

# 千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書 11

—松尾町大山遺跡—

平成14年3月

日 本 道 路 公 団  
財団法人 千葉県文化財センター

# 千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書 11

—まつ お お やま  
—松尾町大山遺跡—





## 序

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和19年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、千葉県文化財センター調査報告第430集として、日本道路公団の千葉東金道路（二期）の開発事業に伴って実施した山武郡松尾町大山遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器集中か所や古墳時代から平安時代の集落が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成14年3月25日

財団法人千葉県文化財センター  
理事長 清水新次

## 凡 例

- 1 本書は、日本道路公団による千葉東金道路（二期）建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書の第11冊目である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県山武郡松尾町古和字大山597-4ほかに所在する大山遺跡（遺跡コード407-006）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、日本道路公団の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理事業の組織、担当者及び実施期間は、第1章に記載した。
- 5 本書の執筆分担は下記の通りである。

第1章、第4章	室 長 糸川道行
第2章、第5章第1節	上席研究員 田島 新
第3章	主席研究員 宮 重行
第3章、第4章第2節の一部、第5章第2節	室 長 大野康男
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、日本道路公団、松尾町教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1/50,000地形図「成田」(NI-54-19-10)
第1図 国土地理院発行 1/50,000地形図「東金」(NI-54-19-11)を2/3に縮小して使用
第2図 成田都市計画図 1/2,500 38・39を1/2に縮小して使用
- 8 写真図版1の周辺航空写真は、京葉測量株式会社による平成8年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 10 本書で使用している遺構略号（SI、SK等）及び遺構番号は、原則として発掘調査時のものを踏襲した。

# 本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
第2節 調査の方法	4
第3節 遺跡の位置と環境	4
第2章 旧石器時代	7
第1節 層位	7
第2節 石材名称と母岩分類について	7
第3節 各文化層の石器集中と出土遺物	7
第3章 縄文時代	103
第1節 遺構と遺物	103
第4章 古墳時代～平安時代	113
第1節 概要	113
第2節 遺構と遺物	114
第5章 まとめ	401
第1節 旧石器時代	401
第2節 古墳時代から平安時代集落の様相	401

## 挿図目次

第1図	千葉東金道路二期路線図……………	3	第20図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 器種別分布図 (12) ……………	27
第2図	大山遺跡周辺地形図……………	5	第21図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 石材別分布図 (1) ……………	28
第3図	下層調査状況図……………	6	第22図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 石材別分布図 (2) ……………	29
第4図	大山遺跡全測図……………	9	第23図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 石材別分布図 (3) ……………	30
第5図	第Ⅰ・第Ⅱb・第Ⅱc・第Ⅱd石器集中 石器分布図……………	11	第24図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 石材別分布図 (4) ……………	31
第6図	第Ⅰ文化層 石器集中Ⅰ 器種別分布図 ……………	12	第25図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 石材別分布図 (5) ……………	32
第7図	第Ⅰ文化層 石器集中Ⅰ 出土石器実測 図……………	13	第26図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 出土石器実測図 (1) ……………	33
第8図	第Ⅱa文化層石器集中石器分布図 ……………	15	第27図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 出土石器実測図 (2) ……………	34
第9図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 器種別分布図 (1) ……………	16	第28図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 出土石器実測図 (3) ……………	35
第10図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 器種別分布図 (2) ……………	17	第29図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 出土石器実測図 (4) ……………	36
第11図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 器種別分布図 (3) ……………	18	第30図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 出土石器実測図 (5) ……………	37
第12図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 器種別分布図 (4) ……………	19	第31図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 出土石器実測図 (6) ……………	38
第13図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 器種別分布図 (5) ……………	20	第32図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 出土石器実測図 (7) ……………	39
第14図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 器種別分布図 (6) ……………	21	第33図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 出土石器実測図 (8) ……………	40
第15図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 器種別分布図 (7) ……………	22	第34図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 出土石器実測図 (9) ……………	41
第16図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 器種別分布図 (8) ……………	23	第35図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 出土石器実測図 (10) ……………	42
第17図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 器種別分布図 (9) ……………	24	第36図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 出土石器実測図 (11) ……………	43
第18図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 器種別分布図 (10) ……………	25			
第19図	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ 器種別分布図 (11) ……………	26			

第37图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図 (12)	44	(30)	62		
第38图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図 (13)	45	第56图	第Ⅱb文化層石器集中Ⅰ	器種別分布図	77
第39图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図 (14)	46	第57图	第Ⅱb文化層石器集中Ⅰ	母岩別分布図	78
第40图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図 (15)	47	第58图	第Ⅱb文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測 図	79
第41图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図 (16)	48	第59图	第Ⅱc文化層石器集中Ⅰa	器種別分布 図(1)	80
第42图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図 (17)	49	第60图	第Ⅱc文化層石器集中Ⅰa	器種別分布 図(2)	81
第43图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図 (18)	50	第61图	第Ⅱc文化層石器集中Ⅰa	母岩別分布 図(1)	82
第44图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図 (19)	51	第62图	第Ⅱc文化層石器集中Ⅰa	母岩別分布 図(2)	83
第45图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図 (20)	52	第63图	第Ⅱc文化層石器集中Ⅰa	出土石器実 測図(1)	84
第46图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図 (21)	53	第64图	第Ⅱc文化層石器集中Ⅰa	出土石器実 測図(2)	85
第47图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図 (22)	54	第65图	第Ⅱc文化層石器集中Ⅰa	出土石器実 測図(3)	86
第48图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図 (23)	55	第66图	第Ⅱc文化層石器集中Ⅰa	出土石器実 測図(4)	87
第49图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図 (24)	56	第67图	第Ⅱc文化層石器集中Ⅰa	出土石器実 測図(5)	88
第50图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図 (25)	57	第68图	第Ⅱc文化層石器集中Ⅰa	出土石器実 測図(6)	89
第51图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図 (26)	58	第69图	第Ⅱc文化層石器集中Ⅰa	出土石器実 測図(7)	90
第52图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図 (27)	59	第70图	第Ⅱc文化層石器集中Ⅰb	器種別分布 図	93
第53图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図 (28)	60	第71图	第Ⅱc文化層石器集中Ⅰb	母岩別分布 図	94
第54图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図 (29)	61	第72图	第Ⅱc文化層石器集中Ⅰb	出土石器実 測図(1)	95
第55图	第Ⅱa文化層石器集中Ⅰ	出土石器実測図		第73图	第Ⅱc文化層石器集中Ⅰb	出土石器実 測図(2)	96

第74図	第Ⅱc文化層石器集中Ⅰb 出土石器実測図(3) ……………	97	第108図	SI-024号実測図 ……………	150
第75図	第Ⅱd文化層石器集中Ⅰ 器種別分布図 ……………	98	第109図	SI-025号実測図 ……………	151
第76図	第Ⅱd文化層石器集中Ⅰ 出土石器実測図 ……………	99	第110図	SI-026号実測図 ……………	153
第77図	グリッド出土石器実測図(1) ……………	100	第111図	SI-027号実測図 ……………	155
第78図	グリッド出土石器実測図(2) ……………	101	第112図	SI-028号実測図 ……………	157
第79図	炉穴・陥穴実測図(1) ……………	107	第113図	SI-028号出土遺物実測図 ……………	158
第80図	陥穴実測図(2) ……………	108	第114図	SI-029号実測図 ……………	160
第81図	縄文土器拓影図(1) ……………	110	第115図	SI-030号実測図 ……………	162
第82図	縄文土器拓影図(2) ……………	111	第116図	SI-031号実測図 ……………	163
第83図	土製品実測図 ……………	112	第117図	SI-032号実測図 ……………	165
第84図	SI-001号実測図 ……………	115	第118図	SI-033号実測図 ……………	166
第85図	SI-002号実測図 ……………	117	第119図	SI-034号実測図 ……………	167
第86図	SI-002号出土遺物実測図 ……………	118	第120図	SI-034号出土遺物実測図 ……………	169
第87図	SI-003号実測図 ……………	119	第121図	SI-034号出土遺物実測図 ……………	170
第88図	SI-005号実測図 ……………	120	第122図	SI-035号実測図 ……………	172
第89図	SI-007号実測図 ……………	121	第123図	SI-036号実測図 ……………	173
第90図	SI-008号実測図 ……………	122	第124図	SI-036号出土遺物実測図 ……………	174
第91図	SI-009号実測図 ……………	124	第125図	SI-037号実測図 ……………	175
第92図	SI-009号出土遺物実測図 ……………	125	第126図	SI-038号実測図 ……………	177
第93図	SI-014号実測図 ……………	128	第127図	SI-039号実測図 ……………	178
第94図	SI-014号出土遺物実測図 ……………	129	第128図	SI-039号出土遺物実測図 ……………	179
第95図	SI-015号実測図 ……………	131	第129図	SI-040号実測図 ……………	181
第96図	SI-015号出土遺物実測図 ……………	132	第130図	SI-040号出土遺物実測図 ……………	182
第97図	SI-016号実測図 ……………	134	第131図	SI-041号実測図 ……………	184
第98図	SI-017号実測図 ……………	136	第132図	SI-042号実測図 ……………	186
第99図	SI-017号出土遺物実測図 ……………	137	第133図	SI-042号出土遺物実測図 ……………	187
第100図	SI-017号出土遺物実測図(2) ……………	138	第134図	SI-043号実測図 ……………	189
第101図	SI-018号実測図 ……………	139	第135図	SI-043号出土遺物実測図 ……………	190
第102図	SI-019号実測図 ……………	140	第136図	SI-044号実測図 ……………	192
第103図	SI-020号実測図 ……………	141	第137図	SI-045号実測図 ……………	193
第104図	SI-021号実測図 ……………	143	第138図	SI-046号実測図 ……………	195
第105図	SI-022号実測図 ……………	145	第139図	SI-047号実測図 ……………	196
第106図	SI-023号実測図 ……………	147	第140図	SI-047号出土遺物実測図 ……………	197
第107図	SI-023号出土遺物実測図 ……………	148	第141図	SI-048号実測図 ……………	199
			第142図	SI-048号出土遺物実測図 ……………	200
			第143図	SI-049号実測図 ……………	201
			第144図	SI-050号実測図 ……………	203

第145图	SI-051号实测图	·····	204	第182图	SI-080号实测图	·····	258
第146图	SI-051号出土遺物实测图	·····	205	第183图	SI-080号出土遺物实测图	·····	259
第147图	SI-052号实测图	·····	208	第184图	SI-081号实测图	·····	260
第148图	SI-053号实测图	·····	209	第185图	SI-081号出土遺物实测图	·····	261
第149图	SI-054号实测图	·····	211	第186图	SI-082号实测图	·····	263
第150图	SI-054号出土遺物实测图	·····	212	第187图	SI-083号实测图	·····	265
第151图	SI-055号实测图	·····	214	第188图	SI-083号出土遺物实测图	·····	266
第152图	SI-056号实测图	·····	215	第189图	SI-084号实测图	·····	268
第153图	SI-057号实测图	·····	216	第190图	SI-085号实测图	·····	269
第154图	SI-058号实测图	·····	217	第191图	SI-086号实测图	·····	271
第155图	SI-059号实测图	·····	219	第192图	SI-087号·088号实测图	·····	272
第156图	SI-059号出土遺物实测图	·····	220	第193图	SI-089号实测图	·····	273
第157图	SI-060号实测图	·····	222	第194图	SI-090号实测图	·····	275
第158图	SI-061号实测图	·····	224	第195图	SI-090号出土遺物实测图(1)	·····	276
第159图	SI-061号出土遺物实测图	·····	225	第196图	SI-090号出土遺物实测图(2)	·····	277
第160图	SI-062号实测图	·····	225	第197图	SI-091号实测图	·····	279
第161图	SI-063号实测图	·····	227	第198图	SI-092号实测图	·····	281
第162图	SI-064号实测图	·····	228	第199图	SI-093号实测图	·····	283
第163图	SI-064号出土遺物实测图	·····	230	第200图	SI-093号出土遺物实测图	·····	284
第164图	SI-065号实测图	·····	231	第201图	SI-094号实测图	·····	286
第165图	SI-066号实测图	·····	233	第202图	SI-095号实测图	·····	287
第166图	SI-066号出土遺物实测图	·····	234	第203图	SI-096号实测图	·····	289
第167图	SI-067号实测图	·····	236	第204图	SI-096号出土遺物实测图(1)	·····	290
第168图	SI-068号实测图	·····	238	第205图	SI-096号出土遺物实测图(2)	·····	291
第169图	SI-069号实测图	·····	240	第206图	SI-097号实测图	·····	293
第170图	SI-070号实测图	·····	242	第207图	SI-097号出土遺物实测图	·····	294
第171图	SI-071号实测图	·····	243	第208图	SI-098号实测图	·····	296
第172图	SI-072号实测图	·····	245	第209图	SI-099号实测图	·····	297
第173图	SI-073号实测图	·····	246	第210图	SI-100号实测图	·····	298
第174图	SI-074号实测图	·····	248	第211图	SI-101号实测图	·····	299
第175图	SI-074号出土遺物实测图	·····	249	第212图	SI-102号实测图	·····	300
第176图	SI-075A·B号实测图	·····	251	第213图	SI-103号实测图	·····	302
第177图	SI-076号实测图	·····	252	第214图	SI-104号实测图	·····	303
第178图	SI-076号出土遺物实测图	·····	253	第215图	SI-105号实测图	·····	304
第179图	SI-077号实测图	·····	254	第216图	SI-106号实测图	·····	305
第180图	SI-078号实测图	·····	255	第217图	SI-109号实测图	·····	306
第181图	SI-079号实测图	·····	256	第218图	SI-110号实测图	·····	308

第219図	SI-111号実測図	310	第248図	SB-019号・020号実測図	355
第220図	SI-112号実測図	312	第249図	SB-022号・023号実測図	357
第221図	SI-113号実測図	313	第250図	土坑実測図(1)	360
第222図	SI-113号出土遺物実測図	314	第251図	土坑実測図(2)	363
第223図	SI-114号・115号実測図	315	第252図	土坑実測図(3)・土坑出土遺物実測図	366
第224図	SI-116号実測図	316	第253図	SK-090号出土遺物実測図	367
第225図	SI-116号実測図	317	第254図	SD-001号実測図	370
第226図	SI-116号出土遺物実測図	318	第255図	SD-001号遺物出土状況図(1)	371
第227図	SI-117号・128号実測図	320	第256図	SD-001号遺物出土状況図(2)	372
第228図	SI-117号・128号出土遺物実測図	321	第257図	SD-001号遺物出土状況図(3)	373
第229図	SI-118号実測図	322	第258図	SD-001号出土遺物実測図(1)	375
第230図	SI-118号出土遺物実測図	323	第259図	SD-001号出土遺物実測図(2)	376
第231図	SI-119号実測図	324	第260図	SD-001号出土遺物実測図(3)	377
第232図	SI-120号・121号実測図	325	第261図	SD-001号出土遺物実測図(4)	378
第233図	SI-121号出土遺物実測図	326	第262図	SD-001号出土遺物実測図(5)	379
第234図	SI-122号・123号実測図	328	第263図	SD-001号出土遺物実測図(6)	380
第235図	SI-124号実測図	330	第264図	SD-001号出土遺物実測図(7)	381
第236図	SI-125号・129号実測図	332	第265図	SD-001号出土遺物実測図(8)	382
第237図	SI-125号・129号出土遺物実測図	333	第266図	SD-002号・005号実測図	387
第238図	SI-126号・127号実測図	336	第267図	SD-003号・004号・008号・009号・ 014号実測図	388
第239図	SI-126号・127号出土遺物実測図	337	第268図	SD-010号実測図	390
第240図	SI-130号実測図	338	第269図	SD-003号・008号・010号出土遺物実測図	391
第241図	SB-001号実測図	346	第270図	SD-010号出土遺物実測図	392
第242図	SB-002号実測図	347	第271図	遺構外出土遺物実測図(1)	394
第243図	SB-003号・004号実測図	348	第272図	遺構外出土遺物実測図(2)	395
第244図	SB-005号・006号実測図	350	第273図	古墳時代以降の集落変遷図	403
第245図	SB-007号・009号・010号・011号実測図	352	第274図	古墳時代以降の土器の変遷(1)	405
第246図	SB-013号・014号・015号実測図	353	第275図	古墳時代以降の土器の変遷(2)	406
第247図	SB-016号・017号・018号実測図	354			

## 表目次

第1表	第I文化層	石器集中1	石器属性表	12	第6表	第II d文化層	石器集中1	石器属性表	99
第2表	第II a文化層	石器集中1	石器属性表	63	第7表	グリッド出土	石器属性表	102	
第3表	第II b文化層	石器集中1	石器属性表	76	第8表	陥穴観察表		106	
第4表	第II c文化層	石器集中1a	石器属性表	91	第9表	古墳時代以降遺構一覧表		113	
第5表	第II c文化層	石器集中1b	石器属性表	92	第10表	SI-001号出土土器観察表		116	



第11表	SI-002号出土土器觀察表	118	第48表	SI-047号出土土器觀察表	197
第12表	SI-003号出土土器觀察表	119	第49表	SI-048号出土土器觀察表	198
第13表	SI-005号出土土器觀察表	120	第50表	SI-049号出土土器觀察表	201
第14表	SI-007号出土土器觀察表	121	第51表	SI-050号出土土器觀察表	202
第15表	SI-008号出土土器觀察表	123	第52表	SI-051号出土土器觀察表	206
第16表	SI-009号出土土器觀察表	126	第53表	SI-052号出土土器觀察表	207
第17表	SI-014号出土土器觀察表	129	第54表	SI-053号出土土器觀察表	210
第18表	SI-015号出土土器觀察表	133	第55表	SI-054号出土土器觀察表	213
第19表	SI-016号出土土器觀察表	134	第56表	SI-055号出土土器觀察表	213
第20表	SI-017号出土土器觀察表	135	第57表	SI-056号出土土器觀察表	216
第21表	SI-018号出土土器觀察表	138	第58表	SI-057号出土土器觀察表	217
第22表	SI-019号出土土器觀察表	140	第59表	SI-058号出土土器觀察表	218
第23表	SI-020号出土土器觀察表	142	第60表	SI-059号出土土器觀察表	221
第24表	SI-021号出土土器觀察表	144	第61表	SI-060号出土土器觀察表	223
第25表	SI-022号出土土器觀察表	146	第62表	SI-061号出土土器觀察表	223
第26表	SI-023号出土土器觀察表	148	第63表	SI-062号出土土器觀察表	226
第27表	SI-024号出土土器觀察表	149	第64表	SI-063号出土土器觀察表	226
第28表	SI-025号出土土器觀察表	152	第65表	SI-064号出土土器觀察表	229
第29表	SI-026号出土土器觀察表	154	第66表	SI-065号出土土器觀察表	232
第30表	SI-027号出土土器觀察表	156	第67表	SI-066号出土土器觀察表	235
第31表	SI-028号出土土器觀察表	158	第68表	SI-067号出土土器觀察表	237
第32表	SI-029号出土土器觀察表	159	第69表	SI-068号出土土器觀察表	239
第33表	SI-030号出土土器觀察表	161	第70表	SI-069号出土土器觀察表	241
第34表	SI-031号出土土器觀察表	164	第71表	SI-070号出土土器觀察表	242
第35表	SI-032号出土土器觀察表	166	第72表	SI-071号出土土器觀察表	244
第36表	SI-034号出土土器觀察表	170	第73表	SI-072号出土土器觀察表	244
第37表	SI-035号出土土器觀察表	171	第74表	SI-073号出土土器觀察表	247
第38表	SI-036号出土土器觀察表	174	第75表	SI-074号出土土器觀察表	249
第39表	SI-037号出土土器觀察表	176	第76表	SI-075号出土土器觀察表	250
第40表	SI-039号出土土器觀察表	180	第77表	SI-076号出土土器觀察表	253
第41表	SI-040号出土土器觀察表	183	第78表	SI-077号出土土器觀察表	254
第42表	SI-041号出土土器觀察表	185	第79表	SI-078号出土土器觀察表	255
第43表	SI-042号出土土器觀察表	187	第80表	SI-079号出土土器觀察表	257
第44表	SI-043号出土土器觀察表	190	第81表	SI-080号出土土器觀察表	259
第45表	SI-044号出土土器觀察表	191	第82表	SI-081号出土土器觀察表	262
第46表	SI-045号出土土器觀察表	194	第83表	SI-082号出土土器觀察表	264
第47表	SI-046号出土土器觀察表	194	第84表	SI-083号出土土器觀察表	266

第85表	SI-084号出土土器観察表	267	第122表	SI-127号出土土器観察表	337
第86表	SI-085号出土土器観察表	270	第123表	SI-130号出土土器観察表	339
第87表	SI-086号出土土器観察表	271	第124表	竪穴住居跡観察表	339
第88表	SI-088号出土土器観察表	272	第125表	SB-001号出土土器観察表	345
第89表	SI-089号出土土器観察表	274	第126表	SB-002号出土土器観察表	347
第90表	SI-090号出土土器観察表	278	第127表	SB-003, 004号出土土器観察表	348
第91表	SI-091号出土土器観察表	280	第128表	SB-006号出土土器観察表	349
第92表	SI-092号出土土器観察表	282	第129表	SB-007号出土土器観察表	349
第93表	SI-093号出土土器観察表	285	第130表	SB-013号出土土器観察表	351
第94表	SI-094号出土土器観察表	286	第131表	SB-014号出土土器観察表	351
第95表	SI-095号出土土器観察表	287	第132表	SB-022号出土土器観察表	356
第96表	SI-096号出土土器観察表	291	第133表	SB-023号出土土器観察表	356
第97表	SI-097号出土土器観察表	294	第134表	掘立柱建物跡観察表	356
第98表	SI-098号出土土器観察表	295	第135表	SK-006号出土土器観察表	359
第99表	SI-099号出土土器観察表	297	第136表	SK-044号出土土器観察表	362
第100表	SI-100号出土土器観察表	298	第137表	SK-089号出土土器観察表	365
第101表	SI-101号出土土器観察表	300	第138表	SK-090号出土土器観察表	368
第102表	SI-102号出土土器観察表	301	第139表	土坑一覽表	368
第103表	SI-103号出土土器観察表	301	第140表	SD-001号出土土器観察表	383
第104表	SI-104号出土土器観察表	303	第141表	SD-003号出土土器観察表	386
第105表	SI-105号出土土器観察表	305	第142表	SD-008号出土土器観察表	389
第106表	SI-109号出土土器観察表	307	第143表	SD-010号出土土器観察表	392
第107表	SI-110号出土土器観察表	309	第144表	遺構外出土土器観察表	396
第108表	SI-111号出土土器観察表	311	第145表	住居跡・溝出土 石製品属性表	397
第109表	SI-112号出土土器観察表	311	第146表	鉄鏃計測表	397
第110表	SI-113号出土土器観察表	314	第147表	刀子計測表	398
第111表	SI-116号出土土器観察表	318	第148表	鉄製品計測表	398
第112表	SI-117号出土土器観察表	319	第149表	銅製品計測表	399
第113表	SI-128号出土土器観察表	321	第150表	玉類計測表	399
第114表	SI-118号出土土器観察表	323	第151表	紡錘車計測表	399
第115表	SI-119号出土土器観察表	324	第152表	支脚計測表	400
第116表	SI-1210号出土土器観察表	327	第153表	その他の遺物計測表	400
第117表	SI-122号出土土器観察表	329			
第118表	SI-124号出土土器観察表	330			
第119表	SI-125号出土土器観察表	334			
第120表	SI-129号出土土器観察表	334			
第121表	SI-126号出土土器観察表	335			

## 写真図版目次

図版 1	遺跡周辺航空写真	4	SI-002号遺物出土状況
図版 2	1 調査前状況 遺跡中央	5	SI-003号全景
	2 調査区全体 遠景	図版15	1 SI-004号全景
	3 調査区全体 遠景	2	SI-007号カマド近景
図版 3	航空写真	3	SI-007号遺物出土状況
図版 4	航空写真	4	SI-008号遺物出土状況
図版 5	航空写真	5	SI-008号・SK-020号全景
図版 6	航空写真	図版16	1 SI-009号全景
図版 7	航空写真	2	SI-009号カマド近景
図版 8	航空写真	3	SI-009号遺物出土状況
図版 9	1 第Ⅱ a 文化層 石器集中1	4	SI-009号遺物出土状況
	2 第Ⅱ a 文化層 石器集中1	5	SI-009号遺物出土状況
	3 第Ⅱ a 文化層 石器集中1	図版17	1 SI-014号・029号全景
図版10	1 第Ⅱ a 文化層 石器集中1	2	SI-014号柱穴内遺物出土状況
	2 第Ⅱ a 文化層 石器集中1	3	SI-014号カマド近景
	3 第Ⅱ b 文化層 石器集中1	4	SI-014号遺物出土状況
図版11	1 第Ⅱ c 文化層 石器集中1	5	SI-014号遺物出土状況
	2 第Ⅱ d 文化層 石器集中1	6	SI-014号遺物出土状況
	3 旧石器時代 単独出土	図版18	1 SI-015号全景
図版12	1 SK-016号陥穴全景	2	SI-015号カマド近景
	2 SK-018号陥穴全景	3	SI-016号全景
	3 SK-022号陥穴セクション	4	SI-016号カマド近景
	4 SK-029号陥穴全景	5	SI-017号全景
	5 SK-052号陥穴全景	図版19	1 SI-018号全景
図版13	1 SI-001号遺物出土状況	2	SI-018号カマド近景
	2 SI-001号・007号全景	3	SI-020号完掘状況
	3 SI-002号カマド近景	4	SI-021号遺物出土状況
	4 SI-002号全景	5	SI-021号カマド近景
	5 SI-002号カマド遺物出土状況	図版20	1 SI-021号・022号全景
	6 SI-002号遺物出土状況	2	SI-022号カマド近景
	7 SI-002号炭化材検出状況	3	SI-023号全景
図版14	1 SI-002号炭化材・遺物検出状況	図版21	1 SI-024号全景
	2 SI-002号炭化材・遺物検出状況	2	SI-025号全景
	3 SI-002号カマド遺物出土状況	3	SI-025号カマド袖状況

- |      |   |                     |      |   |                   |
|------|---|---------------------|------|---|-------------------|
| 図版22 | 1 | SI-026号全景           | 図版30 | 1 | SI-048号全景         |
|      | 2 | SI-026号カマド近景        |      | 2 | SI-048号カマド近景      |
|      | 3 | SI-027号全景           |      | 3 | SI-049号カマド近景      |
|      | 4 | SI-028号全景           |      | 4 | SI-050号全景         |
|      | 5 | SI-028号カマド近景        |      | 5 | SI-051号全景         |
| 図版23 | 1 | SI-029号カマド灰検出状況     |      | 6 | SI-051号全景         |
|      | 2 | SI-029号カマド近景        | 図版31 | 1 | SI-052号全景         |
|      | 3 | SI-029号遺物出土状況       |      | 2 | SI-052号カマド近景      |
|      | 4 | SI-029号遺物出土状況       |      | 3 | SI-053号カマド近景      |
|      | 5 | SI-030号・033号全景      |      | 4 | SI-054号カマド近景      |
| 図版24 | 1 | SI-031号全景           |      | 5 | SI-055号全景         |
|      | 2 | SI-032号・SD-005号完掘状況 |      | 6 | SI-055号カマド近景      |
|      | 3 | SI-040号全景           |      | 7 | SI-056号カマド近景      |
| 図版25 | 1 | SI-040号・SD-005号全景   | 図版32 | 1 | SI-057号カマド近景      |
|      | 2 | SI-034号・036号全景      |      | 2 | SI-057号カマド近景      |
|      | 3 | SI-035号全景           |      | 3 | SI-058号全景         |
| 図版26 | 1 | SI-036号全景           |      | 4 | SI-058号カマド近景      |
|      | 2 | SI-036号カマド近景        |      | 5 | SI-059号遺物・炭化材出土状況 |
|      | 3 | SI-036号炭化物出土状況      |      | 6 | SI-059号カマド検出状況    |
|      | 4 | SI-037号全景           | 図版33 | 1 | SI-059号カマド袖近景     |
|      | 5 | SI-037号カマド近景        |      | 2 | SI-059号カマド内遺物出土状況 |
| 図版27 | 1 | SI-038号全景           |      | 3 | SI-059号遺物出土状況     |
|      | 2 | SI-038号カマド近景        |      | 4 | SI-059号炭化材・遺物出土状況 |
|      | 3 | SI-039号全景           |      | 5 | SI-060号全景         |
|      | 4 | SI-040号カマド近景        | 図版34 | 1 | SI-060号カマド近景      |
|      | 5 | SI-039号カマド近景        |      | 2 | SI-063号床面検出状況     |
| 図版28 | 1 | SI-041号全景           |      | 3 | SI-064号全景         |
|      | 2 | SI-041号カマド近景        |      | 4 | SI-064号カマド全景      |
|      | 3 | SI-043号全景           | 図版35 | 1 | SI-066号遺物出土状況     |
|      | 4 | SI-042号カマド近景        |      | 2 | SI-066号全景         |
|      | 5 | SI-043号カマドセクション     |      | 3 | SI-067号カマド近景      |
| 図版29 | 1 | SI-044号全景           |      | 4 | SI-067号遺物出土状況     |
|      | 2 | SI-044号カマド近景        |      | 5 | SI-067号焼土検出状況     |
|      | 3 | SI-045号カマド近景        |      | 6 | SI-068号カマド近景      |
|      | 4 | SI-045号全景           |      | 7 | SI-068号全景         |
|      | 5 | SI-046号カマド近景        | 図版36 | 1 | SI-069号カマド遺物出土状況  |
|      | 6 | SI-046号・047号全景      |      | 2 | SI-069号カマド近景      |

	3	SI-070号全景		3	SI-092号カマド近景
	4	SI-071号全景		4	SI-093号全景
	5	SI-071号カマド袖近景	図版43	1	SI-093号カマド近景
図版37	1	SI-074号全景		2	SI-094号カマド
	2	SI-074号カマド近景		3	SI-094号遺物出土状況
	3	SI-074号遺物出土状況		4	SI-095号遺物出土状況
	4	SI-075号全景		5	SI-096号カマド袖近景
	5	SI-076号カマド近景		6	SI-096号カマド遺物出土状況
	6	SI-076号全景		7	SI-096号カマド遺物出土状況
図版38	1	SI-077号カマド近景		8	SI-096号遺物出土状況
	2	SI-078号全景	図版44	1	SI-096号炭化材・遺物出土状況
	3	SI-078号カマド近景		2	SI-097号遺物出土状況
	4	SI-079号全景		3	SI-097号全景
	5	SI-079号カマド近景		4	SI-097号カマド近景
	6	SI-080号全景		5	SI-098号全景
	7	SI-080号カマド近景	図版45	1	SI-099号全景
図版39	1	SI-081号カマド近景		2	SI-099号カマド近景
	2	SI-082号カマド近景		3	SI-099号カマド近景
	3	SI-083号全景		4	SI-100号全景
	4	SI-083号カマド近景	図版46	1	SI-101号全景
	5	SI-083号遺物出土状況		2	SI-101号カマド近景
	6	SI-083号遺物出土状況		3	SI-102号カマド検出状況
	7	SI-083号遺物出土状況		4	SI-102号カマド検出状況
	8	SI-083号遺物出土状況		5	SI-102号カマド検出状況
図版40	1	SI-083号遺物出土状況	図版47	1	SI-103号全景
	2	SI-084号カマド近景		2	SI-104号全景
	3	SI-085号カマド近景		3	SI-104号カマド近景
	4	SI-086号カマド近景		4	SI-105号全景
	5	SI-084号・085号・077号全景	図版48	1	SI-106号全景
	6	SI-087号・088号全景		2	SI-109号全景
図版41	1	SI-089号カマド近景		3	SI-110号全景
	2	SI-089号カマド遺物出土状況		4	SI-110号カマド近景
	3	SI-089号遺物出土状況	図版49	1	SI-111号全景
	4	SI-089号遺物出土状況		2	SI-111号カマド近景
	5	SI-090号全景		3	SI-112号全景
図版42	1	SI-090号・093号・094号・095号全景		4	SI-112号カマド近景
	2	SI-092号全景		5	SI-113号全景

	6	SI-113号カマド近景	2	SB-018号全景
図版50	1	SI-114号・115号全景	3	SB-019号全景
	2	SI-116号全景	図版61	1 SB-020号・021号全景
	3	SI-116号カマド近景	2	SB-022号全景
	4	SI-116号遺物出土状況	3	SB-023号・024号全景
図版51	1	SI-118号・119号全景	図版62	1 SK-001号～SK-003号 C8周辺遺構 群全景
	2	SI-118号カマド近景	2	SK-001号全景
	3	SI-120号・121号全景	3	SK-002号全景
	4	SI-122号・123号全景	4	SK-004号検出状況
図版52	1	SI-124号全景	5	SK-005号全景
	2	SI-125号・129号全景	6	SK-006号全景
	3	SI-125号遺物出土状況	7	SK-041号全景
	4	SI-125号遺物出土状況	図版63	1 SD-001号全景
図版53	1	SI-126号全景	2	SD-001号近景
	2	SI-126号・127号全景	3	SD-001号遺物出土状況
	3	SI-126号カマド内遺物出土状況	図版64	1 SD-001号遺物出土状況
	4	SI-126号・SI-127号遺物出土状況	2	SD-001号遺物集中地点
図版54	1	SI-117号・128号全景	3	SD-001号遺物集中地点
	2	SI-128号カマド近景	4	SD-001号遺物集中地点中央部
	3	SI-130号全景	5	SD-001号遺物集中地点
図版55	1	SI-017号全景	6	SD-001号遺物集中地点北西部
	2	SI-026号全景	7	SD-001号遺物出土状況 (中央寄り部分)
	3	SI-031号全景	図版65	1 SD-005号全景
図版56	1	SB-001号全景	2	SD-010号硬化面検出状況
	2	SB-001号柱痕跡検出状況	図版66	1 SD-010号全景
	3	SB-001号 P-8遺物出土状況	2	SD-014号全景
図版57	1	SB-002号全景	図版67	第I文化層 石器集中1 出土石器
	2	SB-002号遺物出土状況	図版68	第IIa文化層 石器集中1 出土石器(1)
	3	SB-004号・005号全景	図版69	第IIa文化層 石器集中1 出土石器(2)
図版58	1	SB-007号全景	図版70	第IIa文化層 石器集中1 出土石器(3)
	2	SB-008号・009号・010号・011号・012号 全景	図版71	第IIa文化層 石器集中1 出土石器(4)
	3	SB-013号全景	図版72	第IIa文化層 石器集中1 出土石器(5)
図版59	1	SB-014号全景	図版73	第IIa文化層 石器集中1 出土石器(6)
	2	SB-015号全景	図版74	第IIa文化層 石器集中1 出土石器(7)
	3	SB-016号全景	図版75	第IIa文化層 石器集中1 出土石器(8)
図版60	1	SB-017号全景		

図版76	第Ⅱa文化層	石器集中1	出土石器(9)	図版112	SI-039号～SI-042号出土遺物
図版77	第Ⅱa文化層	石器集中1	出土石器(10)	図版113	SI-042号～SI-046号出土遺物
図版78	第Ⅱa文化層	石器集中1	出土石器(11)	図版114	SI-045号～SI-050号出土遺物
図版79	第Ⅱa文化層	石器集中1	出土石器(12)	図版115	SI-050号～SI-052号出土遺物
図版80	第Ⅱa文化層	石器集中1	出土石器(13)	図版116	SI-014号・015号・026号・028号・042号・051号・052号・090号出土金属製品
図版81	第Ⅱa文化層	石器集中1	出土石器(14)	図版117	SI-051号～SI-059号出土遺物
図版82	第Ⅱa文化層	石器集中1	出土石器(15)	図版118	SI-059号～SI-061号出土遺物
図版83	第Ⅱa文化層	石器集中1	出土石器(16)	図版119	SI-061号～SI-064号出土遺物
図版84	第Ⅱa文化層	石器集中1	出土石器(17)	図版120	SI-064号～SI-066号出土遺物
図版85	第Ⅱa文化層	石器集中1	出土石器(18)	図版121	SI-066号～SI-068号出土遺物
図版86	第Ⅱa文化層	石器集中1	出土石器(19)	図版122	SI-068号～SI-072号出土遺物
図版87	第Ⅱa文化層	石器集中1	出土石器(20)	図版123	SI-072号～SI-076号出土遺物
図版88	第Ⅱa文化層	石器集中1	出土石器(21)	図版124	SI-076号～SI-081号出土遺物
図版89	第Ⅱb文化層	石器集中1	出土石器	図版125	SI-081号～SI-083号出土遺物
図版90	第Ⅱc文化層	石器集中1a	出土石器(1)	図版126	SI-083号～SI-086号出土遺物
図版91	第Ⅱc文化層	石器集中1a	出土石器(2)	図版127	SI-086号～SI-090号出土遺物
図版92	第Ⅱc文化層	石器集中1a	出土石器(3)	図版128	SI-090号出土遺物
図版93	第Ⅱc文化層	石器集中1a	出土石器(4)	図版129	SI-090号～SI-093号出土遺物
図版94	第Ⅱc文化層	石器集中1a	出土石器(5)	図版130	SI-093号～SI-096号出土遺物
図版95	第Ⅱc文化層	石器集中1b	出土石器(1)	図版131	SI-096号出土遺物
図版96	第Ⅱc文化層	石器集中1b	出土石器(2)	図版132	SI-097号～SI-098号出土遺物
図版97	グリッド出土石器(1)			図版133	SI-098号～SI-104号出土遺物
図版98	1 グリッド出土石器(2)			図版134	SI-105号～SI-111号出土遺物
	2 縄文時代土製品			図版135	SI-111号～SI-113号出土遺物
図版99	縄文土器(1)			図版136	SI-113号～SI-116号出土遺物
図版100	縄文土器(2)			図版137	SI-116号～SI-118号出土遺物
図版101	SI-001号～SI-002号出土遺物			図版138	SI-118号～SI-125号出土遺物
図版102	SI-003号～SI-009号出土遺物			図版139	SI-125号～SI-126号出土遺物
図版103	SI-009号出土遺物			図版140	SI-126号～SI-129号出土遺物
図版104	SI-014号～SI-015号出土遺物			図版141	SI-129号・130号・SB-001号・002号・SK-090号・遺構外出土遺物
図版105	SI-015号～SI-017号出土遺物			図版142	SD-001号・遺構外出土遺物
図版106	SI-017号～SI-022号出土遺物			図版143	SD-001号出土遺物
図版107	SI-022号～SI-028号出土遺物			図版144	SD-001号出土遺物
図版108	SI-027号～SI-029号出土遺物			図版145	SD-001号出土遺物
図版109	SI-031号～SI-034号出土遺物			図版146	SD-001号出土遺物
図版110	SI-034号～SI-037号出土遺物				
図版111	SI-036号～SI-039号出土遺物				

- |       |  |                     |
|-------|--|---------------------|
| 図版147 | SD-001号出土遺物                                  | SD-008号・遺構外出土墨書土器   |
| 図版148 | SD-001号出土遺物・SI-001号・002号・<br>003号・034号出土墨書土器 | 図版152 遺構外出土墨書土器     |
| 図版149 | SI-036号～SI-079号出土墨書土器                        | 図版153 住居跡・溝出土石製品(1) |
| 図版150 | SI-090号～SI-093号出土墨書土器                        | 図版154 住居跡・溝出土石製品(2) |
| 図版151 | SI-095号～SI-127号・SB-004号・013号・                | 図版155 住居跡・溝出土石製品(3) |
|       |  | 図版156 住居跡・溝出土石製品(4) |



# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

日本道路公団は、千葉東金道路の延伸を計画し、松尾町谷津まで16.1kmの千葉東金道路（二期）の建設を決定した。建設工事に当たり、区域内に所在する埋蔵文化財の有無と取扱いについて千葉県教育委員会に照会した結果、区域内には39か所の遺跡があることが判明した。協議の結果、記録保存の措置を講ずることとなり、調査は財団法人千葉県文化財センターに委託された。

大山遺跡は、山武郡松尾町古和字大山597-4ほかに所在する。発掘調査は平成6年12月から開始され、平成9年8月までに調査対象面積16,000m<sup>2</sup>の調査を終了した。調査の結果、検出した遺構は、旧石器時代の石器集中地点5か所、古墳時代後期の竪穴住居跡50軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡57軒、古墳時代あるいは奈良・平安時代の竪穴住居跡16軒、縄文時代の陥穴22基、古墳時代以降の土坑、溝状遺構である。検出した遺構の大部分は竪穴住居跡であり、山武地域における古墳時代後期及び奈良・平安時代の集落について、また一つ良好な事例を加えることができた。

整理作業は平成9年度から平成13年度まで行われ、平成13年度中に報告書刊行の運びとなった。

発掘調査及び整理作業に係わる各年度の組織、担当職員及び作業内容は下記のとおりである。

### 平成6年度

期 間	平成6年12月1日～平成7年3月30日
組 織	成田調査事務所長 矢戸三男
	担当職員 主任技師 平野雅一 矢本節朗 技師 沖松信隆
内 容	発掘調査 調査対象面積14,600m <sup>2</sup> 確認調査上層1,460m <sup>2</sup> 本調査上層7,000m <sup>2</sup>

### 平成7年度

期 間	平成7年4月1日～平成8年2月29日
組 織	成田調査事務所長 石田廣美
	担当職員 主任技師 平野雅一 荒木清一 矢本節朗 高柳圭一 技師 沖松信隆
内 容	発掘調査 調査対象面積14,600m <sup>2</sup> 確認調査下層524m <sup>2</sup> 本調査上層7,600m <sup>2</sup> 下層1,410m <sup>2</sup>

### 平成9年度

期 間	(発掘調査) 平成9年7月1日～平成9年8月29日
	(整理作業) 平成9年4月1日～平成10年3月31日
組 織	東部調査事務所長 石田廣美
(発掘調査)	担当職員 副所長 加藤修司 主任技師 荒木清一
(整理作業)	担当職員 副所長 加藤修司 芝山調査室長 加藤正信 主任技師 矢本節朗 安井健一 廣瀬和之 荒木清一 技師 黒沢 崇

内 容 発掘調査 調査対象面積1,400m<sup>2</sup> 確認調査下層56m<sup>2</sup>  
本調査上層1,400m<sup>2</sup> 下層120m<sup>2</sup>  
整理作業 水洗・注記の一部

#### 平成10年度

期 間 平成10年4月1日～平成10年6月30日, 平成10年8月1日～平成11年3月31日  
組 織 東部調査事務所長 三浦和信  
担当職員 芝山調査室長 加藤正信 主任技師 廣瀬和之 石塚 浩 小林信一  
荒木清一 遠藤治雄 矢本節朗 安井健一 技師 黒沢崇  
内 容 整理作業 水洗・注記の一部, 記録整理, 分類・選別, 復元の一部

#### 平成11年度

期 間 平成10年4月1日～平成10年6月30日, 平成10年8月1日～平成11年3月31日  
組 織 東部調査事務所長 三浦和信  
担当職員 副所長 加藤正信 芝山調査室長 香取正彦 研究員 猪股昭喜 西口 徹  
土屋潤一郎 鈴木弘幸 遠藤治雄 石塚 浩 渡邊昭宏  
主任技師 行川 永 技師 永塚俊司  
内 容 整理作業 復元の一部, 実測, 挿図・図版作成の一部

#### 平成12年度

期 間 平成12年4月1日～平成13年3月31日  
組 織 東部調査事務所長 折原 繁  
担当職員 主席研究員 豊田佳伸 宮 重行 副所長 香取正彦 室長 糸川道行  
上席研究員 田島 新 鈴木弘幸 遠藤治雄 大塚一美 研究員 小笠原永隆  
永塚俊司 黒沢 崇  
内 容 整理作業 挿図・図版作成の一部, 原稿執筆

#### 平成13年度

期 間 平成13年9月1日～平成14年3月31日  
組 織 東部調査事務所長 折原 繁  
担当職員 主席研究員 宮 重行 副所長 香取正彦 柴田龍司 室長 大野康男  
上席研究員 田島 新  
内 容 整理作業 編集・報告書刊行



第1図 千葉東金道路二期路線図

- |           |             |             |             |            |           |
|-----------|-------------|-------------|-------------|------------|-----------|
| 1. 四ツ塚遺跡  | 2. 千神塚遺跡    | 3. 大谷遺跡     | 4. 中谷遺跡     | 5. 赤羽根遺跡   | 6. 大山遺跡   |
| 7. 榎谷遺跡   | 8. 一本松遺跡    | 9. 大長作遺跡    | 10. 久保谷遺跡   | 11. 小川崎台遺跡 | 12. 向畑遺跡  |
| 13. 里守遺跡  | 14. 上人塚遺跡   | 15. 東嵐山遺跡   | 16. 駄ノ塚遺跡   | 17. 栗焼棒遺跡  | 18. 道塚遺跡  |
| 19. 原山遺跡  | 20. 小山田遺跡   | 21. 鹿穴遺跡    | 22. ヲフサ野遺跡  | 23. 岡田山遺跡  | 24. 岡田遺跡  |
| 25. 酒蔵城遺跡 | 26. 油谷(2)遺跡 | 27. 油谷(1)遺跡 | 28. 市谷遺跡    | 29. 新堀遺跡   | 30. 万谷遺跡  |
| 31. 万才楽遺跡 | 32. 板橋遺跡    | 33. 滝台遺跡    | 34. ビンタライ遺跡 | 35. 丹尾台遺跡  | 36. 大谷台遺跡 |
| 37. 前畑遺跡  | 38. 羽戸遺跡    | 39. 尾亭遺跡    |             |            |           |

## 第2節 調査の方法

調査対象範囲全域に、公共座標に合わせて東西南北に20m×20mの方眼網を設定し、大グリッドとした。大グリッドの呼称は、北から南にA, B, C……、西から東へ1, 2, ……として、これを組み合わせて使用した。大グリッド内には2m×2mに100分割の小グリッドを設定し、北西隅のグリッドを00とした。そこから東へ01, 02, 03……、南へ10, 20, 30……として南東隅を99とした。グリッド名はこれにより、大グリッドと小グリッドを組み合わせて、9C-05のように表示することにした。

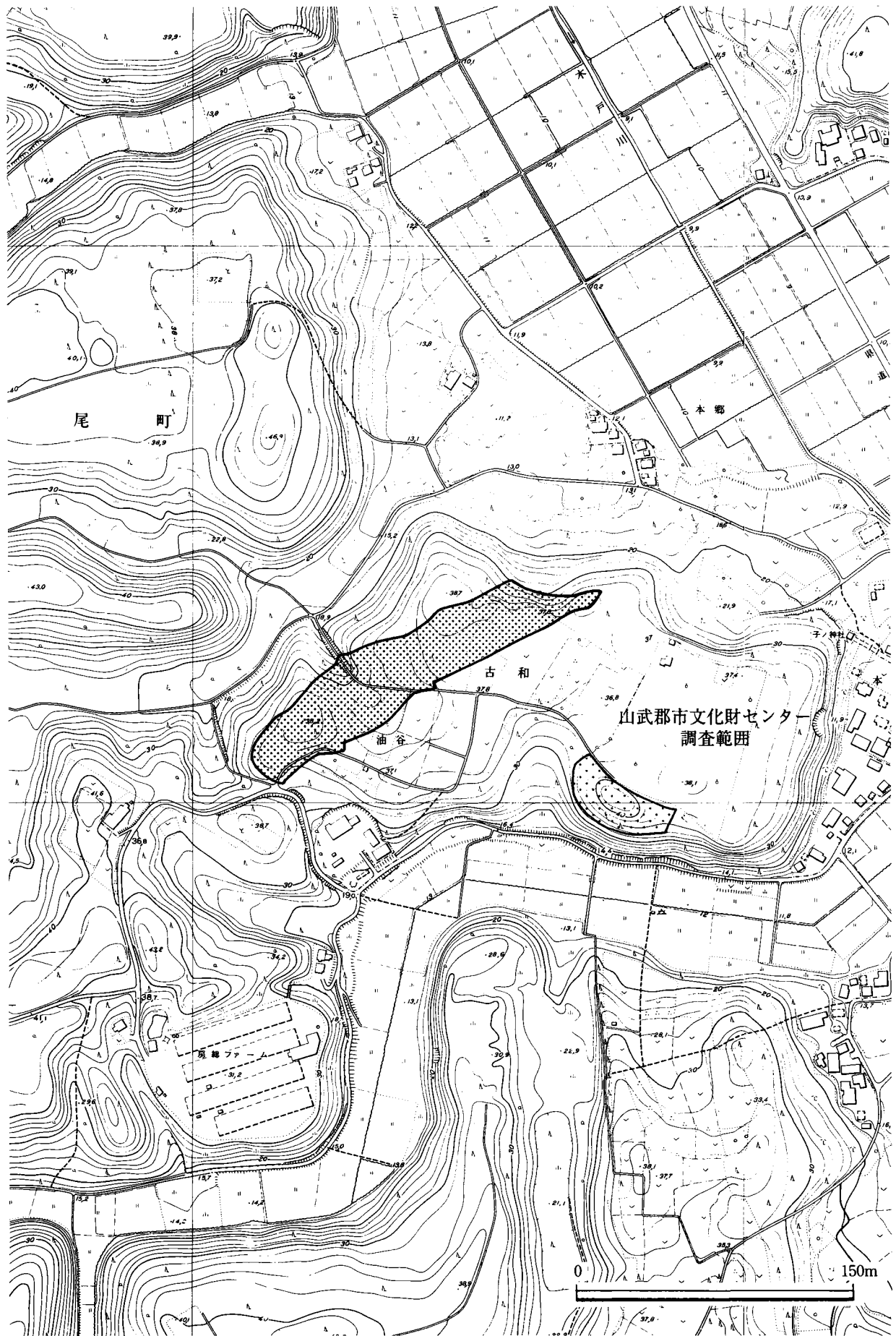
発掘調査は平成6年度に開始され、全域16,000m<sup>2</sup>のうち14,600m<sup>2</sup>が調査対象となり、その10%の面積で発掘区を設定し、上層遺構の確認調査を実施した。その結果、対象面積全域に遺構が分布することが判明したため、全面本調査を実施することとなり、平成6年度は7000m<sup>2</sup>の上層本調査を行った。翌平成7年度は、残り7,600m<sup>2</sup>の上層本調査を行い、また、14,600m<sup>2</sup>の4%分の面積で発掘区を設定して下層の確認調査を実施した。その結果、1,410m<sup>2</sup>の本調査面積が必要となり、年度内に本調査を実施した。平成9年度は残り1,400m<sup>2</sup>が調査対象となり、上層は全面本調査を実施した。下層は確認調査を行い、その結果、120m<sup>2</sup>の本調査を実施し、これをもって大山遺跡の調査がすべて終了した。

発掘調査時において、各遺構には3桁の数字の前に遺構の性格を表す記号を付けた遺構番号を与えた。整理においても、原則として発掘調査時の遺構番号をそのまま使用して作業を実施した。ただし、いくつかの遺構については、記号が表す遺構であるとの認定ができなかったため、欠番とした。遺構の種別、時代、数量と遺構番号及び欠番については、第9表のとおりである。

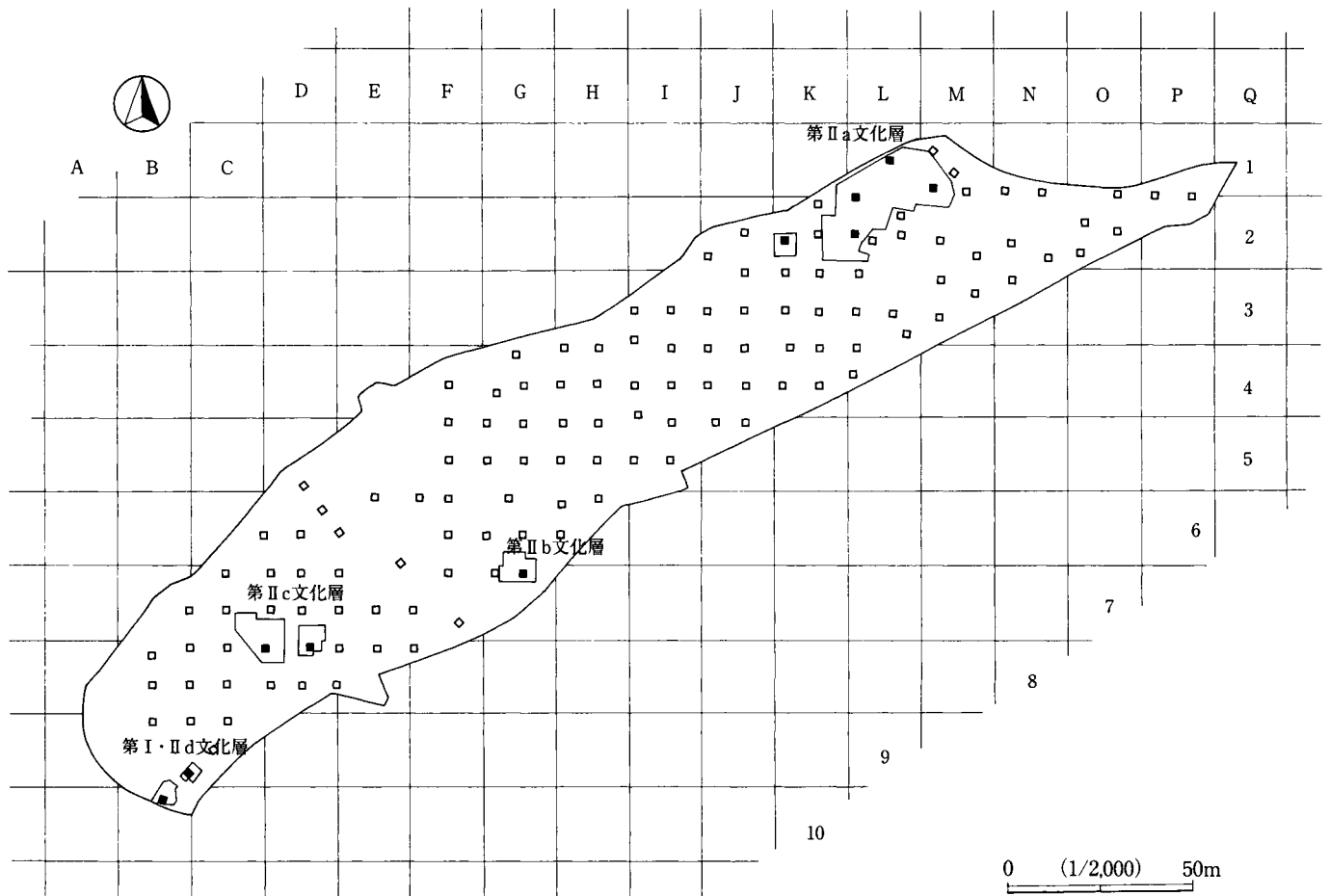
## 第3節 遺跡の位置と環境 (第1, 2図)

大山遺跡は木戸川流域右岸の標高約30m～39mの台地上に立地している。大山遺跡が所在する台地は、東西にやや長く、台地上の東側は比較的平坦であるが、西側はやや起伏がある。台地の東方及び北東方向は木戸川の沖積低地で、台地の北西方向は木戸川の低地から続く狭い谷が西方へ延びて行く。台地の南方も木戸川の低地から続くやや広い谷が西方及び南西方向へ延びて行く。台地上の西側はやや細尾根となり、地形が画されている。調査区は、台地の北西側となる。調査区の北方は斜面となり、木戸川流域の低地及び谷に続いていく。一方、調査区東部の東南方向は広大な台地が広がり、西部の東南方も台地が続くが、ゆるやかに南方に傾斜していく。

次に、通常ならば大山遺跡周辺の遺跡について記述するところであるが、『千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書 2』<sup>1)</sup>など本シリーズの報告書で十分に記述されているので、既刊の報告書を参照していただくこととし、今回は省略する。ただし、千葉東金道路(二期)路線内で近接する遺跡についてのみ記述する。赤羽根遺跡は大山遺跡の北西方向に隣接する遺跡である<sup>2)</sup>。旧石器時代の総遺物量が8,000点を超すことと、低位河岸段丘上の緩斜面に立地することで注目される遺跡であるが、古墳時代後期の集落において、大山遺跡よりも先行する時期である点でも興味深い。あるいは赤羽根遺跡・大山遺跡の双方を合わせて一体の集落であることも考えられる。また、大山遺跡調査区の南西約250mの地点には榎谷遺跡が所在する<sup>3)</sup>。榎谷遺跡は対象地が一部斜面にかかり、面積が小規模であることを考慮しなければならないが、竪穴住居跡の検出はなく、地形から考えて、大山遺跡の集落がこの地点まで延びていなかったことがうかがえる。



第2図 大山遺跡周辺地形 (S=1/1,500)  
 (成田都市計画図38・39を使用)



第3図 下層調査状況図

- 注1 加藤正信ほか 1998 『千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書4 一山武町久保谷遺跡一』  
財団法人千葉県文化財センター
- 2 千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書12として平成14年度に刊行予定である。
- 3 廣瀬和之ほか 1998 『千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書4 一山武町久保谷遺跡一』  
財団法人千葉県文化財センター

## 第2章 旧石器時代

### 第1節 層位

立川ローム層の土層断面図は、各石器集中地点の本調査範囲の一方向に対して記録してある。第1黒色帯（V層）は本遺跡では識別できなかったため、便宜的に、Ⅲ層と、AT包含層（Ⅵ層）の中間土層をⅣ～V層とした。

I層	黒褐色土	表土。
Ⅱ層	暗褐色土	縄文時代以降の包含層。
Ⅲ層	黄褐色土	ソフトローム。
Ⅳ～V層		第1黒色帯に相当するV層とⅣ層はほとんど識別できない。
Ⅵ層		AT（始良丹沢火山灰）包含層。
Ⅶ層		第2黒色帯上半部。Ⅵ層よりATの包含量は少なく、色調もやや暗い。
Ⅷ層		第2黒色帯下半部。
X層		立川ローム最下層。
XI層		武蔵野ローム層最上層。

### 第2節 石材名称と母岩分類について

石材名称については視覚的判断によっているが、同一石材であっても全く異なる特徴をもつものが存在する。本報告では、安山岩については石材名の後にアルファベットを付し、以下のように分類を行った。

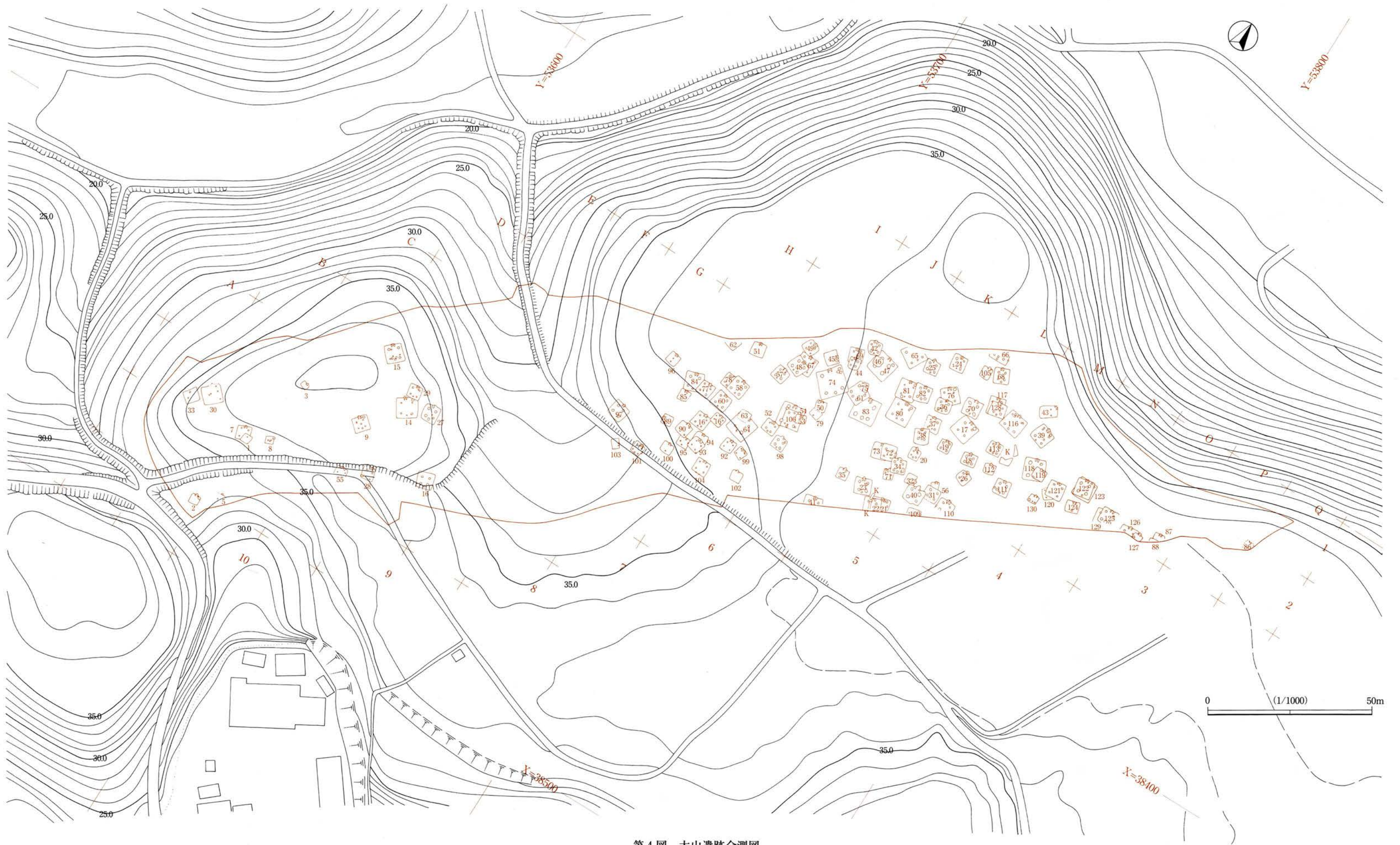
安山岩 A・B……安山岩Aの風化剥離面は暗灰色を、新鮮な剥離面は黒色を呈する資料で、しばしば原礫面には爪形の裂痕が観察される。多くは拳大の円礫を素材として用いている。いわゆる黒色緻密質安山岩・ガラス質黒色安山岩と称されているものである。安山岩Bの風化剥離面は明灰色を、新鮮な剥離面は黒色を呈する資料で、風化が著しく剥離面の稜の多くはつぶれてしまって不明瞭となっている。いわゆるトロトロ石と称されているものである。

母岩分類については、接合資料を基本とし、同一母岩と判断される複数の資料について細分を行う。細分できた資料には石材名の後にアラビア数字を付した。アラビア数字を付していない資料は、単独母岩か、分類不能の資料である。明らかに単独母岩と考えられる資料については、備考欄に「単独母岩」と記した。

### 第3節 各文化層の石器集中と出土遺物

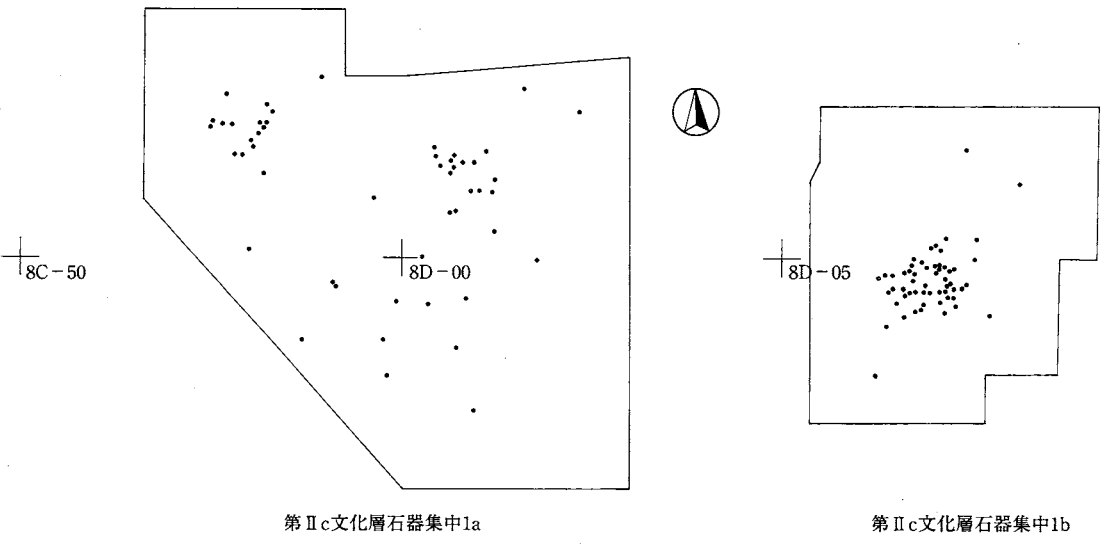
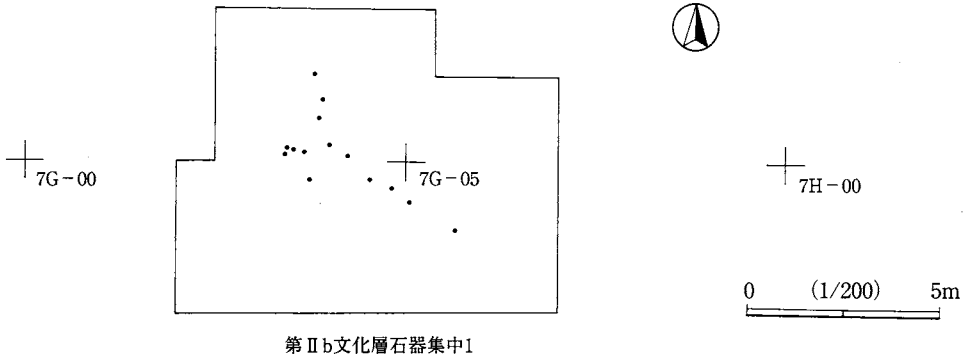
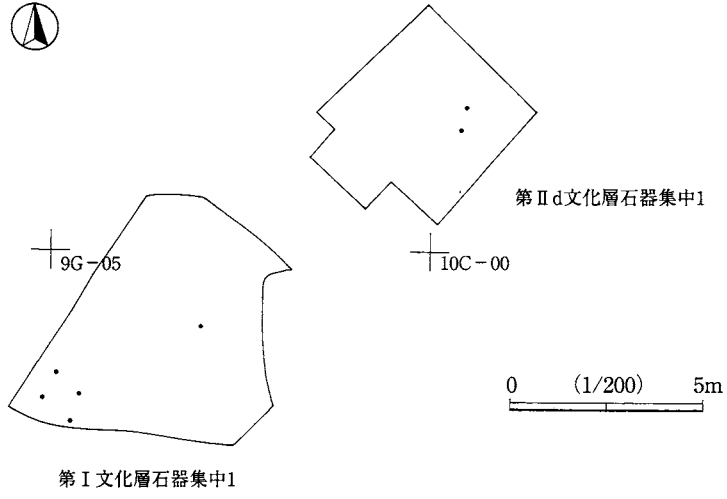
本遺跡の旧石器時代では2枚の文化層・5か所の石器集中が検出された。第Ⅱ文化層については接合関係や母岩の共有等による明確な同一文化層との認識は得られなかった。さらに出土層位に若干のレベル差が見られたが、発掘時の所見を重視してほぼ同一の文化層と考え、第Ⅱa文化層から第Ⅱd文化層の4枚の文化層に細分した（第3図）。また、第Ⅱc文化層については2か所の石器集中が検出され、相互に接合関係が見られた。第Ⅰ文化層はⅢ層の石器群、第Ⅱ文化層は第2黒色帯下部の石器群と考えられる。



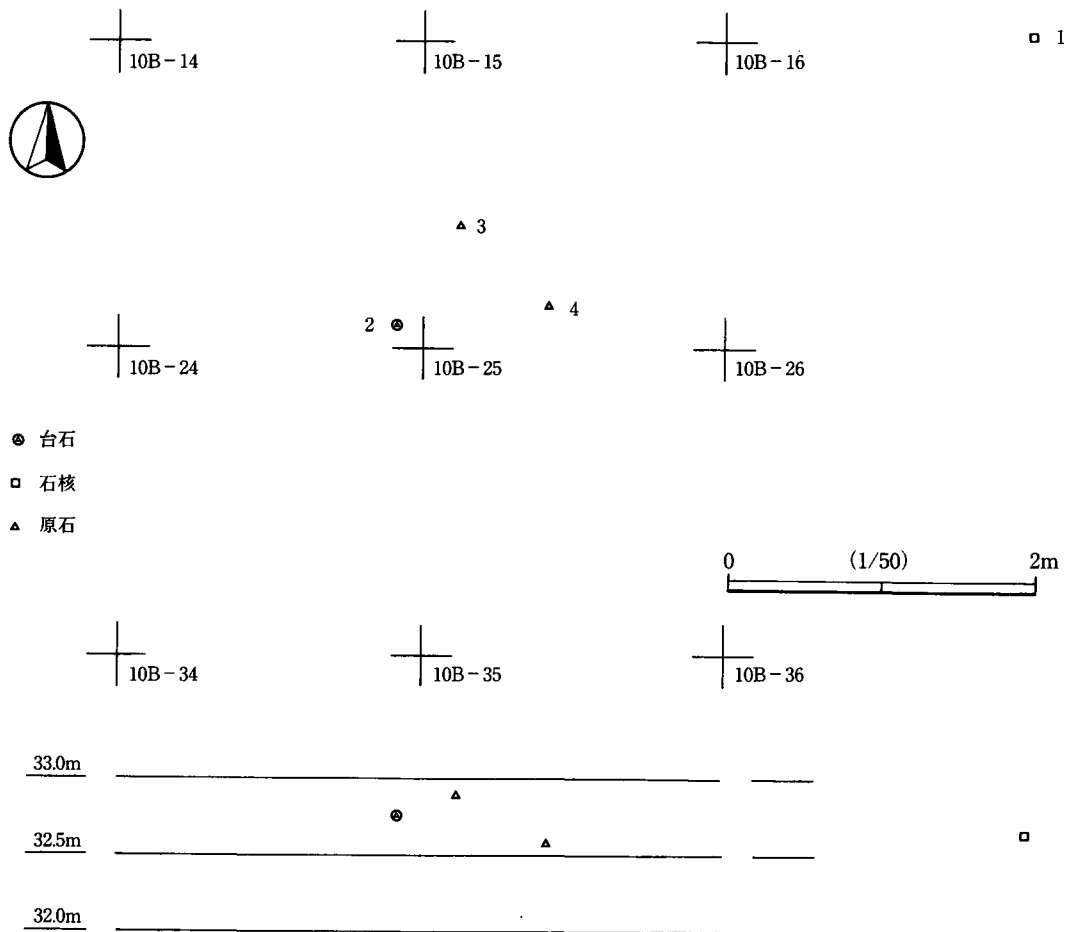


第4図 大山遺跡全測図





第5図 第I・第II b・第II c・第II d文化層石器集中石器分布



第6図 第I文化層 石器集中1 器種別分布図

### 第I文化層

#### 石器集中1 (第6, 7図, 第1表, 図版67)

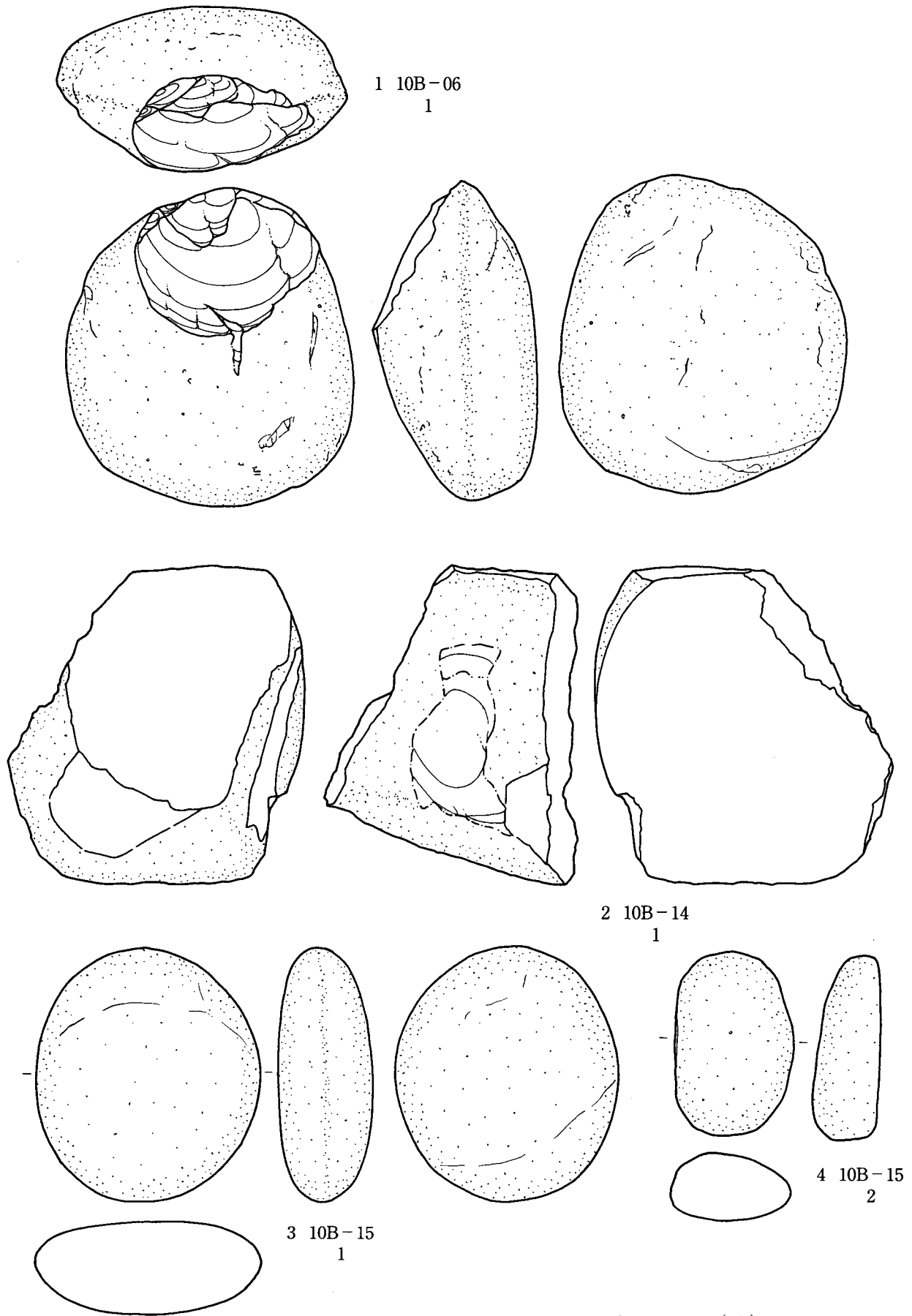
調査区の南西端の斜面上に石器群は分布する。出土層位は、発掘時の所見からはⅢ層上部からⅡb層となっている。石器群は南北2m, 東西4mの範囲に広がるが、ほとんどが10B-15グリッドを中心に南北1m, 東西1mにまとまる。石器の帰属時期は縄文時代以降の可能性もある。

出土石器は、石核1点, 台石1点, 原石2点の合計4点である。

1はチャートの石核である。2はハンレイ岩の台石としたが、あるいは礫の可能性もある。3は砂岩の原石, 4はチャートの原石である。

第1表 第I文化層 石器集中1 石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物No.	器種	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	打面形状	打角	打面頭部	C	J	H	T	背面構成	R	L	D	V	調整角°	刃部角°	先端角°	調整部位	折面部位	末端	母岩番号	備考	標高	
1	10B-06	1	石核	70.7	63.8	36.6	198.2																			チャート1	Ⅲ層上	32.615	
2	10B-14	1	台石	70.9	66.3	56.9	308.4																				ハンレイ岩1	Ⅱb層	32.778
3	10B-15	1	原石	56.7	50.1	21.3	87.7																				砂岩1	Ⅱb層	32.895
4	10B-15	2	原石	40.8	26.6	16.7	27.8																				チャート2	Ⅱb層	32.592



第7图 第I文化層 石器集中1 出土石器実測図

## 第Ⅱ a 文化層

### 石器集中1 (第8～55図, 第2表, 図版9, 10, 68～88)

調査区の北東端の斜面肩口に分布する(第4図)。出土層位について、土層断面図からはXI層からIIc層にかけて大きく上下に拡散しているが、主体は第2黒色帯下部と考えられる。確認調査時の所見はIX層からVII層である。平面的には南北30m, 東西45mの範囲に広がる。これらの石器群は空白部によってさらにいくつかの集中部に分けられそうであるが、明確には識別されない。むしろ極端に集中するグリッドが存在することによる偏ったばらつきが目立つ。このような事情から石器集中1として大きく捉え、機械的にグリッド毎に機種別及び石材別の分布図を作成した。

出土石器は、石斧1点、楔形石器5点、敲石6点、台石2点、石核31点、剥片110点、碎片9点、原石896点、礫2点の合計1062点である。

1～5は楔形石器である。1は両極石核で末端に微細な剥離痕がある。むしろ両極剥片とした方が良いかもしれない。石材はチャート、安山岩A、ホルンフェルスである。6～22は石核である。6～9は剥片を素材とし、周辺から求心的に剥離したものである。10～22は扁平な礫を素材とし、両極技法などにより求心的に剥離したものである。22は脆い砂岩で石核であるか微妙である。石材は安山岩A、黒曜石、ホルンフェルス、珪質頁岩、砂岩、チャートである。23～28は敲石である。比較的扁平な礫の側縁及び末端に敲打痕や剥離痕を残す。石材が砂岩ないしホルンフェルスであることから敲石としたが、一部には石核としても良いものがあるかもしれない。29・30は台石である。比較的大形の扁平礫の表面に敲打痕が見られることから台石としたが、敲石の可能性もある。石材は砂岩である。31～88は剥片である。31～62は縦長剥片、63～88は横長剥片である。31・32は石材等から石斧の調整剥片の可能性もある。33・34は両極剥片である。55, 85, 87は若干白濁しており被熱の可能性がある。石材は蛇紋岩、黒曜石、チャート、ホルンフェルス、安山岩A、珪質頁岩、ハンレイ岩である。89～96は原石である。石材はチャート、ホルンフェルス、砂岩、流紋岩である。97a～fは石斧1点と剥片5点の接合資料である。扁平な礫の周辺から求心的に調整剥離を行い自然面を取り去った後、刃部に若干深めの調整を施している。未成品と思われる。石材は粘板岩である。98a～fは石核1点と剥片5点の接合資料である。扁平な礫の周辺から求心的に加撃して、剥片を剥離している。石材は緻密で良質なホルンフェルスである。99a+bは石核1点、剥片1点の接合資料である。石材はチャートである。100a～cは石核1点、剥片2点の接合資料である。礫の自然面を取り去った後、石刃状の縦長剥片を剥離している。石材は安山岩Aである。101a+bは石核1点、剥片1点の接合資料である。これも98a～fと同様、扁平な礫の周辺から求心的に加撃して、剥片を剥離している。右側縁及び下端部の細かい剥離痕は石斧等の調整のための可能性もある。石材は安山岩Aである。102a～110bには扁平な礫を素材とし、上端ないし下端部に少数の剥離痕を残す石核と剥片の接合資料を集めた。102a+bは石核1点、剥片1点の接合資料である。石材は砂岩である。103a+b及び104a+bは石核1点、剥片1点の接合資料である。石材はホルンフェルスである。105a～c及び106a～cは石核1点、剥片2点の接合資料である。石材は砂岩である。107a+bは石核1点、剥片1点の接合資料である。石材はチャートである。108a+bは石核1点、剥片1点の接合資料である。石材は砂岩である。109a～cは石核1点、剥片2点の接合資料である。石材は流紋岩である。110a+bは石核1点、剥片1点の接合資料としたが、石核の破損の接合である。石材は安山岩Bである。



第 8 图 第 II a 文化層石器集中 石器分布图

2K-50      2K-51      2K-52      2K-53      2K-54

■ 楔形石器



2K-60      2K-61      2K-62      2K-63      2K-64

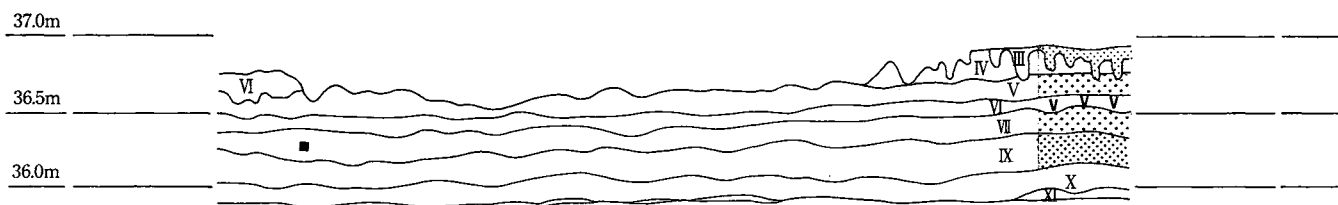
■ 2

2K-70      2K-71      2K-72      2K-73      2K-74

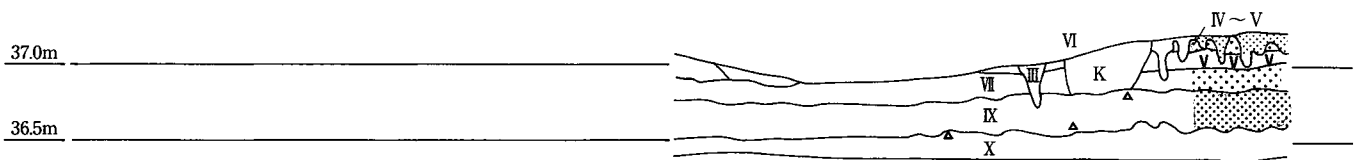
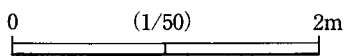
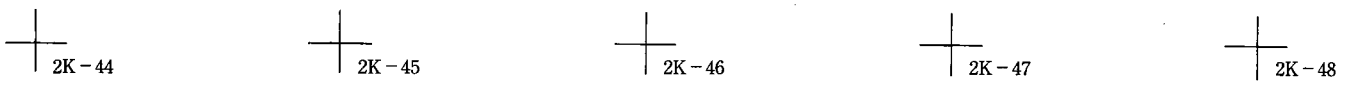
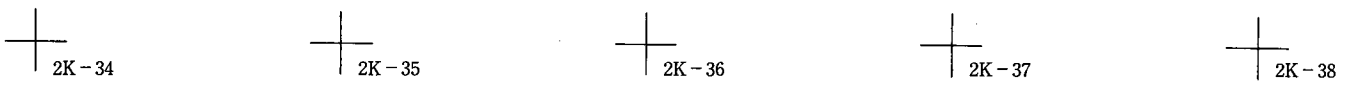
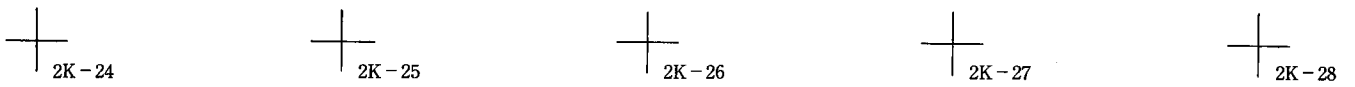
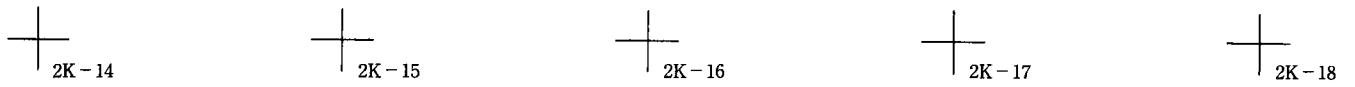
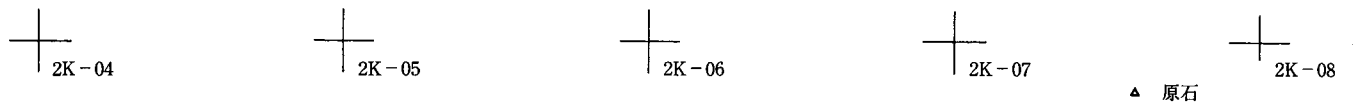
2K-80      2K-81      2K-82      2K-83      2K-84

2K-90      2K-91      2K-92      2K-93      2K-94

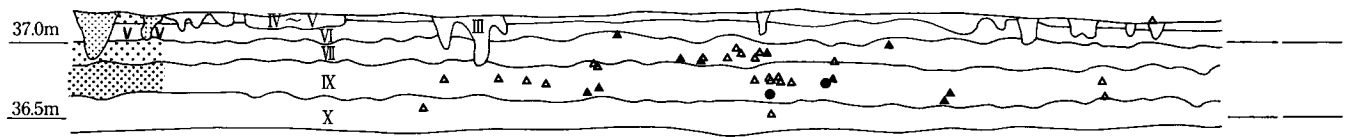
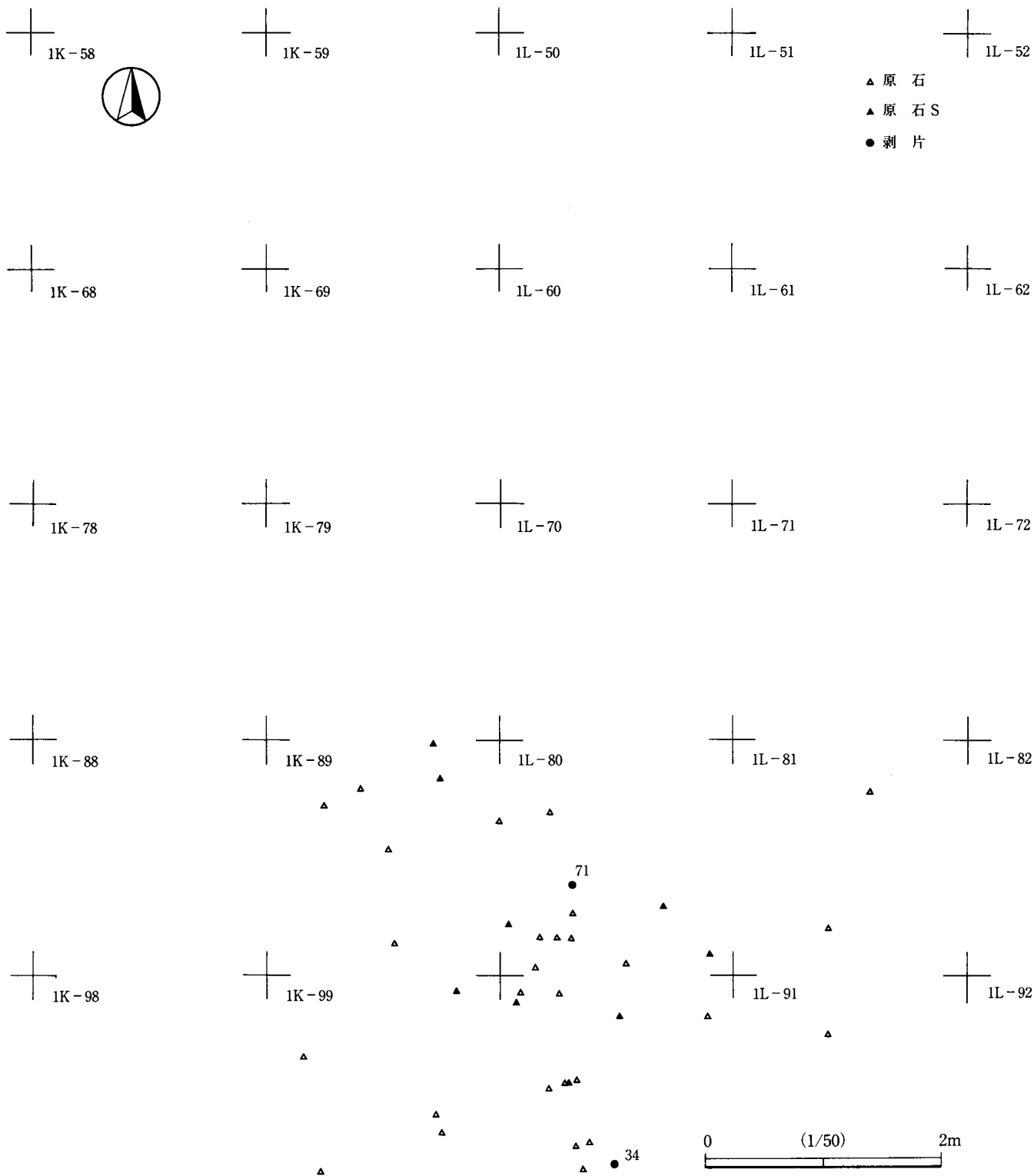
0 (1/50) 2m



第9図 第Ⅱa文化層 石器集中1 器種別分布図(1)

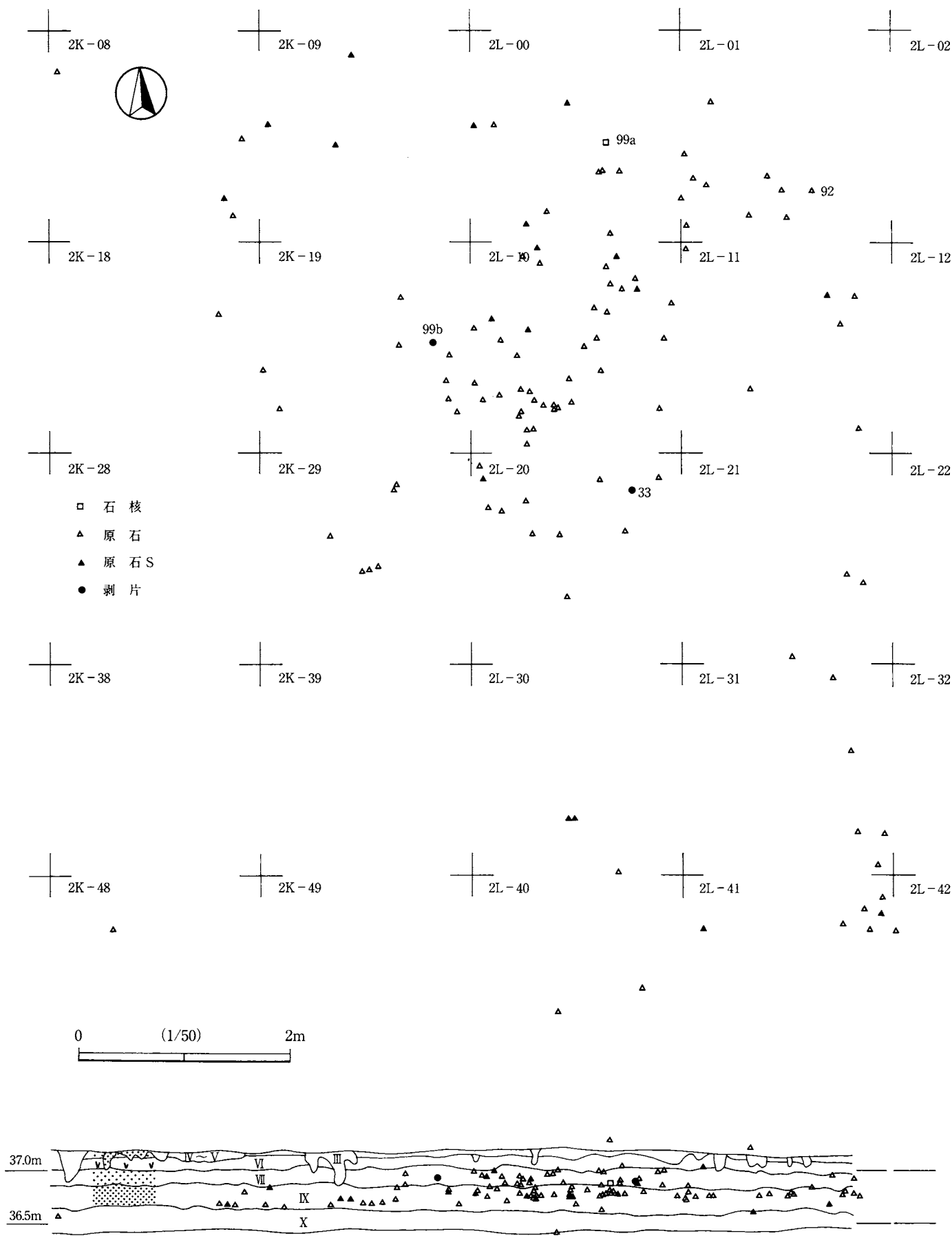


第10図 第Ⅱa文化層 石器集中1 器種別分布図(2)

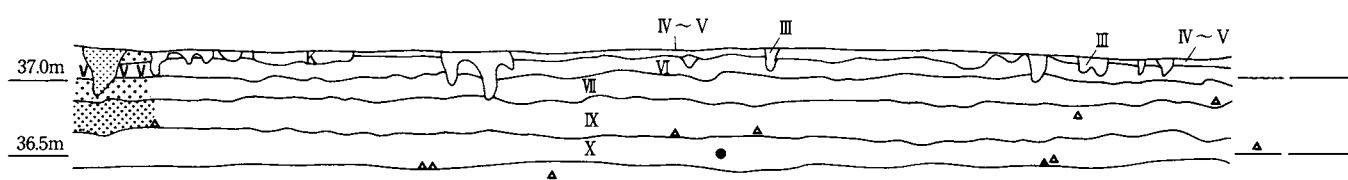
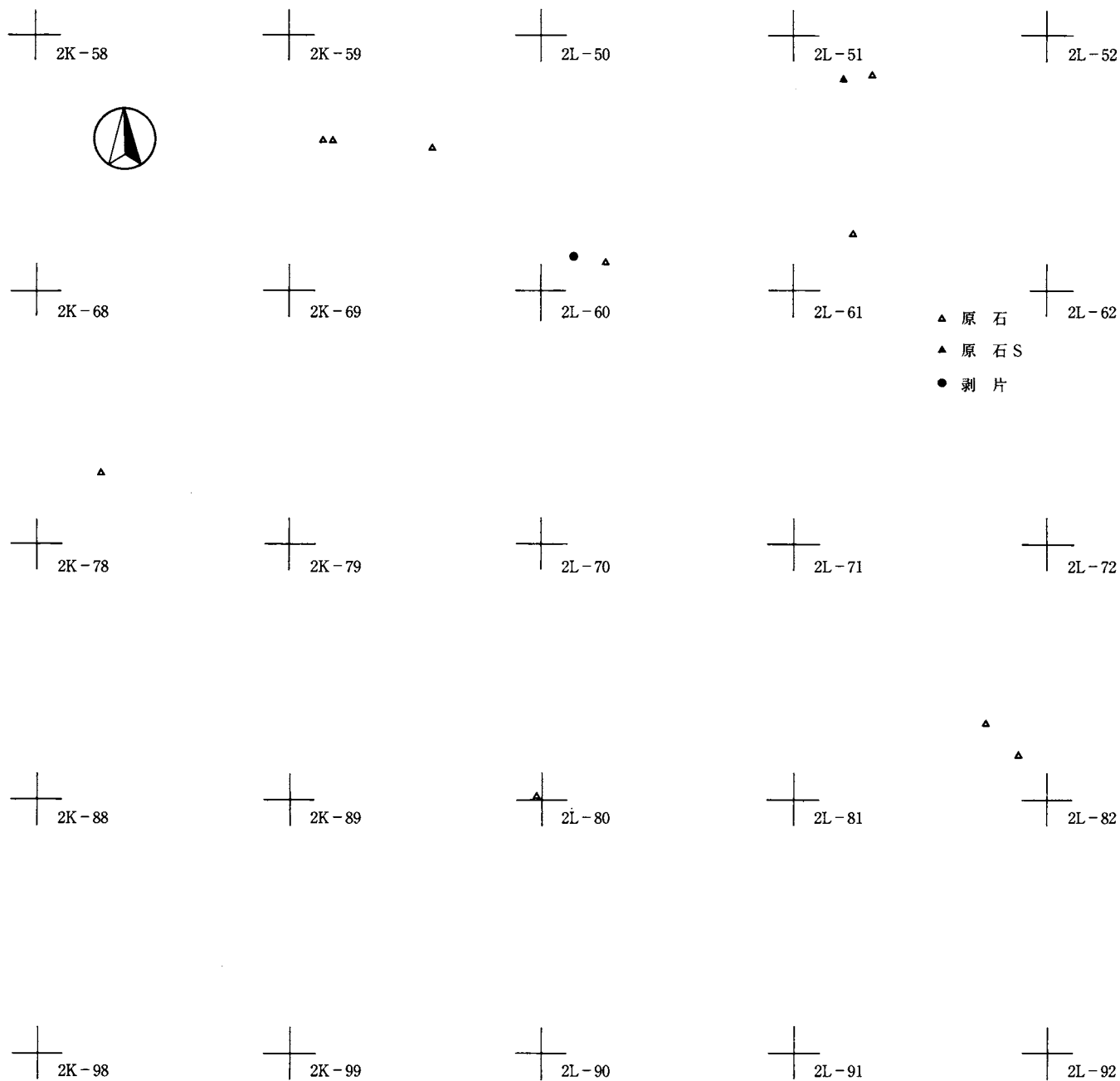


第11图 第IIa文化層 石器集中1 器種別分布图(3)

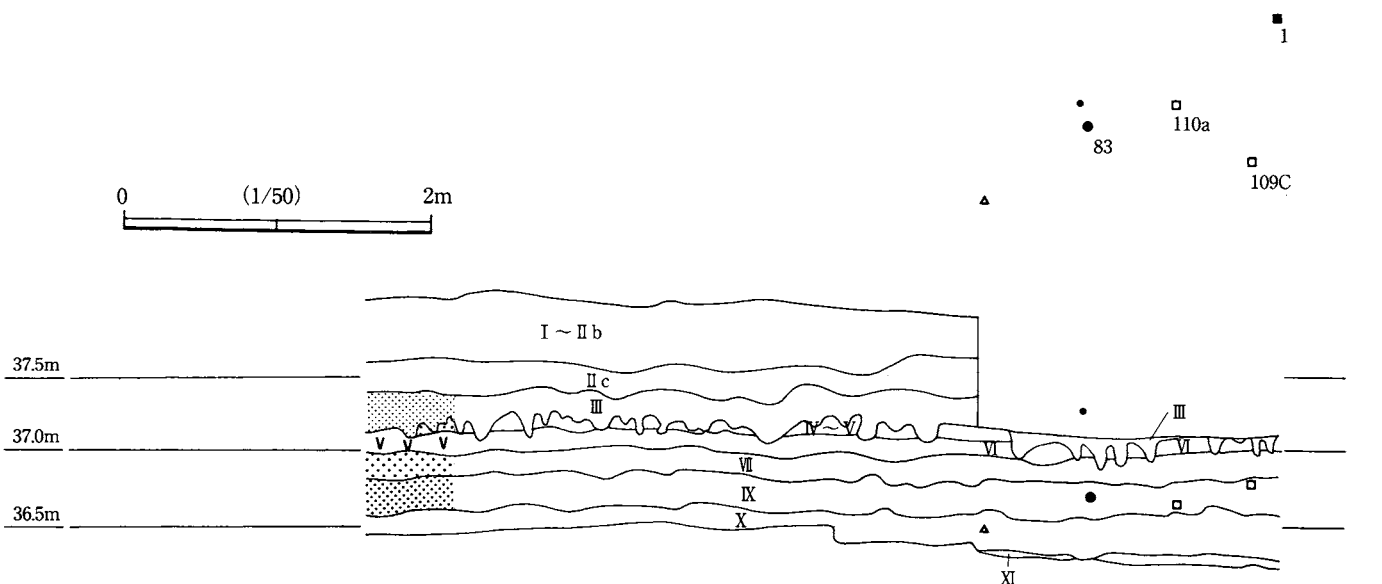
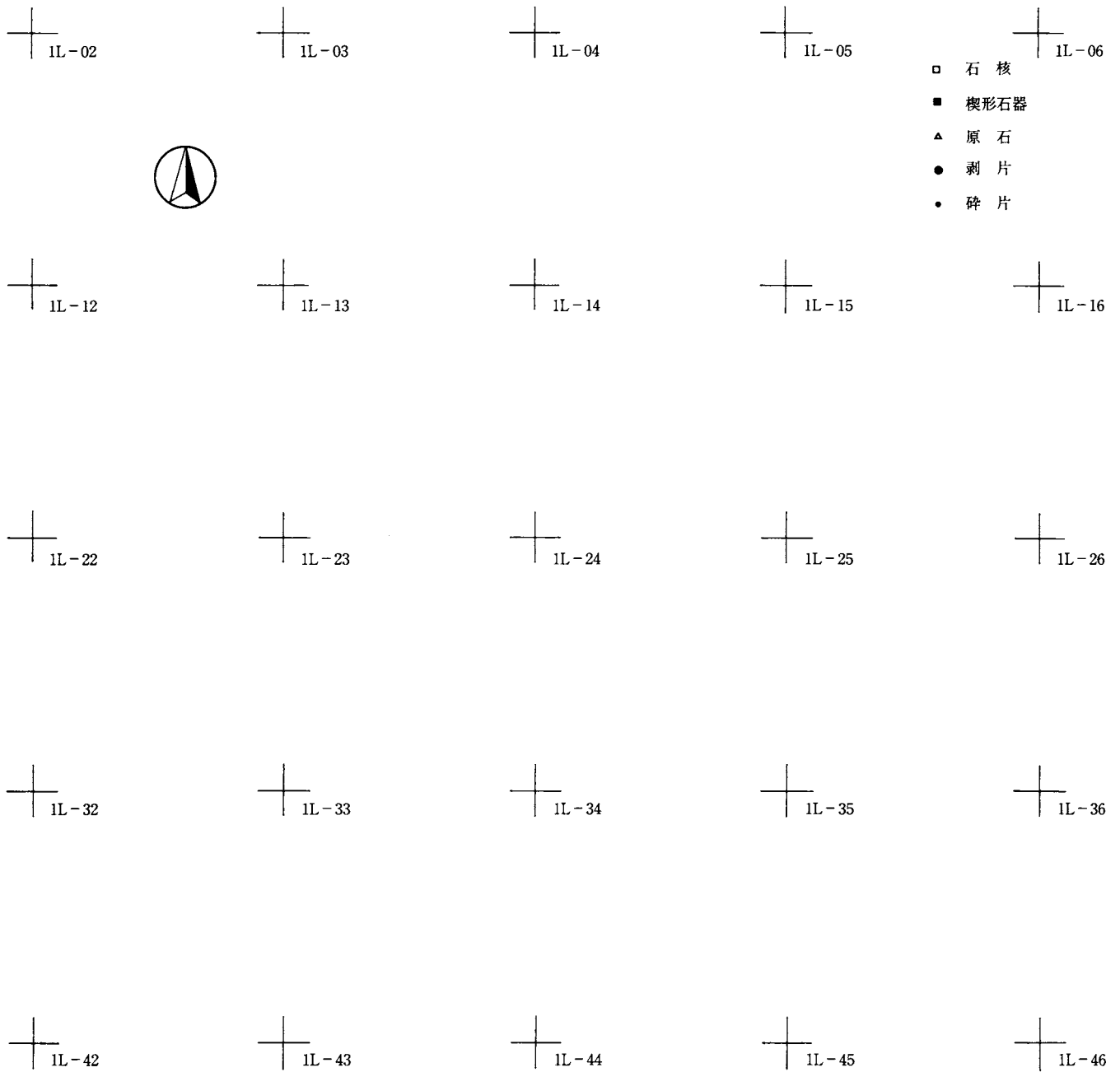




第12図 第IIa文化層 石器集中1 器種別分布図(4)

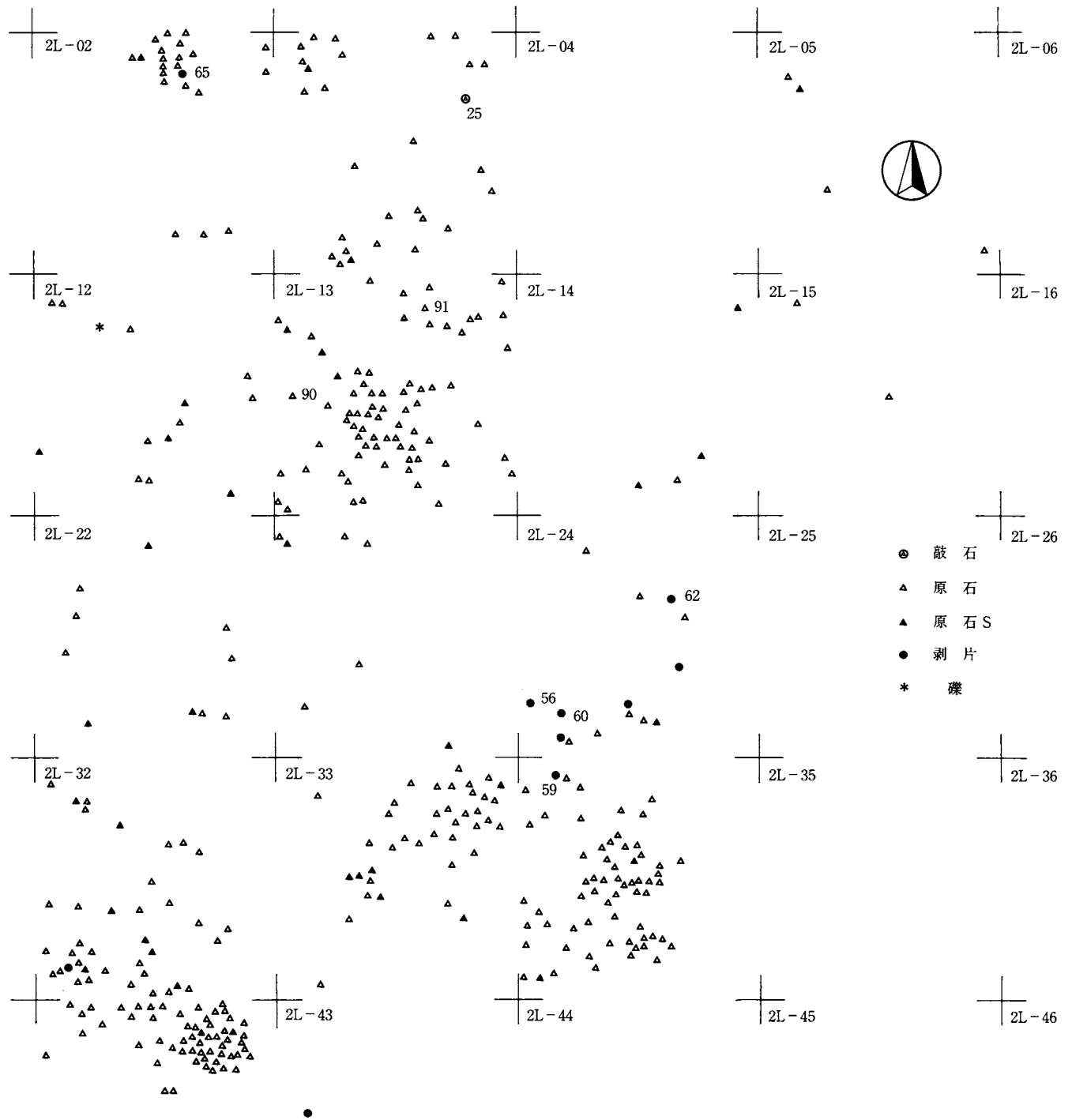


第13图 第IIa文化層 石器集中1 器種別分布图(5)

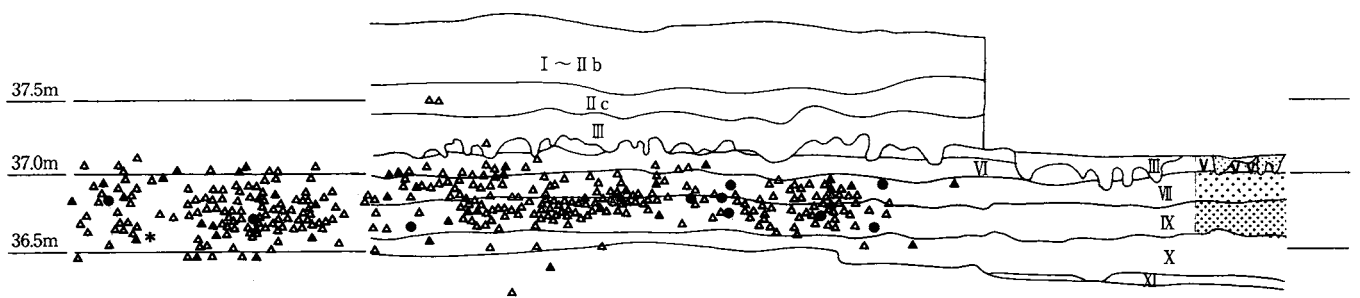
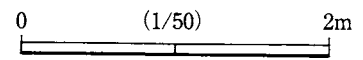


第14图 第IIa文化層 石器集中1 器種別分布图(6)





- 敲石
- △ 原石
- ▲ 原石S
- 剥片
- \* 礫



第16図 第IIa文化層 石器集中1 器種別分布図(8)

1L-06      1L-07      1L-08      1L-09      1M-01



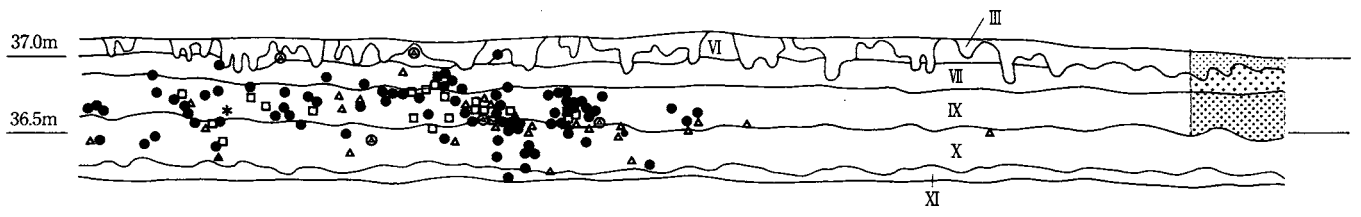
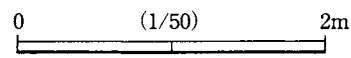
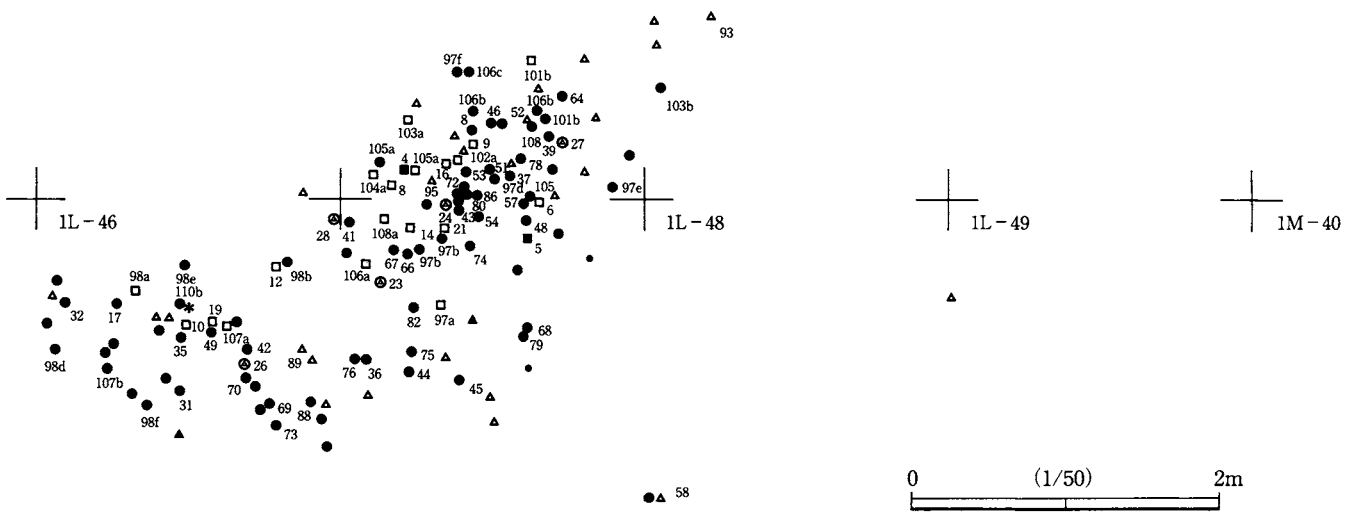
- 楔形石器
- 石核
- ⊙ 敲石
- ▲ 原石
- ▲ 原石S
- 剥片
- 碎片
- \* 烧成砾

1L-16      1L-17      1L-18      1L-19      1M-10

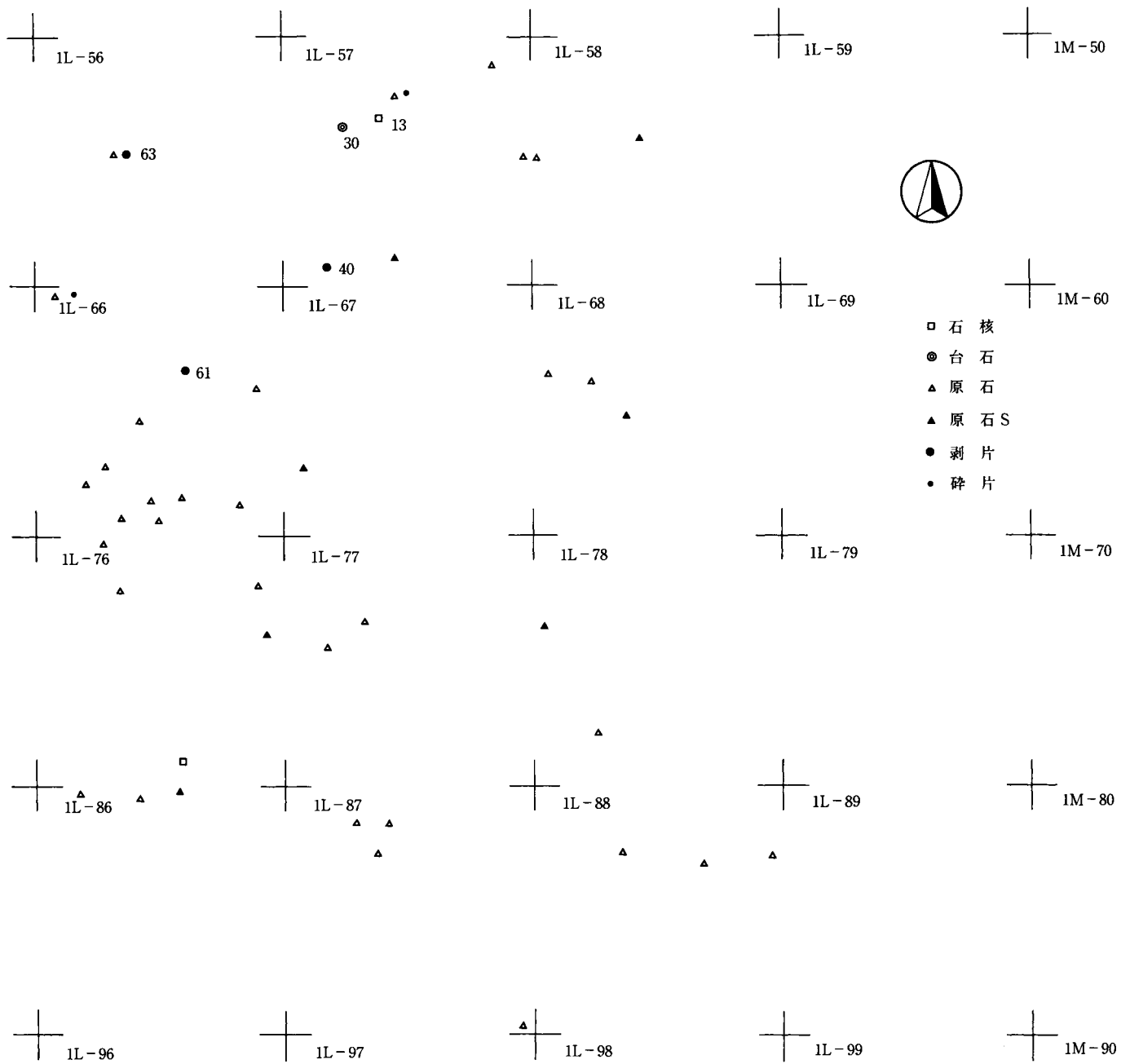
1L-26      1L-27      1L-28      1L-29      1M-20

1L-36      1L-37      1L-38      1L-39      1M-30

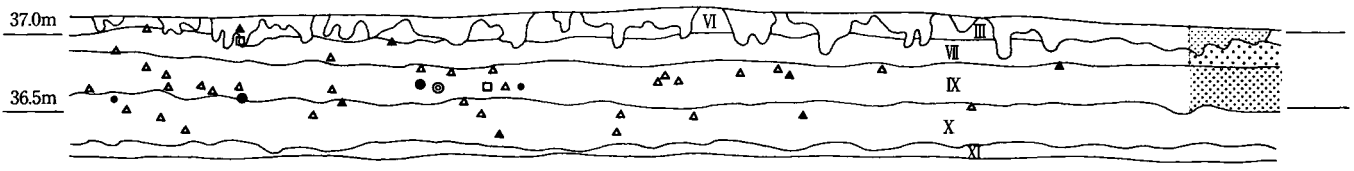
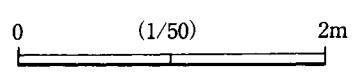
1L-46      1L-48      1L-49      1M-40



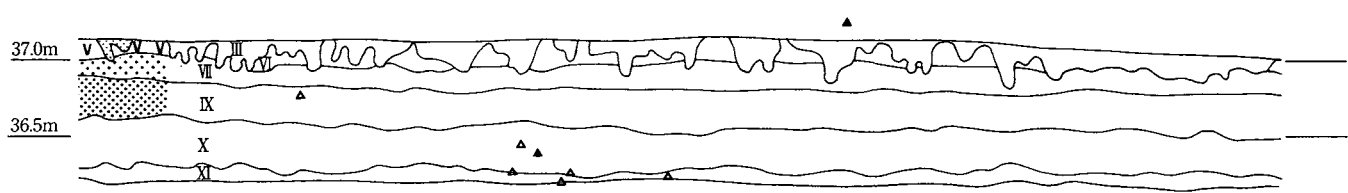
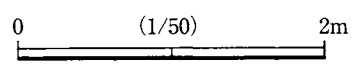
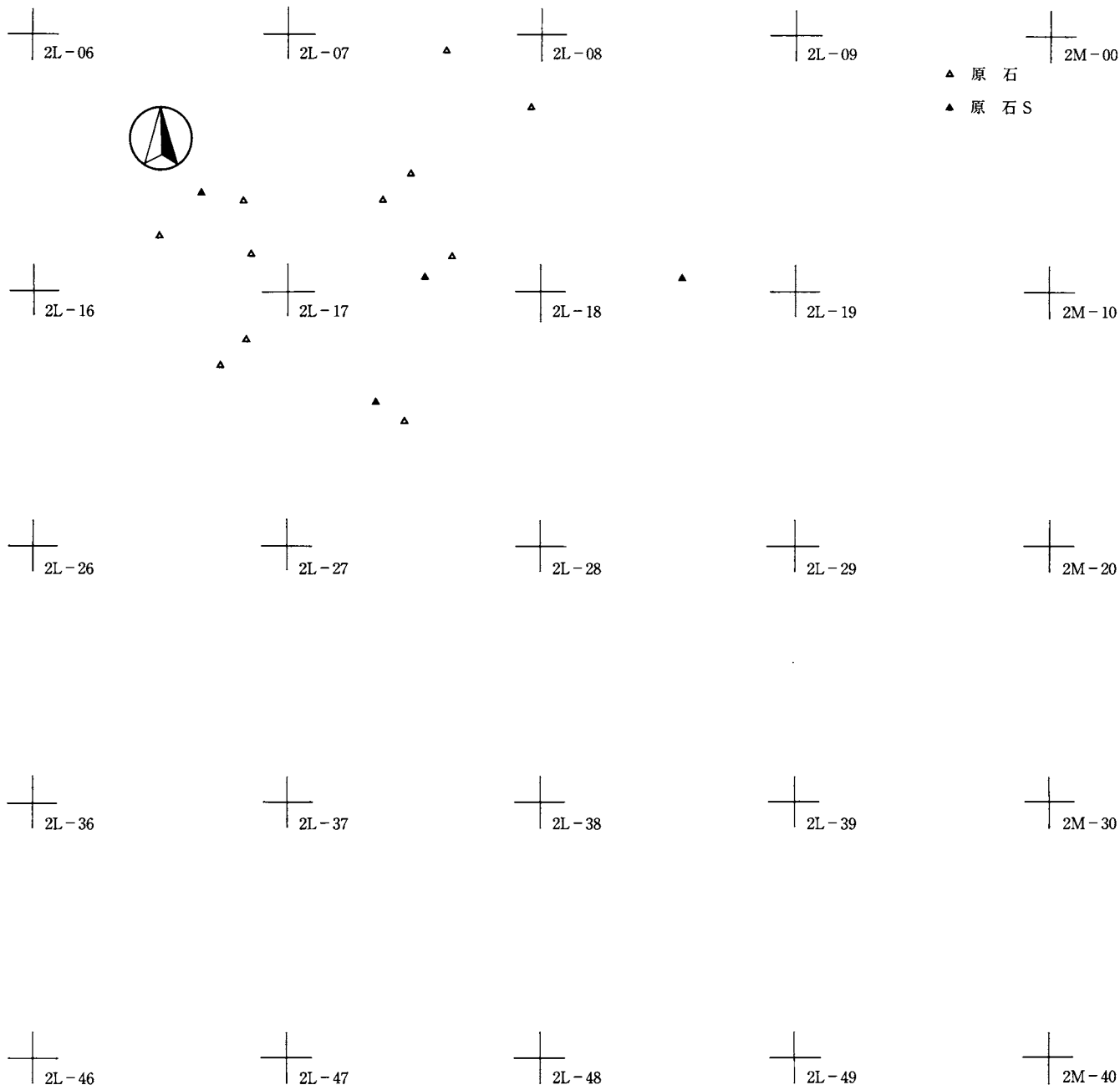
第17图 第IIa文化層 石器集中1 器種別分布图(9)



- 石核
- ⊙ 台石
- ▲ 原石
- ▲ 原石S
- 剥片
- 碎片

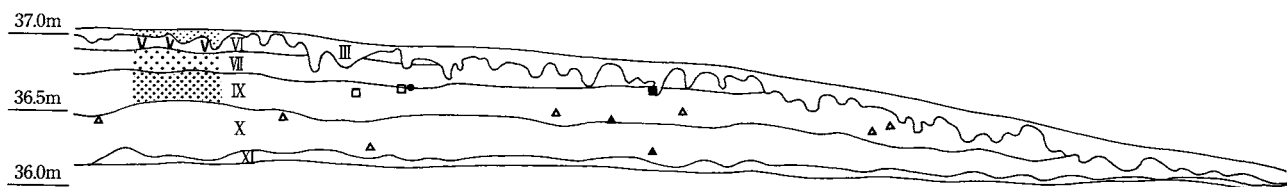
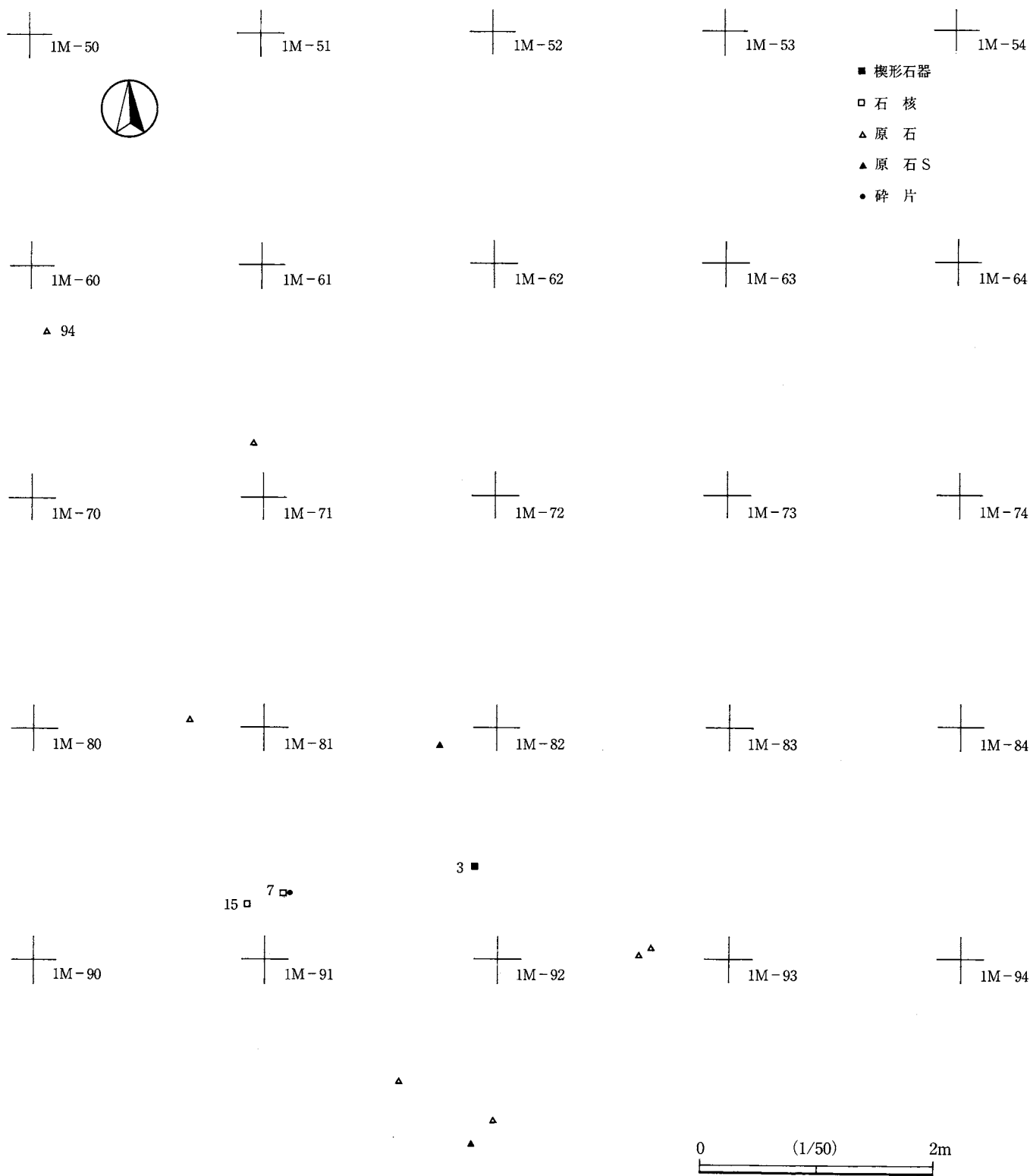


第18图 第IIa文化層 石器集中1 器種別分布图 (10)

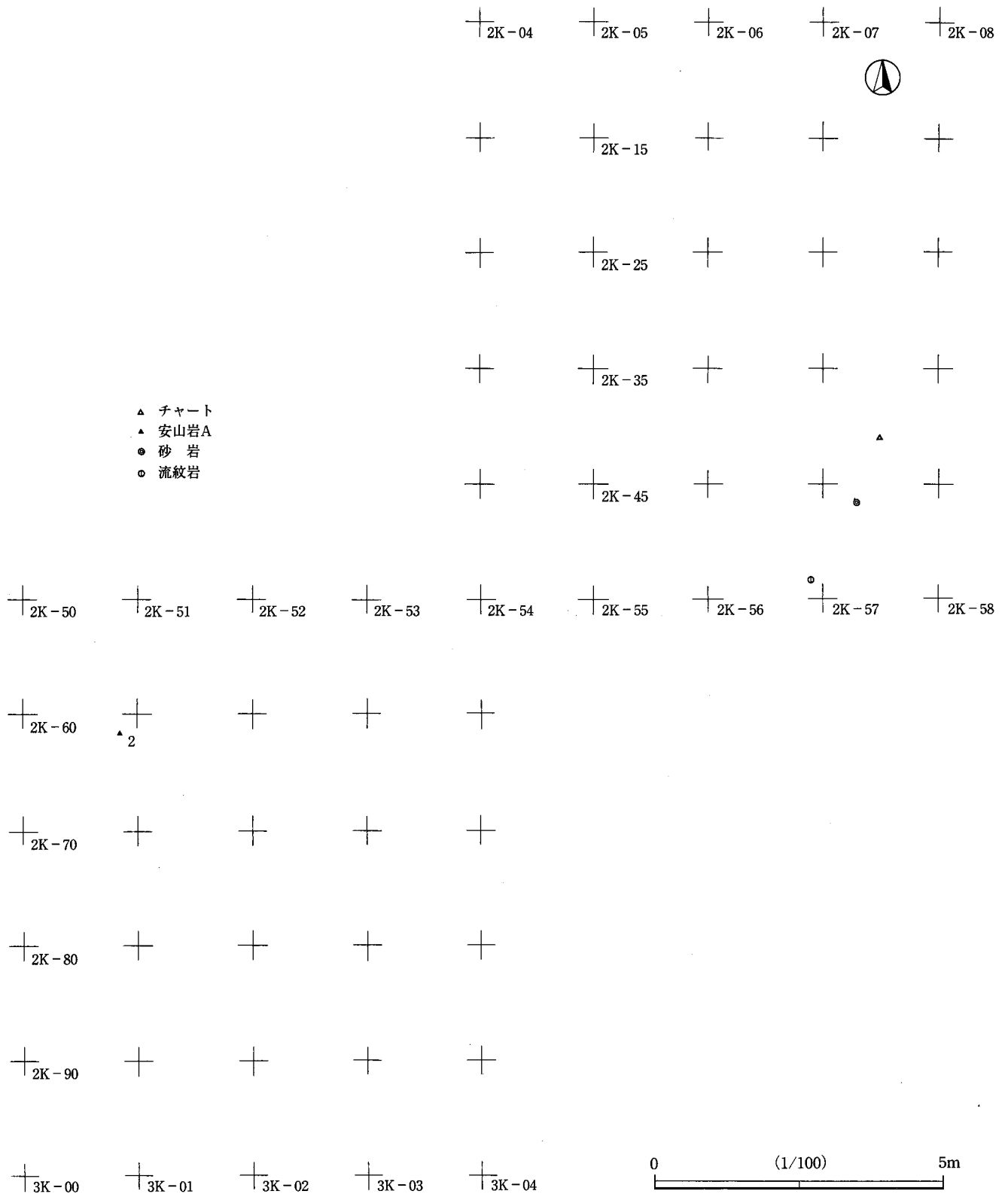


第19图 第IIa文化層 石器集中1 器種別分布图 (11)

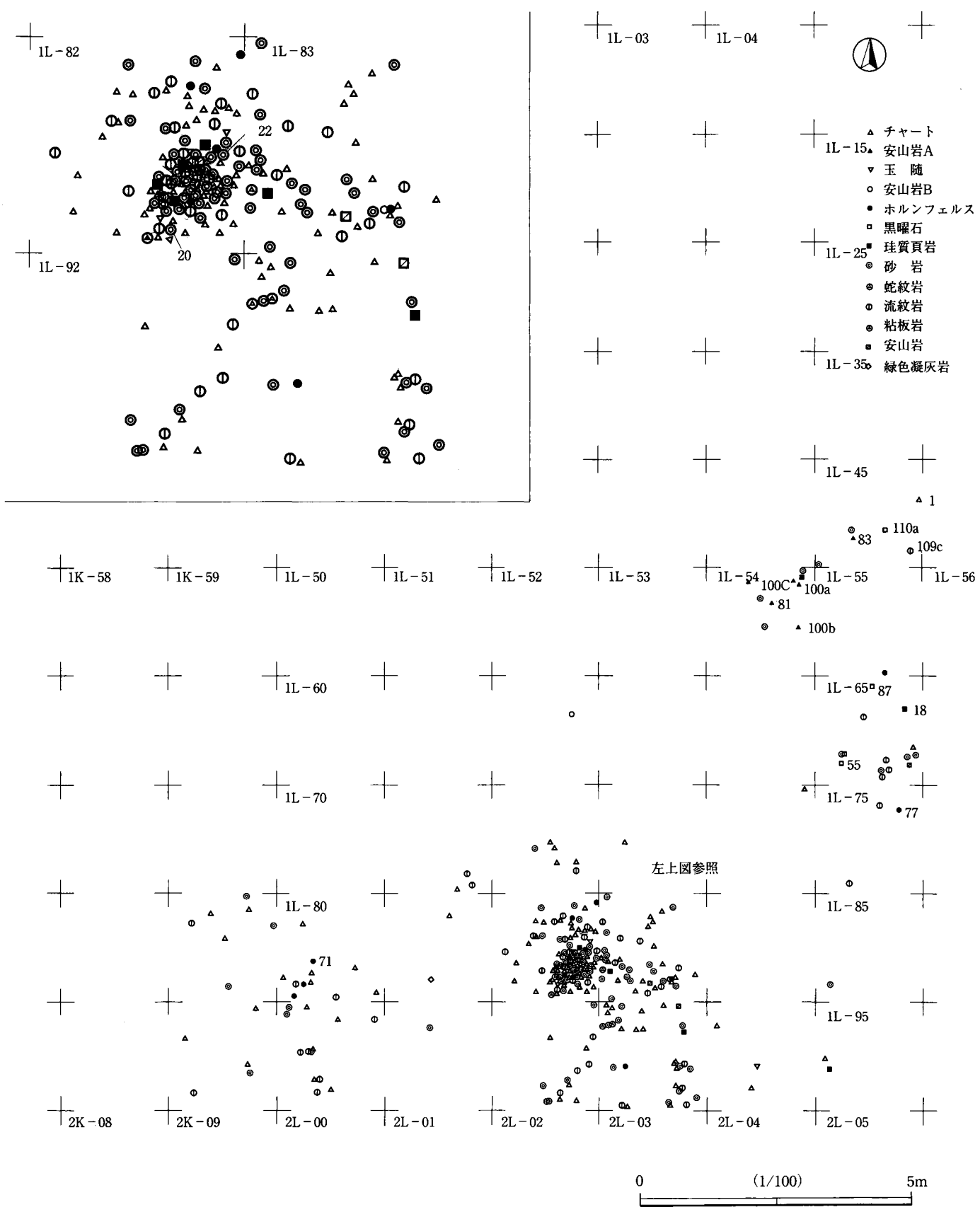




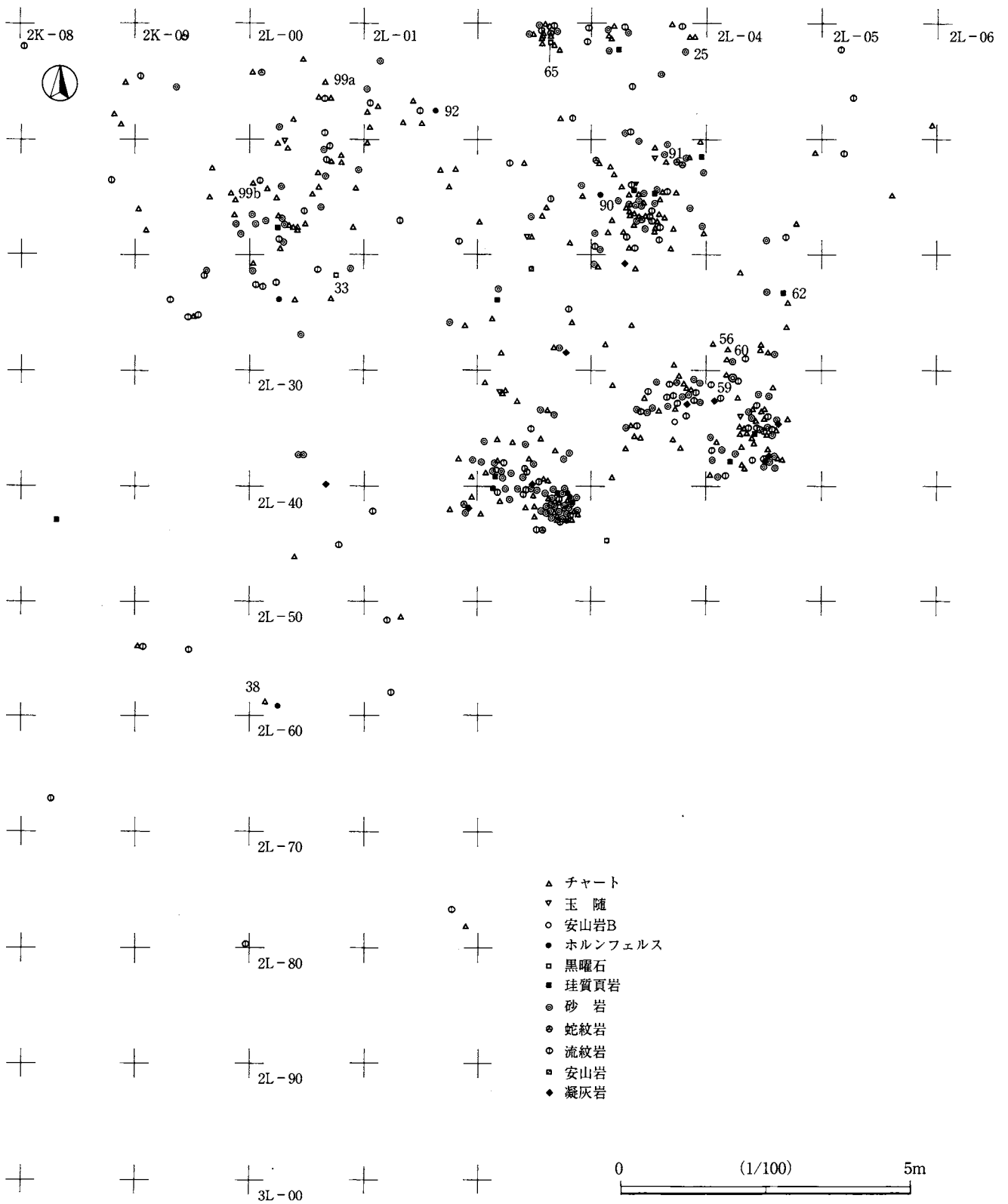
第20图 第IIa文化層 石器集中1 器種別分布图 (12)



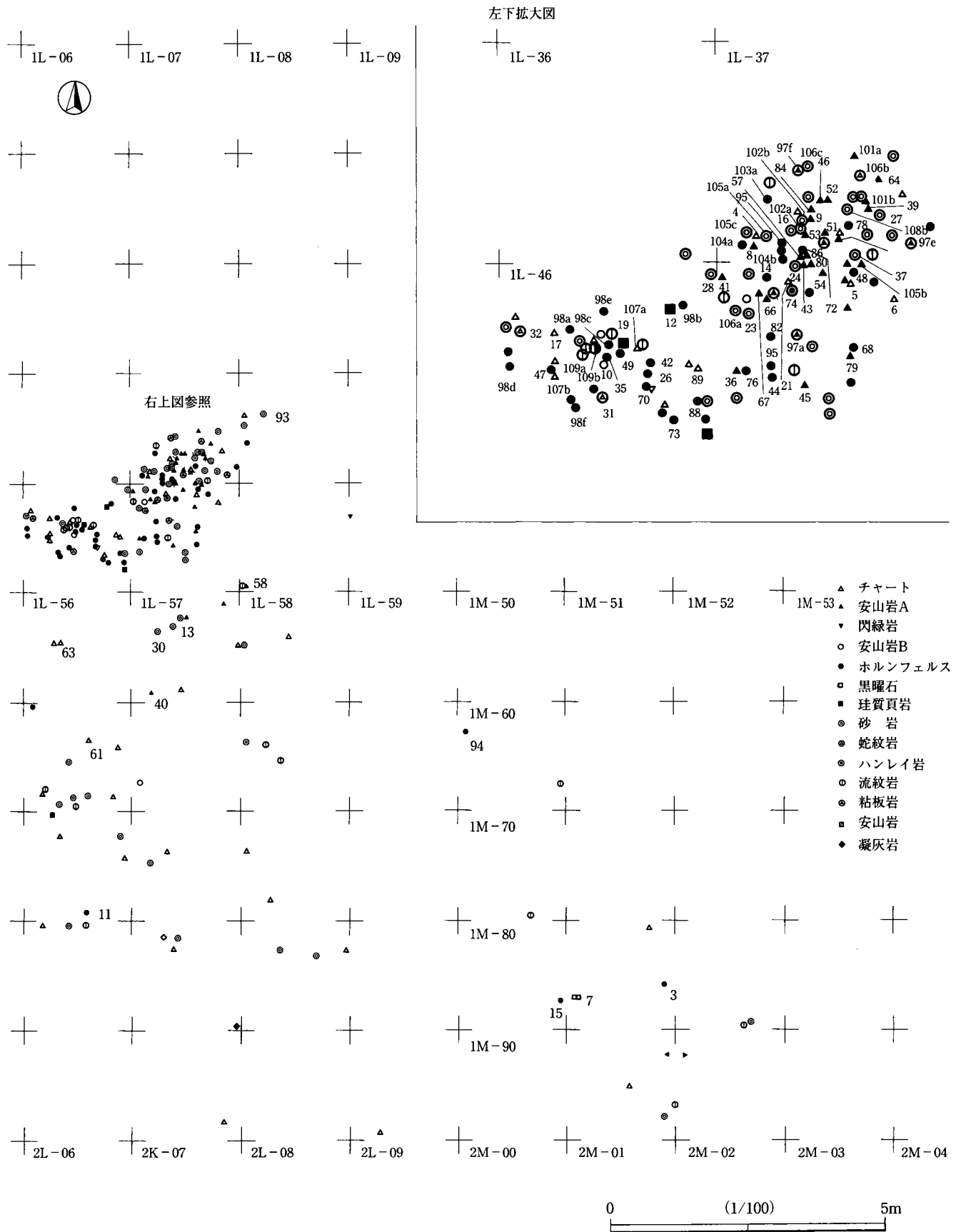
第21図 第Ⅱa文化層 石器集中1 石材別分布図(1)



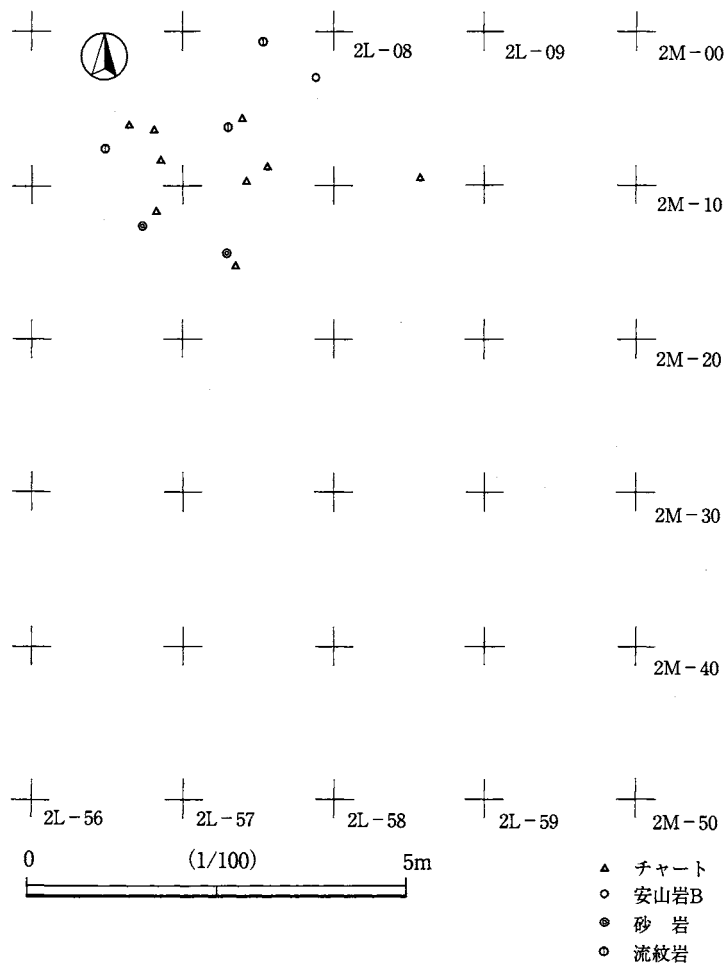
第22図 第IIa文化層 石器集中1 石材別分布図(2)



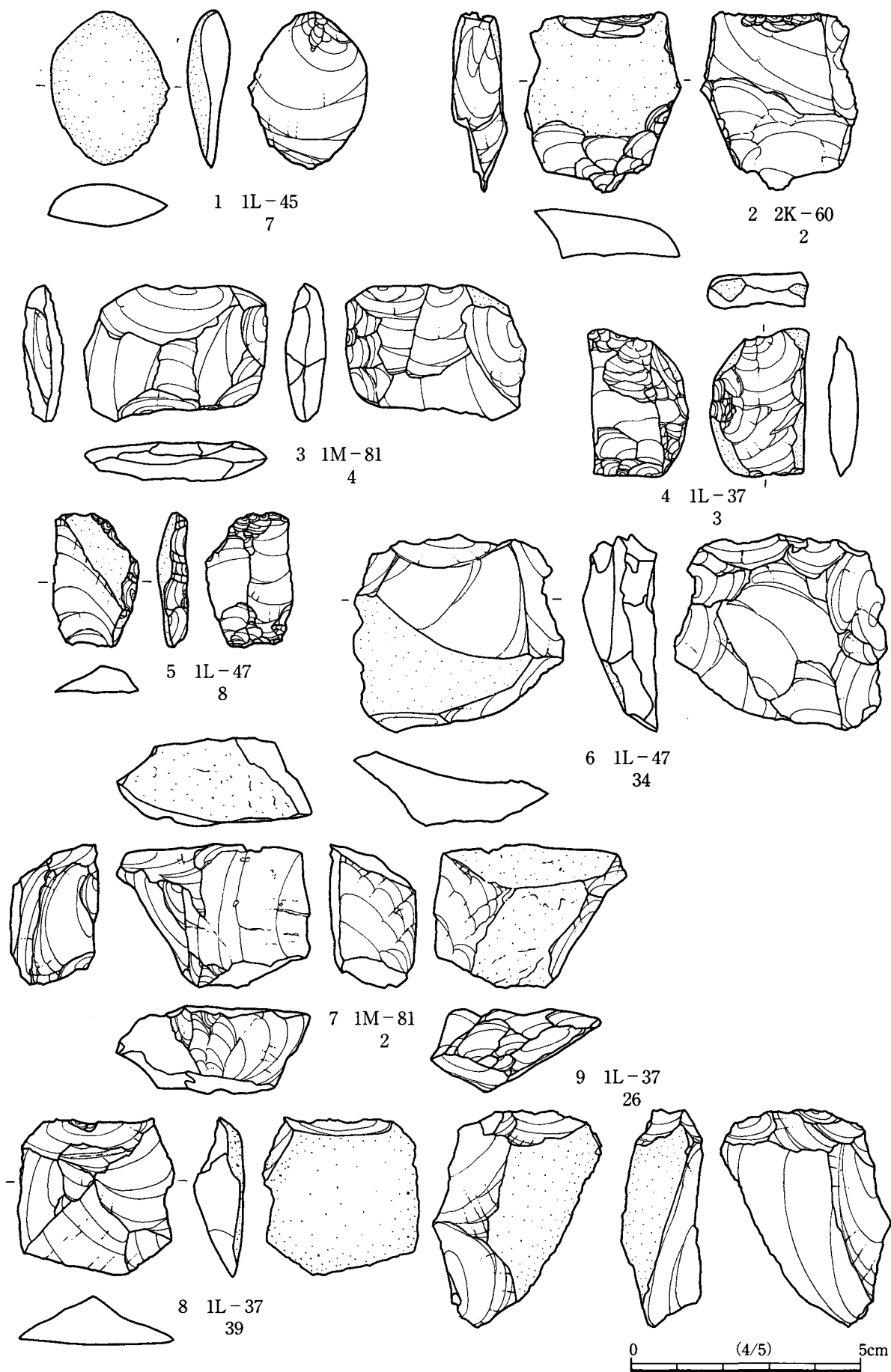
第23図 第IIa文化層 石器集中1 石材別分布図(3)



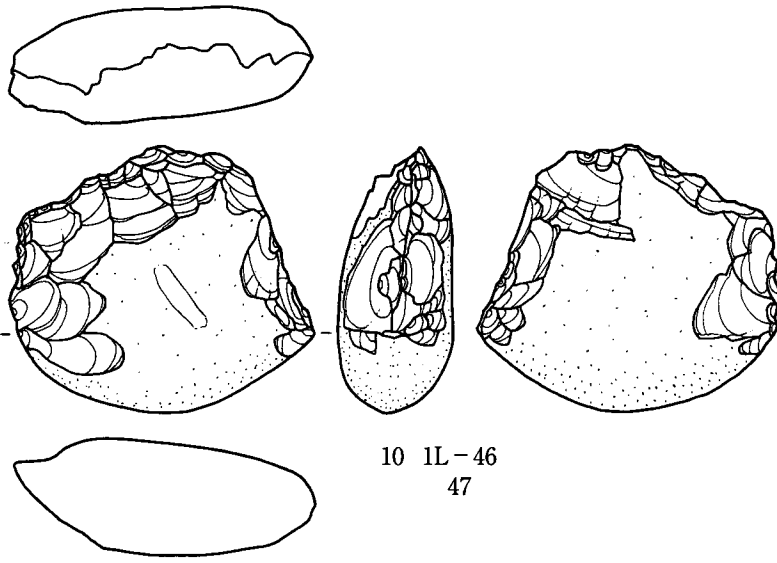
第24図 第Ⅱa文化層 石器集中1 石材別分布図(4)



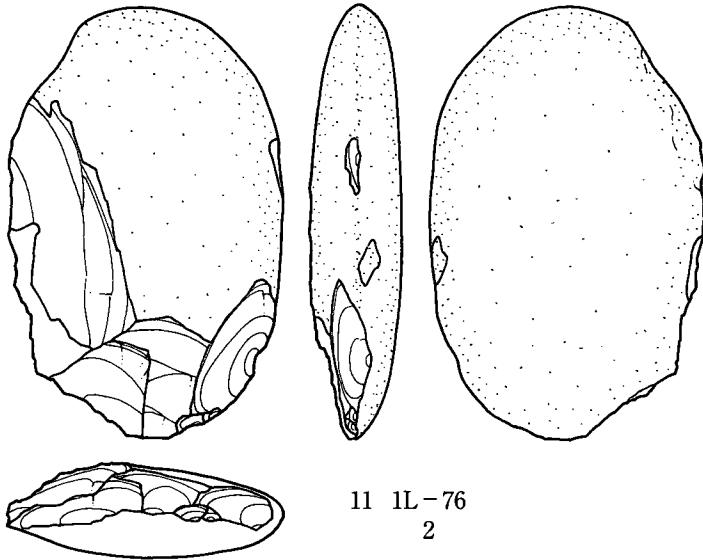
第25図 第Ⅱa文化層 石器集中1 石材別分布図(5)



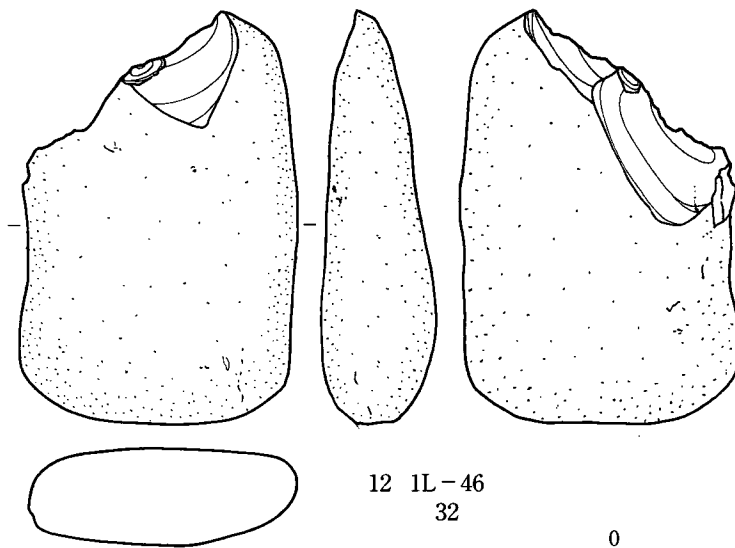
第26图 第IIa文化層 石器集中1 出土石器实测图(1)



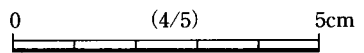
10 1L-46  
47



11 1L-76  
2

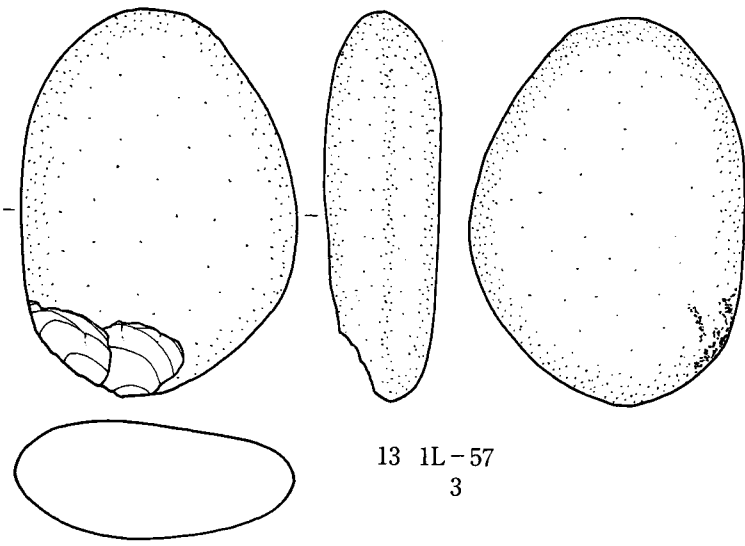


12 1L-46  
32

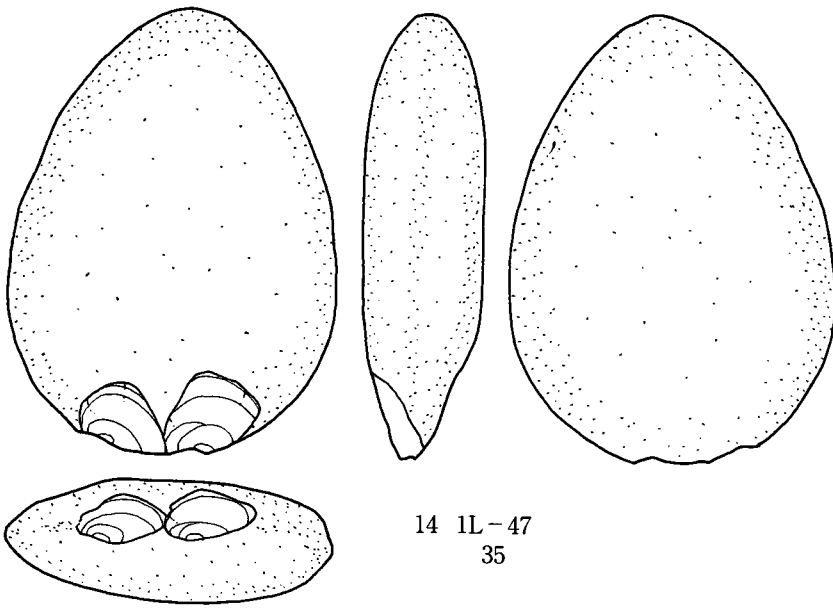


第27图 第IIa文化層 石器集中1 出土石器実測図(2)

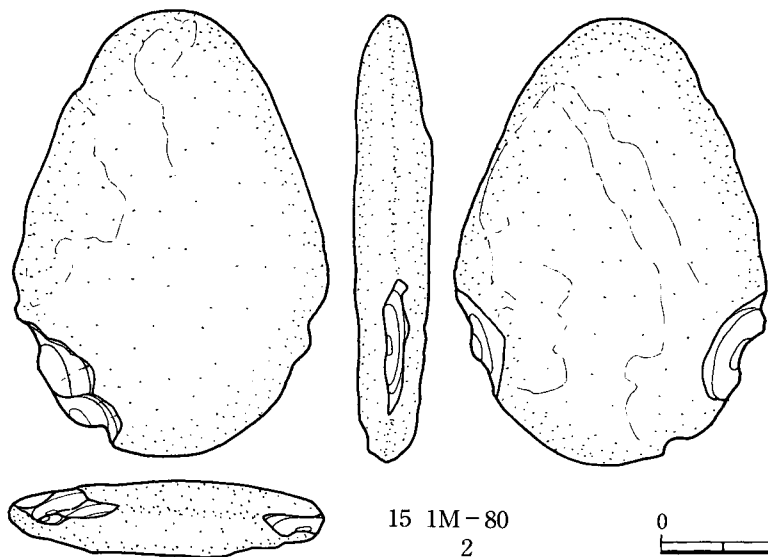




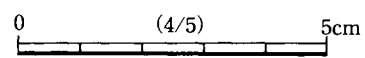
13 1L-57  
3



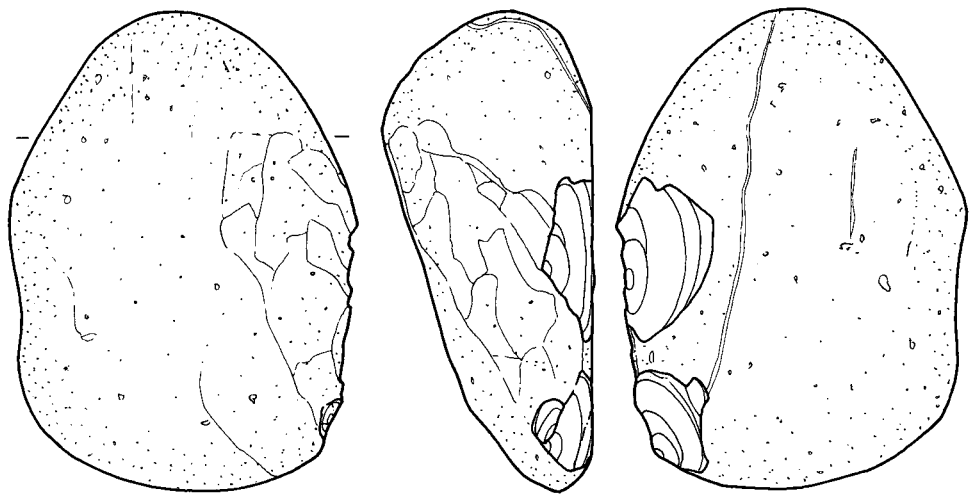
14 1L-47  
35



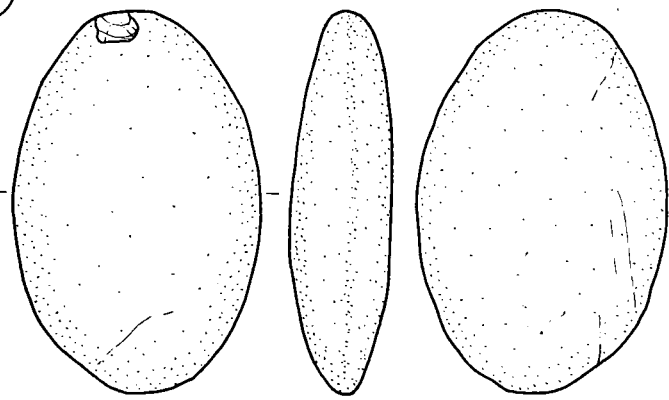
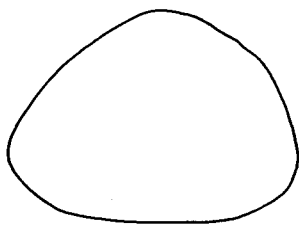
15 1M-80  
2



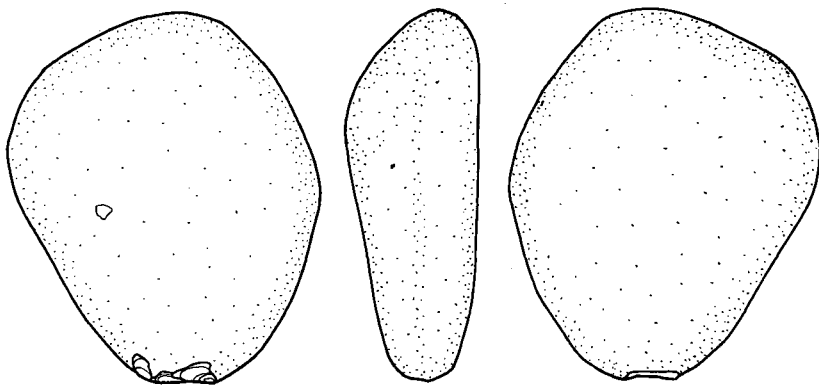
第28图 第IIa文化層 石器集中1 出土石器实测图(3)



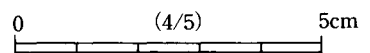
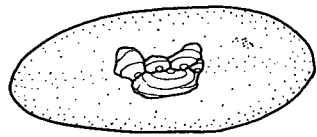
16 1L-37  
38



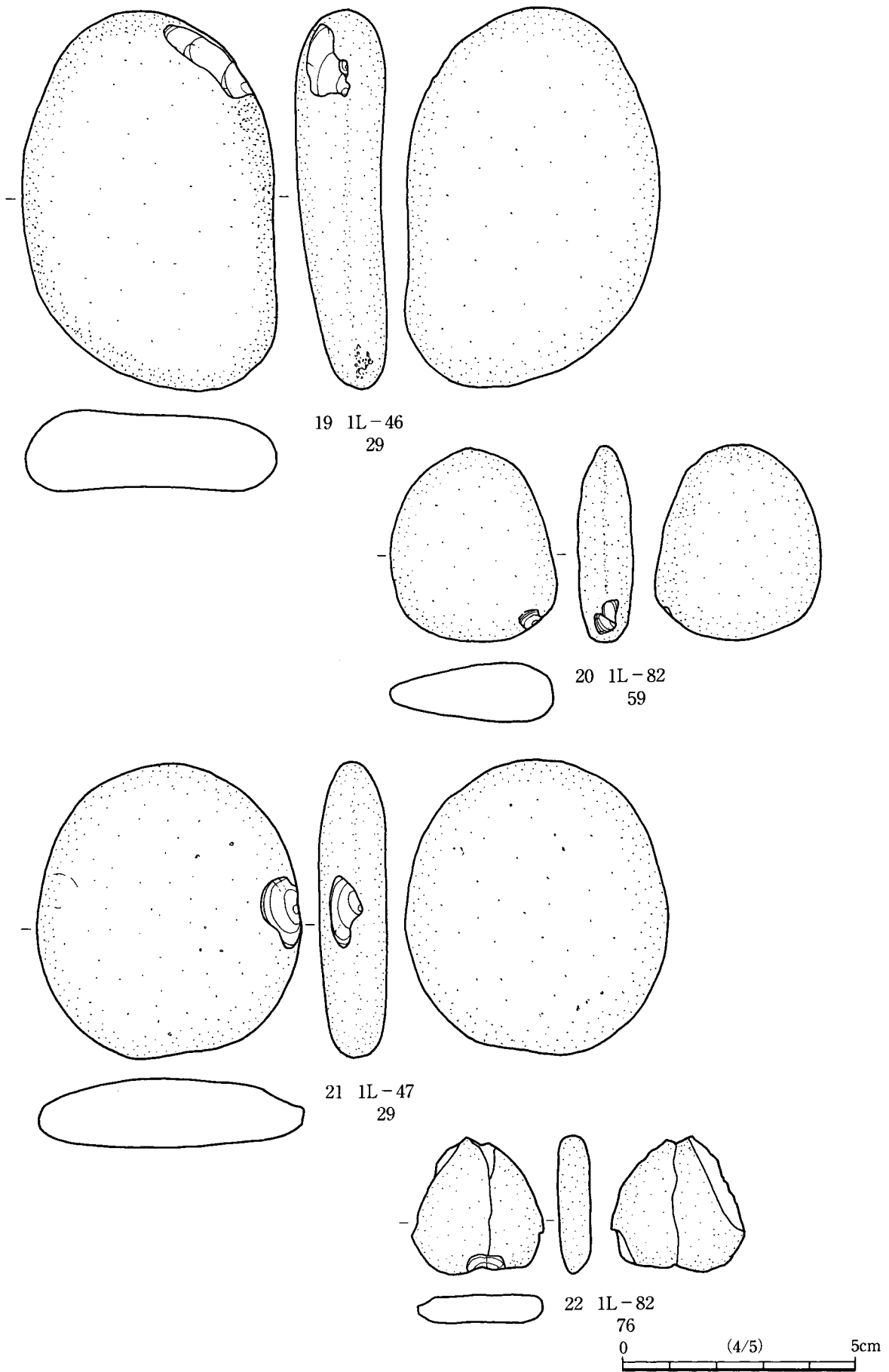
17 1L-46  
26



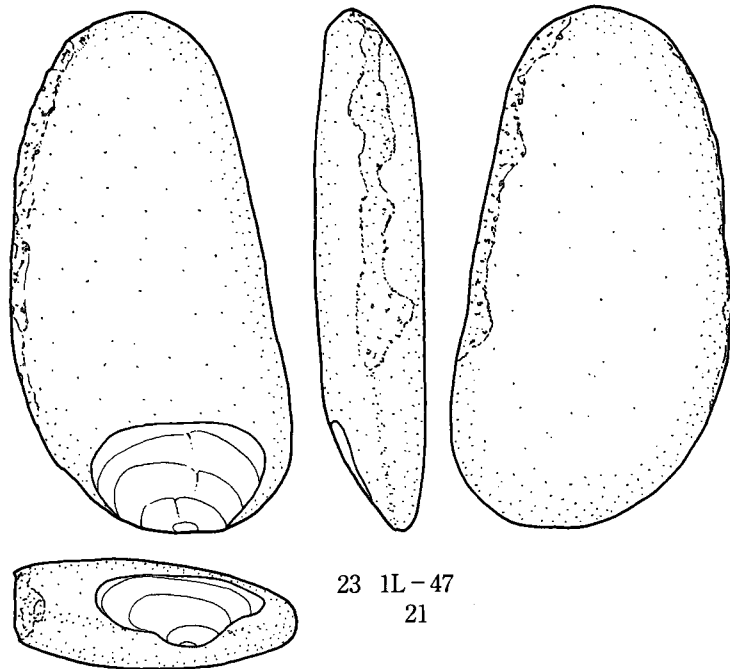
18 1L-65  
11



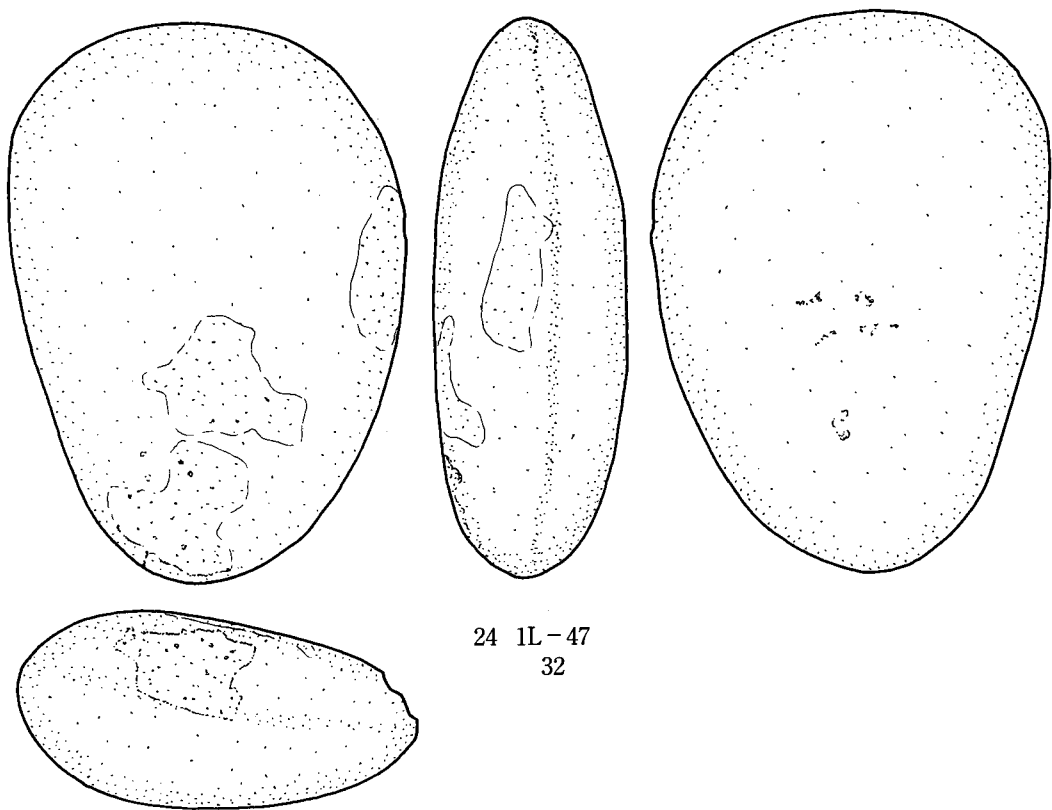
第29图 第IIa文化層 石器集中1 出土石器実測図(4)



第30図 第Ⅱa文化層 石器集中1 出土石器実測図(5)



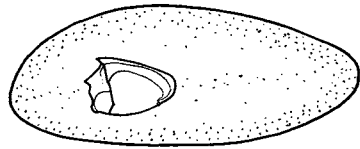
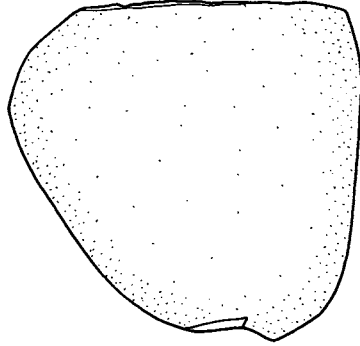
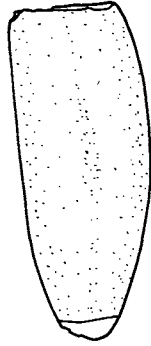
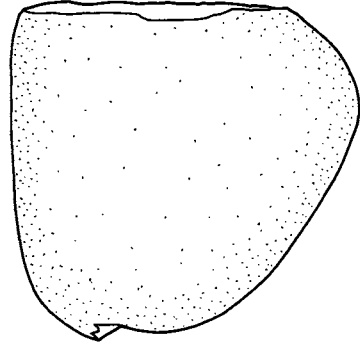
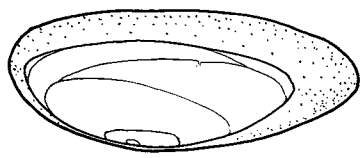
23 1L-47  
21



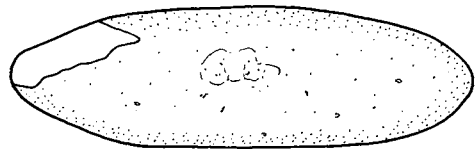
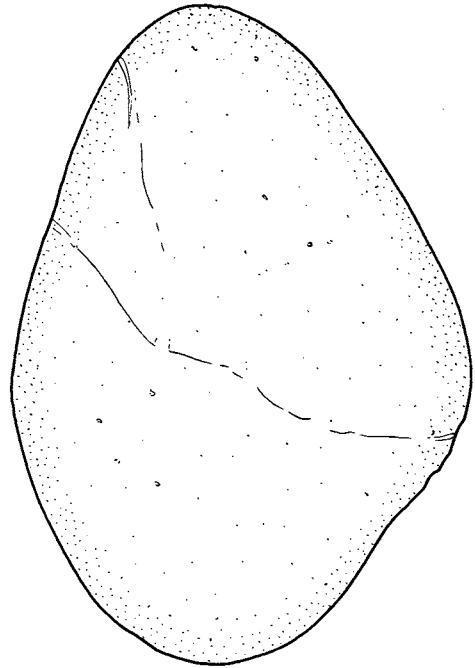
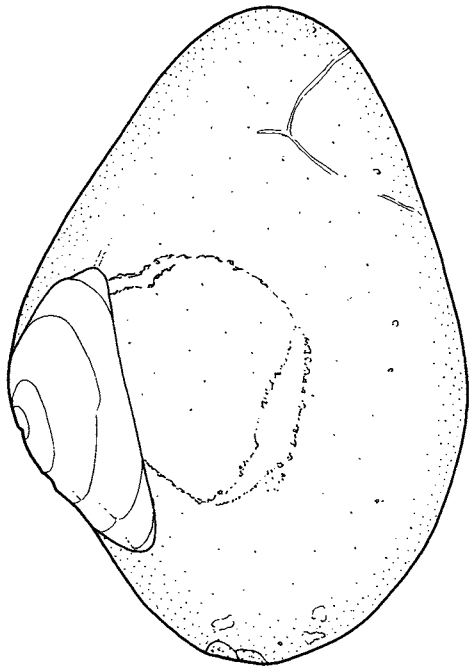
24 1L-47  
32

0 (4/5) 5cm

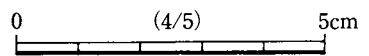
第31図 第Ⅱa文化層 石器集中1 出土石器実測図(6)



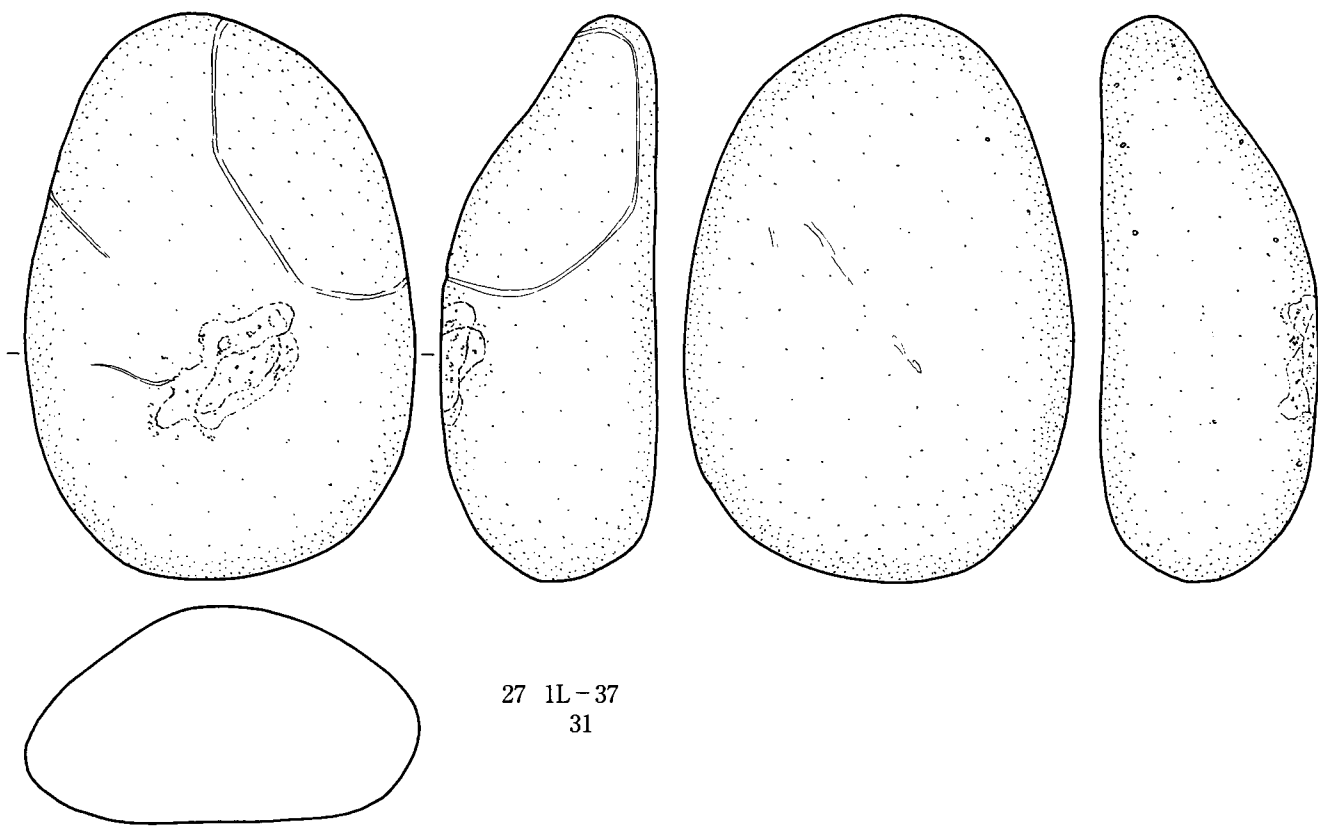
25 2L-03  
12



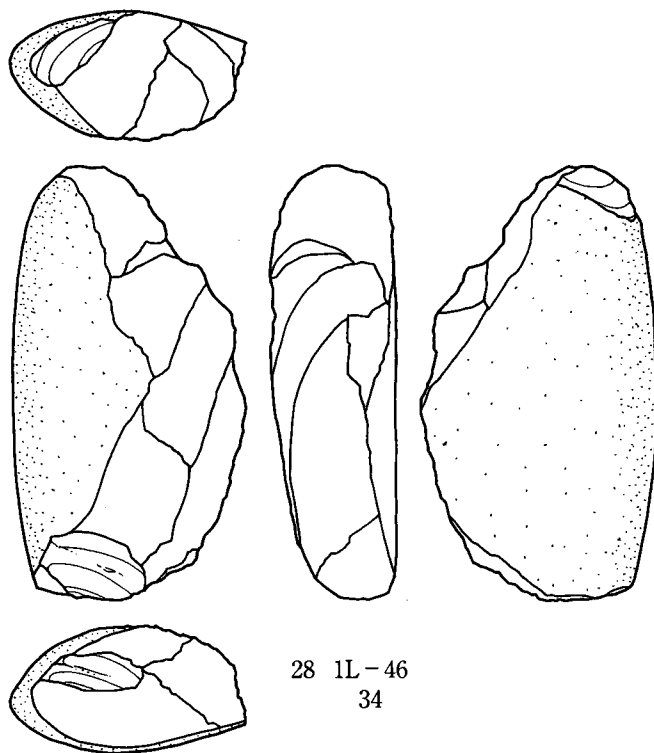
26 1L-46  
7



第32図 第Ⅱa文化層 石器集中1 出土石器実測図(7)



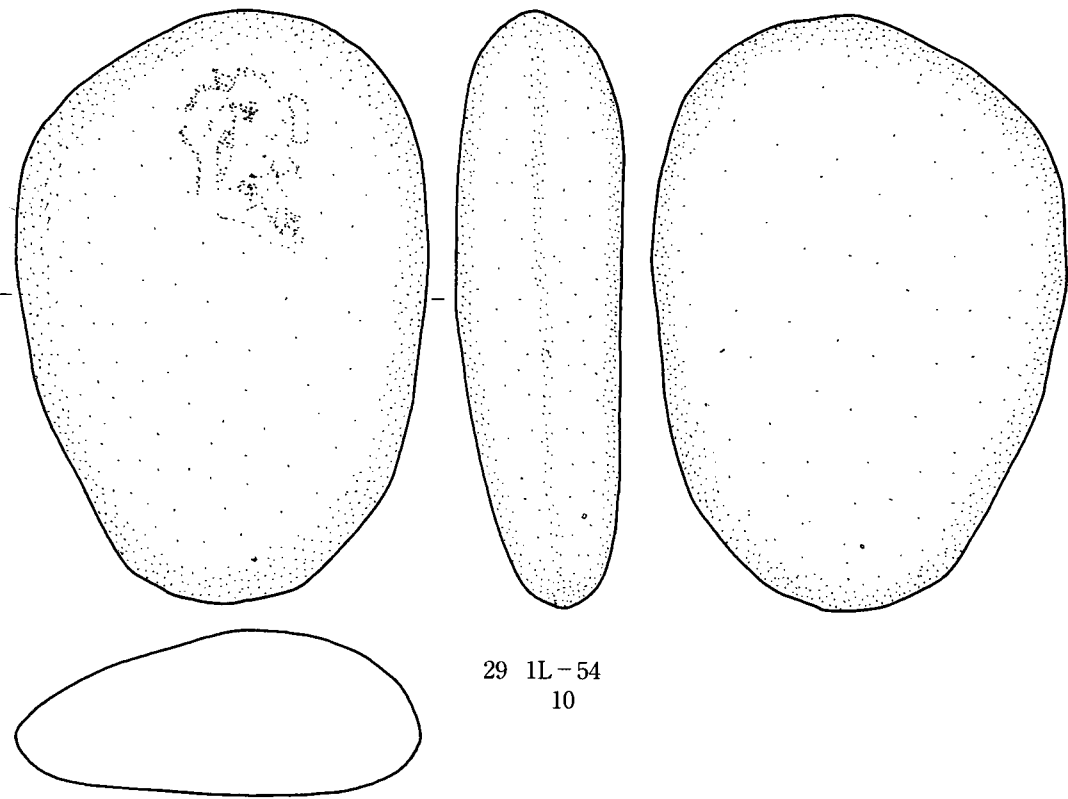
27 1L-37  
31



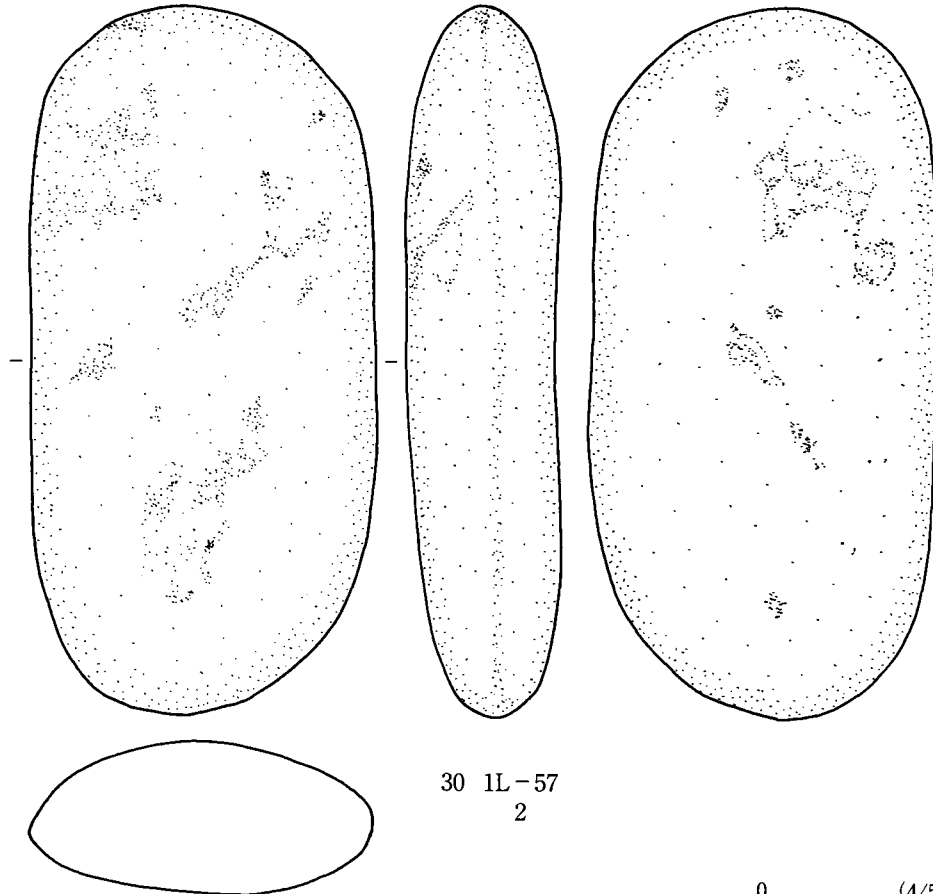
28 1L-46  
34

0 (4/5) 5cm

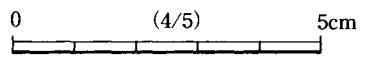
第33图 第IIa文化層 石器集中1 出土石器实测图(8)



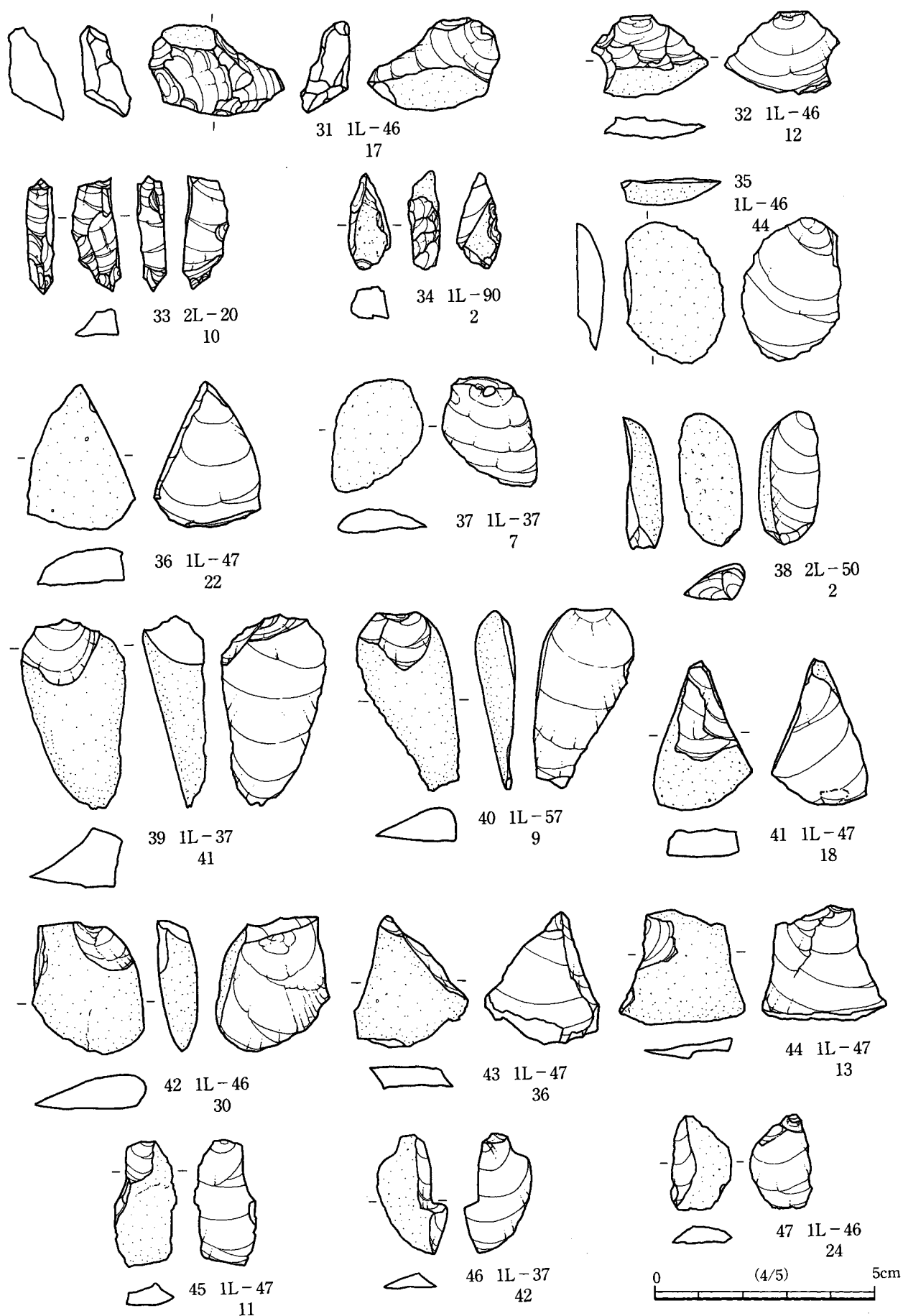
29 1L-54  
10



30 1L-57  
2

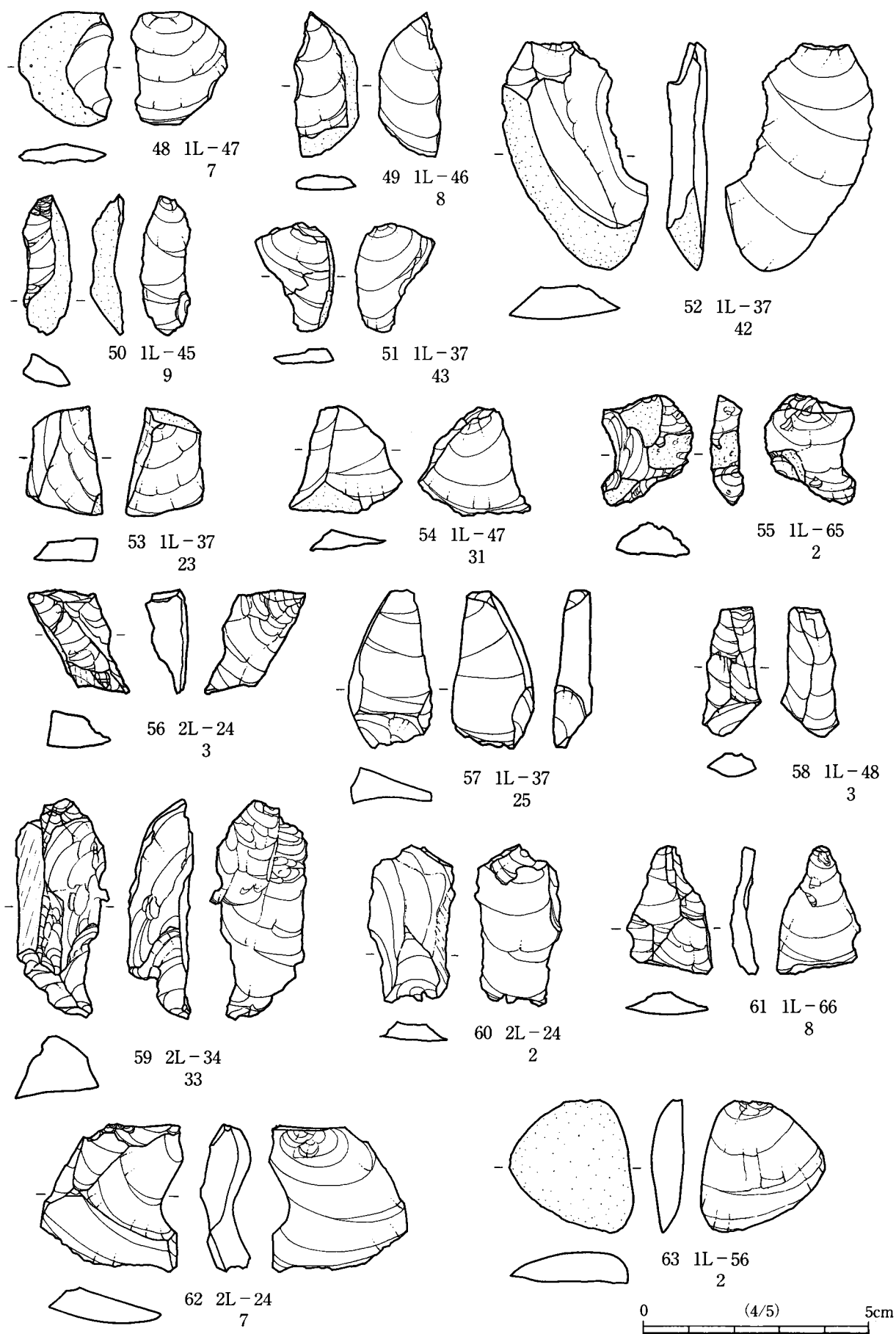


第34图 第IIa文化層 石器集中1 出土石器実測図(9)

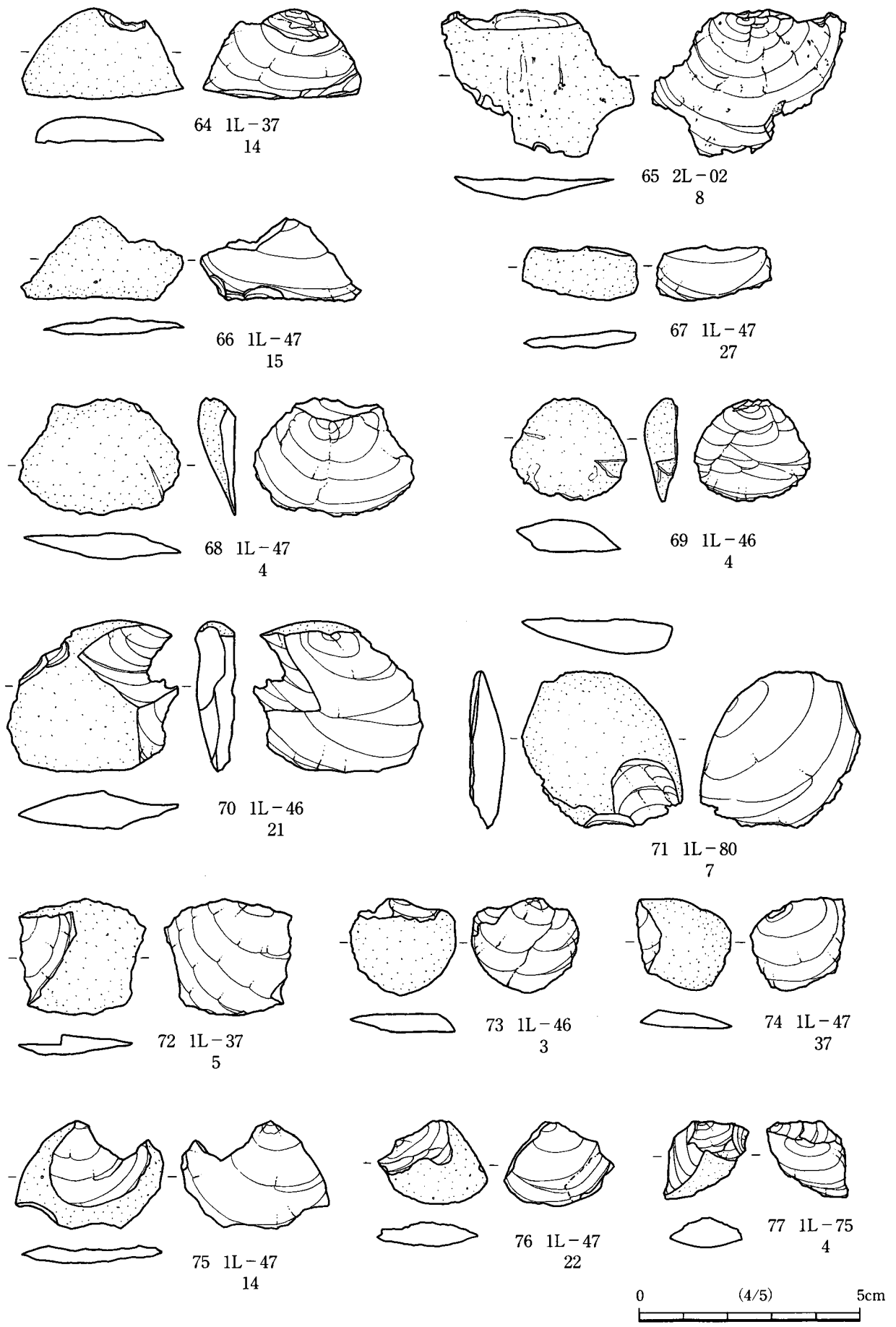


第35图 第IIa文化層 石器集中1 出土石器実測図(10)

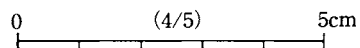
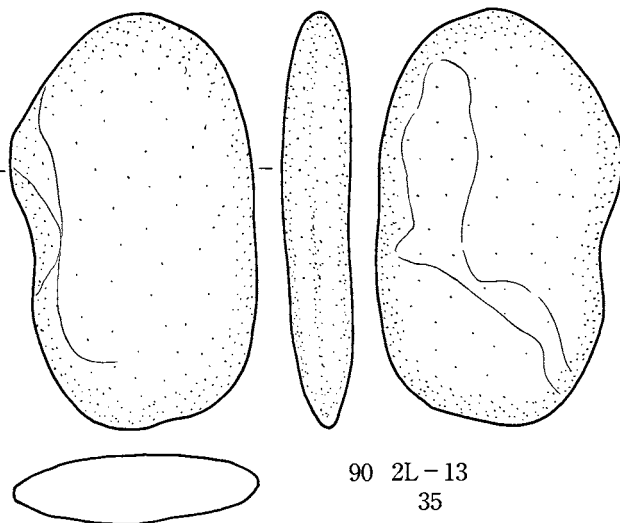
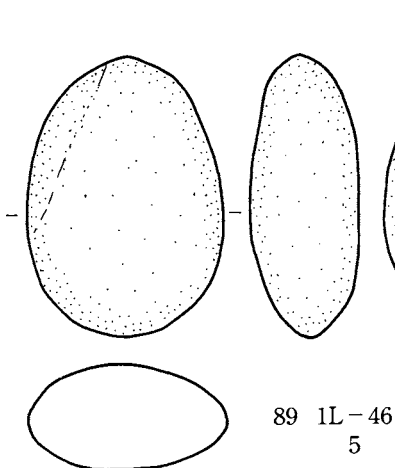
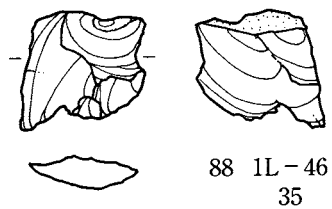
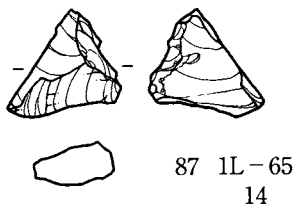
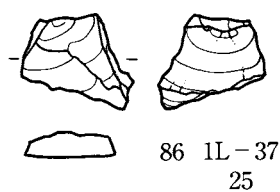
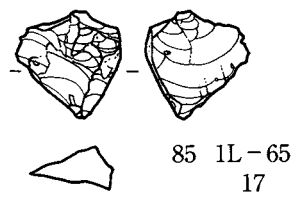
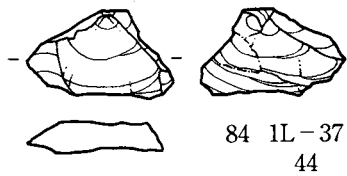
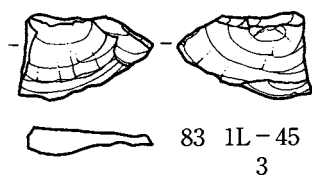
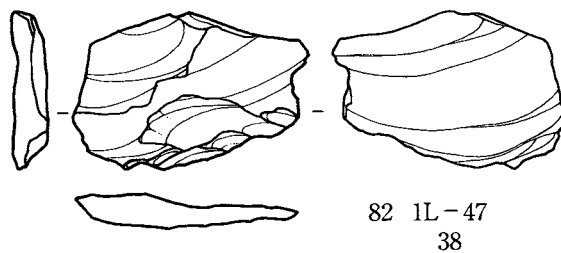
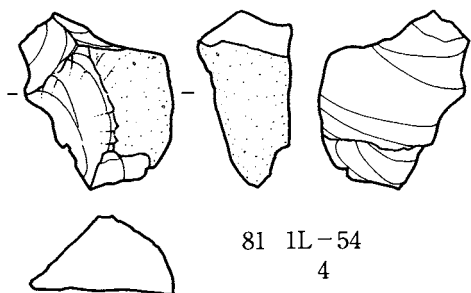
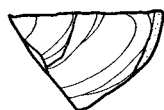
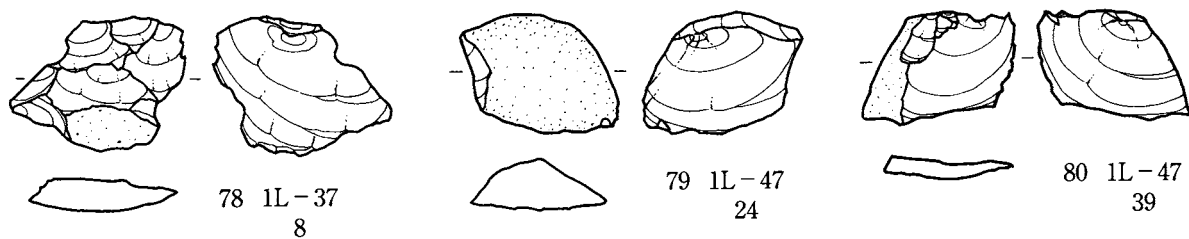




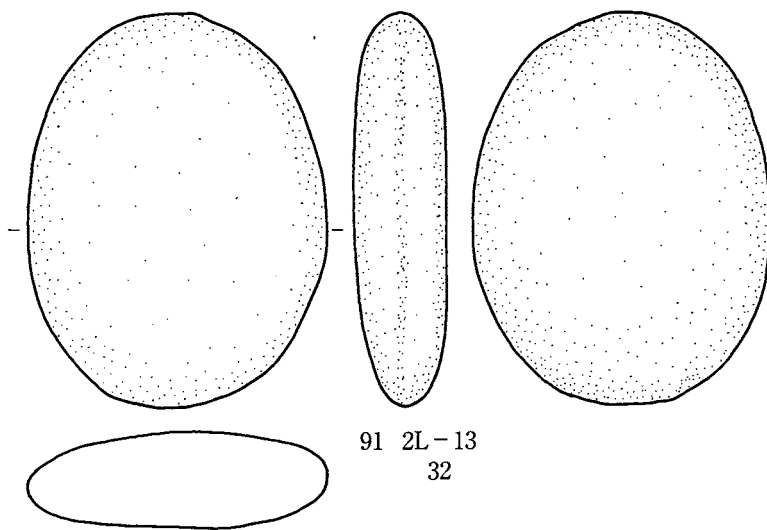
第36图 第IIa文化層 石器集中1 出土石器実測図(11)



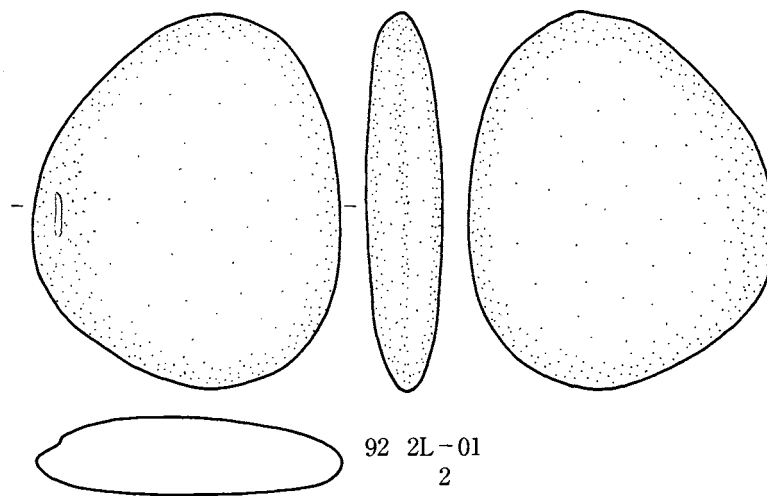
第37图 第IIa文化層 石器集中1 出土石器実測図(12)



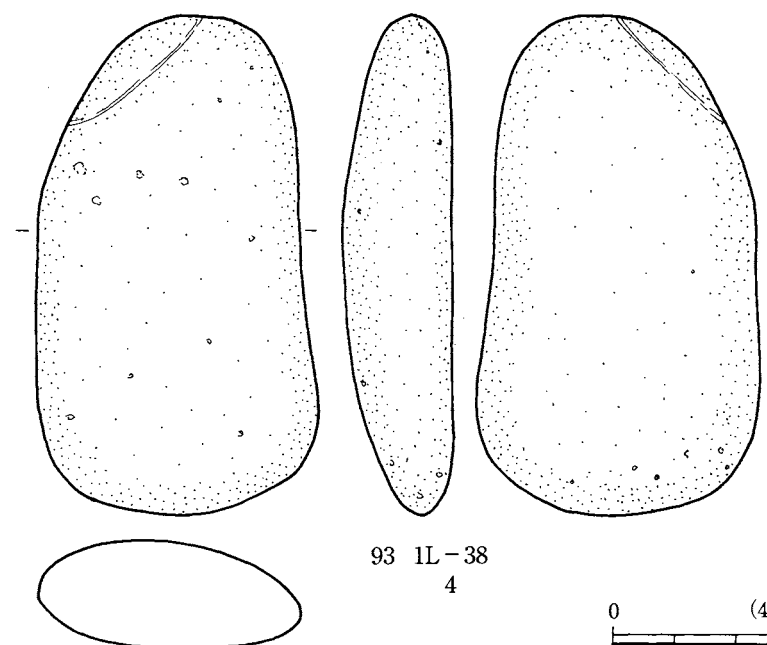
第38图 第IIa文化層 石器集中1 出土石器実測図(13)



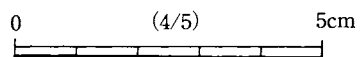
91 2L-13  
32



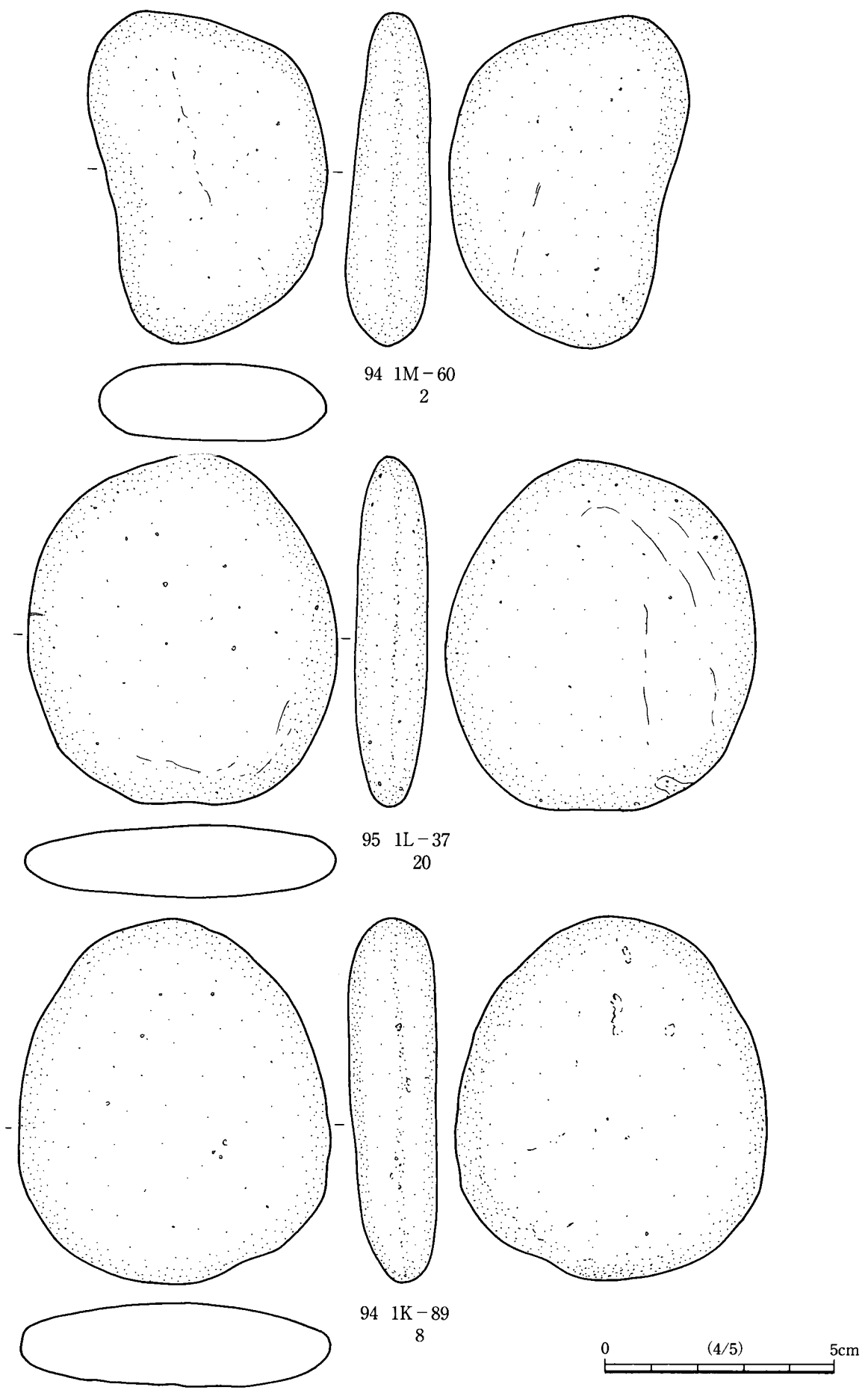
92 2L-01  
2



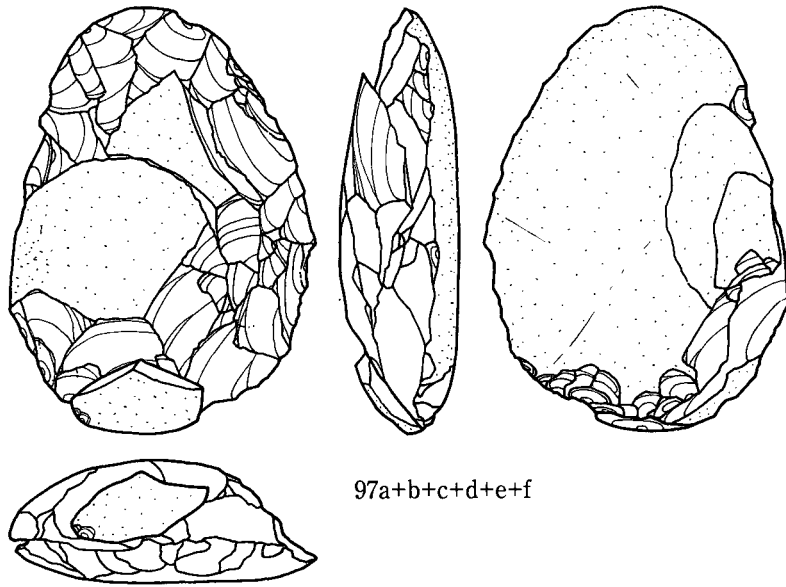
93 1L-38  
4



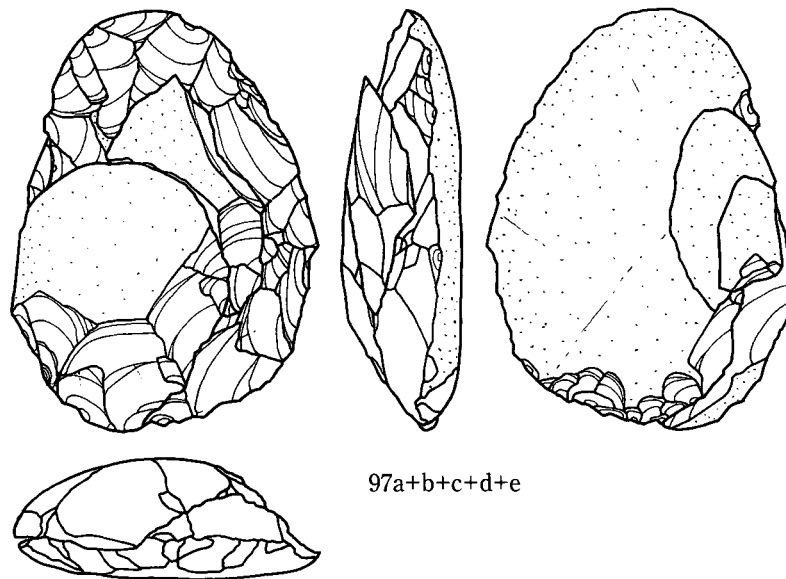
第39図 第Ⅱa文化層 石器集中1 出土石器実測図 (14)



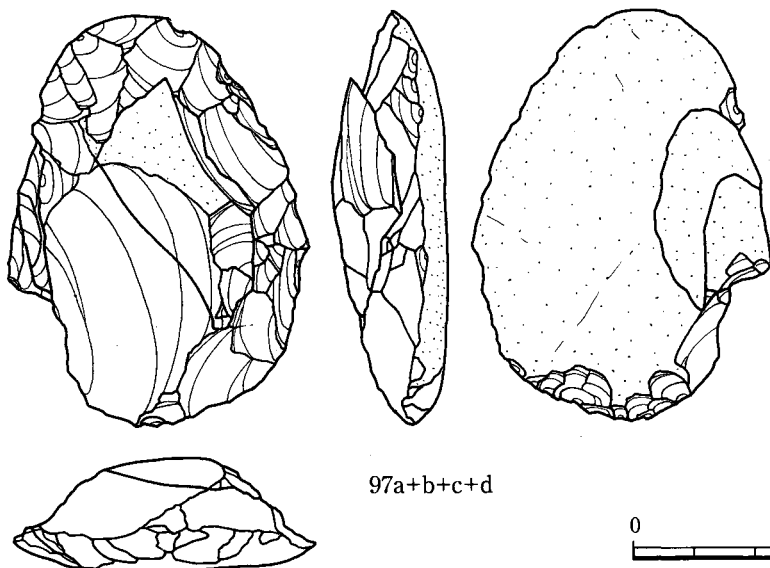
第40図 第Ⅱa文化層 石器集中1 出土石器実測図 (15)



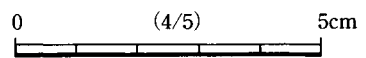
97a+b+c+d+e+f



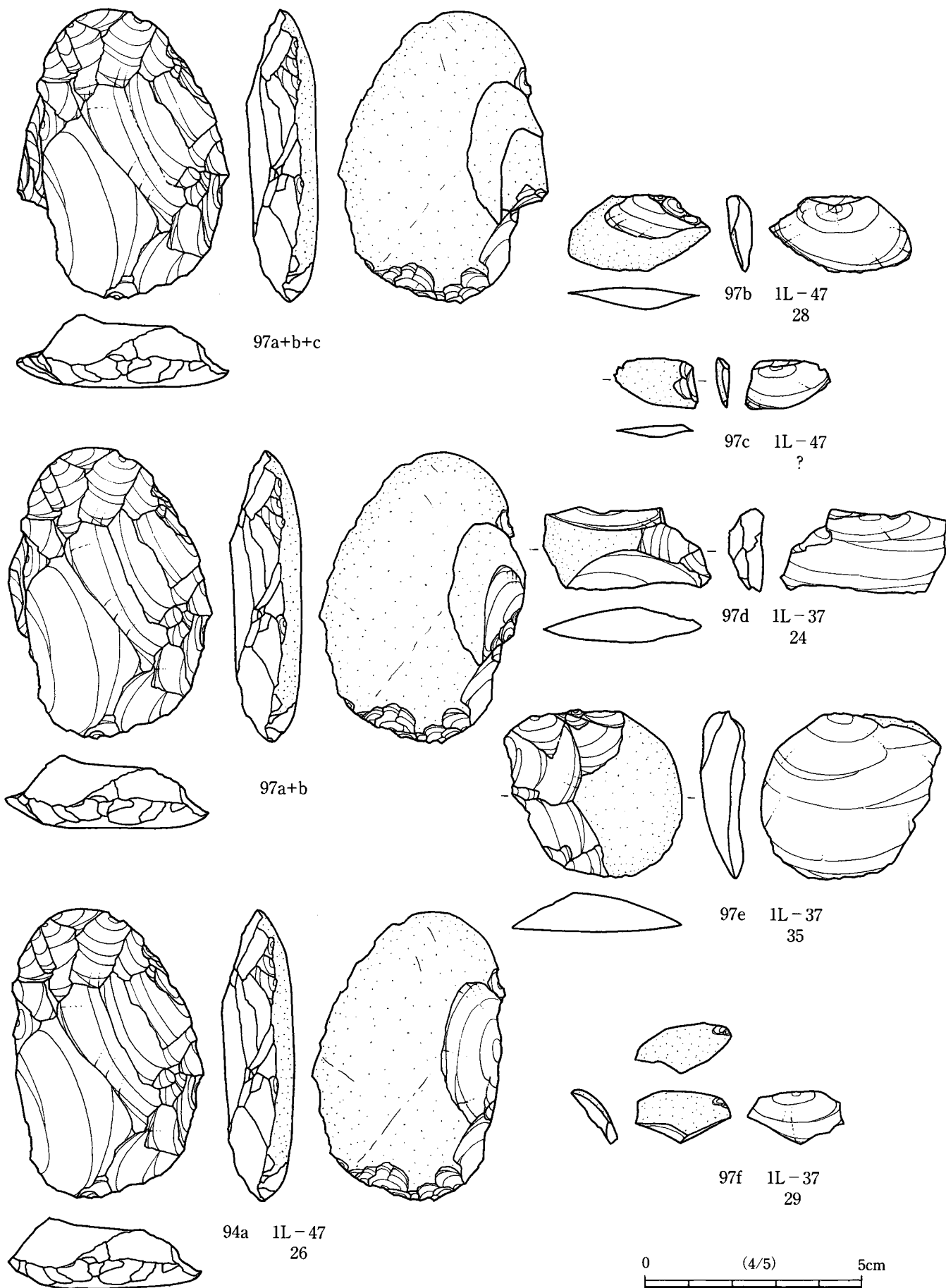
97a+b+c+d+e



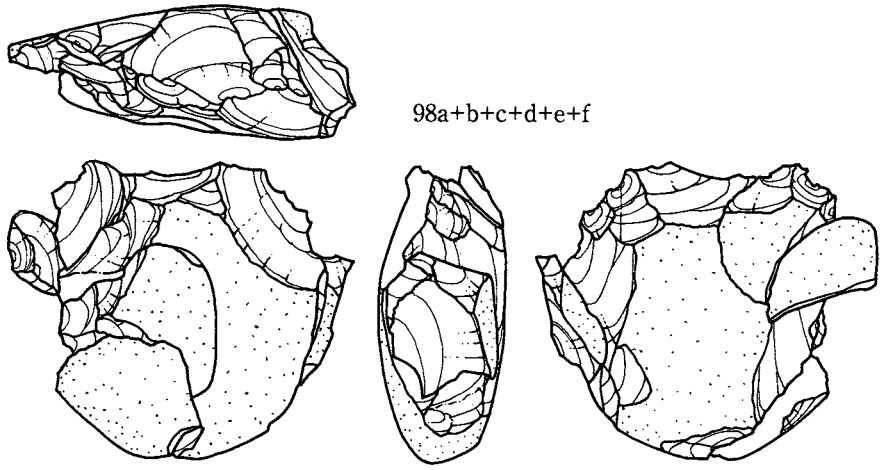
97a+b+c+d



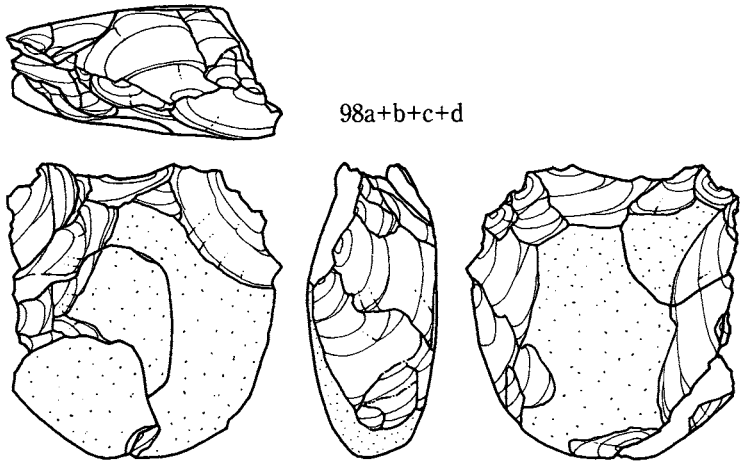
第41图 第IIa文化層 石器集中1 出土石器实测图(16)



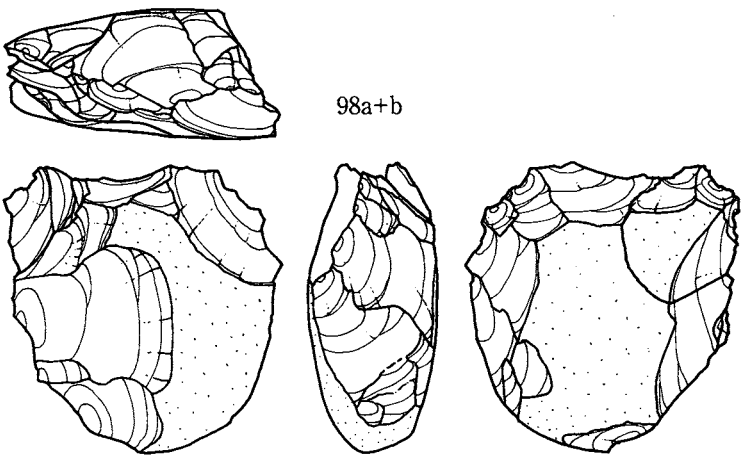
第42图 第IIa文化層 石器集中1 出土石器实测图 (17)



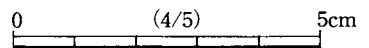
98a+b+c+d+e+f



98a+b+c+d

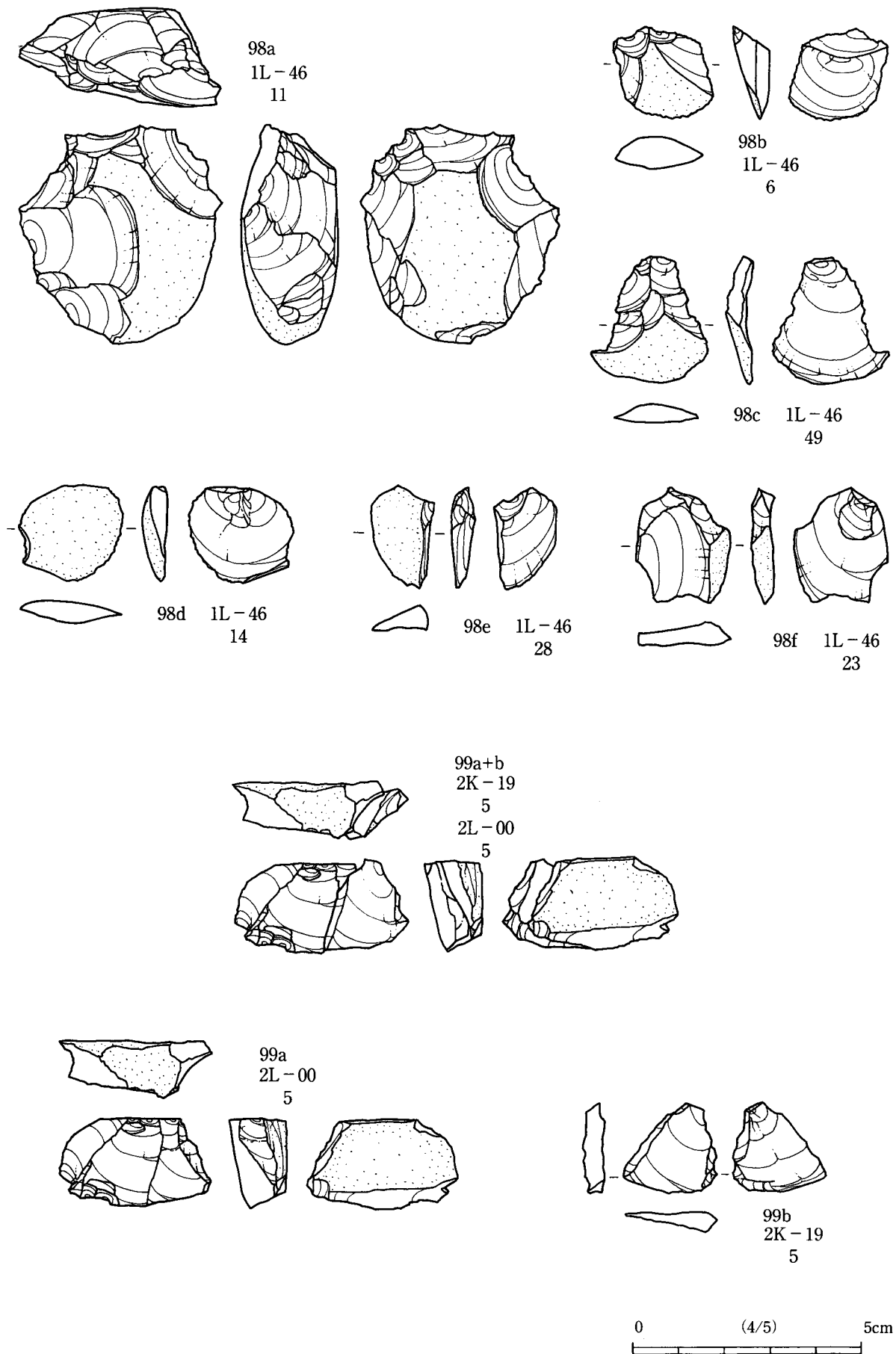


98a+b

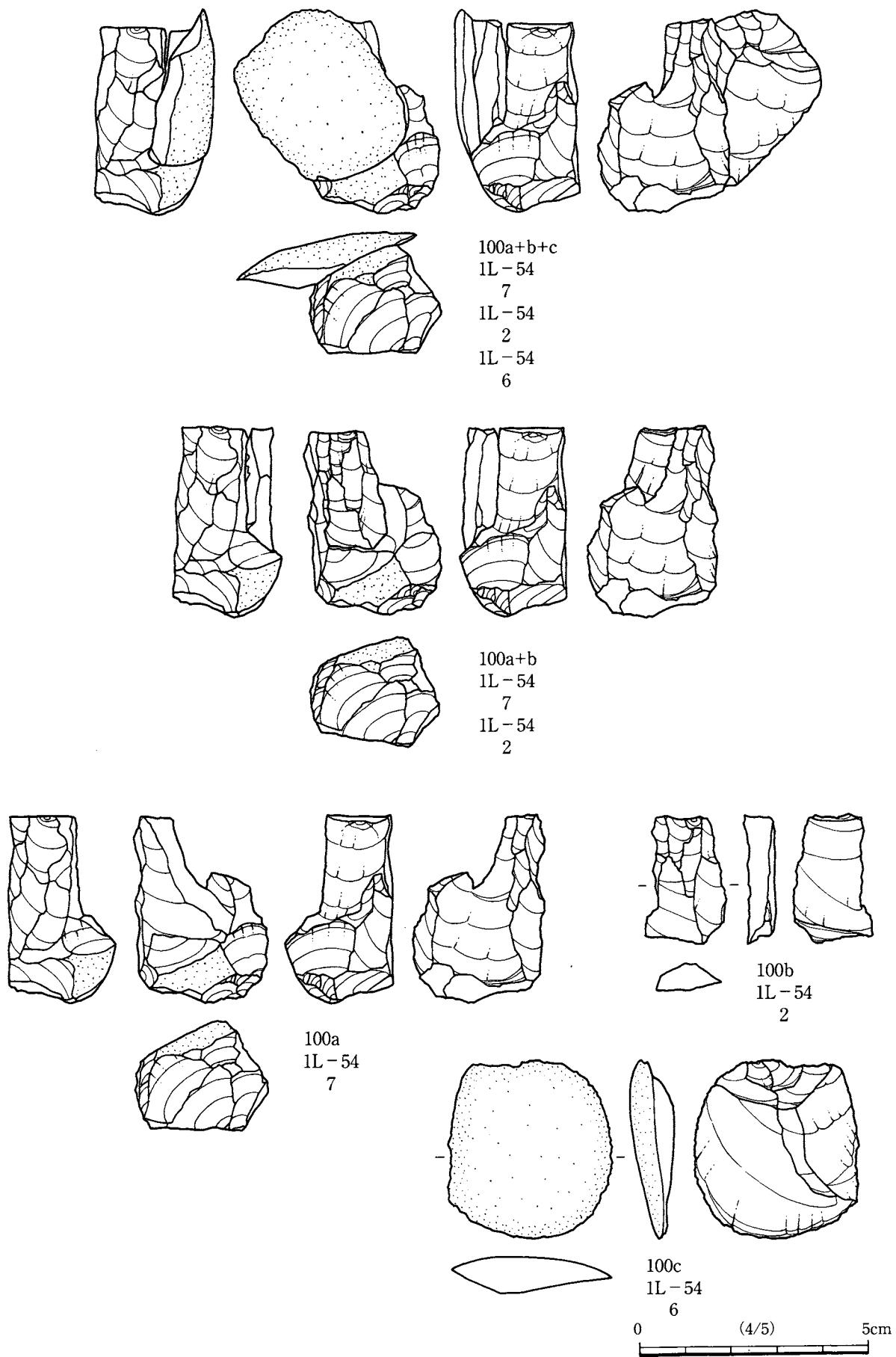


第43图 第IIa文化層 石器集中1 出土石器实测图(18)

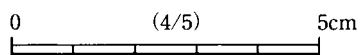
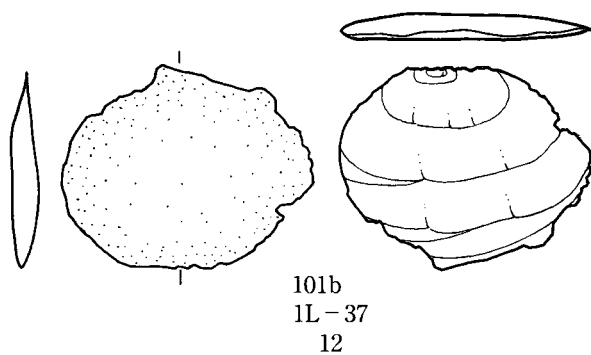
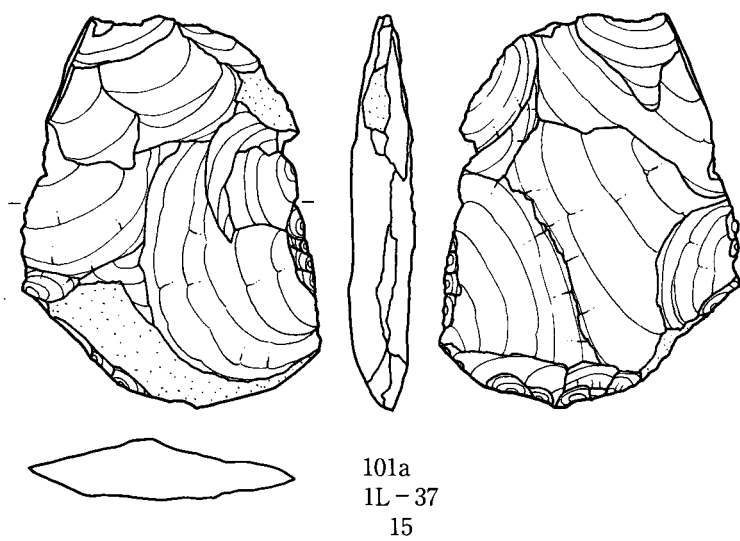
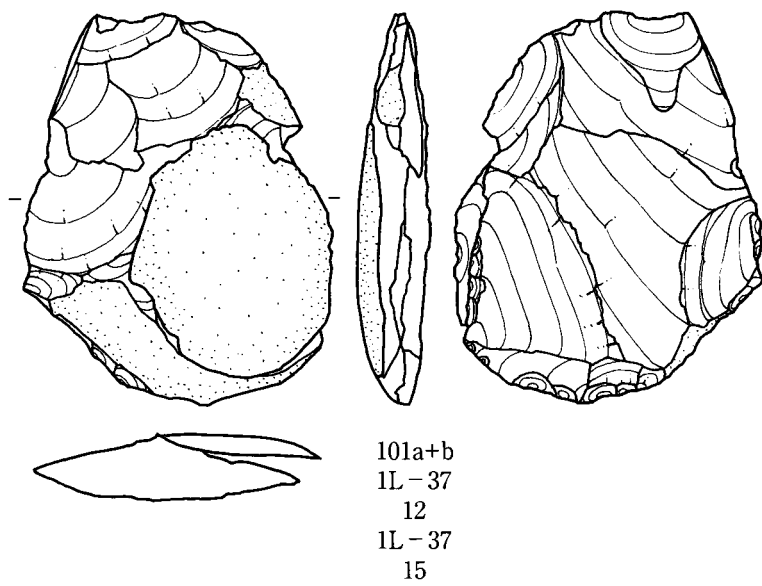




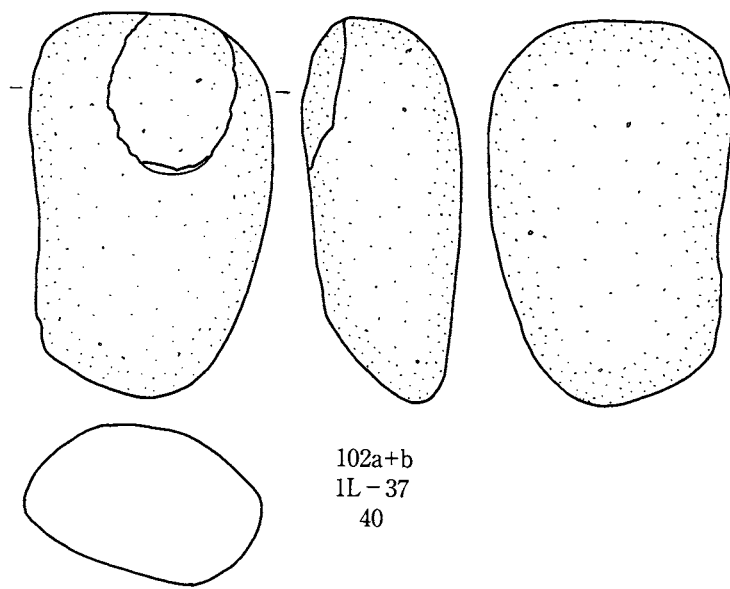
第44图 第IIa文化層 石器集中1 出土石器实测图 (19)



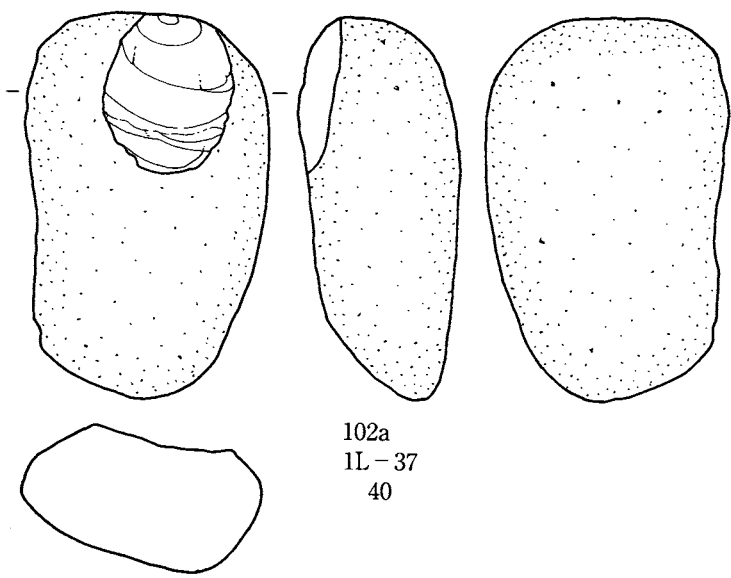
第45图 第IIa文化層 石器集中1 出土石器实测图(20)



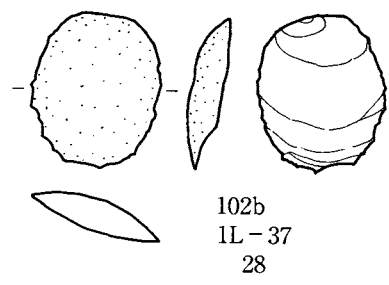
第46图 第Ⅱa文化層 石器集中1 出土石器実測図(21)



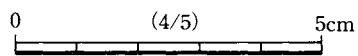
102a+b  
1L-37  
40



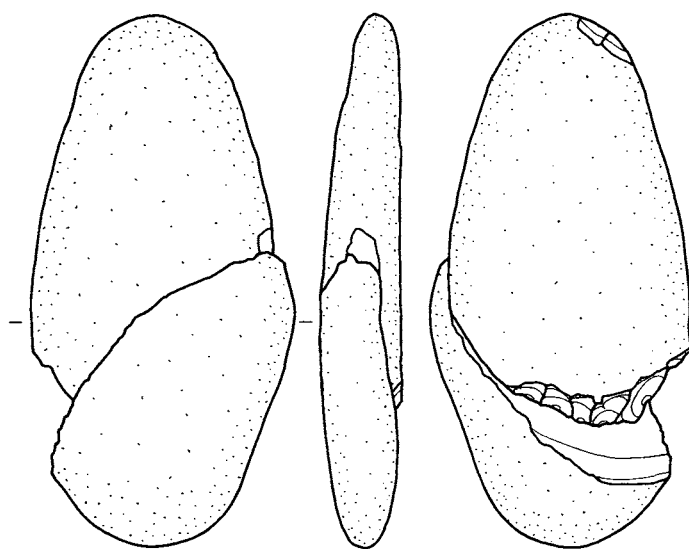
102a  
1L-37  
40



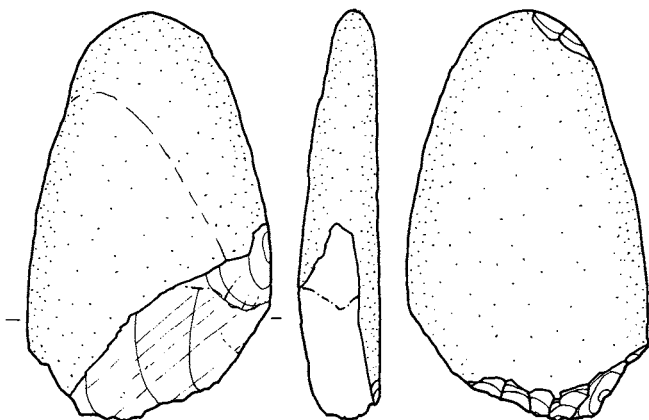
102b  
1L-37  
28



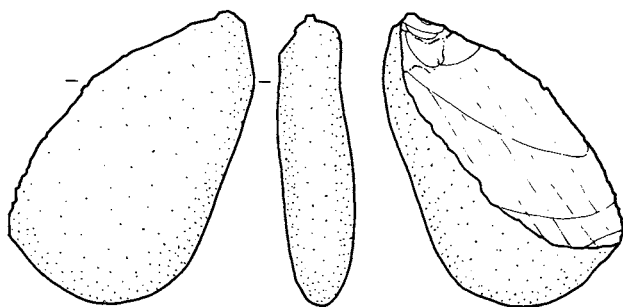
第47図 第Ⅱa文化層 石器集中1 出土石器実測図(22)



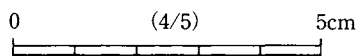
103a+b  
1L-37  
4  
1L-38  
2



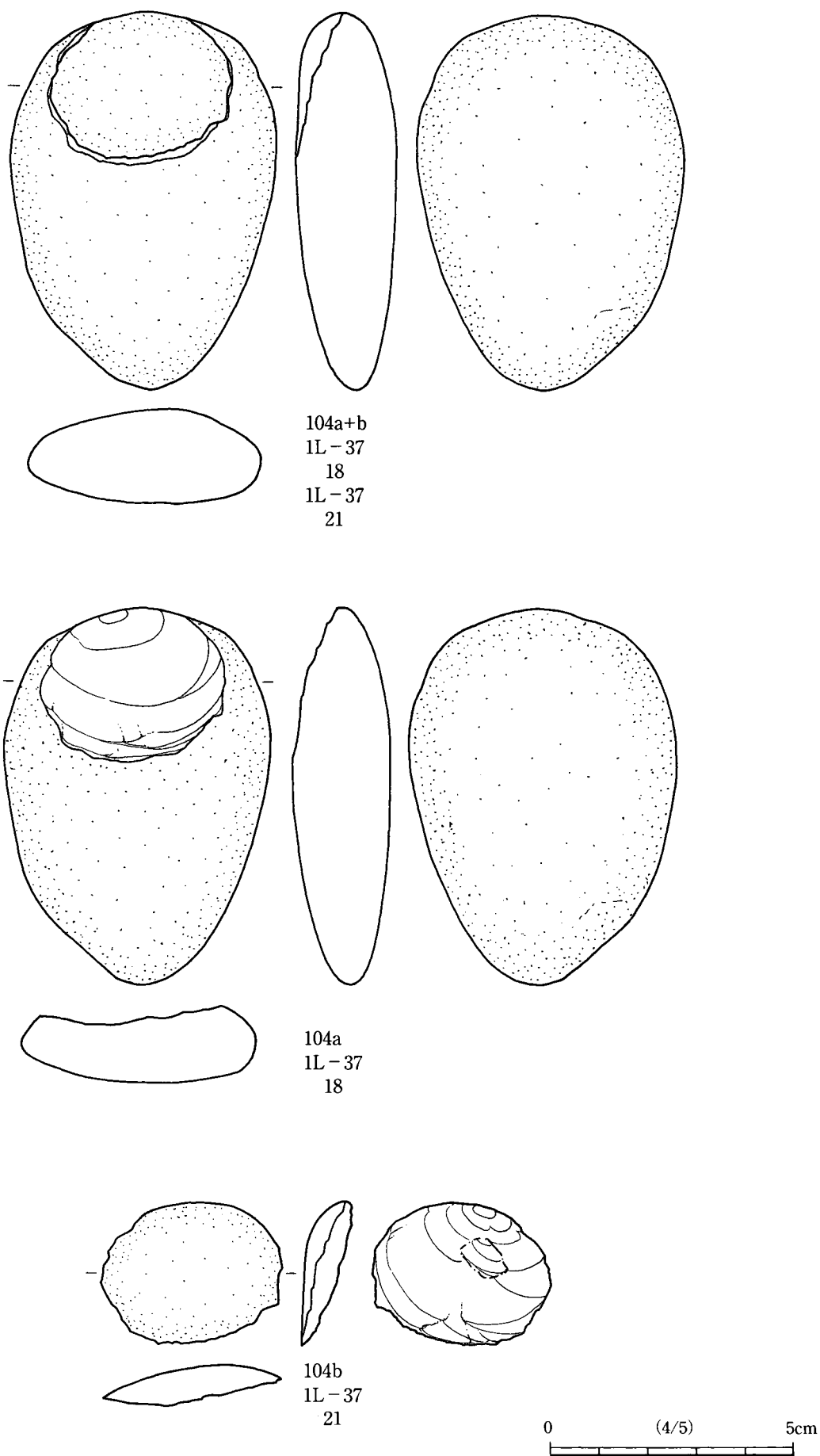
103a  
1L-37  
4



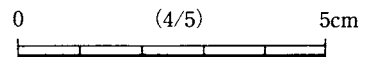
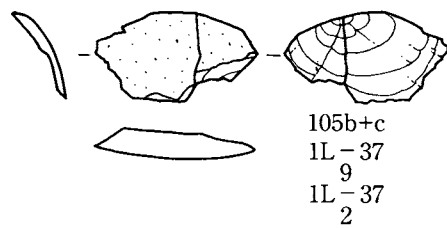
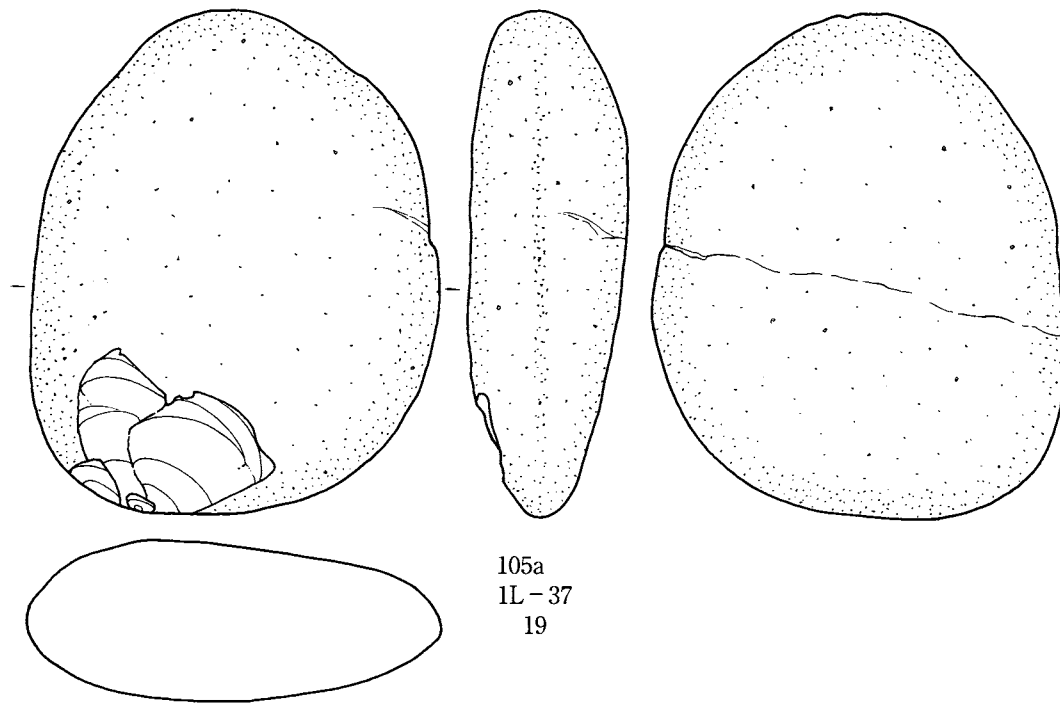
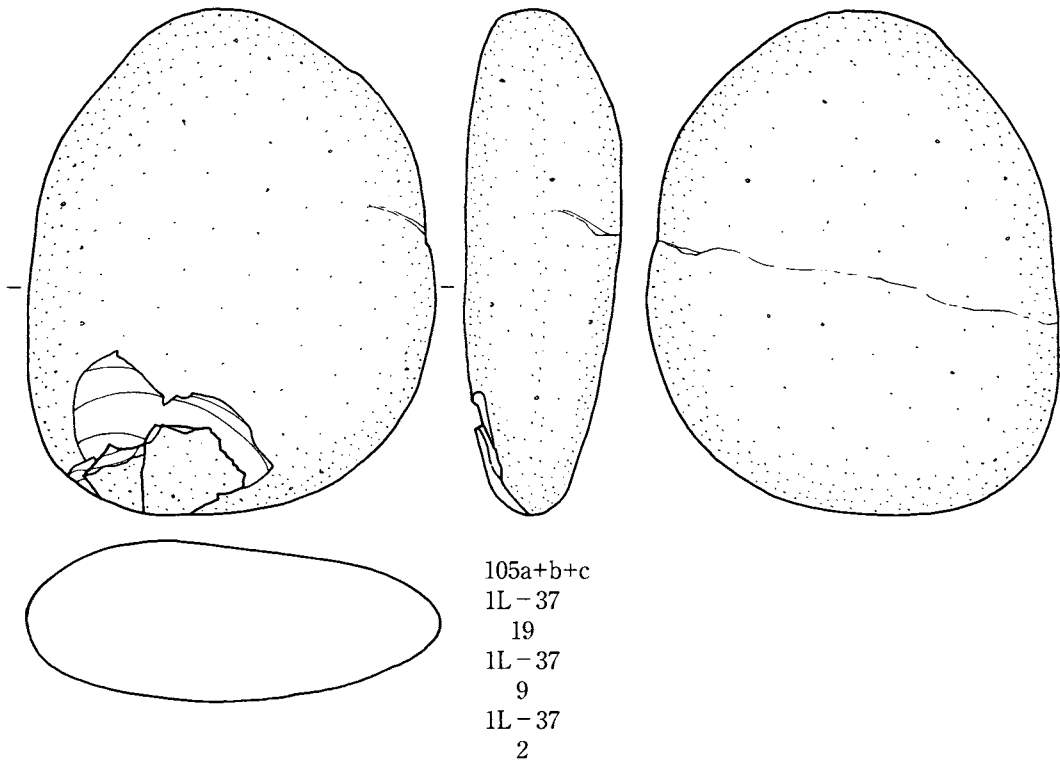
103b  
1L-38  
2



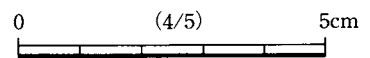
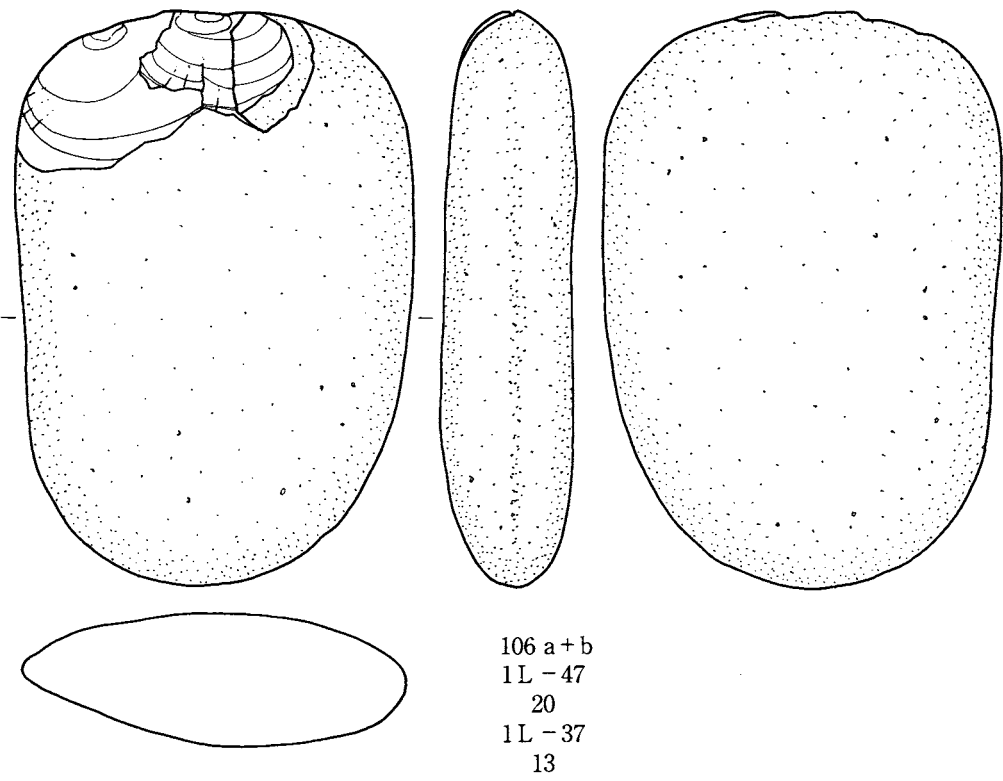
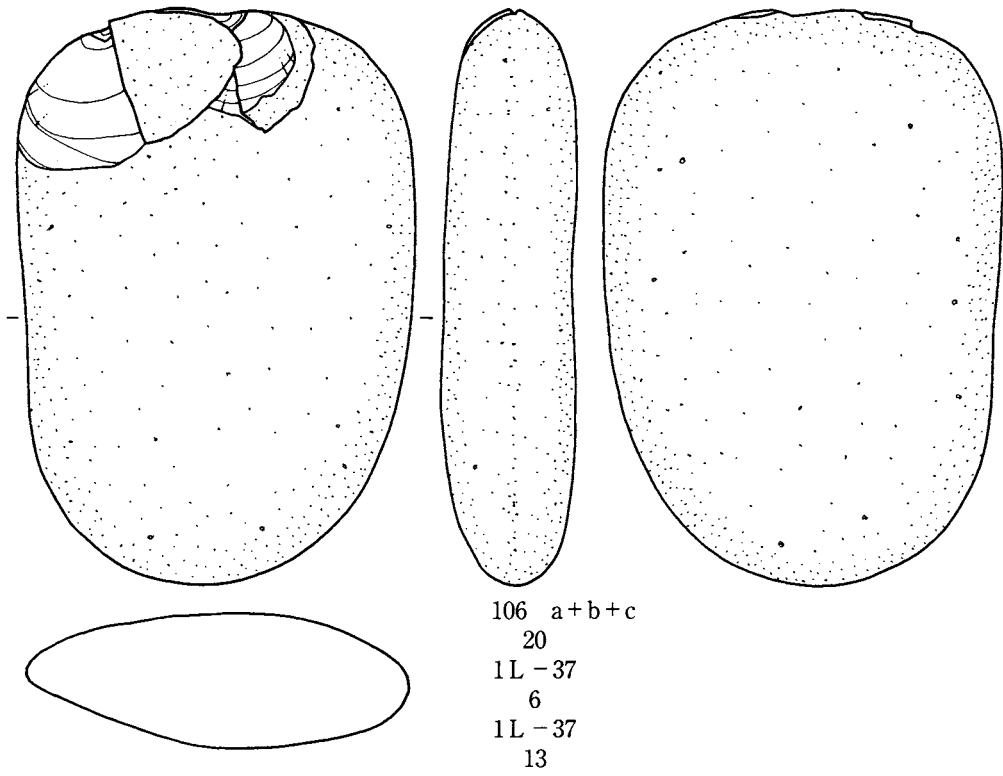
第48図 第Ⅱa文化層 石器集中1 出土石器実測図(23)



第49図 第Ⅱa文化層 石器集中1 出土石器実測図(24)

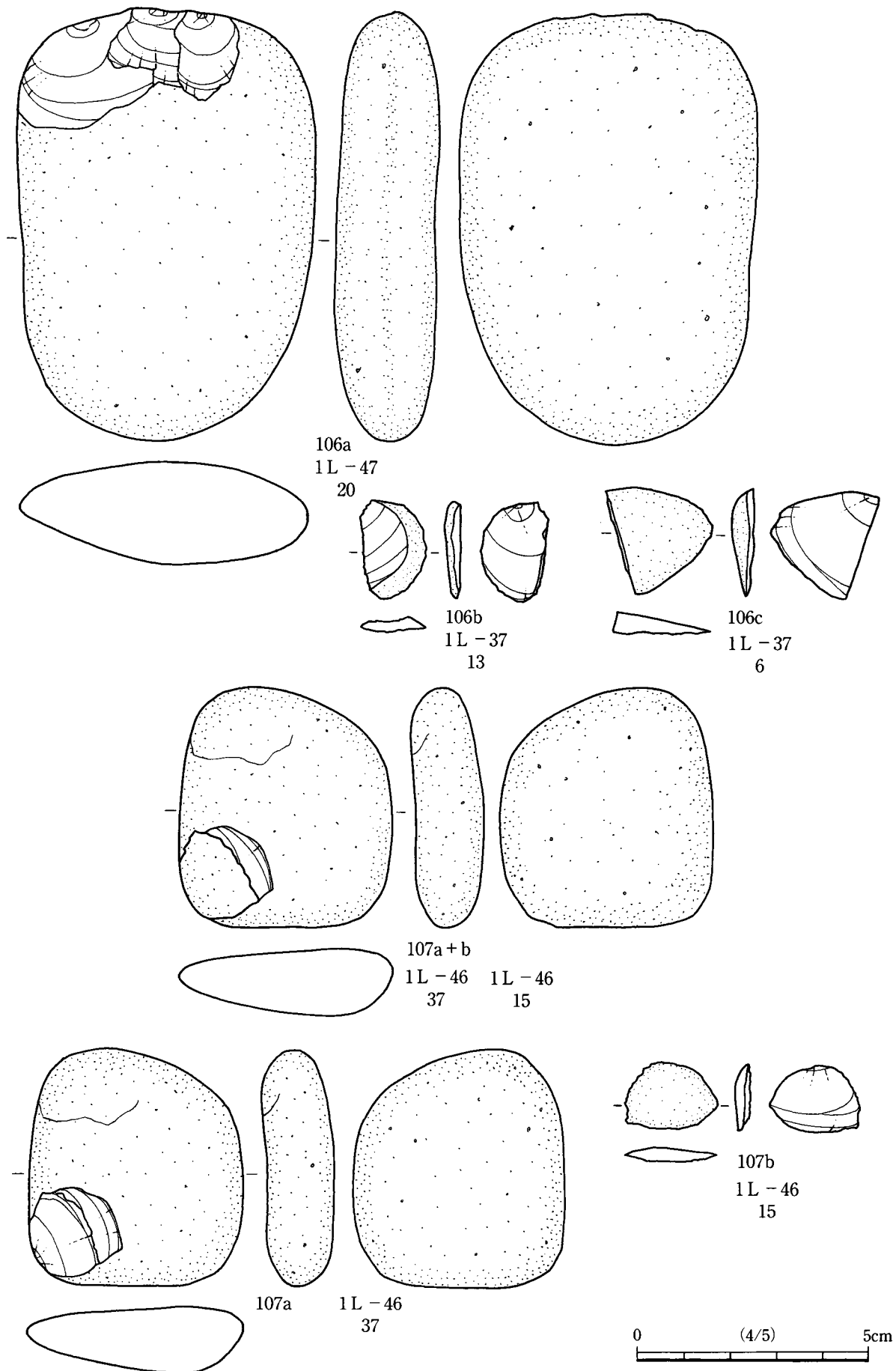


第50图 第IIa文化層 石器集中1 出土石器実測図(25)

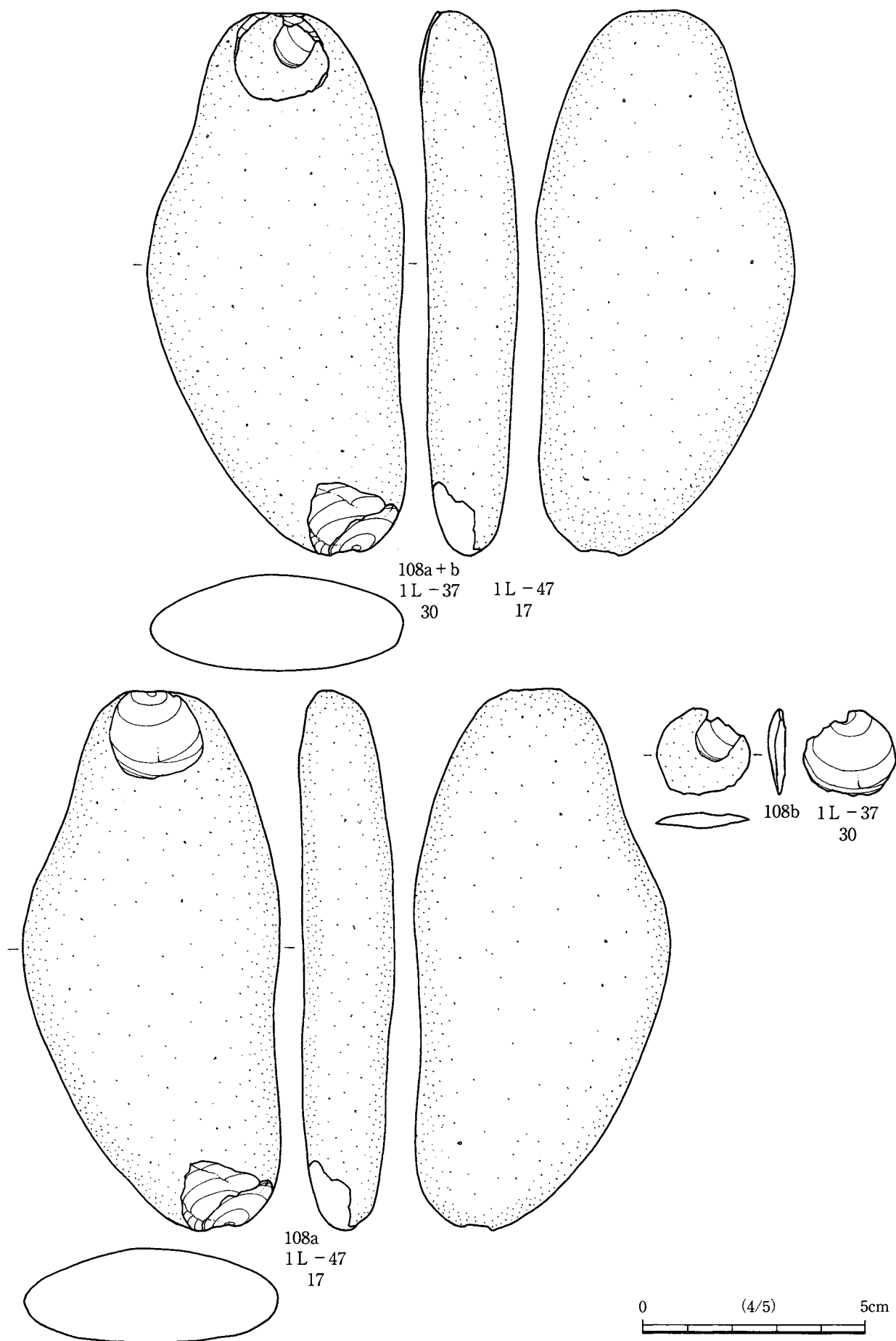


第51图 第IIa文化層石器集中1 出土石器実測図(26)

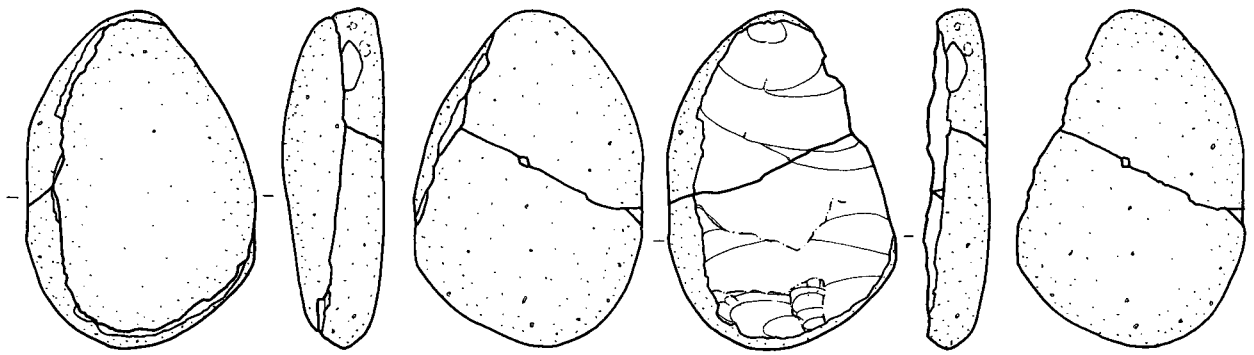




第52図 第Ⅱa文化層石器集中1 出土石器実測図 (27)

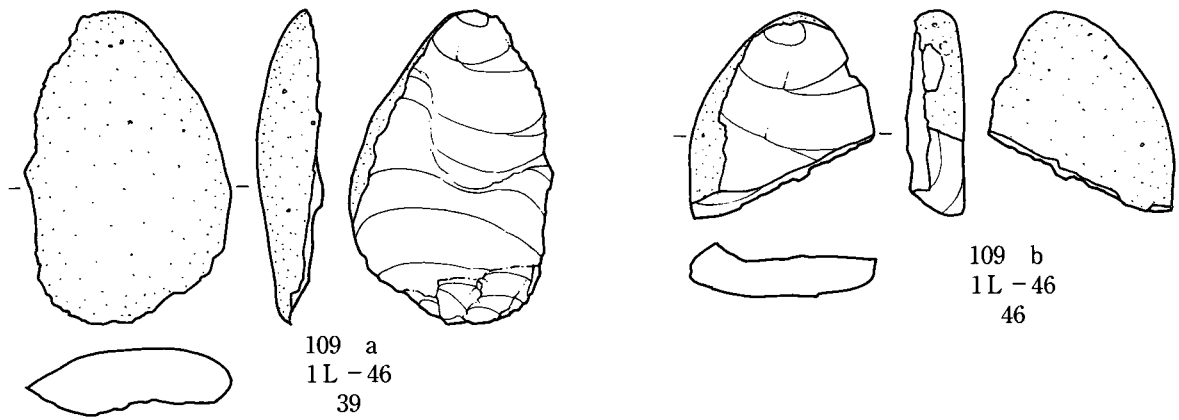


第53図 第Ⅱa文化層石器集中1 出土石器実測図 (28)



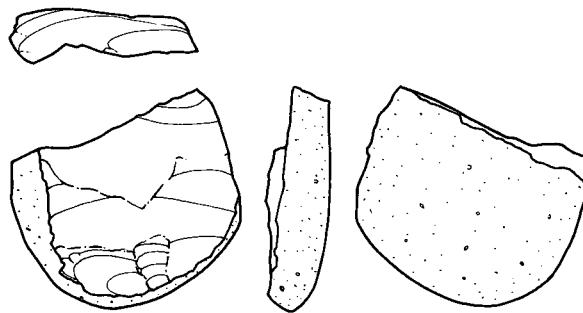
109 a+b+c  
1L-45  
6  
1L-46  
46  
1L-46  
39

109 b+c  
1L-45  
6  
1L-46  
46



109 a  
1L-46  
39

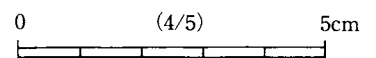
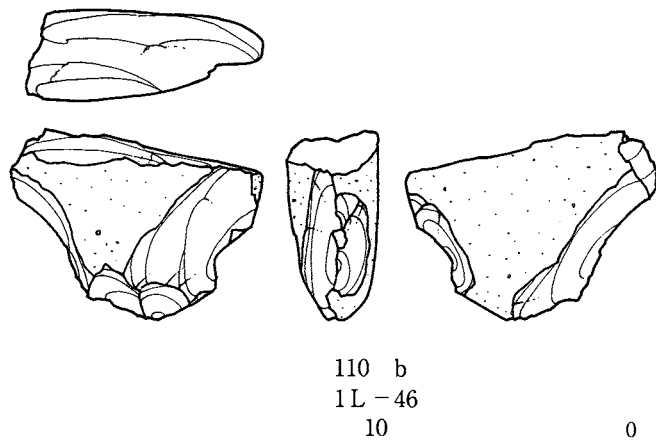
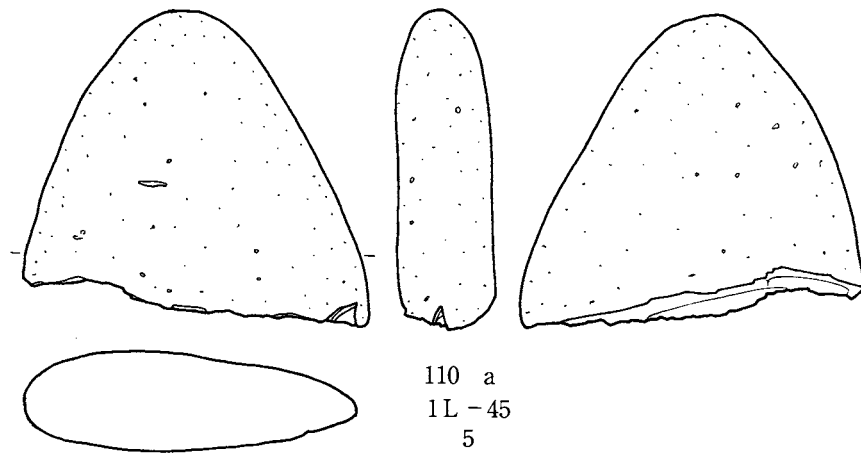
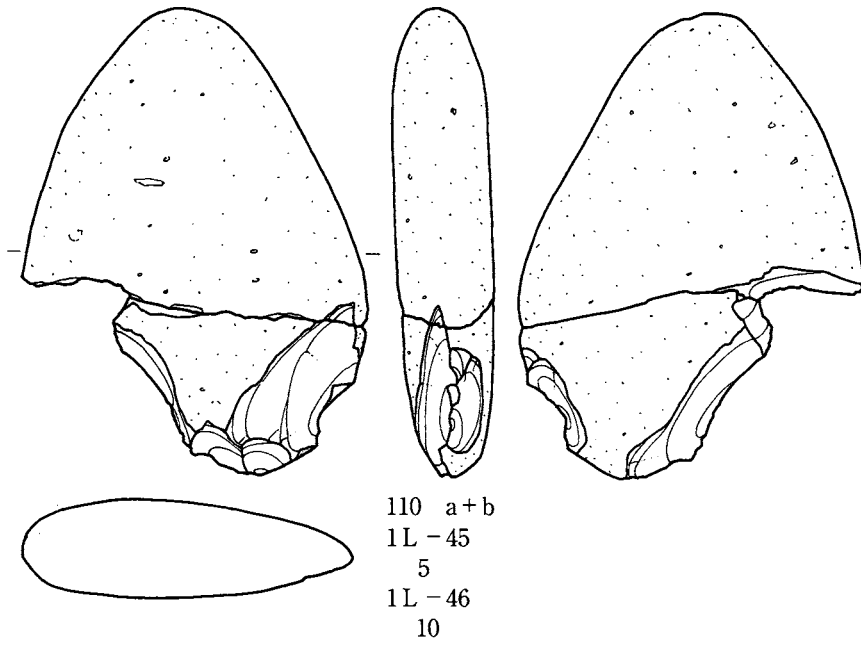
109 b  
1L-46  
46



109 c  
1L-45  
6

0 (4/5) 5cm

第54图 第IIa文化層石器集中1 出土石器実測図(29)



第55図 第IIa文化層石器集中1 出土石器実測図 (30)























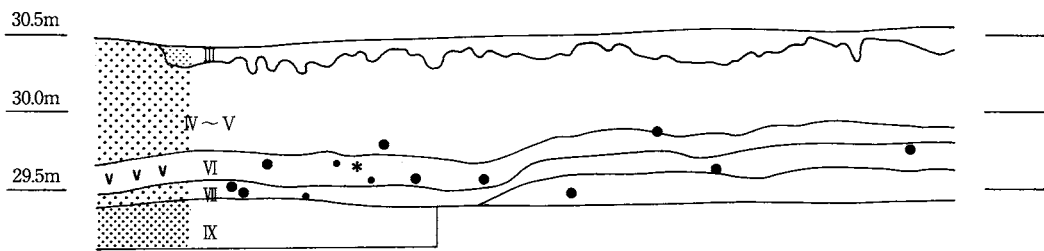
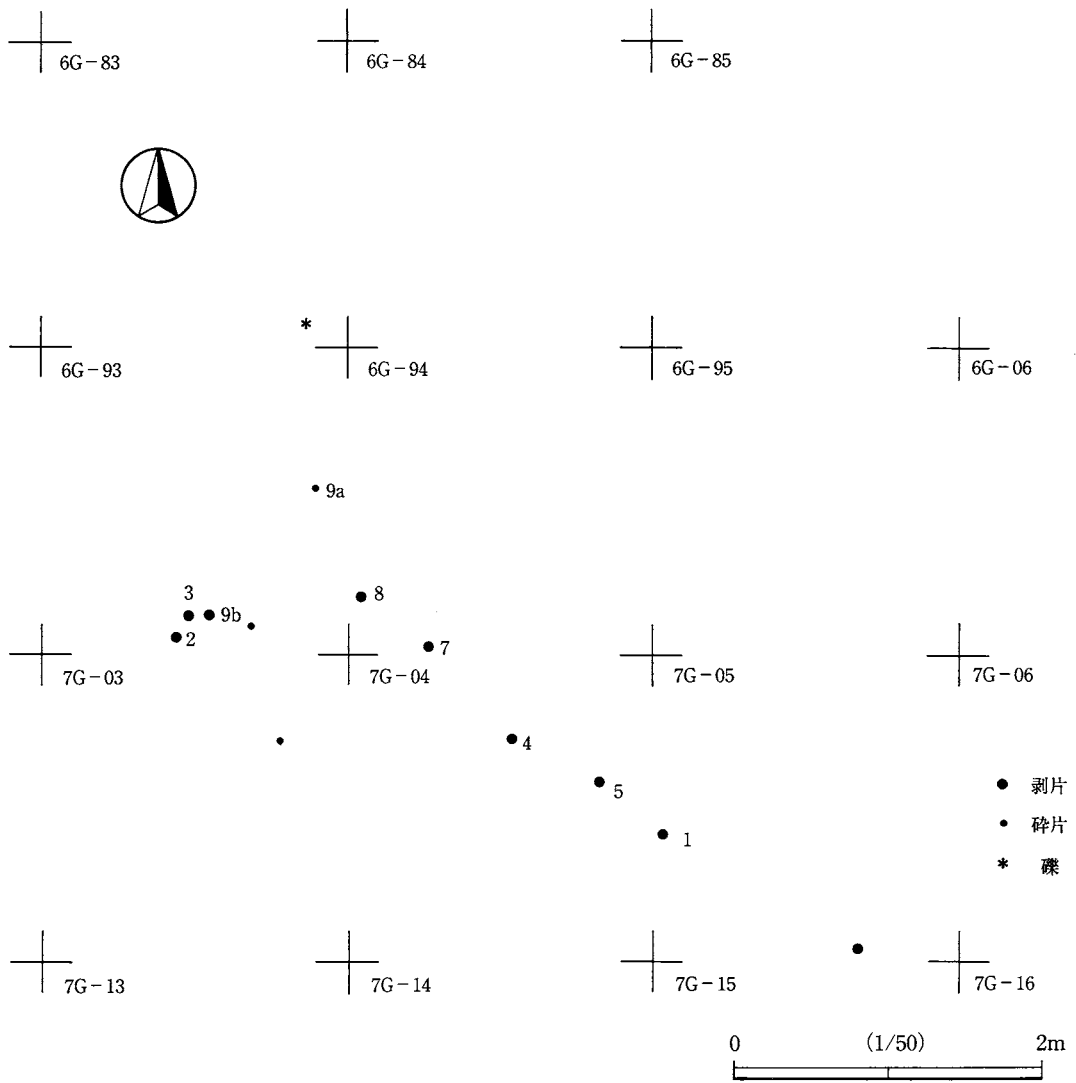




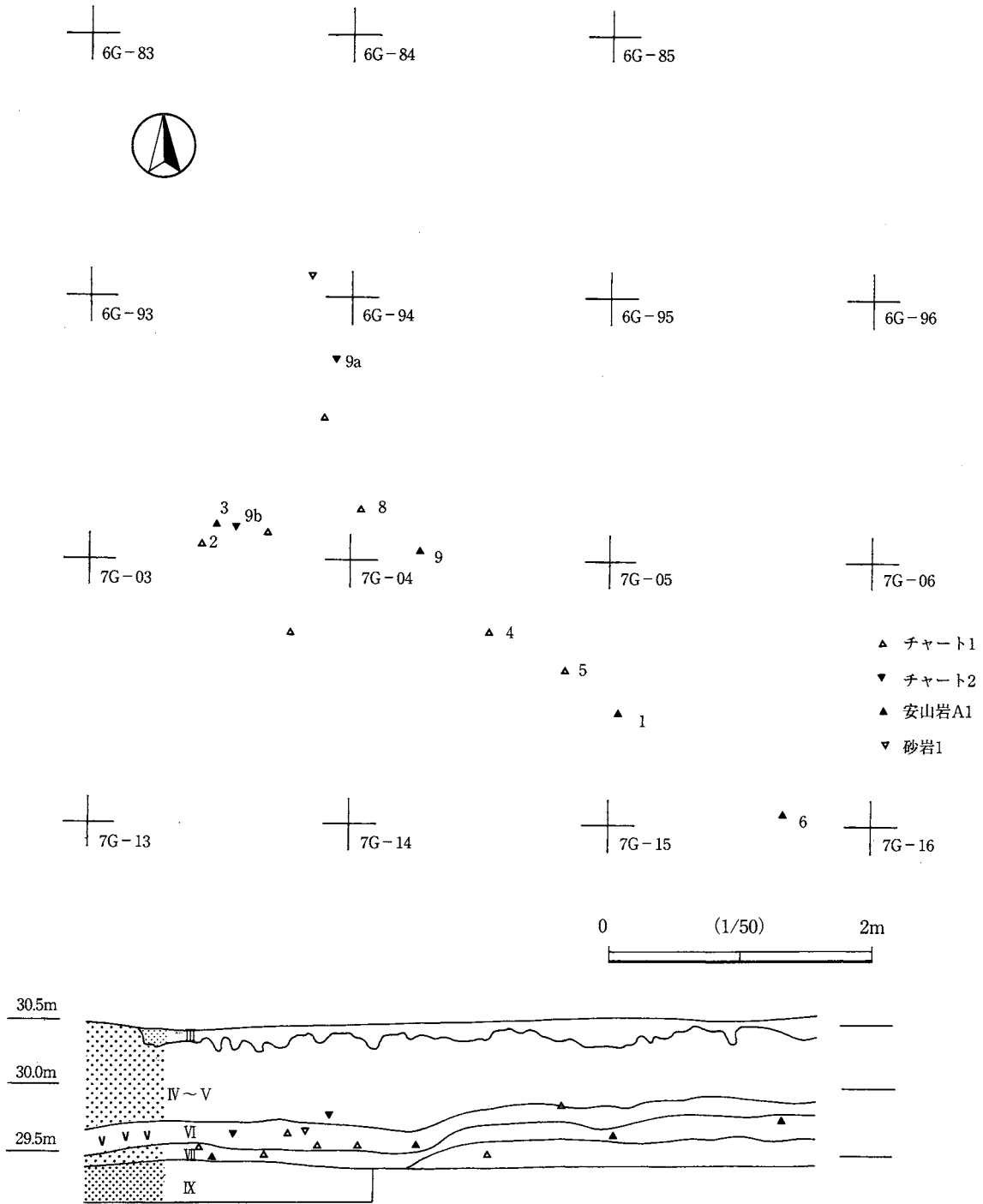




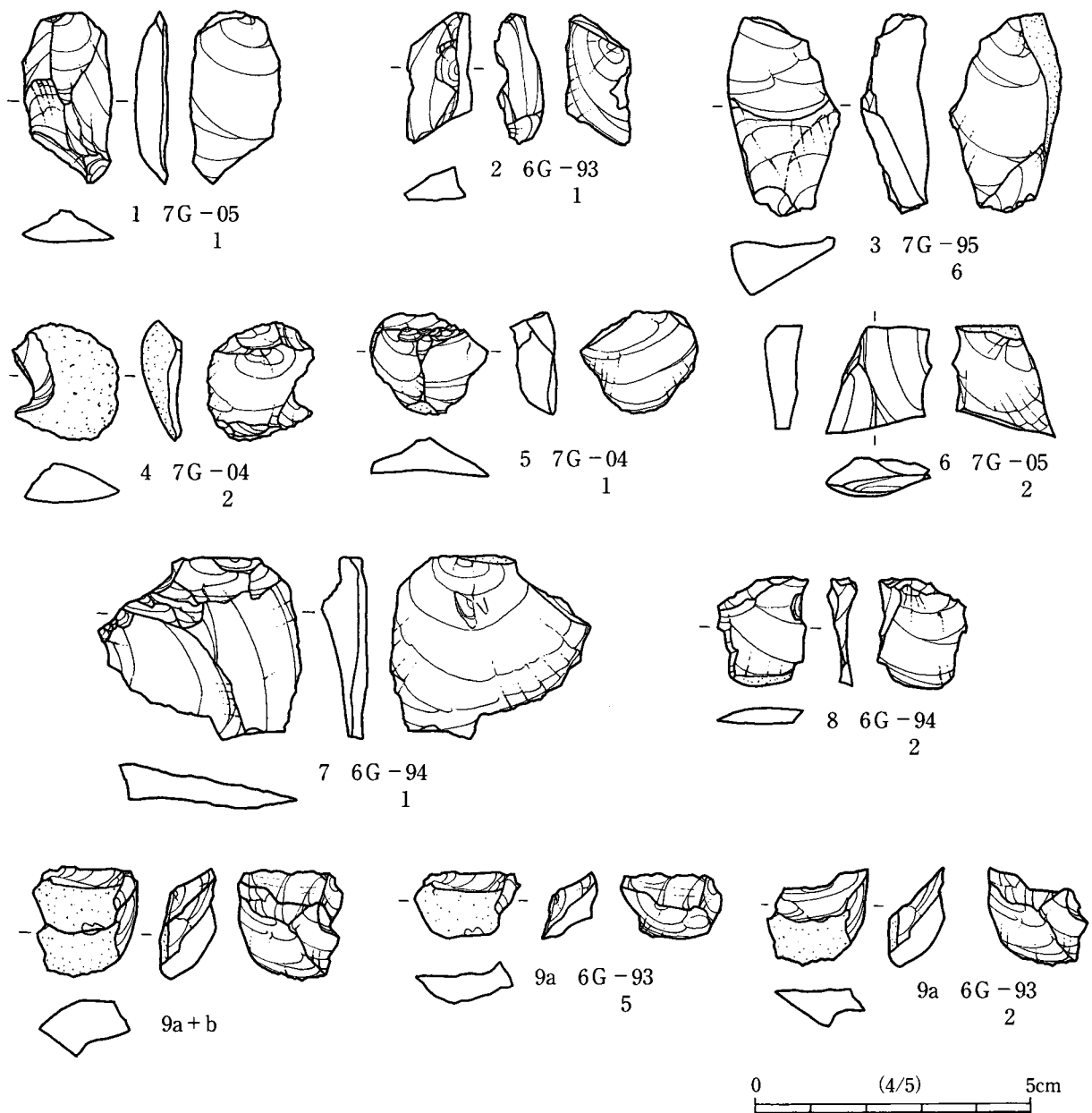




第56图 第IIb文化層石器集中1 器種別分布图



第57図 第Ⅱb文化層石器集中1 母岩別分布図



第58図 第Ⅱb文化層石器集中1 出土石器実測図

## 第Ⅱc文化層

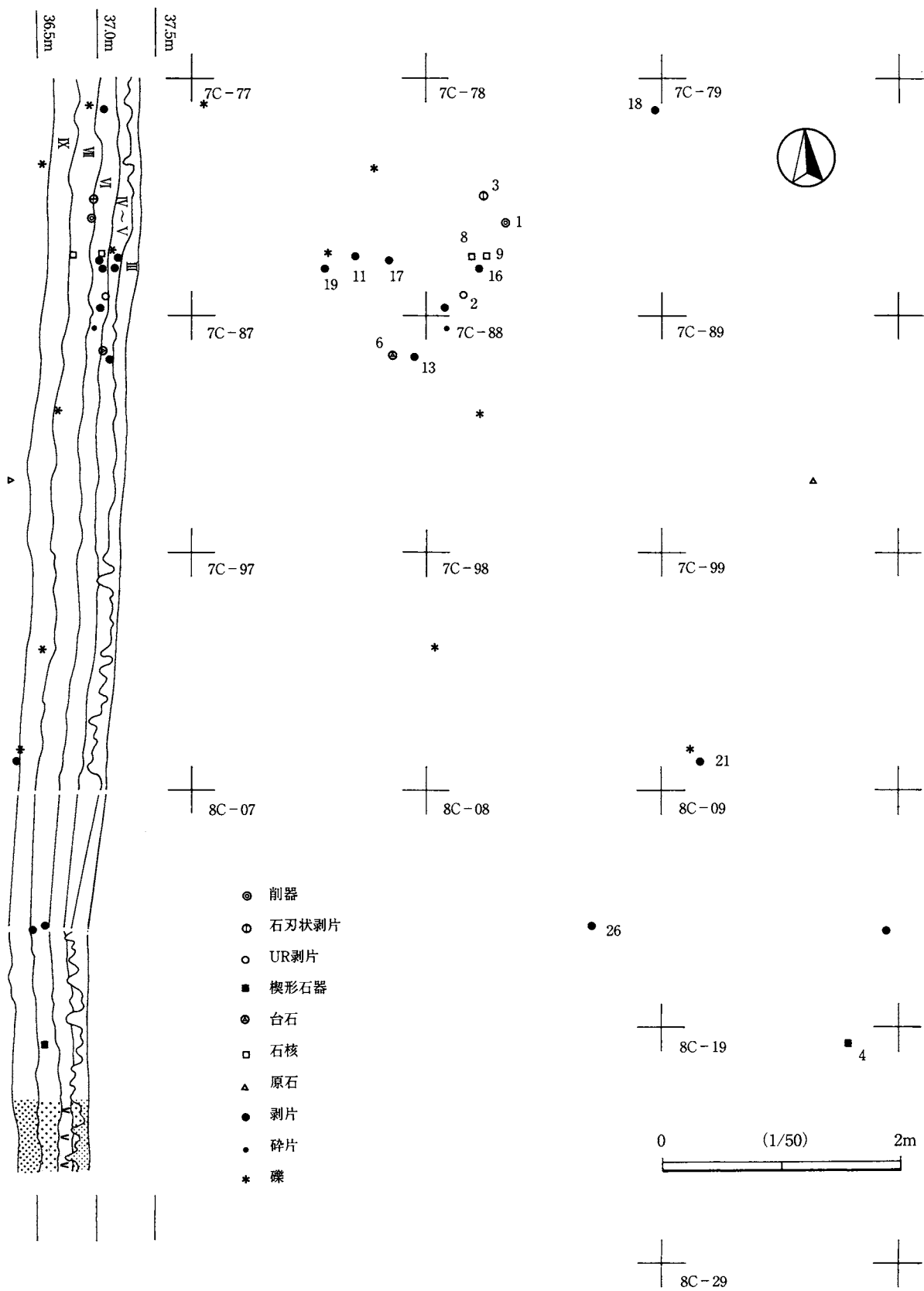
### 石器集中1 a (第59～69図, 第4表, 図版11, 90～94)

調査区の南西端の斜面肩口に分布する。

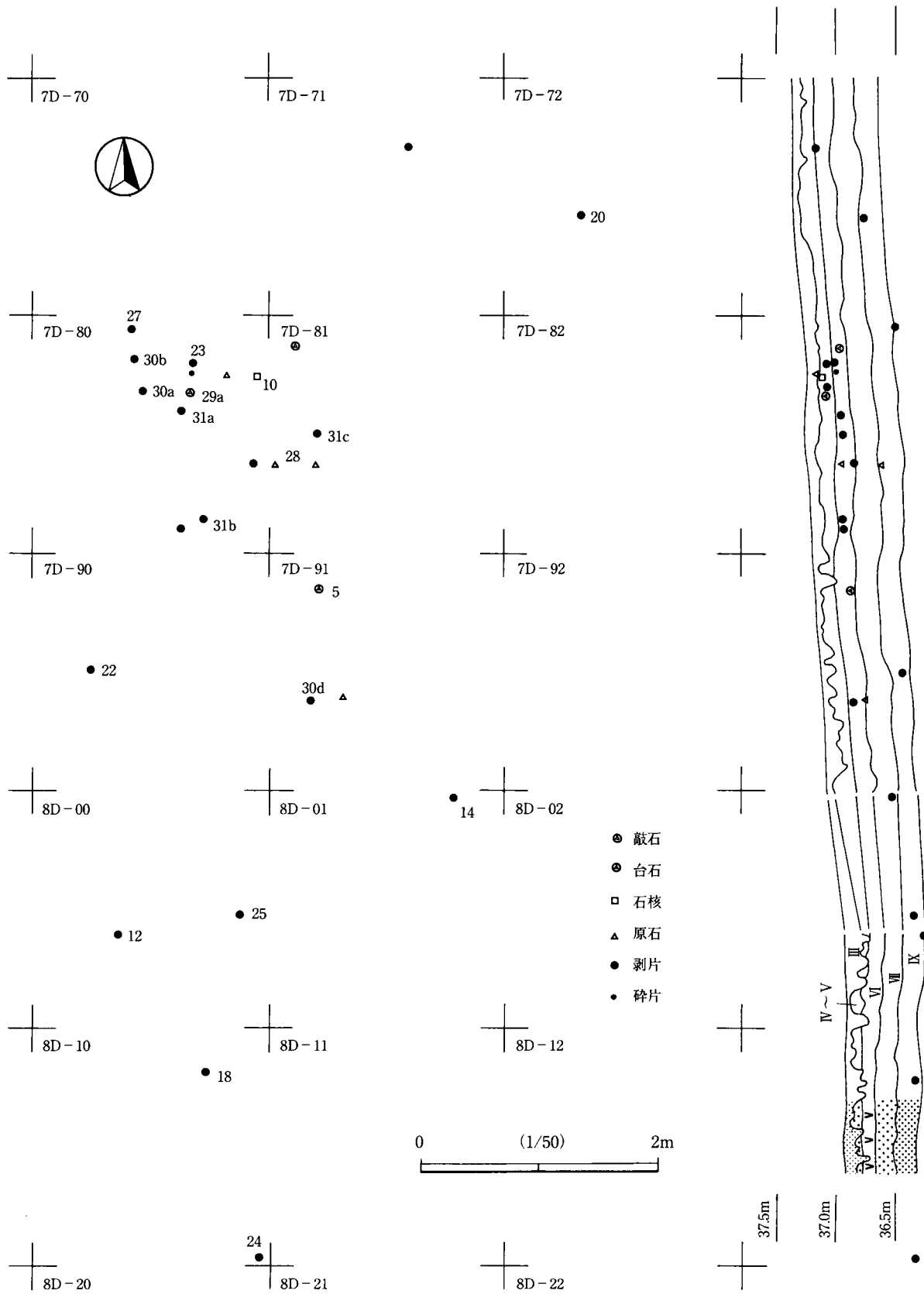
出土層位について、土層断面図からはXI層からIV～V層にかけて大きく上下に拡散しているが、主体はVII層からVI層に集中する。第Ⅱa文化層に比べるとレベル的には高い。確認調査時の所見はIX層及びVI層である。石器群は南北9m、東西10mの範囲に分布するが、さらに2群に分かれそうである。

出土石器は、削器1点、UR剥片1点、石刃状剥片1点、楔形石器1点、敲石1点、台石3点、石核3点、原石5点、剥片28点、碎片2点、礫6点の合計52点である。

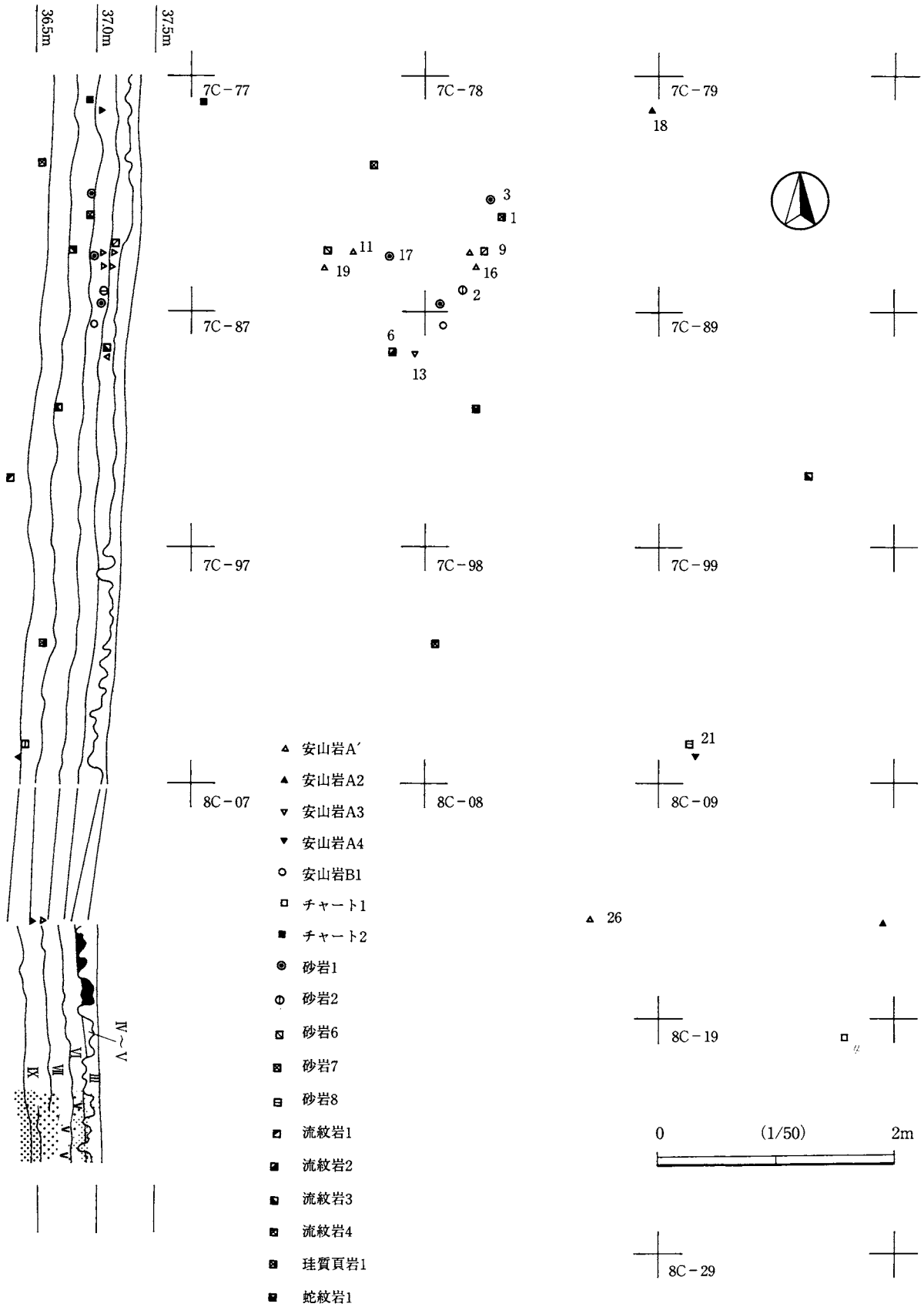
1は削器である。石刃を素材とし、表裏両側縁に細かい調整を施している。石材は珪質頁岩である。2



第59图 第IIc文化層石器集中1a 器種別分布图(1)

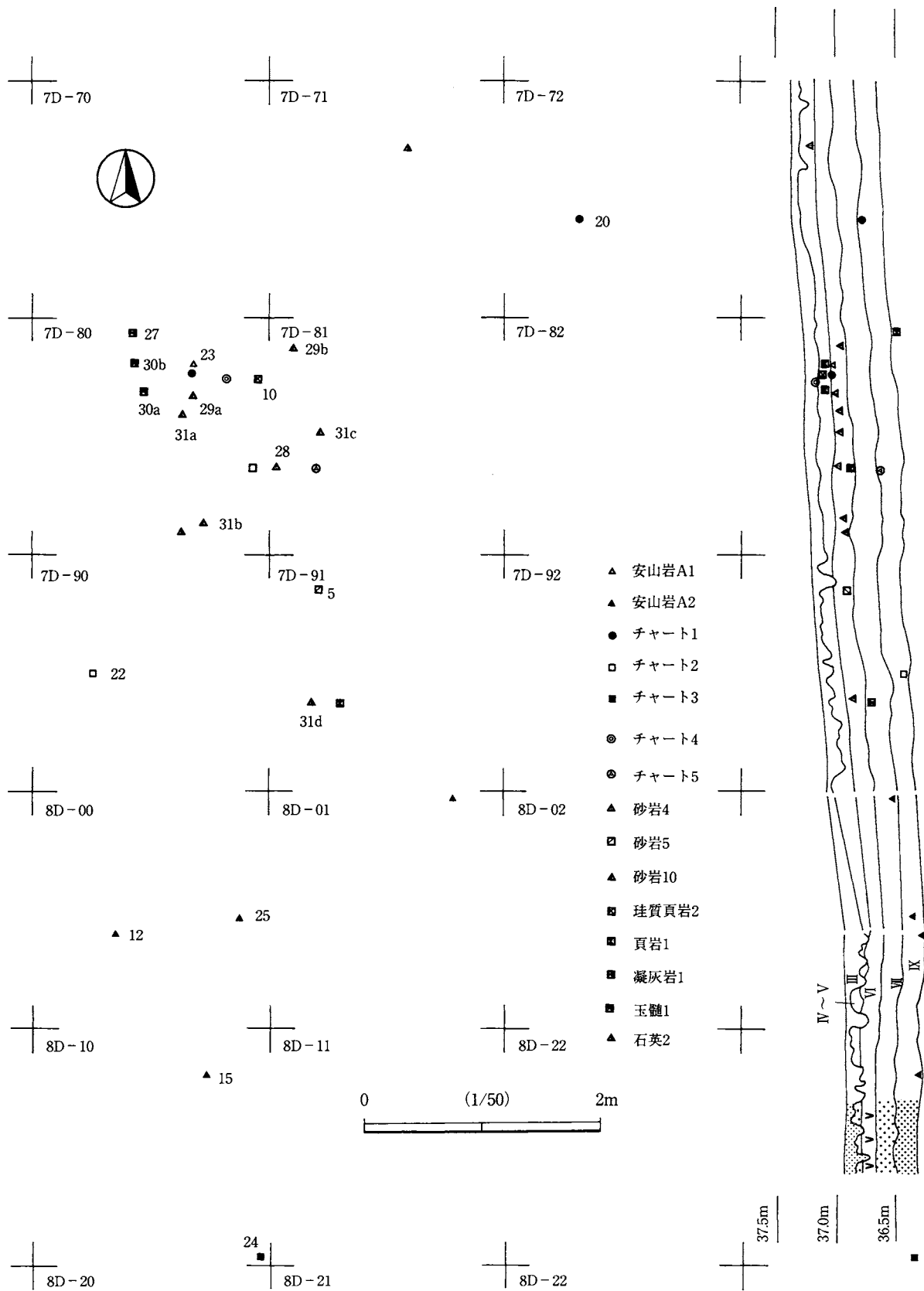


第60图 第IIc文化層石器集中1a 器種別分布图(2)

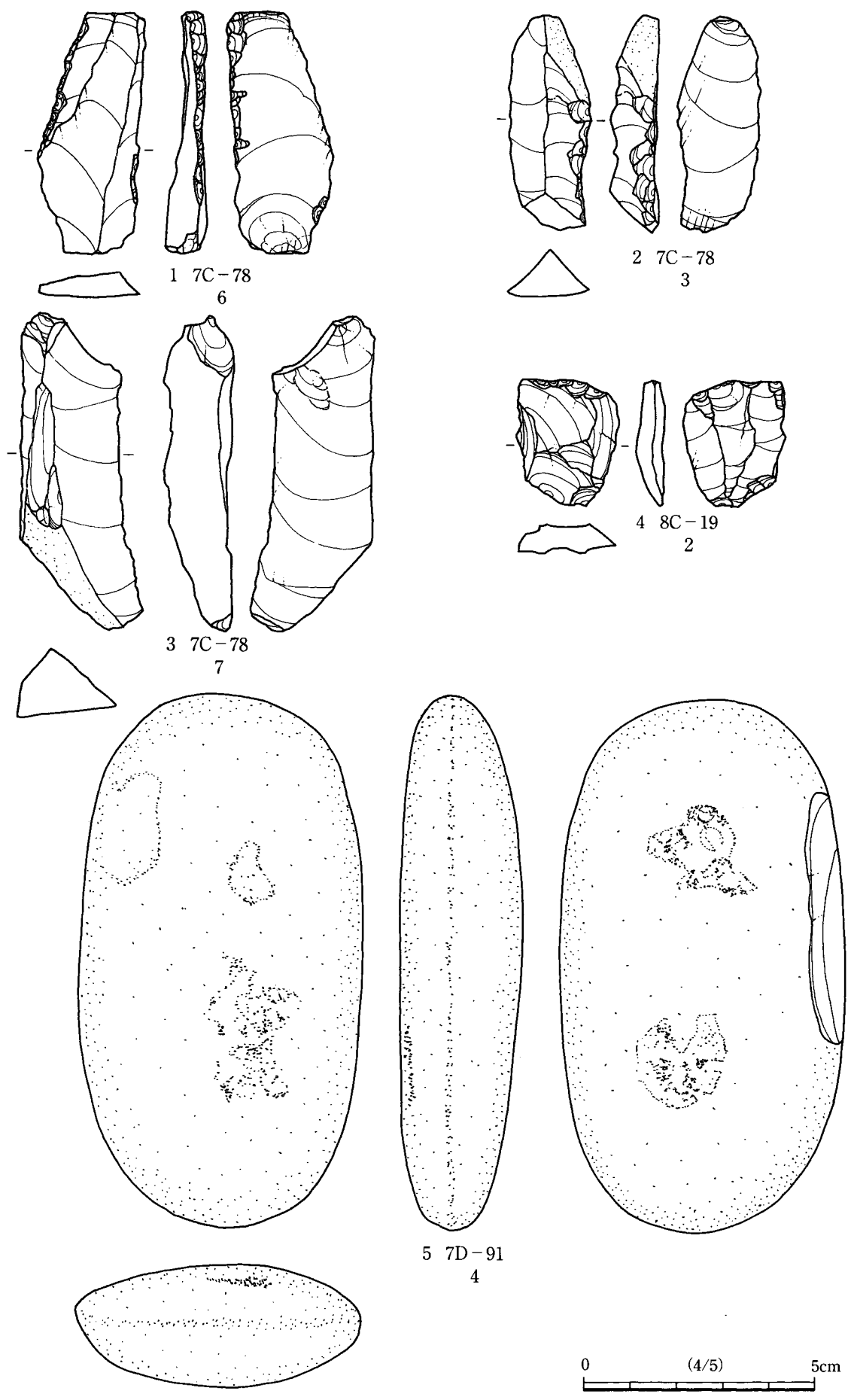


第61図 第Ⅱc文化層石器集中1a 母岩別分布図(1)

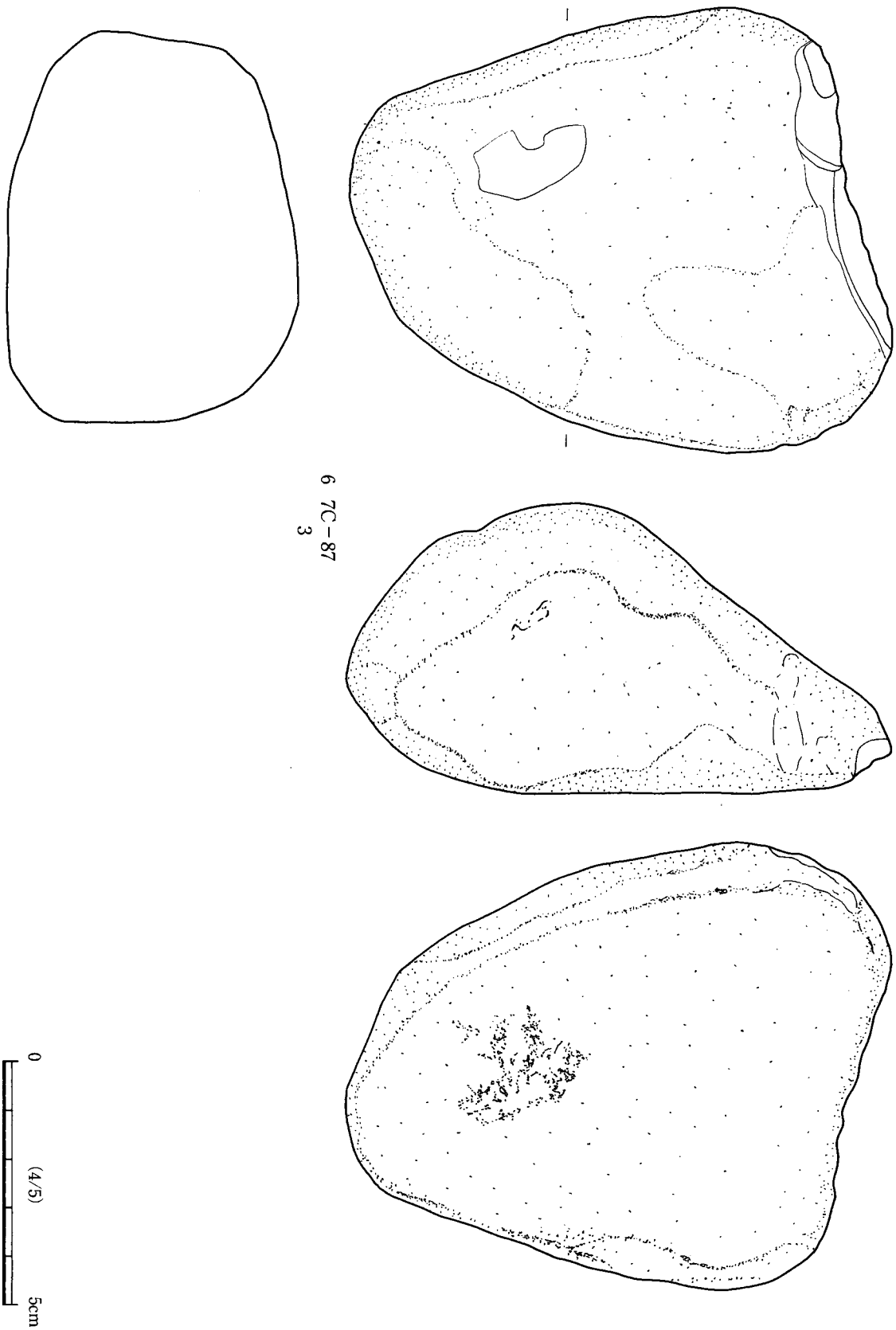




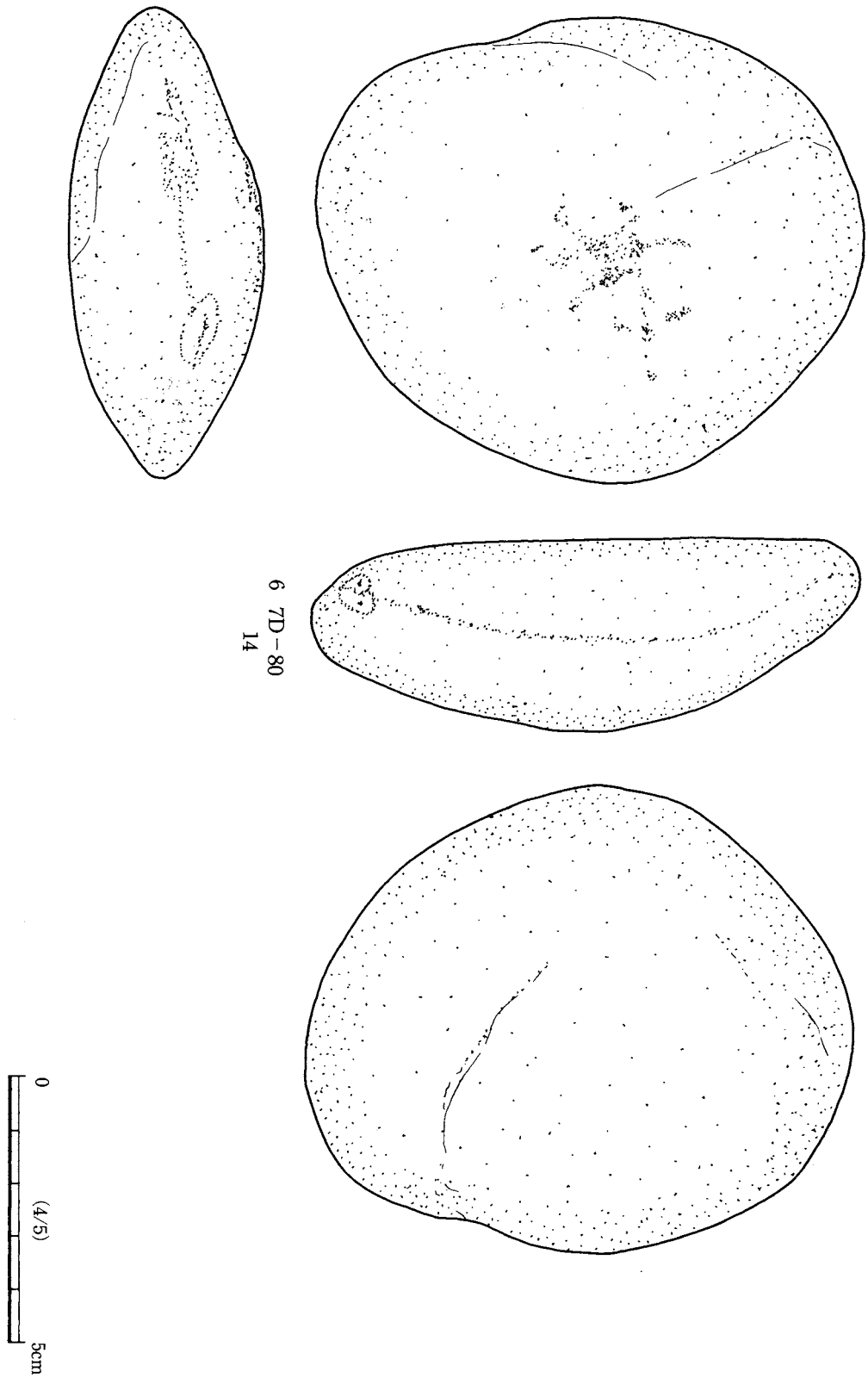
第62図 第IIc文化層石器集中1a 母岩別分布図(2)



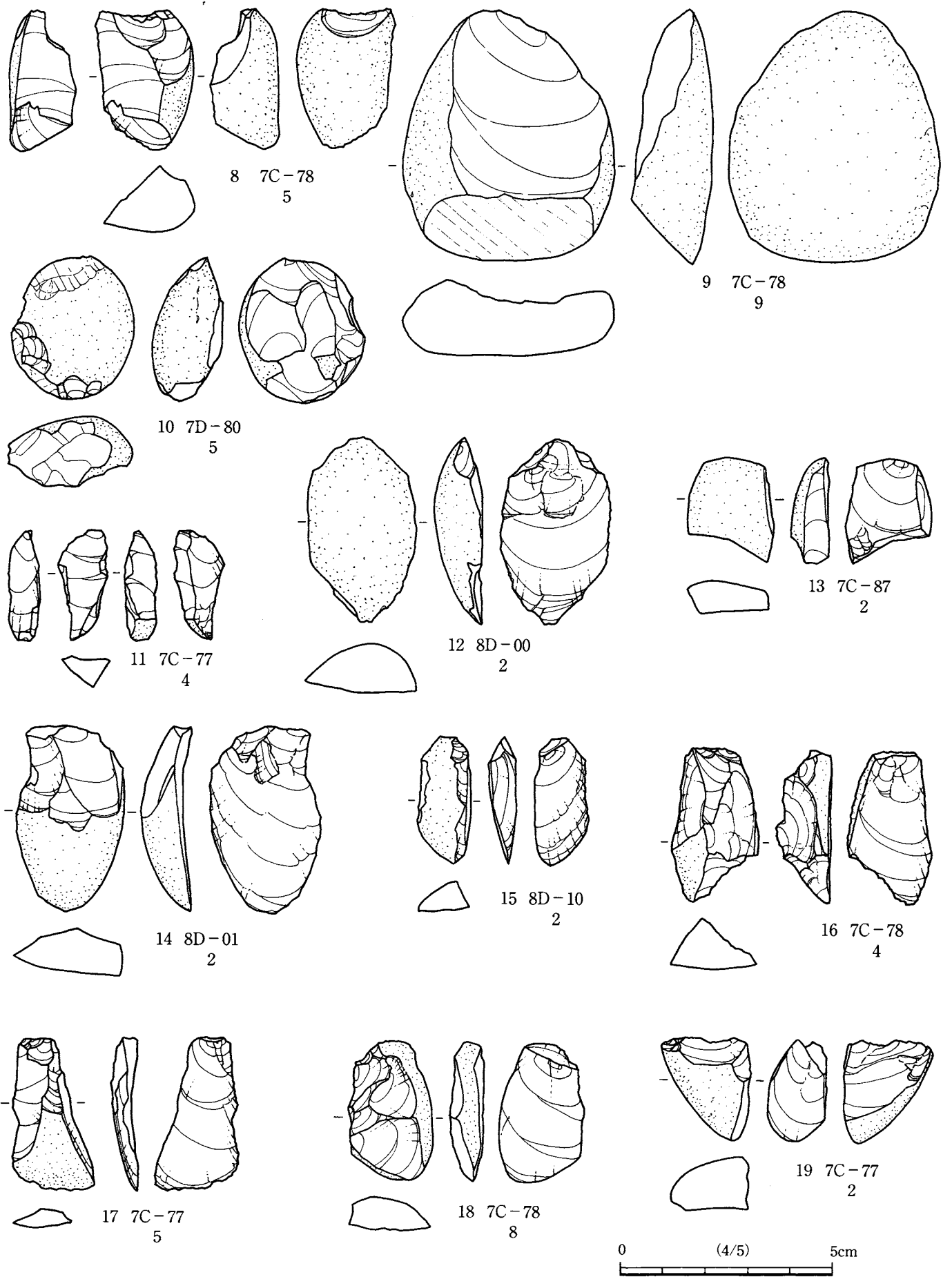
第63图 第Ⅱc文化層石器集中1a 出土石器実測図(1)



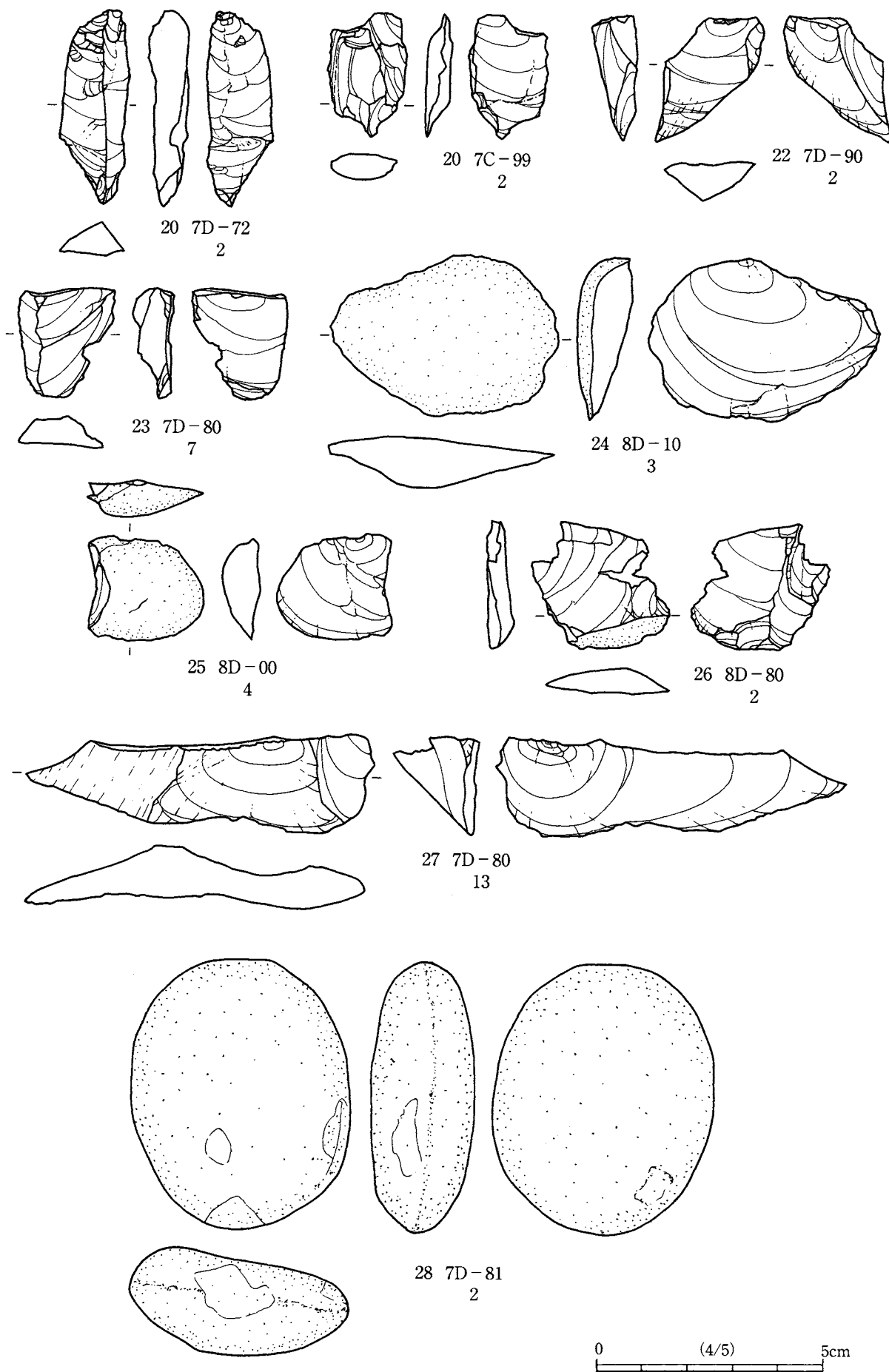
第64図 第Ⅱc文化層石器集中1a 出土石器実測図(2)



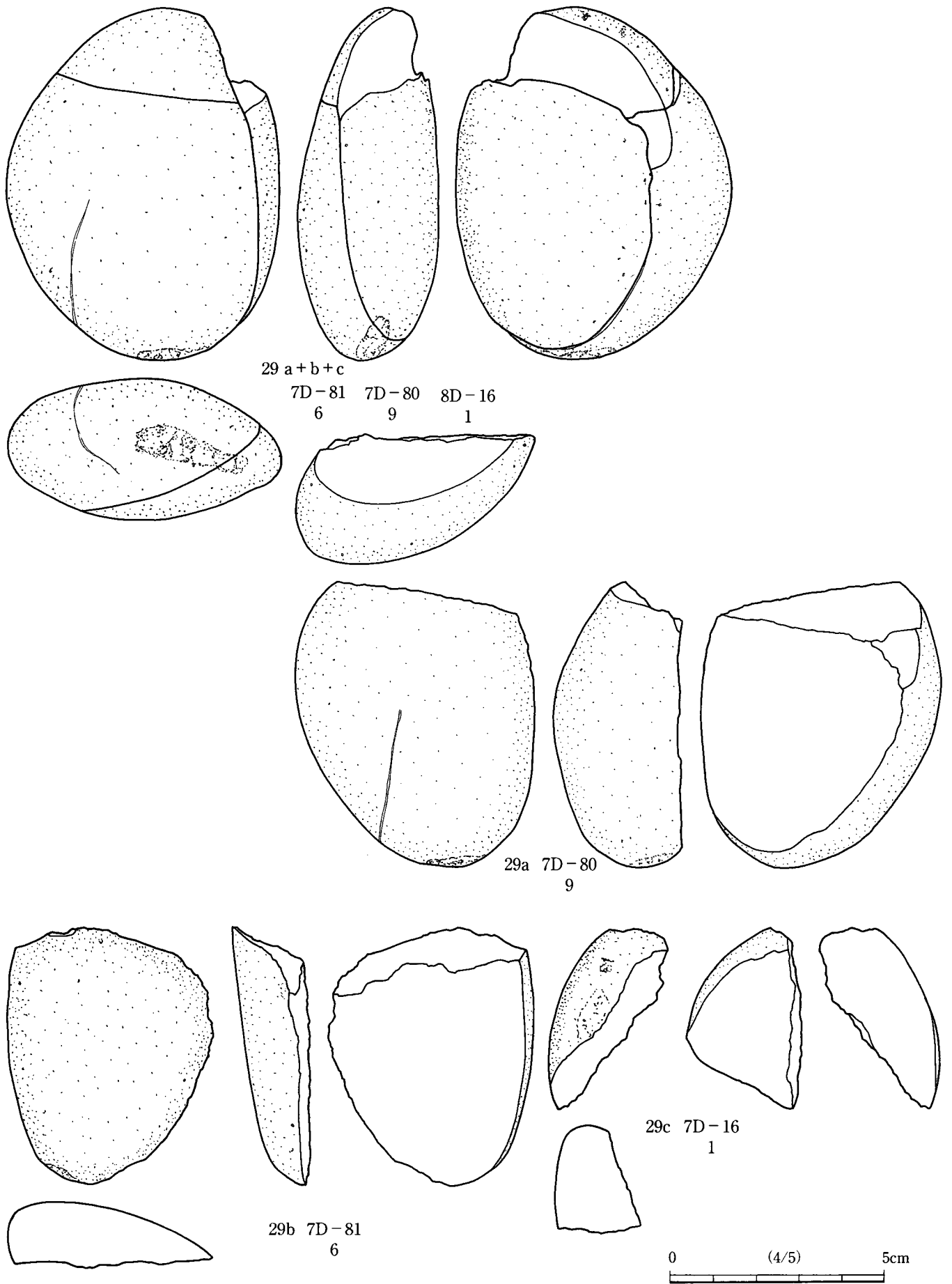
第65図 第Ⅱc文化層石器集中1a 出土石器実測図(3)



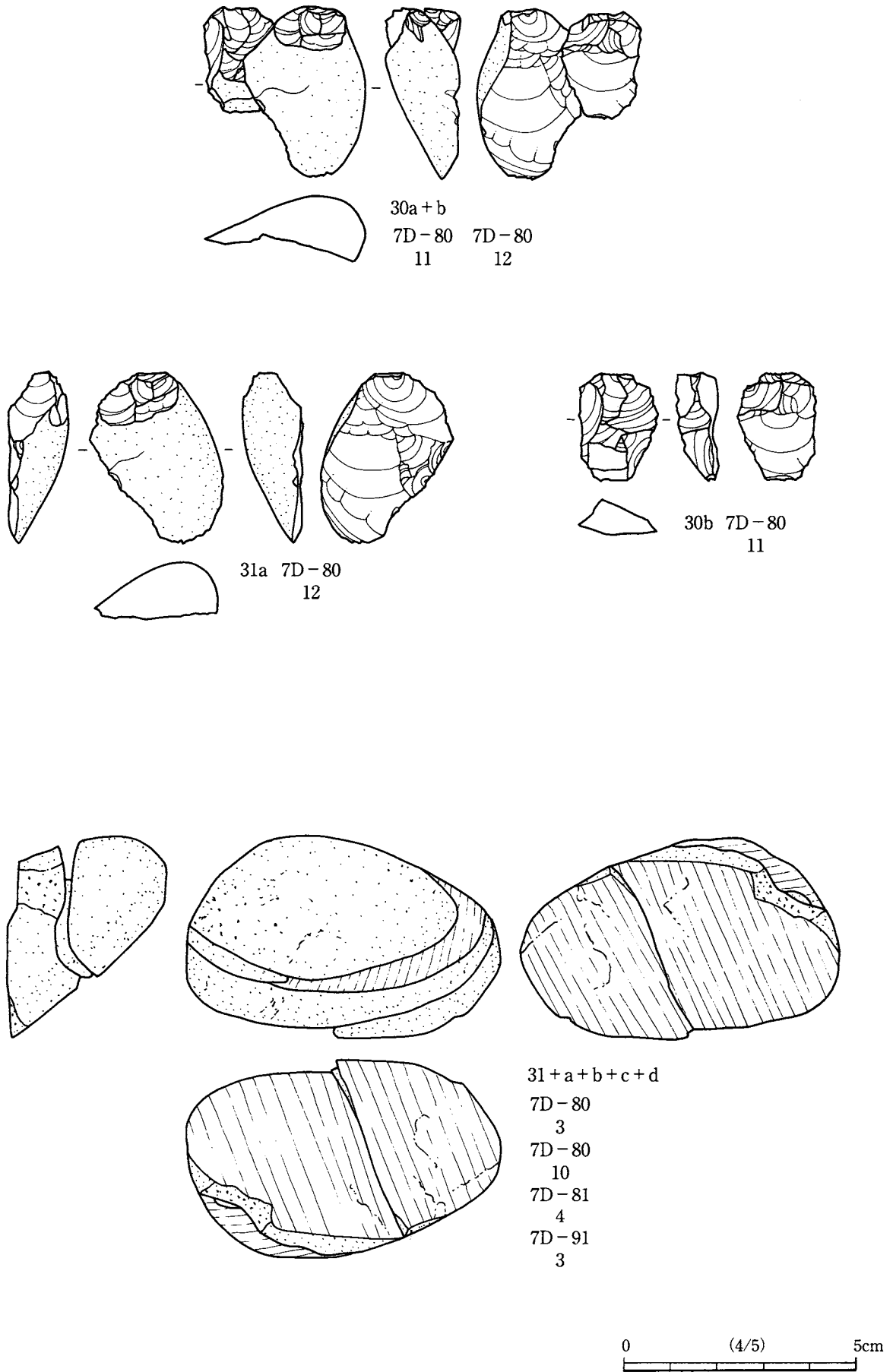
第66图 第IIc文化層石器集中1a 出土石器実測図(4)



第67图 第IIc文化層石器集中1a 出土石器実測図(5)



第68图 第Ⅱc文化層石器集中1a 出土石器実測图 (6)



第69图 第IIc文化層石器集中1a 出土石器实测图(7)



はUR剥片である。右側縁に急傾斜な調整を施している。あるいは削器としても良いかもしれない。石材は砂岩である。3は石刃状剥片である。稜上調整が施されている。石材は砂岩である。4はチャートの楔形石器である。5～7は台石である。比較的大形なことから敲打痕が側縁にないことから台石としたが、敲石の可能性もある。石材は砂岩、流紋岩である。8～10は石核である。石材は安山岩A、流紋岩、珪質頁岩である。11～27は剥片である。11～23は縦長剥片、24～27は横長剥片である。石材は安山岩A、砂岩、チャート、凝灰岩である。28は砂岩の原石である。29a + b + cは敲石の破損品の接合資料である。29a・29bは石器集中1a、29cは石器集中1bから出土している。石材は砂岩である。30a・bは剥片2点の接合資料である。石材は玉髓である。31a～dは剥片4点の接合資料である。節理で剥落したもので、剥片として良いのか微妙である。石材は石英である。

第4表 第Ⅱc文化層 石器集中1a 石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物No.	器種	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	打面形状	打角°	打面	頭部	C	J	背面	構成	調整角°	刃部角°	先端角°	調整部位	折面部位	末端	母岩番号	備考	標高	
1	7C-78	6	削器	51.8	23.3	8.9	8.9										56					珪質頁岩1		36.994	
2	7C-78	3	UR剥片	46.3	17.7	10.6	8.4	H	101		○	○	1	1			50				F	砂岩2		37.008	
3	7C-78	7	石刃状剥片	67.8	26.9	15.0	22.0	H	93		○	○			2					B		砂岩1		36.972	
4	8C-19	2	楔形石器	26.8	22.2	5.9	3.6															チャート2		36.560	
5	7D-91	4	台石	115.4	62.1	26.7	304.0															砂岩5		36.896	
6	7C-87	3	台石	111.8	90.9	59.1	697.0															流紋岩2		37.094	
7	7D-80	14	台石	104.4	88.3	36.9	412.0															砂岩3		36.922	
8	7C-78	5	石核	32.9	23.6	16.1	12.1															安山岩A1		37.014	
9	7C-78	9	石核	59.7	50.3	19.1	58.9															流紋岩1		36.797	
10	7D-80	5	石核?	33.7	29.5	16.5	20.0															珪質頁岩2		37.127	
11	7C-77	4	剥片	25.9	12.0	7.6	1.9															安山岩A1	両極剥片	37.146	
12	8D-00	2	剥片	43.5	25.9	11.6	13.7	L				○									F	安山岩A2		36.260	
13	7C-87	2	剥片	24.6	20.5	9.1	5.5	L				○								BL		安山岩A3		37.094	
14	8D-01	2	剥片	43.4	26.1	12.1	12.6					○		3							F	安山岩A2		36.518	
15	8D-10	2	剥片	29.6	13.0	6.7	2.5	H	118			○								R		安山岩A2		36.302	
16	7C-78	4	剥片	35.8	20.0	13.0	8.2	H	110		○	○	1	1		3					F	安山岩A1		37.028	
17	7C-77	5	剥片	26.2	19.7	6.2	2.8	H	120		○	○		3							F	砂岩1		37.001	
18	7C-78	8	剥片	32.9	19.9	8.1	5.8	H	121			○			5						F	安山岩A2		37.076	
19	7C-77	2	剥片	23.6	20.9	13.9	6.9	L				○		3							O	安山岩A1		37.144	
20	7D-72	2	剥片	42.5	15.1	8.9	4.3	H	112		pt			2							S	チャート1		36.799	
21	7C-99	2	剥片	27.1	17.8	5.6	2.7	L						2	4					L		安山岩A4		36.338	
22	7D-90	2	剥片	27.4	24.0	9.9	3.6	H	102								1				F	チャート2		36.418	
23	7D-80	7	剥片	23.8	21.0	9.0	3.4	H	97					3							H	安山岩A1		37.028	
24	8D-10	3	剥片	35.7	50.6	11.9	20.1	C	98			○									H	チャート3		36.324	
25	8D-00	4	剥片	22.9	25.3	8.3	4.5	C	66			○			1						F	安山岩A2		36.364	
26	8C-08	2	剥片	28.0	30.3	5.8	3.6	-	-	-	-	○		1	1					H	F	安山岩A1		36.558	
27	7D-80	13	剥片	20.8	76.6	19.1	15.4	J	87				○	2							S	凝灰岩1		36.494	
28	7D-81	2	原石	59.6	48.3	23.8	86.2															砂岩4		36.982	
29a	7D-80	9	敲石	71.0	59.5	30.6	133.7															砂岩10		37.053	
29b	7D-81	6	敲石	60.9	50.1	15.0	56.3															砂岩10		36.970	
29c	8D-16	1	敲石	26.6	46.4	18.2	23.0															砂岩10	第Ⅱc文化層石器集中1b	36.531	
30a	7D-80	11	剥片	37.7	25.2	13.4	11.9	H	114			○		1							S	玉髓1		37.018	
30b	7D-80	12	剥片	22.7	17.2	7.4	3.0	2	106			○		2	1					B		玉髓1		37.024	
31a	7D-80	10	剥片	58.7	31.8	17.6	35.9															石英2		36.994	
31b	7D-80	3	剥片	25.0	21.8	3.7	3.0															石英2		36.962	
31c	7D-81	4	剥片	66.7	37.5	12.4	41.2															石英2		36.946	
31d	7D-91	3	剥片	38.8	27.6	6.6	11.4															石英2		36.800	
	7C-77	3	礫	19.1	27.0	5.5	2.4															砂岩6		37.156	
	7C-77	6	礫	22.0	22.0	11.0	5.4															砂岩7		36.542	
	7C-77	7	礫	27.3	16.2	8.4	5.0															チャート3		36.910	
	7C-78	2	剥片	10.9	10.4	1.6	0.2			L		○									F	砂岩1		37.028	
	7C-88	2	礫	20.9	17.0	5.5	3.0															凝灰岩1		36.670	
	7C-88	3	碎片	7.8	9.9	2.4	0.2															安山岩B1		36.996	
	7C-89	2	原石	32.7	29.2	10.3	13.1															流紋岩3		36.276	
	7C-98	2	礫	38.5	28.2	8.3	7.5															流紋岩4		36.542	
	7C-99	3	礫	40.2	12.2	9.0	6.1															砂岩8		36.370	
	7D-71	2	剥片	29.9	23.3	4.5	4.1															石英2		37.180	
	7D-80	2	剥片	41.2	29.8	5.5	11.4															石英2		36.907	
	7D-80	4	剥片	14.8	11.2	4.7	0.8	H	115			○		3							F	玉髓1		36.830	
	7D-80	6	原石	32.2	27.9	13.5	19.3															チャート4		37.155	
	7D-80	8	碎片	9.2	12.2	1.6	0.2															チャート1		37.030	
	7D-81	3	原石	24.0	20.0	11.2	7.8															チャート5		36.616	
	7D-91	2	原石	33.5	25.7	12.4	15.5																頁岩1		36.744
	8C-09	2	剥片	13.4	12.1	4.4	0.7	H	100					4							B	安山岩A2		36.430	

石器集中1b (第70~74図, 第5表, 図版11, 95, 96)

調査区の南西端の斜面肩口に分布する。

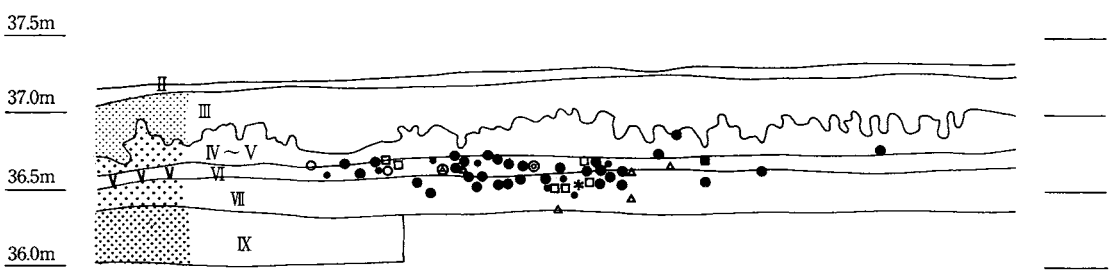
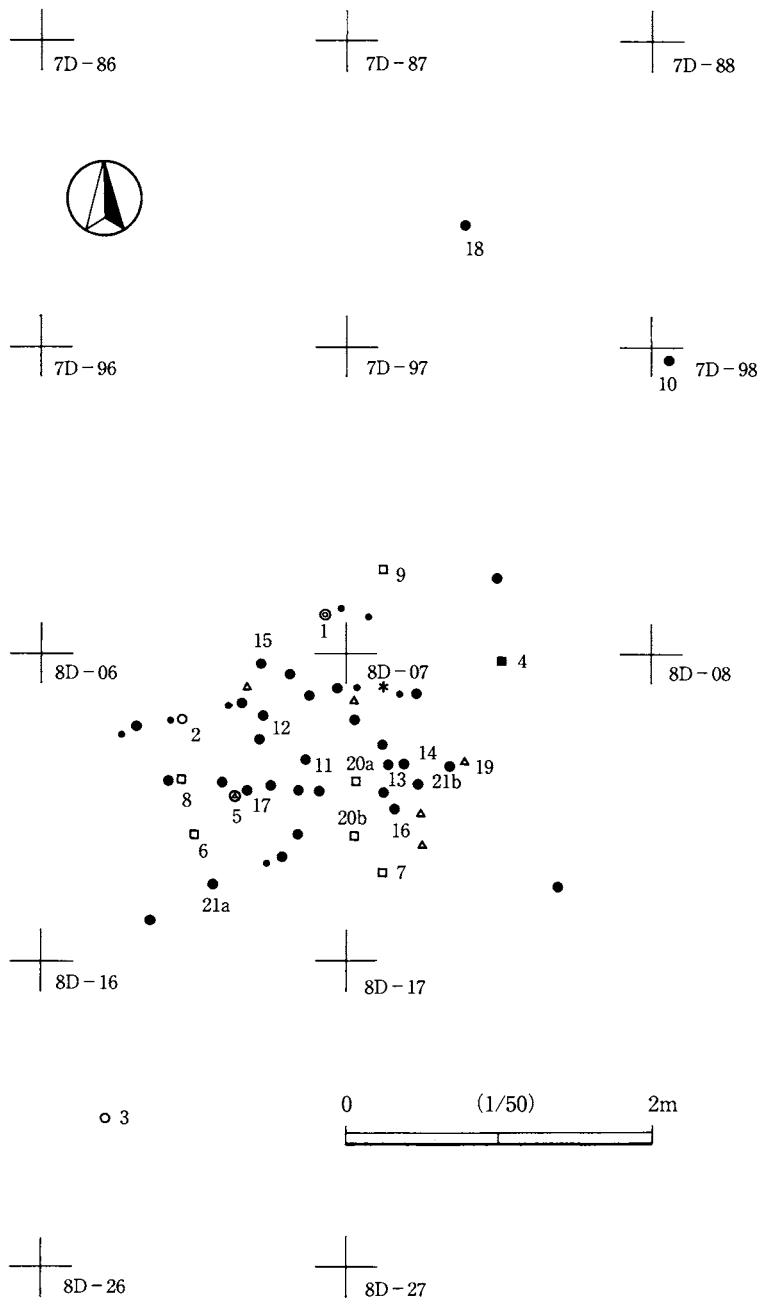
出土層位は, VII層からIV~V層にかけて分布するが, ほぼVII層~VI層に集中する。第II a文化層に比べるとレベル的には高い。確認調査時の所見はIX層からVII層である。石器群は南北6m, 東西4mの範囲に広がるが, ほとんどが8D-06グリッドを中心に南北2m, 東西2mにまとまる。

出土石器は, 削器1点, UR剥片2点, 楔形石器1点, 敲石1点, 石核5点, 原石3点, 原石S2点, 剥片32点, 碎片8点, 礫1点の合計56点である。

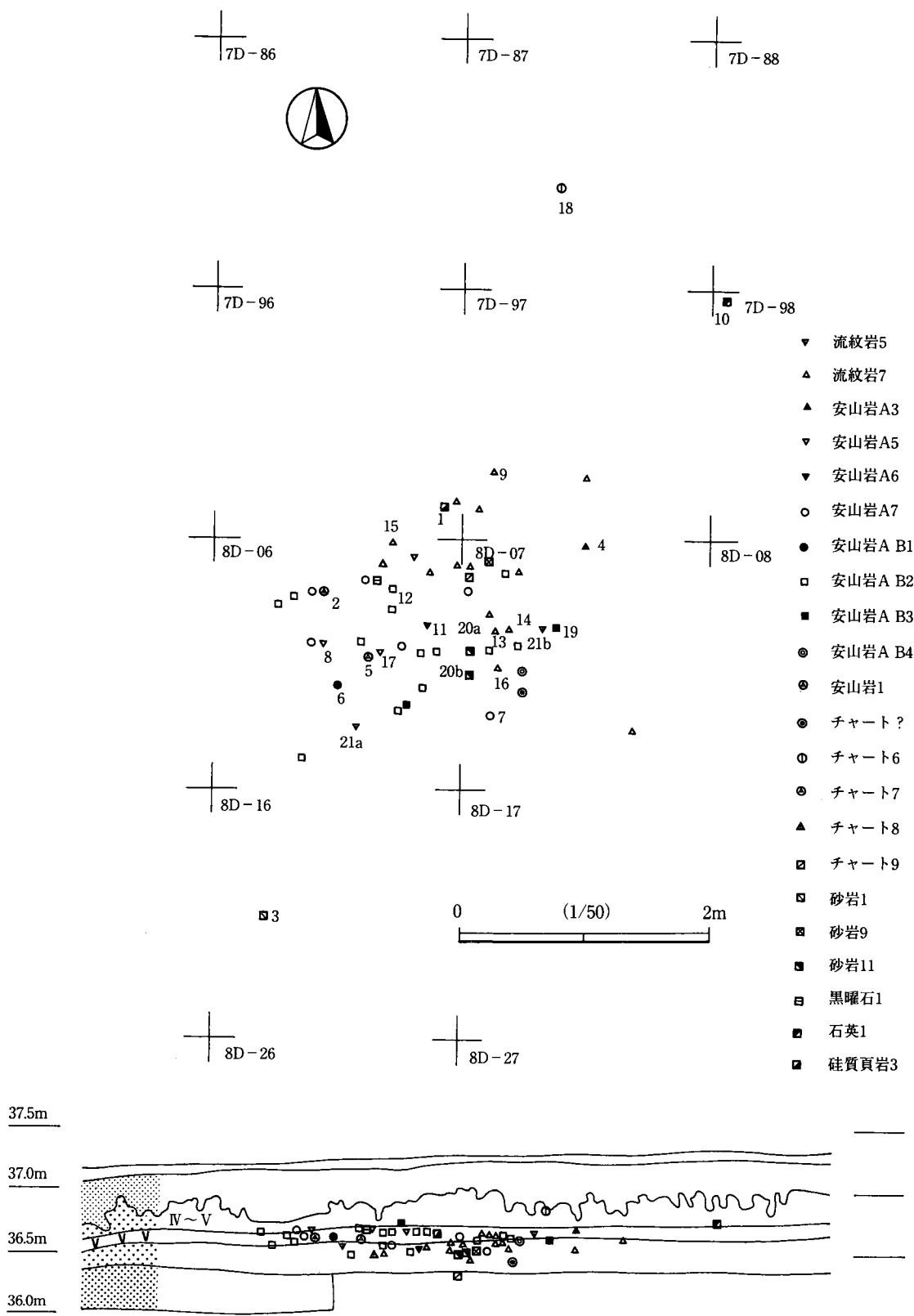
1は削器である。石刃を素材とし, 左側縁にノッチ状の急角度で深めの調整加工を施し, 右側縁には表面に細かい調整加工を, 裏面に深めの調整加工を施している。石材は珪質頁岩である。2・3はUR剥片である。2は両側縁には剥離痕が見られる。あるいは削器としても良いかもしれない。石材はチャートである。3は左側縁の一部に剥離痕が見られる。石材は砂岩である。4は安山岩Aの楔形石器である。5は敲石である。側縁の一部に敲打痕が見られる。石材は安山岩である。6~9は石核である。石材は安山岩B, 安山岩A, 流紋岩である。6は縦長剥片を, 7~9は扁平な礫の周辺から求心的に加撃して, 剥片を剥離している。10~18は剥片である。10~14は縦長剥片, 15~18は横長剥片である。石材は石英, 安山岩A, 安山岩B, 流紋岩, チャートである。19は安山岩Bの原石である。20a・bは石核の破損品の接合資料である。石材は砂岩である。21a・bは剥片2点の接合資料である。石材は流紋岩である。

第5表 第II c文化層 石器集中1b 石器属性表

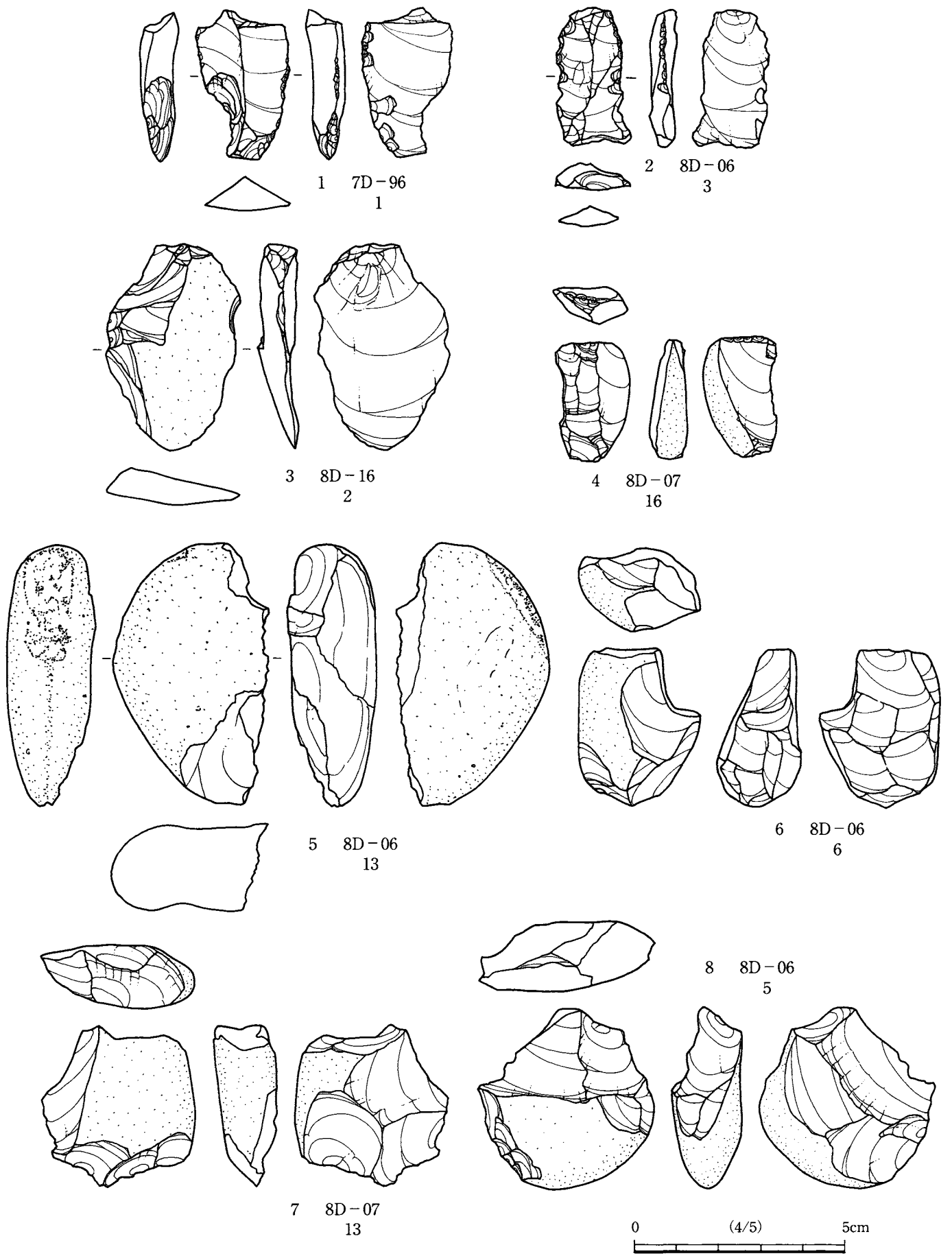
挿入番号	グリッド	遺物No.	器種	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	打面形状	打角°	打面	頭部	C	J	背面	H	T	構成	R	L	D	V	調整角°	刃部角°	先端角°	調整部位	折面部位	末端	母岩番号	備考	標高	
1	7D-96	1	削器	35.7	21.8	9.1	5.4																64				珪質頁岩3		36.686		
2	8D-06	3	UR剥片	32.9	17.7	6.1	3.2	H	69						3								66		B		チャート7		36.651		
3	8D-16	2	UR剥片	32.0	48.9	9.5	12.0	H	105	○	○	○			2		3						69		F		砂岩1		36.651		
4	8D-07	16	楔形石器	28.2	17.5	9.0	4.6																				安山岩A3		36.700		
5	8D-06	13	敲石	62.2	37.0	21.4	60.0																				安山岩1		36.630		
6	8D-06	6	石核	37.3	28.5	19.5	19.0																				安山岩B1		36.658		
7	8D-07	13	石核	38.1	36.9	15.0	24.1																				安山岩A7		36.651		
8	8D-06	5	石核	43.0	42.1	16.5	27.2																				安山岩A5		36.675		
9	7D-97	1	石核	55.2	52.8	29.7	86.9																				流紋岩5		36.565		
10	7D-98	1	剥片	16.4	16.1	6.1	1.3																				石英1	両極剥片	36.779		
11	8D-06	23	剥片	42.5	39.5	17.0	31.8	C	106			○															安山岩A6		36.578		
12	8D-06	17	剥片	50.5	38.9	11.2	23.3	2	72			○															安山岩B2		36.599		
13	8D-07	7	剥片	24.8	18.1	7.1	1.8	H	111			○			2										B		流紋岩5		36.544		
14	8D-07	5	剥片	26.8	24.2	7.8	2.9	2	112					3	1												F	流紋岩5		36.600	
15	8D-06	20	剥片	38.2	36.5	8.1	12.5	L				○															F	流紋岩5		36.514	
16	8D-07	9	剥片	25.5	30.6	7.6	4.4	H	118			○				1											F	流紋岩5		36.618	
17	8D-06	14	剥片	23.2	34.1	6.8	3.8	4	106			○		2													F	安山岩A5		36.700	
18	7D-87	1	剥片	15.4	21.0	5.9	1.6	-	-	-	-			2												HL	S	チャート6		36.858	
19	8D-07	15	原石	50.0	40.3	22.8	66.1																					安山岩B3		36.636	
20			石核	47.2	50.2	29.9	62.3																					砂岩11		-	
20a	8D-07	10	石核																									砂岩11		36.589	
20b	8D-07	11	石核																									砂岩11		36.501	
21a	8D-06	9	剥片	34.2	36.8	9.1	9.2	H	109			○	○	2													F	流紋岩5		36.736	
21b	8D-07	14	剥片	16.2	19.1	2.8	0.8	H	101			○		1													F	流紋岩5		36.586	
	7D-96	2	碎片	9.1	5.0	1.2	0.1																					流紋岩5		36.518	
	7D-97	2	碎片	12.0	8.7	4.0	0.6																					流紋岩5		36.482	
	7D-97	3	剥片	14.7	17.4	3.8	0.7	H	107					2	1												F	流紋岩5		36.579	
	8D-06	1	碎片	8.3	14.9	2.6	0.3																					安山岩B2		36.585	
	8D-06	2	剥片	10.1	18.3	3.6	0.5	L				○		1													F	安山岩B2		36.659	
	8D-06	3	碎片	8.7	11.8	1.8	0.2	L																				安山岩A7		36.651	
	8D-06	5	剥片	20.4	35.9	3.1	2.0	L				○				1											F	安山岩A7		36.675	
	8D-06	7	剥片	17.3	24.4	5.7	1.9	H	118			○				1											F	安山岩B2		36.498	
	8D-06	8	剥片	13.1	7.7	2.9	0.3																					安山岩B2	発掘時欠損	36.604	
	8D-06	10	碎片	14.0	7.4	1.8	0.2																					安山岩B2		36.680	
	8D-06	11	剥片	14.9	15.7	17.7	3.6	H	106					2			1										O	安山岩B3		36.723	
	8D-06	12	剥片	22.9	19.3	4.7	1.8	H	110					3													F	安山岩B2		36.682	
	8D-06	15	剥片	15.3	10.2	3.5	0.4																					F	安山岩A7	発掘時欠損	36.597
	8D-06	16	剥片	22.5	11.1	3.7	0.6	H	94					2													F	安山岩B2		36.688	
	8D-06	18	剥片	28.1	6.7	7.1	1.1	H	101			○		6													O	黒曜石1		36.644	
	8D-06	18	碎片	11.1	9.7	3.1	0.4																					安山岩A7		36.644	
	8D-06	19	原石S	18.3	7.9	5.9	1.1																					チャート8	自然礫?	36.515	
	8D-06	21	剥片	19.3	14.8	4.7	1.5	H	111			○		1	1												L	F	安山岩A5		36.700
	8D-06	22	剥片	17.5	19.4	4.1	1.1							3													H	F	流紋岩5		36.596
	8D-06	24	剥片	11.7	19.8	3.5	0.7	H	104			○		2														F	安山岩B2	発掘時欠損	36.538
	8D-06	25	剥片	16.4	19.7	4.9	1.4	H	124			○		1	1													F	安山岩B2		36.681



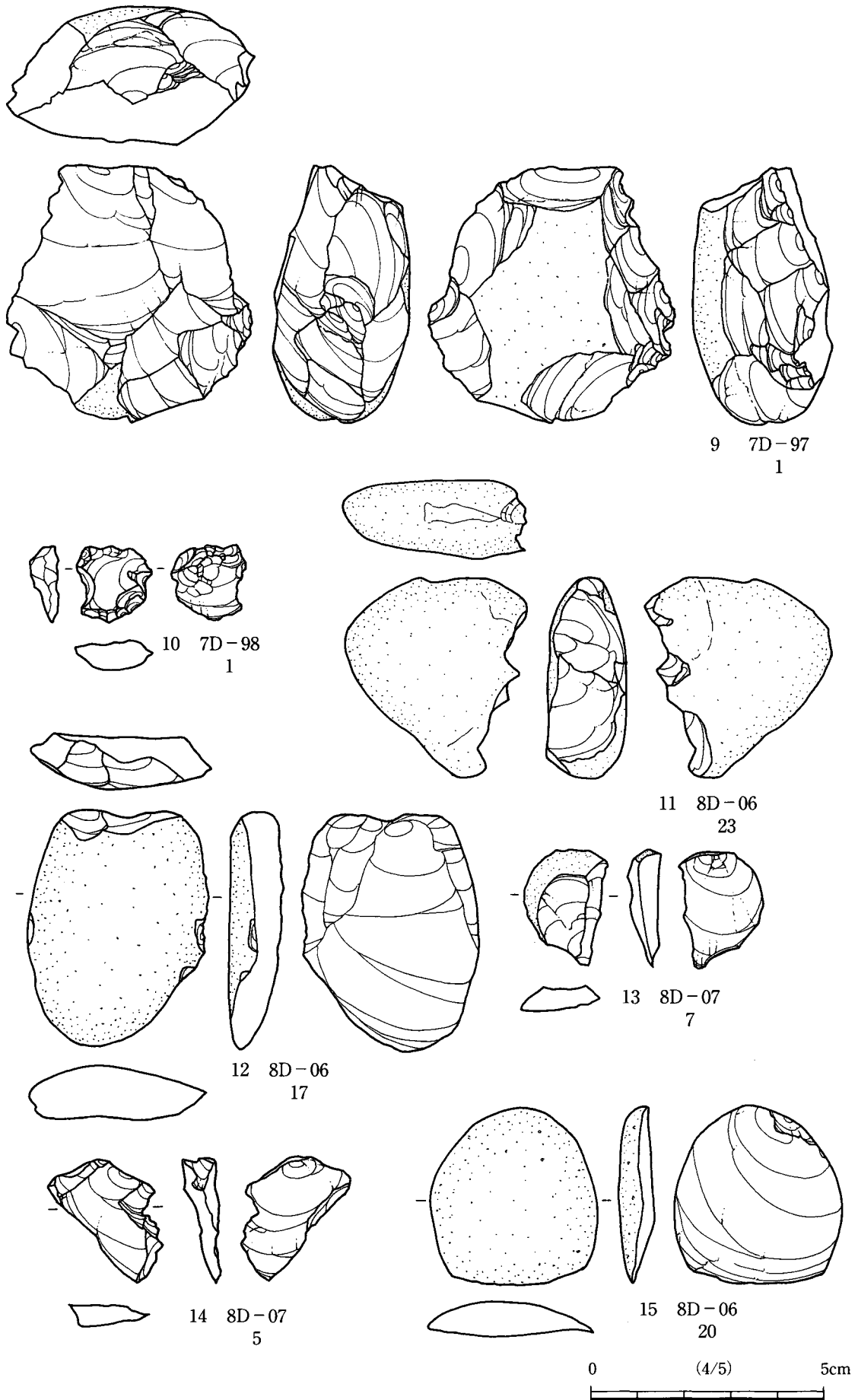
第70图 第IIc文化層石器集中1b 器種別分布图



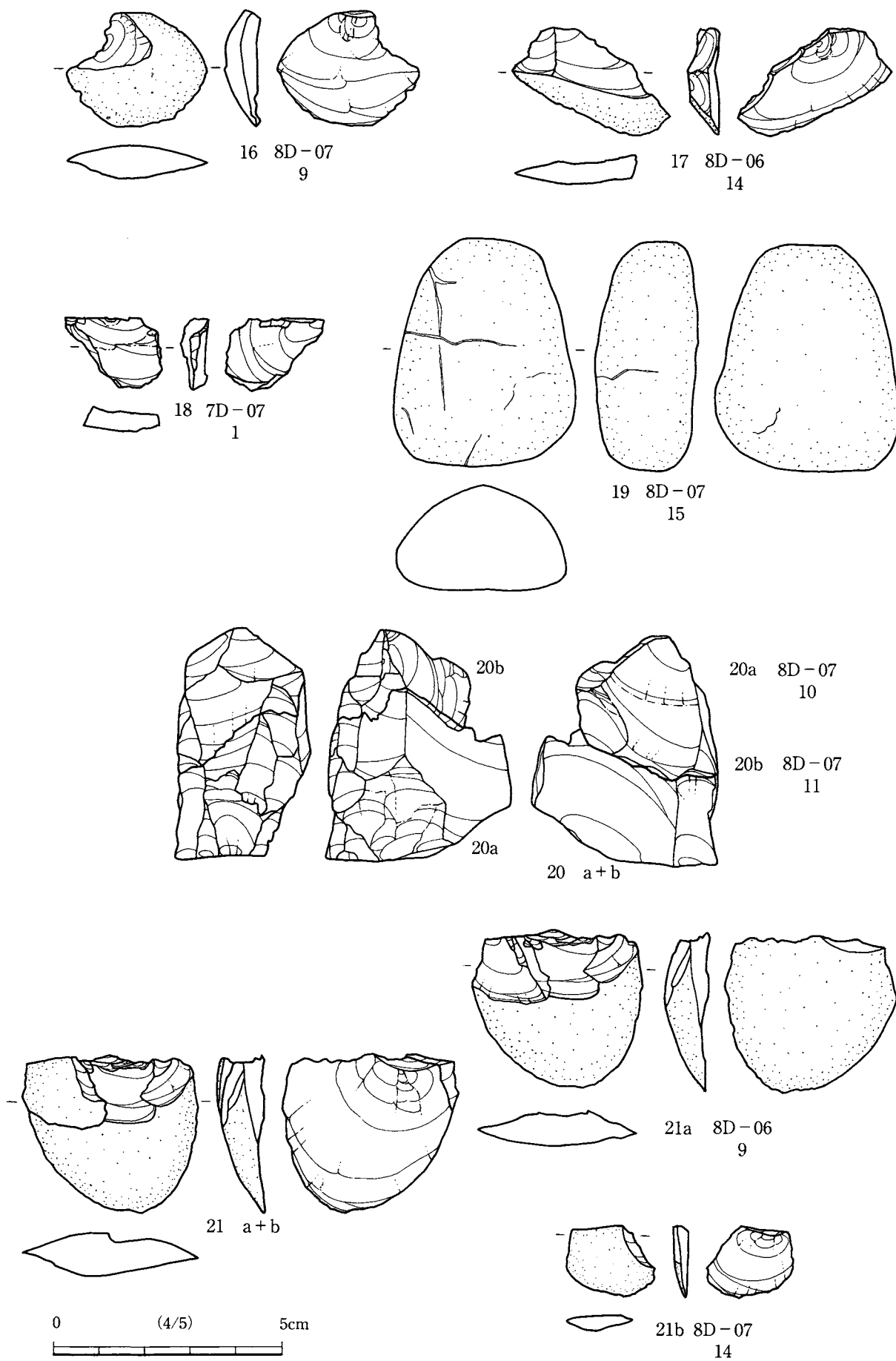
第71図 第Ⅱc文化層石器集中1b 母岩別分布図



第72图 第IIc文化層石器集中1b 出土石器实测图(1)



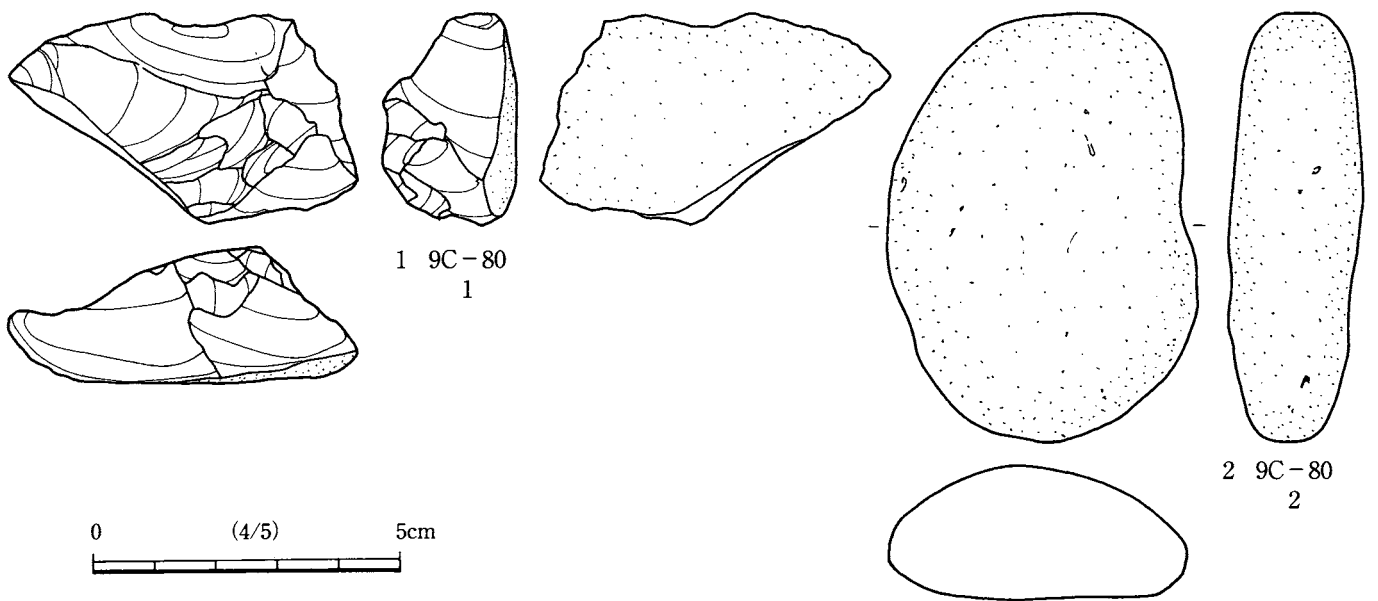
第73图 第Ⅱc文化層石器集中1b 出土石器実測図(2)



第74图 第Ⅱc文化層石器集中1b 出土石器実測図(3)







第76図 第Ⅱd文化層石器集中1 出土石器実測図

硬質で下部に白色微粒子を多量に含む。特に6層との境で顕著である。第2黒色帯と思われる。6層は黄褐色砂層である。立川ローム最下層と思われる。石器群は、9C-80グリッドを中心に南北1m、東西1mにまとまる。

出土石器は、石核1点、原石1点の合計2点である。

1はホルンフェルスの石核である。発掘時の所見ではハードローム下部となっている。2はチャートの原石である。発掘時の所見では武蔵野ロームとなっている。

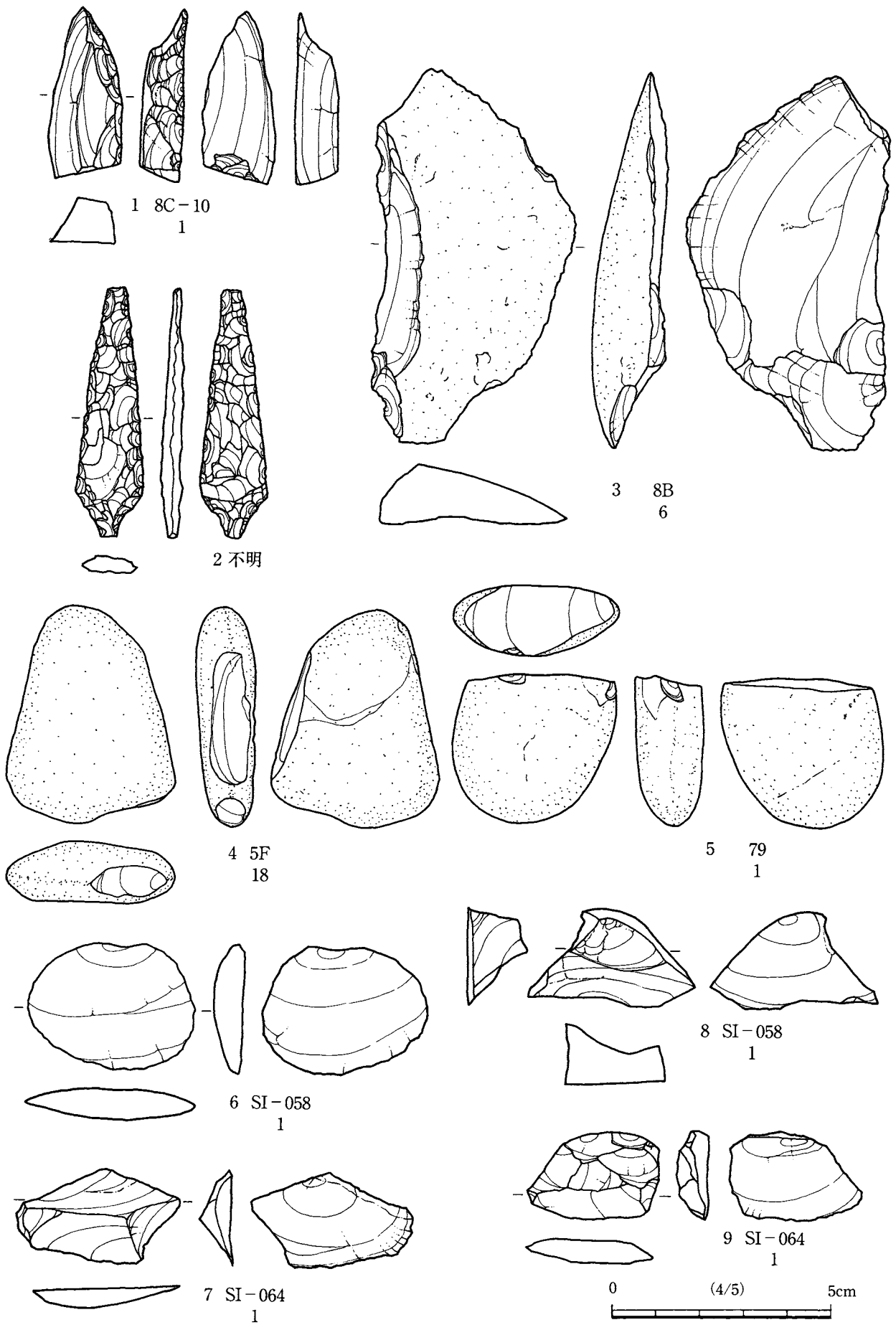
**単独出土石器**（第77, 78図, 第7表, 図版11）

上層出土の石器である。12~16の石鏃を除き旧石器時代に属す可能性がある。

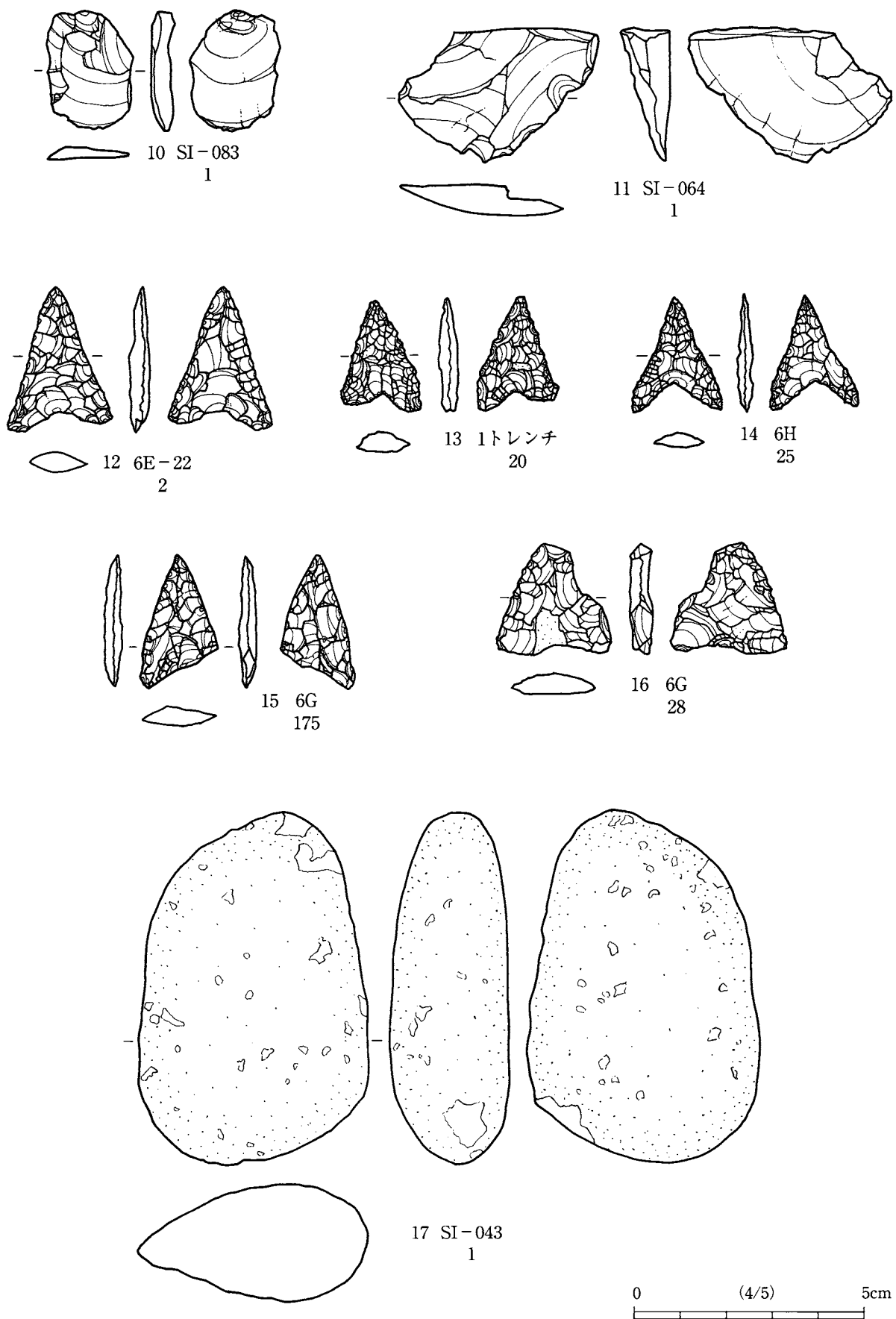
1は横長剥片の右側縁に調整加工を施したナイフ形石器である。下端部を欠損する。石材は流紋岩である。2は安山岩Aの有舌尖頭器である。3・4は石核である。3は板状の剥片を素材とし、横長剥片を剥離している。石材は安山岩である。4は石核としたが、礫の可能性もある。石材は砂岩である。5~11は剥片である。石材はチャート、ホルンフェルス、安山岩A、緑色凝灰岩、珪質頁岩である。石材は頁岩、黒曜石、チャート、珪質頁岩である。12~16は石鏃である。17は安山岩の原石である。礫の可能性もある。他に図示しなかったが、2M-00グリッド及び2N-00グリッドから第Ⅱa文化層に属すと思われる原石・原石Sがまとめて採集されている。SI-002・009・074住居跡からも原石が発見されており、旧石器時代に属すものと思われる。

第6表 第Ⅱd文化層 石器集中1 石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物No.	器種	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	打面形状	打角°	打面	頭部	C	J	背面H	成面T	R	L	D	V	調整角°	刃部角°	先端角°	調整部位	折面部位	末端	母岩番号	備考	標高
1	9C-80	1	石核	34.0	56.8	21.9	40.2																			ホルンフェルス1	ハードローム下部	32.921
2	9C-80	2	原石	69.3	50.1	23.6	121.8																			チャート1	武蔵野ローム	32.695



第77図 グリッド出土石器実測図 (1)



第78図 グリッド出土石器実測図 (2)

石器属性表について

1. 挿図番号 実測図として掲載した遺物の通し番号。この番号は遺物の出土平面図と写真図版の番号に一致する。実測図として報告できなかったものについては、取り上げ番号順に、以下に掲載した。
2. グリッド・遺物番号 出土したグリッドと遺物の取上げ番号（注記番号）。
3. 器種 原石 S は最大長と最大幅のいずれかが20mm より小さいもの
4. 打面形状 C は自然面, J は節理面, P は点状打面, L は線状打面, H は平坦打面, 2 以上は複剥離打面, - は欠損等による打面なし・計測不可を示す。
5. 背面構成 主要剥離面の剥離方向を基準として、背面を構成する剥離面の種類と数を示した。素材を大きく変形させたものは記入しないが、素材の背面構成が窺われるものに関しては、観察される範囲で記入した。C は自然面, J は節理面, H は頭部側, T は尾部側, R は背面を正面にして右方, L は左方, D は背面側, V は腹面側（両者は作業面調整剥片, 角柱状の剥片など90° に近い剥離角をもつ剥離面の場合）からの剥離面数を示す。
6. 調整部位・折面部位 主要剥離面の剥離方向を基準として、調整部位と折断部位の位置を示した。H は頭部側, B は尾部側, R は背面を正面にして右側, L は左側を示す。
7. 末端形状 F は通常の末端（フェザーエンド）, S は階段状（ステップ）, H はちょうつがい状（ヒンジフラクチャー）, O はアーチ状（ウートラパッセ）を示す。
8. 母岩番号 石材の種類と、母岩分類については本文に記したとおりである

第7表 グリッド出土 石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物 No.	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面形状	打角	打面	頭部	背面構成							調整角°	刃部角°	先端角°	調整部位	折面部位	末端	母岩番号	備考				
												C	J	H	T	R	L	D	V											
1	8C-10	1	ナイフ形石器	38.9	16.7	9.4	6.8													71	54	47		B	流紋岩					
2	不明	不明	有舌尖頭器	56.8	15.7	4.2	4.0																	HB	安山岩A					
3	8B	6	石核	85.2	46.1	17.1	54.1																			安山岩				
4	5F	18	石核?	49.2	38.4	13.5	35.0																			砂岩				
5	7G	1	剥片	33.8	37.5	15.4	29.3	C	100			○														O	チャート			
6	SI-058	1	剥片	28.8	38.4	7.2	9.3	L						1												F	ホルンフェルス			
7	SI-064	1	剥片	22.2	37.1	17.8	4.1	H	125					1	1	1	1									F	安山岩A			
8	SI-058	1	剥片	22.2	38.1	13.9	7.6	C	81					1	1			1								F	緑色凝灰岩			
9	SI-064	1	剥片	20.5	30.4	7.6	4.5	H	121					4	1	1	1									F	ホルンフェルス			
10	SI-064	1	剥片	25.9	19.2	4.7	1.5	P						5	1											F	珪質頁岩			
11	SI-064	1	剥片	29.7	43.7	10.4	9.8	H	100					1	1	1										F	安山岩A			
12	6E-22	2	石鏃	31.3	22.8	4.2	3.0																					頁岩		
13	1トレンチ	20	石鏃	24.8	17.3	3.9	1.4																					黒曜石		
14	6H	25	石鏃	25.7	18.5	2.9	1.0																					チャート		
15	6G	175	石鏃	28.7	17.1	3.5	1.2																		B	チャート				
16	6G	28	石鏃	22.7	24.8	0.5	2.4																			HR	珪質頁岩			
17	SI-043	1	原石?	76.6	50.3	26.7	120.9																					安山岩		
	2M-00	1a	原石	37.6	27.1	12.9	19.7																					チャート	第II a文化層?	
	2M-00	1b	原石	27.8	17.1	8.1	5.8																					砂岩	第II a文化層?	
	2M-00	1c	原石	22.7	17.5	10.1	5.5																					チャート	第II a文化層?	
	2M-00	1d	原石	24.2	16.2	10.0	5.4																					チャート	第II a文化層?	
	2M-00	1e	原石	21.5	18.8	9.4	5.7																					チャート	第II a文化層?	
	2M-00	1f	原石	22.4	14.6	8.4	4.3																					チャート	第II a文化層?	
	2M-00	1g	原石S	19.8	16.5	8.5	4.0																					チャート	第II a文化層?	
	2M-00	1h	原石S	20.9	16.2	6.4	2.9																						流紋岩	第II a文化層?
	2M-00	1j	原石S	19.8	13.6	8.4	3.3																					チャート	第II a文化層?	
	2M-00	1j	原石S	16.5	15.4	5.2	2.0																						流紋岩	第II a文化層?
	2M-00	1k	原石S	15.1	14.3	8.8	2.7																					チャート	第II a文化層?	
	2M-00	1l	原石S	15.5	13.5	10.4	2.5																					チャート	第II a文化層?	
	2M-00	1m	原石S	16.1	13.9	9.1	2.7																					チャート	第II a文化層?	
	2N-00	1a	原石	30.5	30.2	12.3	16.6																					チャート	第II a文化層?	
	2N-00	1b	原石	31.3	27.8	18.9	22.1																					チャート	第II a文化層?	
	2N-00	1c	原石	27.9	24.8	12.6	12.7																						砂岩	第II a文化層?
	2N-00	1d	原石	28.7	20.7	8.0	6.8																						流紋岩	第II a文化層?
	2N-00	1e	原石	24.8	20.3	12.4	8.3																					チャート	第II a文化層?	
	2N-00	1f	原石	22.5	16.4	5.7	2.3																						流紋岩	第II a文化層?
	2N-00	1g	原石	20.2	15.3	11.5	4.3																						チャート	第II a文化層?
	8C-21	1	礫	38.8	21.4	11.2	11.1																						流紋岩	破損、表面赤化
	SI-002	5	原石	42.4	29.8	15.3	29.0																					チャート		
	SI-009	34	原石	48.4	36.5	21.4	6.0																					チャート		
	SI-074	6	原石	95.6	72.4	25.3	30.0																						流紋岩	

## 第3章 縄文時代

### 第1節 遺構と遺物

縄文時代は炉穴・陥穴が検出されただけで、他の遺構は認められなかった。また、早期を中心に土器を掲載しているが、遺物包含層が形成されることはなく、他の時代の遺構から出土した土器片である。

#### 1 炉 穴

##### SK-008号土坑 (第79図)

C8-75グリッドに所在する。平面形は不整形で、規模は長軸長1.58m、短軸長0.78m、深さ3cmである。長軸方位はN-87°-Wである。覆土中に焼土を含み、形態から炉穴と考えられるが、遺物の出土がなく時期決定は困難である。

#### 2 陥 穴

##### SK-016号土坑 (第79図, 図版12)

G6-85グリッドに所在し、東側台地の西縁辺に位置する。確認面での平面形は楕円形で、規模は長軸長2.00m、短軸長1.42m、深さ2.9mである。底面も楕円形で、0.82m×0.50mを測る。長軸方位はN-10°-Wで、斜面と平行である。覆土は全体にローム粒を多く含む。

##### SK-018号土坑 (第79図, 図版12)

G6-32グリッドに所在し、東側台地の西縁辺に位置する。平面形は長楕円形で、規模は長軸長3.26m、短軸長1.00m、深さ1.31mである。底面は幅0.1m程度で、両端がオーバーハングしている。長軸方位はN-48°-Eで、斜面に直交する。覆土は底面に壁の崩落土と思われるロームが堆積している。

##### SK-022号土坑 (第79図, 図版12)

E5-15グリッドに所在し、遺跡中央で北へ向けて開く浅い谷の中に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸長1.99m、短軸長1.33m、深さ3.07mである。底面は不正な楕円形で、幅は0.76mを測る。長軸方位はN-78°-Eで、斜面に対して直交している。覆土は細かく分層することが可能で、全体にローム粒・ロームブロックを含んでいる。

##### SK-029号土坑 (第79図, 図版12)

F6-89グリッドに所在し、遺跡中央で北へ向けて開く浅い谷の中に位置する。平面形は長楕円形で、確認面での規模は長軸長2.91m、短軸長0.72m、深さ1.08mである。底面の幅は0.15mで、南西端部がやや緩やかに立ちあがる。長軸方位はN-64°-Wで、斜面に対して平行である。

##### SK-052号土坑 (第79図, 図版12)

D8-54グリッドに所在し、SI-055号の床面除去後に検出した。平面形は不整な長楕円形で、規模は長軸長2.47m、短軸長0.44m、深さ0.88mである。深さはSI-055号の深さを加味すれば1.2m以上あった

ことは確実である。底面は細く、幅0.2m前後で、西側端部がオーバーハングする。長軸方位はN-72°-Eである。

**SK-062号土坑 (第79図)**

O2-00グリッドに所在し、東側台地の北東縁辺部にあたる。以下SK-088号まで17基の陥穴が斜面に沿って位置している。平面形は楕円形で、規模は長軸長2.26m、短軸長1.35m、深さ2.38mで、西側端部が大きくオーバーハングする。長軸方位はN-87°-Eで、斜面に対して直交する。

**SK-063号土坑 (第79図)**

N2-04グリッドに所在し、東側台地の北東縁辺部にあたる。平面形は長楕円形で、規模は長軸長2.53m、短軸長0.64m、深さ1.13mである。底面は細く、幅0.12mを測り、両端部が僅かにオーバーハングする。長軸方位はN-24°-Eで、斜面に対して直交する。

**SK-064号土坑 (第79図)**

N2-00グリッドに所在し、東側台地の北東縁辺部にあたる。平面形は不整な長楕円形で、規模は長軸長2.16m、短軸長0.73m、深さ1.36mである。底面は細く、幅0.1m程度で、両端部が僅かにオーバーハングする。長軸方位はN-30°-Eで、斜面に対して直交する。

**SK-065号土坑 (第79図)**

N1-09グリッドに所在し、東側台地の北東縁辺部にあたる。平面形は長楕円形で、規模は長軸長2.29m、短軸長0.52m、深さ1.41mである。底面は細く、幅0.10mを測り、両端部がオーバーハングする。長軸方位はN-22°-Eで、斜面に対して直交する。

**SK-066号土坑 (第80図)**

M1-90グリッドに所在し、東側台地の北東縁辺部にあたる。平面形は長楕円形で、規模は長軸長2.61m、短軸長0.81m、深さ1.91mである。長軸方位はN-69°-Wで、斜面と平行である。

**SK-072号土坑 (第80図)**

M1-94グリッドに所在し、東側台地の北東縁辺部にあたる。平面形は長楕円形で、規模は長軸長2.58m、短軸長0.83m、深さ1.44mである。底面は細く、幅0.13mを測る。長軸方位はN-24°-Eで、斜面に対して直交する。覆土は全体にロームブロックを多く含んでいる。

**SK-077号土坑 (第80図)**

L2-27グリッドに所在し、東側台地の北東縁辺部にあたる。平面形は楕円形で、規模は長軸長1.73m、短軸長2.53m、深さ1.93mである。長軸方位はN-83°-Wで、斜面に対して平行である。覆土は中層以下にロームを多く含んでいる

#### SK-079号土坑 (第80図)

N2-14グリッドに所在し、東側台地の北東縁辺部にあたる。平面形は楕円形で、規模は長軸長2.24m、短軸長0.86m、深さ1.60mである。底面は幅0.37mを測り、端部がオーバーハングする。長軸方位はN-5°-Eで、斜面に対して直交する。覆土はローム粒を多く含む。

#### SK-080号土坑 (第80図)

N2-25グリッドに所在し、東側台地の北東縁辺部にあたる。平面形は長楕円形で、規模は長軸長2.30m、短軸長0.70m、深さ1.39mである。底面は細く、幅0.20mを測り、端部がオーバーハングする。長軸方位はN-47°-Eで、斜面に対して直交する。

#### SK-081号土坑 (第80図)

O2-40グリッドに所在し、東側台地の北東縁辺部にあたる。平面形は長楕円形で、規模は長軸長2.68m、短軸長0.50m、深さ1.03mである。底面は細く、幅0.10mで、北から南へ向かって深くなり、その差は0.4mに達する。長軸方位はN-26°-Eで、斜面に対して直交する。

#### SK-082号土坑 (第80図)

O2-42グリッドに所在し、東側台地の北東縁辺部にあたる。平面形は長楕円形で、規模は長軸長2.60m、短軸長0.53m、深さ1.24mである。底面は細く、幅0.18mを測り、端部がオーバーハングする。底面は北から南へ向かって徐々に深くなっており、その差は0.3mに達する。長軸方位はN-20°-Eで、斜面に対して直交する。

#### SK-083号土坑 (第80図)

M1-97グリッドに所在し、東側台地の北東縁辺部にあたる。また、SK-084と平行して並んでいる。平面形は長楕円形で、規模は長軸長2.53m、短軸長0.42m、深さ1.34mである。底面は細く、幅0.30mを測り、端部がオーバーハングする。長軸方位はN-17°-Eで、斜面に対して直交する。

#### SK-084号土坑 (第80図)

M1-96グリッドに所在し、SK-083号の西側に平行して並んでいる。平面形は長楕円形で、規模は長軸長2.22m、短軸長0.44m、深さ0.74mである。底面は細く幅0.10mを測り、北から南へ向かって深くなり、その差は0.3mに達する。長軸方位はN-14°-Eで、斜面に対して直交する。

#### SK-085号土坑 (第80図)

M1-83グリッドに所在し、東側台地の北東縁辺部にあたる。平面形は長楕円形で、規模は長軸長2.13m、短軸長0.38m、深さ1.37mである。底面は細く、幅0.12mを測る。長軸方位はN-23°-Eで、斜面に対して直交する。

### SK-086号土坑 (第80図)

M1-72グリッドに所在し、東側台地の北東縁辺部にあたる。平面形は長楕円形で、規模は長軸長2.03m、短軸長0.18m、深さ0.13mで、底面だけが残っている。長軸方位はN-34°-Eで、斜面に対して直交する。

### SK-087号土坑 (第80図)

L1-59グリッドに所在し、東側台地の北東縁辺部にあたる。平面形は長楕円形で、規模は長軸長1.15m、短軸長0.14m、深さ0.06mで、底面だけが残っている。長軸方位はN-52°-Eで、斜面に対して直交する。

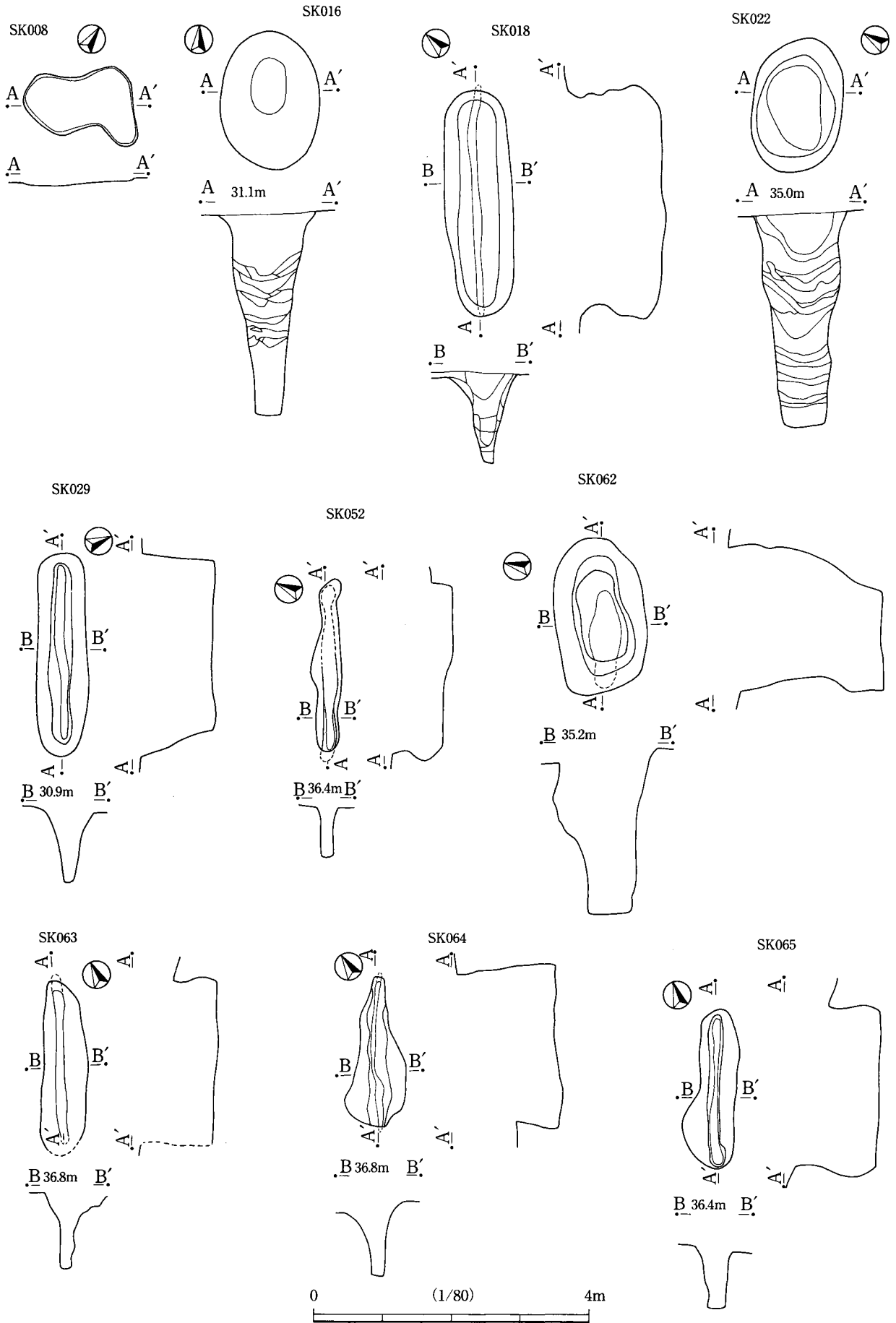
### SK-088号土坑 (第80図)

L1-38グリッドに所在し、東側台地の北東縁辺部にあたる。平面形は楕円形と想定され、北東端部だけが検出できた。この部分の深さは0.63mである。長軸方位はN-52°-Eで、斜面に対して直交する。

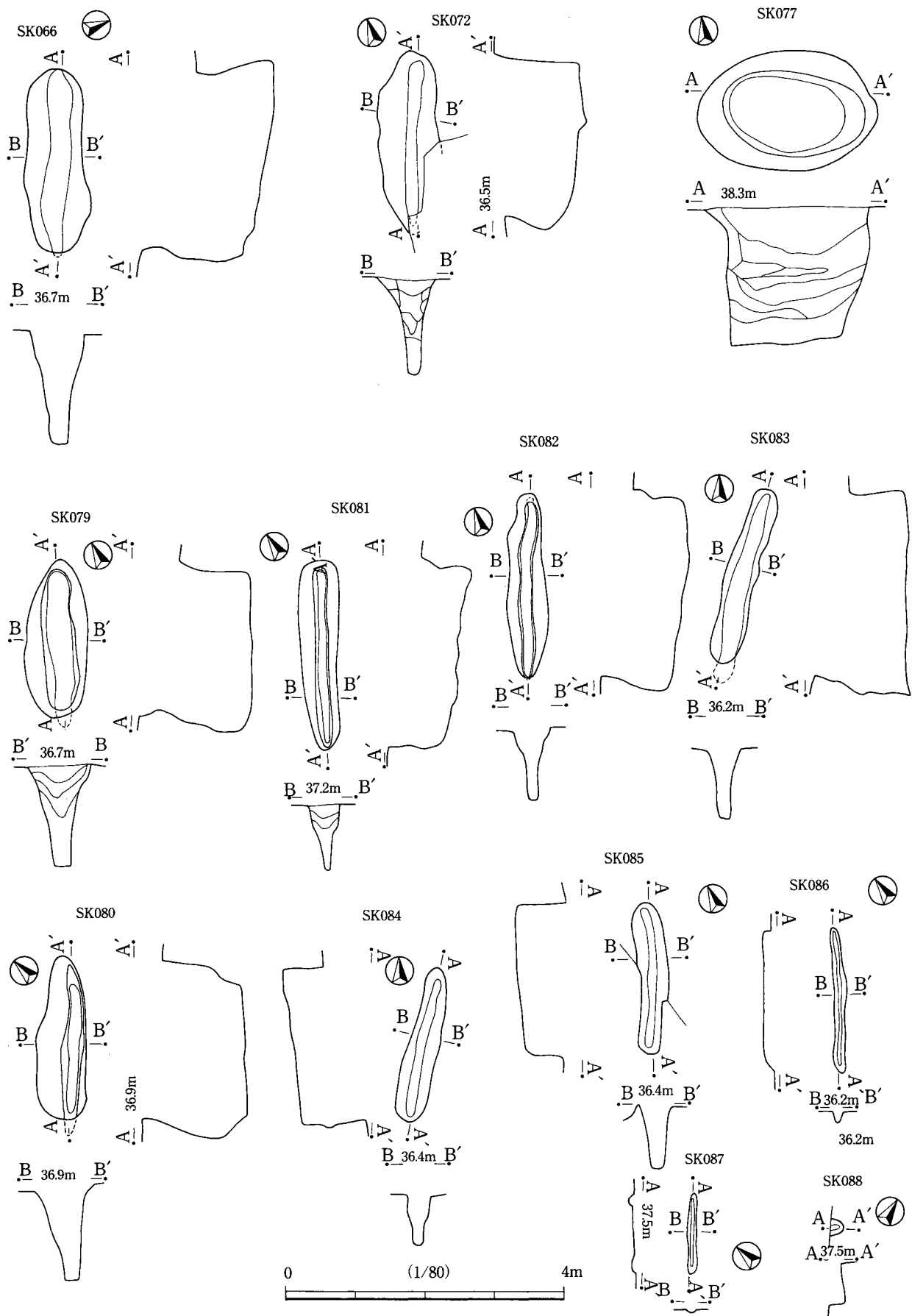
第8表 陥穴観察表

遺構No.	グリッド	長軸方位	形態	規模 (m)	深さ (m)	底面 (m)	備 考
008	C8-75	N-87°-W	不整形	0.66×1.58	0.03	0.68×1.50	
016	G6-85	N-10°-W	楕円形	2.00×1.42	2.90	0.80×0.50	
018	G6-32	N-48°-E	長楕円形	3.26×1.00	1.31	2.99×0.56	
022	E5-15	N-78°-E	楕円形	1.99×1.33	3.07	1.23×0.70	
029	F6-89	N-64°-W	長楕円形	2.91×0.72	1.08	2.50×0.14	
052	D8-54	N-72°-E	不整形	2.47×0.44	0.88	2.53?×0.20	SI-055床面除去後に検出
062	O2-00	N-87°-E	楕円形	2.26×1.35	2.38	1.39?×0.48	
063	N2-04	N-24°-E	長楕円形	2.53×0.64	1.13	2.45?×0.13	
064	N2-00	N-30°-E	不整形	2.16×0.73	1.36	2.32×0.04	
065	N1-09	N-22°-E	長楕円形	2.29×0.52	1.41	2.14×0.06	
066	M1-90	N-69°-W	長楕円形	2.61×0.81	1.91	2.61×0.32	
072	M1-94	N-24°-E	長楕円形	2.58×0.83	1.44	2.46×0.10	旧石器確認調査中に検出
077	L2-27	N-83°-W	楕円形	1.73×2.53	1.93	1.12×1.64	
079	N2-14	N-5°-E	楕円形	2.24×0.86	1.60	2.19×0.36	
080	N2-25	N-47°-E	長楕円形	2.30×0.70	1.39	1.80×0.25	
081	O2-40	N-26°-E	長楕円形	2.68×0.50	1.03	2.44×0.11	
082	O2-42	N-20°-E	長楕円形	2.60×0.53	1.24	2.47×0.14	
083	M1-97	N-17°-E	長楕円形	2.53×0.42	1.34	2.76×0.26	
084	M1-96	N-14°-E	長楕円形	2.22×0.44	0.74	1.98×0.14	
085	M1-83	N-23°-E	長楕円形	2.13×0.38	1.37	1.98×0.12	
086	M1-72	N-34°-E	長楕円形	2.03×0.18	0.13	1.90×0.03	
087	L1-59	N-52°-E	長楕円形	1.15×0.14	0.06	0.98×0.05	
088	L1-38	N-52°-E	楕円形?		0.63		旧石器確認調査中に検出





第79图 炉穴·陷穴实测图(1)



第80图 陷穴实测图 (2)

### 3 土器 (第81, 82図, 図版99, 100)

遺物包含層は形成されておらず、少量が主に堅穴住居跡の覆土を中心に出土した。出土土器は図示したように若干前期の土器が混じるが、ほぼ撚糸文系土器の単独出土といえる。

1は外面全面に細い撚り戻しの無節縄文(L)が横位に施されており、口縁上端には連続の円形刺突文がみられる。この刺突は径3mmで、深く刺突され、内面が突瘤状になる。一部貫通するものもみられる。外反せず、直線的な口縁で、内面の調整は平滑にされず、凹凸がある。胎土は微細砂を多く含むものである。

2・3は口唇に2段施文のものである。

2は口縁横縄文の横位文様帯を持つ。口唇は押圧縄文と斜縄文の2段施文である。口縁上端で外反し、指頭痕がある。3は口縁直下から縦縄文が施される。口唇は斜縄文が2段施文されている。口縁上端に指頭痕が有る。

4~13 口唇1段施文で、口縁直下から縄文が施される。縄文原体はRLのものである。器形は端部で外方へ屈曲するものが多い。

4は胴部を欠く。5は口縁上端に無文部がある。6は指頭痕があり、指で口縁端部を外方に曲げたことが明瞭にわかる。

7は小形のもので、斜縄文がみられる。

8・9は同一個体で口唇下の施文が浅く、無文帯のようになる。

10・11は外方へ肥厚する。11は条が斜傾している。

12は口唇に斜縄文、口縁下に方向を変えてまばらな斜縄文がみられる。

13は口唇に縦縄文、屈曲部の無文帯を挟んで、胴部にも縦縄文が施文されている。

14~16 口縁直下から縦縄文が施される。口唇は無施文である。

14はRL施文で、口唇部の残りが少ないので、口唇施文があるのかもしれない。

15はわずかに外反する口縁で、口唇に向けて薄くなる。口唇は角頭である。無節Rの原体が使われ、条がやや斜傾し、かつ条方向が口縁と胴部で異にしている。

16は口唇円頭で肥厚する。縄文はRLで節が太い。

17 無節Rの縄により、口縁斜縄文の横位文様帯、胴部縦縄文が施されている。

18はRL斜縄文の横方向施文がみられる。19~43はRL縦縄文の胴部である。44・45は底部近のもので44は斜縄文施文と思われる。

46~48 Rの撚糸文がみられるもので、46は撚りが密で太く、47・48は細かいものである。

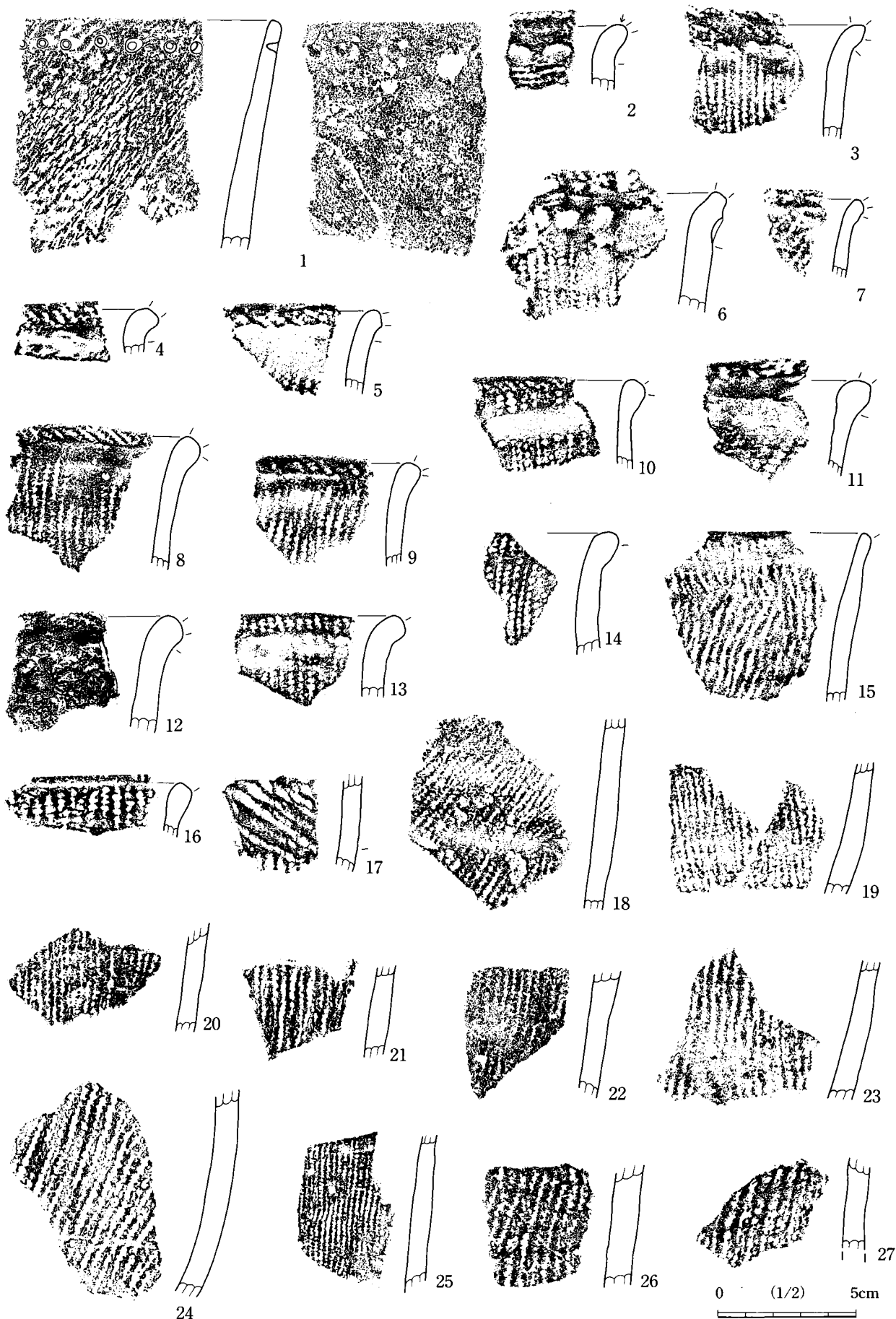
49 撚糸文施文と思われるが、条の中の撚りが明瞭に見えず、条線文的なものである。絡条体条痕文とも異なる。

50 無文のもので、外反せず肥厚しており、口唇円頭で、夏島式土器のものであろう。

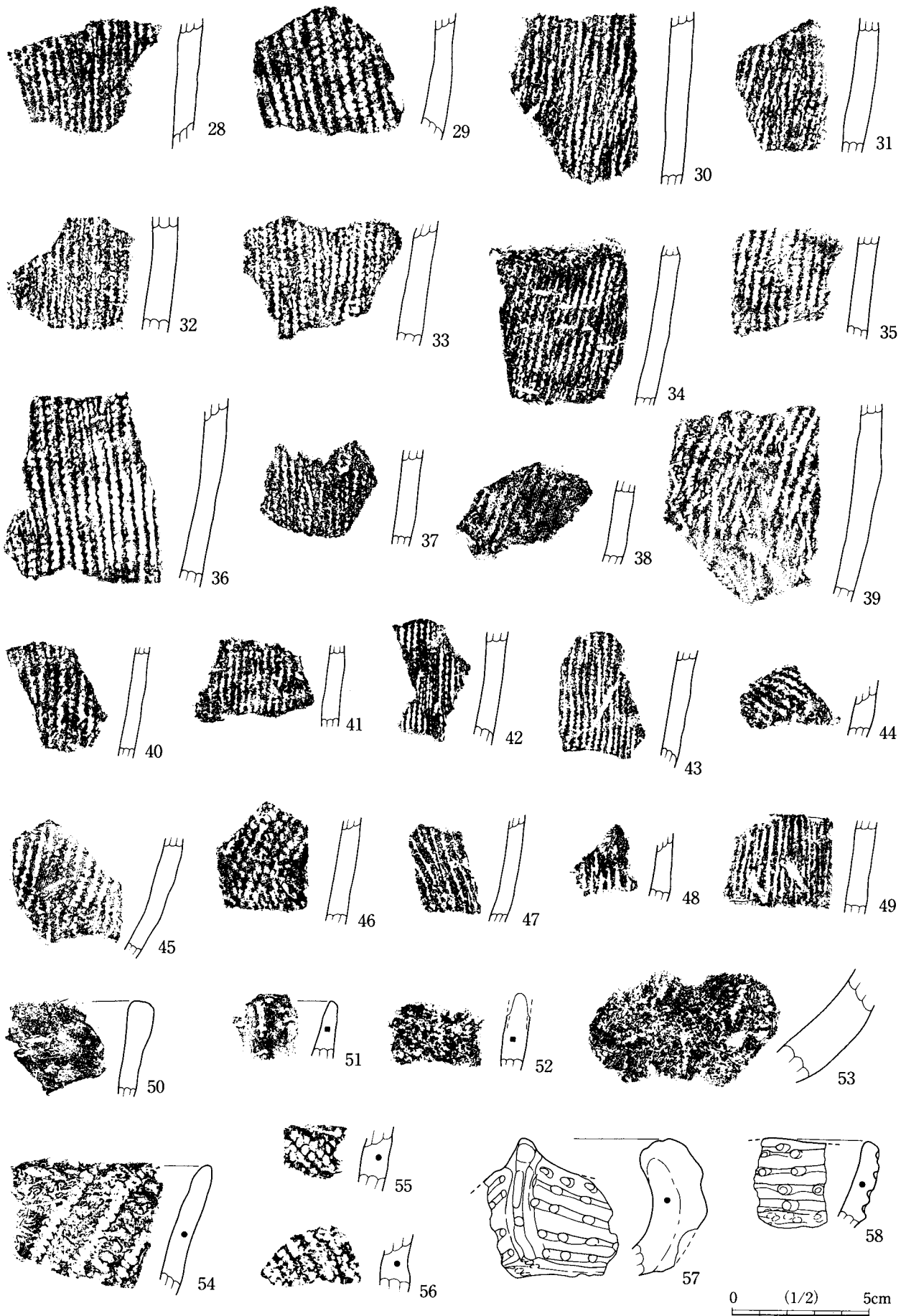
51・52 無文、白色礫を胎土に混える。51は角頭になる口唇で、内面は磨かれている。小破片なので外面は縦ナデか、浅い沈線が縦に入るようにもみえる。52は擬口縁状をしている。

53 無文丸底の底部の一部とみられる。二次焼成のためか、内面に剥落が多い。

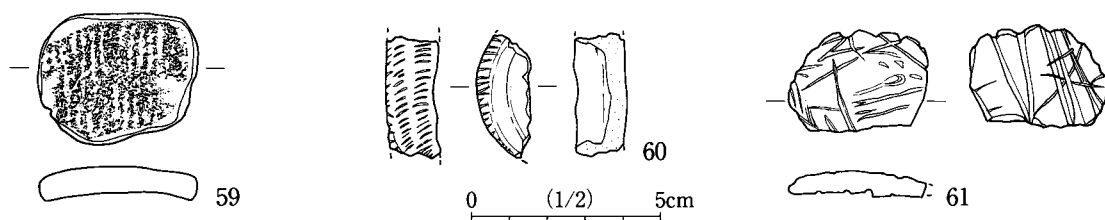
前期繊維土器



第81図 縄文土器拓影図 (1)



第82图 绳文土器拓影图 (2)



第83図 土製品実測図

54～56 斜縄文土器。

54は円頭の口唇，粗いLR斜縄文をもつ。内面平滑。55・56はRLのもので同一個体。

57・58 波状口縁。連続刺突が沈線に添えられて，押し引きながら刺突したもの。波頂部から垂下する隆帯と，頸部に隆帯を持つ。頸部以下には斜縄文がみられる。内面は平滑になでられている。55・56とは出土した箇所が同じで，同一のものかもしれない。

#### 4 土製品（第83図，図版98）

59 4.3cm，3.4cm，厚さ0.7cm，重さ13gである。楕円形をしている。撚糸文系土器の胴部片の周囲が擦られて摩滅している。

60 耳飾か，手づくね的なミニチュアの皿か，紡錘車の可能性が考えられる。細砂を含む胎土である。細かい連続爪形文が外面に施されている。

61 粘土塊 薄く小さい粘土塊で，植物の茎の圧痕が外面にみられ，一部は沈線に見える。

## 第4章 古墳時代～平安時代

### 第1節 概要

古墳時代から平安時代の遺構及び遺物を一括して扱う。全体では竪穴住居跡126軒、掘立柱建物跡21棟が検出された。竪穴住居跡は鬼高期のものが54軒、奈良・平安時代のものが69軒で、奈良・平安時代に属する竪穴住居跡が幾分多い。また、他の遺構との重複により時期を明確にし得なかったものが3軒ある。

このほか、土坑、溝跡が検出されており、ともに中世以降の溝跡及び炭窯が多く存在するが、SD-001号やSK-090など古墳時代及び奈良・平安時代の遺物が多く出土した遺構もある。

竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、土坑の順で報告し、それぞれの最後に遺構観察表を付ける。また、遺物については、それぞれの遺構ごとに土器観察表を付けるが、その他の金属製品・土製品・石製品については、最後にまとめて観察表を付ける。

第9表 古墳時代以降遺構一覧表

遺構	時代	数量	遺構番号	備考
竪穴住居跡	古墳時代	54	5 9 14 16 17 20 21 22 24 39 41 45 47 48 51 54 55 58 60 64 65 66 67 68 69 71 73 74 76 78 80 81 82 83 84 89 95 96 97 100 101 103 104 109 111 116 117 118 119 121 122 125 126 129	
	奈良・平安時代	69	1 2 3 7 8 15 18 19 23 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 40 42 43 44 46 49 50 52 53 55 56 57 59 61 62 63 70 72 75A 75B 77 79 85 86 87 88 90 91 92 93 94 95 98 99 102 105 110 112 113 114 115 119 124 127 128 130	
	時期不明	3	106 120 123	
計		126		
掘立柱建物跡	奈良・平安時代	21	1 2 3 4 5 6 7 9 10 11 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23	
土坑		41	1 2 4 5 6 7 9 13 17 20 21 23 24 25 26 27 28 30 31 33 34 35 37 41A 41B 42 44 50 51 53 54 57 58 59 60 61 69 73 78 89 90	
溝状遺構		8	1 4 5 6 8 9 10 14	

## 第2節 遺構と遺物

### 1 竪穴住居跡

#### SI-001号竪穴住居跡（第84図，図版13，101）

本遺構はC8-80グリッド付近に位置し，西側台地の南西の縁辺部，標高約36.0mに立地する。住居北側でSI-007号竪穴住居跡と重複するが，本遺構の方が新しく，SI-007号の一部を壊して掘り込まれている。形態は方形で，規模は2.8m×2.6mを測る。主軸方位はN-87°-Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がっており，確認面からの深さは42cm～61cmを測る。住居のほぼ中央に深さ30cmのピットが検出されたが，これはSI-007号の南東側の支柱穴である。本遺構からは支柱穴は検出されていない。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体で，床面付近には焼土と炭化物を含む褐色土が観察されている。

カマドは西側の壁面のほぼ中央に位置する。最大幅は100cmを測り，袖部は壁から45cm延びている。煙道部の掘り込みは確認されなかった。カマドの奥壁部分にロームを多く含む黄褐色土が検出されている。この部分はSI-007号の覆土に当たるため，補強を施したと判断できる。カマドの焚き口付近からは甕の胴部が検出されている。

遺物はカマドが位置する住居西側から多く出土している。北壁際の中央よりやや西へ寄った位置からは須恵器坏2点(1)(2)，土師器坏1点(3)が重ねられた状態で出土している。また，カマド焚き口部から土師器甕(18)の胴部以下が出土した。

1～2は須恵器坏である。分量はほぼ同じで，完形である。体部下端はともに手持ちヘラ削り，底部は一方のヘラ削りである。色調は褐色ないし黒褐色である。3・9は土師器坏である。3は完形で，体部外面はヘラ削り，内面はヘラ磨きが施されるが，器面の遺存状況が悪く，不鮮明である。外面は円形に炭素が吸着している。9は破片である。平底となる坏で，体部内面はヘラ磨き，口唇部だけヨコナデを施している。

4・6～8・10～12はロクロ土師器坏である。8・10は底部を欠損するが，11・12は回転糸切り後，回転ヘラ削りを施す。4・6・7は一方のヘラ削りである。なお，12の底部外面には数文字の墨書があり，右側は「□佛」，左側は1文字ではない可能性もある「成」に近い字形であるが不明である。

5・13・14は土師器皿である。5は無高台で，体部下端及び底部全面は回転ヘラ削り。13・14は高台付きの皿で，14は高台が剥落している。器面の状況は悪いがともに内面は丁寧なヘラ磨きを施している。

15・16は鉄鉢形の鉢で，15は体部外面を横方向のヘラ削り，内面に粗いヘラ磨きを施している。

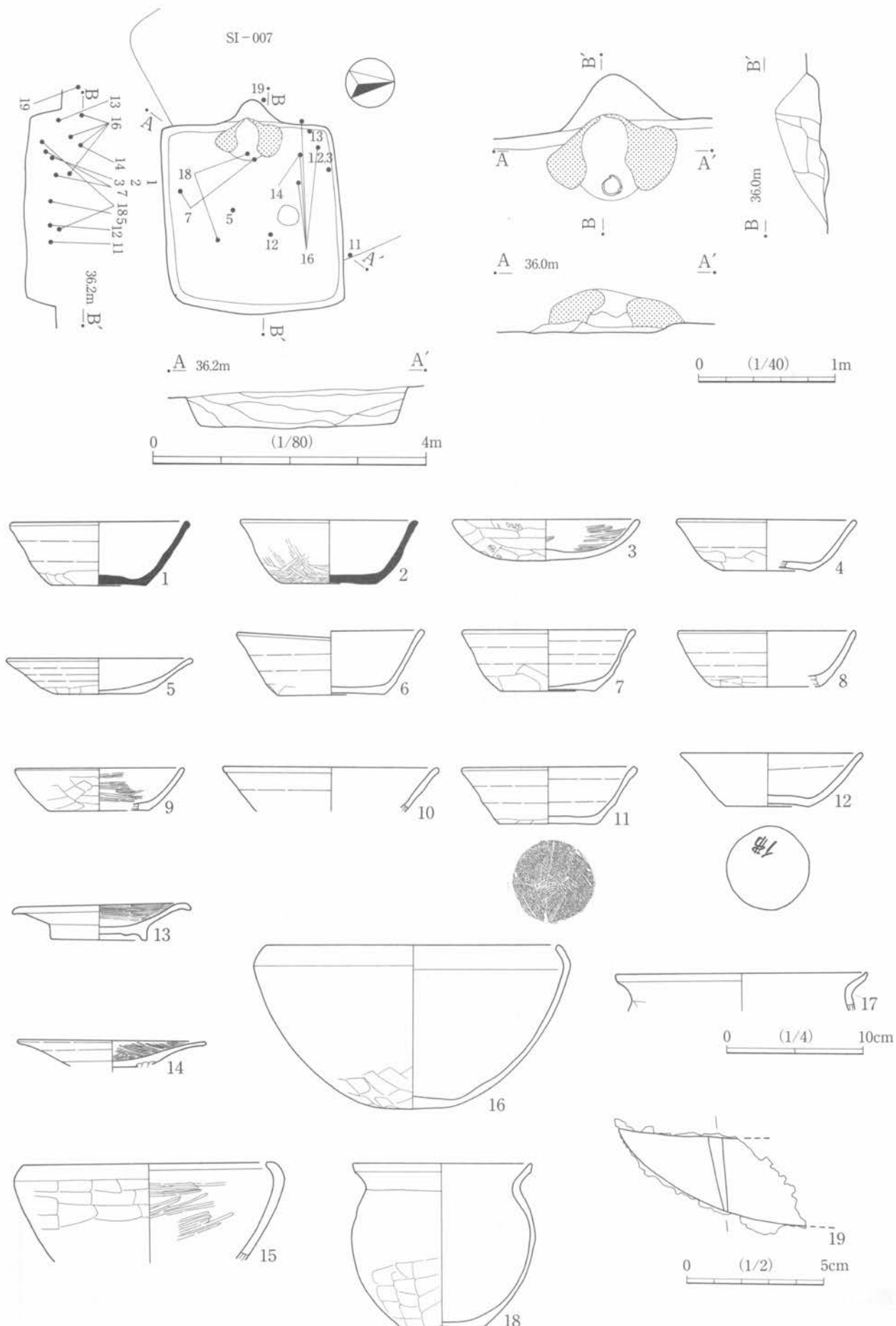
17・18は土師器甕で，18はほとんどの部分がカマドから出土した。器面の遺存が悪く調整は不鮮明であるが，胴部下半に横方向のヘラ削りが観察できる。

19は鉄製鎌である。

#### SI-002号竪穴住居跡（第85，86図，図版13，14，101）

本遺構はB10-08グリッド付近に位置し，西側台地の南西の緩斜面，標高約33.0mに立地する。形態は方形で，規模は2.8m×2.9mを測る。主軸方位はN-7°-Wである。住居の掘込みは明確ではなく，確認面からの深さは，カマド付近のみ約60cmを測るが，他の部分は20cm以下である。支柱穴は確認されていない。住居北西コーナー部分に貯蔵穴と思われるピットが検出されており，長軸70cm，短軸60cmを測る。深さは5cmと浅い。床面は堅緻に踏み固められており，特に中央部分は硬化している。住居北側壁のカ





第84图 SI-001号实测图

第10表 SI-001号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	13.4	4.7	3.6	完形	白色砂粒(多) 石英、長石、スコリア	内、黒色 外、鈍い黄褐色～黒色	内、炭素吸着(光沢あり) 外、底部～体部1/2炭素吸着	27
2	須恵器 坏	13.5	4.6	7.0	ほぼ完形	白色砂粒(多)、長石	黒色		26
3	土師器 坏	13.8	2.9	6.0	完形	白色粒、黒色粒、スコリア、長石	内、鈍い黄灰色～灰黒色 外、灰黒色～黒色	内、密にミガキ痕有り、若干摩耗 外、ヘラケズリ痕刷毛目状に有り 底部～3/4位炭素吸着有り	25
4	ロクロ土師器 坏	(13.2)	3.7	(6.4)	1/4	白色砂粒、長石(少)、スコリア	橙褐色	若干摩耗	1
5	ロクロ土師器 皿	(13.8)	2.6	6.4	口縁1/8 底部1/2	白色砂粒、小石(1～2mm) 石英、スコリア	暗黄褐色	内外、薄く炭素吸着 底部回転ヘラケズリ	8
6	ロクロ土師器 坏	(13.8)	4.7	7.8	底部完形 体部1/2	白色砂粒(多) 長石(多) 石英	鈍い橙褐色	内外、口縁部炭素吸着有り 内、若干摩耗、口縁正円ではない	1
7	ロクロ土師器 坏	(12.8)	4.5	(7.0)	1/4	白色砂粒(少) 黒色砂粒(多)	黄褐色	内面若干摩耗	1.3.18
8	ロクロ土師器 坏	(13.0)	4.1	(7.6)	1/8	混合物少ない 白色微砂粒	鈍い赤褐色	内、ケール状のスス有り 内外、赤彩か?	1
9	土師器 坏	(12.4)	3.1	(7.2)	1/6	白色砂粒、スコリア、石英	赤褐色	内、ミガキ(単位不明) 若干摩耗	1
10	ロクロ土師器 坏	(15.8)	[3.2]	—	1/4	小石(黒色1mm位) 白色砂粒、スコリア	鈍い褐色	内外、器面摩耗	1.29
11	ロクロ土師器 坏	12.9	4.2	7.3	完形	白色砂粒、長石(多)	鈍い黄褐色～灰黒褐色	内、底部～口縁1/2位スス付着 二次焼成による剥落内外にある 外、底部～口縁1/3位斑状にスス付着 底部回転糸切り(拓本)	24
12	ロクロ土師器 坏	13.4	4.1	3.2	2/3	白色砂粒、長石、石英	鈍い褐色～黒褐色	内、底部～口縁1/3、外、1/4位ケール状にスス付着 内、若干摩耗 底部(外)墨書「口」	23
13	ロクロ土師器 高台付皿	13.0	2.8	7.0	ほぼ完形	白針、白色砂粒(多)、長石、スコリア	明赤褐色	内、ミガキ(単位有り)、体部中央に一本の帯状のスス付着 外、底部回転ヘラケズリ後高台を貼付後強くナデである	20
14	ロクロ土師器 高台付皿	13.9	2.2	—	高台、欠口縁1/2 他完形	白針、白色砂粒(多)、長石、小石(1～3mm)	灰黄褐色～黒色	内、密にミガキ(単位有り)光沢有り、二次焼成による剥落斑状に有り 内面3/4位に炭素吸着 外、底部から1/2位薄目に炭素吸着	1.11
15	土師器 鉢	(19.8)	[7.3]	—	口縁1/6	小石(1～2mm)(各多い)、白色砂粒、長石、石英、スコリア	暗赤褐色	内、ミガキ(光沢有り) 内外、砂粒の流れ痕多く有り	1
16	土師器 鉢	(21.2)	12.1	九	1/5	白色砂粒(多)長石	明褐色～黒色	内外、器面摩耗 内外、炭素吸着して器面ざらついている	1. 10. 11. 12.21
17	土師器 甕	(18.4)	[2.8]	—	口縁1/6	白色砂粒(少)	褐色		1
18	土師器 小型甕	13.2	12.4	6.0	3/4	小石(1～2mm)、白色砂粒(多)、長石、スコリア	内、鈍い黄褐色～灰褐色 外、赤褐色～灰褐色	内外、器面摩耗激しい 薄く炭素吸着	7.28

マド左脇から住居西側壁にかけて深さ4cm～8cmの壁溝が検出された。覆土は上層に炭化物を少量含む暗黄褐色土、下層にはさらに炭化物、焼土を多く含む暗褐色土が堆積している。床面には炭化物が多く検出されている。住居の四隅から中央部に向けて柱状の炭化材が検出されており、放射状に検出された炭化材の一部が、住居の外側からも検出されている。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は105cmを測り、袖部は壁から45cm延び、黄灰色砂質土を主体とする。袖の残りがよく、天井部分も一部残存していた。

カマドには、甕がほぼ2個体分横位置に並んだ状態で検出されている。煙道部の掘込みは壁外に25cm確認された。

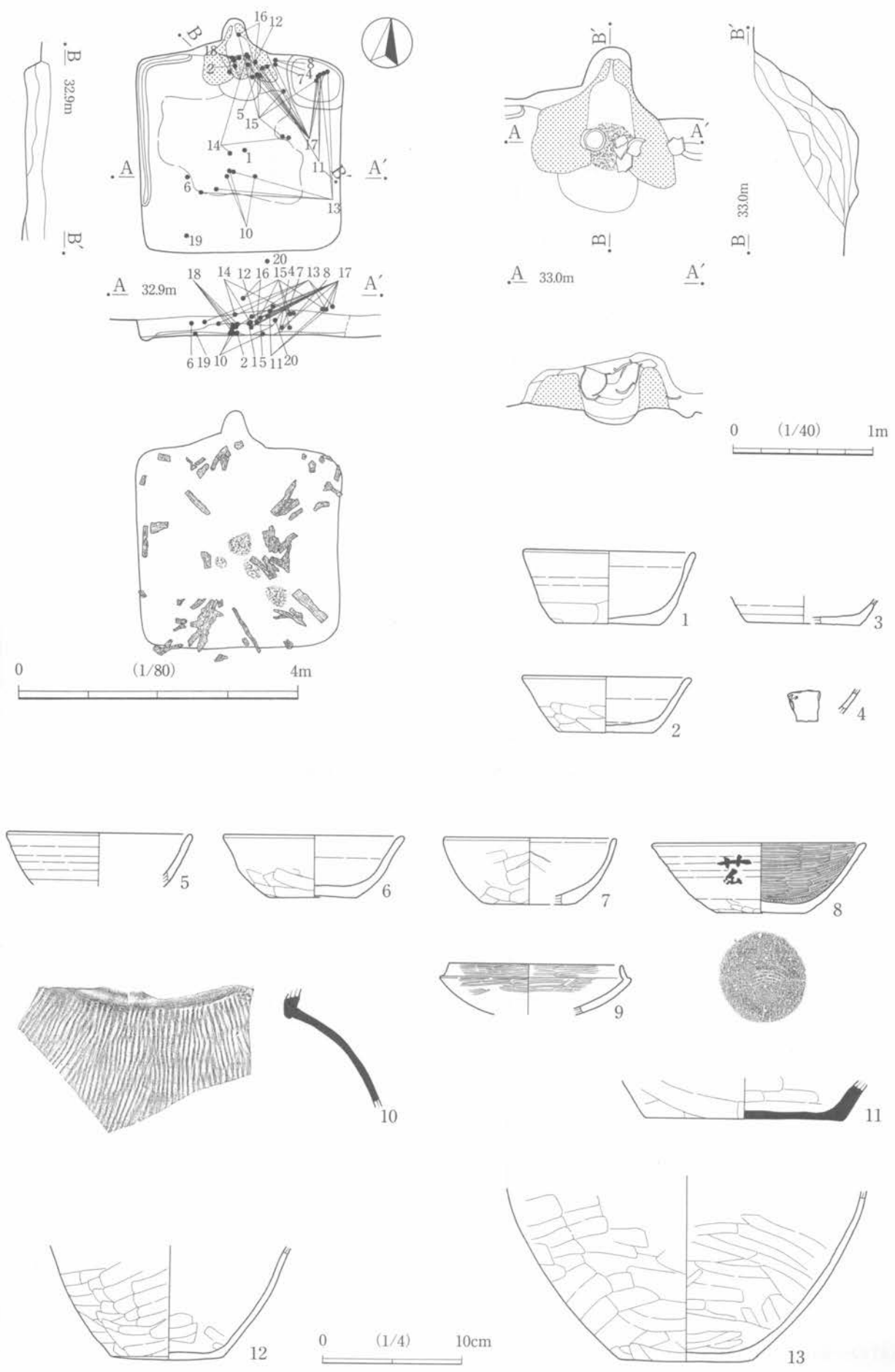
1～6・8はロクロ土師器坏で、1は箱形の器形を残している。1・3は体部下端に回転ヘラ削り、底部全面回転ヘラ削りを施す。2・6・8は体部下端を手持ちヘラ削り、底部は全面一方向のヘラ削りである。8は内面黒色処理され、丁寧に磨かれている。4・8は体部外面に墨書され、4はつくりの一部「予」が、8は草かんむりが視認できる。7は土師器坏で、体部外面のヘラ削りをナデで消している。9は混入品である。

10・11は須恵器甕である。10は他にも同一個体の破片があり、良質の須恵器である。他の破片も含めて、破損部の摩耗はないが、内面の中央がいずれもきわめて平滑になっており、破損後に転用硯として再利用した可能性もある。11は暗褐色を呈する須恵器甕の底部である。12～16は土師器甕である。12・13は底部で、13は径の大きな甕の底部である。遺存部分は底部にいたるまで横方向のヘラ削りを施し、底部外面は一方向のヘラ削りである。14～18はやや受け口状の口縁部で、18はほぼ完形、17は底部を欠損する。17は胴部上半を縦方向、下半に横方向のヘラ削りが施され、ヘラ削り後に粗くヘラナデを施す。

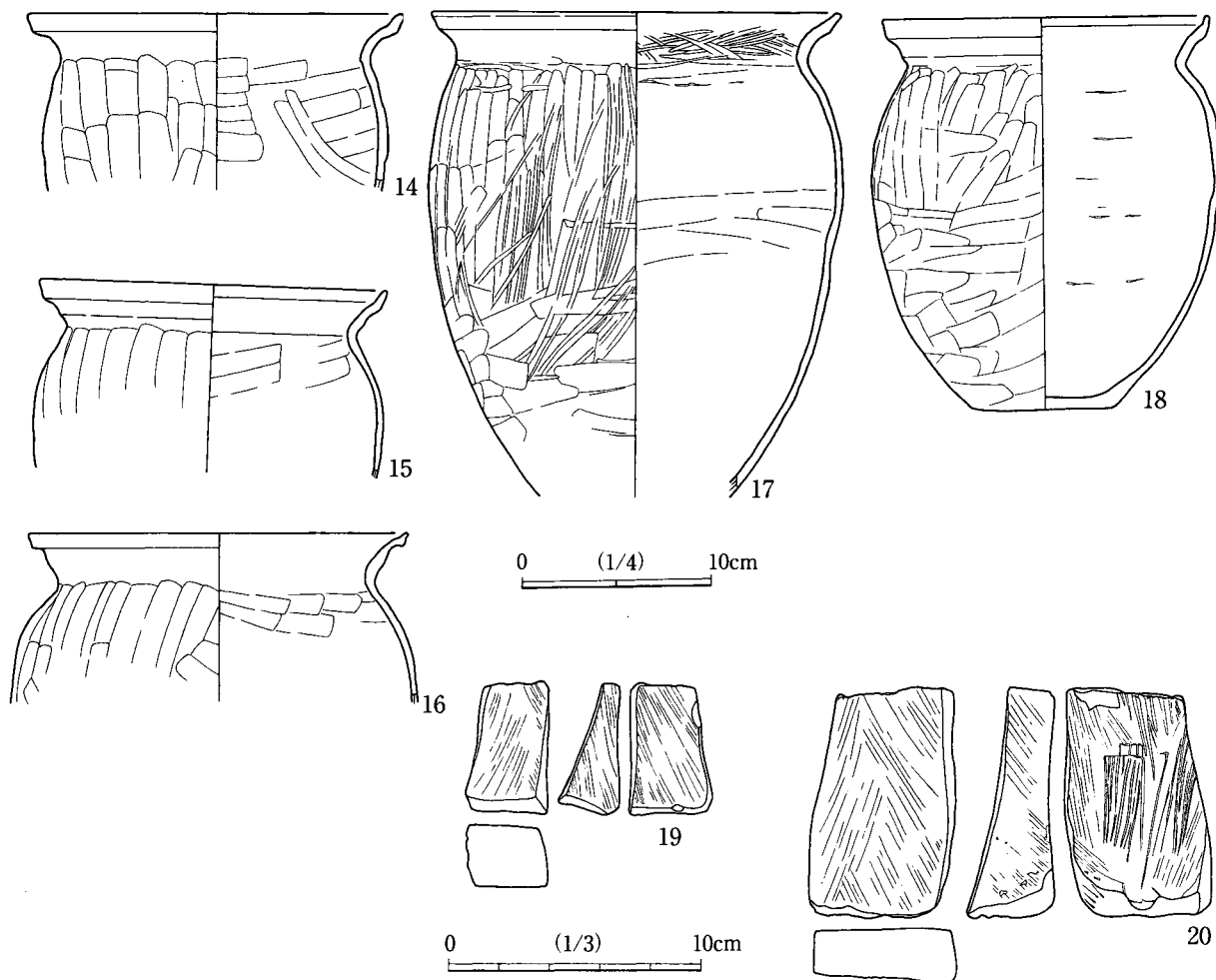
19・20は凝灰岩製の砥石である。20には幅の狭い擦痕が多く付き、最も深いもので3mmを測る。

#### SI-003号竪穴住居跡 (第87図, 図版14, 102)

本遺構はC7-63グリッド付近に位置し、西側台地の南西縁辺部の標高約37.5mに立地する。形態は方形で、規模は1.8m×2.3mを測る。主軸方位はN-53°-Wである。住居の掘り込みは浅く、特に南側のプランは明確ではなかった。検出面からの深さは29cm～37cmであった。主柱穴は確認されていない。壁際には深さ2cm～5cmの壁溝が南側を除いて巡る。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体である。



第85图 SI-002号实测图

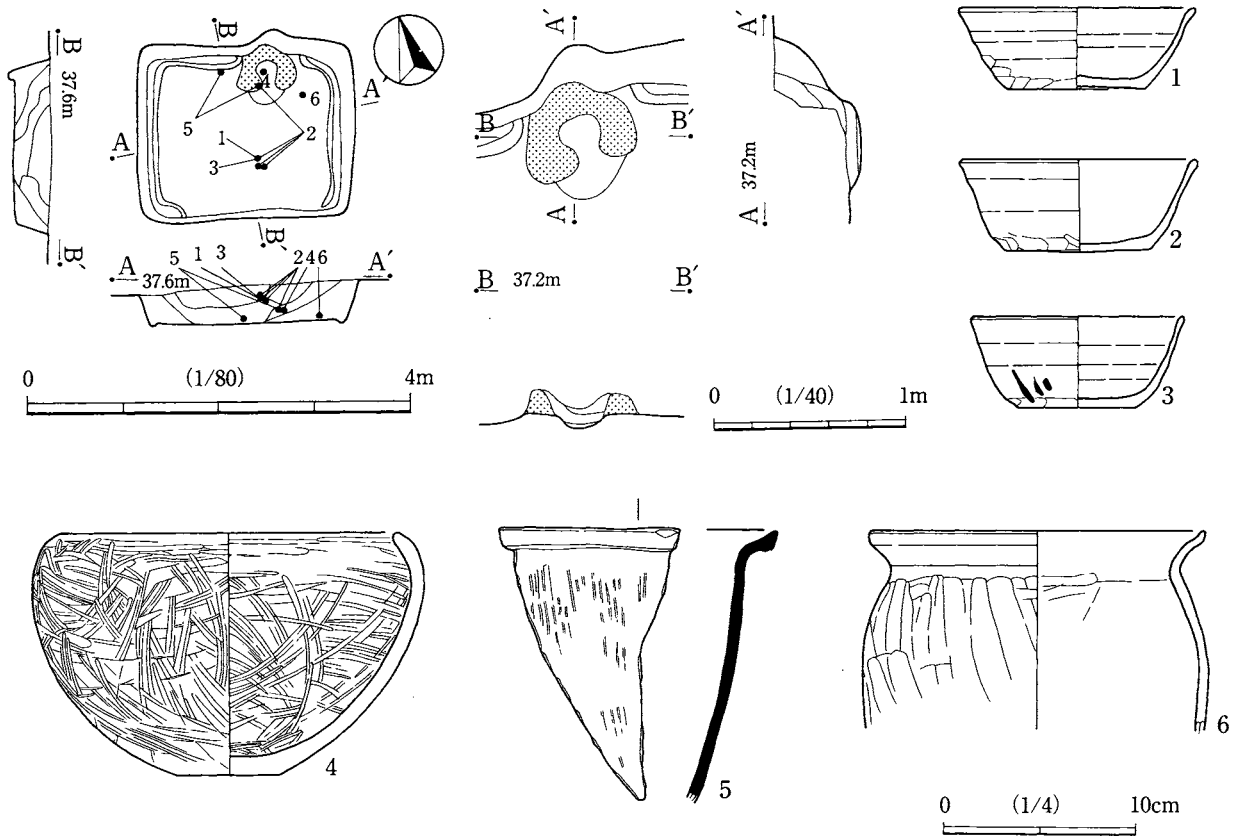


第86図 SI-002号出土遺物実測図

第11表 SI-002号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	ロクロ土師器 坏	(12.3)	5.2	7.5	1/3	白色微砂粒 (少)	鈍い黄褐色	外、底辺部のヘラケズリ強く稜を持つ	6
2	ロクロ土師器 坏	12.1	4.0	6.8	完形	白色微砂粒、石英 (少)	内、鈍い黄褐色 外、鈍い灰褐色	硬質な焼成	37
3	ロクロ土師器 坏	-	[1.9]	(8.0)	底部1/3	白色砂粒、白針	鈍い黄褐色	内、摩耗有り	42
4	土師器 坏	-	-	-	体部片	白色砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色	体部墨書「□」	12
5	ロクロ土師器 坏	(13.4)	[3.8]	-	口縁1/4	白色砂粒、長石、石英	褐色	内、口縁の一部にスス付着	13
6	ロクロ土師器 坏	12.9	4.5	6.2	完形	スコリア、白色砂粒 (多)、長石、石英	内、鈍い黄褐色～黒色 外、鈍い赤褐色～黒色	口縁、帯状にタール状のスス付着	26
7	土師器 坏	(12.4)	3.8	(6.6)	1/7	白針、白色微砂粒、長石、スコリア	鈍い褐色	硬質な焼成	29
8	ロクロ土師器 坏	15.3	5.2	6.3	2/3	白針、白色砂粒 (多)、長石 (少)	内、黒色 外、橙色	外、体部墨書	30
9	土師器 坏	(11.4)	[3.6]	-	1/5	微砂粒	淡黄褐色一部橙赤色	内外、密にミガキ (光沢有り)	41
10	須恵器 甕	-	-	-	胴部片	微砂粒	灰色	内、転用珪の可能性有りか?	23.24.25
11	須恵器 甕	-	[2.9]	(14.0)	底部1/4	長石、石英、スコリア、白色粒 (多)、白針	暗褐色	内外、若干炭素吸着	13.15.16
12	土師器 甕	-	[8.3]	8.0	残存部完形	白色砂粒、長石、スコリア、(各少)	褐色	若干剥落有り	31
13	土師器 甕	-	[12.6]	9.5	残存部2/3	白色砂粒、長石、スコリア	赤褐色～黒褐色	内外、スス付着	16.17.20.21.22
14	土師器 甕	(19.6)	[9.1]	-	残存部1/4	白色砂粒、長石、スコリア	赤褐色～黒褐色	内、ナゲ痕鮮明	2.9.36
15	土師器 甕	(18.2)	[9.7]	-	残存部1/3	白色微砂粒、石英、(各少)	赤褐色～黒褐色	器面光沢有り	10.11.12.16.39.41.42
16	土師器 甕	19.8	[8.7]	-	残存部2/3	白色微砂粒 (少)	鈍い赤褐色～黒褐色	内外、斑状にスス付着	31.39.40
17	土師器 甕	21.5	25.2	-	底部欠他ほぼ完形	白色砂粒、長石、石英 (少)	鈍い橙褐色～黒褐色	内外、2/3位スス付着	12.15.16.17.27.28.29.31.33.36.40.41
18	土師器 甕	17.0	20.4	7.4	ほぼ完形	白色砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色～黒褐色	内、口縁剥落多い	32.34.35.38.40

カマドは北側壁の中央より東側に偏って位置する。最大幅は60cmを測り、袖部は壁から36cm延びている。黄灰色山砂を構築材とする。天井部も掛け口付近まで残存していた。カマドの掛け口付近からは鉢(4)の一部が検出されている。



第87図 SI-003号実測図

1～3はロクロ土師器坏で、体部下端はいずれも手持ちヘラ削りを施し、底部は1が不定方向、2・3は一方向のヘラ削りを施している。3の体部外面には墨書されている。

4は鉄鉢形の鉢で、底部は平底である。内外面とも丁寧に磨かれ、外面は僅かにヘラ削り痕が観察できる。

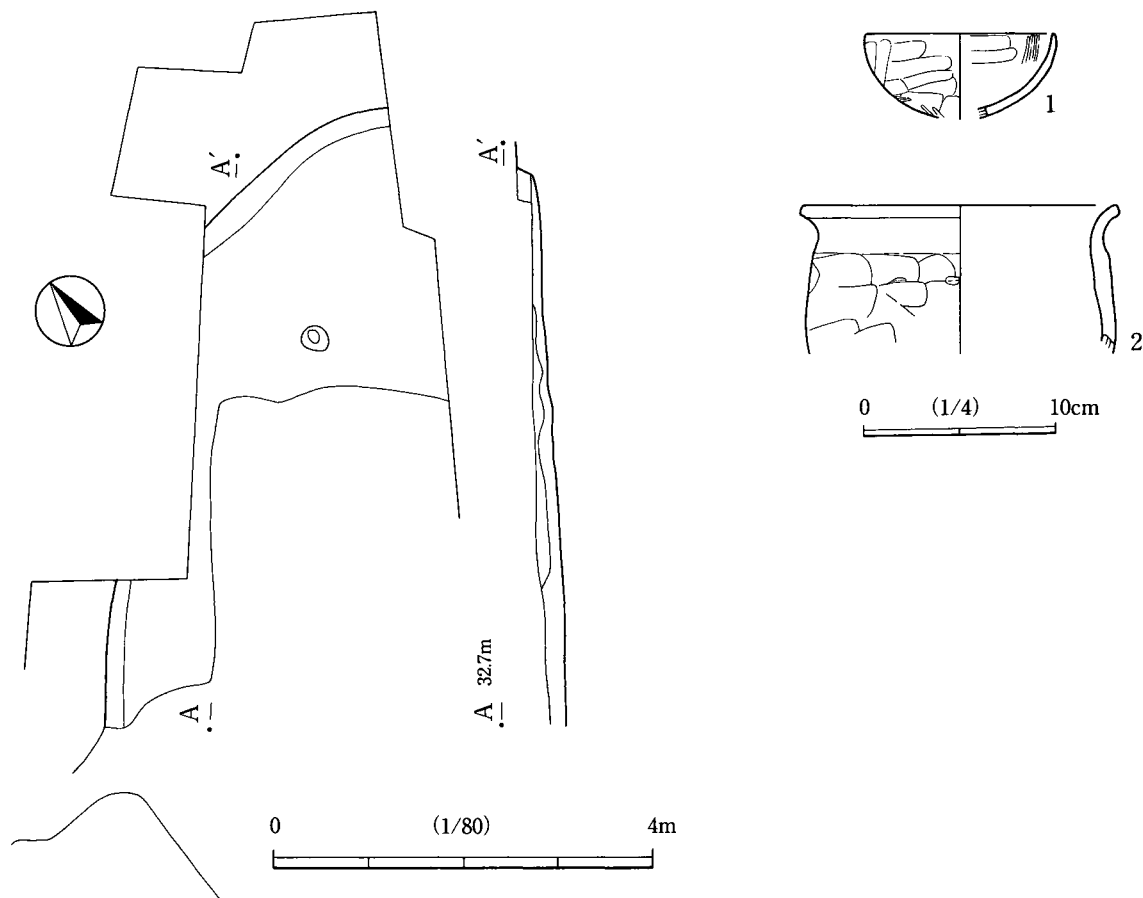
5は須恵器甕で、破片資料である。外面は縦方向の平行叩きがみられ、叩き後にかるくナデている。6は土師器甕で、胴部下半を欠損している。胴部は縦方向のヘラ削りを、ナデで消している。

第12表 SI-003号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	ロクロ土師器 坏	12.4	4.3	7.2	完形	白色砂粒、長石、石英(各多)、スコリア	内、鈍い橙色～暗褐色 外、鈍い黄褐色～暗褐色	内、剥落が多く器面ざらついている	3
2	ロクロ土師器 坏	12.4	4.8	7.6	底部完形 体部1/2	白色砂粒、長石、石英、黒色小石(1mm位)	鈍い黄褐色～暗褐色一部黒色	外、斑状にスス付着	1.2.3.6
3	ロクロ土師器 坏	11.2	4.7	6.2	底部完形 体部1/3	白色砂粒、黒色砂粒、スコリア	鈍い黄褐色	外、体部墨書「三〇」	3.10
4	土師器 鉢	(17.6)	12.7	5.4	口縁1/3 他完形	白色微砂粒、長石(細)、石英(細)	内、鈍い橙色～褐灰色 外、灰黄色～黒褐色	体部中央部に帯状スス付着	5
5	須恵器 甕	-	-	-	破片	白針、白色砂粒、スコリア	灰黄色		8.11
6	土師器 甕	17.5	[10.3]	-	1/3	白色砂粒(多)、長石、石英、スコリア、小石(1mm)	鈍い橙褐色～黒褐色	内外、口縁部スス付着	6.9.10

SI-005号竪穴住居跡 (第88図)

本遺構はC9-81グリッド付近に位置し、台地南西の緩斜面、標高約33.2mに立地する。南側の一部分でSI-002号竪穴住居跡と重複し、この竪穴住居跡を壊して構築したと判断されるが、プランも明確ではなく、形態は長楕円形を呈すると想定される。検出された範囲は長軸長6.5m、短軸長3.7mであるが、全体の規模は不明である。掘り込みは浅く、8cm～9cmを測り、だらだらと立ち上がる。床面は軟弱であり、斜面に沿うように南西方向に緩やかに傾斜する。床面には径約30cm、深さ約20cmを測る小ピットが



第88図 SI-005号実測図

検出された。主柱穴である可能性が考えられる。南側は壁の立ち上がりが検出されず、整地した埋土を床面とする状況が窺える。覆土は黄褐色で地山との判別も困難な状況であった。

1は土師器坏である。器面の遺存状況が悪く、調整は不鮮明であるが、体部は横方向のヘラ削りである。

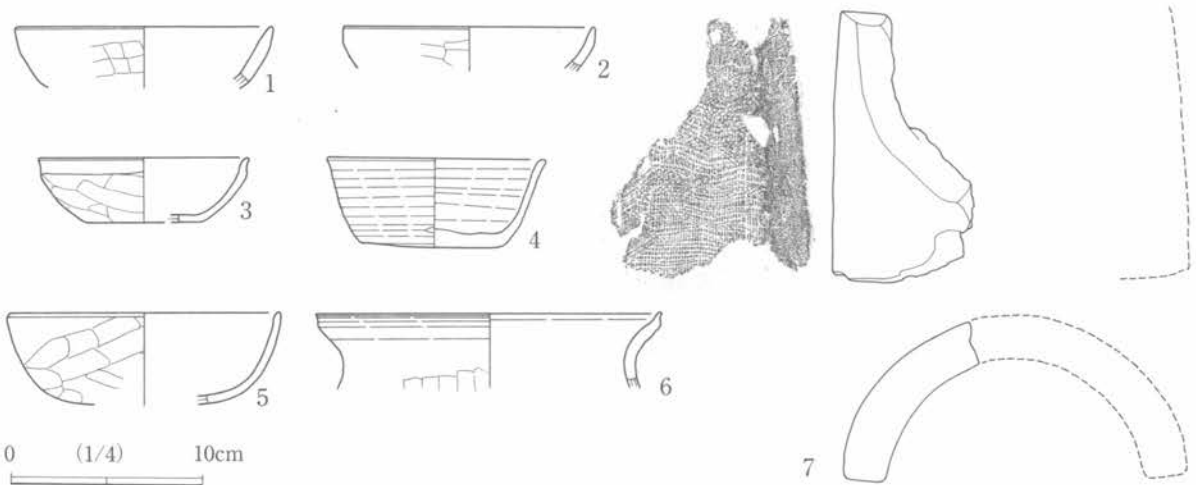
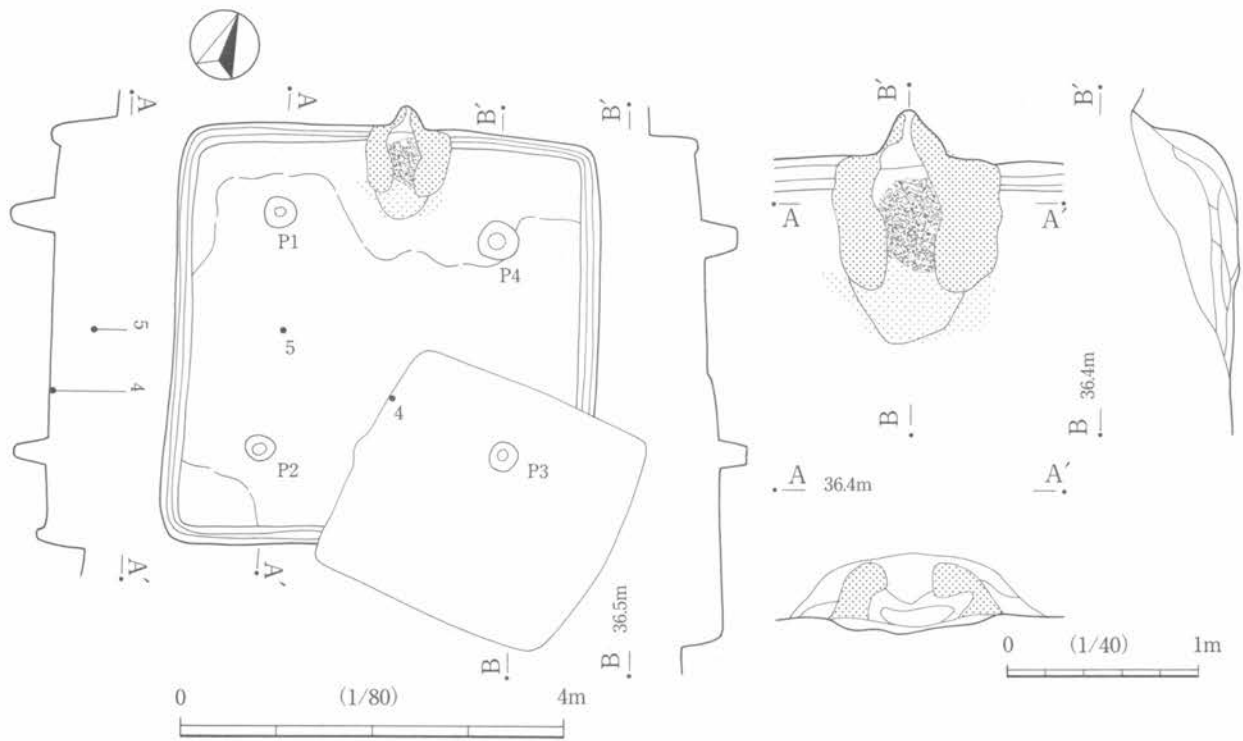
第13表 SI-005号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(10.0)	[4.4]	-	1/4	白色微砂粒、石英、スコリア	橙色	内外、摩耗	2
2	土師器 甕	(16.6)	[7.5]	-	口縁1/3	白色砂粒、長石、石英	赤褐色一部暗褐色	口縁部強く横ナデ	3.5

### SI-007号竪穴住居跡（第89図、図版15）

本遺構はB8-79グリッド付近に位置し、西側台地の南西の縁辺部、標高約36.4mに立地する。南東側でSI-001号竪穴住居跡と重複するが、本遺構の方が時代が遡り、床面に削平を受けている。形態は方形で、規模は4.4m×4.4mを測る。主軸方位はN-20°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしており、50cm～68cmを測る。床面は堅緻に踏み固められており、ほぼ全面が硬化している。主柱穴は対角線上に4基検出され、径25cm～40cmを測る。深さは北西と南東方向の対角線上の1対は約45cmを測り、他方の対角線上の柱穴は約33cmを測る。SI-001号に切られた部分を除いて、壁際には深さ4cm～8cmを測る壁溝が巡る。覆土はローム粒を若干含む褐色土が主体である。

カマドは北西側の壁の中央に位置する。最大幅は90cmを測り、袖部は壁から68cm延びている。黄灰色砂質土を主な構築材とする。カマド内部にはスサの入った粘土塊も検出されており、カマド内面ともに被



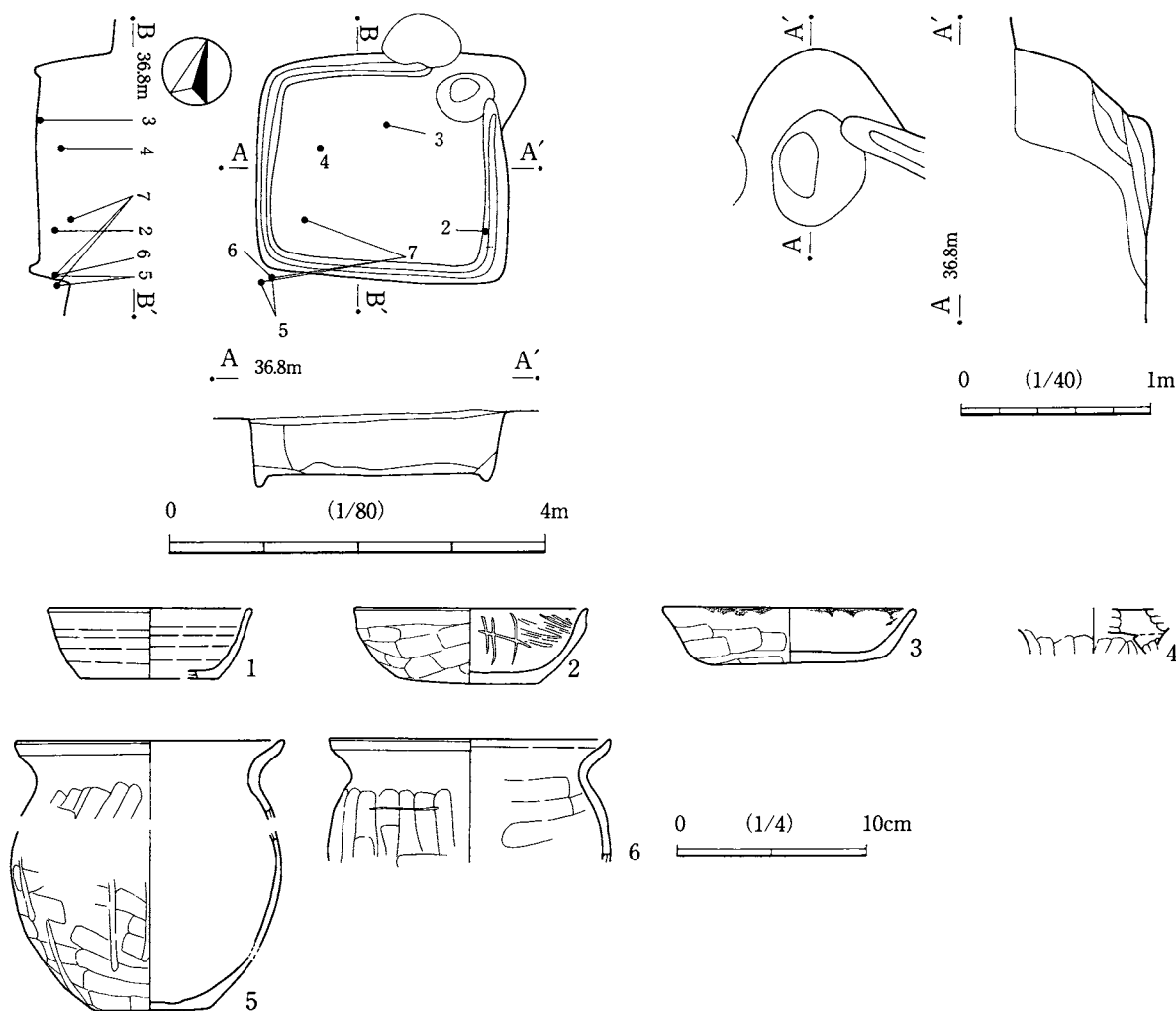
第89図 SI-007号実測図

熱により赤色硬化している。火床部には焼土が厚く堆積し、焚き口の周辺には黒色灰が分布している。

1～3・5は土師器坏である。いずれも破片資料であるが、1は軟質の感がする焼成で、東海系と考えられる。5は丸底、3は平底で、いずれも体部外面は横方向のヘラ削り、口唇部にヨコナデを施す。2は口唇部内側に油煙が付着する。4はロクロ土師器坏で、口径11.4cmの小振りの製品で、体部も角度をもって立ち上がる。体部下端にヘラ削りは施されず、底部は糸切り後、不定方向のヘラ削りを施している。

第14表 SI-007号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(13.5)	[3.0]	—	破片	白色微砂粒少々	黄灰色	軟質な焼成	1
2	土師器 坏	(13.2)	[2.2]	—	破片	白色砂粒、スコリア	鈍い褐色	内外、口縁部にタール付着	1
3	土師器 坏	(14.3)	[4.8]	—	1/5	白色砂粒、長石粒、スコリア	黒褐色～鈍い褐色	口縁～2/3位スス付着	1
4	ロクロ土師器 坏	11.4	4.7	7.3	ほぼ完形 (1/8欠損)	白色、黒色(砂粒)、石英粒(スコリア)、小石(1mm)やや多い	明褐色		17
5	土師器 坏	(11.0)	[3.4]	—	1/4	白色砂粒、黒色砂粒、(小石1mmやや多い)	鈍い黄褐色	硬質な焼成	11
6	土師器 甕	(18.1)	[3.8]	—	口縁1/7(破片)	白色粒、石英粒	赤褐色	内 摩耗	1
7	丸瓦	—	—	—	—	—	—	—	10



第90図 SI-008号実測図

6は土師器甕の口縁部破片である。口唇部は受け口状を呈する。7は丸瓦で、還元炎焼成である。

**SI-008号竪穴住居跡**（第90図，図版15，102）

本遺構はC8-63グリッド付近に位置し，西側台地の南西の緩斜面，標高約36.6mに立地する。北側の壁付近をSB-002号掘立柱建物跡の柱穴により切られる。形態は方形で，規模は2.4m×2.7mを測る小さな遺構である。主軸方位はN-25°-Wである。住居の掘込みはしっかりしており，検出面からの深さは42cm~70cmを測る。床面は斜面に沿って緩やかに傾斜する。主柱穴は検出されていない。カマド付近を除き，壁際には深さ6cm~10cmの壁溝が検出された。覆土はロームブロックと炭化物を含む暗黄褐色土が主体で，床面付近には地山と判別しにくい粘性の高い暗黄褐色土が堆積していた。

カマドは北東側の壁のコーナー部分に位置する。カマドの袖部分は掘立柱建物を構築した際に破壊されており，検出された火床部の一部と掘方からカマドと判断される。掘方の最大幅は45cmを測る。袖部は壁から45cm延びている。カマド周辺の覆土から，構築材は黄灰色砂質土を主体とすると考えられる。煙道部の掘込みは壁外に約30cm確認された。

1はロクロ土師器坏で，暗灰褐色を呈する硬質な製品である。体部下端及び底部外面にヘラ削りを施している。2・3は土師器坏で，2は口縁部をやや欠損する。3はほぼ完形で，住居中央の床面から出土し



た。2は平底で、体部は内湾気味に立ち上がり、口唇部をヨコナデで摘みあげている。体部は横方向、底部は一方向のヘラ削りを施している。3は浅い坏である。内外面とも赤彩するが、内面は器面の遺存が悪く、ほとんど残されていない。外面も体部下端の摩耗が著しい。口唇部内側には油煙が付着し、灯明皿として利用されたものである。4は土師器高坏の坏部と脚部の接合部破片である。脚部は縦方向のヘラ削りが施されている。坏部内面は黒色処理されている。

5～7は土師器甕である。ともに小形の甕で、胴部上半に縦方向、下半に横方向のヘラ削りを施している。5・6は胎土・調整などから同一個体とみられる。

第15表 SI-008号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	ロクロ土師器 坏	(10.8)	3.7	(7.3)	1/8残存	スコリア、白色微砂粒	褐色	内外 炭素吸着	1
2	土師器 坏	12.4	7.5	4.0	4/5	白色砂粒、石英、長石	褐色	内、線刻	8
3	土師器 坏	13.4	2.9	10.0	完形	白色砂粒、スコリア、長石(少)	鈍い黄褐色、一部黒色、赤褐色	内外、赤彩 口縁部ケール付着	11
4	土師器高坏	-	[2.4]	-	基部片	石英、長石、白色砂粒	内 黒色	内 黒色処理	6
5	土師器 甕	(14.3)	[4.0]	-	口縁1/5 胴1/3	白色砂粒(多) 長石、石英	赤褐色		1.2.3.
6	土師器 甕	(15.0)	[6.4]	-	口縁1/8弱、胴部1/5	白色砂粒、石英粒	内外、鈍い赤褐色	器面 全体的にざらついている	1.3
7	土師器 甕	-	[9.5]	6.1	底部完形～胴部	白色砂粒(多)、石英、長石	内、赤褐色 外、鈍い赤褐色	5と同一個体	1.2.3

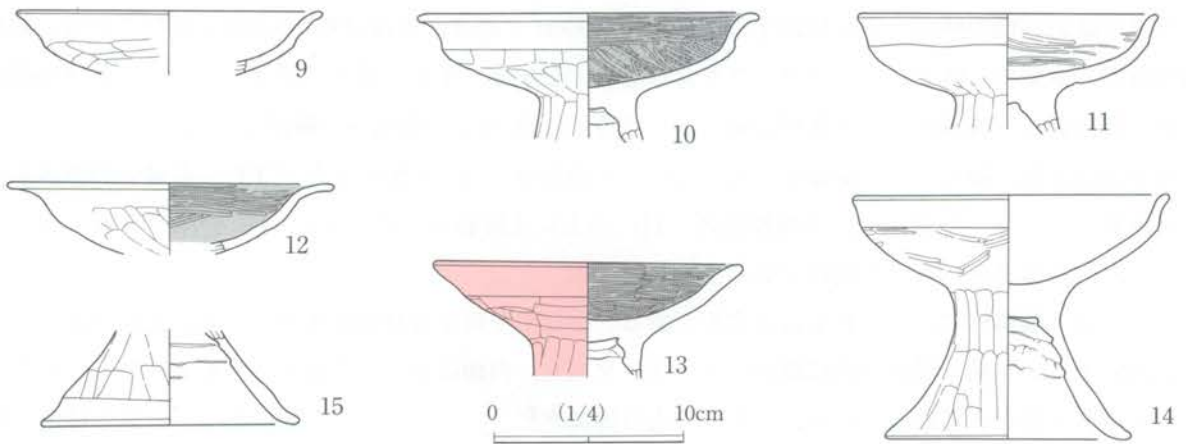
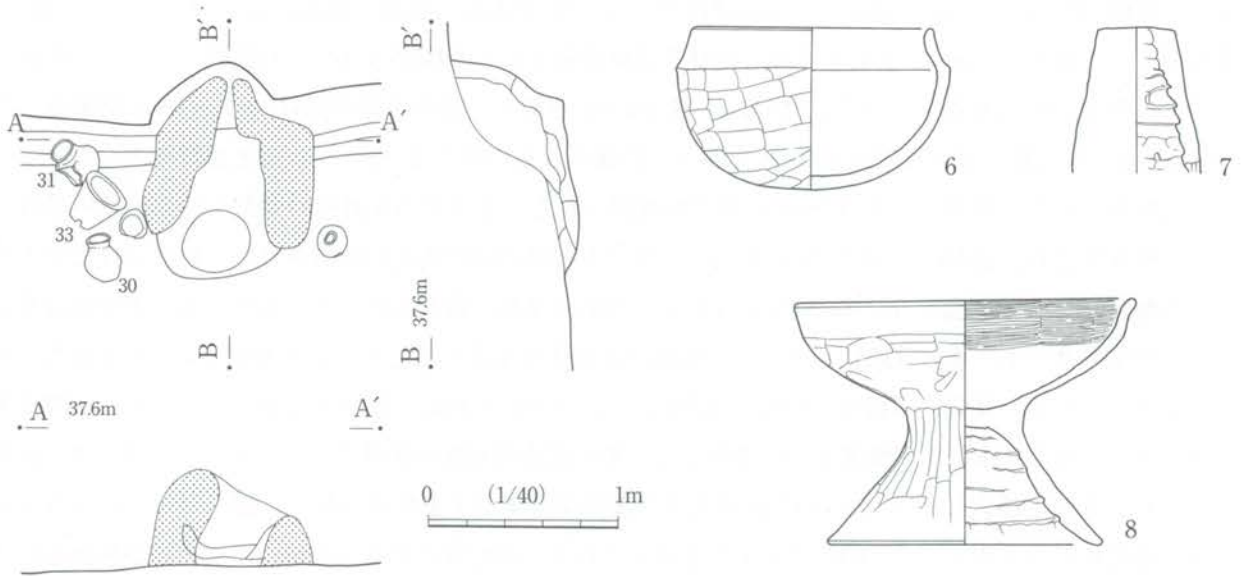
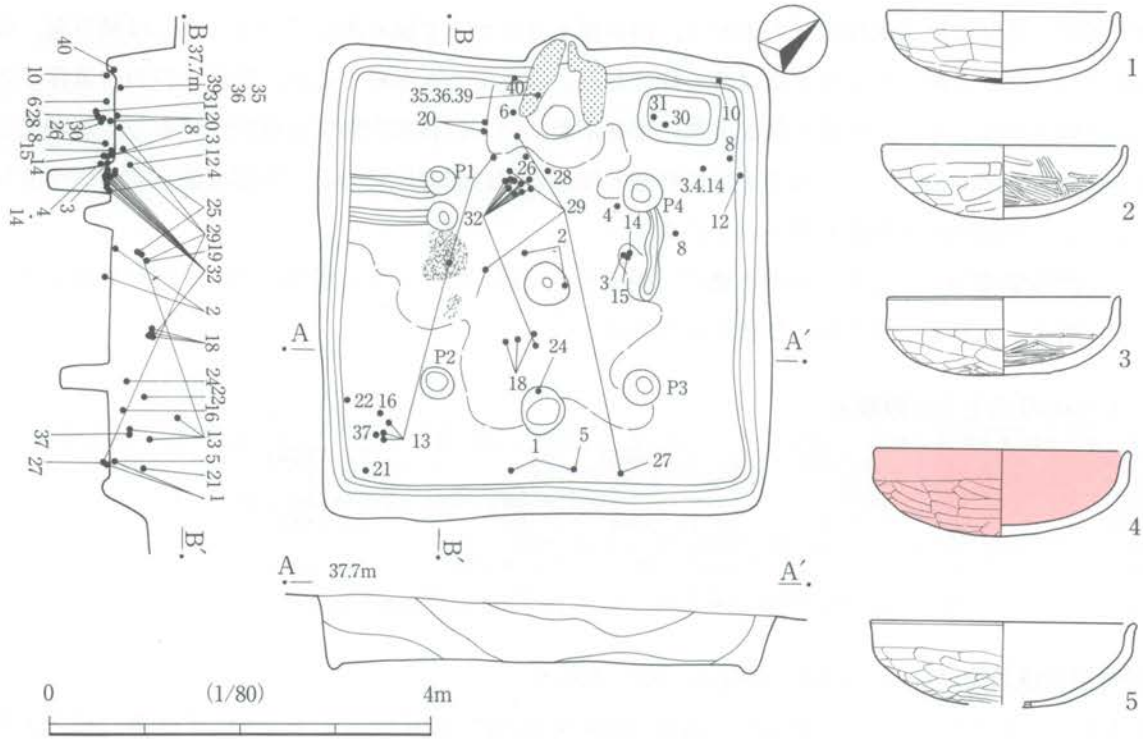
SI-009号竪穴住居跡 (第91, 92図, 図版16, 102, 103)

本遺構はD7-63グリッド付近に位置し、西側台地中央部の標高約37.5mに立地する。形態はほぼ正方形で、規模は4.7m×4.7mを測る。主軸方位はN-54°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしており、確認面からの深さは51cm～65cmを測る。主柱穴は対角線上に5基検出された。対角線の交点で、住居のほぼ中央部分の柱穴が最も大きく、径45cm、深さ95cmを測る。他の4基の径は30cm～40cmを測る。カマドより左側の2基の深さは62cm・65cmを測る。右側の2基の深さは51cm・52cmと比較的浅くなっている。北西側主柱穴に隣接して深さ28cmの柱穴が検出された。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径44cm、深さ26cmを測る。カマド右脇には貯蔵穴が検出された。形態はほぼ長方形で、長軸長86cm、短軸長54cm、深さ45cmを測る。床面は堅緻に踏み固められており、特に中央部分及びカマドの左側コーナー部分は硬化している。床面には間仕切り溝と想定される小溝が3条検出された。いずれもカマドに近い柱穴から延びている。深さは7cm～12cmを測る。カマド左側では、主柱穴と隣接する柱穴からそれぞれ南西側の壁溝まで、並行して2条の間仕切り溝が検出された。カマド右側では、北側主柱穴から東側主柱穴に向かって約45cmの長さの間仕切り溝が1条検出された。覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主体で、人為的な埋め戻しが想定される。床付近には若干の焼土、炭化物が検出されている。

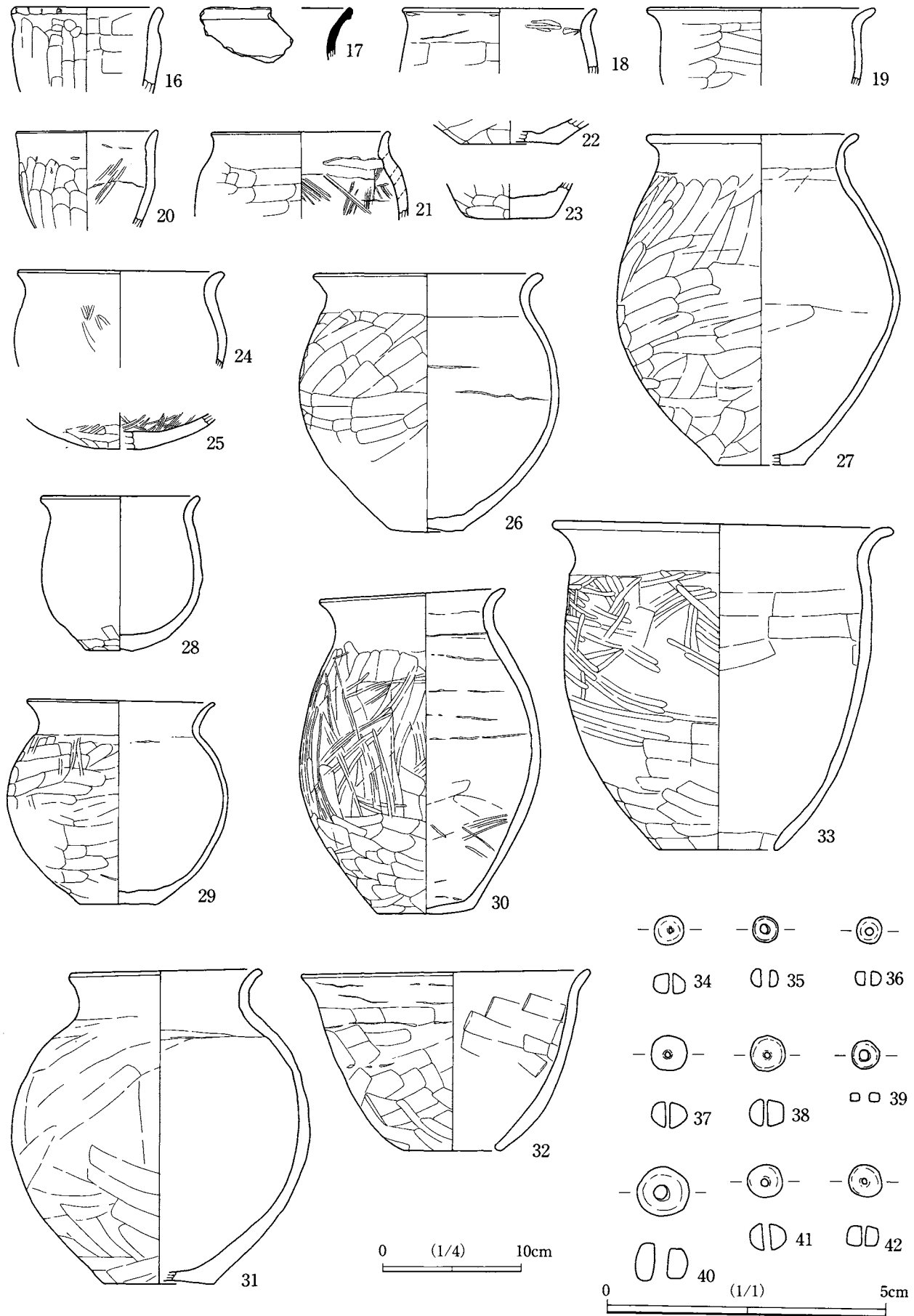
カマドは北西側の壁の中央に位置する。最大幅は90cmを測り、袖部は壁から65cm延びている。袖部の構築材は、少量の山砂とロームブロックを含む褐色土を主体とする。覆土の状況から、天井部は小礫を含む黄灰色砂質土を構築材とした様相が窺える。煙道部は約20cmの掘込みが確認された。

カマドの左袖に接して、土師器甕(30)(31)、土師器甗(33)が出土した。また、貯蔵穴の周辺からも土師器甕(26)(28)が並んで、土師器高坏(14)の上に土師器坏2点(3)(4)が乗せられて出土し、付近から土師器高坏(8)もほぼ完形で出土している。

1～5は土師器坏で、いずれもほぼ完形である。2はやや扁平な身を呈するが、他は比較的深く、口縁部は直立する。外面は渦巻き状に細かくヘラ削りを施し、内面は2～4に粗くヘラ磨きを施している。なお、4は部分的に赤彩が認められ、おそらく内外面に赤彩がなされていたと思われる。6は半球形の体部



第91图 SI-009号实测图



第92図 SI-009号出土遺物実測図

を呈する鉢で、完形である。口縁部は内傾して立ち上がり、ヨコナデ調整である。体部は横方向のヘラ削り後ナデ調整で、ヘラ削りは不鮮明である。7は土師器器台である。内面は粘土紐接合痕がかなり明瞭に残され、外面の調整もいたって粗雑である。ただし、頂部だけは丁寧にナデられている。

8～15は土師器高坏である。8・14はほぼ完形で、器形もよく似ている。坏部は深く、口縁部をヨコナデ、体部はヘラ削り後粗くヘラ磨きを施している。脚部は短く開き、裾部にヨコナデを施す。脚部内面には粘土紐接合痕を明瞭に残している。9～13は坏部の破片、15は脚部の破片である。口縁部は9・10・12が大きく外反し、13は僅かに屈曲するものの脚との接合部からはほぼ直線的に開いている。体部外面は10・12が放射状にヘラ削りを施す。10・12・13は内面を黒色処理している。なお、10・11の脚部破損部は摩擦しており、11がより顕著である。脚部破損の使用を物語っている。

16・18～31は土師器甕である。16・18～20・24は小形で粗雑な調整の製品で、口縁部の屈曲の少ない器形である。また、底部も20にみるようにはっきりとした平底とはならず、丸底に近いものである。胴部は縦方向もしくは横方向の粗雑なヘラ削りで、器面の凹凸もかなり目立つ。他の甕は胴部が球形に近いものと、やや長いものが混在する。26・29・31は球形に近い胴部をもつもので、31の胴部が円形に大きく欠損するが、26・29はほぼ完形である。口縁部は外反しヨコナデを施す。胴部はいずれも被熱し剥落する部分もあるが、上半部で斜方向、下半部で横方向のヘラ削りを施している。なお、26は底部付近が著しく剥落し、29は全体的にカマド構築材が付着している。27・30はやや長い胴部をもつもので、30は完形である。口縁部は外反し、ヨコナデを施す。29の胴部には上半で縦方向から斜方向、胴部中位で横方向、下半で斜方向のヘラ削りを施す。30は上半で縦方向、下半で斜方向ないし横方向のヘラ削りを施し、ヘラナデを加える。なお、27の胴部下半は片側だけ被熱して剥落している。32・33は甌でともに完形である。32は横方向のヘラ削り後、横位のナデ調整、33は上半部で縦方向、下半部で横方向から斜方向のヘラ削り後、内外

第16表 SI-009号出土土器観察表

種別番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	12.2	3.8	丸	ほぼ完形	白色砂粒(多)長石、石英(少)	内、赤色～暗黄灰色 外、明褐色	内、剥落が激しい、赤彩	9.13
2	土師器 坏	12.8	[3.8]	丸	3/4	白色微砂粒、長石、石英	赤褐色	内、丁寧なミガキ	1.23.24
3	土師器 坏	12.2	4.1	丸	ほぼ完形	白色砂粒、長石、石英	褐色	内外、若干摩耗	1.71.81
4	土師器 坏	13.4	4.5	丸	ほぼ完形	白色砂粒、石英	内、褐色 外、鈍い黄褐色	内、全面赤彩	72
5	土師器 坏	13.9	4.4	丸	3/4	荒白色砂粒、長石、スコリア、小石(1～1.5mm)	明灰色～灰褐色	内、剥落激しい	13
6	土師器 鉢	12.6	8.5	丸	完形	白色砂粒、長石、石英	内、褐色 外、鈍い黄褐色	内外、若干摩耗	83
7	土師器 器台	2.0	[7.7]	—	1/2	白色砂粒	内、褐色 明褐色	内、無調整	80
8	土師器 高坏	14.0	[4.5]	(14.4)	ほぼ完形	白色砂粒、石英、長石、小石(2mm)	褐色	内、坏部底～底辺剥落激しい	68
9	土師器 高坏	(16.0)	[3.3]	—	坏部口縁1/5	スコリア、砂粒	褐色	外、ヘラケズリ	1.79
10	土師器 高坏	(18.0)	[6.5]	—	坏部1/2	白色砂粒、石英、スコリア(多)、小石	内、黒色 外、鈍い黄色～赤褐色	内、黒色処理	66
11	土師器 高坏	15.6	[6.2]	—	坏部ほぼ完形	白色砂粒、長石、スコリア、小石	内、黄褐色 外、暗褐色	内外、著しく摩耗	81
12	土師器 高坏	(17.2)	[3.8]	—	坏部口縁1/5	雲母、白色砂粒	内、黒色 外、褐色	内、黒色処理	1.38
13	土師器 高坏	(16.4)	[6.2]	—	坏部2/3	白色砂粒、長石、石英、スコリア	内、黒色 外、赤褐色	内、黒色処理、外、赤彩	1.4.6.28.57
14	土師器 高坏	16.4	13.1	12.8	ほぼ完形	白色砂粒、長石、石英、スコリア、小石(1mm)	内、明褐色 外、赤色～鈍い黄褐色	内、坏部剥落著しい	73
15	土師器 高坏	—	[5.1]	13.6	脚部完形	白色砂粒、長石、石英、スコリア	明褐色		67.85
16	土師器 甕	(11.0)	[6.0]	—	口縁1/8	白色砂粒、スコリア	内、黒褐色 外、褐色	外、ヘラケズリ	27
17	須恵器 甕	—	[3.8]	—	口縁の一部	石英	黄褐色		1
18	土師器 甕	14.0	[4.5]	—	口縁1/2	白色砂粒、長石(少)	内、黒褐色 外、暗赤褐色		16.17.18
19	土師器 甕	(16.4)	[5.5]	—	口縁1/6	白色砂粒、長石	内、明赤褐色 外、鈍い赤褐色	内、著しく剥落	1.20
20	土師器 甕	(10.2)	[7.0]	—	1/4	白色砂粒、長石、小石	鈍い赤褐色	内、剥落激しい	39.40
21	土師器 甕	(12.8)	[6.4]	—	口縁～胴上部1/4	白色砂粒、長石(少)	内、暗褐色 外、赤褐色	外、若干摩耗	11
22	土師器 甕	—	[1.8]	(7.1)	底部1/3	白色砂粒、小石	内、明赤褐色 外、褐色	内、著しく剥落 外、ヘラケズリ	63
23	土師器 甕	—	[2.5]	6.1	底部2/3	白色砂粒、石英	内、褐色～暗褐色 外、赤褐色	内、剥落有り	8
24	土師器 甕	(14.9)	[6.9]	—	口縁1/4	白色砂粒、長石、小石(1～2mm)	赤褐色	内外、摩耗著しい	1.14
25	土師器 甕	—	[2.6]	(4.8)	底部1/4	白色砂粒、石英	内、黒褐色 外、鈍い赤褐色	内、ナデ後ミガキ	1.57.58
26	土師器 甕	16.5	18.5	5.0	ほぼ完形	白色砂粒、石英、長石、小石(1～1.5mm)	内、暗褐色～赤褐色 外、鈍い赤褐色	内外、胴下部～底部剥落著しい	1.69
27	土師器 甕	15.2	23.8	6.4	3/4	スコリア(少)、白色砂粒、長石、石英(多)	明褐色～灰黄褐色～黒褐色	二次焼成による剥落有り	1.60.78.79.80.85
28	土師器 甕	11.4	11.1	丸	完形	白色砂粒、長石粒、石英粒	鈍い赤褐色～灰黄褐色一部黒色	内、剥落著しい	70
29	土師器 甕	13.5	14.7	5.5	3/4	白色砂粒、長石粒	暗黄褐色～黒褐色(内) 赤褐色～黒褐色	内、著しく器面剥落	1.20.30.60.61
30	土師器 甕	13.5	22.7	7.0	完形	白色砂粒、長石、石英、スコリア	内、鈍い褐色～暗黄灰色 外、鈍い赤褐色～黒褐色	内、接合痕多く残る	74
31	土師器 甕	13.7	21.4	7.8	3/4	白色砂粒、長石、石英	内、明褐色～灰褐色 外、鈍い赤褐色～黒褐色	内、著しく器面剥落	76
32	土師器 甌	20.8	13.1	7.0	ほぼ完形	スコリア、白色砂粒、長石、石英、小石(2mm)	鈍い黄褐色～赤褐色	外、接合痕残す	15.42.43.44.45.46.47.48.49.51
33	土師器 甌	24.4	23.6	8.4	ほぼ完形	白色砂粒、長石、石英、小石(やや多い)	明赤褐色	内、胴尖から底部剥落有り	75

面とも丁寧なヘラナデを施し、器面は平滑である。

34～42は石製の白玉である。

#### SI-014号竪穴住居跡（第93, 94図, 図版17, 104）

本遺構はD7-07グリッド付近に位置し、西側台地の北東部の斜面、標高約37.0mに立地する。北側コーナー部分においてSI-029号竪穴住居跡と、南側コーナー部分においてSK-015号土坑と重複関係にある。SI-029号の覆土中に貼り床を施していることから本遺構の方が新しいことが明確である。SK-015号は本遺構の覆土中に掘り込まれていることから、本遺構の方が時代を遡ることが明確である。形態はほぼ正方形で、規模は6.4m×6.5mを測る。主軸方位はN-32°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしており、検出面からの深さは西側で80cm、東側で30cmを測る。主柱穴は対角線上に4基検出された。柱間は約3.4mと比較的広い。主柱穴の径は40cm～65cmを測り、深さはカマド側の2基は65cm、反対側の2基では97cm・81cmを測り、比較的深くなっている。主柱穴のうち北西側の柱穴からはほぼ完形の遺物が検出されている。住居中央部のやや東側柱穴寄りに径25cm、深さ45cmの小ピットを検出した。性格は不明であるが、主柱穴の対角線上に所在する点から住居の構造との関連が想定される。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、長軸長30cm、短軸長20cm、深さ53cmを測る。壁際には深さ4cm～12cmの壁溝が全周する。東西の壁溝の中に径約10cm、深さ6.5cm～8cmの壁柱穴と想定される小ピットが検出された。覆土は、下層がローム粒を少量含む暗褐色土、上層は暗褐色土を斑紋状に含む褐色土で人為的な埋め戻しが想定される。西側コーナー部分では焼土の付近に遺物が集中して出土している。

カマドは北西壁の中央に位置する。袖の遺存状況は比較的良好であった。最大幅は95cmを測り、袖部は壁から80cm延びている。構築材は黄灰色砂質土を主体とする。煙道部の掘込みは壁外に約10cm確認された。焚き口付近には灰が分布していた。

遺物は比較的多く、特に住居西コーナーに接して土師器高坏（13）（14）、土師器坏（3）、土師器甕（23）がまとまって出土した。

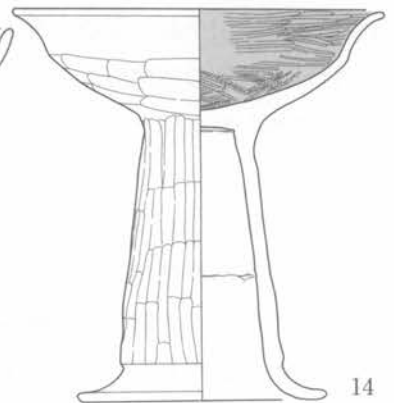
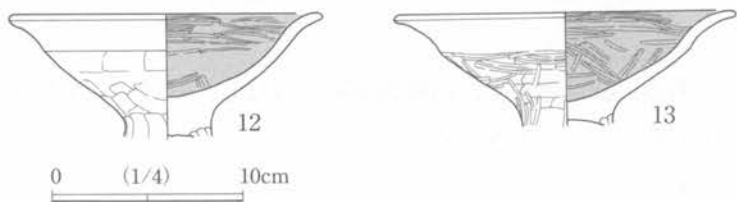
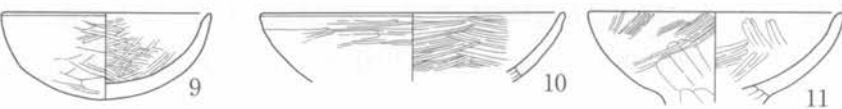
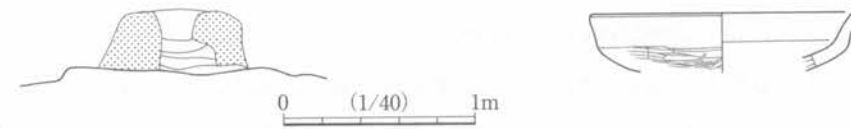
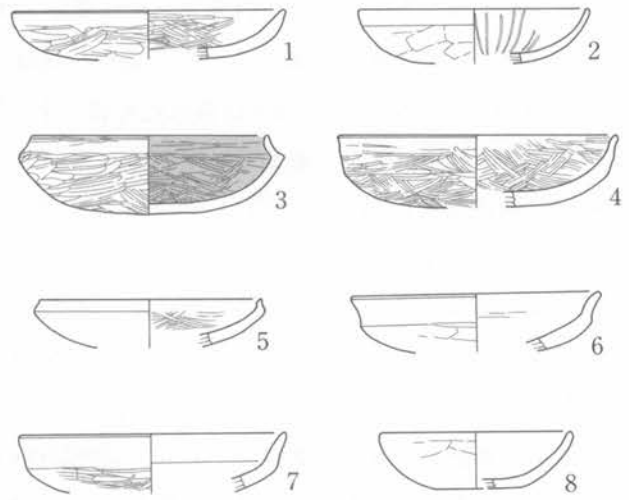
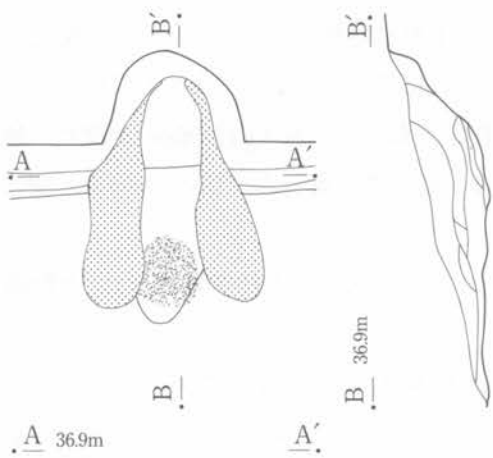
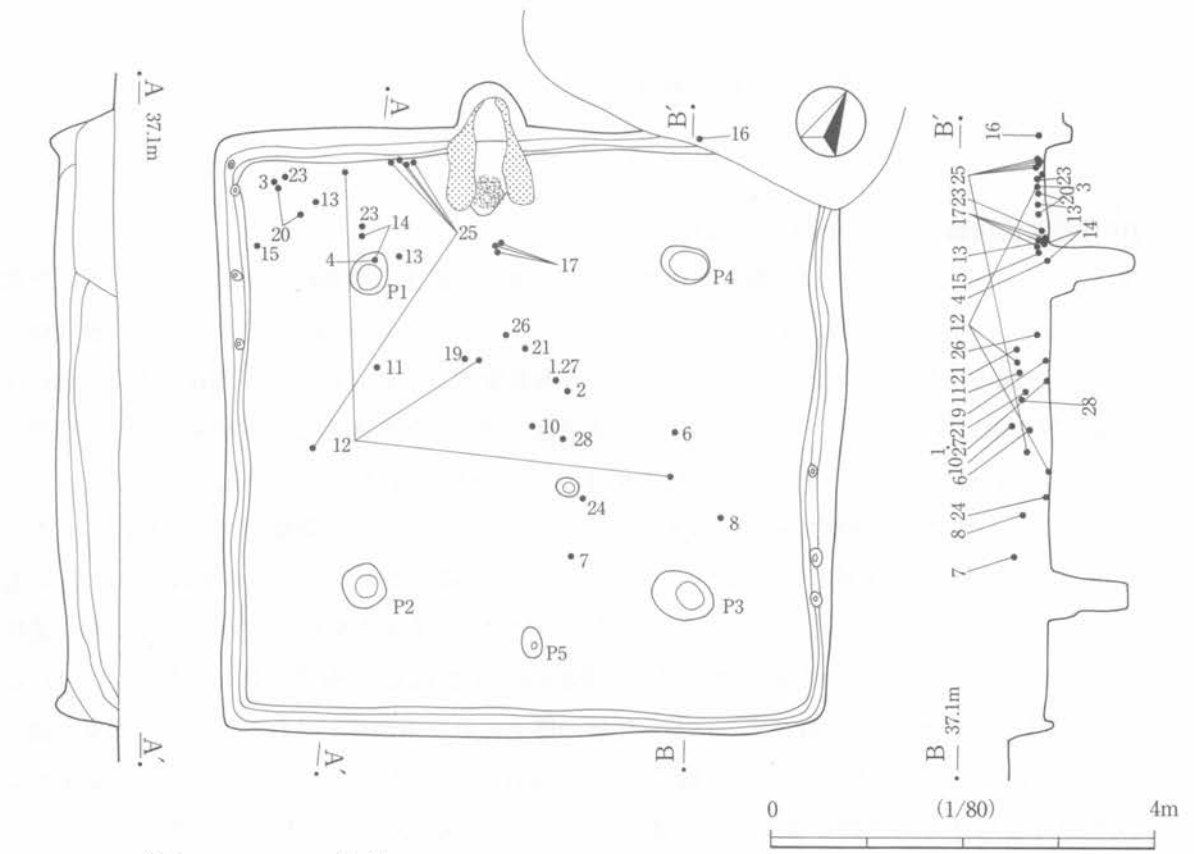
1～9は土師器坏である。口縁部の形状は、体部から屈曲して内傾するもの、内湾気味に立ち上がるもの、外反するものがある。口縁部はヨコナデで、体部は横方向のヘラ削りを施す。また、5・6・8を除いて丁寧なヘラ磨きを施している。なお、2には内面に放射状の暗文がある。3・9は内面黒色処理される。3・4は調整・色調とも酷似しており、同時製作の可能性が高い。

10～17は土師器高坏である。14は口縁部の一部を欠損するがほぼ完形である。脚部は円柱状に長く、中空である。口縁部と脚裾部はヨコナデで、脚部は縦方向の、坏部は横方向のヘラ削りを施している。坏部内面は丁寧に磨かれ、黒色処理を施している。12・13も同様の坏部で、13は外面にもヘラ磨きを施している。11は半球形の坏部破片である。15～17は脚部破片で、中空となる円柱状のものである。いずれも内面に粘土紐接合痕を残している。

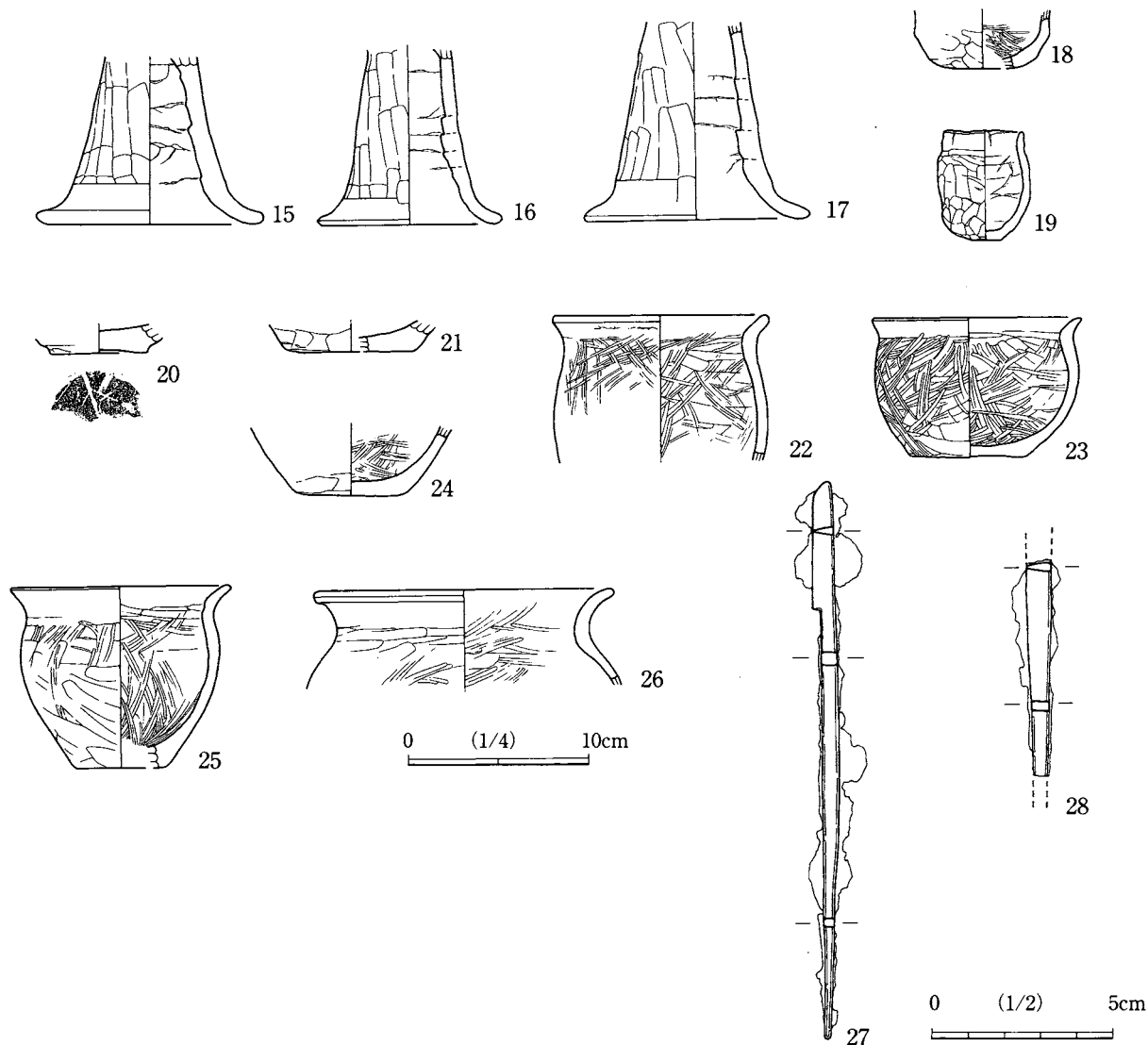
18・19はミニチュアの土器で、18は坏を、19は甕を模倣している。ともに手捏ねで、口縁部にヨコナデを模した調整が加えられている。

20～26は土師器甕で、22・23・25は小形である。23は完形で、口縁部は短く外反し、ヨコナデを施す。胴部は横方向のヘラ削りが観察されるが、内外面ともヘラ磨きを施している。

27・28は鉄鏃である。27は片刃の鉄鏃で、刃部の先端を欠損する。28は茎の破片である。



第93图 SI-014号实测图



第94図 SI-014号出土遺物実測図

第17表 SI-014号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号	
1	土師器 坏	(14.4)	[3.5]	-	1/6	石英粒、スコリア	内、灰黄褐色 外、鈍い黄褐色	内、ミガキ	68	
2	土師器 坏	(12.0)	[2.8]	-	1/8	砂粒、スコリア、白針	鈍い黄橙-灰褐色	内、暗文 外、ヘラケズリ	40	
3	土師器 坏	12.5	4.3	丸	3/4	白色微砂粒、長石(少)	内、黒灰色 外、赤褐色	内、黒色処理	99	
4	土師器 坏	(14.5)	3.8	丸	1/2	白色砂粒、長石粒	赤褐色~暗赤褐色	内外、密にミガキ	94	
5	土師器 坏	(11.6)	[2.5]	-	1/5	砂粒、スコリア	鈍い黄褐色	内、ミガキ	105	
6	土師器 坏	(13.0)	[3.0]	-	1/12	砂粒、石英粒、長石粒	明褐色	内外面ともに摩耗	64	
7	土師器 坏	(14.0)	[3.1]	-	1/8	砂粒、長石粒	鈍い橙色		74	
8	土師器 坏	(10.0)	[3.0]	(4.6)	1/4	砂粒、スコリア(少々)	内、灰黄褐色 外、鈍い黄褐色	内外面ともに摩耗	76	
9	土師器 坏	(11.0)	4.5	丸	1/3	細砂粒、(長石、スコリア少)	内、黒色 外、鈍い黄褐色	内、密にミガキ	105	
10	土師器 高坏	(16.0)	[3.1]	-	坏部1/10	砂粒、スコリア	鈍い黄色	内、密に丁寧なミガキ	41.105	
11	土師器 高坏	(13.4)	[4.8]	-	坏部1/6	長石、石英	暗赤褐色	内、ナデ後ミガキ	45	
12	土師器 高坏	16.4	[6.5]	-	坏部1/2	白色砂粒、長石、石英(少)、スコリア(少)	内、黒色 外、鈍い赤褐色	内、黒色処理	60.65.105	
13	土師器 高坏	(18.0)	[6.0]	-	坏部1/2	白色砂粒、長石粒	内、黒色 外、鈍い赤褐色	内、黒色処理	95	
14	土師器 高坏	19.4	20.9	13.0	口縁1/4欠 他完形	白色微砂粒、長石、スコリア	内、黒色2/3、黄褐色1/3、外、明褐色+赤褐色	内、坏内面黒色処理	94.100	
15	土師器 高坏	-	[9.3]	12.6	脚部完形	白色微砂粒、長石、石英、スコリア	内、明褐色 外、明褐色	内、脚部上部1/2位輪積み痕明瞭に残る、薄く炭素吸着有り外、ヘラケズリの単位は細い	93	
16	土師器 高坏	-	[9.7]	10.2	脚部完形	細砂粒、長石、石英	内、鈍い黄橙褐色 外、明褐色~赤褐色	内、脚上部2/3輪積み痕明瞭	81	
17	土師器 高坏	-	[11.0]	11.4	脚部完形	砂粒、スコリア、長石、小石(1mm位)	内、鈍い黄褐色 外、明褐色	内、輪積み痕残る	100.103.104	
18	土師器 ミニチュア	-	[3.2]	5.0	1/4	白色砂粒、長石(少)	白色砂粒、長石(少)	内、ミガキ(光沢有り)	105.106	
19	土師器 ミニチュア	4.4	6.1	2.0	完形	砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色	内、指ナデ	101	
21	土師器 甕	-	[1.7]	7.0	底部3/4	白色砂粒、小石(1mm)	暗赤褐色	内、剥落激しい	25	
22	土師器 甕	(12.0)	[8.1]	-	1/6	砂粒、石英粒	内、赤灰色 外、暗赤灰色	内、ナデ後ミガキ	105.106	
23	土師器 甕	11.5	7.0	6.4	完形	白色砂粒、長石(各少)	内、暗赤色1/2、黒褐色1/2 外、黒褐色	一部ケール付着	96	
24	土師器 甕	-	[3.8]	(6.0)	底部1/2	白色砂粒、長石粒	内、暗灰黄色 外、黒褐色	外、二次焼成のため剥落	86.106	
25	土師器 甕	12.2	10.1	(7.2)	口縁2/3、胴部1/2底部一部	口縁2/3、胴部1/2底部一部	白色砂粒、長石(少)	内、鈍い黄色、黒色 外、鈍い赤褐色	内、底辺部ミガキ密	85.88.89.90.91.105
26	土師器 甕	(16.6)	[5.3]	-	口縁1/8	白色砂粒、長石粒	内、黒褐色 外、鈍い赤褐色	内、ナデ後ミガキ	24	

### SI-015号竪穴住居跡（第95, 96図, 図版18, 104, 105）

本遺構はD6-51グリッド付近に位置し、西側台地の東側緩斜面、標高約37.0mに立地する。住居の床面下からさらに一回り小さな4本の支柱穴及び壁溝の一部が検出され、住居拡張のための建て替えが行われていることが判明した。建て替え後の住居跡について記述する。形態は方形であるが、斜面の傾斜のためか東側コーナー部分がやや膨らんでいる。規模は5.6m×5.6mを測る。主軸方位はN-44°-Wである。住居の掘込みはしっかりしており、確認面からの深さは、斜面に所在するため西側で79cm、東側で48cmを測る。支柱穴は対角線上に4基、ややはずれた位置に1基検出されている。対角線上の支柱穴の径は60cm~70cmを測り、深さは66cm~77cmを測る。南側の柱穴については、柱の抜き取り痕とともにやや内側に径65cm、深さ69cmの柱穴があり、柱の立て替えが行われたことが想定される。セクションによる新旧関係は把握されないが、柱穴の配置から、立て替えの必要が生じたためやや内側に柱穴を掘ったことが想定される。また、柱穴の左側が一般的な掘り込みをしているのに対し、右側はほぼ垂直に掘り込まれていることから、やや斜めに柱を立てた可能性が窺える。床面に踏み固められた状況は観察されず、ハードロームがブロック状に散在する状況であった。支柱穴の外側に一部硬化がみられた。カマドの反対側の支柱穴の間には梯子ピットが1基検出され、径60cm、深さ29cmを測る。壁際には、深さ4cm~9cmの壁溝が全周する。覆土はローム粒を少量含む褐色土が主体で、床面付近に焼土を含む暗褐色土が堆積する。上層には新しい攪乱による掘込みに炭細粒を多く含む。

カマドは北西壁の中央に位置する。最大幅は100cmを測り、袖部は壁から65cm延びている。袖の遺存状況はあまりよくない。構築材は灰色砂質土を主体とする。煙道部は20cm程度掘り込まれていた。

拡張以前の住居は床下から4本一組の支柱穴が検出された。径は50cm~60cmを測り、深さは66cm~85cmを測る。カマドの反対側の壁際中央部では、硬化した床面の下から梯子ピットが1基検出され、径40cm、深さ30cmを測る。西側の支柱穴の外側約50cmの部分に、深さ約5cmの壁溝の一部が検出された。東側と南側については壁溝を共有するものと想定される。拡張前のカマドの痕跡がないことから、カマドは若干の拡張を行った可能性が考えられる。これらのことから拡張前の竪穴住居跡については、主軸方位がN-47°-Wであり、形態は縦長の長方形で、規模は5.5m×4.4m程度であったと想定される。

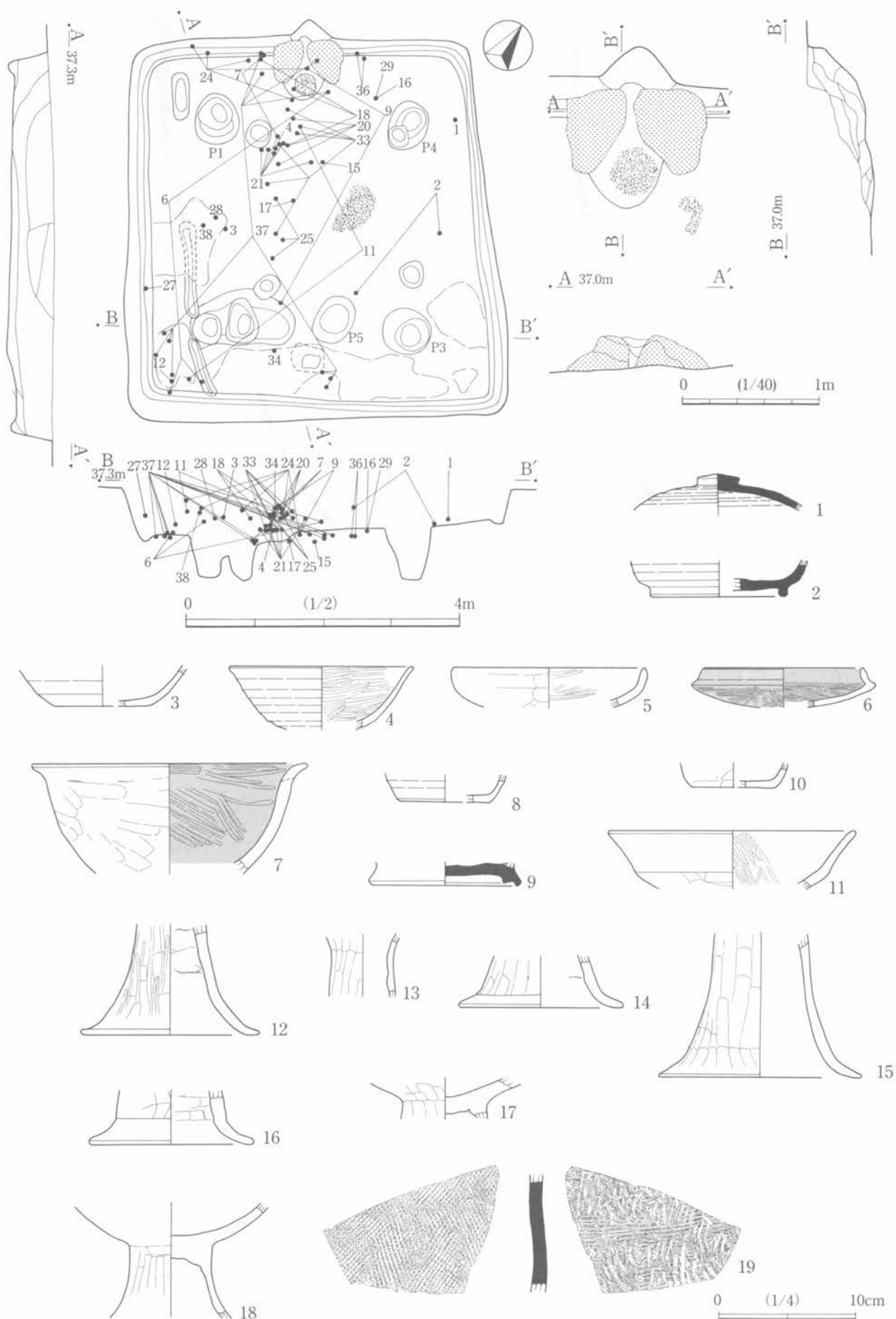
遺物は鬼高期のものと9世紀代のものが混在しているが、須恵器(21)がカマド前面から出土している。

1は須恵器蓋で、扁平な宝珠様つまみが付く。天井部は回転ヘラ削りである。2・9は須恵器の高台坏で、2は比較的精緻な胎土であるが、9は雲母粒・長石粒を多く含んでいる。3~6・8・10は土師器坏である。5・6は鬼高期のもので、7の鉢も同時期である。5・6とも漆仕上げとみられる暗褐色の光沢があり、底部は横方向のヘラ削りが観察できるが、内外面とも丁寧に磨いている。7は内面黒色処理を施し、丁寧に磨いている。外面は横方向から斜方向のヘラ削りである。3・4・8・10はロクロ土師器坏で、4は内面にヘラ磨きを施す。底部は3が回転ヘラ削り、8・10は手持ちヘラ削りである。

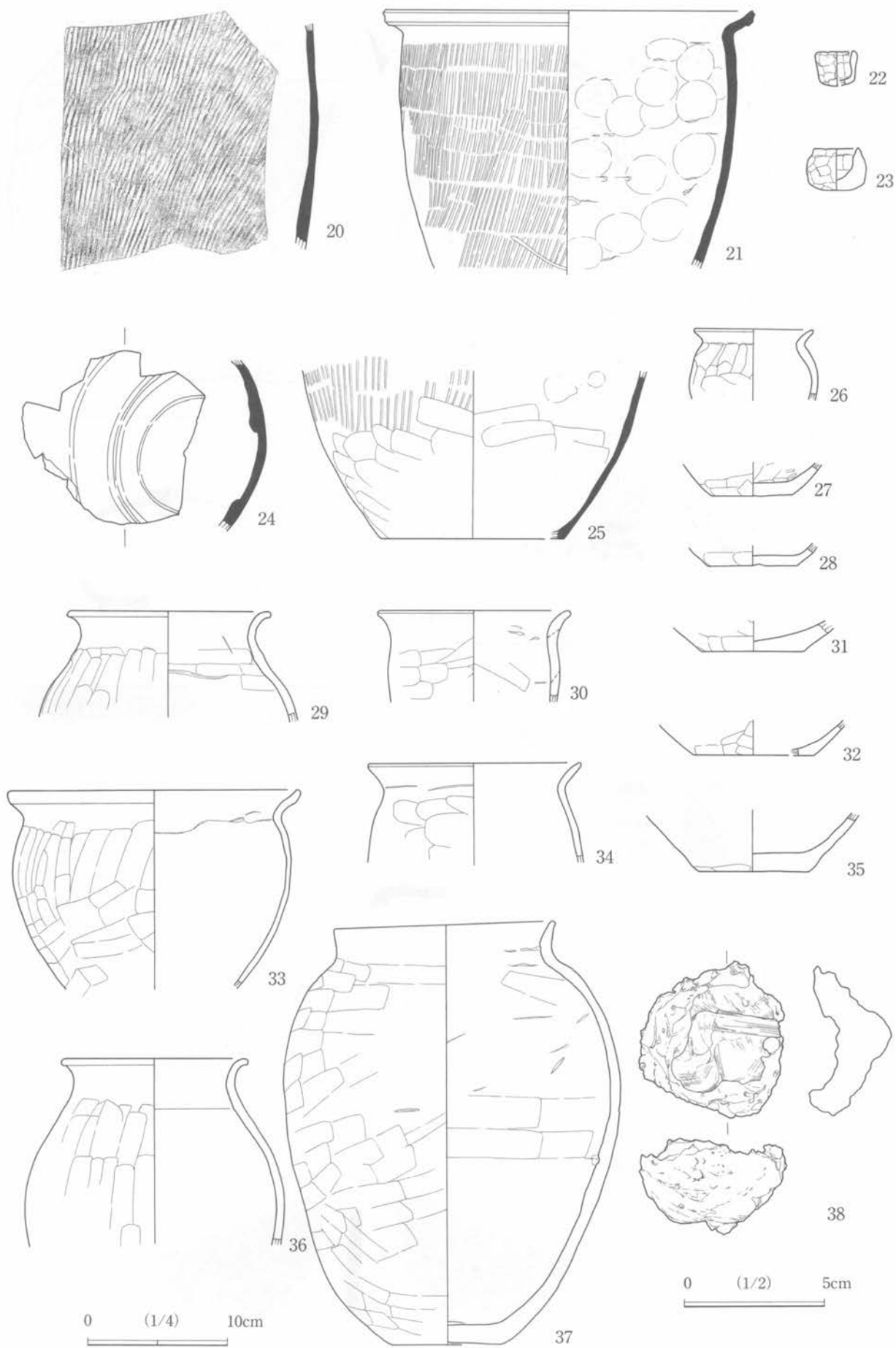
11~18は土師器高坏で、鬼高期の製品である。坏部が完全に残るものはなく、11は内面黒色処理される。また、17も遺存状態が悪いが、内面が暗褐色を呈し、ヘラ磨きが施されている。脚部破片は縦方向のヘラ削り、裾部にヨコナデを施す。15は外面を赤彩している。

19~21・25は須恵器甕である。21・25は胎土に雲母粒・長石粒・石英粒が目立つもので、胴部は縦方向の叩きである。19・20は硬質の大甕の破片である。20の内面中央部分は摩滅して平滑になっており、転用硯などとして再利用されたことが窺える。22・23はミニチュア土器で、ともに手捏ねで、粘土塊を指先で





第95图 SI-015号实测图



第96图 SI-015号出土遗物实测图

摘みあげただけのものである。24は須恵器横瓶の破片で、粗雑なカキ目が施されている。

26～37は土師器甕である。ほとんどが破片資料である。29・36は鬼高期である。口縁部は外反し、ヨコナデを施し、胴部は縦方向のヘラ削りである。33は最大径が口縁部にあるもので、受け口状を呈する。胴部は上半が縦方向、下半が横方向のヘラ削りである。37はほぼ完形に復元できた。口縁部は短く直立気味に立ち上がり、胴部は全体に横方向のヘラ削りを施している。

38は椀形滓である。

第18表 SI-015号出土土器観察表

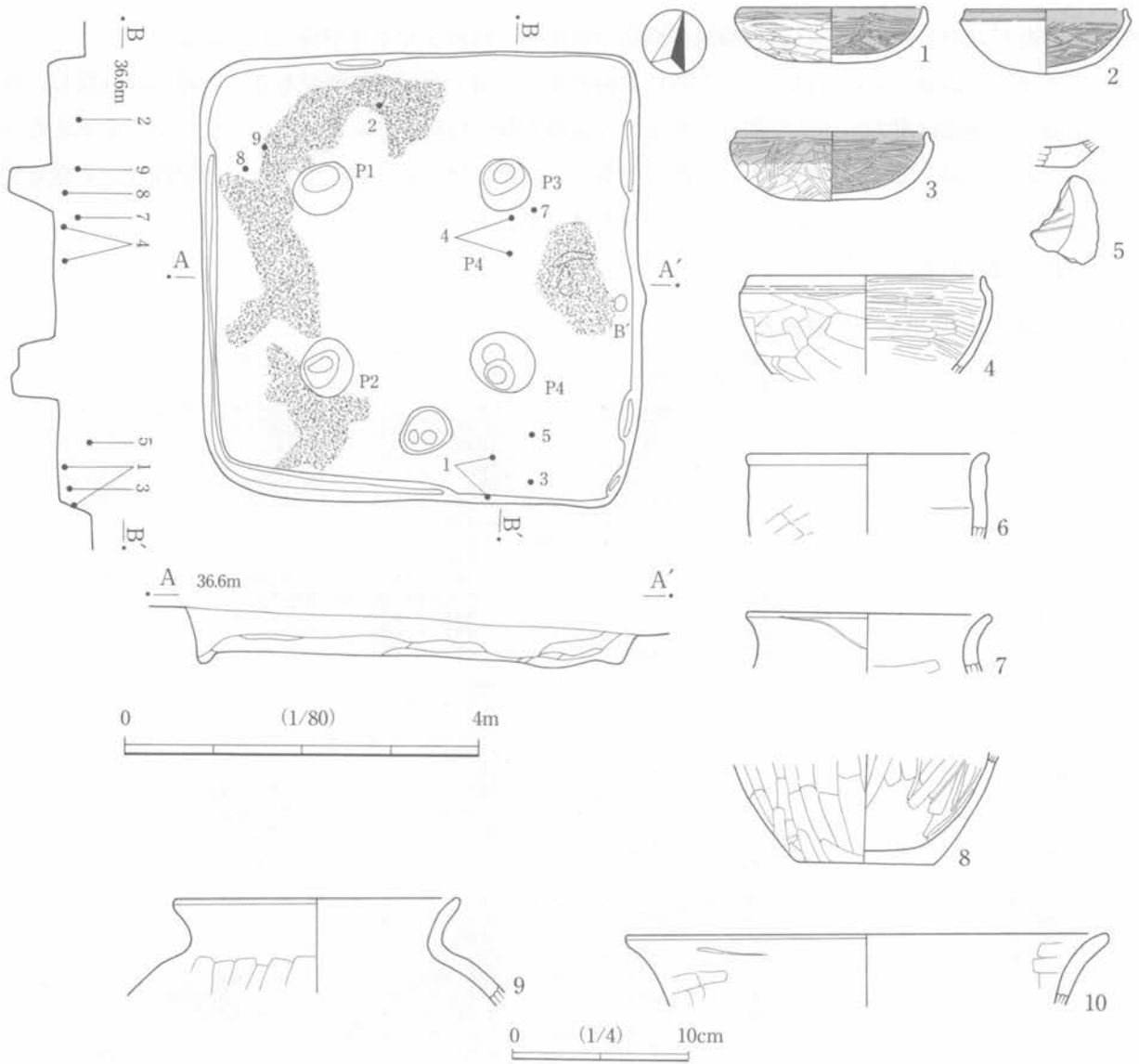
標本番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 蓋	-	[3.0]	-	-	白色砂粒、長石、石英(各少)	灰色		22
2	須恵器 高台付坏	-	[2.6]	(10.0)	高台部1/3	細砂粒、黒色粒	灰色	底部回転ヘラケズリ 貼付高台	17.19.78
3	ロクロ土師器 坏	-	[3.0]	(7.0)	底部1/3	長石、スコリア、石英	内、褐色 外、黒褐色	底部回転ヘラケズリ	43.77
4	ロクロ土師器 坏	(13.4)	[4.65]	-	1/6	白色粒、スコリア	灰黄褐色	内、丁寧なミガキ 外、ヨコナデ	67
5	土師器 杯	(14.4)	[2.9]	-	1/8	石英、白色粒	黒褐色	内、ミガキ 外、ヘラケズリ後ナデ	77.78
6	土師器 坏	11.8	[2.9]	-	九 2/3	白色砂粒、長石	黒褐色	内、黒色処理	7.28.52
7	土師器 鉢	20.1	[8.0]	-	1/4	長石、石英(少)、白色砂粒(多)	内、黒褐色 外、暗赤色	内、黒色処理	71.77.78.81
8	ロクロ土師器 坏	-	[2.0]	(6.6)	底部の一部	スコリア、砂粒	鈍い黄褐色	内外、ヨコナデ	78
9	須恵器 高台付皿	-	[1.7]	(11.2)	高台部2/3	雲母(多)、長石、石英、白色砂粒	暗灰色		54.77.78.79
10	土師器 杯	-	[1.8]	(6.0)	底部の一部	砂粒、雲母、スコリア	鈍い黄褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	78
11	土師器 高坏	(18.0)	[4.2]	-	坏部1/5	雲母、白色砂粒	内、黒色 外、赤褐色	内、黒色処理 外、赤彩	6.73
12	土師器 高坏	-	[8.0]	13.0	脚部完形	白色砂粒、長石、石英、スコリア	内、黒色～赤褐色 外、赤褐色	輪積み痕残る	51.62.77
13	土師器 高坏	-	[4.6]	-	基部のみ	長石	内、黄褐色 外、赤褐色	内、ナデ 外、赤彩、ヘラケズリ	62.77
14	土師器 高坏	-	[3.8]	(12.0)	脚部1/3	白色砂粒、石英、スコリア	内、黄褐色 外、赤褐色	内外、摩耗	62.77.78
15	土師器 高坏	-	[10.5]	14.8	脚部2/3	白色砂粒、黒色砂粒、長石、スコリア	内、赤褐色 外、赤褐色	内、炭素吸着 外、赤彩	69.78.83
16	土師器 高坏	-	[4.0]	(12.0)	脚部1/4	長石	明褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	25.77
17	土師器 高坏	-	[3.0]	-	基部のみ	白色砂粒(多)、長石、石英、スコリア	内、鈍い赤色～黒灰色 外、明褐色	坏内底剥落	59
18	土師器 高坏	-	[8.5]	-	1/4	細砂粒、スコリア(少)	内、鈍い赤褐色 外、鈍い赤褐色～黄褐色	内外、摩耗著しい	30.31.70.78.83
19	須恵器 甕	-	-	-	破片	細砂粒、長石粒、黄土粒	灰色		1
20	須恵器 甕	-	-	-	破片	細砂粒 混合物なし	灰黄色	内、転用規の可能性有り	37.38.74
21	須恵器 甕	(18.5)	26.6	-	1/3	砂粒、石英、小石(2-3mm)	鈍い黄灰褐色 一部明褐色	内、無文の当て具痕	36.63.64.66.70.71.77.78
22	土師器 手捏	(3.0)	2.5	(2.6)	1/3	砂粒、長石(少)	褐色	内外、指ナデ	78
23	土師器 手捏	(3.0)	3.0	(2.0)	1/4	砂粒、長石、スコリア(各少)	褐色	内外、指ナデ	78
24	須恵器 フラスコ形瓶	-	-	-	胴部片	微砂粒、長石、石英(各少)	内、灰白色 外、灰緑色、暗緑色	外、細い沈線文有り	32.56.58.76.77
25	須恵器 甕	-	[12.0]	(13.3)	底部1/8～胴部	黒色粒、白色砂粒、黄土粒	灰黄色	内、当て具痕有り	40.42.55.77
26	土師器 甕	(8.4)	[5.0]	-	口縁の一部	黒色粒	内、明赤褐色 外、鈍い褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	78
27	土師器 甕	-	[2.9]	5.8	底部完形	白色砂粒、長石やや多い	暗赤褐色		
28	土師器 甕	-	[1.5]	6.4	底部完形	白雲砂粒、長石	明褐色	若干摩耗	44.77
29	土師器 甕	(14.6)	[7.6]	-	1/6	白色砂粒、長石、石英	赤褐色～暗赤褐色	内、口縁ヘラ先痕とナデ有り	25.62.77.78
30	土師器 甕	(13.9)	[6.4]	-	口縁1/4	白色砂粒、スコリア	内、褐色 外、灰褐色	内、ヘラナデ、輪積み痕有り	78
31	土師器 甕	-	[2.2]	(7.2)	底部1/3	長石、スコリア	内、黒褐色 外、赤褐色	割れ口に擦った跡が残る	77.78
32	土師器 甕	-	[2.7]	8.6	底部1/4	白色砂粒、長石、石英	内、鈍い黄褐色 外、赤褐色	内外、摩耗	78
33	土師器 甕	21.0	[14.2]	-	1/4	砂粒、長石、小石(1mm)	鈍い褐色～黒色	内外、器面摩耗激しい	35.39.41.65.68.75.77.78.83
34	土師器 甕	(15.3)	[7.0]	-	口縁の一部	砂粒、雲母	赤褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	11.78
35	土師器 甕	-	[4.2]	(7.8)	底部完形	砂粒、長石、スコリア(少)	内、鈍い黄褐色 外、暗黄褐色	内外、器面著しく摩耗	77.78.83
36	土師器 甕	(13.4)	[13.3]	-	1/6	白色砂粒、長石、石英	赤褐色		26.53.67.77.78
37	土師器 甕	15.9	30.6	7.8	4/5	白色砂粒、長石、石英	内、黒褐色 外、褐色1/2、黒色1/2	内、全面炭素吸着剥落有り	2.3.4.13.14.28.50.60.80.82.84

SI-016号竪穴住居跡 (第97図, 図版18, 105)

本遺構はE8-07グリッド付近に位置し、西側台地の東側緩斜面、標高約36.2mに立地する。形態は隅丸方形で、規模は5.0m×5.0mを測る。主軸方位はN-75°-Eである。掘込みはしっかりしており、確認面からの深さは、斜面のため西側で53cm、東側で31cmを測る。主柱穴は対角線上に4基検出され、径55cm～75cm、深さ46cm～58cmを測る。梯子ピットはカマドの右、東壁際中央部に1基検出され、径60cm、深さ37cmを測る。西側から南側にかけて壁際に壁溝が巡る。深さは3cm～5cmである。北側から東側にかけては一部分に壁溝が確認できる。カマドの反対側の床面では広い範囲にわたって焼土が分布していた。覆土はローム粒を含む褐色土が主体である。床面付近では焼土の分布が確認された。

カマドは西側の壁の中央に位置する。袖部を失っており、袖の構築材が僅かに遺存するのみであった。カマド掘方の最大幅は130cmを測り、火床部は径40cmを測る。覆土の状況から構築材は黄灰色砂質土を主体としたと考えられる。

1～4は土師器坏である。4は大振りであり、身も深い製品であるが、1～3は口径10cm前後の小さい製



第97図 SI-016号実測図

品である。口縁部は短く内傾し、ヨコナデである。体部外面は横方向のヘラ削りで、1・3にヘラ磨きを施している。内面は全面にわたって丁寧に磨かれ、3は黒色処理される。

5～10は土師器甕で、破片資料である。5は底部破片で、底部外面にヘラ描きがなされている。6・7は小形の甕で、6はほとんど屈曲せず口縁部となっている。8は底部で、胴部外面は縦方向のヘラ削り、内面も縦位のヘラナデを施している。

第19表 SI-016号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	10.4	3.2	丸	ほぼ完形	微砂粒、白針(スコリア多い)	鈍い黄褐色 一部黒色	内、黒色処理	64.109
2	土師器 坏	9.0	3.6	丸	1/2	砂粒、スコリア多い	鈍い黄褐色	黒色処理	1区、3区、112.113.115
3	土師器 坏	10.8	3.8	6.0	完形	微砂粒、スコリア	内、黒色 外、鈍い黄褐色	黒色処理	110
4	土師器 坏	(13.2)	[5.6]	-	口縁1/4	スコリア	内、暗灰黄色 外、緑灰黒色	内、密に丁寧なミガキ	17.68
5	土師器 甕	-	-	-	底部破片	白色砂粒	明褐色	底部外面に線刻有り	35
6	土師器 甕	(13.6)	[4.4]	-	口縁1/7	1mm~2mmの小石、長石、白色粒	褐色	内、摩滅している	114
7	土師器 甕	(13.8)	[3.4]	-	口縁1/6	長石、白色砂粒	褐色	内、ヘラナデ	113
8	土師器 甕	-	[6.7]	7.5	底部-底辺部完形	白色砂粒、長石、黒色粒	内、赤褐色 外、明赤褐色	内、ヘラナデ痕多く残る	106
9	土師器 甕	(16.2)	[5.7]	-	口縁1/4	白色砂粒、石英	褐色	内、摩滅している	105
10	土師器 甕	(27.1)	[3.9]	-	口縁1/6	白色砂粒	内、黒褐色 外、褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	7

SI-017号竪穴住居跡（第98～100図，図版18，105，106）

本遺構はL2-73グリッド付近に位置し，台地中央部の標高約37.3mに立地する。本遺構は南西部分においてSB-001号掘立柱建物跡と重複する。南西コーナー部分及び，住居床面をSB-001号の柱穴により切られている。形態は方形で，規模は6.6m×6.5mを測る。主軸方位はN-18°-Eである。住居の掘込みはしっかりとしており，確認面からの深さは46cm～57cmを測る。主柱穴は対角線上に4基検出され，径50cm～70cm，深さ40cm～70cmを測る。カマド右脇には貯蔵穴が検出された。形態はほぼ長方形で，長軸長105cm，短軸長95cm，深さ60cmを測る。床面は堅緻に踏み固められており，特に中央部分は硬化している。壁際には深さ5cm～8cmの壁溝が全周する。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体である。

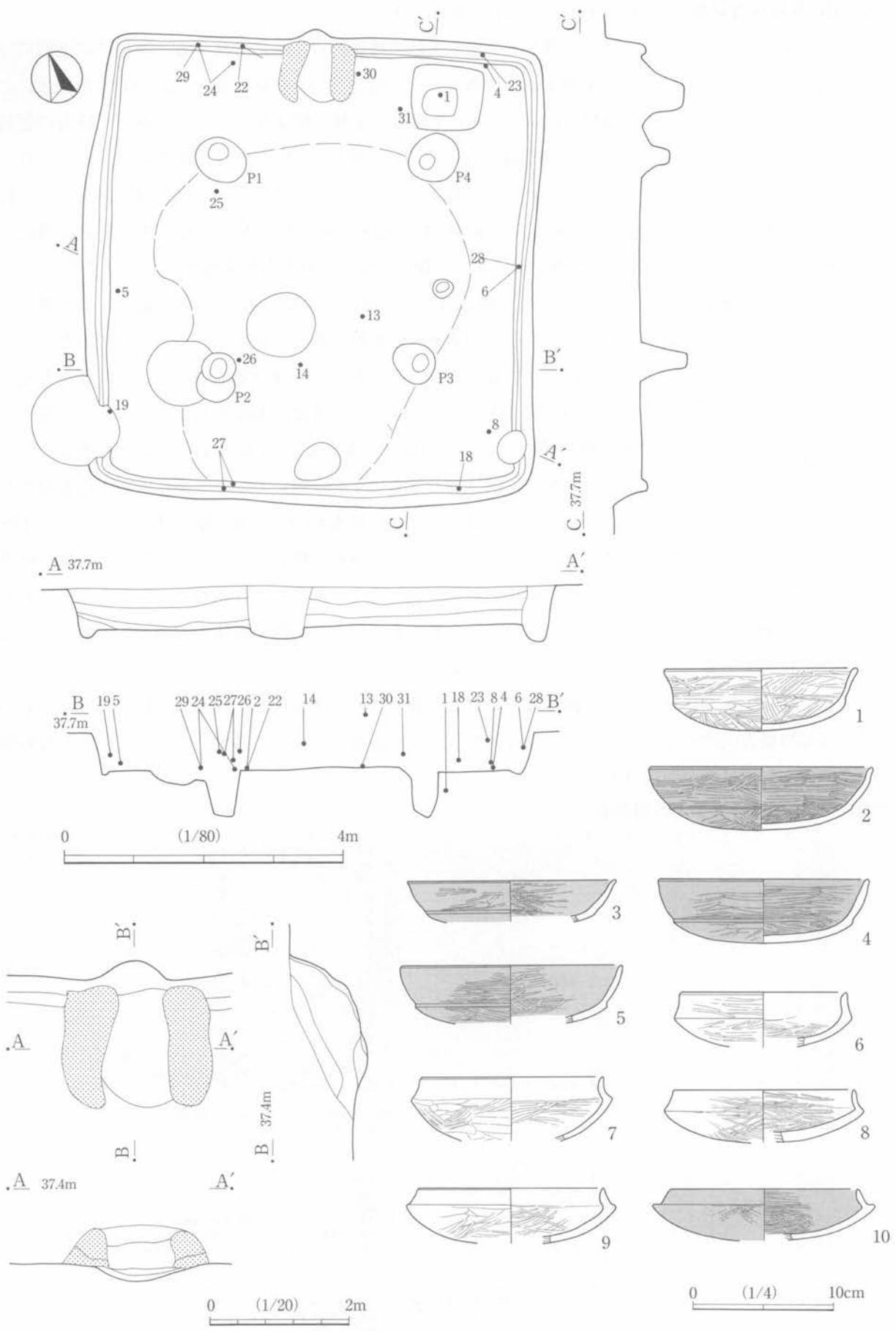
カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は110cmを測り，袖部は壁から90cm延び，淡黄褐色砂質土を主体とする。袖の基礎部分にはローム粒，山砂を含む粘性の強い明褐色土が用いられていた。

1～10は土師器坏である。1は口縁部が外反して外へ開くもので，ほぼ完形である。底部は横方向のヘラ削りを施すが，器面は内外面ともヘラ磨きが施され，ヘラ削り痕は不明瞭である。2～5は口縁部が内湾気味に開くもので，1も含めて蓋の模倣である。口径はいずれも15cm前後を測る大振りのもので，器壁も薄く仕上げられている。胎土は精緻で，内外面とも実に丁寧に磨いている。3は内面黒色処理され，2・4・5も光沢がある。6～10は口縁部が内傾して立ち上がるもので，身の模倣坏である。7は比較的深さがあるが，8～10は扁平な製品である。胎土は2～5が極めて精緻であったのに対し，同様に精緻なのは8・10だけで，他の個体は砂粒・長石粒が目立つ粗い胎土である。10は内外面とも実に丁寧に磨かれ，漆仕上げの可能性が高い。また，8も内面を丁寧に磨き光沢がある。他の個体も内面にヘラ磨きが施されているが，粗雑である。

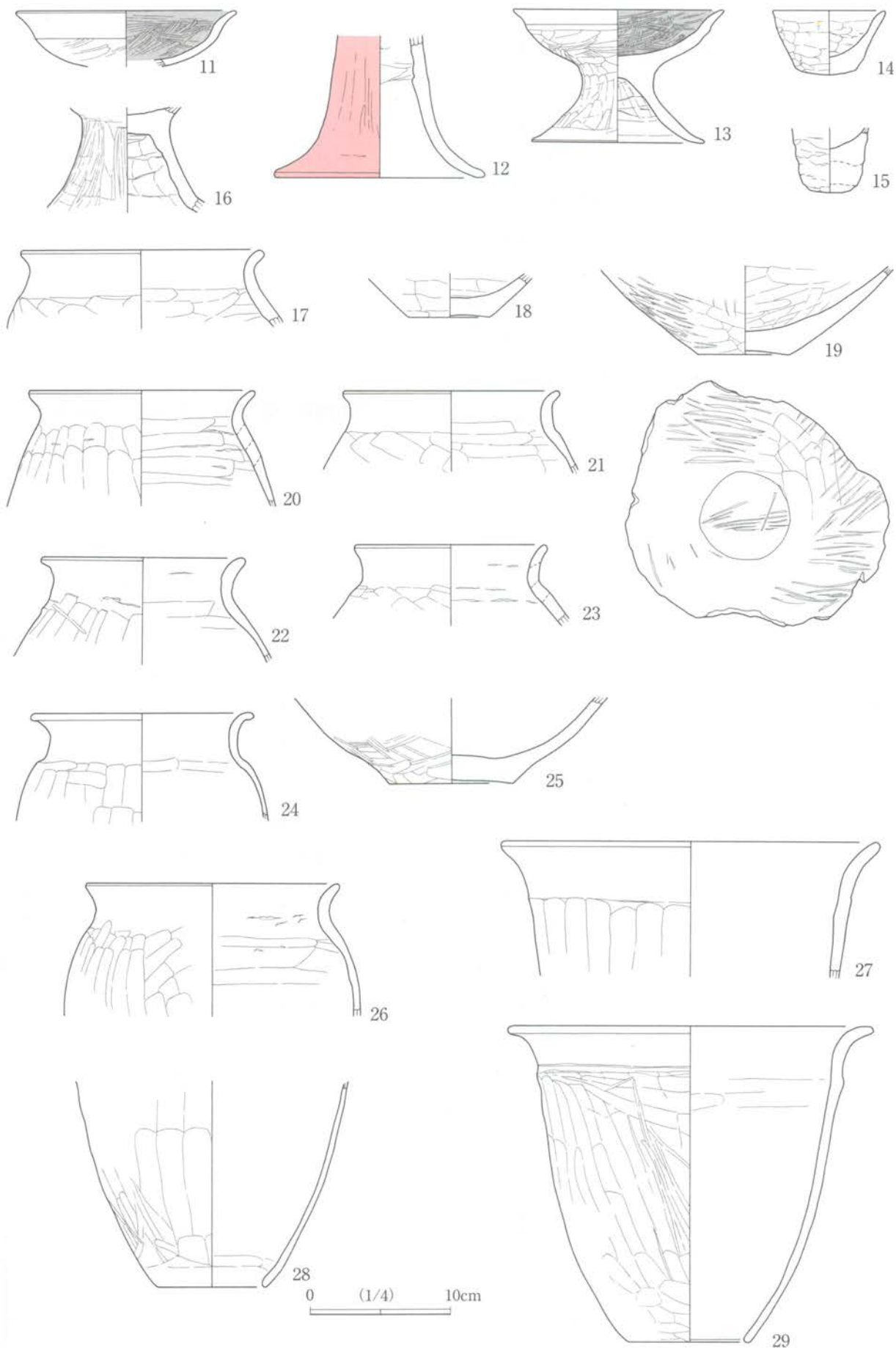
11～13・16は土師器高坏である。脚部は短い13と，長い12に分けられる。坏部は口縁部にヨコナデを施し，坏底部は横方向のヘラ削り，脚部は縦方向のヘラ削りを施している。11・13の坏部内面は黒色処理され，2の脚部外面は赤彩が施されている。

第20表 SI-017号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	13.8	4.4	丸	口縁1/3他完形	白色砂粒、石英、黒色粒	内、黄褐色 外、鈍い赤褐色	内、ナデ後ミガキ	6.31
2	土師器 坏	16.0	4.5	丸	1/2	細砂粒、スコリア	鈍い黄灰色、一部鈍い褐色	黒色処理	35
3	土師器 坏	(15.0)	[2.9]	—	1/8	小砂粒、スコリア	内、黒色 外、黄灰色	内、黒色処理	39
4	土師器 坏	(15.0)	4.5	丸	1/4	細砂粒、スコリア	鈍い黄灰色	黒色処理	30.37
5	土師器 坏	(16.0)	[4.2]	—	1/4	細砂粒、スコリア	暗灰黄色	黒色処理	22
6	土師器 坏	(12.0)	[3.9]	—	1/4	砂粒、石英粒	鈍い褐色	内外、ナデ後ミガキ	10
7	土師器 坏	13.2	[5.0]	—	2/3	白色砂粒(多)、長石	赤褐色	内外、ミガキ	3.9
8	土師器 坏	(13.0)	[3.7]	—	1/3	細砂粒、スコリア	褐灰色	黒色処理	22
9	土師器 坏	(13.4)	[4.0]	—	1/3	白色粒、黄土粒、スコリア	暗褐色	内外、ヘラミガキ	39
10	土師器 坏	(13.6)	[3.7]	—	口縁一部他1/2	細砂粒、スコリア	暗黄褐色、黒褐色	全面、黒色処理	1
11	土師器 高坏	(15.8)	[4.0]	—	坏部1/3	白色砂粒、長石、石英、(少)	内、黒色 外、明褐色	内、黒色処理	37
12	土師器 高坏	—	[10.2]	(15.0)	脚部1/4	白色砂粒、長石、スコリア	内、鈍い黄褐色 外、黄褐色～赤褐色	内、輪積み痕 外、赤彩有	37.39
13	土師器 高坏	(15.0)	9.5	(12.4)	1/4	白色砂粒(多)、長石、スコリア	内、黒色 外、赤色	内、黒色処理	3.37
14	土師器 手捏	8.0	4.6	4.3	2/3	白色砂粒、長石、石英、スコリア	内、明褐色 外、鈍い黄褐色	内外、指ナデ	13
15	土師器 手捏	—	[4.6]	(2.8)	1/4	白色砂粒、長石、黒色粒	鈍い黄褐色	内、指ナデ痕有り 外、無調整	37
16	土師器 高坏	—	[8.5]	—	脚部2/3	白色砂粒、長石、スコリア	内、明褐色 外、明褐色	脚部(内)、輪積みの重ね痕明瞭	17
17	土師器 甕	17.3	[5.6]	—	口縁～頸部完形	白色砂粒(多)、白針、長石、石英、スコリア	鈍い橙褐色、明褐色、暗褐色	内、若干摩耗 外、丁寧なナデ	24
18	土師器 甕	—	[3.2]	6.0	底部のみ	白色砂粒、長石	暗褐色～鈍い褐色	外、一部剥落有り	11
19	土師器 甕	—	[6.3]	6.5	底部～底部完形	白色砂粒、長石、スコリア	内、鈍い橙褐色、外、橙褐色 2/3、黒色1/3	内、ナデ痕有り 外、擦過痕多数有り	18
20	土師器 甕	(16.7)	[8.3]	—	口縁	スコリア、小石、白色砂粒、黒色粒	明褐色	内、ナデ、輪積み痕残る	37
21	土師器 甕	(15.5)	[5.8]	—	口縁部1/3	白色砂粒、長石、黒色粒	鈍い黄褐色	外、薄くスス付着	37
22	土師器 甕	14.6	[7.6]	—	口縁～胴上部完形	白色砂粒(多)、スコリア(少)	内、明褐色～暗褐色 外、褐色～黒褐色	内、丁寧なナデ、外、肩部鋭利なヘラケズリ	35
23	土師器 甕	13.8	[5.7]	—	口縁部1/2	白色砂粒(長石、スコリア各少)	暗灰黄色	内、輪積み痕残る	29
24	土師器 甕	15.9	[7.6]	—	口縁～胴上部完形	白色砂粒、長石(少)	明赤褐色～暗褐色	内、丁寧なナデ光沢有り	25.26.38
25	土師器 甕	—	[6.1]	9.0	底部完形 底辺部1/2	白色砂粒、長石、石英	内、明赤褐色 外、暗赤褐色	内、二次焼成による剥落著しい	1.21.38
26	土師器 甕	(18.0)	[9.4]	—	1/4	スコリア、白色砂粒、黒色粒	鈍い褐色	内、ナデ、輪積み痕残る	14
27	土師器 甕	(26.9)	[9.6]	—	口縁1/4	白色砂粒、黒色粒、長石	内、橙褐色 外、鈍い橙褐色	外、二次焼成、ヘラケズリ	15.16
28	土師器 甕	—	[14.8]	7.6	1/4	白色砂粒、長石(多)、石英	内、赤褐色 外、褐色～黒色	内、丁寧にナデ光沢有り	10.40
29	土師器 甕	26.0	22.8	(8.6)	2/3	白色砂粒、長石(少)、スコリア(少)	内、黄褐色～明赤橙褐色 外、黄灰色～橙褐色、黒色	内、斑状にスス付着	24.26.38



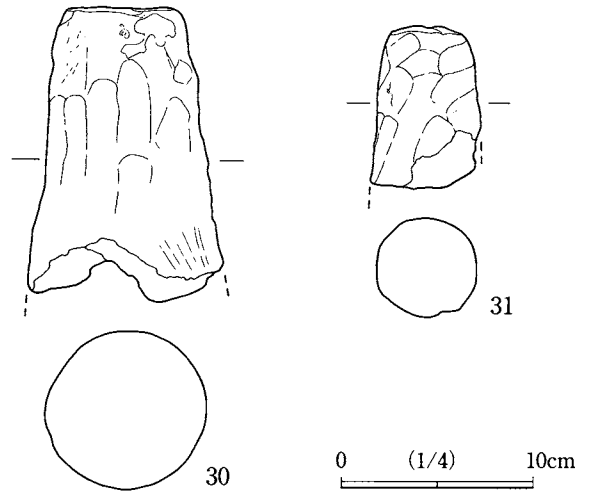
第98图 SI-017号实测图



第99図 SI-017号出土遺物実測図

14・15はミニチュア土器で、ともに鉢形をしている。  
14は粘土紐を用いた成形で、指頭で丁寧に押さえている。  
15の底部は極めて厚い。

17～26は土師器甕である。口縁部は丸く外反し、ヨコナデを施し、口唇部は17・21・23が肥厚している。胴部上半は20・22・24・26が縦方向のヘラ削り、17・21・23は横方向のヘラ削りである。18・19・25は底部の破片で、胴部下半はいずれも横方向のヘラ削りである。19は断面V字形の擦痕が無数にあり、深いもので2mm、浅いものは傷程度である。方向は底部から放射状になっているが、10mm～15mm幅の単位で方向性が認められる。



第100図 SI-017号出土遺物実測図(2)

27～29は土師器甕である。いずれもラッパ状に開く器形で、口縁部は外反する。口縁部はヨコナデで、胴部は縦方向のヘラ削りを施している。内面は横方向に丁寧にナデている。

30・31は土製支脚である。

### SI-018号竪穴住居跡 (第101図, 図版19, 106)

本遺構はL3-15グリッド付近に位置し、台地中央部の標高約37.4mに立地する。形態はやや扁平な隅丸方形で、規模は3.9m×4.6mを測る。主軸方位はN-9°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしており、確認面からの深さは48cm～60cmを測る。支柱穴は対角線上に4基検出され、径60cm～70cm、深さ37cm～53cmを測る。カマドよりも左側の2基の柱穴はいずれも住居廃棄時に柱の抜き取りが行われたことがその形態から窺える。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径50cm、深さ17cmを測る。床面は堅緻に踏み固められており、コーナー部分を除くほぼ全域が硬化している。壁際には、深さ4cm～7cmの壁溝が全周する。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体である。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は120cmを測り、袖部は壁から80cm延びている。構築材は暗灰色砂質土を主体とする。煙道部は35cm程度掘り込まれていた。

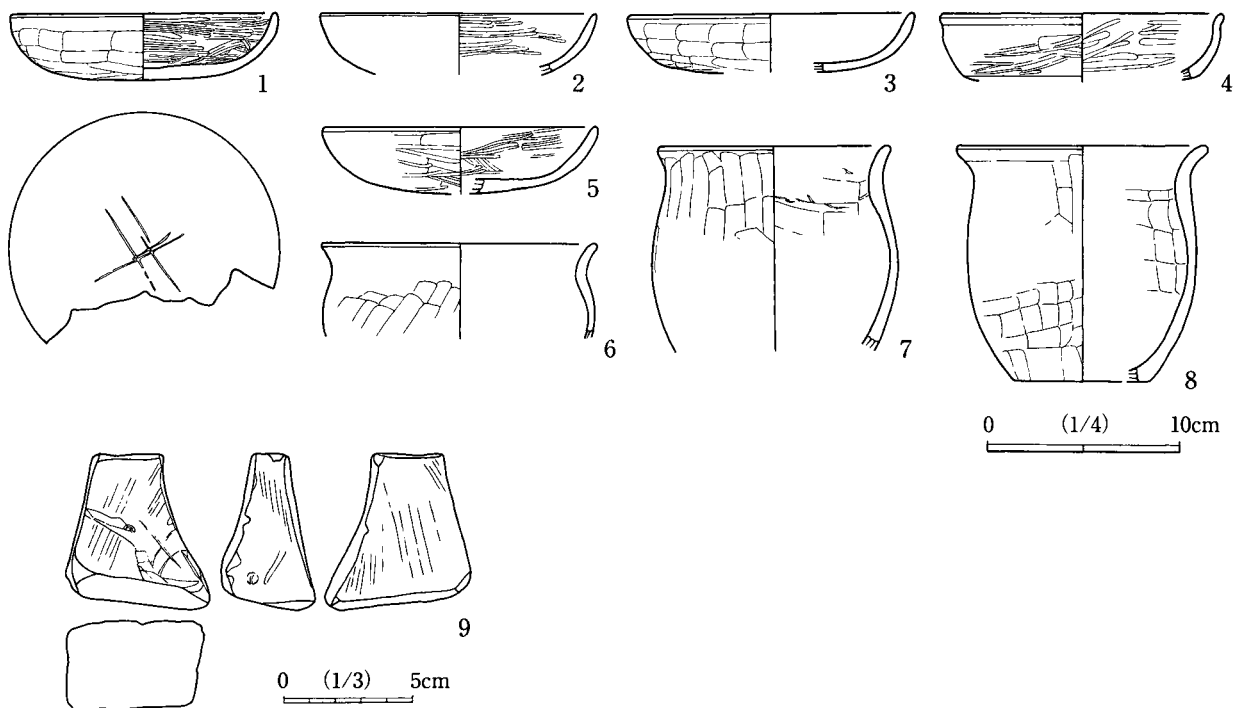
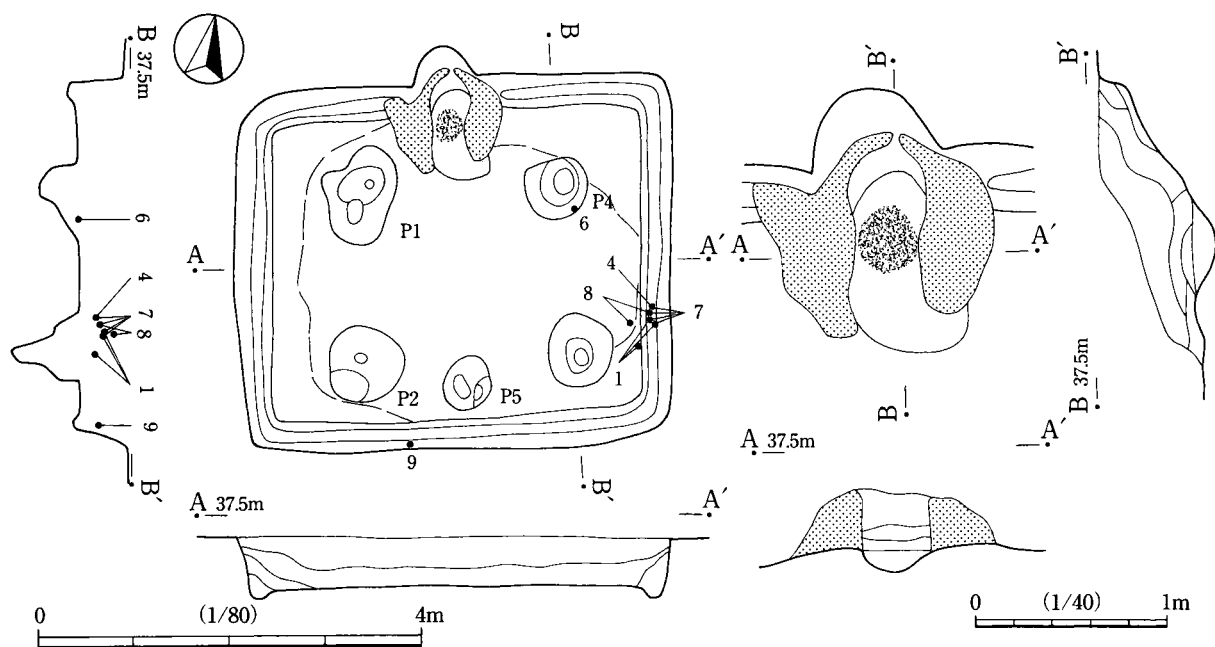
1～5は土師器坏である。口径はいずれも14cm～15cmの製品で、口縁部は4だけが僅かに屈曲して外へ開く。口縁部はヨコナデで、体部は横方向のヘラ削り、内面は3を除いて丁寧に磨いている。なお、4は内外面とも赤彩される。また、1は底部外面に線刻がある。

6～8は土師器甕である。いずれも小形の甕で、胴部は上半で縦方向、下半で横方向のヘラ削りを施す。  
9は凝灰岩製の砥石である。

第21表 SI-018号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	14.0	3.5	丸	2/3	細砂粒、スコリア(多)	鈍い橙褐色	底部外面線刻	
2	土師器 坏	(14.4)	[3.2]	-	1/3	白色微砂粒、石英、スコリア	黄橙褐色	外、摩耗激しい	1
3	土師器 坏	(15.0)	[3.1]	-	1/3	細砂粒、白針、長石、スコリア	黄橙褐色	内外、器面摩耗	1
4	土師器 坏	(14.8)	[3.5]	-	口縁1/4	スコリア	暗赤褐色	内外、赤彩	1.14
5	土師器 坏	(14.4)	[3.5]	丸	1/4	細砂粒、スコリア	黄橙褐色	内、ミガキ	1
6	土師器 甕	(14.4)	[5.0]	-	1/2	スコリア、白色砂粒	鈍い橙褐色	底部に線刻有り	1.7.10.13
7	土師器 甕	(12.2)	[10.7]	-	口縁3/4他1/4	白色砂粒、白針、長石、スコリア	鈍い橙褐色～黒褐色	内、ナデ痕残る	1.7.12.13.14.18
8	土師器 甕	(13.2)	12.3	(7.0)	口縁～底部1/4	スコリア、白色砂粒	内、褐色 外、黒褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	1.8.12

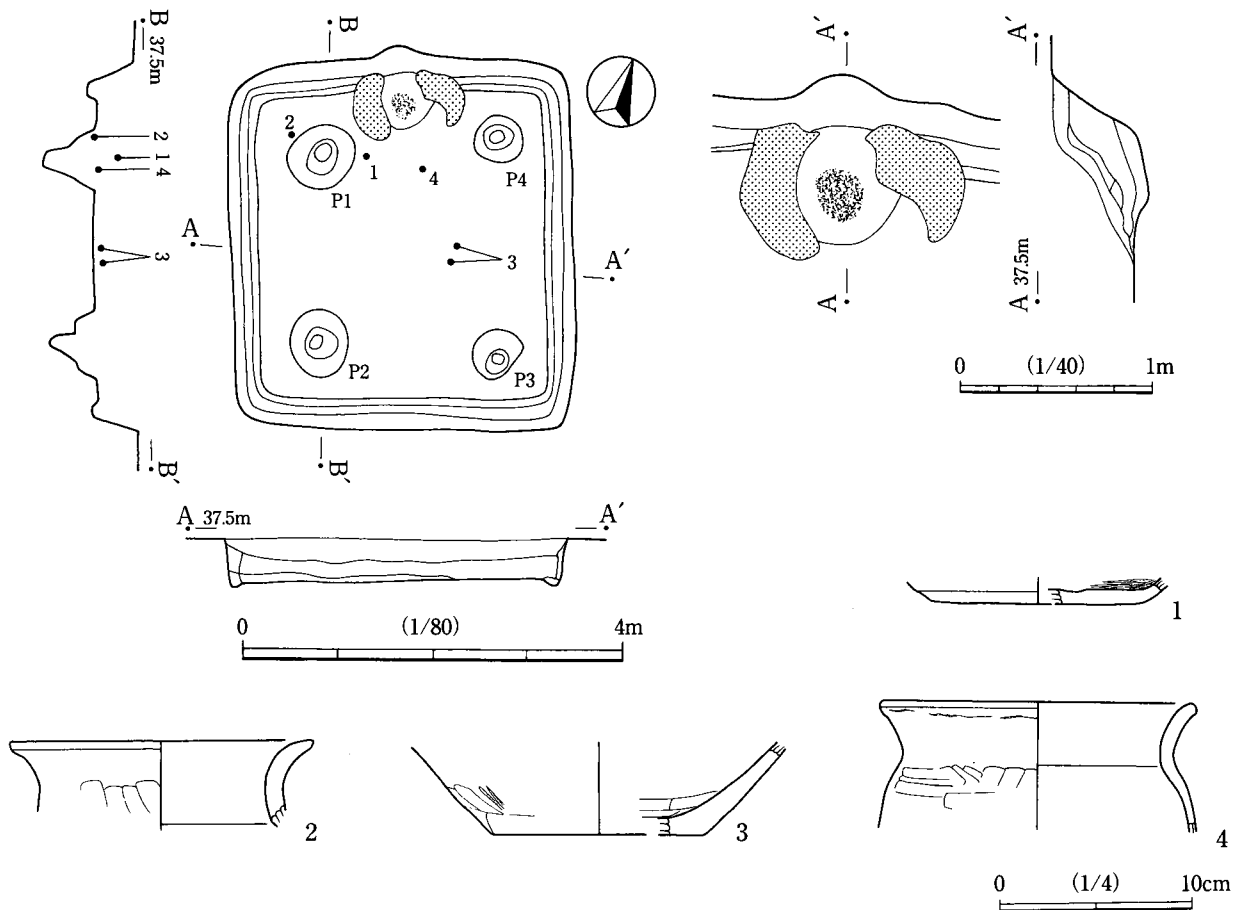




第101図 SI-018号実測図

SI-019号竪穴住居跡 (第102図)

本遺構はL3-21グリッド付近に位置し、台地中央部の標高約37.4mに立地する。形態は方形で、規模は3.9m×3.6mを測る。主軸方位はN-6°-Wである。住居の掘り込みはしっかりとしており、確認面からの深さは39cm~43cmを測る。主柱穴は対角線上に4基検出され、径50cm~75cmを測る。深さは、カマド右脇の一基を除いて約53cmとほぼ揃っている。カマド右脇の一基については深さ44cmで、ほかの柱穴よりも浅くなっている。さらに配置も対角線上には所在するが、やや外側にずれて位置する。主柱穴の覆



第102図 SI-019号実測図

土はしまりを欠き、柱の抜き取りが想定される。壁際には、深さ4cm～9cmの壁溝が全周する。覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主体である。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は115cmを測り、袖部は壁から72cm延び、砂質土を含む暗褐色土を主体とする。煙道部は壁外へ25cm程度掘り込まれていた。

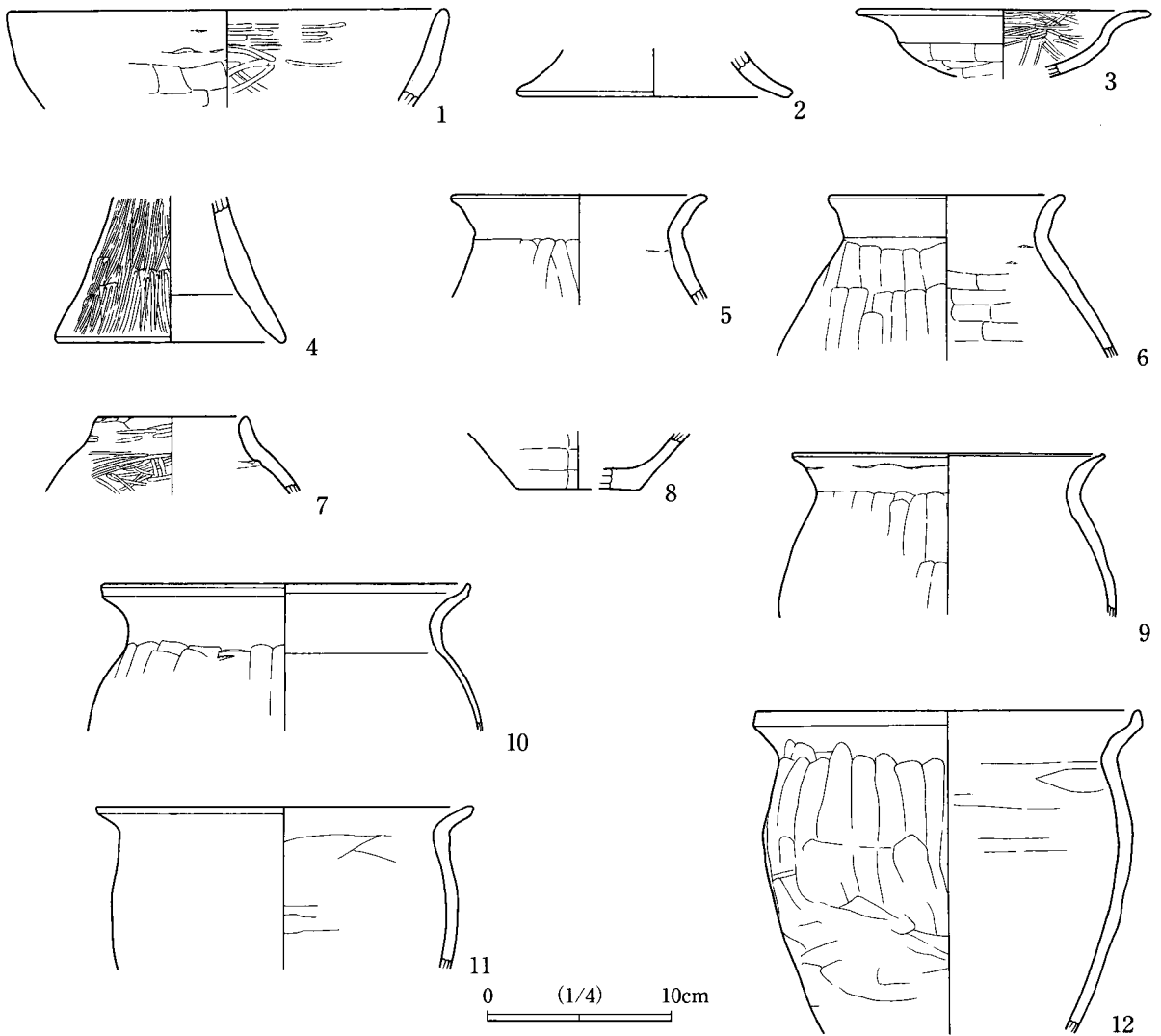
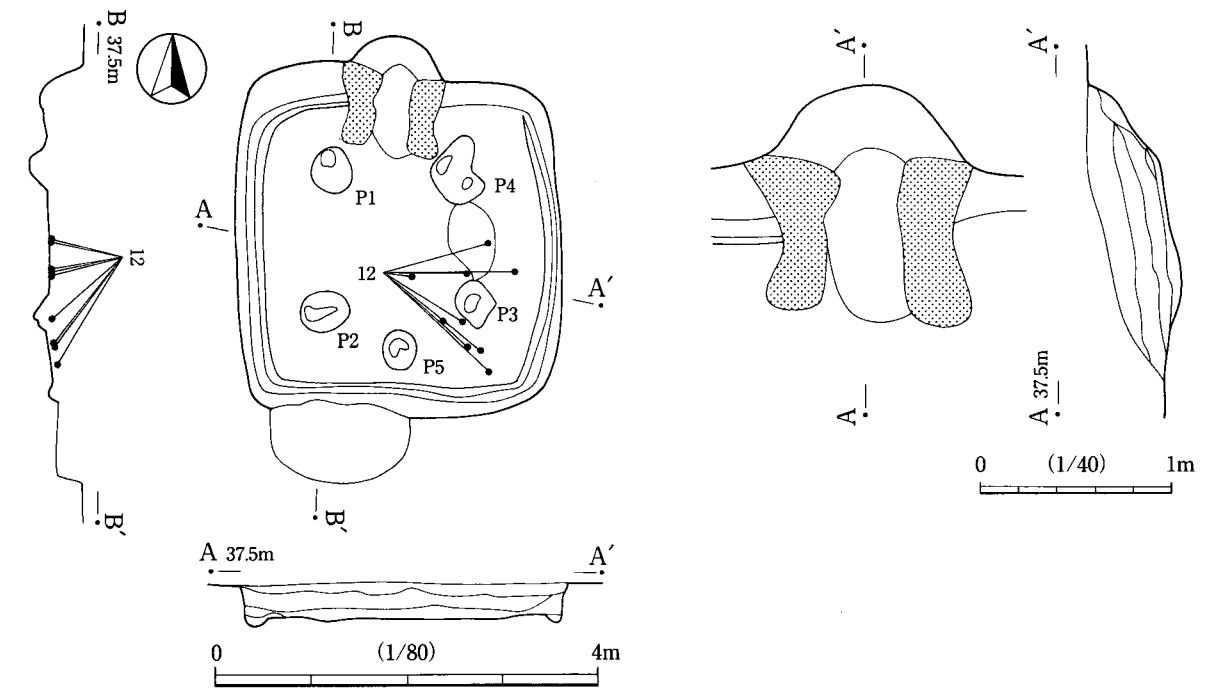
遺物は少なく、図示した遺物も破片資料である。1はロクロ土師器坏で、体部下端及び底部全面に回転ヘラ削りを施している。内面は赤彩されている。2～4は土師器甕である。

第22表 SI-019号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	ロクロ土師器 坏	—	[1.3]	(11.0)	底部1/4	砂粒、白針、スコリア (少)	赤褐色～暗褐色	内、ミガキ痕有り 内外、赤彩	3
2	土師器 甕	(16.0)	[4.6]	—	口縁1/8	白色砂粒、スコリア	暗赤褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	6
3	土師器 甕	—	[4.9]	(11.2)	底部1/3	白色砂粒、スコリア	鈍い赤褐色	内、ヘラナデ 外、ヘラケズリ	11.12
4	土師器 甕	—	[4.9]	(11.2)	残存部1/4	白色砂粒、長石	褐色、外、一部黒色	内、一部剥落 外、黒斑有り	11.12

SI-020号竪穴住居跡 (第103図, 図版19, 106)

本遺構はK3-58グリッド付近に位置し、台地中央部の標高約37.4mに立地する。遺構の南側壁の一部をSK-080号土坑によって切られる。形態は方形で、規模は3.7m×3.4mを測る。主軸方位はN-2°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしており、確認面からの深さは33cm～37cmを測る。主柱穴はカマドの右脇の一組を除いて、対角線上に3基検出され、径45cm～60cm、深さ17cm～23cmを測り、いずれも浅い。カマドの右脇の柱穴は2基が並んで検出されている。よりカマドに近い柱穴は深さ23cmを測り、カマド左側の主柱穴と類似する。カマドから離れる柱穴は、深さ13cmを測るのみであるため、補助的な柱



第103图 SI-020号实测图

穴と考えられる。しかしながら、支柱穴の配置としてはこの2基を対として捉えた方が構造的に安定している。北側壁のカマドの右脇を除いた壁際には、深さ4cm～9cmの壁溝が全周する。床面の右側は一部攪乱を受けている。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体である。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は105cmを測り、袖部は壁から75cm延びている。ロームブロックを多く含む褐色土を基礎としている状況が窺える。袖の遺存状態はよくないが、覆土の状態から砂質土を袖の構造材としていたと判断される。煙道部は壁外へ40cm程度掘り込まれていた。

1は土師器鉢である。口縁部はヨコナデであるが、体部外面は粗雑なナデ、内面は横方向のヘラ削りに近い調整である。

2～4は土師器高坏である。3は坏部の破片である。口縁部は外反しヨコナデを施し、坏底部は横方向のヘラ削りである。内面は黒色処理され、ヘラ磨きを施し、外面は赤彩される。2・4は脚部の破片で、2は裾部が広がるものであるが、4は脚柱部から直線的に裾部へいたる。脚裾部はともにヨコナデを施すが、4は外面を丁寧に磨いている。

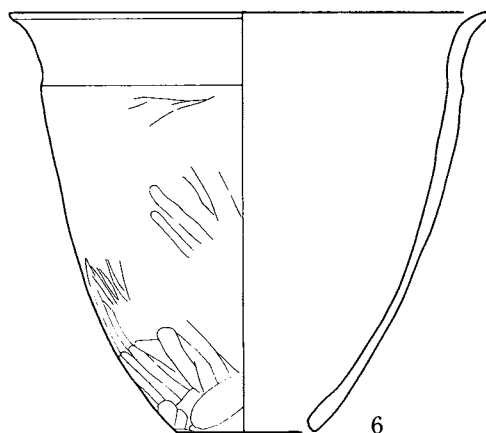
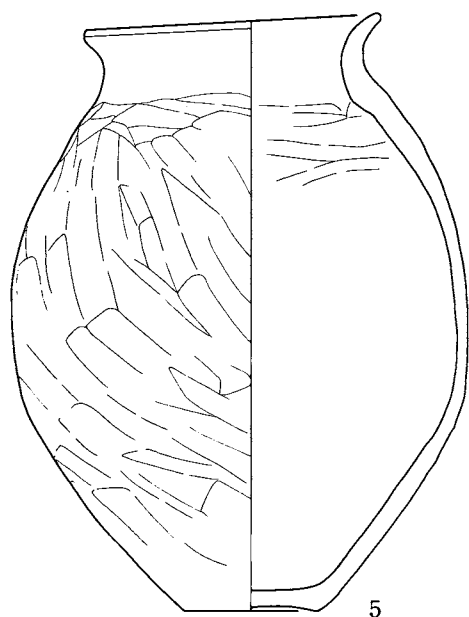
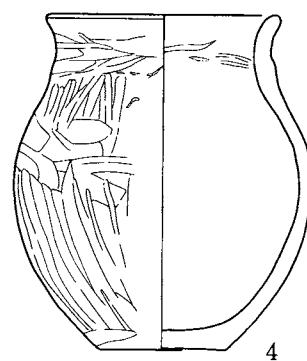
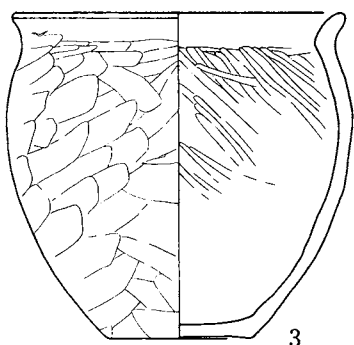
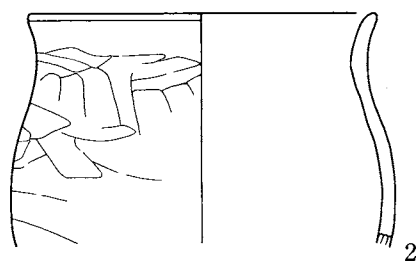
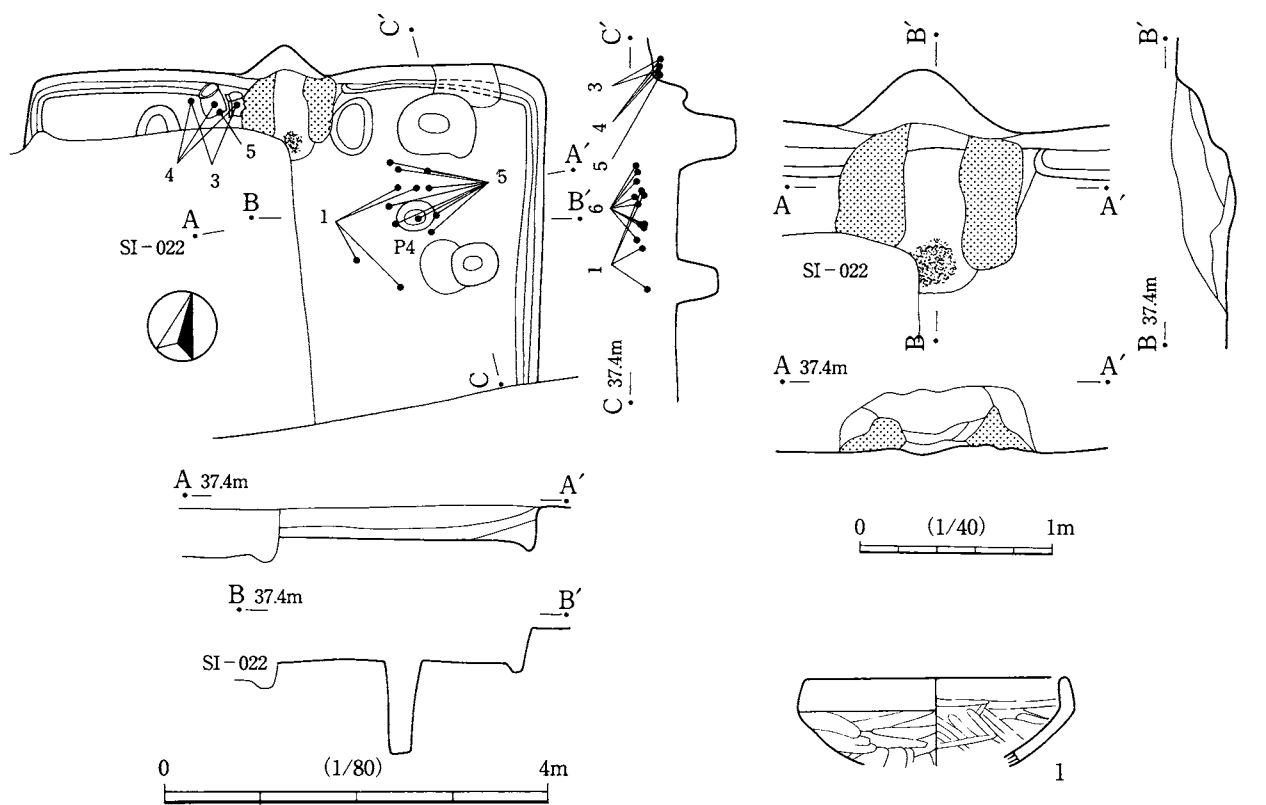
5～12は土師器甕である。口縁部を丸く納めるものと、受け口状を呈するものがあり、後者は9世紀代の所産と考えられる。12は床面から出土しており、鬼高期の遺物も散見されるが、9世紀代の竪穴住居跡と考えられる。5・6は最大径を胴部中位にもつもので、同一個体の可能性もある。口縁部はヨコナデで、胴部は縦方向のヘラ削りを施す。7は小破片であるが、口縁部が内傾していて広がらない。9・10・12は受け口状を呈する口縁部で、胎土・色調・調整・焼成とも酷似している。口縁部はヨコナデで、胴部は上半を縦方向、下半を横方向のヘラ削りで調整している。

第23表 SI-020号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器鉢	(24.0)	[5.3]	—	口縁1/8	雲母、白色砂粒	内、灰褐色 外、鈍い褐色	内、ミガキ 外、ヘラケズリ	14
2	土師器高坏	—	[2.5]	(15.0)	底部1/8	スコリア、白色砂粒	暗赤褐色	内外、横方向のナデ	14
3	土師器高坏	(16.0)	[3.7]	—	口縁1/8	白色砂粒	内、黒色 外、暗赤褐色	外、赤彩	14
4	土師器高坏	—	[8.0]	(12.6)	脚部1/3	白色砂粒、長石(各少)	内、褐灰色 外、鈍い褐色	外、縦方向に密にミガキ	14
5	土師器甕	(14.0)	[6.0]	—	口縁1/8	白針、スコリア	鈍い褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	14
6	土師器甕	(12.8)	[8.8]	—	口縁一部、胴上部1/4	白色砂粒、黒色粒、長石、スコリア	内、橙褐色 外、鈍い褐色	外、摩耗	14
7	土師器甕	(8.0)	[4.2]	—	口縁1/4	スコリア、雲母	褐色	内、横方向のナデ	14
8	土師器甕	—	[3.0]	(6.6)	口縁1/4	スコリア、雲母	内、赤褐色 外、灰黄褐色	内、器面剥落	14
9	土師器甕	(17.0)	[8.8]	—	口縁1/2 胴一部	白色砂粒、白針	暗褐色、黒褐色、褐色	内外、炭素吸着	14
10	土師器甕	(20.4)	[8.0]	—	口縁-胴上部1/4	細砂粒、白針(各少)	暗褐色-黒褐色	内外、炭素吸着、薄手な作り	14
11	土師器甕	(20.4)	[9.0]	—	口縁-胴上部1/4	白色砂粒(多)、長石、石英	暗黒褐色一部赤褐色	外、器面の摩耗著しい	1.13
12	土師器甕	(21.0)	[17.8]	—	2/3	白色砂粒、長石、石英	暗褐色-褐色	内外、炭素吸着	1.2.3.4.5.6.8.10.11

### SI-021号竪穴住居跡(第104図, 図版19, 20, 106)

本遺構はK4-47グリッド付近に位置し、台地中央部の標高約37.2mに立地する。住居跡南側は事業範囲外のため未調査である。本遺構はSI-022号竪穴住居跡と重複関係にあり、後に構築されたSI-022号により、北側壁を除く住居の西側半分を切られる。形態は隅丸方形と考えられる。規模は主軸方向に3.7m確認できた。住居の幅は5.5mを測る。主軸方位はN-14°-Wである。住居の掘込みは比較的浅く、確認面からの深さは27cm～38cmを測る。支柱穴は対角線上になるであろう部分に1基のみ検出された。径40cm、深さ115cmを測る。SI-022号のカマド右側付近にもう一基の支柱穴が所在するものと思われるが、調査の段階では検出されていない。カマド右脇には貯蔵穴が検出された。形態はほぼ長楕円形で長軸長80cm、短軸長62cm、深さ55cmを測る。床面には他に3基のピットが所在した。カマドの両袖の外側に隣接して径45cm～60cm、深さ14cm～17cmを測る浅いピットが各1基ずつ検出された。性格は不明であるが、左側のピットとカマドの袖の間から、ほぼ完形の甕と甌が出土していることとの関連が窺われる。主



0 (1/4) 10cm

第104图 SI-021号实测图

柱穴と東側壁との間に径45cm、深さ45cmを測る小ピットが検出されている。これも性格は不明である。検出された範囲の壁際には、深さ5cm～10cmの壁溝が全周する。覆土はローム粒を微量に含む暗褐色土を主体とし、上層にはローム粒を多量に含む褐色土が堆積する。

カマドは北側の壁の中央に位置する。左袖から火床部の一部にかけてSI-022号によって破壊されている。最大幅は95cmを測り、袖部は壁から70cm延びている。袖部はローム粒子を含む暗灰白色砂質土を主体とする。袖部の基礎として、ロームブロックと暗褐色土を含む褐色土を用いている。煙道部は壁外へ30cm程度掘り込まれていた。

遺物はカマド周辺から多く出土し、カマド右側から土師器甕(3)(4)(5)が出土した。カマド側から(3)が横位、(5)が正位、(4)が逆位となっている。また、土師器甕(6)はP4周辺から出土している。

1は土師器坏である。口縁部は内傾して立ち上がり、ヨコナデを施す。底部は横方向のヘラ削りで、内面に粗くヘラ磨きを施している。

2～5は土師器甕である。3は胴部の一部を欠損する。口縁部は短く、最大径は胴部上半にある。胴部は斜め方向のヘラ削り後、縦方向のナデ調整を行う。底部内面は著しく剥落する。4は最大径が胴部中位にあり、胴部は上部が縦方向、中位が横方向、下半が縦方向のヘラ削りで、さらにヘラ磨きを施している。内面も磨かれ光沢がある。5は最大径が胴部中位よりやや下に位置するもので、胴部の一部を欠損するがほぼ完形である。口縁部は外反しヨコナデを施す。胴部は、口縁部下に横方向のヘラ削りを施し、他は底部にいたるまで斜方向のヘラ削りである。内面は横位のヘラナデである。6は土師器甕で、欠損部分もあるがほぼ完形である。口縁部は外反してヨコナデを施す。胴部は縦方向から斜方向のヘラ削りであるが、その上をナデており、ヘラ削りは不明瞭である。

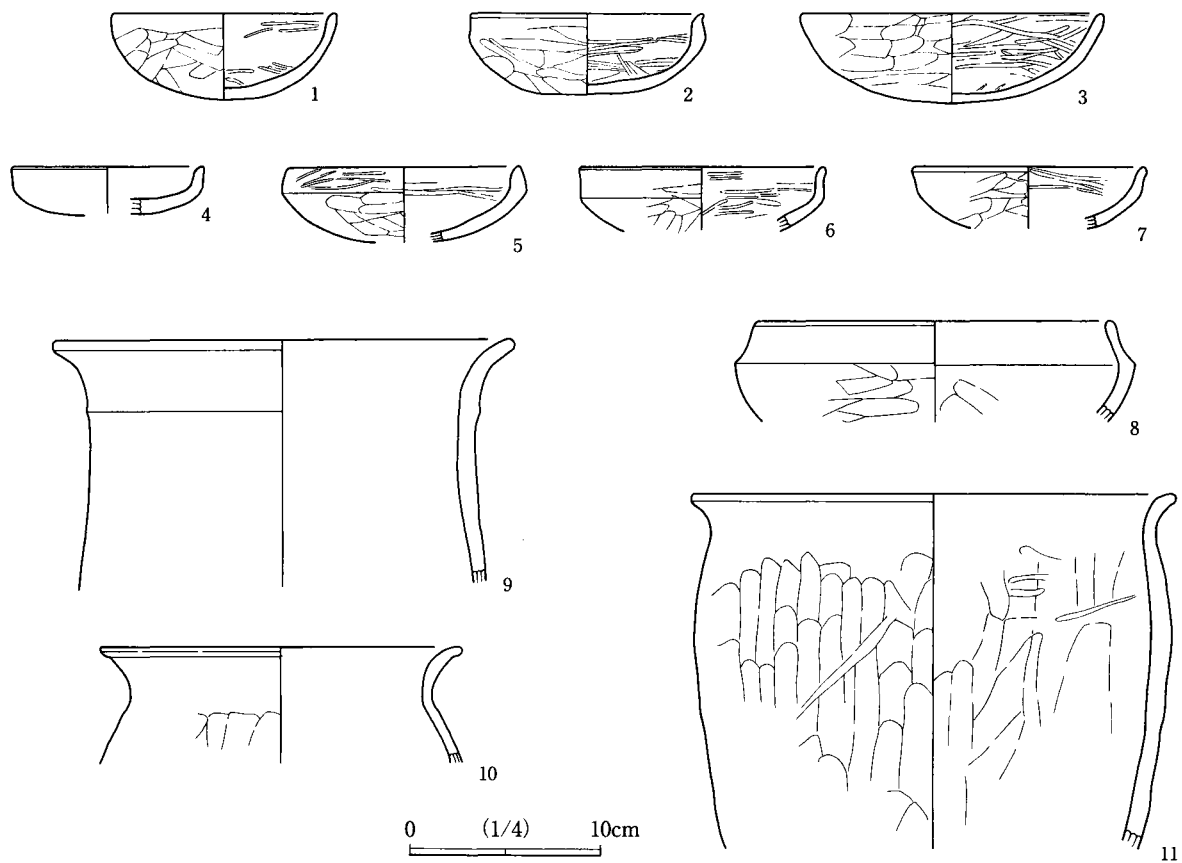
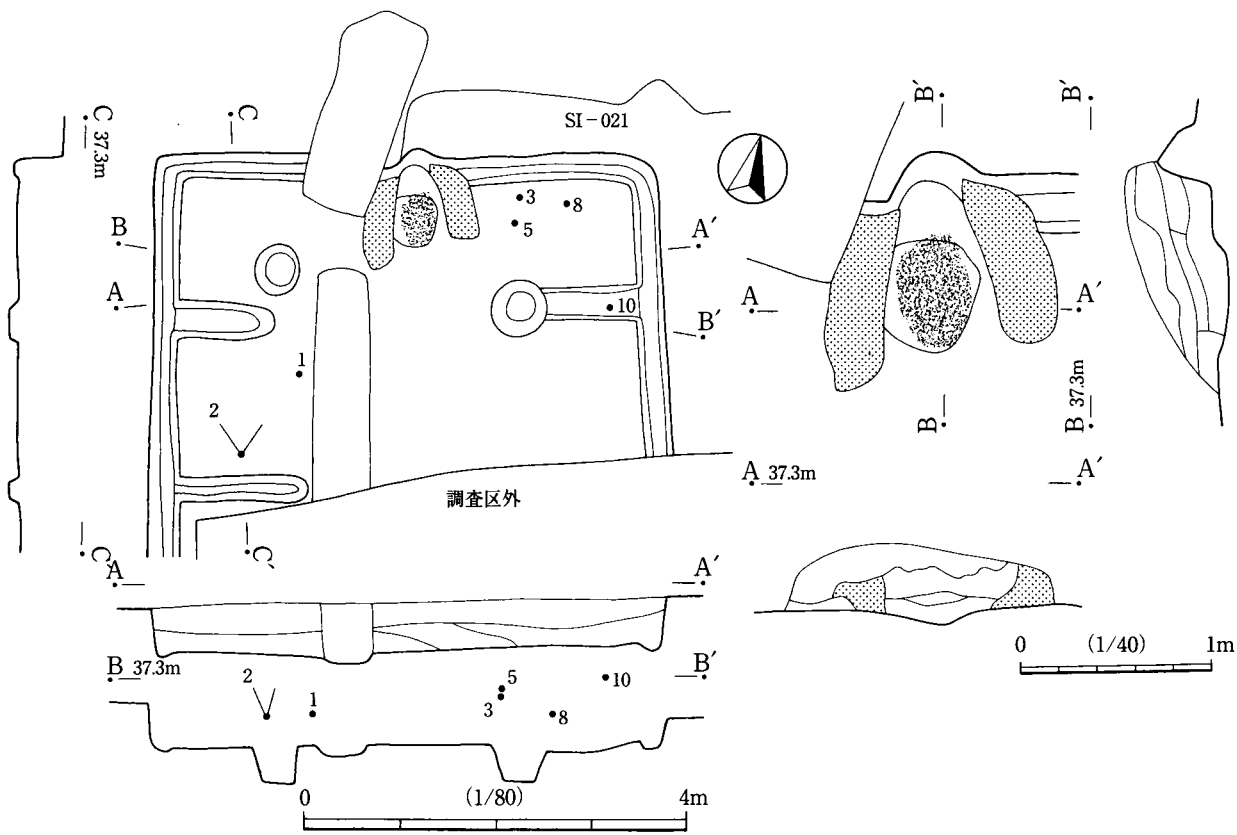
第24表 SI-021号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(13.6)	[4.6]	—	1/2	白色砂粒、長石、黒色粒	赤褐色	内、ミガキ	1.12.14.21
2	土師器 甕	(9.0)	[12.2]	—	口縁の一部	砂粒、雲母	明赤褐色	外、ヘラケズリ	1
3	土師器 甕	17.2	17.0	7.6	1/2	白色砂粒(多量)、長石、石英	内、黒色 外、明赤褐色	内、ミガキ的に強くヘラナデ	27.37
4	土師器 甕	11.8	17.5	6.2	1/2	白色砂粒(多)、長石、石英	内、黒色 外、明赤褐色	外、頸部～肩部に鋭利なヘラケズリ	25
5	土師器 甕	15.8	31.4	7.0	3/4	白色砂粒(多量)、長石、スコリア	赤褐色一部明褐色		26
6	土師器 甕	26.0	22.0	(7.0)	3/4	砂粒、黒色粒、スコリア	明黄褐色一部黒色	内外、器面摩耗	1.3.4.5.7.22.23.24.28

### SI-022号竪穴住居跡 (第105図, 図版20, 106, 107)

本遺構はK4-56グリッド付近に位置し、台地中央部の標高約37.2mに立地する。SI-021号竪穴住居跡と重複関係にあるが、土層断面の観察からSI-021号の廃絶後に本遺構が新しく掘込まれた状況が窺える。南側壁周辺は調査区域外である。カマド付近及び住居中心部には近世の耕作に伴うと考えられる攪乱を受けている。形態はほぼ正方形を呈すると考えられる。規模は主軸方向に4.1mまで確認されている。横方向には5.4mを測る。主軸方位はN-19°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしており、確認面からの深さは48cm～50cmを測る。主柱穴はカマド側に2基検出され、径50cm～60cm、深さ40cmを測る。主柱穴付近から間仕切り溝と考えられる3条の溝が検出された。いずれも壁溝に向かって横方向に延びており、深さは10cm～11cmを測る。調査区域外に当たる南壁を除いた壁際には、深さ5cm～9cmの壁溝が全周する。覆土はローム粒子を多量に含む褐色土を主体とする。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は120cmを測り、袖部は壁から95cm延び、暗灰白色砂質土を主体とする。袖の基部はローム・砂質土を含む褐色土によって構築される。



第105图 SI-022号实测图

1～8は土師器坏である。1・3は半球形で口縁部が僅かに直立する。2・4・6・7は口縁部が直立し、口唇部が僅かに外へ摘み出される。4・5は口縁部が直立もしくはやや内傾して立ち上がる。いずれも底部はヘラ削りで、内面は4を除いてヘラ磨きが施される。

9は土師器甑である。破片が小さいため、傾きが不明である。外面は丁寧にナデられ、調整は不明である。11は外面縦方向のヘラ削り、内面も砂粒の動きが観察できる強いヘラナデである。

第25表 SI-022号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	11.6	4.5	丸	1/2	白色砂粒、スコリア	内、明赤褐色 外、鈍い黄褐色	外、摩耗著しい	1.12
2	土師器 坏	12.2	4.3	丸	3/4	白色砂粒、長石(少)、スコリア(少)	鈍い黄褐色	内、ミガキ	1.11
3	土師器 坏	(15.8)	4.7	丸	1/2	白色砂粒、長石、石英	内、暗黄褐色、 外、黄褐色	内、ミガキ痕明瞭	8
4	土師器 坏	(10.0)	[2.5]	丸	口縁の一部	砂粒	内、明赤褐色 外、赤褐色		1
5	土師器 坏	12.0	[3.9]	-	1/2	白色砂粒、黒色粒、石英、長石	褐色	内、ミガキ、稜強く有り	1.4
6	土師器 坏	(12.8)	[3.3]	-	口縁の一部	砂粒	明赤褐色	内、ミガキ 外、ヘラケズリ	1
7	土師器 坏	(12.0)	[3.2]	-	口縁の一部	砂粒、雲母	内、黒色 外、鈍い黄褐色	内、ミガキ 外、ヘラケズリ	1
8	土師器 坏	(18.4)	[5.3]	-	口縁1/6	白色微砂粒、スコリア、長石(少)	内、橙褐色 外、明赤褐色	外、口縁強く横ナデ有り	3
9	土師器 甑	(24.0)	[18.0]	-	口縁の一部	砂粒	明赤褐色-橙色	外、器面摩耗している	1.11.21
10	土師器 甑	(18.8)	[6.1]	-	口縁の一部	砂粒	内、鈍い褐色 外、赤褐色	外、ヘラケズリ	5
11	土師器 甑	(25.0)	[18.7]	-	1/6	白色砂粒(多)、長石、スコリア(多)	橙褐色		1.14.15

### SI-023号竪穴住居跡 (第106, 107図, 図版20, 107)

本遺構はK4-33グリッド付近に位置し、台地中央部の標高約37.3mに立地する。形態は方形で、規模は4.9m×5.3mを測る。主軸方位はN-22°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしており、確認面からの深さは75cm～78cmを測る。支柱穴は対角線上に4基検出され、径70cm～100cm、深さ45cm～57cmを測る。カマド右側の支柱穴付近から間仕切り溝と考えられる2条の溝が検出された。いずれも壁溝に向かって横方向に延びており、深さは3cm～10cmを測る。カマド寄り右側の支柱穴に隣接して深さ49cmの柱穴が検出された。柱穴の配置から、当初から支柱穴として所在したとは考えにくい間仕切り溝がこの柱穴から掘り込まれていることから、支柱穴の補助的な役割を果たすと想定される。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径42cm、深さ30cmを測る。壁際には、深さ6cm～7cmの壁溝が全周する。覆土は大小のロームブロックを多く含む暗褐色土を主体とする。

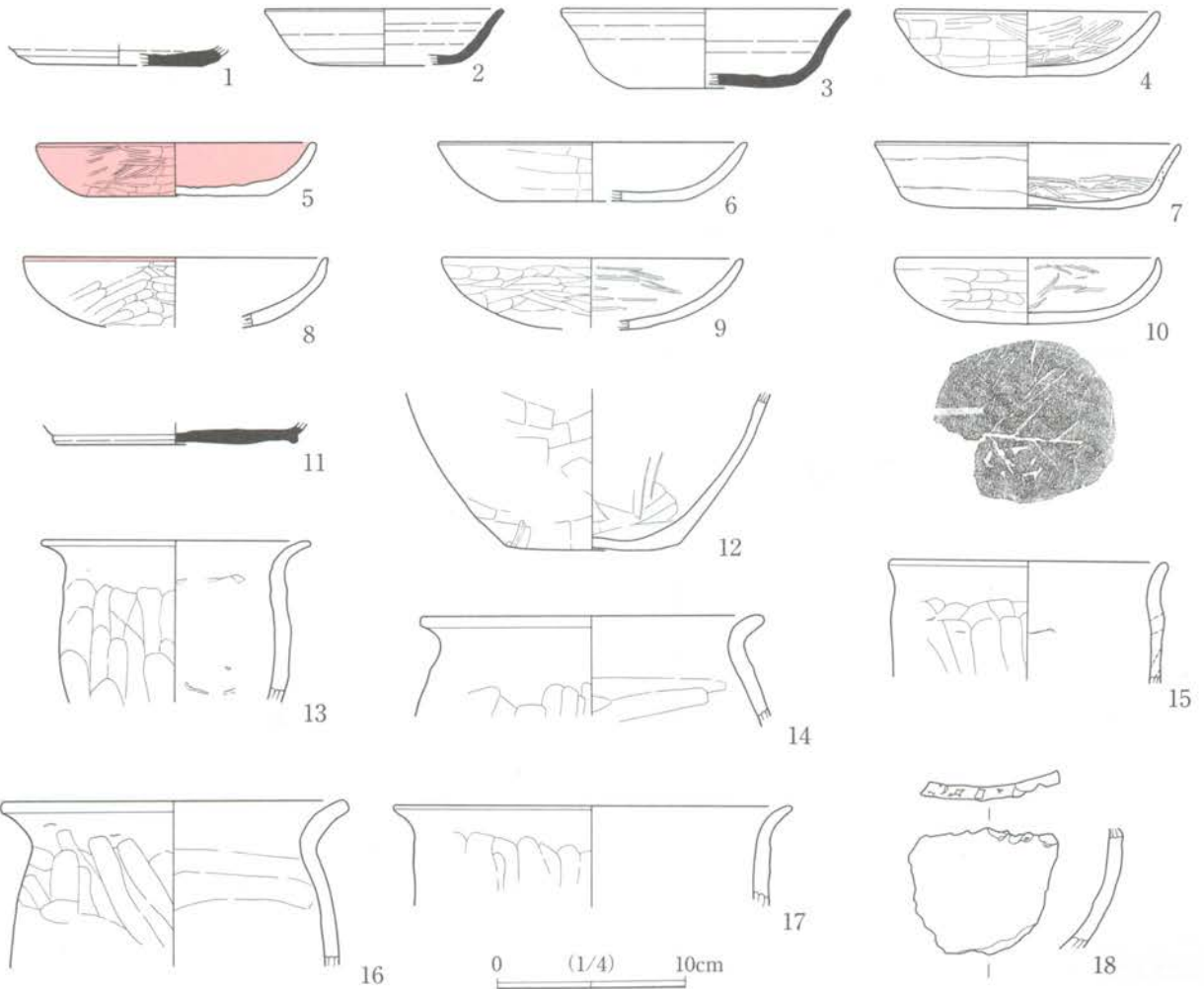
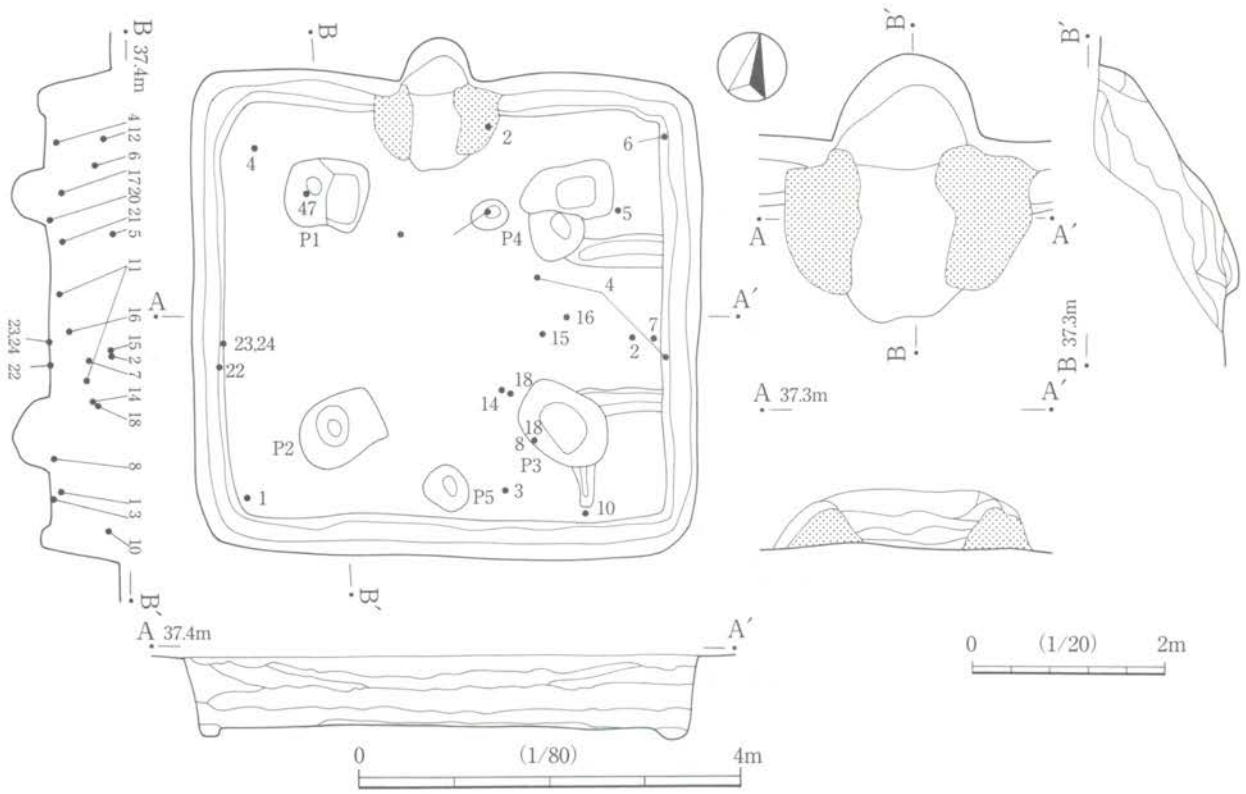
カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は130cmを測り、袖部は壁から74cm延び、砂質土を含む暗褐色土を主体とする。袖の基部はロームブロックを多く含む暗褐色土により構築される。煙道部は壁外へ46cm程度掘り込まれていた。

1～3は須恵器坏で、胎土に長石粒・石英粒が目立つ。1は底部の破片で、体部下端及び底部全面に回転ヘラ削りを施す。ロクロ回転方向は右である。2は体部下端を手持ちヘラ削り、3は器面の遺存状況が悪く観察できないが、底部はヘラ切り後一方向ヘラ削りである。

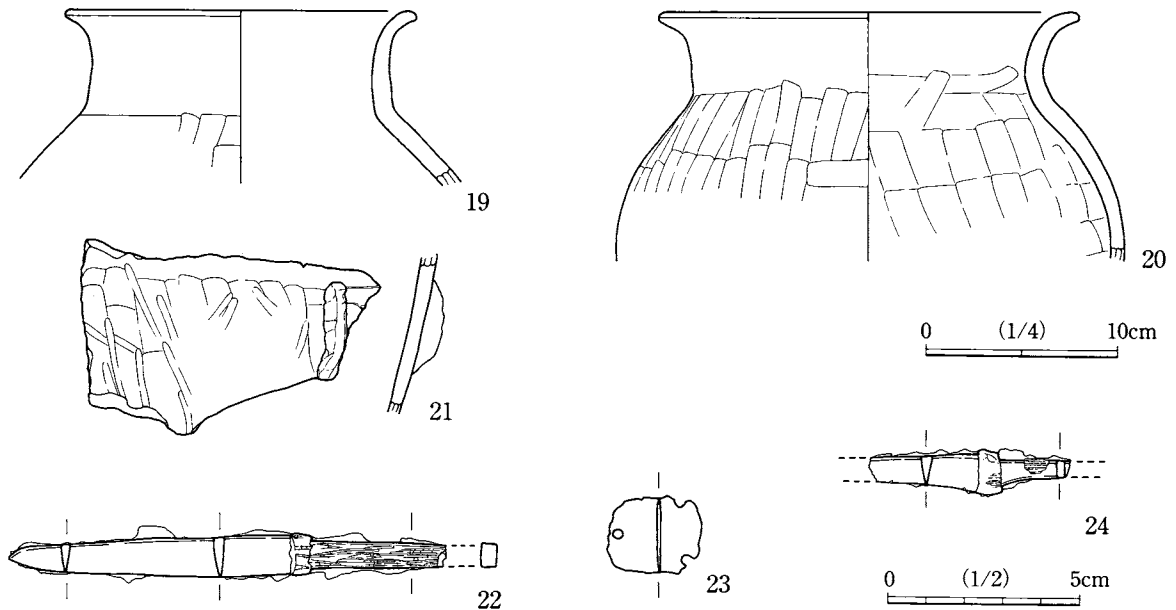
4～10は土師器坏である。大きく分けて平底で浅い盤状のものと、丸底のものがある。平底となるのは5・6・7・10であるが、体部の立ち上がりはそれぞれ異なっている。7は体部全体にヨコナデを施し、底部は不定方向のヘラ削り、内面は丁寧に磨いている。5は体部が横方向、底部は不定方向のヘラ削りで、内外面とも赤彩されている。6は器面の摩耗が著しく、調整はほとんど観察できない。10は底部に木葉痕がある。4・8・9は丸底の坏で、4は完形である。体部から底部にかけては横方向のヘラ削りを施し、8は内外面を、9は内面を磨いている。11は須恵器高台坏である。胎土は灰白色を呈し、軟質の焼成である。高台は低く断面方形を呈し、底部外面は回転ヘラ削りである。

12～21は土師器甕で、20は口縁部が全周するが、他は破片である。14・16・20は最大径が胴部に位置す





第106图 SI-023号实测图



第107図 SI-023号実測図

るが、13・15・17は口縁部に最大径が位置する。いずれも口唇部は丸く納められ、口縁部にヨコナデを施している。胴部は縦方向のヘラ削りで、底部を含む破片である12は横方向のヘラ削りを施している。18はおそらく粘土紐接合部で破損した擬似口縁となるものであるが、破損部を刻んでおり、粘土紐接合に伴う製作技法を表している。21は口縁部近くの破片で、破片上部にヨコナデがみられる。この位置に、長さ約5cmの隆帯状の貼り付けがある。

22・24は刀子、23は青銅製帯金具の裏座である。孔は3孔で、あるいは鈍尾かもしれない。長さ24.7mm、幅19.8mm、厚さ1.6mmである。

SI-024号竪穴住居跡（第108図，図版21，107）

本遺構はK1-95グリッド付近に位置し、台地中央部の標高約37.5mに立地する。床面下から一組の主

第26表 SI-023号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	-	[1.1]	(8.8)	底部1/2	細砂粒、長石、スコリア(各少)	内、灰白色、外、灰色	内外、摩耗	31
2	須恵器 坏	(12.6)	3.0	(8.0)	口縁-底部の一部	石英、長石	灰色		15
3	須恵器 坏	(15.0)	4.2	(8.4)	1/2	白色砂粒、長石	黄灰色	器面若干摩耗	1.50
4	土師器 坏	14.0	3.5	丸	ほぼ完形	白色砂粒、長石	内、鈍い黄色+赤色~黒色	内外、剥落激しい	1.50
5	土師器 坏	(14.8)	2.8	9.6	1/2	細砂粒、長石(少)、スコリア	内、鈍い黄色+赤色 外、赤色+黄褐色	内外、全面赤彩	1.9.58
6	土師器 坏	(16.4)	3.1	(10.0)	2/3	細砂粒、長石、スコリア(各少)	鈍い黄褐色	内外、器面摩耗	1.8
7	土師器 坏	(16.0)	3.3	(13.0)	1/2	細砂粒、スコリア(少)	鈍い黄褐色	底部摩耗	14
8	土師器 坏	(16.0)	[3.7]	-	1/3	細砂粒、スコリア(少)	黄褐色	外、口縁部赤彩有り	1.49
9	土師器 坏	(16.0)	[3.8]	-	1/4	白色微砂粒、スコリア(少)	黄褐色	内、ミガキ丁寧	1
10	土師器 坏	(13.8)	3.6	7.0	口縁1/8 底部3/4	白色砂粒、長石(少)	内、黄褐色 外、黒褐色	外、底部木葉痕	1.17
11	須恵器 高台付坏	-	[1.1]	(8.8)	底部1/2	細砂粒、スコリア(少)	内、灰黄色 外、灰色	貼付高台 内外、器面摩耗	12.47
12	土師器 甕	-	[8.3]	9.1	底辺部1/4 底部完形	白色砂粒、スコリア、小石	褐色	内、器面剥落激しい	1.25.26
13	土師器 甕	13.8 ~ 17.0	[8.6]	-	口縁1/4	砂粒	赤褐色	内、輪積み痕残る	1
14	土師器 甕	(18.0)	[5.9]	-	口縁の一部	砂粒	赤褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	1.41
15	土師器 甕	(14.4)	[6.5]	-	口縁の一部	白色砂粒、石英	明赤褐色		27
16	土師器 甕	(18.0)	[9.0]	-	口縁の一部	雲母、スコリア、砂粒	明赤褐色		57
17	土師器 甕	(21.2)	[5.5]	-	口縁の一部	雲母、砂粒	明赤褐色		37
18	土師器 甕	-	-	-	剥部破片	砂粒	内、鈍い褐色 外、明赤褐色	擬似口縁	24
19	土師器 甕	(18.4)	[9.0]	-	口縁1/5	白色砂粒(多)長石(少)スコリア(少)	内、鈍い褐色 外、赤褐色		1.59
20	土師器 甕	22.0	[13.0]	-	口縁-胴上部 完形	白色砂粒、長石(多)、黄土粒、スコリア	明赤褐色		13
21	土師器 甕	-	-	-	胴部片	白色砂粒(多)、長石、スコリア(多)	赤褐色	内、器面摩耗	1.40

柱穴と南側壁面より一回り小さい壁溝が検出され、拡張するために建て替えが行われたことが明らかとなっている。建て替え前の住居の規模、柱穴については後述する。形態はほぼ方形で、規模は4.9m×4.6mを測る。主軸方位はN-9°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしており、確認面からの深さは46cm～61cmを測る。主柱穴は対角線上に4基検出され、径は50cm～60cm、深さ50cm～70cmを測る。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径55cm、深さ22cmを測る。壁際には深さ6cm～12cmの壁溝が全周する。覆土はローム粒子を若干含む褐色土を主体とする。

拡張前の住居は、南側を除く壁面及びカマドを共有していたと考えられる。形態はほぼ正方形で、規模は主軸方向に4.6mを測る。主柱穴は想定される住居範囲の対角線上に4基検出され、径60cm～110cm、深さ47cm～65cmを測る。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は100cmを測り、袖部は壁から90cm伸び、暗灰白色砂質土を主体とする。袖の基部はロームを多量に含む褐色土により構築される。

1は須恵器高坏の坏部破片と思われる。実に堅緻な焼成で、薄く仕上げられている。坏底部との境に稜があり、口縁部に櫛状工具の刺突文が、坏底部にヘラ描きがある。2は須恵器坏身の破片で、底部内面にナデ調整が行われている。底部はロクロ右回転の回転ヘラ削りである。3～6は土師器坏である。3・5は精緻な胎土で、赤色のスコリアを若干含む。底部はヘラ削りを施すが、内外面とも丁寧に磨いており、ヘラ削り痕は不鮮明である。また、3は内面を、5は内外面を漆仕上げしている可能性がある。6は砂粒が目立つ胎土で、調整も粗雑である。体部外面はヘラ削り後ナデを施すが、凹凸や接合痕が残っている。

7～11は土師器高坏である。7・8は坏部の破片で、口縁部はヨコナデ、底部は横方向のヘラ削りである。ともに内面は黒色処理され、8は外面に赤彩される。9～11は坏部破片で、10はやや開いているが、9・11は長脚である。外面は縦方向のヘラ削りで、赤彩される。坏部内面はいずれも黒色処理される。

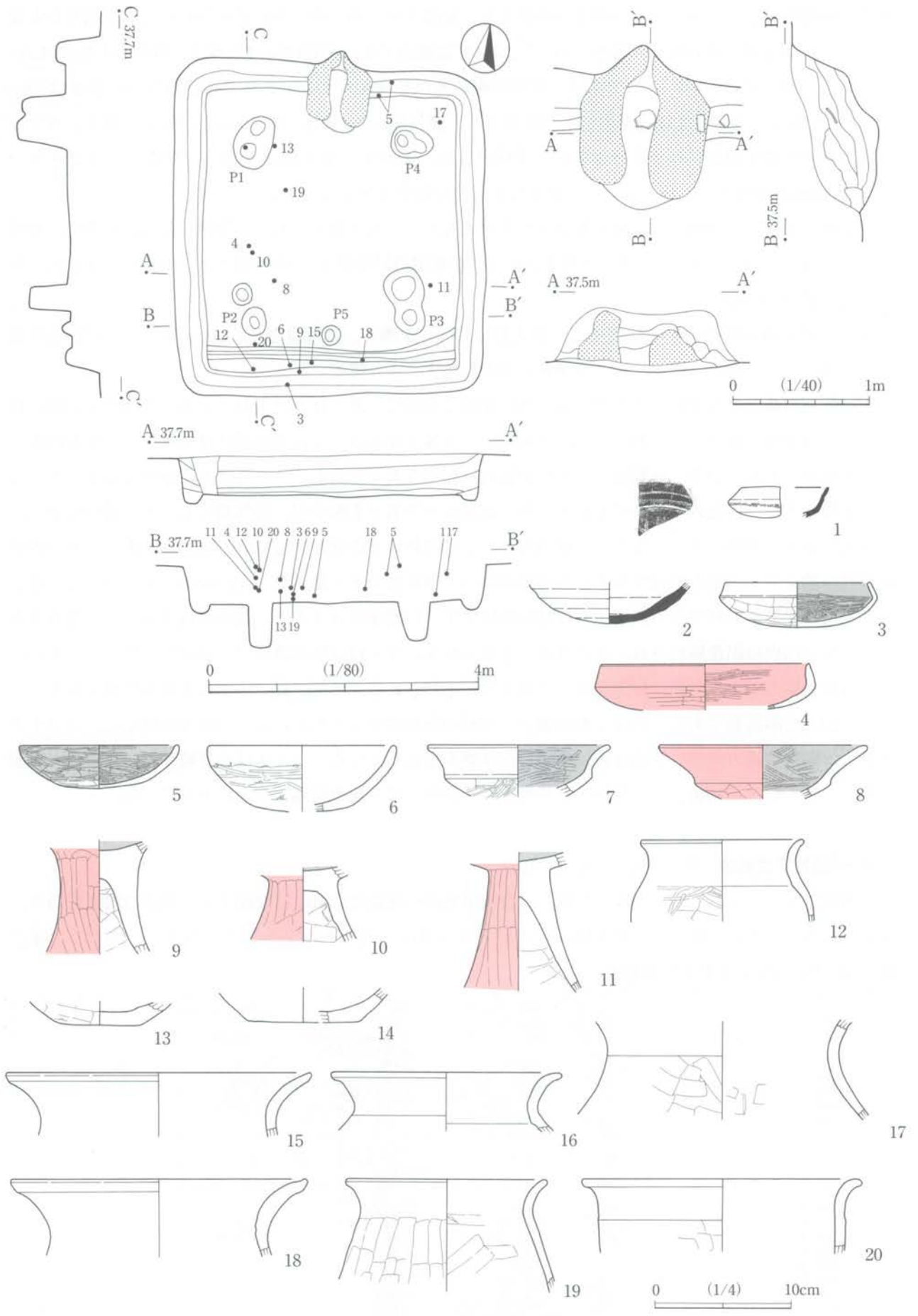
12～20は土師器甕である。12は小形の甕で、球形の胴部になるとと思われる。口縁部は外反し、ヨコナデで整え、胴部は横方向のヘラ削り後、僅かにヘラ磨きを加えている。5・6は底部破片で、被熱して脆弱である。15・17・18は胎土に雲母粒・石英粒を多く含み、17・18の胴部は丁寧にナデている。

### SI-025竪穴住居跡（第109図，図版21，107）

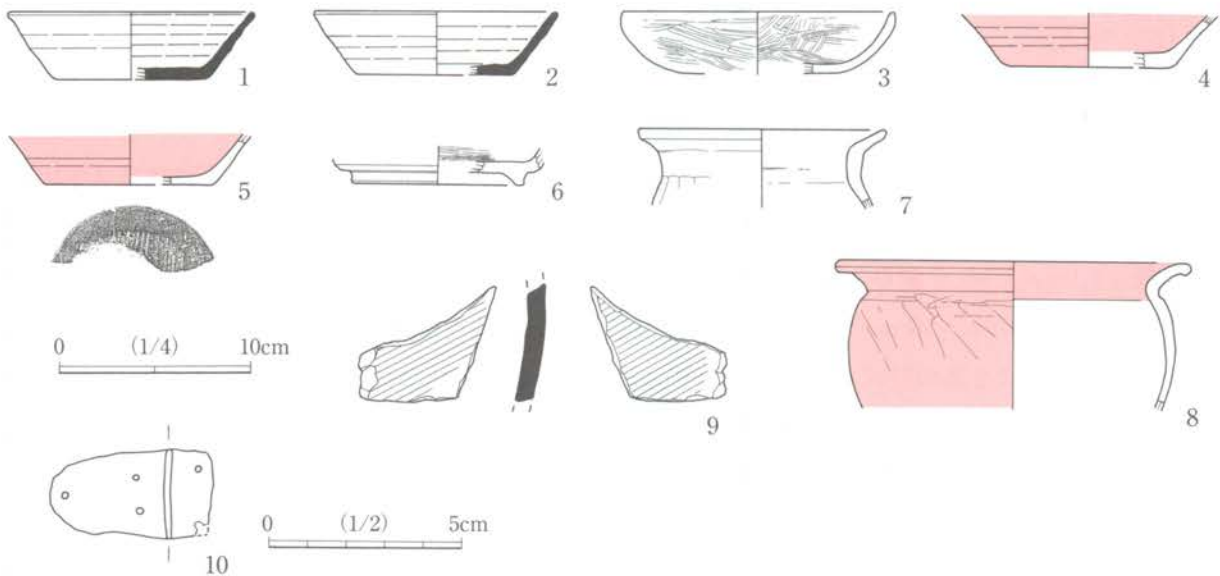
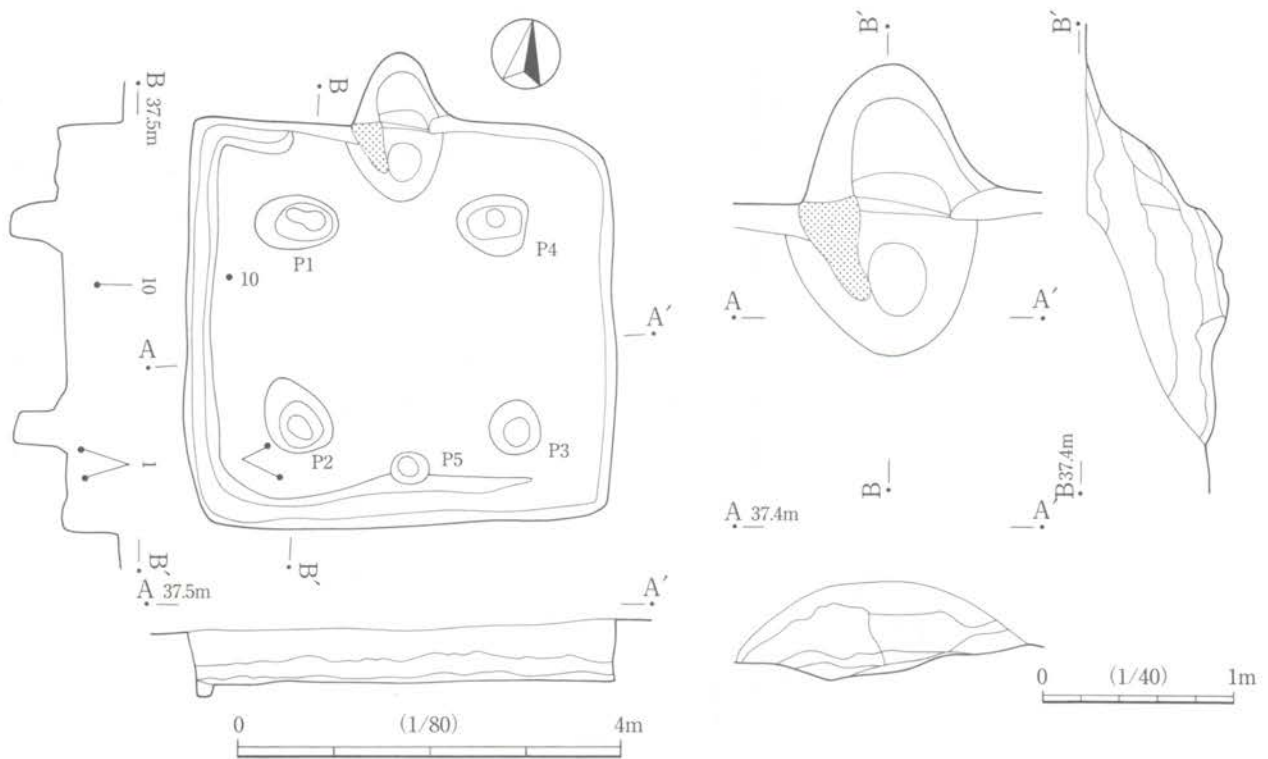
本遺構はK2-23グリッド付近に位置し、台地中央部の標高約37.4mに立地する。形態は隅丸方形で、規模は4.3m×4.4mを測る。主軸方位はN-8°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしており、確認

第27表 SI-024号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 高坏	-	[2.2]	-	口縁一部	微砂粒、長石（少）	灰色	外、櫛状の列点文有り	8
2	須恵器 坏	-	[3.1]	丸	底部～体部1/6	長石、黒色粒	灰色		1
3	土師器 坏	10.6	3.3	丸	ほぼ完形	微砂粒、スコリア（少）	内、鈍い橙黄褐色～黒色 外、明橙褐色～灰黒褐色	内、黒色処理	18
4	土師器 坏	(15.4)	[3.3]	丸	口縁1/6	白色砂粒	赤褐色	内、ミガキ	26
5	土師器 坏	11.8	3.2	丸	ほぼ完形	微砂粒、スコリア（少）	鈍い黄色～灰黒色	黒色処理	1.33.38
6	土師器 坏	(14.0)	[4.9]	(7.0)	1/2	粗砂粒、長石、石英（多）、スコリア	鈍い黄色～赤褐色	内外、剥落、摩耗、著しい	19
7	土師器 高坏	(13.6)	[3.8]	-	口縁1/8	スコリア、長石	内、黒色 外、鈍い褐色	内、炭素吸着	1
8	土師器 高坏	(15.4)	[4.0]	-	口縁1/6	白色砂粒	内、黒色 外、鈍い赤褐色	外、赤彩	23
9	土師器 高坏	-	[8.3]	-	脚部1/2	白色砂粒、長石	坏部内黒色 脚部内鈍い褐色 脚部外、鈍い赤褐色	坏部内、黒色処理 脚部外、赤彩	17
10	土師器 高坏	-	[5.5]	-	脚部1/3	白色砂粒、長石、スコリア	坏部内、脚部内黒色 脚部外、暗赤褐色	坏部内、黒色処理 脚部外、赤彩	1.25
11	土師器 高坏	-	[10.3]	-	脚部1/2	白色砂粒、長石、（スコリア少）	坏部内黒色 脚部（内）鈍い褐色、（外）赤褐色	坏部内、黒色処理 脚部外、赤彩	31
12	土師器 甕	(12.0)	[6.0]	-	胴部上半1/4	白色砂粒	鈍い赤褐色		1.20
13	土師器 甕	-	[1.8]	6.4	底部完形	砂粒、スコリア（少）	灰黄褐色一部橙色	内外、剥落著しい	30
14	土師器 甕	-	[2.6]	(8.0)	底部1/3	粗砂粒、長石、石英	赤褐色	内外、剥落著しい	39
15	土師器 甕	(22.6)	[4.8]	-	口縁1/4	石英	明赤褐色		14
16	土師器 甕	(17.2)	[4.4]	-	口縁1/8	白色砂粒	鈍い赤褐色		1
17	土師器 甕	-	[7.2]	-	頸部1/5	長石、雲母	鈍い黄褐色		2
18	土師器 甕	(22.0)	[5.8]	-	口縁1/8	石英（多量）	明黄褐色	内外、横方向のナデ	13
19	土師器 甕	(15.0)	[8.5]	-	口縁1/3	長石、石英、スコリア	明赤褐色		29
20	土師器 瓶	(20.6)	[5.5]	-	口縁1/6	スコリア、白色砂粒	暗褐色		1.34



第108图 SI-024号实测图



第109図 SI-025号実測図

面からの深さは60cm～73cmを測る。支柱穴は対角線上に4基検出され、径55cm～85cm 深さ43cm～51cmを測る。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径35cm、深さ28cmを測る。壁際には、深さ1cm～3cmの壁溝が住居の左側において半周する。右半部については明確な掘込みは確認されていない。覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土を主体とする。

カマドは北側の壁の中央に位置する。遺存状態は悪く、左袖の一部が残存するのみで右袖はまったく遺存していない。カマドの掘方の最大幅は100cmを測り、袖部は壁から55cm延びている。煙道部は壁外へ60cm程度掘り込まれていた。

1・2は須恵器坏である。ともに体部は直線的に立ち上がり、体部下端にヘラ削りはみられない。底部は1が全面回転ヘラ削り、2は数方向のヘラ削りである。3は土師器坏である。口縁部はヨコナデを施し、体部外面から底部にかけて横方向のヘラ削りを施す。また、内外面ともヘラ磨きを施している。4・5はロクロ土師器坏である。4の切り離しは不明だが、底部は全面不定方向のヘラ削り。5は静止糸切り後、周辺部に手持ちヘラ削りを施す。また、体部下端に回転ヘラ削りを施している。ともに内外面赤彩される。6はロクロ土師器高台坏である。高台は断面台形で、体部は直立気味に立ち上がっている。内面にはヘラ磨きが施されている。

7・8は土師器甕の破片である。ともに口唇部が僅かに外方へ肥厚している。9は須恵器甕の破片で、転用硯として利用されたものである。内外面とも摩滅しているが、内面には墨痕と思われる黒ずみがある。

10は青銅製鉈尾の裏座と考えられる。やや細長い形状で、若干反っている。孔は5孔で、このうちの中央下の孔の中には折れた鉈が残っている。また、片面には径5mm弱の円形のもの4隅に見える。長さ43.5mm、幅23.0mm、厚さ1.7mmである。

第28表 SI-025号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	13.0	3.5	8.0	1/2	白色砂粒、白針、長石	灰色	外、底辺部なめらか	4.5
2	須恵器 坏	(12.8)	3.3	(8.4)	1/6	細砂粒、釜母、スコリア	灰白	内外、摩耗	1
3	土師器 坏	(14.2)	[3.2]	-	1/3	細砂粒、スコリア	黄褐色	器面なめらか	1
4	ロクロ土師器 坏	-	[2.7]	8.8	1/3	細砂粒、スコリア(少)	鈍い黄色-赤褐色	内外、赤彩 器面なめらか	1
5	ロクロ土師器 坏	-	[2.6]	(8.8)	1/6	白色砂粒(少)、スコリア(少)	赤褐色	内外、全面赤彩	1
6	ロクロ土師器 高台付坏	-	[2.0]	(9.0)	高台部1/4	白色砂粒、黒色粒、石英、スコリア	内、鈍い橙色 外、鈍い黄褐色	内、ミガキ有り 外、貼付高台	6
7	土師器 甕	(13.0)	[4.1]	-	口縁1/4	白色砂粒、スコリア	鈍い褐色	外、砂粒状の付着物がある	1
8	土師器 甕	(18.6)	[7.7]	-	1/10	白色砂粒、石英	鈍い黄褐色	内、口縁付近赤彩 外、赤彩	1
9	須恵器 甕片(転用硯)	-	-	-	胴部片	細砂粒、長石(少)	灰色	内外、転用硯	1

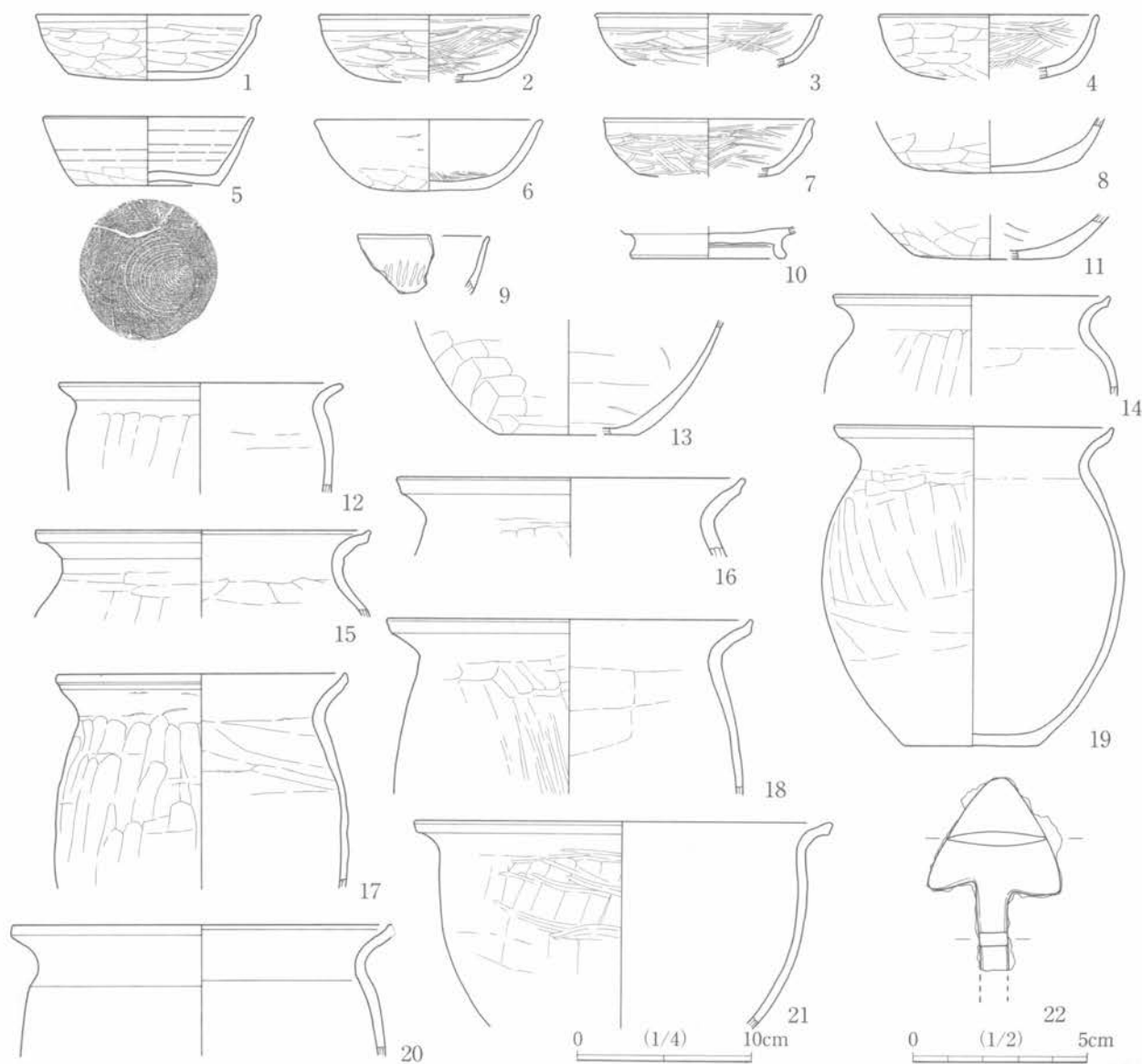
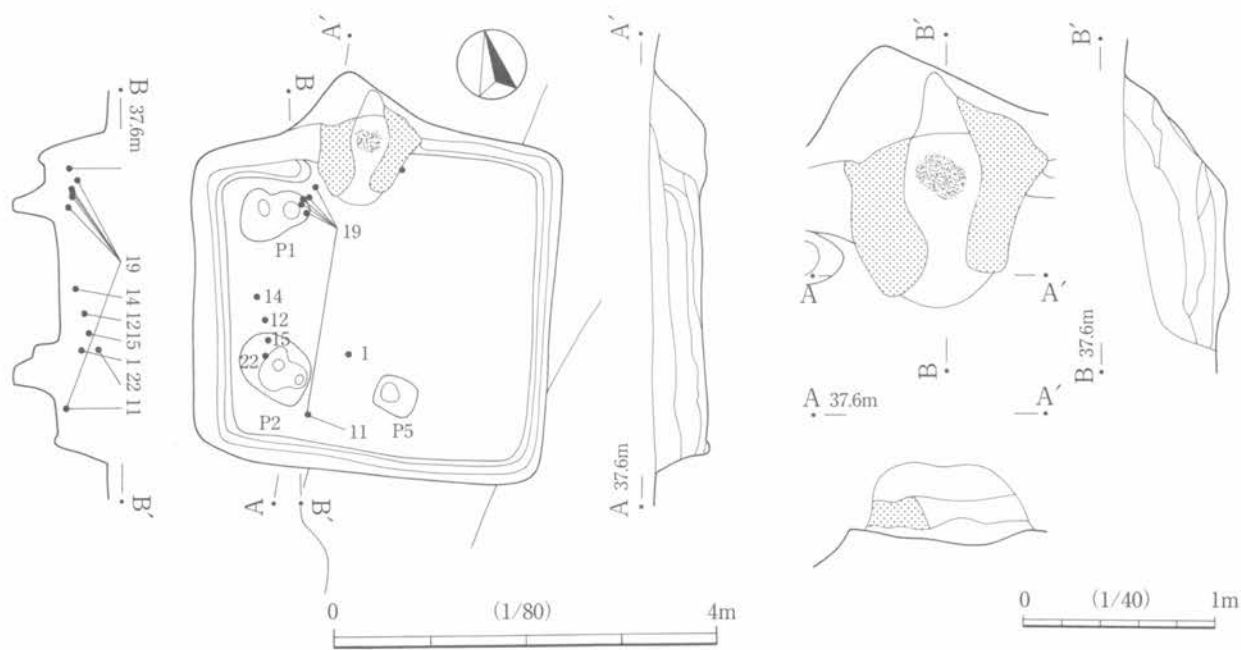
### SI-026号竪穴住居跡 (第110図, 図版22, 107)

本遺構はL3-46グリッド付近に位置し、台地中央部の標高約37.5mに立地する。本遺構は2年次にわたって調査が行われている。カマドを含む左半部は第1次調査、右半部は第2次調査による。形態は方形で、規模は4.0m×3.8mを測る。主軸方位はN-14°-Eである。住居の掘込みはしっかりとしており、確認面からの深さは37cm~58cmを測る。主柱穴は住居左半分にのみ検出されている。北西コーナー部、南西コーナー部ともに2基の柱穴が隣接しており、建て替えが行われた状況が窺える。径45cm~60cm、深さ37cm~48cmを測る。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径50cm、深さ26cmを測る。壁際には深さ3cm~7cmの壁溝が全周する。覆土はロームブロックを含む暗褐色土を主体とする。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は105cmを測り、袖部は壁から85cm延び、暗灰白色砂質土を主体とする。煙道部は壁外へ50cm程度掘り込まれていた。

1~4・6~8は土師器坏である。いずれも平底で、体部は横方向、底部は不定方向のヘラ削りを施している。1~3・7の口唇部はヨコナデが明瞭で、端部が僅かに外方へ肥厚する。内面はヘラ磨きが施される。5・9はロクロ土師器坏である。5は体部が直線的に開くもので、体部下端は回転ヘラ削り、底部は回転糸切り後、周辺部に回転ヘラ削りを施している。9は破片であり、体部外面に縦方向のヘラ状工具の痕跡が5列並んで残されている。10はロクロ土師器高台坏の底部破片で、高台は断面方形である。底部は全面回転ヘラ削りである。

11~21は土師器甕である。19はほぼ完形に復元できたが、他は破片である。19は口縁部をヨコナデ、胴



第110图 SI-026号实测图



部上半を縦方向のヘラ削り、下半を横方向のヘラ削りで、口唇部は受け口状を呈する。底部近くは被熱して、器面が剥落している。12は口唇部を丸く収めるが、他の甕はすべて受け口状となり、胴部上半に縦方向のヘラ削りが施されている。20はナデで消しているが、やはり縦方向のヘラ削りが施されている。また、18・21はヘラ削り後、僅かにナデを加えている。

22は鉄鏝である。

第29表 SI-026号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	12.8	3.8	8.6	2/3	砂粒、長石(少)、スコリア(多)	内、橙色 外、明黄褐色		21
2	土師器 坏	(12.6)	[3.9]	—	1/4	白色砂粒、スコリア(少)	橙色	内、ミガキ	27
3	土師器 坏	(13.0)	[3.0]	—	1/6	白色砂粒、黄土粒	橙色	内、ミガキ	23
4	土師器 坏	(12.6)	[3.7]	—	1/4	砂粒、長石、スコリア	口縁-1/2暗褐色 底部鈍い橙褐色	口縁部スス付着	23
5	ロクロ土師器 坏	(12.0)	3.9	8.1	底部完形 体部1/8	白色微砂粒、長石、石英、スコリア	内、黄褐色 外、橙色	器面なめらか	23
6	ロクロ土師器 坏	(13.0)	4.0	(7.0)	底部1/2 体部1/6	白色砂粒、長石、スコリア	橙色	内外、体部薄く剥落	27
7	土師器 坏	(12.0)	[3.3]	—	口縁-体部1/6	石英、スコリア	鈍い褐色	内、ミガ 外、ヘラケスリ後ミガキ	23
8	土師器 坏	—	[3.0]	(10.0)	底部1/2	細砂粒、長石(少)、スコリア	内、鈍い黄褐色 外、鈍い黄褐色+黒色	器面なめらか 底部丸みを帯びている	23
9	土師器 坏	—	—	—	口縁の破片	スコリア	明黄褐色	外、擦過痕あり	23
10	土師器 高台付坏	—	[1.8]	—	底部1/2	粗砂粒、白針、長石(多)、スコリア	鈍い褐色		23
11	土師器 甕	—	[2.6]	(2.6)	底部1/3	白色粒、石英	内、黒褐色 外、明赤褐色		22
12	土師器 甕	(16.2)	[6.2]	—	1/6	白色粒、石英	鈍い赤褐色	器面摩耗	5.23
13	土師器 甕	—	[8.0]	(6.6)	底部1/8	白色微粒(少々)	内、褐灰色 外、灰黄褐色		27
14	土師器 甕	15.8	[5.7]	—	口縁部2/3	白色砂粒(多)、長石(少)	鈍い黄褐色+橙色、灰黄褐色	口縁部スス付着有り	17.23.27
15	土師器 甕	(19.0)	[10.0]	—	1/8	白色粒、スコリア	暗灰黄色		6
16	土師器 甕	(20.0)	[4.4]	—	口縁1/6	白色粒、スコリア	鈍い褐色	二次焼成	23
17	土師器 甕	16.7	[16.8]	—	口縁部2/3 胴部1/6	白色砂粒(多)、白針、長石(多)	鈍い褐色+赤褐色、暗褐色	粘土紐巻き上げ痕有り	25.28
18	土師器 甕	(21.0)	[10.0]	—	1/8	白色粒、スコリア	褐色	二次焼成	23.25.27
19	土師器 甕	16.0	18.3	7.8	3/4	白色砂粒(多)、長石(多)、スコリア	鈍い黄褐色~赤褐色 内頸部外、1/3暗褐色		9.11.12.13.15.22.23
20	土師器 甕	(11.8)	[7.6]	—	1/12	白色粒、石英、スコリア	鈍い赤褐色		23
21	土師器 甕	(24.0)	[12.0]	—	1/6	白色粒、石英、長石粒	褐色~暗褐色	器面剥落	9.11.12.13.15.22.23

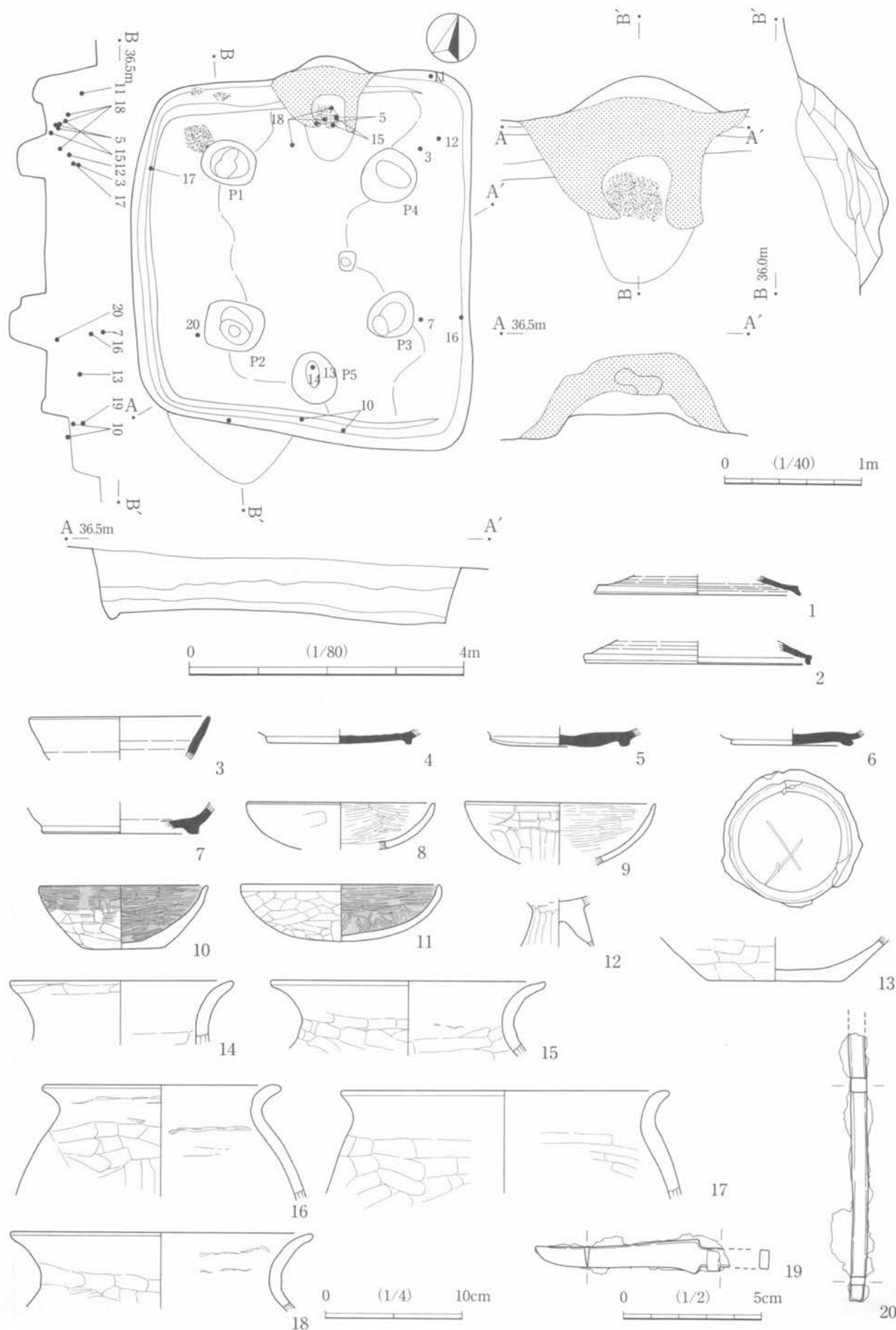
### SI-027号竪穴住居跡 (第111図, 図版22, 107, 108)

本遺構はE6-91グリッド付近に位置し、西側台地東緩斜面の標高約36.2mに立地する。南側壁周辺においてSK-021号土坑と重複する。本遺構の覆土中に所在することから、この土坑は本遺構よりも新しいことは明確である。形態はほぼ方形であるが、右半部が広く歪である。規模は概ね5.5m×5.0mを測る。主軸方位はN-10°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしており、確認面からの深さは西側で82cm、東側で67cmを測る。床面は西側において堅緻に踏み固められており、特に中央部分は硬化している。東側においては斜面上に立地するため、床面は軟弱であり、壁の立ち上がりも明確ではない。支柱穴は概ね対角線上に4基検出され、径62cm~85cm、深さ41cm~62cmを測る。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径75cm、深さ35cmを測る。右側の支柱穴2基の間に径30cm、深さ27cmの小ピット1基が検出されているが、性格は不明である。壁際には東側壁を除いて深さ4cm~12cmの壁溝が所在する。北西コーナー付近の床面には焼土が少量分布している。覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土を主体とし、床面付近には粘性の高い暗褐色土が堆積している。

カマドは北側の壁の中央に位置する。遺存状態は良好で、焚き口付近は崩落しているものの天井部分は残存していた。最大幅は150cmを測り、袖部は壁から85cm延びている。掛け口は径約40cmを測る。構築材は淡褐色砂質土を主体とする。

1・2は須恵器蓋である。ともに口縁部の破片で、端部は2が直立するが、1は外方へ開いている。現存部分にヘラ削りは観察できない。3~7は須恵器坏で、底部破片はいずれも高台が付いている。高台の断面は8が角張った方形、5・7は端部が丸くなった方形、6は潰れて低いものである。底部はいずれも回転ヘラ削りで、6は焼成前のヘラ描きがある。なお、底部内面はすべて摩耗している。8~11は土師器





第111图 SI-027号实测图

坏である。8・10は丸底の坏で、口縁部が直立しヨコナデを施している。体部外面は横方向のヘラ削りで、内面は丁寧に磨いている。9・10はやや深さのある坏で、口縁部はやはり直立しヨコナデ、体部は10が横方向のヘラ削り、9は横及び縦方向のヘラ削りを施している。内面は丁寧に磨かれている。12は土師器高坏である。脚部は面取りに近いような強い縦方向のヘラ削りである。

13～18は土師器甕で、いずれも破片である。口唇部は丸く納められ、胴部上位から横方向のヘラ削りを施している。器厚は比較的厚い。

19は刀子、20は鉄鏃である。19は茎及び鏃の一部を欠損する。

第30表 SI-027号出土土器観察表

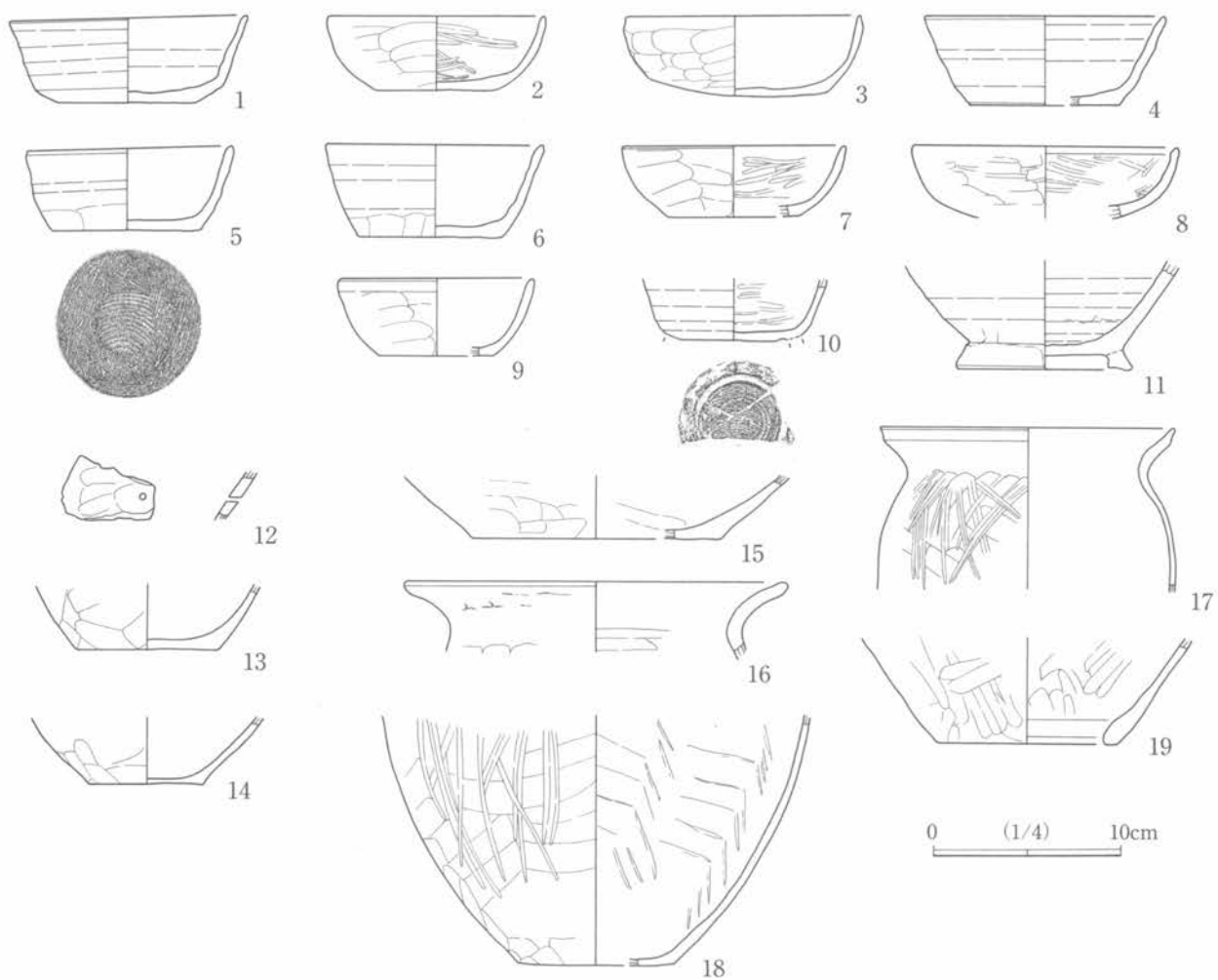
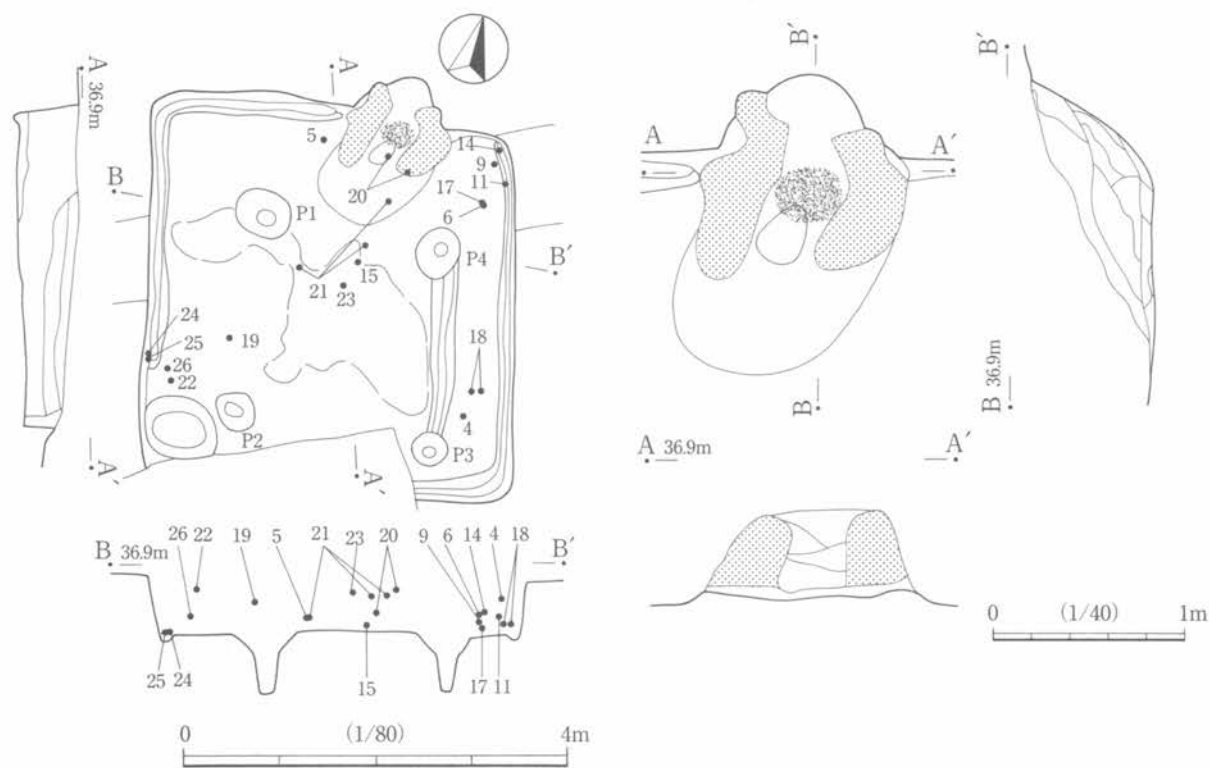
挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 蓋	-	[1.4]	(15.0)	1/6	白色砂粒	緑灰色	内外、ヨコナデ	1
2	須恵器 蓋	-	[1.7]	(16.4)	1/6	白色砂粒	緑灰色	内外、ヨコナデ	1
3	須恵器 坏	(13.2)	[3.2]	-	口縁1/6	黒色砂粒	灰黄色	内、ナデ 外、ヨコナデ	1.43
4	須恵器 高台付坏	-	[0.8]	10.4	底部1/3	微砂粒、白針(少)	灰色		1
5	須恵器 高台付坏	-	1.5	10.2	底部1/2	細砂粒、スコリア	黄灰色	器面摩耗	68.69
6	須恵器 高台付坏	-	[1.0]	8.5	底部完形	微砂粒	内、灰黄色 外、暗灰色	底部(外) 十字線刻有り	1
7	須恵器 高台付坏	-	[2.2]	11.5	底部1/4	細砂粒、スコリア	内、黄褐色 外、灰白色	外、摩耗 底部、貼付高台	21
8	土師器 坏	(13.7)	[3.4]	-	1/4	白色粒	褐色	器面摩耗している	1
9	土師器 坏	(13.8)	[4.5]	-	1/8	スコリア	内、鈍い黄褐色 外、黒褐色～鈍い黄褐色	内、丁寧なミガキ 外、ヘラケズリ後ミガキ	1
10	土師器 坏	12.2	4.6	5.6	口縁部1/4欠他完形	細砂粒、スコリア(少)、混合物少ない	鈍い黄色一部暗褐色	内、全面外、口縁黒色処理(漆)	49.50
11	土師器 坏	14.4	4.2	丸	口縁部1/5欠他完形	細砂粒、スコリア(少)、混合物少ない	鈍い黄色一部暗褐色	内、全面黒色処理(漆)	SI027 57 SI036 57
12	土師器 高坏	-	[3.6]	-	1/6	細砂粒、スコリア(少)	鈍い黄灰色	内外、摩耗	45
13	土師器 甕	-	[3.1]	(9.8)	底部1/4	長石、白色粒	内、黒褐色 外、暗褐色	内、ナデ、器面剥落	8
14	土師器 甕	(16.3)	[4.4]	-	口縁1/5	スコリア、石英	明赤褐色	内外、ナデ	1
15	土師器 甕	(20.0)	[6.0]	-	口縁1/6-頸部1/3	石英	赤褐色	内、ナデ、輪積み痕残る	61.62
16	土師器 甕	(17.2)	[8.2]	-	口縁-胴上部3/4	白色砂粒、長石、スコリア	内、鈍い黄褐色 外、橙褐色	内、剥落多	27
17	土師器 甕	(24.0)	[7.5]	-	口縁1/4	石英、スコリア	内、明黄褐色 外、鈍い黄褐色	内外ともに摩耗している	56
18	土師器 甕	22.0	[5.6]	-	口縁部2/3	白色砂粒、長石(多)、黒色粒	鈍い橙褐色	内、輪積み痕残る	58.63.65

SI-028号竪穴住居跡(第112, 113図, 図版22, 108)

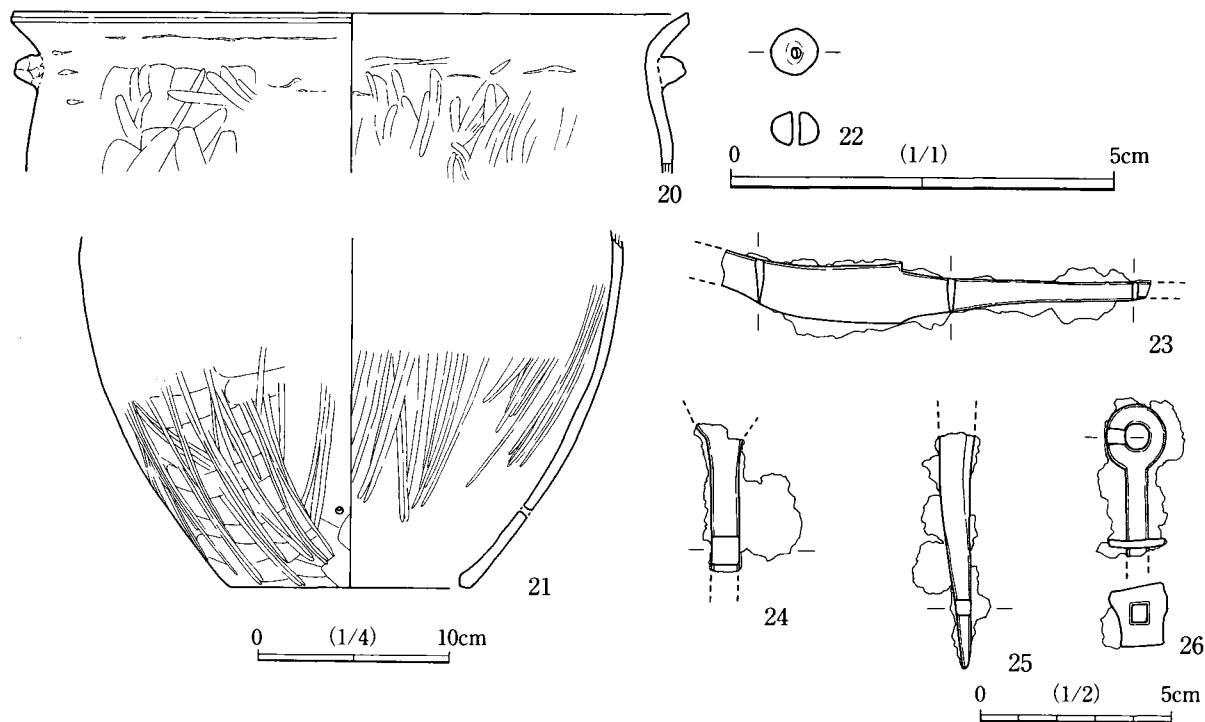
本遺構はD8-28グリッド付近に位置し、西側台地南東緩斜面の標高約36.8mに立地する。本遺構中央部を東西に横切るようにSD-002号溝が重複するが、本遺構の覆土中に所在することから、溝の方が新しいことは明確である。南側壁の一部分が現在の道路により攪乱を受けている。形態は概ね方形であるが、やや歪んでいる。規模は4.1m×3.8mを測る。主軸方位はN-15°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしており、確認面からの深さは北西側で67cm、南東側で23cmを測る。主柱穴は柱間約2mのほぼ正方形に4基配置され、径40cm～60cm、深さ38cm～65cmを測る。南西コーナー付近には貯蔵穴と考えられるピットが検出された。形態はほぼ楕円形で、長軸長80cm、短軸長60cm、深さ25cmを測る。床面は中央部分が硬化しており、若干高まっている。攪乱を受けている南側壁を除いて、壁際には深さ4cm～6cmの壁溝がほぼ全周する。覆土はローム小粒を含む褐色土を主体とする。

カマドは北側壁の北東コーナー付近に位置する。その主軸を住居中央部に向け、若干傾けている。最大幅は105cmを測り、袖部は壁から95cm延びている。黄灰色山砂を主体とする。煙道部は壁外へ40cm程度掘り込まれていた。

2・3・7・8・9は土師器坏である。8は丸底であるが、他は平底で、体部との境に明瞭な稜がある。体部はいずれも横方向のヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削りである。3・9を除いて内面はヘラ磨きされ、2は黒色処理されている。1・4～6はロクロ土師器坏である。箱形に近い形状で、1は体部下端でくびれるが、他はほぼ直線的に体部が立ち上がっている。体部下端及び底部の調整は、1が体部下端及び底部全面回転ヘラ削り、4は底部一方向ヘラ削り、5は体部下端に手持ちヘラ削り、底部は回転糸切り後周縁部手持ちヘラ削り、6は体部下端を手持ち、底部全面一方向ヘラ削りである。16はロクロ土師器高台



第112图 SI-028号实测图



第113図 SI-028号出土遺物実測図

坏で、高台は剥落している。底部に回転糸切り痕が残されている。11は長頸瓶の底部破片で、底部内面及び胴部から高台にかけて釉が溜まっている。底部に回転糸切り痕が残されている。

12～18は土師器甕である。12は胴部の破片であるが、焼成前に穿たれた小孔がある。孔の内部及び胴部外面は特に摩滅した様子も観察できないが、内面の孔の周囲が僅かに剥落している。あるいは21の甕と同一体の可能性もある。口縁部の破片は2点図示したが、16は口唇部を丸く収め、17は受け口状を呈する。胴部は縦方向のヘラ削りで、13～15の底部破片では横方向のヘラ削りがみられる。なお、17・18はヘラ削り後に僅かにナデを加える。

19～21は土師器甕である。19・21は底部破片で、孔周辺はヘラできれいに面取りしている。胴部は19が縦方向、21が横方向のヘラ削りで、21はヘラ削り痕をナデで消している。また21は12と同様の小孔が底部から4cmのところであり、孔の内部にも摩耗は認められない。20は口縁部破片で、推定口径35.6cmの大

第31表 SI-028号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	ロクロ土師器 坏	12.8	4.8	7.4	1/2	白色砂粒、長石、スコリア、小石(1～3mm位)	鈍い黄褐色	内、剥落有り	45
2	土師器 坏	(10.8)	4.0	6.4	1/3	白色砂粒(少)、黒色砂粒(少)	鈍い橙褐色	内、ミガキ	1
3	土師器 坏	(12.6)	4.3	(9.5)	1/3	細砂粒、スコリア(少)	鈍い黄褐色	底部正円でない	1
4	ロクロ土師器 坏	(12.8)	4.8	(8.0)	1/6	白色砂粒、スコリア	鈍い黄褐色、黒褐色	内、剥落有り	1.15
5	ロクロ土師器 坏	11.1	4.2～4.5	8.0	ほぼ完成	細砂粒、黒色砂粒(少)	鈍い黄灰褐色～黒褐色	内、斑状に剥落	1.25
6	ロクロ土師器 坏	11.6	4.9	7.7	3/4	細砂粒、長石、石英、スコリア	鈍い黄褐色	器面なめらか	30
7	土師器 坏	(12.0)	3.7	(7.0)	口縁1/4	白色粒	鈍い黄褐色	内、ミガキ 外、ヘラケズリ	47
8	土師器 坏	(14.2)	[3.8]	—	1/4	白色砂粒(少)、長石(少)	内、黒色 外、鈍い褐色～黒色	内、黒色処理(漆?)	1
9	土師器 坏	(10.5)	4.2	(6.0)	1/4	白色砂粒(多)、長石(多)	赤色～黒褐色	内外、スス付着有り	1.9
10	土師器 高台付坏	—	[3.3]	6.0	1/6	砂粒、長石(少)	鈍い褐色	—	1
11	灰袖陶器 長頸瓶	—	[6.0]	9.4	底部2/3	細砂粒、長石	暗灰色+暗緑色	火膨れ有り	10
12	土師器 甕	—	—	—	胴部片	白色砂粒、長石、小石	褐色	孔あり(3.5×3.5mm)	1
13	土師器 甕	—	[3.4]	7.5	底部1/2	スコリア、白色砂粒	褐色	内、ナデ、器面剥落	1
14	土師器 甕	—	[3.5]	6.1	底部完成	白色砂粒(少)、長石、スコリア	内、明褐色 外、褐色～黒褐色	内、剥落著しい	8
15	土師器 甕	—	[3.4]	(13.3)	底部1/4	白色砂粒、石英	灰黄褐色	—	40
16	土師器 甕	(20.6)	[3.7]	—	口縁1/5	スコリア、長石、黄土粒	赤褐色	輪積み痕残る	1
17	土師器 甕	(15.7)	[8.7]	—	1/3	長石、スコリア、石英	褐色	—	33
18	土師器 甕	—	[13.5]	(8.5)	1/4	白色砂粒、石英	内、鈍い赤褐色 外、暗褐色	—	12.23
19	土師器 甕	—	[5.7]	(9.6)	底部1/8	白色粒、石英	明褐色	—	16
20	土師器 甕	(35.6)	[8.5]	—	口縁部1/3	白色砂粒、長石、スコリア、黒色粒	明赤褐色	—	4.42
21	土師器 甕	—	[18.3]	(12.5)	1/6	白色砂粒(少)、長石(少)	暗褐色一部褐色	孔有り(直径3.5mm)	2.26.41

形の甑である。口縁部直下に把手が付き、接合しないがもう1点把手の破片があり、2個1対であったことがわかる。把手は粘土塊を張り付けただけの形骸化したもので、指頭で押さえただけの調整である。口縁部はヨコナデで整えるが、粘土紐接合痕が残っている。

22は石製の白玉、23は刀子、24・25は鉄鏃、26は金具である。26は破損部に方形の座金が付いている。

### SI-029号竪穴住居跡（第114図，図版23，108）

本遺構はD6-87グリッド付近に位置し、西側台地北東緩斜面の標高約36.4mに立地する。南東コーナー付近においてSI-014号竪穴住居跡と重複関係にある。本遺構の覆土中にSI-014号の貼り床が施されていることから、本遺構の方が時代を遡ることが明確である。形態は方形で、規模は3.9m×4.1mを測る。主軸方位はN-5°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしており、確認面からの深さは北東側で31cm、南西側で64cmを測る。支柱穴は対角線上に4基検出され、径30cm～55cm、深さ48cm～65cmを測る。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径30cm、深さ88cmを測る。床面は堅緻に踏み固められており、特に西側壁面から中央部分は硬化している。覆土はハードロームブロックを多く含む褐色土を主体とし、人為的な埋め戻し状況が窺える。

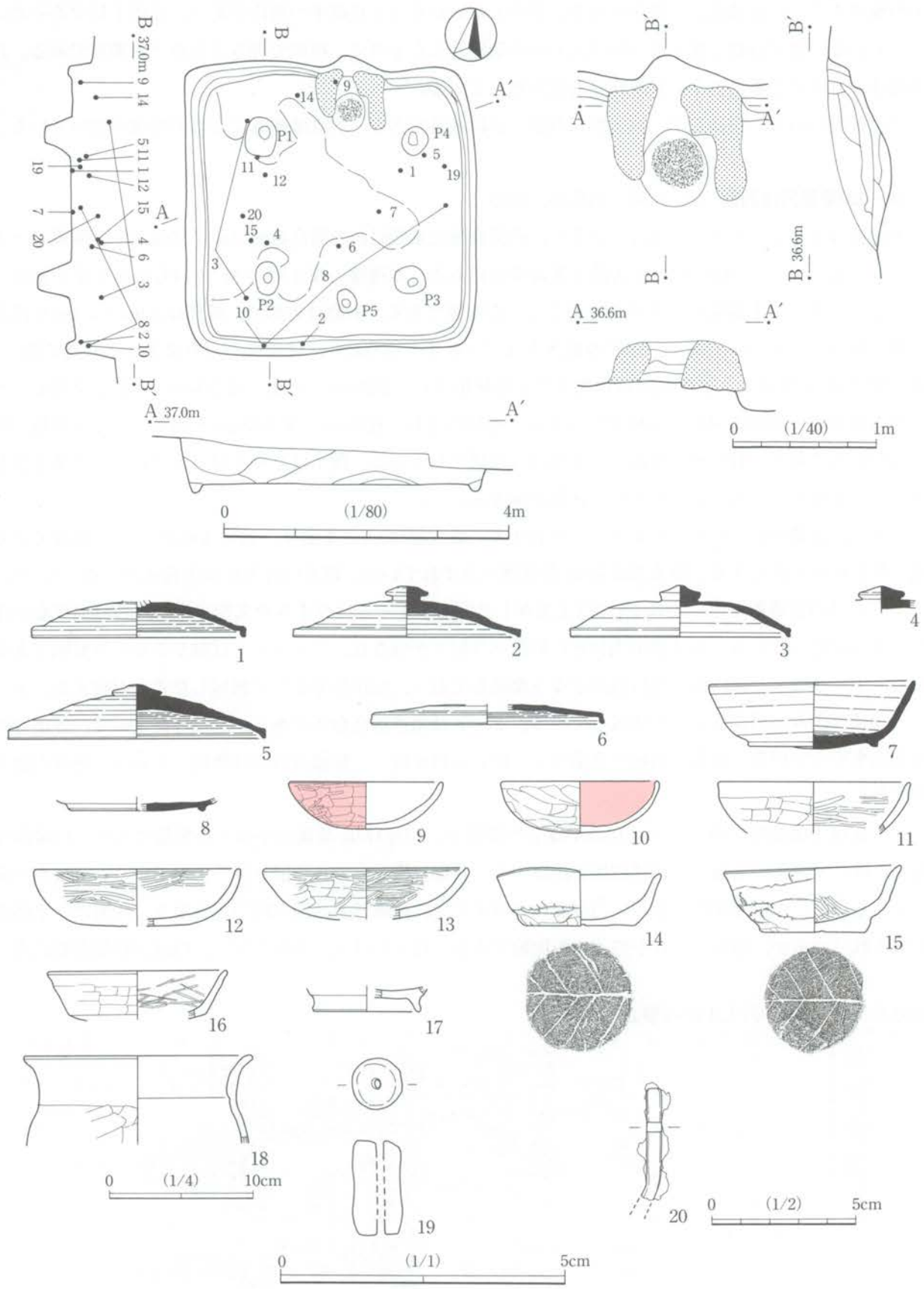
カマドは北側の壁の中央やや東寄りに位置する。最大幅は82cmを測り、袖部は壁から80cm延びている。黄灰色山砂を主体とする。煙道部は40cm程度掘り込まれていた。焚き口付近には黒色灰が分布していた。

1～6は須恵器蓋で、いずれも1/2以上遺存している。1・6はつまみを欠損するが、他は扁平な宝珠様つまみが付いている。天井部中央付近に回転ヘラ削りが施され、2・3・6は釉がかかり不鮮明である。なお、1～3は天井部内面中央付近がかなり摩滅しており、転用硯等として利用したことが窺える。また、2・3はつまみの頂部もかなり摩滅している。7・8は須恵器高台坏である。7はほぼ完形で、体部はやや丸味をもっている。底部は回転ヘラ削りで、低い高台が付く。体部内外面は摩耗しており、底部内面が特に著しい。

7～16は土師器坏である。9・10は半球形の器形で、口径11cm前後の小振りの製品である。口縁部は端部だけにヨコナデを施し、10は内側に肥厚する。体部は横方向のヘラ削り後、ナデている。11はやや深さがある坏で、口縁部が直立する。口縁部はヨコナデで、体部外面は横方向のヘラ削り、内面はヘラ磨きが施されているが、器面の遺存が悪く、不明瞭である。12・13は浅い丸底の坏で、13は口唇部内側に浅く

第32表 SI-029号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 蓋	15.0	(2.5)	—	つまみ欠	細砂粒、混合物なし	灰色	器面なめらか	8.28
2	須恵器 蓋	16.0	3.5	—	1/2	微砂粒、長石(少)、スコリア(少)	灰色 袖部分緑	外面、自然釉がかかっている	22
3	須恵器 蓋	(15.4)	3.6	—	つまみ完形他1/4	微砂粒、石英、黒色粒(少)	黄灰色	外面、自然釉少々付着	15.19.34
4	須恵器 蓋	—	(1.6)	—	つまみ完形	微砂粒、長石粒(少)	内、白灰色 外、青灰色	若干摩耗	4
5	須恵器 蓋	(18.0)	3.8	—	口縁1/7 他2/3	細砂粒、長石、石英、黒色粒	内、灰白色 外、灰白色	内、摩耗	27
6	須恵器 蓋	(16.4)	[1.4]	—	1/2	細砂粒、混合物なし	内、灰色 外、灰色+黄灰緑色	外、自然灰付着	5.34
7	須恵器 坏	14.3	4.4~4.8	9.0	口縁1/5欠	微砂粒、長石粒(少)	灰色	底部の中央が高台より高い	29
8	須恵器 坏	—	[1.4]	(9.6)	高台部1/4	微砂粒	浅黄色+暗褐色	外、器面摩耗一部スス付着有り	2.4.31
9	土師器 坏	(10.8)	3.3	丸	1/2	白色砂粒(少)、スコリア(少)	明褐色+オリーブ黒色	外、赤彩 内外、器面摩耗有り	32
10	土師器 坏	(11.0)	3.6	丸	2/3	白色砂粒、長石(多)、石英(少)	内、赤褐色 外、明赤褐色	内、赤彩、剥落有り	SI027 1 SI029 31
11	土師器 坏	(13.4)	[3.6]	—	1/4	砂粒、スコリア(少)	内、褐灰色 外、鈍い褐色	器面摩耗有り	20
12	土師器 坏	(14.4)	[3.9]	丸	1/3	砂粒、石英、スコリア	内、赤褐色～明褐色 外、明褐色	内外、ミガキ、剥落あるが器面はなめらか	16.34
13	土師器 坏	(14.4)	[3.5]	丸	口縁1/4	白色砂粒、スコリア	内、鈍い赤褐色 外、鈍い赤褐色～底部 黒褐色	内、ミガキ 外、ヘラケズリ後一部ミガキ、底部不定向にケズリ	1
14	土師器 坏	11.4	3.5~4.0	7.6	完形	白色砂粒、長石(少)	内、黒褐色 外、明褐色～鈍い黄褐色	外、底部木葉痕(鮮明)輪積み痕残り	11
15	土師器 坏	12.3	4.1~4.6	7.0	完形	白色砂粒(少)、長石(少)	鈍い黄褐色	外、輪積み痕鮮明、底部木葉痕有り	30
16	ロクロ土師器 坏	(12.6)	(3.4)	(9.6)	1/4	微砂粒、スコリア(少)	鈍い黄色	内、暗文風のミガキ有り	1
17	土師器 高台付坏	—	[1.8]	(7.6)	高台部1/2	亮白色砂粒(多)、長石、石英	明褐色	器面砂っぽくボロボロしている	1
18	土師器 甕	16.0	[6.0]	—	口縁～胴上3/4	白色砂粒、長石	明赤褐色	器面剥落著しい	33



第114图 SI-029号实测图

沈線様のくぼみを巡らす。12は丁寧なヘラ磨きが施され、ヘラ削り痕はほとんど見えない。14・15は粗雑な調整の製品で、ともに完形である。底部はかなり厚く、口縁部にヨコナデを施すが、粘土紐接合痕をそのまま残している。底部には木葉痕が鮮明に残り、別の葉を使用している。16は上総型の坏で、口縁部が僅かに屈曲して外反する。体部は横方向のヘラ削りを施し、内面は身込み部分に雑に斜格子暗文が施される。胎土は精緻である。

18は土師器甕である。19は管玉で、土製であろうか。20は鉄鏃である。

### SI-030号竪穴住居跡（第115図，図版23）

本遺構はB8-41グリッド付近に位置し、西側台地北西緩斜面の標高約34.9mに立地する。本遺構中央部分にSD-003号溝が縦横に入り込んでいる。本遺構の覆土から床面まで削平されており、本遺構の方が時代を遡ることが明確である。形態は横長の長方形で、規模は5.6m×6.0mを測る。主軸方位はN-40°-Wである。斜面に立地するため、住居の掘込みは場所によって差があり、確認面からの深さは北側で0cm、東側で42cmを測る。主柱穴と判断できるしっかりとした柱穴は検出されていない。北部・東部のコーナー付近には径25cm・30cm 深さ24cm・8cmの小ピットが検出されている。また、溝の底部から径25cm～40cm、深さ17cm～21cmの小ピット3基が検出されているが、いずれも性格は不明である。床面は概ね斜面に沿うように傾斜している。

カマドは検出面から掘込みがないばかりでなく、住居の周囲の方が低くなってしまっているため、カマド袖の構築材と思われる黄白色粘土の分布により、その範囲を想定した。北西側の壁の中央に位置すると考えられる。

1・2は土師器甕。3は土師器甌である。4は須恵器の大甕で、住居平面図に○で示したように、同一個体の破片が、住居全域に散在している。また、SI-033号からも同一個体の破片が出土しており、接合関係もある。H-033号の平面図にも同様に○で示した。口縁部は大きく外反し、3条の突帯を巡らす。突帯に区画された中には、櫛歯状の工具を連続して刺突している。胴部は叩き調整で、内面に同心円叩きも明瞭に残る。

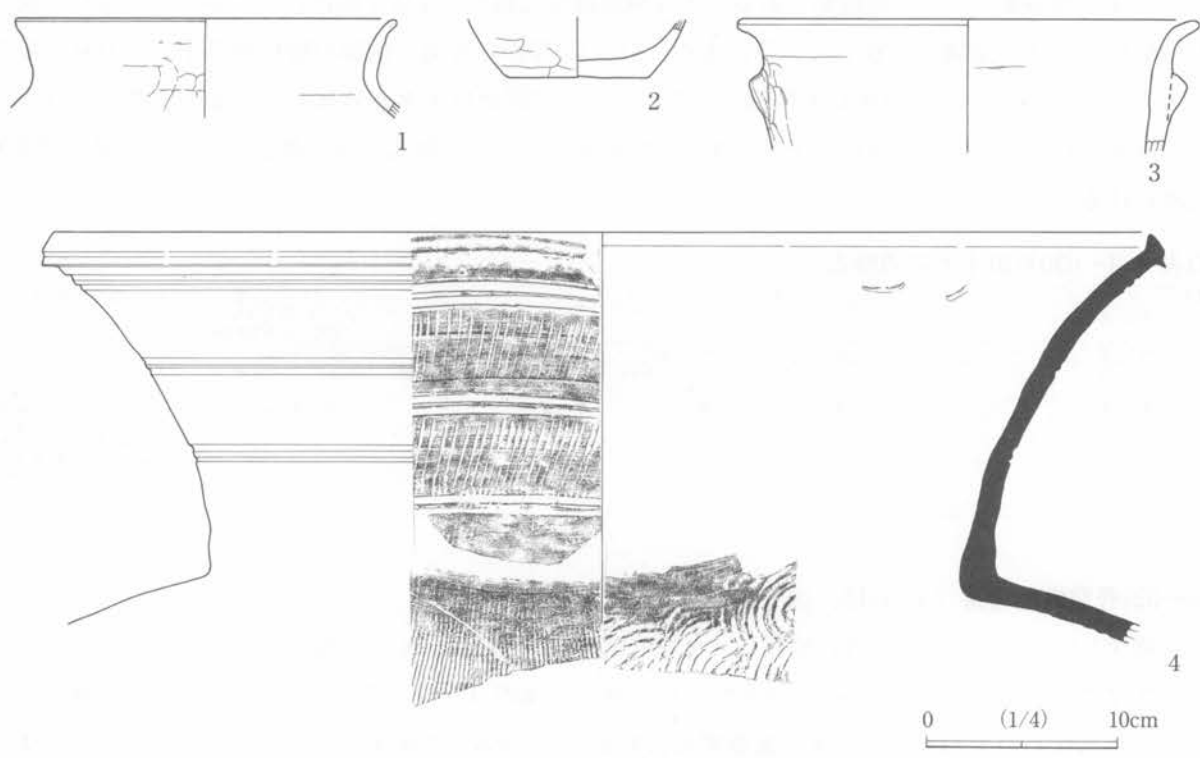
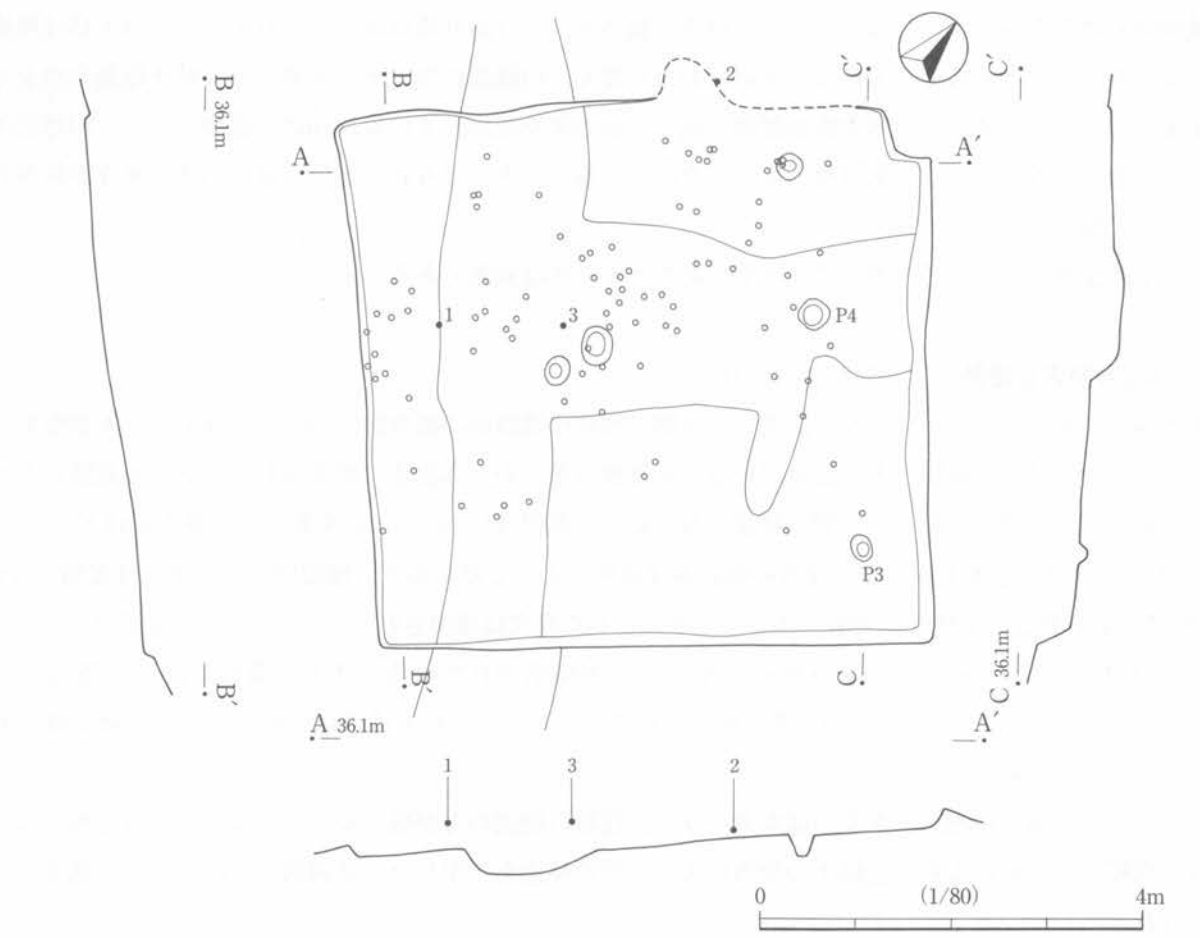
第33表 SI-030号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 甕	(20.0)	[5.2]	-	口縁1/12	白色粒、スコリア	鈍い褐色	内、ナデ 外、輪積み痕残る、二次焼成のため器面が荒れている	67
2	土師器 甕	-	[3.1]	7.5	底部完形	白色砂粒、長石	内、明褐色 外、赤褐色～暗褐色	器面剥落著しい	19
3	土師器 甌	24.2	[7.0]	-	口縁部1/8	スコリア、白色砂粒（多）、長石（多）	内、明褐色 外、鈍い黄色	器面ざらついている	51
4	須恵器 甕	(57.2)	[21.0]	-	破片	石英粒	青灰色	H-033と接合関係	1.～6. 8. 10. 11. 13～33. 35～39. 41～50. 52～57. 59～61. 63～66. 68. 70～76. 79. 82～87. 89～96. 99. 100. 102. 103. 105. 106. 109. 110/H-033-2. 5. 6. 8. 9～11. 13～26

### SI-031号竪穴住居跡（第116図，図版23，109）

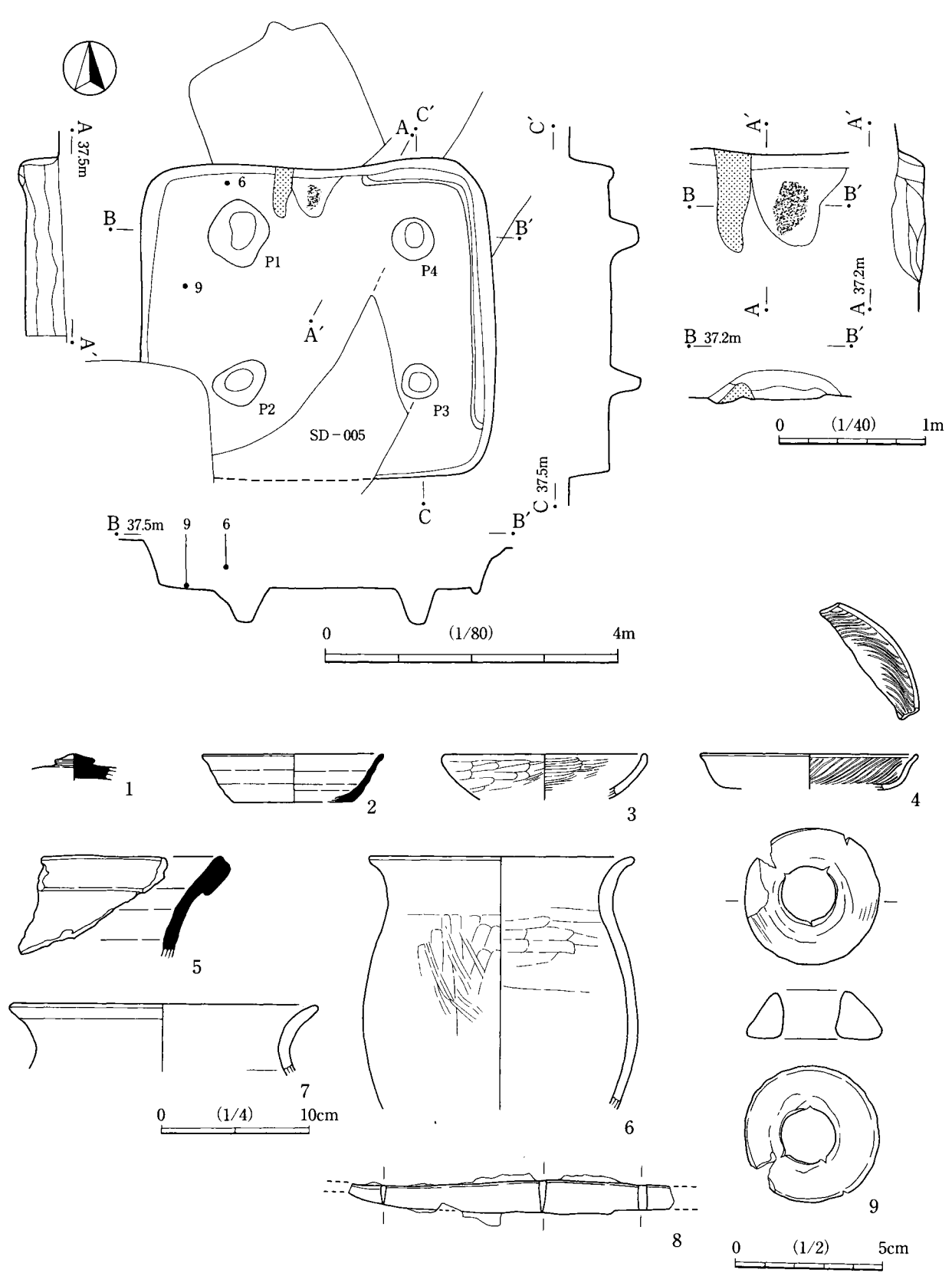
本遺構はL3-93グリッド付近に位置し、台地中央部の標高約37.4mに立地する。

本遺構はカマド付近においてSI-056号竪穴住居跡と、南西コーナー部分においてSI-040号竪穴住居跡と、右半部においてSD-005号溝と重複関係にある。SI-056号の床面を切っていることから本遺構の方が新しい。SI-040号によって床面が切られているため本遺構の方が時代を遡る。SD-005号については、その深さの相違により北東コーナー部分では本遺構の覆土中に所在し、南側壁部分では本遺構の床面及



第115图 SI-030号实测图





第116图 SI-031号实测图

び壁の一部を切っており、これも本遺構の方が時代を遡ることが明確である。本遺構は2年次にわたって調査が行われている。カマドを含む左半部は第1次調査、右半部は第2次調査による。形態は方形で、規模は4.2m×4.8mを測る。主軸方位はN-2°-Eである。住居の掘込みはしっかりとしており、確認面からの深さは50cm～58cmを測る。主柱穴は対角線上に4基検出され、径52cm～100cm、深さ36cm～51cmを測る。図示するにいたらなかったが、第2次調査が行われた右半部の床面の一部に硬化が認められている。カマド右脇から東側壁にかけて深さ10cm程度の壁溝が巡る。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土を主体とする。

カマドは北側の壁の中央に位置する。遺存状態は悪く袖部は右側が遺存するのみであった。袖部は壁から70cm延び、暗灰色砂質土を主体とする。

1は須恵器蓋である。扁平な宝珠様つまみが付き、つまみ頂部がやや摩滅している。2は須恵器坏である。体部下端は手持ちヘラ削り、底部はおそらく一方向へのヘラ削りと思われる。

3・4は土師器坏である。3はやや深い身をもつもので、口縁部は短く直立し、端部にヨコナデを施す。体部外面は横方向のヘラ削りで、内面にヘラ磨きを施している。4は畿内系土師器で、口唇部内側に沈線を巡らせ、体部内面に一段の斜放射暗文を施す。螺旋暗文はなく、平城Ⅲである。

5は須恵器甕の口縁部破片である。口唇部は外側へ折り曲げている。6・7は土師器甕である。6は底部を欠損するが、他はほぼ完形に復元できた。口縁部は外反し、ヨコナデで整え、口唇部を丸く収める。胴部は器面の状態が不良で不鮮明であるが、縦方向のヘラ削りを施している。

8は刀子、9は土製の紡錘具である。孔は20mmと大きい、焼成後に広げられた可能性もある。

第34表 SI-031号出土土器観察表

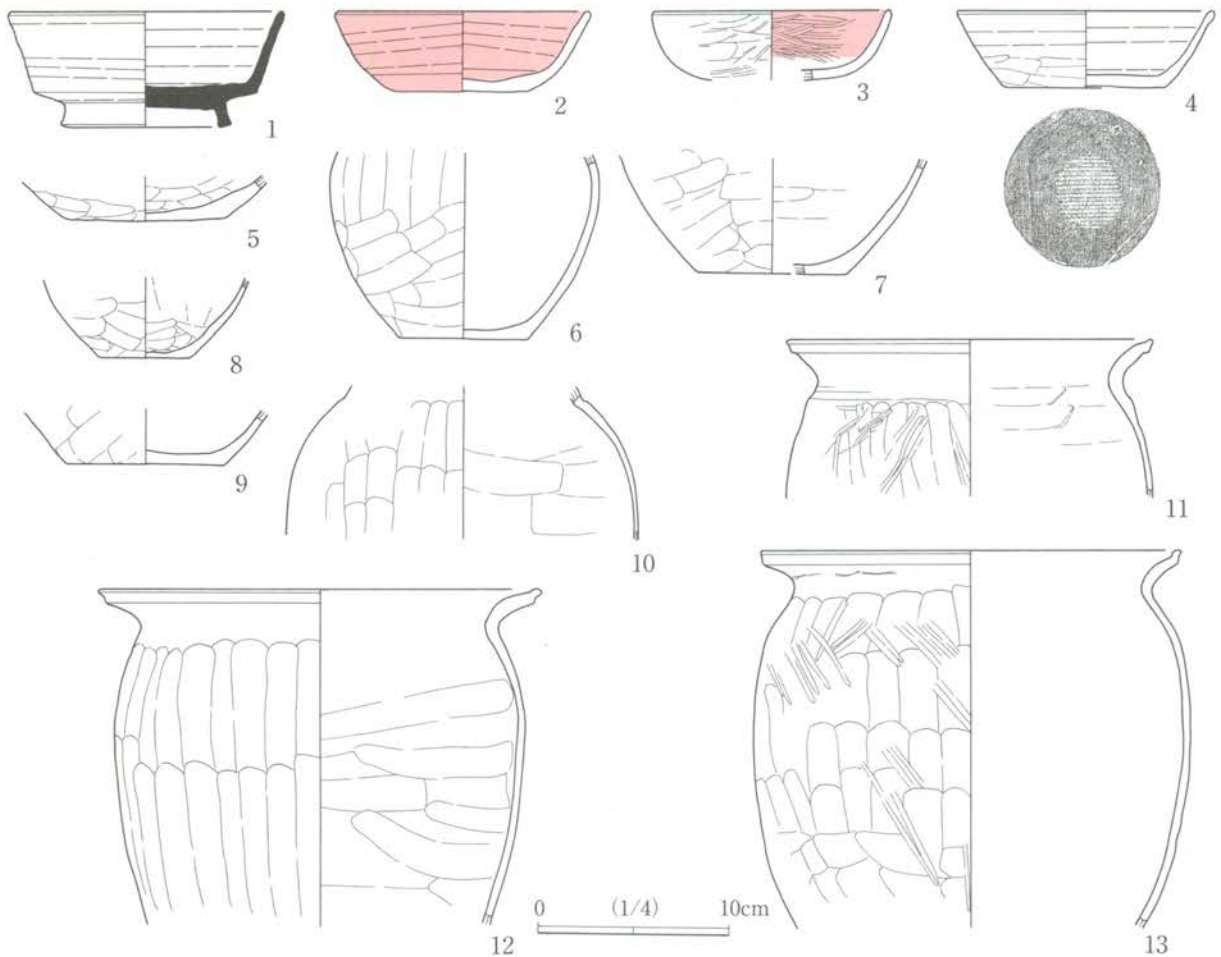
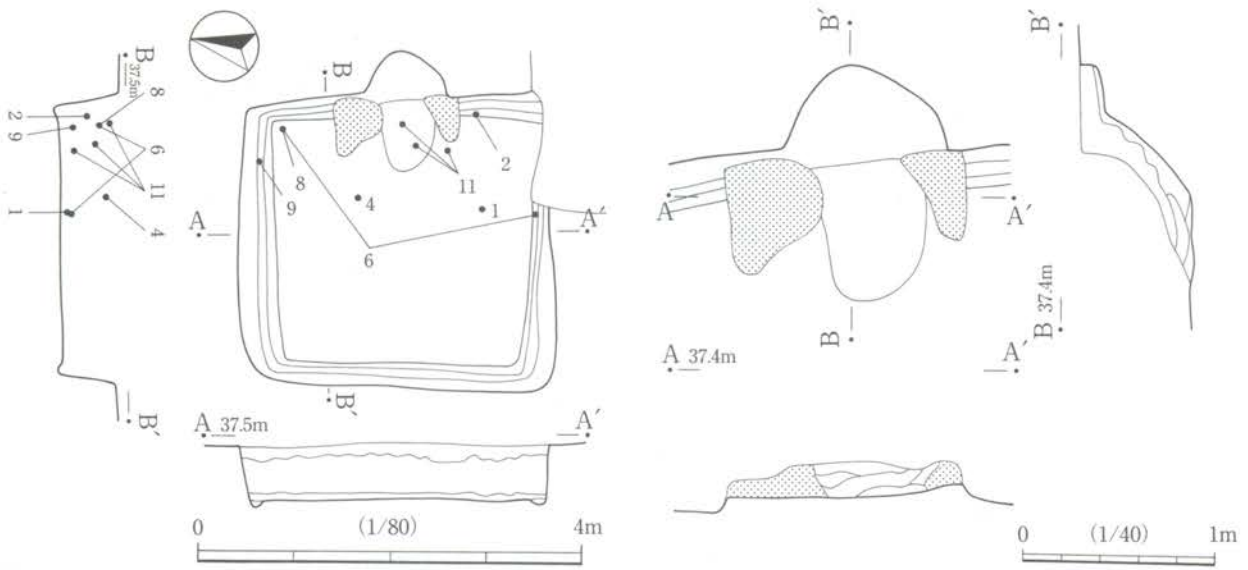
挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 蓋	-	[1.8]	-	つまみのみ完形	微砂粒、長石粒	灰色	器面なめらか	1
2	須恵器 坏	(12.4)	[3.3]	(8.0)	1/10	白色粒少々	灰色	内外、ヨコナデ 底部、ヘラケズリ	1
3	土師器 坏	(14.0)	[3.0]	-	口縁1/4	白色粒、石英	鈍い黄褐色	内、ミガキ 外、ヘラケズリ後 一部ミガキ	1
4	土師器 坏	(14.8)	[2.4]	-	1/4	微砂粒、長石(少)	褐色	内、斜放射暗文 畿内系	1
5	須恵器 甕	-	-	-	口縁部片	白色砂粒、長石粒	黄灰色		1
6	土師器 甕	18.2	[17.2]	-	口縁2/3 胴部1/2	白色砂粒、長石、石英、スコリア	明褐色、黒色	器面若干摩耗	1.3
7	土師器 甕	(21.0)	[4.8]	-	口縁1/6	石英、長石	褐色	外、器面薄く剥落	1

### SI-032号竪穴住居跡 (第117図, 図版24, 109)

本遺構はL3-90グリッド付近に位置し、台地中央部の標高約37.4mに立地する。南東コーナー付近においてSI-040号竪穴住居跡と重複関係にあるが、壁部が僅かに切り合うのみであるため、遺構から新旧関係を把握することはできない。形態は隅丸方形で、規模は3.1m×3.3mを測る。主軸方位はN-85°-Eである。住居の掘込みはしっかりとしており、確認面からの深さは54cm～62cmを測る。主柱穴は検出されていない。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土を主体とし、人為的な埋め戻し状況が窺える。

カマドは東側の壁の中央に位置する。最大幅は125cmを測り、袖部は壁から60cm延びている。暗灰色砂質土を主体とする。煙道部は50cm程度掘り込まれていた。

1は須恵器高台坏である。断面方形のしっかりした高台が付き、体部は直線的に立ち上がる。底部は回転ヘラ削りを施す。なお、底部内面は若干摩滅している。2・4はロクロ土師器坏である。2は完形で、内面及び外面体部下端から底部にかけて著しく摩耗している。底部は一方向のヘラ削りである。内外面赤彩される。4は体部下端を回転ヘラ削り、底部は静止糸切り後周縁部手持ちヘラ削りである。3は丸底の坏で、体部外面は横方向のヘラ削り、内面はヘラ磨きを施し、赤彩される。



第117図 SI-032号実測図

5～13は土師器甕である。5～9は底部破片で、胴部下半に横方向のヘラ削りを施している。内面は丁寧にナデられるが、9は底部にヘラ当て痕が明瞭に残る。10～13は胴部から口縁部にかけての破片である。口縁部は受け口状を呈し、胴部上半は縦方向のヘラ削りを施す。11・13はヘラ削り後に軽くナデている。

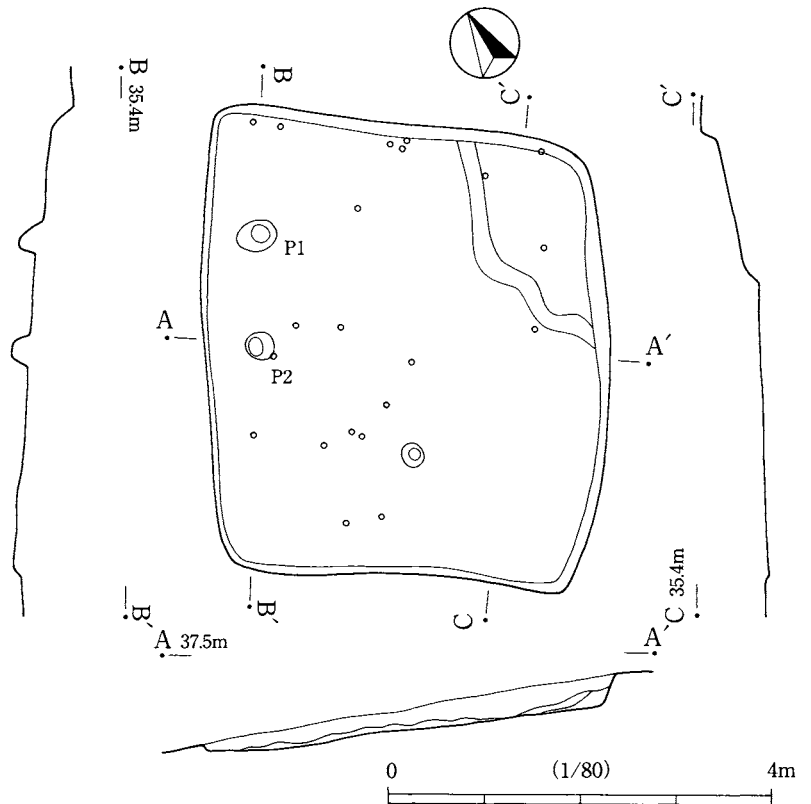
第35表 SI-032号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 高台付坏	(14.4)	6.0	8.9	1/2	微砂粒、長石、石英、小石	青灰色	外、自然釉薄くかかっている	8
2	ロクロ土師器 坏	13.4	4.2	7.2	口唇部ほとんど欠地完形	白色砂粒、小石(多)、長石、石英、スコリア	明褐色一部赤色	全体的に摩耗、赤彩部はげている 全面赤彩	6
3	土師器 坏	12.5	[3.7]	-	2/3	白色砂粒、長石	鈍い黄橙色～橙色+暗褐色	内、赤彩、ミガキ有り(単位なし) 内外、器面若干摩耗	1.13
4	ロクロ土師器 坏	13.4	4.0	8.4	2/3	白色砂粒、長石、石英、スコリア	明褐色	底部静止糸切り	1.5
5	土師器 甕	-	[2.3]	(8.4)	底部1/4	白色粒	内、鈍い褐色 外、黒褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	1
6	土師器 甕	-	[9.7]	6.6	口縁部欠 1/2	白色砂粒、長石(多)、石英	内、黄橙色～暗褐色 外、赤褐色～暗褐色	薄手な作り 外、スス付着有り	3.7
7	土師器 甕	-	[7.0]	(8.0)	底部1/6	白色粒	暗褐色	内、丁寧なナデ 外、ヘラケズリ後ナデ	13
8	土師器 甕	-	[4.3]	4.6	底部完形	白色砂粒、長石、石英	赤褐色	内、ナデ痕明瞭にあり	3
9	土師器 甕	-	[2.9]	8.3	底部完形	白色砂粒、長石	赤褐色	外、底部1/3位スス付着	1.2
10	土師器 甕	-	[8.0]	-	胴上部1/3	スコリア、白色粒、石英	内、褐色 外、鈍い赤褐色	内、ヘラナデ 外、ヘラケズリ	1
11	土師器 甕	(19.0)	[8.3]	-	口縁～胴上部1/8	白色微粒、石英	褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ後一部ミガキ	9.11.12
12	土師器 甕	23.1	[17.5]	-	1/3	白色砂粒、小石(3mm)、長石(多)、石英	鈍い橙色～暗褐色	内、口縁部帯状にスス付着	1
13	土師器 甕	21.8	[19.7]	-	2/3	白色砂粒、黒色粒、長石、石英、スコリア	鈍い黄橙色		1

SI-033号竪穴住居跡 (第118図)

本遺構はB8-60グリッド付近に位置し、西側台地西斜面の標高約35.2mに立地する。形態は縦長の長方形で、規模は4.5m×4.1mを測る。主軸方位はN-36°-Eである。住居の掘込みは浅く、確認面からの深さは斜面に立地するため、北東壁で27cm、東側コーナー付近で1cmを測る。主柱穴と判断できる柱穴は検出されていない。床面には径42~75cm、深さ18~25cmの3基の小ピットが検出されているが、性格は不明である。北東コーナー部分の床面はテラス状の高まりが認められる。砂質土と黄白色粘土によって構成されており、堅くしまっていることが報告されているが、崩壊したカマドの痕跡である可能性も考えられる。覆土はローム粒子、黄白色粘土粒子を多く含む粘性の高い褐色土を主体とする。

カマドは検出されていない。須恵器の大甕の破片が多量に出土し、平面図に○で出土位置を示した。SI-030号出土のものと同一体で、接合関係もある。遺物はSI-030号に掲載した。

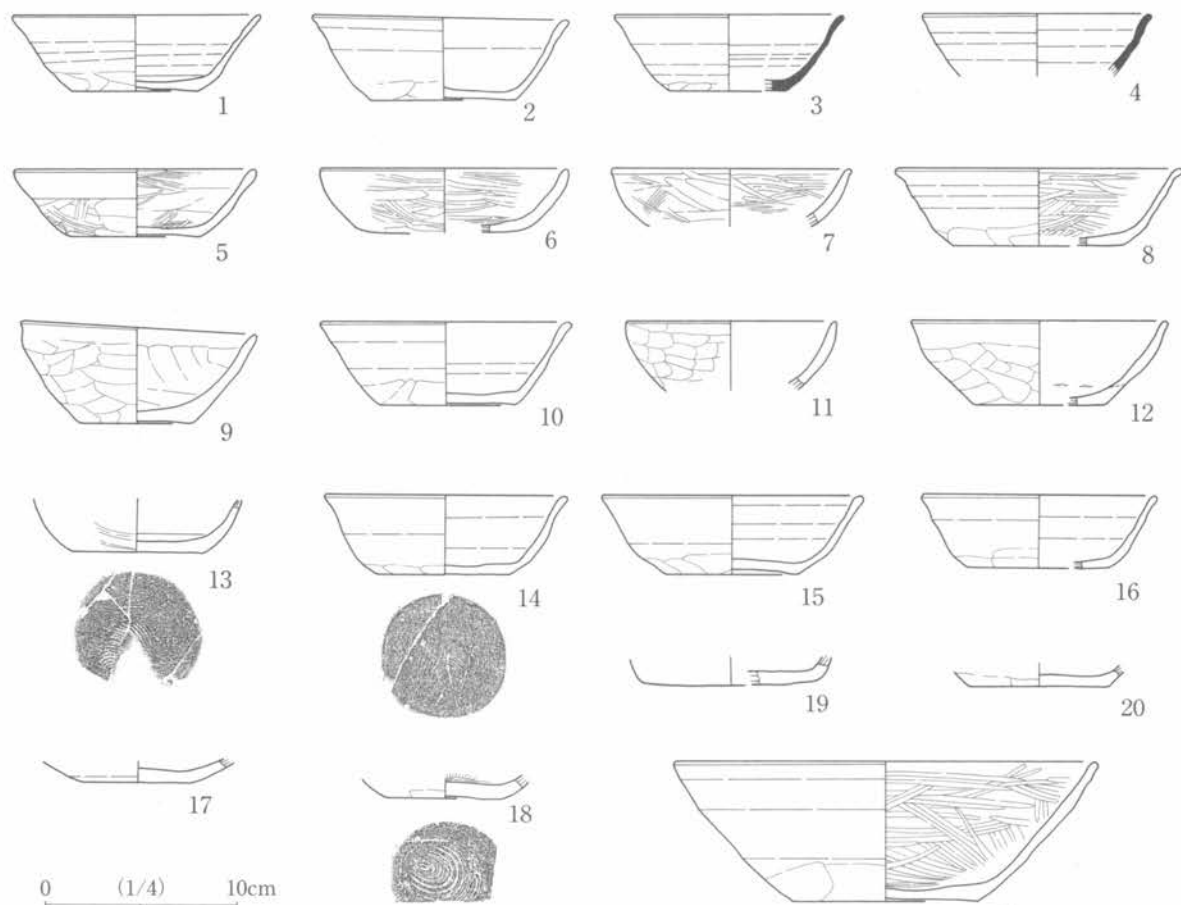
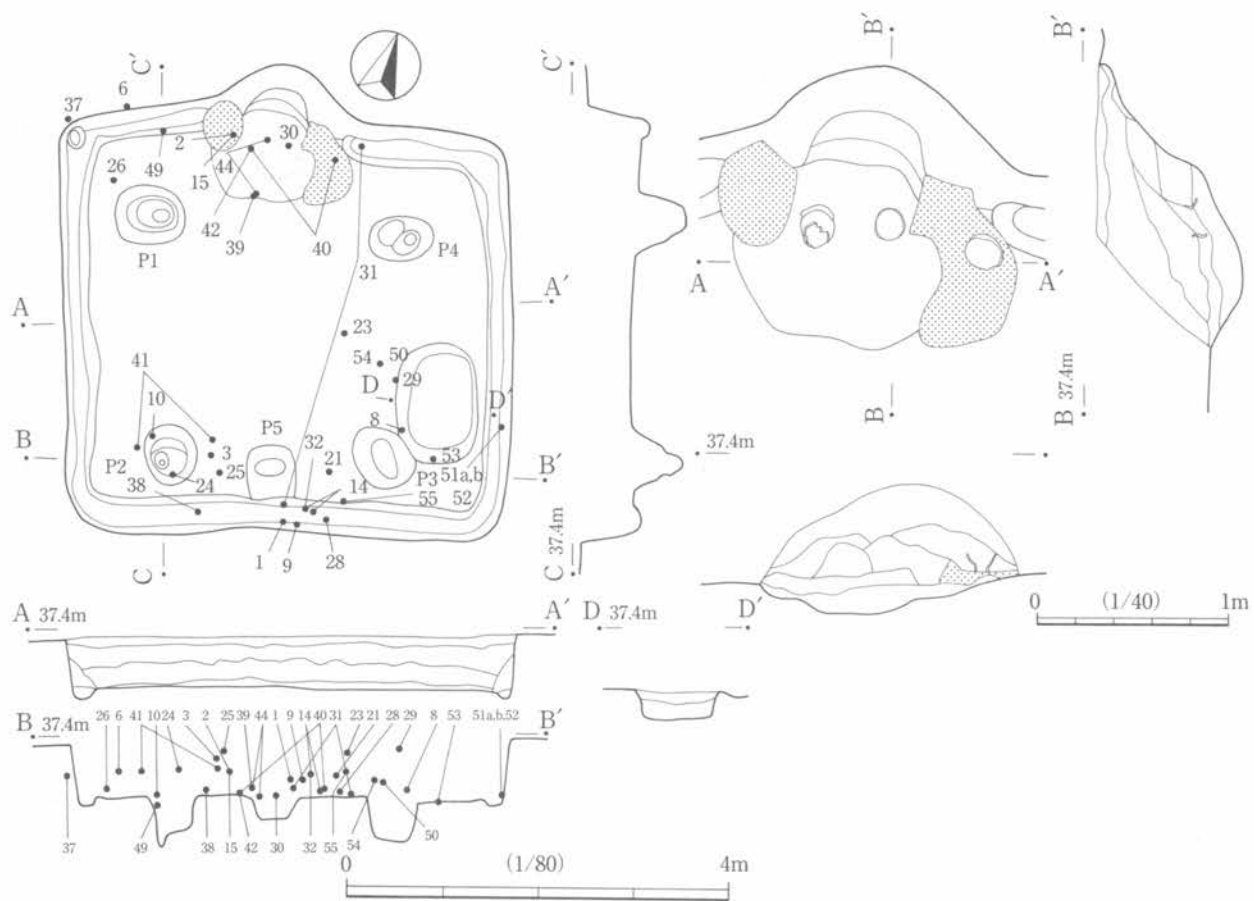


第118図 SI-033号実測図

SI-034号竪穴住居跡

(第119~121図, 図版25, 109, 110)

本遺構はK3-86グリッド付近に位置し、台地中央部の標高約37.3mに立地する。本遺構は南西コーナー付近においてSI-071号竪穴住居跡と、北西コーナー付近においてSI-072号竪穴住居跡と重複関係にある。SI-071号、SI-072号と



第119图 SI-034号实测图

もに本遺構の方が切っており、本遺構の方が新しいことが明確である。形態は方形で、規模は4.6m×4.7mを測る。主軸方位はN-20°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしており、確認面からの深さは51cm～65cmを測る。主柱穴は4基検出されており、貯蔵穴に干渉を受ける南東部の1基を除いて対角線上に配置される。径50cm～68cm、深さ46cm～55cmを測る。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径50cm、深さ24cmを測る。南西コーナー付近には貯蔵穴が検出された。形態はほぼ長方形で、長軸長120cm、短軸長80cm、深さ33cmを測る。壁際には深さ6cm～11cmの壁溝が全周する。梯子ピット付近の壁際において貝の集中ブロックが検出された。床面から約5cmの覆土中に長径60cm、短径18cm、厚さ16cmを測る。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土を主体とする。

カマドは北側の壁の中央に位置する。カマドの袖部の遺存状態は悪いが、周辺からは遺物が多く検出されている。最大幅は160cmを測り、袖部は壁から80cm延びている。灰白色砂質土を主体とする。煙道部は壁外へ50cm程度掘り込まれていた。

カマド燃焼部からは、右に須恵器甕の破片(30)が、左に土師器甕(42)が逆位で並び、右袖部の上に土師器甕(40)が逆位で出土した。

3・4は須恵器坏である。体部下端に手持ちヘラ削り、底部も一定方向のヘラ削りである。口唇部内側が若干摩滅する。同一個体の可能性がある。

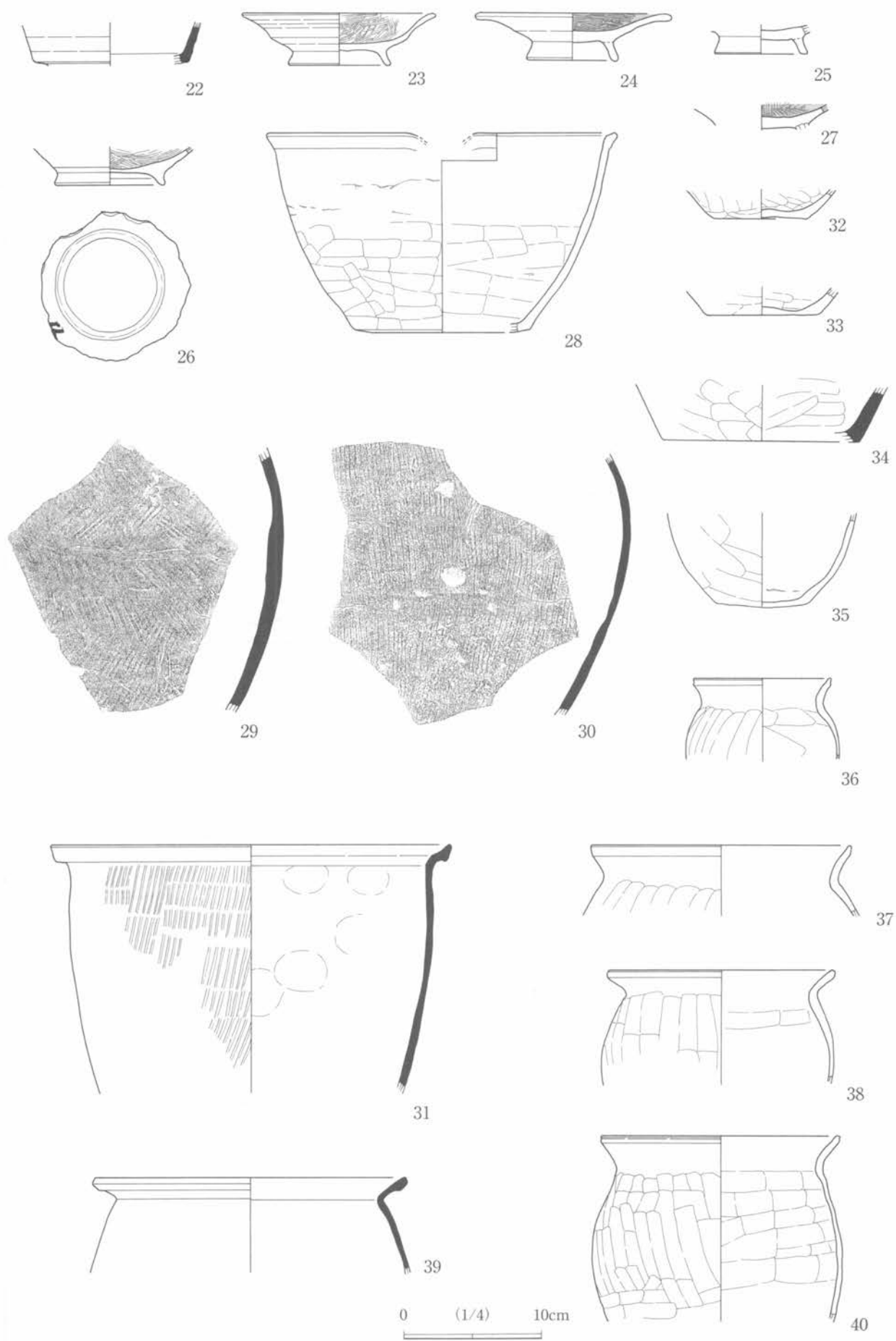
6・7・9・11・12は土師器坏である。9・12は平底で、身も深い。口縁部は僅かに外方へ開き、ヨコナデである。体部外面は横方向のヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削りである。内面はナデ調整で、ヘラ当て痕が残る。6・7は丸底の坏で、内面を丁寧に磨いている。

1・2・5・8・10・13～16・18はロクロ土師器坏である。体部下端はすべて手持ちヘラ削りで、底部は一方向もしくは数方向のヘラ削りである。13・14・18は底部のヘラ削りが周縁部だけで、回転糸切り痕が残る。また、3・18は内面黒色処理され、3はヘラ磨きも丁寧である。45～49は墨書された破片で、いずれも墨書部位は底部外面である。46は「三〇家」で二文字目が欠損部と重なって明らかではないが、「三田家」の可能性もある。47は「万」か。49は「人」である。17・23～27はロクロ土師器皿である。17は無高台であるが、他はすべて高台が付く。17は体部下端に回転ヘラ削りを施し、底部も全面回転ヘラ削りである。高台付き皿は、すべてしっかりした高台が付き、体部下端から底部全面にかけて回転ヘラ削りを施している。内面はすべてヘラ磨きで、23・26は全面を一方向へ磨く。また、24・27は内面黒色処理される。なお、26は体部外面に墨書されるが、釈文は不明である。

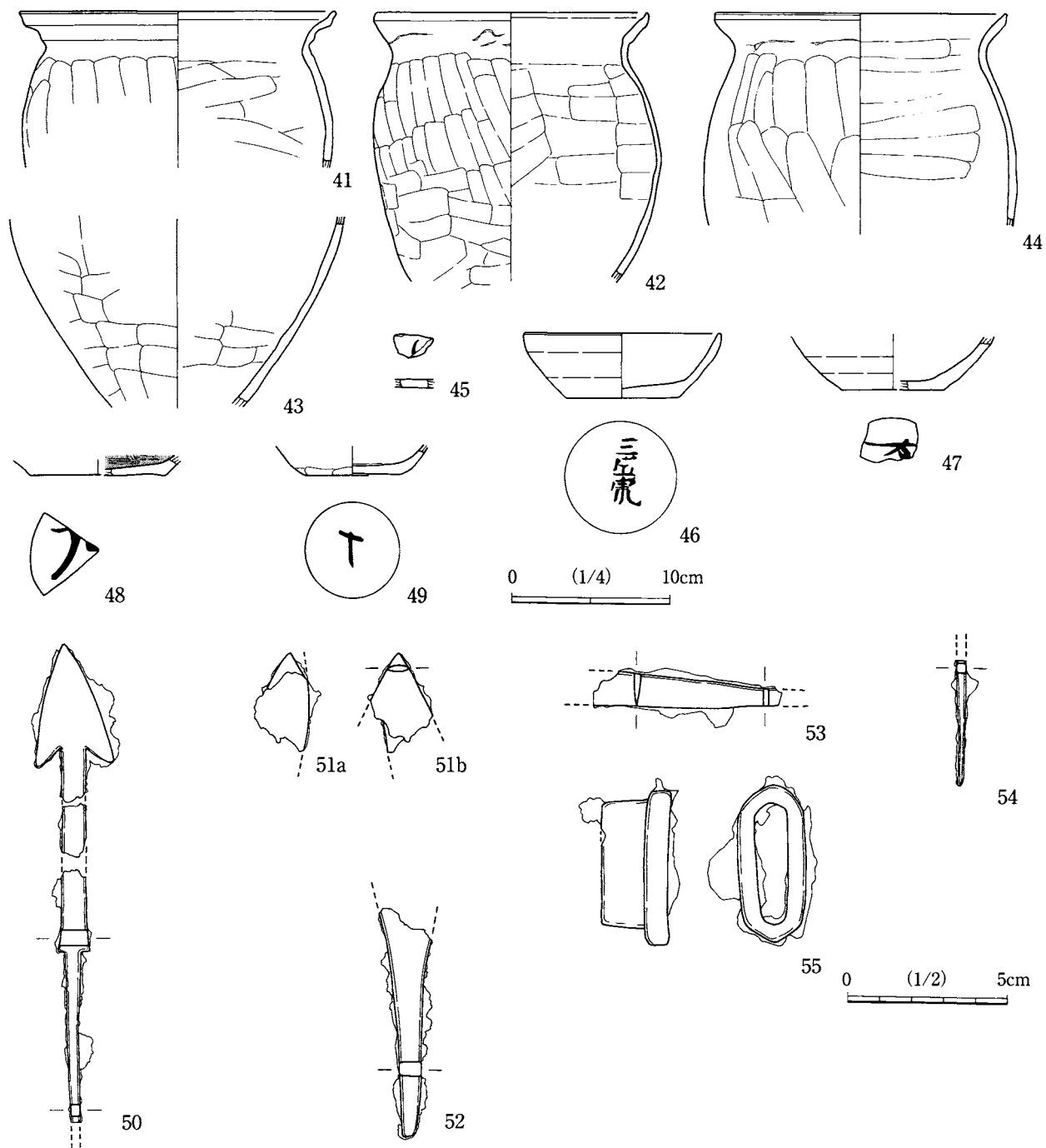
21・28は土師器鉢である。21はロクロ調整で、七寸の坏である。体部下端及び底部全面に手持ちヘラ削りを施し、内面はヘラ磨きである。28は片口の鉢である。口唇部を外側へ折り返し、ヨコナデ調整である。胴部は横方向のヘラ削りで、上半を丁寧にナデている。内面は横方向のヘラナデである。

29・30・34・39は須恵器甕、31は須恵器甗と思われる。31は口縁直下から平行叩きが施されている。32～33・35～38・40～43は土師器甕である。口径は16cm～20cmの製品が多い。口縁部は受け口状を呈し、胴部上半は縦方向、下半は横方向のヘラ削りを施す。内面は横方向のヘラナデである。

50・51・52・54は鉄鏃、53は刀子、55は刀装具であろうか。



第120图 SI-034号出土遗物实测图



第121図 SI-034号出土遺物実測図

第36表 SI-034号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	ロクロ土師器 坏	13.0	4.0	6.5	完形	白色砂粒、小石(1~3mm)、長石、石英、スコリア	黄色、橙色		33
2	ロクロ土師器 坏	13.4	4.5	7.5	ほぼ完形	白色砂粒、石英、長石、スコリア	橙色		49
3	須恵器 坏	(12.0)	4.0	(6.0)	口縁1/4	白色粒、小石(3mm)	内、灰黄褐色 外、褐灰色	底部、切り難し不明	1.12
4	須恵器 坏	(12.0)	[3.3]	-	口縁1/4	白色粒、スコリア	暗灰褐色		1
5	ロクロ土師器 坏	12.8	3.5	7.0	2/3	白色砂粒、小石、長石、石英、スコリア	橙褐色	内外、ミガキ有り(単位なし)	1
6	土師器 坏	(13.0)	[3.3]	-	1/12	スコリア、黄土粒	明褐色	内、ナデ後ミガキ 外、ヘラケズリ後ミガキ	3
7	土師器 坏	(12.4)	[3.0]	-	口縁1/4	白色粒	鈍い黄褐色	内、ナデ後ミガキ 外、ヘラケズリ後ミガキ	32
8	ロクロ土師器 坏	(15.0)	4.1	(9.0)	1/4	スコリア	浅黄色		21
9	土師器 坏	12.4	5.3	6.0	完形	白色砂粒、長石、スコリア	内、鈍い橙褐色~暗褐色 外、黄灰色~黒褐色	左右の器高に差がある	34



10	ロクロ土師器 坏	(13.2)	4.3	7.1	体部1/4	白色砂粒、長石、石英	内、鈍い褐色～黒褐色 外、褐色～灰褐色		1.9
11	土師器 坏	(11.0)	[3.6]	—	口縁～体部1/6	白色粒、スコリア	褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ後ナデ	1
12	土師器 坏	(13.4)	[4.4]	(6.7)	1/4	白色砂粒、スコリア	明褐色	内、輪積み痕残る	1
13	ロクロ土師器 坏	—	[2.8]	6.8	底部3/4	細砂粒、スコリア(少)	内、灰黄褐色 外、灰黄色、黒色	器面摩耗 外、スス付着、軟質	1
14	ロクロ土師器 坏	12.6	4.2	6.7	ほぼ完形	白色砂粒、長石、スコリア	内、灰黄褐色 外、暗灰褐色～黒色	底部回転糸切り	25.35
15	ロクロ土師器 坏	(13.6)	4.1	6.8	1/2	白色粒、長石(少)、スコリア(少)	内、黄褐色+暗褐色 外、鈍い黄褐色+灰黄色	内、炭素吸着	44.54
16	ロクロ土師器 坏	(12.3)	3.8	(7.4)	1/5	微砂粒、スコリア	浅黄色	器面摩耗 軟質	1
17	ロクロ土師器 皿	—	[1.1]	5.7	底部3/4	微砂粒、スコリア	褐色	軟質	1
18	ロクロ土師器 坏	—	[1.3]	(6.0)	底部2/3	スコリア、白色砂粒	鈍い黄褐色	内、黒色処理、ミガキ	1
19	ロクロ土師器 坏	—	[1.4]	(9.2)	底部1/3	スコリア、石英	褐色	器面摩耗	1
20	ロクロ土師器 坏	—	[1.0]	9.3	底部2/3	白色砂粒、長石、スコリア	内、暗褐色 外、黒色	外、炭素吸着	1
21	ロクロ土師器 鉢	(22.0)	7.5	9.6	1/2	白色砂粒、小石(1mm)、長石、スコリア	褐色	内、ヨコナデ後ミガキ(単位なし) 外、火ダスキ痕明瞭	1.10
22	須恵器 高台付坏	—	[3.1]	—	底辺部1/8	長石	灰色	内外、ヨコナデ	1
23	ロクロ土師器 皿	(14.0)	3.8	7.4	1/3	微砂粒、長石(少)	鈍い黄褐色	内、密にミガキ(光沢有り)	1.19
24	ロクロ土師器 皿	14.2	3.5	6.7	3/4	微砂粒、スコリア(少)	内、黒色 外、鈍い黄褐色	内、黒色処理	1.11
25	ロクロ土師器 皿	—	[2.2]	6.7	高台部のみ	微砂粒、長石(少)	鈍い黄褐色	内、密にミガキ(光沢有り)	40
26	ロクロ土師器 皿	—	[2.7]	8.0	高台部完形	白色砂粒、長石、石英、スコリア	内、鈍い黄褐色 外、明褐色	内、粗にミガキ 体部に墨書「□」	6.1
27	ロクロ土師器 皿	—	[1.4]	—	底部のみ	白色砂粒、石英(少)、スコリア	内、黒色 外、鈍い黄褐色	内、黒色処理	1
28	土師器 鉢	(25.4)	14.4	12.8	1/2	微砂粒、長石、石英	褐色～暗褐色	内外、炭素吸着有り	1.36
29	須恵器 甕	—	—	—	胴部片	粗砂粒、長石、石英	暗灰黄褐色	内、剥落有り	1.20
30	須恵器 甕	—	—	—	胴部片	白色砂粒、長石	暗赤褐色	外、剥落有り	46
31	須恵器 甕	(29.0)	[18.0]	—	口縁1/4	細砂粒、長石、スコリア	明赤褐色	内、無文の当て具痕有り	1.26.44.52
32	土師器 甕	—	[2.1]	6.8	底部のみ完形	白色砂粒、長石、スコリア	内、黒褐色 外、赤褐色一部黒色	内、炭素吸着 外、スス付着	25
33	土師器 甕	—	[2.0]	(8.0)	底部1/3	白色微粒、スコリア	褐色～鈍い褐色	器面剥落	1
34	須恵器 甕	—	[4.0]	(14.2)	底部1/5	スコリア	褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	1
35	土師器 甕	—	[5.3]	6.4	1/6	白色砂粒、スコリア(少)	内、鈍い黄褐色 外、黒褐色	内、白色状の塗布痕有り	1
36	土師器 甕	(9.9)	[6.0]	—	1/4	スコリア、白色砂粒	内、黒褐色 外、鈍い赤褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	1
37	土師器 甕	(18.8)	[5.0]	—	口縁1/6	スコリア、白色砂粒	鈍い褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	29
38	土師器 甕	16.4	[8.2]	—	口縁のみ完形	白色砂粒、小石、長石、スコリア	赤褐色	内外、器面薄く剥離	28
39	須恵器 甕	(22.7)	[7.0]	—	口縁1/4	スコリア、白色砂粒、石英	明褐色	外、器面摩耗している	50
40	土師器 甕	17.2	[13.5]	—	1/2	砂粒、長石、スコリア	鈍い黄褐色～黒褐色	火熱を受けた剥落有り	48.53.54
41	土師器 甕	(19.8)	[9.7]	—	1/4	白色砂粒、長石、石英、小石	赤褐色	二次的に火を受け器面荒れている	1.8.13
42	土師器 甕	17.4	[16.8]	—	2/3	白色砂粒、長石、石英、スコリア	明褐色～暗灰褐色	器形が歪んでいる	48
43	土師器 甕	—	[11.8]	—	胴下半1/2	スコリア、石英、白色砂粒	内、灰黄褐色 外、赤褐色	器面摩耗	1.54
44	土師器 甕	18.2	[13.3]	—	1/3	白色砂粒、長石、スコリア	明褐色～灰褐色	内外、器面ざらつき剥落している	1.47.50.54
45	ロクロ土師器 坏	—	—	—	底部片		鈍い黄褐色	底部墨書「□」	1
46	ロクロ土師器 坏	(12.5)	4.1	7.0	1/3	砂粒、長石、石英、スコリア	鈍い黄褐色	底部墨書「三田家、？」	1
47	ロクロ土師器 坏	—	[3.5]	(6.4)	1/7	砂粒、石英	明褐色	底部墨書「□」	1
48	ロクロ土師器 坏	—	[1.3]	(8.5)	底部1/4	砂粒、白針、長石(少)	内、黒色 外、鈍い黄褐色	底部墨書「□」	1
49	ロクロ土師器 坏	—	[1.8]	5.9	底部完形	砂粒、長石、石英、スコリア	内、褐色 外、明黄褐色	底部墨書「□」	32

### SI-035号竪穴住居跡 (第122図, 図版25, 110)

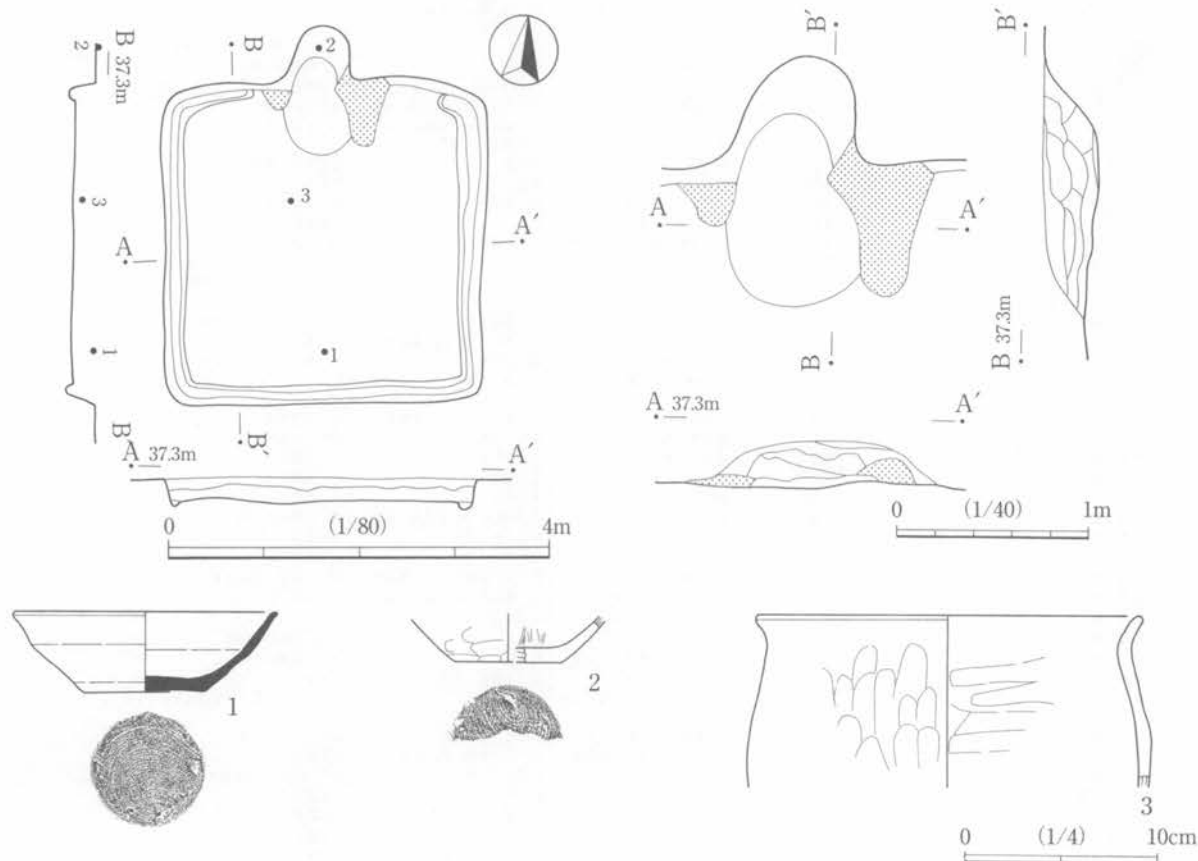
本遺構はK4-30グリッド付近に位置し、台地中央部の標高約37.2mに立地する。形態は方形で、規模は3.9m×3.4mを測る。主軸方位はN-5°-Wである。住居の掘込みは比較的浅く、確認面からの深さは21cm～27cmを測る。主柱穴は検出されていない。カマドの両側を除いた壁際には、深さ5cm～10cmの壁溝が巡る。覆土はしまりがよく、ローム粒子を多く含む暗褐色土を主体とする。

カマドは北側の壁の中央に位置する。掘り込みが浅いため、袖部の遺存状態はよくない。最大幅は145cmを測り、袖部は壁から65cm延びている。暗灰色砂質土を主体とする。煙道部は壁外へ55cm程度掘り込まれていた。

1は須恵器坏である。外面黒色、内面暗褐色で、体部下端に手持ちヘラ削りを施す。底部は回転糸切り無調整である。2は土師器としたが、やはり体部下端に手持ちヘラ削りを施し、底部は回転糸切り無調整である。3は土師器甕である。口縁部は短く、胴部は縦方向のヘラ削りを施す。

第37表 SI-035号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	(13.8)	4.2	6.2	体部1/5	白色砂粒、長石(少)、小石(1×2mm)	暗褐色～黒褐色	底部回転糸切り無調整	5
2	土師器 坏	—	[2.4]	(5.8)	底部1/2	白色粒	褐色	内、ミガキ	6.8
3	土師器 甕	(20.2)	[9.0]	—	口縁1/6	雲母	鈍い褐色	内、ヘラナデ 外、ヘラケズリ	4



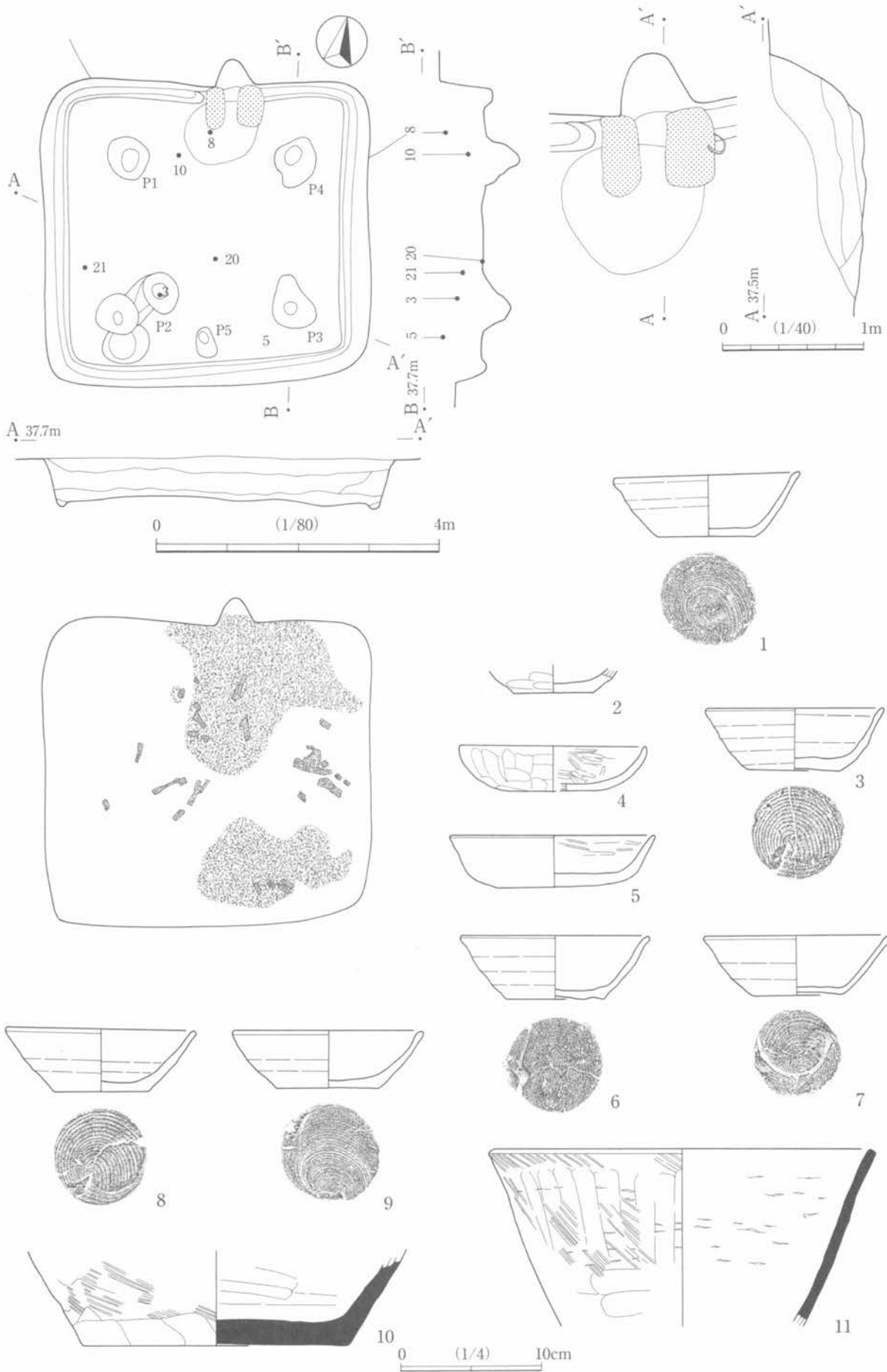
第122図 SI-035号実測図

SI-036号竪穴住居跡 (第123, 124図, 図版26, 110, 111)

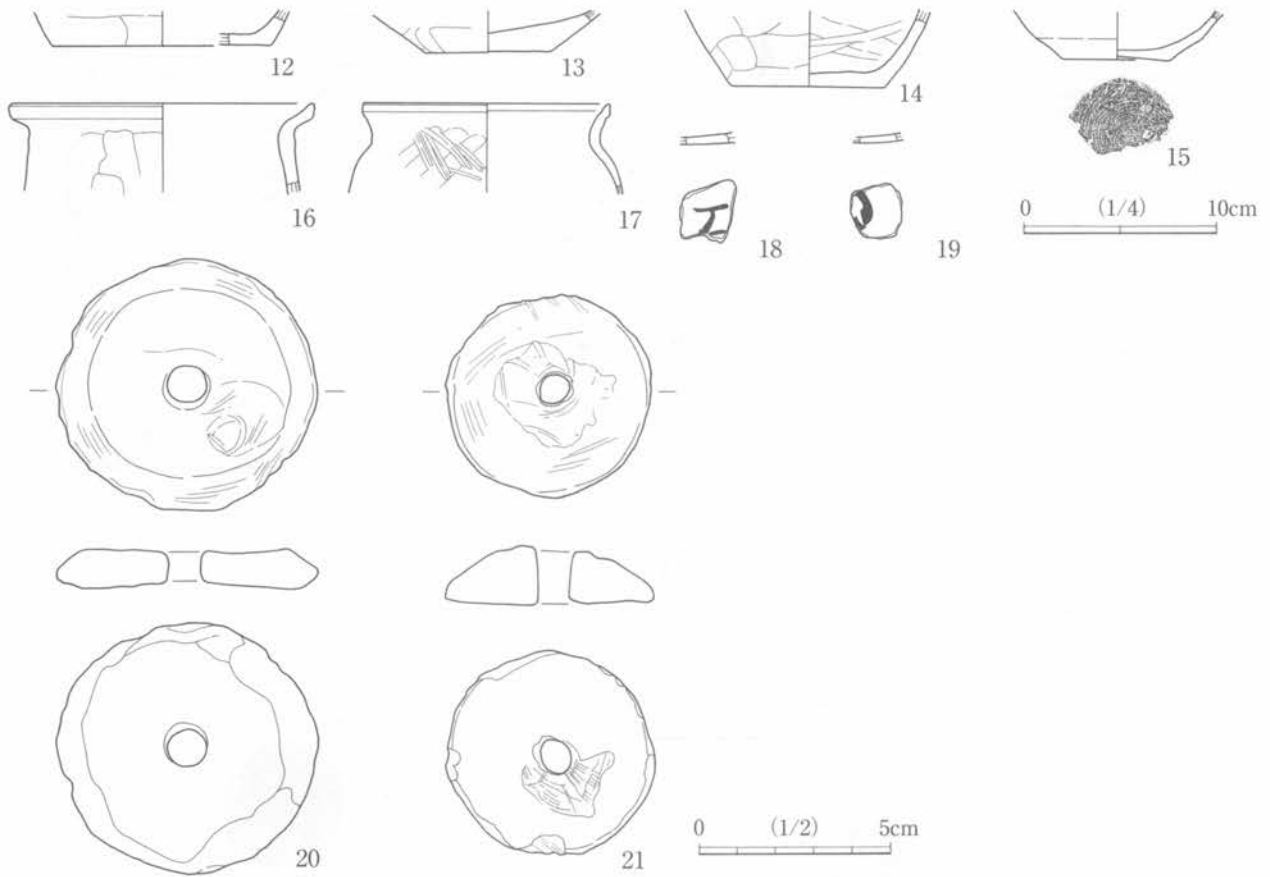
本遺構はK2-68グリッド付近に位置し、台地中央部の標高約37.5mに立地する。北東コーナー付近でSI-076号竪穴住居跡と重複関係にある。本遺構がSI-076号を切っており、本遺構の方が新しいことが明確である。形態は方形で、規模は4.2m×4.6mを測る。主軸方位はN-10°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしており、確認面からの深さは61cm~68cmを測る。主柱穴は対角線上に4基検出され、径60cm~80cm、深さ34cm~46cmを測る。南西コーナー部はコーナー寄りに隣接して深さ26cmの柱穴が検出されている。性格は不明であるが、配置から主柱穴を補完するものである可能性が窺える。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径40cm、深さ35cmを測る。壁際には深さ4cm~7cmの壁溝が全周する。覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土を主体とし、人為的な埋め戻し状況を呈する。多く検出されている焼土や炭化材は、床面から40cm~50cmの覆土上層に堆積しており、住居の廃絶後に焼却が行われたものと想定される。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は80cmを測り、袖部は壁から55cm延びている。暗灰色砂質土を主体とする。

1~3・6~9・15はロクロ土師器坏である。2の切り離しは不明であるが、他の個体は体部下端にヘラ削りは施されず、底部も回転糸切り無調整である。3・4は土師器坏である。4は丸底の坏で、体部外面は横方向のヘラ削り後、僅かにヘラ磨きを施し、内面も僅かに磨いている。5は平底の坏で、器面の遺存状況が悪く調整はほとんど観察できないが、体部内面のヘラ磨きがかろうじて窺える。18・19は墨書さ



第123图 SI-036号实测图



第124図 SI-036号出土遺物実測図

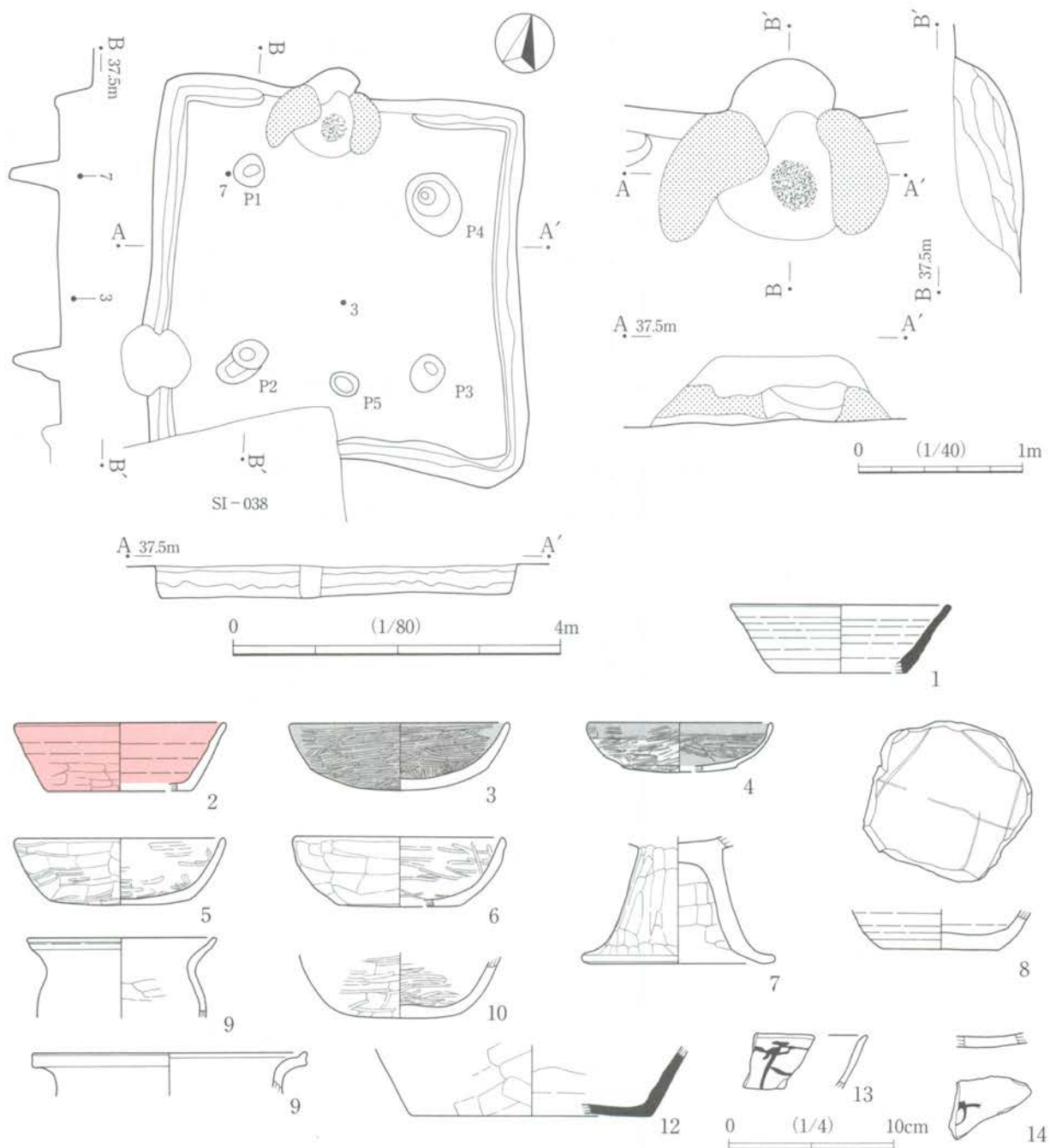
れた破片である。

10は須恵器甕, 11は須恵器甌である。10は雲母粒・石英粒の目立つ胎土で, 胴部は斜位に平行叩きが施され, 最下端に横方向のヘラ削りを施す。11は直口縁で, 器面は斜位の平行叩きを縦方向のナデで消している。12~14・16・17は土師器甕である。いずれも小破片である。

20・21は紡錘具である。20はロクロ土師器坏の底部を再利用したものである。21も土製で, 表面はヘラ削り後, 磨かれている。なお, 頂部の孔周囲は器面が剥がれている。

第38表 SI-036号出土土器観察表

検出番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	ロクロ土師器 坏	(13.1)	4.5	6.9	1/2	白色砂粒、長石、スコリア	内、鈍い褐色 外、鈍い黄褐色	底部回糸切り無調整	12
2	ロクロ土師器 坏	-	[1.7]	(5.6)	底部1/2	雲母、スコリア	褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	12
3	ロクロ土師器 坏	12.6	4.5	6.4	完形	白色砂粒、長石、スコリア	褐色-鈍い褐色	底部回糸切り無調整	7
4	土師器 坏	(13.3)	3.2	(7.0)	1/3	微砂粒、長石(少)、スコリア	内、鈍い褐色 外、鈍い黄褐色	内、ミガキ口縁部密(光沢有り)	1
5	土師器 坏	14.4	3.7	10.6	3/4	白色砂粒、小石(チャート)、長石(少)、石英(少)	内、鈍い黄褐色 外、鈍い褐色-暗褐色	口唇部はほとんど摩滅	3
6	ロクロ土師器 坏	(13.4)	4.5	6.9	1/4	白色砂粒、スコリア	明褐色-暗黄褐色	底部回糸切り、器面重み有り	12
7	ロクロ土師器 坏	13.3	4.3	6.2	ほぼ完形	白色砂粒、小石(1mm)、長石、スコリア	明赤褐色	二次的に火を受けピッチ状にスス附着	1,12
8	ロクロ土師器 坏	13.5	4.2	6.6	3/4	白色砂粒、長石(多)、石英、スコリア	内、明褐色 外、暗黄褐色-黒色	底部回糸切り、無調整	3,4,9
9	ロクロ土師器 坏	13.5	4.0	7.2	ほぼ完形	白色砂粒、長石、石英(少)、スコリア	鈍い黄褐色	内、ピッチ状にスス附着	11
10	須恵器 甕	-	[6.8]	18.7	底部完形	微砂粒、雲母、長石、スコリア	灰白色一部褐色	外、底部周縁剥落有り 常総産	5
11	須恵器 甌	(27.3)	[12.7]	-	口縁-胴部1/4	白色砂粒、長石	暗褐色-赤褐色	内、輪積み痕多く残る	一括13
12	土師器 甕	-	[1.8]	(11.4)	底部1/5	スコリア、白色砂粒	鈍い黄褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	一括
13	土師器 甕	-	[2.1]	(6.5)	底部1/3	スコリア、石英、長石	内、鈍い赤褐色 外、褐色-黒褐色	外、二次焼成	1
14	土師器 甕	-	[4.0]	8.0	底部2/3	白色砂粒、長石粒	暗褐色	内、剥落多い	1,12
15	ロクロ土師器 坏	-	[2.5]	(5.6)	底部1/2	白色砂粒、スコリア	明赤褐色	底部、回糸切り難し	1
16	土師器 甕	(15.9)	[4.6]	-	底部1/4	スコリア、白色砂粒	内、黒褐色 外、灰黄褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	1
17	土師器 甕	(12.9)	[4.7]	-	口縁1/8	スコリア、白色砂粒	内、鈍い赤褐色 外、赤褐色-黒褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ後ミガキ	1
18	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	砂粒、長石	内、鈍い赤褐色 外、鈍い黄褐色	底部墨書「万」?	1
19	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	砂粒、長石	暗赤褐色	底部墨書「口」	1



第125図 SI-037号実測図

SI-037号竪穴住居跡 (第125図, 図版26, 110, 111)

本遺構はK2-98グリッド付近に位置し、台地中央部の標高約37.4mに立地する。本遺構は南西コーナー付近でSI-038号竪穴住居跡、SB-013号掘立柱建物跡の柱穴と重複関係にある。いずれも本遺構の壁、床面が切られており、本遺構の方が時代が遡ることが明確である。形態はほぼ正方形で、規模は4.6m×4.5mを測る。主軸方位はN-13°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしており、確認面からの深さは35cm~40cmを測る。主柱穴は対角線上に4基検出され、径40cm~80cm、深さ50cm~70cmを測る。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径30cm、深さ35cmを測る。壁際には深さ5cm~9cmの壁溝がカマドの両側を除いてほぼ全周する。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土を主体とす

る。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は140cmを測り、袖部は壁から80cm延びている。暗灰色砂質土を主体とする。

1は須恵器坏である。青灰色を呈し、体部下端に手持ちヘラ削りを施す。2・8・13・14はロクロ土師器坏である。2は体部が直線的に立ち上がるもので、体部下端は手持ちヘラ削り、底部は静止糸切り後周縁部手持ちヘラ削りである。内外面とも赤彩される。8は内面に線刻され、やはり内外面とも赤彩されている。13・14は墨書のある破片である。3～6・10は土師器坏である。3・4は蓋模倣の系譜を引くもので、底部が稜をもって僅かに突出する。ともに内外面とも実に丁寧に磨かれ、特に3は内外面とも黒色で黒光りしている。5・6は平底の坏で同一個体の可能性もある。口縁部は短く直立し、ヨコナデで整える。体部から底部は横方向のヘラ削りで、内面にヘラ磨きを施す。10は丸底の坏で、体部から底部にかけて横方向のヘラ削りを施し、内外面とも僅かに磨いている。7は土師器高坏である。脚部は短く、外面は縦方向のヘラ削り、内面は横方向のヘラナデである。坏部内面にヘラ磨きは施されていない。

9・11は土師器甕である。ともに口縁部の小破片である。10は須恵器甕の底部である。

第39表 SI-037号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	(13.4)	4.1	(8.0)	口縁～底部1/8	白色砂粒	灰色	底部、切り難し不明	1
2	ロクロ土師器 坏	(13.0)	[4.2]	(8.8)	体部1/2 底部1/4	白色砂粒、長石、スコリア	鈍い黄褐色～赤褐色	全面赤彩、器面摩耗	1
3	土師器 坏	(13.4)	[4.1]	丸	1/4	微砂粒、白針(少)	黒色	内外、密にミガキ、黒色処理	
4	土師器 坏	(11.4)	[3.0]	(7.0)	1/4	微砂粒、スコリア	鈍い黄褐色	内外、密にミガキ、黒色処理(漆)	1
5	土師器 坏	(13.0)	4.0	(8.6)	1/4	砂粒、小石(チャート)、スコリア	黄褐色	器面若干摩耗	1.5
6	土師器 坏	(13.0)	4.2	[7.4]	1/3	白色砂粒、小石(1×2mm)、石英、スコリア	鈍い褐色	外、若干摩耗	1
7	土師器 高坏	—	[7.7]	11.8	脚部完形	白色砂粒、長石	明赤褐色	二次的に火を受ける	3
8	ロクロ土師器 坏	—	[2.4]	7.0	底部のみ	砂粒、長石(少)、スコリア(少)	内、明赤褐色 外、明赤色～鈍い黄褐色	内、線刻有り	1
9	土師器 甕	(11.6)	[4.8]	—	口縁1/6	白色砂粒	褐色	内、ヘラナデ 外、ヘラケズリ	1
10	土師器 坏	—	[3.9]	6.0	1/3	白色砂粒、長石(少)、スコリア(多)	鈍い黄褐色	内、ミガキ痕鮮明 外、若干摩耗	1
11	土師器 甕	(16.8)	[2.4]	—	口縁1/8	白色砂粒、石英	褐色	内外、横方向のナデ	1
12	須恵器 甕	—	[4.3]	(14.6)	底部1/4	長石、スコリア	赤褐色	内、ナデ 外、底部無調整	1
13	ロクロ土師器 坏	—	—	—	口縁片	砂粒、長石、石英	明褐色	体部墨書「口」	1
14	ロクロ土師器 坏	—	—	—	底部片	砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色	底部墨書「口」	1

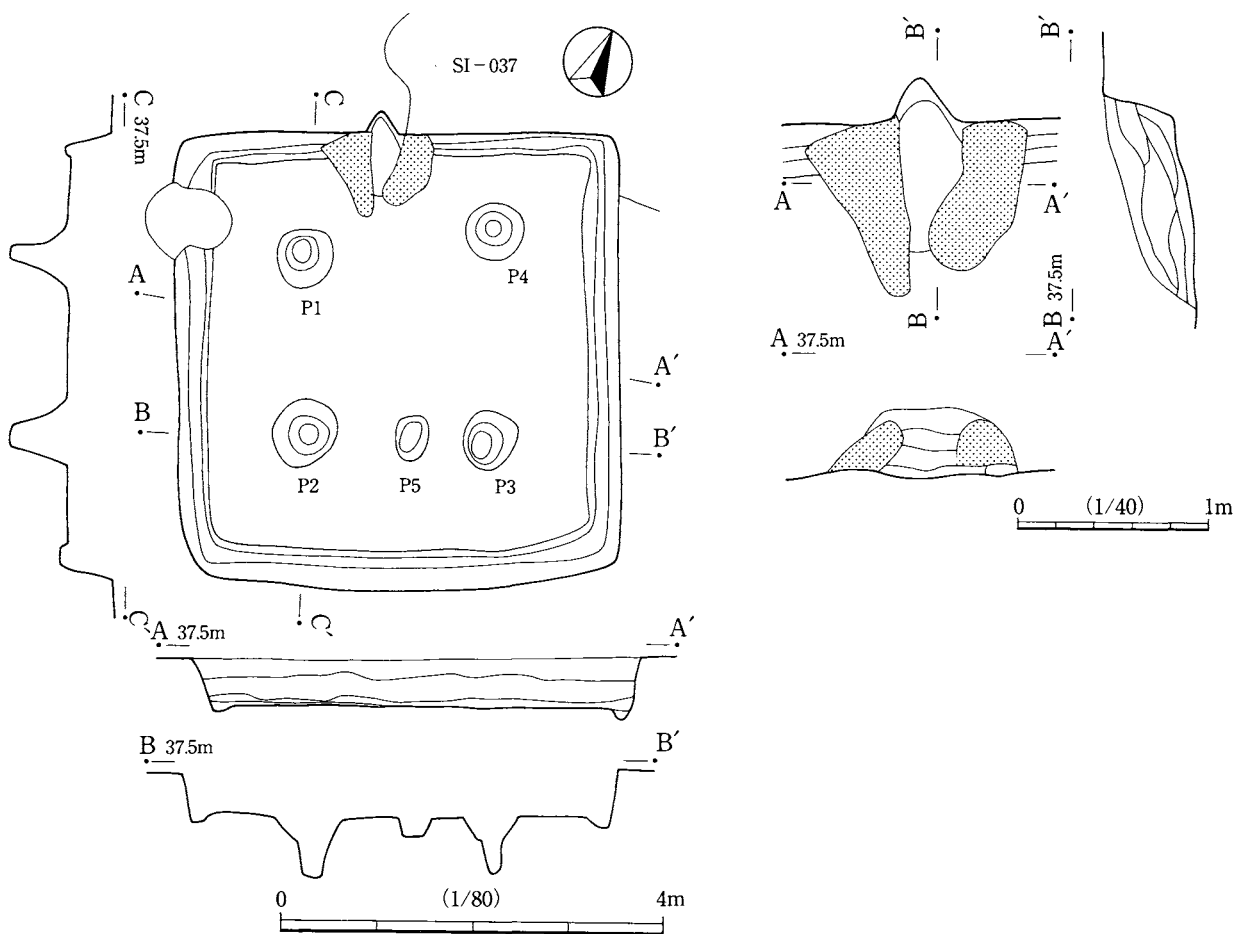
### SI-038号竪穴住居跡 (第126図, 図版27)

本遺構はK3-27グリッド付近に位置し、台地中央部の標高約37.4mに立地する。北東コーナー付近においてSI-037号竪穴住居跡と、北西コーナー付近においてSB-006号掘立柱建物跡の柱穴と、南西コーナー付近においてSK-032号土坑とそれぞれ重複関係にある。SI-037号の床面を切っていることから本遺構の方が新しいことが明確である。SB-006号、SK-032号はともに本遺構の覆土上から掘り込まれており、本遺構の方が時代を遡ることが明確である。

形態は方形で、規模は4.8m×4.6mを測る。主軸方位はN-23°-Wである。住居の掘込みははっきりとしており、確認面からの深さは35cm～40cmを測る。主柱穴は対角線上に4基検出され、径60cm～74cm、深さ58cm～68cmを測る。カマドの反対側の主柱穴のほぼ中間には梯子ピットが1基検出され、径46cm、深さ21cmを測る。壁際には深さ3cm～9cmの壁溝が全周する。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土を主体とする。

カマドは北西側の壁の中央に位置する。最大幅は110cmを測り、袖部は壁から90cm延びている。暗灰白褐色土を主体とする。

図示できる遺物はない。



第126図 SI-037号実測図

**SI-039号竪穴住居跡** (第127, 128図, 図版27, 111)

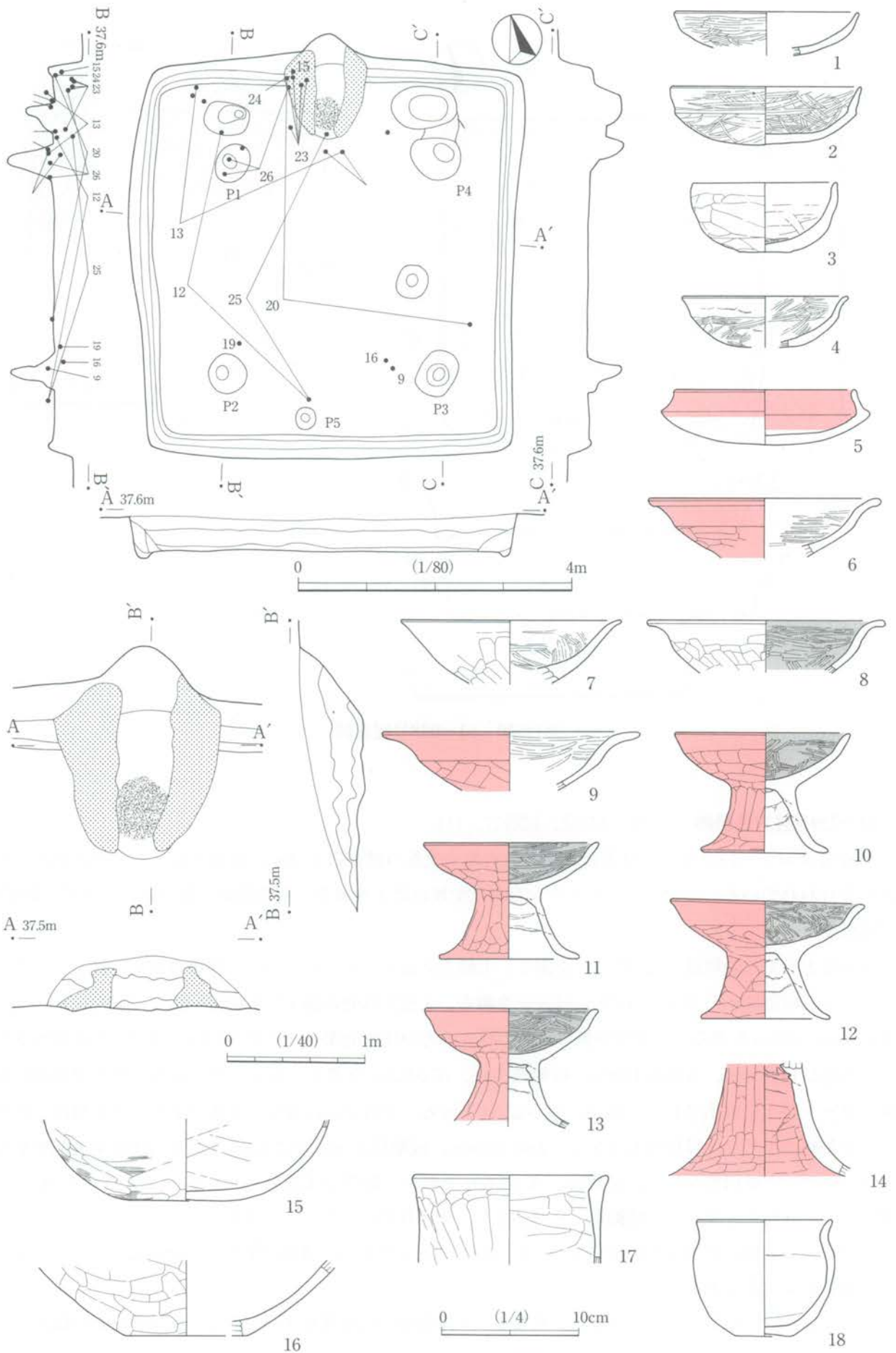
本遺構はM2-13グリッド付近に位置し、台地中央部の標高約37.4mに立地する。2年次にわたって調査が行われている。カマドと主柱穴を含むほぼ全域は第1次調査、東側壁から南側壁にかけては第2次調査による。

形態は方形で、規模は5.8m×5.7mを測る。主軸方位はN-20°-Eである。住居の掘込みはしっかりとしており、確認面からの深さは49cm~57cmを測る。主柱穴は対角線上に4基検出され、径48cm~78cm、深さ50cm~66cmを測る。カマド左側の2基の柱穴の方が比較的深い。カマド右脇には貯蔵穴が検出された。形態は楕円形で、長軸長100cm、短軸長60cm、深さ52cmを測る。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径35cm、深さ22cmを測る。床面からはほかに2基の小ピットが検出された。カマド左脇の小ピットは楕円形を呈し、長軸長60cm、短軸長37cm、深さ20cmを測る。住居中央部やや右寄りの小ピットは円形を呈し、径45cm、深さ37cmを測る。壁際には深さ3cm~9cmの壁溝が全周する。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土を主体とし、床面付近はしまりを有する。

カマドは北東側の壁の中央に位置する。最大幅は120cmを測り、袖部は壁から120cm延びている。暗灰白色砂質土を主体とする。

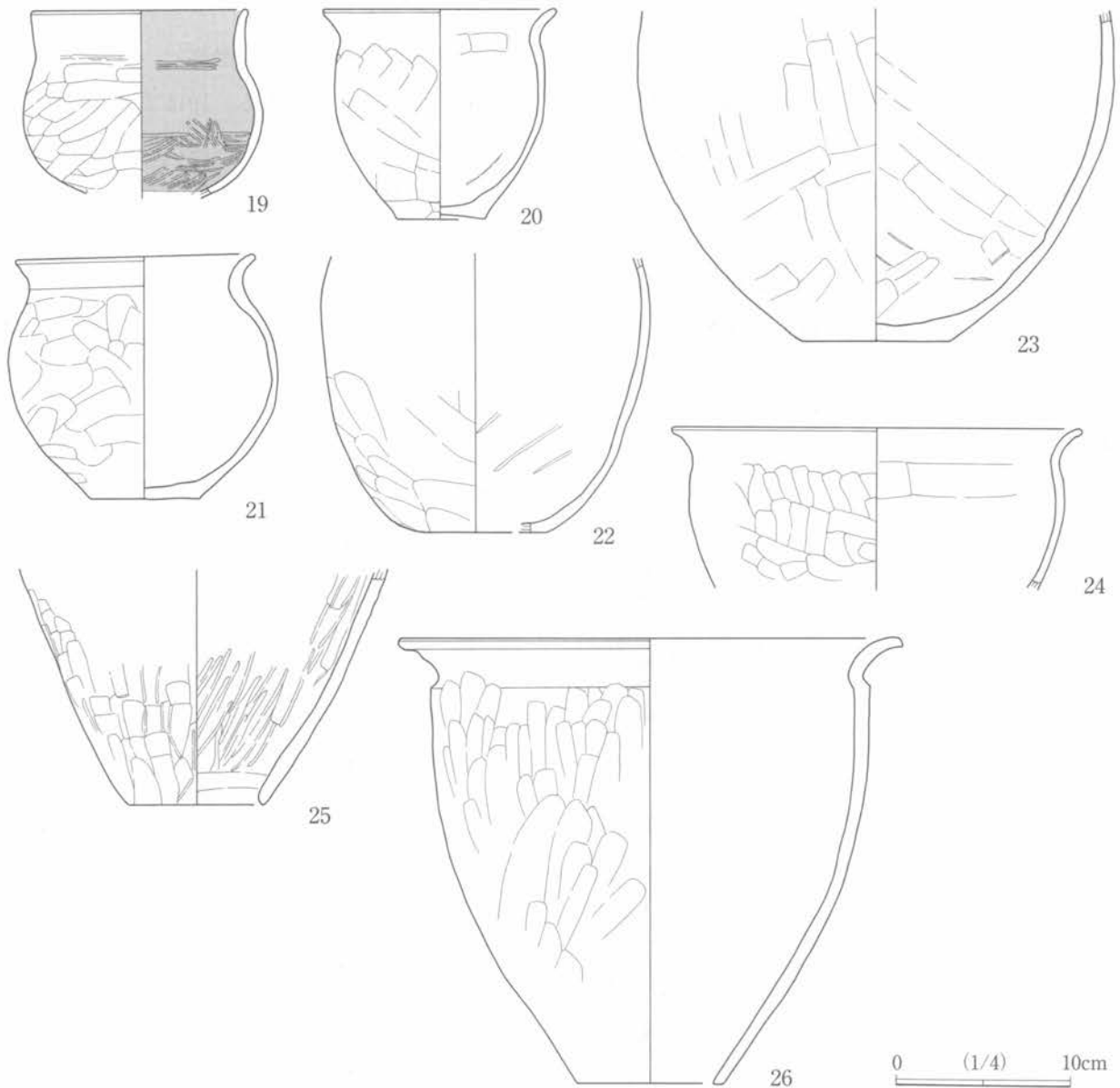
1~5は土師器坏で、それぞれ形状が異なる。1は僅かに口縁部が立つもので、ヘラ削りが口縁部まで





第127图 SI-039号实测图





第128図 SI-039号出土遺物実測図

達している。底部はヘラ削り後ナデ、口縁部はヘラ削り後磨きを施す。2は蓋模倣の坏で、底部はヘラ削り後磨き、口縁部及び内面も粗く磨いている。3は深さのある坏で、口縁部が直立する。外面は凹凸ができるほど強いヘラ削りを施し、内面は横方向にナデている。4は高坏の坏部のような形状で、口縁部が外反している。底部は横方向のヘラ削りで、内面に粗くヘラ磨きを施す。5は身模倣の坏で、器面の遺存状況が悪く調整は観察できない。外面の口縁部及び内面全体に赤彩される。

6～14は土師器高坏である。14の脚部は若干長い、他は短い脚部である。10～13はほとんど同じ法量の高坏がほぼ完形で揃っており、セットとして製作されたものと思われる。外面は全面赤彩され、坏部内面は黒色処理される。6～9の坏部は口径16cm～19cmのもので、7は粗雑な調整であるが、他は比較的に丁寧な作りである。8は内面黒色処理され、6・9は外面に赤彩される。

15は土師器鉢である。底部は平坦であるが体部との境はあまり明瞭でなく、底部自体不定形である。外

面は底部，体部ともヘラ削りであるが，底部近くに刷毛目状の調整がみられる。

16～24は土師器甕である。17～21は比較的小形である。17は胴部からそのまま口縁部にいたるもので，口縁部はヨコナデ，胴部外面は縦方向のヘラ削り，内面は横方向のヘラ削りである。19は丁寧な作りで，外面はヘラ削りをほとんどナデで消しており，内面にはヘラ磨きが施されている。内面は黒色処理，外面は赤彩される。21はほぼ完形で，口縁部はヨコナデ，胴部は横方向のヘラ削りである。24は胴部があまり膨らまないもので，最大径が口縁部に位置する。

25・26は土師器甌である。26は口縁部が大きく外反し，ヨコナデで整える。胴部は外面が縦方向のヘラ削り後部分的に磨きを加え，内面は丁寧にナデている。孔周辺は内面に斜め方向のヘラ削りを施している。25は底部破片で，内外面ともヘラ削り後ヘラ磨きを施している。

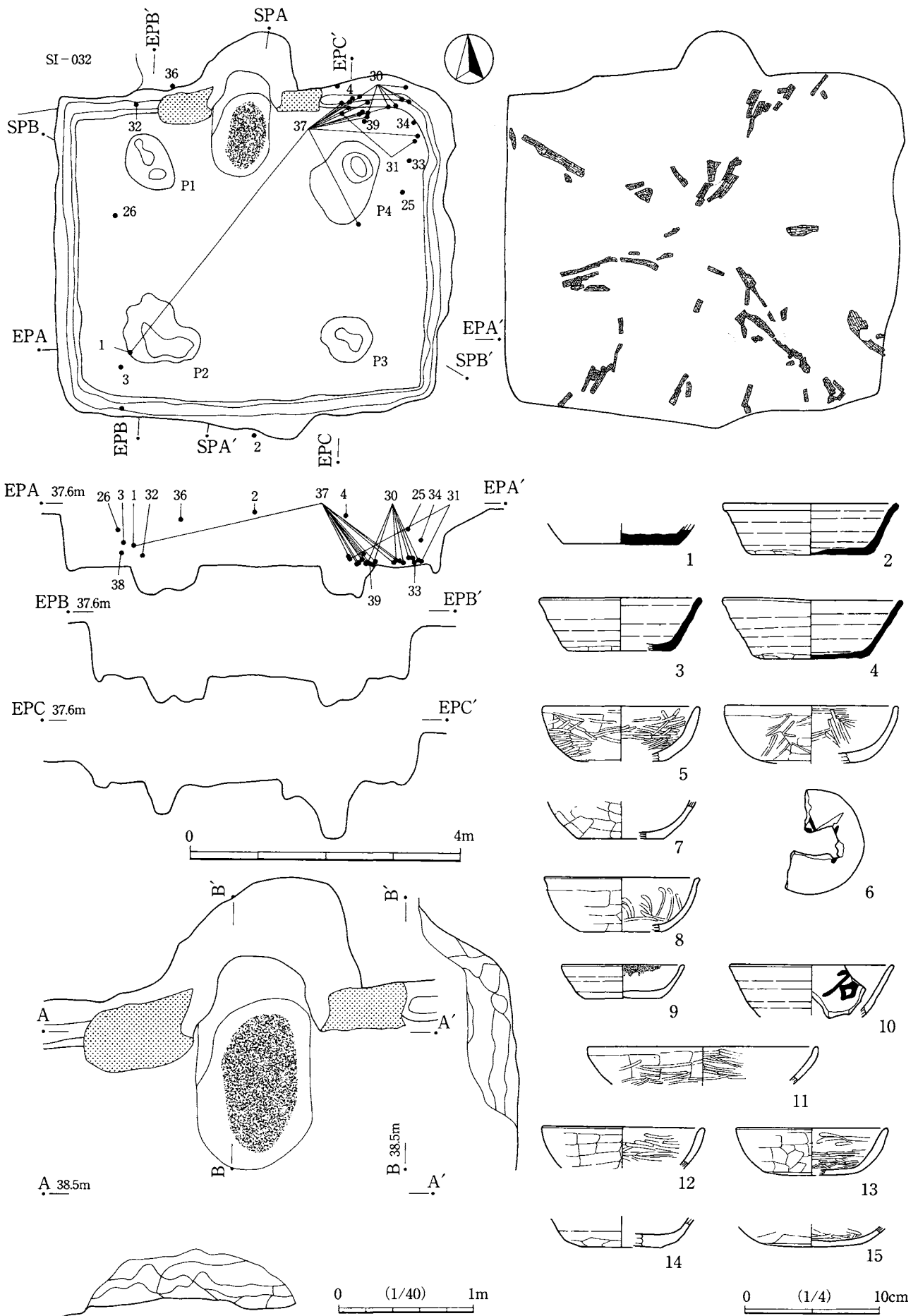
第40表 SI-039号出土土器観察表

種別番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	13.3	[3.1]	-	底部欠体部 2/3	白色砂粒(少),小石(1mm)	鈍い褐色	口唇部磨滅	1
2	土師器 坏	(13.8)	4.2	丸	1/3	白色砂粒,長石粒	鈍い黄褐色+黒色	内外,ミガキ有り	1
3	土師器 坏	10.4	5.0	丸	ほぼ完形	白色砂粒,長石,石英	内,鈍い褐色 外,鈍い褐色+黒色	口唇部割った様に欠けている	3
4	土師器 坏	(12.0)	[3.7]	-	1/3	白色砂粒,長石	鈍い褐色-黒色	底部不定方向のヘラケズリ	1
5	土師器 坏	13.2	4.0	丸	2/3	砂粒,雲母,長石,スコリア	橙褐色	内外,赤彩(範囲有り),器面磨滅	1.19
6	土師器 高坏	(16.8)	[4.4]	-	坏部1/3	白色砂粒,石英,長石(少)	内,暗赤褐色 外,赤褐色	内,ミガキ(単位なし,光沢有り) 外,赤彩,丁寧なナデ調整	1
7	土師器 高坏	(16.1)	[4.5]	-	坏部1/3	白色砂粒,長石,黒色粒	褐色+暗褐色	内,ミガキ(単位なし,光沢有り)	1
8	土師器 高坏	(17.2)	[3.8]	-	坏部1/3	白色砂粒,白針,長石(少)	内,黒色 外,褐色	内,黒色処理(吸炭)密にミガキ	1
9	土師器 高坏	(18.7)	[4.4]	-	坏部1/2	白色砂粒,小石(1mm位),長石	内,鈍い赤褐色 外,赤褐色	内,ミガキ(単位有り,光沢有り) 外,赤彩	1.32.39
10	土師器 高坏	12.7	8.8	9.9	ほぼ完形	白色砂粒,白針,長石,スコリア	内,黒色 外,赤褐色	内,黒色処理(吸炭)ミガキ(光沢有り) 脚内,輪積み痕明瞭 外,赤彩,若干磨滅	8
11	土師器 高坏	12.7	8.4	10.2	ほぼ完形	白色砂粒,長石(多),石英,スコリア	内,黒色 外,暗褐色-鈍い黄褐色	内,黒色処理(吸炭),ミガキ(単位有り,光沢有り) 外,赤彩,全面薄く剥落,坏部脚内炭素吸着有り	4
12	土師器 高坏	12.7	8.8	9.2	ほぼ完形	白色砂粒,長石	内,黒色 外,赤色	内,黒色処理(吸炭),ミガキ(単位有り,光沢有り) 脚部輪積み痕明瞭 外,全面赤彩	1.9.27
13	土師器 高坏	12.6	[8.5]	-	裾部のみ欠	白色砂粒,小石,長石,石英,スコリア	内,黒色 外,明赤色-暗褐色	内,黒色処理(吸炭),口縁部磨滅,ミガキ有り 外,全面赤彩	2.35
14	土師器 高坏	-	[8.0]	-	脚部のみ	白色砂粒(少),長石(少),スコリア	赤褐色	内外,全面赤彩	1
15	土師器 鉢	-	[6.0]	8.0×11.0	底部完形	白色砂粒,長石	橙褐色-黒褐色	外面刷毛目残る	36
16	土師器 甕	-	[5.0]	(8.8)	底部1/4	白色砂粒,石英	内,鈍い黄褐色 外,黒色	内,器面剥落している	1.25
17	土師器 甕	(14.2)	[6.6]	-	口縁-胴上	白色砂粒(少),長石(少),小石	内,黒色 外,褐色-黒色	器面若干磨滅 内外,炭素吸着	1
18	土師器 甕	(9.8)	8.1	4.2	1/3	白色砂粒,白針,長石	内,暗褐色 外,赤褐色-極赤褐色	外,剥落著しい 内,炭素吸着	1
19	土師器 甕	17.4	[10.8]	-	3/4	白色砂粒,白針,長石(少)	内,黒色 外,赤褐色	内,黒色処理,ミガキ胴部密にあり(光沢有り)	1.29
20	土師器 甕	13.5	12.0	5.0	1/3	白色砂粒,白針,長石(多),小石	内,黒褐色 外,暗赤褐色	外,器面剥落	1.23.37
21	土師器 甕	13.8	14.0	6.2	胴部1/5欠	白色砂粒,長石,石英(少)	鈍い褐色-暗赤褐色+黒褐色	内,胴部下-底部剥落多し	1.18.35.38
22	土師器 甕	-	[16.0]	8.0	底部-胴部2/3	白色砂粒,長石(少)	内,鈍い黄褐色-黒褐色 外,暗赤色-暗褐色	内外,二次的に火を受け汚れている	1.38
23	土師器 甕	-	[19.0]	8.4	1/6	白色砂粒,長石	内,黒色 外,明褐色-褐灰色	内外,剥落著しい	1.11.12.13.14.15.38
24	土師器 甕	23.4	[10.0]	-	口縁-胴上 1/2	白色砂粒,長石,スコリア(少)	内,黄褐色 外,明赤褐色	内,口縁部帯状にスス付着	1.37.38
25	土師器 甌	-	[13.5]	7.7	底部完形	白色砂粒,長石,石英	内,明赤褐色 外,明褐色+黒色	内,強斜縦方向にヘラミガキ(光沢有り)	17.27.39
26	土師器 甌	28.8	[25.6]	(8.4)	1/2	白色砂粒,長石,石英,スコリア	内,鈍い褐色 外,褐色+黒色	内,丁寧にナデ	1.6.7.12

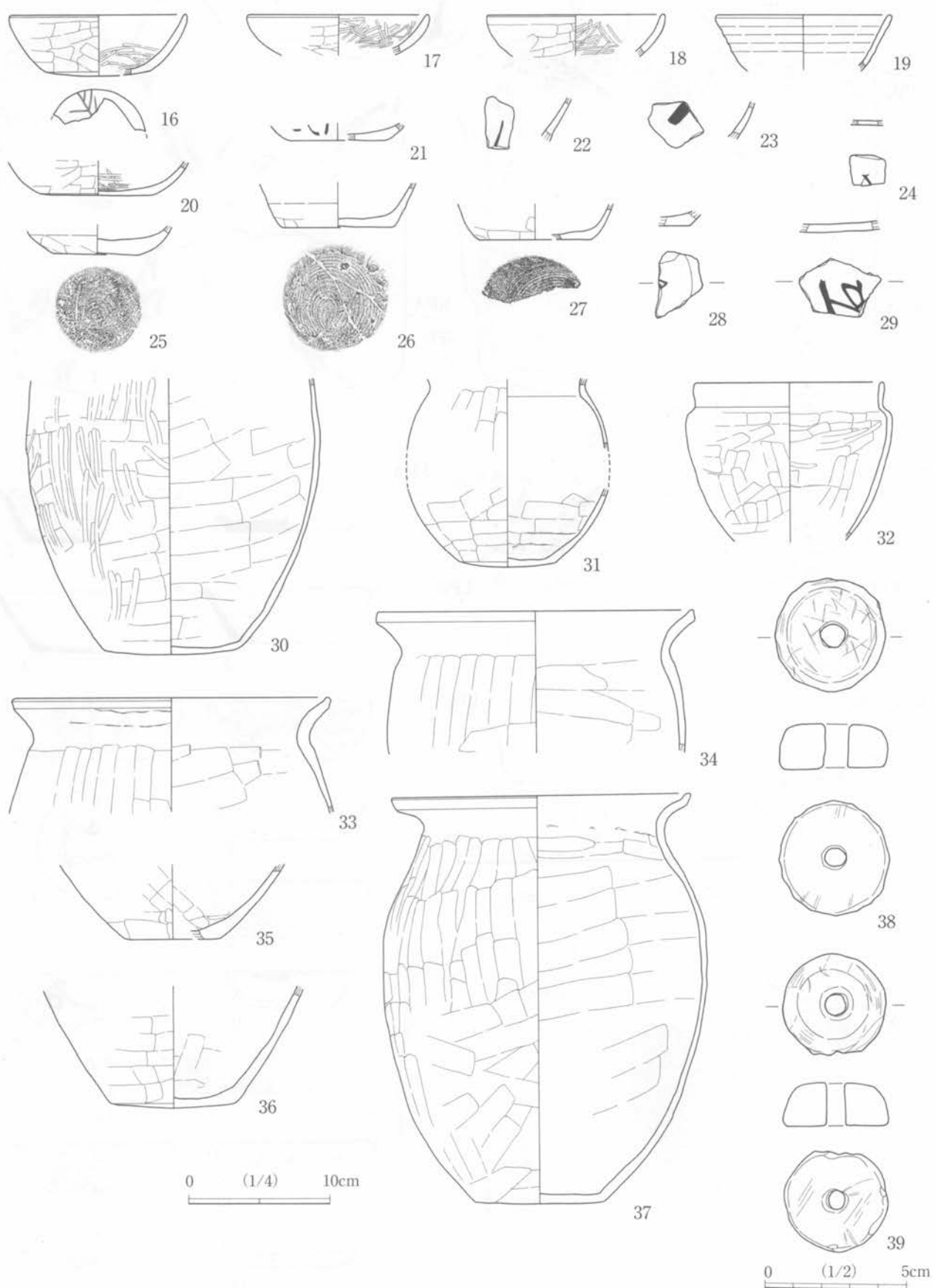
SI-040号竪穴住居跡 (第129, 130図, 図版27, 112)

本遺構はL4-00グリッド付近に位置し，台地中央部の標高約37.4mに立地する。北西コーナー付近においてSI-032号竪穴住居跡と，東側壁付近においてSD-005号溝状遺構と，カマド上部においてSD-033号と重複関係にある。SI-032号とは壁のごく一部分が重複するのみであるため，遺構から新旧関係を把握することはできない。SD-005号，SK-033号ともに本遺構の覆土中に所在しており，本遺構の方が時代を遡ることは明確である。

形態は横長の方形で，規模は5.0m×5.9mを測る。主軸方位はN-0°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしており，確認面からの深さは70cm～78cmを測る。主柱穴は対角線上に4基検出され，径70cm～120cm，深さは北東の柱穴のみが84cmと深く，他は40cm～42cmを測る。カマド左側の2基については，



第129图 SI-040号实测图



第130图 SI-040号出土遗物实测图

土層断面の観察から、住居外側に向かって柱の建て替えが行われた状況が窺える。住居内の覆土中に焼土、炭化材が多量に検出された。炭化材は住居の各コーナーから中心部に向かって分布しており、上屋が焼け落ちたものと判断される。炭化材の出土レベルは中心部が低く、壁に向かうほど高くなる傾向がみられた。さらに、土層断面の観察から、住居内の壁付近においては、焼土の堆積以前にローム粒子を含む褐色土が堆積した状況がみられることから、本住居廃絶後多少の時間経過の後に焼失したものと考えられる。

カマドは北側の壁の中央に位置する。カマドの直上にSK-033号が所在したために、袖部の遺存状態はあまり良好ではない。最大幅は240cmを測り、袖部は壁から50cm延びている。暗灰白色砂質土を主体とする。カマド両袖の下部からはそれぞれ小ピットが検出されている。径20cm・35cm、深さはともに26cmを測る。性格は明らかではないが、配置からカマドの構造との関連が窺える。煙道部は壁外へ60cm程度掘り込まれていた。

1～4は須恵器坏である。いずれも体部が直線的に開くもので、1は体部下端及び底部全面回転ヘラ削り、2～4は体部下端を手持ちヘラ削り、底部は一方向ヘラ削りである。2・4の底部からヘラ切りであることがわかる。

5～8・11～13・15～18・20は土師器坏である。5～8・12・13は器高が4cm前後の製品で、平底である。口縁部は端部だけにヨコナデを施し、体部は横方向のヘラ削り、内面にヘラ磨きを施す。12は内面黒色処理される。6は底部外面に墨書が、16は線刻がある。11・17・18はやや浅く、体部が大きく開くものである。口縁部は端部だけにヨコナデが施され、体部は横方向のヘラ削りである。17は内外面赤彩される。

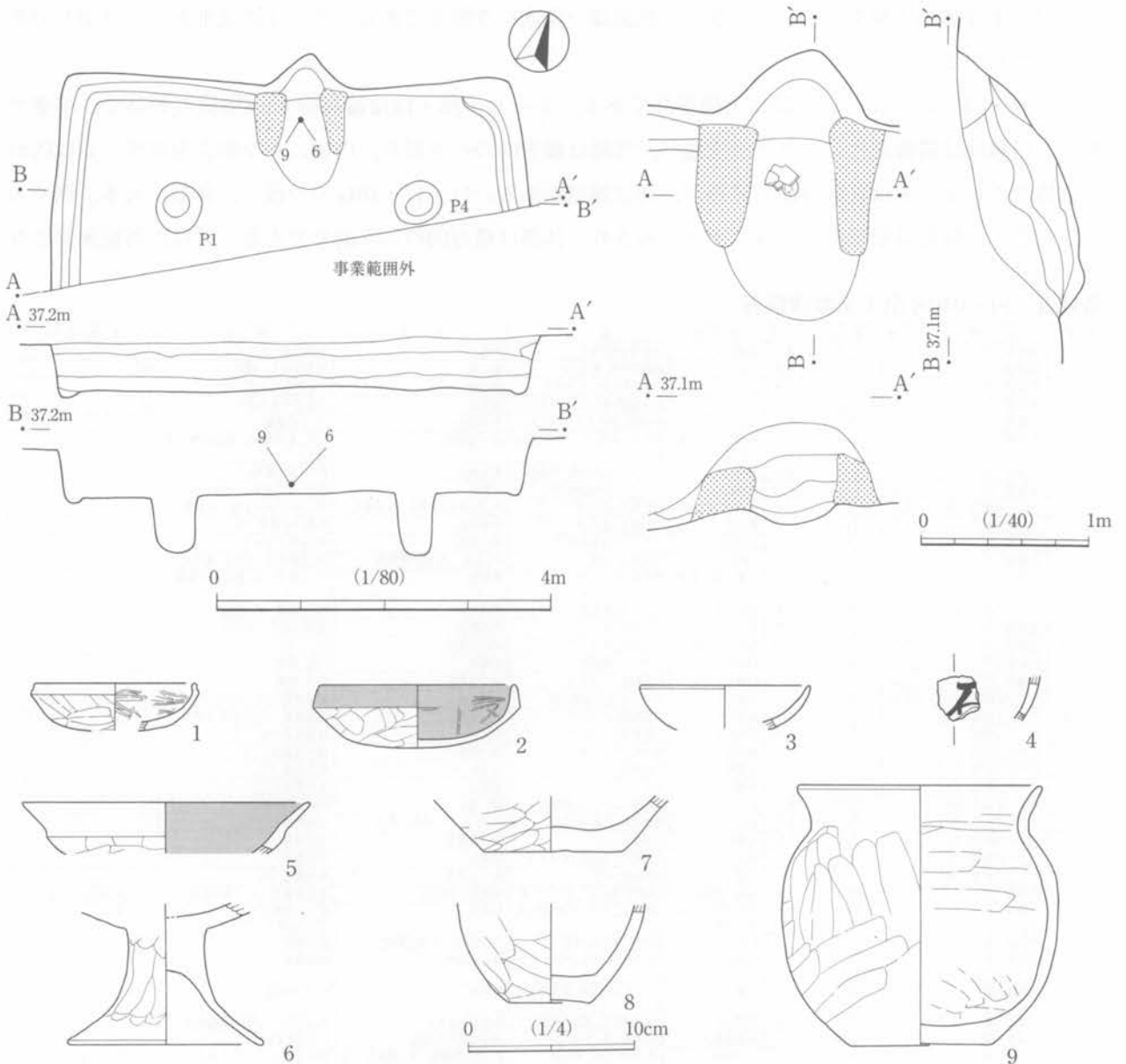
第41表 SI-040号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	-	[1.5]	(8.4)	底部2/3	白色微砂粒、長石	灰色	底部回転ヘラケスリ	3
2	須恵器 坏	(13.0)	3.8	(8.4)	1/2	白色微砂粒、長石(少)	黄灰色	薄手な作り 硬質	51
3	須恵器 坏	(12.0)	3.9	(7.4)	1/2	白色砂粒(少)、スコリア	暗灰色	二次的に火を受ける	1.2
4	須恵器 坏	13.4	4.3~4.5	7.4	2/3	白色砂粒(多)、白針、長石(少)	暗灰色	口縁若干歪み有り	32
5	土師器 坏	(11.6)	[4.1]	(6.6)	1/2	白色砂粒、長石、石英、スコリア	明赤褐色	外、若干摩耗	1
6	土師器 坏	(12.8)	[4.3]	(7.6)	体部1/5 底部1/2	黒色粒、小石、スコリア、黄土粒	鈍い黄褐色	内外、若干摩耗 底部墨書有り「□」	1
7	土師器 坏	-	[2.7]	(6.2)	底部1/4	スコリア、白色砂粒、黒色粒	明黄褐色	内外、若干摩耗	1
8	土師器 坏	(11.4)	4.0	(6.0)	口縁1/4	スコリア、白色砂粒(多)	赤褐色	内外、若干摩耗、ミガキ	1
9	ロクロ土師器 坏	(9.0)	2.5	(5.4)	体部1/4 底部1/2	白色砂粒、長石、スコリア	内、鈍い黄褐色+黒色 外、明褐色	内、口縁タール付着 灯明皿	1
10	ロクロ土師器 坏	(12.2)	[3.7]	-	体部片	白色砂粒、長石、スコリア	明赤褐色	体部(内)墨書「石」	1
11	土師器 坏	(17.0)	[2.8]	-	口縁1/8	スコリア、白色砂粒(少)	鈍い橙褐色	外、摩耗している	1
12	土師器 坏	(12.0)	[3.0]	-	口縁1/4	白色砂粒、石英	内、黒色 外、鈍い黄褐色	内、炭素吸着、ミガキ(光沢あり)	1
13	土師器 坏	(11.2)	3.5	(7.0)	口縁一部-底部1/4	黄色粒、スコリア	黄褐色	内、ミガキ 外、器面若干摩耗	1
14	ロクロ土師器 坏	-	[2.3]	(5.8)	底部1/3	スコリア、黄色粒	黄褐色	内外、摩耗 内、剥離あり	1
15	土師器 坏	-	[1.5]	7.6	底部のみ	白色砂粒、スコリア	暗赤褐色	底部 正円ではない	1
16	土師器 坏	(12.6)	4.3	(7.4)	口縁1/8-底部1/3	白色砂粒、スコリア	鈍い赤褐色	内、ミガキ	1
17	土師器 坏	(13.0)	[2.9]	-	口縁1/4	スコリア、細砂粒	明褐色	内外、摩耗	1
18	土師器 坏	(12.6)	[2.9]	-	口縁1/4	白色砂粒、スコリア	鈍い黄褐色	内外、摩耗	1
19	ロクロ土師器 坏	(12.4)	[3.9]	-	口縁1/6	スコリア、白色砂粒(多)	明赤褐色	器面摩耗、内外、ヨコナデ	1
20	ロクロ土師器 坏	-	[2.3]	(8.0)	底部1/2	白色砂粒、スコリア	鈍い黄褐色	器面摩耗 内、ナデ後ミガキ	1
21	ロクロ土師器 坏	-	[1.2]	(6.8)	底部1/4	白色砂粒、スコリア	明褐色	体部墨書(外)「□」	1
22	ロクロ土師器 坏	-	-	-	体部片	微砂粒、スコリア	鈍い褐色	体内部墨書「□」	1
23	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	白色砂粒、スコリア	黄褐色	底部墨書「□」	1
24	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	スコリア	黄褐色	底部墨書「□」	1
25	ロクロ土師器 坏	-	[2.1]	6.0	1/2	微砂粒、スコリア、黒色粒	鈍い褐色	内外、器面摩耗	12
26	ロクロ土師器 坏	-	[3.1]	7.6	1/2	白色砂粒、白針、黒色粒	内、褐色 外、褐色+黒色	底部回転糸切り	6
27	ロクロ土師器 坏	-	[2.5]	(7.8)	底部1/4	白色砂粒	鈍い黄褐色	器面摩耗	1
28	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	白色砂粒、黒色粒、スコリア	赤褐色	底部墨書「□」	1
29	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	白色砂粒、長石	鈍い赤褐色	底部墨書「石」	1
30	土師器 甕	-	[19.4]	9.6	底部～胴部1/3	白色砂粒、長石(少)、スコリア(多)	黄褐色+黒褐色	器面摩耗著しい 薄手な作り	1.7.18.20.21.40.42.43
31	土師器 甕	-	復元(13.2)	6.8	口縁～胴上1/6 底部～胴下3/4	白色砂粒、小石、石英(少)、長石	暗褐色	器面二次的に火を受けざらついている、薄手な作り	1.26.45
32	土師器 甕	(13.4)	[11.2]	-	1/8	微砂粒、黒色粒、雲母	内、淡褐色、外、黄灰褐色	胎土軟質	1.48
33	土師器 甕	(22.6)	[8.0]	-	口縁1/4	白色砂粒、長石(多)、スコリア、小石	鈍い赤褐色	器面摩耗	47
34	土師器 甕	(22.6)	[10.0]	-	口縁1/4	スコリア、白色砂粒、長石(多)、石英	暗褐色	内、炭素吸着	1.16
35	土師器 甕	-	[5.3]	6.8	底部1/4	白色砂粒(多)、白針、長石	赤褐色～黒褐色	内、剥落有り、内外、炭素吸着	1
36	土師器 甕	-	[6.6]	8.8	底部完形	白色砂粒(多)、白針、長石	暗赤褐色～黒褐色	内外、剥落有り	1.33
37	土師器 甕	21.2	29.0	9.2	ほぼ完形	白色砂粒、石英、黒色粒	内、鈍い黄褐色 外、浅黄色～褐色 灰色～黒色	薄手な作り、火ダスキ痕有り	1.3.14.15.20.22.27.28.37.38.39.40.41.42

る。9・10・19・21～29はロクロ土師器坏である。9は小形の灯明皿で、体部下端にヘラ削りはなく、底部はヘラ切り後全面回転ヘラ削りである。口唇部内側にタール状の油煙が付着する。25～27は底部の破片で、25は体部下端及び底部とも手持ちヘラ削り、26・27は底部糸切り無調整である。10・21～24・28・29には墨書があり、10は体部内面に正位で「石」、29は底部外面に「石」と書かれる。他の破片は部分的なもので積文は不明であるが、21～23が体部外面に、23・28は底部外面に墨書されている。

30～37は土師器甕である。大形と小形の甕がある。37はほぼ完形で、30も同じ形状になると思われる。口縁部は外反して受け口状を呈し、ヨコナデで整える。胴部は全体的に縦方向のヘラ削りであるが、胴部中位に横方向のヘラ削りが少しみられる。また、ヘラ削りに後にナデを加えている。32は破片であるが、鉢のような形状で、薄く硬質な仕上がりである。口縁部は直立し、胴部は内外面とも丁寧にナデている。

38・39は石製の紡錘具である。



第131図 SI-041号実測図

SI-041号竪穴住居跡（第131図，図版28，112）

本遺構はJ4-99グリッド付近に位置し，台地中央部の標高約37.0mに立地する。カマド側の支柱穴までが調査されているが，南半分は調査区域外となっている。形態は方形とみられ，規模は主軸方向に2.5mまで確認された。横方向については5.7mを測る。主軸方位はN-15°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしており，確認面からの深さは52cm～61cmを測る。支柱穴は2基のみ検出され，径50cm・55cm，深さ67cm～75cmを測る。検出された住居内においては，壁際に深さ5cm～9cmの壁溝が巡る。ただし，カマドの右側から北西コーナーにかけては検出されていない。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土を主体とする。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は110cmを測り，袖部は壁から75cm延びている。暗褐色砂質土を主体とする。

カマド内には土師器高坏（6）が正位で立ち，その奥から土師器甕（9）が出土した。

1～3は土師器坏である。1は口径10cm弱の小形の製品で，口縁部は短く，やや内傾する。1・2とも内面は丁寧に磨いており，3は内外面とも磨いている。4は混入したロクロ土師器坏の破片で，体部外面に正位で「石」と墨書されている。

5・6は土師器高坏である。5の坏部は内面黒色処理され，外面も赤彩の可能性もある。6の脚部は短く，外面は赤彩される。

7～9は土師器甕である。9はほぼ完形で，最大径が胴部中位よりやや下に位置する。器面は被熱したためか，剥落しており，調整は不明瞭であるが，胴部上半で縦方向，下半で斜め方向のヘラ削りを施している。

第42表 SI-041号出土土器観察表

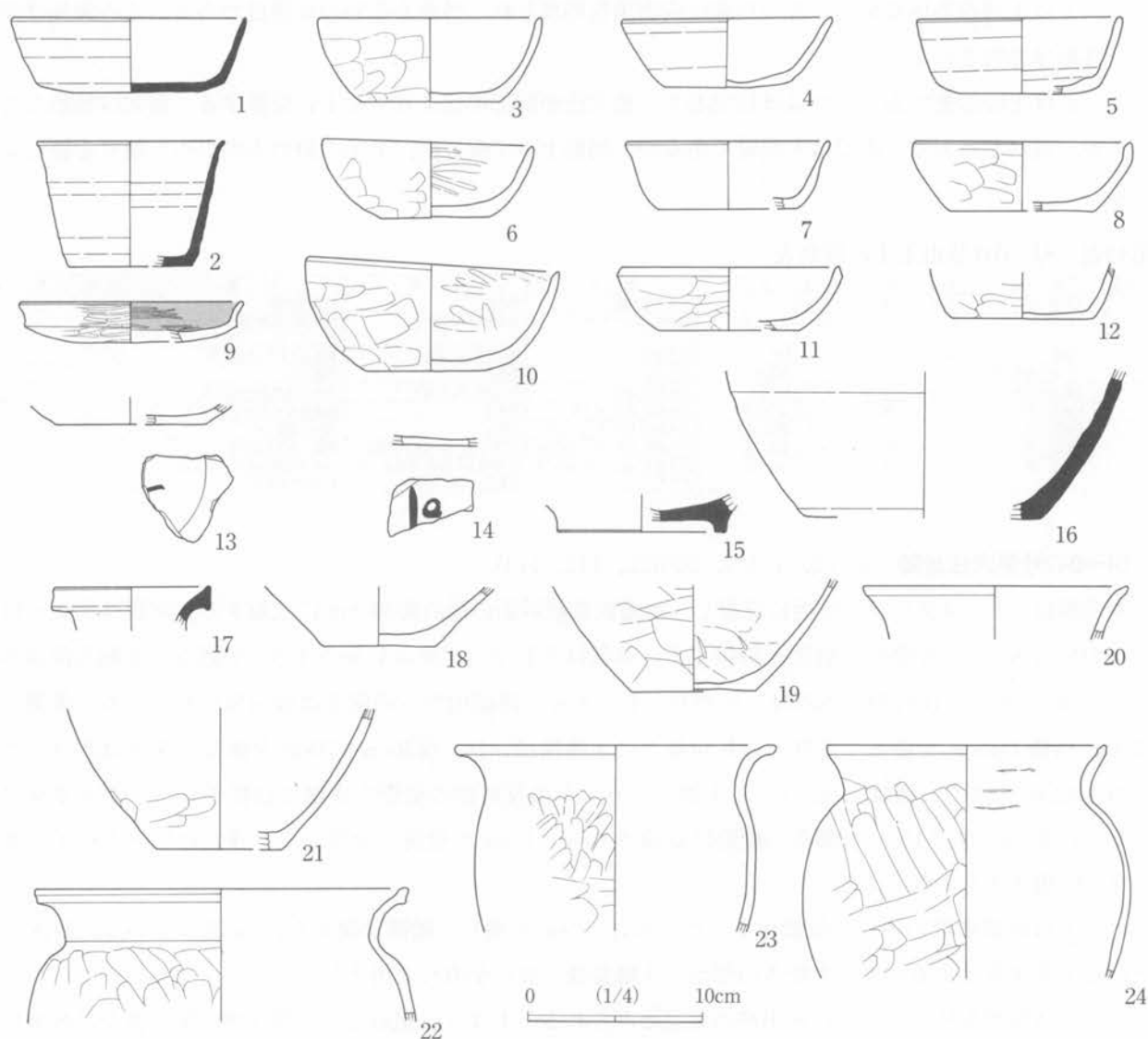
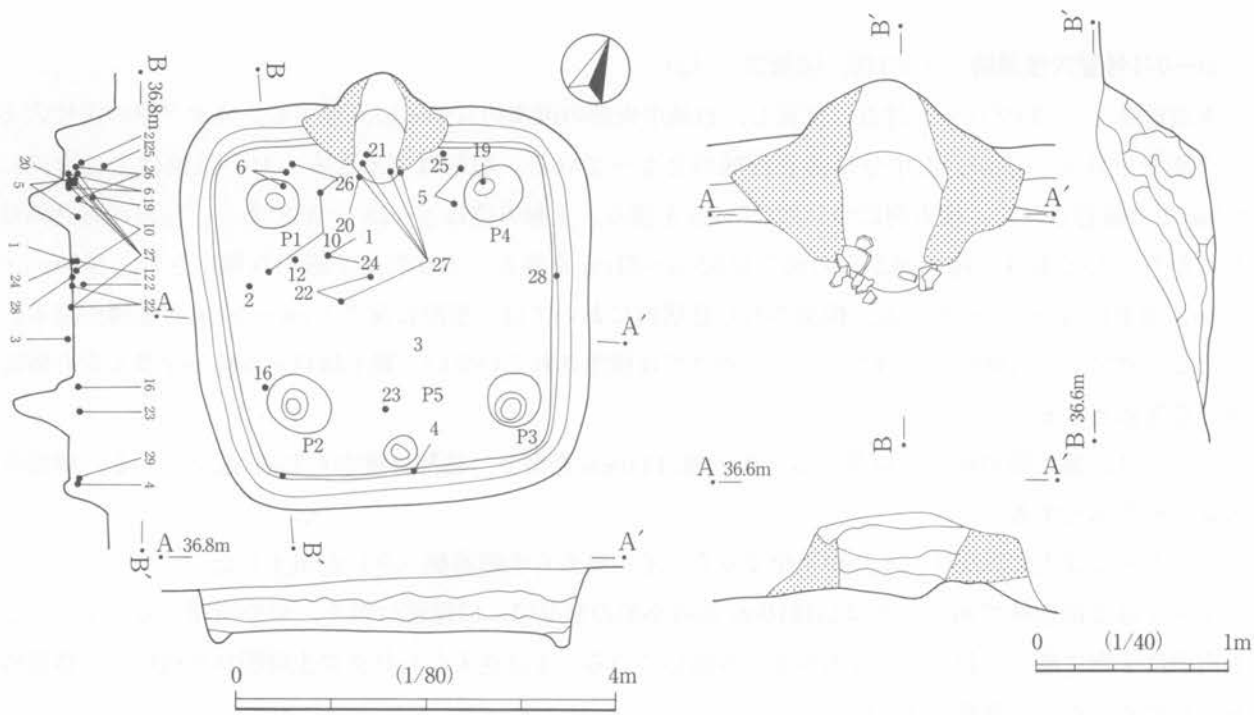
挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(9.6)	[2.8]	—	1/4	スコリア、砂粒	明赤褐色	外、器面摩耗	1
2	土師器 坏	11.8	3.7	丸	ほぼ完形	細砂粒、スコリア(少)	浅黄橙色一部褐灰色	内外、黒色処理(漆) 外、器面摩耗	1
3	土師器 坏	(10.0)	[2.6]	—	1/6	混合物なし	鈍い黄褐色～黒色	軟質な土器で、器面摩耗	1
4	ロクロ土師器 坏	—	—	—	体部片	白色砂粒	明褐色	墨書「石」	1
5	土師器 高坏	(17.0)	[3.0]	—	口縁1/3	白色砂粒、長石	内、黒色 外、赤褐色	内外、黒色処理、器面剥落	1
6	土師器 高坏	—	[8.0]	11.6	ほぼ完形	白色砂粒、長石、黄土粒	赤褐色	器面摩減、赤彩の可能性有り	5
7	土師器 甕	—	[3.2]	8.3	底部2/3	白色砂粒、長石(多)、スコリア	赤褐色	器面剥落著しい	1.24
8	土師器 甕	—	[6.0]	4.8	底部完形	白色砂粒、長石、スコリア(少)	内、黄褐色 外、褐色～黒褐色	軟質 外面炭素吸着	4
9	土師器 甕	14.4	8.2	15.7	ほぼ完形	白色砂粒(多)、小石、長石、スコリア	内、黒褐色 胴部、赤褐色 外、赤褐色 底部、黒褐色	内外、器面剥落有り 内、底部白色状の付着物有り	1.5

SI-042号竪穴住居跡（第132，133図，図版28，112，113）

本遺構はJ2-54グリッド付近に位置し，台地西側緩斜面の標高約36.6mに立地する。南西コーナー付近においてSI-047号竪穴住居跡と隣接する。形態は方形で，規模は4.5m×4.3mを測る。主軸方位はN-20°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしており，確認面からの深さは緩斜面にあるため，東側で77cm，西側で46cmを測る。支柱穴は対角線上に4基検出され，径50cm～70cmを測る。深さは北コーナーのみ42cmと浅く，他は59cm～64cmを測る。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され，径35cm，深さ15cmを測る。壁際には深さ7cm～12cmの壁溝が全周する。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土を主体とする。

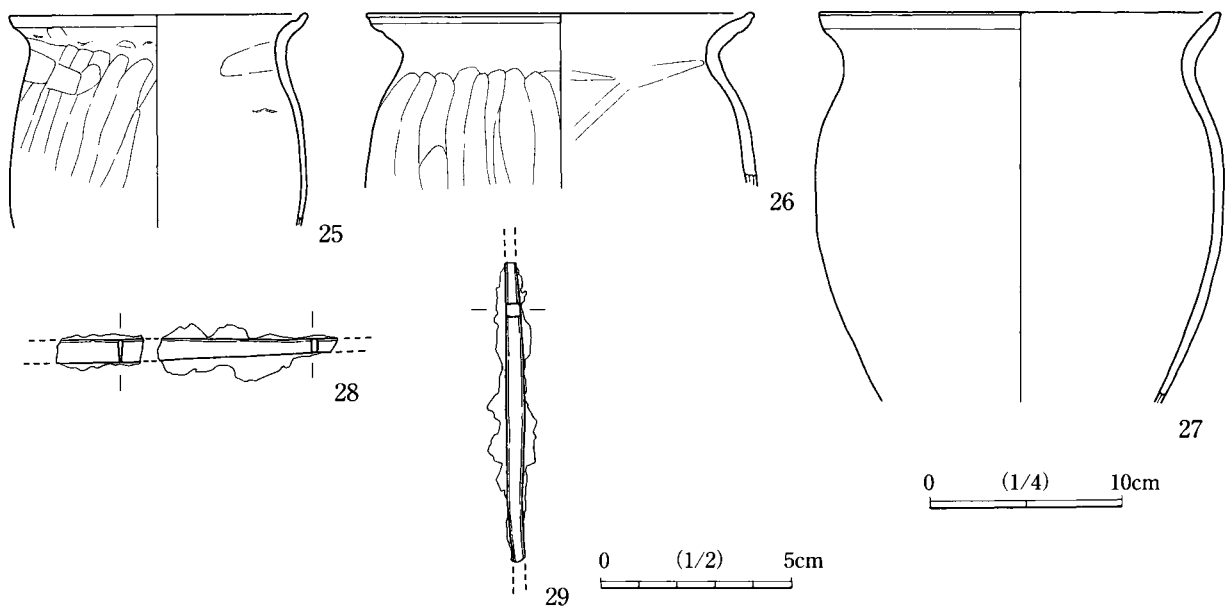
カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は150cmを測り，袖部は壁から70cm延びている。暗灰白色砂質土を主体とする。カマド焚き口部から土師器甕（27）が潰れて出土した。

1・2は須恵器坏で，ともに永田窯の製品とみられる。1はほぼ完形で，底部は中心部に僅かに糸切り



第132图 SI-042号实测图





第133図 SI-042号出土遺物実測図

痕を残し、周縁部に回転ヘラ削りを施す。内外面とも火樨がある。2はコップ状の深い坏で、硬質な仕上がりである。体部にヘラ削りはみられず、底部は全面回転ヘラ削りである。

3・6・8・10・11は土師器坏である。いずれも平底で、口縁部は短く直立ないし内傾し、ヨコナデを施す。体部は横方向のヘラ削りで、6・10は内面を僅かに磨いている。底部は一方向のヘラ削りであるが、8は木葉痕が残る。なお、3は口唇部内側に油煙と思われる黒ずみがあり、外面も赤彩された可能性がある。9は鬼高期の坏の混入で、内面黒色処理される。

4・5・7・12~14はロクロ土師器坏である。4・5はほぼ完形で、底部が摩耗しており、調整が不明瞭である。4は回転糸切り痕がかろうじて観察でき、5は一方向のヘラ削りである。4は外面に赤彩されている。他の個体も底部は一方向のヘラ削りである。なお、13・14は底部外面に墨書があり、14は「石」

第43表 SI-042号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	13.5	4.2	7.3	ほぼ完形	白色微砂粒、小石、長石(少)、スコリア	灰色	底部回転糸切り後回転ヘラ削り 火ダスキ痕有り	9
2	須恵器 坏	(10.6)	7.0	(7.0)	1/5	白色微砂粒、長石(少)	暗紫灰色~灰色	器面なめらかで美しい	23
3	土師器 坏	(12.8)	4.9	7.9	1/3	微砂粒、黒色粒、スコリア(多)	浅黄褐色	器面若干摩耗	24
4	ロクロ土師器 坏	11.9	3.7	7.2	ほぼ完形	砂粒、スコリア(少)	橙色	外、赤彩か?底部摩耗	21
5	ロクロ土師器 坏	11.7	4.4	6.0	底部2/3	白色砂粒、長石、スコリア	橙色	口唇部ほとんど磨滅	1.15.33.34
6	土師器 坏	14.0	4.5	6.0	2/3	白色砂粒、長石、黒色粒	褐色	二次的に火を受け、器面汚れている	3.4
7	ロクロ土師器 坏	(11.4)	3.8	(7.8 ~ 8.0)	口縁1/4	スコリア、白色砂粒	赤褐色	口縁部スス付着	1
8	土師器 坏	(10.6)	3.6	(6.0)	口縁1/4	砂粒、スコリア	明赤褐色	外、ヘラケズリ	34
9	土師器 坏	(12.6)	[2.8]	—	1/6	白色砂粒	内、黒色 外、褐灰色	内、黒色処理(吸炭)	1
10	土師器 坏	14.5	6.5	6.5	3/4	白色砂粒、黒色粒、長石、スコリア	褐色	底部平らでない、器面歪み有り	1.6.7
11	土師器 坏	(12.4)	[3.6]	(7.8 ~ 8.0)	1/4	スコリア、砂粒	鈍い黄褐色	外、ヘラケズリ	1
12	ロクロ土師器 坏	—	[3.1]	(8.0 ~ 8.2)	底部1/2	スコリア、白色砂粒	赤褐色	外、底部スス付着	8
13	ロクロ土師器 坏	—	[1.2]	(8.4)	底部1/4	白色砂粒、スコリア	褐色	底部墨書「□」	1
14	ロクロ土師器 坏	—	—	—	底部片	白色砂粒、スコリア	鈍い褐色	底部墨書「□」	1
15	須恵器 高台付坏	—	[2.2]	9.6	高台部1/6	白色粒、長石(少)	灰黄色	貼付高台	1
16	須恵器 瓶子	—	[8.5]	(13.4)	底部1/8	微砂、長石、褐色粒	内、黒褐色 外、暗褐色	外、自然補付着	11
17	灰輪陶器 長頸瓶	(9.0)	[2.5]	—	口縁1/3	微砂粒	暗灰黄色	内外、灰輪	1
18	土師器 甕	—	[3.4]	6.3	底部3/4	白色砂粒(多)、長石、スコリア	赤褐色	内、底部に鋭利なヘラ痕有り	1
19	土師器 甕	—	[6.3]	8.0	底部1/2	白色砂粒、白針、スコリア	内、黒褐色 外、赤褐色	硬質、薄手な作り 内、炭素吸着	1.16
20	土師器 甕	(15.0)	[3.0]	—	口縁1/4	白色粒	鈍い褐色	器面剥落	32
21	土師器 甕	—	[8.0]	(7.1)	底部1/4	白色砂粒、黒色粒、長石、小石	内、鈍い褐色 外、赤褐色	内外、若干剥落	1.30
22	土師器 甕	21.0	[7.6]	—	口縁部1/2	砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色	二次的に火を受ける	10.25
23	土師器 甕	(18.4)	[10.7]	—	口縁の一部	スコリア、白色粒	明赤褐色	器面ざらつきあり	12
24	土師器 甕	(16.0)	[13.4]	—	口縁1/6	スコリア、砂粒	明褐色	薄手な作り、内、輪積み痕残る	1.19
25	土師器 甕	(15.8)	[11.0]	—	口縁~胴部1/3	白色砂粒(多)、長石	内、褐灰色 外、鈍い赤褐色	内、炭素吸着	1.18.34
26	土師器 甕	20.0	[9.0]	—	口縁~胴部2/3	白色砂粒、長石(多)、スコリア	暗赤褐色	内、頸部強くヘラナデ痕有り	2.6
27	土師器 甕	(21.0)	[20.2]	—	胴部1/2	白色砂粒(多)、長石(少)、石英(少)	鈍い黄褐色~暗褐色	器面摩耗、薄手な作り	25.28.29.31.32

の可能性がある。15は須恵器高台坏。16・17は瓶子である。16の破片中央は摩耗している。

18～27は土師器甕である。18・19・21は底部破片で、胴部下半は横方向、底部外面は一方方向のヘラ削りを施す。20・22～27は口縁部を含む破片で、口縁部はいずれも受け口状を呈する。

28は刀子、29は鉄鏃である。

#### SI-043号竪穴住居跡（第134、135図、図版28、113）

本遺構はM1-83グリッド付近に位置し、台地北東縁辺部の標高約37.0mに立地する。南側コーナー付近においてSK-076号土坑と重複関係にある。SK-076号は本遺構の覆土から掘り込まれており、床面を切っていることから本遺構の方が時代を遡ることが明確である。

形態は縦長の長方形で、規模は主軸方向に5.6m×3.8mを測る。住居の掘込みはしっかりとしている。確認面からの深さは、斜面の落ち込みにかかるため、北側では48cm、南側で89cmを測る。床面には2基の小ピットが検出された。径は25cm・35cm、深さは34cm・45cmを測る。主柱穴とは判断しがたいが、その配置から上屋を支える柱穴である可能性は否定できない。カマドの両袖付近を除いた壁際には、深さ5cm～11cmの壁溝がほぼ全周する。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土を主体とする。

カマドは北側コーナーの壁に位置する。最大幅は120cmを測り、袖部は壁から60cm延びている。暗灰色砂質土を主体とする。カマド掛け口と想定される位置には、カマド廃絶後に上部から貝を詰め込んでいる。貝の範囲は長径48cm、短径36cm、厚さは約15cmを測る。全量採取したところ、ダンベイキサゴ182点、ハマグリ3点であった。

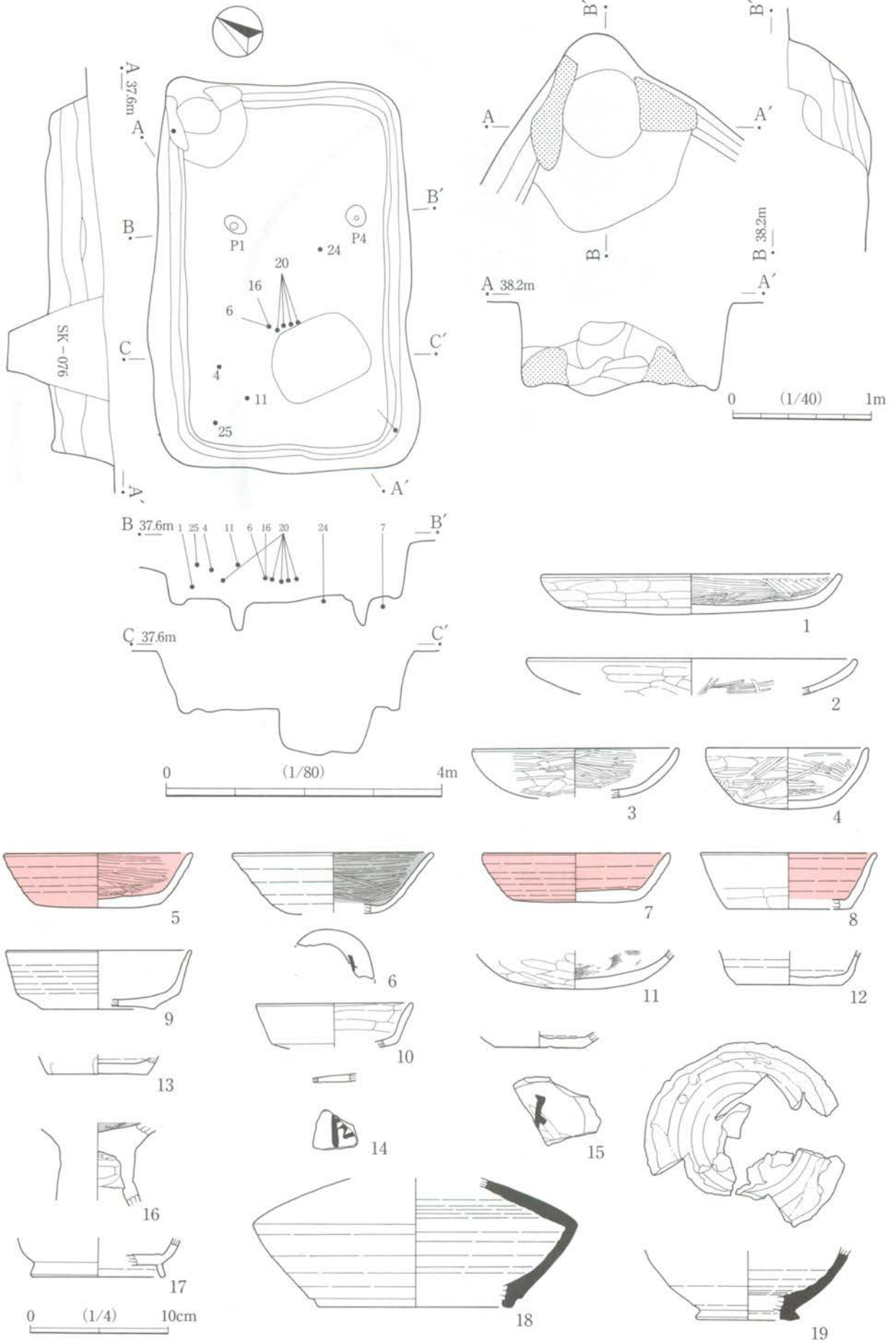
1・2は土師器盤である。2は細片であるが、1は器形が復元できる。1は口縁部に僅かにヨコナデを施し、体部は横方向のヘラ削り、底部外面はヘラ削り後ナデを加え、ヘラ削り痕はほとんど観察できない。体部内面から底部内面周縁部にかけて横位から斜位の丁寧なヘラ磨きで、底部中央は一方方向のヘラ磨きである。

3・4・11は土師器坏である。4は平底となるが、3・11は丸底である。3・4は口縁部に短くヨコナデを施し、体部外面は横方向のヘラ削り後、僅かにヘラ磨きを施す。内面は丁寧に磨いている。11は底部破片で、内面にタール状の油煙が付着している。

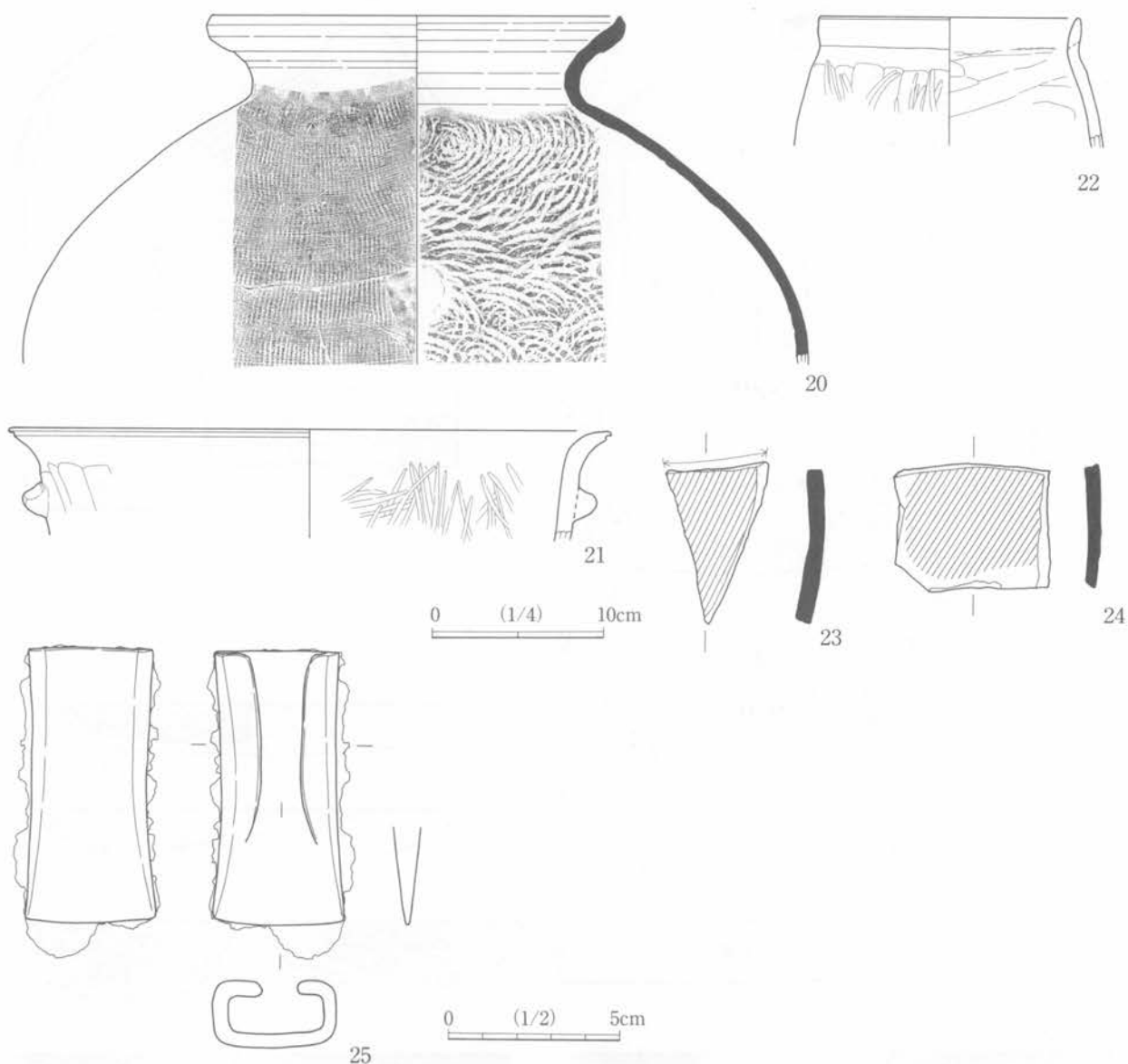
5～10・12～15はロクロ土師器坏である。5・7・8は内外面とも赤彩された坏で、底部は5が全面回転ヘラ削り、7が全面一方方向ヘラ削り、8は体部下端に手持ちヘラ削り、底部一方方向ヘラ削りである。6は内面黒色処理された坏で、混入品である。体部下端は手持ちヘラ削り、底部は一方方向ヘラ削りで、底部外面に墨書される。9・10は体部下位で屈曲するもので、高台は付かない。体部下端にヘラ削りはなく、底部も丁寧にナデている。14・15は墨書のある破片で、ともに底部外面に墨書され、14は「尼」である。

16は土師器高坏の脚部破片で、坏部内面は黒色処理される。14は土師器高台坏で、底部から丸味をもって体部が立ち上がる。18は平瓶である。肩に稜をもち高台が付くもので、肩から上に淡緑色の灰釉が厚くかけられている。実測図では表現できなかったが、頸部接合部周りの調整及び把手接合部周りの調整が残されている。19はおそらく須恵器長頸瓶の底部破片である。底部から4cmほどのところで割れており、欠損部も含めて相対する2か所に溶解物が付着し、欠損部断面はガラス状になっている。とりべとして使用されたと考えられる。

20は須恵器甕である。胴部外面は叩きの後、刷毛状工具による横方向のナデが、内面は同心円叩きが明



第134图 SI-043号实测图



第135図 SI-043号出土遺物実測図

瞭に残る。21は土師器甌で、口縁部下に形骸化した把手が付き、指頭で押さえている。22は土師器甕で、口縁部はほぼ直立する。胴部は縦方向のヘラ削りである。23・24須恵器甕の破片で、23は内面全体が、24も内面のかなりの部分が摩耗している。

25は鉄斧である。

第44表 SI-043号出土土器観察表

種別番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 甕	(21.7)	2.9	(8.3)	1/3	長石、石英(少)、スコリア	内、橙褐色 外、鈍い褐色	内、ミガキ(単位、光沢有り)	15
2	土師器 甕	(24.0)	[2.6]	—	破片	スコリア、長石(少)	内、明赤褐色—鈍い赤褐色 外、明褐色	内、火グスキ痕あり	1
3	土師器 坏	(15.0)	[3.6]	—	1/7	スコリア、白色砂粒	橙色	内、ミガキ(光沢あり)	1
4	土師器 坏	11.9	4.5	7.1	2/3	砂粒、黒色粒(少)、スコリア	明赤褐色	内、ミガキ(単位なし、光沢有り) 底部不定方向へのヘラケズリ (正円でない)	4
5	ロクロ土師器 坏	13.8	3.9	9.1	1/2	微砂粒、白針(少)、長石(少)	明赤褐色	内外、赤彩	1.17
6	ロクロ土師器 坏	(14.6)	4.3	(6.8)	1/3	白色砂粒、長石(少)	内、黒色 外、鈍い黄褐色	内、黒色処理(吸炭)	13.16
7	ロクロ土師器 坏	(13.6)	3.5	9.0	2/3	微砂粒、白針(少)、長石(少)	明赤褐色 底部暗赤褐色	内外、赤彩 器面摩耗有り	1.6
8	ロクロ土師器 坏	(12.8)	4.0	(9.0)	1/4	スコリア、石英、白色砂粒	橙色	内、赤彩	1
9	ロクロ土師器 坏	(13.5)	4.3	(8.0)	1/3	白色砂粒、長石(少)、スコリア(多)	内、鈍い黄褐色—灰褐色 外、鈍い黄褐色	内、剥落有り ピッチ状にスス付着 外、器面若干摩耗	1
10	ロクロ土師器 坏	(11.1)	[3.2]	(9.1)	1/4	スコリア、白色砂粒	鈍い黄褐色	器面ざらついている	1
11	土師器 坏	—	[2.9]	丸	底部完形	砂粒、スコリア	黄橙褐色+黒色	内タール付着、石明皿として使用	5
12	ロクロ土師器 坏	—	[2.4]	(7.7)	底部1/3	砂粒、黒色粒	橙色	底部静止赤切り後手持ちヘラケズリ	1
13	ロクロ土師器 坏	—	[1.3]	7.3	底部完形	砂粒、長石、スコリア	橙色	底部静止赤切り後回転ヘラケズリ	1

14	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	細砂粒、石英、スコリア	鈍い赤褐色	底部墨書「厄」	17
15	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部1/4	白色砂粒、石英、スコリア	鈍い黄褐色～赤褐色	底部墨書「□」線刻有り	1
16	土師器 高坏	-	[5.6]	-	基部のみ	スコリア、白色粒	明褐色	内、黒色処理、ミガキ 外、器面摩耗	1.3
17	土師器 高台付坏	-	[2.8]	(9.8)	底部1/3	白色砂粒、長石(少)、スコリア	褐色	貼付高台	1
18	灰釉陶器 平瓶	-	[9.5]	(14.1)	1/6	微砂粒、石英、スコリア	内、浅黄色 外、上部 灰黄緑色 下部 鈍い黄褐色	底部に火ぶくれあり	1
19	須恵器 瓶子	-	[5.4]	7.5	底部2/3	微砂粒、長石(少)	褐灰色～暗灰褐色	とりべに転用 火彫れ多数有り ガラス化か所多数	1
20	須恵器 甕	(24.2)	[20.0]	-	口縁～胴上1/5	微砂粒、小石、長石、石英	内、灰色 外、暗灰色～灰色	内、当て工具痕同心円文	1.9.10.11.12.14.17
21	土師器 甕	(35.0)	[6.2]	-	口縁1/8	スコリア、白色砂粒、石英	鈍い褐色	内、ナデ後ミガキ 外、ヘラケズリ	1
22	土師器 甕	(15.1)	[7.4]	-	口縁1/3	白色砂粒、長石、石英	鈍い褐色	内外、輪積み根残る	1
23	須恵器 転用磁石	-	-	-	胴部片	微砂粒、長石(少)	灰色		2
24	須恵器 転用磁石	-	-	-	胴部片	微砂粒、黒色粒(少)	灰色		1

### SI-044号竪穴住居跡 (第136図, 図版29, 113)

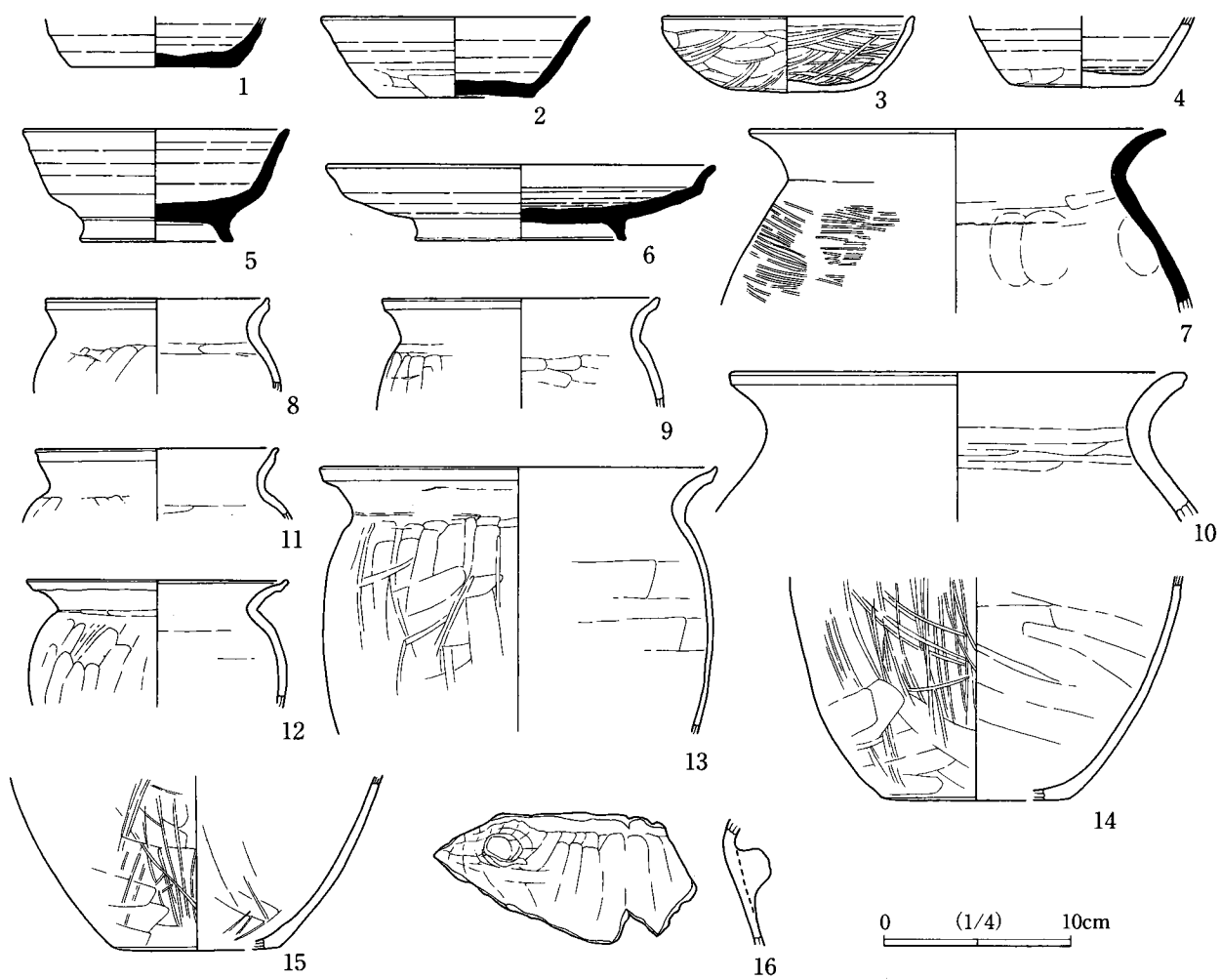
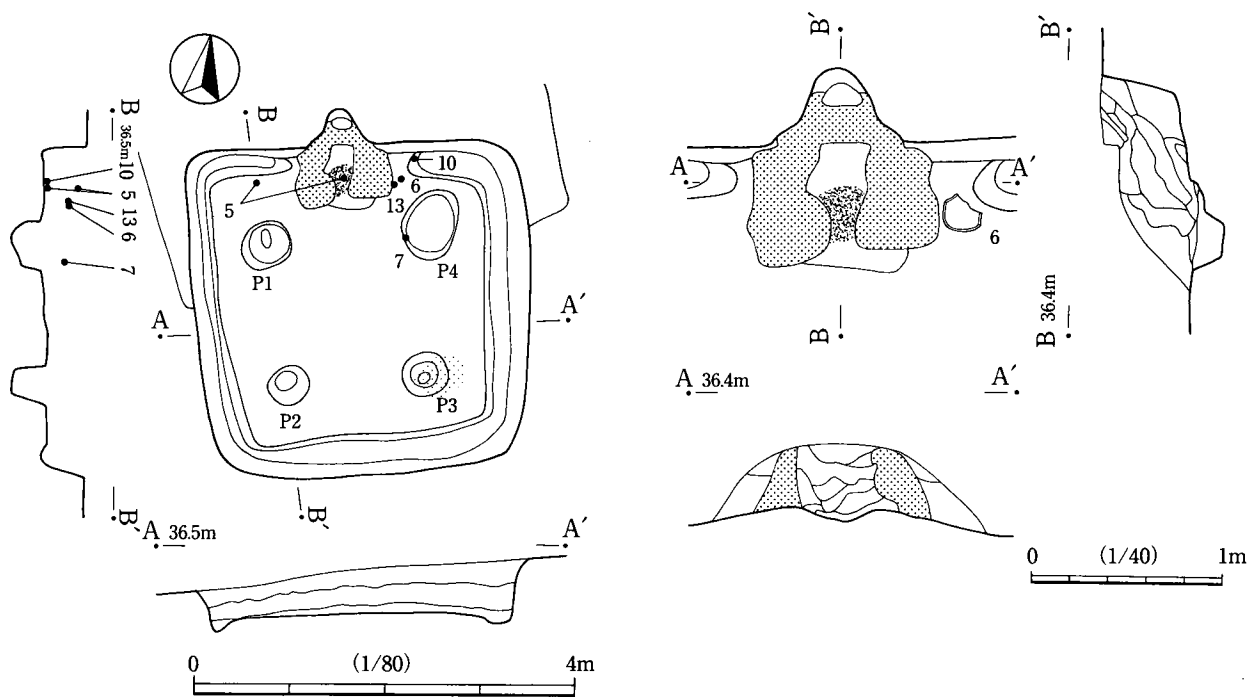
本遺構はJ2-82グリッド付近に位置し、台地西緩斜面の標高約36.3mに立地する。北側においてSI-069号竪穴住居跡と重複関係にある。SI-069号の床面を切っていることから、本遺構の方が新しいことが明確である。形態は逆台形で、規模は3.5m×3.5mを測る。主軸方位はN-7°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしている。確認面からの深さは、緩斜面に立地するため東側で62cm、西側で33cmを測る。主柱穴は対角線上に4基検出され、径40cm～75cmを測る。深さは北西の柱穴が25cmと浅く、他の柱穴は30cm～33cmを測る。カマドの両袖を除いた壁際には深さ3cm～7cmの壁溝がほぼ全周する。南西の柱穴付近の床面直上には、長径約60cm、短径約40cmの範囲に灰が分布していた。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土を主体とし、最下層はやや粘性を有する。床面から10cm～15cmの覆土中には少量の砂が分布している。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は100cmを測り、袖部は壁から70cm延びている。カマドの遺存状態は良好で、袖部ばかりでなく、天井部の一部や煙道部まで遺存していた。掛け口は30cm～60cmであったと想定される。煙道部は壁外へ40cm程度掘り込まれており、煙出しの部分は内径約20cmを測る。カマドの構築材は黄灰色山砂を主体とする。カマド右脇から須恵器盤(6)が出土した。

1・2は須恵器坏である。ともに底部は全面一方向へラ削りで、2は体部下端に手持ちへラ削りを施している。3は土師器坏である。口縁部は短くヨコナデを施し、体部外面は横方向のへラ削り後、僅かにへラ磨きを加える。内面は粗くへラ磨きを施す。4はロクロ土師器坏である。体部下端は手持ちへラ削り、底部は直交する四方向のへラ削りである。5は須恵器高台付坏である。底部は回転へラ削りで、高台端部、口唇部内側、底部内面が摩滅している。6は須恵器盤である。高台は断面三角形で、底部は回転へラ削りを施す。被熱し脆弱である。

第45表 SI-044号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	-	[2.7]	9.0	底部1/2	微砂粒、長石、雲母、スコリア	黄灰色	内外、器面摩耗 常陸新治窯産	1
2	須恵器 坏	(14.6)	4.3	8.4	底部1/2 体部1/8	微砂粒、長石(少)、スコリア	黄灰色	器面なめらか	1
3	土師器 坏	13.5	4.0	丸	2/3	白色砂粒、長石(少)、石英(少)、スコリア	鈍い赤褐色	内、ミガキ 外、ヘラケズリ一部ミガキ	1
4	ロクロ土師器 坏	-	[3.7]	7.6	底部完形	砂粒、長石(少)、スコリア	黒褐色一部赤褐色	内外、スス付着一部タール状灯明皿として使用	1
5	須恵器 高台付坏	14.4	6.0	8.2	2/3	微砂粒、長石、石英、黒色粒	灰色	底部は回転ヘラケズリ	1.6.7
6	須恵器 有台 盤	21.0	4.0	11.4	2/3	白色砂粒(多)、長石、石英、小石	灰黄色1/3 褐灰色2/3		11
7	土師器 甕	(22.3)	[9.7]	-	口縁1/5	白色粒、スコリア	内、灰黄褐色 外、鈍い黄褐色	内、無文の当て具復	9
8	土師器 甕	(12.0)	[5.0]	-	口縁1/4	白色粒、長石粒	褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	1
9	土師器 甕	15.0	[5.9]	-	口縁2/3	白色砂粒、長石、スコリア(少)	褐色	外、炭素吸着	1
10	土師器 甕	(24.6)	[8.0]	-	口縁1/3	砂粒、長石、石英、スコリア	鈍い黄褐色+灰褐色	器面汚れて剥落している	12
11	土師器 甕	(13.0)	[3.8]	-	口縁1/2	長石(少)	鈍い灰黄褐色	内、口縁炭素吸着	1
12	土師器 甕	(14.0)	[6.8]	-	口縁1/3	白色砂粒、長石(少)	赤褐色	内、剥落有り	1
13	土師器 甕	(21.4)	[14.3]	-	口縁～胴部1/6	白色砂粒、長石(少)	明褐色	内外、薄手な作り一部剥落	1.8
14	土師器 甕	-	[9.5]	(9.0)	底部1/4	白色粒、長石粒	明褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ後一部ミガキ	1.4
15	土師器 甕	-	[10.0]	(12.0)	底部1/5 胴中央部2/3	白色粒、長石粒、スコリア	灰黄褐色	内、丁寧なナデ 外、ヘラケズリ後ミガキ	1
16	土師器 甕	-	-	-	胴部片	砂粒、長石、石英(多)	鈍い褐色	頸部スス付着	1

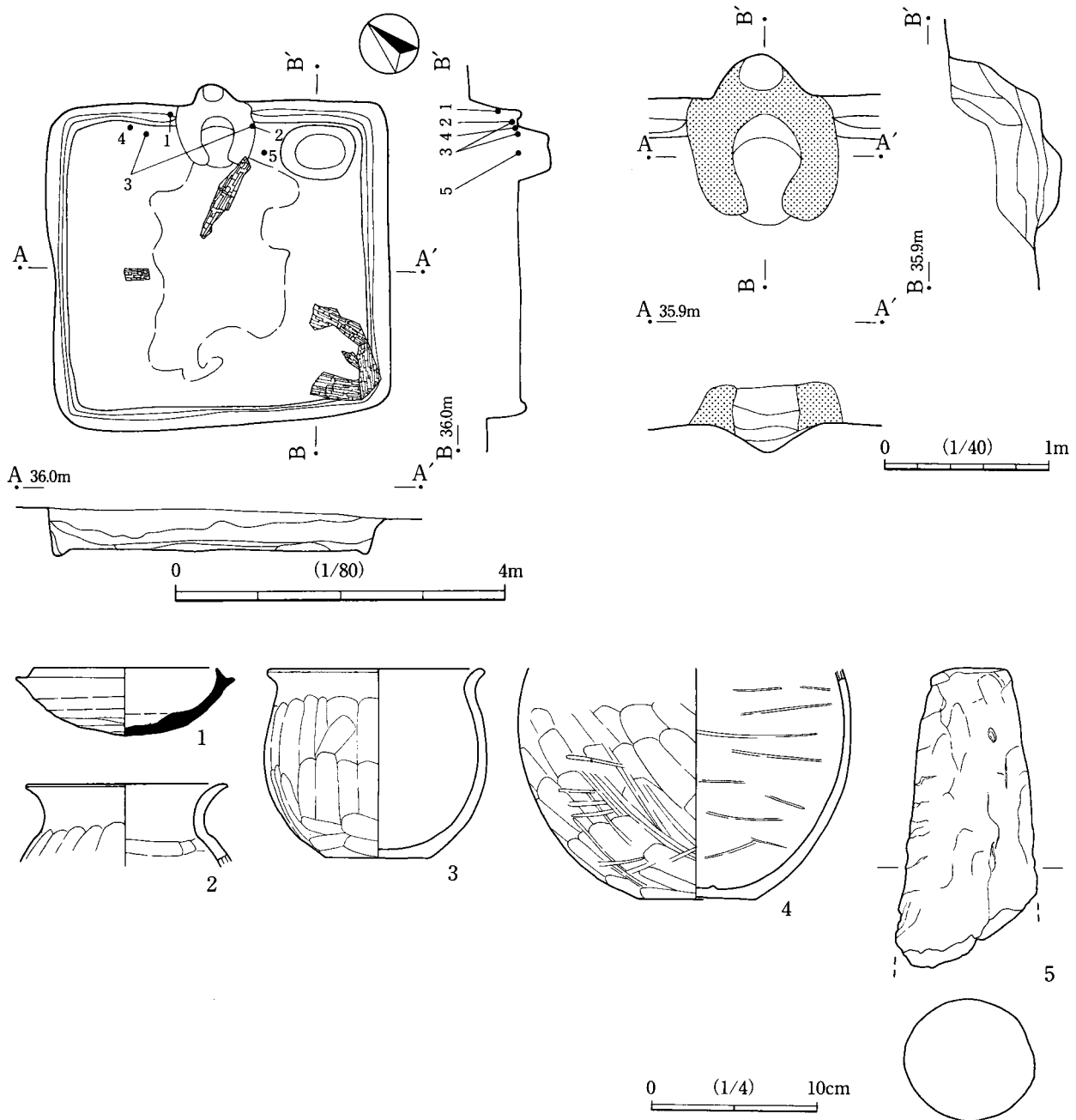


第136图 SI-044号实测图

7は須恵器甕で、胴部は横位の叩き調整である。8～15は土師器甕である。8・9・11・12は口径15cm前後の小形甕で、胴部は比較的丸い。胴部現存部には縦方向のヘラ削りが施されている。10は口縁部から胴部上半の破片で、胴部は丁寧にナデられている。14・15は底部破片で、胴部は横方向のヘラ削り後ナデを加えている。16土師器甕の破片である。

SI-045号竪穴住居跡 (第137図, 図版29, 113, 114)

本遺構はJ2-90グリッド付近に位置し、台地西緩斜面の標高約35.8mに立地する。形態はほぼ正方形で、規模は3.9m×4.1mを測る。主軸方位はN-44°-Eである。住居の掘込みはしっかりとしている。確認面からの深さは、緩斜面に立地するため東側で59cm、西側で36cmを測る。支柱穴は検出されていない。



第137図 SI-045号実測図

い。カマド右脇には貯蔵穴が検出された。形態はほぼ長方形で、長軸長90cm、短軸長60cm、深さ40cmを測る。壁際には深さ3cm～5cmの壁溝が全周する。床面の中央部はよく踏みしめられており、硬化が認められる。床面直上から炭化材が検出された。覆土は最下層に炭化物を含む黒褐色土、他はロームブロックを多く含む褐色土を主体とする。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は90cmを測り、袖部は壁から75cm延びている。カマドの遺存状態は良好で、袖部ばかりでなく、天井部の一部や煙道部まで遺存していた。掛け口は35cm程度であったと想定される。煙道部は壁外へ25cm程度掘込み、煙出し部分は径25cm程度が確認された。構築材は淡褐色砂質土を主体とする。図示した遺物はカマド周辺からの出土である。

1は須恵器坏で、完形である。長石粒が目立ち、立ち上がりは短く内傾し、底部はロクロ右回転の回転ヘラ削りである。2～4は土師器甕である。3はほぼ完形で、口縁部は僅かに外反し、胴部は縦方向のヘラ削り、底部近くで横方向となる。器面は被熱し剥落している。4は球形に近い胴部で、斜め方向のヘラ削りをナデで消している。

5は土製の支脚である。胎土に5mm以下の砂粒を多量に混入している。

第46表 SI-045号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	11.0	4.1	丸	完形	微砂粒、長石(多)、小石(2-5mm)	灰色	口縁部鋭利に薄い	4
2	土師器 甕	12.4	[5.0]	-	口縁3/4	白色砂粒、白針(少)、長石(少)	暗赤褐色	内外、炭素吸着	一括、6
3	土師器 甕	13.1	11.5	6.2	ほぼ完形	白色砂粒(多)、長石	内、鈍い赤褐色～黒褐色 外、鈍い赤褐色一部黒色	外、器面著しく剥落、口縁いびつ	3.6
4	土師器 甕	-	[14.0]	7.0	底部～胴部2/3	白色砂粒、長石、スコリア	内、鈍い黄褐色～褐灰色 外、明褐色～褐色～黒色	内、胴中央部帯状にスス付着	2

SI-046号竪穴住居跡 (第138図, 図版29)

本遺構はJ2-76グリッド付近に位置し、台地西緩斜面の標高約36.6mに立地する。SI-047号竪穴住居跡の覆土中から掘込んだうえに、SI-047号竪穴住居跡の床面を切っており、本遺構の方が新しいことは明確である。形態は歪んだ方形で、規模は約3.0m×3.0mを測る。主軸方位はN-0°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしている。確認面からの深さは、緩斜面に立地するため西側が深くなる。西側で74cmを測る。主柱穴は検出されていない。カマドの両脇を除く壁際には、深さ4cm～8cmの壁溝がほぼ全周する。床面の中央部はよく踏みしめられており、硬化が認められる。覆土は斜面上位から流れ込んでいる状況を呈しており、最下層は粘性のある暗褐色土、ローム主体の黄褐色土、上層はローム粒子を多く含む暗褐色土の堆積が確認される。

カマドは北西コーナーの壁に位置するが、遺存状態は非常に悪く、袖部も一部が検出されるのみであった。最大幅は75cmを測り、袖部は壁から22cm延びている。構築材は黄灰色砂質土を主体とする。

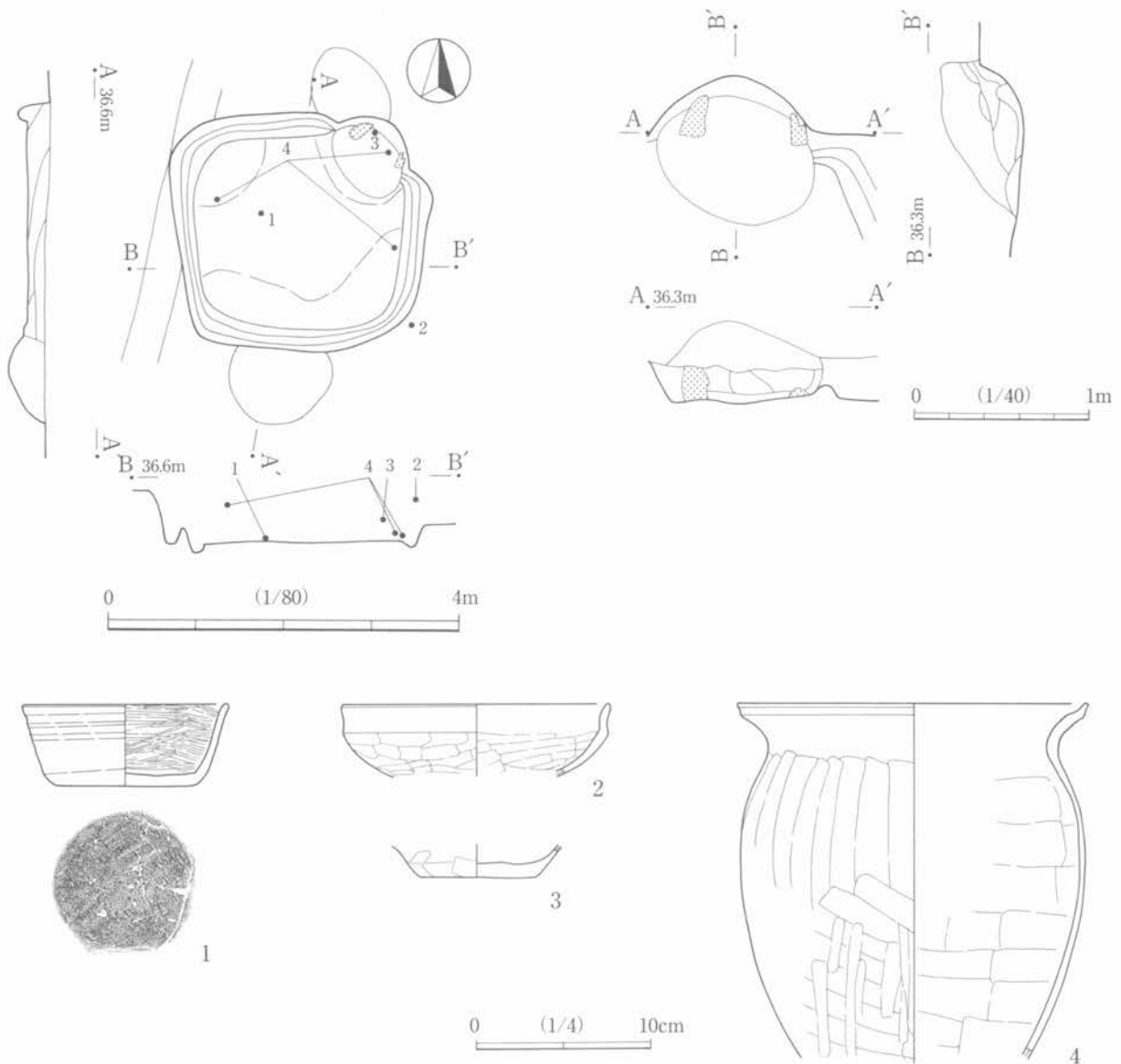
1はロクロ土師器坏である。体部下端にヘラ削りはなく、底部は回転糸切り後、円を描くように四方向のヘラ削りを加える。内面はヘラ磨きが施される。2は土師器坏で混入品である。口縁部は僅かに外反し、体部は横方向のヘラ削りである。

3・4は土師器甕である。4は最大径が口縁部にあり、胴部は縦方向のヘラ削り、下半に横方向のヘラ削りを施すが、その上にナデを加える。

第47表 SI-046号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	ロクロ土師器 坏	(11.8)	4.7	8.1	体部1/4 底部完形	微砂粒、長石(少)、スコリア(少)	明赤褐色	内、ミガキ痕鮮明	5
2	土師器 坏	(15.4)	[4.1]	-	1/6	白色粒、雲母、石英	内、明赤褐色 外、鈍い赤褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	6
3	土師器 甕	-	[1.9]	6.8	底部完形	白色砂粒(多)、長石(多)、黒色粒	明赤褐色		10
4	土師器 甕	(19.9)	-	-	口縁1/2 胴部1/4	白色砂粒(多)、白針、長石	赤褐色～暗黄褐色+黒色	内外、炭素吸着	3.7.9



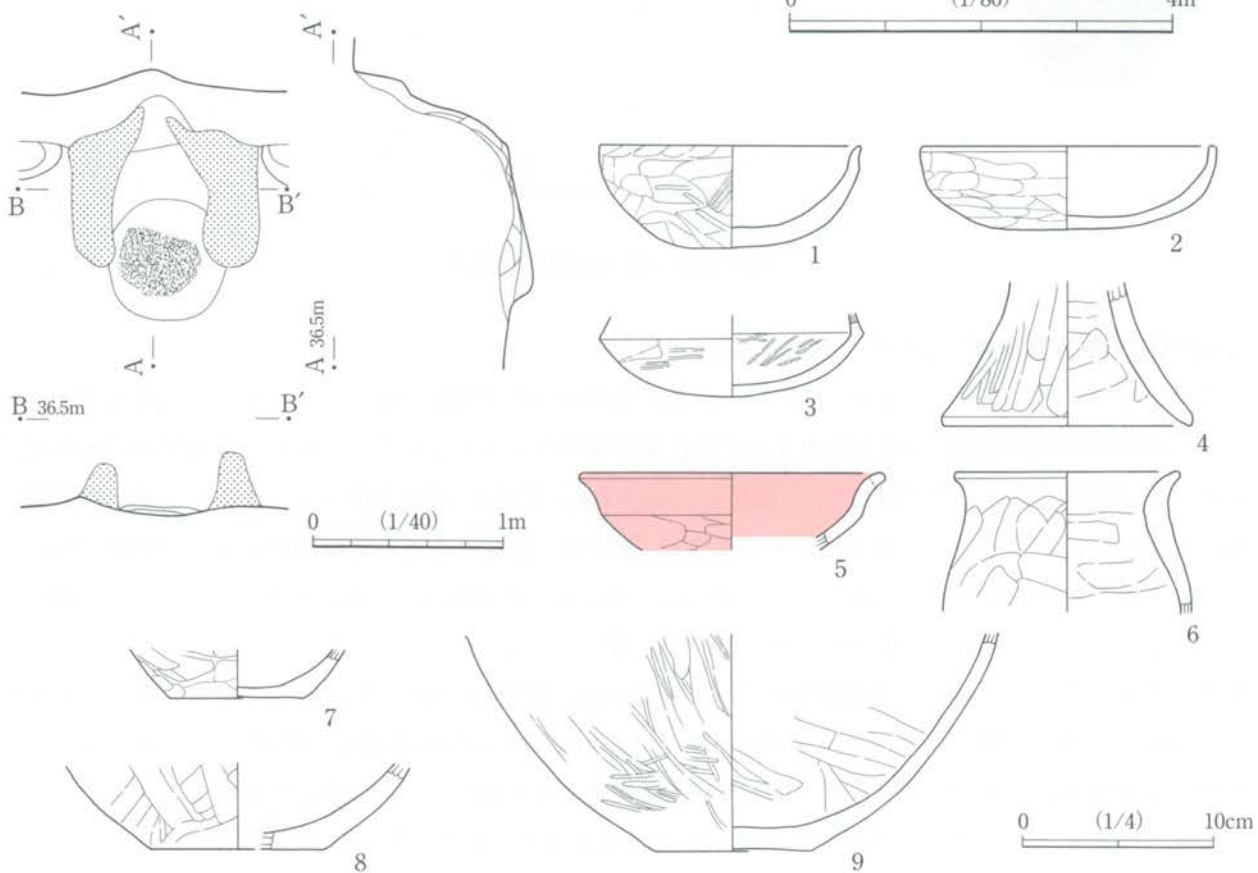
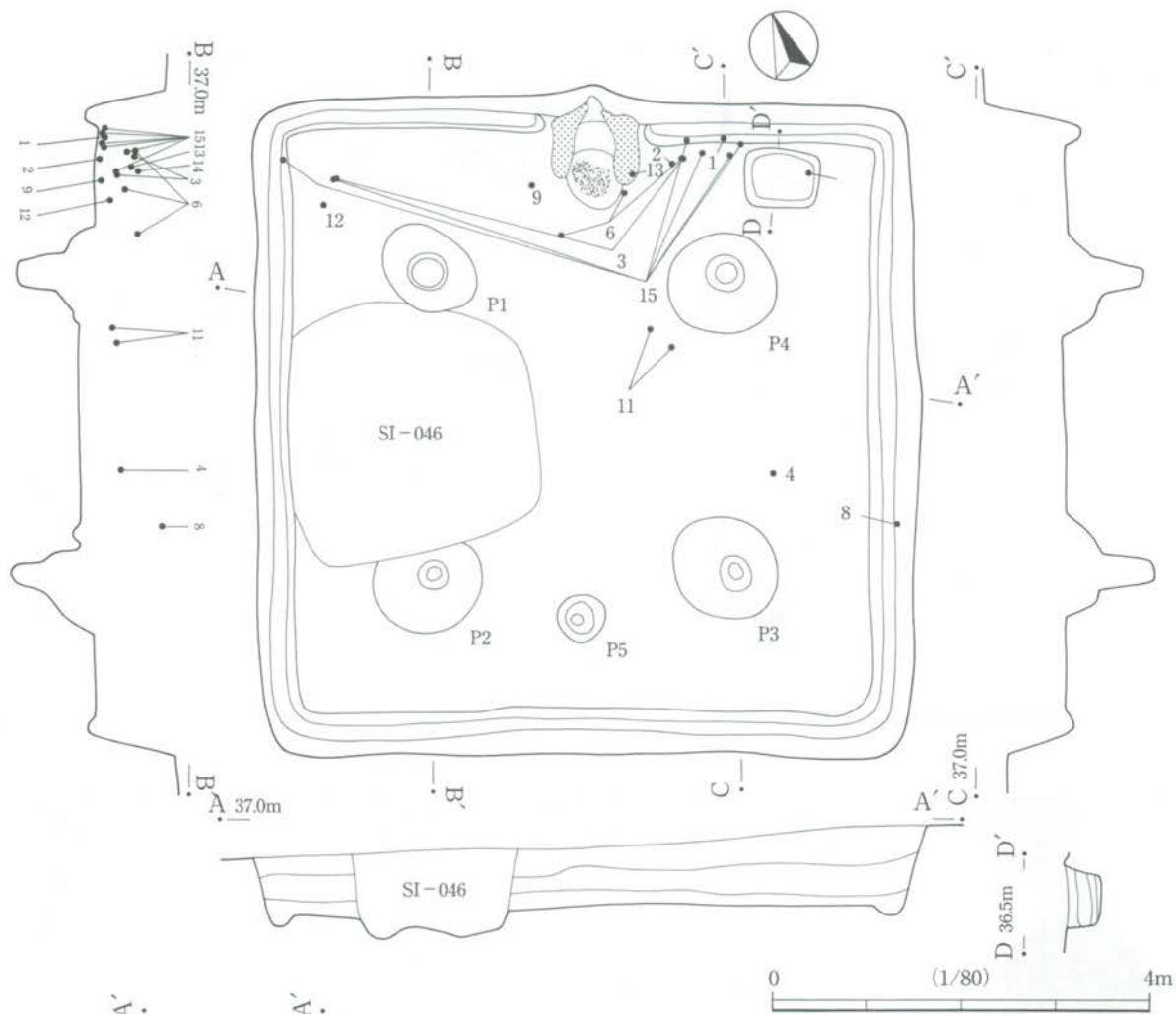


第138図 SI-046号実測図

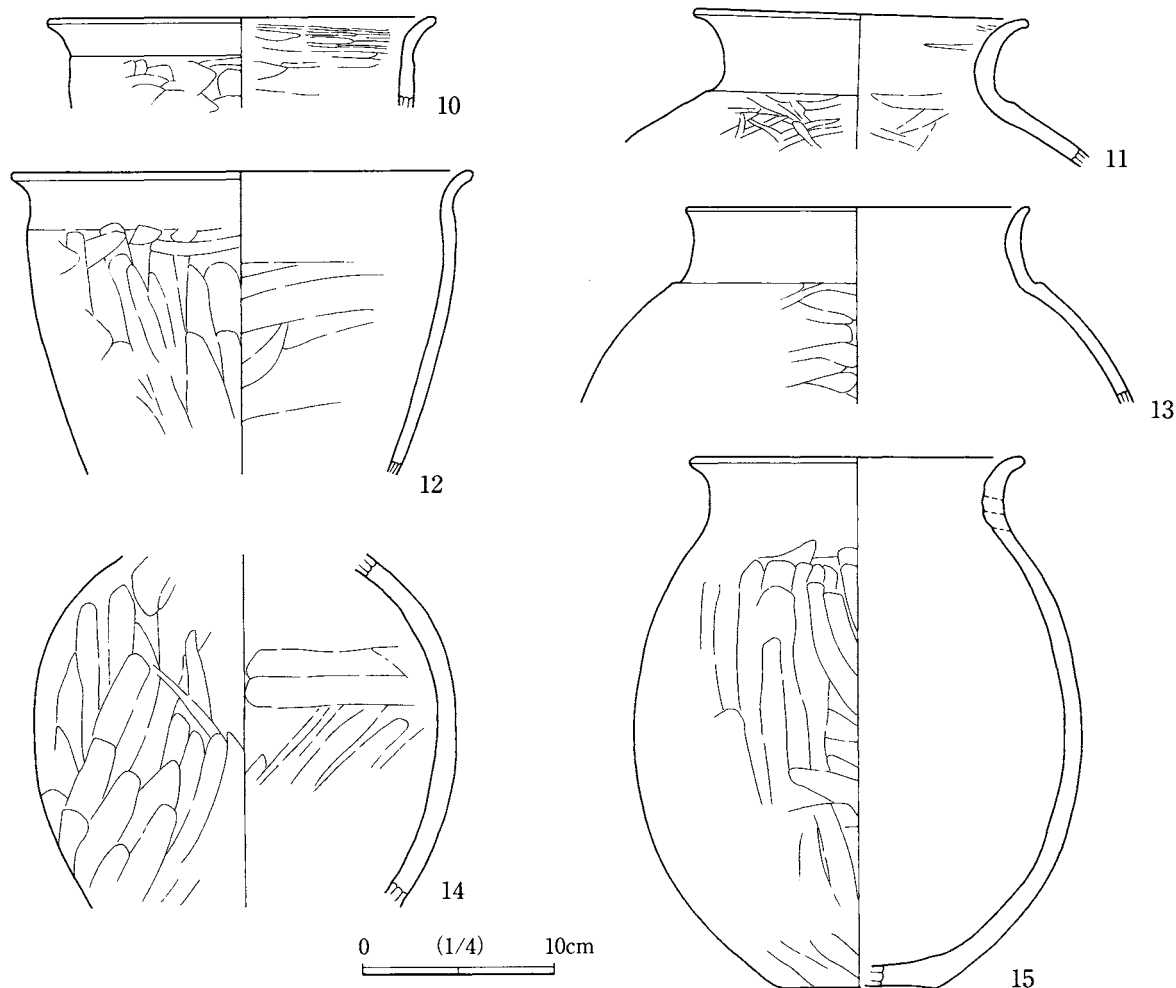
SI-047号竪穴住居跡 (第139, 140図, 図版29, 113)

本遺構はJ2-66グリッド付近に位置し、台地西緩斜面の標高約36.7mに立地する。本遺構の覆土中からSI-046号竪穴住居跡が掘込まれたうえに当住居の床面が切られていることから、本遺構の方が時代を遡ることは明確である。形態は方形で、規模は7.0m×7.0mを測る。主軸方位はN-15°-Eである。住居の掘込みはしっかりしている。確認面からの深さは、緩斜面に立地するため北東側で87cm、南西側で47cmを測る。主柱穴は対角線上に4基検出され、径85cm~115cm、深さ88cm~100cmを測る。いずれも床面付近が広がっており、柱の抜き取りが行われていると考えられる。カマドの右となる北西コーナー付近から貯蔵穴が検出された。形態はほぼ長方形で、長軸長80cm、短軸長65cm、深さ39cmを測る。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径50cm、深さ39cmを測る。壁際には深さ11cm~22cmの壁溝が全周する。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土を主体とし、最下層はしまりを有する。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は95cmを測り、袖部は壁から75cm延びている。構築材は



第139图 SI-047号实测图



第140図 SI-047号出土遺物実測図

黄灰色山砂を主体とする。火床部はよく被熱し、硬化している。

1～3は土師器坏で、いずれもほぼ完形である。1は半球形を呈し、体部は横方向のヘラ削りで、内外面ともヘラ磨きを施す。2は蓋模倣の坏であるが、稜がかなり鈍くなっている。体部は横方向のヘラ削りであるが、器面の状況が悪く不鮮明である。3は身模倣の坏で、口縁部は短く内傾する。体部は横方向のヘラ削りで、ヘラ磨きを加えているためヘラ削り痕は不鮮明である。

4・5は土師器高坏である。4は脚部破片で、外面は縦方向のヘラ削り後、丁寧なヘラ磨きを施す。内

第48表 SI-047号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	13.6	5.3	丸	完形	白色砂粒、白針、長石	赤褐色～暗褐色	口縁正円でない(13.1×13.6)	17
2	土師器 坏	15.5	4.3	丸	ほぼ完形	粗砂粒、長石、黒色粒、スコリア	明褐色～赤色	外底ピッチ状にスス付着	20
3	土師器 坏	—	[4.3]	丸	口唇部欠 他完形	白色砂粒、長石	鈍い黄褐色～黒褐色	口縁部剥落多い	9.13
4	土師器 高坏	—	[8.6]	(13.0)	脚部1/3	白色砂粒(少)	内、鈍い黄褐色～灰褐色 外、鈍い黄褐色～灰黄色	裾部若干剥落有り	14
5	土師器 高坏	(16.0)	[4.0]	—	坏部1/3	白色砂粒、長石、石英	明赤褐色	口縁部磨減 内外、全面赤彩	—
6	土師器 甕	(11.8)	[7.3]	—	口縁～胴上部1/3	白色砂粒、長石(少)	鈍い黄褐色～暗褐色	内、粘土紐接合部が濡んでいる	5.9.39
7	土師器 甕	—	[2.6]	7.0	底部2/3	白色砂粒、長石、黒色粒	内、黄褐色 外、鈍い黄褐色～黒褐色	—	39
8	土師器 甕	—	[4.3]	(9.0)	底部1/4	長石、砂粒	赤褐色～明赤褐色	内、炭素吸着 外、ヘラケズリ	32
9	土師器 甕	—	[8.0]	(11.5)	底部～胴部1/4	砂粒、長石、石英	暗赤褐色	内、ナデ、剥落あり	4.39
10	土師器 甕	(20.0～20.6)	[4.7]	—	破片	砂粒、黒色粒	内、明赤褐色 外、明褐色	内、剥落有り 外、ヘラケズリ	39
11	土師器 甕	(17.0)	[8.0]	—	口縁1/4	砂粒、石英、長石	橙色	内、ナデ 外、ミガキ(光沢あり)	11.19
12	土師器 甕	(24.0)	[15.8]	—	口縁1/4	スコリア、長石、砂粒	鈍い黄褐色	外、僕っぽい	2.39
13	土師器 甕	(17.8)	[10.2]	—	口縁1/2	白色砂粒、黄土粒、長石	暗赤褐色	器面光沢有り 口縁部は強く横ナデが施されている	35.39
14	土師器 甕	—	[18.2]	—	胴部1/4	スコリア、長石、砂粒	赤褐色～明赤褐色	内、ナデ、粗雑な整形	25.39
15	土師器 甕	17.4	(23.4)	8.0	口縁～胴上3/4	白色砂粒(少)、長石(少)	内、黄褐色～暗褐色 外、鈍い橙色～黒褐色	上下接合しないが器面上接合内、剥落激しい	3.18.21.22.23.37.38.39

面は横方向のヘラ削りで、裾部にヨコナデを施す。5は坏部破片で、内外面とも赤彩される。

6～9・11・13～15は土師器甕である。6は小形の甕、7～9は底部破片である。胴部は底部から大きく開き、9はヘラ削り後ナデている。15の胴部は縦方向のヘラ削りで、底部近くで斜め方向のヘラ削りとなる。11・12は肩から胴部が大きく膨らむもので、ともに肩部に横方向のヘラ削りを施している。10・12は土師器甕と考えられる。最大径は口縁部に位置し、胴部は縦方向のヘラ削りで、口縁部直下に横方向のナデを加える。

### SI-048号竪穴住居跡 (第141, 142図, 図版30, 114)

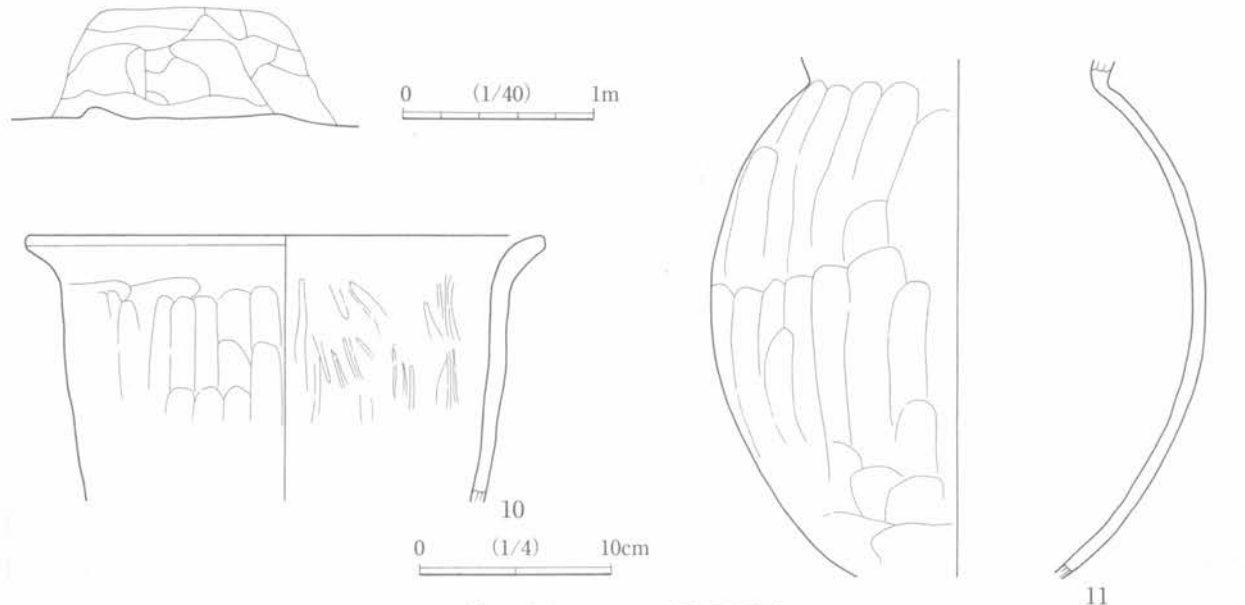
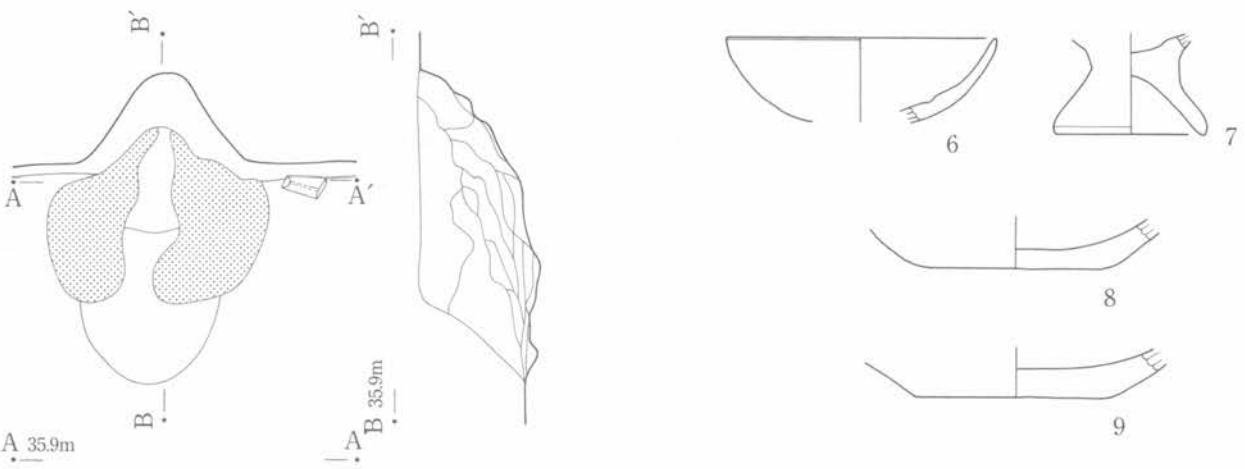
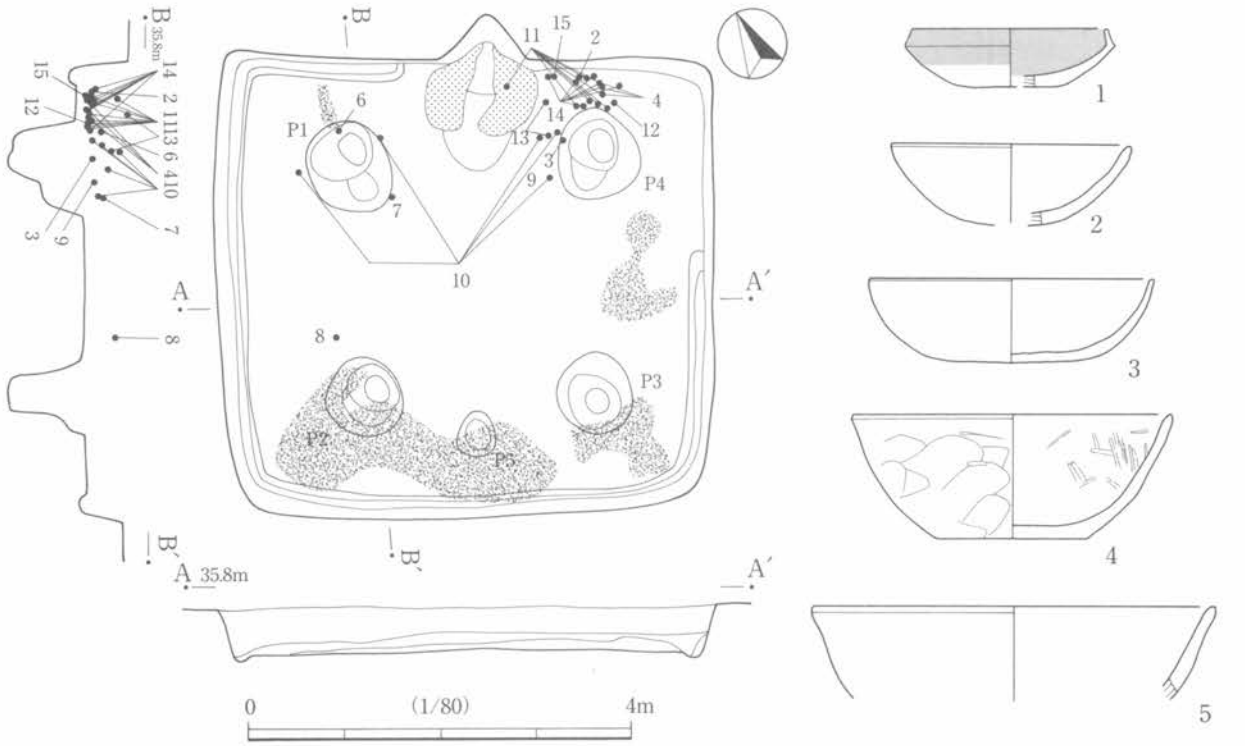
本遺構はI3-36グリッド付近に位置し、台地北西緩斜面の標高約35.7mに立地する。北半部においてSI-067号竪穴住居跡と重複関係にある。本遺構がSI-067号の床面を切っていることから本遺構の方が新しいことが明確である。形態は方形で、規模は4.8m×5.2mを測る。主軸方位はN-26°-Eである。住居の掘込みはしっかりしている。確認面からの深さは、緩斜面に立地するため北側で62cm、南側で33cmを測る。支柱穴は対角線上に4基検出され、径80cm～100cmを測る。深さはカマドの反対側の柱穴が2基とも77cmであるのに対して、カマド側の柱穴は82cm・88cmを測り比較的深くなっている。カマド右側の柱穴においては、深さ55cmの付近にテラス状を呈する部分が柱穴の南側に所在し、左側の柱穴においては、深さ51cmを測るピットが南側に重複している。これらのカマド側の柱穴にはいずれも柱の補助的な構造が所在した可能性が窺える。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径42cm、深さ32cmを測る。カマドの右袖から東側壁の中程にかけては壁溝が所在しないが、他の壁際には、深さ8cm～11cmの壁溝が巡る。床面にはソフトロームを含む暗褐色土が堆積し、その上に焼土が堆積している状況が観察される。この焼土は主に支柱穴の外側に分布している。

カマドは北東側の壁の中央に位置する。最大幅は115cmを測り、袖部は壁から75cm延びている。山砂とローム粒子を多く含み、しまりのある暗褐色土を基礎としてカマドが構築されている。袖部は黄灰色山砂を主体とする。火床部は右袖の下部が最もよく被熱していた。

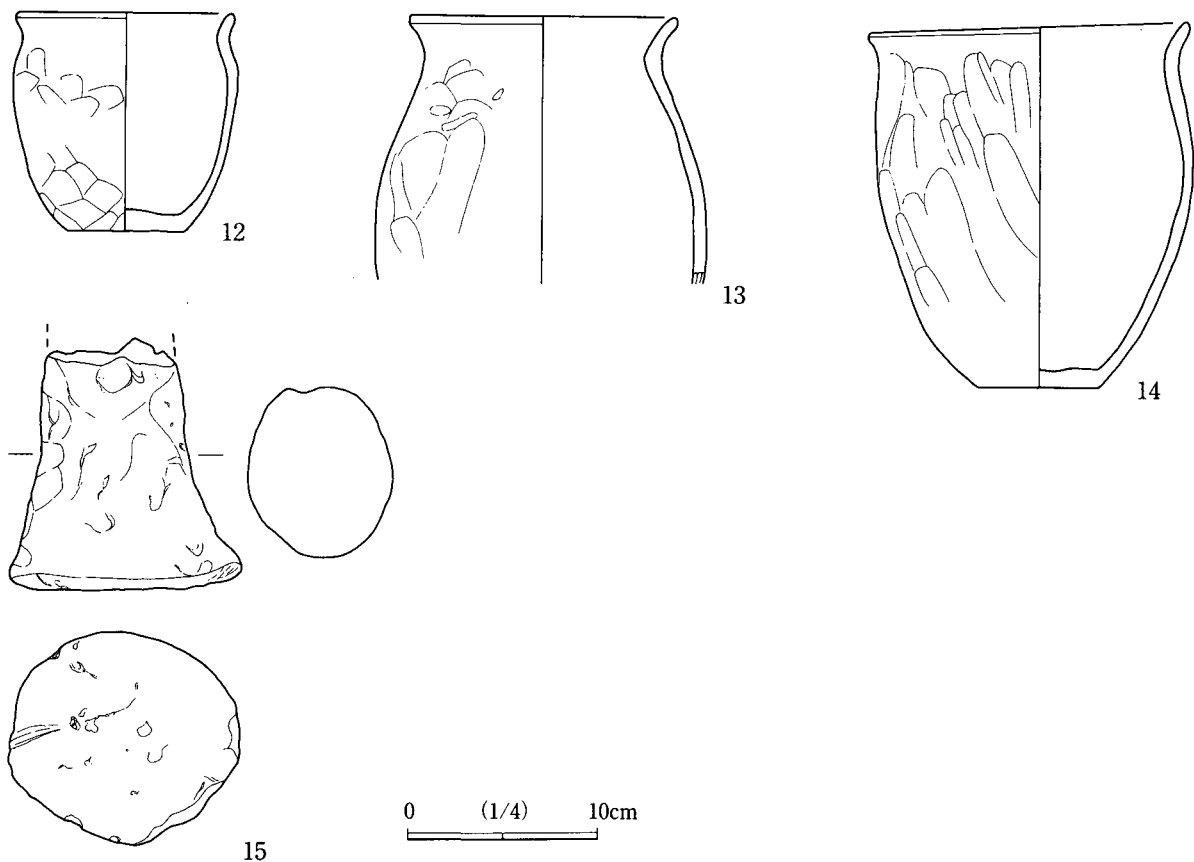
遺物はカマド右脇に集中する。1～6は土師器坏である。1は身模倣の坏で、口径10cm程度の小振りの製品である。口縁部は短く内傾し、体部はヘラ削りをきれいに消している。胎土は精緻で硬質である。口縁部から内面にかけて漆仕上げの可能性が有る。2・3は丸底の坏である。2は脆弱であるが、いずれも内外面ともヘラ磨きを施している。4・5は大振りで鉢形とした方が適当かもしれない。4はほぼ完形で、口縁部はヨコナデ、体部は横方向のヘラ削りで、内面も平滑にナデている。7は土師器高坏で、短い

第49表 SI-048号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(10.2)	3.0	(4.0)	1/4	微砂粒、スコリア	黄褐色～暗褐色	(外)口縁～(内)全面黒色処理(漆)	1
2	土師器 坏	(12.4)	[4.3]	—	口縁の一部	黒色粒、長石	赤褐色	器面剥落	28
3	土師器 坏	(14.6)	4.3	丸	口縁の一部	スコリア、微砂粒	鈍い黄褐色	薄手なつくり、摩耗あり	1.35
4	土師器 坏	16.6	6.6	7.6	完形	白色砂粒、白針、長石、小石	褐色～黒褐色	内、粗にミガキ 内外、炭素吸着	18.21.26
5	土師器 坏	(20.9)	[4.7]	—	口縁1/3	白色砂粒、長石、小石	鈍い赤褐色	外、器面摩耗	1
6	土師器 坏	(14.1)	[4.4]	—	口縁1/4	スコリア、黒色粒、微砂粒	橙色	器面摩耗	4
7	土師器 高坏	—	[5.5]	8.0	脚部 2/3	白色砂粒、長石	橙色	外、摩耗 裾部磨滅	6
8	土師器 甕	—	[2.6]	8.7	底部完形	白色砂粒、長石、スコリア	橙色	外、摩耗	25
9	土師器 甕	—	[2.7]	10.0	底部完形	長石、石英、小石	橙色	外、摩耗	11
10	土師器 甕	(27.1)	[14.0]	—	1/8	白色砂粒(少)、黒色粒、スコリア	内、鈍い黄褐色 外、鈍い黄褐色+黒色	頸部横に一周する沈線有り	1.3.5.8.10.12
11	土師器 甕	—	[27.8]	—	胴部1/2	長石(多)、石英、スコリア(少)	明赤褐色+黒色	内、二次焼成による剥落有り	1.14.15.16.17.18.19.21.37
12	土師器 甕	(11.5)	[11.5]	6.0	口縁1/2 胴部1/5 底部完形	白色砂粒、長石	赤褐色～黒褐色	外、器面著しく剥落	1.20.57
13	土師器 甕	(14.1)	[13.8]	—	口縁1/4	白色粒、長石	暗褐色	内外面、器面剥落	1.7.30
14	土師器 甕	16.7	19.2	6.2	ほぼ完形	白針、スコリア、長石(多)、石英	鈍い黄褐色 赤褐色+黒褐色	口縁に歪み有り 外、器面1/6位に砂粒状の付着物有り	1.21.22.27.29.32.36.53



第141图 SI-048号实测图



第142図 SI-048号出土遺物実測図

脚部である。器面の状況が悪く調整は不明であるが、脚部内面に横方向のヘラ削りが観察できる。

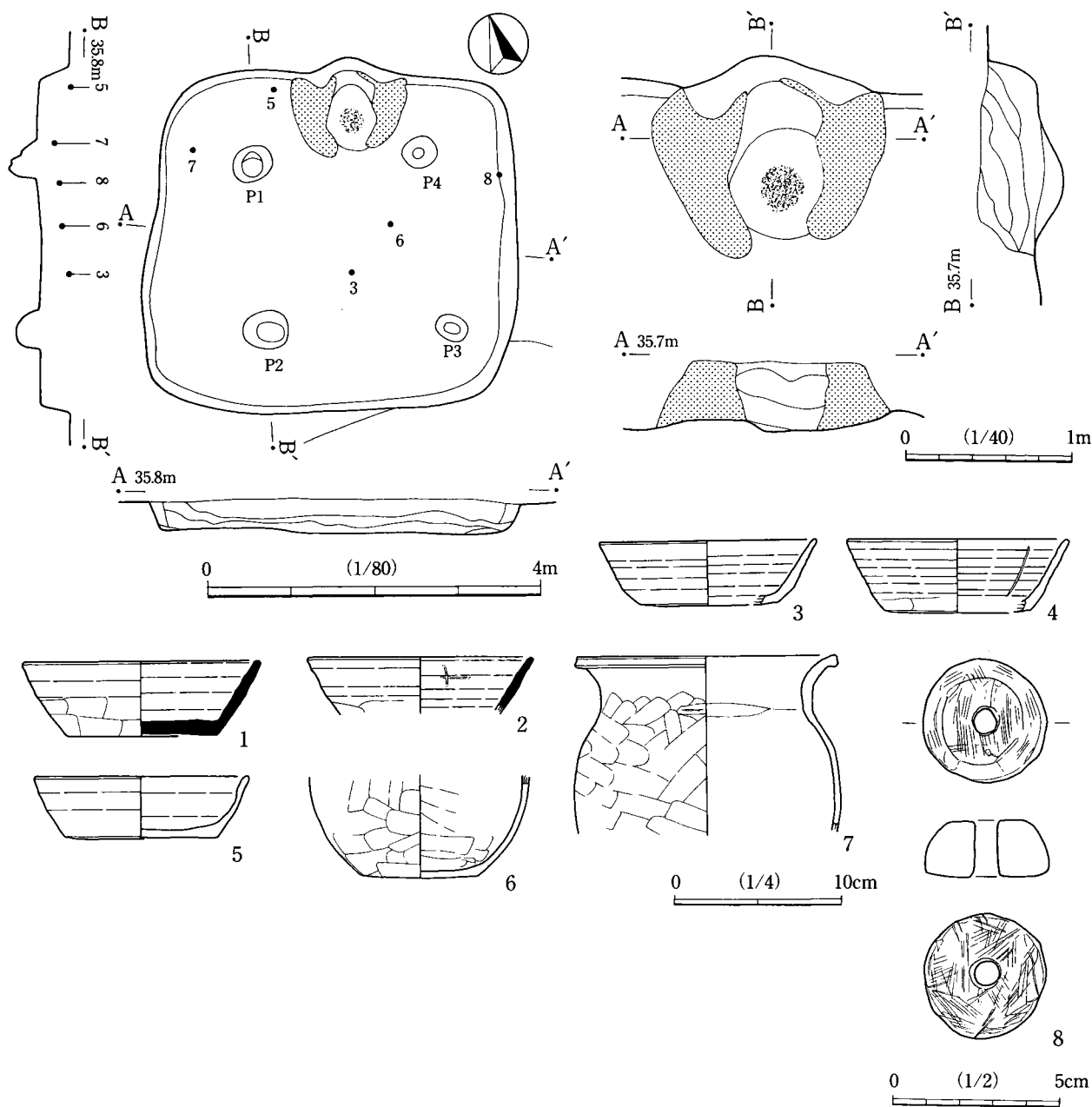
8・9・11~14は土師器甕である。8・9も底部から大きく胴部が開いており、あるいは鉢かもしれない。11は大形の甕であるが、他はさほど大きなものではなく、14はほぼ完形に復元できた。口唇部は丸く収め、胴部は縦方向のヘラ削りである。12は最大径が口縁部に位置し、甌とみられる。胴部は縦方向のヘラ削りで、内面は平滑で縦方向のヘラ磨きが施されている。15は土製支脚である。

#### SI-049号竪穴住居跡（第143図，図版30，114）

本遺構は13-06グリッド付近に位置し、台地北西緩斜面の標高約35.6mに立地する。南西コーナーにおいてSI-067号竪穴住居跡と重複関係にあるが、壁とカマドが僅かに重複するのみであるため、遺構から新旧関係を捉えることはできない。形態は隅丸方形で、規模は4.1m×4.5mを測る。主軸方位はN-20°-Eである。住居の掘込みはしっかりとしており、確認面からの深さは27cm~45cmを測る。主柱穴は対角線よりやや歪んだ配置で4基検出され、径30cm~50cmを測る。深さは北西の柱穴が最も深く39cmを測り、他の柱穴は25cm~28cmを測る。床面は北東部と南西部のコーナーが比較的高く、傾斜を有する。床面には少量の焼土が検出されている。

カマドは北東側の壁の中央に位置する。最大幅は140cmを測り、袖部は壁から95cm延びている。淡褐色砂質土を主体とする。

1・2は須恵器坏である。ともに直線的に開く体部で、体部下端に手持ちヘラ削り、底部は不定方向のヘラ削りである。なお、2の体部内面に線刻がある。3~5はロクロ土師器坏である。3は体部下端及び



第143図 SI-049号実測図

底部を手持ちヘラ削り，4は体部下端及び底部を回転ヘラ削り，5は底部一方向ヘラ削りである。なお，4は体部内面に線刻がある。

6・7は土師器甕である。7は口唇部を外側へ肥厚させ，胴部は横方向のヘラ削りである。

8は石製紡錘具である。

第50表 SI-049号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	(14.4)	4.5	(9.0)	1/4	長石(多)、黒色粒	灰色	底部厚みがある	11
2	須恵器 坏	(13.6)	[3.4]	—	1/5	微砂粒、長石	灰色	器面なめら、内外、ヨコナデ	12
3	ロクロ土師器 坏	(13.0)	3.9	(8.2)	1/4	スコリア、長石、雲母	橙色	—	8
4	ロクロ土師器 坏	(13.2)	4.4	(8.6)	1/5	スコリア、長石、微砂粒	橙色	器面、若干摩耗	1
5	ロクロ土師器 坏	(12.9)	3.8	(9.2)	1/2	長石、雲母、スコリア	内、橙色～赭灰色 外、橙色	外、器面若干摩耗	1.2
6	土師器 甕	—	[6.1]	7.0	1/6	白色砂粒、長石	内、灰黄色 外、赤褐色～暗褐色	薄手な作り	1.7.11
7	土師器 甕	15.8	[10.6]	—	1/3	微砂粒、長石、石英、スコリア	内、明赤褐色、一部黒色	内外、二次的に火を受けた剥落有り	3

### SI-050号竪穴住居跡（第144図，図版30，114，115）

本遺構はJ3-72グリッド付近に位置し，台地西緩斜面の標高約35.9mに立地する。南西コーナーにおいてSI-079号竪穴住居跡と重複関係にある。SI-079号の覆土中に本遺構の床と壁溝の一部が検出されていることから，本遺構の方が新しいことは明確である。形態は方形で，規模は3.2m×3.2mを測る。主軸方位はN-12°-Wである。床面にはカマドの両脇に大きなピットが2基検出されている。カマドの左側はほぼ円形の貯蔵穴で，径80cm，深さ20cmを測る。カマドの右側は楕円形を呈し，長径43cm，短径26cmで，深さ40cmを測る。性格は明らかではないが，対応する柱穴が存在しないことと，左側の貯蔵穴と深さが類似するため，貯蔵穴である可能性が考えられる。床面には径35cm・38cm，深さ20cm・17cmを測る小ピット2基が検出されている。いずれも浅く支柱穴とは想定しかねるが，上屋構造との関連が想定される。SI-079号と重複する部分については貼り床が施されていたと想定されるが，床面が明瞭ではないため検出されていない。一部の壁溝を除いて，壁の立ち上がりなども検出することができなかった。SI-079号と重複する部分を除いて，壁際には深さ5cm～10cmの壁溝が全周する。覆土は床面付近にロームブロックを多く含む暗褐色土が堆積し，人為的な埋め戻し状況を呈する。

カマドは北西側の壁の中央に位置する。カマドの遺存状態は良好で，袖部ばかりでなく，天井部の一部や煙道部まで遺存していた。最大幅は130cmを測り，袖部は壁から45cm延びている。煙道部の先端では，径23cmの煙出しが検出されている。黄灰色砂質土を主体とする。

1・2・6・7はロクロ土師器坏である。2は体部下端に手持ちヘラ削りを施し，底部は一方向ヘラ削りである。6・7は底部の破片で，ともに体部下端手持ちヘラ削り，底部一方向ヘラ削りである。6の内面はヘラ磨きされ，底部外面に「人」とヘラ描きされる。高台はやや丸味をもち，底部に回転糸切り痕を残す。残存部位に釉はみられず，内面に重ね焼きの痕跡がある。

4は須恵器甕である。最大径は口縁部にあり，胴部は縦位の叩きである。8～11は土師器甕である。9は口唇部を丸く収めるが，他は受け口状となり，11は口縁部に顕著な段を有している。胴部は縦方向のヘラ削りで，9は内面のヘラナデ痕が明瞭である。

13は安山岩製砥石である。

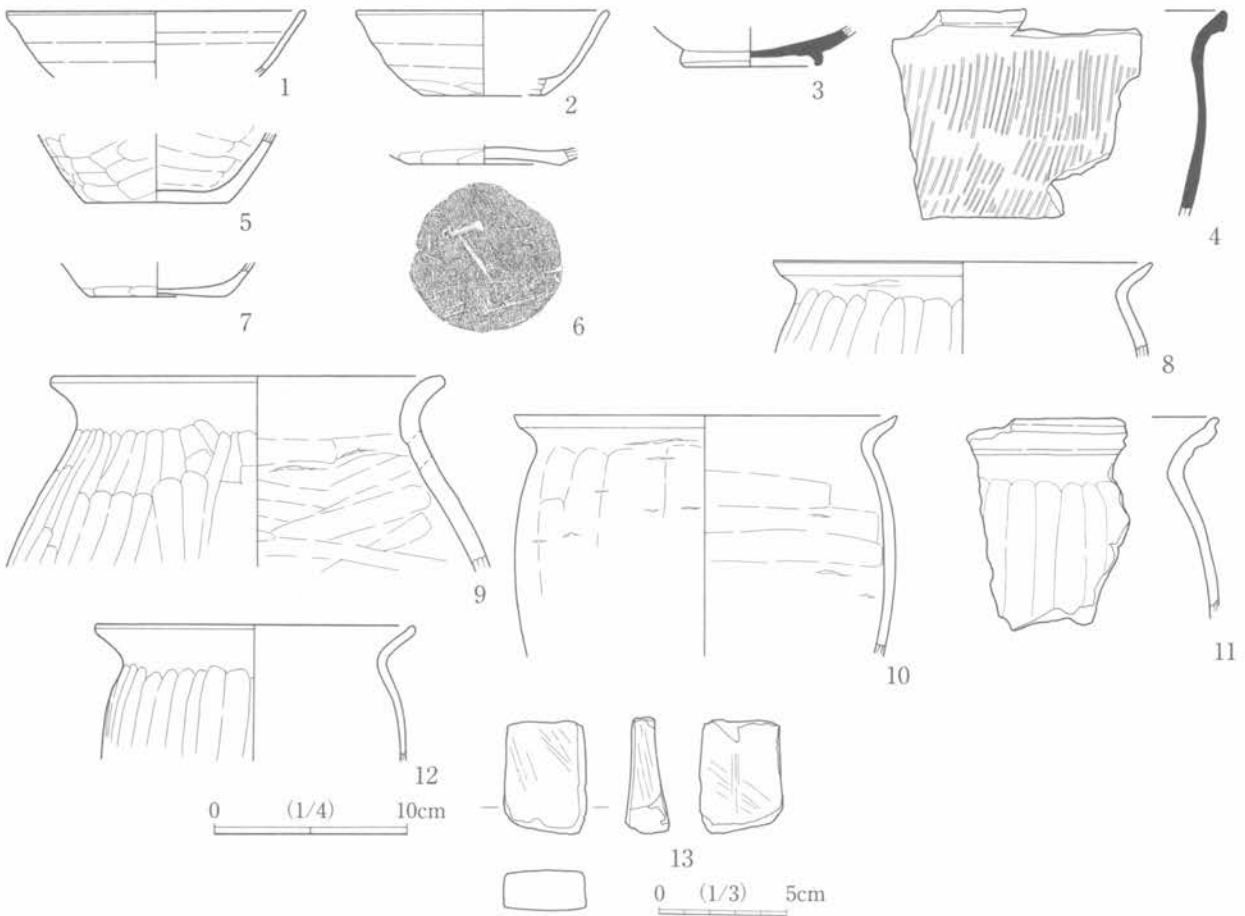
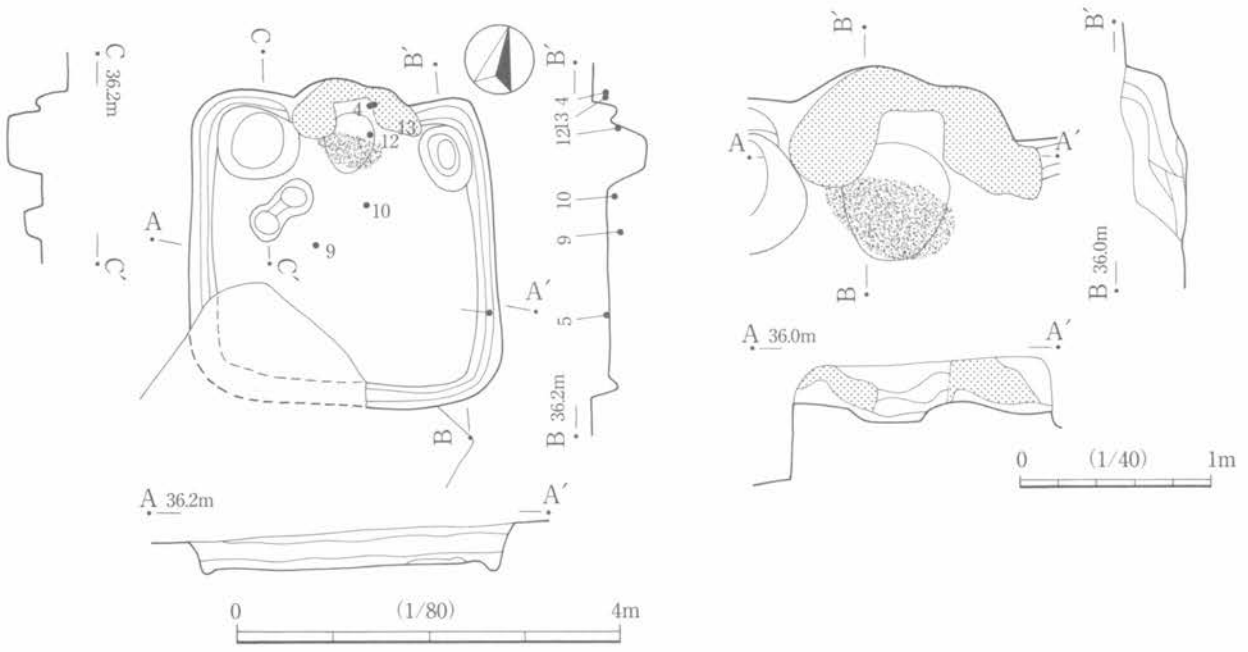
第51表 SI-050号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	ロクロ土師器 坏	(15.6)	[3.5]	—	口縁部1/4	微砂粒、白針、長石	内、明赤褐色 外、鈍い褐色	剥落有り、薄手な作り	1.7
2	ロクロ土師器 坏	(13.2)	4.3	(6.4)	1/4	白色砂粒、長石、スコリア(少)	内、灰黄褐色 外、鈍い褐色	内、炭素吸着	
3	灰釉陶器 碗	—	[2.0]	7.1	底部完形	微砂粒、長石、黒色粒	灰白色	底部回転糸切り後、周囲回転ヘラケズリ	1
4	須恵器 甕	—	[10.6]	—	破片	白色砂粒、長石(少)、スコリア	内、灰褐色 外、鈍い黄褐色	内、炭素吸着 外、叩目	13
5	土師器 甕	—	[3.6]	7.5	底部完形	白色砂粒(多)、長石、黄土粒	内、暗褐色 外、灰黄褐色	内外、炭素吸着	1.5
6	ロクロ土師器 坏	—	[0.9]	8.0	底部完形	白色砂粒(多)、白針、長石	明赤褐色	底部ヘラ描き	1
7	ロクロ土師器 坏	—	[1.8]	7.0	底部完形	白色砂粒、長石、スコリア	鈍い黄褐色		1.17
8	土師器 甕	(19.7)	[4.8]	—	口縁1/3	砂粒、白針、長石	黒褐色	内外、炭素吸着	1
9	土師器 甕	(20.6)	[10.0]	—	1/8	砂粒、小石、長石、石英、スコリア	内、鈍い黄褐色 外、明褐色		3
10	土師器 甕	(20.0)	[12.6]	—	口縁-胴上部1/5	スコリア、石英、白色砂粒	明褐色-黄褐色	器面摩耗	2.7
11	土師器 甕	—	[11.0]	—	破片	黒色粒、長石	鈍い黄褐色	内、煤付着	7

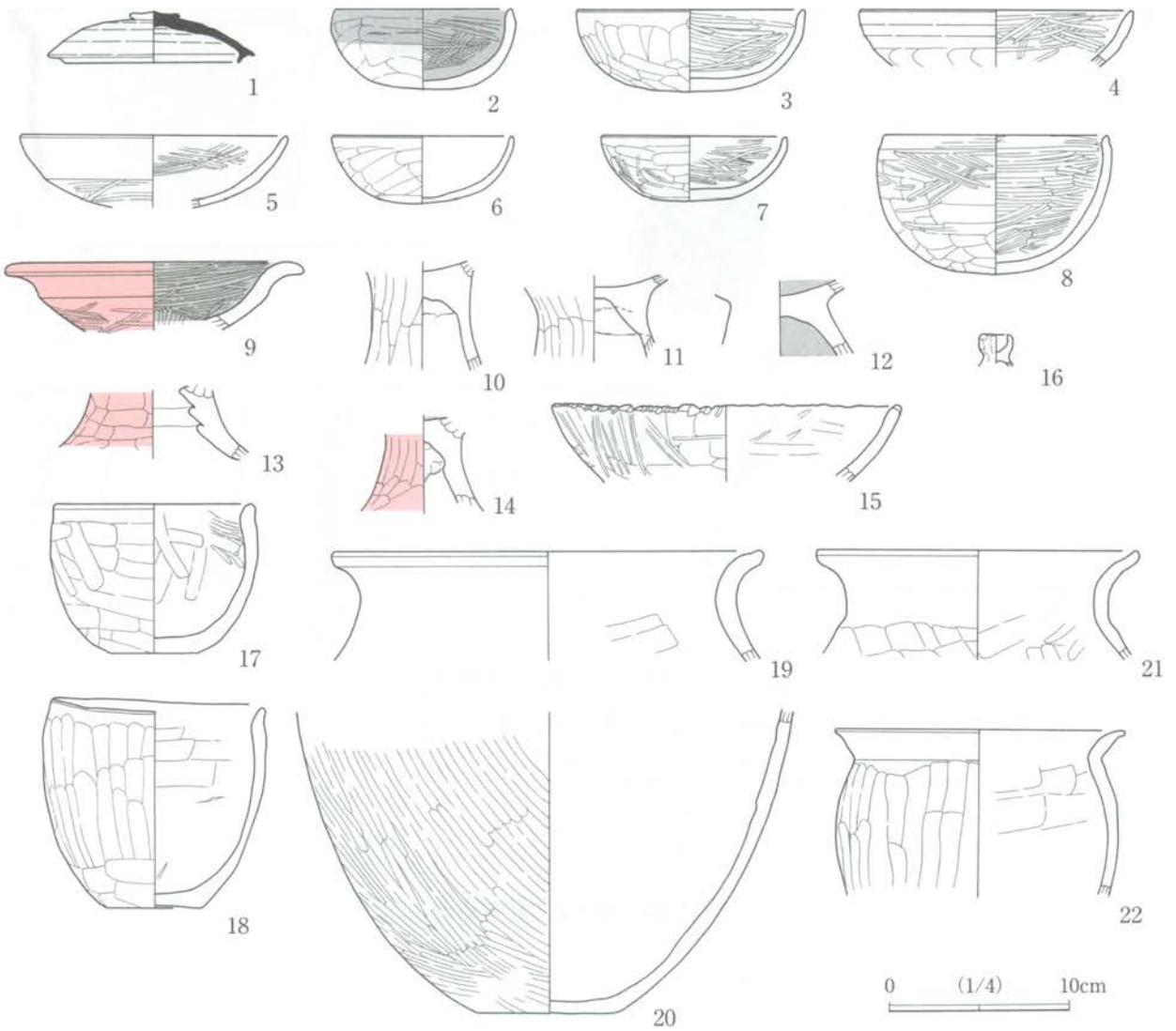
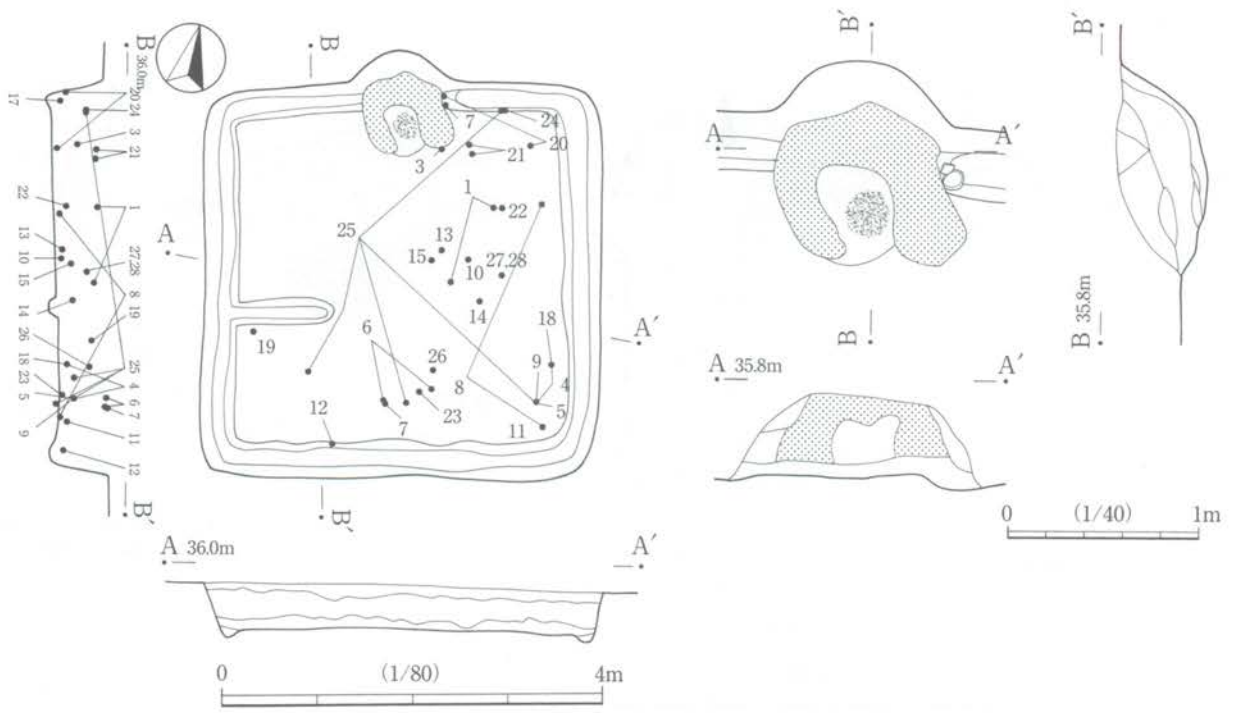
### SI-051号竪穴住居跡（第145，146図，図版30，115）

本遺構はH3-49グリッド付近に位置し，台地北東緩斜面の標高約35.5mに立地する。形態は方形で，規模は4.2m×4.2mを測る。主軸方位はN-11°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしている。確認面からの深さは，緩斜面に立地するため北東側で40cm，南西側で59cmを測る。床面には間仕切り溝と想定される溝が1条検出された。壁溝から中央部に向かって横方向に延びており，幅25cm，長さ100cm，深さ9cm～11cmを測る。覆土はローム粒子を少量含み，しまりの弱い暗褐色土を主体とする。

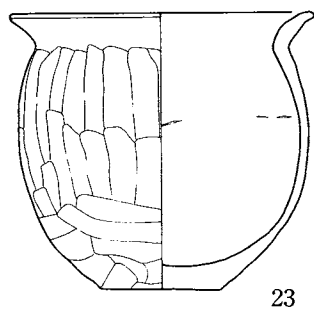




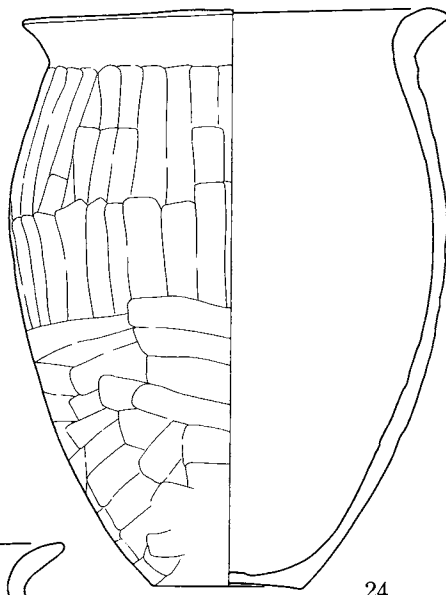
第144图 SI-050号实测图



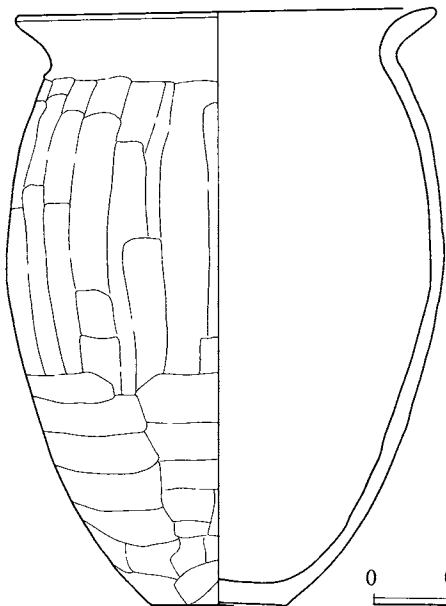
第145图 SI-051号实测图



23

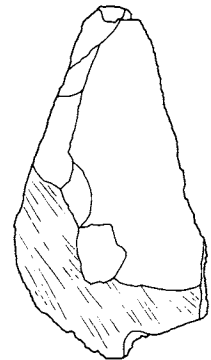
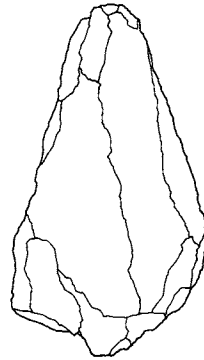


24



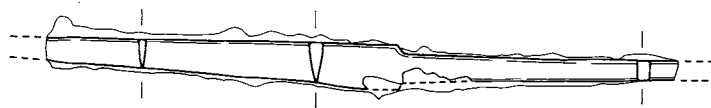
25

0 (1/4) 10cm



26

0 (1/3) 10cm



27



28

0 (1/2) 5cm

第146图 SI-051号出土遺物実測図

カマドは北側の壁の中央に位置する。カマドの遺存状態は良好で、袖部ばかりでなく、天井部の一部や煙道部まで遺存していた。最大幅は95cmを測り、袖部は壁から60cm延びている。煙道部は壁外へ40cm程度掘り込まれていた。淡褐色砂質土を主体とする。カマド付近からは完形に近い遺物が多く検出されている。

1は須恵器坏蓋で、扁平なつまみが付く。天井部は回転ヘラ削りで、薄く釉がかかる。2～8は土師器坏である。2・6・7は口径10cm前後の小振りのもので、2は口縁部がやや内傾するが、6・7はほぼ直立する。また、2は丸底であるが、6・7は底を作っている。口縁部はヨコナデで、体部は横方向のヘラ削りを施し、内面はヘラ磨きされる。3は丸底の坏で、口縁部は短くヨコナデ、体部から底部にかけて、直交する二方向のヘラ削りである。4・5は蓋模倣の坏で、稜は弱い。4は内面に、5は内外面にヘラ磨きを施している。8は器高が7.7cmと深いもので、丸底である。口縁部は短く内傾してヨコナデを施す。体部は横方向のヘラ削りであるが、上半部に粗くヘラ磨きを加える。内面は横方向に丁寧に磨いている。

9～14・16は土師器高坏である。9は坏部の破片で、口縁部が大きく外反する。口縁部はヨコナデで、坏底部は横方向のヘラ削りをナデてきれいに消している。内面は黒色処理され、外面は赤彩される。10～14は脚柱部の破片で、外面は縦方向のヘラ削りを施すが、13はナデを加える。12・14は坏部内面を黒色処理し、12は脚部内面も黒くなっている。また、13・14は脚部外面を赤彩する。16は高坏のミニチュアで、手捏ねによる。

15は土師器鉢としたが、端部を棒状工具で細かく刻んでいる。SI-023号-18も同様のものがあり、疑似口縁と判断したが、本個体も刻み方が不規則で装飾を目的としたものとは思えない。

17～25は土師器甕である。17・18は小形の甕で、18は完形である。ともに胴部からそのまま口縁部にいたる器形で、口縁部はやや反り気味でヨコナデを施す。胴部は17が横方向、18が縦方向のヘラ削りで、18は底部近くに横方向のヘラ削りを加える。19・20は常総型の甕で、胎土に石英粒・長石粒を多く含んでい

第52表 SI-051号出土土器観察表

種別番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 蓋	9.7	2.8	—	ほぼ完形	微砂粒、長石、黒色粒	灰黄色	外、自然灰かかる 湖西産	16.18
2	土師器 坏	9.8	4.4	丸	3/4	微砂粒、スコリア	鈍い黄色～灰黄色	内、ミガキ(単位なし) 内外、黒色処理(漆)	1.25
3	土師器 坏	12.8	4.5	丸	2/3	白色砂粒、長石、スコリア、小石(多)	明赤褐色	外、底部剥落	1.36
4	土師器 坏	(15.2)	[3.1]	—	1/4	白色砂粒、長石(少)	灰黄褐色	内、ミガキ(単位なし、光沢有り)	32.33
5	土師器 坏	(15.0)	[4.0]	—	1/4	微砂粒、混合物なし	橙色～黒褐色	外、帯状にタール付着	33
6	土師器 坏	10.2	3.7	丸	ほぼ完形	微砂粒、スコリア(少)	鈍い黄褐色一部灰褐色	外、摩耗有り 黒色処理(漆?)	7.6
7	土師器 坏	10.4	3.6	丸	ほぼ完形	微砂粒、スコリア(少)	内、褐灰色 外、鈍い黄褐色	内、密にミガキ	6
8	土師器 坏	12.5	7.7	丸	2/3	微砂粒、白針(少)	黒褐色～黄褐色	内、丁寧なミガキ	10.30
9	土師器 高坏	(16.7)	[3.8]	—	坏部1/4	砂粒、スコリア、長石(多)、石英(多)	内、黒色 外、赤褐色	内、黒色処理 外、赤彩	33
10	土師器 高坏	—	[6.0]	—	1/5	白色砂粒、黒色粒	灰黄褐色	器面若干摩耗	13
11	土師器 高坏	—	[4.8]	—	1/5	白色砂粒、長石、石英	明赤褐色	脚部輪積み痕跡に残る	12
12	土師器 高坏	—	[3.8]	—	1/6	砂粒、スコリア	鈍い黄褐色+黒色	黒色処理、器面摩耗	5
13	土師器 高坏	—	[3.8]	—	1/5	白色砂粒、小石、石英、スコリア	内、黄褐色～灰黄色 外、赤色	脚部(外)、赤彩 脚部(内)、粘土紐巻き上げ痕跡、指押痕残る	19
14	土師器 高坏	—	[5.3]	—	1/5	白色砂粒、長石(多)、黒色粒	内、黒色、鈍い褐色 外、鈍い赤褐色	坏部(内)、黒色処理 脚部(外)、赤彩	20
15	土師器 鉢	(19.5)	[4.3]	—	口縁部1/4	白色砂粒、小石、長石(多)、石英	明褐色+黒色	口唇部、雑に指圧痕有り	11
16	土師器 高坏ミニチュア	2.0	[1.6]	—	坏部完形	長石(少)、黒色粒(少)	鈍い褐色		1
17	土師器 甕	11.2	8.3	4.9	1/2	白色砂粒、長石(多)、石英	内、暗赤色～黒褐色 外、赤褐色～黒褐色	外、器面摩耗 内外、炭素吸着	38
18	土師器 甕	11.9	11.8	5.2	完形	白色砂粒、小石、長石(多)、石英(多)	内、明赤褐色 外、明褐色～黒褐色	外、1/2位スス付着	32
19	土師器 甕	(24.2)	[6.0]	—	口縁1/4	石英(多)、小石	鈍い黄褐色	口唇部ほとんど磨滅している	2
20	土師器 甕	—	[17.0]	8.0	1/3	白色砂粒、長石(多量)、石英、スコリア	鈍い黄褐色	内、剥落著しい	1.29.30
21	土師器 甕	(17.9)	[5.8]	—	口縁1/6	白色砂粒、長石、白針	内、明赤褐色 外、鈍い赤褐色	外、煤付着	26.27
22	土師器 甕	16.1	[9.3]	—	口縁～胴上完形	白色砂粒、スコリア、長石(少)、石英(少)	明褐色～黄褐色一部暗褐色	外、黄色の砂粒状の付着物有り	31
23	土師器 甕	15.9	14.5	6.2	完形	白色砂粒、長石(少)、石英(少)	内、鈍い黄褐色～黒褐色 外、明赤褐色～鈍い黄褐色	外、黄土色の付着物が底辺から胴にかけて付着	34
24	土師器 甕	22.3	30.1	7.8	底辺部一部欠損	黒色粒、スコリア、長石、石英	胴上～口縁、明褐色 他暗褐色～黒色	内、底辺～底部にかけ一面点々と剥落有り	28
25	土師器 甕	21.8	31.1	7.0	1/2	白色砂粒、スコリア、長石(多)、石英(多)	内、明褐色 外、黒褐色～明褐色	内、口縁～胴上部剥落著しい	1.3.28.33.35

る。口縁部はやや受け口状を呈し、胴部上位はナデ調整、中位以下に縦方向のヘラ磨きを施す。21～23は口径16cm前後の中形の甕で、胴部も長くない。口縁部は外傾し、ヨコナデで整え、胴部は上半で縦方向、下半で横方向のヘラ削りを施す。23は内外面にカマド構築材とみられる粘質土がこびりついている。24・25はやや胴の長い甕で、法量・調整とも酷似している。最大径は胴部中位よりやや上に位置する。口縁部は外傾し、ヨコナデで整え、胴部は上半を縦方向、下半を横方向のヘラ削りである。なお、24は内面の胴部中位から下の器面が斑点状に剥落しており、底部に近くなるほど顕著である。

26は礫片であるが、台石として使用されたと思われる。27は刀子、28は棒状で鉄鏃であろうか。

### SI-052号竪穴住居跡（第147図，図版31，115，117）

本遺構はI4-37グリッド付近に位置し、台地西緩斜面の標高約35.7mに立地する。北西コーナー付近においてSI-054号竪穴住居跡に隣接するが、新旧関係を捉えることはできない。形態は横長の方形で、規模は3.4m×3.8mを測る。主軸方位はN-9°-Eである。住居の掘込みはしっかりとしている。確認面からの深さは、緩斜面に立地するため東側で57cm、西側で43cmを測る。支柱穴は対角線上に4基検出され、径32cm～55cm、深さ53cm～64cmを測る。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径45cm、深さ16cmを測る。壁際には深さ8cm～14cmの壁溝が全周する。床面の中央部はよく踏みしめられており、特に支柱穴に囲まれた内側は硬化が認められる。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土を主体とし、最下層はローム粒子を多く含むしまりのよい褐色土が堆積する。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は110cmを測り、袖部は壁から80cm延びている。淡褐色砂質土を主体とする。カマド内から土師器甕（11）が出土した。

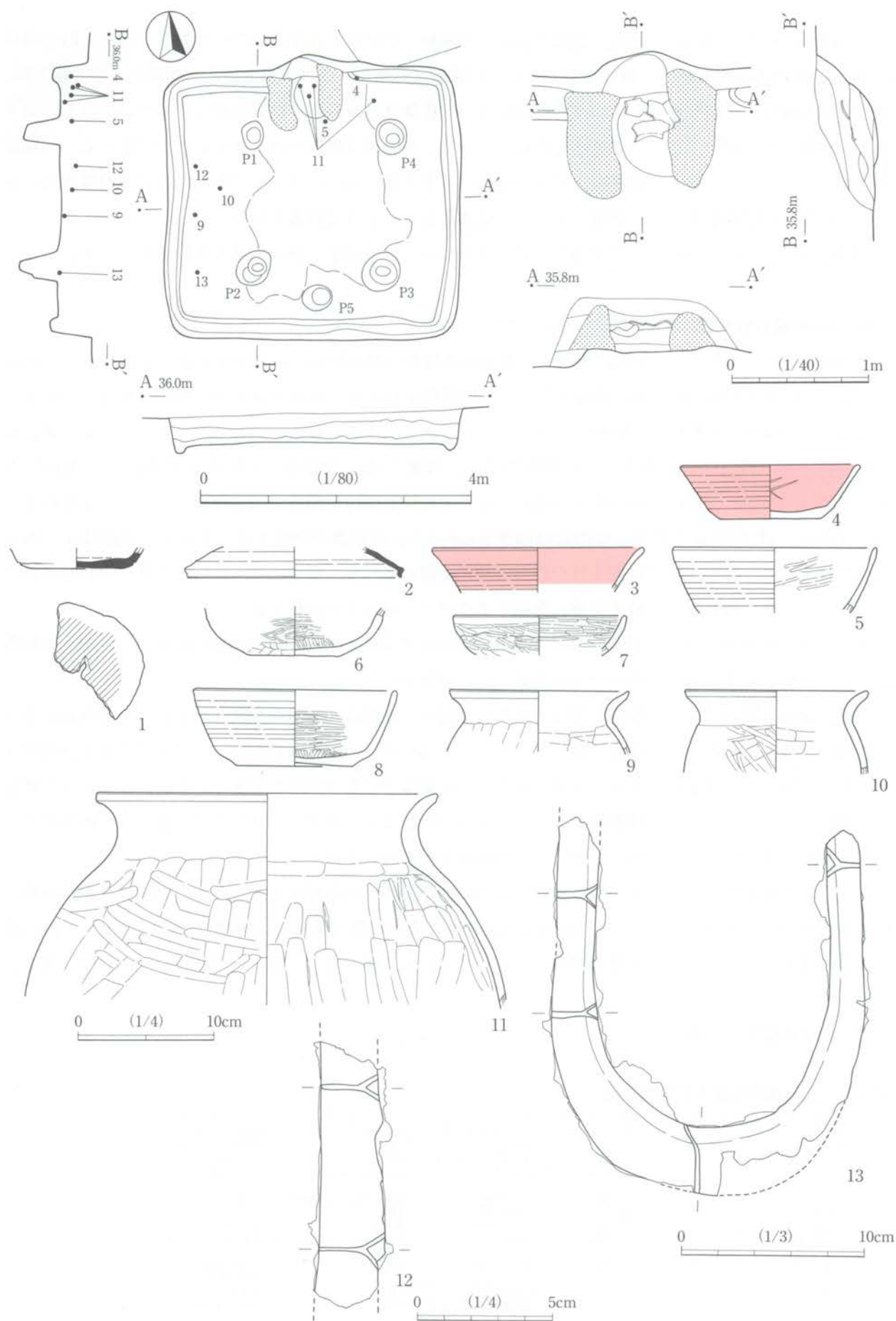
1・2は須恵器坏である。体部下端は手持ちヘラ削り、底部は一方向ヘラ削りである。底部外面が僅かに摩耗し、墨痕がある。2は坏蓋である。3～5・8はロクロ土師器坏である。4は体部下端及び底部全面回転ヘラ削り。8は体部下端にヘラ削りはなく、底部は手持ちヘラ削りである。なお、3・4は内外面とも赤彩される。6・7は土師器坏である。ともに口縁部は短く直立し、ヨコナデで整える。体部は横方向のヘラ削りで、僅かにヘラ磨きを加える。内面は丁寧に磨いている。

9～11は土師器甕である。9・10は比較的小形の甕で、10は口唇部を丸く収める。胴部は9が縦方向、10が横方向のヘラ削りである。11は口径25.2cmを測る大形の甕である。口縁部は大きく外反し、口唇部に一条の沈線を巡らす。胴部は縦方向のヘラ削りであるが、横方向に丁寧なナデを施し、ヘラ削り痕を消している。

12・13は鉄製鋤先である。

第53表 SI-052号出土土器観察表

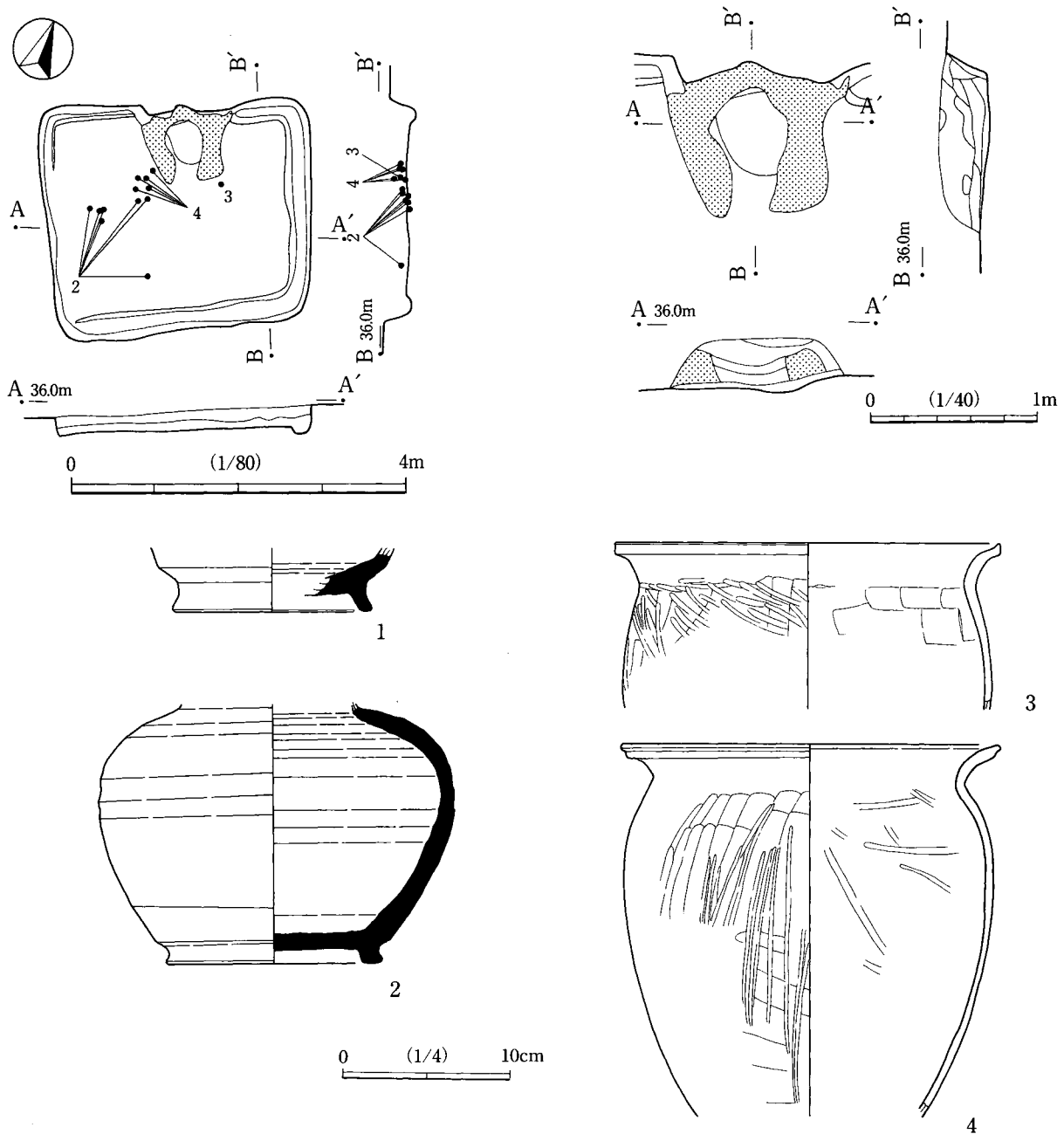
挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	—	[1.6]	(6.6)	底部1/2	長石(多量)、石英(多量)	灰色～暗灰色	転用碗として使用	1
2	須恵器 蓋	(15.8)	[2.2]	—	口縁1/8	白色砂粒	灰色	器面なめらか、内外、ヨコナデ	1
3	ロクロ土師器 坏	(15.6)	[3.3]	—	口縁1/3	白色微砂粒(少)、長石(少)	暗赤褐色	内外、全面赤彩	1
4	ロクロ土師器 坏	(13.2)	3.9	7.2	底部3/4	黒色粒、長石、石英	鈍い赤褐色～鈍い黄褐色	内外、全面赤彩 ヘラ描き有り「□」	1
5	ロクロ土師器 坏	(15.0)	[4.8]	—	口縁1/6	石英、白色砂粒	内、鈍い赤褐色 外、明赤褐色	内、器面若干摩耗	12
6	土師器 坏	—	[3.6]	(6.4)	底部1/2	白色砂粒、長石	赤褐色	内、ミガキ	1
7	土師器 坏	(12.8)	[2.9]	—	口縁1/4	スコリア、細砂粒	鈍い褐色	内、ミガキ	1
8	ロクロ土師器 坏	(15.0)	5.6	8.4	底部3/5	白色砂粒、長石、スコリア	内、鈍い黄褐色～灰褐色 外、鈍い褐色～黒褐色	内、若干摩耗 外、底部タール付着	1
9	土師器 甕	(13.2)	[4.5]	—	口縁1/3	白針、長石、石英、小石	褐色	内、肩部に鋭利なヘラケズリ、口唇部摩滅箇所多い	4
10	土師器 甕	(13.4)	[6.0]	—	口縁1/4	長石、白色砂粒	赤褐色	内、ナデ 外、ケズリ後ミガキ	1.5
11	土師器 甕	25.2	[15.5]	—	2/3	白色砂粒、白針、長石、石英、スコリア	明褐色～黒色	内、縦にヘラ痕残る	2.8.9.10.13



第147图 SI-052号实测图

SI-053号竪穴住居跡 (第148図, 図版31, 117)

本遺構はJ4-00グリッド付近に位置し, 台地北東緩斜面の標高約35.8mに立地する。カマドを含む左半部をSI-054号竪穴住居跡と重複関係にある。SI-054号の覆土中に本遺構が所在することから, 本遺構の方が新しいことは明確である。形態は横長の方形で, 規模は2.7m×3.2mを測る。主軸方位はN-19°-Wである。住居の掘込みは浅く, その深さは, 緩斜面に立地するため南東側で31cm, 北西側で15cmを測るのみである。床面は東側の一部を除いてSI-054号の覆土中に貼られているため, 軟弱な部分が多い。南西コーナー付近を除いた壁際には深さ6cm~15cmの壁溝が巡る。覆土はローム粒子を含む暗褐色土を



第148図 SI-053号実測図

主体とする。

カマドは北西側の壁の中央に位置する。最大幅は100cmを測り、袖部は壁から80cm延びている。山砂とローム粒子を多く含み、粘性のある褐色土を基礎としてカマドが構築されている。淡褐色砂質土を主体とする。カマド右袖脇から支脚が出土した。

1は須恵器高台坏である。やや足の長い高台が付き、底部は回転ヘラ削り後ヨコナデである。2は須恵器短頸壺で、口縁部を欠損する。肩は丸く、薄く釉がかかる。胴部下端はロクロ右回転の回転ヘラ削りを施す。高台は断面方形である。なお、底部内面に指頭により強く押さえた痕跡が10か所あり、ちょうど高台の内側に沿ったように並んでいる。

3・4は土師器甕である。口縁部は受け口状を呈し、4は口唇部外側に沈線状にくぼませる。口縁部はヨコナデで、胴部は縦方向のヘラ削りであるが、3は斜め方向、4は縦方向のナデを加えている。

第54表 SI-053号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 高台付坏	-	[3.9]	(11.8)	底部1/5	細砂粒、白針、長石、黒色粒	灰白色	貼付高台	1
2	須恵器 短頸壺	-	[15.5]	12.9	2/3	微砂粒、小石、長石、石英、スコリア	灰色	(外)肩部と(内)底部に自然灰かかる	2. 3. 4. 5. 6. 5. 7. 8
3	土師器 甕	(23.0)	[9.9]	-	1/6	白色砂粒、白針、長石、スコリア(少)	内、褐色 外、暗褐色～黒色	外、炭素吸着、薄手な作り	17
4	土師器 甕	22.6	[22.4]	-	2/3	白色砂粒、小石(1mm)、長石(多)、石英、スコリア	赤褐色～黒褐色	外、黒斑胴部一箇所有り	1.9.10.12.13.16

#### SI-054号竪穴住居跡 (第149, 150図, 図版31, 117)

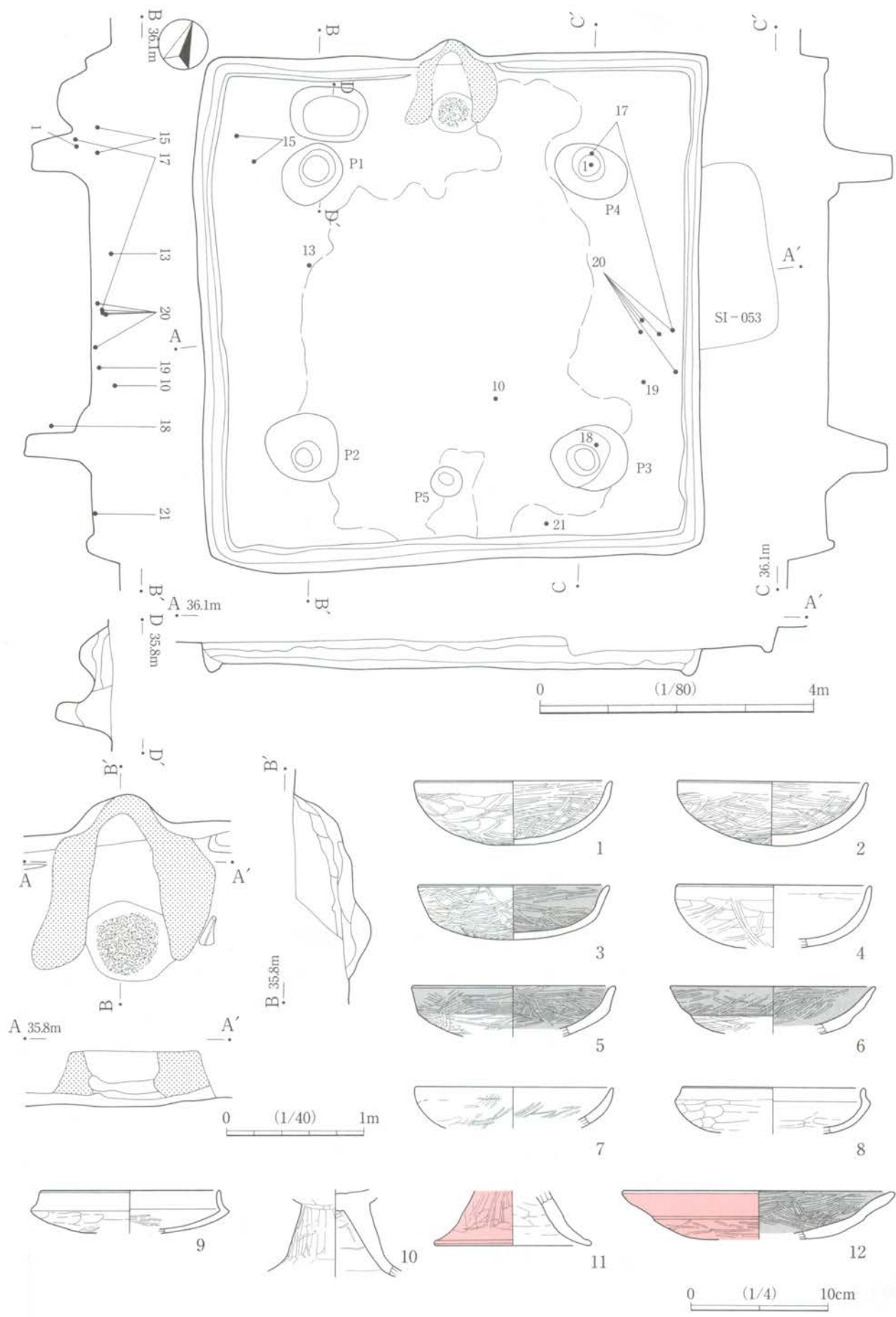
本遺構はI3-98グリッド付近に位置し、台地西緩斜面の標高約35.7mに立地する。東側壁付近においてSI-053号竪穴住居跡と、南半部を中心とするほぼ全面においてSI-106号竪穴住居跡と、南西コーナー付近においてSI-052号竪穴住居跡と重複関係にある。SI-053号は本遺構の覆土中に所在することから、本遺構の方が時代を遡ることが明確である。本遺構がSI-106号の床面を削平して構築していることから、本遺構の方が新しいことは明確である。SI-052号とは重複部分が僅かなため、新旧関係を捉えることはできない。

形態は方形で、規模は7.4m×7.4mを測る。主軸方位はN-10°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしている。確認面からの深さは、緩斜面に立地するため南東側で71cm、北西側で26cmを測る。主柱穴は対角線上に4基検出され、径80cm～105cmを測る。柱間は比較的広く、縦横ともほぼ4.2mを測る。深さは北西側の柱穴が最も浅く72cm、南西側の柱穴が最も深く98cm、東側の2基はいずれも91cmを測る。東側の柱穴の覆土からはいずれも遺物が出土している。柱の抜き取り後に入り込んだものと想定される。カマド左脇には貯蔵穴が検出された。形態はほぼ長方形で、長軸長105cm、短軸長85cm、深さ47cmを測る。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径46cm、深さ36cmを測る。壁際には深さ3cm～11cmの壁溝が全周する。床面の中央部はよく踏みしめられており、特に主柱穴の内側は広い範囲で硬化が認められる。

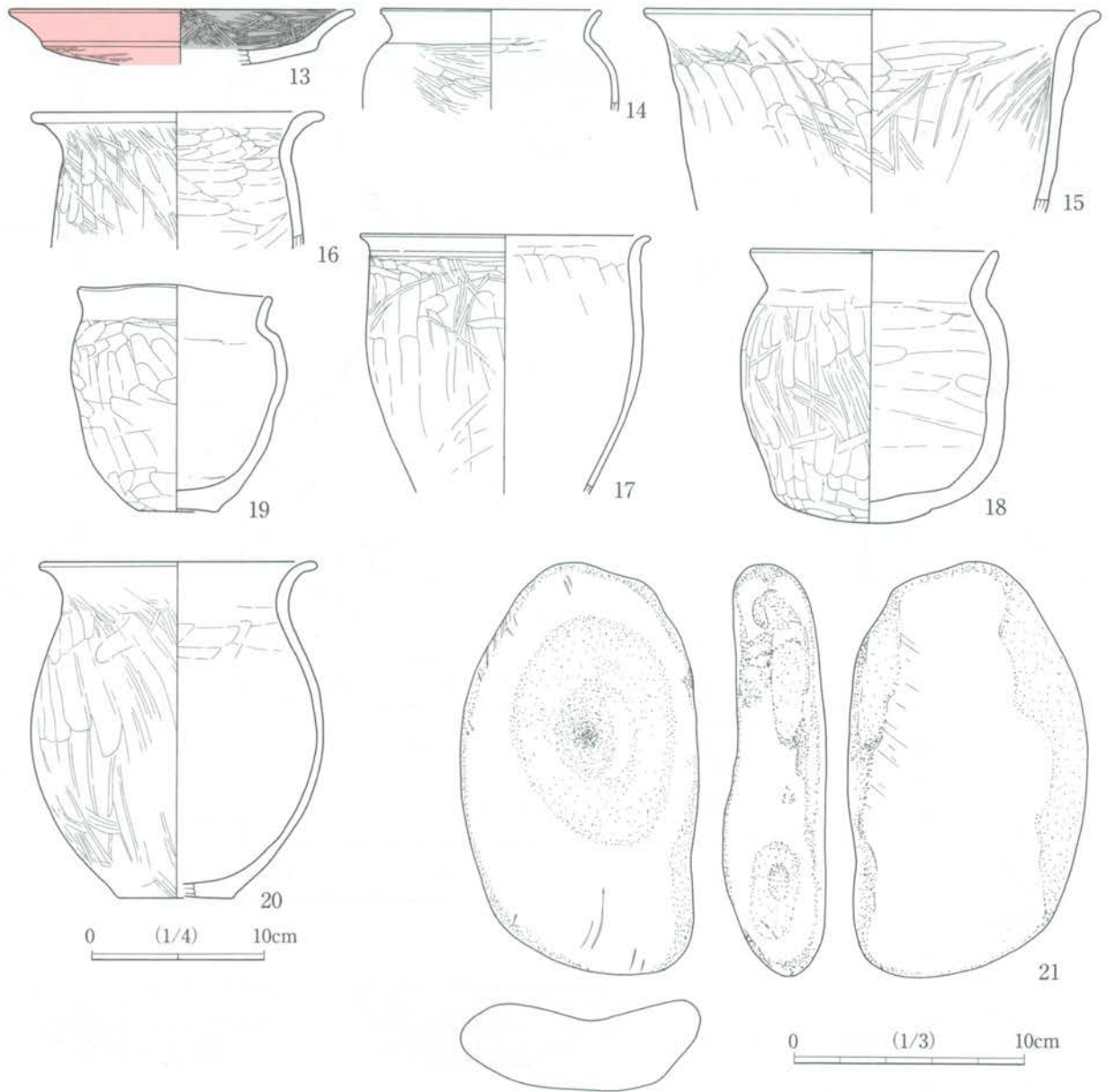
カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は120cmを測り、袖部は壁から105cm延びている。黄灰色砂質土を主体とする。山砂とローム粒子を多く含み、粘性のある灰褐色土を基礎としてカマドが構築されている。

1～9は土師器坏である。1・2・4は半球形の体部で、口縁部が短く直立する。1は完形である。口縁部はヨコナデで整え、体部は横方向のヘラ削り、底部は一方向のヘラ削りである。3・5は口縁部が外傾して開くもので、口縁部はヨコナデ、体部は横方向のヘラ削りで、内外面ともヘラ磨きを施す。8・9





第149图 SI-054号实测图



第150図 SI-054号出土遺物実測図

は坏の模倣で、口縁部は内傾気味に立ち上がる。口縁部はヨコナデ、体部は横方向のヘラ削りである。

10～13は土師器高坏である。10・11は脚部の破片で、脚は短い。脚柱部は縦方向のヘラ削りで、裾部にヨコナデを施す。11は外面赤彩される。12・13は坏部の破片である。ともに内面黒色処理され、外面は赤彩される。

14・16～20は土師器甕である。16・18はほぼ完形である。18は器壁が厚く、全体に歪で丸底となる。口縁部はヨコナデで、胴部は縦方向のヘラ削りである。19も歪みが著しく、外面は被熱している。17は最大径が口縁部にあり、口縁部は短く外反する。胴部は縦方向のヘラ削りである。15は土師器甗で、口縁部は外反しヨコナデで整えるが、その上から縦方向のヘラ削りを施している。内面は縦方向に磨かれている。

21は砂岩製の不整形な砥石である。大きなくぼみが1か所あるが、この部分はもともとくぼんでいたものと思われる。

第55表 SI-054号出土土器観察表

押図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	14.6	4.8	丸	ほぼ完形	細砂粒、長石(多)、石英、スコリア	明黄褐色、赤色(内底)、黒色	内底に円状に火ダスキ痕鮮明	31
2	土師器 坏	(14.0)	4.7	丸	口縁一部 他2/3	白色砂粒、長石(多)、石英(少)	暗赤褐色～黒褐色	口縁部著しく摩滅している	33
3	土師器 坏	(14.2)	4.0	丸	1/4	白色砂粒、長石(少)	内、黒色 外、灰黄褐色	内、黒色処理	1
4	土師器 坏	(14.2)	[4.6]	丸	1/4	白色粒、長石	鈍い浅褐色	器面が非常に汚れている、二次焼成	1
5	土師器 坏	(15.0)	[3.7]	—	1/4	白色砂粒、長石(少)	暗橙褐色～暗褐色	黒色処理(漆)	1
6	土師器 坏	(15.0)	[3.5]	—	1/6	スコリア(少)、細砂粒	灰黄褐色	内外、黒色処理(漆)、ミガキ	1
7	土師器 坏	(14.6)	[3.0]	—	口縁1/3	微砂粒	鈍い褐色	器面なめらか	1
8	土師器 坏	(13.6)	[3.3]	—	1/6	白色砂粒、長石	黒褐色	内外、炭素吸着	1
9	土師器 坏	(13.4)	[3.2]	—	1/6	白色粒、スコリア	褐色	内、炭素吸着	1
10	土師器 高坏	—	[6.5]	—	胴部1/2	砂粒、白針、長石	褐色～暗赤色	裾部摩滅している	1.15
11	土師器 高坏	—	[4.1]	(11.4)	脚部1/4	白色粒、黄土粒、長石	内、鈍い褐色 外、鈍い赤褐色	内、ナデ 外、赤彩	1
12	土師器 高坏	(20.0)	[3.6]	—	坏部1/3	白色砂粒、黒色粒、長石、小石(1～4mm)	内、黒色 外、鈍い黄褐色～赤褐色	内、黒色処理 外、赤彩	1
13	土師器 高坏	(20.2)	[3.2]	—	坏部1/5	白色粒、スコリア	内、黒色 外、暗赤褐色	内、黒色処理暗文状に強く放射線あり、外、赤彩	1.4
14	土師器 甕	(13.0)	[5.8]	—	口縁1/5	白色粒、長石(多)、石英(少)	暗赤褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ後ミガキ	1
15	土師器 甕	(26.4)	[11.8]	—	口縁～胴部1/3	白色砂粒、長石、石英、スコリア	内、鈍い橙褐色 外、鈍い黄褐色～鈍い橙褐色	内、斜面にミガキ	1.2.3
16	土師器 甕	(17.0)	[8.0]	—	口縁～胴上部1/4	白色粒、長石粒	内、暗黒色 外、赤褐色	内、炭素吸着、強くヘラナデ	1
17	土師器 甕	(17.0)	[15.0]	—	1/4	白色粒、石灰粒、長石(多)、スコリア	鈍い褐色	内、ナデ	23.30.33
18	土師器 甕	14.4	15.8	7.2	口縁1/2 他完形	白色砂粒、小石(1～5mm)、長石(多)、石英、スコリア	内、赤褐色～鈍い褐色 外、赤褐色～黒色	底部不安定で境目が無い	35
19	土師器 甕	11.3	8.2	4.8	ほぼ完形	細砂粒、白針、長石(少)、小石(1mm)	内、黒褐色 外、赤褐色～暗灰黄色	外、剥落著しい 底部正円でない	1.26
20	土師器 甕	16.2	19.5	(6.8)	胴部1/2底部1/5	白色砂粒、スコリア、長石(少)、石英(少)	褐色～暗褐色	口縁部摩耗気味	1.19.21.22.23.24

SI-055号竪穴住居跡 (第151図, 図版31, 117)

本遺構はD8-45グリッド付近に位置し、西側台地南緩斜面の標高約36.5mに立地する。南壁付近は調査区境界の道路による削平を受けており遺存していない。形態は方形と想定され、規模は主軸方向に2.6mまで確認され、横方向は3.6mを測る。主軸方位はN-10°-Wである。住居の掘込みはしっかりとしている。確認面からの深さは、緩斜面に立地するため北側で57cm、南側で25cmを測る。床面の中央部はよく踏みしめられており、硬化が認められる。検出された範囲では、壁際に深さ4cm～11cmの壁溝が東側壁の一部を除いて巡る。床面のほぼ直上から少量の焼土と炭化物が検出された。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は155cmを測り、袖部は壁から70cm延びている。黄灰色砂質土を主体とする。

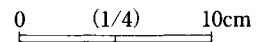
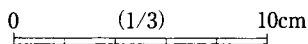
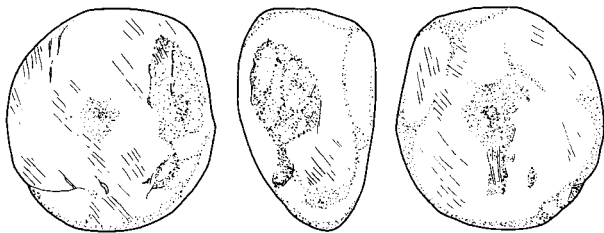
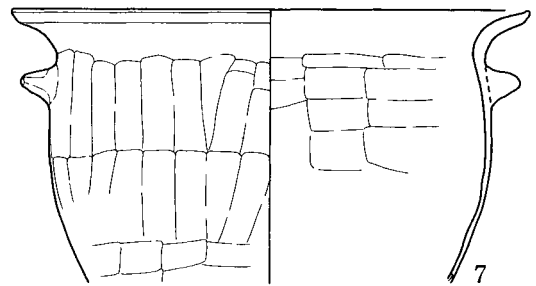
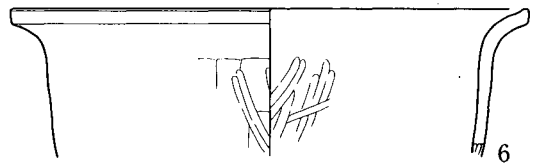
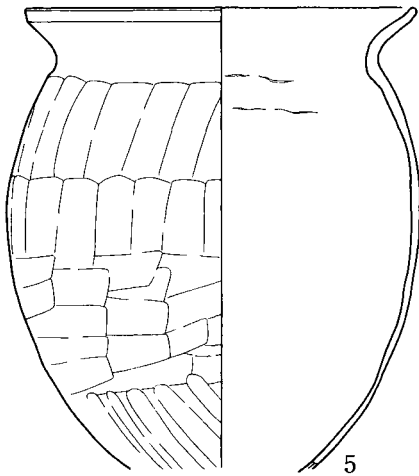
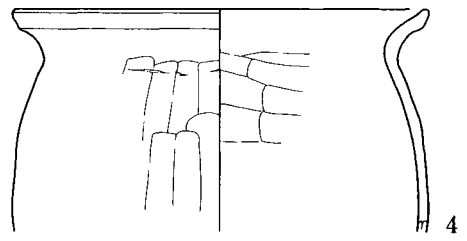
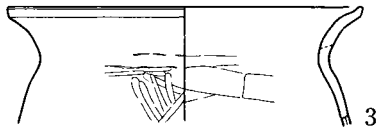
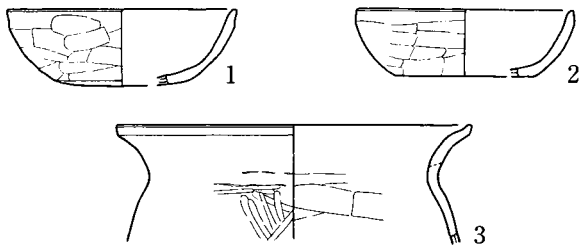
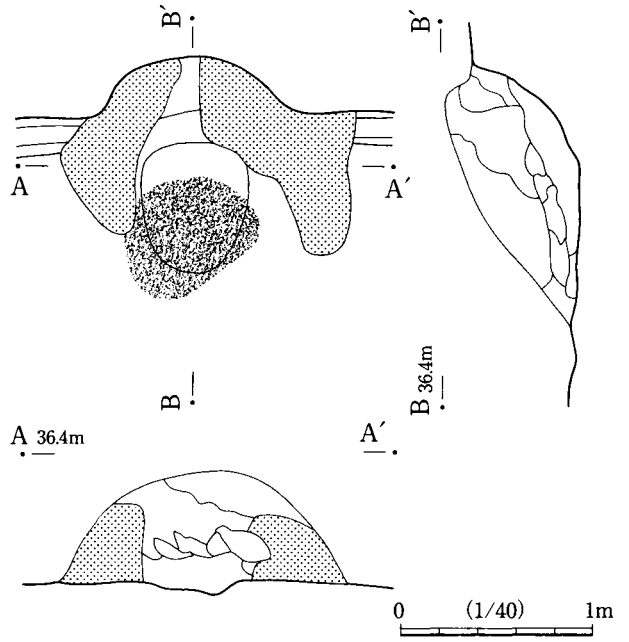
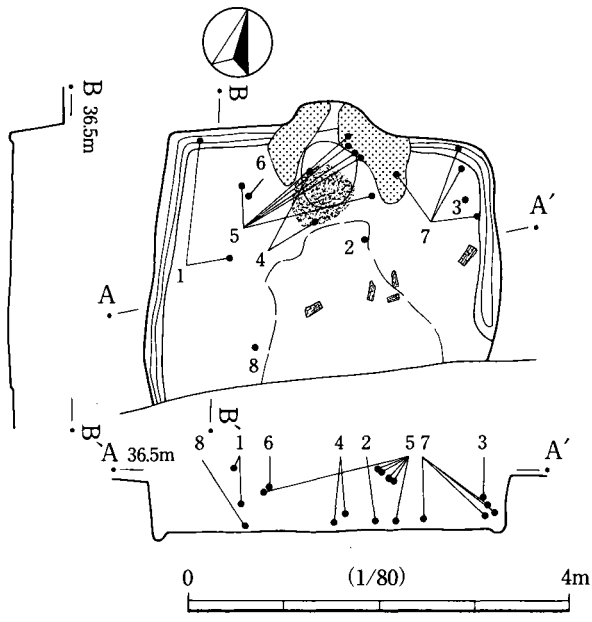
1・2は土師器坏である。ともに平底で、体部は丸味をもって立ち上がる。口縁部はヨコナデで、体部は横方向のヘラ削りである。

3～6は土師器甕である。5は底部を欠損するがほぼ完形である。いずれも口縁部はやや受け口状を呈し、胴部は上半で縦方向、下半で横方向のヘラ削りである。4は器面の状況が悪くヘラ削りは不鮮明である。6・7は土師器甕である。6は小破片であるが、最大径が口縁部にあり、内面に縦方向のヘラ磨きがある。7は形骸化した円錐形の把手が付いている。口縁部は大きく外反し、口唇部外側に沈線様のくぼみを巡らす。胴部は縦方向のヘラ削りである。器壁は薄く仕上げられている。

8は拳大の礫で、両面に敲打痕がある。

第56表 SI-055号出土土器観察表

押図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(12.0)	4.0	(7.0)	1/3	白色微砂粒(少)	内、鈍い黄褐色～灰褐色 外、鈍い灰黄色～黒色	炭素吸着(外底部)	11.14
2	土師器 坏	(11.4)	3.5	(7.2)	口縁～底部1/8	砂粒、黒色粒(少)	鈍い黄褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	7
3	土師器 甕	(18.6)	[6.2]	—	口縁1/6	白色砂粒、長石(少)	赤褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ後ミガキ	3
4	土師器 甕	(21.6)	[11.6]	—	口縁1/4	砂粒、長石、石英、小石	内、明褐色 外、暗褐色	器面ざらざらして落ちやすい	38.46
5	土師器 甕	20.8	[24.0]	—	底部欠	白色砂粒、長石(少)、スコリア	内、褐色 外、褐色～黒褐色	外、胴中央～底部にかけ黒色の付着物(ふきこぼれの痕)	1.13.40.41.42.43.44.50
6	土師器 甕	(27.0)	[7.6]	—	口縁1/8	白色砂粒、長石(少)	赤褐色	内、ミガキ 外、ヘラケズリ後ミガキ	1.12
7	土師器 甕	(27.0)	[14.3]	—	口縁1/4 胴部2/3	白色砂粒、長石(多)、スコリア	内、黒褐色 外、赤褐色		4.20.24.49



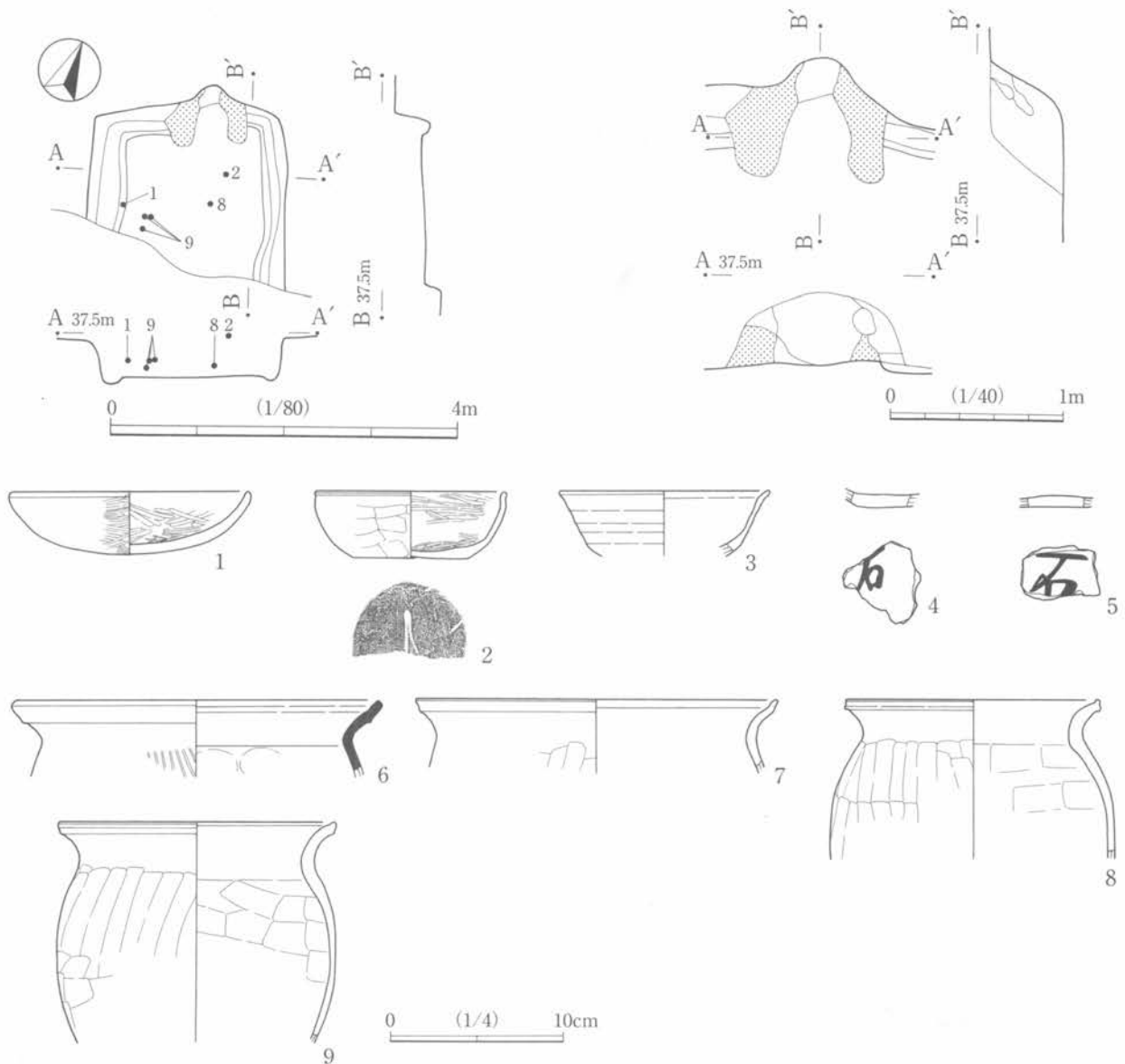
第151图 SI-055号实测图

SI-056号竖穴住居跡 (第152図, 図版31)

本遺構はL3-83グリッド付近に位置し, 台地中央部の標高約37.4mに立地する。南側壁周辺においてSI-031号竖穴住居跡と重複関係にある。土層断面による新旧関係は捉えられていないが, 本遺構の床が切られていたと判断でき, 本遺構の方が時代を遡ると想定される。形態は縦長の方形で, 規模は主軸方向に2.0mまで確認され, 横方向には2.3mを測る。主軸方位はN-20°-Wである。壁際には深さ4cm~8cmの壁溝が全周する。覆土はローム粒子, 焼土粒子を含む褐色土を主体とする。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は80cmを測り, 袖部は壁から50cm延びている。黄灰色砂質土を主体とする。

1・2は土師器坏である。1は丸底, 2は平底で, 2は口唇部が僅かに外へ肥厚する。体部はともに横方向のヘラ削りであるが, 1はヘラ削り後にヘラ磨きを施す。内面はヘラ磨きである。なお, 2の底部外面にはヘラ描きがある。3~5はロクロ土師器坏である。いずれも破片で, 3は体部下端に手持ちヘラ削りを施す。4・5は底部外面に「石」と墨書される。



第152図 SI-056号実測図

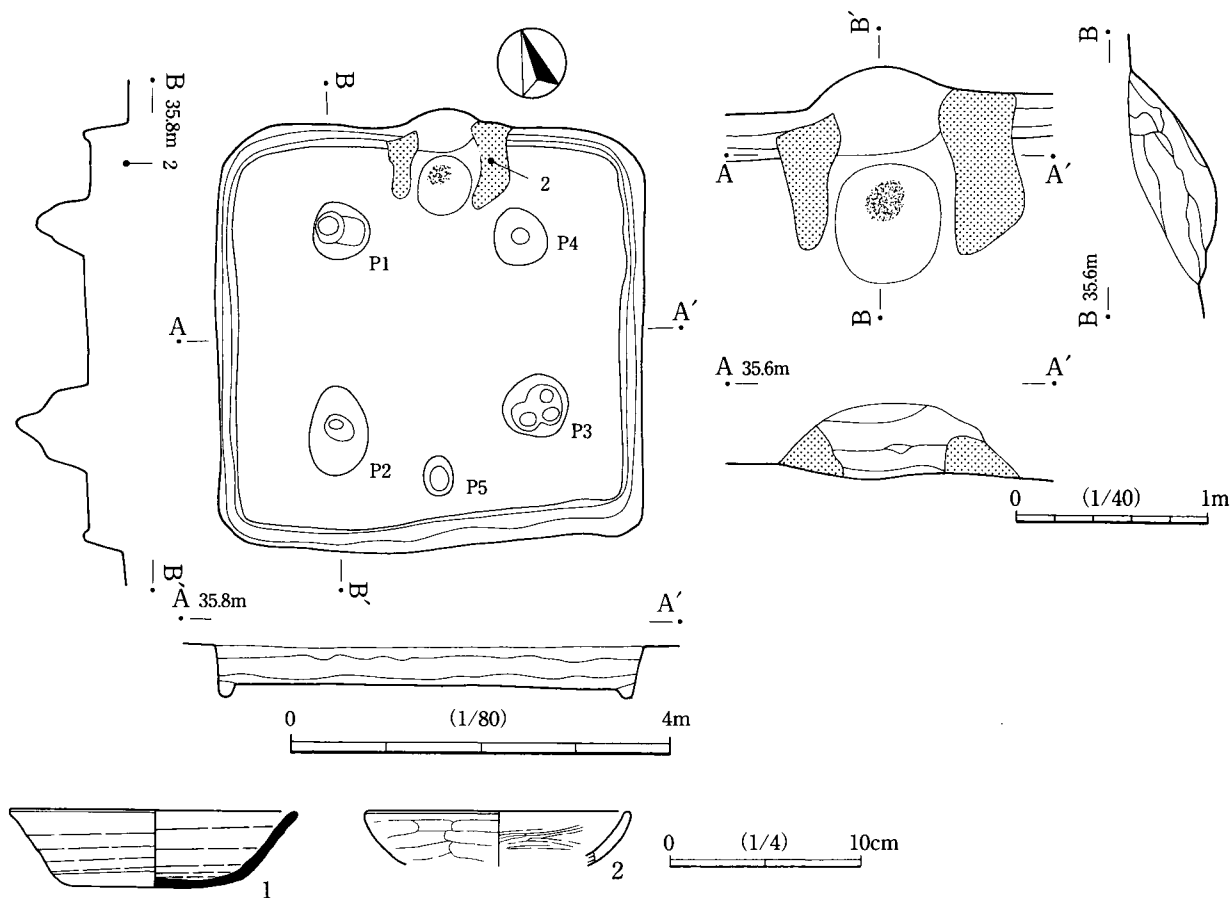
6は須恵器甕である。口縁部は受け口状で、外側へ折り返している。胴部は縦の叩きである。7～9は土師器甕である。口縁部は受け口状で、8・9は比較的丸い胴部である。口縁部はヨコナデで、胴部は上半を縦方向、下半を横方向のヘラ削りである。

第57表 SI-056号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(14.0)	3.7	丸	口縁-底部1/8	スコリア、黒色粒	内、鈍い橙色 外、橙色	内、ミガキ	1.14
2	土師器 坏	(11.0)	3.9	6.6	底部1/2 体部1/8	微砂粒、黒色粒(少)、小石	明赤褐色-鈍い黄褐色+灰褐色	底部へラ描き沈線有り	1.7
3	ロクロ土師器 坏	(12.2)	[3.8]	-	口縁1/6	スコリア	鈍い黄褐色	器面若干摩耗	1
4	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	砂粒、長石	鈍い黄褐色	底部墨書「石」	1
5	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	砂粒、長石、スコリア	鈍い黄褐色	底部墨書「石」	1
6	須恵器 甕	(11.4)	[4.3]	-	口縁1/8	白色砂粒、スコリア	鈍い黄褐色	内、当て具痕 外、平行叩目	1
7	土師器 甕	(21.0)	[4.2]	-	口縁1/4	白色砂粒、石英	鈍い赤褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	1
8	土師器 甕	(14.8)	[9.2]	-	1/4	砂粒、白針、長石	内、褐灰色 外、褐灰色+黒色	外、炭素吸着、黒斑有り	
9	土師器 甕	(16.0)	[12.9]	-	1/4	白色砂粒、長石、スコリア	内、明赤褐色 外、鈍い褐色+黒色	口縁部は強くヨコナデが加えられている	15.16.19

SI-057号竪穴住居跡 (第153図, 図版32, 117)

本遺構はI3-64グリッド付近に位置し、台地西斜面側の狭い尾根状の標高約35.5mに立地する。形態は南西コーナーが張り出した歪な方形で、規模は4.4m×4.5mを測る。主軸方位はN-12°-Eである。住居の掘込みはしっかりとしている。確認面からの深さは、尾根状の地点に立地するため東・西側で44cm、南・北側で38cmを測る。主柱穴は対角線上に4基検出され、径55cm～90cmを測る。深さは南西部の柱穴が最も深く74cmを測り、他の柱穴は51cm～61cmを測る。北西部の柱穴は深さ38cmの部分で平らなテラス状を呈する。南東部の柱穴は2～3本の柱が立っていた痕跡が観察され、建て替えや補助的な柱を添



第153図 SI-057号実測図

えていた状況が窺える。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径40cm、深さ43cmを測る。壁際には深さ6cm～9cmの壁溝が全周する。覆土はソフトロームを含む暗褐色土を主体とする。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は120cmを測り、袖部は壁から85cm延びている。淡黄灰褐色土を主体とする。

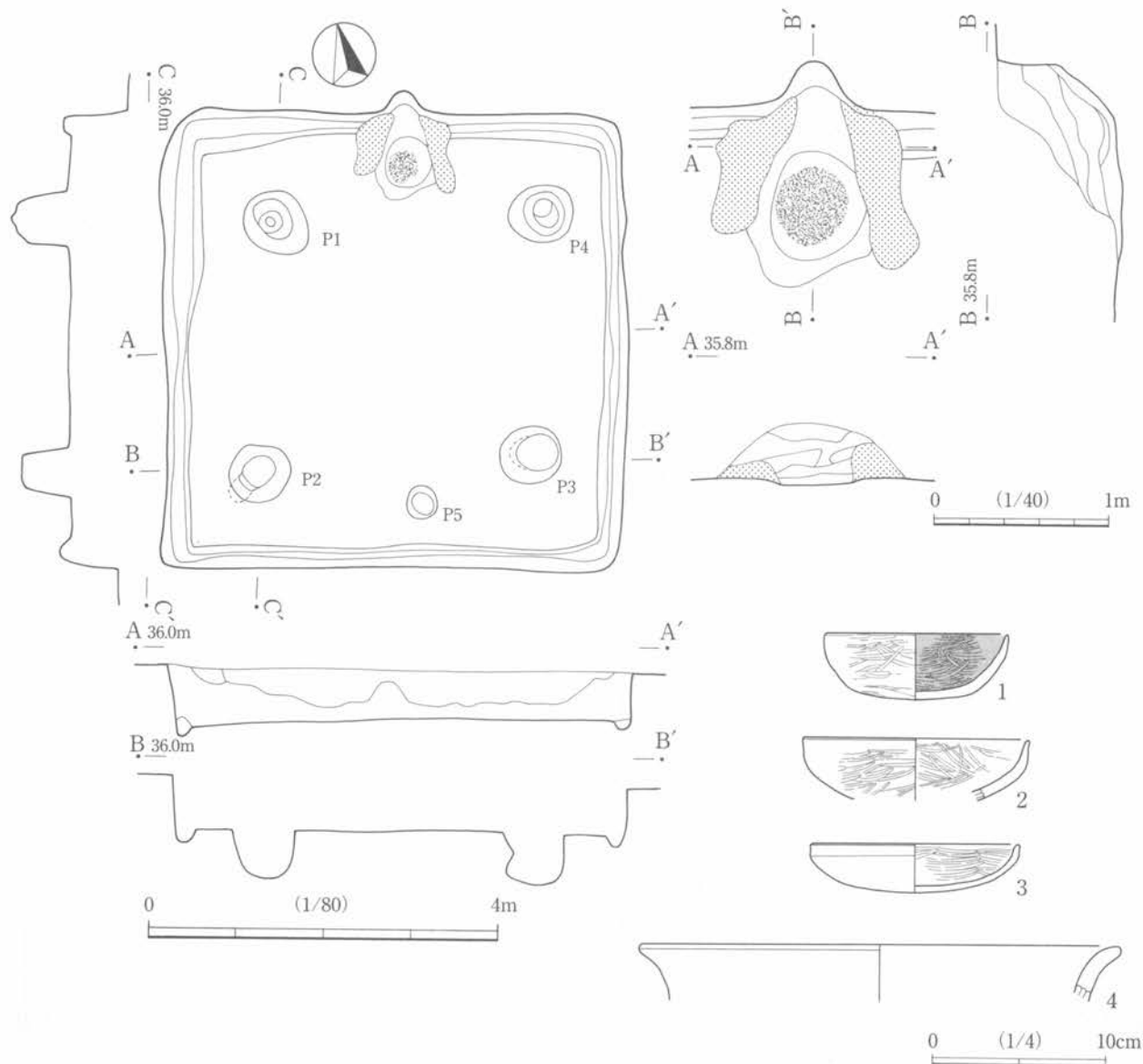
遺物は少なく、2点を図示しただけである。1は須恵器坏で、雲母粒・石英粒を非常に多く含む。体部は直線的に立ち上がり、体部下端並びに底部全面回転ヘラ削りである。2は土師器坏で、体部は横方向のヘラ削り、内面はヘラ磨きを施している。

第58表 SI-057号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	15.2	4.1	9.0	1/2	長石(多量)、石英(多)、雲母(多)	灰色	常陸新治産産	1
2	土師器 坏	(14.0)	[2.9]	-	口縁～体部1/3	砂粒、スコリア(少)	内、橙色、外、鈍い黄褐色	外面に飛びカンナ風のヘラケズリ有り	4

SI-058号竪穴住居跡 (第154図, 図版32)

本遺構はI4-00グリッド付近に位置し、台地南東緩斜面の標高約35.8mに立地する。東側壁周辺にお



第154図 SI-058号実測図



いてSI-078号竪穴住居跡と重複関係にある。本遺構がSI-078号の床面を切っており、本遺構の方が新しいことが明確である。形態はほぼ正方形で、規模は5.3m×5.3mを測る。主軸方位はN-10°-Eである。住居の掘込みはしっかりとしている。確認面からの深さは、緩斜面に立地するため北西側で79cm、南東側で52cmを測る。支柱穴は対角線上に4基検出され、径65cm～85cm、深さ56cm～68cmを測る。柱間は大変広く、主軸方向に2.8m、横方向に3.2mを測る。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径35cm、深さ25cmを測る。壁際には深さ9cm～13cmの壁溝が全周する。覆土はロームブロックを多量に含む褐色土を主体とする。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は120cmを測り、袖部は壁から85cm延びている。灰褐色砂質土を主体とする。煙道部は壁外へ30cm程度掘り込まれていた。

1～3は土師器坏である。1はやや身の深いもので、口径も10cm前後の小振りなものである。体部外面は横方向のヘラ削り後僅かに磨きを加え、内面は黒色処理される。体部を横、底部を放射状に丁寧に磨いており、黒光りしている。2は口縁部が垂直に立ち上がるが、体部との境に稜はない。体部外面は横方向のヘラ磨きで、後に粗くヘラ磨きを行い、内面も粗いヘラ磨きである。3も小振りの模倣坏で、口縁部は短く直立し、ヨコナデで整える。体部外面にヘラ削り痕は観察できないが平滑で、内面は丁寧に磨いている。

4は土師器甕の口縁部破片である。口唇部を丸く収めている。

第59表 SI-058号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(10.6)	3.8	丸	1/3	微砂粒	内、黒色 外、鈍い黄色	内、黒色処理 器面なめらか 密にミガキ	1
2	土師器 坏	(13.0)	[3.5]	—	1/4	白色粒	鈍い褐色	内、粗にミガキ 外、ナデミガキ	1
3	土師器 坏	(12.0)	2.9	丸	1/4	スコリア(少)	鈍い黄褐色	外、器面剥落のため成形不明	1
4	土師器 甕	—	—	—	口縁部片	白色粒、砂粒	明褐色	内外、ヨコナデ	

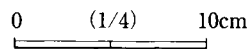
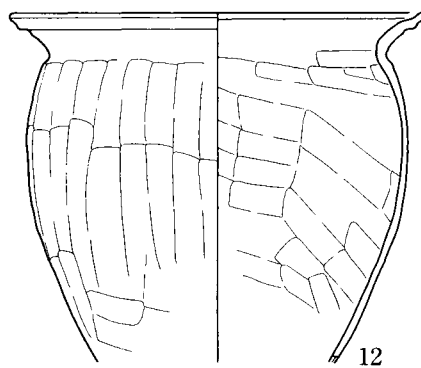
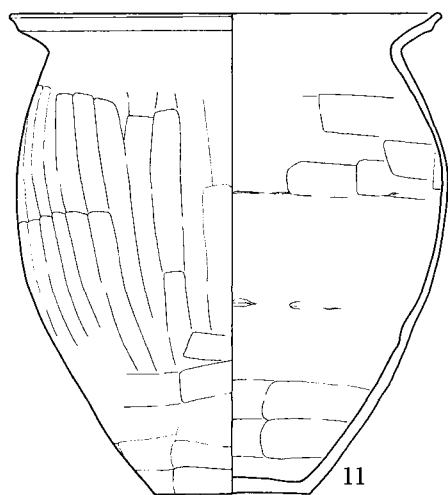
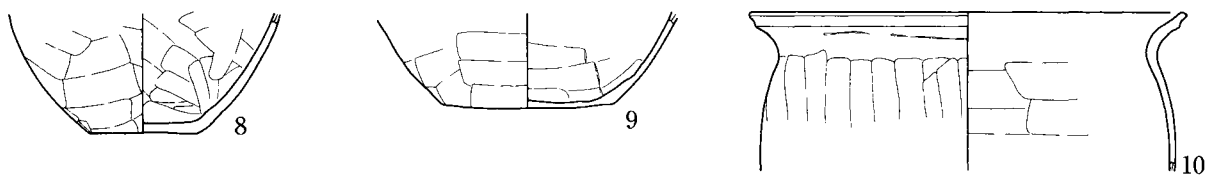
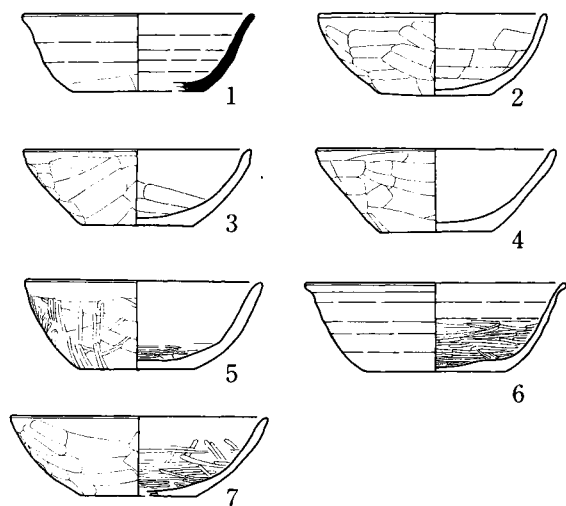
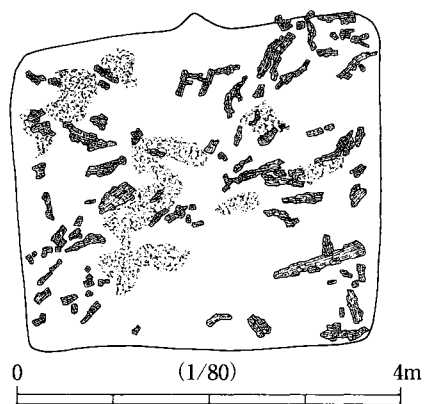
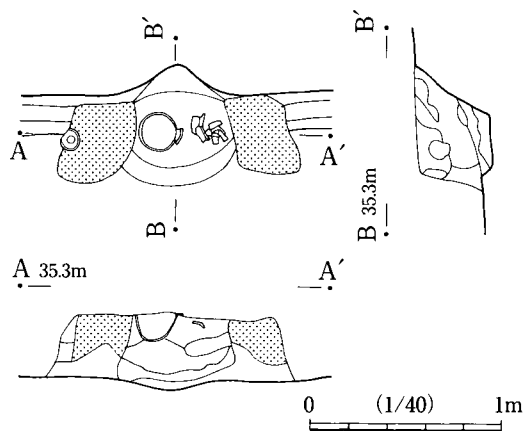
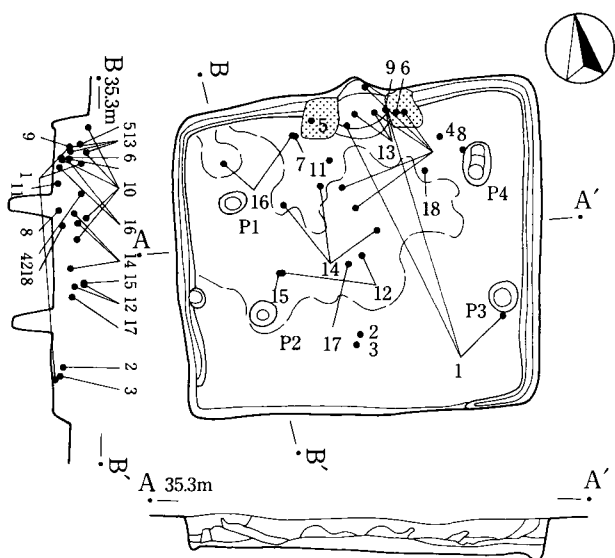
#### SI-059号竪穴住居跡 (第155, 156図, 図版32, 33, 117, 118)

本遺構はI4-70グリッド付近に位置し、台地南西緩斜面の標高約35.2mに立地する。形態は北西コーナーが張り出したうえに、横長のやや歪んだ方形で、規模は3.4m×3.8mを測る。主軸方位はN-12°-Eである。住居の掘込みは比較的浅く、確認面からの深さは、緩斜面に立地するため東側で38cm、南側で20cmを測る。支柱穴と想定される柱穴は対角線から大きくはずれ、長方形の頂点となる位置に4基検出され、径30cm～45cmを測る。深さは西側の2基は比較的深く約45cmを測り、東側の2基は比較的浅く22cm～25cmを測る。柱間は主軸方向に60cm～65cm、横方向に125cmを測る。西側壁溝内には径18cm、深さ4cmの小ピットが所在する。南側壁を除いて壁際には深さ4cm～9cmの壁溝が巡る。床面はカマド周辺及び中央部から西側壁にかけてよく踏みしめられており、硬化が認められる。住居跡ほぼ全面にわたって焼土と炭化材が検出された。いずれも床面直上から10cmの間に出土している。この焼土と前後するレベルで遺物が多く出土している。炭化材は住居跡中央部と各コーナーを結ぶように分布しているが、東側壁方向に分布する一群はコーナー部に向かっているとは判断しがたい。この住居の上屋構造を考える上で興味深い。

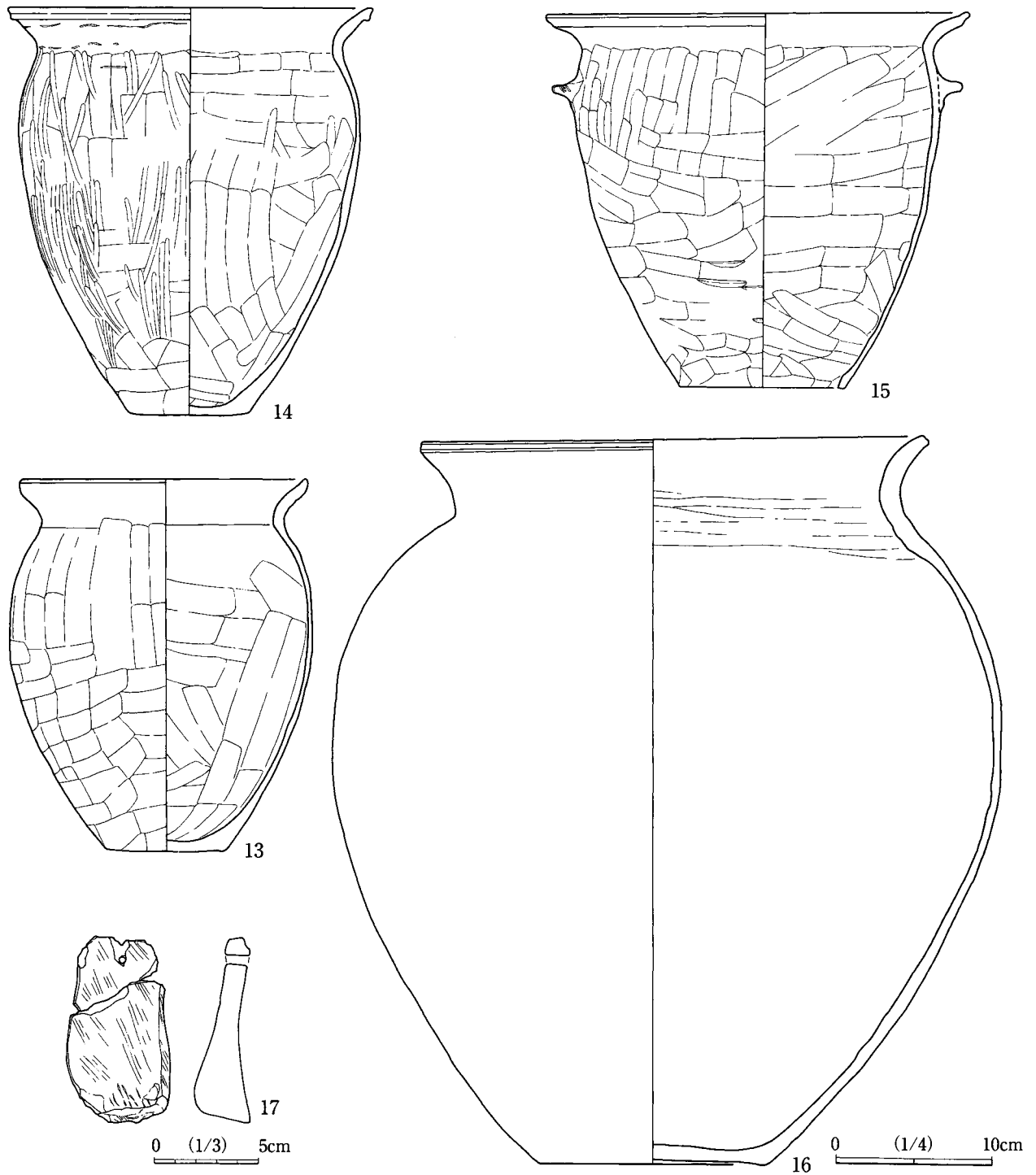
カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は125cmを測り、袖部は壁から40cm延びている。ハードローム粒子を多く含み、粘性の高い黄褐色土を基礎としてカマドを構築している。黄灰色砂質土を主体とする。

カマドに掛けられたような状態で土師器甕(13)の底部が出土している。また、カマド左袖前面から土





第155图 SI-059号实测图



第156図 SI-059号出土遺物実測図

師器甕（11）が、カマド右袖上から土師器坏（6）が出土している。

1は須恵器坏である。体部下位にやや丸味をもち、下端及び底部は手持ちヘラ削りである。2～5・7は土師器坏である。すべて平底で、体部は3・4が直線的に、2・5・7は内湾気味に立ち上がる。口縁部はヨコナデで、体部は横方向のヘラ削りである。5・7は内面に粗くヘラ磨きを施す。なお、5は口唇部内側が摩耗している。6はロクロ土師器坏である。体部下端にヘラ削りはなく、底部は全面不定方向の

ヘラ削りである。内面は体部を横、底部を放射状に丁寧に磨いている。

8～14・16は土師器甕である。8・9は底部破片で、ともに器壁が薄く、胴部は横方向にヘラ削りを施している。10～14は口径22cm前後のよく似た甕で、最大径は11が胴部上位に位置するが、他は口縁部にある。口縁部は受け口状を呈し、ヨコナデで整える。胴部は縦方向のヘラ削りで、底部近くで横方向のヘラ削りを施す。内面は横方向のヘラナデであるが、13・14は縦方向のヘラナデが目立つ。16は大形の甕で、口径33cm、器高46.5cmを測る。口縁部は外反し、口唇部は角頭状に納める。器面の状況が悪く調整は観察できない。15は土師器甕で、ほぼ完形である。最大径は口縁部にあり、口縁部の調整は甕とまったく変わらない。胴部は縦方向のヘラ削りであるが、かなり上位から横方向のヘラ削りを施している。内面は横方向のナデである。把手は横に広い三角形で、ナデ調整である。

17は凝灰岩製の砥石で、一端に孔がある。

第60表 SI-059号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	(12.2)	4.0	6.8	1/3	白色砂粒、長石(多)、スコリア	黄灰色	在地産	1.26.33.39
2	土師器 坏	11.9	4.3	5.8	完形	細砂粒、小石(1mm)、長石、スコリア	明褐色	底、一方にヘラケズリで六角形になっている	6
3	土師器 坏	11.7	4.1	5.8	完形	砂粒、小石(1mm)、長石(少)、スコリア	鈍い黄褐色+黒色	口縁丁寧にヨコナデしてある	7
4	土師器 坏	12.5	4.5	5.8	完形	砂粒、小石(2mm)、長石(少)	内、黒褐色一部黄褐色 外、鈍い黄褐色1/2黒色1/2	炭素吸着(内全体、外1/2)	1.9
5	土師器 坏	12.3	4.7	6.0	ほぼ完形	白色砂粒、小石、長石	赤褐色～黒褐色	内外、一部タール状のスス付着	32
6	ロクロ土師器 坏	(13.6)	4.6	7.2	底完形 体部1/4	白色砂粒(少)、小石、スコリア(少)	橙色～黒褐色	内、底部ミガキ放射状に密に有り	30
7	土師器 坏	(13.4)	4.2	6.0	1/3	白色砂粒、長石、スコリア	黒褐色	外、飛びカンナ風のヘラケズリ痕有り	23
8	土師器 甕	-	[6.2]	5.6	1/4	白色砂粒、長石、スコリア(少)	内、鈍い黄褐色 外、赤褐色～暗褐色	薄手な作り	1.20
9	土師器 甕	-	[4.9]	8.8	底部完形	白色砂粒、長石	赤褐色	器面ややざらつく	1.39
10	土師器 甕	22.8	[8.2]	-	口縁2/3	白色砂粒、白針、長石	鈍い赤褐色～黒褐色	頸部波状に歪み有り、輪轆み残る	1.4.5.31.35.37
11	土師器 甕	(22.5)	25.4	8.0	2/3	砂粒、長石、スコリア	鈍い褐色+黒色		29
12	土師器 甕	21.6	[18.4]	-	口縁3/4	白色砂粒、長石(少)、スコリア(多)	褐色～暗褐色	薄手な作り 胴部波打っている	1.17.21
13	土師器 甕	(18.4)	23.9	7.8	口縁一部 他2/3	砂粒、長石、石英	内、鈍い黄褐色 外、鈍い黄褐色+赤色+黒褐色	薄手な作り 底部と胴部に帯状にスス付着	1.34.35.39
14	土師器 甕	(23.4)	26.2	7.8	2/3	白色砂粒、長石、石英、スコリア	暗褐色～黒褐色	口縁波打っている 輪轆み残る	1.2.3.19
15	土師器 甕	27.2	25.3	10.6	ほぼ完形	白色砂粒、小石(1mm)、長石(少)、スコリア	鈍い赤褐色～暗褐色、一部黒色		21
16	土師器 甕	33.0	46.5	15.0	口縁1/2 他完形	白色砂粒、小石、長石、石英	鈍い黄褐色	内外、剥落著しい	1.22.23

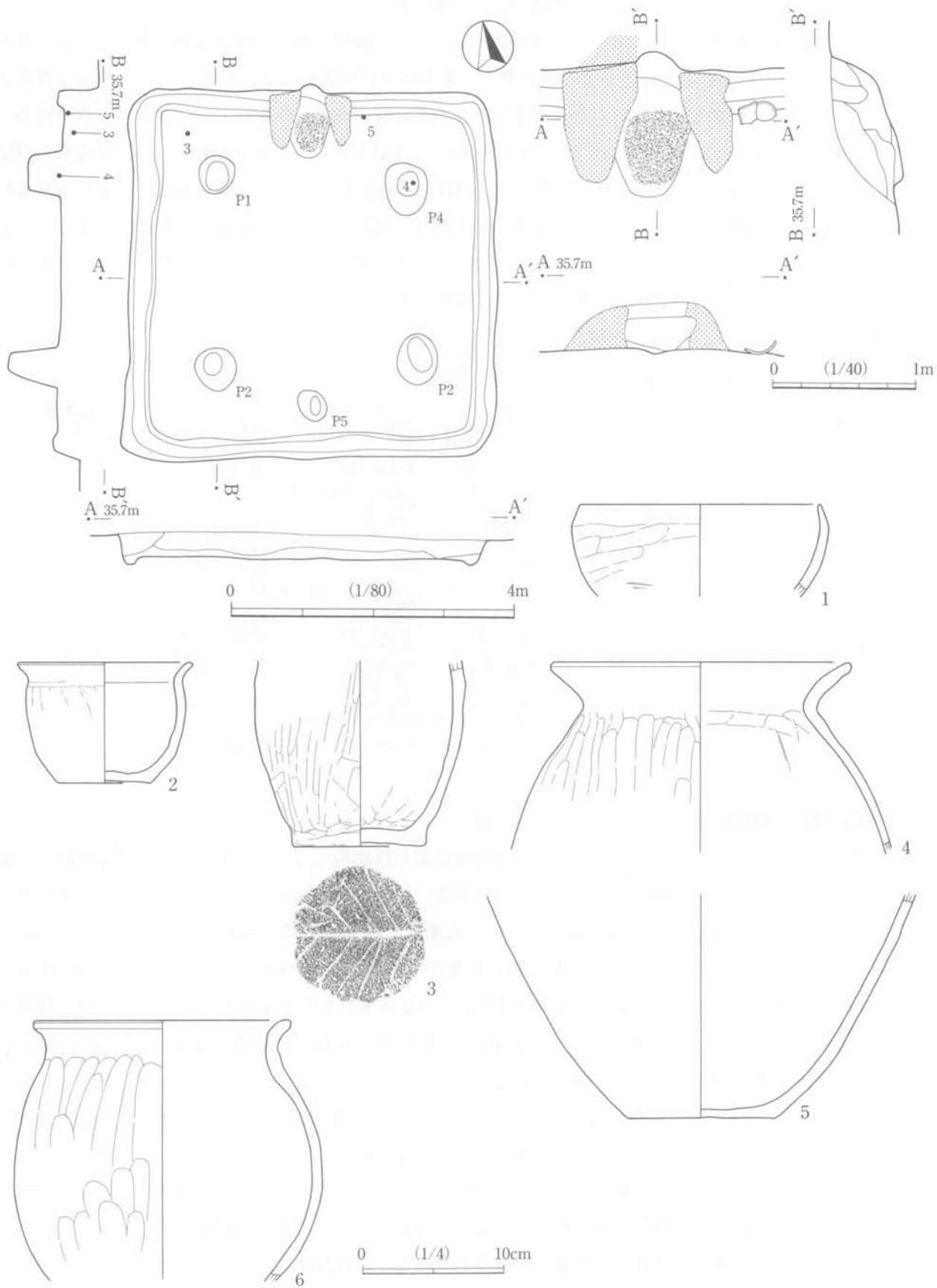
SI-060号竪穴住居跡 (第157図, 図版33, 34, 118)

本遺構はH4-38グリッド付近に位置し、台地南緩斜面の標高約35.7mに立地する。形態は方形で、規模は5.1m×5.1mを測る。主軸方位はN-10°-Eである。住居の掘込みははっきりとしている。確認面からの深さは、緩斜面に立地するため北東側で57cm、南東側で21cmを測る。主柱穴は対角線上に4基検出され、径50cm～75cmを測る。深さは北東の柱穴と南西の柱穴が深く70cm・74cmを測る。北西・南東は51cm・48cmを測る。主柱穴はいずれも住居の外側方向へ抜き取られた状況を呈する。カマドの反対側の壁際中央部には梯子ピットが1基検出され、径40cm、深さ33cmを測る。壁際には深さ3cm～9cmの壁溝が全周する。覆土はローム粒子を少量含む褐色土を主体とする。

カマドは北側の壁の中央に位置する。最大幅は120cmを測り、袖部は壁から80cm延びている灰黄褐色砂質土を主体とする。カマド右脇から土師器甕(5)が出土した。

1は土師器碗である。半球形の体部で口縁部が内傾する。口縁部はヨコナデ、体部は横方向のヘラ削りである。内面は横方向のヘラ磨きが施されているようであるが、器面が摩滅し観察しにくい。

2～6は土師器甕である。2は小形の甕でほぼ完形である。口縁部は外反しヨコナデで整え、胴部は縦方向のヘラ削り後ナデを施す。被熱したためか底部内面が剥落する。3も小形の甕であるが、調整は粗雑で、底部が突出する。胴部は縦方向のヘラ削りで、底部に木葉痕を残す。4～6はやや大形の甕で、4・



第157图 SI-060号实测图

6は口縁部が残っている。口縁部は6が外反し、4はく字状に開くが、ともに口唇部は丸く収める。胴部は縦方向のヘラ削りで、内面は横方向のヘラナデである。

第61表 SI-060号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 椀	(17.0)	[6.5]	—	1/3	混合物少ない、スコリア(少)	褐色	器面摩耗	1
2	土師器 甕	12.4	8.5	6.6	ほぼ完形	白色砂粒、白針、長石(少)	鈍い黄褐色	内外、剥落著しい	1
3	土師器 甕	—	[13.0]	9.5	1/4	白色砂粒(多)、白針、長石(多)、石英、スコリア	明褐色～灰黄褐色	底部木葉痕	1.6
4	土師器 甕	21.0	[13.4]	—	1/4	白色砂粒、白針(多)、長石(多)、スコリア	明褐色+黒褐色	外、口縁部スス付着し剥落著しい	1.3
5	土師器 甕	—	[15.7]	10.2	底部完形	砂粒、長石、スコリア	鈍い黄褐色	内外、器面剥落著しい	4
6	土師器 甕	18.0	[18.5]	—	1/3	白色砂粒(多)、白針、長石、石英	明赤褐色+黒色	黒斑一箇所	1

SI-061号竪穴住居跡 (第158, 159図, 図版118, 119)

本遺構はI3-25グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約36.7mに立地する。北東壁からカマドを含む位置でSI-075号竪穴住居跡と重複し、南東壁の一部でSI-083号竪穴住居跡と重複している。土層断面の観察から、本住居はSI-075号に先行し、またSI-083号が先行する。形態は方形で、規模は5.5m×5.3mを測る。主軸方向はN-25°-Eである。壁はやや外方へ開いて立ち上がり、確認面からの深さは53cm～73cmを測る。柱穴は住居対角線上に4基確認でき、直径60cm～80cm、深さはカマド側が56cm、58cmであるのに対し、カマドの反対側に位置する2基は80cm、73cmと深い。また、カマドに対する南東壁際中央に梯子ピットが検出された。規模は長軸長32cm、深さ27cmである。その他、カマド前面に直径約10cmの小ピットが2基近接して検出されたが用途は不明である。壁溝は深さ2cm～6cmでカマド部分も含めて全周している。覆土は全体的にローム粒を含む。

カマドは北東壁中央に位置しているが、床面に火床部の掘込みが残されるだけで、SI-075号竪穴住居跡に大きく破壊されている。火床部の掘込みは幅80cmで、煙道部の掘込みも明確ではない。なお、カマド右側に山砂が堆積しているが、カマド袖部の痕跡と判断できる。

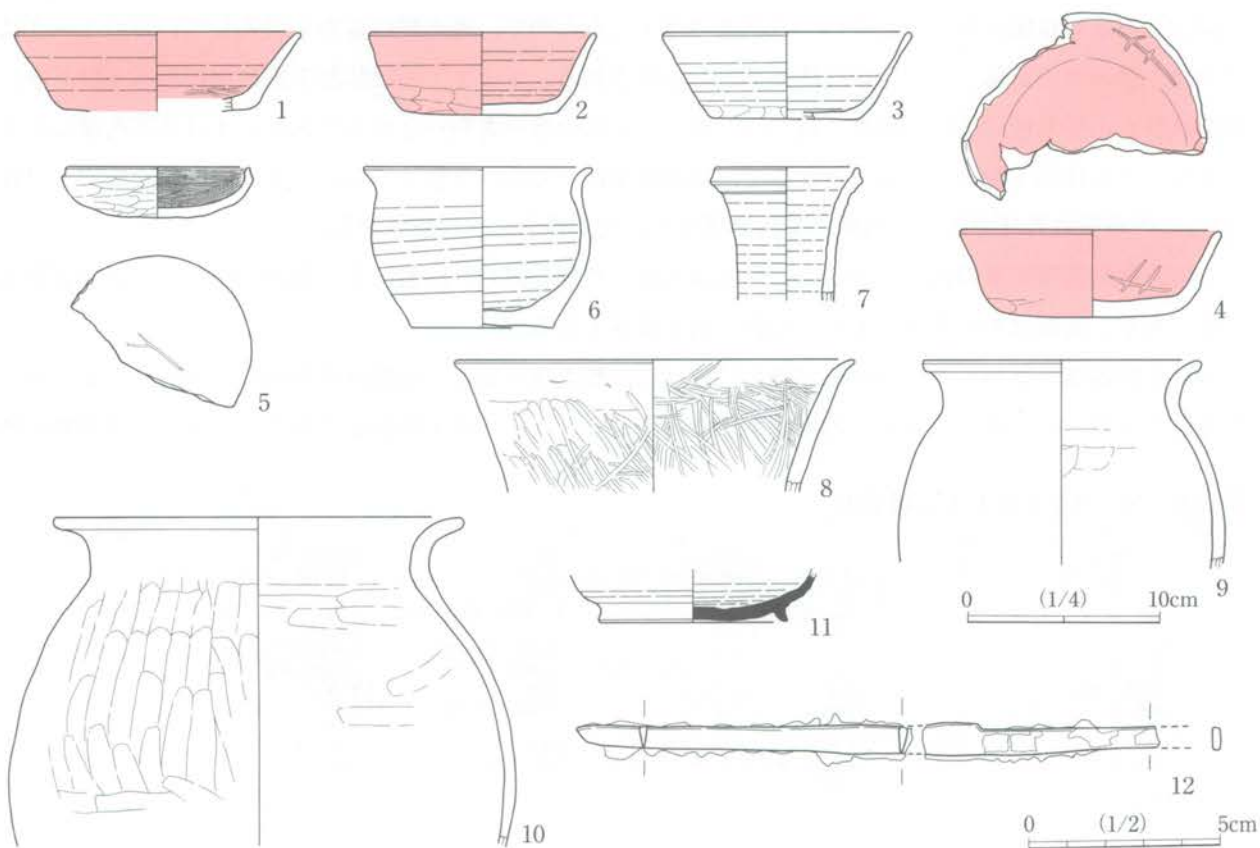
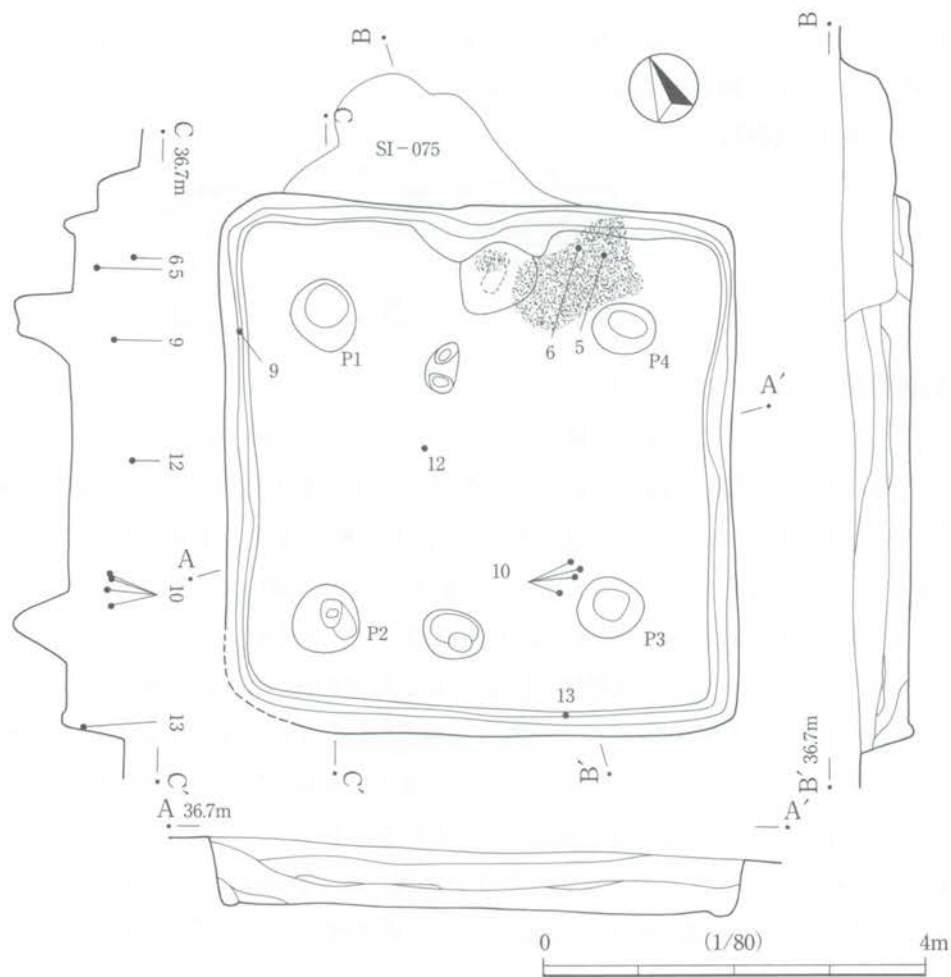
図示した遺物は床面からかなり浮いた状態で出土したもので、鬼高期の遺物も混入している。1～4はロクロ土師器坏である。3を除いて内外面とも赤彩される。1・2・4は体部下端に手持ちヘラ削りを、底部は静止糸切り後、2は周縁部手持ちヘラ削り、4は全面一方向ヘラ削りである。4は体部内面に線刻がある。3も体部下端は手持ちヘラ削りで、底部は全面一方向ヘラ削りである。5は鬼高期の坏で、口径約10cmの小振りの坏である。内面は黒色処理され、底部外面にヘラ描きがある。

7は灰釉陶器長頸瓶の破片である。口唇部は断面三角形を呈し、内面によく釉がかかる。11は須恵器高台坏である。底部はやや丸味をもち、高台と同じ高さとなる。

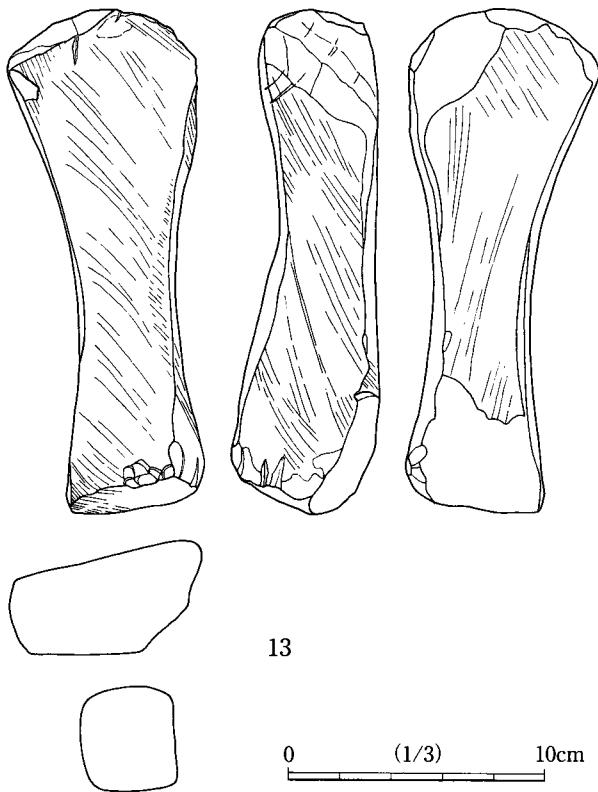
8は土師器甕と思われる。口縁部は僅かに外反し、最大径となる。胴部は縦方向のヘラ削りであるが、内外面とも粗いヘラ磨きを施す。内面は黒色である。6・9・10は土師器甕である。6はロクロ調整の甕

第62表 SI-061号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	ロクロ土師器 坏	(15.0)	[4.1]	(10.0)	1/5	混合物なし	赤色	内外面全面赤彩	1
2	ロクロ土師器 坏	12.0	4.3	8.0	ほぼ完形	砂粒、長石(少)、スコリア(少)	鈍い褐色	口縁部摩滅 内外、赤彩	1
3	ロクロ土師器 坏	(13.0)	4.5	(7.8)	1/4	スコリア	鈍い褐色	器面なめらか	1
4	土師器 坏	(13.6)	4.5	9.0	口縁一部 底部1/2	砂粒、長石(少)、小石(1mm)	鈍い黄褐色～赤褐色+黒色	内面線刻有り、底部タール付着 内外、赤彩	1
5	土師器 坏	(9.6)	2.7	丸	1/2	微砂粒、スコリア	内、黒色 外、鈍い黄色	内、黒色処理 外、線刻有り	24
6	土師器 甕	12.0	8.4	7.6	完形	白色砂粒、白針、長石、石英(少)	鈍い褐色	底部無調整、硬質	23
7	灰釉陶器 長頸瓶	(8.0)	[7.0]	—	口縁1/4	混合物なし	黄灰色	自然釉かかる	1
8	土師器 甕	(21.0)	[6.9]	—	口縁1/5	白色粒、スコリア	内、黒色 外、鈍い褐色	ランダムにミガキ 外、ヘラケズリ後ミガキ	1
9	土師器 甕	(14.4)	[8.0]	—	1/3	白色粒、石英粒、スコリア	明褐色	外、剥落が著しい	1.18
10	土師器 甕	(21.5)	[17.5]	—	口縁完形 胴上～胴央1/2	白色砂粒、スコリア、長石、石英(少)	明褐色+赤色	器面若干摩耗	1.4.5.11.12
11	須恵器 高台付坏	—	[2.7]	10.0	底部1/2	微砂粒、スコリア(少)	灰色	浜西産 器面なめらか	14



第158图 SI-061号实测图



で、内外面ともロクロナデである。底部は回転糸切り無調整である。

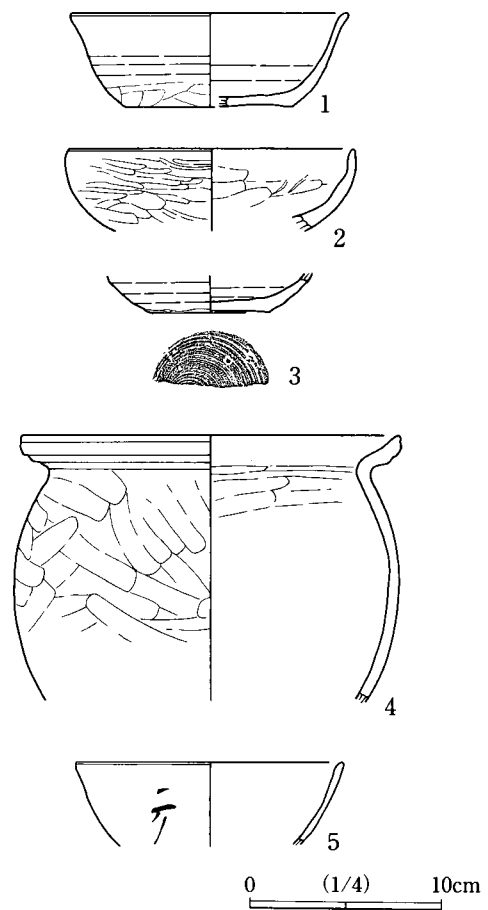
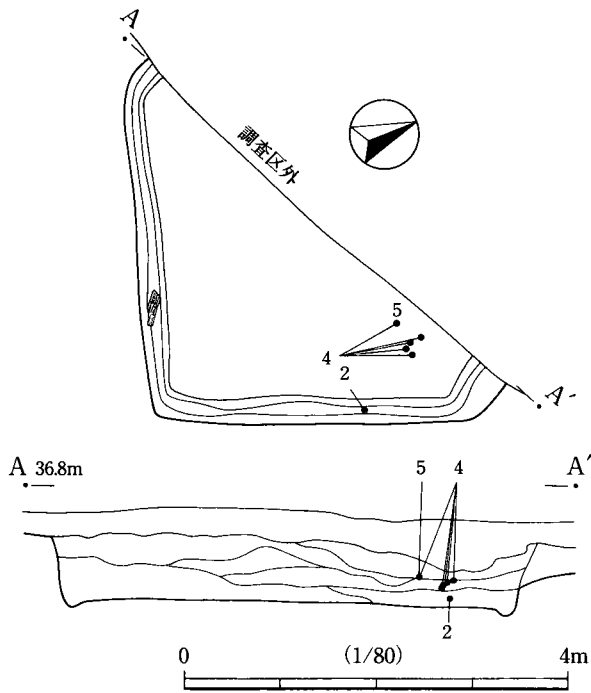
9・10は鬼高期の甕で、ともに口唇部を丸く収める。9は器面遺存状況が悪く、調整は不鮮明であるが、胴部に横方向のヘラ削りを施す。10は胴部上半に縦方向、下半に横方向のヘラ削りを施している。

12は刀子で、木質が残る。13は砂岩製の砥石である。

**SI-062号竪穴住居跡 (第160図, 図版119)**

本遺構はH3-76グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約36.0mに立地する。住居北西側の約1/2は事業範囲外に当たり未調査である。形態は方形と想定でき、規模は南北方向で3.9mを測る。主柱穴及びカマドは確認できず、調査範囲内の壁際に深さ5cm~10cmの

第159図 SI-061号出土遺物実測図



第160図 SI-062号実測図

壁溝が巡っている。確認面からの深さは53cm～56cmで、床面は北に向かって僅かに低くなっている。覆土は全体的にローム粒・ロームブロックが混入し、床面に近いほどロームブロックの混入が多くなる。遺物は北東コーナー近くに集中し、北壁にカマドが位置していた可能性を示唆している。

1・3・5はロクロ土師器坏である。1は体部下端に手持ちヘラ削りを、底部は回転糸切り後、一方向ヘラ削りである。3は体部下端にヘラ削りはなく、底部は回転糸切り無調整である。5は体部外面に墨書され、釈文は不明であるが、2文字とみられる。2は丸底の土師器坏である。体部外面は横方向のヘラ削りで、外面に粗くヘラ磨きを加える。4は土師器甕である。口縁部は受け口状を呈し、胴部は横方向から斜め方向のヘラ削り後、ナデで消している。

第63表 SI-062号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	ロクロ土師器 坏	(14.4)	4.9	(8.6)	1/3	白色砂粒、長石	内、赤褐色～暗褐色 外、鈍い褐色～灰黄褐色	内、剥落著しい	1
2	土師器 坏	(14.8)	[4.3]	—	1/4	白色粒、長石	鈍い赤褐色	外、一部炭素吸着	2
3	土師器 坏	—	[2.0]	(6.2)	底部1/2	砂粒	鈍い黄色	底部回転糸切り	1
4	土師器 甕	19.8	[13.8]	—	1/2	白色砂粒、スコリア、長石、石英(少)	鈍い赤褐色～黒褐色	外、口縁部と胴部剥落著しい	1.6.9.10.34
5	土師器 坏	(14.0)	[4.5]	—	口縁1/6	白色砂粒、小石、長石	鈍い黄褐色	体部墨書「□□」	6

### SI-063号竪穴住居跡（第161図，図版34,119）

本遺構はI4-44グリッド付近に位置し、東側台地の中央付近、標高約36.5mに立地している。本遺構の大部分はSI-064号竪穴住居跡と重複し、SI-064号竪穴住居跡の覆土中に床面が構築されている。形態は不明であるが、この時期の竪穴住居跡として方形が考えられ、北壁長は3.5m、主軸長も覆土の観察から3.4m前後と推定できる。主軸方向はN-2°-Wである。壁の立ち上がりはSI-064号竪穴住居跡と重複しない北東コーナー付近で約15cm認められるが、他の部分では明確な壁を検出することはできなかった。柱穴はなく、北東コーナーから住居中央にかけて硬化面が認められた。また、東壁際中央に焼土が堆積している。

カマドは北壁中央に僅かな張り出しが認められることと、その付近に山砂が堆積していることから、北壁中央に位置していた可能性が高い。

1はロクロ土師器坏である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、体部下端は手持ちヘラ削り、底部は回転糸切り無調整である。2は須恵器高台付坏である。底部内面がかなり摩耗し、転用硯と考えられる。

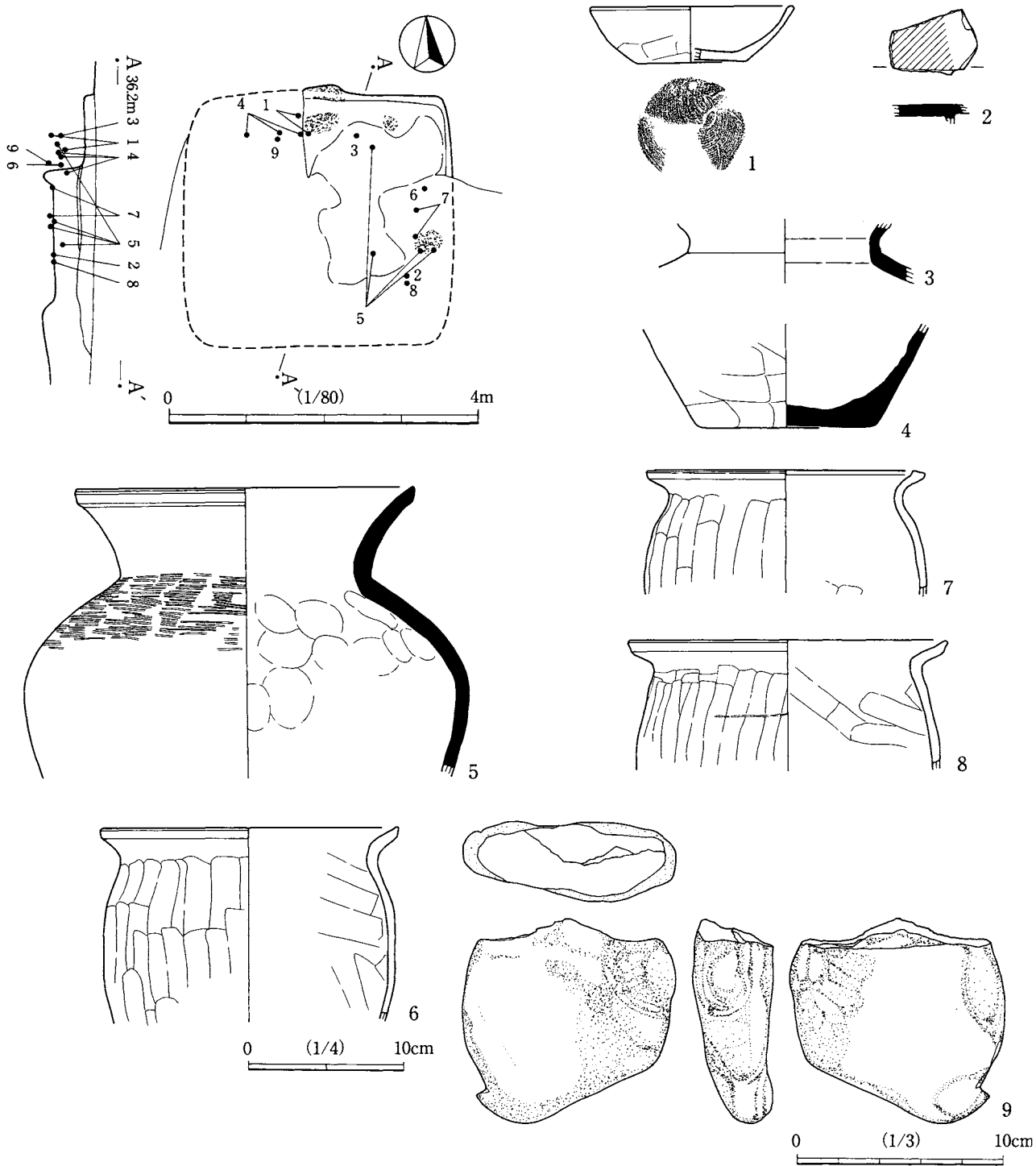
3～5は須恵器甕である。5は広口の甕で、胴部は横位の叩きである。4は底部破片で、外面に横方向のヘラ削りを施す。内面には暗褐色の付着物があり、器面も斑点状に剥落している。6～8は土師器甕である。口唇部は受け口状を呈するが、7は端部が内側へ張り出す。胴部は縦方向のヘラ削りである。

9はチャートの礫である。

第64表 SI-063号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	ロクロ土師器 坏	13.2	3.6	7.0	1/3	白色砂粒、長石、石英(少)	内、赤褐色 外、鈍い褐色～褐灰色	底部回転糸切り	1.6.16
2	須恵器 高台付坏	—	—	—	底部片	長石、スコリア	灰色	転用硯	23
3	須恵器 甕	—	[2.5]	—	頸部1/4	白色粒、スコリア	緑灰色	内外、ナデ	36
4	須恵器 甕	—	[6.4]	(11.5)	底部1/2	砂粒、小石(1～5mm)、長石(多)、石英(多)	内、褐灰色 外、暗赤褐色	在地産 内、デコボコに剥落	3.4.5
5	須恵器 甕	22.0	[18.7]	—	口縁1/2	雲母(多)、スコリア、長石、石英	黄灰色	常陸新治産産	10.24.32.38.66
6	土師器 甕	(19.3)	[18.8]	—	口縁～胴部1/4	石英、スコリア、小石(1mm～2mm)、長石	赤褐色	外、頸部煤付着	13
7	土師器 甕	(18.0)	[8.0]	—	1/5	白色砂粒、黄土粒、長石(少)	赤褐色一部黒色	外、胴上部スス付着有り	1.27.35
8	土師器 甕	(20.6)	[10.0]	—	1/5	白色砂粒、黄土粒、長石	赤褐色	内、砂粒状の付着物有り	1.19

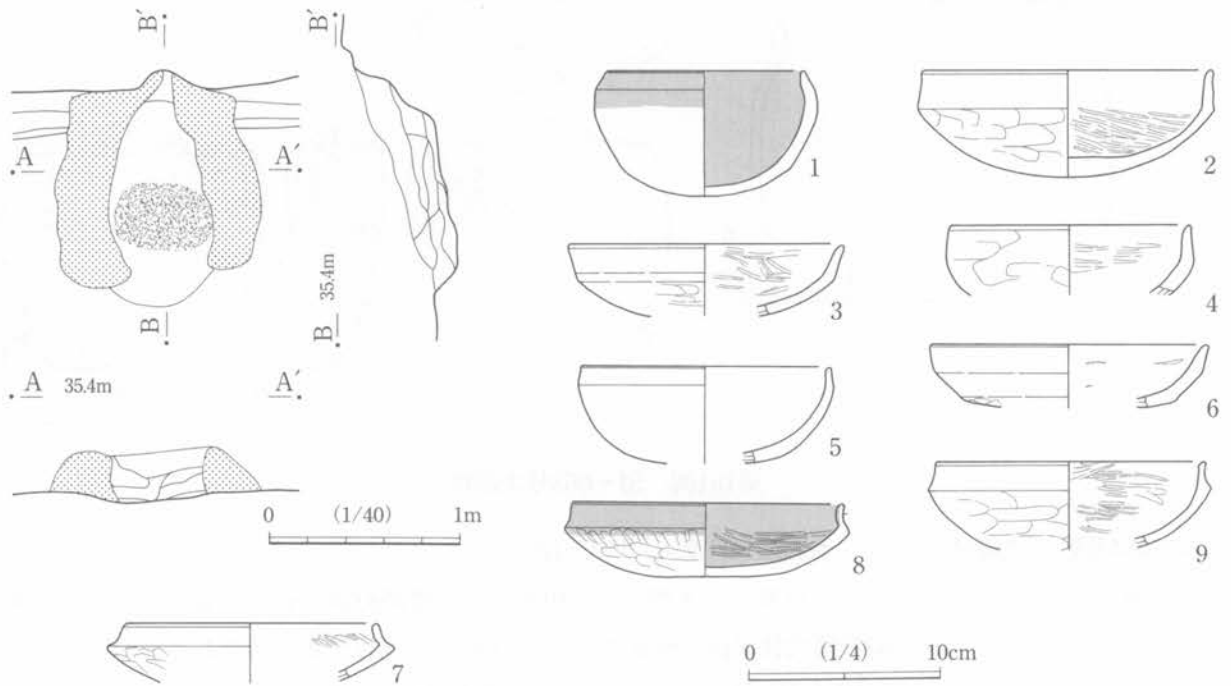
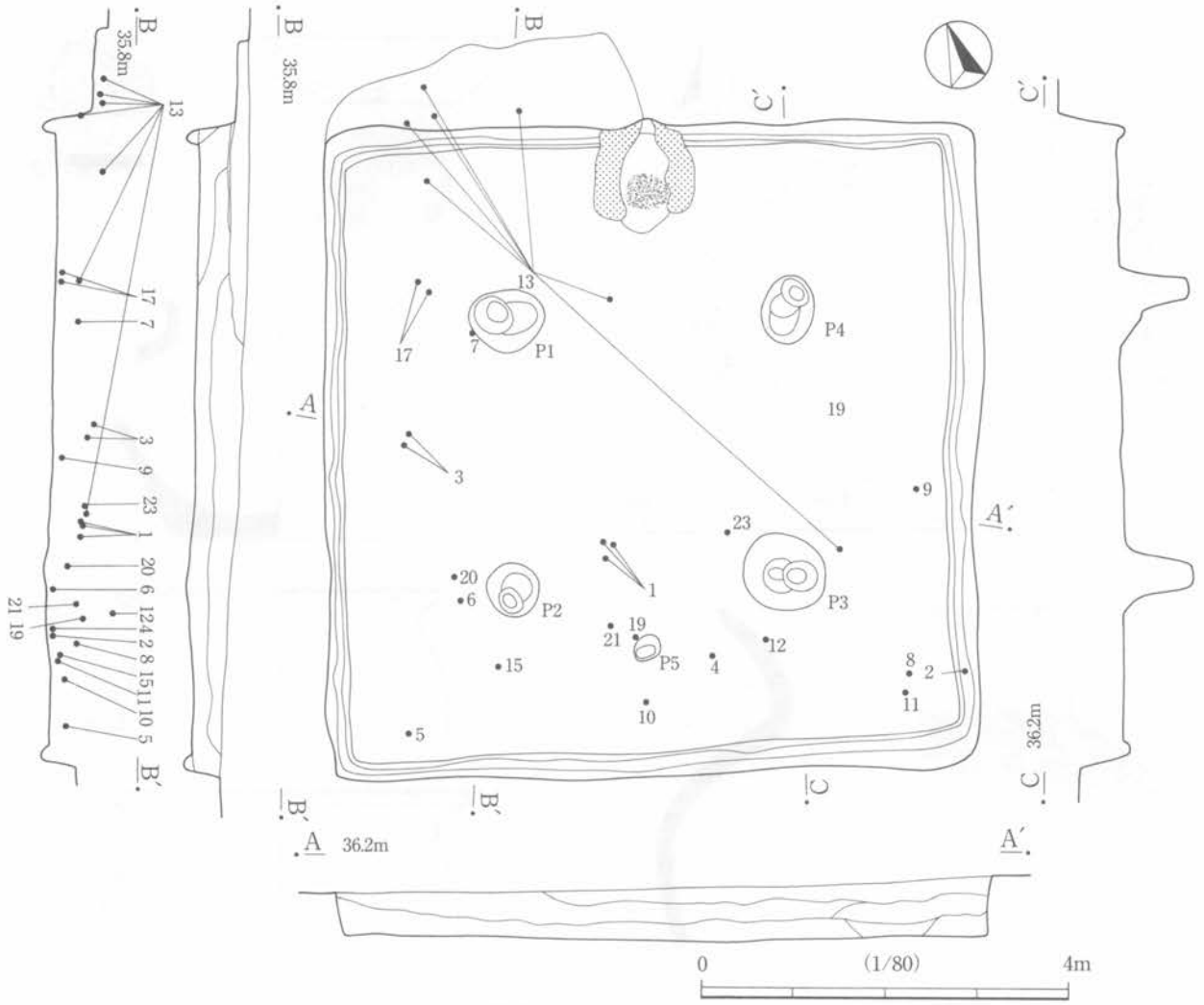




第161図 SI-063号実測図

SI-064号竪穴住居跡 (第162, 163図, 図版34, 119, 120)

本遺構はI4-43グリッド付近に位置し、東側台地の中央付近、標高約36.4mに立地している。北東コーナー付近の覆土中にSI-063号竪穴住居跡が構築され、SI-063号に先行する住居である。形態は方形で、規模は7.1m×7.1mを測る。主軸方向はN-15°-Eである。確認面からの深さは30cm~60cmで、カマド下を除いて深さ4cm~11cmの壁溝が巡っている。主柱穴は住居対角線上に4基検出され、直径は南東コ



第162图 SI-064号实测图

一ナー付近のものが最大で80cmを測る。なお、4基とも40cm前後の深さのところにテラス状の平坦な部分があるが、抜き取り痕とは考えにくい。またカマドに対する南壁際に梯子ピットが検出された。直径26cm、深さ33cmで、床面から壁に向かってやや斜めに掘り込まれている。覆土は全体にローム粒を多く含む。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅105cm、袖は壁から80cm延びている。構築材は灰黄色砂質土を主体とし、火床部底面に僅かに焼土と灰を含む土層が堆積している。煙道部の張り出しは少なく、壁外へ10cm程度の張り出しがあり、煙道は緩やかに立ち上がる。

SI-063号と重複するため、平安期の遺物も混入している。1は土師器碗である。半球形で、口縁部は内傾する。口縁部はヨコナデで、体部は横方向のヘラ削りのようであるが、内外面とも横方向のヘラ磨きを施し、ヘラ削り痕はほとんど観察できない。内面は黒色処理している。2～9は土師器坏である。2・3・6は蓋模倣の坏で、口縁部下に稜が巡る。口縁部はヨコナデで、体部は横方向のヘラ削りである。2・3は内外面ともヘラ磨きを、6は内面ヘラ磨きである。7～9は身模倣の坏で、7が最も受け部をよく表現している。口縁部は短くヨコナデで整え、底部は横方向のヘラ削りであるが、7・8は横方向のヘラ磨きを施して、ヘラ削り痕は不鮮明である。内面は横方向のヘラ磨きである。4・5は体部に丸味をもち、口縁部は僅かに内傾する。体部は横方向のヘラ削りで、4は内面に横方向のヘラ磨きを施している。

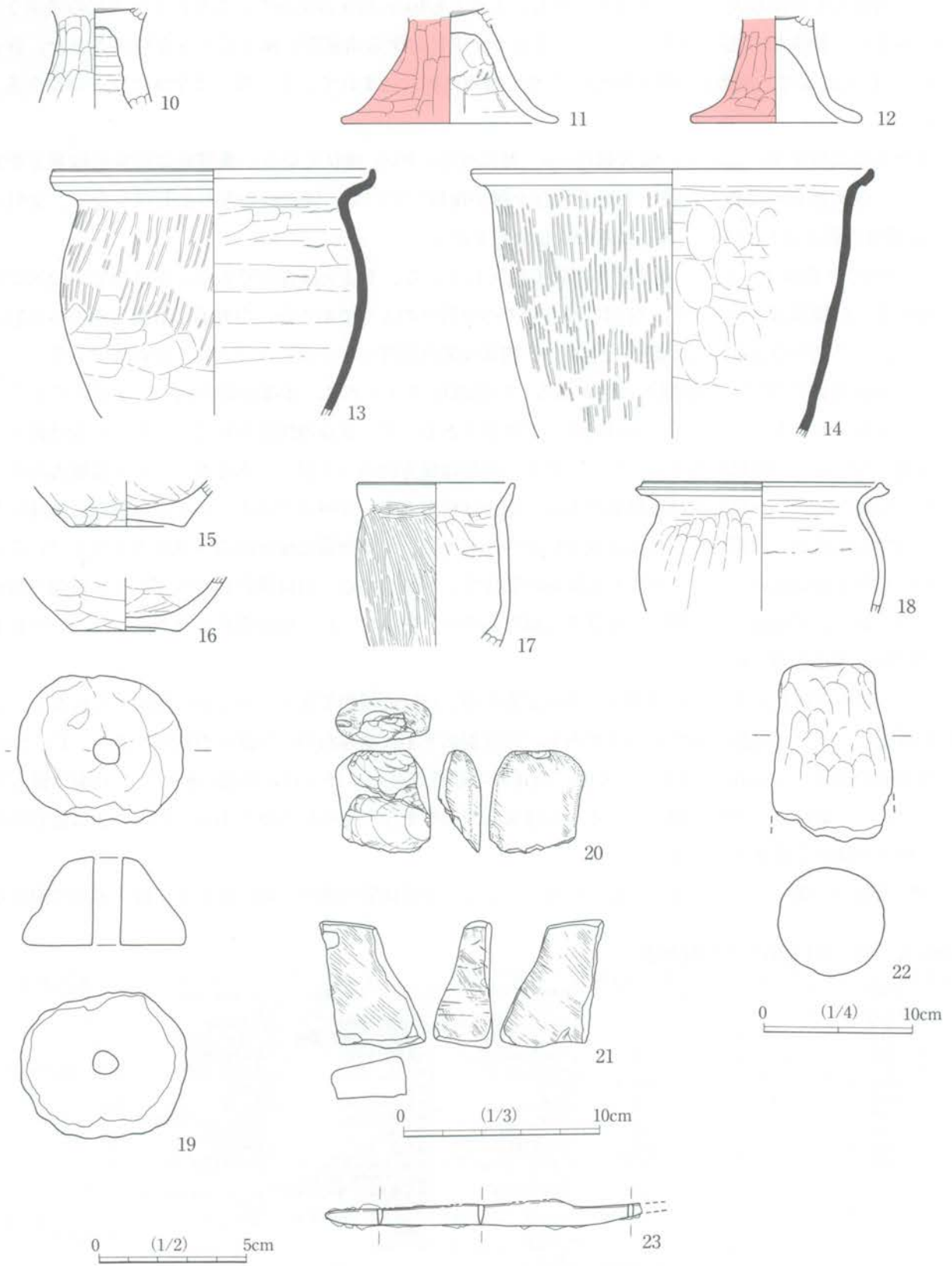
10～12は土師器高坏である。いずれも脚部の破片で、短脚である。11は接合部からそのまま裾部へ向かって開くが、12は裾部で外へ開く。脚柱部は縦方向のヘラ削りで、11・12は赤彩される。また、いずれも坏部内面は黒色処理される。

13・14は須恵器甕である。13は胴部に丸味があるが、14は直線的であり、あるいは甑かもしれない。口縁部は受け口状で、胴部は縦位の叩きである。13は胴部下半に横方向のヘラ削りが観察できる。15～18は土師器甕である。18はH-063号-8と同一個体の可能性が高い。15・16は底部の破片で、外面は横方向のヘラ削り、底部は一方向に削っている。17は筒状の器形を呈する小形の甕である。胴部外面は縦方向のヘラ磨きが細かく施されている。

19は土製の紡錘具で、表面はヘラ磨きを施している。20は砂岩の礫の一端に簡単な剥離で刃部を形成し

第65表 SI-064号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(10.5)	6.5	丸	1/3	微砂粒、スコリア	内、灰褐色 外、鈍い黄褐色	(内) 全面(外) 口縁迄黒色処理(漆)	1.22.23.26
2	土師器 坏	15.2	5.5	丸	3/4	粗砂粒、小石(1mm)、長石(少)	鈍い赤褐色～黒褐色	内外、炭素吸着	55
3	土師器 坏	(14.5)	[3.8]	—	1/3	白色砂粒、白針、長石	内、鈍い褐色 外、暗褐色一部赤色	外、火出ダスキ痕有り	1.7.8
4	土師器 坏	12.7	[3.7]	—	口縁1/2	白色砂粒、長石、スコリア	灰黄褐色～黒褐色	口縁部摩滅箇所多し	1.56
5	土師器 坏	13.2	[6.0]	—	1/2	白色砂粒、長石、石英	鈍い褐色	口唇部磨滅 外面摩耗	SI063-1、SI064-1.2
6	土師器 坏	(14.5)	[3.2]	—	口縁1/4	微砂粒	橙色	やや軟質	67
7	土師器 坏	(13.4)	[3.2]	—	口縁1/4	微砂粒	褐灰色～鈍い黄褐色	軟質な土器	73
8	土師器 坏	14.3	4.1	—	1/3	微砂粒	鈍い黄褐色～褐色	(内) 全面、(外) 口縁迄黒色処理	35
9	土師器 坏	(14.1)	[4.6]	—	口縁1/4	スコリア、白色粒、長石	鈍い黄褐色	内外、炭素吸着	64
10	土師器 高坏	—	[6.8]	—	胴部1/2	白色砂粒、長石(少)	暗赤褐色+黒色	坏部黒色処理	18
11	土師器 高坏	—	[7.7]	14.8	脚部3/4	白色砂粒、小石(1mm)、長石、スコリア	内、鈍い黄褐色～黒褐色 坏内、黒色 外、赤褐色～鈍い褐色	坏部(内) 黒色処理 脚部(外) 赤彩	36
12	土師器 高坏	—	[7.1]	—	脚部3/4	白色砂粒、長石、石英	脚内、明赤褐色 脚外、赤褐色 坏内、黒色	坏部(内) 黒色処理(吸炭) 脚部(外) 赤彩	1
13	須恵器 甕	(21.8)	[16.6]	—	1/4	白色砂粒、小石(1mm)、長石(多)、石英	内、明赤褐色～黒褐色 外、褐色～黒褐色	内、輪積み痕残る	SI-063 1.2.37.39.40 SI-064 34.79
14	土師器 甑	(27.2)	[18.1]	—	1/6	白色砂粒、小石(1mm)、長石(多)、スコリア	褐色～暗褐色	内、無文の当て痕有り	1.71
15	土師器 甕	—	[3.1]	7.8	底部完形	白色砂粒、長石、スコリア	内、鈍い褐色 外、明褐色+黒色	底部境目に鋭利な沈線4箇所有り	10
16	土師器 甕	—	[3.6]	7.2	底部完形	白色砂粒、小石(2mm)、長石(少)	内、黒褐色 外、鈍い赤褐色	外面若干剥落している	1
17	土師器 甕	10.8	[10.0]	—	底部欠 他2/3	白色砂粒、黄土粒、長石	明赤褐色	内、剥落有り	1.75.76
18	土師器 甕	(17.0)	[8.8]	—	1/6	白色砂粒、白針、長石	褐色	内、輪積み痕残る	1



第163図 SI-064号出土遺物実測図

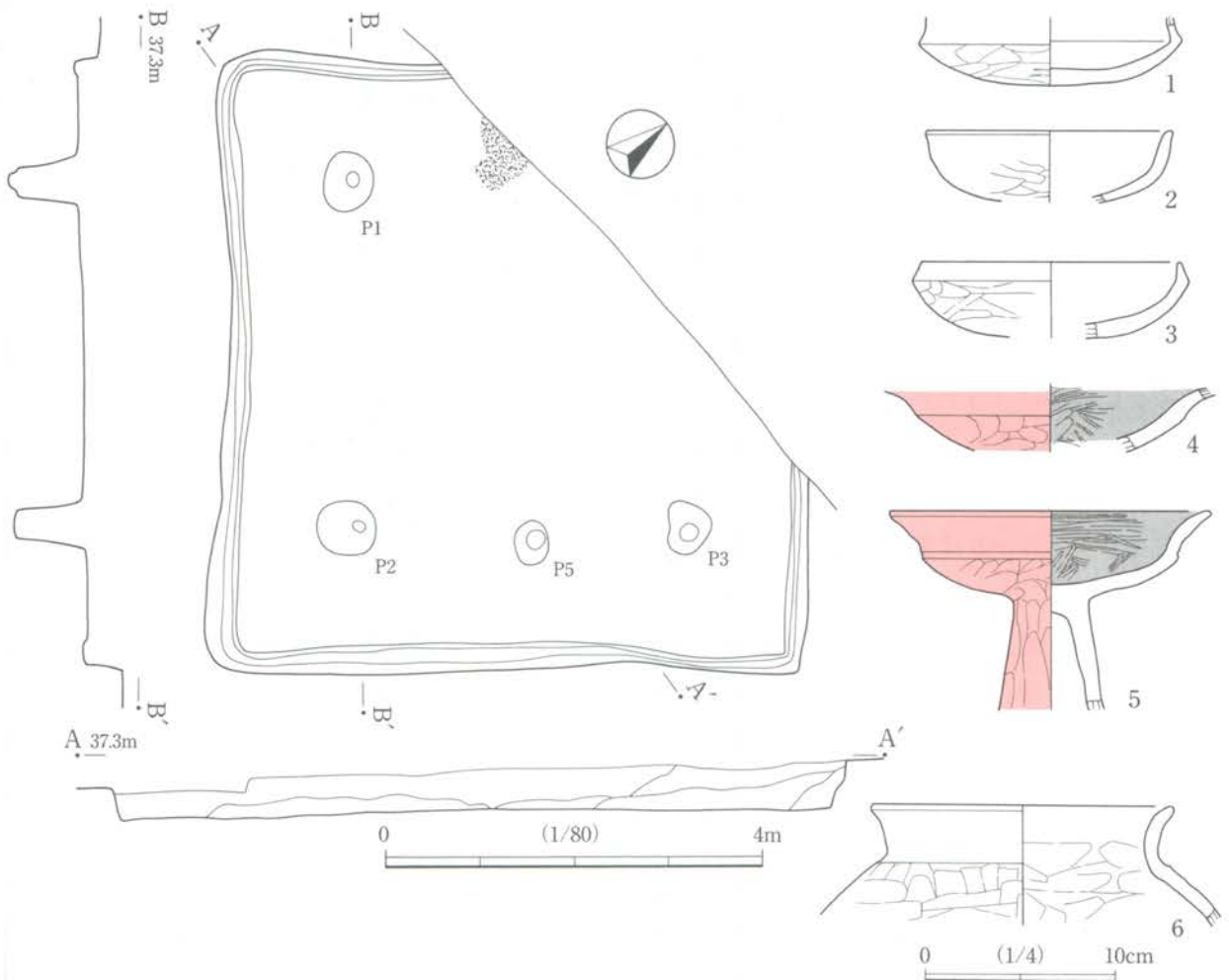
ている。縄文時代の石器であろうか。21は砂岩製砥石で、側面に幅1mm以下の細い擦痕がある。22は土製支脚である。23は刀子である。

SI-065号竪穴住居跡 (第164図, 図版120)

本遺構はK2-30グリッド付近に位置し, 東側台地の中央部, 標高約37mに立地している。住居北コーナー付近は事業範囲外に当たり, 未調査である。また, 住居中央から北コーナーにかかる部分にSK-051号土坑が重複しているが, これは床面まで達していない。形態は方形で, 規模は6.4m×6.4mである。主軸方向はN-61°-Wである。確認面からの深さは13cm~35cmで, 台地の傾斜に伴って北側が深くなっている。支柱穴は住居対角線上に3基検出され, 北コーナーの柱穴も調査範囲外に存在するものと思われる。規模は直径50cm~60cm, 深さ66cm~77cmで垂直に掘られている。また, カマドに対するP2とP3の中間に梯子ピットが存在し, 直径40cm, 深さ59cmを測る。検出した壁際には深さ4cm~6cmの壁溝が巡り, おそらく全周していたものと思われる。覆土は全体にローム粒を多く含み, 東コーナー付近では床面近くに大粒のロームブロックを多く含む土層が堆積している。

カマドは北西壁中央に位置しており, 袖の一部と考えられる山砂が厚さ約20cmで堆積している。

1~3は土師器坏である。1・3は身模倣の坏で, 口縁部は短く内傾し, ヨコナデで整える。体部は横方向のヘラ削りで, 1はさらにナデている。1は内外面とも赤彩される。2は口縁部と体部の境に明確な稜がなく, 全体的に丸味がある。口縁部はヨコナデで, 体部は横方向の不定なヘラ削りである。4・5は土師器高坏である。口縁部は外反し, 坏底部との境に明瞭な稜がある。坏底部は横方向のヘラ削りで, 5



第164図 SI-065号実測図

はさらにナデている。脚部は縦方向のヘラ削りで、内面も丁寧にナデている。ともに外面は赤彩され、坏部内面は黒色処理される。

6は土師器甕の破片である。口縁部は外反し、口唇部を丸く収める。胴部は縦方向のヘラ削りの上に横方向のヘラ削りを施している。内面は横方向のヘラナデである。

第66表 SI-065号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	-	[3.6]	丸	口唇部欠 他1/2	砂粒、長石(多)、石英(少)	赤褐色～暗褐色	外、底辺部に帯状にスス附着	6
2	土師器 坏	(13.0)	-	-	口縁1/4	砂粒、長石	赤褐色、黒褐色	器面荒れている	65
3	土師器 坏	(13.6)	4.1	丸	1/3	白色砂粒、黒色粒、長石(多)、石英	褐色	外、ヘラケズリ	1
4	土師器 高坏	-	[3.4]	-	坏部1/2	白色砂粒、長石	内、黒色 外、鈍い赤褐色	内、黒色処理、ミガキ 外、赤彩、ヘラケズリ	1
5	土師器 高坏	(16.9)	[10.5]	-	1/3	白色砂粒、長石、石英	内、黒色 外、赤褐色	内、黒色処理(吸炭)、ミガキ 外、赤彩	1
6	土師器 甕	(16.0)	[6.3]	-	口縁1/4	長石	内、黒色 外、黒褐色	内、炭素吸着	2

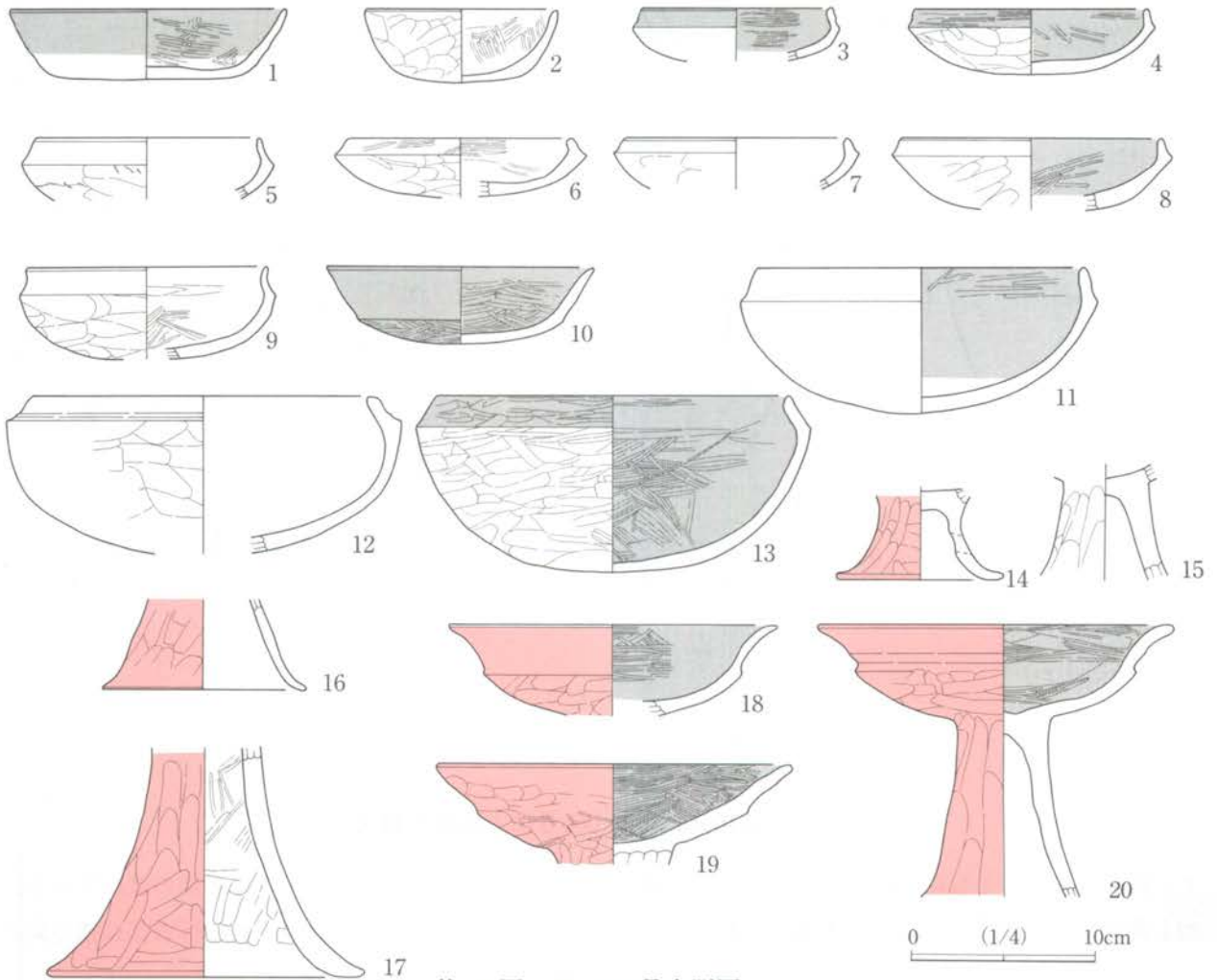
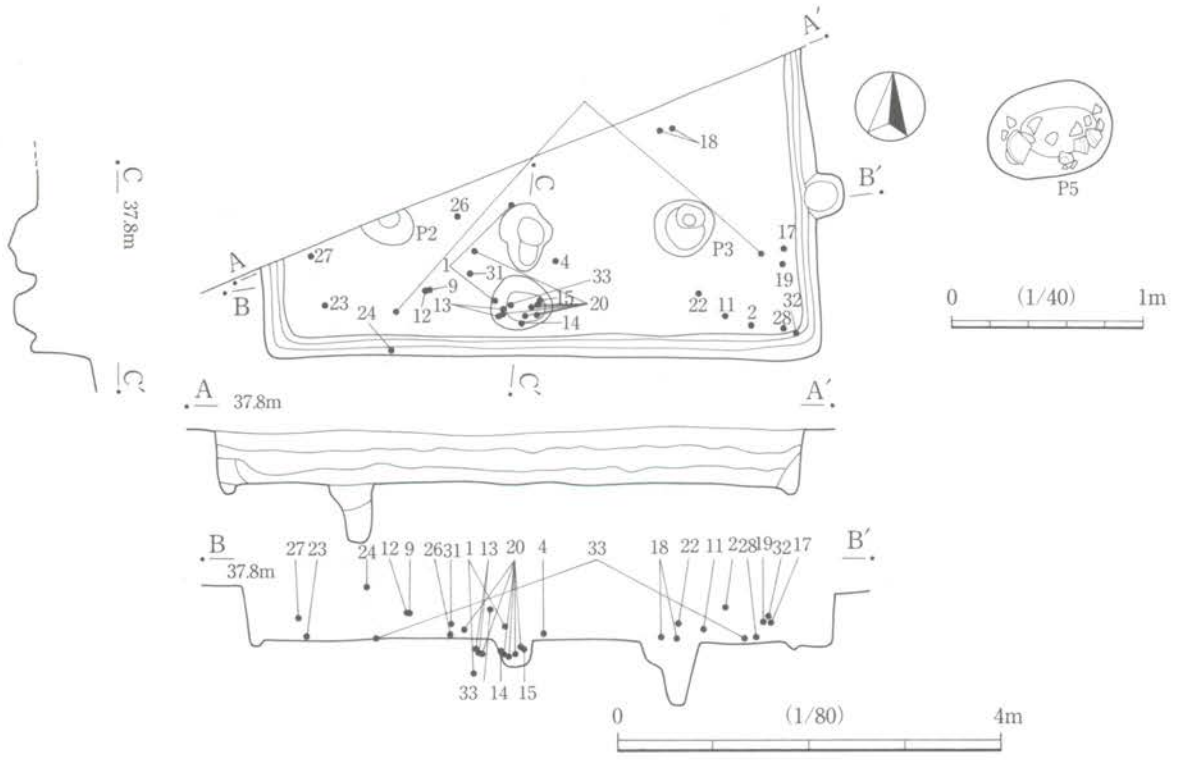
SI-066号竪穴住居跡 (第165, 166図, 図版35, 120)

本遺構はL1-71グリッド付近に位置し、東側台地の北側縁辺部、標高約37mに立地する。形態は方形と考えられ、住居北側半分は事業範囲外に当たるため未調査である。規模は東西5.8m、主軸方向は3.2mまで確認している。主軸方向はN-6°-Wである。住居の掘込みは明確で、確認面から54cm～62cmの深さがあり、壁も垂直に立ち上がる。主柱穴はカマドに対する南壁にそって2基検出され、直径はP3が60cm、深さ64cm～68cmである。また、主柱穴P2・P3の中間に梯子ピットがあり、主軸方向に長軸をとり、長軸長68cm、短軸長56cmで床面から約20cmの深さがある。さらに梯子ピットの外側に円形のピットが並んで位置し、直径約60cm、深さ約20cmを測る。なお、このピットからは第165図20の高坏をはじめとした土器が出土しており、出入り口部に設置された貯蔵穴的性格が考慮される。検出した壁際には深さ2cm～8cmの壁溝が巡っている。覆土は全体にローム粒・ロームブロックを含み、水平に堆積する。

カマドは検出されていないが、おそらく北壁に位置していたと考えられる。遺物は多く、先述のP5及びその周辺から住居南東コーナーにかけて集中している。P5からは土師器坏(13)、土師器高坏(20)(14)が出土した。

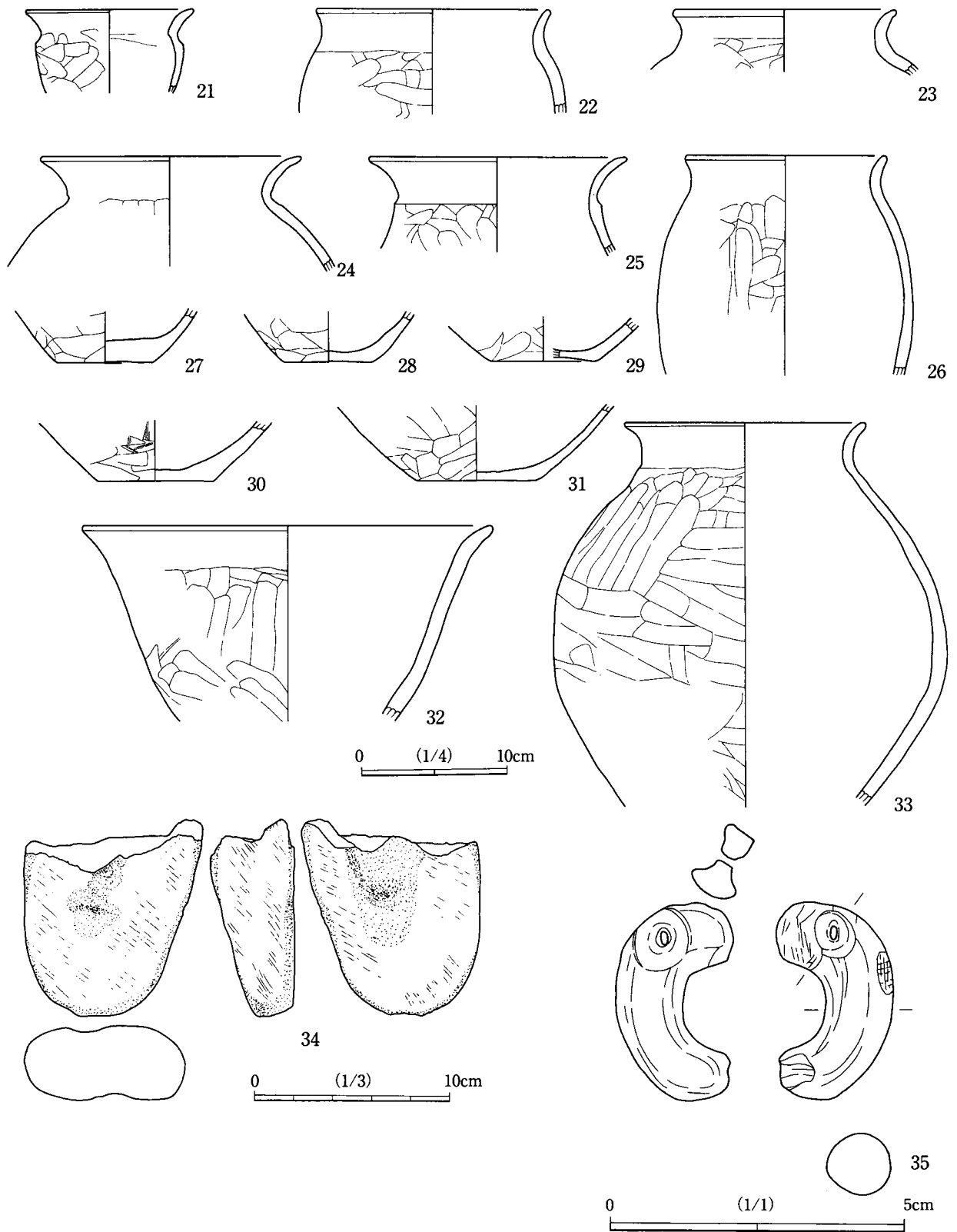
1～13は土師器坏である。1・10は蓋模倣の坏で、1は底部が平坦となるが、体部との境にかすかに稜がある。口縁部はヨコナデで、底部は横方向のヘラ削り後、1は数方向のヘラ磨き、10は口縁部も含めて横方向のヘラ削りを施す。内面は体部が横方向、底部が数方向のヘラ磨きである。なお、10は内外面とも漆仕上げとみられる。2は口径約10cmの小振りの坏である。体部は指頭によるナデで、底部のみヘラ削りが施される。3～9は身の模倣で、9を除いて口縁部は内傾する。口縁部はヨコナデ、体部は横方向のヘラ削りである。5・9を除いて外面は口縁部も含めてヘラ磨きを施し、内面も丁寧に磨いている。9は体部外面から底部及び内面に粗くヘラ磨きを施している。なお、5は外面に粘土紐接合痕を残している。また、3・4は漆仕上げとみられ、8は内面黒色処理される。11～13は口径18cm前後の大形のもので、鉢とした方が適当かもしれない。口縁部は内傾し、ヨコナデで整え、体部は横方向のヘラ削りである。外面は口縁部も含めて横方向のヘラ磨きを加え、内面も全体を磨いている。11・13は漆仕上げの可能性はある。

14～20は土師器高坏である。14～17は脚部の破片で、14は短脚である。14は脚部全体に横方向の調整痕が観察でき、外面は赤彩、坏部内面は黒色処理される。なお、胎土に長さ5mmほどの鉄の破片が1点含まれているが、砂鉄塊かどうかは判然としない。17・20は長脚の高坏である。脚注部は縦方向のヘラ削りで、裾部にヨコナデを施す。内面は17が横方向のヘラ削り後、部分的に縦方向のナデを、20は全体的に



第165图 SI-066号实测图





第166図 SI-066号出土遺物実測図

ナデ調整である。ともに外面は赤彩され、17は裾部内面にまで及んでいる。18・19は坏部の破片である。20も含めて、口縁部と坏底部との境にはかなり明瞭な稜を巡らせ、口縁部はヨコナデ、坏底部は横方向の



ヘラ削りである。いずれも、外面は赤彩され、内面は黒色処理されている。

21～31・33は土師器甕である。33は底部を欠損する。大形の甕で、最大径は胴部中位に位置する。口縁部は外反し、ヨコナデで整え、端部を丸く収める。胴部は上部で縦方向、他は斜めないし横方向のヘラ削りで、内面は横方向のヘラナデである。他はすべて破片で、21・22は胴上部から横方向のヘラ削りを施している。32は土師器甕である。最大径は口縁部に位置し、ラッパ状に開いた器形である。口縁部はヨコナデで、胴部は縦方向から斜方向のヘラ削りである

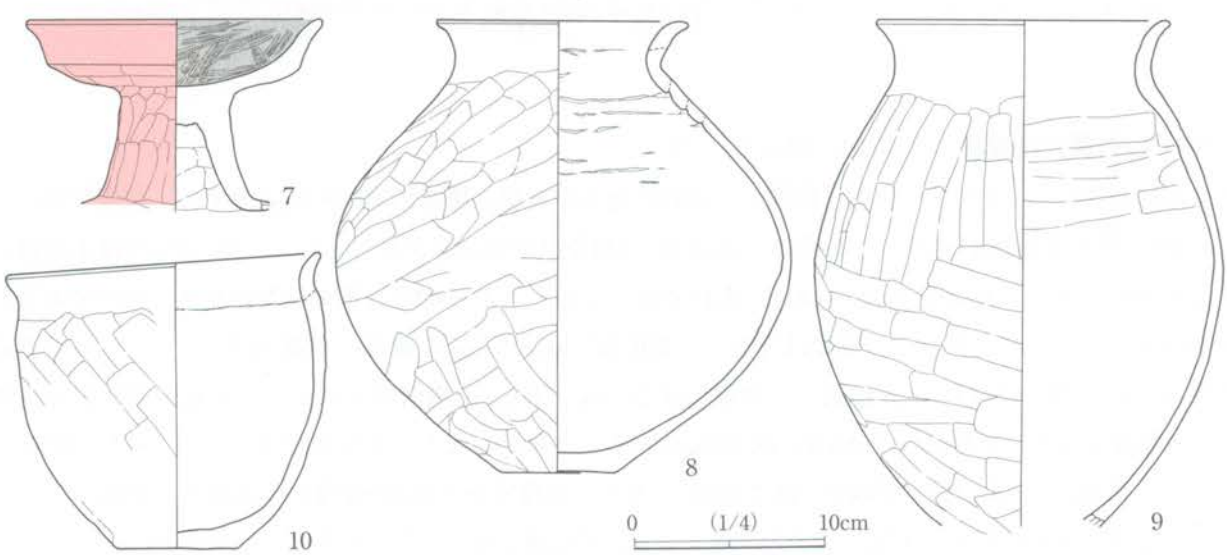
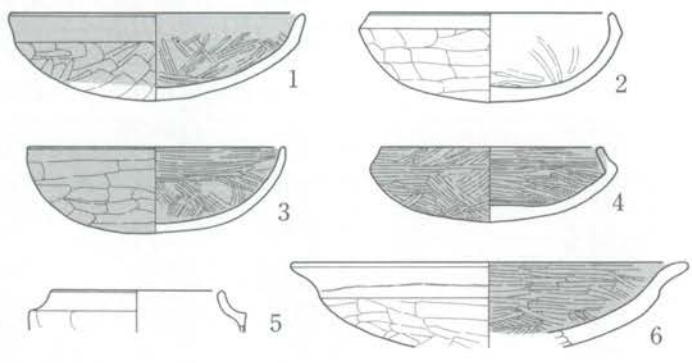
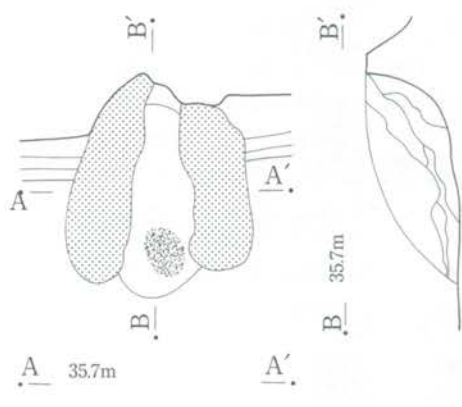
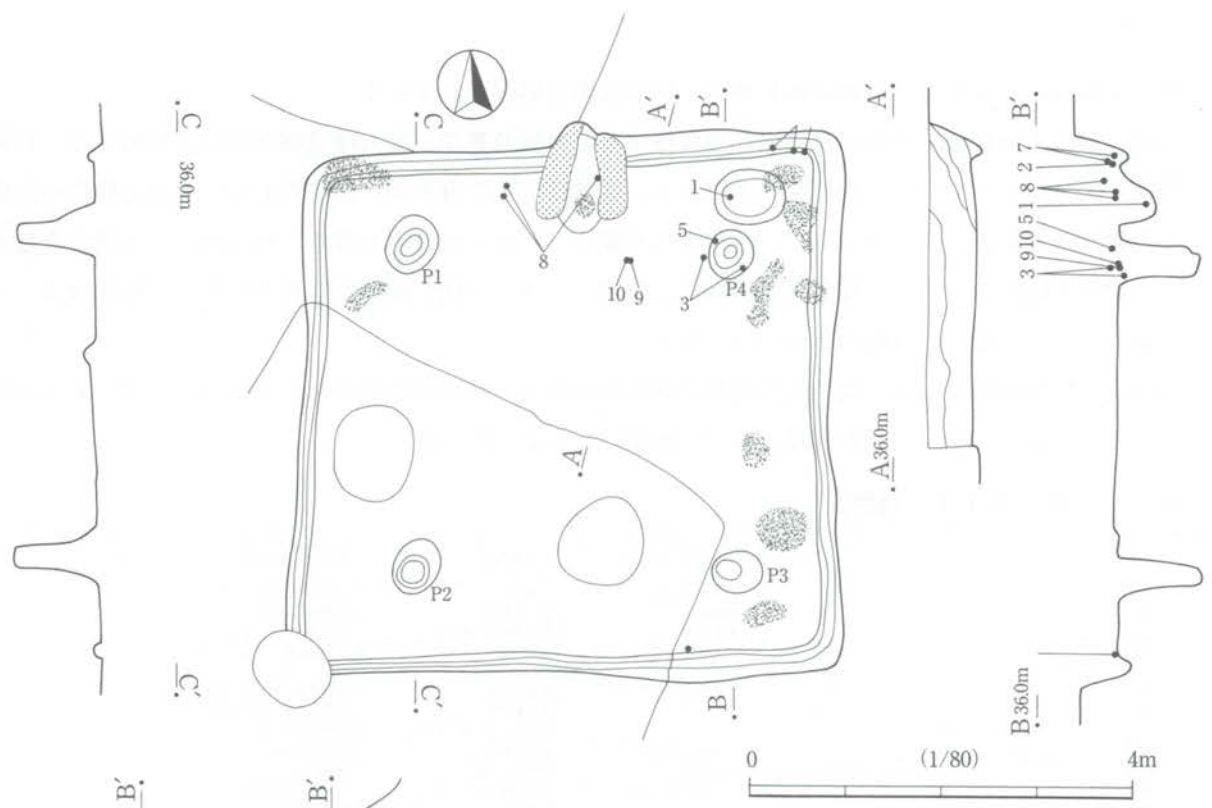
34は縄文時代の凹石である。両面及び端部に敲打痕がある。35は滑石製の勾玉である。両側に丸玉が配置されていたとみえ、孔の周囲が直径8mmで摩滅してくぼんでいる。

第67表 SI-066号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(15.1)	3.8	10.0	底部3/4 体部1/4	微砂粒、スコリア(少々)	鈍い黄褐色	黒色処理(漆)、軟質	12.45
2	土師器 坏	10.4	4.0	6.5	2/3	白色砂粒、長石	黒褐色	底部やや丸に近いが境目はある	26
3	土師器 坏	(10.5)	[2.8]	—	口縁1/4	微砂粒	鈍い黄褐色	内、黒色処理(漆)	1
4	土師器 坏	12.6	3.6	丸	1/2	微砂粒	鈍い黄褐色+褐灰色	内外、黒色処理 軟質	10
5	土師器 坏	(12.0)	[3.4]	—	口唇部 一部 底部欠 体部2/3	白色砂粒、長石、スコリア	鈍い黄褐色	口縁端摩滅 外、接合痕残す	1
6	土師器 坏	(12.2)	[3.2]	丸	1/4	微砂粒、スコリア(少々)	鈍い黄褐色	口縁端摩滅 漆仕上げの可能性あり	1
7	土師器 坏	(12.0)	[2.8]	—	口縁1/3	スコリア	鈍い黄褐色	内、黒色処理(漆の可能性あり)	1
8	土師器 坏	(14.0)	[3.9]	—	1/4	スコリア、雲母	内、黒色 外、鈍い黄褐色	内、黒色処理(漆)	1
9	土師器 坏	(13.0)	5.0	丸	1/2	白色砂粒、白針、長石、スコリア	鈍い赤褐色	内、丁寧にミガキ(光沢あり)	1.17
10	土師器 坏	14.4	4.2	丸	2/3	微砂粒、スコリア(少々)	黄褐色～黒褐色	全面漆仕上げ	1
11	土師器 坏	17.7	8.0	丸	1/2	白色砂粒、長石、小石(1～4mm)	鈍い黄褐色+褐灰色	内、口縁～体部漆仕上げ	1.25
12	土師器 坏	(18.6)	[8.6]	丸	1/4	砂粒	明黄褐色	外、器面摩耗	1.17
13	土師器 坏	(19.2)	9.6	丸	1/2	微砂粒、長石(少)、小石(1～2mm)	鈍い黄褐色+橙色 一部黒褐色	内外、ミガキ 漆仕上げ	1.47.48
14	土師器 高坏	—	[4.9]	[9.2]	脚部完形	白色砂粒、長石、スコリア	坏部(内)黒色、脚部(内)黄褐色、(外)赤色	坏部(内)黒色処理(漆) 脚部(外)赤色	40
15	土師器 高坏	—	[6.2]	—	1/3	白色砂粒、白針、長石、スコリア	褐色一部褐灰色	一部剥落有り	34
16	土師器 高坏	—	[5.0]	(11.0)	脚部端部	スコリア、砂粒、長石	内、黒色 外、明赤褐色～明褐色	外、赤彩、ヘラケズリ	1
17	土師器 高坏	—	[12.8]	17.2	脚部完形	白色砂粒、長石、スコリア、黒色粒	内、黒褐色～鈍い黄褐色 外、赤褐色	赤彩 内外、ピッチ状にスス付着	21
18	土師器 高坏	(18.0)	[5.0]	—	坏部1/3	スコリア、砂粒	内、黒色 外、赤色	内、黒色処理 外、赤彩	1.29.30
19	土師器 高坏	19.2	[5.5]	—	坏部完形	白色砂粒、白針、長石(少)、スコリア	内、黒色 外、赤褐色	内、黒色処理、ミガキ 外、赤彩	22
20	土師器 高坏	19.0	[15.0]	—	裾部欠 他完形	白色砂粒、長石、スコリア、黒色粒	内、黒色 外、赤褐色	坏内黒色処理、ミガキ 外、赤彩	1.15.35.37.38.39.49.50
21	土師器 甕	(11.2)	[5.7]	—	1/3	白色砂粒、長石	内、黒褐色 外、暗赤色	内、炭素吸着	1
22	土師器 甕	(16.0)	[7.0]	—	1/4	白色砂粒(多)、白針、長石、石英、スコリア	内、鈍い黄褐色 外、赤褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	7
23	土師器 甕	(14.8)	[4.5]	—	口縁1/8	砂粒、白針、スコリア	内、暗褐色 外、黒褐色	炭素吸着	24
24	土師器 甕	(16.6)	[7.8]	—	口縁1/6	砂粒、スコリア、長石	内、黒褐色 外、暗褐色	器面摩耗	1.20
25	土師器 甕	(17.4)	[6.7]	—	口縁1/6	スコリア、長石	内、暗赤褐色 外、暗褐色	頸部 強くヨコナデ	1
26	土師器 甕	(13.4)	[15.0]	—	1/4	スコリア、長石(少)	内、黒色 外、暗赤褐色	内外、炭素吸着	1.14
27	土師器 甕	—	[3.7]	6.6	底部完形	白色砂粒、長石	内、明赤褐色 外、灰黄褐色	内、剥落著しい	28
28	土師器 甕	—	[3.3]	6.4	底部完形	微砂粒、長石	内、灰黄褐色 外、鈍い黄褐色	内、剥落著しい	3
29	土師器 甕	—	[2.8]	(7.0～7.5)	底部2/3	白色砂粒、長石、スコリア	内、黄褐色～黒褐色 外、褐色	内、炭素吸着	1
30	土師器 甕	—	[4.1]	8.0	底部1/2	白色砂粒、長石、スコリア	赤褐色	内、剥落有り	1
31	土師器 甕	—	[5.2]	8.0	底部完形	白色砂粒、長石、石英、スコリア	内、鈍い黄褐色 外、褐色～黒褐色	内、剥落著しい	16
32	土師器 甕	(28.0～28.2)	[13.3]	—	口縁1/4	砂粒、スコリア、黒色粒、長石	内、明赤褐色 外、明褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	1.2
33	土師器 甕	16.4	[26.0]	—	口縁～胴部完形	白色砂粒、小石(1mm)、長石(多)、石英、スコリア	内、明赤褐色 外、明赤色～黄灰色+黒色	内、剥落有り	1.4.18

SI-067号竪穴住居跡 (第167図, 図版35, 121)

本遺構はI3-37グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約36.9mに立地する。南側半分にはSI-048号竪穴住居跡が重複し、北壁の一部にSI-049号竪穴住居跡が接している。SI-048号は本遺構の床面を切っており、本遺構がSI-048号に先行する。しかし、SI-049号は壁の一部が接するだけであり、新旧関係は捉えられなかった。形態は方形で、規模は5.6m×5.5mを測る。主軸方向はN-3°-Eである。確認面からの深さは概ね40cm前後で、壁際に深さ4cm～10cmの壁溝が全周する。主柱穴は住居対角線上に4基確認され、直径40cm～45cm、深さ83cm～87cmと深い。また、住居北東コーナーに接して貯蔵穴があり、長軸長73cm、短軸長56cm、深さ39cmである。貯蔵穴からは第167図1の土師器坏が出土した。また、北及び東壁に接する床面に焼土の堆積があり、炭化種子が1点含まれる。



第167图 SI-067号实测图

カマドは北壁中央に位置し、最大幅190cmを測り、袖部は壁から110cm延びる。袖材の遺存は比較的よく、煙道の一部にまで及んでいる。構築材は淡黄褐色砂質土である。煙道部は壁外へ約60cm張り出し、急角度で立ち上がっている。

遺物はカマド付近から住居北東コーナーにかけて集中し、完形に近い形で出土した。

1～4は土師器坏で、いずれもほぼ完形である。1は口縁部が外傾するもので、体部との境に稜を残す。口縁部はヨコナデで、体部から底部にかけて横方向のヘラ削り後ナデを施す。内面は粗く磨いている。底部を除いて漆仕上げとみられる。2・4は身の模倣で、口縁部は短い。体部は横方向、底部は一方のヘラ削りで、2は粗く、4は丁寧にナデている。内面は2が底部のみ、4は全面ヘラ磨きを施す。3は半球形の坏で、口縁部に僅かにヨコナデを施すが、そのまま体部へと移行する。体部から底部にかけては横方向のヘラ削り後丁寧に磨いており、内面は全面ヘラ磨きを施している。

5は土師器碗である。口縁部は内傾し、体部との境で大きく屈曲する。口縁部はヨコナデ、体部は横方向のヘラ削りである。6・7は土師器高坏である。6は脚部を欠損するが、口縁部と坏底部の境に明瞭な稜を有し、口縁部は外反する。口縁部はヨコナデで、坏底部は横方向のヘラ削り後にナデている。内面は黒色処理される。9は短脚の高坏である。口縁部及び脚裾部はヨコナデで、坏底部は横方向、脚柱部は縦方向のヘラ削りを施す。外面は赤彩され、坏部内面は黒色処理される。

8～10は土師器甕である。8は胴部が膨らむもので、最大径は胴部中位にある。口縁部は外反しヨコナデで、胴部は上半が斜め方向のヘラ削り、下半は90°向きを変えた斜め方向のヘラ削りである。内面は口縁部下に粘土紐接合痕を数条残している。9も最大径は胴部中位にある。口縁部は外反し、胴部は上半が縦方向、下半が横方向のヘラ削りである。内面は横方向のヘラナデで整える。10は口縁部が短く、胴部があまり膨らまないものである。口縁部はヨコナデで、胴部は斜め方向のヘラ削りである。

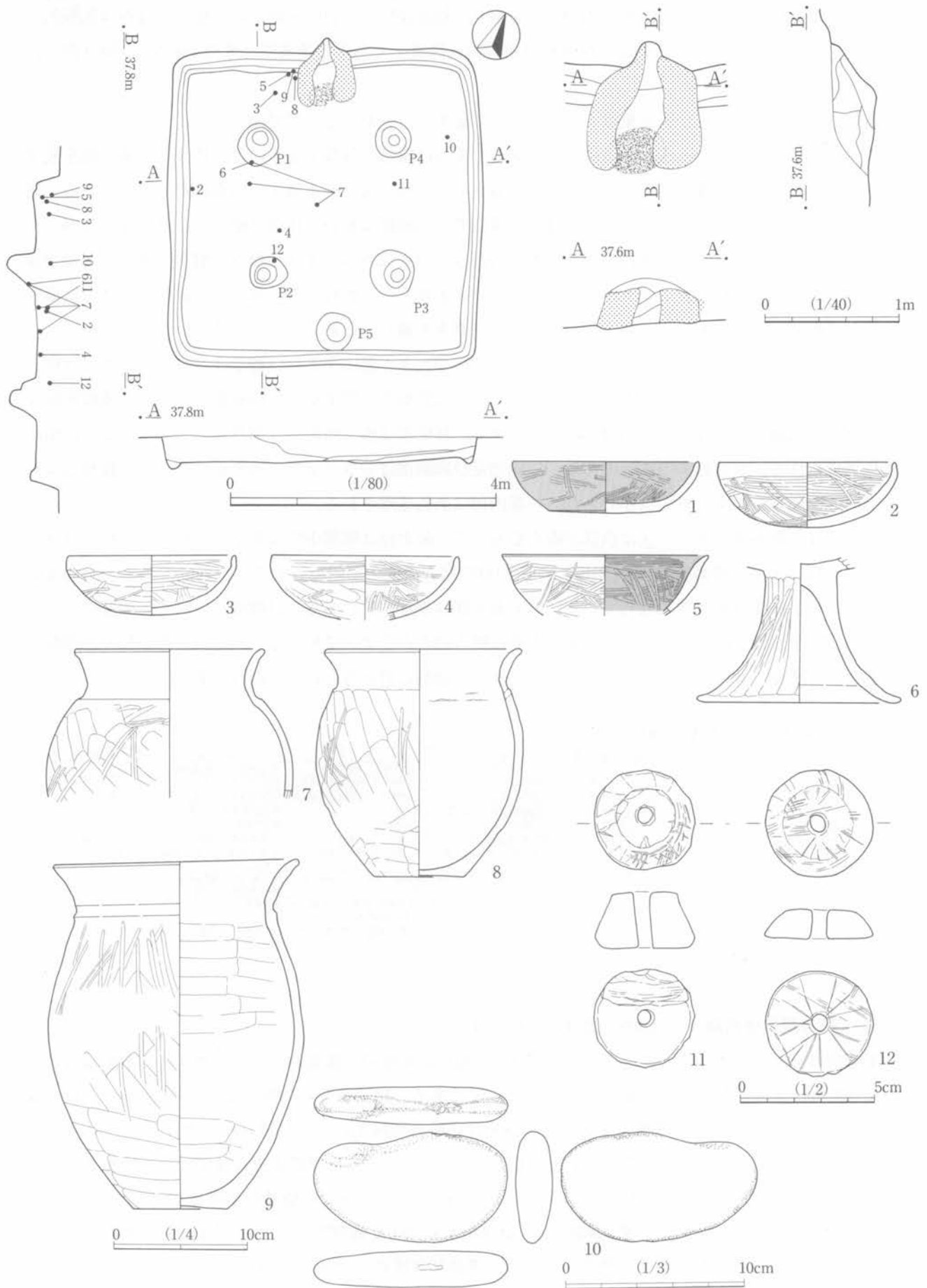
第68表 SI-067号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	15.6	4.6	丸	3/4	長石(多)、石英、スコリア	口縁黒褐色 底部明褐色	内外、漆仕上げ 底部摩擦	21
2	土師器 坏	12.9	4.7	丸	ほぼ完形	白色砂粒、小石(2mm)、長石、石英	内、褐色 外、暗灰黄色+黒色	内外、粗にミガキ有り	6
3	土師器 坏	13.5	4.5	丸	ほぼ完形	白色砂粒、長石	内、暗褐色 外、明褐色～暗褐色	内外、漆仕上げ 丁寧なミガキ	1.11.22
4	土師器 坏	11.6	3.9	丸	ほぼ完形	白色砂粒、長石(多)、石英	黒褐色	黒色処理(吸炭)、内、密にミガキ	10
5	土師器 碗	(9.1)	[2.1]	-	口縁1/2	白色微砂粒、長石(少)	鈍い黄褐色	薄手で硬質	1
6	土師器 高坏	20.8	[4.5]	-	坏部1/2	砂粒、黄土粒、長石、石英、スコリア	内、黒色 外、赤褐色	内、黒色処理 丁寧なミガキ	SI067-2 SI048-1
7	土師器 高坏	15.5	10.0	-	3/4	白色砂粒、小石(1mm)、長石、石英、スコリア	内、黒色 外、赤色～黄褐色	内、黒色処理 外、赤彩、器面若干摩擦	1.7.8
8	土師器 甕	13.3	23.8	6.2	2/3	白色砂粒、長石、石英、黒色粒	明褐色～赤褐色 広範囲に褐灰黒色	内、肩部に鮮明に輪痕み痕残り 外、胴尖と底部黒色の付着物有り	14.17.19.20
9	土師器 甕	15.4	[26.8]	-	3/4	白色砂粒、小石(1～2mm)、長石、石英、スコリア	内、暗褐色～黒褐色 外、鈍い黄褐色～黄灰黒色	炭素吸着(内外、1/3)	12
10	土師器 甕	16.5	15.2	6.7	1/2	砂粒、小石(1mm)、長石、石英	内、鈍い黄褐色～暗赤褐色 外、赤褐色～黒褐色	内外、剥落著しく、器面歪み有り 外、胴尖一部に黒色の付着物有り	1.12

SI-068号竪穴住居跡 (第168図, 図版35, 121, 122)

本遺構はL1-93グリッド付近に位置し、東側台地の北側縁辺、標高約37mに立地する。形態は方形で、規模は4.7m×4.6mを測る。主軸方向はN-63°-Wである。確認面からの深さは31cm～39cmで、ロームブロックを多く含む土層が堆積している。主柱穴は住居対角線上に4基配置され、直径52cm～64cm、深さ41cm～51cmでいずれも下部で細くなる。また、カマドに対する南壁際中央に梯子ピットがあり、直径52cm、深さ27cmで垂直に掘り込まれている。なお、深さ2cm～10cmの壁溝が全周している。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅83cm、袖は壁から100cm延びている。袖部は暗褐色砂質土で構築され、遺存はよく煙道部の奥まで残されている。煙道部は壁外へ20cm張り出し、緩やかに立ち上がって



第168图 SI-068号实测图

いる。火床部はかなり手前に位置し、先端は袖部先端と同じ位置に当たり、40cm×27cmの楕円形の範囲が特に被熱している。カマド左脇からは土師器坏、甕がまとまって出土した。

1～4は土師器坏である。1はやや突出した平坦な底部となる。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部に僅かにヨコナデを施す。内外面とも丁寧に磨かれており、漆仕上げとみられる。2～4は半球形の坏で、口縁部は僅かに内傾する。口縁部はヨコナデで、体部外面は横方向、底部外面は不定方向のヘラ削りである。内面は体部が横方向、底部が一方向のヘラ磨きである。

5・6は土師器高坏である。5は坏部の破片で、口縁部が僅かに外反する。外面は横方向のヘラ削り後に、やはり横方向のヘラ磨きを施す。外面は赤彩が、内面は黒色処理がそれぞれなされている。6は脚部の破片で、約10cmの高さがある。外面は縦方向のヘラ削り後丁寧にナデており、赤彩される。坏部内面にヘラ磨きが観察できる。

7～9は土師器甕である。3点とも形状が異なるが、共通して口縁部ヨコナデと胴部の境がきつく、稜となっている。7・8は比較的丸い胴部で、胴部はともに斜め方向のヘラ削りを施し、8は底部近くで横方向のヘラ削りを加える。8は被熱し、胴部下位がやや剥落している。9は口縁部が長い。胴部は上半で縦方向、下半で横方向のヘラ削りを施し、内面は横方向のヘラナデである。胴部外面の上半に暗褐色の付着物がある。

10はメノウの礫で、端部に僅かに敲打痕がある。11・12は石製の紡錘具である。11は滑石製で、斜格子の線刻が施されているが、摩滅してほとんど消えている。12は放射状に3本1組の線刻がある。

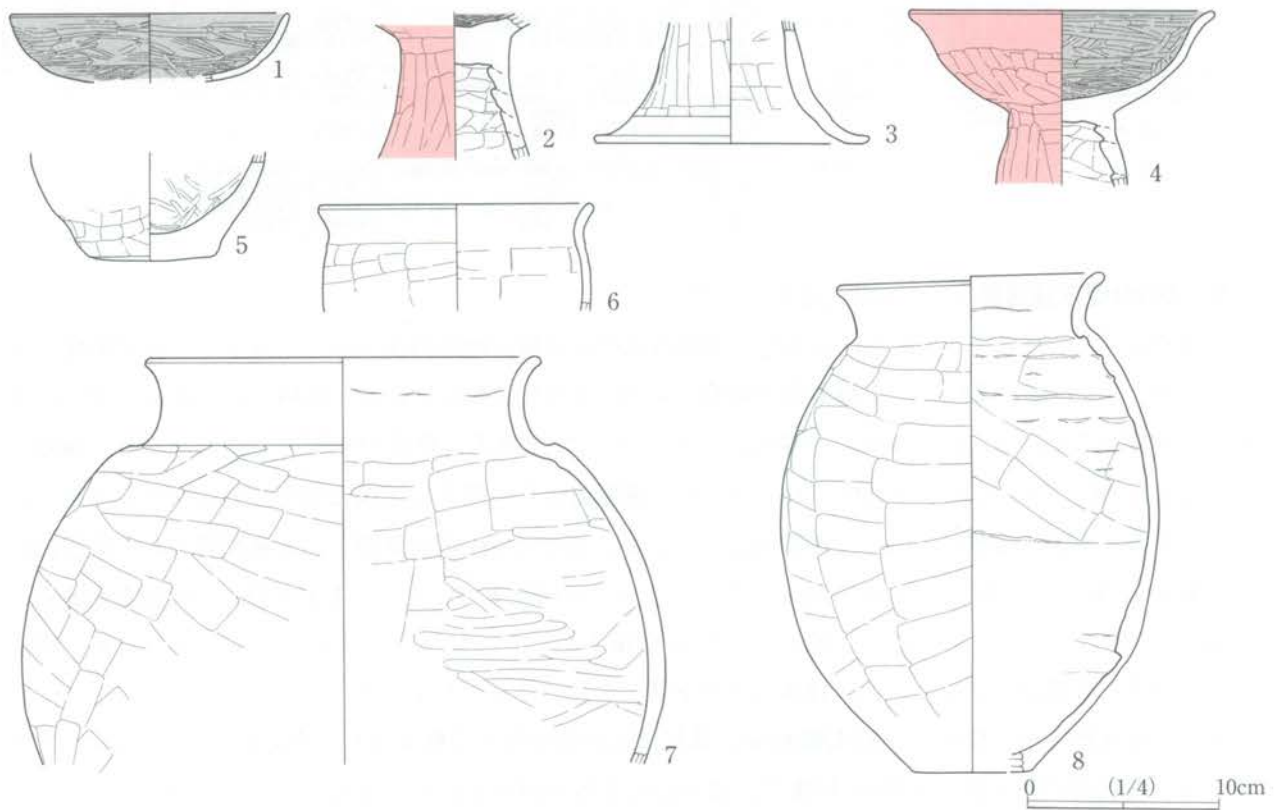
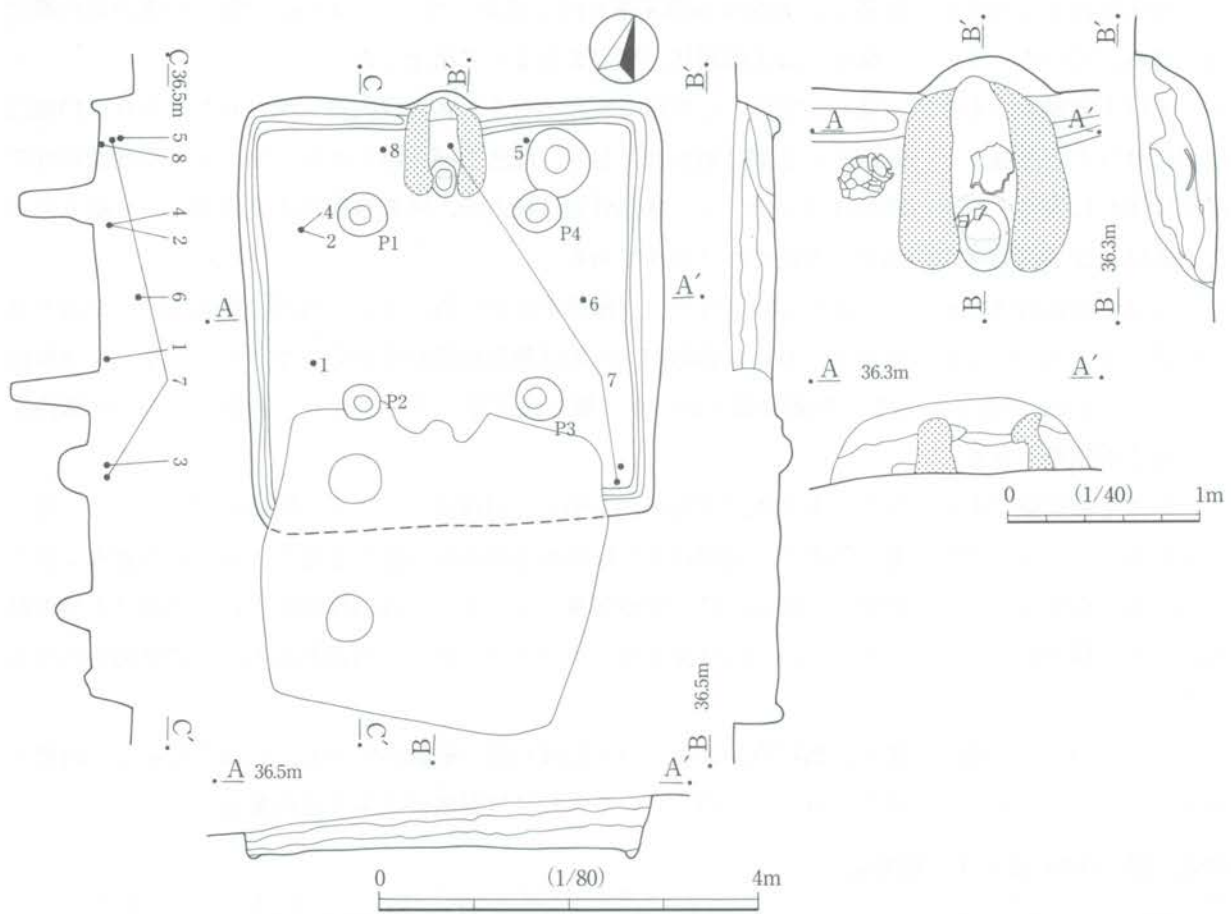
第69表 SI-068号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(14.0)	3.8	8.4	1/4	微砂粒、スコリア(少)	鈍い黄褐色～灰黄色	全面漆仕上げ、軟質	1
2	土師器 坏	13.1	4.9	丸	完形	白色砂粒、小石(1mm)、長石、石英、スコリア	赤褐色	内、ミガキ痕鮮明	11
3	土師器 坏	12.5	4.5	丸	ほぼ完形	小石(多1mm)、長石(少)、石英(多)	鈍い黄褐色	若干摩耗	10
4	土師器 坏	14.0	4.8	丸	1/4	白色砂粒、小石(1～7mm)、長石、石英、スコリア	明褐色	内、ミガキ痕鮮明 外、若干摩耗	1.3
5	土師器 高坏	(15.4)	[5.6]	—	坏部1/4	スコリア、白色砂粒、石英	内、黒色 外、明赤褐色	内、黒色処理 外、ヘラナデ後ミガキ	14
6	土師器 高坏	—	[10.1]	15.1	脚部2/3	白色砂粒、小石(1～7mm)、長石、石英	内、赤褐色、外、赤色～褐灰色～暗褐色	二次的に火を受け灰とスス付着	6
7	土師器 甕	(14.2)	[11.1]	—	1/6	白色粒、白針、長石(多)、石英、スコリア	明赤褐色	外、若干摩耗	1.4.5.6
8	土師器 甕	14.9	17.0	6.9	ほぼ完形	白色砂粒(多)、白針、長石(多)、石英(多)、小石	内、褐色～暗褐色 外、赤褐色～黒褐色	外、二次的に火を受け器面著しく剥落と黒色の付着物有り	1.13.16
9	土師器 甕	18.4	26.4	7.0	完形	白色砂粒、小石(1mm)、長石、石英	内、鈍い黄褐色 外、鈍い黄褐色～暗褐色	口縁は黒色(炭化物)胴中部は褐色(砂粒状)の付着物有り	7

### SI-069号竪穴住居跡 (第169図, 図版36, 122)

本遺構はJ2-83グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約36.4mに立地する。住居南側はSI-044号竪穴住居跡と重複し、土層断面の観察からSI-044号に先行することが明らかである。形態は方形で、規模は4.4m×4.4mを測る。主軸方向はN-20°-Wである。壁はやや開いて立ち上がり、南壁のほとんどはSI-044号に破壊され残されていない。確認面からの深さは、西に向かって緩やかに下がる斜面に位置するため、東側で60cm、西側で23cmとなる。支柱穴は住居対角線上に4基配置され、直径はいずれも40cm前後で、深さは79cm～97cmと深い。また、住居北東コーナーにP4と接して貯蔵穴がある。貯蔵穴は66cm×72cmの略円形で、床面から29cmの深さがある。なお、SI-044号と重複するため、梯子ピットの存在は確認できなかった。壁溝はカマド部分を除いて全周している。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅90cm、袖部は灰白色砂質土で構築され、直線的に壁から75cm延びている。煙道部の張り出しは15cm程度で、緩やかに立ち上がっている。なお、カマド内の底面から浮いた状態で土師器甕(7)の一部が、カマド左脇床面直上から(8)が潰れた状態でそれぞれ出土した。



第169图 SI-069号实测图

1は土師器坏である。内外面とも入念に磨かれ、漆仕上げとみられる。2～4は土師器高坏である。4の坏部はやや深さがあり、口縁部はヨコナデ、坏底部は縦横のヘラ削りである。坏部内面は2も含めて黒色処理される。脚部はいずれも縦方向のヘラ削りで、3・4は細い単位で行っている。なお、2・3は外面に赤彩される。

5～8は土師器甕である。6は小形の甕で、胴部は横方向のヘラ削りを施している。7は大形で、胴部が丸い甕である。ヨコナデを強く行い、明瞭な稜が形成される。胴部は横方向のヘラ削り後にナデを加え、内面は横方向のヘラナデである。8は胴部中位に最大径があるもので、全体に歪んでいる。口縁部は外反し、ヨコナデで整える。胴部は全体に横方向のヘラ削りで、内面は横方向のヘラナデである。

第70表 SI-069号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(14.6)	[3.6]	—	1/4	微砂粒、混合物なし	黄褐色～暗褐色	内外、漆仕上げ	5
2	土師器 高坏	—	[7.7]	—	脚部2/3	長石、石英、小石(1mm)	内、黒色 外、赤色	内、黒色処理 外、赤彩 (脚内) 粘土紐巻き上げ痕鮮明	6
3	土師器 高坏	—	[6.5]	—	脚部1/4	白色砂粒、スコリア、長石、黄色粒	内、鈍い褐色～赤褐色 外、赤褐色	内、輪痕み痕残る 外、ヘラケズリ	3
4	土師器 高坏	(16.0)	[9.0]	—	1/4	白色砂粒、小石(5mm)、長石、石英、スコリア	内、黒色 外、赤色	内、黒色処理 外、赤彩 (脚内) 粘土紐巻き上げ痕鮮明	6
5	土師器 甕	—	[5.6]	6.4	底部完形	砂粒、小石(1mm)、長石、石英、スコリア	内、赤褐色 外、褐色～暗褐色	底部平らでなく安定感ない	2
6	土師器 甕	(14.4)	[5.5]	—	口縁1/4	長石、石英	内、黒褐色 外、赤褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	11
7	土師器 甕	(20.8)	[21.5]	—	1/5	砂粒、白針、長石、石英、スコリア	内、鈍い黄褐色～黒褐色 外、鈍い赤褐色～黒褐色	硬質、口縁部強くヨコナデが加えられている	4.13
8	土師器 甕	14.0	26.4	6.2	3/4	砂粒、長石(少)、石英(少)、スコリア	内、口縁黄褐色他黒褐色 外、黄褐色、赤褐色+黒色	正円でなく歪んでいる	12

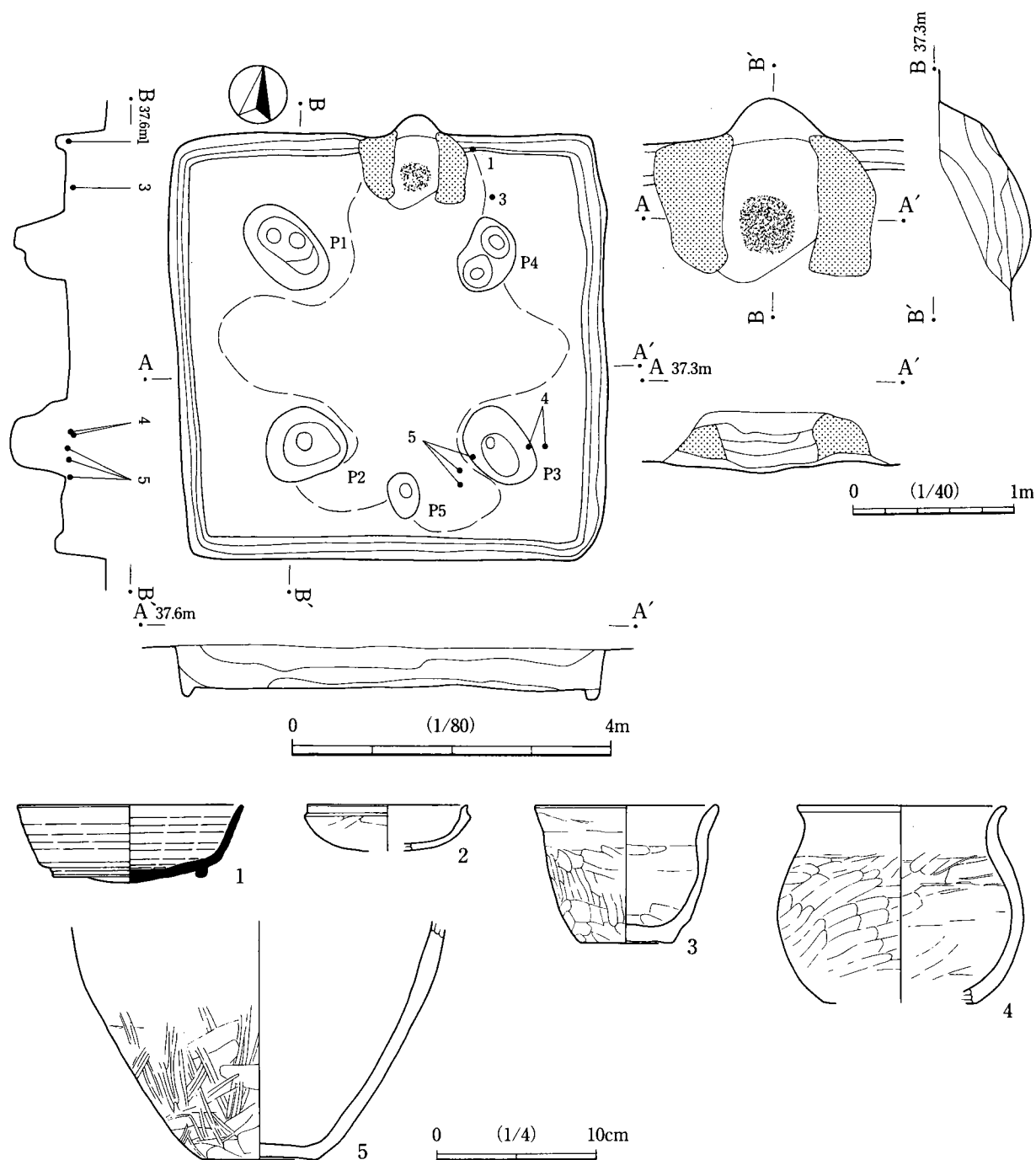
SI-070号竪穴住居跡 (第170図, 図版36, 122)

本遺構は、L2-52グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約37.3mに立地する。調査工程の都合から2年次にまたがって調査し、北西コーナーを含む一部を前年度に、他の大部分を後年度に調査している。形態は方形で、規模は5.3m×5.4mを測る。主軸方向はN-8°-Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、掘込みもしっかりし、確認面からの深さも45cm～60cmを測る。主柱穴は住居対角線上に4基配置され、床面では住居対角線方向に長い楕円形をしている。P1は119cm×77cm、P2は100cm×90cm、P3は100cm×72cm、P4は88cm×64cm、深さは41cm～72cmで、床面での規模の割に深さはない。また、カマド側のP1・P4はピット底面が2か所窪み、柱の建て替えが行われた可能性を示している。カマドに対する南壁際中央には梯子ピットがあり、56cm×35cmと住居主軸方向に長い楕円形である。深さは31cmで、住居外側から内側へ向くように斜めに掘り込まれている。壁溝は深さ10cm程度で全周している。床面は主柱穴に囲まれた範囲に硬化面があり、主柱穴を避けるように十文字に踏み固められているのが特徴的である。覆土は全体にローム粒・ロームブロックを多く含むが、下層で若干砂質となる。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅125cm、袖部は明褐色の砂・粘土混合土を基礎として淡黄褐色の粘性の強い砂質土で構築している。煙道部の張り出しは30cmで、緩やかに立ち上がっている。

1は須恵器高台坏である。高台より僅かに底部が出るもので、底部はロクロ左回転の回転ヘラ削りである。高台は断面方形である。高台・口唇部内側・底部内面が若干摩滅している。2は土師器坏で、破片である。口縁部は短く、器面遺存状況が悪く、調整は不鮮明である。

3～5は土師器甕である。3は小形の甕で、最大径は口縁部にある。口縁部はヨコナデで、胴部は横方向のヘラ削りを施す。内面は口縁部を除いて器面が剥落している。4は胴部が球形となる甕である。口縁部は外反し、ヨコナデで整え、胴部は横方向のヘラ削りである。内面は横方向のヘラナデを施す。5は口縁部を欠損するが、胴部はヘラ削り後丁寧なナデ調整である。



第170図 SI-070号実測図

第71表 SI-070号出土土器観察表

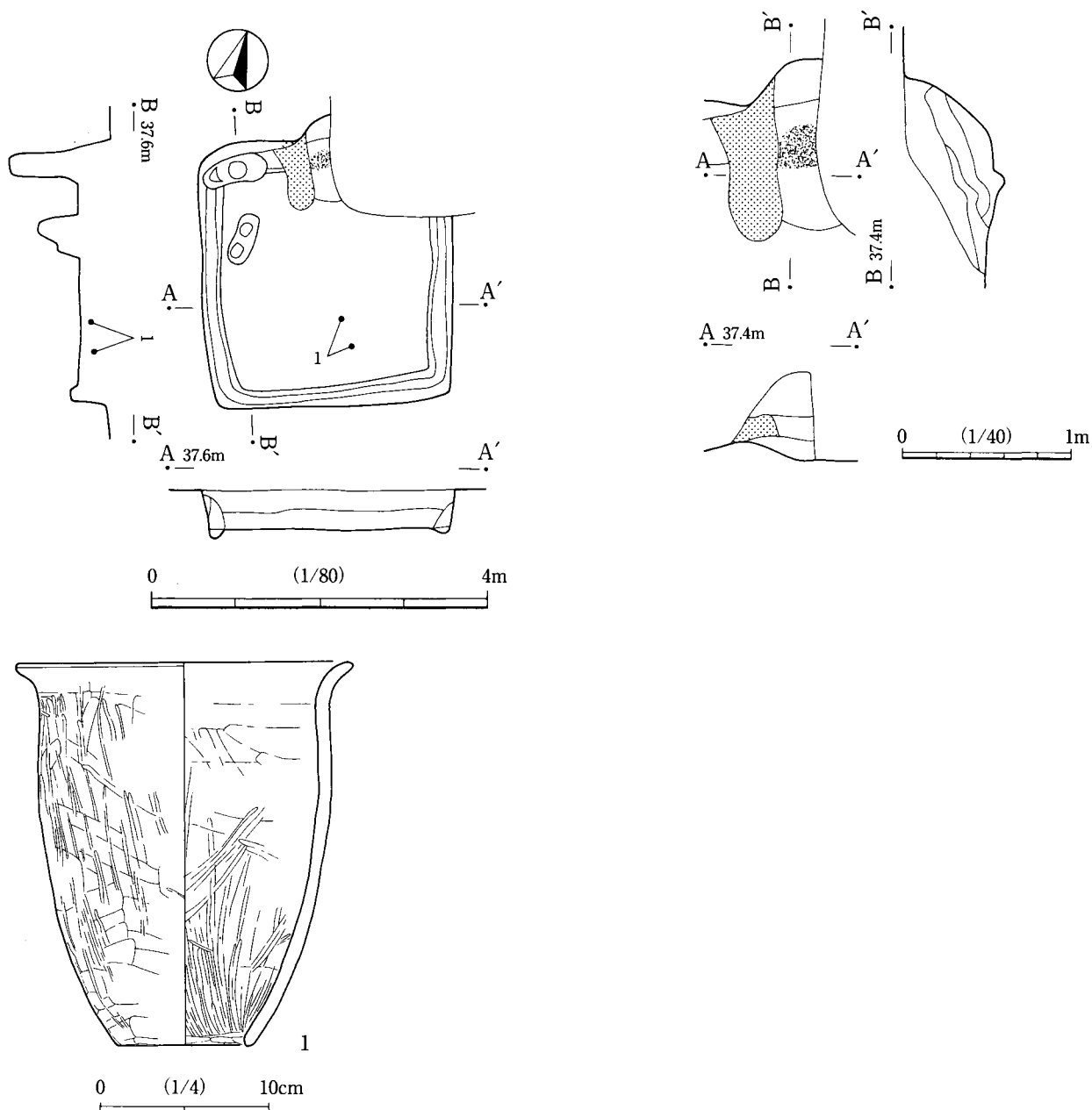
挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 高台付杯	14.0	4.8	9.5	底部完形 体部1/2	微砂粒	灰白色	湖西産	17
2	土師器 杯	(10.0)	[2.9]	-	口縁1/4	スコリア(少)	明褐色	器面著しく剥落	2
3	土師器 甕	11.6	8.6	6.0	1/2	粗砂粒、黄土粒、長石(多)、石英、スコリア	明褐色～暗褐色	若干剥落有り	7
4	土師器 甕	(13.0)	12.3	(9.4)	底部一部 他完形	白色砂粒、小石(1mm)、長石、石英	鈍い赤褐色～暗褐色	器面剥落	8.9
5	土師器 甕	-	[14.8]	7.2	底部完形	粗砂粒、長石、スコリア	内、鈍い黄褐色 外、明褐色～暗褐色	内、著しく剥落 外、砂粒状の付着物有り	2.3.10.11.12



SI-071号竪穴住居跡 (第171図, 図版36, 122)

本遺構は 4K-17グリッド付近に位置し, 東側台地の中央部, 標高約37.4m に立地する。住居北東コーナー部で SI-034号竪穴住居跡と重複し, カマドの半分を破壊されている。従って, SI-034号に先行する住居であることが明らかである。形態は方形で, 規模は3.2m×3.0m を測る。主軸方向は N-18°-W である。壁はほぼ垂直に立ち上がり, 確認面からの深さは40cm 前後である。主柱穴はなく, 北西コーナーの壁溝内及びその南側に 2基のピットがある。ピットは 2基 1対となり, 深さは壁溝内のピットが69cm, その南側のピットは15cm である。壁溝は深さ 5cm~15cm で全周し, SI-034号に破壊された部分にも巡っていたと考えられる。覆土は水平に堆積し, 全体的にロームブロックを多量に含んでいる。

カマドは北壁中央に位置し, 西側半分が遺存している。袖部壁から80cm 延び, カマド内には天井部の崩



第171図 SI-071号実測図

落土と考えられる暗灰色砂質土が堆積している。煙道部の張り出しは20cmと小さく、急激に立ち上がる。

遺物は少なく、土師器甕が図示できるのみである。口縁部は外反し、胴部は縦方向のヘラ削り後かなり上位から横方向のヘラ削りを施している。さらに、内外面とも縦方向の細かいヘラ磨きを施す。

第72表 SI-071号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 甕	(20.0)	23.0	(8.0)	1/6	白色砂粒、黒色粒、長石、石英、スコリア	外、赤褐色、一部黒色	内、ナデ後ミガキ(光沢有り) 外、ヘラケズリ後部分的にミガキ	1.2.3

SI-072号竪穴住居跡 (第172図, 図版122, 123)

本遺構はK3-86グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約37.3mに立地する。南東コーナー部でSI-034号竪穴住居跡と、西壁でSI-073号竪穴住居跡とそれぞれ重複し、土層断面及び遺構の遺存状況からSI-034号に先行し、SI-073号より新しいことが明らかである。形態は方形で、規模は4.7m×4.6mを測る。主軸方向はN-77°-Eで東向きにカマドを設ける住居である。確認面からの深さは32cm～46cmで、南及び西壁の全部とカマド左脇及び北壁の一部に壁溝が巡っている。支柱穴は全体に住居南側に寄って位置し、直径44cm～60cm、深さ50cm～67cmである。また、カマドのある東壁を除いた各壁際の壁溝内に1基～4基の壁柱穴がある。覆土は全体にロームブロックを含み、P1の付近に焼土の堆積も僅かにみられた。

カマドは東壁中央に位置し、最大幅160cm、袖部は壁から33cm延びる。煙道部は半円形に壁外へ30cm張り出し、緩やかに立ち上がっている。なお、壁溝は袖部の下まで掘り込まれている。

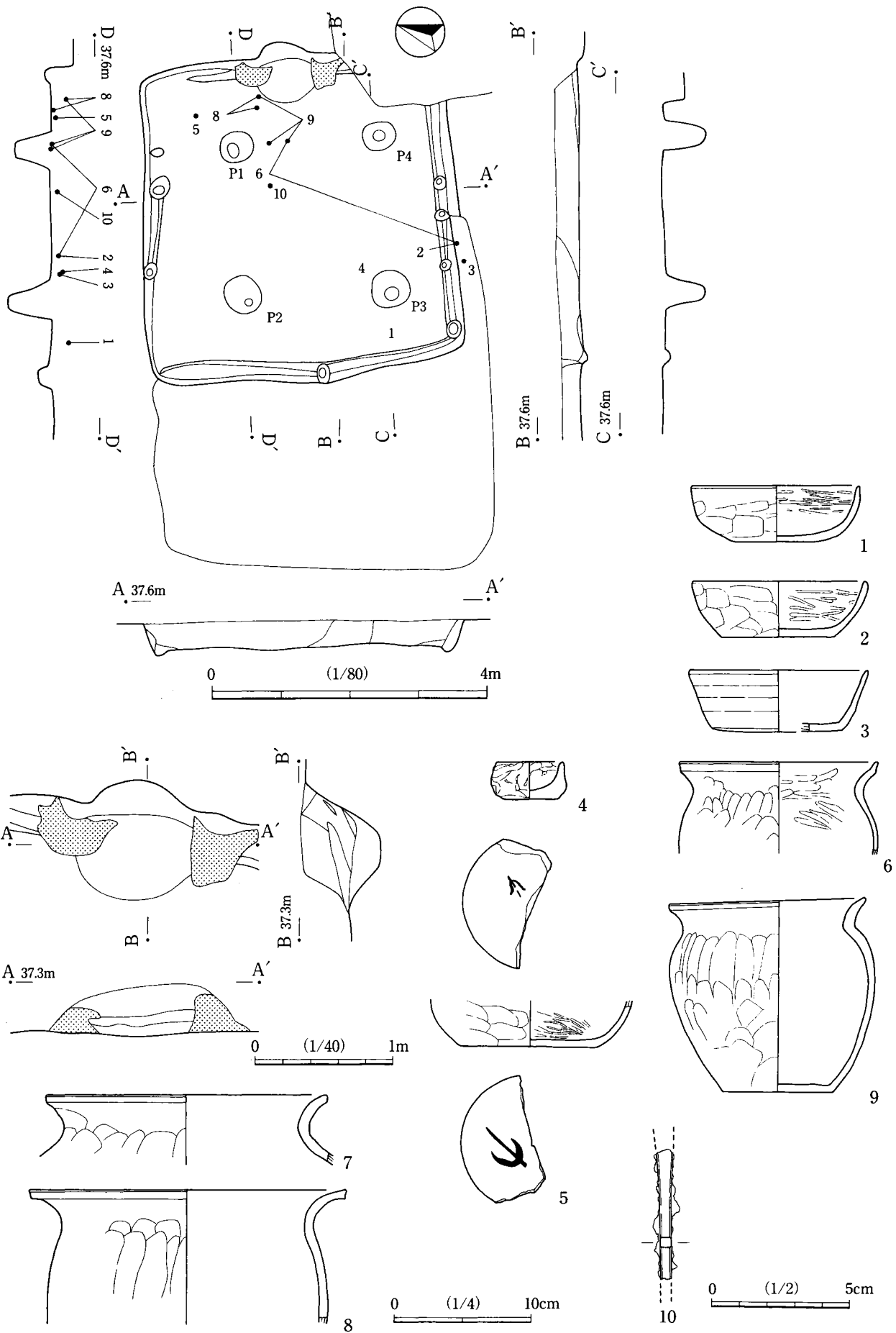
1・2・5は土師器坏である。1は丸底の坏であるが、ヘラ削りの方向で底部を区分している。口縁部はヨコナデで、体部は横方向のヘラ削り、底部は直交する二方向のヘラ削りを施している。内面は体部のみ横方向のヘラ磨きを施す。2は平底の坏である。口唇部のみヨコナデを施し、体部は横方向、底部は直交する二方向のヘラ削りを施す。内外面とも荒くヘラ磨きを施すが、底部外面は放射状に磨いている。5も平底の坏で、底部内外面に「Ψ」字様の墨書があり、外面の方が大きく書かれている。3はロクロ土師器坏である。体部は直線的に立ち上がり、体部下端にヘラ削りはない。底部は全面手持ちヘラ削りである。4は坏のミニチュアで、手捏ねである。平底で、底部外面にナデ調整を施す。

6～9は土師器甕で、9はほぼ完形であるが、他は破片である。6・9は小形の甕で、口唇部は6が受け口状、9は丸く収める。胴部は縦方向のヘラ削りで、9は底部近くに横方向のヘラ削りを施している。なお、9は被熱したため器面の遺存状況が悪く、内面は剥落する。

10は鉄鏝である。

第73表 SI-072号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	12.2	4.1	丸	ほぼ完形	白色砂粒、長石(多)、石英、スコリア	内、黄褐色 外、橙色	内、火ダスキ痕有り	15
2	土師器 坏	12.7	4.0	8.2	2/3	砂粒、長石、石英、スコリア	灰褐色	内外、底部密にミガキ(光沢有り)	12
3	ロクロ土師器 坏	(12.9)	4.5	(9.4)	1/4	微砂粒、黄色粒、長石、雲母、スコリア	橙色	全体に軟質で器面摩耗	13
4	土師器 手捏	(4.8)	2.7	4.0	1/2	長石、石英	橙色		17
5	ロクロ土師器 坏	-	[3.3]	(10.0)	1/4	白色砂粒、黒色粒、長石、石英、黄色粒	内、橙褐色～暗褐色 外、赤褐色～暗褐色	内外、墨書「口」	2
6	土師器 甕	(14.3)	[6.7]	-	口縁1/6	スコリア、長石	暗褐色	内、ミガキ 外、ヘラケズリ	7.12.19
7	土師器 甕	(20.4)	[5.0]	-	口縁1/4	白色砂粒、スコリア、長石、石英(多)	鈍い赤褐色～暗褐色	口縁部スス付着	11
8	土師器 甕	(23.0)	[9.9]	-	口縁1/2	白色粒、雲母	赤褐色	砂粒状の付着物あり	8.9
9	土師器 甕	14.3	14.2	8.0	3/4	白色砂粒、スコリア、長石、石英	内、明赤褐色 外、鈍い黄褐色～灰褐色	内外、器面著しく剥落	1.7.9

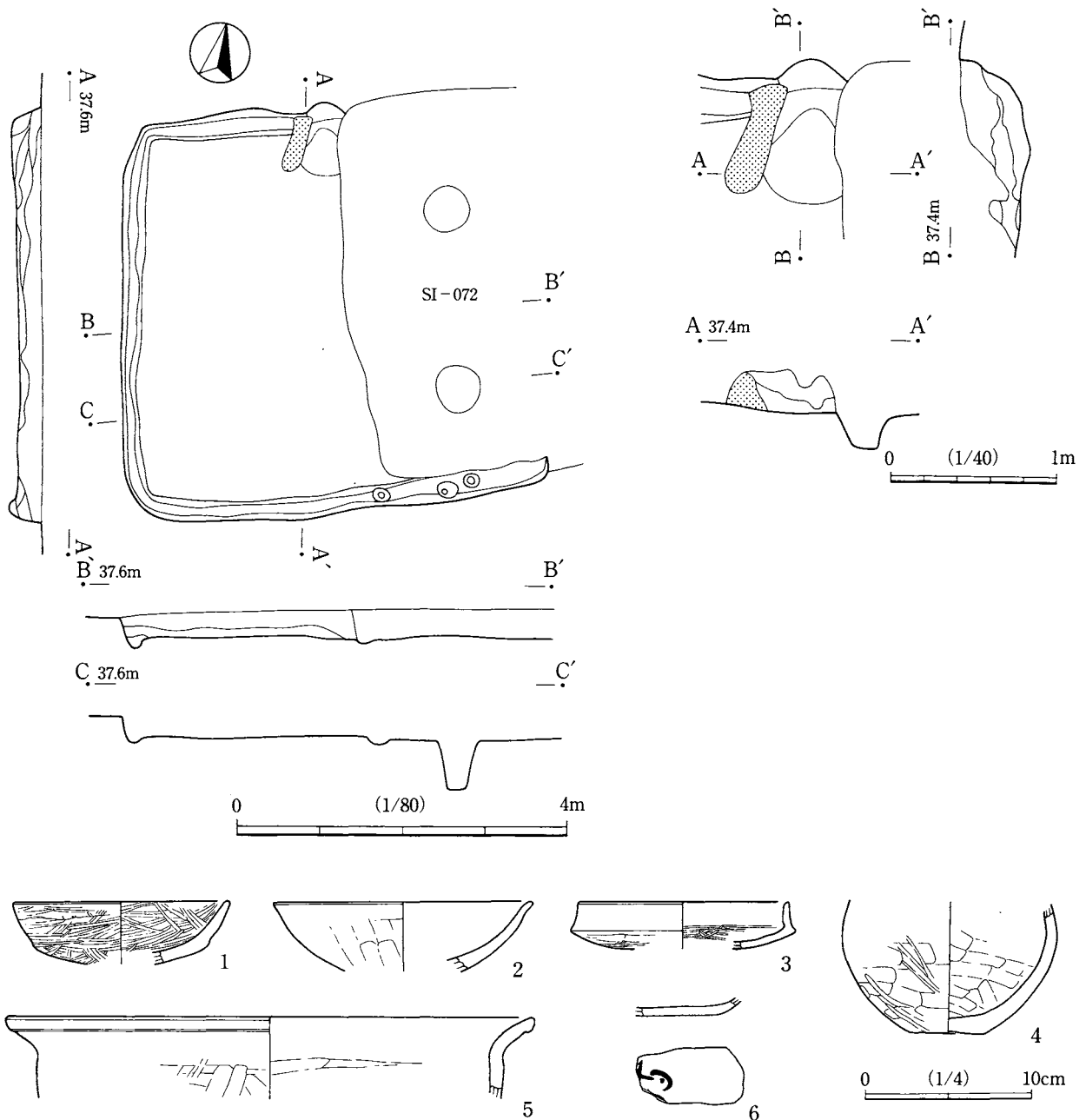


第172图 SI-072号实测图

SI-073号竪穴住居跡 (第173図, 図版123)

本遺構はK3-84グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約37.3mに立地する。住居東側半分がSI-072号竪穴住居跡と重複し、床面及びカマドがSI-072号竪穴住居跡に破壊されることから、同住居に先行するものである。しかし、かろうじて住居南東コーナーがSI-072号の南壁から壁溝にかかる部分に残されている。形態は方形で、規模は4.9m×5.0mを測る。主軸方向はSI-072号と90°異なり、N-10°-Wである。支柱穴はなく、遺存部分では壁溝が巡り、南壁の中央より東に直径20cm前後の壁柱穴が3基ある。掘込みの深さは22cm~29cmと浅く、覆土は全体にソフトロームを多く含み、床面上の所々に若干砂質の土層が堆積している。

カマドは北壁に位置し、南壁の長さから復元すると、北壁中央であったと思われる。袖部は黄褐色砂質



第173図 SI-073号実測図

土で構築され、左袖だけが遺存している。煙道部の張り出しは10cmと小さく、半円形をしている。

遺物は少なく、図示したもののうち、5・6はSI-072号からの混入と考えられる。

1・3・6は土師器坏である。1は蓋模倣の坏で、僅かに稜が残る。内外面とも入念に磨いており、黒色をしている。3は身模倣の坏で、口縁部は短く直立する。体部外面は横方向のヘラ削りを施す。6は混入品で、底部外面に「得」と墨書される。2は土師器高坏の坏部破片である。器面の遺存状況が極めて悪く、調整は不鮮明であるが、口縁部にヨコナデ、坏底部は縦方向のヘラ削りである。

4・5は土師器甕である。4は小形の甕で、胴部は球形である。外面は横方向のヘラ削りで、僅かに縦方向のナデが観察できる。内面は横方向のヘラナデである。5は混入品で、口唇部は断面三角形を呈する。

第74表 SI-073号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(13.0)	[3.8]	-	1/4	白針(少)	褐灰色	軟質 内、ミガキ(光沢あり)	1
2	土師器 高坏	(15.6)	[4.2]	-	1/3	粗砂粒、黒色粒、長石、石英、黄色粒	鈍い褐色～暗褐色	器面著しく磨滅	1
3	土師器 坏	(12.8)	[2.8]	-	1/8	白色粒、スコリア	灰褐色	外、煤付着	1
4	土師器 小型甕	-	[8.0]	3.4	底部完形	白色砂粒、小石(多)、長石(多)、石英(多)	内、黒褐色 外、赤褐色～黒褐色	内外、炭素吸着	1
5	土師器 甕	(32.0)	[5.0]	-	口縁片	白色粒、長石粒、石英粒	内、黒褐色 外、暗褐色	内、炭素吸着 硬質	1
6	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	砂粒、長石(多)、石英	鈍い黄褐色	底部墨書「口」	1

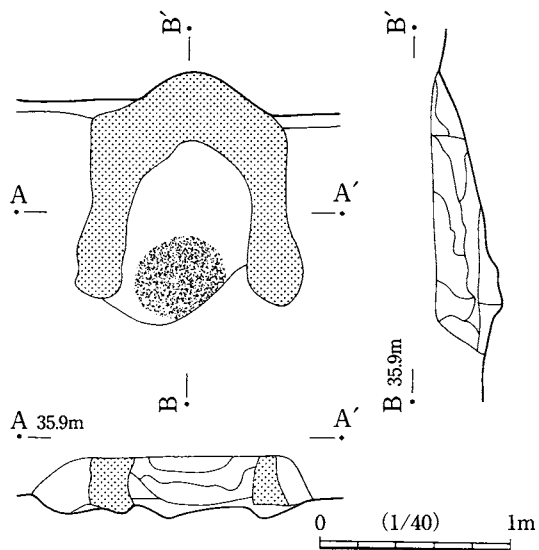
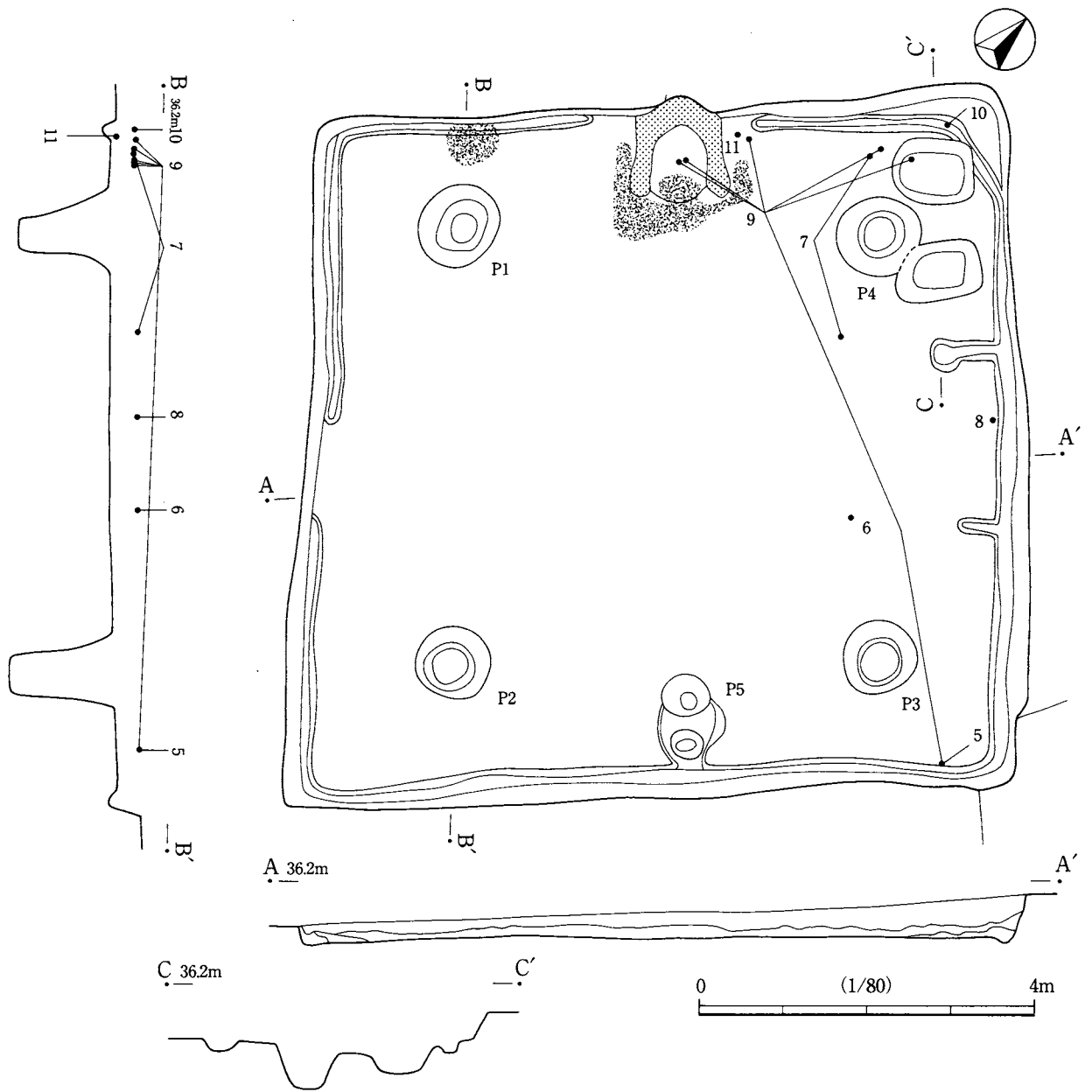
#### SI-074号竪穴住居跡 (第174, 175図, 図版37, 123)

本遺構はJ3-32グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約36.0mに立地する。住居東コーナーでSI-061号竪穴住居跡と重複するが、コーナー部が互いに接する程度の重複であるため、新旧関係は明らかではないが、出土遺物からSI-061号に先行するものである。形態は方形で、規模は8.2m×8.4mと今回報告する住居の中では最大規模のものである。主軸方向はN-48°-Wである。住居周辺は北西方向に向かって緩く下がる傾斜があり、確認面からの深さも8cm～41cmで北壁が最も深くなっている。主柱穴は住居対角線上のコーナーに寄った位置に4基あり、直径は80cm～100cm、深さ107cm～135cmと住居規模に比例して柱穴規模も大きい。また、カマドに対する南東壁際中央に梯子ピットがあり、2基の掘込みがある。直径は50cm～60cmで、床面から58cmの深さがある。貯蔵穴は住居北コーナーに2基あり、コーナーに近いものが100cm×80cm、深さ40cm、もう一方が100cm×72cm、深さ57cmでともに略方形である。壁溝は南西壁の一部を除いて全周するが、北コーナーでは壁から最大40cm離れて掘り込まれている。北コーナーだけが他のコーナーと比較して不自然に張り出しており、壁が崩落したとも考えられるが、壁溝自体も他のコーナー部分と比較してより内側で丸味を帯びて屈曲していることから、本来壁と壁溝が離れていた可能性も否定できない。なお、北東壁から住居内側に2本の間仕切り溝が掘り込まれている。北側の間仕切り溝は、幅28cm、長さ80cmで、先端がピット状に丸くなる。南側のものは幅20cm、長さ42cmである。覆土はソフトロームを含み、P1に接する北西壁際に焼土が、カマド前面に焼土粒及び灰を多く含んだ土層が堆積している。

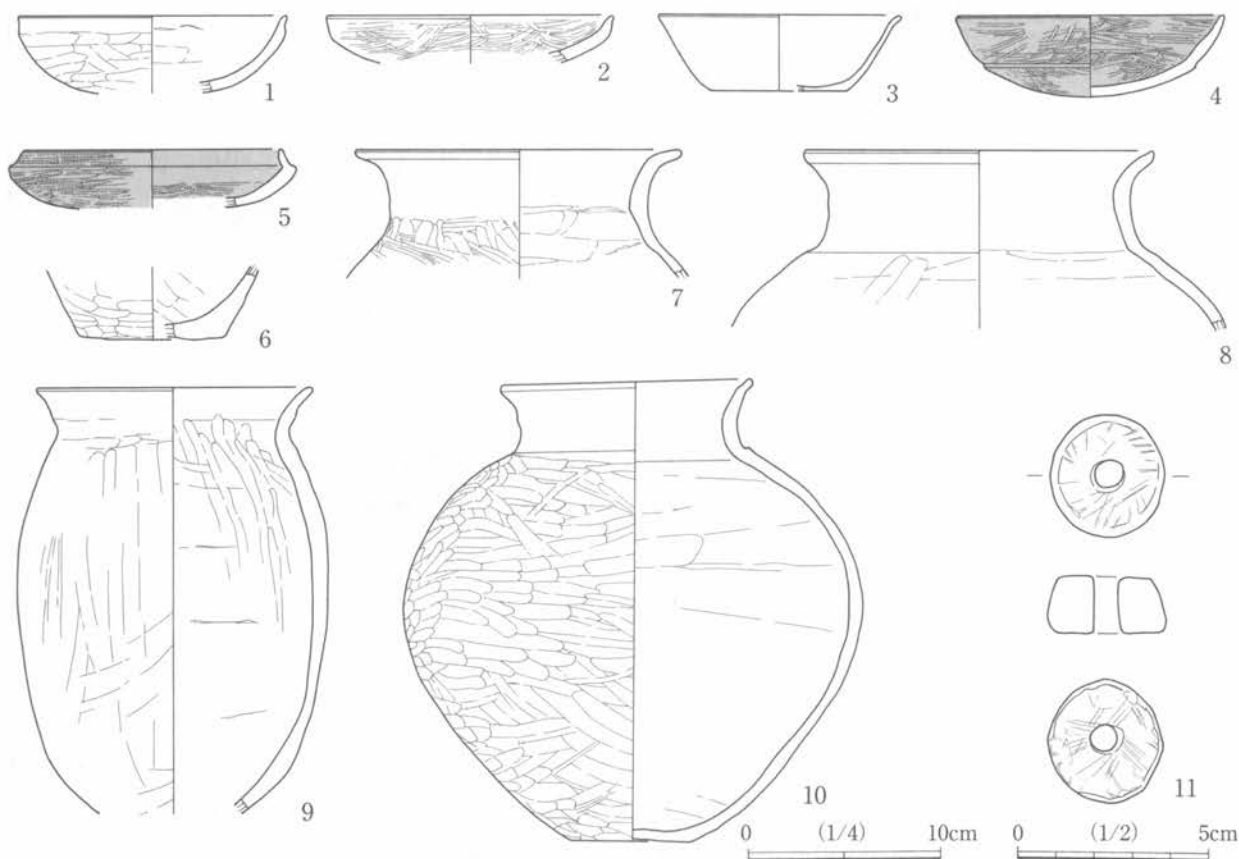
カマドは北西壁中央に位置し、最大幅125cm、袖部は黄灰色砂質土で構築し、壁から85cm延びている。袖部の遺存状況は比較的良好であるが、煙道部の上面まで覆っている。斜面の下位に当たることもあって煙道部の張り出しはほとんどなく、かなり緩やかに立ち上がっている。

遺物は少なく、カマドから北西壁にかけて8・9・10の土師器甕が出土している。

1・2・4・5は土師器坏である。1・2は浅い丸底の坏で、口縁部が直立する。口縁部は短くヨコナデで整え、体部外面は横方向のヘラ削りである。2は内外面ともヘラ磨きを施している。4は蓋模倣の坏で、内外面とも入念に磨き、漆仕上げとみられる。5は身模倣の坏で、口縁部は短く内傾する。体部外面



第174图 SI-074号实测图



第175図 SI-074号出土遺物実測図

は丁寧に磨かれ、内外面とも漆仕上げである。3はロクロ土師器坏で、混入品である。器面の遺存状況が悪いが、体部下端にヘラ削りはなく、底部は全面手持ちヘラ削りである。

7~10は土師器甕である。10は胴部が球形となるもので、7・8もおそらく同じような胴部となると思われる。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部で大きく開く。調整はヨコナデで、端部を丸く収める。胴部は横方向のヘラ削りで、10はさらに丁寧にナデている。9は胴部があまり張らないもので、最大径も胴部下位にある。口縁部は外傾し、ヨコナデで整え端部を丸く収める。胴部外面は縦方向のヘラ削りで、底部近くで横方向のヘラ削りを施している。内面は横方向のヘラナデで、上半に縦方向の強いナデを施す。

11は石製の紡錘具で、表面に放射状の斜行する線刻がある。

第75表 SI-074号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(14.0)	[4.1]	-	1/4	白色粒、石英(少)	黒褐色	炭素吸着	1
2	土師器 坏	(15.0)	[2.5]	-	口縁1/4	白色粒(少)	暗赤褐色	内外、ミガキ	1
3	土師器 坏	(12.6)	[4.0]	(7.0)	口縁1/8-底部1/2	白色粒、スコリア、黄土粒	鈍い褐色	内外面ともに器面ボロボロ	1
4	土師器 坏	(14.0)	[4.3]	丸	1/4	微砂粒、長石(少)	黄灰褐色	内外、漆仕上げ	1
5	土師器 坏	(13.6)	[3.0]	-	口縁1/4	スコリア(少)	暗赤灰色	内外、漆仕上げ、密にミガキ	34
6	土師器 甕	-	[3.8]	7.6	底部2/3	砂粒、長石、黒色粒	内、暗褐色 外、赤色-黒褐色	内外、炭素吸着	1.26
7	土師器 甕	(17.2)	[6.7]	-	口縁1/2	白色砂粒、小石(1mm)、長石、石英 スコリア	内、褐色-暗褐色 外、赤褐色-暗褐色	頸部強くヨコナデ加えられている	2.12
8	土師器 甕	18.2	[9.3]	-	口縁-胴上部完形	砂粒、石(10位)、長石(多)、石英、小石(1mm多)	明褐色-黒褐色	二次的に火を受け、内面剥落	27
9	土師器 甕	(14.4)	[22.2]	-	2/3	白色砂粒、小石、長石、スコリア	黒褐色-明褐色	内、輪積み痕残る 外、剥落著しく全体にスス付着	1.14.24.31.32.34.35
10	土師器 甕	13.2	24.0	6.4	ほぼ完形	砂粒、長石、石英	黄褐色-赤褐色-暗褐色-黒色	器形歪み有り	1.25

### SI-075A・B号竪穴住居跡（第176図，図版37）

本遺構はJ3-27グリッド付近に位置し，東側台地の中央部，標高約36.5mに立地する。A・B2基の住居が重複しており，さらに南側半分がSI-061号竪穴住居跡と重複する。床面はSI-061号の覆土中に作られていることからSI-075号が新しいことが明らかである。A・Bともにほぼ同じ規模の住居で，僅かに位置をずらした建て替えと考えられる。AよりBが先行し，Bはカマドを含む北壁しか残されていない。形態はともに方形で，規模はAが2.4m×2.3m，Bは東西方向で2.0m，主軸方向は南側をAに破壊されているために0.6mまでしか明らかではない。主軸方向はA・BともにN-10°-Wである。Aの壁はやや開いて立ち上がるが，確認面からの深さは約60cmを測り，Bの床面もほぼ同じ高さに構築されている。支柱穴はともになく，遺存の良好なAの東側半分の壁際に壁溝が掘り込まれていることが確認できた。床面はそれほど堅緻ではないが，SI-061号竪穴住居跡の覆土中に位置することもあり，若干砂質の褐色土による貼り床が認められる。覆土はローム粒を含む褐色土であるが，中層に灰褐色砂質土が薄く堆積している。

カマドは北壁中央に位置し，袖部は残されていない。Aのカマド前面には黒褐色の灰が堆積し，煙道部の周辺は炭化した様子が窺える。BのカマドはAのカマドの奥に黄灰色砂質土が堆積した範囲があり，また壁際に溝状の掘込みがあることから，この部分にBのカマドが存在したと判断した。

図示した遺物はすべてAから出土したものである。1は丸底の坏である。口縁部は短くヨコナデを施し，体部外面から底部にかけて横方向のヘラ削りである。内面は体部を横方向，底部を放射状に磨いている。2はロクロ土師器坏で，底部は回転糸切り後周縁部手持ちヘラ削りである。底部外面に墨書される。

3は凝灰岩製の砥石で，一端に孔を穿けかけているが，貫通していない。4は火成岩の礫片で，一部が摩耗している。

第76表 SI-075号出土土器観察表

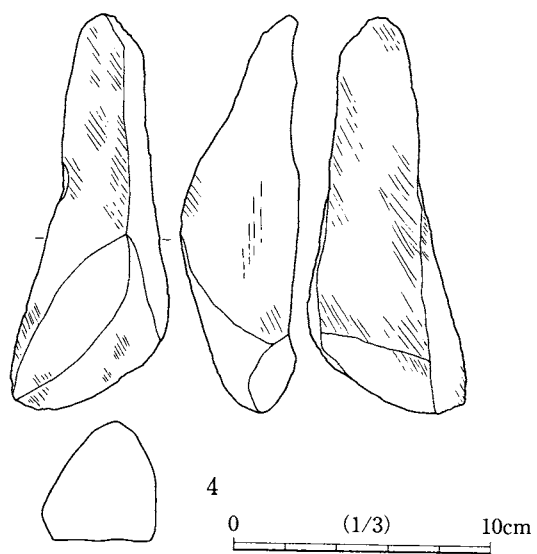
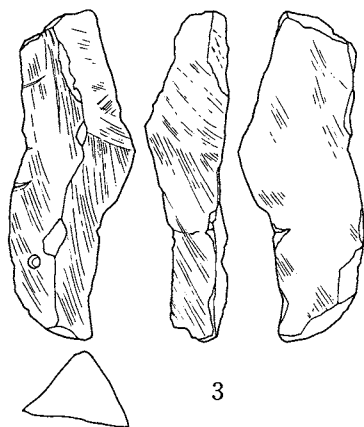
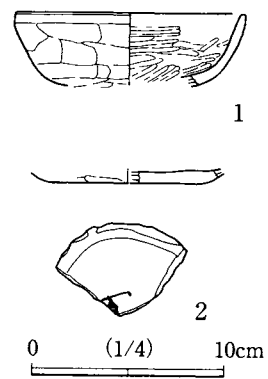
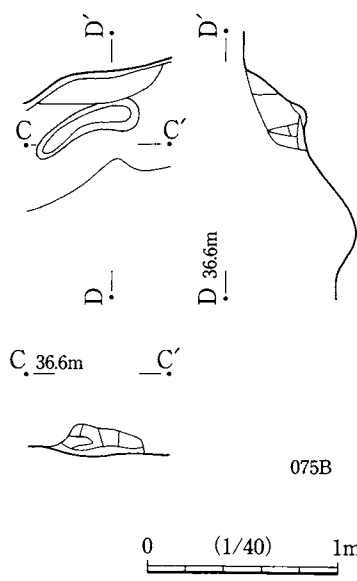
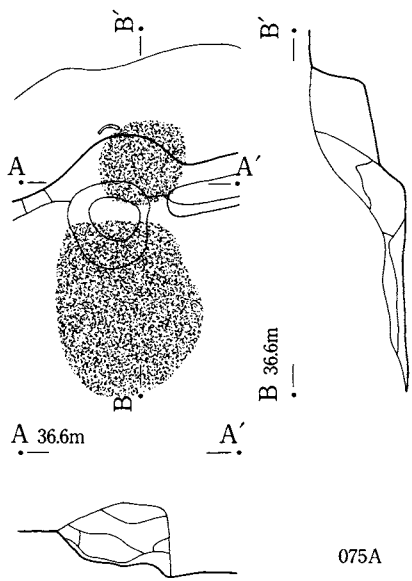
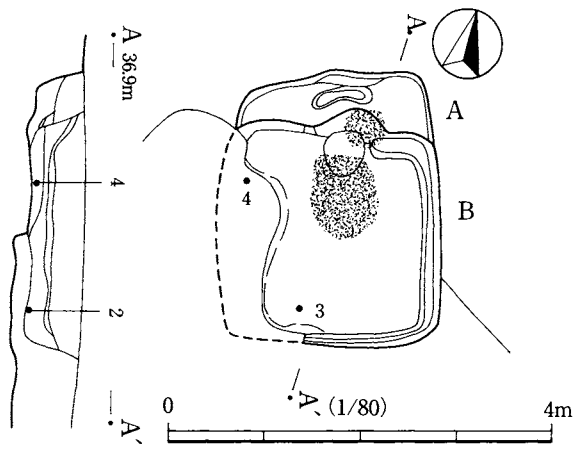
挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(12.0)	[3.8]	-	1/4	砂粒、長石(少)	鈍い黄褐色	器面なめらか	10
2	土師器 坏	-	[0.7]	(8.0)	底部1/4	白色砂粒、長石(多)	褐色	底部墨書「万」?	10

### SI-076号竪穴住居跡（第177，178図，図版37，123，124）

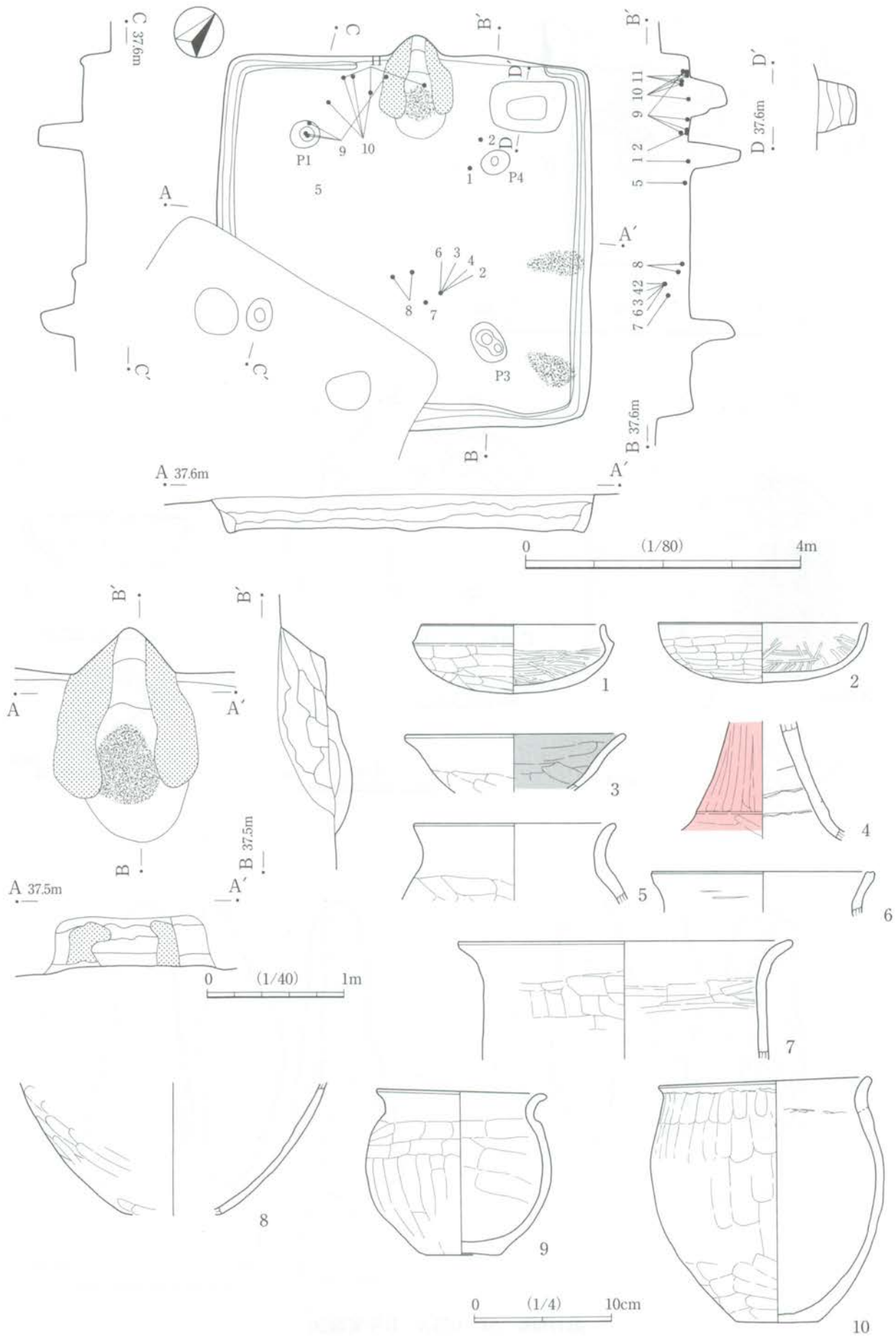
本遺構はK2-68グリッド付近に位置し，東側台地の中央部，標高約37.4mに立地する。住居南側でSI-036号竪穴住居跡と重複し，床面が切られていることからSI-036号に先行する住居であることがわかる。床面はSI-036号が約10cm低く構築されている。形態は方形で，規模は5.4m×5.4mを測り，主軸方向はN-42°-Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，確認面からの深さは39cm～56cmを測る。支柱穴は住居対角線上に4基あるが，SI-036号と重複する位置にあるP2はやや壁側へずれた位置に存在する。直径は概ね40cm前後で，深さは102cm～104cmとほぼ一定で深い。また，P3は2基のピットが連結している。貯蔵穴は住居北コーナーに接して位置し，110cm×73cmの略方形で，床面から67cmの深さがある。貯蔵穴内には底面に近い位置にロームブロックを多く含む土層が堆積している。壁溝は全周するが，SI-036号と重複とする部分は残っていない。覆土は暗褐色土が水平に堆積し，東コーナー床面付近及び北東壁際中央に10cm程度の厚さで焼土が堆積していた。

カマドは北西壁中央に位置し，最大幅107cm，袖部は壁から85cm延びている。袖部は暗灰色砂質土で構築され，構築材そのものの遺存はよくないが，煙道部の奥まで残されている。煙道部は三角形に30cm張り出している。なお，土師器甕(10)はカマド左脇から出土した。





第176图 SI-075A·B号实测图



第177图 SI-076号实测图

1・2は土師器坏である。1は身模倣の坏である。口縁部は内傾しヨコナデ、体部は横方向のヘラ削りである。体部外面はヘラ削り後に丁寧なナデを、内面から口縁部外面にかけてヘラ磨きを施している。なお、内面は漆仕上げとみられる。2は浅い丸底の坏で、口縁部は僅かに外傾する。体部から底部にかけては横方向のヘラ削りで、内外面ともヘラ磨きを施している。

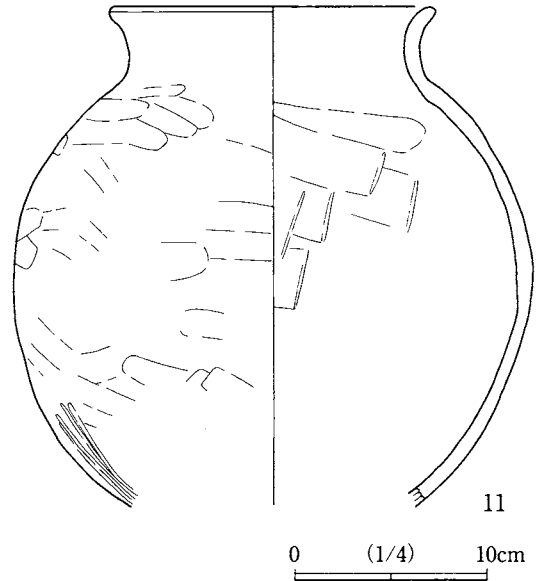
3・4は土師器高坏である。3は坏部の破片、4は脚部の破片で、いずれも小片である。3の外面は赤彩され、内面は黒色処理される。4は脚柱部を縦方向の細かいヘラ削りで、裾部をヨコナデで整える。外面に赤彩される。

5・6・8～11は土師器甕である。5・6は口縁部破片で、口唇部は5が丸く、6は角頭状に収め、頂部に沈線様のくぼみを巡らす。9は小形の甕で、口縁部は大きく外反し、ヨコナデで整える。胴部は上半が横方向、下半が縦方向のヘラ削りである。10は口縁部が短い甕で、口唇部が外側へ反る。胴部は縦方向のヘラ削り、底部近くに横方向のヘラ削りを施す。11は胴部が球形となる大形の甕である。口縁部は外反しヨコナデで整え、胴部は横方向のヘラ削り後、丁寧にナデている。

7は土師器甌と思われ、最大径は口縁部にある。胴部は横方向のヘラ削りで、内面にも砂粒が動く調整が認められる。

第77表 SI-076号出土土器観察表

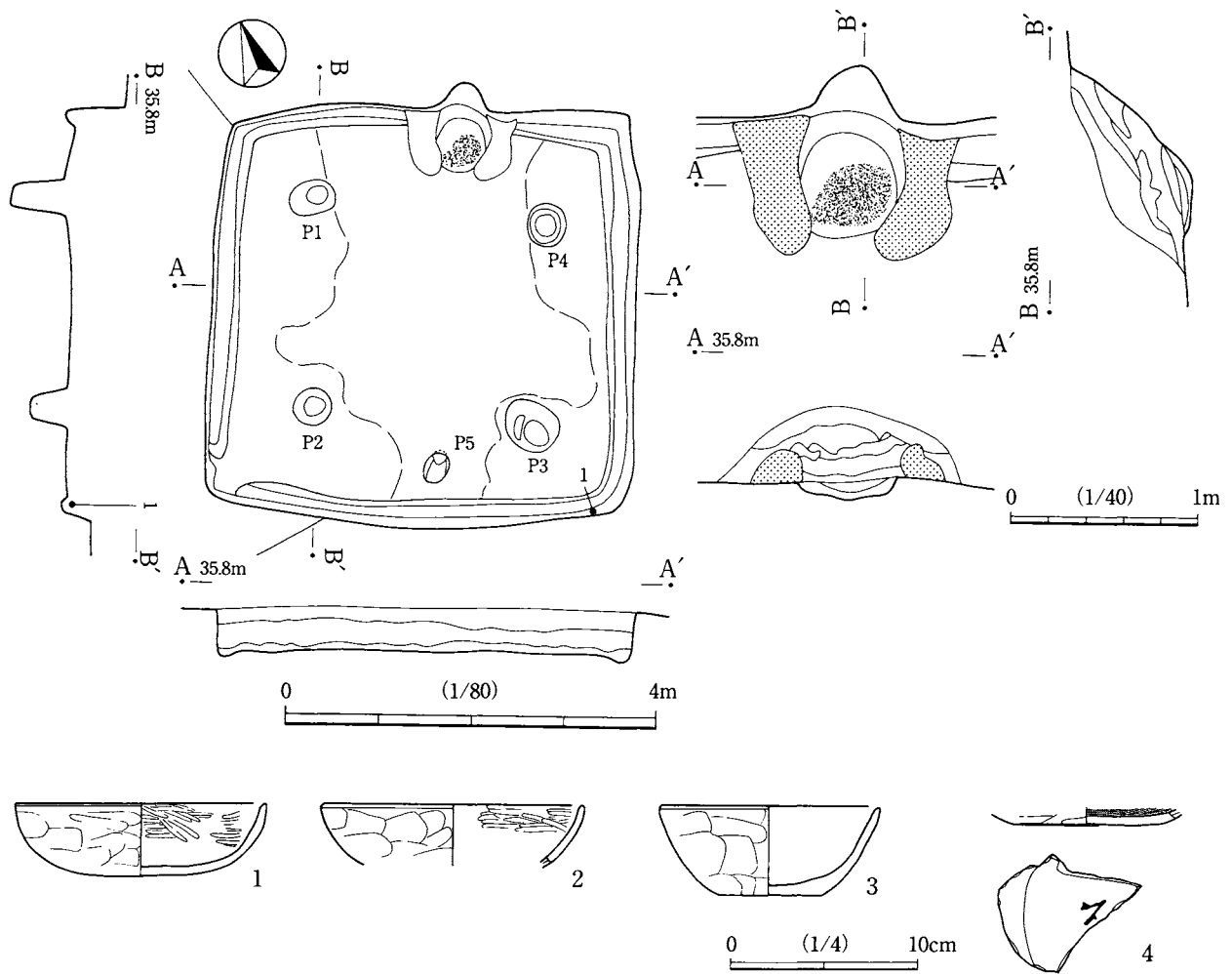
挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	13.5	5.0	丸	完形	砂粒、黒色粒、長石(多)、石英、スコリア	鈍い黄褐色～黒褐色	内、漆仕上げの可能性有り	5
2	土師器 坏	15.2	4.3	丸	ほぼ完形	砂粒、長石、石英、小石	鈍い黄褐色	内、全面ミガキ	4
3	土師器 高坏	(16.1)	[4.1]	—	坏部口縁1/6	白色粒、長石	内、黒色 外、赤褐色	内、黒色処理 外、ヘラケズリ	1
4	土師器 高坏	—	[8.5]	—	脚部1/8	スコリア	内、灰黄褐色 外、赤褐色	内、輪積み痕残る 外、赤彩	1
5	土師器 甕	(14.8)	[5.3]	—	口縁1/5	スコリア、小石	明褐色	器面剥落有り	17
6	土師器 甕	(16.2)	[2.9]	—	口縁1/4	長石、石英、荒砂粒	鈍い褐色	器面剥落著しい	1
7	土師器 甌	(24.3)	[8.5]	—	口縁1/4	石英、長石(多)、スコリア、小石(5mm)	鈍い赤褐色	器面剥落著しい	1
8	土師器 甕	—	[9.9]	(6.8)	底部～胴下部1/3	スコリア、白色微砂粒、小石	内、赤褐色～黒褐色 外、橙色～黒褐色	器面剥落有り	1.21.22
9	土師器 甕	12.5	12.0	5.8	2/3	白色砂粒、長石、石英	内、黄灰色～暗褐色 外、赤褐色～暗褐色	外、全体薄く剥離有り	1.15.16.23.28
10	土師器 甕	15.4	18.1	6.0	ほぼ完形	白色砂粒、長石、石英、小石	赤褐色～黒褐色	内、輪積み痕残る 外、若干摩耗	1.9.10.12.13
11	土師器 甕	16.9	[26.0]	—	2/3	白色砂粒、小石(1mm)、長石、石英	鈍い黄褐色～褐色	内、ヘラナデ痕多く残る	1.9.12.27.30



第178図 SI-076号出土遺物実測図

SI-077号竪穴住居跡 (第179図, 図版38, 124)

本遺構はH4-56グリッド付近に位置し、南側に浅い谷を臨む台地縁辺部、標高約35.7mに立地する。南西側でSI-084号竪穴住居跡と重複し、SI-084号の床面を切って構築している。また、土層断面の観察からもSI-084号より新しいことが確認できた。形態は方形で、規模は4.5m×4.5mを測る。主軸方向はN-6°-Eである。北から南へ向かって緩く下がる斜面に位置するため、確認面からの深さも29cm～59cmとカマド付近が最も深くなっている。主柱穴は住居対角線上に4基配置され、直径は40cm～55cm、深さは29cm～60cmである。傾向として、斜面上位に当たる北側のP1、P4がより深く掘り込まれている。また、南東コーナーに位置するP3は2段に掘り込まれている。梯子ピットは南壁際中央に位置し、



第179図 SI-077号実測図

40cm×23cmの主軸方向に長い楕円形である。床面からの深さは19cmで、壁から住居内側へ向かって斜めに掘り込まれている。壁溝は住居南西コーナーを除いて巡っている。床面はカマドの両脇から梯子ピットにかけた支柱穴の内側に硬化面があり、よく踏み固められている。

カマドは北壁の中央よりやや東に寄った位置にあり、最大幅117cm、袖部は壁から72cm延びている。構築材は暗褐色砂質土で、煙道部には認められない。煙道部は半円形に28cm張り出している。なお、火床部には5cmほどの厚さで焼土が堆積していた。

1～3は土師器坏である。1・2は丸底の坏で、色調・調整が酷似しており、同一個体の可能性もある。口縁部は端部のみをヨコナデで、体部から底部にかけては横方向のヘラ削りを施している。また、外面の全体と内面の体部にヘラ磨きを施し、外面の方がより丁寧である。3は平底の坏で、体部は内湾気味に立ち上がる。口唇部はヨコナデで、体部は横方向、底部は一方向のヘラ削りを施している。4はロクロ土師器坏の底部破片である。体部下端にヘラ削りはなく、底部は全面手持ちヘラ削りである。内面は黒色処理

第78表 SI-077号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(13.5)	3.8	丸	1/2	微砂粒、長石、スコリア(少)	内、暗灰黄色～黒褐色 外、黒褐色	外、ヘラケズリ後強くミガキ復残る	1.4
2	土師器 坏	(14.2)	[3.2]	-	1/5	白色砂粒、長石(少)、スコリア(少)	内、暗灰黄色 外、黒褐色	内外、ミガキ(光沢有り)	1
3	土師器 坏	(11.8)	4.7	(5.3)	1/4	砂粒、黒色粒、長石	内、暗褐色 外、黒褐色	外、炭素吸着	1
4	土師器 坏	-	[0.9]	(8.0)	底部1/4	砂粒、長石、石英	内、黒色 外、鈍い褐色	底部墨書「□」	1

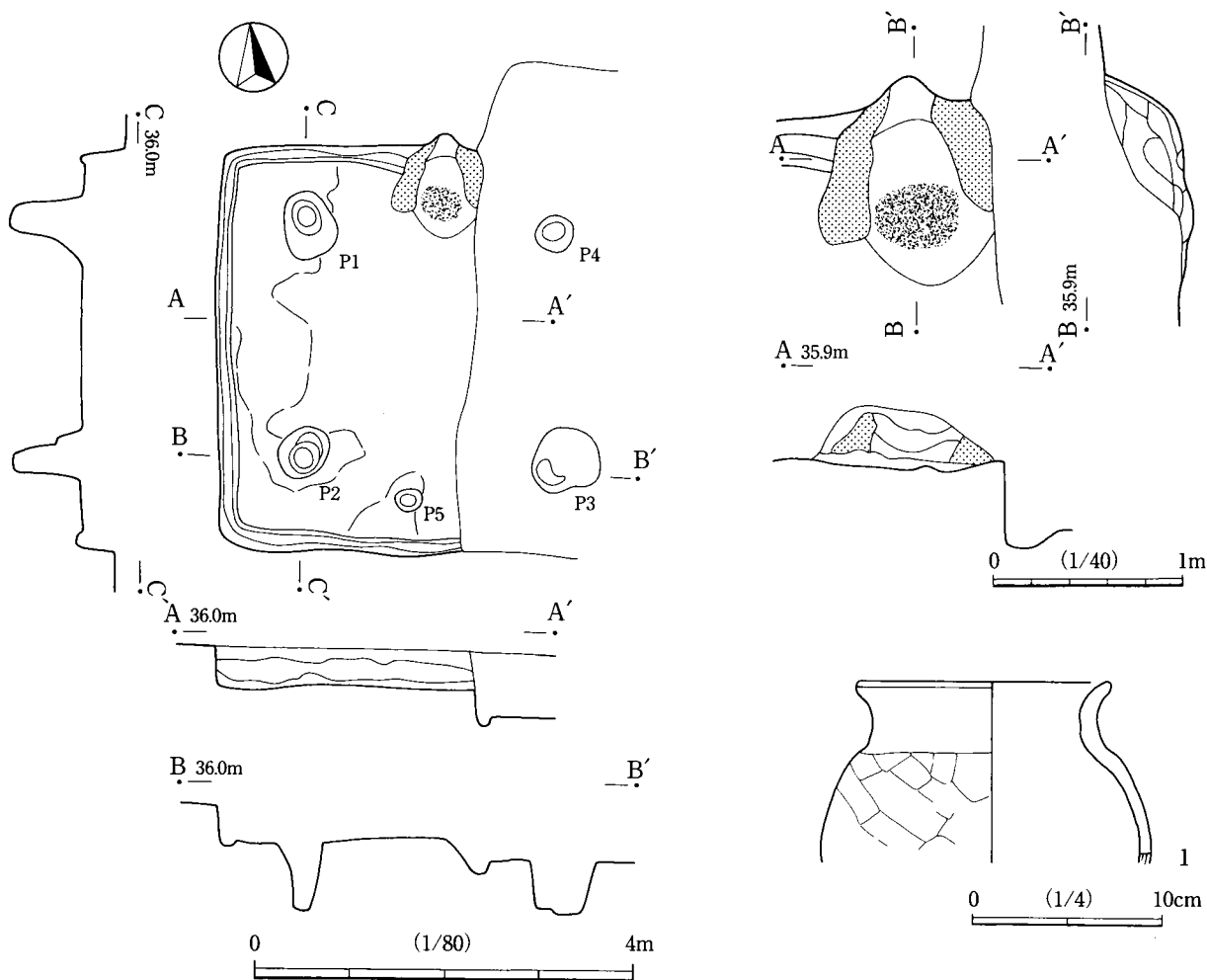
される。底部外面に墨書されるが、釈文は不明である。

**SI-078号竖穴住居跡**（第180図，図版28，124）

本遺構はH4-18グリッド付近に位置し，南側に浅い谷を臨む台地縁辺部，標高約35.9mに立地する。住居東側半分はSI-058号竖穴住居跡と重複し，土層断面の観察からもSI-058号に先行する住居である。形態は方形で，規模は主軸長で4.5m，東西方向はSI-058号に切られるために不明であるが，2.7mまで確認できた。主軸方向はN-10°-Eである。北から南へ向けて緩く下がる斜面に位置するため，確認面からの深さも北壁で46cm，南壁で31cmを測る。支柱穴は4基あるが，東側のP3・P4は重複するSI-058号の床面下から確認された。西側のP1・P2は住居対角線方向に長い楕円形で，P1は68cm×54cm，P2は60cm×49cmを測る。深さは77cm～79cmである。カマドに対するP2とP3の間に梯子ピットがあり，規模は20cm×30cmの楕円形で，深さは29cmを測る。遺存する壁際には壁溝が掘り込まれ，SI-058号に切られた壁際にも巡っていたものと考えられる。床面は住居北東コーナーからP2までの範囲と

第79表 SI-078号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 甕	13.3	[9.5]	-	口縁完形 明上 1/4	白色砂粒(多), 長石, 小石(1mm)	鈍い赤褐色	内外, 著しく剥落	1



第180図 SI-078号実測図

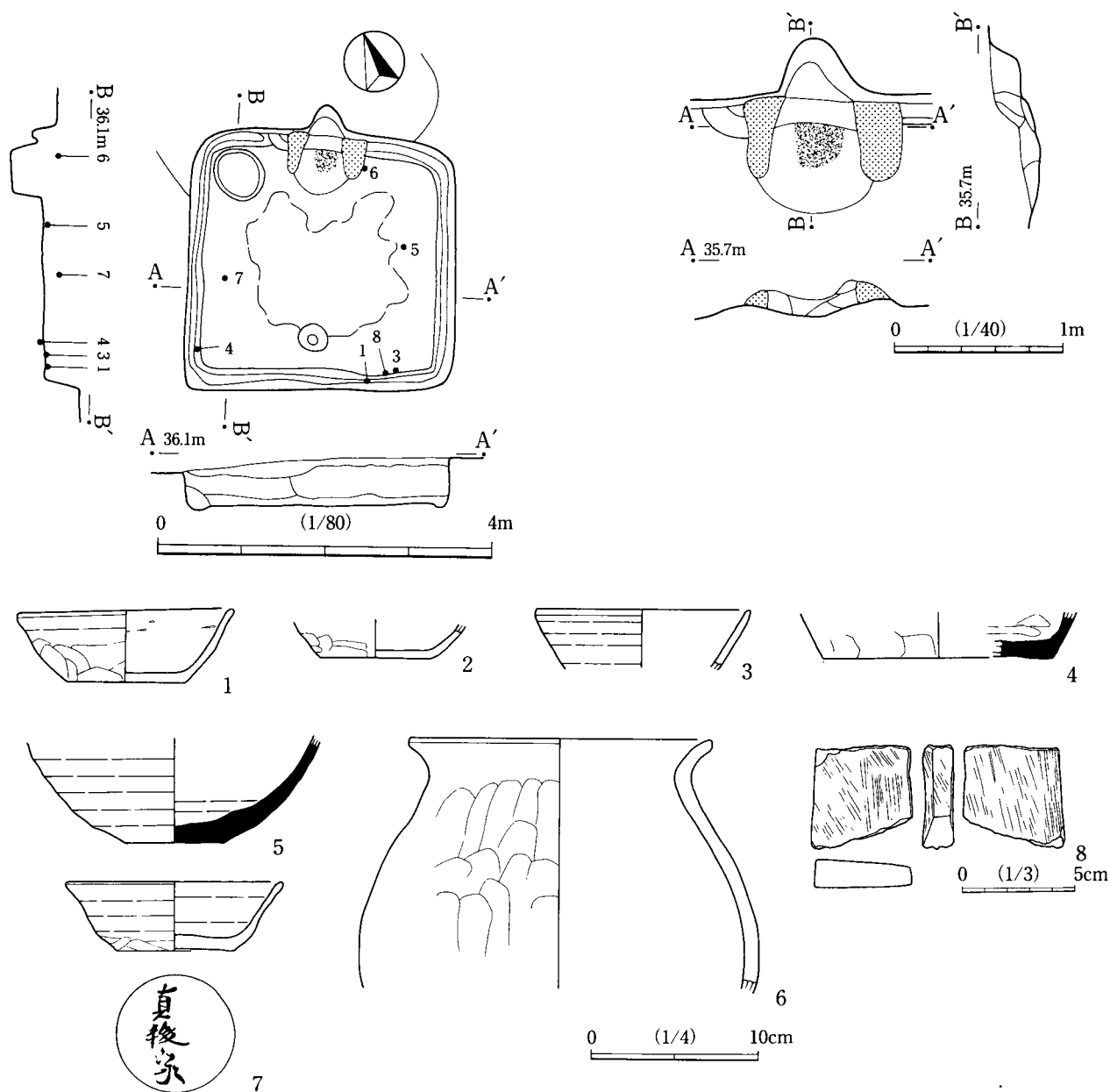
梯子ピット周辺を除く広い範囲に硬化面がある。覆土はローム粒を含んだ暗褐色土が水平に堆積している。

カマドは北壁に位置し、主柱穴との位置関係からほぼ中央であったと推定できる。最大幅は95cmで、袖部は壁から70cm延びている。袖部の構築材は淡黄褐色砂質土で、袖部内側上部は被熱して焼土化している。煙道部の張り出しは三角形で、10cm程度である。

遺物は土師器甕が1点図示できただけである。口縁部は外反し、ヨコナデで整え、口唇部を丸く収めている。胴部は斜め方向のヘラ削りであるが、被熱したため器面の状況は悪い。

**SI-079号竪穴住居跡**（第181図，図版38，124）

本遺構はJ3-92グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約36.0mに立地する。住居北側でSI-050号竪穴住居跡と重複し、SI-079号竪穴住居跡の覆土中にSI-050号の床面が構築されている。その



第181図 SI-079号実測図

ため、本遺構のカマド上面はSI-050号によって切られている。形態は方形で、規模は3.1m×3.2mを測り、主軸方向はN-20°-Eを指す。壁は垂直に立ち上がり、確認面からの深さは60cm前後としっかりし、壁溝が全周している。主柱穴はなく、カマドに対する南壁際中央に梯子ピットがある。梯子ピットは直径約30cmで、床面から約20cm掘り込まれている。また、カマド左の住居北コーナーに接して直径約60cmの貯蔵穴がある。貯蔵穴はほぼ円形で、床面から38cmの深さがある。床面はカマド前面から梯子ピットにかけて硬化面があり、カマド前面はカマドの張り出しに合わせて硬化面が両側に張り出している。覆土は全体にローム粒、ロームブロックを多く含み、人為的埋め戻しと考えられる。

カマドは北東壁中央に位置し、最大幅は92cmである。袖部は黄灰色砂質土で構築され、壁から50cm延びている。袖部の下は、袖部の形状に合わせて床面及び壁を掘り残している。煙道部はU字形で、壁外へ30cm張り出している。

1～3・7はロクロ土師器坏である。1・2・7は体部下端に手持ちヘラ削りを施し、底部は1が四方方向、2は二方向、7は一方向のヘラ削りである。3は体部下端にロクロ右回転の回転ヘラ削りを施している。なお、7は底部外面に「真後家」と墨書される。

4は須恵器甕の底部破片である。5は須恵器の壺か瓶子の底部である。底部は小さいが平坦で、胴部下端から底部全面にかけてロクロ左回転の回転ヘラ削りを施している。6は土師器甕で、胴部中位に最大径が位置すると思われる。口縁部は外反し、ヨコナデで整え、胴部外面は縦方向のヘラ削りである。

8は凝灰岩製の砥石である。

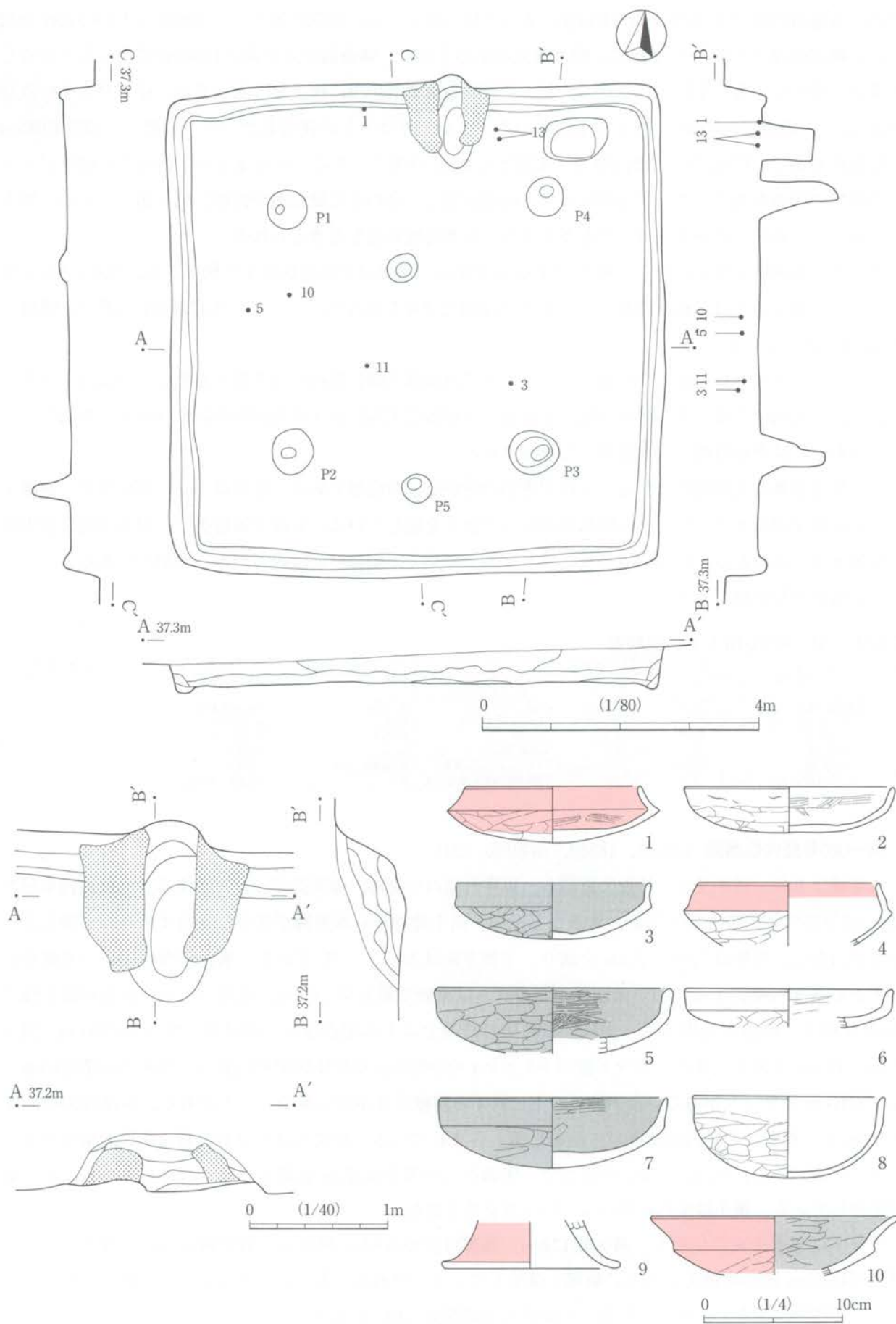
第80表 SI-079号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	ロクロ土師器 坏	13.0	4.5	7.0	ほぼ完形	白色砂粒(多)、小石(1mm)、長石(多)、石英、スコリア	赤褐色	器高左右の差有り	15
2	ロクロ土師器 坏	-	[2.1]	6.6	底部完形	砂粒、スコリア(少)	鈍い黄褐色	内外、摩耗、軟質	1
3	ロクロ土師器 坏	(12.9)	[3.5]	-	口縁1/3	砂粒、長石、スコリア	黄褐色	器面なめらか	2
4	須恵器 甕	-	[2.7]	(13.7)	底部1/4	白色粒	鈍い黄色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	14
5	須恵器 壺	-	[6.3]	5.8	1/4	微砂粒、長石(少)、スコリア(少)	灰白色	東海産系	7
6	土師器 甕	(18.0)	[15.0]	-	口縁-胴部1/4	小石(3mm~7mm)、黒色粒	鈍い黄褐色~橙色	一部煤附着	8
7	ロクロ土師器 坏	13.0	4.2	7.0	2/3	白色砂粒、黒色粒、長石、石英	橙色	底部墨書「真後家」	1.13

#### SI-080号竪穴住居跡 (第182, 183図, 図版38, 124)

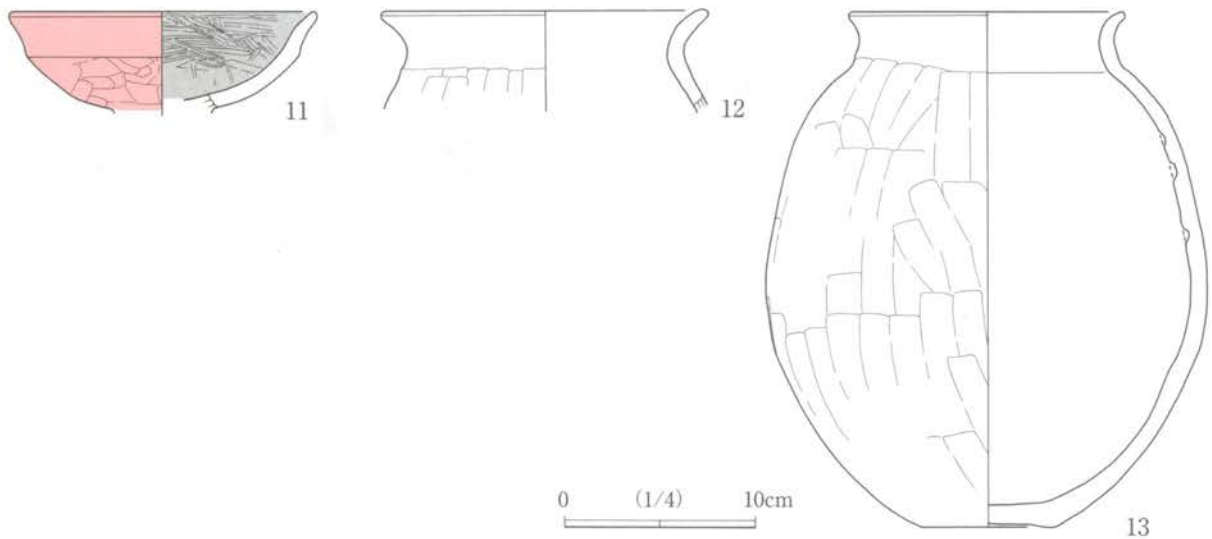
本遺構はK3-13グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約37.2m立地する。北壁の西半分がSI-081号竪穴住居跡と接するが、重複はしない。出土遺物から本遺構が僅かに先行する様相が窺える。形態は方形で、規模は7.0m×7.2mを測り、主軸方向はN-3°-Wである。東から西へ向かって緩やかに下がる斜面に位置するため、確認面からの深さは東壁で最も深く63cm、北西コーナー付近が最も浅く34cmを測り、壁溝が全周する。主柱穴は住居対角線上に4基配置され、直径はいずれも約60cm、深さ95cm~113cmを測る。また、カマド側のP1とP4の中間からやや住居中央へ寄った位置に直径約40cm、深さ約10cmのピットがある。なお、カマドに対する南壁寄り中央に梯子ピットがあり、直径約50cm、深さ56cmで、僅かに住居内側に向けて斜めに掘り込まれている。貯蔵穴はカマド右側の住居北東コーナーに近い位置にあり、94cm×62cmの方形で、床面からの深さは78cmを測る。ローム粒を多く含んだ土層が堆積している。覆土は全体にロームブロックを多く含む。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅123cm、袖部は壁から80cm延びる。構築材は灰白色砂質土で、左側袖部は10cm弱の暗褐色土の上に袖部を構築している。煙道部の張り出しは少なく、急激に立ち上がっている。遺物は少なく、カマド右脇の床面から土師器甕(13)が出土した。



第182图 SI-080号实测图





第183図 SI-080号出土遺物実測図

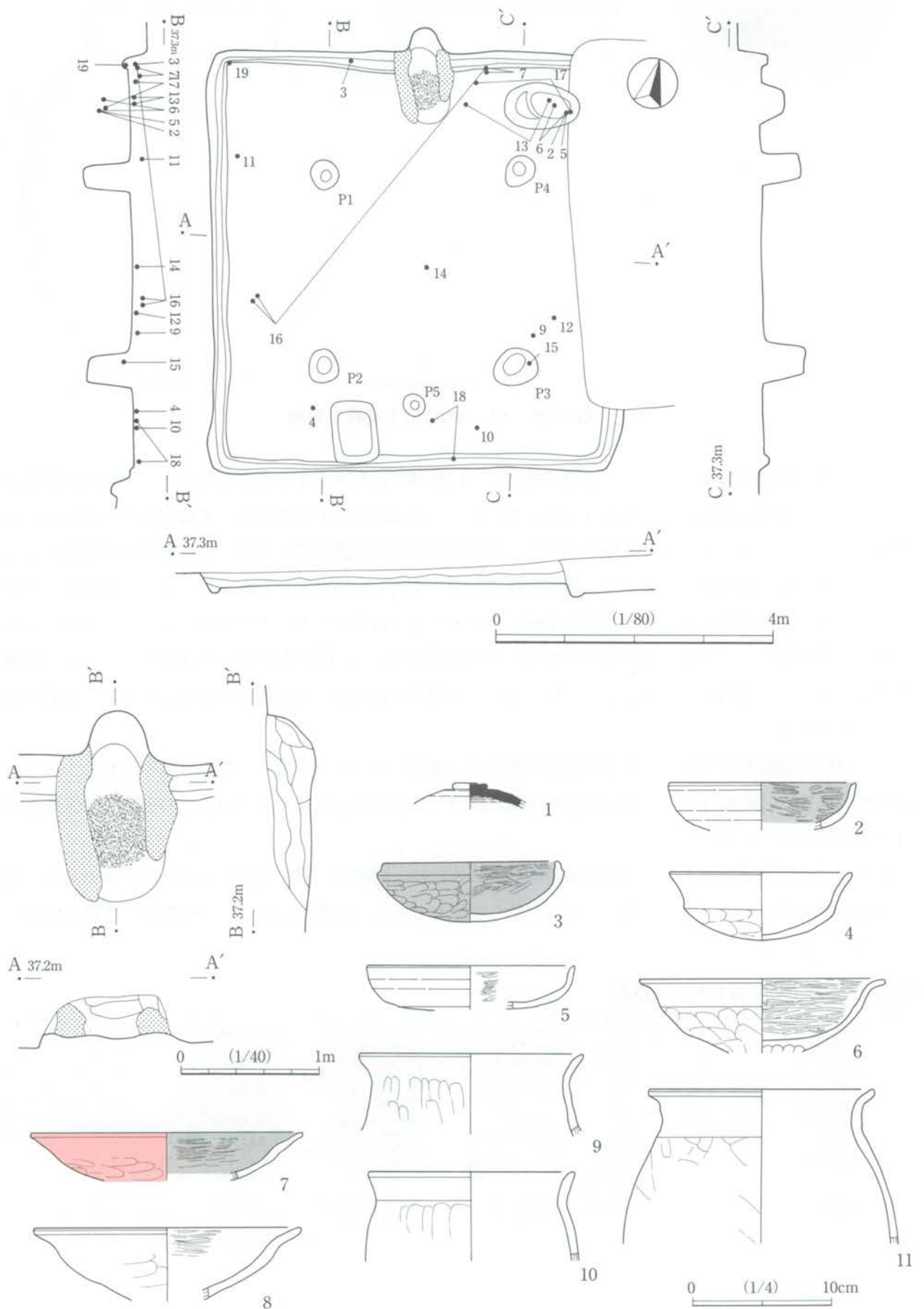
1～8は土師器坏である。1・4は身の模倣で、口縁部は内傾するがやや高さがある。ともに口縁部はヨコナデで、底部は横方向のヘラ削りを施している。1は底部を除く内外面を、4は口縁部の内外面に赤彩している。2・3・5～7は蓋模倣の坏で、2は口縁部がやや開いているが、他の個体はほぼ直立している。いずれも口縁部はヨコナデで、底部は横方向のヘラ削りを施している。また、すべて内面はヘラ磨きがなされ、7は外面も全体にヘラ磨きを施し、2・3・5は磨きに近いナデを施している。なお、4は内面に赤彩を施し、7は漆仕上げとみられる。8は器高が6cmに近いもので、半球形をしている。口縁部はヨコナデで、体部から底部にかけて横方向のヘラ削りを施すが、内外面とも丁寧にナデでヘラ削り痕は不明瞭である。

9～11は土師器高坏である。9は脚裾部の破片で、裾部にヨコナデを施す。外面は赤彩される。10・11は坏部破片で、口縁部はヨコナデ、坏底部は横方向のヘラ削り後丁寧にナデている。内面は黒色処理され、外面は赤彩されている。

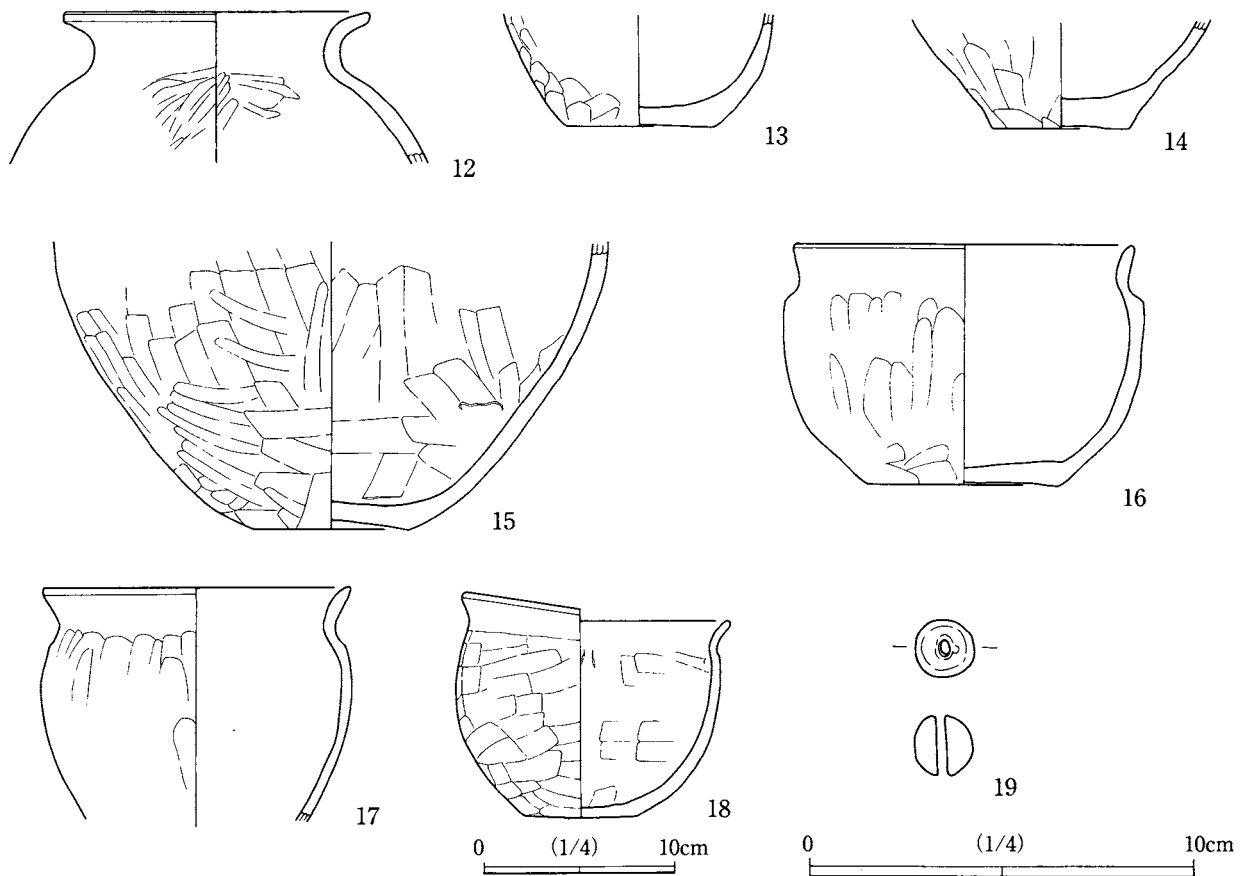
12・13は土師器甕である。12は口縁部の破片である。13は胴部の一部を欠損するがほぼ完形である。最大径は胴部中位にあり、胴部は縦方向のヘラ削りを施している。被熱しており、やや脆弱で、胴部内面上半が剥落している。

第81表 SI-080号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	12.6	4.1	丸	1/2	砂粒、長石、石英、スコリア	赤色+橙黄色	内外、赤彩範囲有り	1.6
2	土師器 坏	(15.0)	3.3	丸	1/3	砂粒、長石(多)、石英(多)	黒褐色一部暗赤色	内外、赤彩か?	1
3	土師器 坏	14.2	4.0	丸	ほぼ完形	砂粒、白針、長石	鈍い褐色～黒褐色	内外、漆仕上げ	7
4	土師器 坏	13.2	[4.5]	—	底裾欠 他2/3	白色砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色～黄灰褐色+暗赤褐色	内外、口縁部赤彩	1
5	土師器 坏	17.0	[4.7]	—	1/2	砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色～黒褐色	内外、漆仕上げ	5
6	土師器 坏	(14.8)	[2.8]	—	1/6	スコリア、長石	明赤褐色	内、ミガキ(光沢あり)	1
7	土師器 坏	16.4	5.1	丸	2/3	砂粒、長石	黒褐色～鈍い黄褐色	内外、漆仕上げ	17
8	土師器 坏	(13.0)	5.9	丸	1/2	白色砂粒、長石、小石	暗赤褐色	外、丁寧にナデ(光沢有り)	1
9	土師器 高坏	—	[3.6]	(12.4)	脚部裾部1/2	石英	内、明赤褐色 外、鈍い赤色	器面摩耗	1
10	土師器 高坏	(19.6)	[4.4]	—	坏部1/5	スコリア、石英、雲母	内、黒色 外、暗赤色	内、黒色処理(吸炭) 外、赤彩	1.4
11	土師器 高坏	(15.8 - 16.0)	[5.3]	—	坏部1/4	スコリア、石英、雲母	内、黒色 外、暗赤色	内、黒色処理 外、赤彩	1.8
12	土師器 甕	(17.2)	[5.3]	—	口縁1/4	白色砂粒、スコリア、長石	内、黒褐色 外、鈍い褐色	内、炭素吸着	1
13	土師器 甕	14.4	26.9	6.8	3/4	白色砂粒、長石	暗赤褐色一部黒色	内外、二次的に火を受け剥落著しい	1.15.16



第184图 SI-081号实测图



第185図 SI-081号出土遺物実測図

**SI-081号竪穴住居跡** (第184, 185図, 図版39, 124, 125)

本遺構はK3-82グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約37.1mに立地する。住居南側でSI-080号竪穴住居跡と接し、東側でSI-082号竪穴住居跡と重複している。SI-082号は本住居の床面を切って構築されており、本住居が先行する。形態は方形で、規模は6.0m×5.9mを測る。主軸方向はN-11°-Wである。東から西へ向かって緩やかに下がる斜面に位置するため、確認面からの深さも東側で38cm、西側で13cmと浅い。壁溝はSI-082号に切られた部分を除いて巡り、本来全周していたものと思われる。支柱穴は住居対角線上に4基配置され、直径は40cm~60cm、深さ58cm~70cmで、斜面下位に当たる西側の支柱穴が東側のものに比べて深く掘り込まれている。カマドに対する南壁際中央には梯子ピットがあり、直径30cm、深さ28cmの円形である。貯蔵穴は住居北東コーナーと南壁際のやや西寄りに2基ある。北東コーナー付近の貯蔵穴は110cm×66cmの楕円形で、底面は2段に掘り込まれ、深さ52cmを測り、周辺に遺物が集中する。南壁に接する貯蔵穴は92cm×66cmの方形で、深さ39cmを測る。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅86cm、袖部は右側の遺存がよくないが、黄灰色砂質土で構築され壁から100cm延びている。煙道部はU字形で、壁外へ30cm張り出している。

1は須恵器坏蓋の破片で、天井部に薄く釉がかかり、扁平なつまみが付いている。2~5は土師器坏である。2・5は浅い丸底の坏で、口縁部は直立する。口縁部はヨコナデで、体部から底部は横方向のヘラ削り後粗くヘラ磨きを施している。内面は横方向のヘラ磨きで、2は内面黒色処理される。3は身の模倣

で、口縁部は短く内傾する。口縁部はヨコナデで、底部は横方向のヘラ削り後僅かにヘラ磨きを施している。内面は斜め方向のヘラ磨きである。内外面とも漆仕上げとみられ、口唇部は摩滅している。4は高坏の坏部のような製品で、口縁部は長く外反している。口縁部はヨコナデで、底部は横方向のヘラ削り後ナデている。

6～8は土師器高坏である。いずれも坏部の破片で、6は坏部のみほぼ完形である。口縁部は外反し、ヨコナデで整え、坏底部は横方向のヘラ削り後7・8にナデを加えている。内面は黒色処理され、6・7は外面に赤彩される。

9～18は土師器甕である。9～13は口縁部の破片で、いずれも口唇部を丸く収める。口縁部はヨコナデで、胴部は11が斜め方向、12が横方向のヘラ削りであるが、他は縦方向のヘラ削りを施している。13～15は底部の破片で、底部近くに横方向のヘラ削りを施し、15はヘラ削り後ナデている。16～18は小形の甕である。口縁部はヨコナデで、胴部は18が横方向、16・17は縦方向のヘラ削りで、16は底部近くに僅かに横方向のヘラ削りを施している。

19は石製の丸玉である。

第82表 SI-081号出土土器観察表

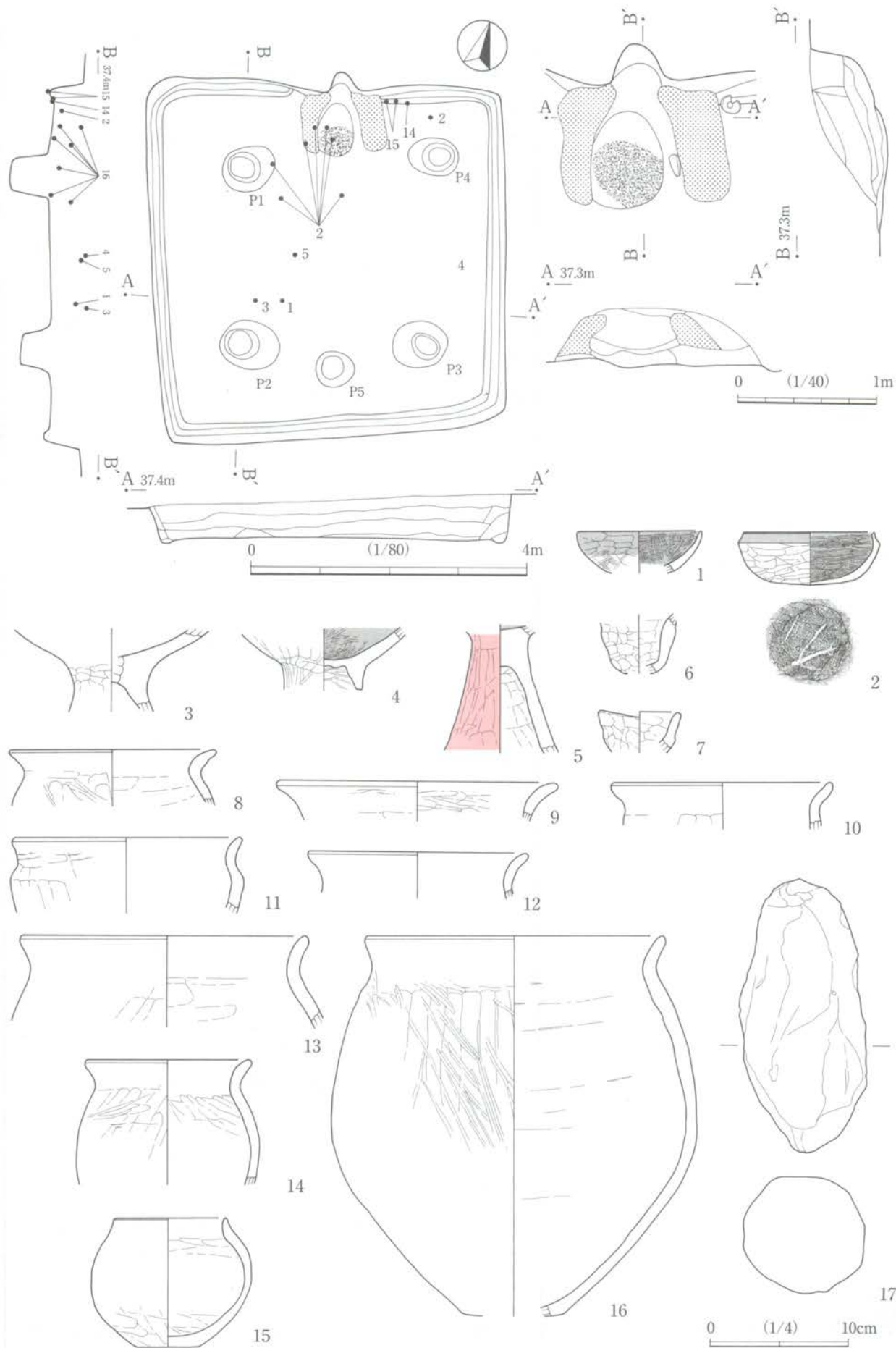
挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 蓋	-	[1.8]	-	つまみ完形	微砂粒、小石(1mm)	灰黄色	東海産系 外、自然灰かかる	33
2	土師器 坏	(13.4)	[3.4]	-	口縁の一部	スコリア	橙色	内、ミガキ 外、器面剥落	41
3	土師器 坏	12.3	4.4	丸	ほぼ完形	砂粒、小石、長石、石英、スコリア	内、暗褐色 外、褐色～暗褐色	内外、漆仕上げ 内、ミガキ丁寧	15.35
4	土師器 坏	13.1	5.0	丸	ほぼ完形	砂粒、小石、長石(多)、石英(多)	内、暗褐色 外、鈍い褐色～暗褐色	内外、漆仕上げの可能性有り	8
5	土師器 坏	(15.1)	[3.2]	-	1/4	粗砂粒、小石、スコリア(多)	鈍い褐色	器面若干摩耗	41
6	土師器 高坏	17.6	[5.4]	-	坏部完形	砂粒、小石(1mm)、長石、石英	鈍い黄褐色+黒色	内、ミガキ	33.38.41
7	土師器 高坏	(19.3)	[5.5]	-	坏部1/4	砂粒、長石、石英、スコリア	内、黒色 外、赤褐色	内、黒色処理 外、赤彩	17.30
8	土師器 高坏	(19.3)	[5.3]	-	口縁の一部	スコリア	内、黒色 外、明赤褐色	内、黒色処理 外、ヘラケズリ	17.30
9	土師器 甕	(16.4)	[5.9]	-	口縁1/4	白色粒	明赤褐色	内、ナデ、器面一部剥落	9
10	土師器 甕	(15.0)	[6.5]	-	口縁1/4	砂粒	赤褐色	器面摩耗	12.36
11	土師器 甕	(15.2)	[11.3]	-	口縁の一部	白色粒	灰褐色～鈍い黄褐色	器面著しく剥落	5.33.35
12	土師器 甕	(15.9)	[8.0]	-	口縁部1/4	砂粒、黒色粒、長石、小石(1mm)	内、浅黄色 外、鈍い黄褐色	やや硬質	10.35
13	土師器 甕	-	[6.0]	7.6	底部3/4	白色砂粒、小石(1～2mm)、長石、石英	内、鈍い黄褐色 外、赤褐色	外、底部摩耗	18.32
14	土師器 甕	-	[5.7]	7.1	底部完形	白色砂粒、長石、石英、スコリア	内、黒褐色 外、灰黄褐色	内、炭素吸着 内外、剥落有り	21.35.36
15	土師器 甕	-	[15.0]	8.0	底部完形 胴下～胴央1/3	砂粒、小石(1mm)、長石(少)、石英(少)	鈍い黄褐色+黒色	底部小さく正円に近い	11
16	土師器 甕	(17.6)	12.5	(9.0)	1/3	砂粒、黒色粒、長石	内、暗褐色 外、鈍い赤褐色	底部楕円に近い	7.16.17.36
17	土師器 甕	(16.0)	[12.3]	-	口縁1/4	白色粒、スコリア(多)	褐色		29.34.40.42
18	土師器 甕	14.2	11.8	5.8	2/3	白色砂粒、小石(1mm)、長石(多)、石英(多)	内、暗褐色 外、鈍い赤褐色～黒褐色	歪み有り	20.27.36.42

### SI-082号竪穴住居跡 (第186図, 図版39, 125)

本遺構はK2-74グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約37.2mに立地する。住居西側でSI-081号竪穴住居跡と重複し、SI-081号を切っている。床面はSI-081号より約20cm低く構築されている。形態は方形で、規模は5.1m×5.2mを測り、主軸方向はN-11°-Wである。壁は垂直に立ち上がり、確認面からの深さは約70cmである。壁際にはカマド部分を除いて壁溝が巡っている。支柱穴は住居対角線上に4基配置されるが、各柱穴を結ぶ方向は各壁の方向と僅かにずれている。支柱穴は住居横軸方向に長い楕円形で、柱穴の長軸長は70cm～80cm、短軸長は50cm～70cm、深さは48cm～56cmである。カマドに対するP2とP3の中間に梯子ピットがあり、50cm×60cmの楕円形で、25cmの深さがある。覆土は全体的にローム粒・ロームブロックを含み水平に堆積する。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅120cm、袖部はソフトロームにハードロームブロックを混入した基盤の上に灰褐色砂質土で構築され、壁から85cm延びている。煙道部は半円形で、壁外へ30cm張り出している。土師器甕(16)はカマド内及びカマド前面から、(14)・(15)はカマド右脇から出土した。

1・2は土師器坏である。ともに口径10cm以下の小振りの坏で、精緻な仕上がりである。1は口縁部



第186图 SI-082号实测图

が直立，2は内傾し，ヨコナデで整える。体部は横方向のヘラ削りで，2の底部は一方向のヘラ削りを施している。内面は横方向に入念に磨かれ，2は底部を一方向に磨いている。ともに漆仕上げとみられる。なお，2の底部には木葉痕とみられるくぼみが残される。

3～5は土師器高坏である。3・4は坏部と脚部の接合部分の破片である。3は器面の遺存状況が悪い。4は坏部内面を黒色処理し，脚柱部も比較的薄く仕上げている。5は脚柱部の破片で，外面は縦方向のヘラ削りを施している。坏部内面は黒色処理が，脚部外面は赤彩される。6・7はミニチュアの土器で，手捏ねである。外面は凹凸がかなりあるが，ヘラ削りを施しており，内面もナデ調整をしている。

8～16は土師器甕である。8から13は口縁部の破片で，いずれも小片である。口唇部は丸く収め，口縁部をヨコナデ，胴部に縦方向のヘラ削りを施している。11は肩が張っている。14・15は小形の甕で，15は胴部からそのまま口縁部となる。口縁部はヨコナデであるが，15は口唇部から口縁部内側にかけてヨコナデを施している。胴部は14が縦方向，15は横方向のヘラ削りで，15はヘラ削り痕がほとんど見えなくなるまでナデを施す。16は大形の甕である。口縁部はヨコナデで，胴部は縦方向のヘラ削りを施すが，ヘラ削り後にナデを加える。

17は土製支脚である。

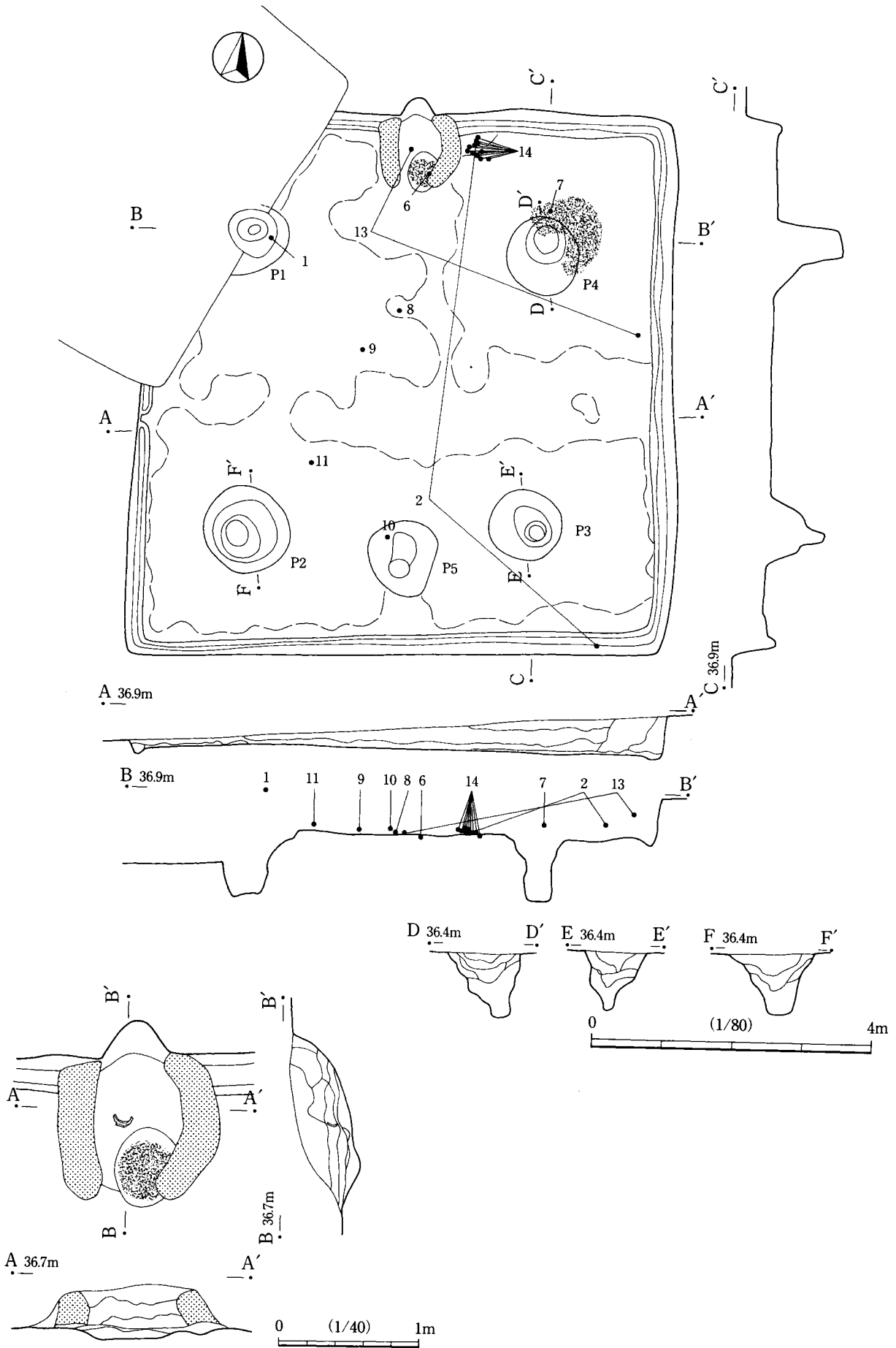
第83表 SI-082号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(9.0)	[3.0]	—	1/7	スコリア(少)	黄褐色	内外、一部漆仕上げ	16
2	土師器 坏	9.5	3.8	6.4	完形	微砂粒、スコリア(少)	内、鈍い黄褐色 外、鈍い黄褐色	漆仕上げ 内、密にミガキ	12
3	土師器 高坏	—	[5.8]	—	坏底部～基部	スコリア	鈍い橙色	器面荒れている	17
4	土師器 高坏	—	[4.5]	—	基部完形	微砂粒、スコリア(少)	灰黄褐色	内、漆仕上げ、丁寧なミガキ	15
5	土師器 高坏	—	[9.2]	—	脚部のみ	砂粒、黒色粒、長石、石英	坏底部、黒色 脚部(内)暗黄灰色 脚部(外)赤色	坏部(内)黒色処理 脚部(外)赤彩	10
6	土師器 手捏	—	[4.2]	(2.4)	体部1/6	白色粒	鈍い黄褐色	内外、指ナデ	1
7	土師器 手捏	(6.0)	[3.0]	—	1/3	砂粒、長石(少)	暗赤褐色	内、指ナデ	1
8	土師器 甕	(15.0)	[4.0]	—	口縁1/6	白色粒	黒褐色	炭素吸着	1
9	土師器 甕	(20.4)	[2.8]	—	口縁片	白色粒、長石	黒褐色	口縁炭素吸着	1
10	土師器 甕	(16.0)	[3.4]	—	口縁1/9	白色粒、石英粒	明褐色	内外、ヨコナデ	1
11	土師器 甕	(16.6)	[5.4]	—	口縁1/8	白色粒	暗褐色	内、剥落著しい	1
12	土師器 甕	(16.0)	[3.2]	—	口縁1/6	白色粒、長石粒	鈍い黄褐色	口縁に黒斑あり	1
13	土師器 甕	(20.4)	[6.7]	—	口縁1/4	白色粒、長石粒、石英粒	鈍い褐色	内外、器面摩耗	1
14	土師器 甕	12.0	[9.0]	—	1/5	砂粒、長石(少)、石英(少)	鈍い黄灰褐色	内、口縁部スス付着 外、若干摩耗	11
15	土師器 甕	8.1	9.5	4.6	ほぼ完形	砂粒、石英(少)	内、鈍い赤褐色 外、暗赤色～黒褐色	外、全体にススが付着し器面の剥落著しい	13.19.23.24
16	土師器 甕	(21.8)	[27.7]	(7.4)	1/3	砂粒、長石、石英、小石(1mm)	明褐色一部黒色	内外、器面剥落	1.3.6.7.8.20.21

SI-083号竪穴住居跡 (第187, 188図, 図版39, 125, 126)

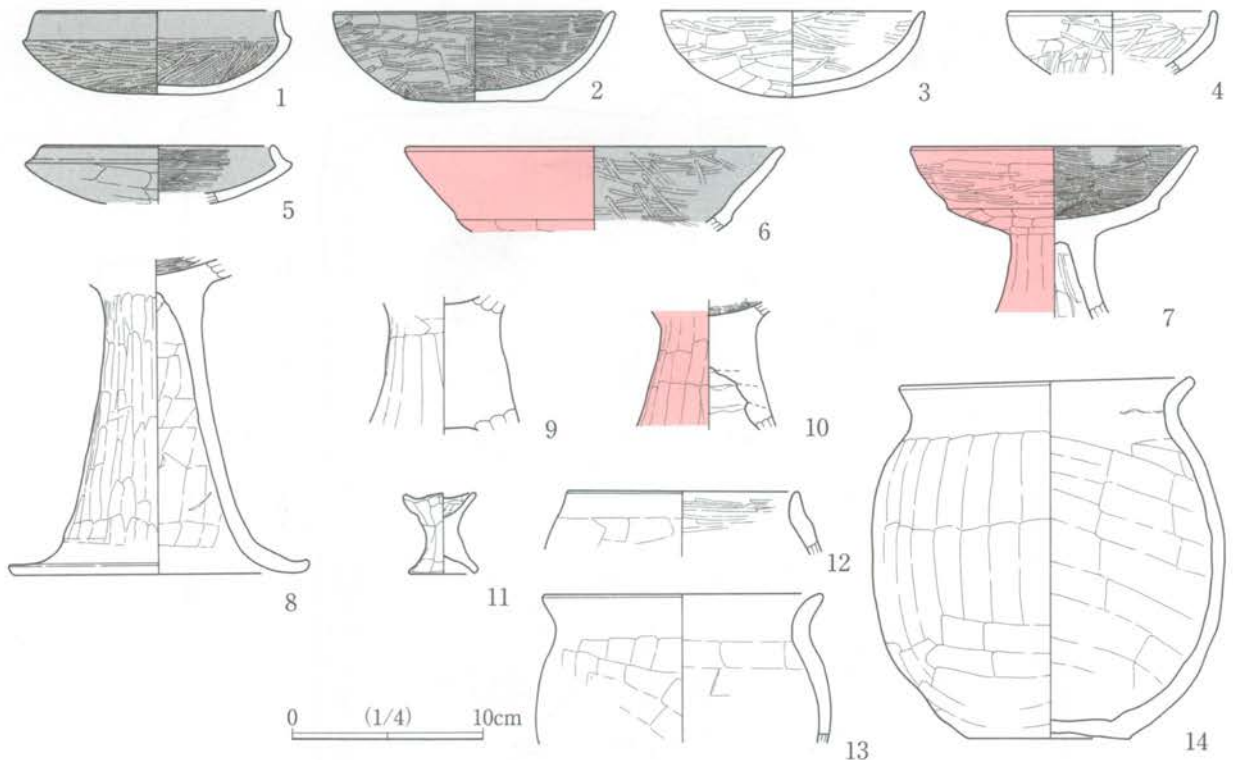
本遺構はJ3-W38グリッド付近に位置し，東側台地の中央部，標高約36.7mに立地する。住居北西コーナー付近でSI-061号竪穴住居跡と重複し，床面がSI-061号に切られるため本住居が先行することが明らかである。形態は方形で，規模は7.8m×7.8mを測り，主軸方向はN-6°-Wである。東から西へ向かって緩やかに下がる斜面に位置するため，確認面からの深さも東壁で63cm，西壁で13cmである。壁際には壁溝が巡るが，西壁中央で僅かに途切れている。主柱穴は住居対角線上に4基配置され，直径は100cm～130cmと大きく，深さは59cm～111cmを測る。主柱穴はいずれも2段に掘り込まれ，中位に炭化材の破片を多く含んだ土層が堆積している。カマドに対するP2，P3の間には梯子ピットがあり，直径95cm，深さ54cmを測る。床面は広い範囲に硬化面があり，よく踏み固められているが，カマド前面から梯子ピットにかけての範囲と東西の壁の中央を結ぶ十字形に硬化面がない部分がある。覆土は全体にローム粒を多く含み，壁際にロームブロックを多く含んだ土層が堆積している。また，P4の北東側の床面には半月形に焼土が堆積し，その中から土師器高坏(7)が出土した。

カマドは北壁中央に位置し，最大幅117cm，袖部は黄灰色砂質土で構築され，壁から90cm張り出して



第187图 SI-083号实测图





第188図 SI-083号出土遺物実測図

いる。煙道部は三角形に20cm張り出し、緩やかに立ち上がる。

カマド内には底面から浮いた状態で土師器甕(13)の破片が立っており、カマド右脇からは土師器甕(14)が出土した。

1～5は土師器坏で1・2はほぼ完形である。1・5は身の模倣である。1の口縁部はやや内傾し、ヨコナデを施す。底部は横方向のヘラ削り後丁寧にナデしており、ヘラ削り痕はほとんど観察できない。5は口縁部が短く内傾し、底部は横方向のヘラ削り、内面はヘラ磨きを施す。漆仕上げとみられる。2は平底の坏で、体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は短くヨコナデで、体部は横方向のヘラ削りを施すが、内外面とも入念に磨かれ、ヘラ削り痕はほとんど観察できない。漆仕上げとみられる。3・4は丸底の坏である。外面は横方向のヘラ削りで、僅かにヘラ磨き様のナデを加える。内面はヘラ磨きを施している。

6～11は土師器高坏である。6は坏部の破片で、内面は黒色処理が、外面は赤彩される。7は坏部から

第84表 SI-083号出土土器観察表

神図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	12.8	4.4	丸	完形	白色砂粒、長石、石英	黒褐色	全面黒色処理 底辺部に孔有り	37
2	土師器 坏	14.7	4.7	7.2	完形	微砂粒、スコリア	鈍い黄灰褐色	外、底部除く全面漆仕上げ	11.24
3	土師器 坏	13.8	4.5	丸	2/3	砂粒、小石(1mm)、長石、石英	暗赤褐色	内外、ミガキ	1
4	土師器 坏	(11.0)	[3.3]	—	口縁1/4	長石、石英、黒色粒、スコリア	赤褐色	器面若干摩耗	1
5	土師器 坏	(12.4)	[3.0]	—	口縁1/4	スコリア	鈍い黄褐色	内、ミガキ	1
6	土師器 高坏	(20.0)	[4.4]	—	坏部口縁1/6	石英、長石	内、黒色 外、赤褐色	内、黒色処理 外、赤彩	35
7	土師器 高坏	15.0	[9.0]	—	1/2	砂粒、長石、石英	坏部(内)黒色 (外)赤褐色	坏部(内)黒色処理 外、赤彩	14
8	土師器 高坏	—	[16.4]	15.8	脚部 完形	砂粒、小石(1-3mm)、長石(多)、石英、スコリア	赤褐色	支脚として転用の可能性有り	12
9	土師器 高坏	—	[7.2]	—	基部完形	砂粒、長石、石英	内、黒色 外、鈍い赤褐色	断面にスス付着、支脚として転用の可能性有り	7
10	土師器 高坏	—	[6.7]	—	基部一脚上部完形	砂粒、長石(少)、石英(少)	内、黄褐色 外、赤褐色	外、赤彩 内、粘土粘巻き上げ痕 明瞭に有り	10
11	土師器 ミニチュア	3.8	4.3	3.7	ほぼ完形	砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色	全体に歪み有り	13
12	土師器 甕	(12.2)	[3.3]	—	口縁1/4	白色砂粒	内、黒褐色 外、鈍い赤褐色	内、ナデ 外、器面剥落	1
13	土師器 甕	14.8	[7.7]	—	口縁3/4	粗砂粒、長石、石英、小石(1mm)	赤褐色～黒褐色	外面、剥落、スス付着	8.32
14	土師器 甕	15.5	18.6	8.2	ほぼ完形	白色砂粒、長石(多)、石英	赤褐色～黒褐色	外、二次的に火を受けてスス付着と器面剥落有り	1.15.16.20.21.23.24.25.26.27.28.29.31



脚部の一部までが遺存している。口縁部は内湾気味に開き、外面は坏底部から口縁部まで横方向のヘラ削りを施している。脚部は縦方向のヘラ削り後ナデている。坏部内面は黒色処理され、ヘラ磨きは口縁部が横方向、底部は不定方向である。外面は坏部、脚部とも赤彩される。8～10は脚部の破片である。8は長脚の高坏となる。脚柱部は縦方向のヘラ削り後僅かにナデを加え、裾部はヨコナデで整える。坏部内面は黒色処理される。9・10は坏部との接合部分で、9は接合部が極めて厚い。9は坏部内面を黒色処理、10は外面に赤彩される。11は手捏ねのミニチュアで、ほぼ完形である。外面には縦方向のヘラ削りが施されている。

12～14は土師器甕で、14はほぼ完形である。12は口縁部が内傾し、ヨコナデで整える。胴部外面は横方向のヘラ削り、内面は横方向のヘラ磨きを施す。13・14は似た器形であるが、胴部は13が横方向、14は縦方向のヘラ削りである。

### SI-084号竪穴住居跡（第189図、図版40、126）

本遺構はH4-43グリッド付近に位置し、南側に浅い谷を臨む台地縁辺部、標高約35.7mに立地する。住居南東側でSI-077号竪穴住居跡と、南西側でSI-085号竪穴住居跡と重複する。SI-077号が本遺構の床面を切って構築されるため、本遺構が先行する。またSI-085号は壁の一部が重複するのみで、出土遺物の様相から本遺構が先行すると判断できる。形態は南東コーナーがやや張り出す方形で、規模は5.8m×5.5mを測る。主軸方向はN-18°-Wである。北から南へ向けて緩やかに下がる斜面に位置するため、確認面からの深さは北壁で46cm、南壁は存在しない。壁溝は全周する。

主柱穴は住居対角線上に4基配置されるが、住居南東コーナーがやや張り出す形状をしているのに対し、主柱穴であるP3はやや内側へ寄った位置にある。カマド側に位置するP1・P4は住居対角線方向に長い楕円形で、P1が90cm×80cm、P4が90×65cmを測り、P4は2基のピットが集合している。深さは46cm～59cmを測る。カマドに対する南壁際中央には梯子ピットがあり、40cm×50cmの楕円形で、深さは25cmである。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅115cm、袖部は黄灰色砂質土で構築され、壁から80cm延びている。煙道部は三角形に20cm張り出している。カマド前面から土製支脚(8)が出土した。

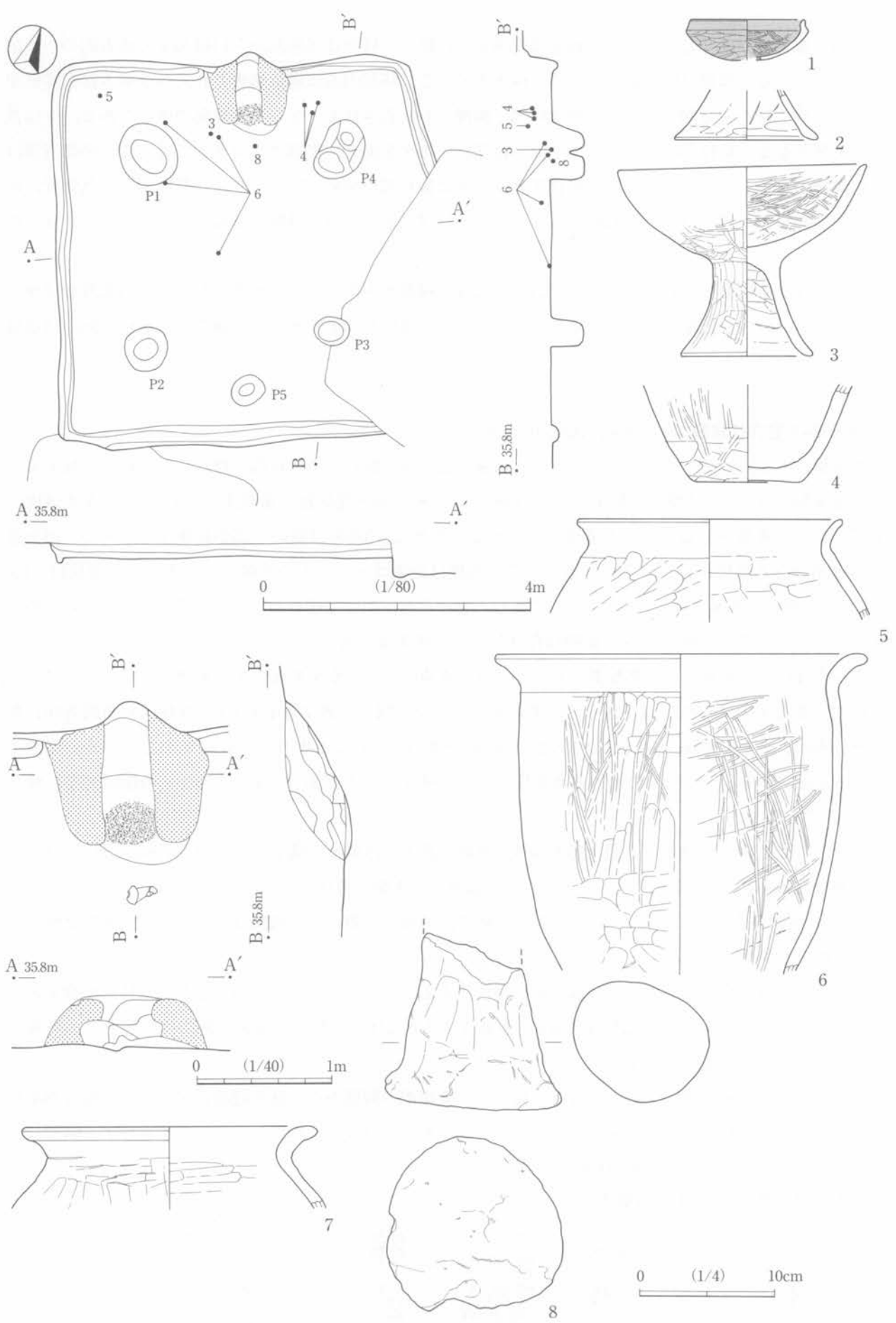
1は土師器坏である。口径8.4cmの小振りの坏で、口縁部も短い。口縁部はヨコナデで、底部は横方向のヘラ削りを施す。

2・3は土師器高坏である。2は脚裾部の破片である。3は坏部を一部欠損するが、全体形が窺える。脚部はあまり長くないが、坏部は深く6cmを測る。外面は坏部、脚部とも縦方向のヘラ削りで、坏部に横方向のヘラ磨きをまばらに施す。

4・5・7は土師器甕である。4は底部破片で、破損部の観察から、粘土紐接合に当たって接合部を刻んでいることが観察できる。5・7は口縁部の破片である。口縁部は外反し、ヨコナデを施す。胴部は5が斜め方向及び縦方向、7が縦方向のヘラ削りである。

第85表 SI-084号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(8.4)	[3.0]	—	1/2	微砂粒、スコリア(少)	鈍い黄褐色	内外、漆仕上げ 軟質	1
2	土師器 高坏	—	[3.7]	(10.6)	脚部1/3	スコリア(少)	鈍い黄褐色	軟質な焼成	1
3	土師器 高坏	18.4	14.2	9.6	2/3	砂粒、小石(1-3mm)、長石、石英、スコリア	明褐色	内外、器面摩耗	1.26.30
4	土師器 甕	—	[7.3]	7.8	底部完形	砂粒、長石、石英	鈍い褐色	二次的に火を受けて器面著しく剥落	3.4.5.30
5	土師器 甕	(19.6)	[7.5]	—	口縁1/4	白色粒、石英、スコリア	暗褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ後ナデ	12
6	土師器 甕	(27.6)	[23.7]	—	1/12	白色粒、長石、石英、スコリア	褐色	内、ナデ後ミガキ 外、ヘラケズリ後ミガキ	8.10.14.25
7	土師器 甕	(22.0)	[6.3]	—	口縁1/3	白色砂粒、長石(多)、石英	褐色	器面摩耗気味	24



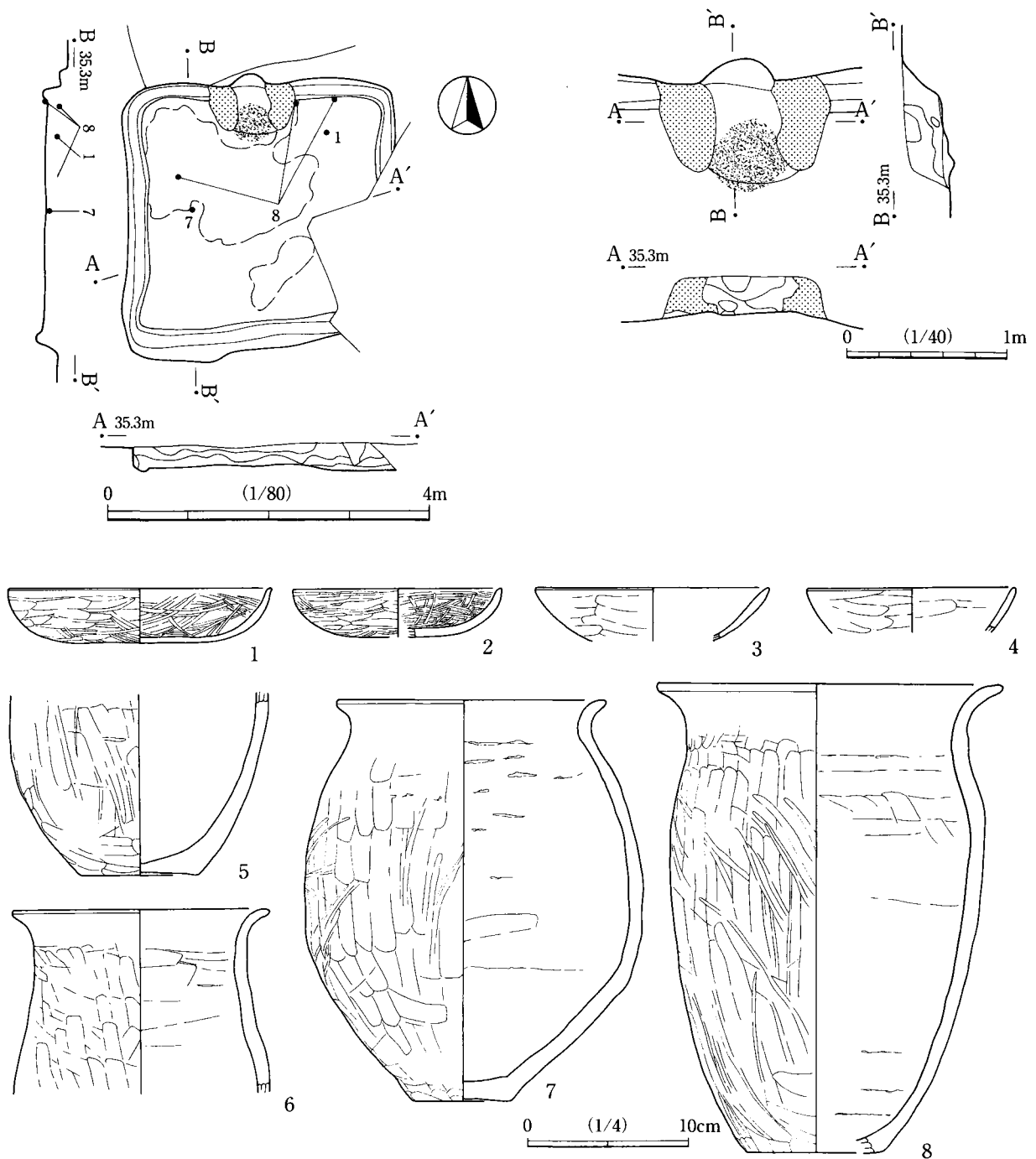
第189图 SI-084号实测图

6は土師器甕である。口縁部は外反しヨコナデを施す。胴部は上半が縦方向、下半が横方向のヘラ削りで、内外面とも縦方向のヘラ磨きを粗く施している。

8は土製支脚である。

SI-085号竪穴住居跡 (第190図, 図版40, 126)

本遺構はH4-74グリッド付近に位置し, 南側に浅い谷を臨む台地縁辺部, 標高約35.2mに立地する。北側にSI-084号竪穴住居跡が接しており, 出土遺物の様相から本住居が新しい。また, 住居南東コーナ



第190図 SI-085号実測図

一付近は攪乱され、コーナーから床面の一部が失われている。形態は歪な方形で、規模は3.3m×3.3mを測り、長軸方向はN-3°-Wである。北東から南西へ向けて緩やかに下がる斜面に位置するため、確認面からの深さも北東コーナー付近で29cm、南西コーナー付近で18cmである。壁溝は全周し、支柱穴・梯子ピットは存在しない。床面は住居北西側の約1/4の範囲と、その南東側の狭い範囲の2か所に硬化面が確認できた。覆土は全体的にロームブロックを含む。

カマドは北壁の中央よりやや西へ寄った位置にあり、最大幅105cm、袖部はソフトロームを主体とした土層の上に黄灰色砂質土により構築され、壁から55cm延びている。煙道部は半円形で、壁外へ10cm張り出している。

第86表 SI-085号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(16.4)	[3.4]	9.6	1/2	微砂粒、長石(少)、石英(少)	内、鈍い黄褐色 外、鈍い黄褐色+黒色	底部全体黒斑	4
2	土師器 坏	(13.0)	3.0	丸	1/4	スコリア	橙色	器面なめらか 内、ミガキ 外、ヘラケズリ後ミガキ	1
3	土師器 坏	(14.6)	[3.3]	-	1/8	白色粒、長石、スコリア	鈍い赤褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ後ナデ	1
4	土師器 坏	(13.0)	[2.8]	-	口縁1/6	白色粒	黒褐色	炭素吸着有り	1
5	土師器 甕	-	[11.3]	7.2	1/3	粗砂粒、長石、石英、スコリア	鈍い黄褐色	内面剥落	1
6	土師器 甕	(16.0)	[11.5]	-	1/6	粗砂粒、黒色粒、長石、石英	内、灰黄褐色 外、黒褐色	二次的に火を受ける	1
7	土師器 甕	(17.0)	25.2	6.4	口縁1/4 他3/4	白色砂粒、黒色粒、長石(多)、石英	内、鈍い赤褐色 外、鈍い黄褐色+黒色	器面歪み有り 内、剥落有り、接合痕多い	1.6
8	土師器 甕	21.4	29.4	4.4	2/3	砂粒、小石、長石(多)	内、明赤褐色 外、鈍い黄褐色、褐灰色、黒褐色	内、二次的に火を受けた剥落有り	2.3.5

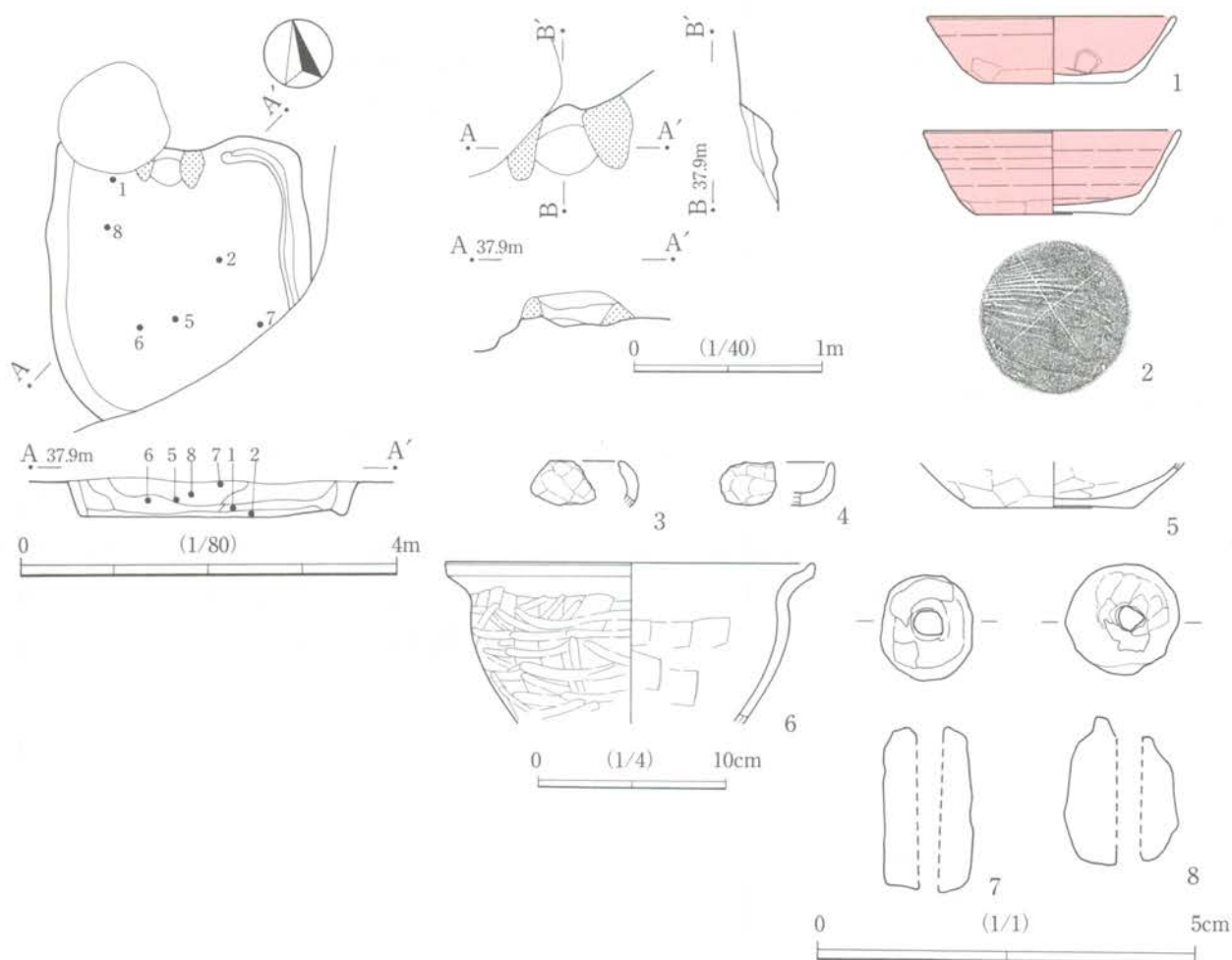
1～4は土師器坏である。1・2は体部が内湾して立ち上がる丸底の坏である。口唇部にヨコナデを施し、体部から底部にかけて横方向のヘラ削りである。内面は横方向のヘラ磨きである。3・4は体部が直線的に開くもので、底部の形状は不明である。口縁部に短くヨコナデを施し、体部外面は横方向のヘラ削りである。

5～8は土師器甕である。5は胴部下半から底部にかけての破片で、胴部外面は縦方向のヘラ削りを施し、底部近くで横方向のヘラ削りを加える。内面は斑点状に剥落している。6は口縁部から胴部上半の破片で、胴部はあまり膨らまない。口縁部は外反しヨコナデを施す。胴部は縦方向のヘラ削りを施している。7は胴部下半で急にすぼまる。口縁部は外反し、口縁部の途中から胴部に向けて縦方向のヘラ削りを施している。内面は胴部上半に5段の粘土紐接合痕を残す。8は土師器甕である。長胴の甕で、最大径は口縁部にある。口縁部は大きく外反し、ヨコナデである。胴部は縦方向のヘラ削りをナデ消す。底部近くには横方向のヘラ削りも施している。

#### SI-086号竪穴住居跡 (第191図, 図版40, 126, 127)

本遺構はQ2-00グリッド付近に位置し、北側に谷を臨む台地縁辺部、標高約37.7mに立地する。南東側の一部は事業範囲外に含まれ、未調査の部分がある。また、北西コーナーはSK-068号土坑に切られている。形態は方形で、規模は東西軸長2.8m、主軸長は2.9m以上である。主軸方向はN-11°-Eである。壁はやや開いて立ち上がり、確認面からの深さは30cm前後である。壁溝は北壁のカマド東側から東壁にかけて巡り、西壁には巡らされていない。また、支柱穴及び梯子ピットは存在しない。覆土は全体的にローム粒を多く含み、南壁に近い位置に僅かに焼土が堆積している。カマドは北壁中央に位置し、SK-068号により右側袖部から煙道部にかけての一部を破壊されている。他の部分も遺存状況は不良で、袖部は灰白色砂質土を含んだ褐色土で構築している。煙道部の張り出しも小さい。

1・2は土師器坏で、ともに内外面とも赤彩される。体部下端は手持ちヘラ削りで、底部は一方向ヘラ削りを施す。2は静止糸切り痕が僅かに残る。なお、1は体部内面の身込み部分にかかって線刻が、2は



第191図 SI-086号実測図

底部外面に「×」の線刻がある。また、2は体部下端が摩滅している。3・4は土師器杯のミニチュアで、手捏ねである。5も杯と思われる。体部下端に僅かに手持ちヘラ削りを施し、底部は全面手持ちヘラ削りである。

6は土師器甕である。最大径は口縁部にあり、胴部は底部に向けてすぼまる。口縁部は受け口状を呈し、ヨコナデを施す。胴部は縦方向のヘラ削り後横方向の粗雑なヘラ磨きを施している。内面は横方向のヘラナデである。

7・8は管状土錘で、指頭で押さえた調整である。

第87表 SI-086号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	ロクロ土師器 杯	13.2	3.6	7.8	2/3	微砂粒、長石、黒色粒	赤褐色	全面赤彩 内、線刻	2
2	ロクロ土師器 杯	(13.6)	4.5	8.2	口縁1/5 底完形	微砂粒 長石(少)	赤褐色	全面赤彩 外、底部線刻	7
3	土師器 手捏	-	-	-	体部片	砂粒、長石、スコリア	褐色		1
4	土師器 手捏	-	-	-	1/6	白色砂粒、長石、スコリア	黒褐色		1
5	ロクロ土師器 杯	-	[2.5]	8.4	底部完形	砂粒、石英、スコリア	鈍い黄褐色	内、剥落有り	6
6	土師器 甕	(19.6)	[8.5]	-	1/7	白色砂粒、長石、石英、小石(1mm)	赤褐色	外、荒くミガキ(光沢有り)	1,5

### SI-087号竪穴住居跡 (第192図, 図版40)

本遺構はO2-77グリッド付近に位置し、北側に谷を臨む台地縁辺部、標高約38mに立地する。南側約1/2は事業範囲外に含まれ、未調査であるとともに、SI-088号竪穴住居跡と重複している。土層断面の観

察から SI-088号に先行することが明らかである。形態は方形で、規模は東西軸長3.3m を測る。主軸方向は N-2°-W である。壁は垂直に立ち上がり、確認面からの深さも75cm としっかりしている。壁溝はカマド部分を除いて巡り、支柱穴等は検出できなかった。覆土は上層で焼土を多量に含み、下層でロームブロックを含んだ土層が堆積している。東方向から埋め戻されたことが想定できる。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅85cm、袖部は灰褐色砂質土で構築され、壁から65cm 延びている。煙道部の張り出しはU字形で、壁外へ15cm 張り出し、急激に立ち上がっている。

図示できる遺物は出土しなかった。

### SI-088号竪穴住居跡 (第192図, 図版40, 127)

本遺構は O2-86グリッド付近に位置し、北側に谷を臨む台地縁辺部、標高約38m に立地する。ほとんどの範囲は事業範囲外に当たり、北西コーナーを含み、北壁を1.6m、西壁を1.0m 調査しただけである。また、北側に重複する SI-087号竪穴住居跡より新しい住居である。形態は方形と考えられ、規模は不明である。主軸方向は僅かに検出した壁の方向から N-10°-W 前後と想定できる。壁は垂直に立ち上がり、確認面からの深さは45cm~60cm としっかりしている。調査範囲の壁際には壁溝が巡るが、カマドを含めその他の施設は一切不明である。

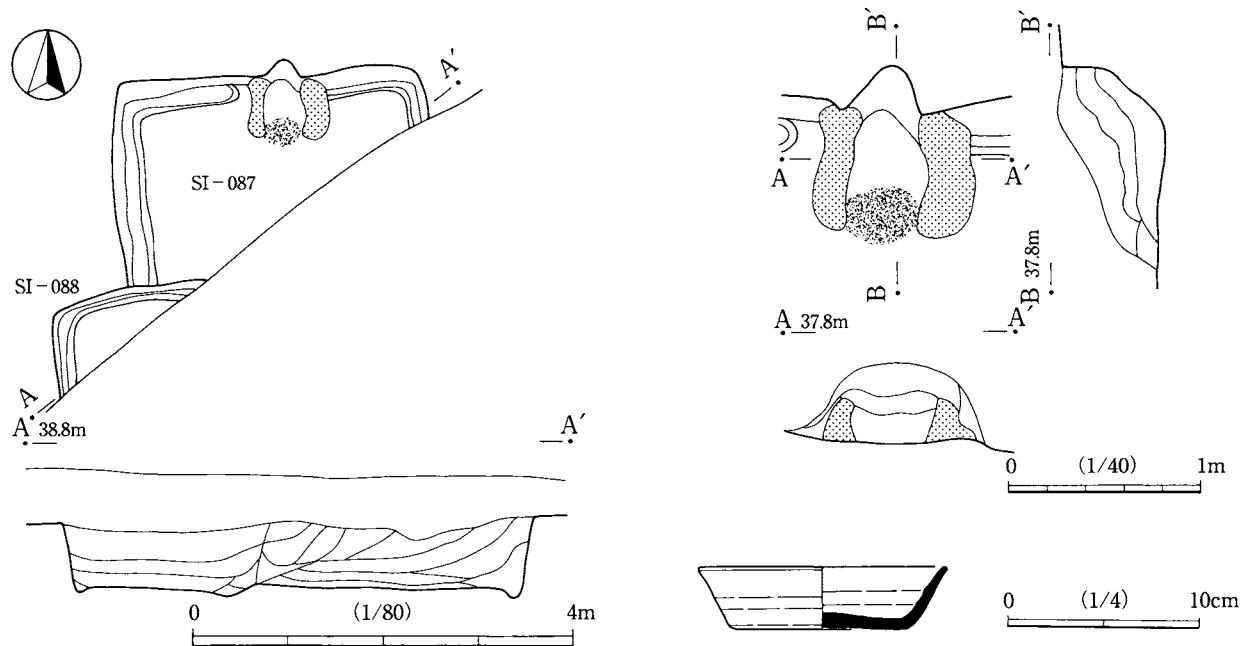
1 は須恵器坏である。体部は直線的に立ち上がり、体部下端にヘラ削りはみられない。底部は全面手持ちヘラ削りである。

第88表 SI-088号出土土器観察表

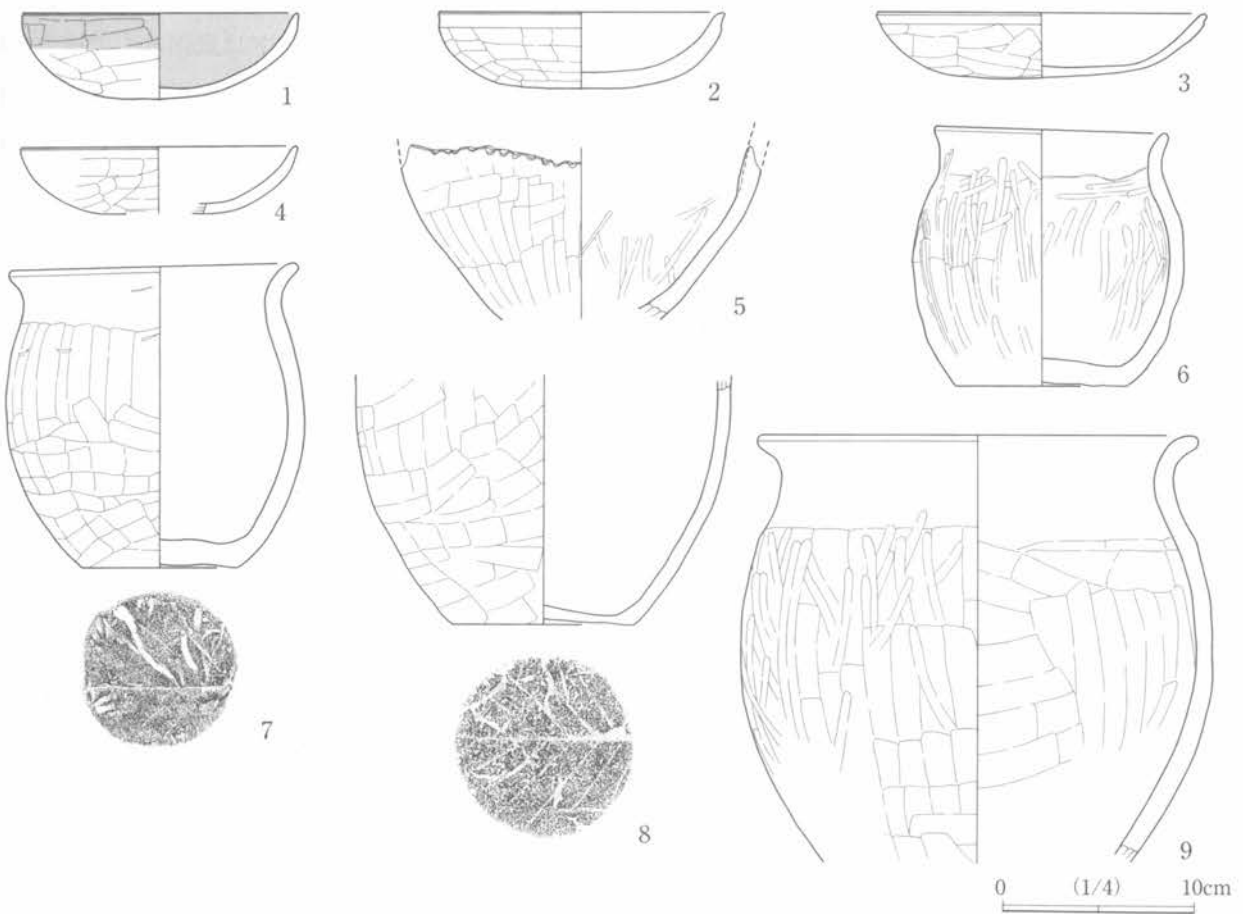
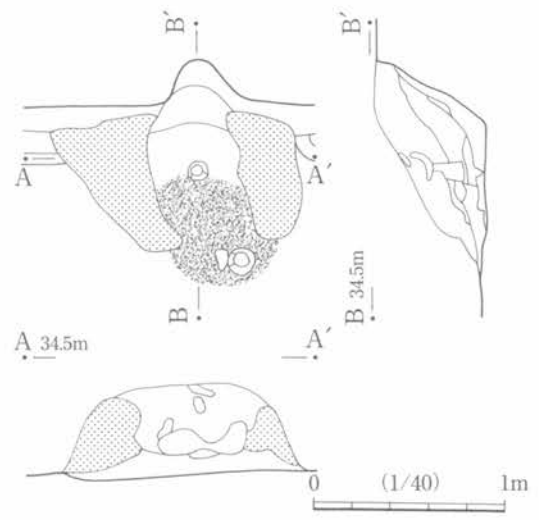
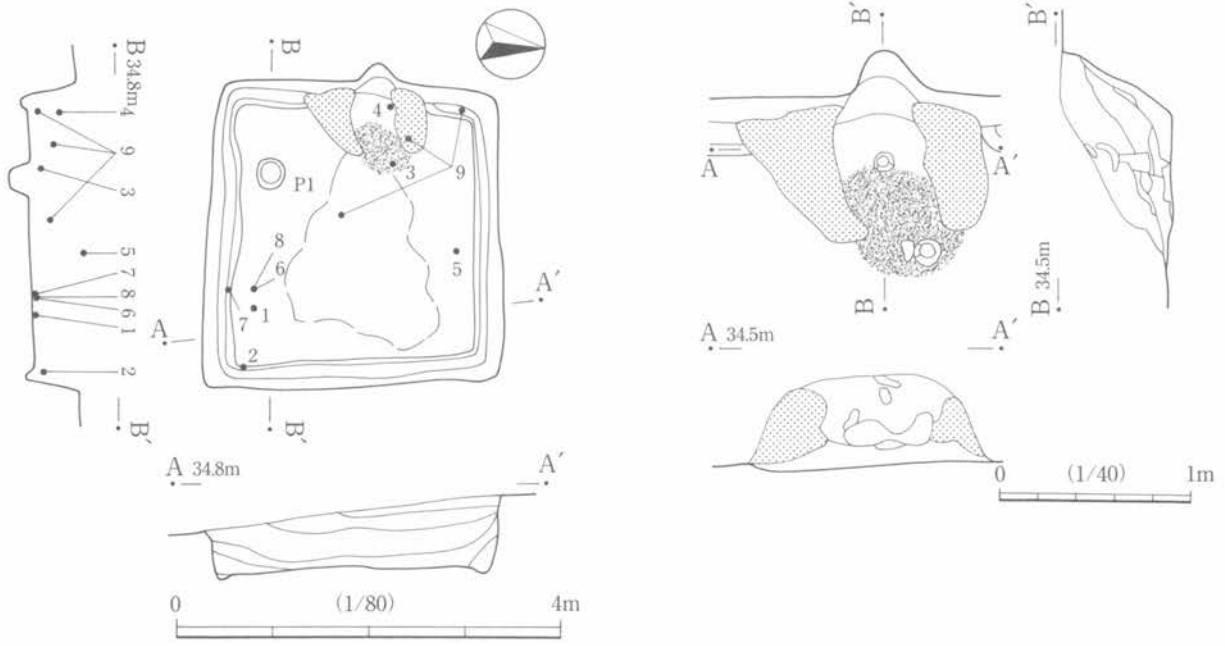
挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	13.0	3.3	8.4	3/4	微砂粒、雲母、長石(多)、石英(多)、黒色粒	灰白色	常陸新治窯産	1

### SI-089号竪穴住居跡 (第193図, 図版41, 127)

本遺構は H5-24グリッド付近に位置し、南側に浅い谷を臨む台地縁辺部、標高約34.6m に立地する。



第192図 SI-087号・088号実測図



第193图 SI-089号实测图

形態は方形で、規模は3.2m×3.0mを測り、主軸方向はN-95°-Wである。北東から南西へ向かって緩く下がる斜面に位置するため、確認面からの深さも北東コーナー付近が最も深く78cm、南西コーナー付近が最も浅く22cmを測る。壁溝はカマド部分を除いて巡り、南西コーナーよりやや東へ寄った南壁際にピットが1基ある。規模は直径30cm、深さ22cmを測る。床面はカマド前面から東壁へ向かって三角形に硬化面が広がり、よく踏み固められている。覆土はロームブロックを含んだ土層が堆積する。

カマドは西壁中央に位置し、最大幅120cmで、黄灰褐色粘質土を全体的に敷き詰めた上に灰褐色砂質土で構築している。残されている袖部は住居主軸方向に対して右側に曲がって延びており、火床部の位置も煙道部中心より右側にずれて位置する。煙道部は三角形で、壁外へ20cm張り出している。

なお、焚き口部から土師器坏（4）が、火床部奥から土師器坏（3）が出土した。また、住居南西コーナー付近からまとめて土師器坏（1）（2）、土師器甕（6）（7）（8）が出土した。

1～4は土師器坏で、いずれも丸底である。全体に脆弱で、器面の調整も不明瞭である。2は厚手の仕上がりである。いずれも口縁部に僅かにヨコナデを施し、体部は横方向のヘラ削りを施している。1は漆仕上げとみられる。

5～9は土師器甕である。5は胴部下半の破片で、破片上部は粘土紐接合部できれいに剥離し、擬似口縁となっている。接合部は竹管状工具で刻んでいる。6～8はよく似た胎土の製品で、7・8は底部に木葉痕を残している。口縁部はヨコナデで、胴部は縦方向のヘラ削りを施し、7・8は底部近くで横方向のヘラ削りである。6は内外面に縦方向の細かいヘラナデを加える。なお、7は一側面が被熱し極めて脆弱となっている。9は口縁部が外反し、胴部縦方向のヘラ削り後に口縁部にヨコナデを施している。内面は横ないし縦方向のヘラナデである。

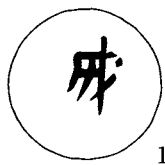
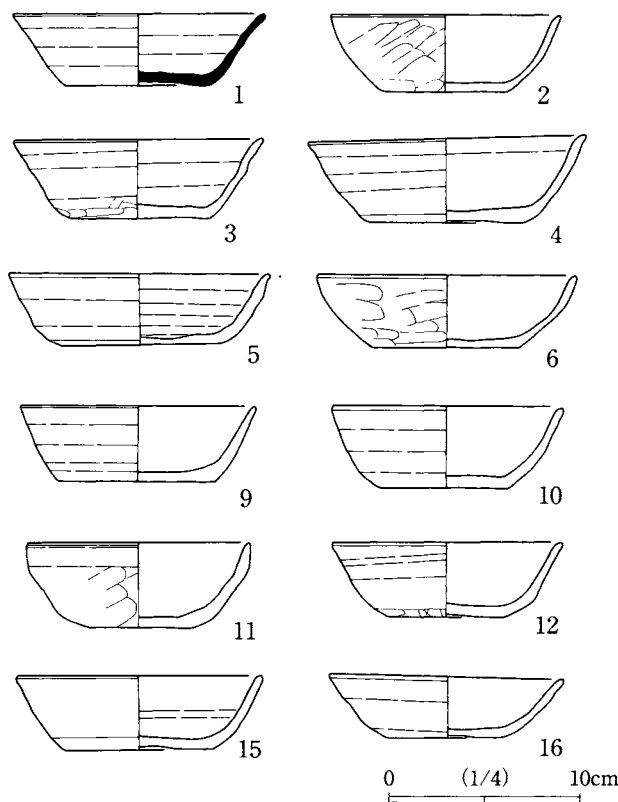
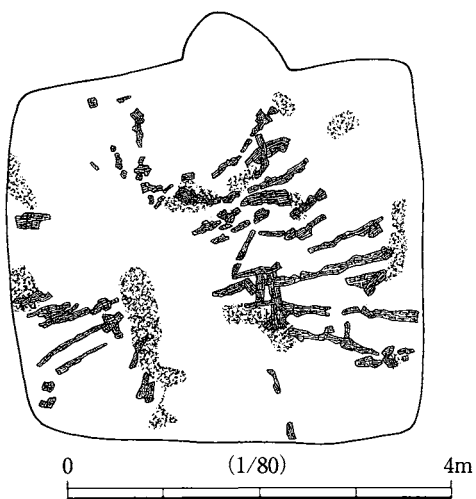
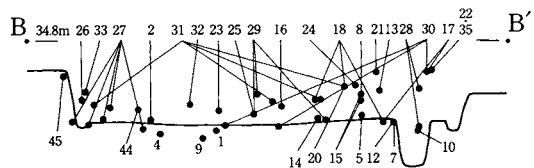
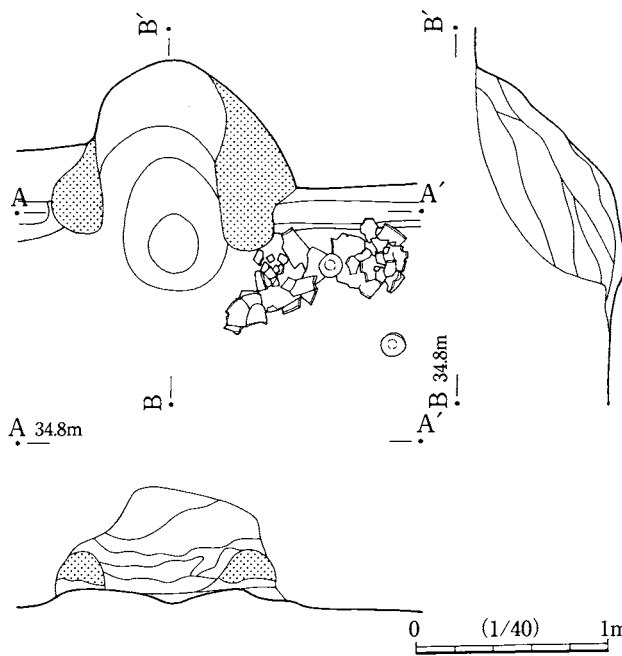
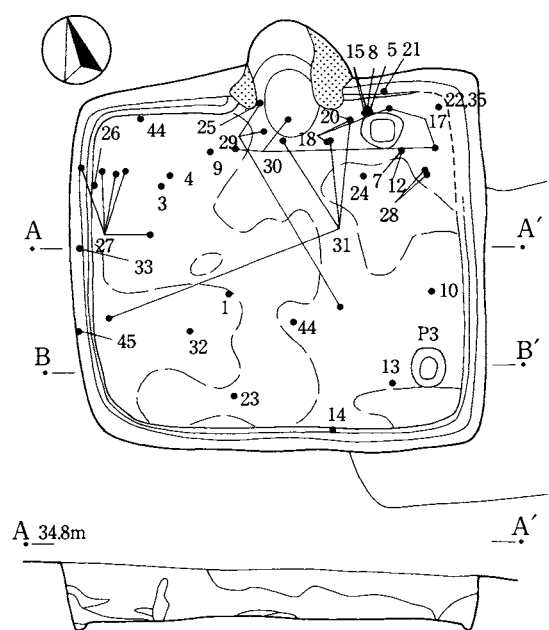
第89表 SI-089号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	14.4	4.5	丸	ほぼ完形	微砂粒、長石(少)、スコリア	鈍い黄褐色	内外、漆仕上げ 器面全体摩耗	SI089-12 SI077-2
2	土師器 坏	15.0	4.0	丸	ほぼ完形	白色砂粒、長石、石英、スコリア	鈍い赤褐色～黒褐色	口唇部磨滅、外、底辺部帯状にスス付着有り	11
3	土師器 坏	17.2	3.6	丸	ほぼ完形	白色砂粒、長石(少)、黒色粒	内、赤褐色～灰褐色 外、鈍い黄褐色～暗褐色	器形歪み有り 口唇部磨滅	7
4	土師器 坏	(14.4)	[3.5]	-	口縁1/6	長石、スコリア、石英	赤褐色	二次焼成有り	8
5	土師器 甕	-	[9.2]	-	胴部1/4	砂粒、長石、石英、小石(1mm)	鈍い赤褐色～黒褐色	粘土紐に液状の脣を付け密着度を強くしたと思われる	SI089-1. 4 SI087-4
6	土師器 甕	12.2	13.6	8.8	ほぼ完形	砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色～黒褐色	歪んでいる器高 外、剥落箇所多い、スス付着	1.13
7	土師器 甕	15.2	15.9	8.0	ほぼ完形	白色砂粒、長石、スコリア	鈍い黄褐色～赤褐色～暗褐色	底部、木葉痕	14
8	土師器 甕	-	[13.0]	9.4	1/2	白色砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色～暗褐色	器面著しく剥落 底部、木葉痕	1.13
9	土師器 甕	(23.0)	[22.3]	-	1/3	白色砂粒、長石、石英、スコリア	鈍い黄褐色～黒褐色	口縁部は強く横ナデが加えられていて	1.2.3.5

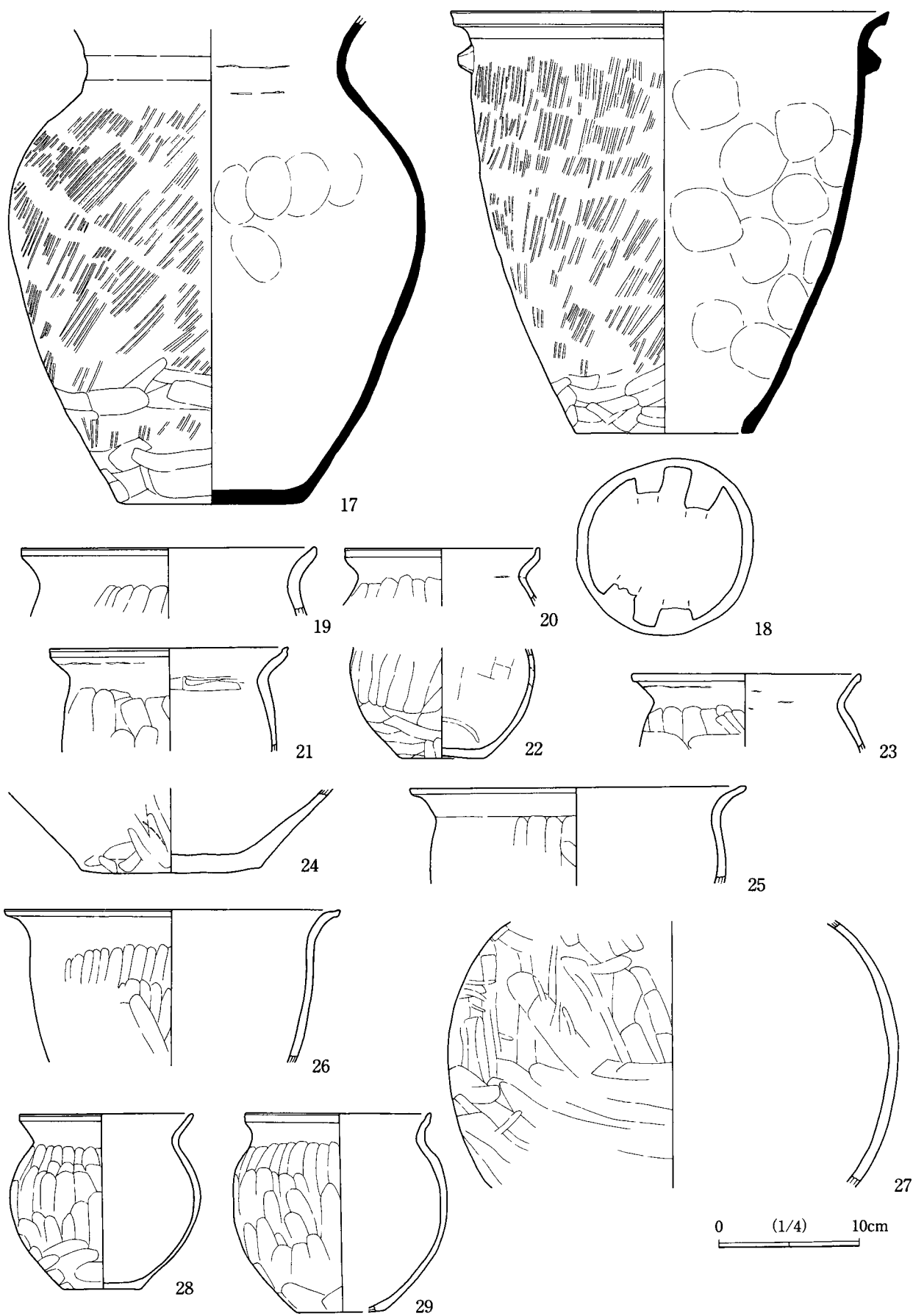
SI-090号竪穴住居跡（第194～196図、図版41、42、127、128）

本遺構はH5-26グリッド付近に位置し、南側に浅い谷を臨む台地縁辺部、標高約34.6mに立地する。住居南西側でSI-095号竪穴住居跡と重複し、重複部分ではSI-095号の覆土中に床面を構築している。形態は方形で、規模は3.9m×4.3mを測り、主軸方向はN-13°-Eである。壁は垂直に立ち上がり、北から南東へ向かって緩く下がる斜面に位置するため、確認面からの深さも北壁が最も深く77cm、南東コーナー付近が最も浅く24cmである。壁溝は北東コーナーが不明瞭であったが、カマド部分を除いて全周している。主柱穴は明らかではないが、住居北東コーナー及び南東コーナーに2基のピットがある。P3は35cm×40cmの楕円形で、深さ48cmを測り、柱穴的な役割の可能性も否定できない。また、北東コーナー付近に位置するピットは42cm×38cmの方形で、深さ28cmを測る。ピットの形状が方形であること及びピットの周辺から遺物がまとめて出土していることを考えると、貯蔵穴の可能性が高い。覆土中には

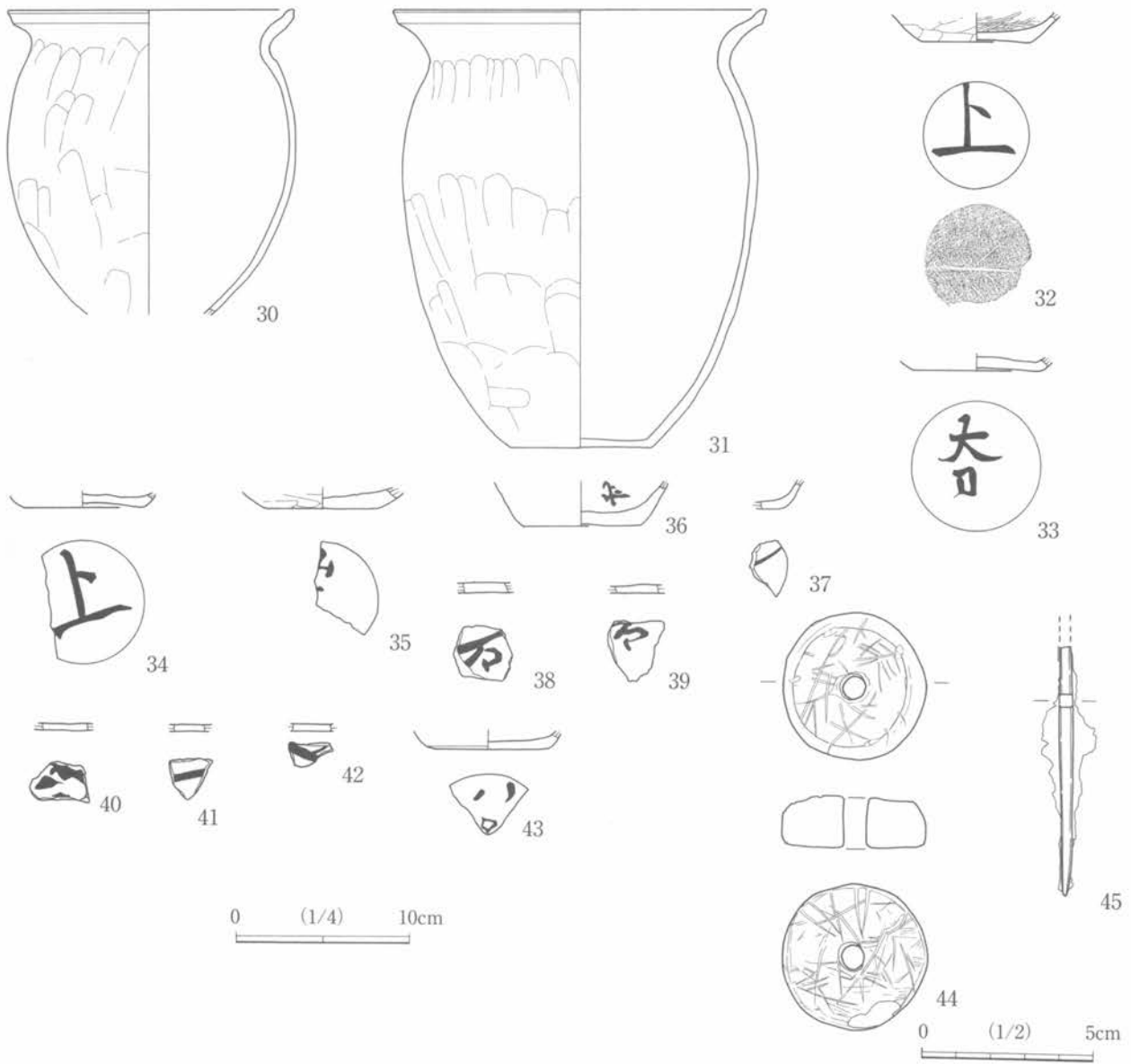




第194图 SI-090号实测图



第195图 SI-090号出土遗物实测图(1)



第196図 SI-090号出土遺物実測図(2)

多量の炭化材があり、住居中央から縁辺に向かって放射状に広がっている。炭化材のうち長いものは130cm程度あり、屋根材と考えることもできる。また、床面から10cm前後浮いた状態で出土しており、その下部にやはり床面から5cm～7cm浮いた状態で焼土が堆積していた。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅は125cmである。袖部はローム主体の暗褐色土の上に、黒褐色の粘質砂質土で構築している。遺存している袖部はほとんど煙道部の張り出しに収まり、右側袖部の前面から多量の土器が出土していることを考えると、本来袖部は手前にあまり伸びていなかったとも考えられる。煙道部は半円形で壁外へ60cm張り出している。

遺物は多く、完形ないし完形に近い個体も多く含まれている。カマド右側からは(18)、(31)などの甕類とともにロクロ土師器坏が出土している。甕類と重なるようにして(5)と(15)が重なって、少し離れて(9)と(12)が重なって出土した。

1は須恵器坏である。体部下端に僅かに手持ちヘラ削りを施し、底部は全面一方向のヘラ削りである。

2・6・7・11・14は土師器坏である。いずれも平底で、体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部には短くヨコナデを施し、体部は横方向のヘラ削りである。底部は2・14が一方方向のヘラ削り、6が直交する二方向のヘラ削り、7・11は不定方向のヘラ削りである。なお、14は底部外面に「上」と墨書される。

3～5・8～10・12・13・15・16・32～43はロクロ土師器坏である。3・4・8・9・10・12は体部下端に手持ちヘラ削りを施し、底部は全面一方方向のヘラ削りである。5・13は体部下端及び底部全面回転ヘラ削り、10は体部下端にヘラ削りは施されず、底部は回転糸切り後周縁部回転ヘラ削り、15は体部下端に手持ちヘラ削りを施し、底部は回転糸切り後周縁部手持ちヘラ削りである。なお、13は底部外面に「成」と墨書される。32～43は墨書のある破片である。底部外面に書かれるものがほとんどであるが、36は体部内面に逆位で「成」と書かれる。32・34は「上」、33は「大刀」、35は「山□」、38・39は同じ文字であるが釈文は不明である。

17は須恵器甕である。広口の甕で、口縁部を欠損する。胴部は斜位の叩きで、底部近くに横方向のヘラ削りを施している。また、ところどころに横方向のナデ調整が観察できる。18は須恵器甕で、ほぼ完形である。胴部は斜位の叩きで、底部近くに横方向のヘラ削りを施す。口縁部下にはヘラで面取りされた把手が付くが、現存するのは1か所だけである。なお、現存する把手から左へ90°の位置と180°の位置に把手

第90表 SI-090号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	13.2	3.7	7.8	完形	微砂粒、長石(少)、スコリア	灰色	薄手なつくり	3.43
2	土師器 坏	(11.9)	4.0	6.6	1/3	砂粒、長石(少)、石英(少)	内、鈍い褐色 外、橙色～黒褐色	外、底部全体スス付着	4
3	ロクロ土師器 坏	13.0	4.2	7.5	完形	白色砂粒、長石、スコリア	明褐色	器面なめらか	57
4	ロクロ土師器 坏	14.4	4.5	8.2	完形	砂粒、小石(1～2mm)、長石、石英	橙色+赤色	若干歪み有り 外、火ダスキ痕跡	56
5	ロクロ土師器 坏	13.6	3.8	8.0	完形	砂粒、長石、小石(1×2mm)	内、褐色～褐灰色 外、赤褐色～暗褐色	底部回転ヘラケズリ(右回り)	52
6	土師器 坏	(13.5)	3.8	7.6	1/4	白色砂粒、長石(少)石英(少)	明赤褐色	器面なめらか	1.3.67
7	土師器 坏	12.0	4.1	6.8	完形	砂粒、石英(少)、スコリア(少)	内、褐色+鈍い黄灰色 外、黒褐色一部褐色	外、タール状に全体スス付着器面摩耗	49
8	ロクロ土師器 坏	12.8	4.5	6.2	完形	砂粒、黒色粒、スコリア、小石(2mm)	鈍い黄褐色～褐灰色	内、剥落 外、摩耗	53.54
9	ロクロ土師器 坏	12.3	4.0	8.2	1/2	微砂粒、長石、小石(2～6mm)	灰黄褐色	内、剥落有り 内外、炭素吸着	4.33
10	ロクロ土師器 坏	12.1	4.4	6.5	ほぼ完形	砂粒、小石(1～2mm)、長石(少)、石英(少)	内、鈍い黄褐色 外、灰黄褐色～黒褐色	内、ピッチ状にスス付着 外、全体にスス付着	60
11	土師器 坏	(11.7)	4.5	5.0	口縁～底部1/4	雲母、スコリア、白色砂粒	灰黄褐色	内、ナデ 外、煤付着	3.4
12	ロクロ土師器 坏	12.0	4.0	6.0	完形	微砂粒、長石(少)、黒色粒	明赤褐色一部黒褐色	丁寧なつくり 外、口縁スス付着	50
13	ロクロ土師器 坏	12.0	3.4	7.8	底部1/2 体部1/6	砂粒、黒色粒、長石、スコリア	赤褐色	底部墨書「成」	2.16
14	土師器 坏	12.2	4.1	6.5	完形	白色砂粒、小石、石英、スコリア	明赤褐色+黒褐色	底部墨書「上」	45.46
15	ロクロ土師器 坏	12.6	4.0	7.6	ほぼ完形	微砂粒、長石(少)	内、黄褐色 外、褐色+黒色	内、炭素吸着、底部回転糸切り	53.54
16	ロクロ土師器 坏	12.0	3.4	6.0	2/3	砂粒、長石、スコリア	内、褐色～暗褐色 外、褐色	底部回転糸切り	44
17	須恵器 甕	-	[33.6]	13.0	口縁欠 他3/4	砂粒、小石(1～5mm)、長石、石英、スコリア	内、明褐色+黒褐色 外、鈍い黄褐色+灰褐色	内、無文の当て具痕	1.2.10.51
18	須恵器 甕	30.4	29.9	12.6	ほぼ完形	砂粒、小石(1～2mm) 長石、スコリア	内、灰黄色 外、灰黄色2/3明赤色+黒色	頸部の全周を4等分した3箇所にて耳を付けた跡があり	1.51.55.61
19	土師器 甕	(21.0)	[4.8]	-	口縁1/4	スコリア	灰黄褐色	口縁波状	2.3.4
20	土師器 甕	(16.0)	[4.0]	-	口縁1/4	スコリア、長石	明赤褐色	器面摩耗	3.55
21	土師器 甕	(17.0)	[7.3]	-	口縁の一部	スコリア、長石、石英	明褐色	輪積み痕残る	8
22	土師器 甕	-	[7.9]	(6.0)	1/2	砂粒、石英(少)、スコリア	内、鈍い黄褐色 外、黒褐色	外、炭素吸着	9
23	土師器 甕	(16.0)	[5.5]	-	口縁1/6	スコリア、雲母、石英	赤褐色	輪積み痕残る	19
24	土師器 甕	-	[5.8]	(12.8)	底部1/2	白色粒、長石、スコリア	明褐色	器面摩耗	13
25	土師器 甕	(24.0)	[7.0]	-	口縁の一部	雲母、白色砂粒、長石	明褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	4.66.67
26	土師器 甕	(23.9)	[10.8]	-	口縁1/6	白色砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色	口縁煤付着	3.4.27
27	土師器 甕	-	[19.0]	-	胴尖部1/2	砂粒、黒色粒、スコリア	内、褐色 外、鈍い黄褐色		1.3.4.28.30.31.32.42
28	土師器 甕	12.3	12.7	5.5	完形	白色砂粒、長石	赤褐色～黒褐色	二次的に火を受け器面ざらつく	2.14.48
29	土師器 甕	13.3	14.4	6.3	2/3	白色砂粒、長石(多)、石英	暗褐色～黒褐色一部赤褐色	内外、炭素吸着	4.15.62.67
30	土師器 甕	16.7	[17.7]	-	底部欠 他3/4	白色砂粒、長石(多)、石英、スコリア	褐色～暗褐色	薄手なつくり 外、スス付着	1.3.4.10.34.65.67
31	土師器 甕	21.8	25.4	6.2	2/3	砂粒、黒色粒、長石粒、スコリア	内、赤褐色 外、赤褐色+黒色	二次的に火を受け器面ざらつく	1.26.55.61.63
32	土師器 坏	-	[1.7]	6.4	底部3/4	砂粒、長石、石英、小石	褐色	底部墨書「上」木葉痕	22
33	ロクロ土師器 坏	-	[0.8]	7.4	底部完形	砂粒、黒色粒、長石、石英	鈍い黄褐色	底部墨書「大刀」	41
34	ロクロ土師器 坏	-	[0.8]	7.0	底部3/4	砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色	底部墨書「上」	5
35	ロクロ土師器 坏	-	[1.2]	6.5	底部1/3	砂粒、黒色粒、長石、石英、小石	鈍い褐色	底部墨書「山□」	9
36	ロクロ土師器 坏	-	[2.7]	7.0	底辺～底部1/4	砂粒、長石、小石	鈍い黄褐色	体部(内)墨書「成」	3
37	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	砂粒、黒色粒、長石、石英	褐色	底部墨書「□」	1
38	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	砂粒、長石、白針	褐色	底部墨書「□」	1
39	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	砂粒、長石、石英	明褐色	底部墨書「□」	3
40	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	微砂粒	鈍い黄褐色	底部墨書「□」	1
41	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	砂粒、長石、石英、スコリア	褐色	底部墨書「□」	3
42	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	砂粒、長石、石英	褐色	底部墨書「□」	3
43	ロクロ土師器 坏	-	[1.1]	(7.0)	底部1/4	砂粒、長石(多)、石英(多)	明褐色	底部墨書「□」	4

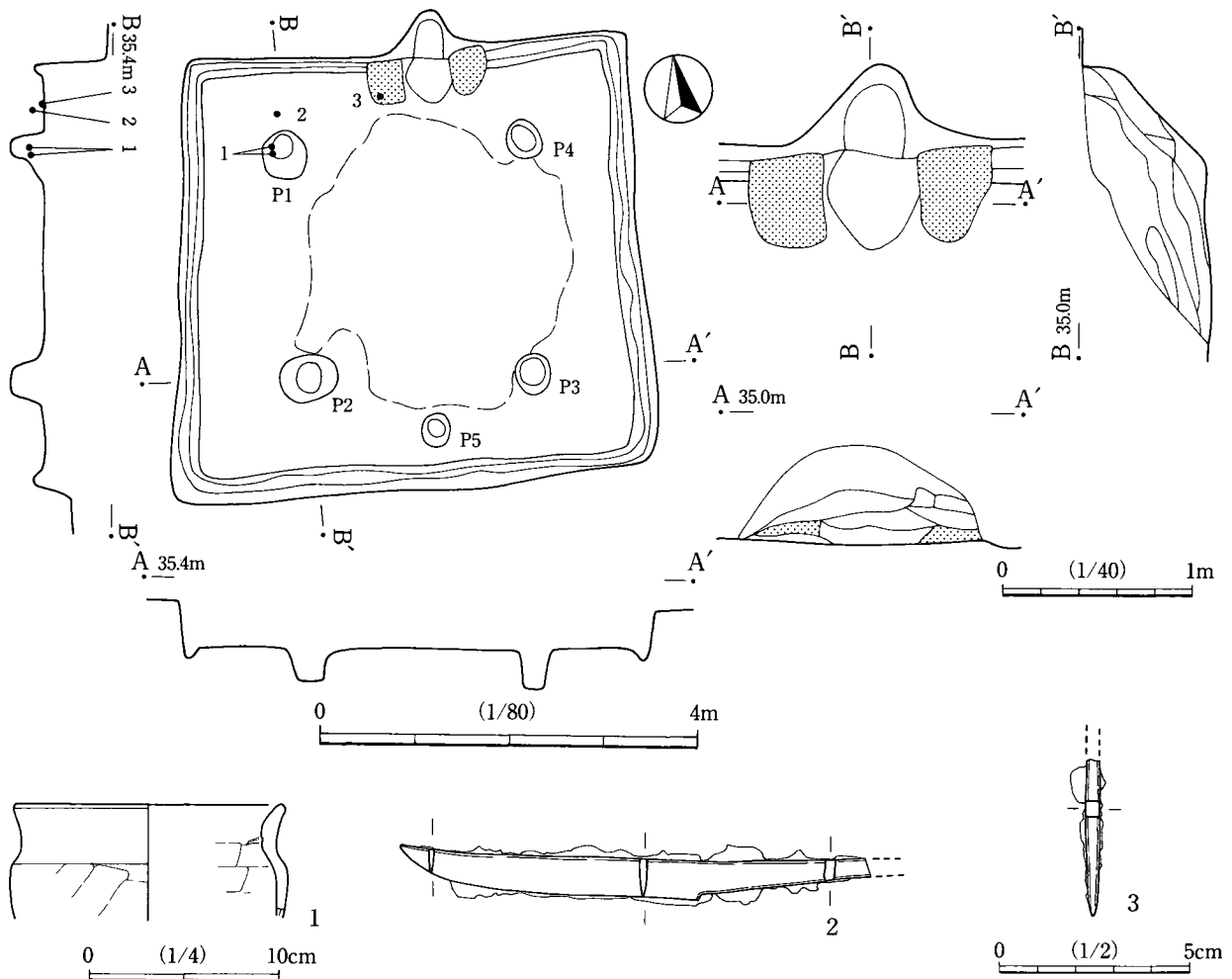
が剥落した痕跡があり、合計3か所となるが、右90°の位置には把手の痕跡がない。底部は3孔である。

19~31は土師器甕である。19~21・23・25・26は口縁部の破片である。口縁部はいずれも受け口状を呈し、ヨコナデで整えるが、21・23は外面に粘土紐接合痕を残している。22・28~30は小形の甕で、22は口縁部を欠損するが、他は全体を窺える。口縁部は受け口状を呈し、ヨコナデを施す。胴部は丸く、縦方向のヘラ削りで、底部近くに横方向のヘラ削りを施している。27・31は大形の甕である。27は胴部破片で、球形を呈する。31は最大径が口縁部にあり、口縁部はやはり受け口状を呈する。胴部は縦方向のヘラ削りで、下半に横方向のヘラ削りを施す。

44は石製紡錘具である。両面にかなり深い線刻がある。45は鉄鏝である。

### SI-091号竪穴住居跡 (第197図)

本遺構はH4-98グリッド付近に位置し、南側に浅い谷を臨む台地縁辺部、標高約35.0mに立地する。形態は方形で、規模は4.7m×4.9mを測り、主軸方向はN-10°-Eである。北から南へ向かって緩やかに下がる斜面に位置するため、確認面からの深さも北壁で最も深く58cm、南壁では37cmを測る。壁溝はカマド部分を除いて全周し、住居対角線上に4基の主柱穴がある。主柱穴は直径40cm~60cmの楕円形で、住居西側のP1・P2が東側のP3・P4に比べて若干大きい。床面からの深さは35cm~46cmで、大きな



第197図 SI-091号実測図

違いはないもののP1・P2が若干深くなっている。カマドに対する南壁際中央には梯子ピットがあり、直径30cm、深さ36cmである。床面は4基の支柱穴に囲まれた範囲に硬化面がある。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅130cm、袖部は壁から49cm延びている。袖部の遺存状態は悪く、灰褐色砂質土もしくは黄褐色砂質土で構築するが、下部の10cm程度が残されているだけである。煙道部は三角形で、壁外へ40cm張り出している。

1は土師器甕である。口縁部は外反してヨコナデで、胴部は斜め方向のヘラ削り後ナデ調整を加えている。

2は刀子、3は鉄鏝である。

第91表 SI-091号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 甕	(14.4)	[6.1]	-	口縁1/4	粗砂粒、黒色粒、長石	内、黒褐色 外、赤褐色	器面剥落著しい 内、炭素吸着	1.4.5

### SI-092号竪穴住居跡（第198図，図版42，129）

本遺構はI5-04グリッド付近に位置し、南側に浅い谷を臨む台地縁辺部、標高約34.9mに立地する。形態は方形で、規模は3.8m×3.8mを測り、主軸方向はN-10°-Eである。壁は垂直に立ち上がり、確認面からの深さは18cm～49cmである。カマド部分を除いた壁際には壁溝が掘り込まれ、覆土の違いが明瞭に識別できた。住居対角線上には4基の支柱穴がある。P1は38cm×21cmの楕円形であるが、他の柱穴は直径20cm前後の円形である。床面からの深さはP2～P4が42cm～45cmを測るが、P1だけが24cmと浅い。また、P2とP3の中間に梯子ピットがあり、直径18cm、深さ19cmである。床面は支柱穴を避けるように硬化面があり、北壁及び南東コーナーは壁際まで踏み固められている。覆土は全体にロームブロック、焼土を含み水平に堆積している。

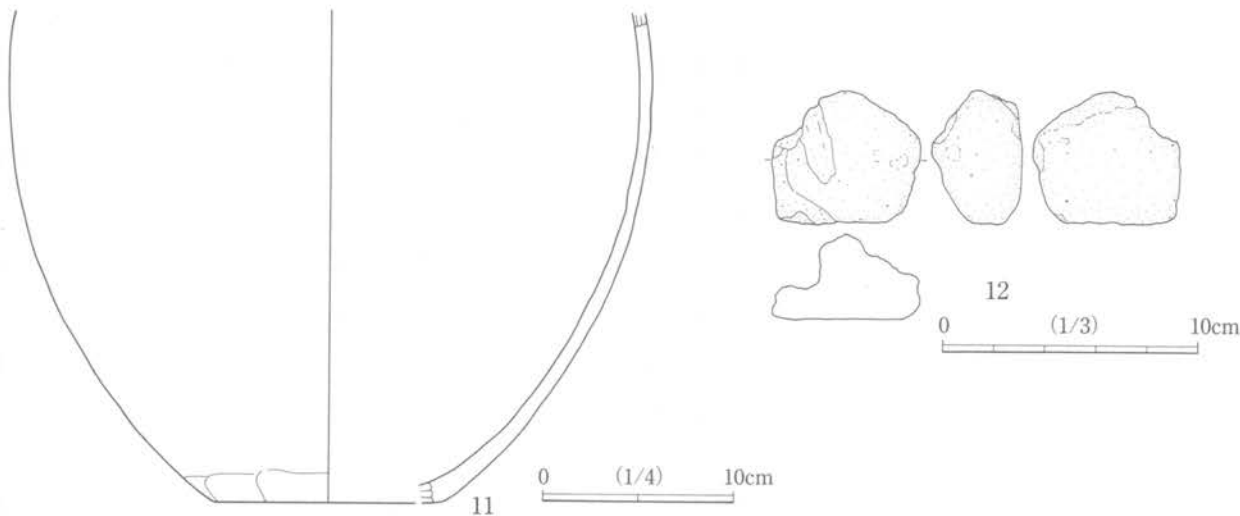
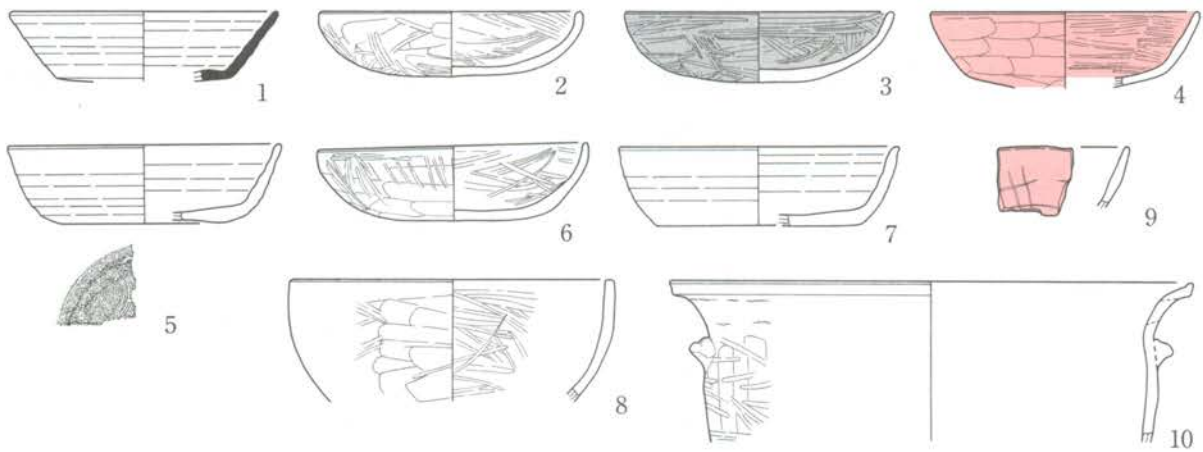
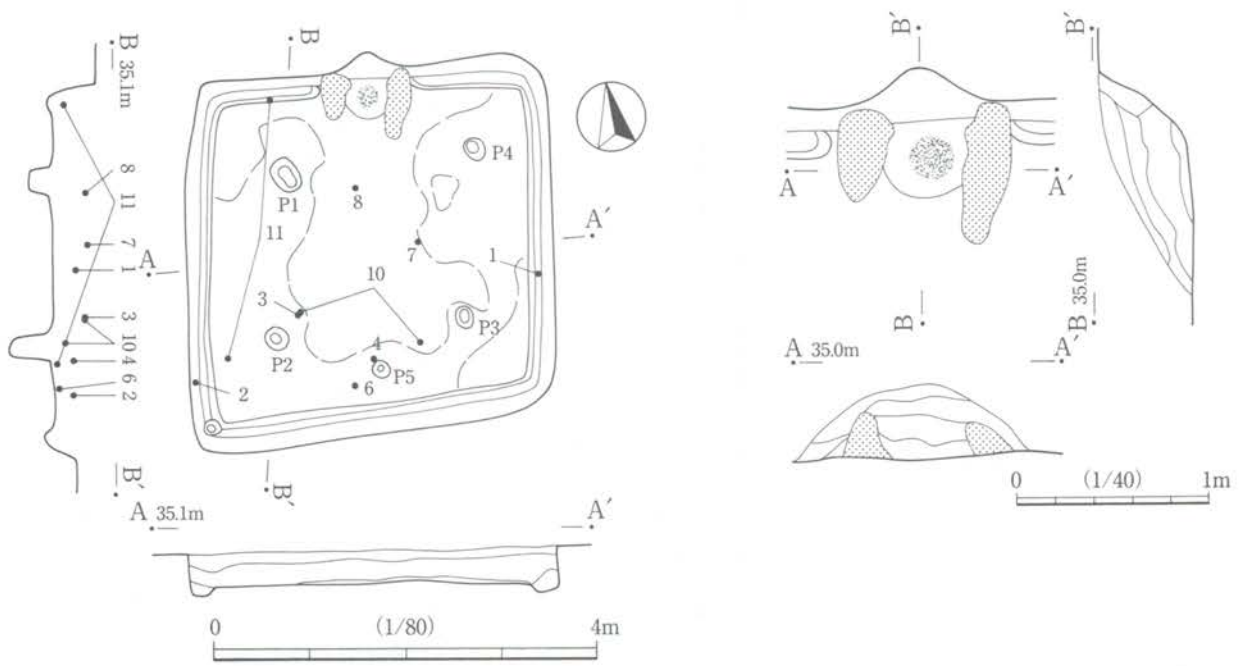
カマドは北壁中央に位置し、遺存状態はかなり悪い。最大幅は92cmで、袖部は壁から74cm延びているが、断面観察でも脆弱なものであった。煙道部は三角形で壁外へ20cm張り出している。

1は須恵器坏である。体部は直線的に立ち上がり、身込み部分を強く押さえる。体部下端にヘラ削りは施されず、底部は手持ちヘラ削りである。

2～4・6・8・9は土師器坏である。2・3・6は浅い丸底の坏で、口径も14cm前後で揃う。口唇部にヨコナデを施し、体部から底部にかけて横方向のヘラ削りで、内外面ともヘラ磨きが施される。3は特に丁寧に磨いており、漆仕上げとみられる。4は平底の坏で、9もおそらく同じ器形になると思われる。口唇部はヨコナデで、体部は横方向のヘラ削りを施す。4の底部は一方方向のヘラ削りである。9は体部内面に線刻される。8は深さのある丸底の坏で、口唇部が僅かに肥厚する。口縁部はヨコナデで、体部は横方向のヘラ削りを施している。内面は横方向のヘラ磨きである。

5・7はロクロ土師器坏である。ともに体部下端がやや丸味を帯びる。5は体部下端に回転ヘラ削りを施し、底部は回転糸切り後周縁部回転ヘラ削りである。ロクロ回転方向は右である。7は体部下端及び底部全面回転ヘラ削りで、ロクロ回転方向は右である。

10は土師器甕である。口縁部は受け口状を呈し、口縁部下に形骸化した把手が付く。胴部は縦方向のヘラ削りで、横方向のヘラ磨きを僅かに施している。11は土師器甕である。胴部は丁寧にナデられ、ヘラ削りが施されたかどうかとも判断できない。底部近くに1段の横方向ヘラ削りがある。



第198图 SI-092号实测图

12は軽石製の砥石であろうか。同様のものはSI-097号からも出土している。

第92表 SI-092号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	(14.1)	[3.7]	(9.0)	1/4	長石、石英	黄灰色	常陸産	6
2	土師器 坏	(13.8)	3.4	丸	1/2	細砂粒、長石、石英、スコリア	橙色	器面なめらか	10
3	土師器 坏	14.0	3.7	丸	2/3	細砂粒、長石	内、灰褐色 外、褐色～黒色	内外、漆仕上げ	2.8
4	土師器 坏	(14.0)	[4.0]	(10.4)	1/4	スコリア	橙色	内外面赤彩	15
5	ロクロ土師器 坏	(14.2)	4.1	(8.6)	1/5	白色粒	褐色	底部 回転糸切り摩し	1
6	土師器 坏	14.0	4.0	丸	1/2	砂粒、黒色粒、スコリア	鈍い黄褐色	外面飛びカンナ風のケズリ	7
7	ロクロ土師器 坏	(14.5)	4.1	(10.6)	1/4	砂粒、黒色粒、スコリア(多)	明黄褐色	底部回転ヘラケズリ	16
8	土師器 坏	(17.0)	[6.3]	-	1/6	スコリア、白色微砂粒	内、鈍い褐色～褐灰色 外、鈍い赤褐色～黒褐色	外、黒斑有り	12
9	ロクロ土師器 坏	-	-	-	口縁片	砂粒	明赤褐色	内面体部線刻	1
10	土師器 甗	(27.2)	[8.3]	-	口縁1/8	スコリア、石英、白色砂粒、長石	鈍い赤褐色	耳付き	1.4.8
11	土師器 甗	-	[25.8]	(11.8)	胴部1/3	白色砂粒、長石、小石(1mm)	内、灰黄色 外、鈍い黄色～赤褐色+黒色	外、暗赤色の吹きこぼれ染み有り	1.9.13

### SI-093号竪穴住居跡 (第199, 200図, 図版42, 129, 130)

本遺構はH5-29グリッド付近に位置し、南側に浅い谷を臨む台地縁辺部、標高約34.5mに立地する。住居北側にはほぼ軸をそろえてSI-094号竪穴住居跡が、西壁の一部でSI-095号竪穴住居跡が重複する。本遺構はSI-094号の床面を切っており、土層断面の観察からも本遺構の方が新しいことが確認できる。また、SI-095号とは壁の一部が重複するだけで、遺構の観察からは新旧関係を明確にし得ないが、出土遺物の様相から本住居が新しいものである。形態は方形であるが、カマドが位置する北壁の両コーナーはかなり丸味を帯びている。規模は4.2m×4.4mを測り、主軸方向はN-10°-Eである。北から南へ向かって緩やかに下がる斜面に位置するため、確認面からの深さも北壁で71cm、南壁では14cmである。壁溝は各壁際に掘り込まれているが、全周せず、北東コーナー・南西コーナー・西壁の一部で検出できなかった。主柱穴は4基配置されるが、住居の形状に合わせるようにカマド側に位置するP1・P4の間隔が広がっている。直径は30cm～40cm、深さは35cm～41cmを測る。また、住居各コーナー付近に壁柱穴がある。覆土は全体にローム粒・炭化材片を多く含み、遺物も覆土上層からの出土が多い。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅は140cmを測る。遺存状況はよく、掛け口の奥に天井部も残っている。火床部は掛け口の下部床面に被熱した部分があるが、カマド下掘込みは焚き口部に位置する。煙道部は三角形で、壁外へ25cm張り出している。なお、右側袖の外側から須恵器坏(1)が、左側袖に接して須恵器坏(5)、土師器坏(8)、須恵器甗(18)が出土した。

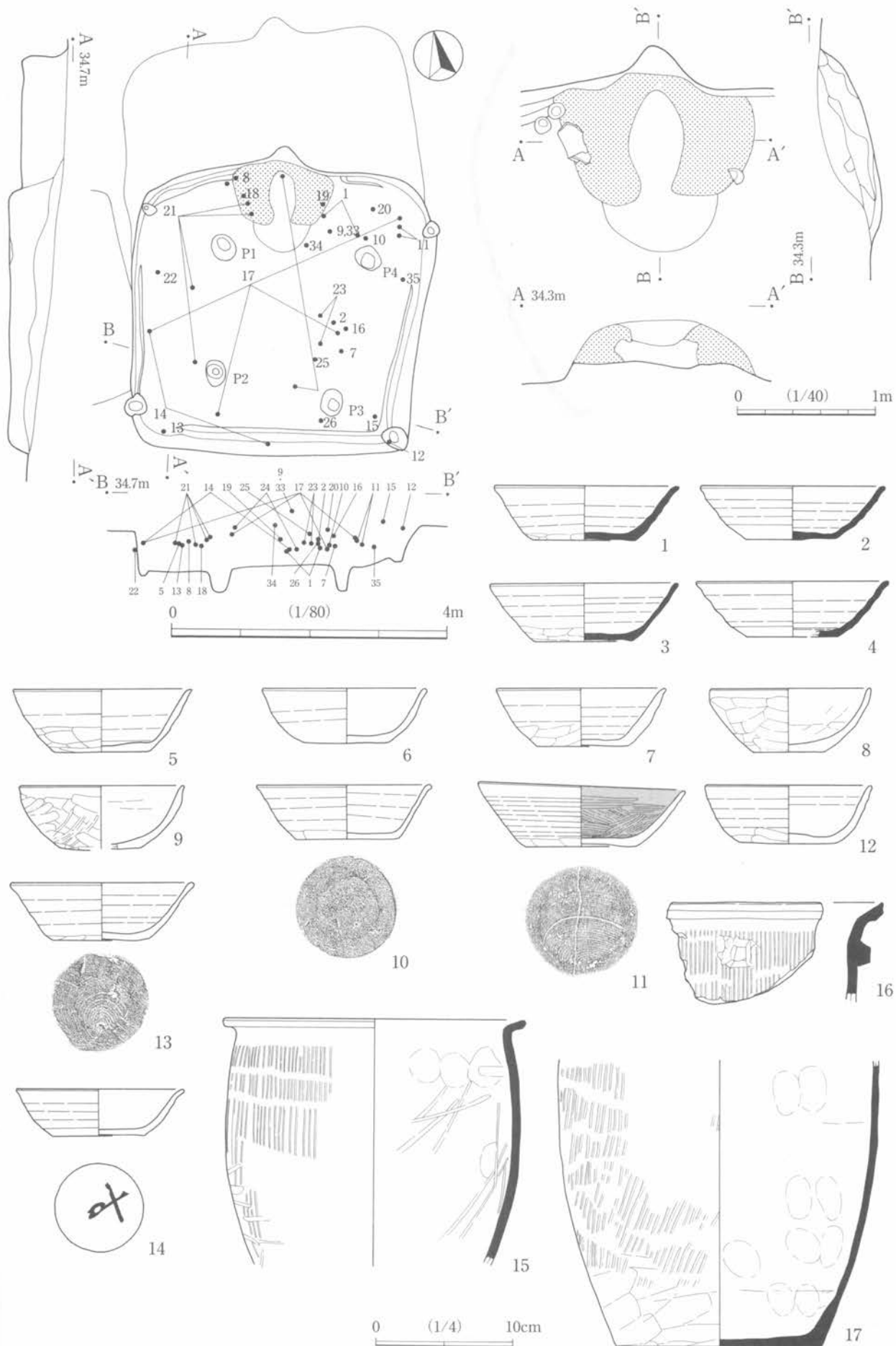
1～4は須恵器坏である。1・3は直線的に開く体部で、下端に手持ちヘラ削りを、底部は全面一方向に削っている。2・4は体部下端及び底部全面回転ヘラ削りで、ロクロ回転方向は右である。

8・9は土師器坏である。平底の坏で、体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は直立し、ヨコナデを施す。体部は横方向のヘラ削りで、底部も全面一方向に削っている。

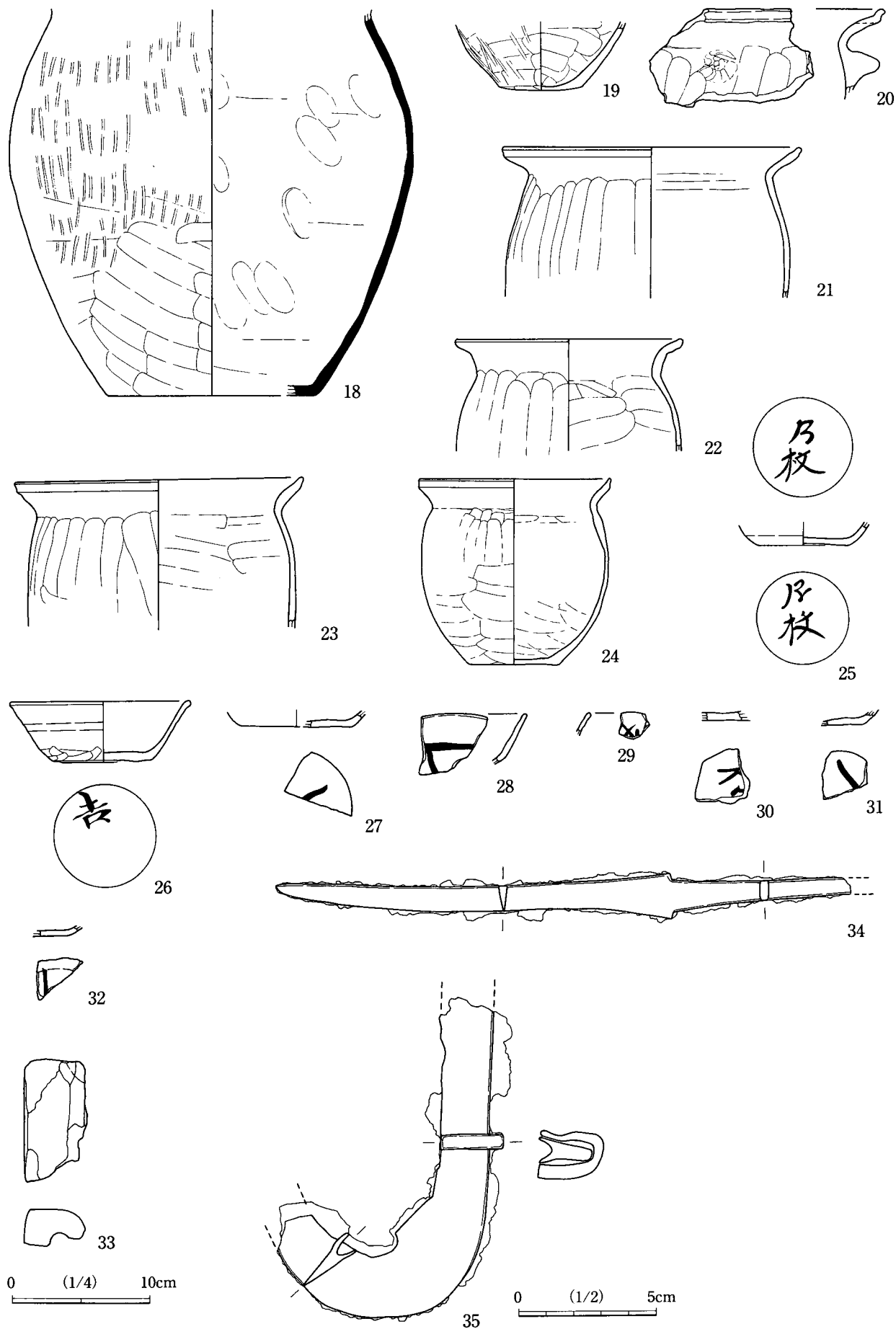
5～7・10～14・25～32はロクロ土師器坏である。5・6・7は体部下端に手持ちヘラ削りを施し、底部は全面一方向に削っている。12も体部下端は手持ちヘラ削りで、全面不定方向に削っている。10・11・13・14・25・26は体部下端は回転ヘラ削り、底部は回転糸切り後周縁部回転ヘラ削りである。ロクロ回転方向は右である。11は内面黒色処理され、14は底部外面に「古」と墨書される。25～31は墨書のある破片である。25は底部の内外面に「得枚」、26は底部外面に「吉」、29は体部内面に逆位で「成」と書かれる。

16は須恵器甗である。口縁部は受け口状を呈し、口縁部下に方形に面取りされた把手が付く。胴部は縦位の叩きである。15・17・18は須恵器甗である。15は口縁部が受け口状を呈する甗で、胴部は縦位の叩き後ところどころに横方向のナデ調整を施す。17は胴部下半から底部にかけての破片で、斜位の胴部は叩





第199图 SI-093号实测图



第200图 SI-093号出土遗物实测图

きを施し、底部近くは横方向のヘラ削りである。18は広口の甕で、胴部は縦位の叩きで、下半に斜め方向のヘラ削りを施す。

20は土師器甕である。口縁部は受け口状を呈し、口縁部下に把手が付く。胴部は縦方向のヘラ削りである。19・21～24は土師器甕である。口縁部はいずれも受け口状を呈し、ヨコナデを施す。胴部は縦方向のヘラ削りで、24は胴部中位から下に横方向のヘラ削りを施す。

33は土製支脚であろうか。面取りされたような整形で、おそらく方形の柱状になると思われる。孔が貫通している。SI-130号の3と接合する。34は刀子、35は鋤先である。35は小形の鋤で、鉄製のタガ状のものがはまっている。

第93表 SI-093号出土土器観察表

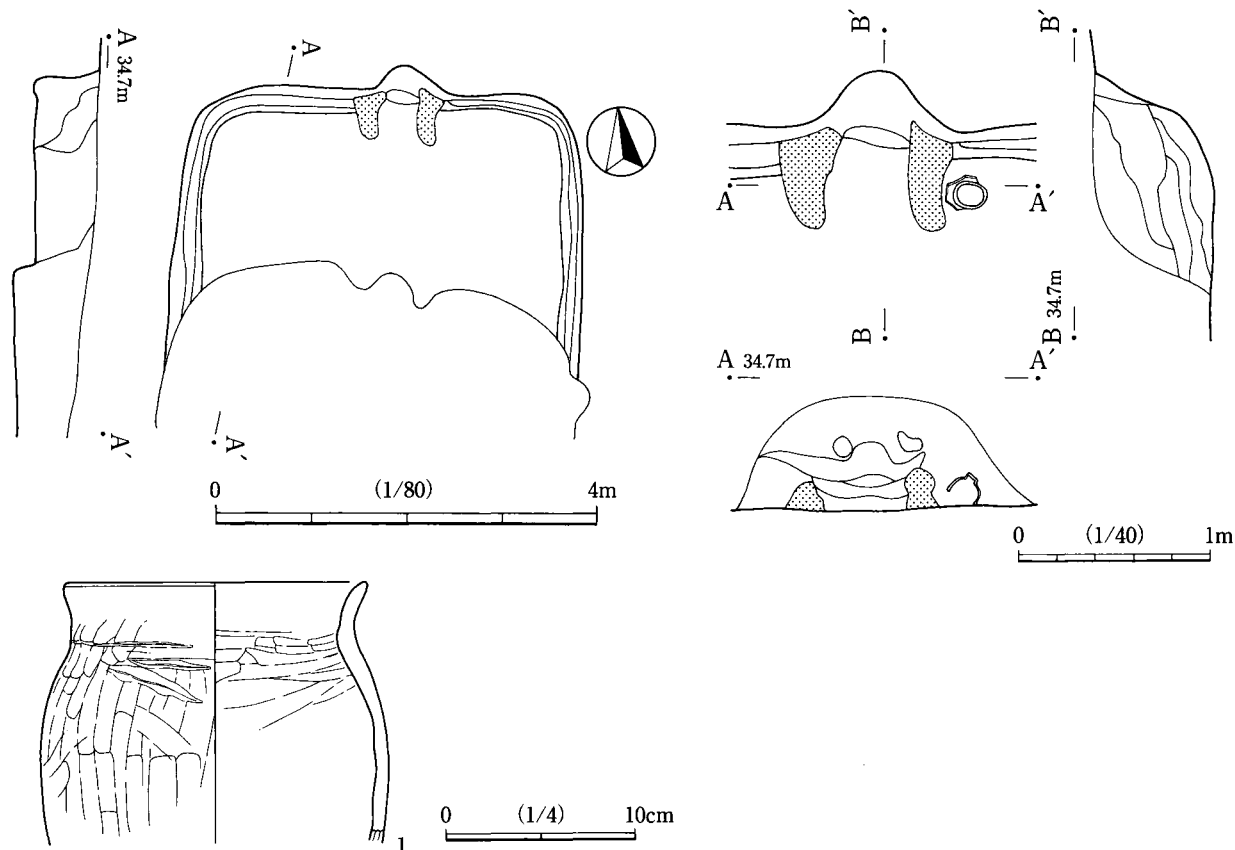
挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	13.4	4.0	7.4	ほぼ完形	砂粒、長石、スコリア	灰色	歪んでいる	1.70.82
2	須恵器 坏	(13.4)	3.9	6.8	底部完形 体部 1/4	微砂粒、長石、スコリア	灰褐色	薄手なつくり 器面なめらか	1.18
3	須恵器 坏	(13.8)	4.2	7.0	底部完形 体部 1/3	白色砂粒、長石、スコリア	灰黄色	薄手なつくり 外、底部スス付着	33
4	須恵器 坏	(14.0)	4.0	(6.6)	1/4	砂粒、黒色粒、長石	灰褐色	底部回転ヘラケズリ	89
5	ロクロ土師器 坏	13.0	4.5	6.8	完形	砂粒、長石、石英、スコリア	暗褐色～黒色	外、黒色の火ダスキ痕有り	84
6	ロクロ土師器 坏	12.0	4.0	6.3	2/3	細砂粒、スコリア	明黄褐色	若干摩耗気味	1.65
7	ロクロ土師器 坏	(12.2)	4.2	6.6	1/2	白色粒、小石(1mm)、長石、石英	明褐色+黒色	外、黒斑	1.21
8	土師器 坏	11.7	4.6	5.0	完形	白色粒、小石(1mm)、長石、石英	内、暗褐色 外、底部明赤色他黒色	外、炭素吸着 ヘラケズリ痕明瞭	83
9	土師器 坏	(12.0)	4.6	(6.0)	1/4	白色粒、石英粒	鈍い褐色	内外ともにすすけている	1.12
10	ロクロ土師器 坏	12.6	4.0	7.5	ほぼ完形	砂粒、長石、スコリア	内、明黄褐色 外、明黄褐色+黒色	薄手なつくり、外、スス付着	69
11	ロクロ土師器 坏	15.0	4.8	8.0	ほぼ完形	砂粒、長石(少)、石英(少)	内、黒色 外、淡黄色～暗灰色	内、黒色処理 歪み有り	73.76
12	ロクロ土師器 坏	(12.1)	4.2	7.0	1/2	砂粒、小石(1mm)、長石、石英	内、鈍い赤褐色 外、暗褐色	内面剥落著しい	58
13	ロクロ土師器 坏	13.4	4.2	6.8	ほぼ完形	白色砂粒、スコリア、長石、石英	内、明褐色 外、明褐色～黒褐色	薄手なつくり 硬質、底部糸切り	36
14	ロクロ土師器 坏	12.2	3.5	6.6	ほぼ完形	砂粒、黒色粒、長石、スコリア	鈍い黄褐色	底部墨書「古」	29.39.89
15	須恵器 甕	(22.0)	[17.8]	—	1/5	スコリア、石英、長石	灰黄褐色	内、無文の当て具痕	1.44
16	須恵器 甕	—	—	—	口縁片	砂粒、長石、褐色粒	褐色	耳状突起有り	1.19
17	須恵器 甕	—	[21.0]	15.0	底部 胴部 1/2 胴部 1/4	砂粒、スコリア、雲母(多量)、長石、石英	内、明褐色 外、黒褐色		1.32.39.48.78
18	須恵器 甕	—	[28.0]	15.0	1/5	砂粒、長石、石英	内、鈍い黄褐色 外、褐色～黒褐色	内、無文の当て具痕有り	86
19	土師器 甕	—	[4.9]	6.1	1/4	白色砂粒、小石(1mm)、長石、石英	内、暗灰褐色 外、明赤色～黒褐色	内、ヘラ痕多数残る	81
20	土師器 甕	—	—	—	口縁片	白色砂粒、長石、石英、スコリア	明褐色	耳状突起有り	1.5
21	土師器 甕	21.6	[10.9]	—	1/3	白色砂粒、長石(多)、石英(多)、スコリア	鈍い黄褐色～灰褐色+赤色	二次的に火を受け器面ざらついている	1.67.68.73.85.89
22	土師器 甕	(16.5)	[8.1]	—	口縁 胴上部 1/2 胴上部 1/4	砂粒、小石(1mm)、長石、石英、スコリア	鈍い褐色一部褐色	口縁波状	43
23	土師器 甕	21.9	[10.8]	—	1/3	砂粒、スコリア(多量)、長石(やや多量)、石英	明赤褐色	二次的に火を受け赤褐色、口縁部剥落している	1.16.20.89
24	土師器 甕	(14.0)	13.4	6.6	1/3	白色砂粒、黄色粒、長石、石英、スコリア	内、鈍い褐色 外、鈍い褐色	薄手なつくり、内、若干剥落有り	1.25.87
25	ロクロ土師器 坏	—	[1.7]	6.6	底部完形	砂粒、長石(多)、石英、スコリア	鈍い褐色	内外、底部 墨書「得枚」カ	24
26	ロクロ土師器 坏	13.0	4.4	7.2	ほぼ完形	砂粒、小石、長石(多)、石英(多)	内、黄褐色 外、鈍い黄褐色	底部墨書「吉」	51
27	ロクロ土師器 坏	—	[1.2]	(8.0)	底部 1/4	砂粒、小石(3mm)、長石、石英、スコリア	鈍い褐色	底部墨書「□」	1
28	ロクロ土師器 坏	—	—	—	体部片	砂粒、長石、黒色粒	明褐色	体部墨書「□」	1
29	ロクロ土師器 坏	—	—	—	口縁片	砂粒、長石	褐色	体部(内)墨書「□」	1
30	ロクロ土師器 坏	—	—	—	底部片	砂粒、長石、石英	褐色	底部墨書「万」?	1
31	ロクロ土師器 坏	—	—	—	底部片	砂粒、長石、黒色粒	鈍い黄褐色	底部墨書「□」	1
32	ロクロ土師器 坏	—	—	—	底部片	微砂粒、スコリア	明褐色	底部墨書「□」	1

SI-094号竪穴住居跡 (第201図, 図版43, 130)

本遺構はH5-19グリッド付近に位置し、前述したSI-093号竪穴住居跡に南側半分を切られている。形態は方形で、規模は東西方向で4.1mを測る。確認面からの深さは住居北壁で63cmで、壁際に壁溝が掘り込まれている。柱穴等は検出できず、覆土にロームブロックを含んでいる。

カマドは北壁中央に位置し、遺存状況はよくない。最大幅は92cmで、煙道部は三角形に35cm張り出ししている。なお、カマド右脇から土師器甕(1)が出土した。

1は胴部中位以下を欠損する。口唇部は丸く収め、口縁部にはヨコナデを施す。胴部は縦方向のヘラ削りで、胴部上位に横方向にかなり深い擦痕がある。



第201図 SI-094号実測図

第94表 SI-094号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 甕	17.0	[18.7]	-	2/3	白色砂粒、長石(やや多)、石英	明褐色-暗褐色	外面肩部に砥き痕鮮明(二箇所)	8

SI-095号竪穴住居跡 (第202図, 図版43, 130)

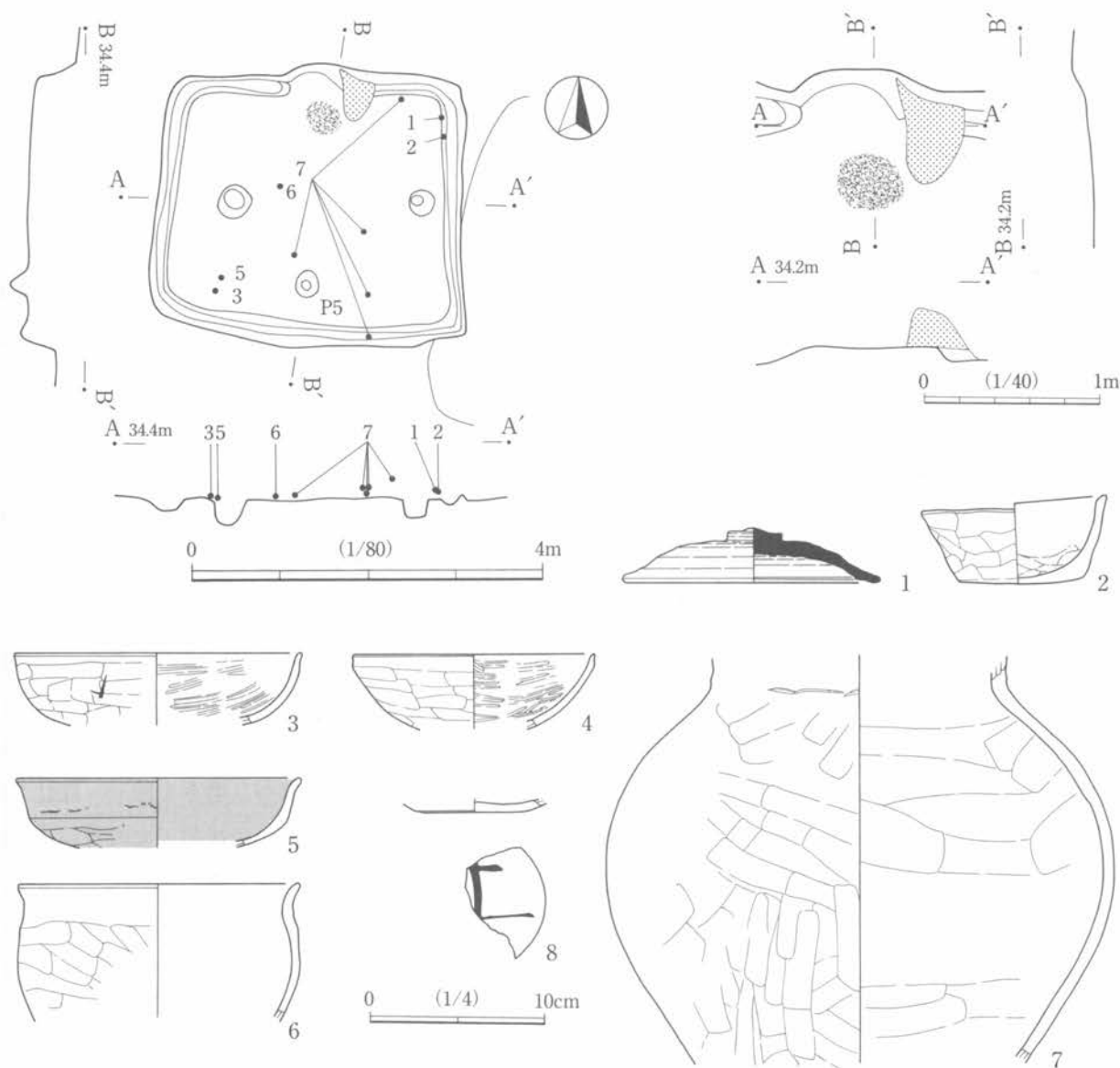
本遺構はH5-27グリッド付近に位置し、前述したSI-093号竪穴住居跡と東壁の一部が重複している。また、カマド付近から西壁にかけてSI-090号竪穴住居跡と重複し、本住居の覆土中にSI-090号の床面が構築されている。確認面からの深さは最も深い北壁で60cmを測り、カマド部分を除いて壁溝が巡っている。柱穴は東西の壁際のそれぞれ中央付近に2基のピットがあり、直径30cm~40cm、深さ20cm~30cmを測る。また南壁際中央に梯子ピットがあり、直径26cm、深さ21cmを測る。

カマドは北壁中央に位置するが、重複するSI-090号跡に切られ、遺存状況は悪い。

遺物はあまり多くないが、東壁の北東コーナー近くから須恵器坏蓋(1)が内面を上に向けて、土師器坏(2)が内面を下に向けて出土した。

1は須恵器坏蓋で完形である。天井部には扁平なつまみが付き、内面にかえしが僅かに残る。天井部中央はロクロ右回転の回転ヘラ削りである。

2~5は土師器坏である。2は口径7.2cmの小振りの製品で、調整は粗雑である。口縁部はヨコナデで、体部は横方向、底部は不定方向のヘラ削りを施す。3・5は浅い丸底の坏で、口唇部が僅かに外側へ肥厚する。5は口縁部に幅広にヨコナデを施し、底部は横方向のヘラ削りである。3は体部内面にヘラ磨きを



第202図 SI-095号実測図

施す。体部外面に逆位で「人」と墨書される。4は平底の坏で、平底である。口縁部は直立しヨコナデを施す。体部は横方向のヘラ削りで、内面に横方向のヘラ磨きを施す。8はロクロ土師器坏の底部破片である。底部は回転糸切り後、周縁部回転ヘラ削りである。なお、底部外面に「上」と墨書される。

6・7は土師器甕である。6は小形の甕で、口縁部はヨコナデ、胴部は横方向から斜め方向のヘラ削りである。7は胴部の破片である。外面はヘラ削り後、丁寧にヘラナデを施し、ヘラ削り痕を消している。頸部にヘラ当て痕が残る。

第95表 SI-095号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 壺	14.7	3.1	-	完形	砂粒、褐色粒(3mm)、長石、石英、雲母	内、黒褐色 外、黄褐色	常陸新治窯産	11
2	土師器 手捏	10.6	4.5	7.2	2/3	砂粒、長石、石英	内、鈍い黄褐色 外、暗褐色-黒褐色	内、赤彩 外、底部木葉痕一部残る	12
3	土師器 坏	(16.4)	[4.1]	-	1/5	スコリア、白色粒	内、明褐色 外、鈍い黄褐色	内、ミガキ 外、体部に墨書「人」	16
4	土師器 坏	(13.8)	4.3	-	1/3	微砂粒、石英(少)	鈍い黄褐色-褐灰色	内、炭素吸着	19, 20
5	土師器 坏	(16.3)	[3.9]	-	1/3	微砂粒、白針(少)	鈍い橙褐色一部黒色	内外、漆仕上げ	7, 13
6	土師器 甕	(16.1)	[7.5]	-	口縁1/5	スコリア、白色粒、石英	内、灰褐色 外、赤褐色	内、炭素吸着	18
7	土師器 甕	-	[22.9]	-	胴部1/2	白色砂粒(多)、長石、石英	赤褐色一部黒褐色	頸部ヘラ当て痕	1, 2, 3, 5, 10, 15
8	ロクロ土師器 坏	-	[0.8]	(7.0)	底部1/3	砂粒、小石(2mm)、長石	浅黄色	底部墨書「上」	1

SI-096号竪穴住居跡（第203～205図，図版43，130，131）

本遺構はG3-98グリッド付近に位置し，西側に浅い谷を臨む台地縁辺部，標高約36.1mに立地する。形態は方形で，規模は3.4m×3.4mを測り，主軸方向はN-12°-Eである。壁は垂直に立ち上がり，確認面からの深さは32cm～49cmである。壁溝はカマド部分を除いて全周し，住居中央に直径30cm，深さ40cmのピットが1基ある。また，南壁寄りに梯子ピットがあり，直径40cm，深さ50cmを測る。床面は北壁よりの範囲と南側の両コーナーに近い位置に硬化面があり，住居中央にはみられない。覆土は床面に近い位置で炭化物を多く含み，床面には住居北東コーナーから南西コーナーを結ぶような方向性で炭化材が検出された。遺物はこの層から多く出土している。

カマドは北壁中央に位置し，最大幅104cmを測る。袖部は灰褐色砂質土で構築され，壁から60cm延びている。煙道部は僅かに張り出す程度で，急角度で立ち上がっている。

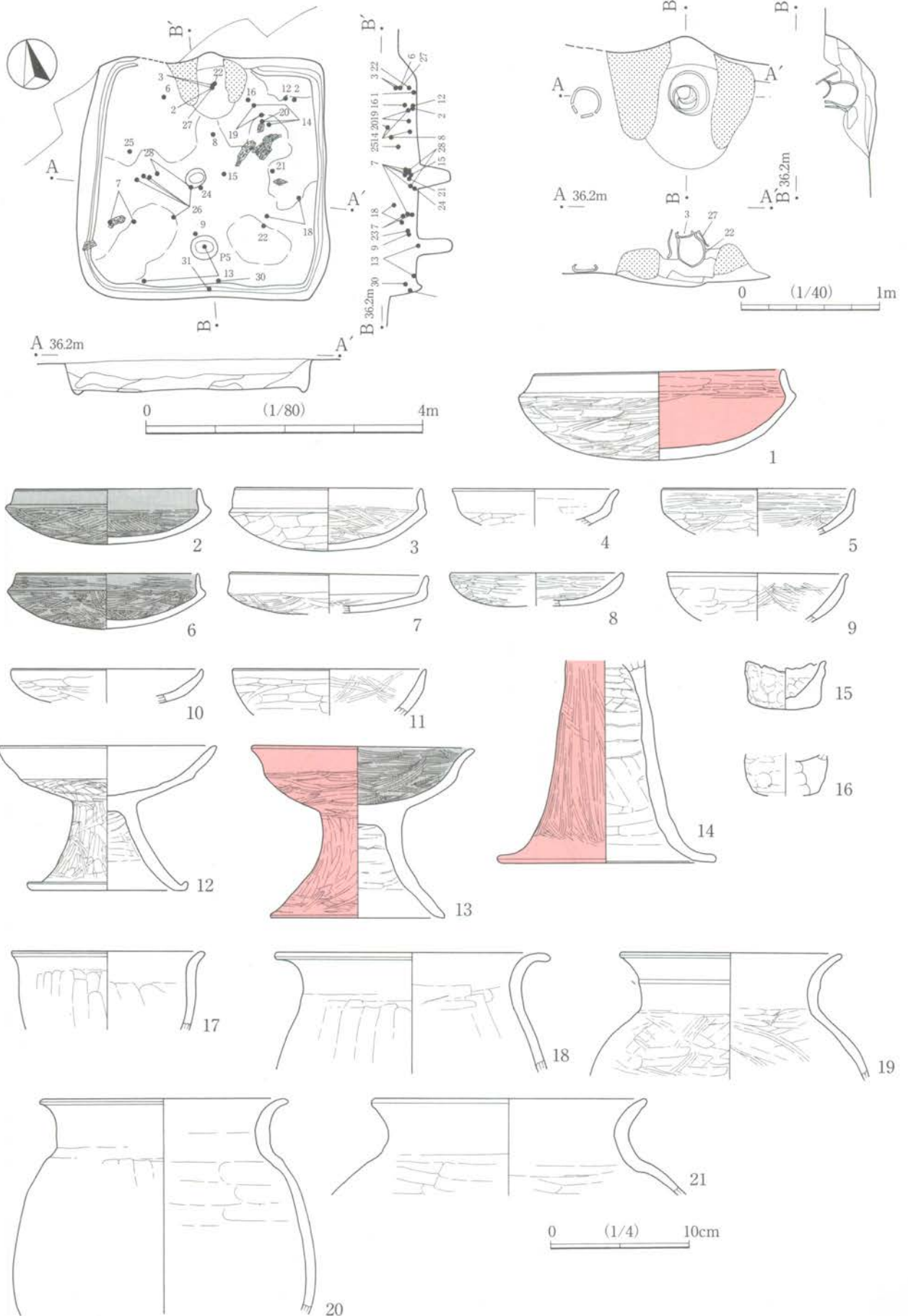
なお，掛け口部には土師器甕(22)が正位ではまり，その口に土師器坏(3)で蓋をし，さらに逆位で土師器甕(27)をかぶせており，カマドを封じる行為と考えられる。また，カマド左脇から土師器坏(1)が出土した。なお，甕の内部に小型のハマグリが詰められていた。

1～11は土師器坏である。1は口径18cmを測る大振りの坏で，形状としては身の模倣である。口縁部は内傾し，ヨコナデである。底部は横方向のヘラ削り後，粗くヘラ磨きを施す。内面は赤彩とみられるが遺存状況は悪い。2・3・6も身の模倣である。口縁部は短いが比較的立ち，ヨコナデで整える。横方向のヘラ削りで，3は中心部を一方向に削っている。2・6は内外面とも丁寧なヘラ磨きを施し，漆仕上げとみられる。3はカマド内から出土しており，被熱している。5は蓋の模倣で，口縁部下に稜が巡る。口縁部はヨコナデで，底部は横方向のヘラ削りを施す。内面から口縁部外面にかけて横方向のヘラ磨きを施している。7は底部が扁平な坏で，口縁部は直立する。口縁部はヨコナデで，底部は横方向のヘラ削り後丁寧にナデている。内面は剥落する。8～11は丸底の坏で，8・10は浅く，9・11は深い。いずれも口縁部は直立気味に立ち，ヨコナデで整える。底部は横方向のヘラ削りで，8・10はヘラ磨きを施し，8は入念である。内面も横方向のヘラ磨きを施す。

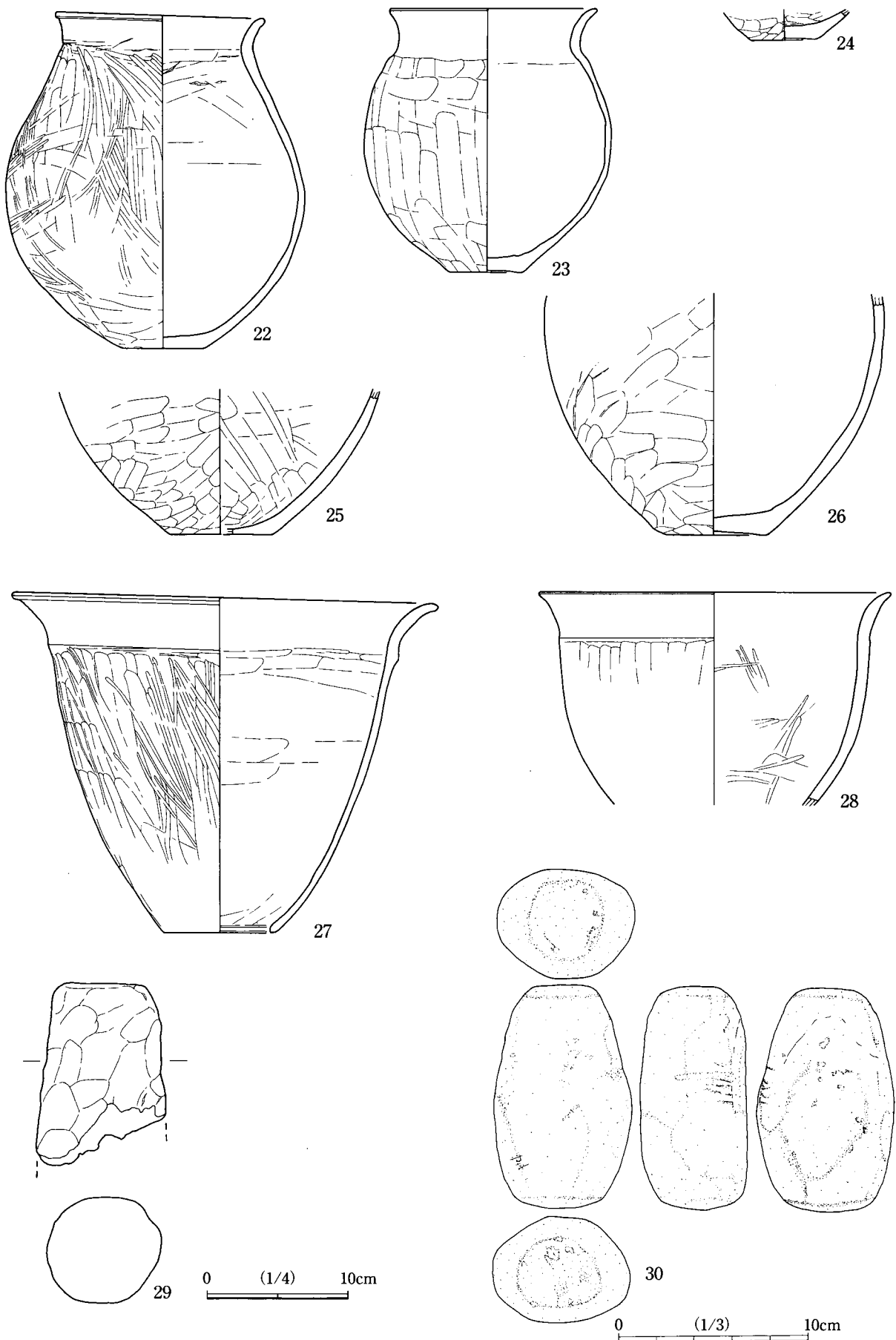
12～14は土師器高坏である。12・13は短脚の高坏で，ほぼ完形である。坏口縁部と脚裾部はヨコナデを施し，12の脚裾部は上へめくれあがる。坏底部は周縁部で横方向，脚部との接合部近くで縦方向のヘラ削りを施す。脚柱部は縦方向のヘラ削り後，縦方向のヘラ磨きを施す。なお，13は坏部内面を黒色処理，外面全体に赤彩を施している。14は長脚の高坏の脚部で，脚柱部は縦方向のヘラ削り，裾部はヨコナデを施す。内面上位に数段の粘土紐接合痕を残す。外面は赤彩される。

15・16はミニチュアの土器で，手捏ねである。ともに指頭によるナデで，器面の凹凸がかなり目立つ。16は厚い底部であり，かなり被熱している。

17～26は土師器甕である。17～21は口縁部の破片である。17は小形の甕で，最大径は口縁部にある。口縁部はヨコナデ，胴部外面は縦方向のヘラ削りを施す。内面は横方向のヘラナデである。19・21は胴部が球形となるものである。ともに口縁部は大きく外反し，19は口縁部の途中に稜を巡らす。胴部は横方向のヘラ削りで，19は横方向のヘラ磨きを施す。18・20はあまり胴部が膨らまないものである。口縁部は大きく外反し，ヨコナデを施す。胴部は縦方向のヘラ削りであるが，20は器面が剥落し調整はほとんど観察できない。22・23はほぼ完形である。22は最大径が胴部中位よりやや下に位置するもので，下膨れである。口縁部は外反し，ヨコナデを施す。胴部は縦方向のヘラ削りで，底部近くは横方向である。また，ヘラ削

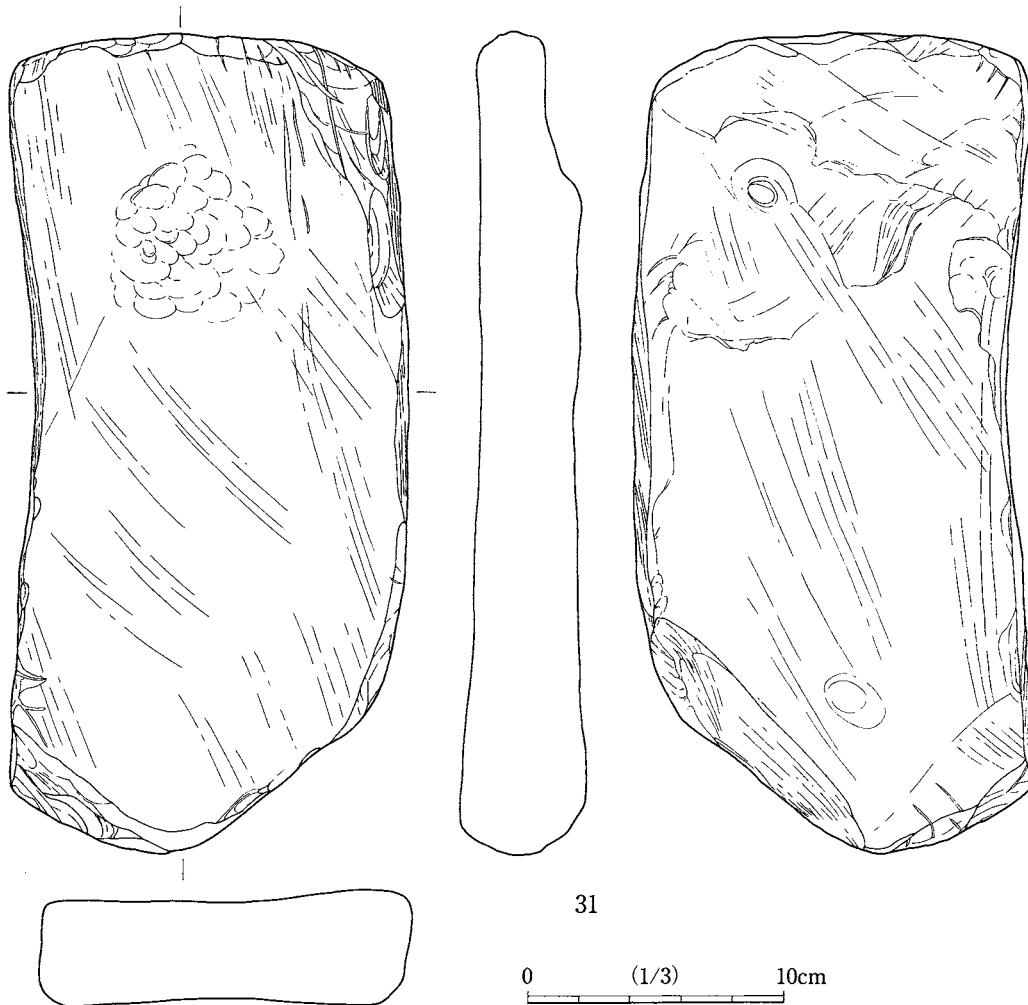


第203图 SI-096号实测图



第204图 SI-096号出土遗物实测图(1)





第205図 SI-096号出土遺物実測図(2)

第96表 SI-096号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	18.0	6.5	丸	ほぼ完形	砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色+外底部黒色	内、赤彩剥落有り 外底部黒斑	41
2	土師器 坏	13.6	4.0	丸	3/4	微砂粒、石英(少)	鈍い赤褐色+黒色	全面漆仕上げミガキ	1.24
3	土師器 坏	13.6	4.5	丸	ほぼ完形	砂粒、長石(少)	内、鈍い赤褐色~黒褐色 外、黄 灰褐色一部赤褐色	二次的に火を受けて内外、剥落 著しい	40.42
4	土師器 坏	(12.0)	[2.7]	—	1/5	白色粒、黄土粒	明赤褐色	内外、ナデ	1
5	土師器 坏	(14.0)	[3.3]	—	口縁1/4	白色粒	明赤褐色	内、丁寧なミガキ 外、ヘラケズ リ後一部ミガキ	1
6	土師器 坏	13.2	4.0	丸	2/3	微砂粒、スコリア	鈍い黄褐色	全面漆仕上げ 器面なめらか	1.40
7	土師器 坏	14.2	[3.1]	—	1/2	砂粒、長石(少)、石英(少)	明褐色	剥落著しい	10.11
8	土師器 坏	(12.6)	[2.4]	—	1/4	白色粒	鈍い赤褐色	器面なめらか	33
9	土師器 坏	13.0	[3.6]	—	1/2	白色粒、長石粒	内、黒褐色 外、褐色	若干剥落有り	1.25
10	土師器 坏	(14.0)	[2.5]	—	口縁1/5	白色粒、小石	明褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	1
11	土師器 坏	(14.0)	[3.4]	—	1/4	白色砂粒、長石(多)、石英	褐色	内、粗にミガキ	1
12	土師器 高坏	15.8	10.5	11.6	ほぼ完形	白色砂粒、黒色粒、長石、石英、 小石(1~2mm)	鈍い黄褐色	坏内面剥落著しい	1.36
13	土師器 高坏	16.2	12.5	12.6	ほぼ完形	砂粒、小石(1mm位)、長石、石英	内、黒色 外、鈍い赤褐色~黒褐色	内、坏部黒色処理 外、全面赤彩	8.37
14	土師器 高坏	—	[14.6]	15.8	胴部3/4	白色微砂粒、長石、石英	内、黒色+鈍い黄褐色 外、赤色	外、赤彩、器面なめらか	16.18.20
15	土師器 手捏	5.8	3.5	5.2	ほぼ完形	白色砂粒、長石(多)、石英(多)	鈍い黄褐色	内、指ナデ 内外、剥落有り	15
16	土師器 手捏	—	[3.0]	(4.6)	底部1/2	砂粒、長石	鈍い褐色	スス付着	23
17	土師器 甕	(14.0)	[5.7]	—	口縁1/4	白色粒、石英粒	内、黒色~灰黄褐色 外、赤褐色	内、口縁部炭素吸着	1
18	土師器 甕	(20.0)	[8.7]	—	口縁1/9~胴部1/4	白色粒、石英粒、小石	鈍い褐色	器面剥落著しい	1.3.30
19	土師器 甕	(16.0)	[9.2]	—	口縁1/4 胴上 2/3	砂粒、長石、スコリア	鈍い黄褐色一部黒褐色	頸部に沈線有り 肩部内外茶状 にスス付着	1.19.20
20	土師器 甕	(16.0)	[15.9]	—	1/4	砂粒、小石(1~2mm)、長石、石英	鈍い赤褐色+黒褐色	外、口縁スス付着、胴部著しく剥落	1.16
21	土師器 甕	(20.0)	[7.0]	—	口縁~胴上部1/5	白色粒、黄土粒	鈍い赤褐色	内、器面剥落有り	17
22	土師器 甕	14.8	23.8	5.8	ほぼ完形	砂粒、長石、石英	鈍い赤褐色~暗灰黄色	器面歪み有り	43
23	土師器 甕	14.6	18.5	5.2	ほぼ完形	砂粒、小石(1~2mm)、長石、石英	鈍い黄褐色+暗灰黄色	内、二次焼成で全面剥落している	21
24	土師器 甕	—	[2.1]	4.6	底部完形	白色砂粒、黒色粒、長石、石英	内、赤褐色 外、鈍い黄褐色	32	
25	土師器 甕	—	[10.2]	7.2	底部~底辺1/2	砂粒、黒色粒、長石、石英	内、鈍い黄褐色 外、鈍い褐色	内、剥落有り、ヘラナデ痕多数	17
26	土師器 甕	—	[17.0]	8.0	底部完形 胴尖 ~底辺1/4	砂粒、長石、石英、スコリア	赤褐色一部黒色	輪積み痕残り粗雑なつくり	1.6.13.26.27.29
27	土師器 甕	30.1	24.0	8.0	ほぼ完形	白色砂粒、小石(1~2mm)、長 石、石英、スコリア	内、暗灰黄色~黒褐色 外、鈍い 黄褐色~灰褐色	内外、器面薄く剥落している	1.40
28	土師器 甕	(24.8)	[15.0]	—	口縁部1/3	砂粒、長石、スコリア	赤褐色	内、丁寧なナデで器面なめらか	1.14.29

り後に不規則なヘラ磨きを粗く施している。23は球形の胴部である。口縁部は外反しヨコナデである。胴部は上位に横方向の、それ以下に縦方向のヘラ削りを施す。

27・28は土師器甕で、27はほぼ完形である。ともに口縁部は外反し、ヨコナデで、27口縁部と胴部の境が突帯状に出っ張る。胴部は縦方向のヘラ削りで、27は縦方向に粗くヘラ磨きを加えている。

29は土製支脚である。胎土にスサを多く混入している。30は砂岩製の敲石で、全体的に敲打痕があり、特に両端が顕著である。また、両側縁にかなり鋭利な擦痕が認められる。31は片岩質の砥石である。幅広の平坦な面よりも、幅の狭い側面がよく使用されている。また、全体的に鋭利で細かい擦痕も多く認められる。

#### SI-097号竪穴住居跡（第206, 207図, 図版44, 131, 132）

本遺構はG5-56グリッド付近に位置し、南側に浅い谷を臨む台地縁辺部、標高約33.2m立地する。北から南へ向かって下がる斜面に位置するため、確認面からの深さも斜面上位に当たる北壁で90cm前後、南壁では30cm前後となる。壁溝はカマド部分を除いて全周し、支柱穴は住居対角線上に4基ある。支柱穴は直径70cm前後で、深さは48cm～64cmである。なお、住居南西コーナー付近の壁溝内に小ピットが1基ある。

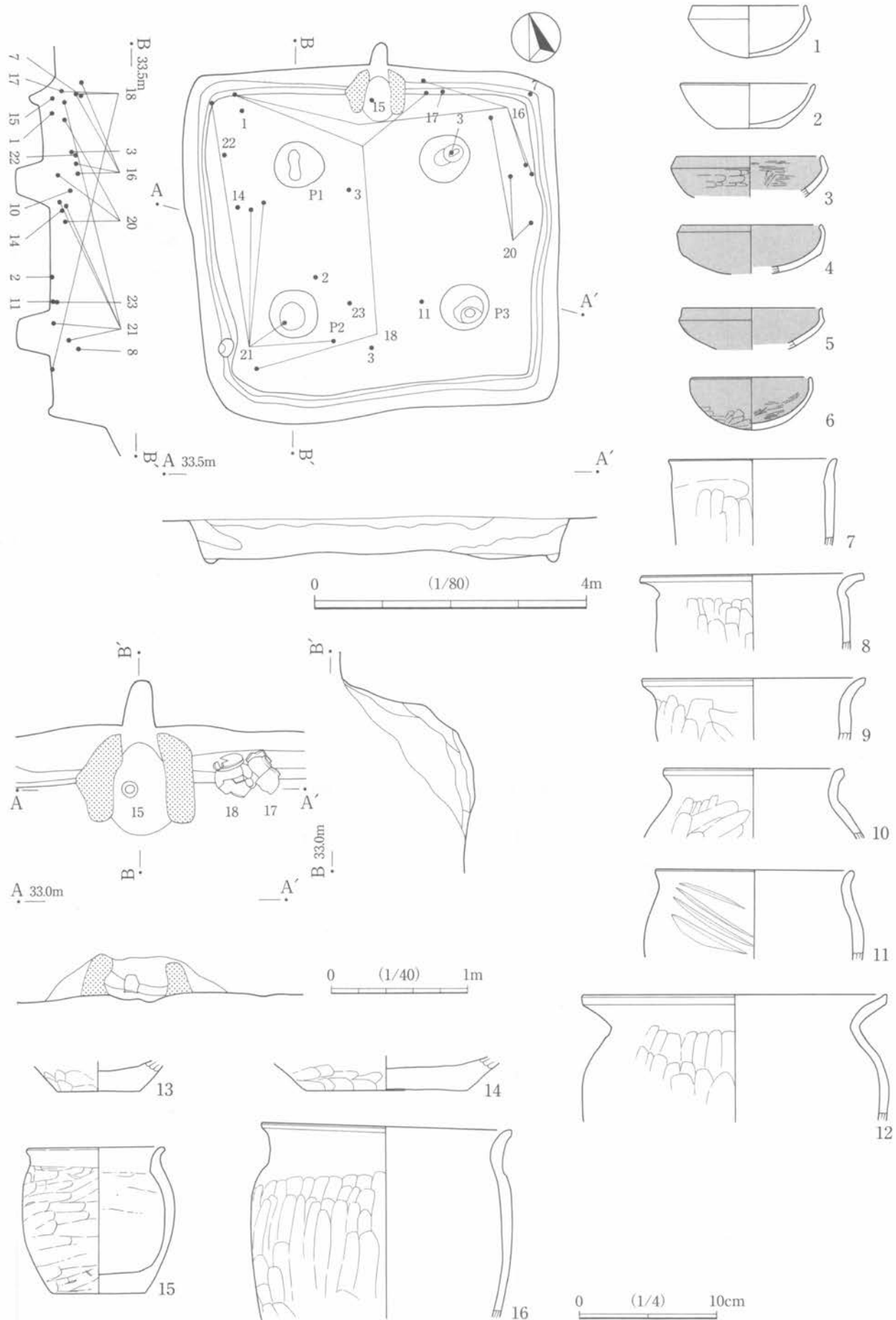
カマドは北壁中央に位置し、最大幅は97cmを測る。袖部は灰褐色砂質土で構築され、壁から60cm延びている。煙道部はU字形で、壁外へ30cm張り出し、急角度に立ち上がっている。

なお、カマド内には火床部から僅かに浮いた状態で小形の土師器甕(15)が逆位で置かれていた。また、カマド右側からも土師器甕(17)(18)がまとまって出土している。

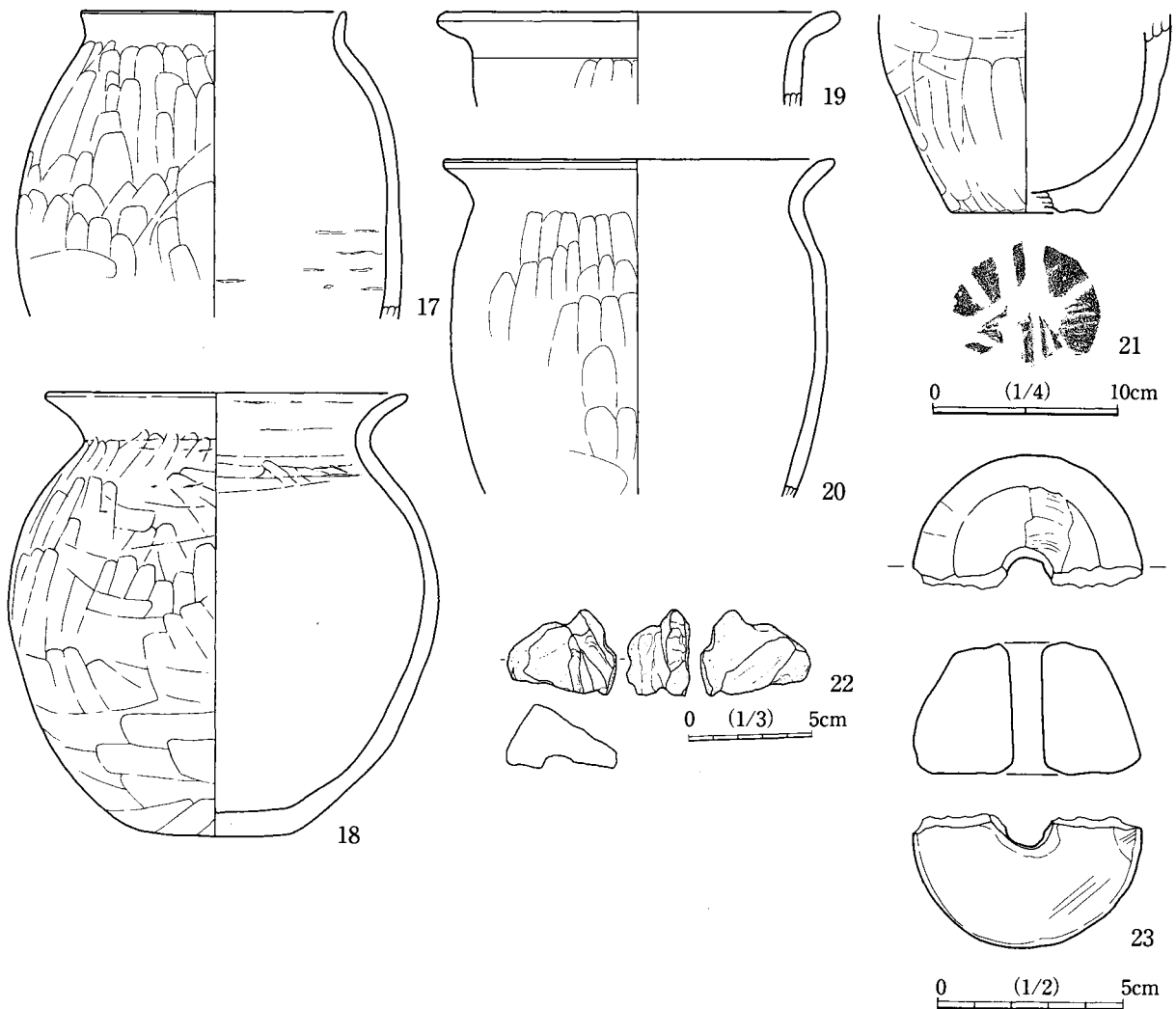
1～6は土師器坏である。いずれも口径10cm内外の小振りの坏で、精緻な仕上がりである。1・3・4・5は身の模倣で、口縁部が短く内傾する。1は器面が摩耗し、調整はまったく観察できないが、他の個体は口縁部にヨコナデを施し、体部外面は横方向のヘラ削りである。3・4・5は内面から口縁部外面にかけて丁寧に磨き、漆仕上げとみられる。2は平底となる坏である。1と同様に器面が摩耗している。6は丸底の坏で、薄く仕上げられている。口縁部はヨコナデで、底部は横方向のヘラ削りを施すが、内面とも入念に磨かれ、漆仕上げとみられる。

7～21は土師器甕である。9～12・19は口縁部の破片で、19は形状から甕かもしれない。いずれも口縁部はヨコナデで、口唇部は12が受け口状を呈するが、他はすべて丸く収めている。胴部は縦方向のヘラ削りである。なお、11は胴部外面に転用砥石として使用したとみられる溝が4条あり、長さは7cm～8cm、器面での幅は最大で6mmで、断面はV字状となり、器面からの深さは6mmを測る。15は小形の甕で、完形である。口縁部はヨコナデで、胴部は横方向のヘラ削りである。16は胴部下半を欠損する。口縁部はヨコナデで、胴部は口縁部からややあいだをあけて縦方向のヘラ削りを施している。17も胴部下半を欠損し、破損部は摩滅している。口縁部は短く直立し、ヨコナデである。胴部は縦方向のヘラ削りであるが、器面の遺存状況が悪く不鮮明である。内面は剥落する。20はほぼ完形である。口縁部は外反し、口唇部はやや尖った感じがする。胴部は上半が縦方向、下半に横方向のヘラ削りを施し、さらにナデを加える。21は底部の破片で、厚く仕上げている。底部外面に太い棒状工具の押厚痕が6本ある。断面の観察からも、単なる押厚であり、土器製作時に下に敷いたものと考えられる。

22は軽石製の砥石である。半円形の溝が4条認められる。同様のものはSI-092号、SD-001号から



第206图 SI-097号实测图



第207図 SI-097号出土遺物実測図

も出土している。23は土製紡錘具で、側面は縦方向のヘラ削り後ヘラ磨きを施している。

第97表 SI-097号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	8.3	3.7	丸	ほぼ完形	微砂粒、スコリア	橙色	内外、摩耗	57
2	土師器 坏	9.8	3.3	丸	3/4	微砂粒、石英(少)、スコリア	橙色	内外、摩耗	56
3	土師器 坏	(10.8)	[3.0]	-	口縁1/4	スコリア、黒色粒	鈍い黄褐色	内面~外面口縁部 漆仕上げ	24
4	土師器 坏	(10.2)	[3.5]	-	口縁1/4	スコリア	鈍い黄褐色	内面~外面口縁部 漆仕上げ	1
5	土師器 坏	(10.2)	[3.0]	-	口縁1/4	スコリア	鈍い黄褐色	内面~外面口縁部 漆仕上げ	65
6	土師器 坏	(8.9)	3.8	丸	一部	白色粒	鈍い黄褐色	内外、漆仕上げ	65
7	土師器 甕	(12.2)	[6.3]	-	口縁1/4	白色粒、長石	鈍い赤褐色	内、炭素吸着	59
8	土師器 甕	(16.3)	[5.5]	-	口縁1/4	長石、白色粒	内、明赤褐色 外、黒褐色	外、炭素吸着	1.37.65
9	土師器 甕	(16.3)	[4.5]	-	口縁の一部	白色粒、雲母	内、鈍い黄褐色 外、明赤褐色	器面著しく剥落	1.65
10	土師器 甕	(13.1)	[5.0]	-	口縁1/3	白色粒	橙色	外、口縁煤付着	6.42.65
11	土師器 甕	(14.4)	[6.5]	-	口縁部1/4	砂粒、黒色粒、長石(少)、石英(少)	鈍い黄褐色~明赤色	刃物を研いた跡鮮明に残る	45
12	土師器 甕	(22.3)	[9.2]	-	口縁1/4	スコリア、雲母	鈍い黄褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	1
13	土師器 甕	-	[2.2]	6.1	底部のみ完形	白色砂粒、長石(少)	鈍い褐色		21
14	土師器 甕	-	[2.5]	11.8	底部3/4	砂粒、小石(1~3mm)、長石、石英	内、黄褐色 外、黄褐色+黒褐色	底部切り離した後丁寧に磨いている	54
15	土師器 甕	10.2	11.0	6.8	完形	粗砂粒、黒色粒、長石(多)、石英(多)	内、明赤褐色 外、明赤褐色~褐色 灰色	器形が歪んでいる、外面剥落著しい	63
16	土師器 甕	18.4	[14.6]	-	1/2	砂粒、小石(1mm)、長石、石英	明赤褐色一部黒色	正円でない	15.48.49.58
17	土師器 甕	14.3	[16.5]	-	2/3	砂粒、スコリア(少)、長石(少)、石英(少)	内、黄灰褐色、灰褐色 外、鈍い黄褐色~黒褐色	内面剥落著しく斑状に染みが多数、外面摩耗	61
18	土師器 甕	19.5	24.0	8.0	ほぼ完形	白色砂粒、黒色粒、長石、石英	内、橙褐色~鈍い褐色 外、橙褐色~黒褐色	内、胴尖~底部にかけて剥落著しい	1.22.62
19	土師器 甕	(22.0)	[5.0]	-	口縁の一部	白色粒、スコリア	橙色	器面著しく剥落	64
20	土師器 甕	(21.2)	[18.0]	-	口縁1/4	白色粒、スコリア	明赤褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	30.31.50.65
21	土師器 甕	-	[10.8]	8.0	1/4	砂粒、長石、スコリア	内、明褐色 外、灰黄褐色~黒色	内、剥落著しい	1.2.20.29.33.53

SI-098号竪穴住居跡（第208図，図版44，132，133）

本遺構はJ4-60グリッド付近に位置し，東側台地の中央部，標高約35.9mに立地する。西壁中央付近でSK-073号土坑と重複する。形態は方形で，規模は4.1m×4.1mを測り，主軸方向はN-5°-Eである。東から西へ向かって緩やかに下がる斜面に位置するため，確認面からの深さは南東コーナーで70cm，東壁で30cmである。壁溝はカマド部分を除いて全周する。支柱穴は住居対角線上に4基配置され，直径は60cm～80cm，深さ40cm～60cmを測る。また，カマドに対する南壁際中央には梯子ピットがあり，直径40cm，深さ13cmである。なお，住居北東コーナーに貯蔵穴があり，70cm×60cmの楕円形で，10cmの深さがある。

カマドは北壁中央に位置し，遺存状況が悪く左側袖部はほとんど残っていない。袖部はロームを主体とした基底部に灰白色砂質土で構築している。煙道部はU字形で，壁外へ40cm張り出している。

2～4は土師器坏で，体部が内湾気味に立ち上がる平底の坏である。口縁部はヨコナデで，体部は横方向のヘラ削りを施す。内面は横方向のヘラ磨きである。1・5・9・14はロクロ土師器坏である。1は体部下端及び底部全面回転ヘラ削りである。5・9・14は底部の破片で，5は体部下端及び底部全面回転ヘラ削り，9・14は体部下端に手持ち，底部一方向のヘラ削りである。なお，9は底部内面が著しく摩滅し，転用硯として使用したとみられる。また，5・14は底部外面に「人」と墨書される。6は土師器蓋の破片である。

7・8・10は土師器甕で，口縁部の破片である。口縁部は受け口状を呈し，ヨコナデを施す。胴部は縦方向のヘラ削りである。11は甕の底部破片である。12・13は須恵器甕の破片で，内面の破片中央が摩滅している。13は特に摩滅が著しくナデで消した同心円叩きが現れている。転用硯と考えられる。

15は刀子である。

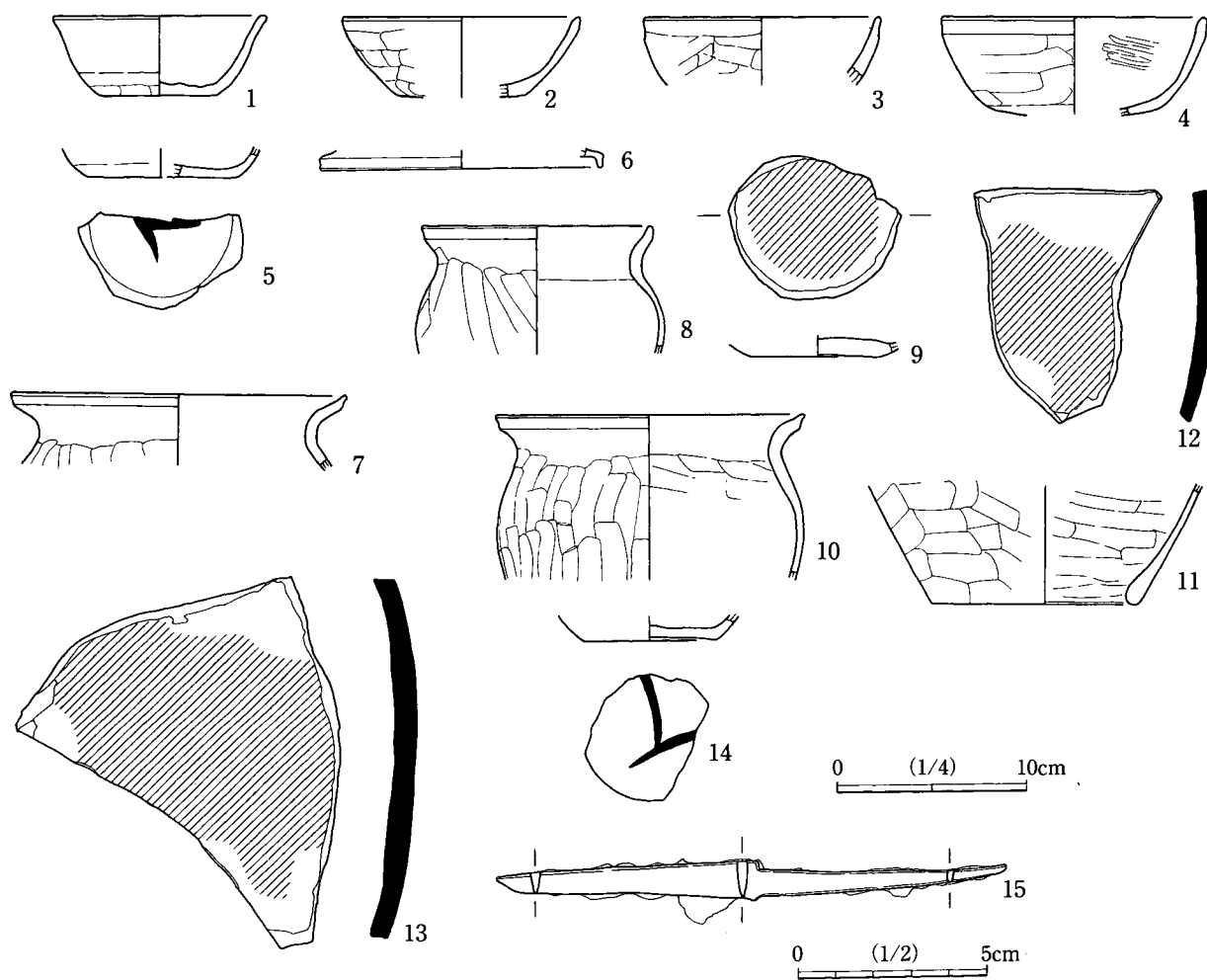
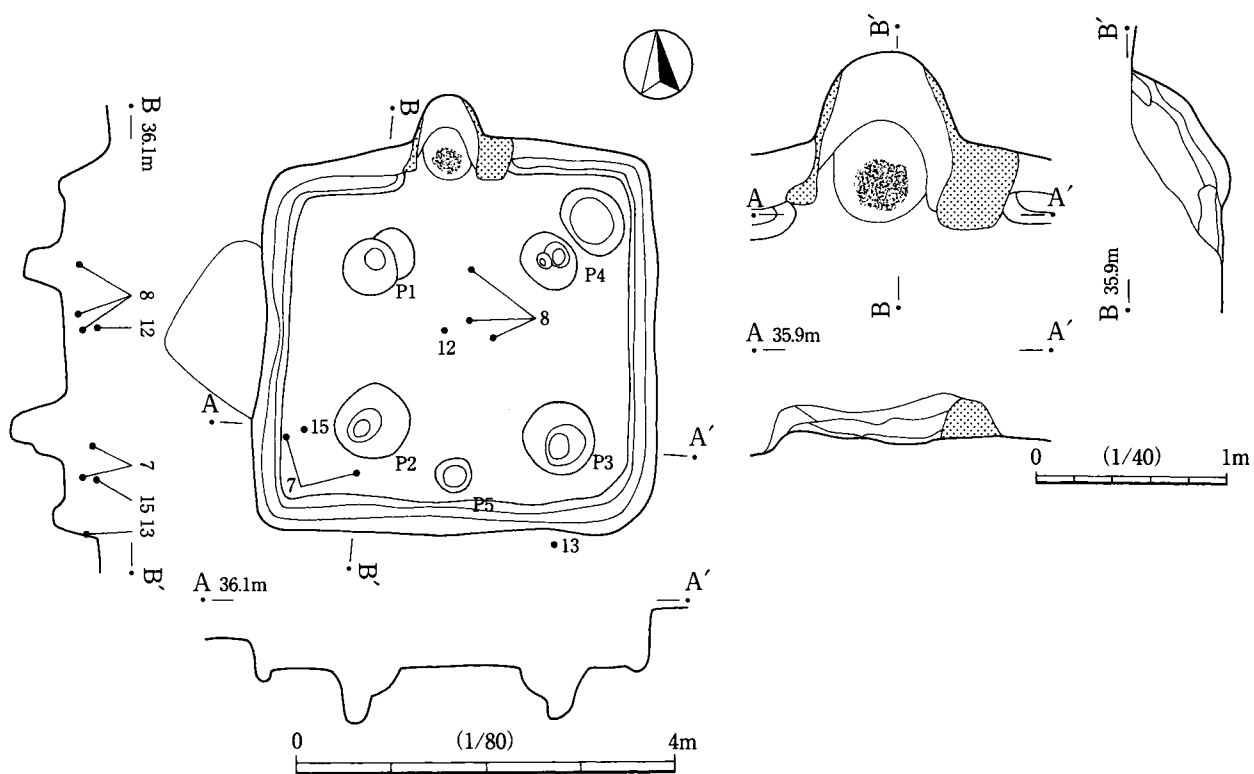
第98表 SI-098号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	ロクロ土師器 坏	(11.3)	4.2	6.1	1/2	砂粒、長石(少)、スコリア	明褐色	内外、摩滅	1
2	土師器 坏	(12.7)	[4.3]	-	1/7	スコリア、石英、白色粒	鈍い褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	1
3	土師器 坏	(12.6)	[3.6]	-	口縁1/4	スコリア、白色粒	鈍い褐色	内、ナデ	1
4	土師器 坏	(14.1)	[4.7]	-	1/4	白色粒、スコリア	黒褐色	内、ミガキ 外、ヘラケズリ	1
5	ロクロ土師器 坏	-	[1.5]	8.0	底部1/2	細砂粒、石英(少)、スコリア	鈍い黄褐色	底部回転ヘラケズリ、底部墨書「人」	1
6	土師器 蓋	-	[1.0]	(15.0)	1/8	白色粒	鈍い赤褐色		1
7	土師器 甕	(17.5)	[3.7]	-	口縁1/4	白色砂粒、長石	明赤褐色		2,3
8	土師器 甕	12.3	[6.8]	-	口縁部完形	白色砂粒、長石、石英	内、黄褐色～暗褐色 外、暗褐色～黒褐色	二次的に火を受けて器面ざらつく	7,9,11
9	ロクロ土師器 坏	-	-	7.0	底部のみ	白色砂粒、長石(多)、石英	内、暗赤褐色 外、暗褐色		1
10	土師器 甕	(16.4)	[8.8]	-	口縁～胴部1/3	砂粒、長石、石英、スコリア	内、鈍い黄褐色 外、明褐色～鈍い褐色	外、ヘラ痕多数	20
11	土師器 甕	-	[6.2]	11.0	底部1/4	スコリア、長石、石英	鈍い黄褐色		1
12	須恵器 転用硯	-	-	-	胴部片	微砂粒、長石	灰色		15
13	須恵器 転用硯	-	-	-	胴部片	微砂粒、長石	灰色		16
14	ロクロ土師器 坏	-	[1.3]	7.2	底部3/4	砂粒、黒色粒、スコリア	明黄褐色	底部墨書「人」	1

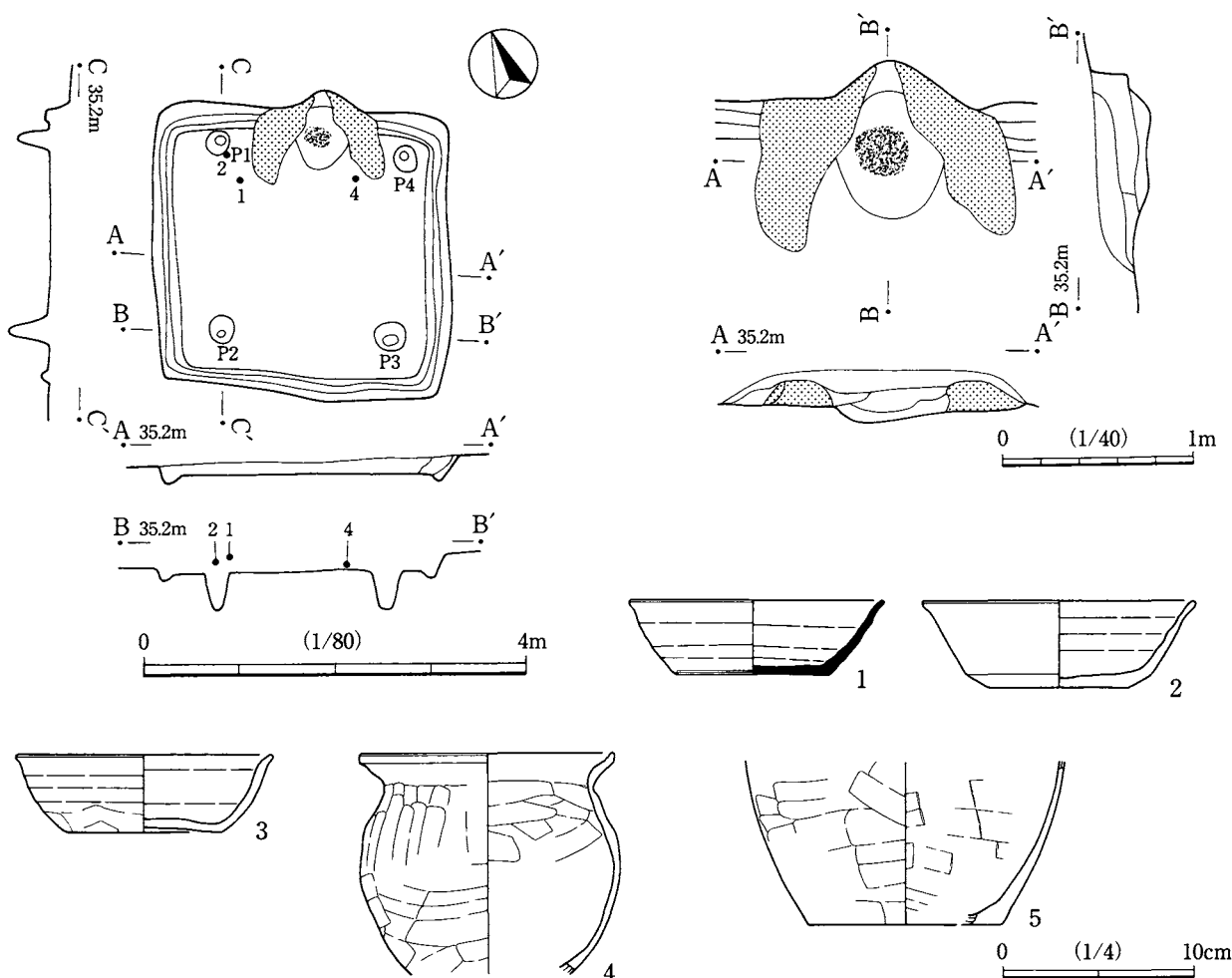
SI-099号竪穴住居跡（第209図，図版45，133）

本遺構はI5-06グリッド付近に位置し，台地の西から入り込む浅い谷にかかり，標高約35.1mに立地する。形態は方形で，規模は3.1m×3.1mを測り，主軸方向はN-15°-Eである。北東から南西へ向かって緩やかに下がる斜面に位置するため，確認面からの深さも北東コーナーで32cm，南西コーナーでは7cmである。壁溝はカマド部分を除いて全周する。支柱穴は4基配置され，カマドの両脇に北壁と接するようにP1・P4が，南壁寄りにP2・P3がある。直径は25cm～30cmで，深さは35cm～43cmである。

カマドは北壁中央に位置し，袖部がハ字状に開いている。最大幅は130cmで，煙道部の奥まで構築材が残っている。煙道部は三角形に壁外へ15cm張り出し，急角度で立ち上がっている。



第208图 SI-098号实测图



第209図 SI-099号実測図

1は須恵器坏である。体部はやや内湾気味に立ち上がるが、口縁部が外反する。体部下端は回転ヘラ削りで、底部はヘラ切り後全面回転ヘラ削りを施す。ロクロ回転方向は右である。2・3はロクロ土師器坏である。2は体部下端及び底部全面をロクロ右回転のヘラ削り、3は体部下端及び底部全面を手持ちヘラ削りである。

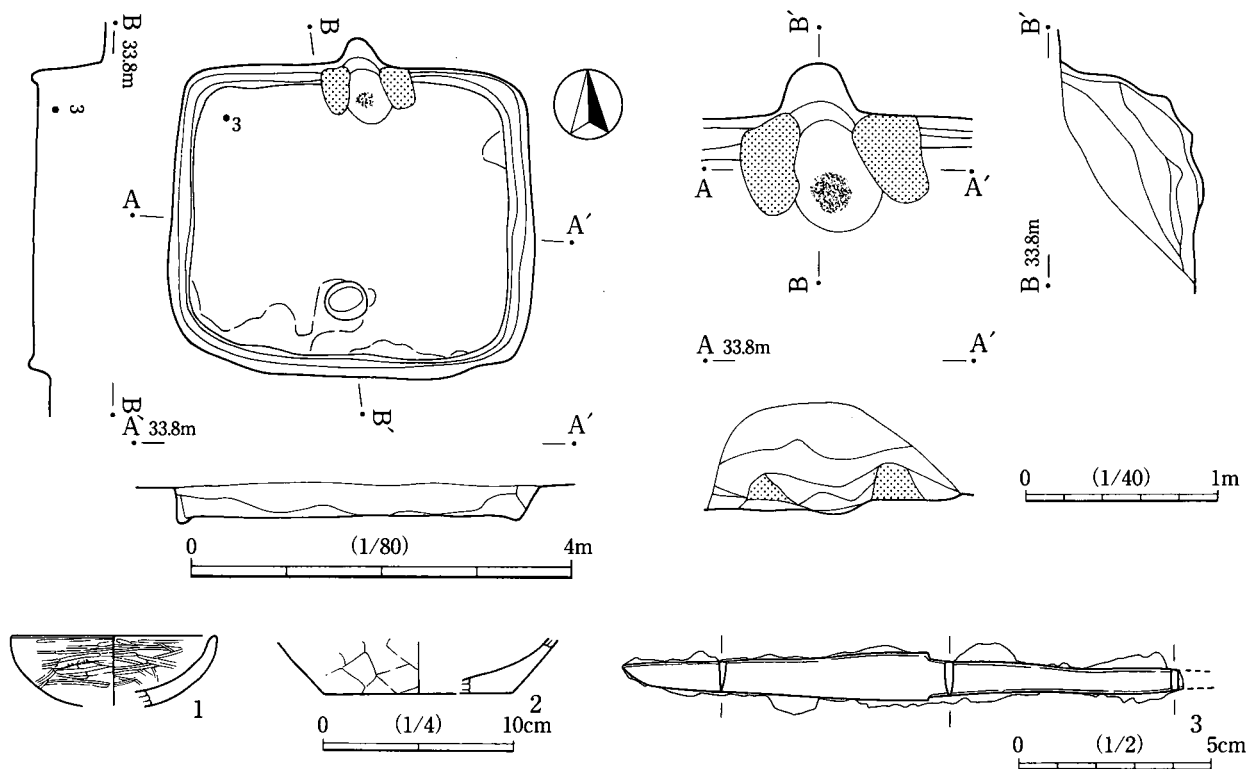
4・5は土師器甕である。4は底部を欠損するがほぼ完形で、小形の甕である。口縁部は受け口状を呈し、ヨコナデで、胴部は上半が縦方向、下半が横方向のヘラ削りを施す。5は底部破片で、外面は横方向のヘラ削りである。

第99表 SI-099号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	13.3	3.9	7.6	ほぼ完形	砂粒、長石(少)	暗灰色	底部回転ヘラ切り後全面回転ヘラ削り	3
2	ロクロ土師器 坏	(14.2)	4.3	7.2	1/2	白色砂粒、スコリア(多)、長石、石英	明赤褐色一部黒褐色	粘土がよく混合せず緻密になっている	2
3	ロクロ土師器 坏	13.4	4.1	8.0	3/4	砂粒、小石(1-2mm)、長石、スコリア	赤褐色	鉄分を多く含む土を使っている	1
4	土師器 甕	13.4	[11.6]	-	2/3	砂粒、長石(少)、石英(少)	内、鈍い黄褐色 外、鈍い黄褐色～黒褐色	正円でない口径	7
5	土師器 甕	-	[8.6]	(10.0)	底部1/8	白色砂粒	暗褐色	内、砂粒状の付着物あり	1

SI-100号竪穴住居跡 (第210図, 図版45)

本遺構はH5-55グリッド付近に位置し、南側に浅い谷を臨む台地縁辺部、標高約32.0mに立地する。



第210図 SI-100号実測図

形態は方形で、規模は3.2m×3.8mを測り、主軸方向はN-2°-Eである。北から南へ向かって下がる斜面に位置するため、確認面からの深さも北壁で70cm、南壁で15cmとなる。壁溝はカマド部分を除いて全周し、床面のほぼ全面に硬化面がある。柱穴はなく、カマドに対する南壁寄り中央に梯子ピットがある。梯子ピットは直径40cm、深さ20cmを測る。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅は95cmである。袖部はロームを主体とした基底部に灰褐色砂質土で構築し、右方向に傾いて延びている。煙道部はU字形で、壁外へ25cm張り出している。

1は土師器坏である。丸底の坏で、厚手の仕上がりである。口唇部はヨコナデで、体部は横方向のヘラ削り後丁寧磨いている。内面も全面にヘラ磨きが施される。2は土師器甕の底部破片である。外面は横方向のヘラ削りで、底部も一方向に削っている。

3は刀子である。

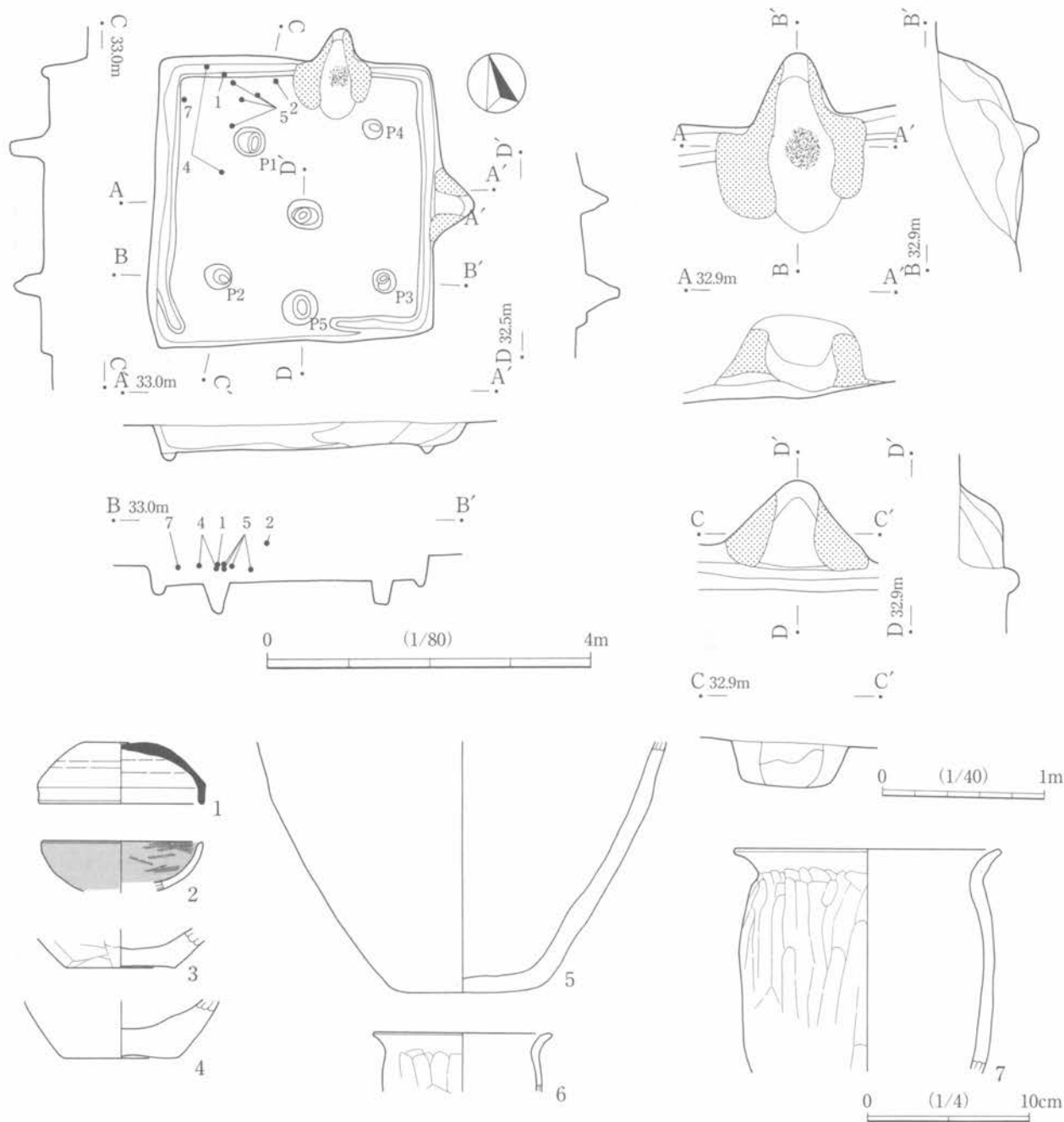
第100表 SI-100号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(10.8)	[3.6]	丸	口縁-底部1/8	スコリア	明赤褐色	厚手なつくり	1
2	土師器 甕	-	[2.7]	(9.8)	底部1/8	白色粒、石英	内、明赤褐色 外、鈍い黄褐色		1

SI-101号竪穴住居跡 (第211図, 図版46, 133)

本遺構はH5-82グリッド付近に位置し、台地の西から入り込む浅い谷にかかり、標高約32.7mに立地する。形態は方形で、規模は3.4m×3.5mを測り、主軸方向はN-15°-Eである。北から南へ向かって下がる斜面に位置するため、確認面からの深さは北壁で50cm、南壁で10cmとなる。壁溝は南壁の約1/2を除いて巡るが、南西コーナーは壁から約15cm離れている。主柱穴は住居対角線上に4基配置されるが、住居北西コーナーに近いP1は、やや住居内側に寄った位置にある。直径は20cm~30cmで、深さ17cm~





第211図 SI-101号実測図

47cm を測る。また、住居中央にもピットがあり、30cm×40cm の楕円形で、深さ38cmを測る。なお、南壁際中央には梯子ピットがあり、直径45cm、深さ40cm を測る。覆土は全体に焼土粒・焼土ブロックを多く含む。

カマドは北壁と東壁の2か所にあり、住居廃絶時において東壁のカマドは使用されていないかのように、東壁を旧カマド、北壁を新カマドとして構築したようだ。北壁のカマドは中央よりやや東に寄った位置にあり、最大幅は90cmを測り、ロームブロックの基底部の上に灰白色砂質土で袖部を構築している。構築材は煙道部の奥まで残り、煙道部はU字形に40cm張り出している。東壁のカマドは東壁中央に位置し、現状では煙道部の張り出しと、その内部に残る構築材が確認できるだけである。住居床面には火床部やカ

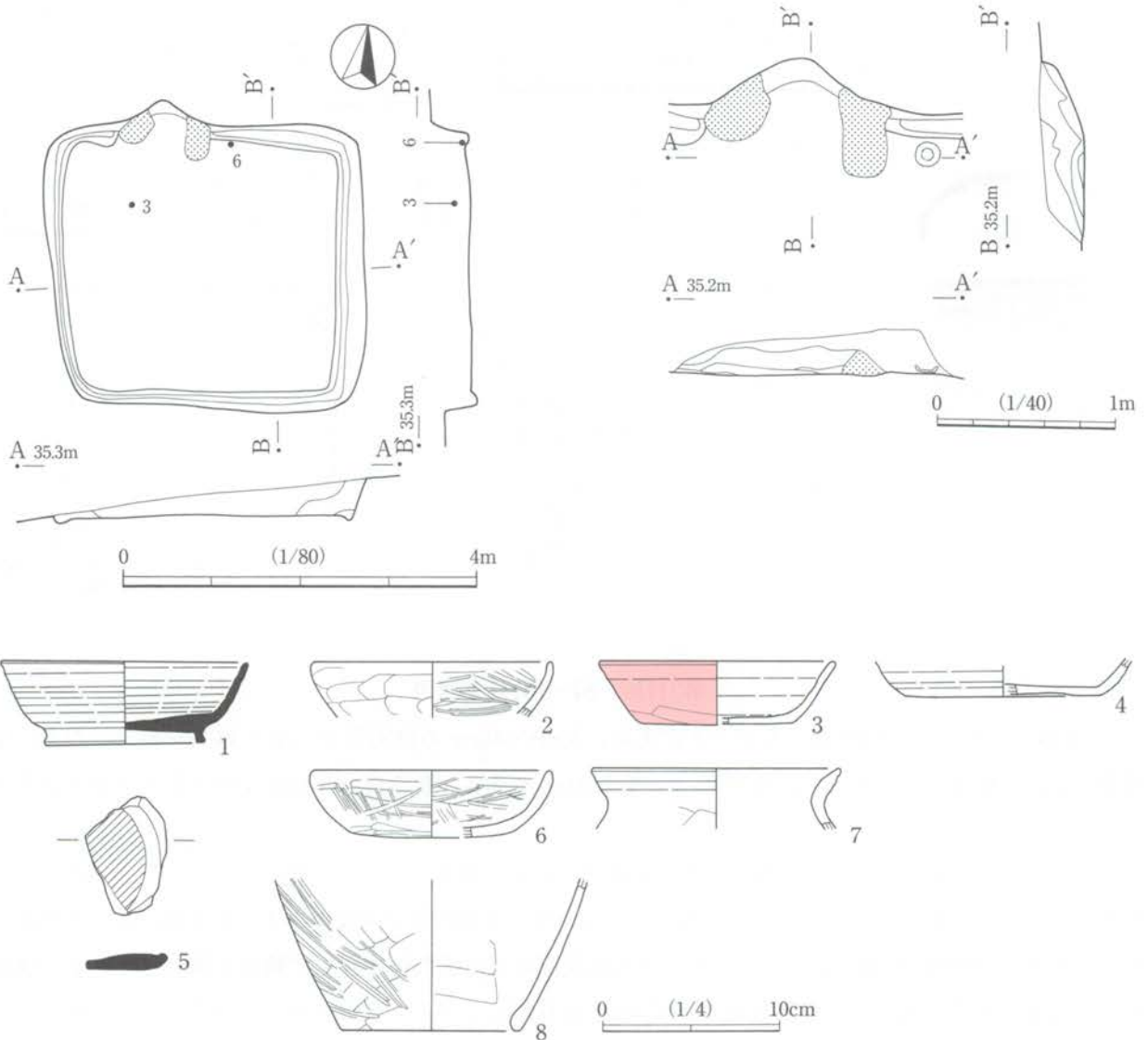
マド下掘り込みは確認できなかった。構築材は灰白色砂質土で、煙道部は三角形に50cm 張り出している。

1は須恵器坏蓋である。天井部は平坦で、ヘラ切りナデ調整である。2は土師器坏である。口径9.8cmの小振りの坏で、丸底である。外面は器面の遺存状況が悪く、調整は観察できないが、横方向のヘラ削り後にヘラ磨きを施したようである。内面は横方向のヘラ磨きを丁寧にし、内外面とも漆仕上げである。

3～7は土師器甕である。3～5は底部破片である。4・5は器面が剥落し調整は不明であるが、3は横方向のヘラ削りを施し、底部も一方向に削っている。6は小形の甕で、薄く仕上げられている。口縁部は外反し、ヨコナデである。胴部は縦方向のヘラ削りを施す。7は胴部が膨らまず、口縁部に最大径がある。胴部は縦方向のヘラ削りである。なお、カマド構築材が付着し脆弱である。

第101表 SI-101号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 蓋	(10.2)	3.8	-	1/2	微砂粒	灰色	湖西産、胎土は精緻である	21
2	土師器 坏	(9.8)	[3.5]	-	1/3	微砂粒、スコリア	灰黄色～黒褐色	全面漆仕上げ、軟質	1.36
3	土師器 甕	-	[2.4]	7.0	底部1/2	白色砂粒、黒色粒、長石、石英	内、赤褐色 外、褐色～黒褐色		40
4	土師器 甕	-	[3.5]	7.0	底部2/3	白色砂粒、黒色粒、長石(多)、石英(多)	赤褐色～黒褐色	全面剥落著しい	1.19.30
5	土師器 甕	-	[15.5]	9.0	底部～胴部1/2	粗砂粒、長石、石英	内、黄褐色～赤褐色 外、赤褐色	内外、器面の剥落著しい	1.16.22.23.24
6	土師器 小型甕	(10.8)	[3.5]	-	口縁1/4	スコリア、石英	赤褐色	器面一部剥落	1
7	土師器 甕	16.0	[13.8]	-	口縁定形 胴部1/4	白色砂粒、長石、石英	内、黒褐色 外、暗褐色	正円でない口径 外、付着物有り	1.17



第212図 SI-102号実測図

SI-102号竪穴住居跡 (第212図, 図版46, 133)

本遺構はI5-37グリッド付近に位置し、南側に浅い谷を臨む台地縁辺部、標高約35.1mに立地する。形態は方形で、規模は3.3m×3.6mを測り、主軸方向はN-7°-Wである。北東から南西へ向かって下がる斜面に位置するため、確認面からの深さは北壁で51cmであるのに対し、南壁では3cmしかない。壁溝はカマド部分を除いて全周し、柱穴等は存在しない。

カマドは北壁の北西コーナーに近い位置にあり、遺存状況はよくない。袖部は僅かに残るだけで、灰白色砂質土で構築されている。煙道部は三角形で、壁外へ30cm張り出している。カマド右脇から須恵器坏(1)が出土した。

1は須恵器高台坏で、ほぼ完形である。体部は底部からやや丸味をもって立ち上がる。底部は断面方形の高台が付き、高台内側の中央に回転ヘラ削り痕が残される。ロクロ回転方向は右である。なお、口唇部内側がやや摩滅している。

2・6は土師器坏である。2は底部を欠損するが、6は平底となる。ともに体部は横方向のヘラ削りで、内面にヘラ磨きを施す。3・4はロクロ土師器坏である。3は内外面とも赤彩される。体部下端は手持ちヘラ削りで、底部は静止糸切り後周縁部手持ちヘラ削りを施す。4は底部破片で、底部は回転糸切り後、周縁部手持ちヘラ削りである。5は須恵器坏の底部破片で、内面がかなり摩滅している。転用硯の可能性もある。

7は土師器甕で、口縁部の破片である。8は土師器甌で、底部破片である。8は斜方向のヘラ削り後ナデを施すが、ヘラ削りは底部から上へ向けて行っている。

第102表 SI-102号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 高台付坏	13.9	4.8	9.1	ほぼ完形	白色砂粒、長石、石英	暗灰色	高台部貼付	10
2	土師器 坏	(13.8)	[3.1]	-	1/4	スコリア	内、鈍い黄褐色 外、明赤褐色	内、ミカキ光沢あり	1
3	ロクロ土師器 坏	13.3	3.5	8.5	1/2	砂粒、長石(少)	明赤色	全面赤彩、底部静止糸切り	1.7
4	ロクロ土師器 坏	-	[2.0]	(11.0)	1/3	スコリア	内、鈍い褐色 外、黒褐色	炭素吸着、底部回転糸切り離し	1
5	須恵器 坏	-	-	-	破片	砂粒、長石、石英	灰色	転用硯の可能性有り	1
6	土師器 坏	(13.8)	[3.8]	-	1/3	細砂粒、石英(少)	内、鈍い褐色+黒色 外、灰褐色	口縁部摩滅	1
7	土師器 甕	(14.0)	[3.4]	-	口縁1/4	スコリア、石英	灰黄褐色		1
8	土師器 甌	-	[8.5]	(10.2)	胴下半部1/5	スコリア、石英、長石	鈍い赤褐色	外、黒斑あり	1

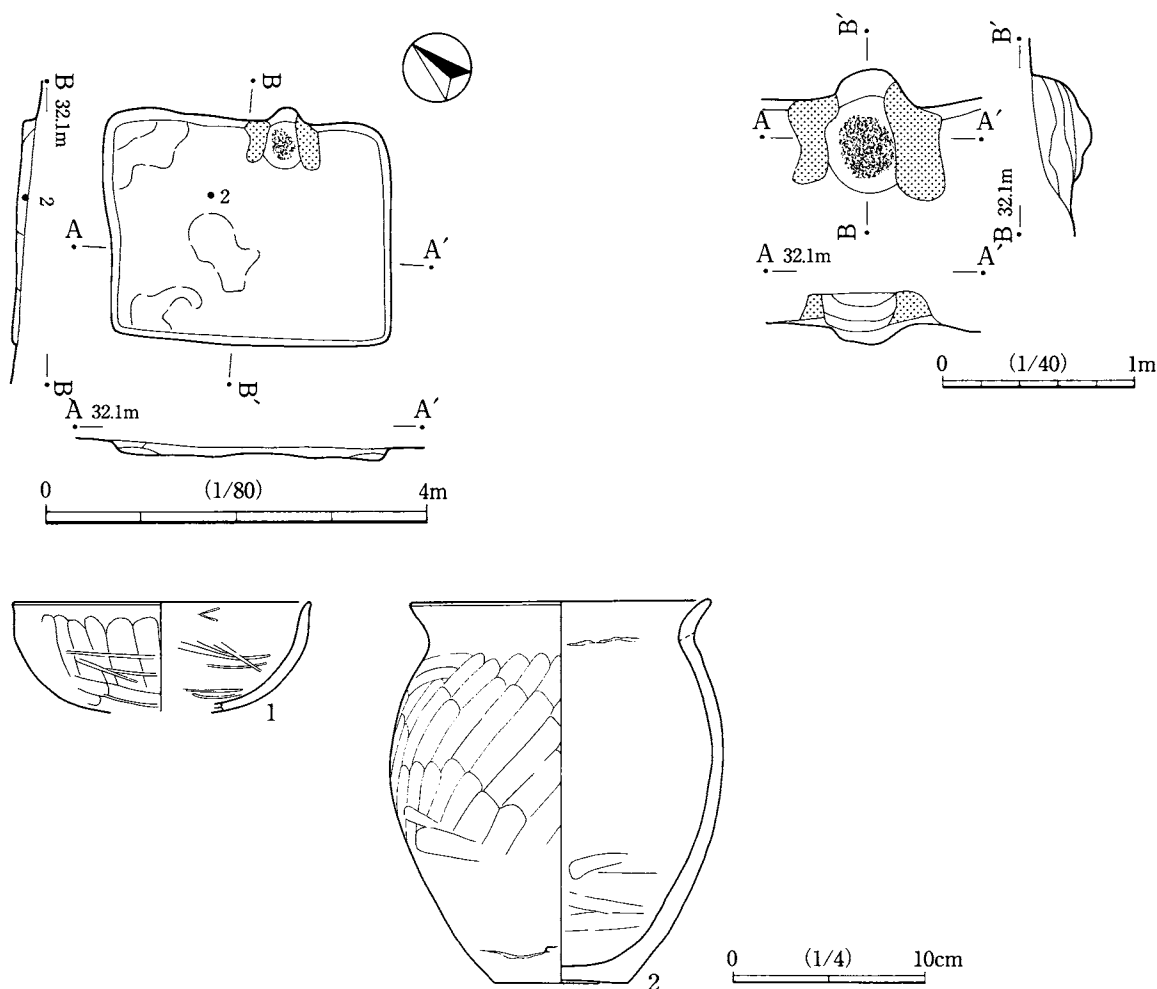
SI-103号竪穴住居跡 (第213図, 図版47, 133)

本遺構はG5-99グリッド付近に位置し、台地の西から入り込む浅い谷にかかり、標高約32.0mに立地する。形態は方形で、規模は2.4m×3.0mを測り、主軸方向はN-47°-Eである。確認面からの深さは4cm~23cmで、壁溝・柱穴等は存在しない。床面は北コーナー・西コーナー及び住居中央に硬化面があるが、顕著なものではなく、北コーナー付近の硬化面は現道と重なる位置であることから、その影響を受けたとも考えられる。カマドは北東壁の中央より南寄りに位置し、最大幅は80cmを測る。袖部は灰白色砂質土で構築され、内側は被熱して赤色化している。煙道部は半円形に壁外へ20cm張り出している。

1は土師器坏で、丸底である。口縁部はヨコナデで、体部は縦方向のヘラ削りを施す。内面はナデ調整である。2は土師器甕で、ほぼ完形である。口縁部は外傾し、ヨコナデで、胴部は上半で斜方向、下半で横方向のヘラ削りを施す。なお、下半は被熱して若干剥落する。

第103表 SI-103号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(15.6)	[5.8]	-	1/6	石英、スコリア	明赤褐色	内外、器面剥落	1
2	土師器 甕	15.9	20.0	7.0	ほぼ完形	砂粒、スコリア(1~4mm)、長石(少)、石英(少)、小石	内、鈍い黄褐色 外、鈍い黄褐色 ~明褐色+黒色	内外、底辺部に多く剥落有り	4



第213図 SI-103号実測図

SI-104号竪穴住居跡 (第214図, 図版47, 133)

本遺構はI5-51グリッド付近に位置し、南側に浅い谷を臨む台地縁辺部、標高約34.0mに立地する。形態は方形で、規模は4.5m×4.5mを測り、主軸方向はN-2°-Wである。北から南へ向かって下がる斜面に位置するため、確認面からの深さも北側で46cm、南側で12cmとなる。壁溝は南壁の一部で途切れる。支柱穴は住居対角線上に4基配置され、およそ30cm×40cmの楕円形である。床面からの深さは27cm～46cmを測る。また、南壁にかかって2基のピットがあり、この2基も壁柱穴の可能性が高い。床面は壁際を除いた広い範囲に硬化面があり、実に堅緻である。

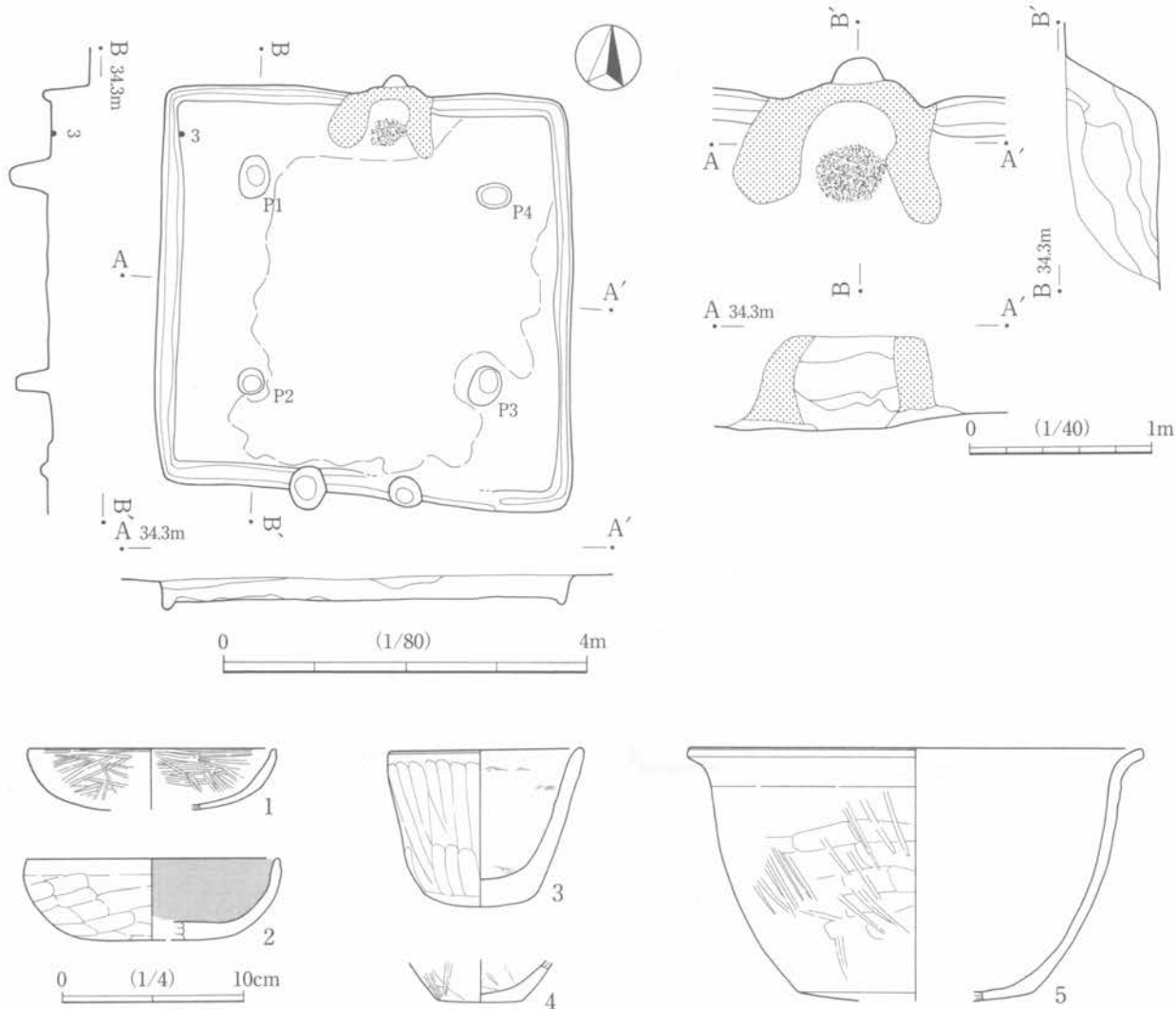
カマドは北壁中央に位置し、遺存状況は比較的良好である。最大幅は115cmで、ローム粒を多く含む基底部の上に、白色粘土を含んだ灰褐色砂質土で袖部を構築している。掛け口の奥には天井部も一部遺存し、袖部内面から煙道部にかけて被熱して赤色化している。煙道部は半円形で、壁外へ30cm張り出している。

遺物は多くないが、西壁の北西コーナーに近い壁際から土師器鉢(3)が完形で出土した。

1・2は土師器坏である。1は丸底の坏で、口唇部にヨコナデを施し、内外面とも丁寧に磨いている。

2は平底の坏で、口縁部は直立する。口縁部はヨコナデで、体部外面は横方向のヘラ削りを施す。

3は土師器鉢で、完形である。底部は丸味を帯び、座りが悪い。胴部は縦方向のヘラ削りである。内面



第214図 SI-104号実測図

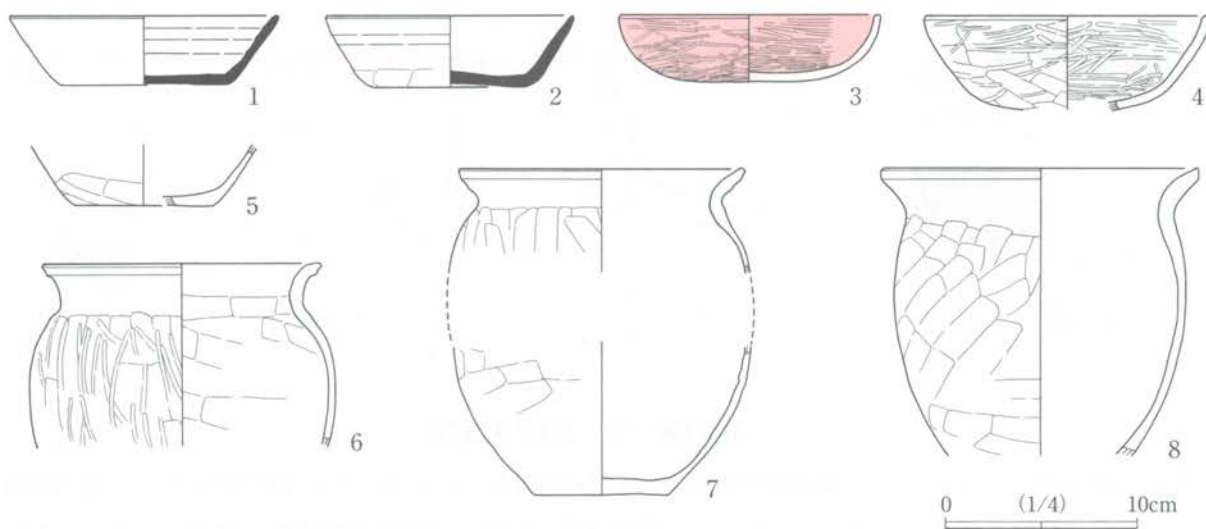
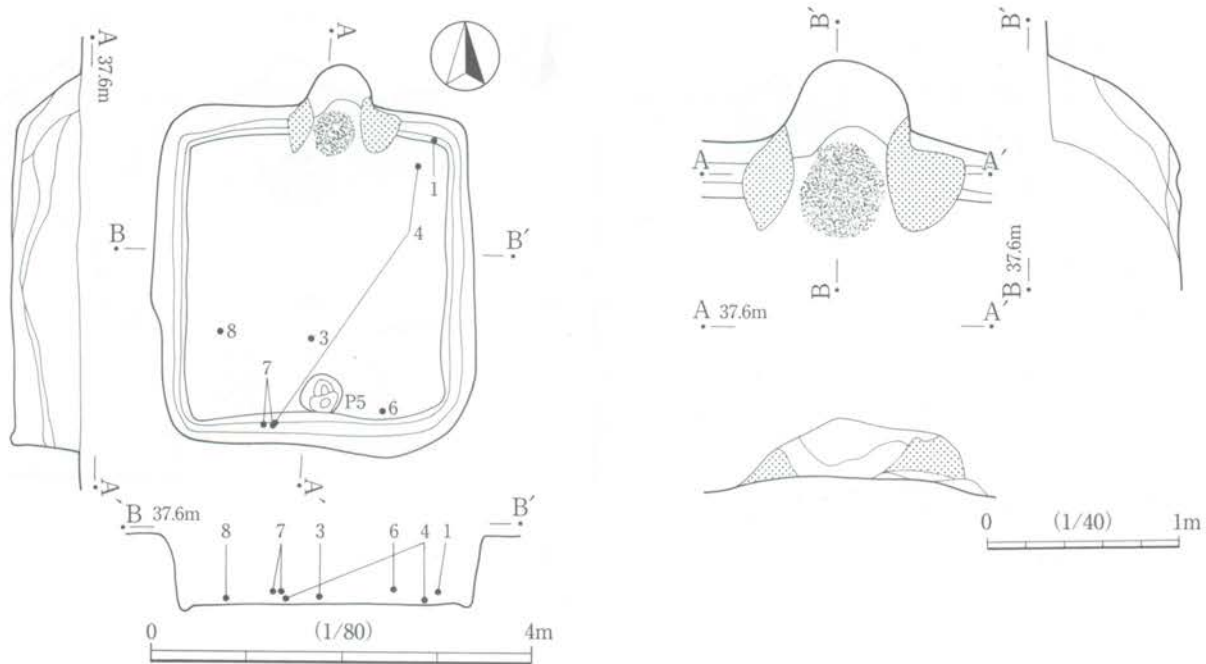
は著しく剥落する。4・5は土師器甕である。5は器高14cmと浅いもので、鍋と呼んだ方が適当かもしれない。口縁部は外反し、ヨコナデで整える。胴部は横方向のヘラ削り後縦方向のナデを施す。なお、底部内面が剥落する。

第104表 SI-104号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(13.7)	[3.3]	—	1/5	スコリア、石英	橙色	内、ミガキ 外、ヘラナズリ後ミガキ	1
2	土師器 坏	14.0	4.5	丸	1/2	砂粒、石英、スコリア	鈍い黄褐色	内、黒色処理	1
3	土師器 小鉢	10.8	8.7	丸	完形	粗砂粒、長石(多)、石英(多)	内、黒褐色 外、赤褐色	口縁部摩滅	2
4	土師器 甕	—	[2.3]	(4.5)	底部1/2	スコリア、石英	鈍い赤褐色	内、ナデのヘラ痕あり	1
5	土師器 鉢	(25.0)	[14.0]	(12.9)	1/4	白色砂粒(多)、長石、石英、スコリア	内、鈍い赤褐色～黒褐色 外、暗赤褐色一部暗褐色	内、底部剥落 外、ミガキ痕有り	1

SI-105号竪穴住居跡 (第215図, 図版47, 134)

本遺構はL1-91グリッドに位置し、東側台地の北側縁辺部、標高約39.5mに立地する。形態は方形で、規模は3.6m×3.3mを測り、主軸方向はN-1°-Wである。確認面からの深さは62cm～76cmと深く、カマド部分を除いて壁溝が全周する。柱穴はなく、カマドに対する南壁際中央に梯子ピットがある。覆土は全体にロームブロックを多く含む。



第215図 SI-105号実測図

カマドは北壁中央に位置し、最大幅は115cmである。煙道部は半円形で、壁外へ40cm張り出している。

1・2は須恵器坏である。ともに雲母粒・石英粒の目立つ胎土である。1は体部下端にヘラ削りはなく、底部は全面一方向のヘラ削りである。口縁部内側がやや摩滅する。2は体部下端に手持ちヘラ削りを、底部はヘラ切り後不定なヘラ削りである。

3・4は土師器坏である。3は丸底の浅い坏で、口唇部にヨコナデを施し、体部外面は横方向のヘラ削りである。底部は不定方向のヘラ削りで、体部も含めヘラ磨きを加えている。内面は全面にヘラ磨きが施される。4はやや深さがあり、底部は平坦となる。体部外面は横方向のヘラ削りで、底部も不定方向に削っている。体部上半及び内面に粗いヘラ磨きが観察できる。5はロクロ土師器坏で、内外面とも赤彩される。体部下端は手持ちヘラ削りで、底部は静止糸切り後、周縁部にヘラ削りを施している。内面に僅かに

油煙が付着する。

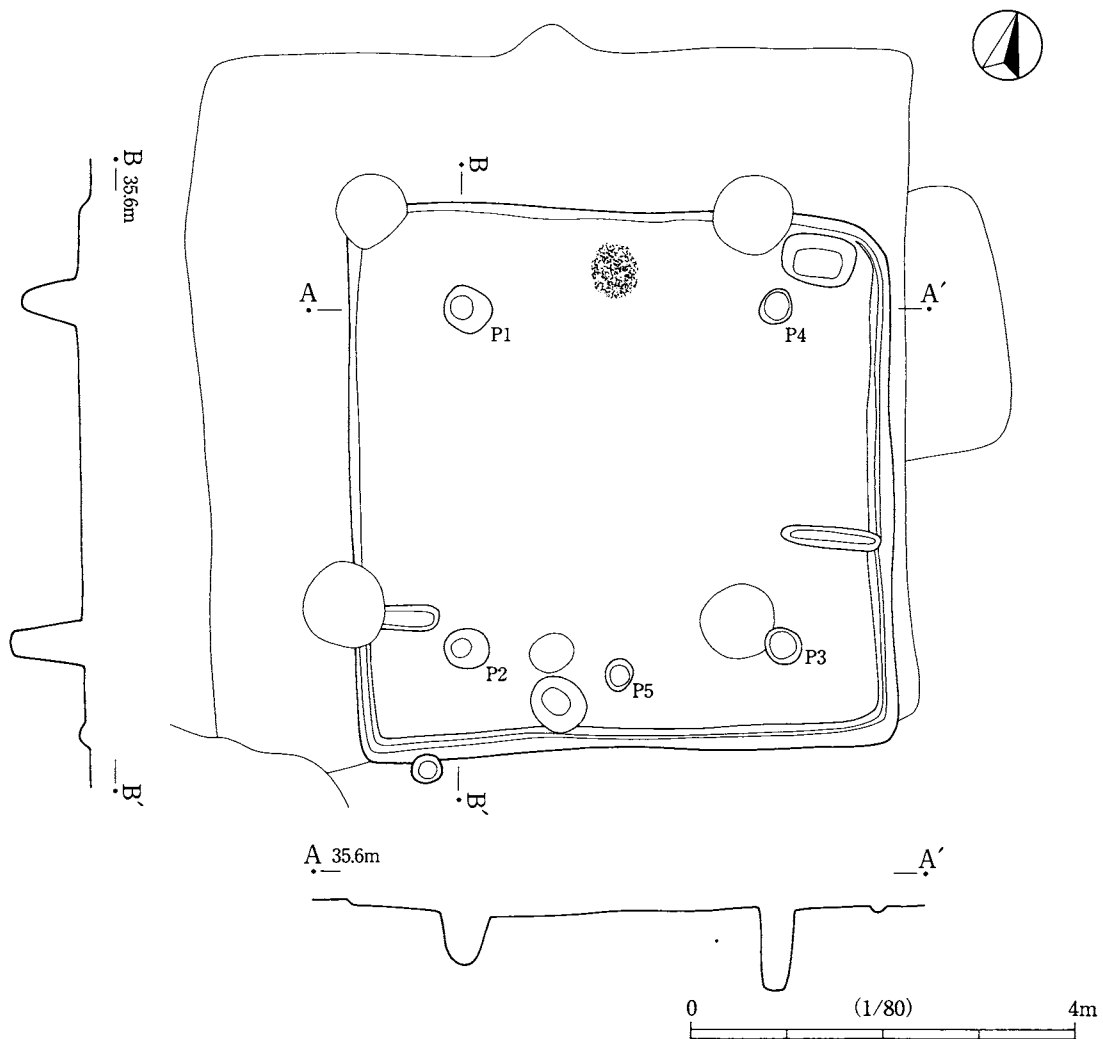
6～8は土師器甕である。ともに口径15cm～16cmの甕で、大きさが揃っている。口縁部は受け口状を呈し、ヨコナデである。胴部は上半で縦方向、下半で横方向のヘラ削りを施す。7は胴部下半が被熱し、内外面とも剥落する。

第105表 SI-105号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	14.0	3.6	8.6	2/3	微砂粒、雲母、長石(多量)、石英(多量)	体部1/2灰色 他緑灰黒色	常陸新治窯産	1.2
2	須恵器 坏	(13.0)	3.7	(7.8)	1/4	砂粒、スコリア、長石、石英、雲母(多)	灰色	常陸新治窯産	1
3	土師器 坏	(13.6)	3.5	丸	1/3	砂粒、黒色粒、長石、スコリア	内、橙色 外、鈍い黄橙色+黒色	内外、ミガキ	6
4	土師器 坏	(15.0)	4.9	-	1/4	砂粒、黒色粒、スコリア	鈍い橙色	外、飛びカンナ風なケズリ痕有り	3.4
5	土師器 坏	-	[3.2]	(7.2)	底部1/4	白色砂粒	赤褐色	内外、赤彩	1
6	土師器 甕	14.6	[9.5]	-	1/3	白色砂粒、長石	内、暗褐色 外、褐色～黒褐色	薄手なつくり 外、黒斑	1.2
7	土師器 甕	15.2	-	7.0	胴部欠 他2/3	白色砂粒、長石、小石	内、鈍い黄褐色 外、鈍い褐色～赤褐色	底部～底辺部は特に剥落著しく付着物有り	1.11.13
8	土師器 甕	16.6	[15.0]	-	1/2	砂粒、長石(多)、石英(多)	内、褐色～暗褐色 外、黒褐色一部鈍い褐色	内、剥落著しい、口縁端摩滅	8

SI-106号竪穴住居跡 (第216図, 図版48)

本遺構はI4-29グリッド付近に位置し、南側に浅い谷を臨む台地縁辺部、標高約35.8mに立地する。SI-054号竪穴住居跡の貼床をはがした段階で検出した。主軸方向はSI-054号とほぼ同じN-9°-Wで、



第216図 SI-106号実測図

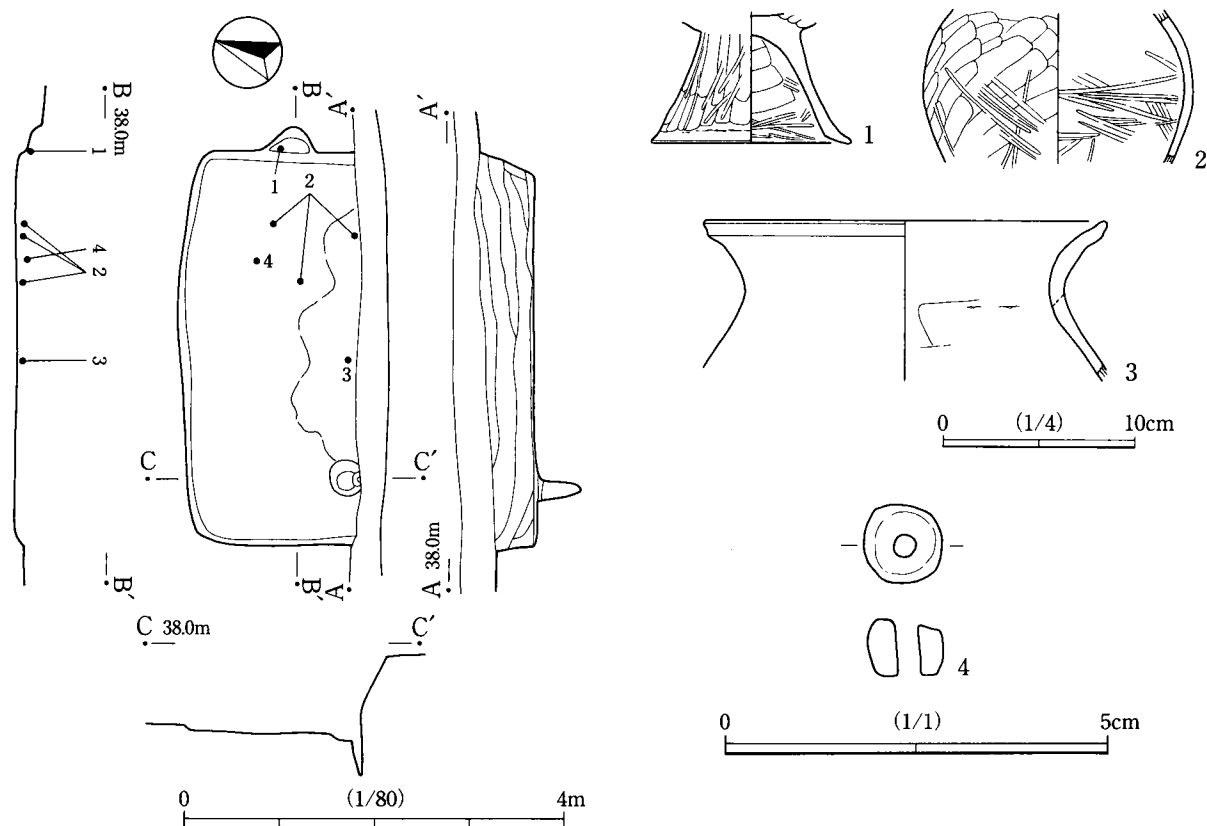
南東コーナーもほぼ同じ位置にあることから、SI-054号は本住居を拡張した建て替えの可能性もある。形態は方形で、規模は5.5m×5.7mを測る。壁溝は北及び西壁のかなりの部分で検出できなかったが、住居北西コーナーから住居中央にかけて検出した床面はやや低くなっており、SI-054号構築に際して、掘り下げられた可能性があり、壁溝も同時に失われたと考えられる。柱穴は住居対角線上に4基配置され、直径は30cm～50cm、深さ56cm～81cmを測る。P2とP3の間には梯子ピットがあり、直径30cm、深さ30cmである。その他南壁にかかって2基のピットがある。住居北東コーナーには貯蔵穴が配置され、78cm×53cmの方形で、40cmの深さがある。また、東西両壁の中央よりやや南へ寄った位置から間仕切り溝が掘り込まれている。東側は壁から100cm、西側は壁から70cmの長さがある。

カマドは北壁中央に位置しているが、火床部の痕跡を残すだけである。

図示できる遺物はない。

### SI-109号竪穴住居跡（第217図、図版48、134）

本遺構はL4-43グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約37.7mに立地する。住居南側は事業範囲外に当たり未調査であり、住居全体の約1/2を調査した。形態は方形で、規模は東西軸長4.1mを測り、主軸方向はN-74°-Eである。壁は垂直に立ち上がり、確認面からの深さは40cm～60cmである。調査区境界の土層断面の観察から、住居の掘込みはローム層の約30cm上から確認でき、Ⅱ層中である。壁溝はなく、南西壁に寄った位置にピットがある。直径38cm、深さ52cmを測り、梯子ピットと考えられる。床面はこのピットから北東壁へ向けて硬化面がある。北東壁にも三角形の張り出しがあるが、カマドでは



第217図 SI-109号実測図



ない。

カマドは検出できず、住居北東壁に近い覆土中層に砂質土の堆積が認められることから、カマドは調査範囲外に位置していたものと思われる。

1は土師器高坏である。脚部の破片で、短脚で裾部が広がるものと思われるが、脚裾部を丁寧に打ち欠き、脚柱部だけが残されている。脚部外面は縦方向のヘラ削り後縦方向のヘラ磨きを施し、内面も丁寧にナデている。坏部内面はヘラ磨きが施されている。

2・3は土師器甕である。2は胴部の破片で、胴部が球形となる小形の甕である。外面は斜め方向のヘラ削りを施している。3は口縁部の破片で、口縁部は受け口状を呈している。胴部はナデ調整である。胎土に石英粒・雲母粒を多く含み、常総型の甕である。

4は石製丸玉である。

第106表 SI-109号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 高坏	-	[6.7]	10.4	脚部完形	細砂粒、長石(少)、スコリア(少)	内、明赤褐色 外、鈍い赤褐色	内、丁寧なナデ後ミガキも施されている	15
2	土師器 甕	-	[8.0]	-	胴部1/4	スコリア、長石、石英、白色砂粒	内、鈍い黄褐色 外、鈍い褐色	内、ミガキ、器面なめらか	1.10, 12, 13
3	土師器 甕	(21.0)	[8.2]	-	口縁1/5	スコリア、石英、長石、雲母	鈍い黄褐色	器面ざらつく	2

#### SI-110号竪穴住居跡 (第218図, 図版48, 134)

本遺構はL4-06グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約37.3mに立地する。南側約1/3は事業範囲外に当たり、未調査である。形態は方形で、規模は東西軸長5.2mを測り、主軸方向はN-0°である。壁はやや開いて立ち上がり、確認面からの深さは35cm~45cmである。壁溝は未調査部分を除いて検出でき、全周していたものと思われる。支柱穴は3基が検出できたが、未調査部分にもう1基あることは確実である。直径は65cm~80cmで、深さは60cm前後で2段に掘り込まれている。また、西壁に沿った壁溝内から3基の壁柱穴が検出され、床面から20cm~30cmの深さがある。床面は北壁に接する位置から支柱穴の内側の長方形の範囲に硬化面がある。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅130cmを測る。袖部は淡黄褐色砂質土で構築され、煙道部の奥まで遺存している。煙道部は半円形に壁外へ40cm張り出している。

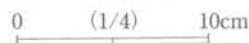
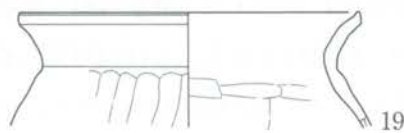
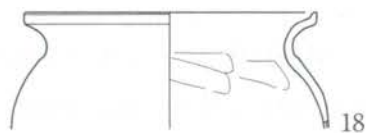
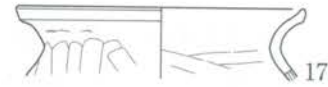
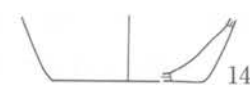
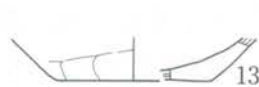
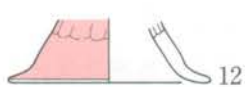
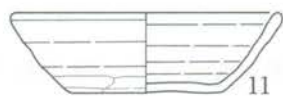
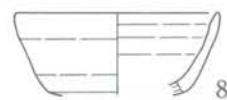
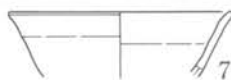
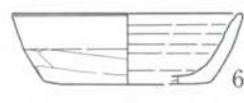
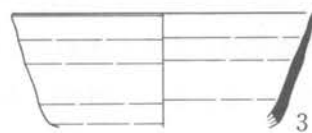
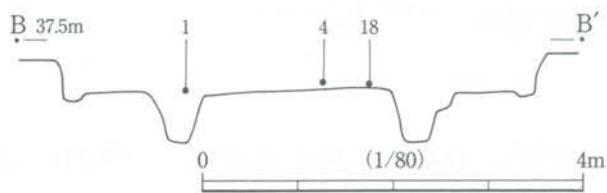
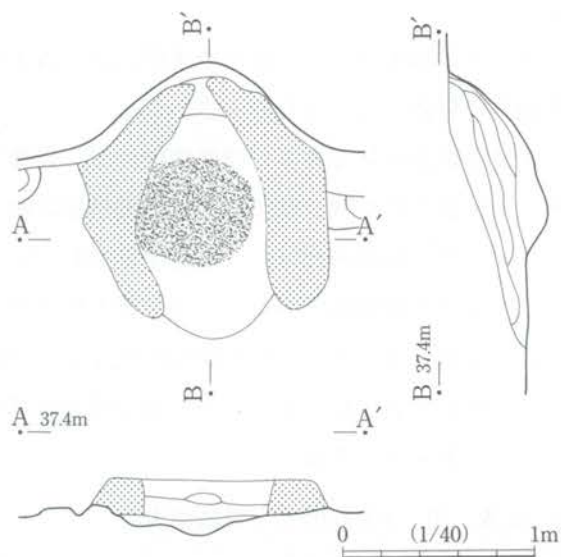
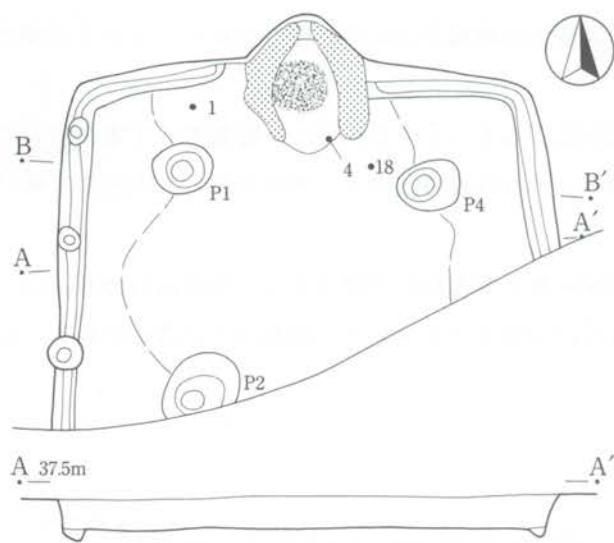
1は須恵器坏蓋である。口縁部及びつまみを欠損する。外面は風化し、調整は極めて不明瞭である。

2・3は須恵器坏である。2は底部の破片で、体部下端に丸味もっている。体部下端及び底部全面回転ヘラ削りである。ロクロ回転方向は右である。3はやや深い坏で、おそらく高台が付くものと思われる。

9・10・22・24は土師器坏である。10は底部を欠損するが、9は平底である。口縁部は短くヨコナデで、体部は横方向のヘラ削りを施す。底部破片の22・24は底部外面に墨書される。

4~8・11・20・21・23はロクロ土師器坏である。6は内外面赤彩され、外面は体部の中位から手持ちヘラ削りを施している。4は体部下端及び底部全面回転ヘラ削り、5は体部下端を手持ち、底部は全面一方向ヘラ削り、11は体部下端を手持ち、底部を全面不定方向ヘラ削り、21は体部下端に手持ちヘラ削りを、底部は回転糸切り後、周縁部手持ちヘラ削りである。20・21・23は底部外面に墨書があり、21は「子」である。12は土師器高坏である。脚裾部の破片で、ヨコナデを施している。外面は赤彩される。

13~15・17~19は土師器甕である。13~15は底部破片で、いずれも小片である。17~19は口縁部の破片で、口縁部は受け口状を呈している。胴部はいずれも縦方向のヘラ削りである。16は土師器甕の底部破片である。



第218图 SI-110号实测图

第107表 SI-110号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 壺	—	[2.9]	—	1/3	細砂粒、長石、黒色粒	内、灰色 外、灰黄色	内外、摩耗	6
2	須恵器 坏	—	[2.3]	(7.3)	底部1/3	細砂粒、長石、石英	暗灰色	薄手なつくり底部回転ヘラケズリ	1
3	須恵器 坏	(15.8)	[5.9]	(11.8)	1/4	長石	黄灰色	内外、ナデ	1.4
4	ロクロ土師器 坏	(12.8)	4.4	8.0	1/3	砂粒、長石、石英、小石	暗赤褐色		9
5	ロクロ土師器 坏	(14.0)	4.5	(8.0)	1/4	砂粒、長石、石英、スコリア	鈍い黄褐色	器面ざらつき有り	4
6	ロクロ土師器 坏	(12.0)	[3.7]	(8.6)	1/4	石英、スコリア	赤褐色	内外、赤彩	1.3
7	ロクロ土師器 坏	(11.7)	[3.4]	—	1/4	長石、スコリア	明赤褐色	内外、ナデ	4
8	ロクロ土師器 坏	(10.8)	[4.3]	(7.2)	1/4	スコリア、白色砂粒	赤褐色	内、炭素吸着	1
9	土師器 坏	(11.6)	[3.5]	(7.8)	1/4	スコリア、石英	鈍い黄褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	4
10	土師器 坏	(11.5)	[3.6]	—	1/6	スコリア	鈍い黄褐色	内、ミガキ 外、ヘラケズリ	1
11	ロクロ土師器 坏	(14.2)	4.2	(8.0)	1/4	白色砂粒、長石、石英、スコリア	鈍い黄褐色	底部に粘土くず付着	1.3
12	土師器 高坏	—	[3.3]	(10.6)	1/4	石英、白色微砂粒	内、橙色 外、明赤褐色	外、赤彩	3
13	土師器 甕	—	[2.2]	(8.0)	底部1/3	スコリア、石英	内、鈍い褐色 外、黒褐色	外、炭素吸着	4
14	土師器 甕	—	[3.4]	(8.0)	底部1/4	スコリア	内、鈍い黄褐色 外、黒褐色	内外、ナデ	3
15	土師器 甕	—	[3.7]	(10.9)	底部1/8	石英	鈍い黄褐色	外、炭素吸着	3
16	土師器 甕	—	[3.0]	(10.0)	胴下部1/5	スコリア、石英	橙色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	1
17	土師器 甕	15.1	[3.7]	—	口縁部1/2	白色砂粒、長石、白針	赤褐色—黒褐色	内外、炭素吸着	1.4
18	土師器 甕	15.3	[6.0]	—	口縁部2/3	白色砂粒、長石、石英、スコリア	内、褐色 外、赤褐色	二次的に火を受けて器面剥落有り 全体的にスス付着	5
19	土師器 甕	(18.0)	[6.0]	—	口縁1/4	スコリア、石英、白色砂粒	明赤褐色	器面ざらつきあり	4
20	ロクロ土師器 坏	—	—	—	底部片	砂粒、長石	鈍い黄褐色	底部墨書「□」	1
21	ロクロ土師器 坏	11.8	4.2	6.8	1/2	白色砂粒、雲母、長石(多)、石英	橙色	底部墨書「子」	1
22	ロクロ土師器 坏	—	[1.0]	(8.4)	底部片	白色砂粒、長石、石英	明赤褐色	底部墨書「□」	3
23	ロクロ土師器 坏	—	[0.7]	(5.6)	底部片	白色砂粒、長石、石英、スコリア	内、赤色 外、鈍い黄褐色	底部墨書「□」	1
24	ロクロ土師器 坏	—	—	—	底部片	砂粒、長石、スコリア	鈍い黄褐色	底部墨書「□」	4

SI-111号竪穴住居跡 (第219図, 図版19, 134, 135)

本遺構はM3-33グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約37.5mに立地する。形態は方形で、規模は4.8m×4.7mを測り、主軸方向はN-9°-Wである。確認面からの深さは38cm~49cmで、カマド部分を除いて壁溝が全周する。主柱穴は住居対角線上に4基配置され、直径は80cm~85cm、深さ60cm~70cmを測り、いずれも2段に掘り込まれている。また、P2とP3の間には梯子ピットがあり、直径40cm、深さ20cmを測る。その他、西壁のP2と並んだ位置にもピットがあり、60cm×70cmの楕円形で、30cmの深さがある。床面はカマド周辺から梯子ピットにかけた主柱穴の内側に長方形の範囲で硬化面がある。

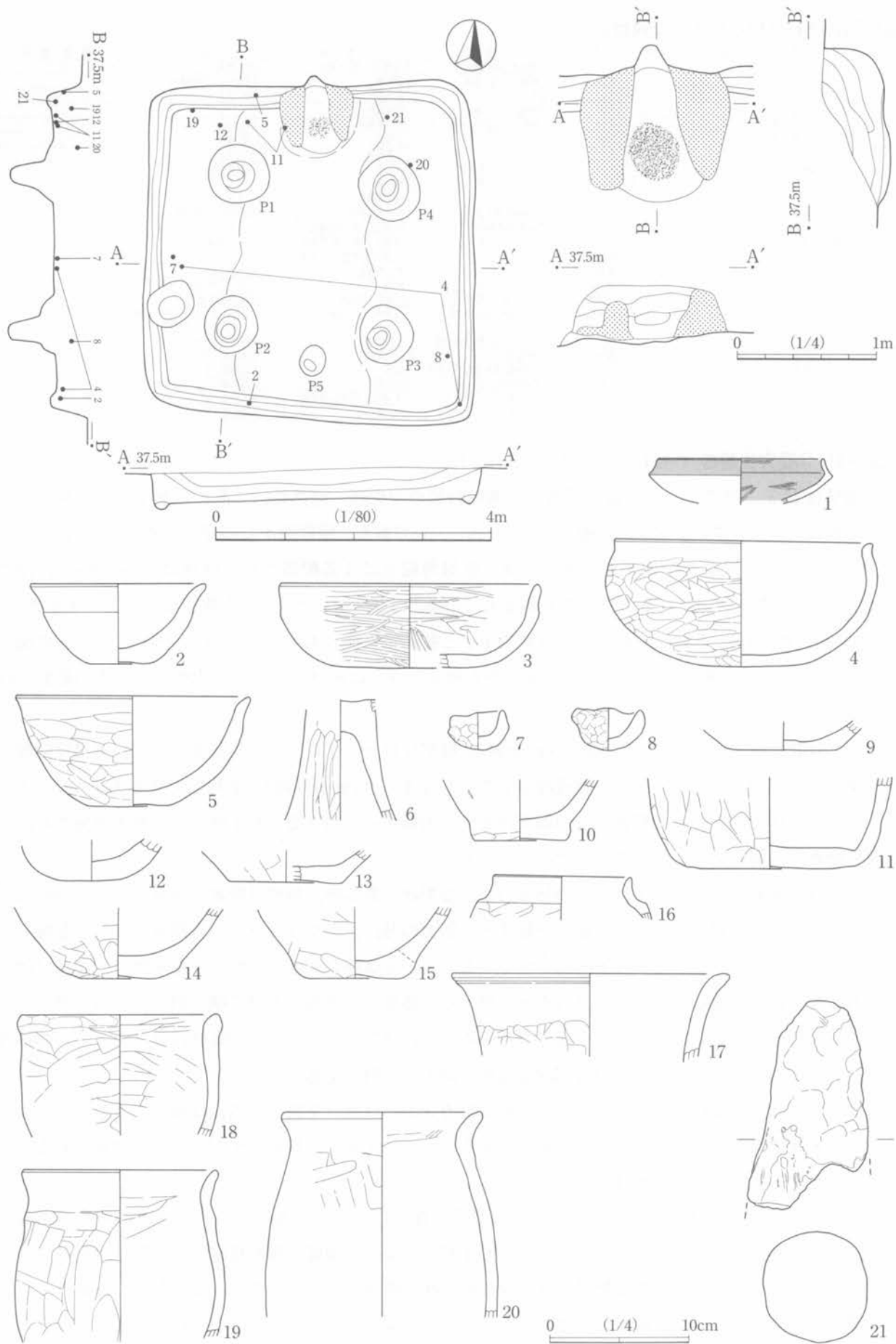
カマドは北壁中央に位置し、最大幅110cmを測る。袖部はロームブロックを基底部として淡黄褐色砂質土で構築し、壁から80cm延びている。煙道部は小さくU字形に10cm張り出し、急角度で立ち上がっている。

1は土師器坏である。身の模倣で、口縁部は短く、内傾する。内外面とも丁寧なヘラ磨きが施され、口縁部外面から内面全体にかけて漆仕上げをしている。

2~5は土師器鉢である。2は高坏の坏部のような形状であるが、調整は粗雑で肉厚である。口縁部はヨコナデで、胴部は斜め方向のヘラ削りを施すが、器面の凹凸がかなり目立つ。底部もヘラ削りを施しているが、平坦ではない。内面は横方向にナデている。3・4は坏を大きくしたような形状で、4はほぼ完形である。口縁部は僅かに外反し、ヨコナデで整える。体部から底部にかけて横方向のヘラ削りで、ともに粗くヘラ磨きを加えている。5は平底となるもので、口縁部が外反する。口縁部はヨコナデで、体部は横方向のヘラ削りを施す。また、口縁部内面も横方向のヘラ削りを施している。

6は土師器高坏の脚柱部の破片である。外面は縦方向のヘラ削りを施し、内面は指頭で丁寧にナデている。7・8は土師器のミニチュアで、手捏ねである。ともに完形で、指頭でナデただけの調整であるが、8には僅かにヘラでの調整痕が付く。

9~16・18~20は土師器甕であり、全体的に厚手に仕上げられている。9~15は底部の破片である。10・14・15は底部がやや突出するもので、底部も平坦ではない。胴部下端も粗雑なヘラ削りが施され、器面の凹凸が目立つ。12も粗雑な調整で、底部全体が丸味を帯びている。また、底部は著しく剥落している。11は底部から丸味をもって胴部が立ち上がるもので、どのような胴部となるのか想像しがたい。胴部は底



第219图 SI-111号实测图

部にいたるまで縦方向のヘラ削りで、底部も全面一方向に削っている。外面にカマド構築材が固着している。破損部は粘土紐接合部であり、粘土紐の上端を刻んでいる。16・18～20は口縁部を含む破片である。16はあるいは碗のような形状かもしれない。18～20は胴部があまり膨らまず、全体に粗雑な印象を受けるものである。口縁部はヨコナデで、胴部は横方向のヘラ削りである。また、内面にもヘラ削りを施す。3点とも長石粒を多く含んだ胎土で、焼成・色調・調整から19と10の底部が、20と11の底部が同一個体となる可能性が高い。

17は土師器甑と思われる。最大径は口縁部にあり、胴部も膨らまない。口縁部は外反し、ヨコナデで、胴部は縦方向のヘラ削りである。

21は土製支脚である。胎土に若干スサを混入している。

第108表 SI-111号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(11.8)	[3.3]	丸	1/6	スコリア	鈍い黄褐色	漆仕上げ	4
2	土師器 鉢	(12.4)	5.7	5.6	2/3	粗砂粒、小石、長石、石英、スコリア	赤褐色	底部不定方向のケズリで平らでなく歪んでいる	11
3	土師器 鉢	(18.6)	[6.0]	丸	1/4	砂粒、小石(1mm)、長石、石英、スコリア	明褐色一部黒色	内外、ミガキ	20
4	土師器 鉢	16.0	9.2	丸	ほぼ完形	白色粒、黒色粒、長石(少)、石英(少)、スコリア	内、赤色 外、赤色～明褐色	丁寧なつくり 外、火ダスキ痕明瞭に有り	10, 12
5	土師器 鉢	16.8	8.1	6.0	3/4	砂粒、小石(1mm)、長石、石英、スコリア	内、暗褐色～鈍い褐色 外、赤褐色～暗褐色	内、口縁部帯状にスス付着	16
6	土師器 高坏	—	[8.6]	—	脚部2/3	白色砂粒、スコリア、長石、石英、雲母	赤褐色～鈍い褐色		4
7	土師器 手捏	3.8	2.6	丸	完形	砂粒、黒色粒、長石	黄褐色	内、指ナデ	18
8	土師器 手捏	4.6	3.1	丸	完形	砂粒、長石、スコリア	鈍い褐色	内、指ナデ	9
9	土師器 甕	—	[2.2]	(6.4)	底部1/2	スコリア、石英	鈍い褐色	内外、器面剥落	1, 2
10	土師器 甕	—	[4.3]	6.6	底部1/2	白色砂粒、長石、石英、スコリア	鈍い褐色	底辺部無調整	1
11	土師器 甕	—	[6.5]	13.0	底部完形	白色砂粒、小石(1～5mm)、長石、石英(少)	明褐色～暗褐色	外、底辺部コブ状に砂粒の付着物有り	1, 4, 15, 19
12	土師器 甕	—	[4.4]	不明	底部完形	粗砂粒、小石(1～5mm)、長石、石英	内、明褐色 外、赤褐色	外、底部の剥落著しく底径を定められない	14
13	土師器 甕	—	[2.3]	(8.0)	底部1/3	スコリア、石英、長石	明赤褐色	内、器面剥落	4
14	土師器 甕	—	[5.1]	(5.6)	底部1/3	スコリア、石英	赤褐色	内、炭素吸着	4
15	土師器 甕	—	[5.2]	6.6	底部1/2	砂粒、小石(1～5mm)、長石、石英、スコリア	内、鈍い褐色 外、赤褐色～暗褐色	底部は平らでない	3
16	土師器 甕	(10.0)	[3.0]	—	口縁1/2	白色砂粒、石英	内、暗褐色 外、褐色～黒褐色	外、炭素吸着	2, 3
17	土師器 甕	(19.6)	[6.2]	—	口縁1/4	スコリア、石英	明赤褐色～赤褐色	内、ヘラによる沈線あり	4
18	土師器 甕	14.0	[8.8]	—	1/6	砂粒、小石(1～2mm)、長石、石英、スコリア	鈍い褐色～暗褐色	内、ヘラケズリの単位明瞭	2
19	土師器 甕	14.0	[12.6]	—	口縁完形 胴部1/2	砂粒、小石(1～5mm)、長石、石英、スコリア	明褐色一部暗褐色	口縁楕円	4, 13
20	土師器 甕	(14.2)	[15.0]	—	1/4	砂粒、小石(1～3mm)、長石、石英、スコリア	内、暗褐色 外、橙褐色	外、胴尖部に砂粒状の付着物有り	1, 7

SI-112号竪穴住居跡 (第220図, 図版49, 135)

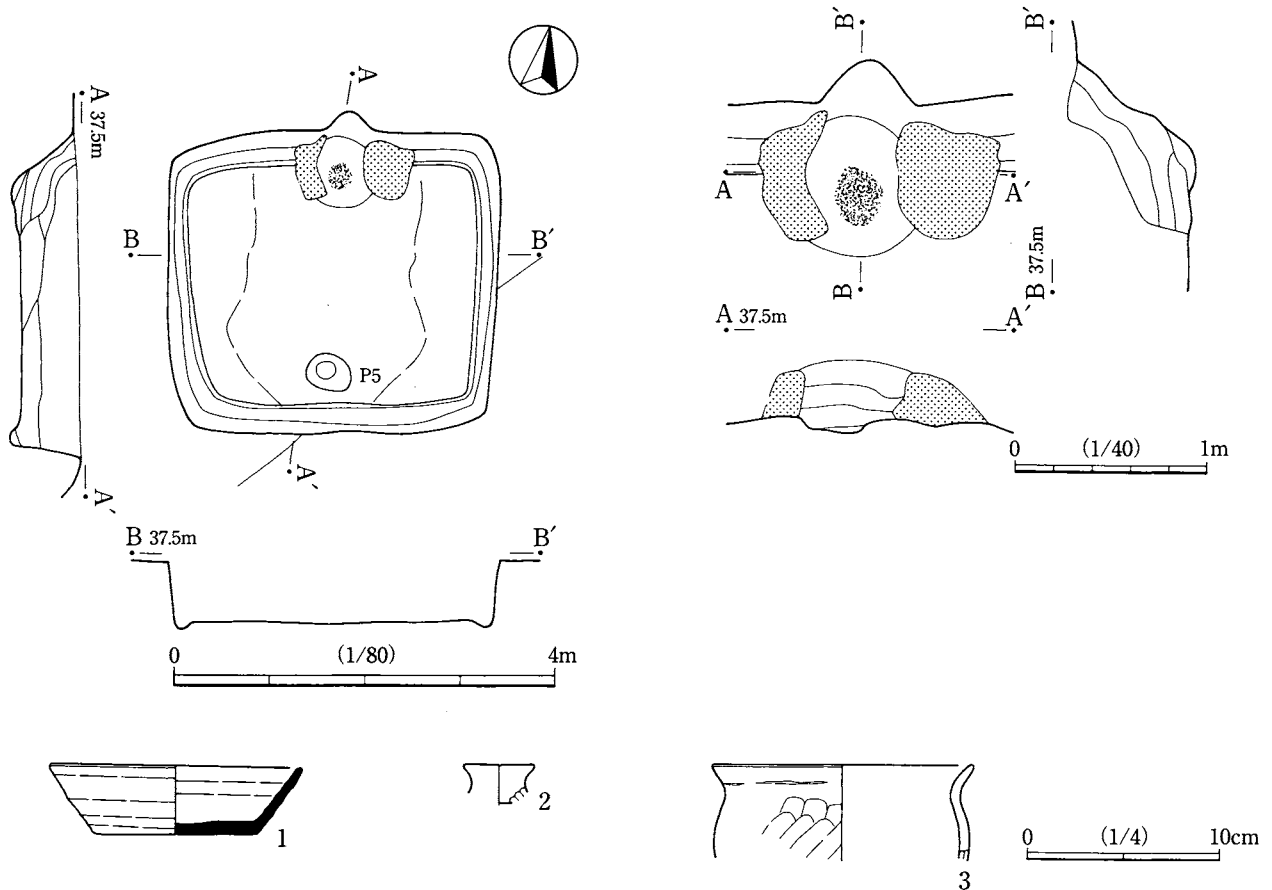
本遺構はL3-29グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約37.5mに立地する。住居南東コーナーでSD-005号溝状遺構と重複する。形態は方形で、規模は3.2m×3.5mを測り、主軸方向はN-10°-Wである。壁は垂直に立ち上がり、確認面からの深さは70cmを測る。壁溝はカマド部分を除いて全周し、柱穴はない。カマドに対する南壁際中央に梯子ピットがあり、直径45cm、深さ20cmを測る。床面はカマド周辺から梯子ピットにかけて、長方形の範囲に硬化面が残る。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅120cmを測る。袖部は灰白色砂質土で構築されるが、カマド内部の堆積土もかなり砂質であった。煙道部は半円形で、壁外へ20cm張り出している。

1は須恵器坏である。体部は直線的に立ち上がり、体部下端にヘラ削りは施されない。底部はヘラ切り後、全面一方向のヘラ削りである。なお、底部周縁部が若干摩滅している。2は土師器蓋のつまみで、外面に赤彩される。3は小形の甕の破片で、口縁部はヨコナデ、胴部は斜め方向のヘラ削りを施している。

第109表 SI-112号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	13.2	3.7	8.6	2/3	微砂粒、長石、石英(少)、スコリア	灰色		1
2	土師器 蓋	—	2.0	—	つまみのみ	砂粒、長石、スコリア	鈍い褐色	つまみ径3.8cm	1
3	土師器 甕	(13.7)	[4.8]	—	口縁の一部	スコリア、雲母	明赤褐色	内、ナデ 外、輪積み痕残る	2



第220図 SI-112号実測図

口縁部に粘土紐接合痕を残す。

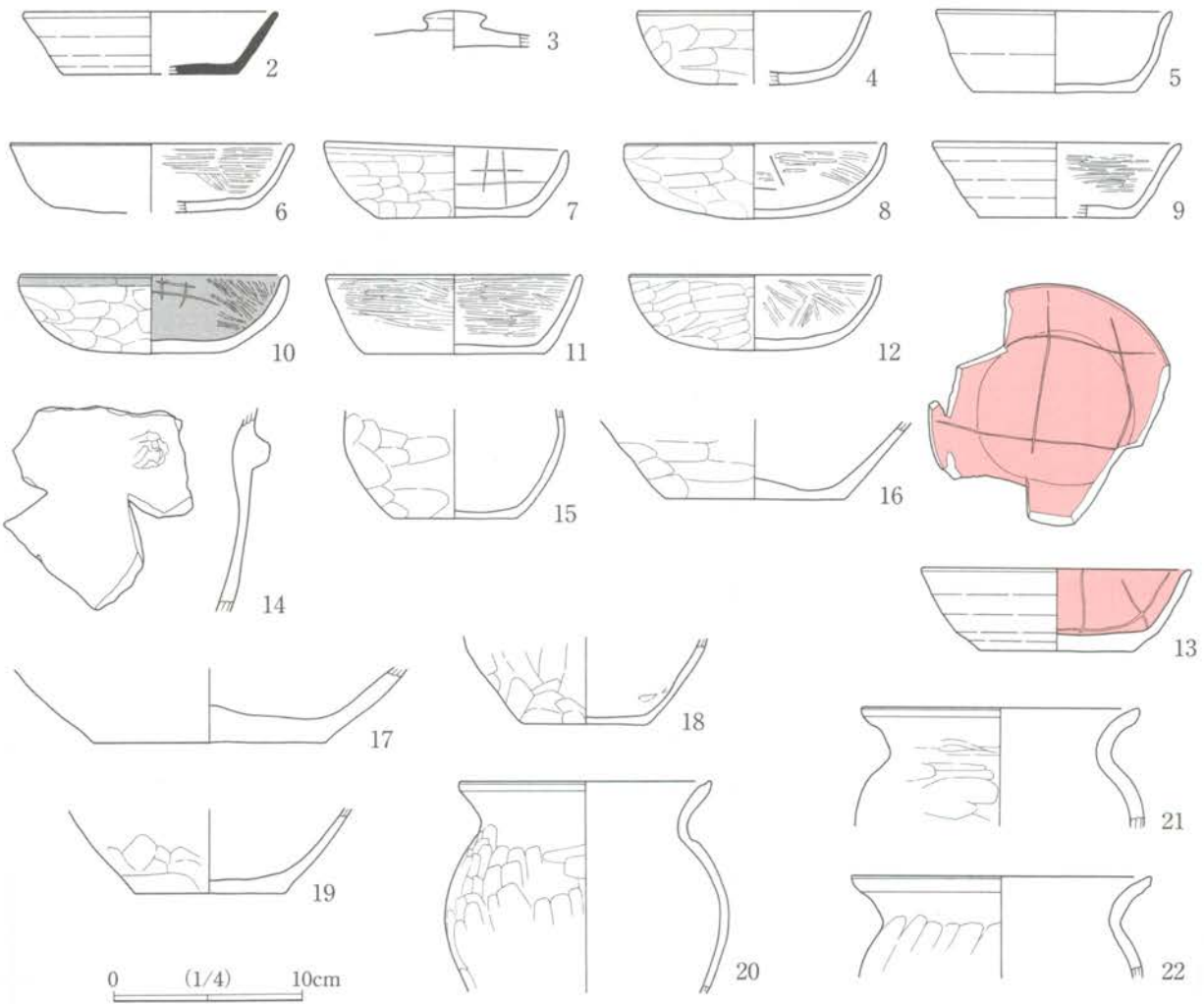
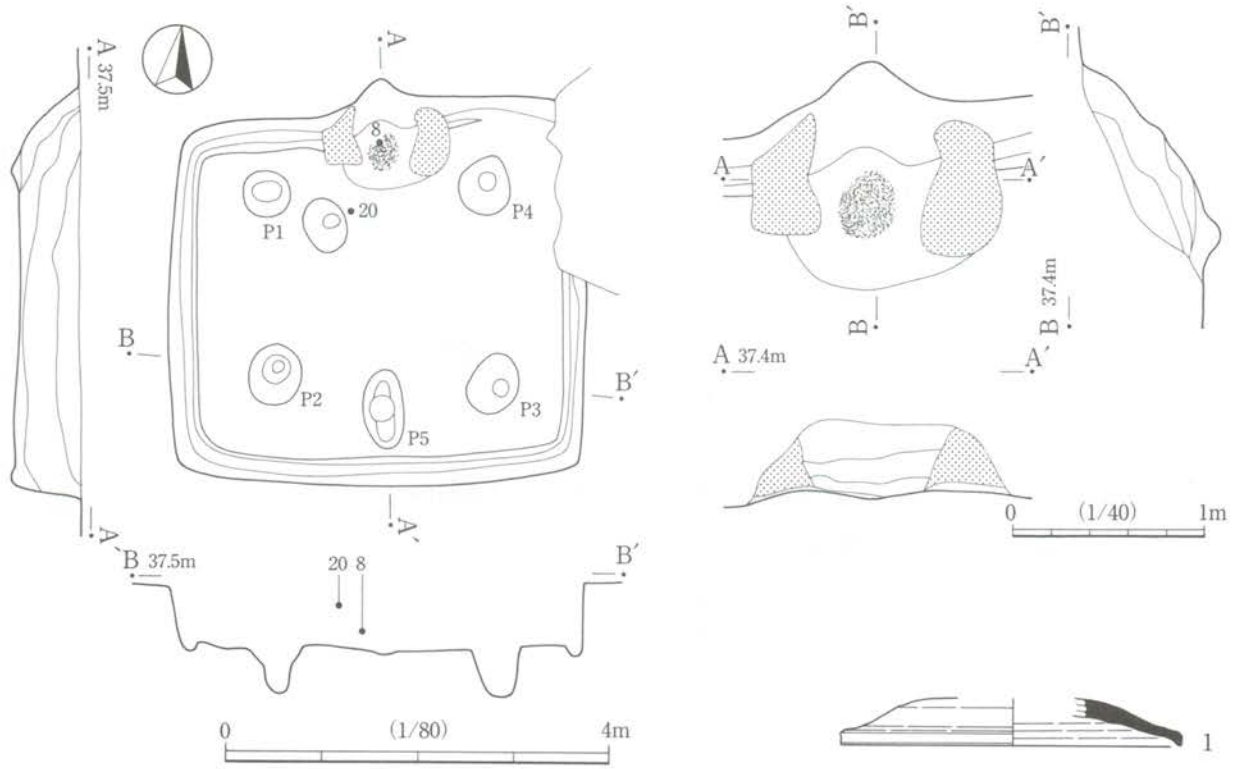
### SI-113号竪穴住居跡 (第221, 222図, 図版49, 135, 136)

本遺構はL3-16グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約37.4mに立地する。形態は方形であるが、北東コーナーから東壁の一部にかけて攪乱され、壁を検出できなかった部分がある。規模は4.0m×4.3mを測り、主軸方向はN-4°-Wである。壁は垂直に立ち上がり、確認面からの深さは60cm~70cmとしっかりしている。主柱穴は住居対角線上に4基配置され、南側のP2・P3は住居主軸方向に長い楕円形をしている。直径は50cm~60cmで、深さは43cm~58cmである。また、P1に並んで同規模のピットがあり、深さも54cmとしっかりしていることから、これも柱穴として機能していたと考えられる。なお、P2とP3の間に梯子ピットがあり、40cm×80cmと住居主軸方向に長い長楕円形をしている。床面はカマドの両脇からP2・P3を結ぶ範囲に硬化面が残っている。

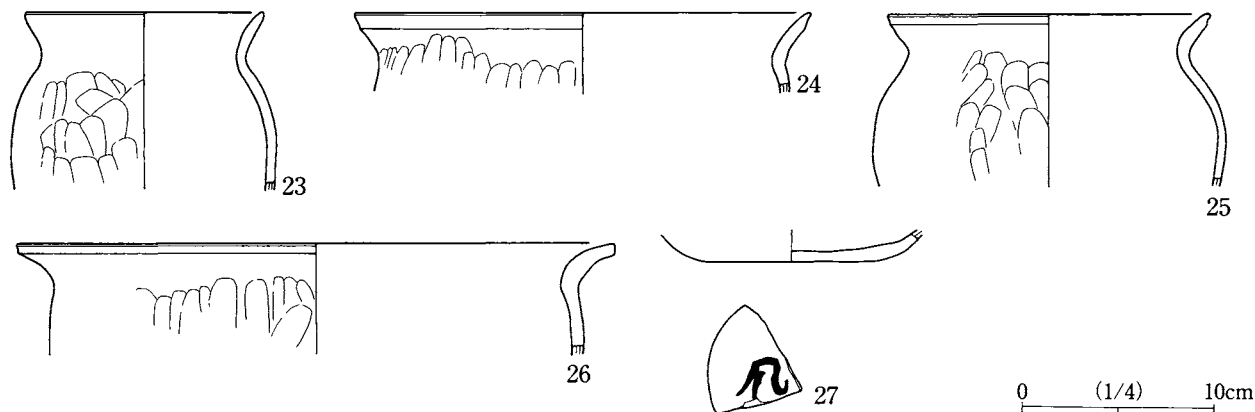
カマドは北壁中央に位置し、最大幅130cmを測る。袖部は灰白色砂質土で構築され、煙道部は三角形に壁外へ30cm張り出している。

1は須恵器坏蓋である。高さはあまりなく、かえしも緩い。天井部は回転ヘラ削りで、ロクロ回転方向は左である。2は須恵器坏である。器面が風化して調整は不鮮明であるが、体部下端にヘラ削りはないようで、底部はヘラ切り後全面一方向のヘラ削りである。

3は土師器蓋のつまみの破片である。外面は赤彩される。4・6~8・10・12・27は土師器坏である。4・7・12は平底で、明瞭に体部と底部を区分している。口縁部は短くヨコナデで、体部から底部は



第221图 SI-113号实测图



第222図 SI-113号出土遺物実測図

第110表 SI-113号出土土器観察表

押印番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 蓋	17.7	[2.5]	—	つまみ欠3/4	微砂粒、長石、黒色粒	内、灰色～黄灰褐色 外、灰白色	内、ほぼ中央に帯状に淡くスス付着	1
2	須恵器 坏	(13.6)	[3.3]	(9.4)	1/4	微砂粒、長石、雲母、黒色粒	灰色	若干摩耗	1
3	土師器 蓋	—	[1.9]	—	つまみのみ	砂粒、石英、スコリア、黒色粒	橙褐色一部赤褐色		2
4	土師器 坏	12.4	[3.8]	丸	1/4	白色砂粒、長石、石英、スコリア	暗褐色一部褐色	若干摩耗	1
5	ロクロ土師器 坏	(12.5)	4.3	8.6	体部1/4 底部完形	砂粒、黒色粒、長石、スコリア	内、口縁褐色 他鈍い黄褐色 外、鈍い橙褐色	内、口縁部スス付着	5
6	土師器 坏	(15.0)	[3.7]	丸	1/3	微砂粒、長石(少)、スコリア	明褐色	内、ミガキ 外、丁寧にナデ	5
7	土師器 坏	13.0	4.1	8.0	ほぼ完形	砂粒、黒色粒、長石、石英、スコリア	明褐色	内、線刻「井」有り	5.6
8	土師器 坏	13.9	4.0	丸	1/2	白色砂粒、長石、石英、スコリア	内、鈍い黄褐色 外、鈍い褐色～暗褐色	器面摩耗一部スス付着、体部内線刻	7
9	ロクロ土師器 坏	(13.1)	4.0	(8.3)	1/4	白色砂粒、黒色粒、長石(多)、石英	赤褐色	口唇部摩滅している	2
10	土師器 坏	14.3	4.2	丸	ほぼ完形	白色砂粒、白針、長石、スコリア	内、鈍い褐色～暗褐色 外、鈍い黄褐色一部黒褐色	内、線刻「井」 内外、漆仕上げ	5
11	ロクロ土師器 坏	(13.7)	4.2	(9.5)	1/3	白色砂粒、長石、石英	鈍い黄灰褐色～暗褐色一部黒色	外、底部～底辺部丁寧にナデ	5
12	土師器 坏	(13.4)	4.0	丸	1/2	砂粒、黒色粒、石英、スコリア	鈍い黄褐色一部橙色	丸底ではあるが境目ははっきり解る	6
13	ロクロ土師器 坏	(14.3)	4.4	(8.0)	1/4	白色砂粒、長石、石英	内、鈍い黄褐色+黒色 外、明赤色～鈍い黄褐色	内外、赤彩 内、「井」の線刻有り	1.SI-118-2
14	土師器 瓶	—	—	—	破片	砂粒、長石、石英、スコリア	明褐色		6
15	土師器 甕	—	[5.8]	6.6	底部完形	砂粒、長石、石英、スコリア	明赤褐色+黒色	薄手なつくり 外、黒斑有り	1
16	土師器 甕	—	[5.2]	9.5	底部完形	白色砂粒、長石	内、褐色 外、暗褐色	外、炭素吸着	2.6
17	土師器 甕	—	[4.0]	12.4	底部2/3	砂粒、長石(少)、スコリア	内、鈍い黄褐色 外、鈍い黄褐色～暗褐色	内、ヘラ痕多数有り 外、若干剥落有り	2.5
18	土師器 甕	—	[4.7]	6.5	底部完形	白色砂粒、小石(2mm)、石英、スコリア	内、明黄褐色～橙色 外、橙色～鈍い褐色	薄手なつくり 内、接合痕有り	1
19	土師器 甕	—	[4.5]	8.0	底部完形	白色砂粒、長石(少)、石英(少)	鈍い黄褐色～暗褐色	外、火ダスキ痕	5.6
20	土師器 甕	13.5	[11.5]	—	口縁～胴上完形 胴尖一部	細砂粒、長石(少)、石英(少)	鈍い黄色～暗灰黄色	器面なめらか、頸部に強く横ナデが施されている	3
21	土師器 甕	(14.8)	[6.2]	—	口縁1/4	スコリア、雲母	明赤褐色	口縁波状	6
22	土師器 甕	(15.9)	[5.6]	—	口縁1/4	白色砂粒	鈍い黄褐色	接合痕あり	6
23	土師器 甕	(14.8)	[9.3]	—	口縁1/4	白色粒、雲母	褐色	炭素吸着	6
24	土師器 甕	(24.0)	[4.2]	—	口縁1/4	スコリア、白色砂粒	褐色	内外、ナデ	6
25	土師器 甕	(16.8)	[10.0]	—	1/6	白色砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色～灰褐色	薄手なつくり	1.5
26	土師器 甕	(31.4)	[5.9]	—	口縁1/4	雲母、白色粒	鈍い黄褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	6
27	ロクロ土師器 坏	—	[1.7]	(9.0)	底部1/4	砂粒、黒色粒、長石、石英、スコリア	鈍い黄褐色	底部墨書「口」	5

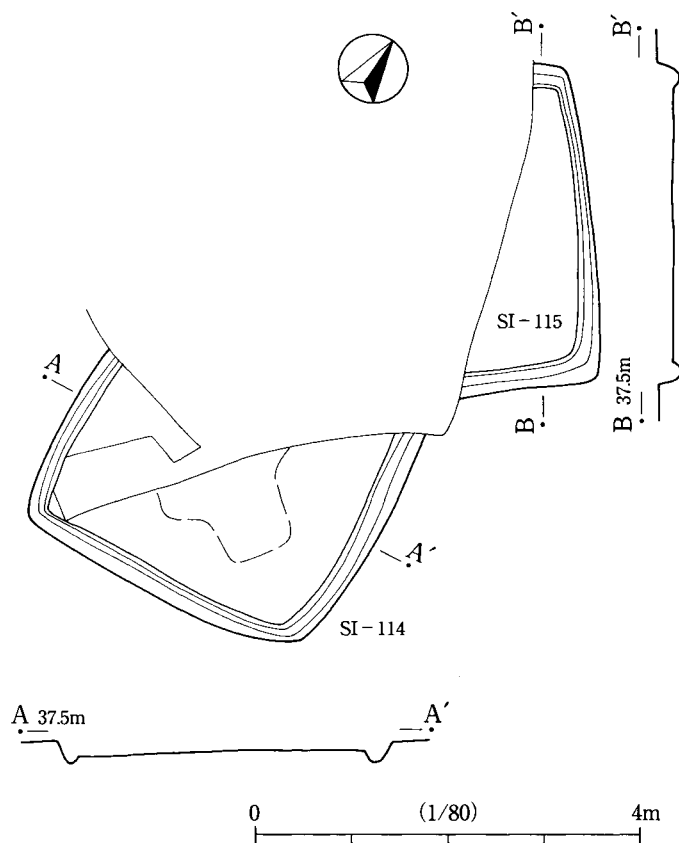
は横方向のヘラ削りであるが、12の底部は概ね一方向のヘラ削りである。内面はヘラ磨きが施され、13は口唇部が内側へ肥厚する。なお、7は体部内面に「井」の線刻がある。6・8・10・12は丸底の坏である。6は身込みの部分を強く押さえ、内面では底部を意識している。体部外面から底部にかけても横方向のヘラ削り後丁寧に磨いており、口唇部が僅かに内側へ肥厚する。8・12は口縁部が直立し、ヨコナデを施す。胴部は横方向のヘラ削りで、体部内面に横方向のヘラ磨きを施している。ともに体部内面に線刻があり、10は「井」である。27は底部の破片で、底部外面に墨書される。

5・9・11・13はロクロ土師器坏である。体部の開きに相違があり、5・11は比較的立っている。5は底部下端及び底部全面手持ちヘラ削りである。9は底部が平坦ではなく、中央が出ている。体部下端及び底部全面回転ヘラ削りで、ロクロ回転方向は右である。11は身込み部分を強く押さえ、底部を含めて内外面ともヘラ磨きを施している。体部下端にヘラ削りはみられず、底部は全面不定方向に削っている。13は



体部下端及び底部全面回転ヘラ削りで、口縁回転方向は右である。内外面とも赤彩され、内面には大きく「井」が線刻される。

14は土師器甗である。形骸化した把手がやや上向きに付けられている。15～26は土師器甕である。15～19は底部破片で、15は小形の甕である。15は胴部外面から底部にかけて横方向のヘラ削りを施し、内面も丁寧にナデている。16・17は内面中央が盛り上がり、17はその周囲にヘラ当て痕がある。20～26は口縁部を含む破片で、小形の甕が多い。口縁部はいずれも受け口状を呈し、胴部は21が横方向のヘラ削りを施すが、他は縦方向のヘラ削りである。なお、20・21・23・25はヘラ削り後にナデを加えている。



#### SI-114号竪穴住居跡 (第223図, 図版50)

本遺構は M2-91グリッド付近に位置

し、東側台地の中央部、標高約37.4mに立地する。北側でSI-115号竪穴住居跡と重複するが、重複部分を大きく攪乱され、新旧関係は不明である。東西軸長は3.4mを測り、主軸方向はN-8°-Wである。攪乱は住居のかなりの範囲に及んでおり、遺存部分には壁溝及び床面の硬化面が認められる。柱穴及びカマドも検出できなかったが、カマドは北壁に位置していたと想定できる。

図示できる遺物はない。

#### 第223図 SI-114号・115号実測図

#### SI-115号竪穴住居跡 (第223図, 図版50)

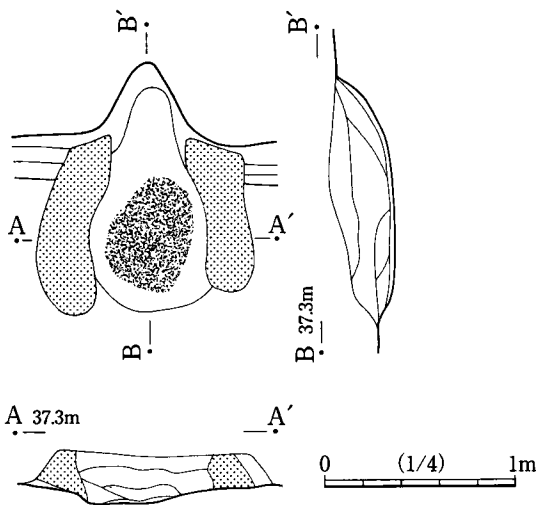
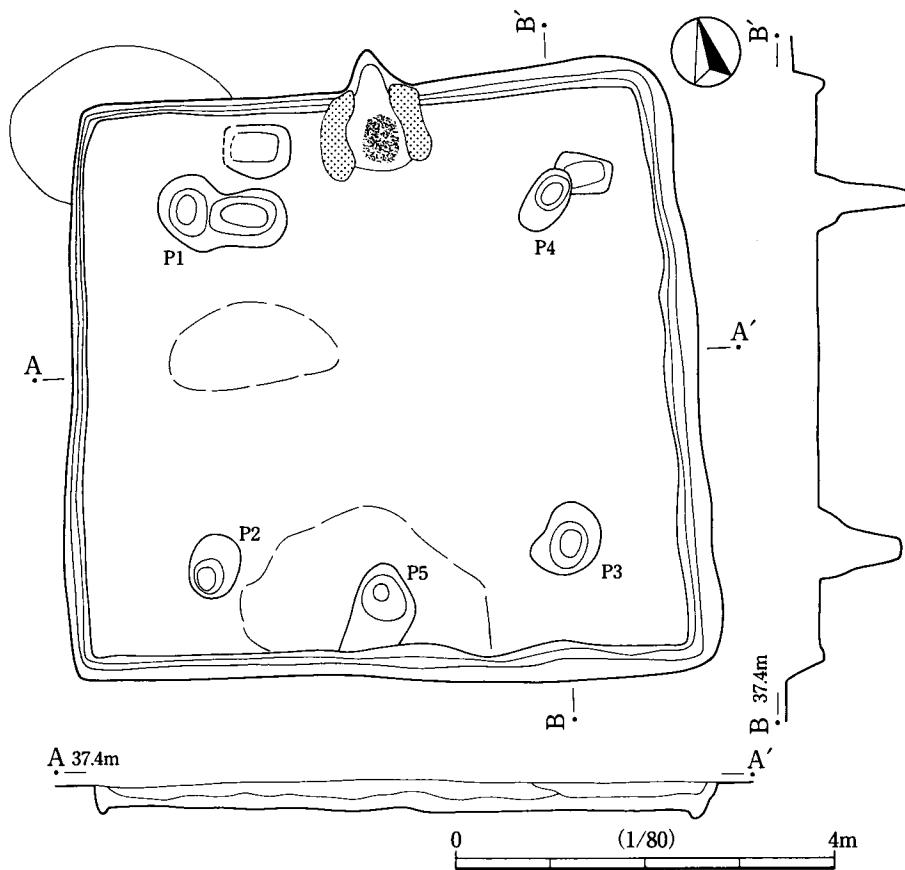
本遺構は M2-81グリッド付近に位置し、SI-114号竪穴住居跡と重複している。やはり住居の大部分に攪乱が及んでいる。北東壁長は3.4mを測り、主軸方向はN-40°-Wである。遺存部分には壁溝が巡り、カマドはおそらく北西壁に設置されていたと想定される。

図示できる遺物はない。

#### SI-116号竪穴住居跡 (第224～226図, 図版50, 136, 137)

本遺構は L2-48グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約37.3mに立地する。新旧2軒の住居が重複しており、(旧)住居は(新)住居の貼り床をはがした段階で検出した。規模は(新)住居が一回り大きく、主軸方向も僅かに異なっている。

(新)住居は、6.2m×6.5mを測る方形で、主軸方向はN-12°-Eである。壁溝はカマド部分を除いて全周する。主柱穴は住居対角線上の4か所に配置されるが、北側のP1・P4は建て替えがあり、それぞ



れ2基のピットが連続している。深さはいずれも90cm～100cmと深い。また、南壁際中央には梯子ピットがあり、直径50cm、深さ60cmを測る。カマドの左側には北壁に接して貯蔵穴があり、70cm×55cmの方形で、床面から30cmの深さがある。床面は梯子ピットの周辺及びP1とP2の間の狭い範囲に硬化面が残されている。

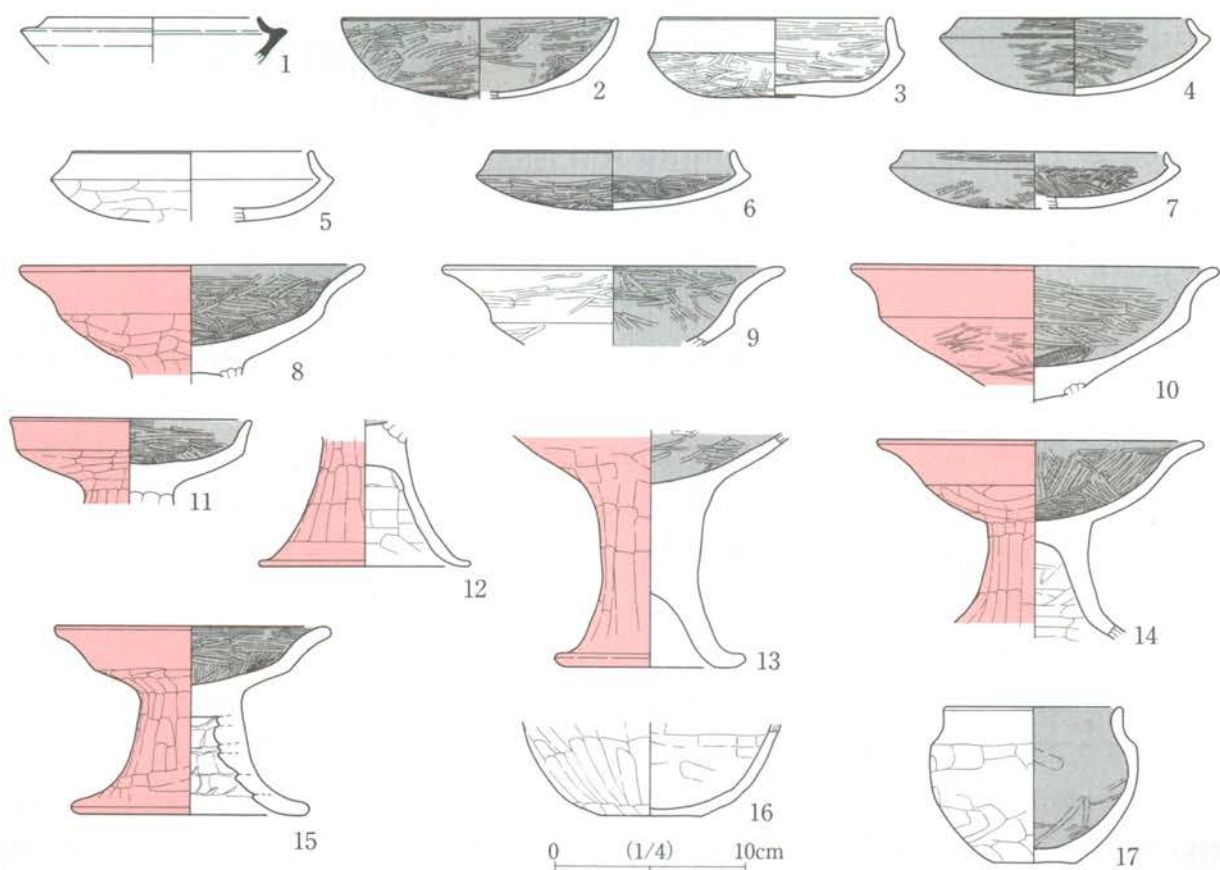
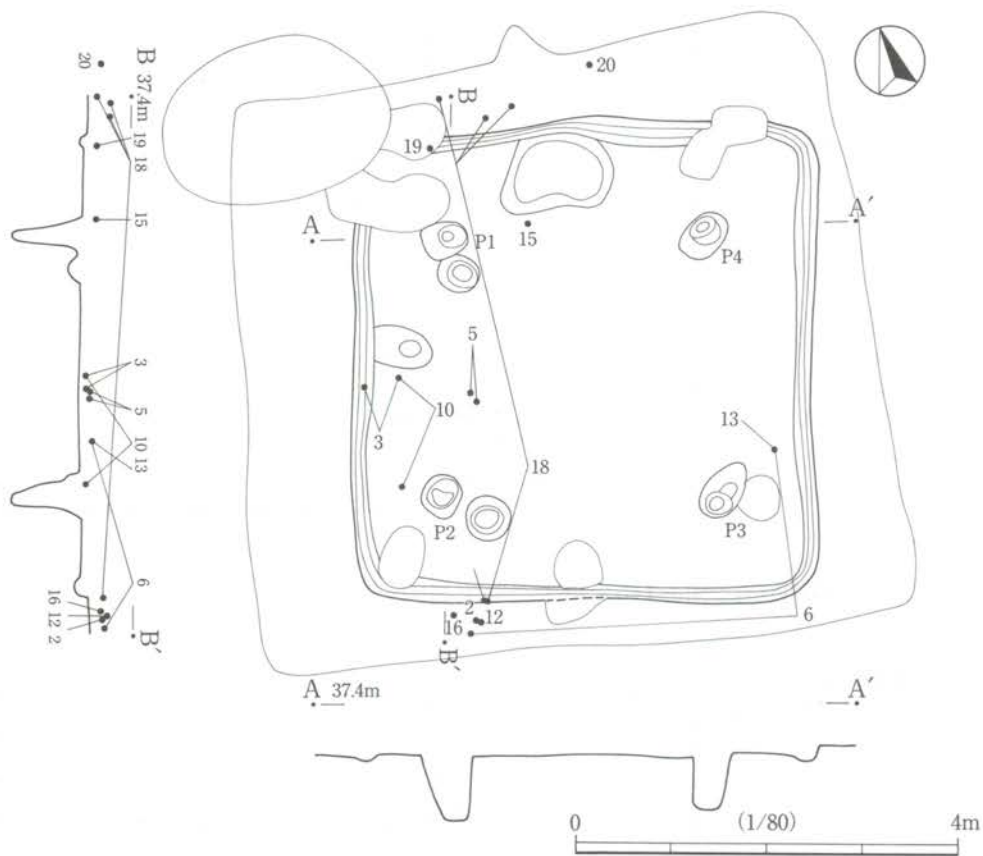
カマドは北壁中央に位置し、最大幅115cmを測る。袖部は黄褐色砂質土で構築され、煙道部は三角形で壁外へ40cm張り出している。

(旧)住居は、(新)住居よりも一回り小さく、4.8m×5.1mを測り、主軸方向はN-19°-Eである。

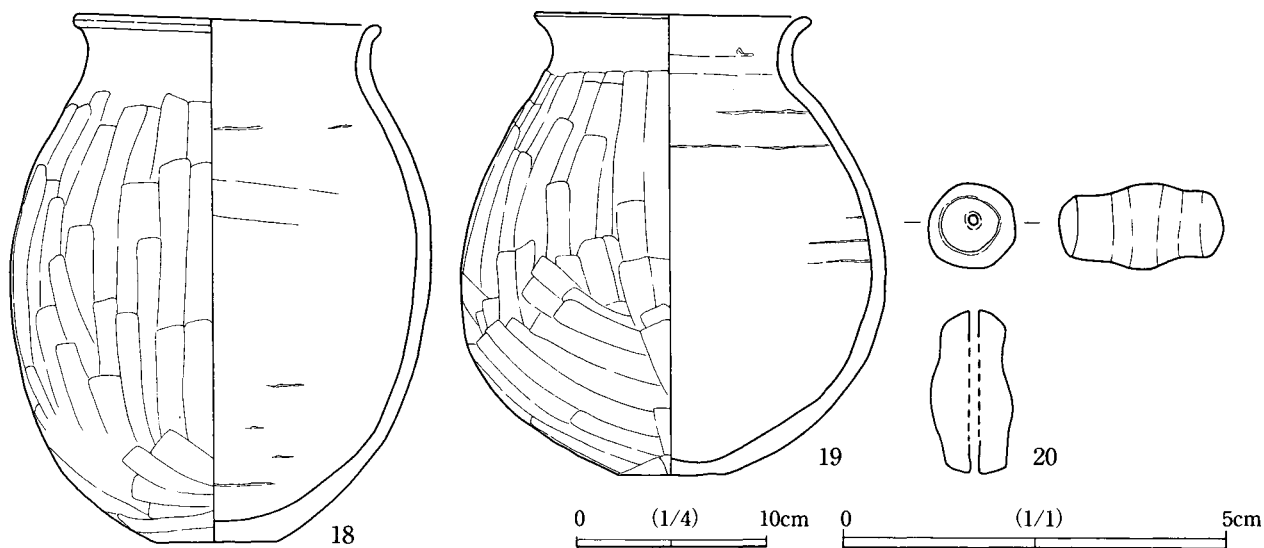
壁溝はカマド部分も含めて全周する。主柱穴は住居対角線上の4か所に配置されるが、住居西側の柱穴は2基が一对となっている。また、住居東側の2基の柱穴もそれぞれ2段に掘り込まれている。カマド痕跡は北壁中央に認められるが、西壁中央にも僅かにカマドの痕跡があることから、カマドの移設とともに柱を建て替えた可能性も考えられる。床面はカマド前面から住居中央にかけて硬化面が残っている。なお、柱穴の深さはいずれも70cm前後としっかりしたものであった。

第224図 SI-116号実測図

対角線上の4か所に配置されるが、住居西側の柱穴は2基が一对となっている。また、住居東側の2基の柱穴もそれぞれ2段に掘り込まれている。カマド痕跡は北壁中央に認められるが、西壁中央にも僅かにカマドの痕跡があることから、カマドの移設とともに柱を建て替えた可能性も考えられる。床面はカマド前面から住居中央にかけて硬化面が残っている。なお、柱穴の深さはいずれも70cm前後としっかりしたものであった。



第225图 SI-116号(旧)实测图



第226図 SI-116号出土遺物実測図

第111表 SI-116号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	(11.0)	[2.4]	—	口縁1/4	微砂粒、長石(少)	灰色	受部径(14.0)、湖西産	4
2	土師器 坏	(14.4)	[4.2]	九	1/4	微砂粒、長石、スコリア	内、鈍い黄橙色 外、鈍い黄橙色 ~鈍い赤褐色	内外、漆仕上げ 器面なめらか	2.17
3	土師器 坏	(12.2)	4.1	5.6	1/2	白色砂粒、長石、石英	内、黒褐色 外、赤褐色~黒褐色	内外、粗にミガキ	12.13
4	土師器 坏	(12.0)	4.0	九	1/3	微砂粒	内、黒褐色 外、鈍い黄色~黒褐色	内外、漆仕上げ 丁寧なミガキ	1.39
5	土師器 坏	(12.6)	[3.7]	九	2/3	白色砂粒、石英	内、鈍い黄褐色~黒褐色 外、赤褐色~黒褐色	漆仕上げ(?) 口唇部摩滅	3.10.11
6	土師器 坏	12.8	3.1	九	ほぼ完形	白色砂粒、長石(少)、石英(少)	鈍い赤褐色~暗褐色	漆仕上げ 口唇部摩滅	3.6.18
7	土師器 坏	(13.8)	3.0	九	口縁1/4	スコリア	内、黒色 外、鈍い褐色	内外、漆仕上げ	3
8	土師器 高坏	18.0	[5.7]	—	坏部完形	砂粒、黒色粒、長石、石英	内、黒色 外、明赤褐色	内、黒色処理 外、赤彩	34
9	土師器 高坏	(18.0)	[4.1]	—	口縁1/6	石英、白色砂粒	内、黒色 外、暗赤褐色	内、黒色処理 外、赤彩	3
10	土師器 高坏	(19.2)	[7.0]	—	坏部1/3	砂粒、黒色粒、長石、石英	内、黒色 外、明赤色~赤褐色	内、黒色処理 外、赤彩	12.14
11	土師器 高坏	(12.6)	[4.5]	—	坏部1/4	白色粒、褐色粒	内、黒色 外、暗赤褐色	内、黒色処理 外、赤彩	39
12	土師器 高坏	—	[7.6]	(11.0)	脚部ほぼ完形	白色砂粒、黒色粒、長石、石英	坏内、黒色 脚内、明褐色 脚外、赤色	坏内、黒色処理 外、赤彩	16
13	土師器 高坏	—	[10.0]	(7.0)	坏部1/3 脚部2/3	白色砂粒、長石、石英、スコリア	坏内、黒色 坏外、脚外、赤褐色	坏内、黒色処理	2.3.6
14	土師器 高坏	(17.0)	[10.3]	—	坏部1/2 裾部欠損	白色砂粒、長石、石英	坏内、脚内、黒色 脚外、赤彩	坏内、脚内、黒色処理 坏外、脚外、赤彩	15
15	土師器 高坏	(14.4)	10.1	12.4	坏部1/2脚部ほぼ完形	白色砂粒、黒色粒、長石、石英、スコリア	坏内、黒色 脚内、明褐色 外、明赤褐色	坏内、黒色処理 脚内部の粘土粒巻き上げ顕明 坏外、脚外、赤彩	1.24
16	土師器 甕	—	[5.0]	5.2	1/8	砂粒、長石(少)、石英(少)	内、暗灰色 外、橙色~褐色	内外、炭素吸着	3.19
17	土師器 甕	(9.4)	8.3	4.4	1/2	砂粒、小石(1~2mm)、長石、石英	内、黒色 外、赤褐色~暗褐色	内、黒色処理 外、底部正円でない	3
18	土師器 甕	16.0	27.3	6.4	ほぼ完形	粗砂粒、石英、スコリア	赤褐色	歪みあり 内、輪轆み痕残す	12.3.15
19	土師器 甕	14.6	22.3	5.8	ほぼ完形	砂粒、小石(1mm)、長石、石英、スコリア	鈍い褐色~黒褐色	内、剥落著しい	25

遺物はすべて(新)住居に伴うもので、高坏が多くある。1は須恵器坏である。口縁部は短くかなり内傾し、受部が突き出たようになっている。

2~7は土師器坏である。2は蓋の模倣で、口縁部と底部の境に低い稜がめぐる。内外面とも大変丁寧にヘラ磨きを施し、ヘラ削り痕はまったく観察することができない。3~7は身の模倣で、3を除くと扁平である。3は口縁部は比較的立つが、底部が押しつぶされたような形状である。底部は横方向のヘラ削りであるが、内外面ともヘラ磨きを施している。4・6・7は内面黒色処理され、5を除いて漆仕上げとみられる。4・7は実に丁寧に磨いている。

8~15は土師器高坏である。脚部が残るものはいずれも短脚で、坏部の形状も11が異質であるが、他はよく似たものである。坏部内面はすべて黒色処理され、外面は坏部・脚部とも赤彩される。

16~19は土師器甕である。16・17は小形の甕で、16は底部にいたるまで縦方向のヘラ削りを、17は胴部全体に横方向のヘラ削りを施している。なお、17は内面黒色処理される。18・19はほぼ完形である。最大

径は18が胴部中位に、19が胴部下位にあり、19は下膨れである。口縁部は外反し、ヨコナデで整え、胴部は上半が縦方向、下半が横方向のヘラ削りを施す。なお、19は胴部下半の一部が脆弱となっている。

20は切子玉を模した土製品であろうか。中央が丸く膨らんでいる。

### SI-117号竪穴住居跡（第227, 228図, 図版54, 137）

本遺構はL2-35グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約37.3mに立地する。主軸方向を揃てSI-128号竪穴住居跡と重複し、SI-128号が新しい。床面は30cm程度の高さの違いがある。形態は方形で、規模は5.4m×4.9mを測り、主軸方向はN-16°-Wである。壁溝は北壁から東壁にかけてと、西壁の一部に巡る。柱穴はP6~P8の3基が本住居に伴うものと思われる。深さは53cm~76cmを測る。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅は110cmである。袖部は壁から80cm延び、ローム粒を多く含んだ明褐色砂質土を基底部として白色粘土を含んだ淡褐色砂質土で構築している。

1~3は土師器坏である。1は身の模倣で、口縁部は短く、口径も小さい。底部は横方向のヘラ削りで、内面にヘラ磨きを施す。口縁部外面から内面にかけて漆仕上げとみられる。2は蓋の模倣とみられ、底部に僅かに段が付く。底部は丁寧にナデられてヘラ削り痕は観察できず、内面は丁寧に磨いている。底部を除いて漆仕上げとみられる。3は半球形の深い坏で、口縁部はヨコナデで、体部から底部にかけて横方向のヘラ削り後ヘラ磨きを施している。内面も横方向に磨いている。

4~7は土師器甕である。4はあまり胴部が膨らまず、最大径も中位以下にある。胴部は縦方向のヘラ削りであるが、胴部中位以下に焼土化したカマド構築材が固着し、器面を覆っている。内面は胴部下位に粘土紐接合痕を残している。6は小形の甕で、胴部は球形を呈する。胴部は斜め方向のヘラ削りを施すが、ヘラ削り後に丁寧にナデており、ヘラ削り痕は不明瞭である。底部もヘラ削りを施すが、木葉痕が残る。

7は土師器甕である。最大径は口縁部にあり、端部はやや受け口状を呈する。胴部は横方向のヘラ削りで、縦方向の強いナデを加える。8は土製支脚である。

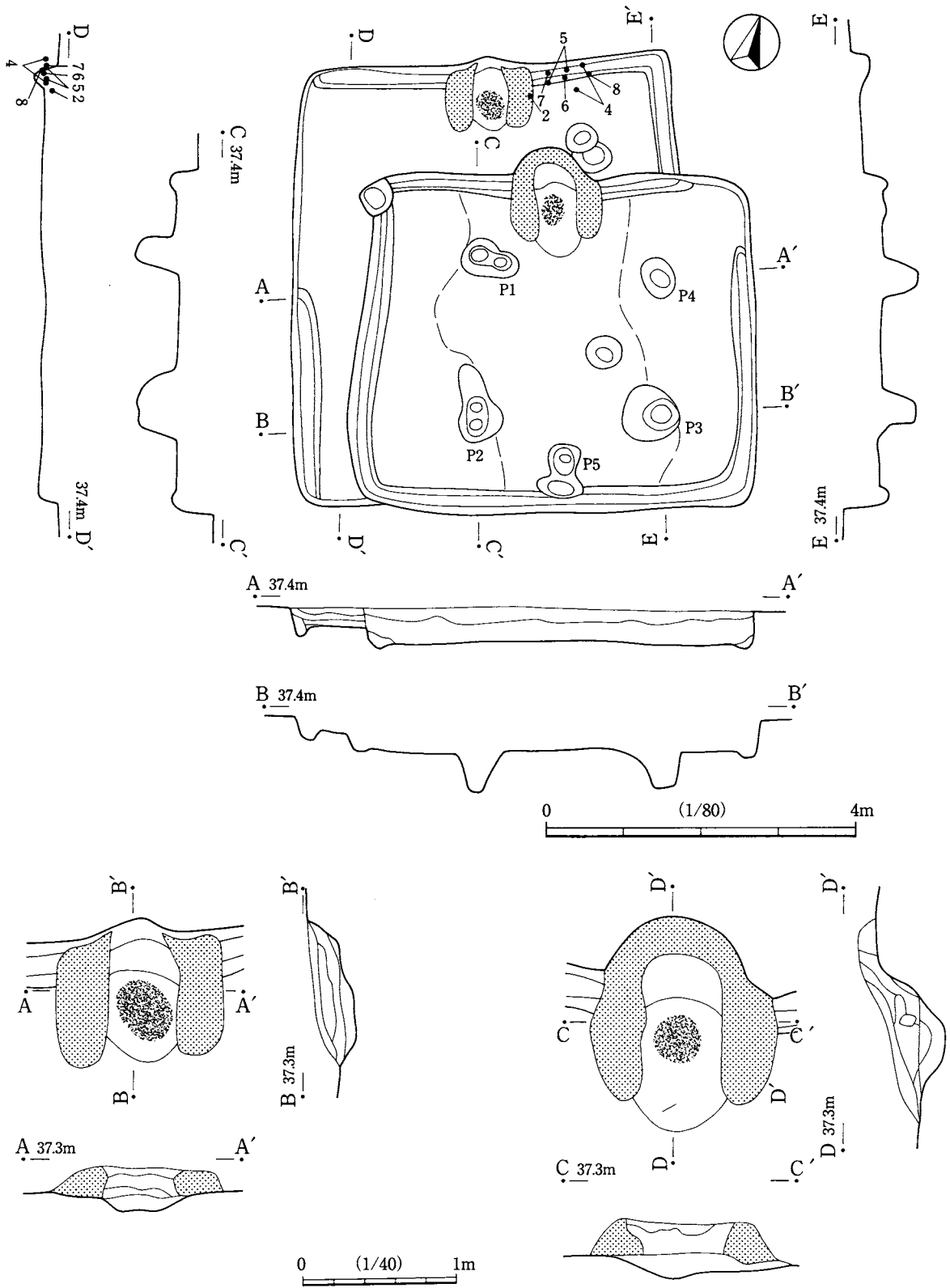
第112表 SI-117号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(10.8)	[2.8]	—	1/4	微砂粒、スコリア	鈍い黄褐色	軟質、内外、漆仕上げ	1
2	土師器 坏	(12.4)	3.4	丸	1/3	微砂粒、スコリア	鈍い黄褐色一部黒色	軟質、内外、漆仕上げ	1.3
3	土師器 坏	(12.2)	[5.1]	丸	1/2	砂粒、長石、石英	鈍い赤褐色一部黒色	外、密にヘラケズリ痕有り	1
4	土師器 甕	(18.2)	[19.6]	—	1/4	砂粒、黒色粒、長石、石英	明赤褐色 外、胴中央-下部黒褐色	全体に整形粗く粗雑なつくり 内、剥落著しい	1.9.12
5	土師器 甕	—	[2.7]	6.6	底部完形	砂粒、石英	内、明褐色 外、赤褐色+黒色	内、剥落著しい	5.7
6	土師器 小型甕	(12.2)	11.0	6.5	1/3	白色砂粒、スコリア、長石、小石(1~2mm)	内、赤褐色-暗褐色 外、鈍い赤褐色-暗褐色	底部、木葉痕	8.15
7	土師器 甕	—	[7.2]	(6.0)	底部のみ	スコリア、石英	明赤褐色	4と同一個体の可能性あり	1.2.6

### SI-128号竪穴住居跡（第227, 228図, 図版54, 137）

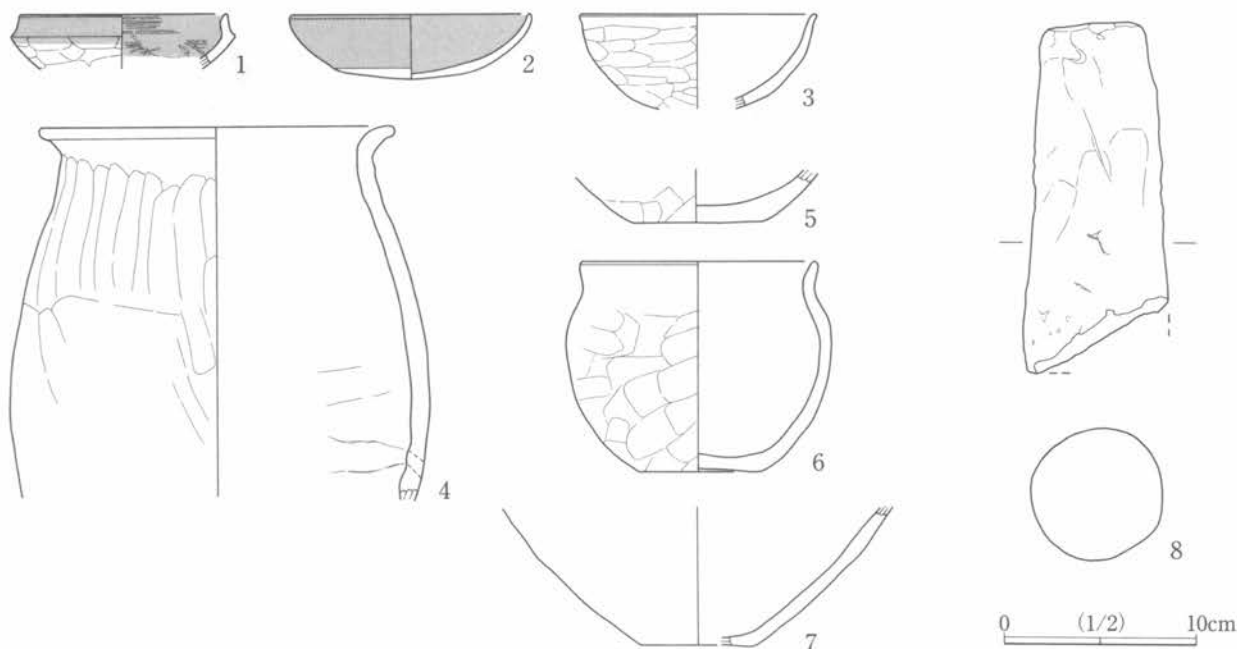
本遺構はSI-117号竪穴住居跡の大部分を切る形で構築されている。形態は方形で、規模は4.3m×5.1mを測り、主軸方向はN-14°-Wである。壁溝は北東コーナーを除いて全周し、主柱穴は住居対角線上に4基配置されている。このうち住居東側のP1・P2は建て替えが認められ、2基のピットが重複している。また、カマドに対する南壁際中央には梯子ピットがあり、梯子ピットも2基が重複している。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅120cmを測る。袖部は壁から80cm延び、ロームブロックを多く含んだ暗褐色土を基底部にし、淡褐色砂質土及び白色粘土を含んだ明褐色砂質土で構築している。煙道部は半円形で、壁外へ45cm張り出している。

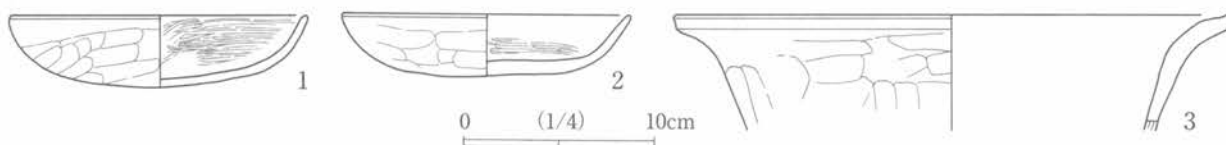


第227图 SI-117号·128号实测图

SI-117



SI-128



第228図 SI-117号・128号出土遺物実測図

第113表 SI-128号出土土器観察表

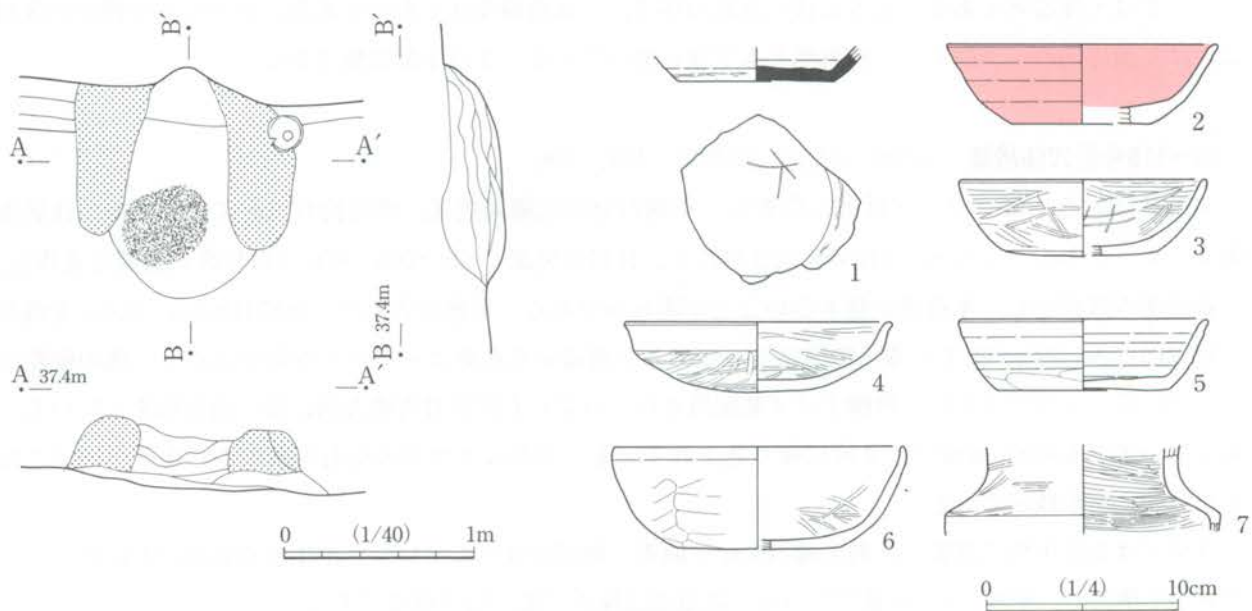
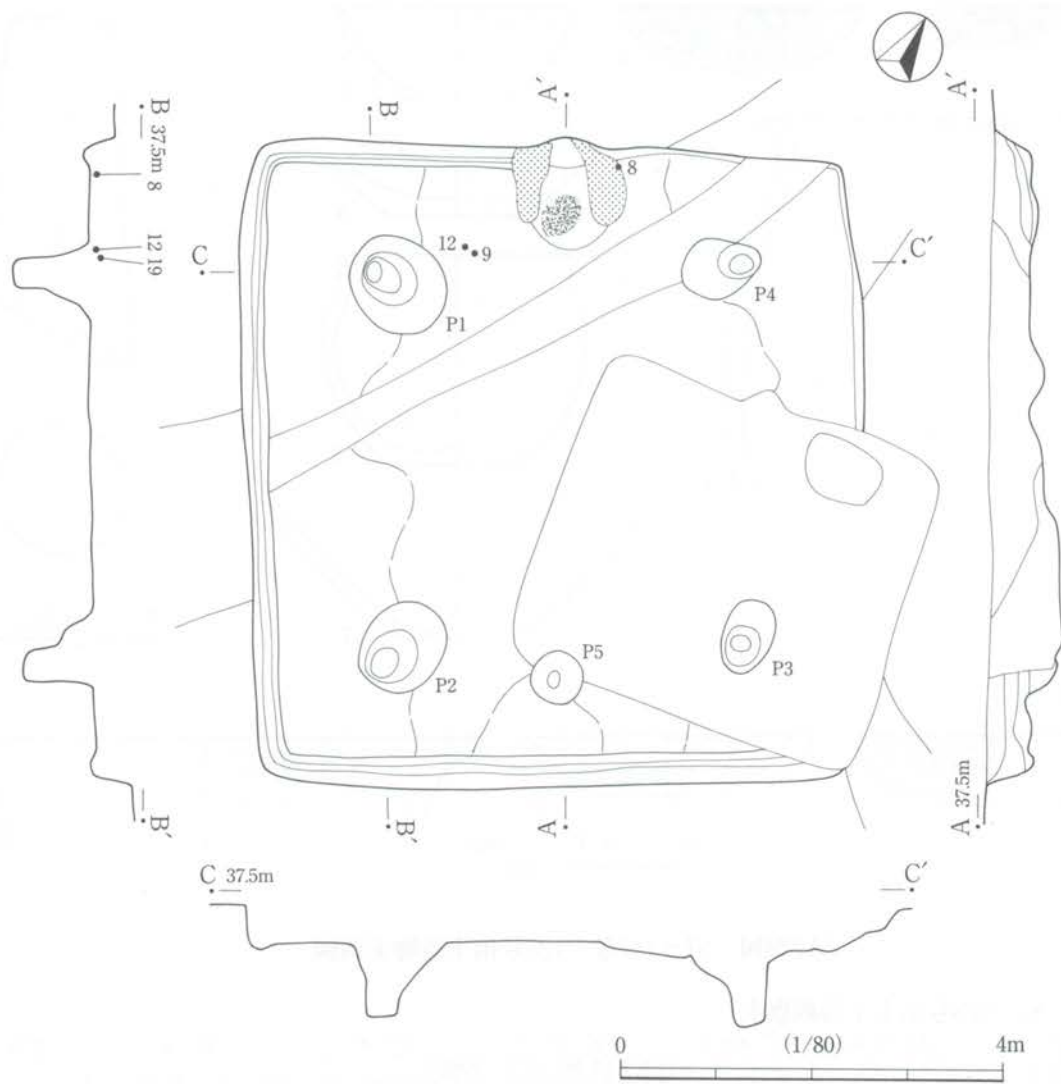
挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(15.6)	3.8	丸	1/2	砂粒、黒色粒、長石、スコリア	明赤褐色		2
2	土師器 坏	(15.0)	3.2	丸	1/4	砂粒、黒色粒、石英、小石(2mm)	内、鈍い褐色 外、赤褐色-黒褐色	内外、二次的に火を受け剥落有り	6
3	土師器 甑	(29.5)	[6.0]	-	口縁1/4	白色粒、雲母	赤褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	2

1・2は土師器坏である。ともに浅い丸底の坏で、1は精緻な仕上がりである。いずれも体部から底部にかけて横方向のヘラ削りで、内外面とも丁寧に磨いている。3は土師器甑である。

#### SI-118号竪穴住居跡 (第229, 230図, 図版51, 137, 138)

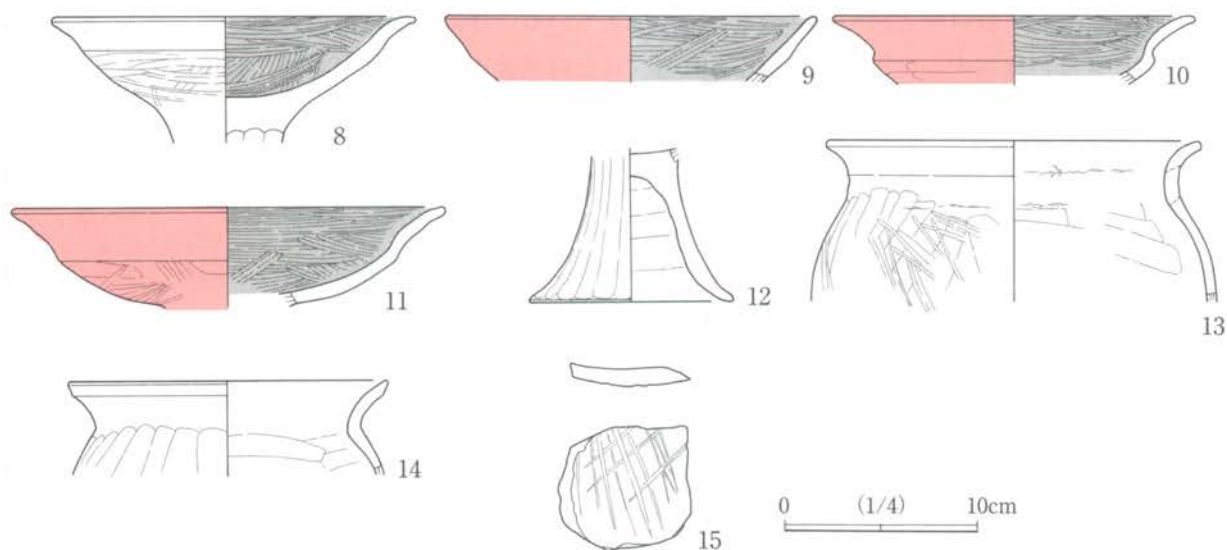
本遺構はM2-85グリッド付近に位置し、東側台地の北側縁辺部、標高約37.4mに位置する。住居南東コーナーを中心としてSI-119号竪穴住居跡と、住居中央部でSD-005・SD-014号溝状遺構と重複し、土層断面の観察から、本遺構が最も古いことが明らかである。形態は方形で、規模は6.6m×6.6mを測り、主軸方向はN-21°-Wである。壁溝はSD-005号と重複する北東コーナーで不明であるが、他の壁際に巡っている。主柱穴は住居対角線上に4基配置され、いずれも住居対角線方向に長い楕円形をしている。深さはいずれも80cm前後で、2段に掘り込まれている。床面はカマドの左右の壁際から南壁へ向けて長方形に硬化面が残っている。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅115cmを測る。袖部はロームブロック主体の基底部の上に淡黄褐色砂質土で構築し、壁から80cm延びている。煙道部は僅かに張り出す程度である。



第229图 SI-118号实测图





第230図 SI-118号出土遺物実測図

第114表 SI-118号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	—	[1.8]	8.2	底部3/4	微砂粒、黒色粒、雲母(多)、長石、スコリア	灰色	底部、線刻有り「大」 常陸新治産	3
2	ロクロ土師器 坏	(14.2)	4.1	(7.2)	1/5	スコリア、長石	内、明赤褐色 外、鈍い橙色	内、赤彩	3、SI-113-13
3	土師器 坏	(13.0)	4.0	(7.7)	1/3	スコリア、石英	橙色	内、ミガキ、線刻あり 外、器面摩耗	3
4	土師器 坏	(14.0)	3.8	丸	1/3	砂粒、スコリア、長石(多)、石英	内、鈍い赤褐色 外、鈍い黄褐色+黒色	外、黒斑 内外、器面光沢有り	3
5	ロクロ土師器 坏	(13.0)	3.8	(8.9)	1/3	白色砂粒、スコリア	鈍い黄色	若干摩耗	3
6	土師器 坏	(15.0)	5.4	(8.3)	1/4	白色砂粒、長石(少)、スコリア	内、明赤褐色 外、鈍い黄褐色	内、粗にミガキ(光沢有り)	3
7	土師器 甕	—	[3.7]	—	頸部-肩部1/4	石英、白色微砂粒	鈍い褐色	内外、ミガキ	3
8	土師器 高坏	19.0	[6.6]	—	坏部ほぼ完形	白色砂粒、白針、長石(多)、石英	内、黒色 外、灰黄褐色、口縁赤色	内、黒色処理 若干剥落有り	9
9	土師器 高坏	(19.5)	[3.4]	—	1/5	石英、長石、スコリア	赤褐色	内、黒色処理 外、赤彩、器面摩耗	7、10
10	土師器 高坏	(18.6)	[3.6]	—	1/4	長石、石英、小石(2mm-3mm)	内、黒色 外、赤褐色	内、黒色処理、ミガキ 外、赤彩	3
11	土師器 高坏	(22.7)	[5.2]	—	1/4	小石、長石、石英	内、黒色 外、明赤褐色	内、黒色処理、ミガキ 外、赤彩	4、SI-119-1
12	土師器 高坏	—	[8.0]	10.7	脚部のみ完形	白色砂粒、黒色粒、長石、石英	内、明赤褐色 外、赤褐色	内外、丁寧にナデている	5
13	土師器 甕	(19.6)	[8.4]	—	口縁部1/3	白色砂粒、長石(少)、石英	鈍い黄褐色一部赤褐色	内、口縁部接合痕残る	3
14	土師器 甕	(16.7)	[4.9]	—	口縁部1/3	砂粒、長石、スコリア	鈍い褐色	やや硬質	1
15	土師器 坏	—	—	—	底部片	微砂粒、スコリア	内、灰黄色 外、鈍い黄褐色	転用砥石、刃の跡が多くある	3

なお、カマド右袖部に接して土師器高坏(8)が出土した。また、SI-119号と重複することから、奈良・平安時代の遺物も混入している。

1は須恵器坏で、底部の破片である。底部はヘラ切り後全面一方向のヘラ削りで、「大」と線刻されている。2・5はロクロ土師器坏である。2は内外面赤彩され、体部内面に線刻がある。SI-113号の13と接合する。5は体部下端にヘラ削りはなく、底部は全面一方向ヘラ削りである。3・4・6は土師器坏である。3・6は平底の坏で、6やや深さがある。口唇部にヨコナデを施し、体部から底部にかけては横方向のヘラ削りである。3は口唇部が内側へ僅かに肥厚し、体部内面に「井」と線刻される。4は丸底の坏で、口縁部が屈曲して立ち上がる。底部は横方向のヘラ削り後丁寧にナデ、内面は磨いている。

7は土師器であるが、器種不明である。肩が張り、頸部のように立ち上がっているが、内外面とも横方向の入念なヘラ磨きが施され、肩の屈曲部の内側まで及んでいることから、甕の類ではないように思われる。

8~12は土師器高坏である。8~11は坏部の破片である。口縁部は外反するが、坏底部との境の稜は10を除いて強くない。逆に10はかなりきつい稜を巡らせる。いずれも口縁部はヨコナデで、坏底部は横方向

のヘラ削りを施し、11は横方向のヘラ磨きを荒く加えている。坏部内面は黒色処理され、外面は赤彩される。なお、8は口縁部内面にまで赤彩がなされる。12は脚部破片で、短脚である。脚柱部は縦方向のヘラ削り後ナデを加え、ヘラ削りは裾端部にまで及んでいる。外面に赤彩される。

13・14は土師器甕である。口縁部は外反し、13は端部を丸く収めるが、14は外側に段が付く。胴部は縦方向のヘラ削りである。

15は土師器坏の底部破片で、転用砥石としたものである。底部外面に交差する2方向から使用している。使用痕は幅2mm～3mmの溝状で、器壁から1mm程度の深さである。

### SI-119号竪穴住居跡（第231図，図版51）

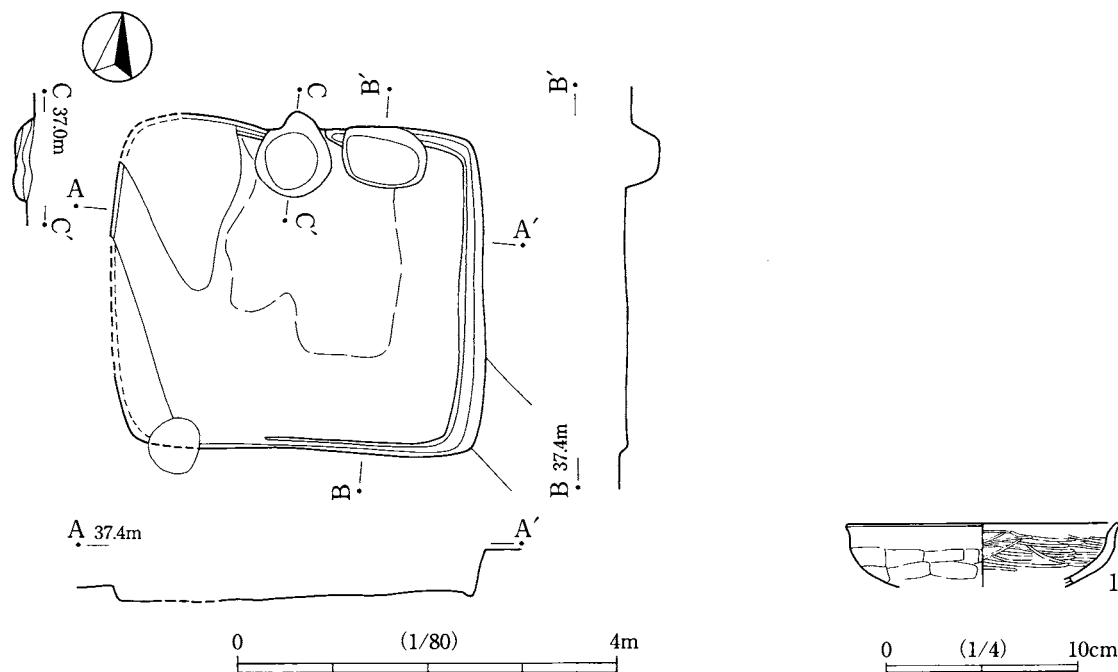
本遺構はSI-118号竪穴住居跡にすっぽり重なるように重複するもので、さらにSD-014号溝状遺構が切っている。形態は方形で、規模は3.3m×3.9mを測り、主軸方向はN-5°-Wである。確認面からの深さは30cmほどで、SI-118号と重複する部分では床面・壁溝及び壁の検出が困難な部分もあった。カマド右側から東壁・南壁の中央付近まで壁溝が巡り、カマド右側には貯蔵穴もある。貯蔵穴は87cm×63cmの方形で、33cmの深さがある。床面はカマド前面から住居中央にかけて硬化面が残っている。

カマドは北壁中央に位置するが、SD-014号溝状遺構に切られ、火床部の掘り込みが残されるだけである。

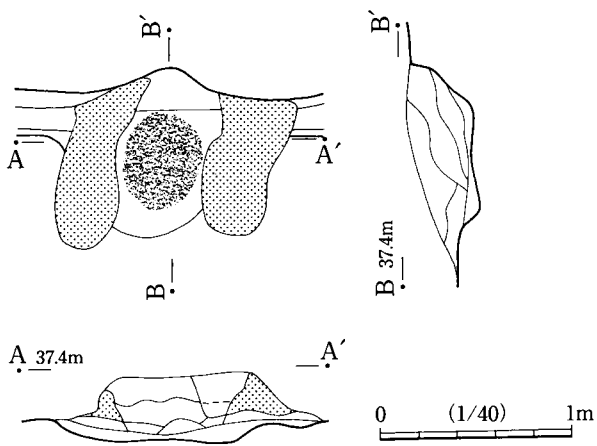
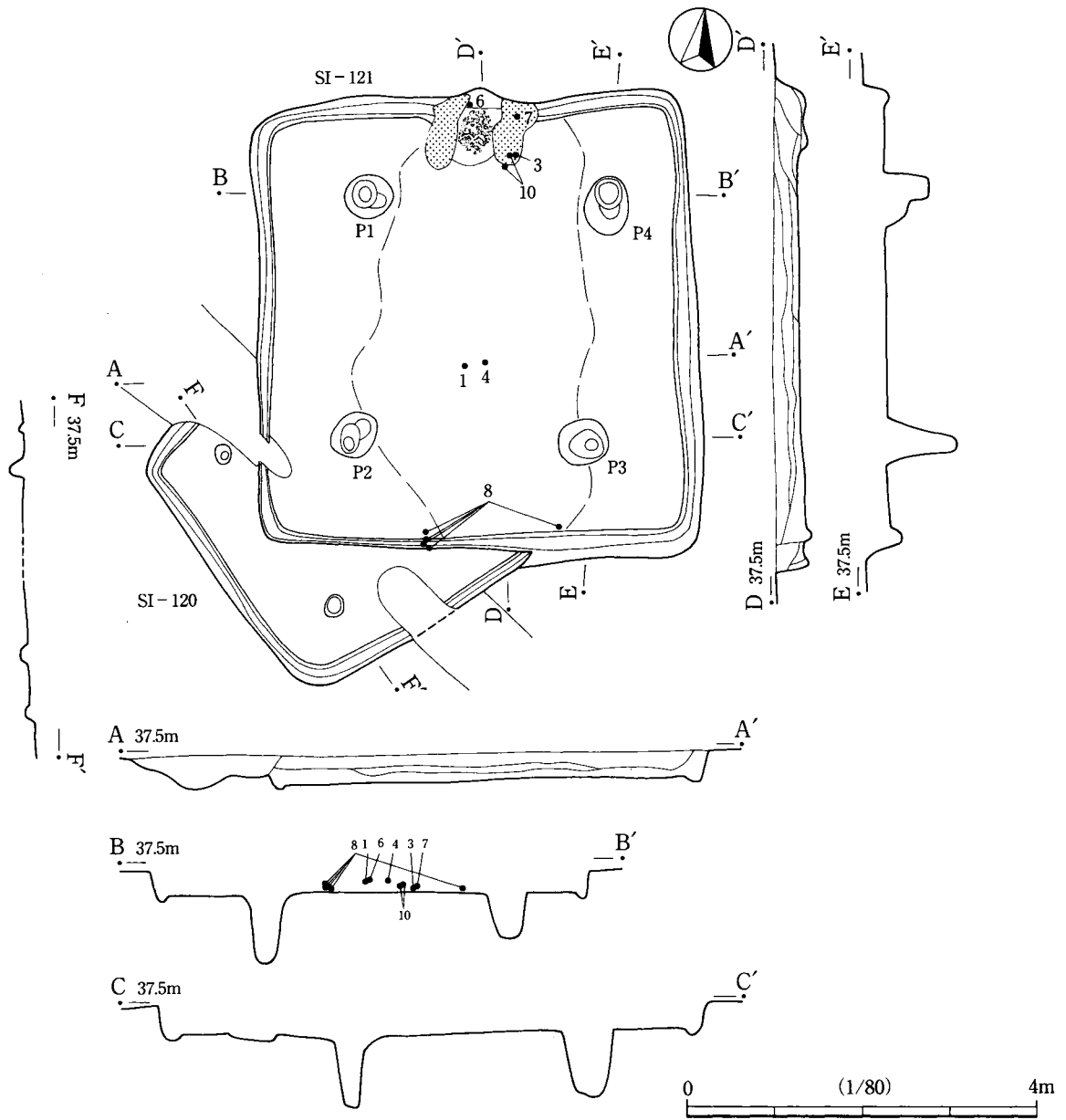
土師器坏1点を図示した。口縁部は直立し、底部は横方向のヘラ削り後磨いている。内面は横方向のヘラ磨きである。

第115表 SI-119号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(14.2)	[3.4]	-	口縁1/4	白色砂粒、スコリア	鈍い褐色	内、ミガキ光沢あり	1.2



第231図 SI-119号実測図



第232图 SI-120号·121号实测图

SI-120号竪穴住居跡 (第232図, 図版51)

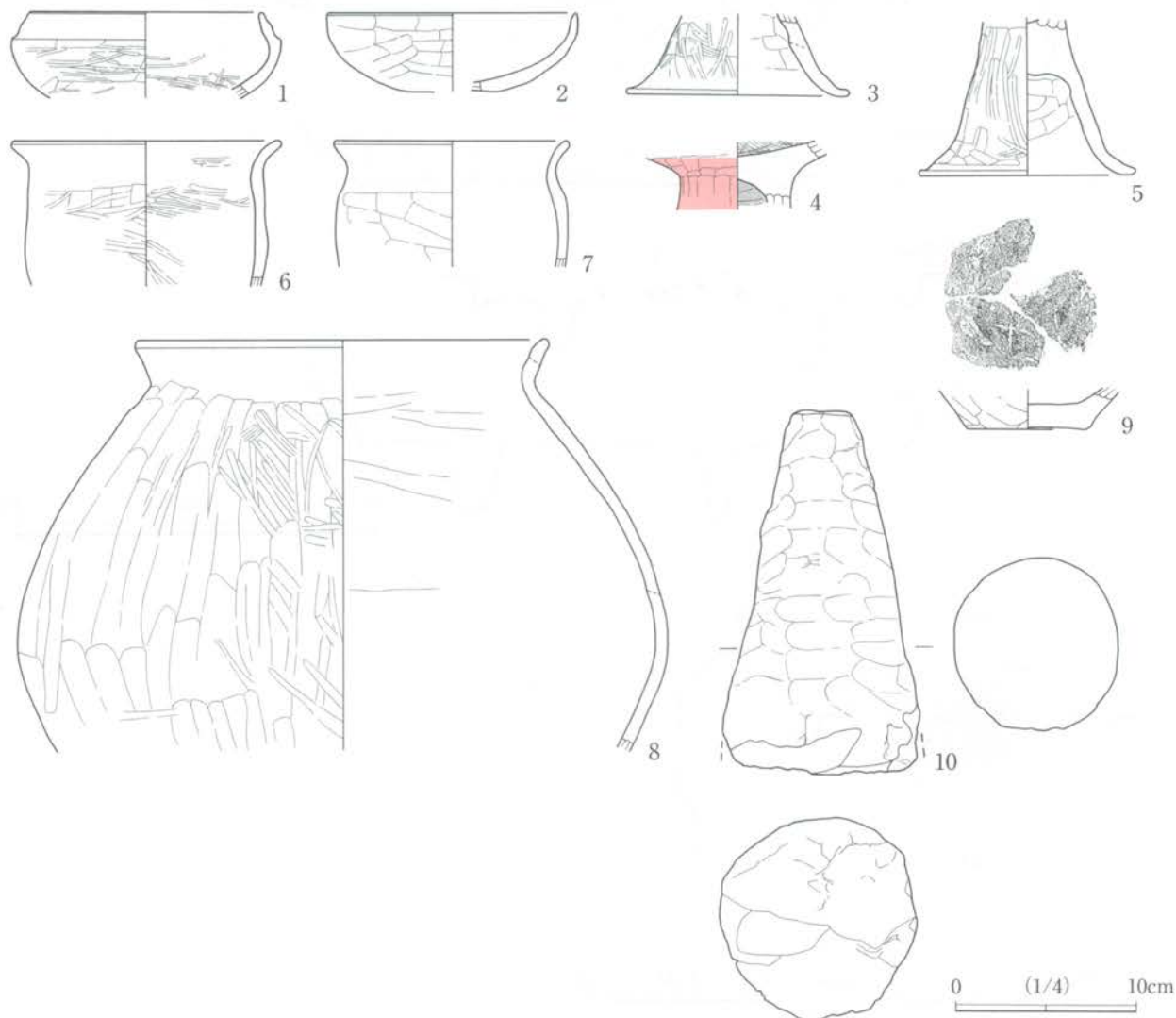
本遺構はN3-00グリッド付近に位置し、東側台地の北側縁辺部、標高約37.4mに立地する。住居北東側のかなりの部分でSI-121号竪穴住居跡と重複し、さらにSD-014号溝状遺構と重複するため、住居の遺存状況は悪い。重複する両遺構とも本住居より新しいものである。形態は方形で、規模は主軸方向で3.7mを測り、主軸方向はN-40°-Wである。検出された壁際には壁溝が巡り、支柱穴は東側のP1・P2が検出できた。直径はいずれも20cm前後で、深さも20cm程度である。

カマドは残されていないが、北西壁の中央のSI-121号竪穴住居跡と重複する付近で焼土及びカマド構築材と思われる砂質土の堆積が認められることから、北西壁に位置していたと考えられる。

図示できる遺物はない。

SI-121号竪穴住居跡 (第232, 233図, 図版51, 138)

本遺構はN3-00グリッド付近に位置し、SI-120号竪穴住居跡の大部分を切って構築されている。また、南西コーナー付近をSD-014号溝状遺構に切られている。形態は方形で、規模は5.1m×5.0mを測



第233図 SI-121号出土遺物実測図

り、主軸方向はN-5°-Wである。壁溝は全周し、住居対角線上に4基の主柱穴が配置されている。P3を除く3基の柱穴は2段に掘り込まれ、そのため形状は楕円形となっている。直径は40cm~60cm、深さは80cm前後であるが、P4だけが55cmと浅い。床面はカマドから南壁へ向けて縦長に硬化面が残されている。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅115cmを測る。カマド内にも攪乱が及んでおり、遺存状況はよくないが、淡黄褐色砂質土で袖部を構築している。煙道部は僅かに張り出すだけである。

1・2は土師器坏である。1は身の模倣で、全体に丸味を帯びている。口縁部は内傾し、ヨコナデで整える。底部は横方向のヘラ削り後粗く磨いている。2は浅い丸底の坏で、口縁部は直立する。体部から底部にかけては横方向のヘラ削りであるが、底部は若干凹凸がある。

3~5は土師器高坏である。3・5は脚部、4は接合部の破片で、短脚である。脚柱部は縦方向のヘラ削り後ナデ調整を行い、裾部にヨコナデを施す。3・5は内面に粘土紐接合痕を明瞭に残し、指頭で押さえている。4は坏部内面を黒色処理し、脚部内面も黒くなっている。

6~9は土師器甕である。6は口縁部直下に縦方向、以下横方向のヘラ削りを施し、その後に横方向に丁寧にナデでヘラ削り痕を消している。7は胴部に横方向のヘラ削りを施す。8は大形の甕で、最大径は胴部中位よりやや下にあると思われる。口縁部は外傾し、ヨコナデで、胴部は縦方向のヘラ削りを施す。9は底部の破片で、底部内面に「×」の線刻がある。

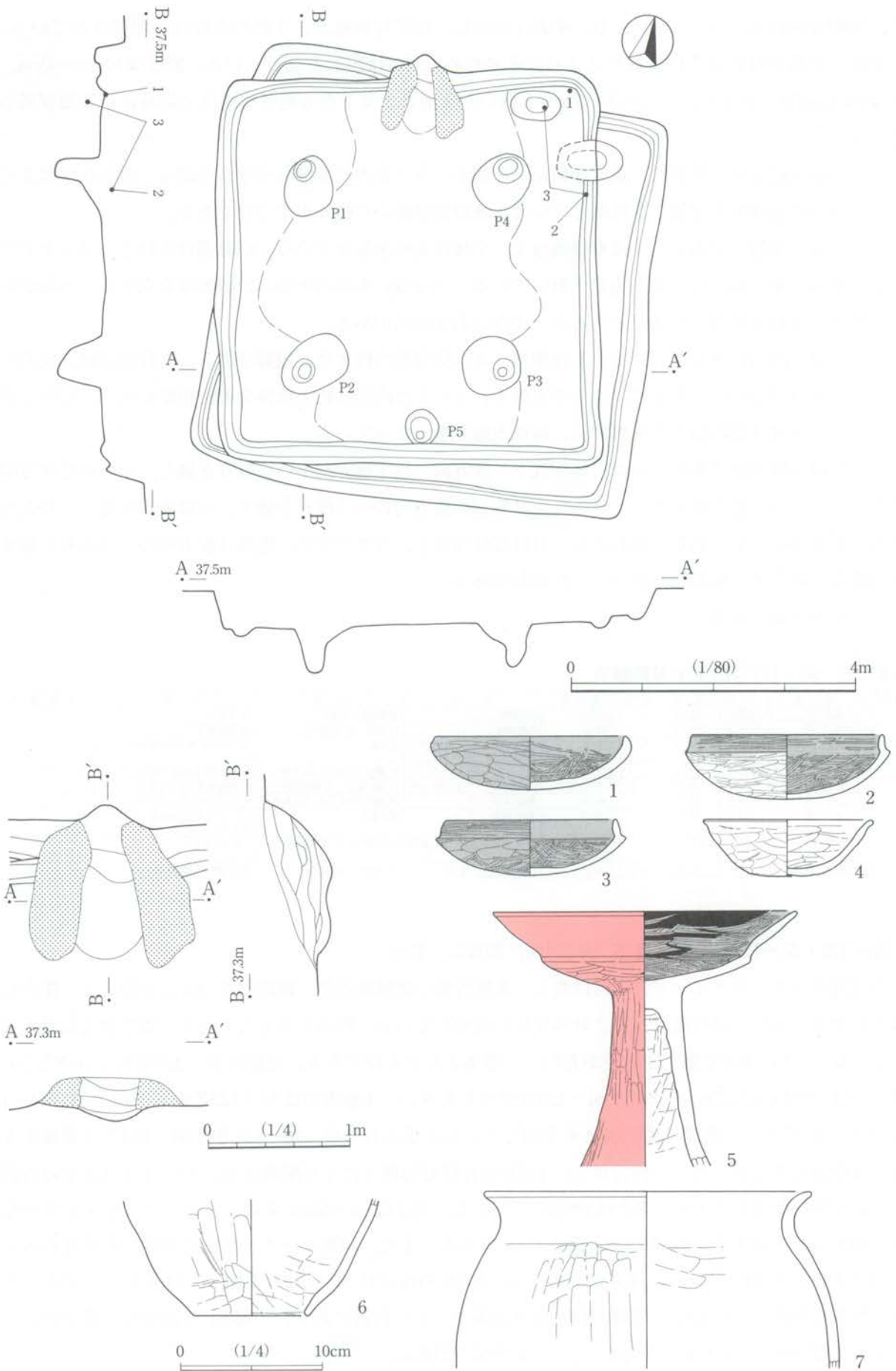
10は土製支脚である。

第116表 SI-121号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(13.0)	[4.7]	-	口縁1/4	白色砂粒	暗赤褐色~黒褐色	内、ミガキ	9
2	土師器 坏	(14.0)	[4.2]	-	口縁1/6	白色砂粒	内、褐色 外、明赤褐色	内、器面剥落	2
3	土師器 高坏	-	[4.4]	(12.4)	脚部1/4	砂粒、小石(2mm)、長石(多)、石英(多)、スコリア	赤褐色	内、粘土紐の巻き上げ痕鮮明	16, 19
4	土師器 高坏	-	[3.8]	-	基部のみ完形	白色砂粒、石英、スコリア	坏、脚部(内)黒色 外、赤褐色	坏部(内)黒色処理 外、赤影	10
5	土師器 高坏	-	[8.6]	12.0	脚部ほぼ完形	白色砂粒、スコリア、長石(多)、石英	内、鈍い褐色 外、暗赤褐色	内、粘着紐巻き上げ痕有り	19
6	土師器 甕	(15.0)	[8.1]	-	口縁1/8	長石、スコリア	内、極暗赤褐色 外、暗赤褐色	内、ヘラナデ後ミガキ 外、ヘラケズリ	15
7	土師器 甕	(13.2)	[7.0]	-	口縁1/6	長石、石英	暗赤褐色	内、ヘラナデ、器面剥落 外、ヘラケズリ	18
8	土師器 甕	(22.8)	[23.8]	-	口縁1/6 胴部1/2	砂粒、黒色粒、長石(多)、石英(多)、スコリア	内、明褐色 外、黄褐色+黒色	火ダスキ痕有り	3.5.6.7.8.12
9	土師器 甕	-	[2.2]	6.6	底部完形	白色砂粒、長石、石英	内、黒褐色 外、暗褐色	底部内面十字線刻有り	1

### SI-122・SI-123号竪穴住居跡 (第234図, 図版51, 138)

本遺構はN2-63グリッド付近に位置し、東側台地の北側縁辺部、標高約37.3mに立地する。僅かに主軸方向を変えるが、ほぼ重なって2軒の住居が重複している。床面を共有しており、建て替えと考えると差し支えない。SI-123号竪穴住居跡が先行して構築されたものである。規模はSI-122号が5.5m×5.3mを測り、SI-123号が5.7m×6.2mとSI-122号がやや大きい。主軸方向はSI-122号がN-10°-W、SI-123号がN-0°である。壁溝は両住居とも全周していたと思われるが、SI-123号はSI-122号と重複する部分では検出できなかった。主柱穴はSI-122号の住居対角線上に4基配置され、P1・P4は住居対角線方向に長い楕円形をしている。P2は100cm×70cmで、深さ62cm~68cmを測る。カマドに対する南壁際中央に梯子ピットがあり、直径50cm、深さ15cmである。また、北東コーナーに近い位置に貯蔵穴があり、70cm×40cmの方形で30cmの深さがある。SI-123号の柱穴はSI-122号と同一とは考えにくい、その他に柱穴は検出していない。貯蔵穴はやはり北東コーナー付近にあり、一部SI-122号の壁溝で切られている。規模は90cm×60cmの略方形で、35cmの深さがある。



第234图 SI-122号·123号实测图



カマドは北東壁中央に位置し、残されているのはSI-122号のカマドである。しかし、SI-123号についても他にカマドの痕跡がみられないことから、SI-122号についても同じ位置に設置されていたと考えられる。最大幅は120cmで、袖部は内側を白色粘土を混入する淡褐色砂質土で、外側を明褐色砂質土で構築している。煙道部は三角形で、壁外へ15cm張り出している。

図示した遺物はすべてSI-122号のものである。

1～4は土師器坏である。1は浅い丸底の坏で、口縁部は僅かに内傾する。口縁部はヨコナデで、底部は周縁部が横方向、中心部は一方向のヘラ削りである。2・3は身の模倣で、口縁部は僅かに内傾する。口縁部はヨコナデで、底部は横方向のヘラ削りを施し、2はさらにヘラ磨きを行う。内面はともに横方向のヘラ磨きである。4は体部が直線的に大きく開く坏で、深さもある。口縁部は僅かに外反し、ヨコナデで、体部から底部にかけて横方向のヘラ削りを施している。底部はあるが平坦ではない。

5は土師器高坏で、脚裾部を欠損する。口縁部は直線的に開き、坏底部との境に段を巡らす。坏底部は横方向のヘラ削りを施すが、その後丁寧にナデられ、ヘラ削り痕はかなり消される。脚部は長脚で、縦方向の幅の狭いヘラ削りを施している。内面も奥まで指頭でナデ上げている。坏部内面は黒色処理され、外面は坏部、脚部とも赤彩される。

6は土師器甌、7は土師器甕で、小片である。口縁部は横ナデで、胴部は縦方向のヘラ削りである。

第117表 SI-122号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	13.6	3.8	丸	3/4	砂粒、長石(多)、石英	暗褐色	全面漆仕上げ、口唇部ほとんど磨滅	7
2	土師器 坏	(13.6)	4.5	丸	1/3	微砂粒、白針、雲母	明褐色～黒色	内外、漆仕上げ、器面なめらか	3.5
3	土師器 坏	(12.4)	3.9	丸	1/2	砂粒、長石、石英(少)	内、暗褐色 外、鈍い褐色	全面、漆仕上げ	5.6
4	土師器 坏	(12.0)	4.0	5.0	体部1/6～底部1/2	白色粒、長石、石英	鈍い褐色、底部黒色	内、ヘラナデ 外、ヘラケズリ	2
5	土師器 高坏	21.4	[18.0]	—	裾部欠他完形	微砂粒、小石(1～3mm)、長石、石英	坏内黒色、脚内鈍い黄色 外、赤褐色	坏内、黒色処理 外、全面赤彩	2.3
6	土師器 甌	—	[8.4]	(8.0)	底辺部1/6	白色粒、石英	鈍い赤褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ後ナデ一部ミガキ	2
7	土師器 甕	(23.0)	[12.7]	—	口縁～胴上部1/20	黒色砂粒、石英、スコリア	橙色～灰褐色	内、器面磨耗さみ	4

### SI-124号竪穴住居跡（第235図、図版52、138）

本遺構はN3-03グリッド付近に位置し、東側台地の北側縁辺部、標高約37.7mに立地する。形態は方形で、規模は3.5m×4.0mを測り、主軸方向はN-16°-Wである。確認面からの深さは35cm～40cmで、カマド部分を除いて壁溝が全周する。柱穴はなく、カマドに対する南壁際に梯子ピットがある。梯子ピットは直径40cm、深さ30cmを測る。床面はカマド前面から南壁へ向けて帯状に硬化面が残っている。

カマドは北壁の中央よりやや東へ寄った位置にあり、最大幅は115cmを測る。袖部は灰白色砂質土で構築され、煙道部の奥まで構築材が残っている。煙道部は弧状に15cm張り出し、急角度で立ち上がっている。なお、カマド内から土師器甕(5)(7)(8)が出土した。

1は須恵器坏蓋である。内面にかえしの名残が僅かにある。天井部は回転ヘラ削りである。2は土師器盤である。口径19.6cmの大振りの製品で、体部は内湾して立ち上がる。体部から底部にかけて横方向のヘラ削りで、粗く横方向のヘラ磨きを加える。内面は丁寧に磨いている。

3・4は土師器坏である。あまり底部の範囲が明確ではないが、ヘラ削りの方向を変えることで底部を意識している。内面はヘラ磨きが施される。

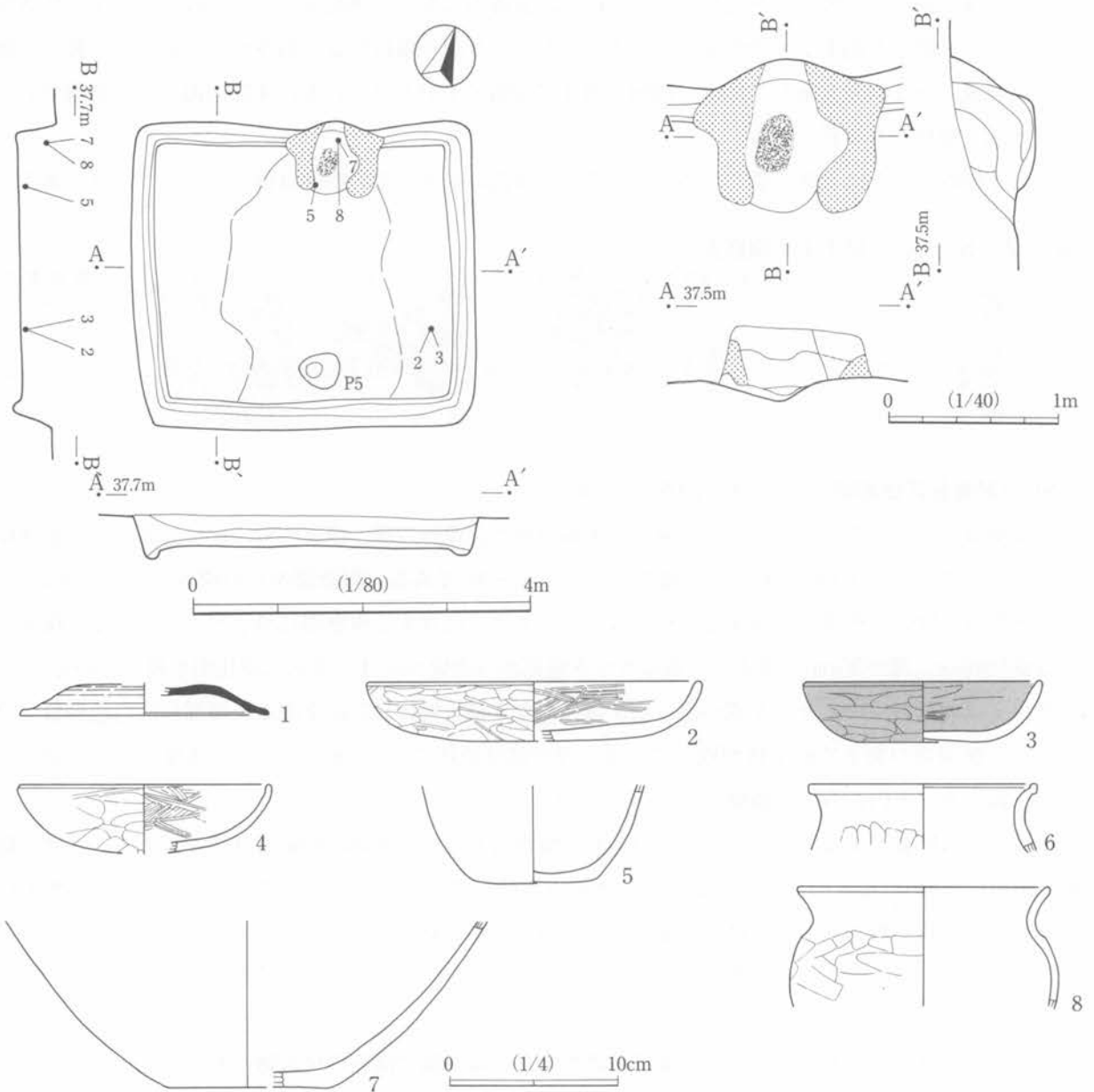
5～8は土師器甕である。5・7は底部の破片で、5は内面に褐色の付着物がある。6・8は口縁部を含む破片で、口唇部は6が受け口状を、8は丸く収める。8の胴部は横方向のヘラ削り後横方向のナデ調整を行い、ヘラ削りは不明瞭である。

第118表 SI-124号出土土器観察表

棟号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 蓋	(14.6)	[1.8]	-	1/6	微砂粒、小石(3mm)、長石、雲母、石英	内、灰白色 外、灰色	小石の混入目立つ 常陸新治産	1
2	土師器 盤	19.6	3.5	14.0	2/3	白色微砂粒、長石(少)、石英(少)	明褐色~暗褐色	内、丁寧なミガキ	2.5
3	土師器 坏	(13.8)	3.5	7.0	1/3	微砂粒、スコリア(少)	明褐色~暗褐色	全面漆仕上げ	2.3.5
4	土師器 坏	(14.6)	[4.0]	丸	1/6	スコリア、石英	暗赤褐色	内、ミガキ 外、ヘラケズリ	1.4
5	土師器 甕	-	[5.7]	7.0	底部完形	白色砂粒、石英(少)	内、黒色炭に黄褐色 外、鈍い褐色	外、摩耗	8
6	土師器 甕	(13.2)	[3.8]	-	口縁の一部	スコリア	暗赤褐色	内外、ナデ	4
7	土師器 甕	-	[10.0]	(9.4)	底部~胴下半部	スコリア	暗赤褐色	器面摩耗	1.7.9
8	土師器 甕	(14.6)	[7.2]	-	1/6	白色砂粒、長石(少)、石英(少)	内、黒褐色 外、黒褐色一部赤褐色		7.9

SI-125号・SI-129号竪穴住居跡 (第236, 237図, 図版52, 138~140)

本遺構はN2-88グリッド付近に位置し、東側台地の北側縁辺部、標高約37.7mに立地する。SI-125号竪穴住居跡とSI-129号住居跡の2軒の住居の大部分がそれぞれ重複し、土層断面及び床面の状況



第235図 SI-124号実測図



から SI-129号が先行する。それぞれの住居南壁は事業範囲外に当たり未調査である。

SI-125号は5.0m×5.3mを測る方形で、主軸方向はN-0°である。確認面からの深さは55cm～60cmで、カマド部分を除いて壁溝が巡っている。主柱穴は住居対角線上に4基配置され、直径は55cm～80cm、深さ40cm～60cmを測る。また、P2とP3の中間に梯子ピットがあり、直径は30cm、深さ15cmであるが、梯子ピットの周囲の直径100cmの範囲がくぼんでいる。床面はカマド前面から梯子ピットにかけて帯状に硬化面が残っている。覆土は全体にローム粒・ロームブロックを多く含み、水平に堆積している。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅105cmを測る。袖部はロームを主体とする基底部分の上に淡黄褐色砂質土で構築し、内側は被熱して赤色化している。煙道部は攪乱を受けるが、大きな張り出しはなく急角度に立ち上がっている。

遺物は両住居とも比較的多く、特にSI-125号のカマド左側から土師器高坏(7)、土師器甕(16)(17)、土師器甕(18)がまとまって出土している。また、住居北西コーナーの壁際で、床面からかなり浮いた状態で、土師器坏が上から(5)(6)(3)(2)の順に重なり、付近から(4)も出土した。

1は須恵器坏である。口唇部を欠損するが、口縁部はかなり内傾し、受部が突き出たようになっている。現存部分にヘラ削りはみられない。

2～6は土師器坏で、すべて完形である。2は平底の坏で、口縁部はヨコナデ、体部から底部にかけて横方向のヘラ削り後ヘラ磨きを施す。内面もヘラ磨きを施し、内外面とも漆仕上げとみられる。3・4・6は丸底の坏で、厚手の仕上がりである。口縁部は直立し、ヨコナデである。体部は横方向のヘラ削りで、3・4は底部に一方方向のヘラ削りを施す。6は内外面とも入念に磨き、漆仕上げとみられる。5は身の模倣で、口径も小さく、口縁部も短い。口縁部はヨコナデで、底部は横方向のヘラ削り後横方向のヘラ削りを施す。内面は入念に磨き、光沢がある。

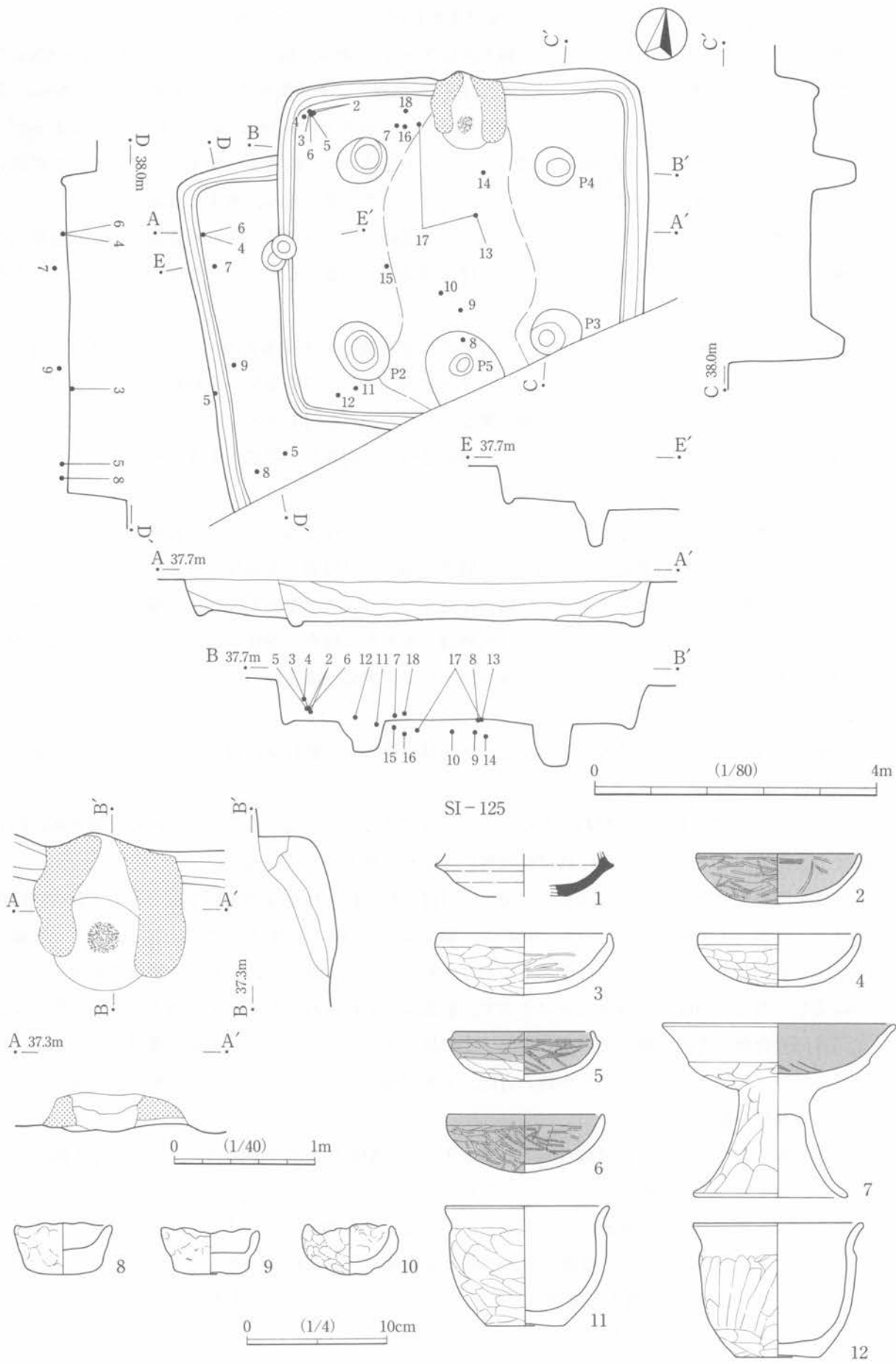
7は土師器高坏である。坏部は僅かに外反し、坏底部に横方向、脚柱部に縦方向のヘラ削りを施す。坏部内面は黒色処理される。

8～10はミニチュアの土器で手捏ねである。8・9は平底、10は丸底である。いずれも底部外面に細いナデ調整を僅かに施している。なお、10は焼成前はかなりヒビが入っている。

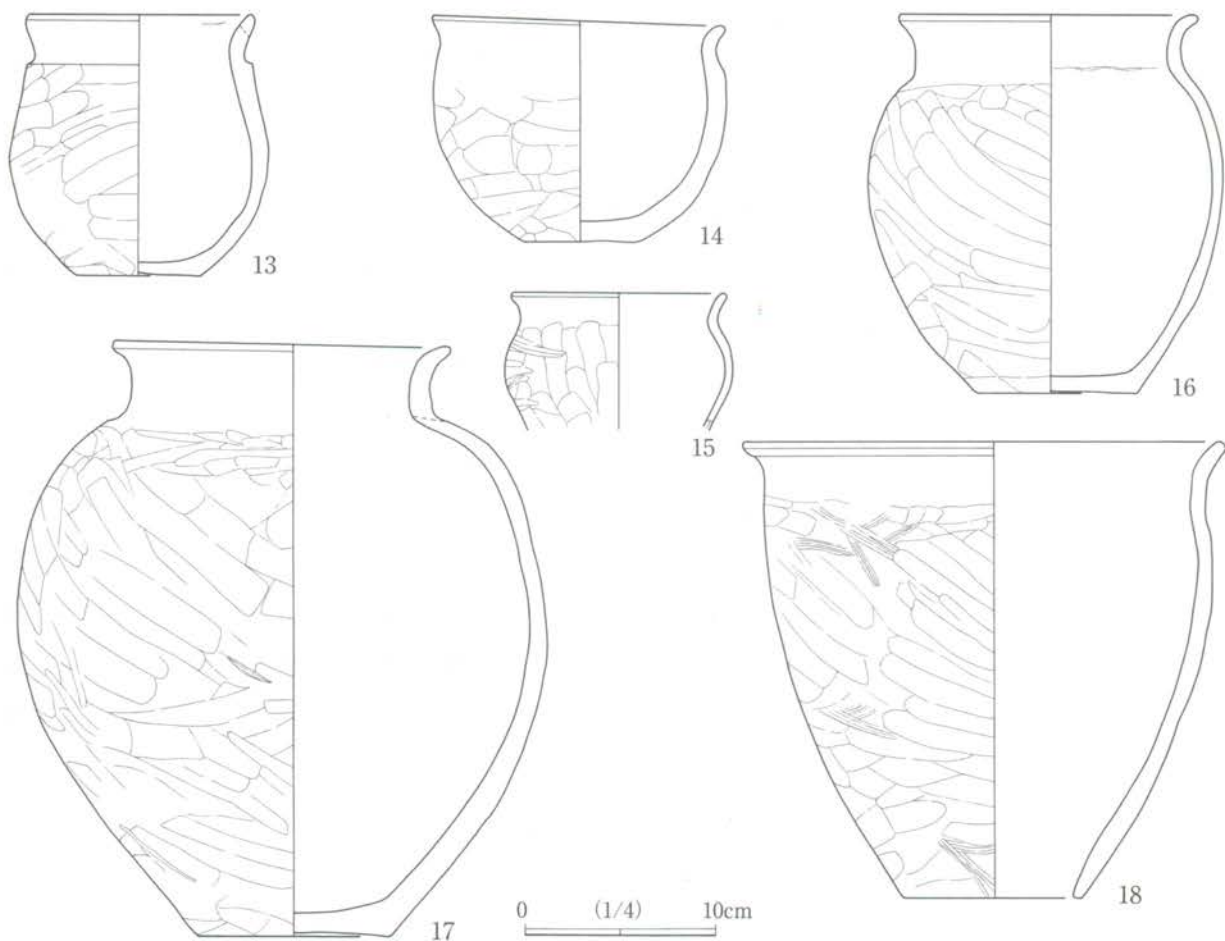
11～17は土師器甕である。11～15は小形の甕で、14は完形、11・13もほぼ完形である。いずれも、口縁部は外反し、ヨコナデで整え、端部を丸く収める。胴部は11・13・14が横方向のヘラ削り、12・15は縦方向のヘラ削りを施している。13・14は胴部下半から底部にかけて被熱し、13はカマド構築材が固着している。16は完形である。口縁部は外反しヨコナデで、胴部は上半が斜め方向、下半が横方向のヘラ削りを施す。底部外面も全面一方方向に削っている。胴部下半が黒くすすけている。17は大形の甕で完形である。口縁部は外反しヨコナデで、胴部は上半が斜め方向、下半が横方向のヘラ削りを施す。胴部は全体的にヘラ削り後にナデ調整を施している。

18は土師器甕で完形である。口縁部は外反しヨコナデで、胴部は上半が斜め方向、下半が横方向のヘラ削りを施し、孔周辺の内面も横方向のヘラ削りを施している。胴部はヘラ削り後にナデ調整を施している。内面は横方向に丁寧なヘラナデを施し、底部から7cmのところを境に、その上下で色調が異なっている。

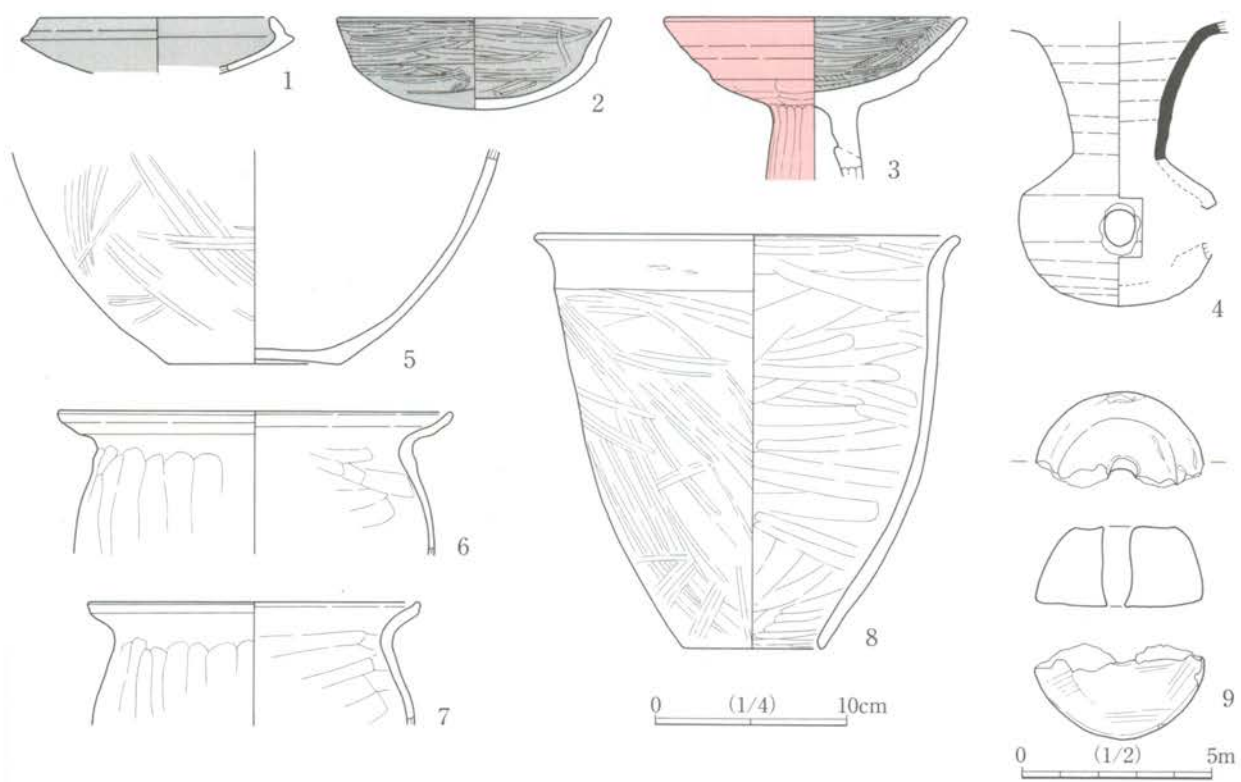
SI-129号は大部分をSI-125号に破壊され、西壁及び北壁の一部が残るだけである。残されている壁際には壁溝が巡り、SI-125号の西壁と重複してピットがある。このピットは直径30cmのピットが2基重複しており、25cm・55cmの深さである。



第236图 SI-125号·129号实测图



SI-129



第237图 SI-125号·129号出土遺物実測図

1・2は土師器坏である。1は身の模倣で、底部は扁平である。底部は横方向のヘラ削りで、口縁部外面から内面全体にかけて丁寧にヘラ磨きを施している。漆仕上げとみられる。2は蓋の模倣で、口縁部に段が巡る。内外面とも実に丁寧に磨いており、底部のヘラ削りはほとんど観察できない。内外面とも黒色で、漆仕上げとみられる。

3は土師器高坏である。口縁部はやや内湾し、坏底部は横方向のヘラ削り後ナデ調整である。脚柱部は縦方向のヘラ削り後ナデている。外面は全体を赤彩し、坏部内面は黒色処理している。

4は須恵器甗で、口縁部を欠損する。頸は長く、口縁部が急激に開いている。孔はやや上向きに開けられ、孔の下側外面の器面が破損している。底部は丸く、回転ヘラ削りを施している。ロクロ回転方向は右である。なお、薄く自然釉がかかる。

5～7は土師器甗である。5は底部の破片で、胴部はナデ調整を施しヘラ削りをすべて消している。6・7は口縁部破片で、6の口縁部は大きく開く。口唇部はともに受け口状で、胴部は縦方向のヘラ削りである。

8は土師器甗である。口縁部は僅かに外反し、ヨコナデである。胴部は口縁部下に4cmほどの幅で横方向のヘラ削りを施し、その下は胴部中位を縦方向、胴部下位を横方向のヘラ削りである。また、ヘラ削り後に胴部上半で横方向、下半で縦方向のヘラ磨きを施している。内面は上半が横方向、下半が縦方向のヘラ削り後全面横方向のヘラ磨きを施す。

9は土製の紡錘具で、表面はヘラ削り後磨かれている。

第119表 SI-125号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	—	[3.0]	(6.0)	1/4	石英	緑灰色		4
2	土師器 甗	11.4	3.5	6.4	完形	微砂粒、スコリア(多)	鈍い黄褐色一部黒褐色	内外、漆仕上げ、器面なめらか	34.35
3	土師器 坏	12.4	4.4	丸	完形	砂粒、小石(1~3mm)、長石(少)、スコリア	明赤褐色	外、若干摩耗	33
4	土師器 坏	11.7	3.8	丸	完形	砂粒、黒色粒、石英、スコリア	内、明赤褐色 外、明褐色	内外、若干摩耗	20
5	土師器 坏	10.0	3.5	丸	完形	微砂粒、長石(少)、スコリア	内、鈍い褐色~黒褐色 外、鈍い褐色~暗灰黄色	内外、漆仕上げ	31
6	土師器 坏	11.0	4.7	丸	完形	微砂粒、スコリア(少々)	内、黒褐色 外、暗褐色+黄灰色	内外、漆仕上げ 全面ミガキ痕鮮明にあり	32
7	土師器 高坏	16.4	12.4	10.8	坏部完形 脚部1/2	砂粒、長石(少)、石英(少)	内、黒色 外、暗赤褐色	内、坏部黒色処理	3.4.18
8	土師器 手捏	6.8	3.7	5.0	口縁一部他完形	粗砂粒、長石、スコリア	鈍い赤褐色~黒褐色	口縁部摩滅、内外、炭素吸着	27
9	土師器 手捏	7.0	3.5	5.6	ほぼ完形	粗砂粒、長石(多)、石英	鈍い褐色	底部木葉痕	28
10	土師器 手捏	6.2	3.6	丸	ほぼ完形	砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色	底部ほとんど無調整	23
11	土師器 甗	11.2	8.7	5.6	ほぼ完形	砂粒、黒色粒、長石、石英、スコリア	鈍い黄褐色~褐色	正円でない	12
12	土師器 甗	12.0	9.7	6.0	1/2	砂粒、小石、長石(少)、石英(少)	内、鈍い黄褐色 外、明赤褐色		13
13	土師器 甗	11.6	13.7	6.4	3/4	白色砂粒、長石、石英	内、鈍い黄褐色 口縁、灰褐色 外、鈍い赤褐色、灰黄褐色	二次的に火を受け外面の剥落著しい	1.25.40
14	土師器 甗	15.2	11.8	6.4	完形	白色砂粒、黒色粒、長石、石英、小石	内、鈍い褐色~黒褐色 外、明赤褐色	内、黒斑有り、頸部に帯状にスス付着	7
15	土師器 甗	(11.2)	[8.7]	—	1/3	砂粒、長石、石英、スコリア	内、鈍い黄褐色 外、黄褐色+黒色	薄手なつくり 外、黒斑	24
16	土師器 甗	15.6	19.7	8.4	完形	砂粒、黒色粒、長石、石英	明赤褐色 外、胴下部黒褐色	外、胴部下半分位スス付着有り	30
17	土師器 甗	17.8	27.7	10.0	完形	砂粒、小石(1~2mm)、長石、石英、黒色粒	内、明赤褐色 外、黒色+明赤色~鈍い褐色	内、全体的に剥落有り	25.29
18	土師器 甗	25.2	23.8	9.2	完形	白色砂粒、小石、長石、石英(少)	内、明褐色 外、黄褐色+黒色	正円でない口径	19

第120表 SI-129号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(12.4)	[2.8]	—	口縁1/3	微砂粒、白針、スコリア(多)	黄灰色	内外、漆仕上げ	2
2	土師器 坏	14.2	4.7	丸	2/3	微砂粒	暗黄灰色~黒褐色	全面漆仕上げ	2
3	土師器 高坏	(15.8)	[8.4]	—	1/4	砂粒、長石、石英、スコリア	内、黒色 外、鈍い黄褐色~明赤褐色	内、黒色処理 外、赤彩	6
4	須恵器 ハソウ	—	[14.8]	丸	口縁欠他完形	微砂粒、小石、長石、石英、黒色粒	灰色	孔径(2.6×1.9) 自然灰が外面に薄くかかる	3
5	土師器 甗	—	[11.2]	9.0	底部完形 胴下部1/2	砂粒、黒色粒、長石(多)、石英(多)	内、鈍い黄褐色 外、鈍い黄褐色+黒色	外、ヘラケズリ後丁寧にミガキ	1.10
6	土師器 甗	(20.6)	[7.5]	—	口縁1/4	スコリア、石英	褐灰色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	3
7	土師器 甗	(17.4)	[6.5]	—	口縁1/4	スコリア、石英	灰褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	4
8	土師器 甗	22.3	21.8	7.2	2/3	白色砂粒、スコリア、長石、石英	明赤褐色	内外、ミガキ	1.9

SI-126号竪穴住居跡（第238図，図版53，139，140）

本遺構はO2-92グリッド付近に位置し，東側台地の北側縁辺部，標高約37.5mに立地する。東壁でSI-127号竪穴住居跡と重複し，土層断面及び出土遺物の様相からSI-127号に先行することが明らかである。また，住居南半分は事業範囲外に当たり未調査である。形態は方形で，規模は東西5.7mを測り，主軸方向はN-7°-Wである。壁はやや開いて立ち上がり，確認面からの深さは40cm～60cmである。北壁際及び西壁際には壁溝が巡り，SI-127号と重複する部分では残されていないが，本来掘り込まれていたものと思われる。柱穴はカマド側に2基検出でき，直径45cm，深さ60cm～70cmである。また，北東コーナーに貯蔵穴があり，一部をSI-127号の壁溝で切られている。規模は80cm×78cmの略方形である。覆土は全体にソフトローム・ハードロームを多く含んでいる。

カマドは北壁中央に位置し，最大幅105cmを測る。袖部は煙道部の奥まで残り，煙道部は三角形で壁外へ30cm張り出している。カマド内からは土師器坏(6)，土師器高坏(8)，土師器甕(10)が出土したが，土師器甕(10)は横倒しの状態で出土しており，さらにその内部に土師器高坏(8)が口縁部を下に向けて入っている。土師器高坏の口縁部径は，甕の口縁部径及び甕の破損部より大きく，甕が破損した後に，内部に入ったものと考えられる。

1～6は土師器坏である。1・5・6は体部から丸味をもって口縁部にいたるもので，口縁部は直立する。体部は横方向のヘラ削りで，1・5はさらに粗くヘラ磨きを施す。内面はいずれも横方向のヘラ磨きである。2は口縁部と底部の境が稜となり，口縁部が内傾する。口縁部はヨコナデで，外面は横方向のヘラ削り後粗くヘラ磨きを施し，内面は黒色処理される。3・4も口縁部と底部の境が稜となるが，口縁部は外反する。底部外面は横方向のヘラ削りであるが，3は底部中央に直交する2方向のヘラ削りを十文字に施している。

7・8は土師器高坏である。7は小形の製品で，あるいは坏かもしれない。口縁部は横ナデで，坏底部は横方向のヘラ削りを施している。8は口縁部と坏底部との境に段が付くもので，口縁部はヨコナデ，坏底部は横方向のヘラ削り後粗くナデている。内面は入念なヘラ磨きが施されている。

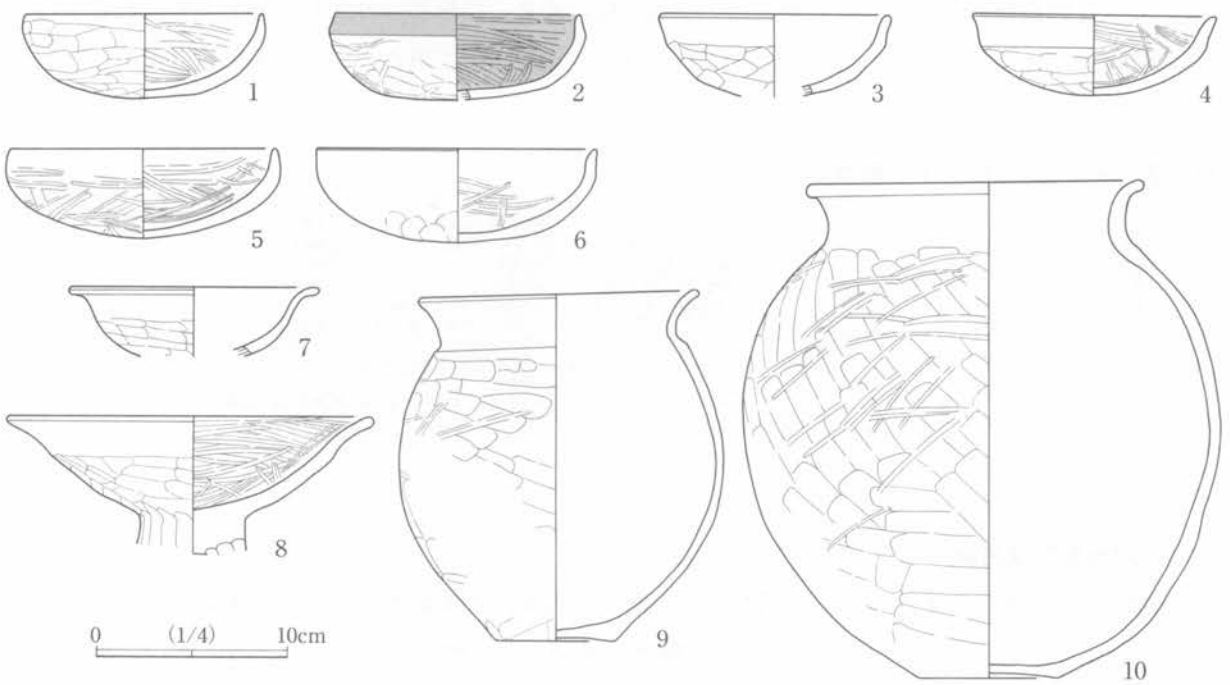
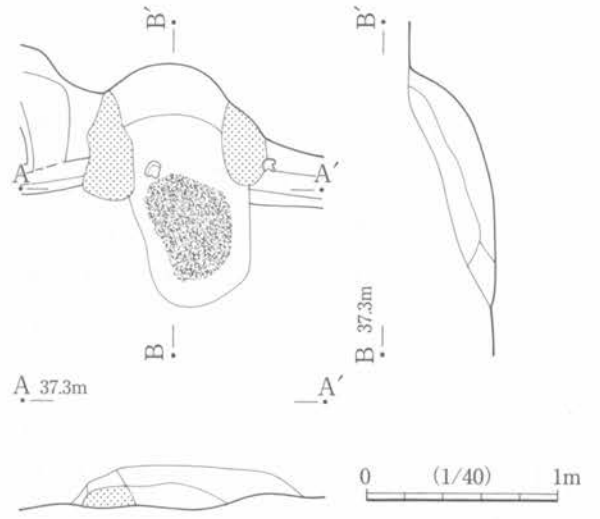
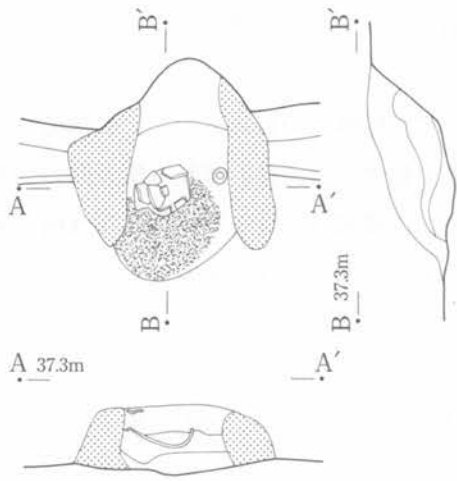
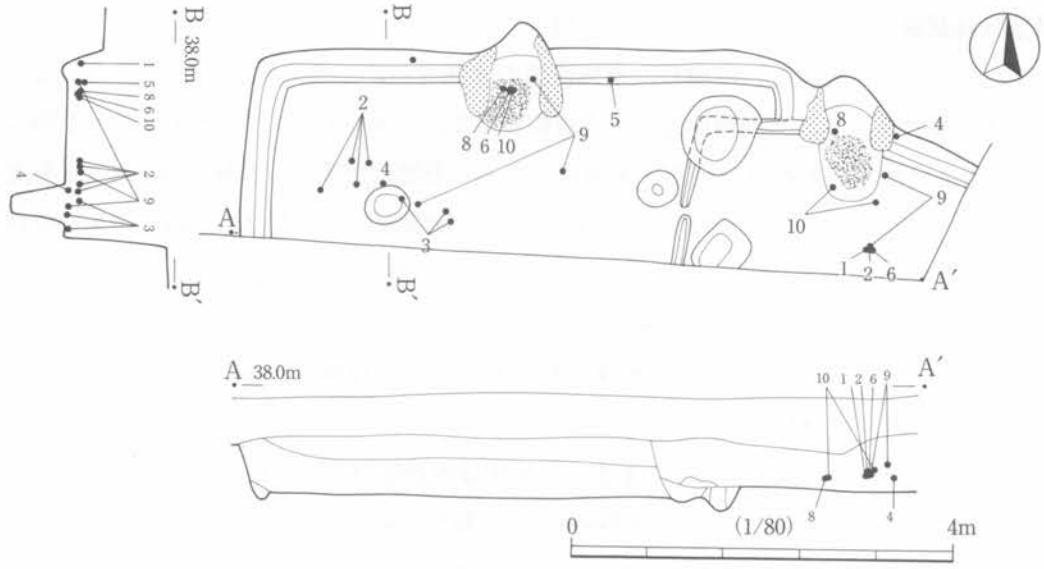
9・10は土師器甕である。ともに最大径が胴部中位にあり，口縁部は外反し端部を丸く収めるものである。胴部は9が上部で横方向，以下縦方向のヘラ削り，10が上半が斜め方向，下半が横方向のヘラ削りである。

第121表 SI-126号出土土器観察表

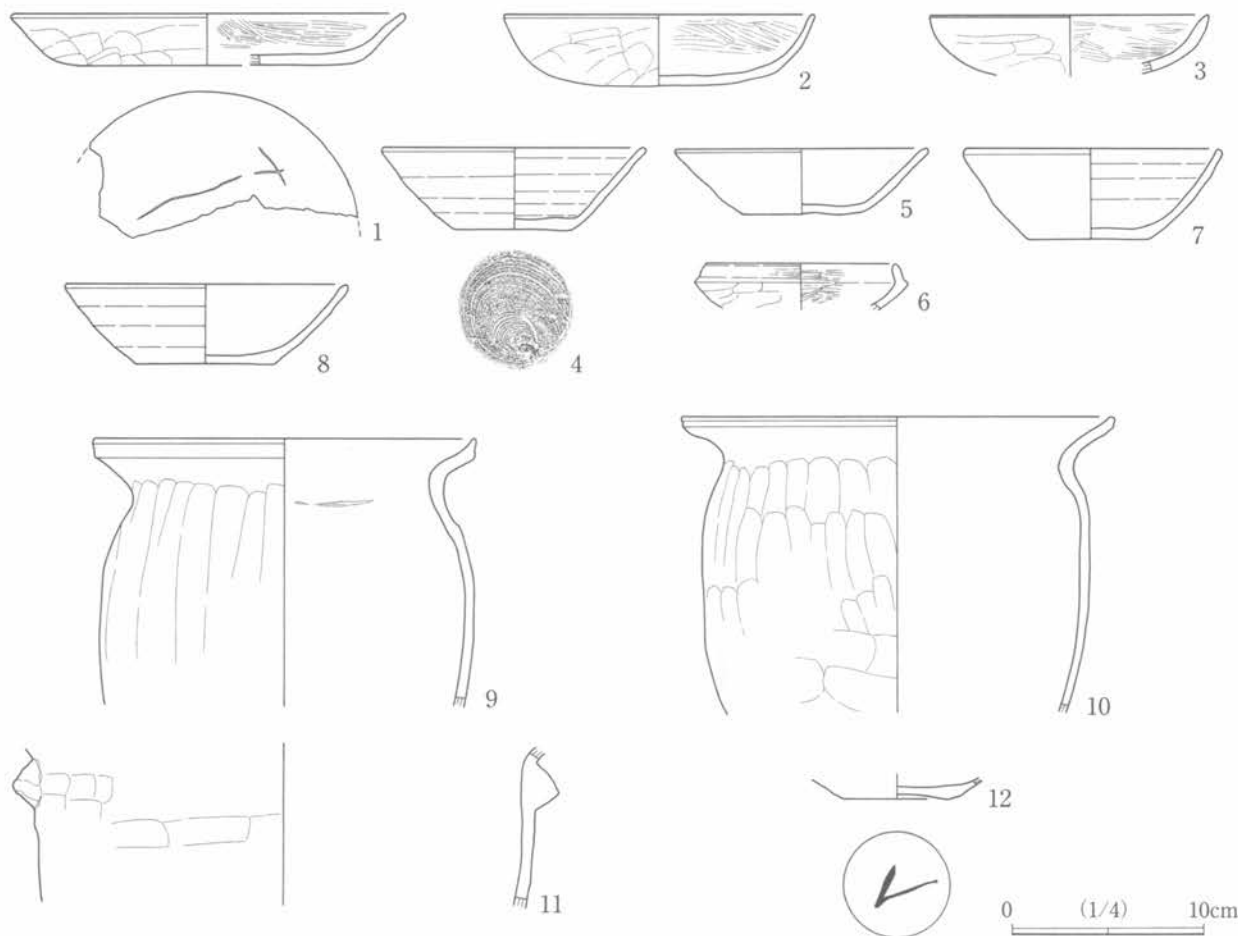
挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	12.5	4.4	丸	完形	砂粒、小石、長石、石英	内、明褐色 外、明褐色+黒色	外、黒斑	13
2	土師器 坏	12.8	4.6	丸	1/2	白色砂粒、石英、白針	内、黒色 外、褐色	内、黒色処理	1.2.3.4.5
3	土師器 坏	12.1	[4.4]	—	4/5	砂粒、小石、長石、石英、スコリア	明赤褐色	内、剥落有り 外、ヘラケズリ痕明瞭	1.7.10.11
4	土師器 坏	(12.7)	3.2	丸	1/4	砂粒、小石、長石、石英	鈍い褐色	小石の混入が目立つ	1.6
5	土師器 坏	(13.9)	4.7	丸	1/2	白色砂粒、白針、長石、スコリア	内、明褐色 外、鈍い褐色+黒色	内外、ランダムにミガキ	17
6	土師器 坏	14.7	4.9	丸	3/4	白色砂粒、長石、石英、スコリア	内、赤褐色+黒褐色 外、赤褐色	内、炭素吸着	20
7	土師器 高坏	(13.0)	[3.7]	—	坏部1/3	白色砂粒、黒色粒、長石、石英	明赤色～暗褐色	内、丁寧なナデ	1
8	土師器 高坏	19.2	[7.1]	—	坏部完形	白色砂粒、黒色粒、長石、石英	内、鈍い赤褐色～黒褐色 外、鈍い黄褐色	内、丁寧なミガキ	19
9	土師器 甕	14.8	18.6	6.2	2/3	砂粒、長石、石英、スコリア	内、鈍い褐色 外、明赤褐色～暗褐色	内、剥落 外、頸部強く横ナデが施されている	1.8.15.21.22
10	土師器 甕	17.6	26.3	7.1	4/5	白色砂粒、黒色粒、長石(多)、石英(多)	内、明褐色+黒色 外、褐色～暗褐色	内、砂粒の痕刷毛目状に強く残る	20.22

SI-127号竪穴住居跡（第238，239図，図版53，140）

本遺構はSI-126号の東壁を切って構築され，南及び東側は事業範囲外に当たり未調査である。形態は方形で，規模は明らかではないが，カマドの構築位置からみて軸長4m以下の住居であった可能性が高



第238图 SI-126号·127号实测图



第239図 SI-127号出土遺物実測図

第122表 SI-127号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 盤	(20.7)	2.6	(16.0)	1/4	微砂粒、長石(少) スコリア(少)	橙色	内、丁寧にミガキ(光沢有り)	SI127-1, 4 SI128-5
2	土師器 坏	(16.3)	3.6	(10.0)	1/4	砂粒、黒色粒、長石(少)	橙色	内、丁寧にミガキ	4
3	土師器 坏	(14.6)	[3.1]	-	1/4	砂粒、長石(少)、黒色粒	明赤褐色	内、若干剥落	1
4	ロクロ土師器 坏	(13.7)	4.3	6.1	底部完形 体部 1/3	砂粒、スコリア、長石、石英	内、鈍い黄褐色 外、赤褐色	薄手なつくり、底部、回転系切り	1
5	ロクロ土師器 坏	(13.2)	3.5	6.0	底部完形 体部 1/3	砂粒、長石(少)	鈍い赤褐色-黒褐色	薄手なつくり、外、炭素吸着	1.10
6	土師器 坏	(9.5)	[2.2]	-	口縁の一部	スコリア	黄褐色	内、ミガキ	4
7	ロクロ土師器 坏	13.5	4.8	6.3	ほぼ完形	砂粒、小石(1-7mm)、長石(少)、スコリア	内、鈍い黄色-暗灰黄色 外、鈍い黄色-黒褐色		1
8	ロクロ土師器 坏	(14.7)	4.2	7.2	底部完形 体部 1/4	砂粒、長石、石英、スコリア	内、鈍い赤褐色 外、鈍い褐色	底部回転系切り痕一部に残る	8
9	土師器 壺	19.9	[14.0]	-	1/4	白色砂粒、長石、石英	内、暗赤褐色 外、鈍い褐色-暗褐色	頸部若干波状で内外、輪積み痕有り	1.2.4
10	土師器 壺	22.6	[15.5]	-	1/4	砂粒、長石、石英、スコリア	橙色		1.3.5
11	土師器 瓶	-	[8.8]	-	-	白色粒	明赤褐色	耳2ヶ所あり	10
12	ロクロ土師器 坏	-	[1.2]	6.5	底部ほぼ完形	砂粒、黒色粒、長石、石英	鈍い赤褐色	底部ヘラ描きあり	10

い。床面はSI-126号より僅かに低く、床面に厚さ5cmほどのハードローンを主体とした貼床が施されている。なお、西壁際にピットが1基あり、おそらく本住居に伴うものと考えられる。ピットの覆土は中心に直径17cmの黒色土が垂直に入っており、柱痕跡と考えられる。

カマドは北壁に位置し、遺存状況は悪い。最大幅は95cmを測り、壁溝から煙道部にかけて僅かに袖部が残されている。煙道部は半円形で、壁外へ40cm張り出している。

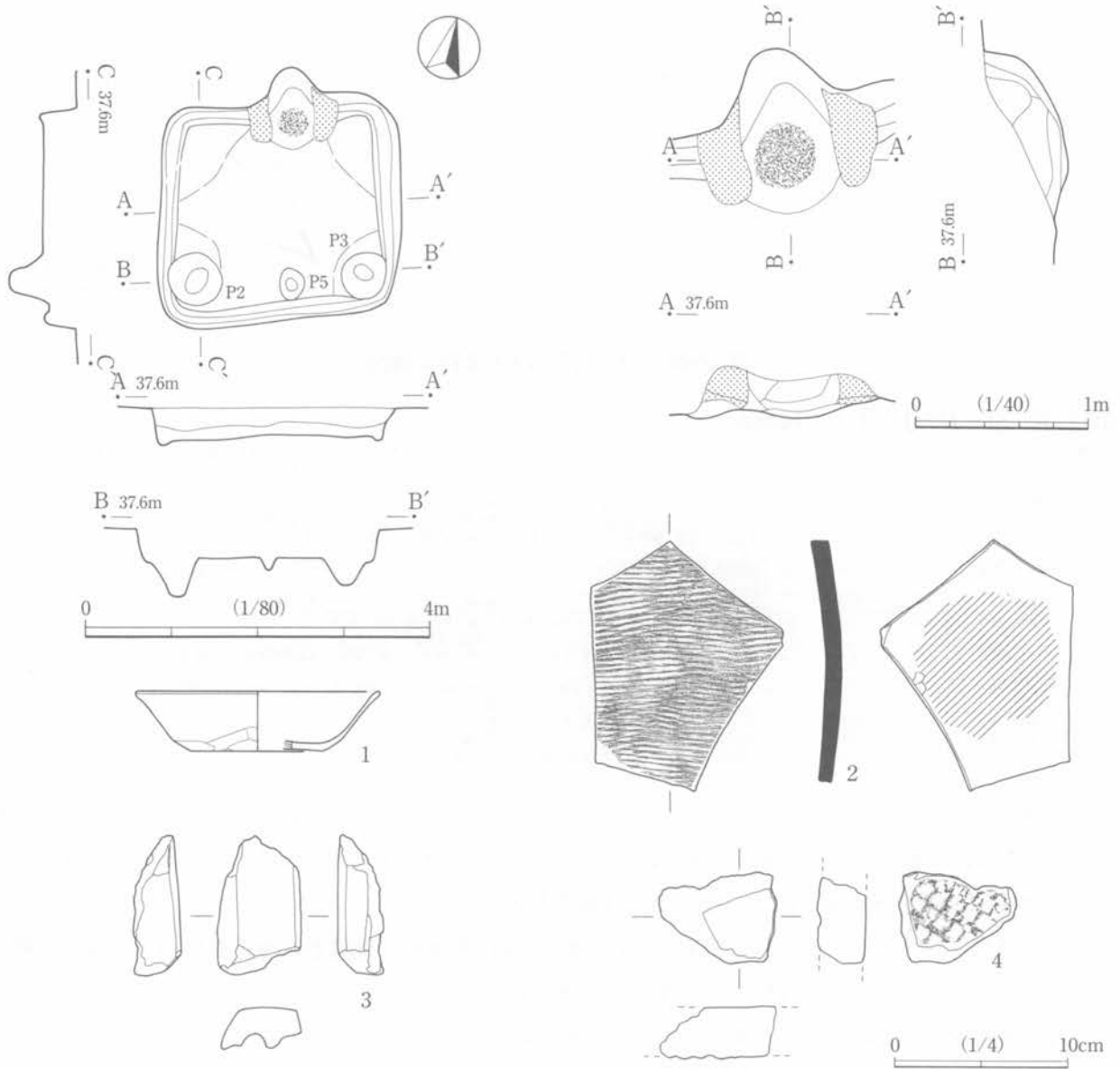
1は土師器盤で、平底である。体部・底部とも横方向のヘラ削り後、丁寧に磨いており、内面はより入念に磨いている。底部外面に線刻がある。

2・3・6は土師器坏である。2は丸底のようであるが、ヘラ削りの方向を変えて、明確に底部を区別している。内外面とも丁寧に磨いている。3は浅い丸底の坏で、体部・底部とも横方向のヘラ削りを施す。

内外面とも丁寧に磨いている。6は身の模倣で、口径9.5cmの小振りの坏である。口縁部は短く内傾し、底部外面を除いて丁寧なヘラ磨きを施している。

4・5・7・8・12はロクロ土師器坏である。いずれも体部は直線的に立ち上がる。4は体部下端にヘラ削りはなく、底部も回転糸切り無調整、5も体部下端にヘラ削りはないが、底部は全面回転ヘラ削り、7・8は体部下端に手持ちヘラ削り、底部全面一方向ヘラ削りで、8は僅かに回転糸切り痕が観察できる。12は底部破片で、回転糸切り無調整である。底部外面に墨痕のようなものがある。墨書ではなく、墨様のものでひっかいたようにみられる。

9・10は土師器甕である。口縁部は受け口状を呈し、端部は沈線状にくぼむ。胴部は縦方向のヘラ削りである。



第240図 SI-130号実測図



SI-130号竪穴住居跡 (第240図, 図版54, 141)

本遺構はM3-28グリッド付近に位置し、東側台地の中央部、標高約37.5mに立地する。形態は方形で、規模は2.6m×2.8mを測り、主軸方向はN-3°-Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは30cm~40cmを測る。壁際にはカマド部分を除いて壁溝が巡り、カマドの反対側の南東コーナー及び南西コーナーに接して2基の柱穴がある。直径60cm・50cmで、深さは40cm・35cmである。また、南壁際中央には梯子ピットがあり、直径20cm、深さ16cmを測る。

カマドは北壁中央に位置し、最大幅102cm、袖部は壁から40cm延びている。袖部はロームを主体とする基底の上に、淡灰褐色砂質土で構築される。煙道部はU字形で、壁外へ35cm張り出している。

1はロクロ土師器坏である。体部下端は手持ちヘラ削りで、底部も全面一方向に削っている。2は須恵器甕の胴部破片で、破片の内面中央が摩滅しており、転用硯とも思われる。

3は方形の柱状を呈し、孔が縦に貫通する。SI-093号の33と接合する。4は平瓦の破片である。凸面には格子状叩きが施されている。

第123表 SI-130号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(14.2)	3.5	(7.7)	1/5	スコリア	黒褐色	内外、ヨコナデ	1
2	須恵器 転用硯	-	-	-	胴部片	微砂粒、長石	灰色	内、転用硯として使用	1

第124表 竪穴住居跡観察表※計測値 ( )内の数値は推定値 [ ]は現存値

遺構No.	規模 (主軸×副軸 m) (上は上端間、下 壁直下間)	主軸方位	面積 (上:床面積 m <sup>2</sup> ) (下:柱穴内面積 m <sup>2</sup> )	壁高 (cm)	柱穴深さ (cm)	出入口 (下:深さ cm)	貯蔵穴 (上:上端長径×短径 ×深さ cm) (下:底面長径×短径 cm)	壁溝	カマド (上:位置) (下:煙道側壁傾斜角度)	特記遺物・備考	時代区分
SI001	2.8 × 2.6 2.6 × 2.4	N-87°-W	7.04 -	42~61	P1 30	無	無	無	西壁中央 80°		9世紀前葉
SI002	2.8 × 2.9 2.7 × 2.7	N-7°-W	7.65	30~60	無	無	有	有 北西	北壁中央 56°	多量の炭化材有	9世紀前葉
SI003	1.8 × 2.3 1.6 × 2.0	N-17°-E	3.3	29~40	無	無	無	無	北壁やや東寄り 50°		8世紀後葉
SI004	欠番									SK-089とし て報告	
SI005	(6.5) × (3.7) -	N-53°-W?	?	10~22	無	無	無	無	無		7世紀中~後
SI006	欠番									SK-090とし て報告	
SI007	4.4 × 4.4 4.2 × 4.3	N-20°-W	18.03 5.91	50~80	P1 46 P2 34 P3 28 P4 33	無	無	有 ほぼ全周	北壁中央 67°	灰有	8世紀後葉
SI008	2.4 × 2.7 2.0 × 2.5	N-25°-W	5.24 -	42~70	無	無	無	有 全周	北東隅 58°		8世紀中葉
SI009	4.7 × 4.7 4.5 × 4.4	N-54°-W	20.20 4.76	51~74	P1 62 P2 65 P3 52 P4 51	有 25	有	有 全周	北西壁中央 62°	焼土 床溝3条 有	6世紀後葉
SI010	欠番										
SI011	欠番										7世紀中~後

SI012	欠番												
SI013	欠番												
SI014	6.4 × 6.5 6.1 × 6.2	N-32°-W	37.26 11.01	30~80	P1 65 P2 97 P3 81 P4 65	有 53	無	有 ほぼ全周	北西壁中央やや西寄り 40°	焼土 炭化材 有	7世紀前葉		
SI015	5.6 × 5.6 5.2 × 5.1	N-44°-W	26.47 9.14	42~79	P1 73 P2 66 P3 77 P4 76	無	無	有 全周	北西壁中央 60°	焼土 旧壁溝 旧柱穴 旧出入口 硬化面 有	7前? 9中?		
SI016	5.0 × 5.0 4.9 × 4.8	N-75°-E	23.02 4.69	40~42	P1 47 P2 53 P3 48 P4 49	無	無	有 南西	無	焼土 炭化材 有	7世紀中~後		
SI017	6.6 × 6.5 6.4 × 6.1	N-18°-E	39.09 8.83	54~58	P1 64 P2 67 P3 69 P4 40	無	無	有 ほぼ全周	北壁中央 60°	焼土 硬化面 有	6後~7初		
SI018	3.9 × 4.6 3.6 × 4.3	N-9°-W	15.02 4.07	48~54	P1 45 P2 44 P3 53 P4 37	無	無	全周	北壁中央 40°	硬化面 有	8第2四半期		
SI019	3.9 × 3.6 3.5 × 3.4	N-6°-W	11.82 3.87	40~48	P1 53 P2 53 P3 53 P4 44	無	無	全周	北壁中央 56°		8第2四半期		
SI020	3.7 × 3.4 3.3 × 3.2	N-2°-W	9.80 2.43	34~38	P1 23 P2 20 P3 17 P4 23	無	無	有 北 欠	北壁中央 45°	攪乱 有	6後		
SI021	[3.7] × 5.5 [3.6] × 5.3	N-14°-W	(29.70) -	27~38	P4 115	無	有 80×62×55	ほぼ全周 ?	北壁中央 34°	焼土 攪乱 有	7前		
SI022	[4.1] × 5.4 [4.0] × 5.3	N-19°-W	(29.59) -	48~50	P1 40 P4 40	無	無	ほぼ全周 ?	北壁中央 68°	床溝3条 有	7中		
SI023	4.9 × 5.3 4.7 × 5.1	N-22°-W	23.64 6.19	75~78	P1 49 P2 45 P3 45 P4 57	有 30	無	全周	北西壁中央 38°	床溝3条 有	8②		
SI024	4.9 × 4.6 4.5 × 4.2	N-9°-W	19.39 6.22	46~61	P1 70 P2 61 P3 53 P4 50	有 22	無	全周	北壁中央 62°	旧柱穴 旧壁溝 有	6末~7初		
SI025	4.3 × 4.4 4.0 × 4.2	N-8°-W	17.15 5.04	60~73	P1 51 P2 51 P3 43 P4 45	有 28	無	有 北東隅~南西	北壁中央 40°		8中		
SI026	3.8 × 3.8 3.3 × 3.5	N-14°-E	11.09 -	37~58	P1 48 36 P2 30 48	有 26	無	全周	北壁中央 40°	硬化面 有	8後		
SI027	5.5 × 5.0 5.0 × 4.8	N-10°-W	23.13 5.08	67~82	P1 41 P2 62 P3 61 P4 50	有 35	無	有 北東~南東 欠	北壁やや東寄り 52°	焼土 有	8初		
SI028	4.1 × 3.8 3.9 × 3.7	N-15°-W	14.19 4.24	23~67	P1 65 P2 54 P3 38 P4 60	無	有 80×60×25	有 北東~南西 欠	北壁やや東寄り	硬化面 攪乱 有	8後		
SI029	3.9 × 4.1 3.7 × 3.9	N-5°-W	14.38 4.6	31~64	P1 48 P2 58 P3 65 P4 50	有 88	無	全周	北壁中央やや東寄り 34°	灰 硬化面 攪乱 有	8前		
SI030	5.6 × 6.0 5.5 × 5.7	N-40°-W	31.13 -	0~42	P1 - P2 - P3 8 P4 24	無	無	無	無		?		
SI031	4.2 × 4.8 4.1 × 4.5	N-2°-E	18.15 5.04	50~58	P1 51 P2 36 P3 48 P4 42	無	無	有 北東~南東	北壁中央 60°		8中		
SI032	3.1 × 3.3 2.8 × 2.9	N-85°-E	8.20 -	54~62	無	無	無	ほぼ全周	東壁中央 43°		8中		
SI033	4.7 × 4.2 4.5 × 4.1	N-36°-E	17.83 -	27	P1 23 P2 18 P3 25 P4 -	無	無	無	無	硬化面 有	?		

SI034	4.6 × 4.7 4.2 × 4.5	N-20°-W	18.53 5.86	57~65	P1 55 P2 52 P3 46 P4 50	有 24	有 120×80×33	全周	北壁中央 47°	壁柱穴 貝プロ ック有	9前
SI035	3.4 × 3.4 3.2 × 3.2	N-5°-W	9.89	21~27	無	無	無	ほぼ全周	北壁中央 40°		9後
SI036	4.2 × 4.6 4.0 × 4.2	N-10°-W	16.70 5.07	61~68	P1 34 P2 42 P3 38 P4 46	有 35	無	全周	北壁やや東寄り 57°	焼土 炭化材 有	9前
SI037	4.6 × 4.5 4.2 × 4.2	N-13°-W	18.31 4.76	35~40	P1 62 P2 58 P3 50 P4 70	有 35	無	ほぼ全周	北壁中央 38°		8中
SI038	4.8 × 4.6 4.4 × 4.3	N-23°-W	19.14 4.43	46~51	P1 63 P2 68 P3 61 P4 58	有 21	無	全周	北西壁中央 75°		?
SI039	5.8 × 5.7 5.4 × 5.3	N-20°-E	28.46 9.48	49~57	P1 65 P2 66 P3 51 P4 50	有 22	有 100×60×52	全周	北西壁中央 45°		6後
SI040	5.0 × 5.9 4.9 × 5.5	N-0°-W	25.20 7.91	70~78	P1 42 P2 40 P3 42 P4 84	無	無	全周	北壁中央 55°	焼土 炭化材 有	8後
SI041	[2.5] × (5.7) [2.4] × 5.4	N-15°-W	(29.81) (8.41)	52~61	P1 67 P2 - P3 - P4 75	無	無	ほぼ全周	北壁中央 40°		7前
SI042	4.2 × 4.3 3.8 × 3.9	N-20°-W	13.71 4.96	46~77	P1 59 P2 61 P3 64 P4 42	有 15	無	全周	北壁中央 53°		8中
SI043	5.6 × 3.8 5.3 × 3.3	N-57°-E	17.82	48~89	P1 34 P2 - P3 - P4 45	無	無	全周	北隅 57°	貝層 有	8前
SI044	3.5 × 3.5 3.2 × 3.2	N-7°-W	9.84 2.49	33~62	P1 30 P2 33 P3 33 P4 25	無	無	全周	北壁中央 78°	灰 有	8後
SI045	3.9 × 4.1 3.8 × 3.8	N-44°-E	13.86 -	36~59	無	無	有 90×60×40	全周	北西壁中央 66°	焼土 炭化材 硬化面 有	7前
SI046	3.0 × 3.0 2.6 × 2.7	N-0°	6.19 -	74	無	無	無	全周	北東隅 67°	硬化面 有	8中
SI047	7.0 × 7.0 6.4 × 6.6	N-15°-E	43.18 10.13	47~87	P1 88 P2 96 P3 89 P4 100	有 37	有 80×65×39	全周	北壁中央 63°		6後
SI048	4.8 × 5.2 4.6 × 4.8	N-26°-E	22.23 6.73	33~62	P1 82 P2 77 P3 77 P4 88	有 32	無	有 北東 欠	北東壁中央 38°	焼土 有	7中
SI049	4.1 × 4.5 3.8 × 4.2	N-20°-E	15.04 4.12	27~45	P1 39 P2 28 P3 25 P4 27	無	無	無	北東壁中央 50°		8後
SI050	3.2 × 3.2 3.0 × 3.0	N-12°-W	9.03 -	26~43	P1 40 P2 40 P3 - P4 -	無	無	ほぼ全周	北壁中央 28°		9前
SI051	4.2 × 4.2 3.9 × 3.8	N-11°-W	14.9 -	40~59	無	無	無	全周	北壁中央 55°	床溝1条 有	7中
SI052	4.1 × 4.3 3.7 × 4.2	N-9°-E	15.44 3.8	43~57	P1 53 P2 59 P3 64 P4 57	有 16	無	全周	北壁中央 48°	硬化面 有	8中
SI053	2.7 × 3.2 2.5 × 3.1	N-19°-W	7.60 -	15~31	無	無	無	有 西南 欠	北壁中央 65°		8~9
SI054	7.4 × 7.4 7.1 × 7.2	N-10°-W	50.27 17.54	26~71	P1 72 P2 98 P3 91 P4 91	有 36	有 105×85×47	全周	北壁中央 53°	硬化面 有	6末~7初
SI055	[2.6] × 3.6 [2.5] × 3.4	N-10°-W	(11.56) -	25~57	無	無	無	有 東南 欠	北壁中央 63°	焼土 硬化面 炭化材 有	7後
SI056	[2.0] × 2.3 1.8 × 2.1	N-20°-W	(4.41) -	35~46	無	無	無	ほぼ全周	北壁中央やや東寄り 55°		9前

SI057	4.4 × 4.5 4.2 × 4.3	N-12°-E	17.84 4.05	38~44	P1 51 P2 74 P3 59 P4 61	有 43	無	全周	北壁中央やや東寄り 38°		8後
SI058	5.3 × 5.3 5.0 × 5.1	N-10°-E	25.27 8.62	52~79	P1 68 P2 56 P3 62 P4 63	有 25	無	全周	北壁中央 52°		7後
SI059	3.4 × 3.8 3.3 × 3.6	N-12°-E	11.75 3.12	20~38	P1 45 P2 44 P3 22 P4 25	無	無	有 南 欠	北壁中央やや東寄り 57°	焼土 多量の炭 硬化面 有	9前
SI060	5.1 × 5.1 4.9 × 4.9	N-10°-E	23.92 7.17	21~57	P1 51 P2 74 P3 48 P4 70	有 33	無	全周	北壁中央 35°		7後
SI061	5.5 × 5.3 5.2 × 5.1	N-25°-E	27.12 9.75	53~73	P1 56 P2 58 P3 80 P4 73	有 27	無	全周	無		8中~後
SI062	(3.9) × (3.9) [3.2] × [3.2]	N-20°-E	13.39 -	53~56	無	無	無	ほぼ全周	無	炭化材 有	8末~9初
SI063	(3.4) × (3.5) 3.1 × 3.3	N-2°-W	10.89	1~15	無	無	無	有 北東	無	焼土 硬化面 有	8末~9前
SI064	7.1 × 7.1 7.0 × 6.8	N-15°-E	47.32 10.40	30~60	P1 84 P2 121 P3 78 P4 84	有 33	無	全周	北壁中央 50°		6後~7初
SI065	6.4 × 6.4 6.3 × 6.1	N-61°-W	(37.56) (13.39)	13~35	P1 66 P2 76 P3 66 P4 -	有 59	無	ほぼ全周	無		6後~7初
SI066	[3.2] × 5.8 [3.1] × 5.7	N-6°-W	(32.49) (9.99)	54~62	P1 - P2 64 P3 68 P4 -	有 27	無	ほぼ全周	無	壁外及び出入口 壁際にピット有	7中
SI067	5.6 × 5.5 5.3 × 5.3	N-3°-E	29.30 4.7	11~41	P1 84 P2 87 P3 86 P4 83	無	有 73×56×39	全周	北壁中央 63°	焼土 有	6後~7初
SI068	4.7 × 4.6 4.5 × 4.4	N-63°-W	20.48 4.11	31~39	P1 43 P2 41 P3 42 P4 51	有 27	無	全周	北壁中央 40°		7中~後
SI069	4.4 × 4.4 4.1 × 4.1	N-20°-W	17.14 3.6	23~60	P1 79 P2 97 P3 89 P4 89	無	有 66×72×29	ほぼ全周	北壁中央 60°		6後~7初
SI070	5.3 × 5.4 5.1 × 5.2	N-8°-W	26.54 5.82	45~60	P1 65 P2 72 P3 72 P4 41	有 31	無	全周	北壁中央やや東寄り 62°	硬化面 有	8初
SI071	3.2 × 3.0 3.1 × 2.9	N-18°-W	(8.28) -	39~53	無	無	無	ほぼ全周	北壁中央 60°	壁際ピット有	?
SI072	4.7 × 4.4 4.4 × 4.2	N-77°-E	(19.17) 4.7	32~46	P1 50 P2 67 P3 60 P4 64	無	無	有 北~北西欠	東壁中央 58°	壁柱 8 有	8③
SI073	4.9 × 5.0 4.6 × 5.0	N-10°-W	(23.55)	22~29	無	無	無	ほぼ全周	北壁中央 40°	壁柱 3 有	6末~7初
SI074	8.2 × 8.4 8.0 × 8.1	N-48°-W	66.56 25.49	8~41	P1 109 P2 124 P3 135 P4 107	有 58	有 100×80×40 100×72×57	有 東 欠	北西壁中央 24°	灰 有 床溝2条	6末~7初
SI075A	2.4 × 2.3 2.2 × 2.1	N-10°-W	(4.84)	12~61	無	無	無	有 西 欠	東壁中央 75°	焼土 灰 有	?
SI075B	[0.6] × 2.0 [0.6] × 1.8	N-10°-W	(3.61)		無	無	無	無	東壁中央 55°		?
SI076	5.4 × 5.4 5.2 × 5.3	N-42°-W	(27.11) (8.31)	39~56	P1 102 P2 - P3 104 P4 104	無	有 110×73×67	ほぼ全周	北西壁中央 55°	焼土 有	6後
SI077	4.5 × 4.5 4.3 × 4.3	N-6°-E	18.55 5.61	29~59	P1 60 P2 41 P3 29 P4 50	有 19	無	有 南西隅 欠	北壁中央 49°	硬化面 有	8前?

SI078	4.5 × [2.7] 4.2 × [2.6]	N-10°-E	(18.32) (7.02)	31-46	P1 79 P2 77 P3 55 P4 41	有 29	無	ほぼ全周	北壁中央 59°	硬化面 有	?
SI079	3.1 × 3.2 2.9 × 3.0	N-20°-E	8.81	21-60	無	有 23	有 63×58×38	全周	北壁中央 60°	硬化面 有	9前
SI080	7.0 × 7.2 6.8 × 7.0	N-3°-W	46.23 13.93	34-63	P1 107 P2 101 P3 95 P4 113	有 56	有 94×62×78	全周	北壁中央やや東寄り 60°	小ビット 有	6後
SI081	6.0 × 5.9 5.9 × 5.8	N-11°-W	(34.37) 7.92	13-38	P1 70 P2 68 P3 58 P4 59	有 28	有 110×66×52 92×66×39	ほぼ全周	北壁中央 50°		6末-7前
SI082	5.1 × 5.2 4.7 × 5.0	N-11°-W	24.25 7.43	11-70	P1 56 P2 48 P3 52 P4 50	有 25	無	全周	北壁中央 55°		7中
SI083	7.8 × 7.8 7.5 × 7.6	N-6°-W	(55.63) 19.07	13-63	P1 95 P2 103 P3 59 P4 111	有 54	無	ほぼ全周	北壁中央 45°	焼土 硬化面 有	6末-7前
SI084	5.8 × 5.5 5.5 × 5.3	N-18°-W	(30.97) 7.81	1-46	P1 59 P2 46 P3 49	有 25	無	ほぼ全周	北壁中央 30°		7中
SI085	3.3 × 3.3 3.1 × 3.2	N-3°-W	(10.20) -	18-29	無	無	無	ほぼ全周	北壁中央 45°	硬化面 攪乱 有	8前
SI086	(2.9) × 2.8 [2.5] × 2.4	N-11°-E	(6.53) -	17-58	無	無	無	有 西欠	北壁中央 60°	焼土 有	8中
SI087	[2.1] × 3.3 [1.9] × 3.1	N-2°-W	(9.34) -	34-59	無	無	無	ほぼ全周	北壁中央 58°		8②
SI088	[1.0] × [1.6] [0.8] × [1.5]	(N-10°-W)	(3.03)	45-60	無	無	無	ほぼ全周	無		?
SI089	3.2 × 3.0 2.9 × 2.8	N-95°-W	8.23 -	22-78	P1 22 P2 - P3 - P4 -	無	無	全周	西壁中央やや北寄り 60°	硬化面 有	7④
SI090	3.9 × 4.3 3.6 × 4.0	N-13°-E	14.56 -	24-77	P1 - P2 - P3 48 P4 -	無	有 42×38×28	ほぼ全周	北壁ほぼ中央 45°	焼土 多量の炭 化材硬化面 有	9前
SI091	4.7 × 4.9 4.4 × 4.8	N-10°-E	21.22 5.78	37-58	P1 35 P2 38 P3 46 P4 41	有 36	無	全周	北壁ほぼ中央 44°	硬化面 有	?
SI092	3.8 × 3.8 3.6 × 3.5	N-10°-E	12.33 3.37	18-49	P1 24 P2 45 P3 42 P4 44	有 19	無	全周	北壁中央 50°	壁柱穴 1 硬 化面有	8②
SI093	4.2 × 4.4 3.8 × 4.1	N-10°-E	15.27 3.91	14-71	P1 36 P2 35 P3 41 P4 36	無	無	有 北東欠 北西欠 南西欠	北壁中央 35°	壁柱穴 4 有	9
SI094	[2.4] × 4.1 [1.8] × 4.0	N-3°-E	(16.00) -	52-63	P1 - P2 - P3 - P4 -	無	無	ほぼ全周	北壁中央やや東寄り 55°		9中
SI095	3.2 × 3.4 2.9 × 3.3	N-3°-W	9.43 -	16-60	P1 31? P2 20?	有 21	無	全周	北壁中央 -		7末
SI096	3.4 × 3.4 3.2 × 3.2	N-12°-E	10.86 -	32-49	P1 - P2 - P3 - P4 -	有 50	無	ほぼ全周	北壁中央 59°	炭化材 硬化面 有	6後
SI097	5.1 × 5.4 4.6 × 5.0	N-18°-E	22.69 5.6	31-93	P1 53 P2 48 P3 56 P4 64	無	無	全周	北壁中央 58°	壁柱穴 1 有	7中
SI098	4.1 × 4.1 3.6 × 3.9	N-5°-E	14.45 3.91	34-70	P1 41 P2 60 P3 53 P4 59	有 13	有 70×60×12	全周	北壁中央 38°		9前-中
SI099	3.1 × 3.1 2.9 × 2.8	N-15°-E	8.06 3.63	7-32	P1 37 P2 42 P3 43 P4 35	無	無	全周	北壁中央 52°		

SI100	3.2 × 3.8 3.1 × 3.6	N-2°-E	10.71 -	14-68	P1 - P2 - P3 - P4 -	有 21	無	全周	北壁ほぼ中央 58°	硬化面 有	7中-後?
SI101	3.4 × 3.5 3.3 × 3.3	N-15°-E	10.90 3.20	10-51	P1 48 P2 37 P3 34 P4 17	有 41	無	有 南 欠	北壁中央やや東寄り 70° 東壁中央 60°	柱穴 1 ?	7中
SI102	3.3 × 3.6 3.0 × 3.3	N-7°-W	9.93 -	3-51	P1 - P2 - P3 - P4 -	無	無	全周	北壁中央やや西より 30°		8中
SI103	2.4 × 3.0 2.2 × 2.8	N-47°-E	6.00 -	4-23	P1 - P2 - P3 - P4 -	無	無	無	北東壁中央東寄り 65°	硬化面 有	7後?
SI104	4.5 × 4.5 4.3 × 4.4	N-2°-W	19.23 5.80	12-46	P1 46 P2 39 P3 43 P4 27	無	無	有 南 欠	北壁中央やや東寄り 60°	壁柱穴 2 硬 化面有	7後?
SI105	3.6 × 3.3 3.3 × 3.0	N-1°-W	9.52 -	62-76	P1 - P2 - P3 - P4 -	有	無	全周	北壁ほぼ中央 27°		8②
SI106	5.5 × 5.7 5.4 × 5.6	N-9°-W	29.78 11.84	1-10	P1 58 P2 81 P3 56 P4 79	有 26	有 78×53×40	有 西南-北東 欠	無	床溝 2条 出入口近く柱穴 1有	?
SI107	欠番				P1 - P2 - P3 - P4 -						
SI108	欠番				P1 - P2 - P3 - P4 -						
SI109	4.1 × [1.9] 3.9 × [1.8]	N-74°-E	(15.60) -	6-28	P1 - P2 - P3 - P4 -	有 52	無	無	無	硬化面 有	7?
SI110	[3.7]×5.2 [3.2]×4.9	N-0°	(24.01) -	34-45	P1 55 P2 62 P3 - P4 56	無	無	ほぼ全周	北壁中央 45°	壁柱穴 3 西南-北東	8中
SI111	4.8 × 4.7 4.6 × 4.5	N-9°-W	20.89 4.8	38-49	P1 62 P2 73 P3 59 P4 65	有 20	無	全周	北壁中央 84°	硬化面 有	6末-7初か
SI112	3.2 × 3.5 2.9 × 3.3	N-10°-W	8.89 -	19-68	P1 - P2 - P3 - P4 -	有 20	無	全周	北壁中央 53°	硬化面 有	8③
SI113	4.0 × 4.3 3.7 × 4.0	N-4°-W	14.61 4.8	57-69	P1 43 P2 47 P3 55 P4 58	有 25	無	有 北東 欠	北壁中央 40°	ビット 1 攪乱 有	8前-中
SI114	3.4 × [2.8] 3.2 × [2.6]	N-8°-W	(10.50) -	12-21	P1 - P2 - P3 - P4 -	無	無	ほぼ全周	無	攪乱 有	?
SI115	3.4 × [1.5] 3.1 × [1.4]	N-40°-W	(9.86) -	13-15	P1 - P2 - P3 - P4 -	無	無	ほぼ全周	無		?
SI116新	6.2 × 6.5 5.9 × 6.3	N-12°-E	37.95 14.31	18-40	P1 92 P2 93 P3 90 P4 100	有 59	有 70×55×32	全周	北壁中央 47°	P1 P2 近くに ビット有 硬化面 有	6後
SI116旧	4.8 × 5.1 4.6 × 4.9	N-19°-E	22.89 7.93	0-8	P1 75 P2 67 P3 75 P4 76	無	無	ほぼ全周	無	新柱穴 4 出入口 1 有	6後
SI117	5.7 × 4.9 5.5 × 4.8	N-16°-W	27.27 -	11-25	P1 61 P2 - P3 53 P4 76	無	無	有 西南欠	北壁中央 59°		7中
SI118	6.6 × 6.6 6.4 × 6.3	N-21°-W	39.85 15.50	17-50	P1 79 P2 75 P3 78 P4 82	有 38	無	有 北東-東 欠	北壁中央 45°	硬化面 有	6後
SI119	3.3 × 3.9 3.2 × 3.8	N-5°-W	12.14 -	14-47	P1 - P2 - P3 - P4 -	無	有 87×63×33	有 南-北西 欠	無	硬化面 有	8後-9初
SI120	(3.7)×(3.7) (3.3)×(3.3)	N-40°-W	(13.69) -	29-37	P1 17 P2 - P3 - P4 -	無	無	ほぼ全周	無		

SI121	5.1 × 5.0 5.0 × 4.8	N-5°-W	24.69 8.08	21-63	P1 78 P2 85 P3 75 P4 54	無	無	全周	北壁中央 53°	硬化面 有	6中～後
SI122	5.5 × 5.3 5.3 × 5.2	N-10°-W	27.82 8.28	35-61	P1 62 P2 68 P3 66 P4 64	有 15	有 70×42×31	全周	北壁中央 50°	硬化面 有	6後
SI123	5.7 × 6.2 5.4 × 5.9	N-0°	33.63 -	30-49	P1 - P2 - P3 - P4 -	無	有 90×57×35	全周	無		
SI124	3.5 × 4.0 3.3 × 3.8	N-16°-W	12.30 -	35-43	P1 - P2 - P3 - P4 -	有 30	無	全周	北壁中央やや東寄り 57°	硬化面 有	8初
SI125	5.0 × 5.3 4.8 × 5.1	N-0°	(24.20) 6.98	54-63	P1 42 P2 46 P3 44 P4 59	有 16	無	ほぼ全周	北壁中央 85°	壁際ビット 硬 化面有	7中
SI126	[2.3]×5.7 [2.0]×5.6	N-7°-W	(30.25) (8.41)	37-59	P1 56 P2 - P3 - P4 73	無	有 80×78×-	ほぼ全周	北壁中央 50°		6末～7初
SI127	[1.7]×[3.0] [1.4]×[2.9]	N-7°-E			P1 - P2 - P3 - P4 -	無	有 60×50×-	ほぼ全周	北壁中央 54°		8初? 9中?
SI128	4.3 × 5.1 4.2 × 4.9	N-14°-W	20.60 4.80	43-49	P1 56 P2 52 P3 48 P4 48	有 33	無	有 北東 欠	北壁中央 45°	硬化面 有	8前か
SI129	[1.5]×[4.6] [1.4]×[4.5]	N-10°-W°		44-47	P1 - P2 - P3 - P4 -	無	無	ほぼ全周?	無		6末～7初
SI130	2.6 × 2.8 2.4 × 2.7	N-3°-W	6.42 -	33-40	P1 - P2 39 P3 34 P4 -	有 16	無	全周	北壁ほぼ中央 60°		9後

## 2 掘立柱建物跡

大山遺跡では21棟の掘立柱建物跡が検出された。面積的にも広いこともあるが、圧倒的に東側台地に多く、西側台地では2棟が検出されただけである。

### SB-001号掘立柱建物跡 (第241図, 図版56, 141)

D8-00グリットに付近に位置し、西側台地中央部、標高約37.0mに立地する。梁行3間(5.68～5.88m)×桁行4間(7.91～7.94m)の側柱構造の建物である。14本の柱穴のうち、9本の柱穴に柱痕を確認した。柱穴の掘方は円形で、直径0.93m～1.53m、深さ0.64m～0.92mを測る。柱痕はおよそ直径0.13m～0.30mほどである。桁行主軸方位はN-89°-Eである。

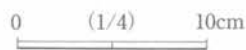
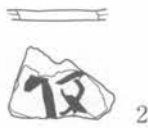
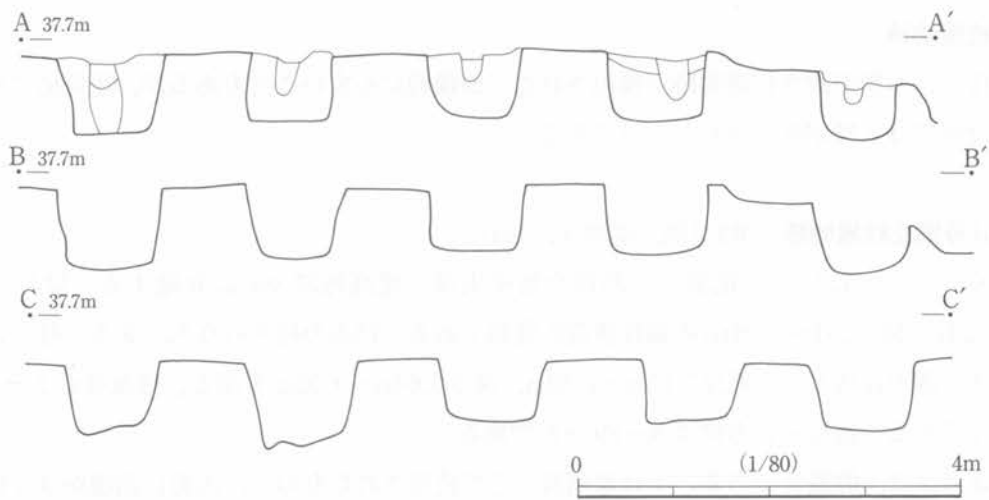
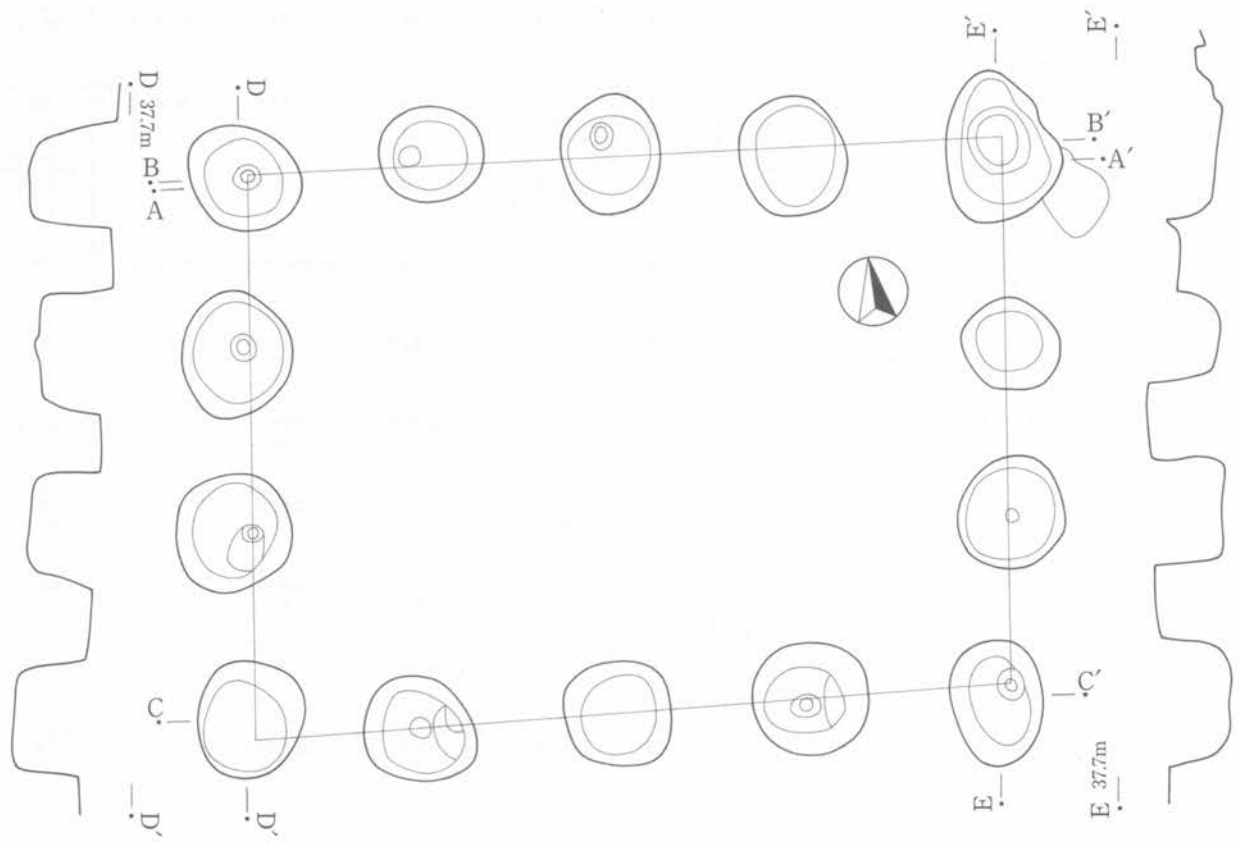
1・2はロクロ土師器坏である。1は燈明皿として使用されたもので、内面に油煙が厚く付着している。体部下端及び底部全面が回転ヘラ削りである。2は底部外面に墨書される。

第125表 SB-001号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	ロクロ土師器 坏	10.1	3.1	5.5	完形	砂粒、長石、石英、スコリア	褐色、黒色	内、タール状の付着部分盛り上がっている	9
2	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	白色砂粒、長石	鈍い赤褐色	底部墨書「□」	8

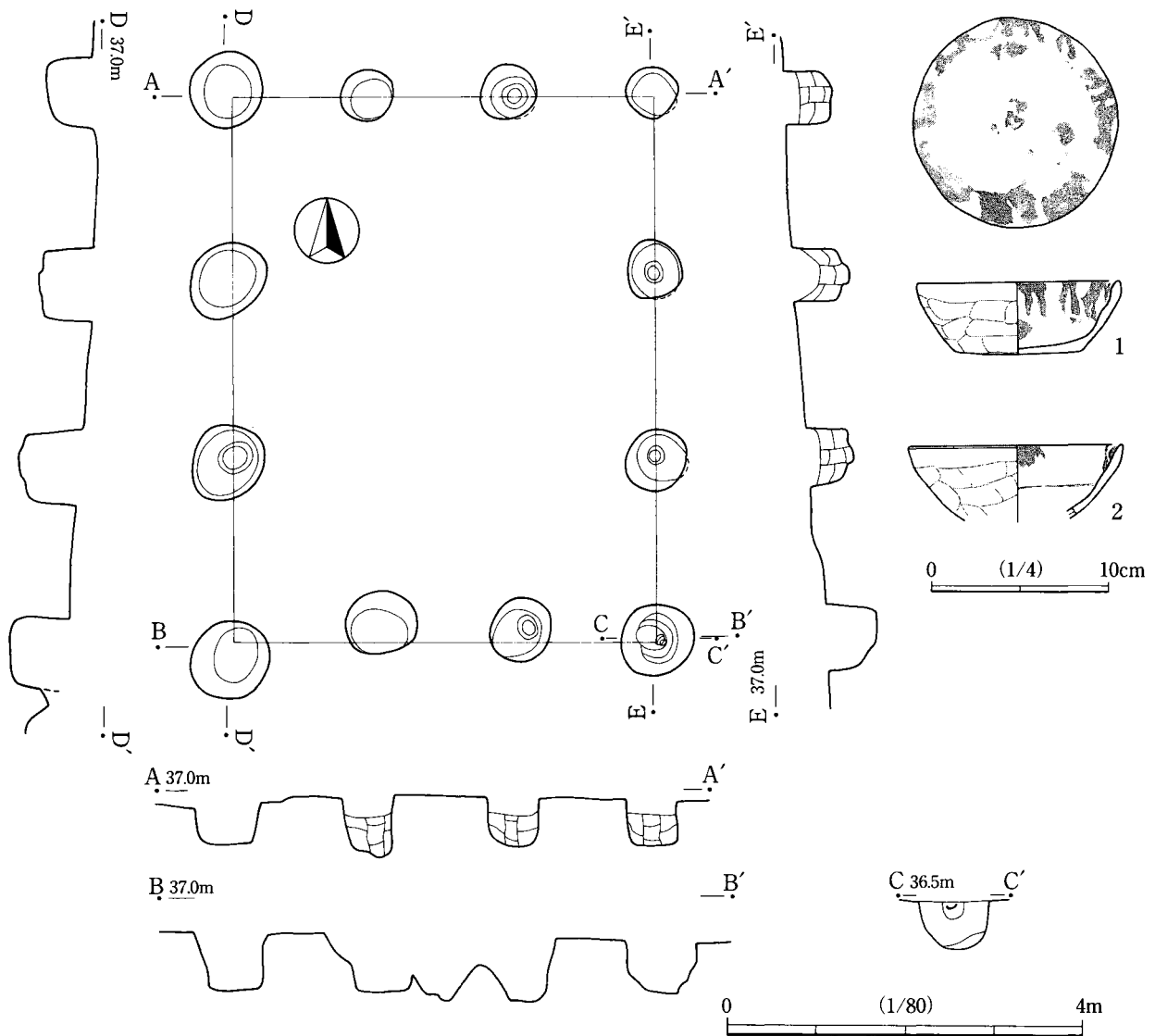
### SB-002号掘立柱建物跡 (第242図, 図版57, 141)

C8-53グリット付近に位置し、SB-001号と近接し、主軸方向を90°振る。梁行3間(4.78m)×桁行3間(6.14m)の側柱構造の建物である。12本の柱穴のうち、5本の柱穴に柱痕を確認した。柱穴の掘



第241图 SB-001号实测图





第242図 SB-002号実測図

第126表 SB-002号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	11.5	4.1	7.1	完形	砂粒、長石、石英、スコリア	内、褐色、黒色 外、鈍い褐色、赤褐色	内、タール付着	2
2	土師器 坏	12.0	[4.1]	-	口縁部1/4	白色粒、石英	内、鈍い赤褐色 外暗褐色	内、タール付着	5

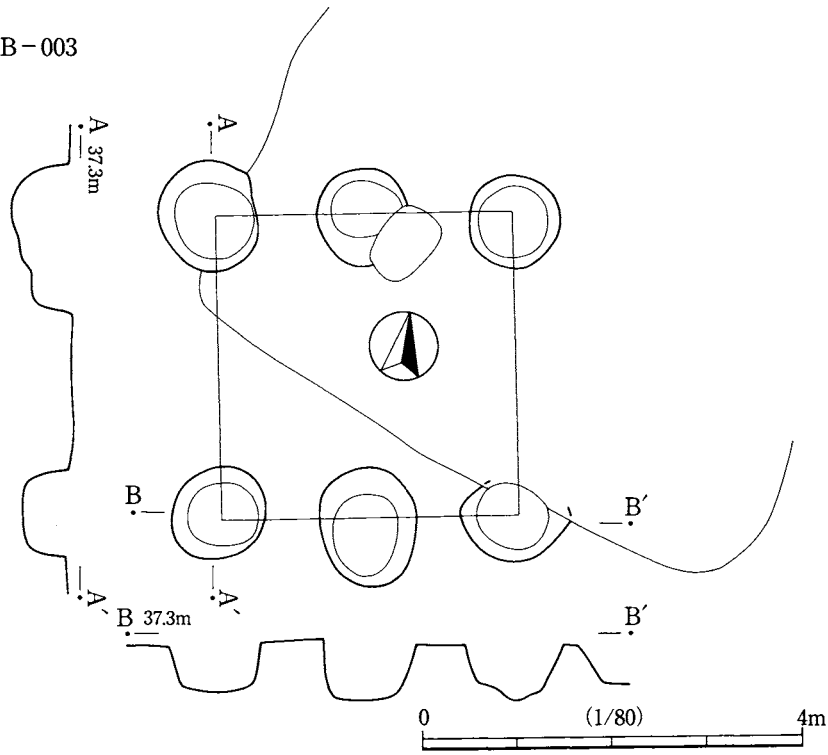
方はほぼ円形で、直径0.56m~0.91m、深さ0.55m~0.81mを測る。柱痕はおよそ直径0.2m~0.40mほどである。桁行主軸方位はN-1°-Eである。

1・2は土師器坏である。1は完形で、燈明皿として使用されたため、内面には油煙が付着している。体部外面及び底部は横方向にヘラ削りである。2も燈明皿として使用されており、内面に油煙が付着している。口縁部はヨコナデで、体部は横方向のヘラ削りである。

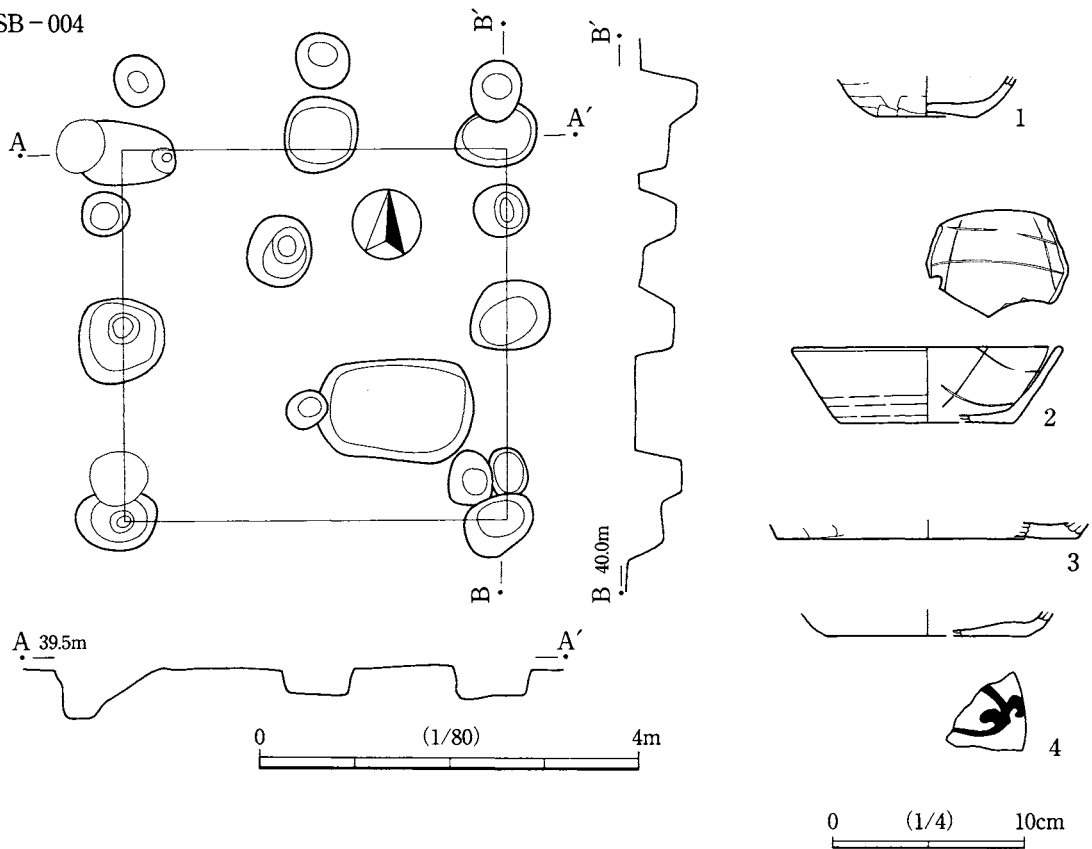
#### SB-003号掘立柱建物跡 (第243図)

L3-02グリット付近に位置し、東側台地の中央部でSI-017号竪穴住居跡と重複し、土層断面の観察からも、SI-017号より新しい構築であることが確認できる。梁行2間(3.14m)×桁行1間(3.17m)の側柱構造の建物である。柱穴の掘方は円形で、直径0.91m~1.20m、深さ0.21m~0.65mを測る。桁行主軸

SB-003



SB-004



第243図 SB-003号・004号実測図

第127表 SB-004号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	ロクロ土師器 坏	-	[2.0]	(5.2)	底部のみ	石英、長石	鈍い黄褐色	底部、回転糸切り雑し	2
2	ロクロ土師器 坏	(14.2)	4.0	(9.0)	1/5	微砂粒、長石、スコリア	明褐色	内、線刻有り	3
3	土師器 甕	-	[0.8]	(15.7)	底部破片	スコリア、白色砂粒	内、黒褐色 外、鈍い黄褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	5
4	ロクロ土師器 坏	-	[1.3]	(10.5)	底部1/6	白色砂粒、長石、石英	褐色	底部墨書「□」	1

方位はN-10°-Eである。

#### SB-004号掘立柱建物跡（第243図，図版57）

L3-73グリット付近に位置し，SB-005号掘立柱建物跡と西側で重複する。また，北側柱列の外側に，ほぼ同じ方向性に柱が並んでいる。梁行2間？(3.85m)×桁行2間？(4.02m)の側柱構造の建物である。9本の柱穴のうち，2本の柱穴に柱痕を確認した。柱穴の掘方は楕円形で，直径0.26m～0.97m，深さ0.29m～0.56mを測る。柱痕はおよそ直径0.22m～0.34mほどである。桁行主軸方位はN-88°-Wである。

1・2・4はロクロ土師器坏である。1は底部破片で，体部下端にヘラ削りはなく，底部は回転糸切り無調整である。2も体部下端にヘラ削りはなく，底部は不定方向のヘラ削りで，体部内面に線刻がある。4は体部下端，底部とも回転ヘラ削りで，底部外面に墨書される。3は土師器甕の底部破片である。

#### SB-005号掘立柱建物跡（第244図，図版57）

L3-72グリット付近に位置し，SB-004号の西側に重複する。梁行2間？(3.46m)×桁行2間？(3.60m)の側柱構造の建物である。8本の柱穴のうち，1本の柱穴に柱痕を確認した。柱穴の掘方は円形で，直径0.46m～0.73m，深さ0.31m～0.66mを測る。柱痕はおよそ直径0.16mほどである。桁行主軸方位はN-8°-Eである。

#### SB-006号掘立柱建物跡（第244図）

K3-25グリット付近に位置し，SB-013号と柱筋を概ね揃えた建物である。梁行2間(4.06m)×桁行3間(5.39m)を測り，柱穴の掘方はほぼ円形で，直径0.34m～1.00m，深さ0.11m～0.59mを測る。桁行主軸方位はN-75°-Wである。1は土師器坏である。口縁部はヨコナデで，体部は横方向のヘラ削りを施している。2は土師器甕で，口縁部の小片である。口縁部は受け口状を呈し，胴部は縦方向のヘラ削りを施している。

第128表 SB-006号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(11.9)	[2.9]	-	1/6	石英、白色砂粒	明赤褐色		4
2	土師器 甕	(16.6)	[4.7]	-	口縁1/10	スコリア、石英、長石	赤褐色	内、ナデ 外、ヘラケズリ	3

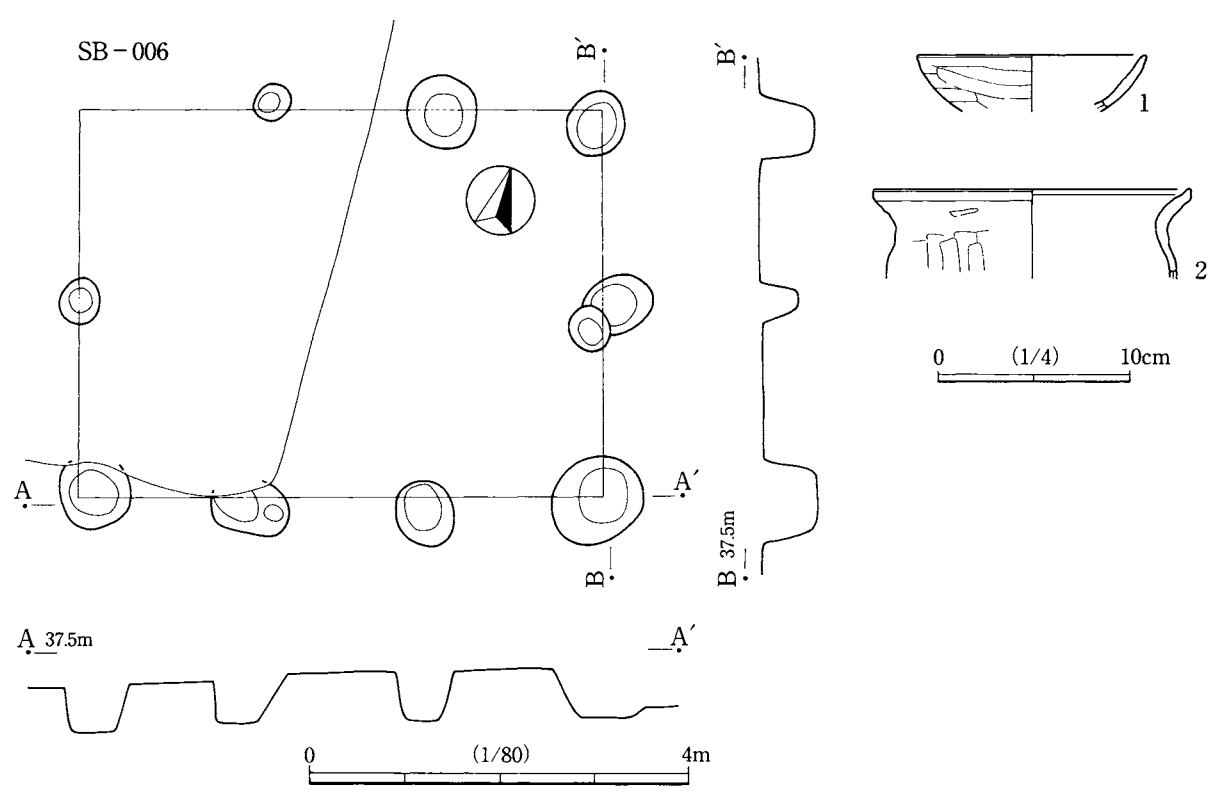
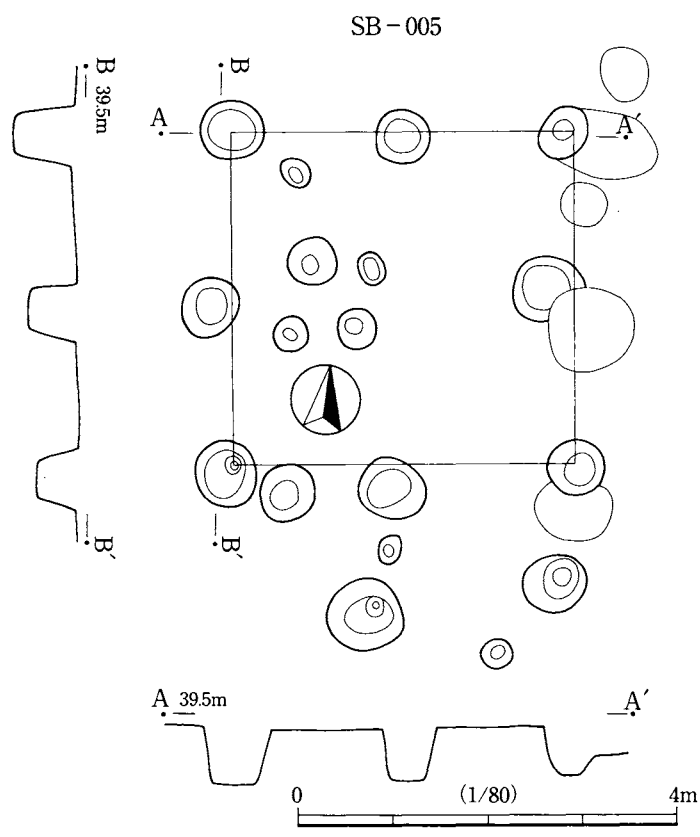
#### SB-007号掘立柱建物跡（第245図，図版58）

K3-66グリット付近に位置し，SB-006号の南側に並んでいる。また，SI-072号と重複し，南西コーナー部分の柱穴は検出できなかった。梁行3間(5.17m)×桁行4間(6.77m)の側柱構造の建物であるが，11本の柱穴を検出した。このうち1本の柱穴に柱痕を確認した。柱穴の掘方は円形で，直径0.44m～0.82m，深さ0.16m～0.70mを測る。柱痕はおよそ直径0.16mほどである。桁行主軸方位はN-10°-Eである。

土師器坏を1点図示した。身の模倣で，内外面とも赤彩される。

第129表 SB-007号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 甕	(14.0)	[3.2]	-	1/6	スコリア、長石	暗赤褐色	内外、赤彩	3



第244图 SB-005号・006号实测图

### SB-009号掘立柱建物跡 (第245図, 図版58)

L3-28グリット付近に位置し, SB-010号, SB-011号の東側に隣接する。南西コーナーから南側の柱筋とみられる柱穴が2基検出できた。柱穴の掘方は円形で, 直径0.50m~0.55m, 深さ0.20m~0.24mを測る。

### SB-010号掘立柱建物跡 (第245図, 図版58)

L3-24グリット付近に位置し, SB-011号と重複している。西側の柱筋の柱穴2基と北側柱筋の柱穴1基の3基の柱穴を検出した。柱穴の掘方は円形で, 直径0.36m~0.41m, 深さ0.07m~0.09mを測る。

### SB-011号掘立柱建物跡 (第245図, 図版58)

L3-34グリット付近に位置し, SB-010号と重複する。西側柱筋の一部と思われる柱穴を2基検出した。柱穴の掘方は円形で, 直径0.49m~0.58m, 深さ0.29m~0.44mを測る。

### SB-013号掘立柱建物跡 (第246図, 図版58)

K3-18グリット付近に位置し, SI-037号, SI-038号と重複する。両竪穴住居跡より新しい構築であるが, 西側柱筋から南西コーナーにかけての柱穴は検出できなかった。梁行2間(4.00m)×桁行3間?(4.93m?)の側柱構造の建物である。柱穴の掘方はほぼ円形で, 直径0.27m~0.82m, 深さ0.08m~0.63mを測る。桁行主軸方位はN-79°-Wである。

1はロクロ土師器坏の底部破片で, 底部外面に墨書される。

第130表 SB-013号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	-	-	-	底部片	砂粒, 黒色粒, 長石, スコリア	鈍い黄橙色		13

### SB-014号掘立柱建物跡 (第246図, 図版59)

L3-51グリット付近に位置する。梁行1間?(2.55m)×桁行1間?(2.60m)の建物であるが, 南東コーナーの柱穴は検出できなかった。柱穴の掘方はほぼ円形で, 直径0.54m~0.69m, 深さ0.29m~0.39mを測る。桁行主軸方位はN-73°-Wである。なお, 図示した範囲の東側にも8基のピットがあり, 図示した遺物はそこから出土したものである。

1は土師器甕の口縁部破片である。口縁部は大きく外反し, 口唇部を丸く収める。胴部も大きく開き, 斜め方向のヘラ削りを丁寧にナデで消している。

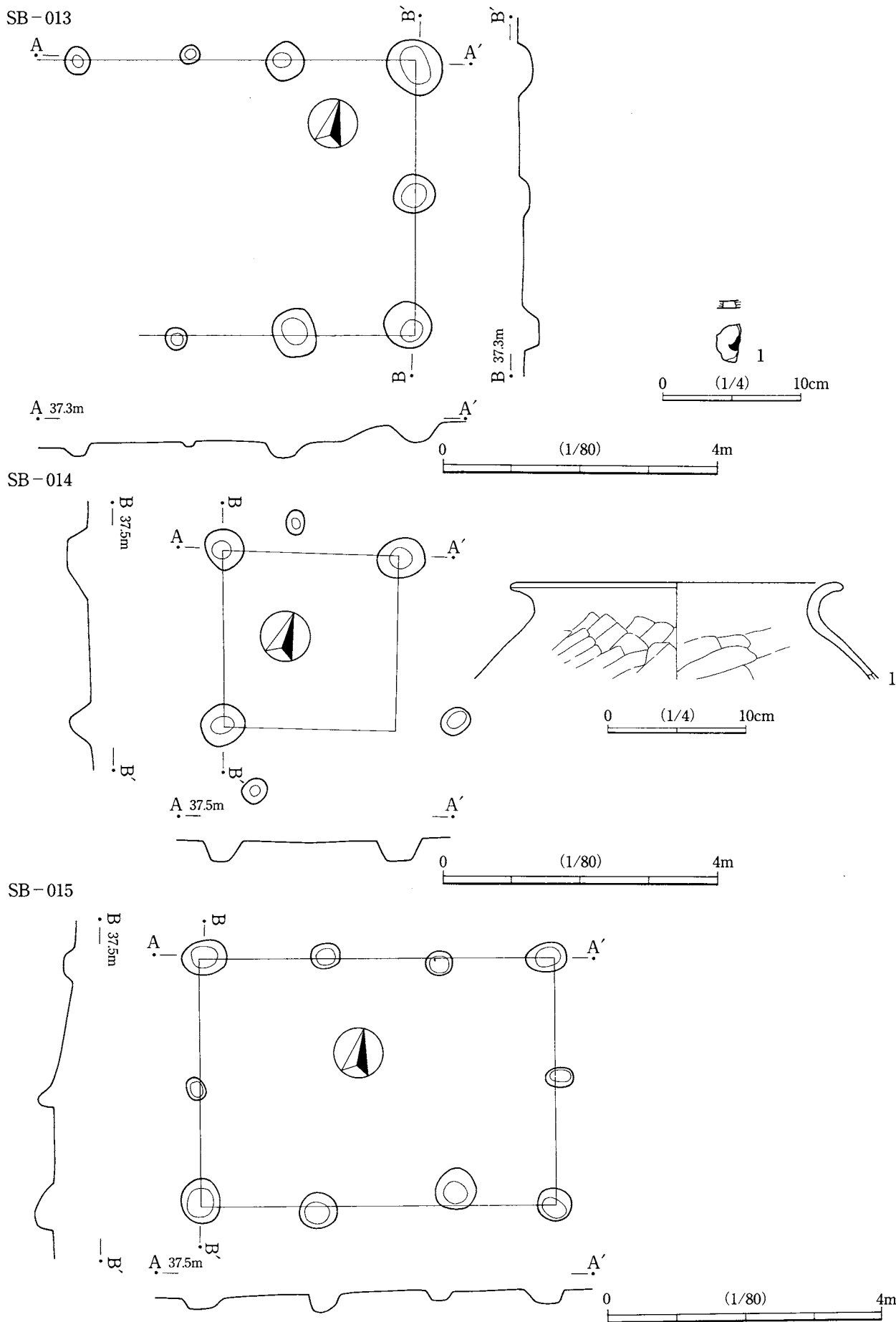
第131表 SB-014号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 甕	(24.0)	[6.9]	-	口縁1/5	スコリア, 白色粒, 石英	褐色		5

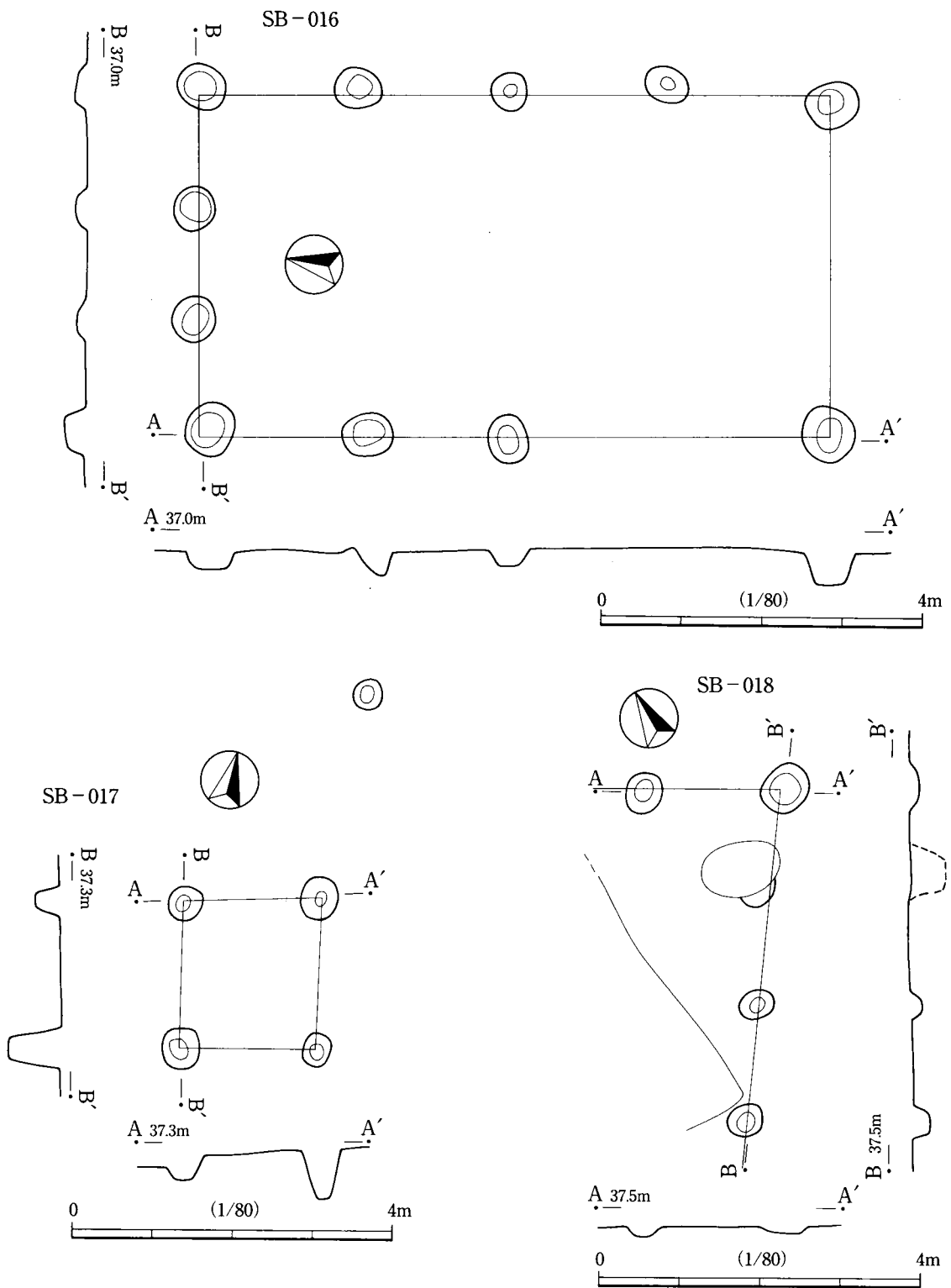
### SB-015号掘立柱建物跡 (第246図, 図版59)

K4-37グリット付近に位置し, SB-006号・SB-007号・SB-020号と概ね柱筋を揃える。梁行2間(3.60m)×桁行3間(5.20m)の側柱構造の建物である。柱穴の掘方はほぼ円形で, 直径0.26m~0.64m, 深さ0.11m~0.39mを測る。桁行主軸方位はN-80°-Wである。





第246图 SB-013号·014号·015号实测图



第247図 SB-016号・017号・018号実測図

**SB-016号掘立柱建物跡** (第247図, 図版59)

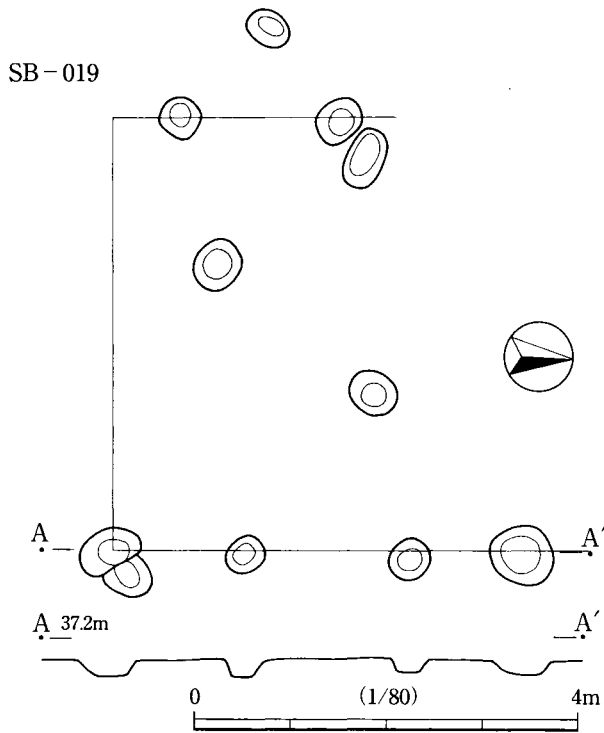
K3-01グリット付近に位置し、SI-080号、SI-081号と重複する。南及び西側柱筋の一部の柱穴は検出できなかったが、竪穴住居跡と重複する部分においても、竪穴住居跡の覆土中に柱穴を検出ことができ、両竪穴住居跡より新しい構築である。規模は梁行3間(4.25m)×桁行4間(7.86m)の側柱構造の建物である。柱穴の掘方はほぼ円形で、直径0.44m~0.70m、深さ0.08m~0.45mを測る。桁行主軸方位は



N-8°-Eである。

**SB-017号掘立柱建物跡** (第247図, 図版60)

K2-87グリット付近に位置し, SI-036号, SI-082号と隣接し, 軸方向もほぼ揃えている。4本柱の建物で, 梁行長1.72m, 桁行長1.87mを測る。柱穴の掘方はほぼ円形で, 直径0.39m~0.55m, 深さ0.30m~0.60mを測る。桁行主軸方位はN-10°-Eである。

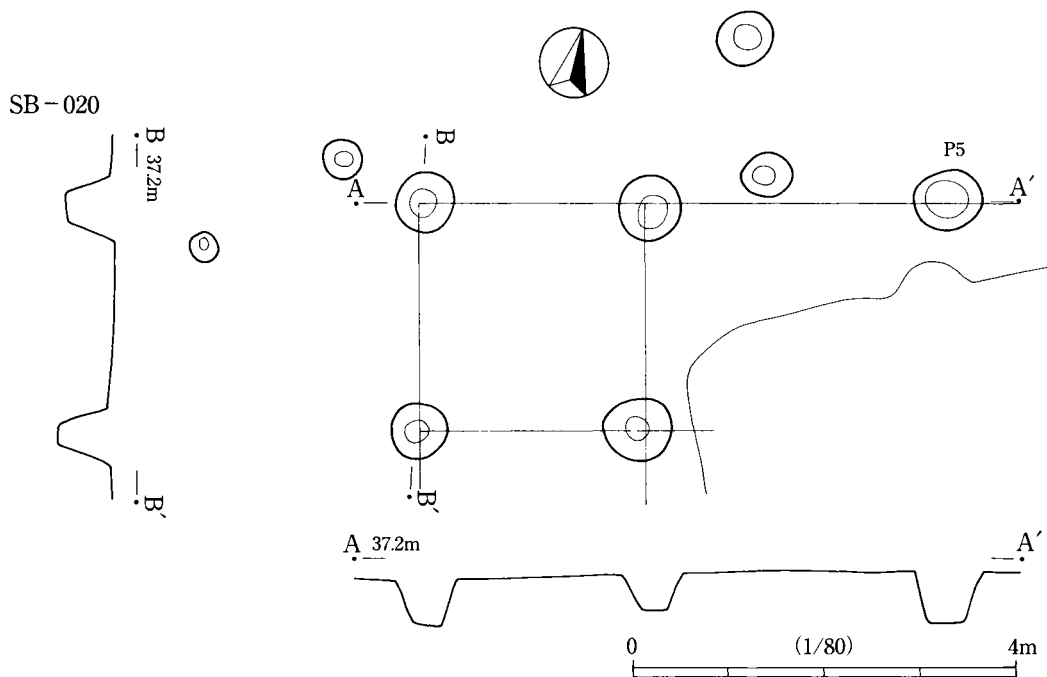


**SB-018号掘立柱建物跡** (第247図, 図版60)

L2-61グリット付近に位置し, SI-036号, SI-076号と重複し, 竪穴住居跡との重複部分では柱穴を検出することができなかった。柱穴の掘形はほぼ円形で, 直径0.36m~0.64m, 深さ0.11m~0.26mを測る。桁行主軸方位はN-38°-Wである。

**SB-019号掘立柱建物跡** (第248図, 図版60)

K2-61グリット付近に位置し, SI-065号と重複する。竪穴住居跡との重複部分では柱穴は検出できなかったが, 梁行3間(4.23m?)×桁行3間(4.50m)の側柱構造の建物と想定される。柱穴



第248図 SB-019号・020号実測図

の掘方はほぼ円形で、直径0.37m～0.68m、深さ0.12m～0.17mを測る。桁行主軸方位はN-2°-Eである。

### SB-020号掘立柱建物跡（第248図，図版61）

R4-42グリット付近に位置し、SI-023号と重複する。4本柱の建物の可能性もあるが、P5も柱筋としてとおり、P5も含めた建物を想定した。柱穴の掘方はほぼ円形で、直径0.57m～0.75m、深さ0.44m～0.66mを測る。桁行主軸方位はN-79°-Wである。

### SB-022号掘立柱建物跡（第249図，図版61）

L3-78グリット付近に位置する。梁行3間(4.62m)×桁行4間(6.97m)の側柱構造の建物である。14本の柱穴のうち、1本の柱穴に柱痕を確認した。柱穴の掘方はほぼ円形で、直径0.54m～1.52m、深さ0.36m～1.63mを測る。このうち四隅の柱穴は他の柱穴より深く掘られる。桁行主軸方位はN-75°-Wである。

1は丸底の土師器坏である。口縁部は直立し、ヨコナデである。体部は横方向のヘラ削で、内面に粗くヘラ磨きを施す。2は土師器甕の底部破片である。胴部外面及び底部は横方向のヘラ削りである。内面はヘラナデで、底部にヘラ当て痕がある。

第132表 SB-022号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 坏	(12.1)	[3.6]	-	口縁1/6	白色粒、スコリア、長石	赤褐色	内、ミガキ 外、ヘラケズリ	1
2	土師器 甕	-	[2.8]	(8.3)	底部3/4	長石、スコリア	内、褐灰色 外、黒褐色	内、ヘラの当て痕残る	1

### SB-023号掘立柱建物跡（第249図，図版61）

M3-72グリット付近に位置し、南側は事業範囲外となり未調査である。梁行2間(3.36m)×桁行2間以上(3.39m以上)の側柱構造の建物である。柱穴の掘方はほぼ円形で、直径0.79m～1.00m、深さ0.14m～0.48mを測る。桁行主軸方位はN-2°-Eである。また、北東側に少し離れて2基の柱穴があるが、隣接して別の掘立柱建物跡が存在していると思われる。

1は土師器甕の口縁部破片である。口縁部は受け口状を呈し、ヨコナデで、胴部は斜め方向のヘラ削りが施されている。

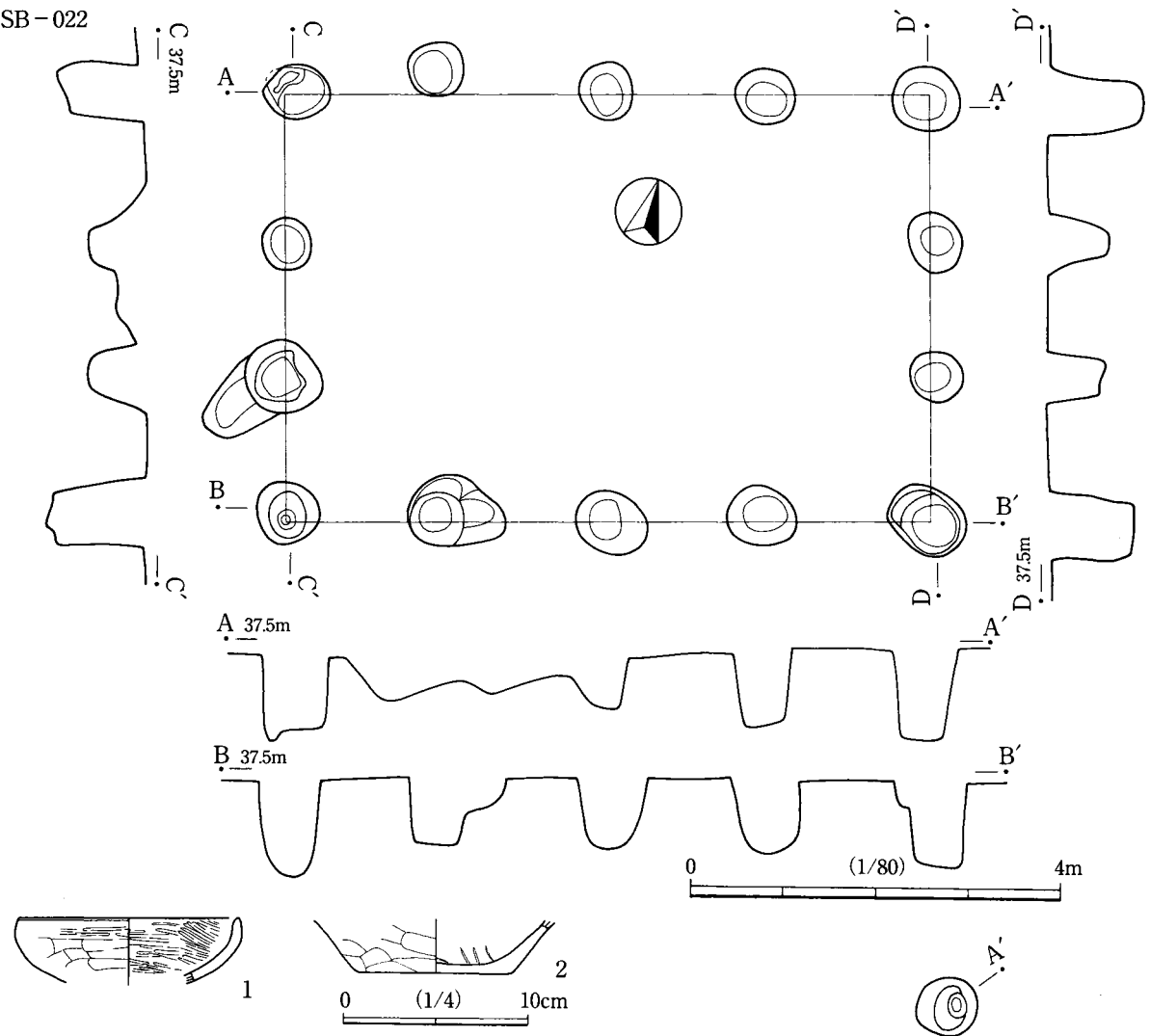
第133表 SB-023号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器 甕	(15.1)	[5.1]	-	口縁1/4	スコリア、長石、石英	褐色	外、ヘラケズリ	1

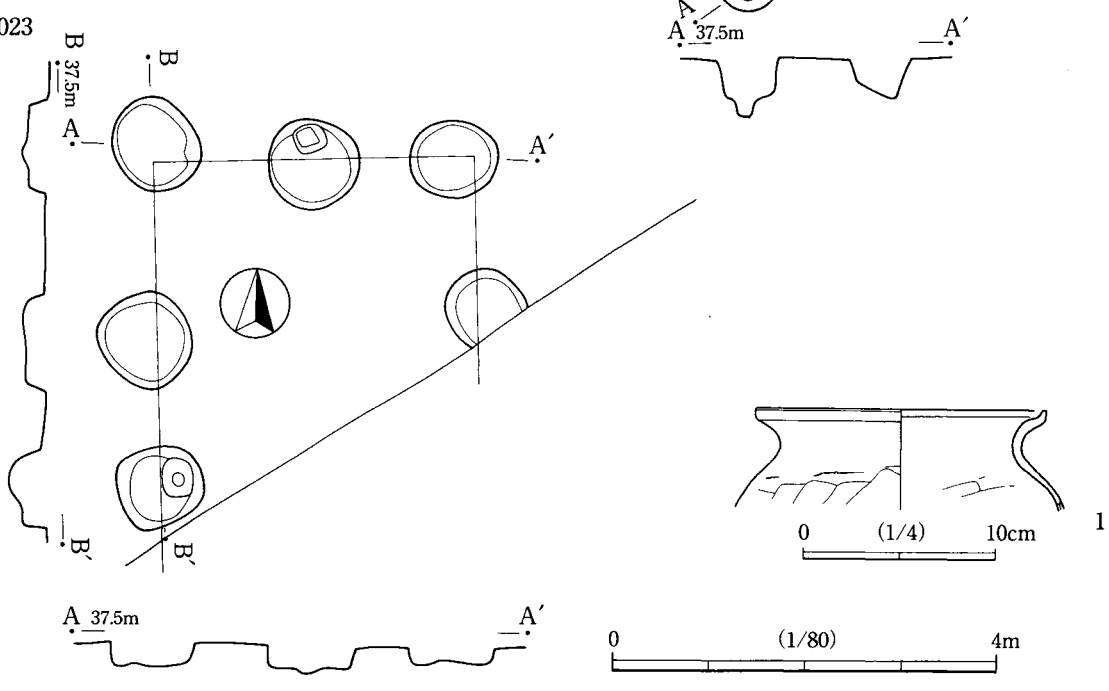
第134表 掘立柱建物跡一覧

遺構No.	長軸方位	規模	構造	桁行長(m)	梁行長(m)	柱間寸法(m)	面積(m <sup>2</sup> )	掘方径(m)	掘方深さ(m)	庇	特記遺物・備考
SB-001	N-89°-E	4間×3間	側柱	7.91~7.94	5.68~5.88	1.73~2.16	45.89	0.93~1.53	0.64~0.92	無	
SB-002	N-1°-E	3間×3間	側柱	6.14	4.78	1.50~2.14	29.35	0.56~0.91	0.55~0.81	無	
SB-003	N-10°-E	1間×2間	側柱	3.17	3.14	1.53~3.17	9.95	0.91~1.20	0.21~0.65	無	
SB-004	N-88°-W	2間×2間?	側柱?	4.02	3.85	1.78~2.07	15.48	0.26~0.97	0.29~0.56	無	
SB-005	N-8°-E	2間×2間?	側柱?	3.60	3.46	1.64~1.93	12.46	0.46~0.73	0.31~0.66	無	
SB-006	N-75°-W	3間×2間	側柱	5.39	4.06	1.68~2.18	21.88以上	0.34~1.00	0.11~0.59	無	
SB-007	N-14°-E	4間×3間	側柱	6.77	5.17	0.82~1.92	35.00以上	0.44~0.82	0.16~0.70	無	
SB-008								0.56~0.65	0.46	無	
SB-009		1間×1間?				1.72		0.50~0.55	0.2~0.24	無	
SB-010		1間×1間?				1.38		0.36~0.41	0.07~0.09	無	
SB-011		1間×1間?				1.86		0.49~0.58	0.29~0.44	無	
SB-012								0.68~0.68	0.45	無	

SB-022



SB-023



第249图 SB-022号·023号实测图

SB-013	N-79°-W	3間×2間	側柱	4.93?	4.00	1.37-2.04	19.72以上	0.27-0.82	0.08-0.63	無
SB-014	N-73°-W	1間×1間?	側柱	2.60	2.55	2.55-2.60	6.63	0.54-0.69	0.29-0.32	無
SB-015	N-80°-W	3間×2間	側柱	5.20	3.60	1.49-1.96	18.72	0.26-0.64	0.11-0.39	無
SB-016	N-8°-E	4間×3間	側柱	7.86	4.25	1.36-4.25	33.41	0.44-0.70	0.08-0.45	無
SB-017	N-10°-E	1間×2間	側柱	1.87	1.72	1.70-1.87	3.17	0.39-0.55	0.30-0.66	無
SB-018	N-38°-W	?	側柱?	4.13?		1.08-1.69		0.36-0.64	0.11-0.26	無
SB-019	N-2°-E	3間×?	側柱	4.23?	4.50	1.16-1.69	19.04以上	0.37-0.68	0.12-0.17	無
SB-020	N-79°-W	1間×1間?	側柱	2.37	2.35	2.35-2.37	5.57	0.57-0.75	0.44-0.66	無
SB-021			?	?	?	3.68	?	0.46-0.83	0.25-0.47	無
SB-022	N-75°-W	4間×3間	側柱	6.97	4.62	1.45-1.86	32.34	0.54-1.52	0.36-1.63	無
SB-023	N-2°-E	2間×2間	側柱	3.39?	3.36	1.55-1.84	11.39以上	0.79-1.00	0.14-0.48	無

### 3 土 坑

#### SK-001号土坑 (第250図, 図版62)

C8-58グリッドに所在する。平面形は隅丸方形で、規模は長軸長2.46m、短軸長2.33m、深さ0.6mを測る。長軸方位はN-35°-Wである。底面は硬質で炭化物が散在している。壁面は被熱して赤色硬化した部分がある。覆土も全体に炭化物を含む。炭窯である。

#### SK-002号土坑 (第250図, 図版62)

C8-11グリッドに所在する。平面形は隅丸方形で、規模は長軸長1.83m、短軸長1.71m、深さ0.4mを測る。長軸方位はN-60°-Wである。底面は平坦かつ硬質で、周溝が認められる。底面には炭化物が分布するが目立つ程でない。壁面は被熱してごく一部に赤色化した部分がある。炭窯である。

#### SK-004号土坑 (第250図, 図版62)

C7-76グリッドに所在する。平面形は隅丸方形で、規模は長軸長1.51m、短軸長1.49m、深さ0.52mである。長軸方位はN-50°-Wである。底面は平坦で、中央に浅いくぼみがある。また、炭化物、焼土が分布している。壁面は被熱して赤色硬化が著しい。覆土も全体に炭化物を多く含む。SK-090号と重複している。炭窯である。

#### SK-005号土坑 (第250図, 図版62)

C7-79グリッドに所在する。平面形はほぼ円形で、規模は直径1.6m、深さ0.23mである。底面はやや軟弱で、2段に掘り込まれている。

#### SK-006号土坑 (第250, 252図, 図版62)

C7-99グリッドに所在する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸長1.57m、短軸長1.34m、深さ0.34mを測る。長軸方位はN-50°-Wである。底面は割と硬質で、炭化物・焼土が散在している。壁面はそれほど被熱の痕跡はないが、一部で焼土がみられる。炭窯である。

2点の遺物を図示したが、いずれも小片である。1は土師器の鉄鉢形の鉢である。口縁部は大きく内湾し、体部もロクロ調整である。2はロクロ土師器坏で、体部下端及び底部は手持ちヘラ削りである。

第135表 SK-006号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	土師器鉢	—	—	—	破片	黒色砂粒、石英	明褐色	断面実測	1
2	ロクロ土師器杯	(11.8)	4.5	(7.0)	破片	長石、石英	内、明褐色 外、鈍い黄褐色	内、器面やや剥離 外、ヨコナデ	1

**SK-007号土坑** (第250図)

C8-25グリッドに所在する。平面形はほぼ隅丸方形で、規模は長軸長1.53m、短軸長1.51m、深さ0.23mを測る。底面は若干凹凸があり、壁面に焼土・炭化物がみられる。炭窯である。

**SK-009号土坑** (第250図)

G6-01グリッドに所在する。平面形は円形で、規模は長軸長1.06m、短軸長0.99m、深さ0.16mを測る。覆土は炭化物を主体とする。

**SK-013号土坑** (第250図)

G6-14グリッドに所在する。平面形は隅丸方形で、規模は長軸長1.12m、短軸長1.09m、深さ0.12mを測る。覆土は炭化物を主体とする。

**SK-017号土坑** (第250図)

G6-18グリッドに所在する。平面形は楕円形で、規模は長軸長1.09m、短軸長0.72m、深さ0.16mを測る。長軸方位はN-50°-Eである。覆土は焼土が主体である。

**SK-020号土坑** (第250図)

C8-71グリッドに所在する。平面形は方形で、規模は長軸長1.45m、短軸長1.14m、深さ0.39mを測る。長軸方位はN-60°-Eである。覆土は炭化物を多く含み、壁面に焼土、炭化物が付着する。炭窯である。

**SK-021号土坑** (第250図)

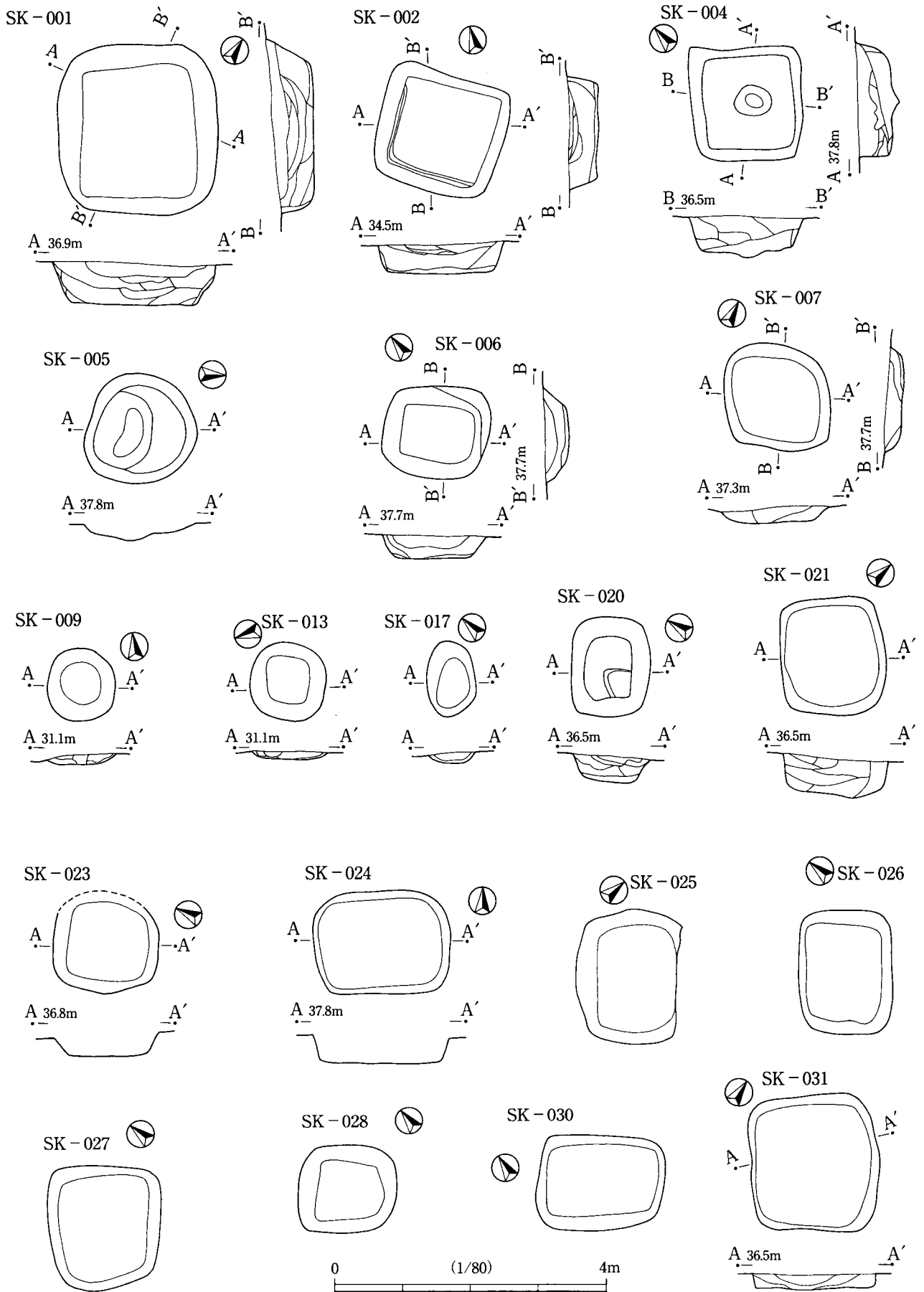
E7-22グリッドに所在する。平面形は方形で、規模は長軸長1.69m、短軸長1.53m、深さ0.56mを測る。長軸方位はN-49°-Wである。覆土は全体にロームブロックを多く含み、壁際でやや焼土を含む。炭窯である。

**SK-023号土坑** (第250図)

E7-73グリッドに所在する。平面形はほぼ隅丸方形で、規模は長軸長1.54m、短軸長1.50m、深さ0.32mを測る。東壁を攪乱される。

**SK-024号土坑** (第250図)

D7-71グリッドに所在する。平面形は隅丸方形で、規模は長軸長2.00m、短軸長1.50m、深さ0.4mを測る。長軸方位はN-90°-Wである。



第250图 土坑实测图(1)

**SK-025号土坑**（第250図）

D6-74グリッドに所在する。平面形は方形で、規模は長軸長1.99m、短軸長1.47m、深さ0.41mを測る。長軸方位はN-48°-Wである。底面は軟弱で、少量の炭化物が散布している。壁面は立ち上がりが穏やかで、コーナー2か所に炭化物と焼土が堆積している。炭窯である。

**SK-026号土坑**（第250図）

C6-48グリッドに所在する。平面形は方形で、規模は長軸長1.82m、短軸長1.38m、深さ0.44mを測る。長軸方位はN-53°-Eである。底面は凹凸があり、壁面もあまり被熱していない。焼土、炭化物が一部に残る。炭窯である。

**SK-027号土坑**（第250図）

B9-54グリッドに所在する。平面形は方形で、規模は長軸長1.81m、短軸長1.63m、深さ0.41mを測る。長軸方位はN-50°-Eである。底面は軟弱で、壁にそって僅かに焼土及び炭化物が堆積する。炭窯である。

**SK-028号土坑**（第250図）

B8-58グリッドに所在する。平面形は方形で、規模は長軸長1.43m、短軸長1.30m、深さ0.67mを測る。底面は軟弱で、炭化物が堆積している。壁面には焼土の痕跡は見られず、炭化物が若干認められた。炭窯である。

**SK-030号土坑**（第250図）

E6-61グリッドに所在する。平面形は方形で、規模は長軸長1.40m、短軸長1.84m、深さ0.5mを測る。長軸方位はN-57°-Wである。炭化物の堆積は少ないが、炭窯である。

**SK-031号土坑**（第250図）

L3-50グリッドに所在する。平面形は方形で、規模は長軸長2.00m、短軸長1.87m、深さ0.26mを測る。

**SK-032号土坑**（第251図）

K3-39グリッドに所在する。平面形は円形で、規模は長軸長1.65m、短軸長1.64m、深さ0.42mを測る。

**SK-033号土坑**（第251図）

G6-34グリッドに所在する。平面形は楕円形で、規模は長軸長1.39m、短軸長1.20m、深さ0.24mを測る。覆土は黒色土を主体とする。

### SK-034号土坑 (第251図)

L3-30グリッドに所在する。平面形は長方形で、規模は長軸長2.03m、短軸長0.79m、深さ0.23mを測る。長軸方位はN-38°-Eである。

### SK-035号土坑 (第251図)

L3-10グリッドに所在する。平面形は長方形で、規模は長軸長1.64m、短軸長0.70m、深さ0.42mを測る。長軸方位はN-22°-Eである。

### SK-037号土坑 (第251図)

D5-69グリッドに所在する。平面形は方形で、規模は長軸長2.20m、短軸長2.18m、深さ0.95mを測る。底面と壁面に若干炭化物が分布し、炭窯である。

### SK-041A号土坑 (第251図, 図版62)

2基の土坑が重複しており、A・Bとした。AはB8-96グリッドに所在する。平面形は長方形で、規模は長軸長3.35m、短軸長2.25m、深さ0.26mを測る。長軸方位はN-46°-Eである。覆土はハードロームブロックを含み、壁の一部に凹凸がある。

### SK-041B号土坑 (第251図, 図版62)

B9-07グリッドに所在し、SK-041Aと重複する。平面形は不整形な楕円形で、規模は長軸長1.62m、短軸長2.07m、深さ0.5mを測る。長軸方位はN-50°-Eである。

### SK-042号土坑 (第251図)

L3-74グリッドに所在する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸長1.68m、短軸長1.00m、深さ0.33mを測る。長軸方位はN-89°-Wである。覆土は焼土粒・焼土ブロックを含む。20点ほどの遺物が出土したが、図示できるものはない。

### SK-044号土坑 (第251, 252図, 図版141)

L3-52グリッドに所在する。平面形は円形で、規模は長軸長1.54m、短軸長1.51m、深さ0.44mを測る。土坑の中央から土師器甕が完形で出土した。

口縁部は外反しヨコナデで、端部を丸く収める。胴部は縦方向のヘラ削りを施すが、さらに口縁部に近い位置から斜め方向のヘラ削りを施し、その上に粗くナデ調整を加える。

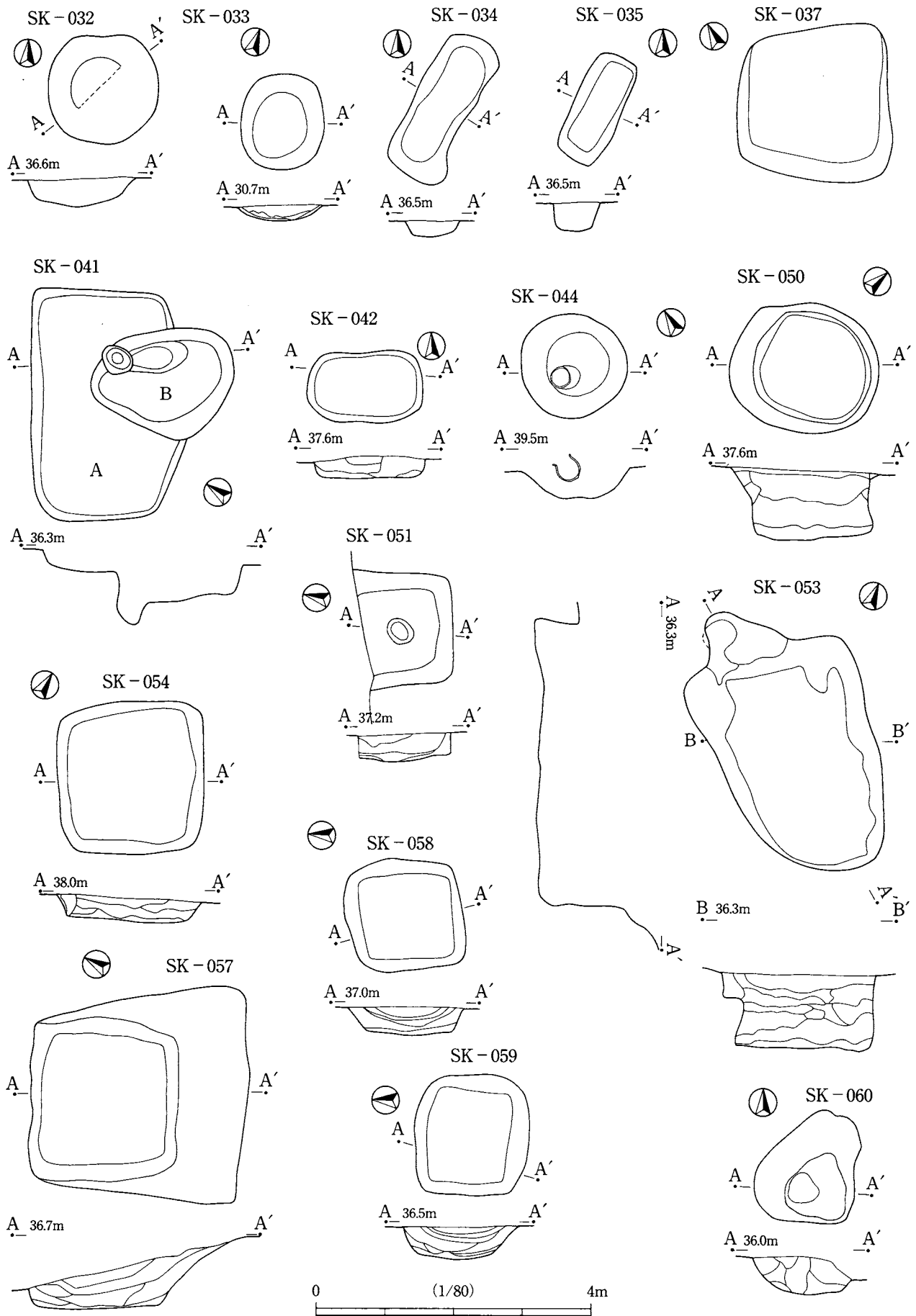
第136表 SK-044号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
3	土師器 甕	14.6	16.3	5.7	完形	砂粒、小石、長石、石英(多)	内、鈍い黄褐色～褐色 外、鈍い黄褐色～黒褐色	外、底部と底辺部を除く広範囲にスス附着	2

### SK-050号土坑 (第251図)

L1-99グリッドに所在する。平面形は楕円形で、規模は長軸長2.16m、短軸長1.87m、深さ1.02mを測る。覆土はロームブロック多く含んでいる。





第251图 土坑实测图(2)

#### SK-051号土坑 (第251図)

J2-39グリッドに所在する。平面形は方形で、規模は長軸長1.60m、短軸長1.30m、深さ0.42mを測る。長軸方位はN-73°-Eである。底面に浅いピットがあり、若干炭化物が散在している。覆土は炭化物を含み、底面近くで炭化材片が多い。炭窯である。

#### SK-053号土坑 (第251図)

P1-73グリッドに所在する。平面形は不整な方形で、規模は長軸長4.20m、短軸長2.26m、深さ1.12mを測る。長軸方位はN-53°-Wである。覆土はローム粒・ロームブロックを含み、底面上に白色粘土が一面に堆積している。

#### SK-054号土坑 (第251図)

P1-79グリッドに所在する。平面形はほぼ方形で、規模は長軸長2.22m、短軸長2.12m、深さ0.33mを測る。覆土は上層及び底面近くに炭化材片を多く含む土層が堆積し、炭窯と考えられる。

#### SK-057号土坑 (第251図)

O1-98グリッドに所在する。平面形は方形で、規模は長軸長3.13m、短軸長2.86m、深さ1.21mを測る。斜面に構築されているために、上端での掘方はかなり広いが、実際は一辺2.3mの方形の土坑である。覆土はローム粒とともに焼土粒・炭化材片を含み、炭窯と考えられる。

#### SK-058号土坑 (第251図)

J4-78グリッドに所在する。平面形はほぼ方形で、規模は長軸長1.66m、短軸長1.51m、深さ0.43mを測る。覆土は焼土粒を含み、底面近くで炭化材片を多く含んでいる。炭窯である。

#### SK-059号土坑 (第251図)

J4-85グリッドに所在する。平面形はほぼ方形で、規模は長軸長1.76m、短軸長1.67m、深さ0.48mを測る。覆土はロームブロックを多く含み、底面に炭が堆積している。炭窯である。

#### SK-060号土坑 (第251図)

B9-06グリッドに所在し、SK-041号と接している。平面形は不整形で、規模は長軸長1.68m、短軸長1.32m、深さ0.56mを測る。長軸方位はN-21°-Eである。覆土は白色粘土を含み、底面に焼土が堆積している。

#### SK-061号土坑 (第252図)

H4-30グリッドに所在する。平面形は方形で、規模は長軸長1.84m、短軸長1.78m、深さ0.49mを測る。長軸方位はN-77°-Eである。覆土はロームブロックを多く含み、底面に炭が堆積している。炭窯である。

### SK-069号土坑 (第252図)

P1-63グリッドに所在する。平面形は不正な長楕円形で、南東端部で他の遺構と重複する。長軸長は推定で2.0m、短軸長1.27m、深さ0.27mを測る。底面は北西に向かって徐々に深くなり、北西端部に直径15cmのピットがある。長軸方位は、N-39°-Wである。覆土は底面に焼土粒・炭化粒を含んだ土層が堆積している。

### SK-073号土坑 (第252図)

I4-58グリッドに所在し、SI-098号を切っている。平面形は方形で、規模は長軸長1.59m、短軸長1.4m、深さ0.21mを測る。長軸方位はN-45°-Wである。底面から壁にかけて炭が堆積し、炭窯である。

### SK-078号土坑 (第252図)

M2-55グリッドに所在し、長方形の土坑が2基重複している。2基合わせた規模は長軸長4.0m、短軸長1.2m、深さ0.77mを測る。長軸方位はN-29°-Eである。覆土はローム粒を多く含んでいる。

### SK-089号土坑 (第252図)

C9-54グリッドに所在し、SI-004号として調査したものである。平面形は不正な楕円形で、部分的に攪乱されている。規模は長軸長推定3.2m、短軸長2.2m、深さ0.26mを測る。長軸方位はN-76°-Wである。覆土は焼土粒・炭化粒を含んでいる。

5点の遺物を図示した。4は土師器高坏の脚部破片である。脚部は柱状で、縦方向のヘラ削り後縦方向のヘラ磨きを施している。坏部内面は黒色処理される。

5は土師器の鉄鉢形の鉢である。口縁部の破片で、口縁部は内湾し、外面は横方向のヘラ削りをナデ消している。7・8は土師器甕の口縁部破片である。

第137表 SK-044号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
4	土師器 高坏	-	[8.1]	-	脚部2/3	白色砂粒、長石	鈍い赤褐色、坏部内面黒色	内、黒色処理	2
5	土師器 鉢	(13.0)	[5.2]	-	口縁1/4	砂粒、石英	鈍い赤褐色	内外、赤彩	2
6	土師器 甕	(12.0)	[3.8]	-	口縁1/4	白色砂粒、石英	鈍い赤褐色	内、丁寧なナデ 外、ヘラケズリ	2
7	土師器 甕	(13.0)	[8.0]	-	口縁～胴上部1/6	砂粒、石英	褐色	内、ナデ	1
8	土師器 甕	(18.2)	[2.4]	-	口縁片	白色砂粒、石英、長石、スコリア	鈍い橙色	内外、横方向のナデ	1

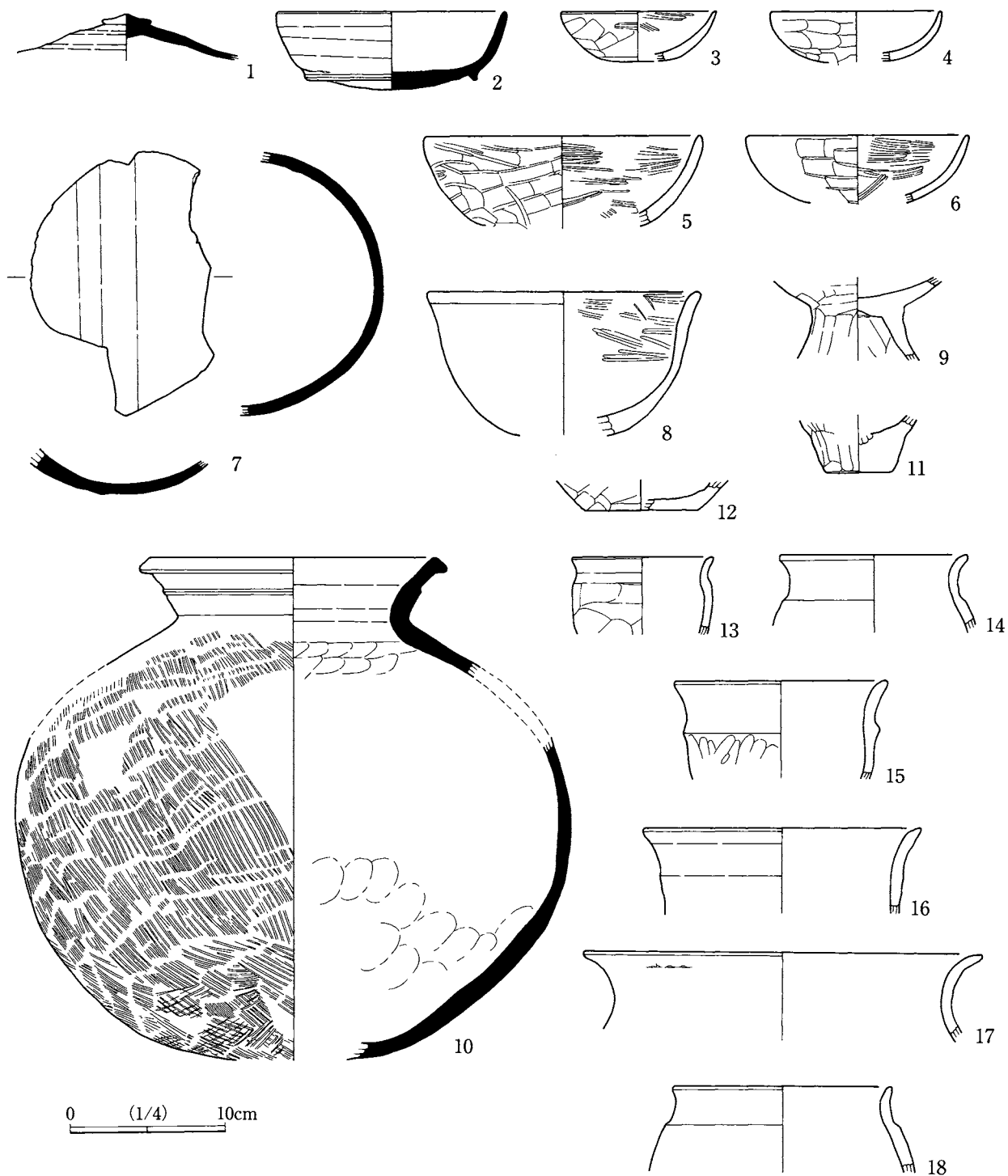
### SK-090号土坑 (第252, 253図, 図版141)

C7-55グリッド付近に所在し、SI-006号・SI-011号・SI-013号として調査したものである。また、SK-004号が覆土中に構築されている。平面形は溝状で、規模は長さ22m、幅は6m前後である。土層断面の観察からも、壁状の立ち上がりが存在するようにも見えるが、さほど明確なものではなく、カマド等の施設も検出できなかったことから、土坑として扱うこととした。確認面からの深さは40cm程度で、横断面は皿状となる。

1は須恵器杯蓋である。つまみは扁平で、外面には自然釉がかかる。2は須恵器杯である。高台は摩耗しているが、底部が高台より出っ張るものである。

3～6は土師器坏である。3・4は口縁部を短く直立させ、丸底である。体部外面は横方向のヘラ削り





第253図 SK-090号出土遺物実測図

であるが、器面の遺存状況が悪く不鮮明である。5は口径18cmを測る大振り of 坏である。体部外面は横方向のヘラ削りで、内面に横方向のヘラ磨きを施す。6も丸底の坏で、体部外面は横方向のヘラ削り、内面は丁寧に磨いている。

7は須恵器フラスコ形瓶子である。肩部及び内面中央にやや厚く自然釉がかかる。8は土師器鉢である。丸底で、口縁部が僅かに外反する。外面は器面が剥落し、調整は不明であるが、内面は口縁部に横方向の

ヘラ磨きを、胴部も丁寧にナデている。9は土師器高坏である。器面の遺存状況は悪いが、脚部は縦方向、坏部は横方向のヘラ削りが観察できる。

10は須恵器甕である。やや潰れた球形の胴部で、底部は丸い。口縁部は外傾し、突帯を1条巡らす。口唇部は断面三角形となる。胴部は斜位の叩きで、内面は丁寧にナデている。

11~18は土師器甕である。11・12は底部破片で、12は底径も小さく粗雑な調整で、底部も厚いことからミニチュアかとも思われる。13~19は口縁部の破片で、いずれも小片である。口縁部と胴部の境の稜がかなり明瞭で、15は突帯状になる。胴部は13・14・17・18が横方向のヘラ削り、他は縦方向のヘラ削りである。なお、15は内面黒色処理される。

第138表 SK-090号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号	
1	須恵器 壺	-	[2.9]	-	1/3	微砂粒、長石、スコリア	灰黄色~灰黄緑色	外、自然釉付着有り、東海系産	55	
2	須恵器 高台付坏	14.9	5.0	11.2	2/3	微砂粒、スコリア	灰色~灰白色	内外、器面摩耗	35.144	
3	土師器 坏	(10.0)	[3.2]	(5.4)	1/4	スコリア少々	鈍い褐色	内外、剥落著しい	130	
4	土師器 坏	(11.0)	[3.2]	-	1/5	白色砂粒	鈍い黄褐色	器面剥落有り	129	
5	土師器 坏	(18.0)	[5.7]	-	1/4	砂粒、長石、石英、黒色粒	明褐色	内、器面の磨耗激しい	38.120.121	
6	土師器 坏	(14.3)	[4.4]	-	1/8	黒色粒、砂粒	褐色	内、ミガキ光沢あり	149	
7	須恵器 瓶	-	-	-	-	胸部片	白色砂粒、微砂粒	黄灰色	火ぶくれ有り	20.27.90.94.105.106.146.149
8	土師器 椀	(17.8)	[9.3]	-	1/4	微砂粒、スコリア	鈍い黄褐色	内、ミガキ(光沢有り) 外、剥落	40.79.133.143.149	
9	土師器 高坏	-	[5.2]	-	1/2	黒色粒、スコリア、白色砂粒	鈍い黄褐色	内外、器面摩耗	58.59	
10	須恵器 甕	18.8	32.5	丸	2/3	微砂粒、長石(少)	灰色一部灰緑色	外、口縁一部と肩部に、若干自然釉がかかる。口縁を除く全面に叩目の調整が有り、底部も丸みを帯びている	2.3.5.6.7.9.10.11.13.15.19.21.26.28.30.31.32.33.37.41.43.48.76.82.85.89.87.91.92.93.95.96.97.98.99.100.101.102.104.107.110.112.114.115.116.117.122.123.124.125.126.133.135.136.137.138.140.146.148.149.7C-2.6.7.9.SK-004-1	
11	土師器 甕	-	[1.9]	(7.3)	1/5	白色粒、長石	内、灰黄褐色 外、黒褐色	内、器面剥落	36	
12	土師器 甕	-	[3.6]	(4.4)	底部1/4	スコリア、白色砂粒	黒褐色		141	
13	土師器 甕	(9.1)	[5.0]	-	口縁1/3	白色砂粒、長石	内、黒色 外、極赤褐色	内、黒色処理	50.52	
14	土師器 甕	(12.0)	[4.5]	-	口縁1/8	白色砂粒、長石、石英、スコリア	内、鈍い褐色 外、赤褐色	二次焼成あり	8.149	
15	土師器 甕	(13.7)	[6.3]	-	口縁の一部	白色砂粒、黒色砂粒、長石、小石(1mm)	内、鈍い黄褐色 外、鈍い黄褐色	内、ナデ痕あり	44	
16	土師器 甕	(17.9)	[5.6]	-	口縁の一部	白色粒、石英、黒色粒	鈍い褐色	内外、器面摩耗	71.81	
17	土師器 甕	(14.0)	[6.0]	-	口縁の一部	白色粒、長石(多)	鈍い赤褐色	内外、器面の剥落著しい	16.30	
18	土師器 甕	(16.6)	[7.5]	-	口縁1/3	白色砂粒、石英、長石、スコリア	赤褐色	硬質な焼成	3	
19	土師器 甕	(25.6)	[5.7]	-	口縁1/4	白色砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色	内外、摩耗	23.25.42.119.149	

第139表 土坑一覧表

遺構V	グリッド	切り合い関係	長軸方位	深さ(cm)	形態	土坑の性格	規模(m)	底面(m)	特記遺物	備考
001	C8-58		N-35°-W	60	隅丸方形	炭窯	2.46×2.33	1.65×1.90		
002	C8-11		N-60°-W	42	隅丸方形		1.71×1.83	1.28×1.37		
004	C7-76	S1-006遺構群と重複	N-50°-W	52	隅丸方形		1.49×1.51	1.37×1.31		
005	C7-79			23	ほぼ円形		1.59×1.61	1.28×1.36		
006	C7-99		N-50°-W	34	隅丸長方形		1.34×1.57	0.81×1.07		
007	C8-25			23	ほぼ隅丸方形		1.51×1.53	1.18×1.24		
009	G6-01			16	円形		1.06×0.99	0.61×1.56		
013	G6-14	SK-018と近接		12	隅丸方形		1.12×1.09	0.67×0.60		
017	G6-18		N-50°-E	16	楕円形		1.09×0.72	0.72×0.43		
020	C8-71		N-60°-E	39	方形		1.45×1.14	0.87×0.69		
021	E7-22		N-49°-W	56	方形		1.69×1.53	1.44×1.37		
023	E7-73			32	ほぼ隅丸方形		1.50×1.54	1.16×1.18		
024	D7-71		N-90°-W	40	隅丸長方形		1.50×2.00	1.26×1.76		
025	D6-74		N-48°-W	41	方形	炭窯	1.99×1.47	1.58×1.14		
026	C6-48		N-53°-E	44	方形	炭窯	1.82×1.38	1.40×1.09		
027	B9-54		N-50°-E	41	方形	炭窯	1.81×1.63	1.53×1.39		
028	B8-58			67	方形	炭窯	1.30×1.43	0.84×0.96		
030	E6-61		N-57°-W	50	方形	炭窯	1.40×1.84	1.04×1.62		
031	L3-50			26	方形		2.00×1.87	1.79×1.66		
032	K3-39			42	円形		1.65×1.64	0.87×?		
033	G6-34			24	楕円形		1.39×1.20	0.98×0.70		
034	L3-30		N-38°-E	23	長方形		2.03×0.79	1.82×0.52		
035	L3-10		N-22°-E	42	長方形		1.64×0.70	1.34×0.44		
037	D5-69			95	方形	炭窯	2.20×2.18	1.89×1.90		

041A	B8-96		N-46°-E	26	長方形	3.35×2.25	3.16×2.00		
041B	B9-07	SK-014Aと重複	N-50°-E	50	不整形な楕円形	1.62×2.07	1.16×1.76		
042	L3-74		N-89°-W	33	隅丸長方形	1.00×1.68	0.86×1.47		
044	L3-52			44	円形	1.51×1.54	0.92×0.90		
050	L1-99			102	楕円形	1.87×2.16	1.41×1.51		
051	J2-39		N-73°-E	42	方形	1.60×1.30	1.18×1.10		
053	P1-73		N-53°-W	112	不整形な方形	4.20×2.26	3.01×1.66		
054	P1-79			33	ほぼ方形	2.22×2.12	1.85×1.87		
057	O1-98			121	方形	2.86×3.13	2.37×1.98		
058	J4-78			43	ほぼ方形	1.51×1.66	1.23×1.32		
059	J4-85			48	ほぼ方形	1.76×1.67	1.35×1.20		
060	B9-06	SK-041と近接	N-21°-E	56	不整形	1.68×1.32	0.98×0.88		
061	H4-30		N-77°-E	49	方形	1.84×1.78	1.42×1.22		
069	P1-63		N-39°-W	27	不正な長楕円形	2.0×1.27	1.87×0.92		
073	I4-58	SI-098を切る	N-45°-W	21	方形	1.59×1.4	1.37×1.23		
078	M2-55		N-29°-E	77	長方形	4.0×1.2	3.63×0.94		
089	C9-54		N-76°-W	26	不正な楕円形	3.2×2.2	3.2×1.93		
090	C7-55			40	溝状	10.82×2.64	10.74×2.47		

#### 4 溝跡

##### SD-001号溝 (第254図, 図版63, 142~148)

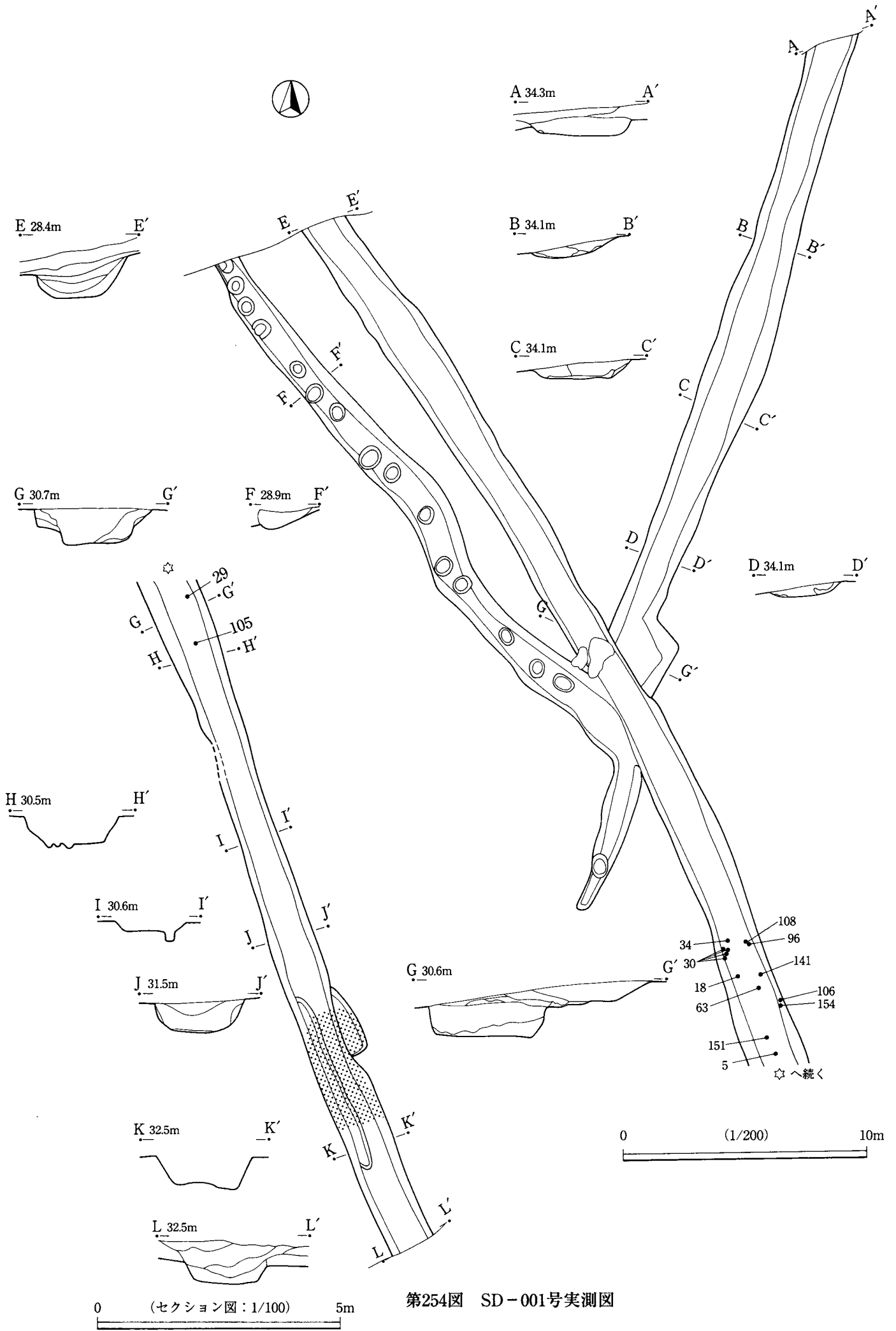
F4グリッドからG7グリッドへかけて所在する溝で延長70mが事業範囲内である。溝はほぼ直線で、N-32°-Wの方向である。F5グリッドにおいて後世の溝跡2条と交差する。遺跡中央で北西へ向けて開く浅い谷で台地が二分されているが、その谷底に沿って位置している。幅は確認面で1.5m~1.8m、底面で1.4m~1.6mを測り、断面は箱形を呈する。底面は平坦であり、台地上の集落から谷へ向けての通路の可能性も考えられる。確認面からの深さは40cm前後で、覆土は炭化物片を含む暗褐色土が主体である。F5グリッドからG6グリッドにかけて多くの遺物が出土しており、特にG7-23グリッド付近ではおびただしい量の遺物が出土している。遺物は底面からではなく、ある程度溝が埋まった段階で一括して廃棄されたものと考えられる。

遺物は非常に多く、157点の遺物を図示した。1は須恵器杯で、完形である。口縁部は著しく内傾し、受部とほとんど高さが変わらない。底部は回転ヘラ削りを施し、ロクロ回転方向は左である。

2~30は土師器坏である。2は丸味のある体部で、口縁部が屈曲して直立するもので、底部は平底である。口縁部はヨコナデで、体部外面は横方向のヘラ削り後ナデを施す。内面は体部が横方向、底部が一方向の丁寧なヘラ磨きである。

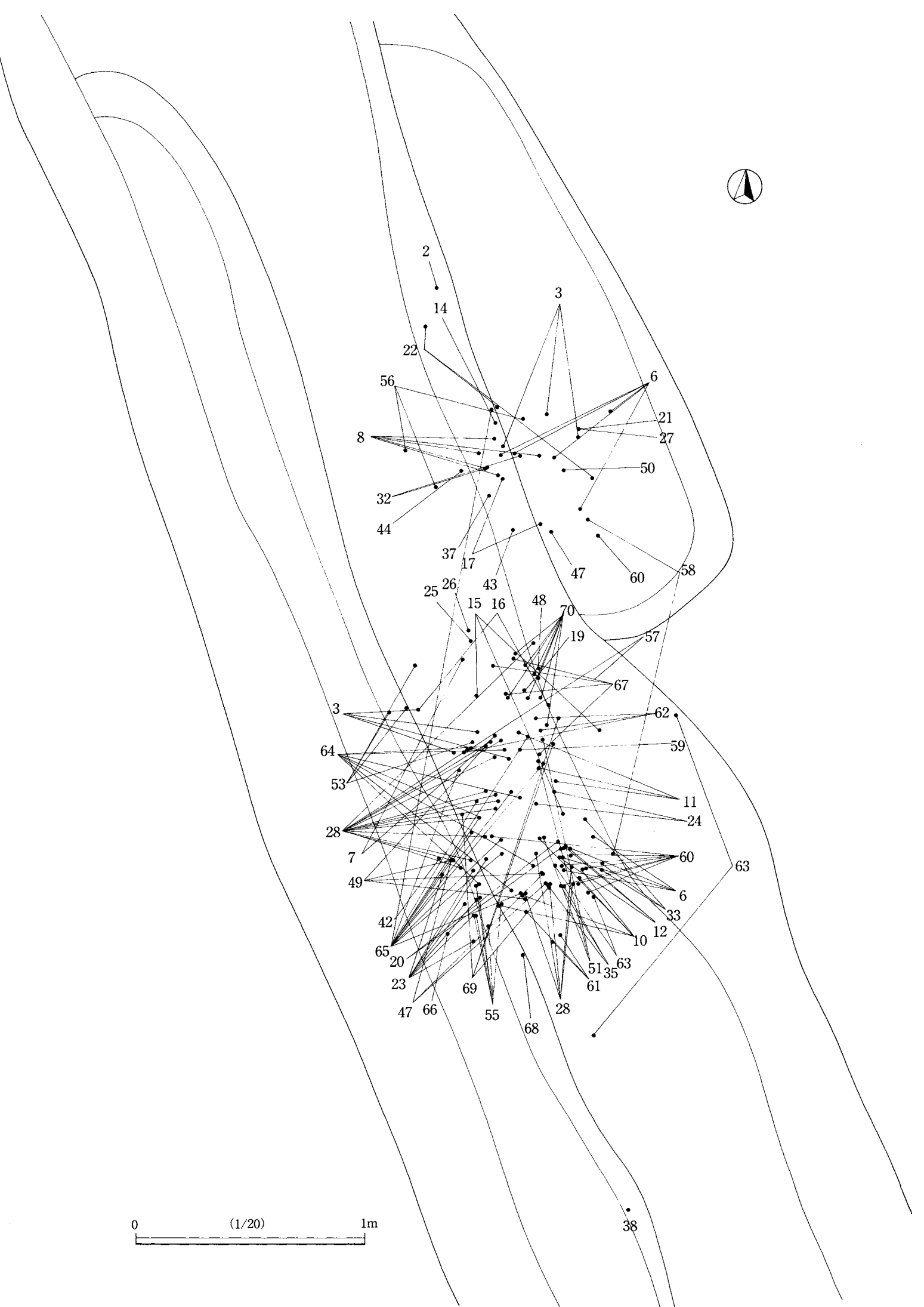
3・4・7・11・17は2と同様に半球形の体部であるが丸底となるものである。3の口縁部はやや内傾するが、他はほぼ直立する。3は小振りの精緻な仕上がりで、口縁部は横ナデ、体部外面は横方向のヘラ削り、内面は体部が横方向、底部が一方向のヘラ磨きである。内面は漆仕上げとみられる。4・11はやや扁平な形状で、体部外面は横方向のヘラ削り、内面は丁寧にナデている。11の口唇部内側が摩滅している。7・17はやや深さがある。7は体部外面を横方向、底部を一方向にヘラ削りを施す。17は外面に横方向のヘラ削り後丁寧にナデている。また、内面にも砂粒の動きが観察できる調整を施している。20も半球形の体部で、丸底となるものであるが、口縁部は外傾している。やや粗雑な調整で、外面は口縁部から横方向のヘラ削りを施し、内面も粗雑なナデ調整である。

15・16・21・22も半球形の体部で口縁部が外傾するものであるが、底部を欠損している。21・22は同一

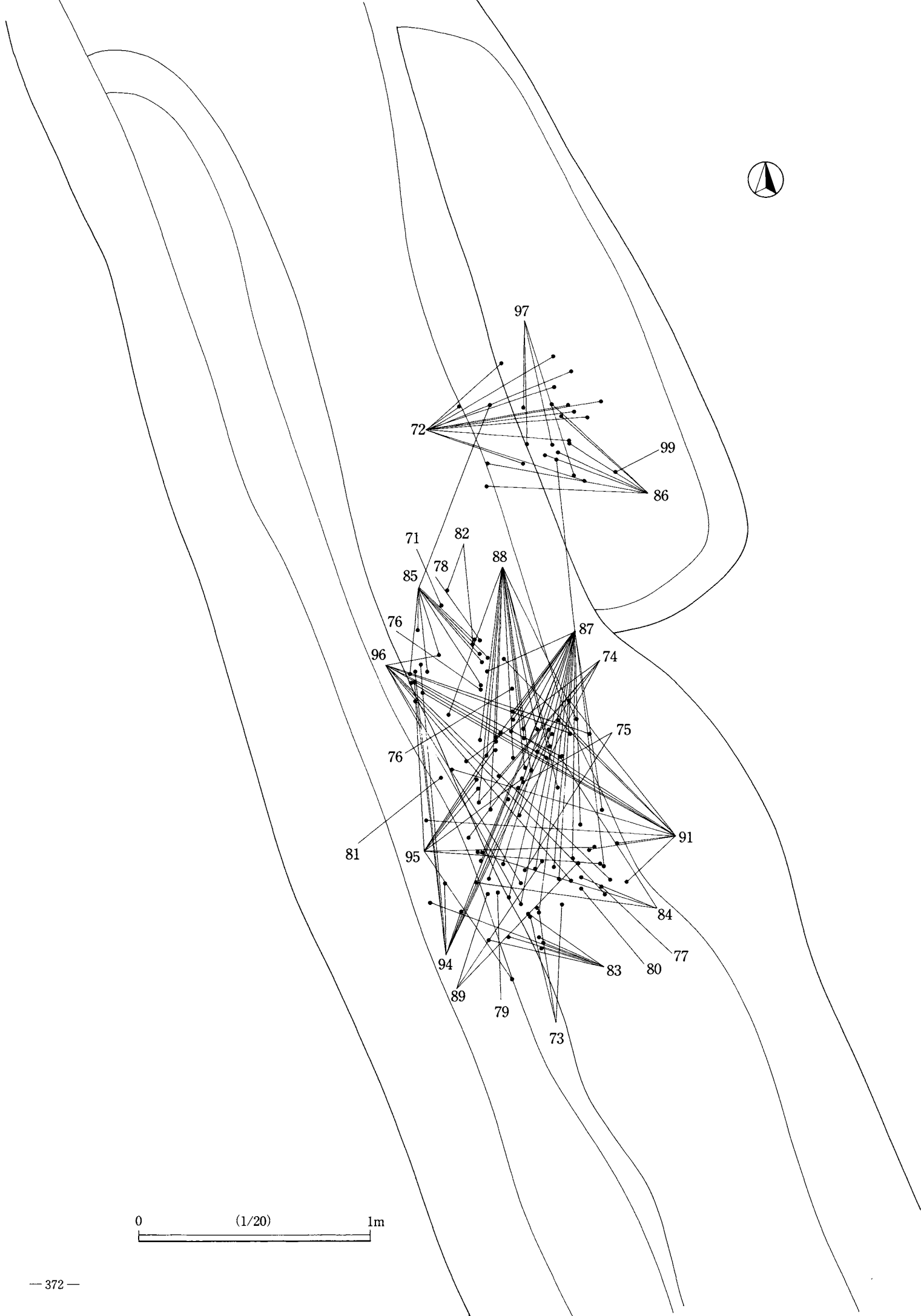


第254図 SD-001号実測図



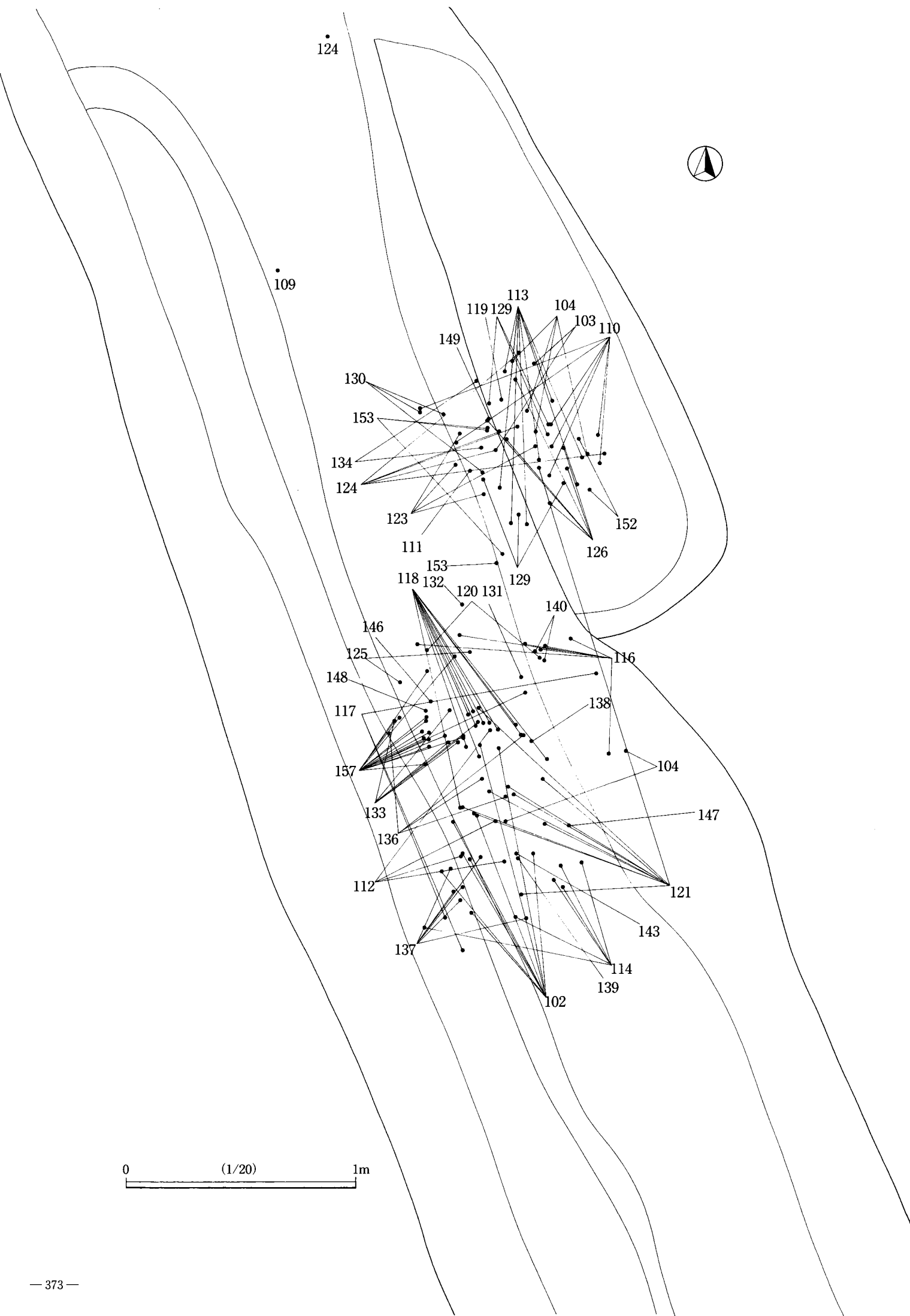


第255図 SD-001号遺物出土状況図(1)



0 (1/20) 1m

第256图 SD-001号实测图(2)



第257图 SD-001号实测图(3)

個体の可能性もあり、器面の摩滅が著しいが、内面に放射状のヘラ磨きが施され、高坏の坏部かもしれない。

5・6・23も丸味のある体部であるが、半球形というよりもやや扁平なもので、平底となる。口縁部は僅かにヨコナデを施し、体部は横方向のヘラ削りを、底部は5が一方方向、6・23が不定方向のヘラ削りである。

9・13・18は体部が外傾して立ちあがるもので、平底となる。9は小振りで精緻な仕上がりで、漆仕上げである。13・18は口縁部が僅かに外反し、口縁部ヨコナデ、体部は横方向のヘラ削りである。12・19も同様の形状であるが、丸底となる。19は口縁部にヨコナデ、体部外面を横方向、底部を一方方向に削っている。8・10・14も同様の形状であるが、底部を欠損している。口縁部は短くヨコナデで、14は口縁部が僅かに外反するが、体部からそのまま口縁部にいたる。体部外面は横方向のヘラ削りを施すが、いずれも器面の遺存状況が悪く不鮮明である。14は内面に粗くヘラ磨きを施している。

24～26・28～30は身の模倣坏である。30は直立気味に立ちあがるが、他はいずれも小振りで精緻な仕上がりで、口縁部は短く内傾する。内外面とも入念なヘラ磨きで、漆仕上げである。

31～66は土師器高坏である。脚部は長脚と短脚のものがあるが、短脚の高坏が圧倒的に多い。坏部の形状は半球形の碗形となるものがほとんどで、33は口縁部が直立気味に立ち、57は浅く扁平な坏部である。

46は長脚の高坏で、坏部及び脚裾部を欠損する。脚部は縦方向のヘラ削り後丁寧にナデ、内側も接合部に近い位置まで空洞である。外面は赤彩され、坏部内面は黒色処理されている。

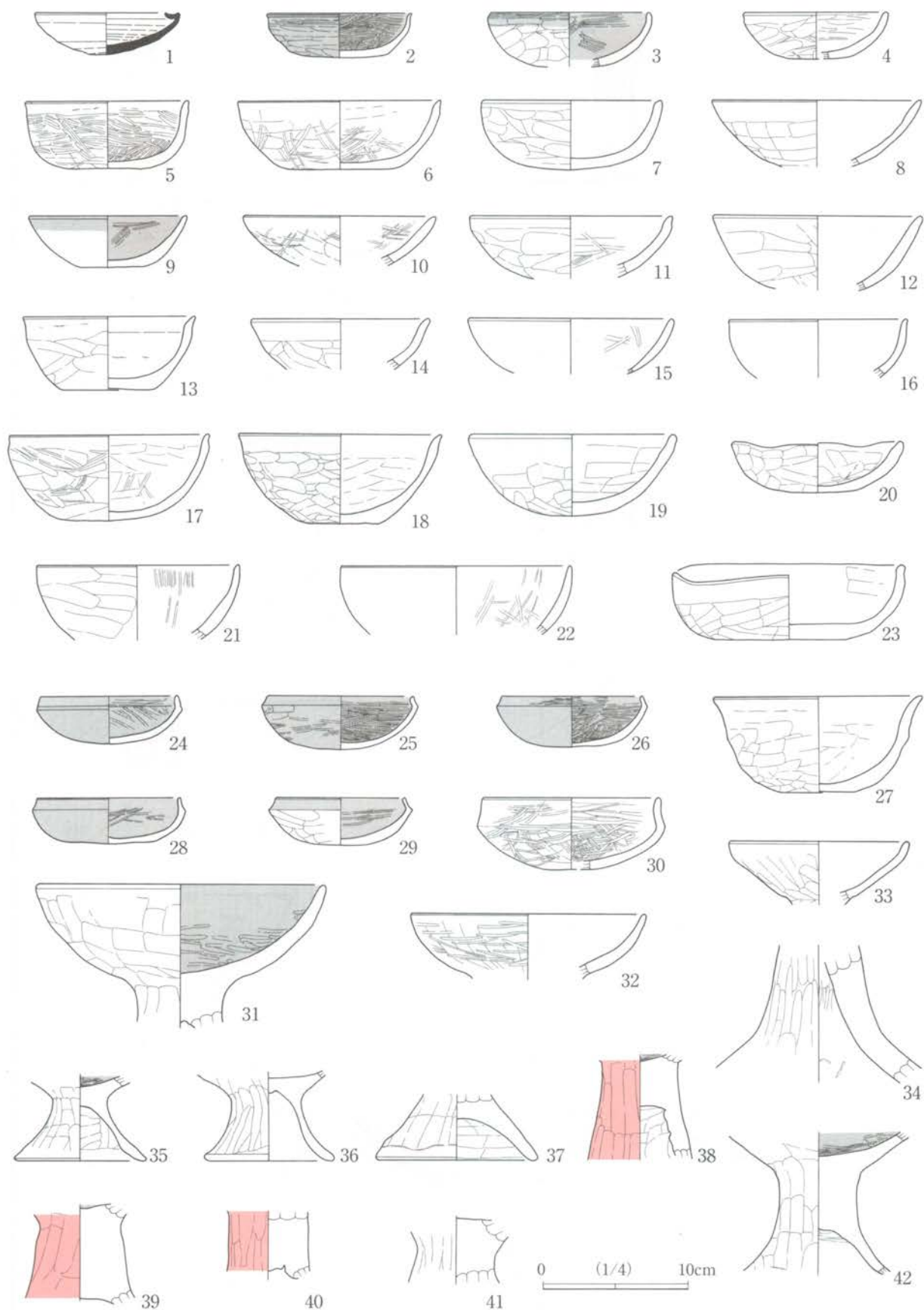
34・36・39・42・43・47・49・50～53・56・58・62～66は脚部が緩やかに開くもので、36・49～51・57・58は脚部がかなり短い。脚柱部は接合部近くまで空洞のものの中が詰まっているものがある。また、49・50は比較的小形の高坏である。脚部外面はいずれも縦方向のヘラ削りで、34は外面に赤彩を、34・39・42・43・47・52・53・58・62・64は坏部内面が黒色処理される。また、66は坏部内面に放射状のヘラ磨きを暗文風に施している。

35・48・57は脚部が「ハ」字状に開くもので、いずれも短い脚部であり、さらに接合部近くまで空洞となっている。32・61は坏部内面を黒色処理している。

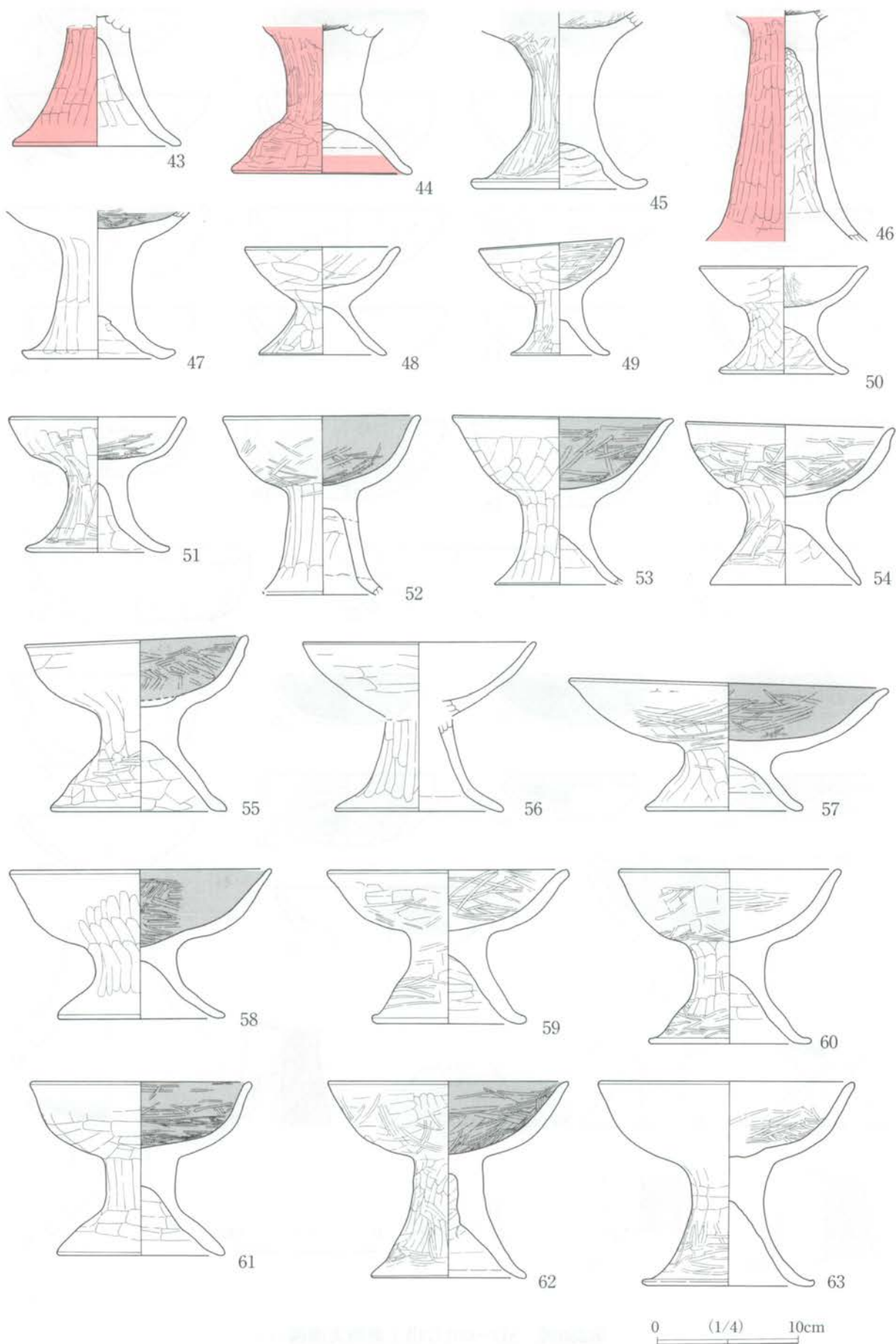
44・45・54・55・59・60・61は脚裾部が内湾気味に開くものである。このうち44・45は脚柱部が長く、脚柱部は中が詰まり、坏部と裾部の2か所で接合している。なお、44は外面に赤彩が、55・61は坏部内面を黒色処理している。

67～70・72は土師器鉢である。いずれも平底で、半球形の胴部に僅かに外反する口縁部が付く。口縁部はヨコナデで、胴部は横方向のヘラ削りである。72は他のものと比べてやや大きい。やはり胴部は横方向から斜め方向のヘラ削りで、底部近くに横方向のヘラ削りをさらに施す。

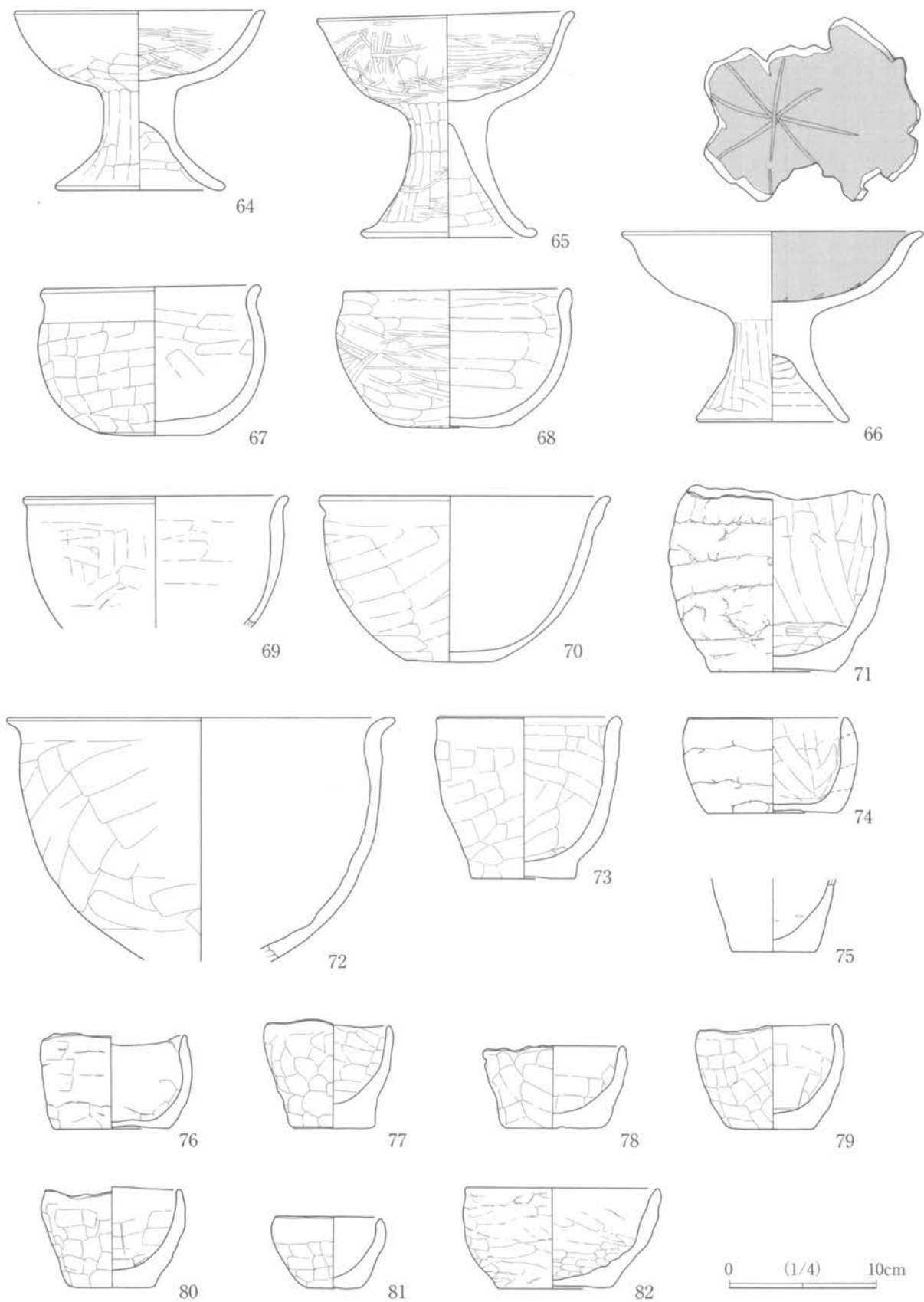
71・73～82はミニチュアの土器である。調整は粗雑で、器面に粘土紐接合痕を残すものが多く、底部にはすべて木葉痕がある。71・73はこの中でも大きく、深さがある。71は全体的に内湾気味の胴部で、73は口縁部が僅かに外反する。71は胴部に粘土紐接合痕を明瞭に残すが、73は横方向にナデで消している。また、73は口縁部にヨコナデを施している。77は小振りであるが、この中では深さのあるもので、外面は横方向のナデを施す。他のものは最大径より器高が低い。74・76・82は粘土紐接合痕を明瞭に残し、74・76は粗雑ではあるが、口縁部にヨコナデを施している。78～81はナデ調整で粘土紐接合痕を消している。81は口縁部にヨコナデが施される。なお、内面はすべて横方向のヘラナデである。



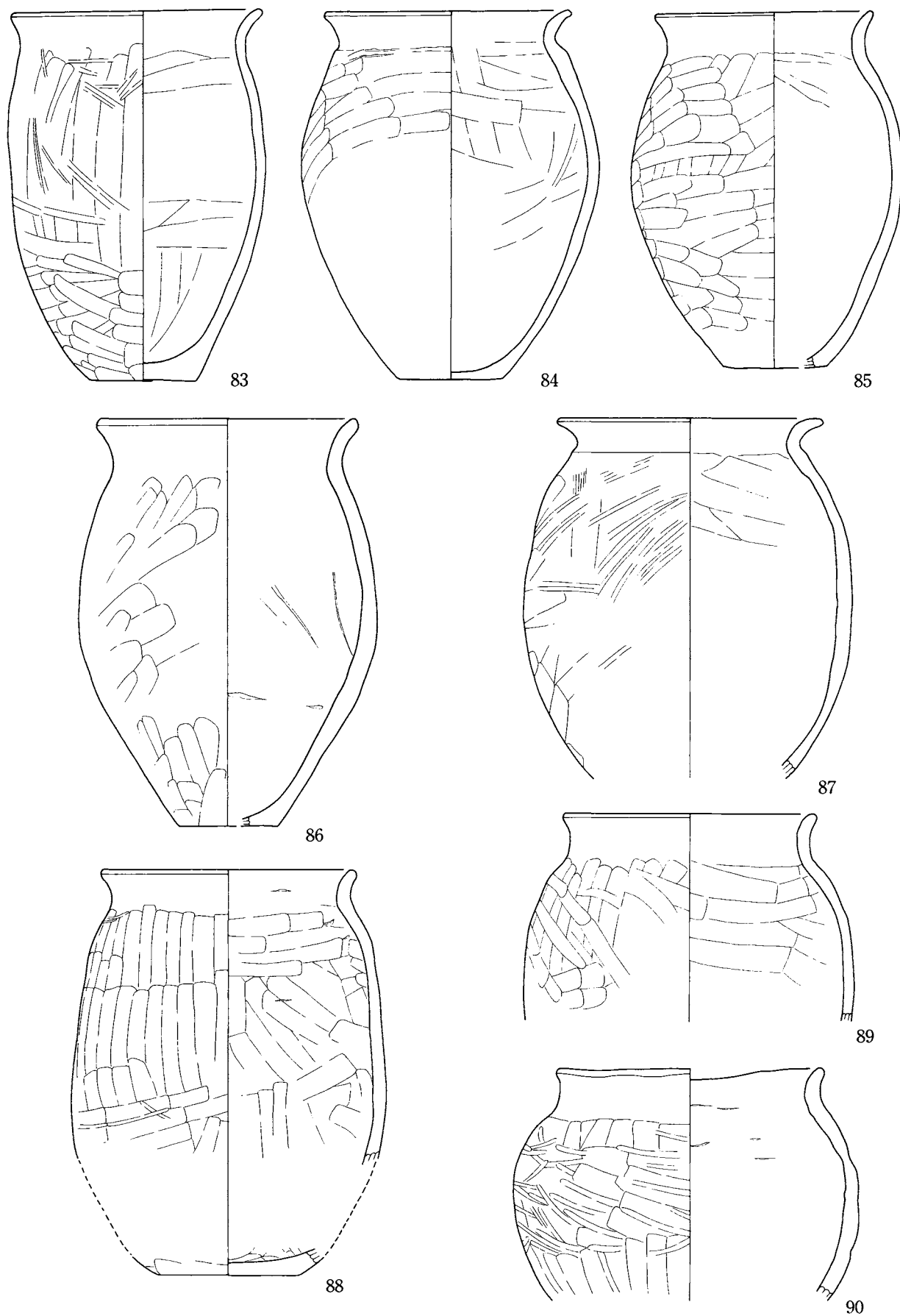
第258图 SD-001号出土遗物实测图(1)



第259图 SD-001号出土遗物实测图(2)

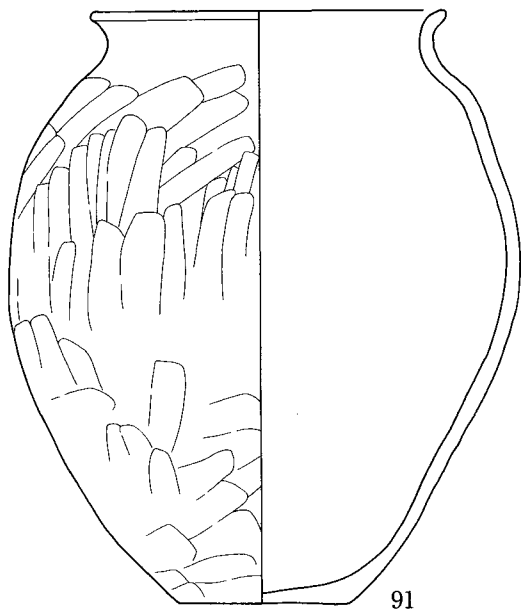


第260图 SD-001号出土遗物实测图(3)

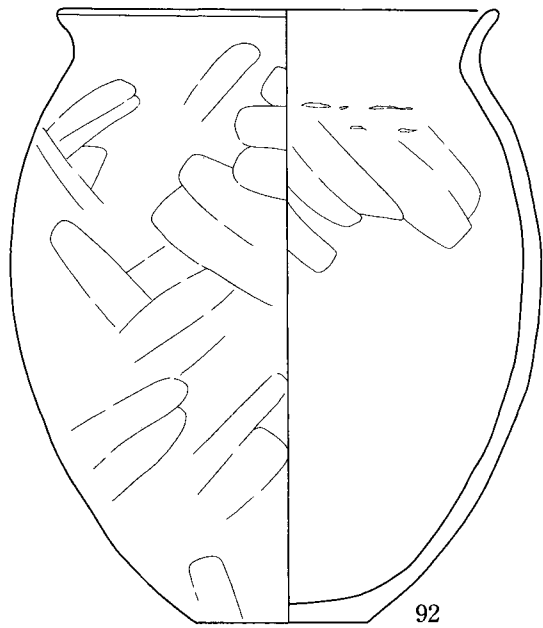


第261图 SD-001号出土遗物实测图(4)

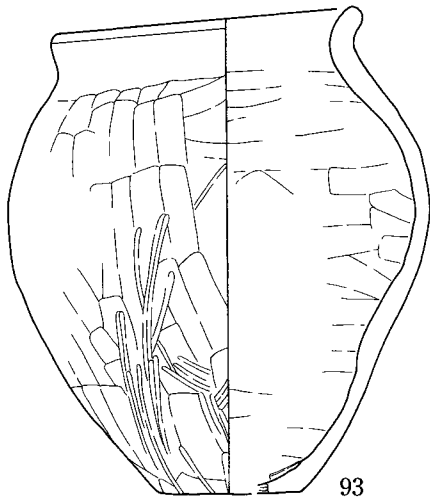




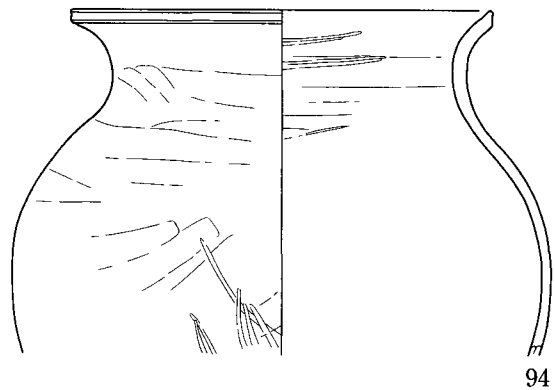
91



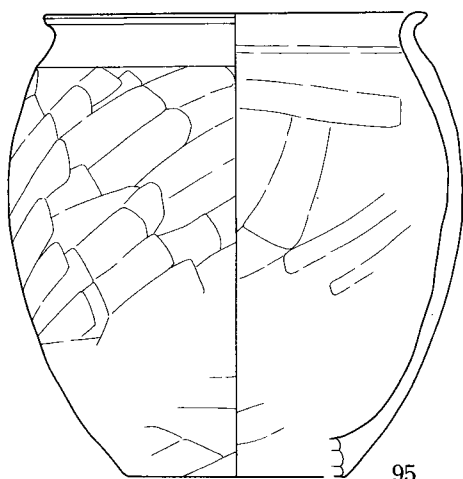
92



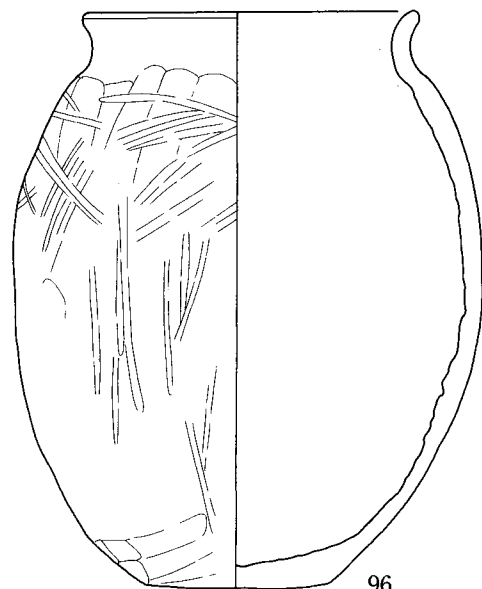
93



94



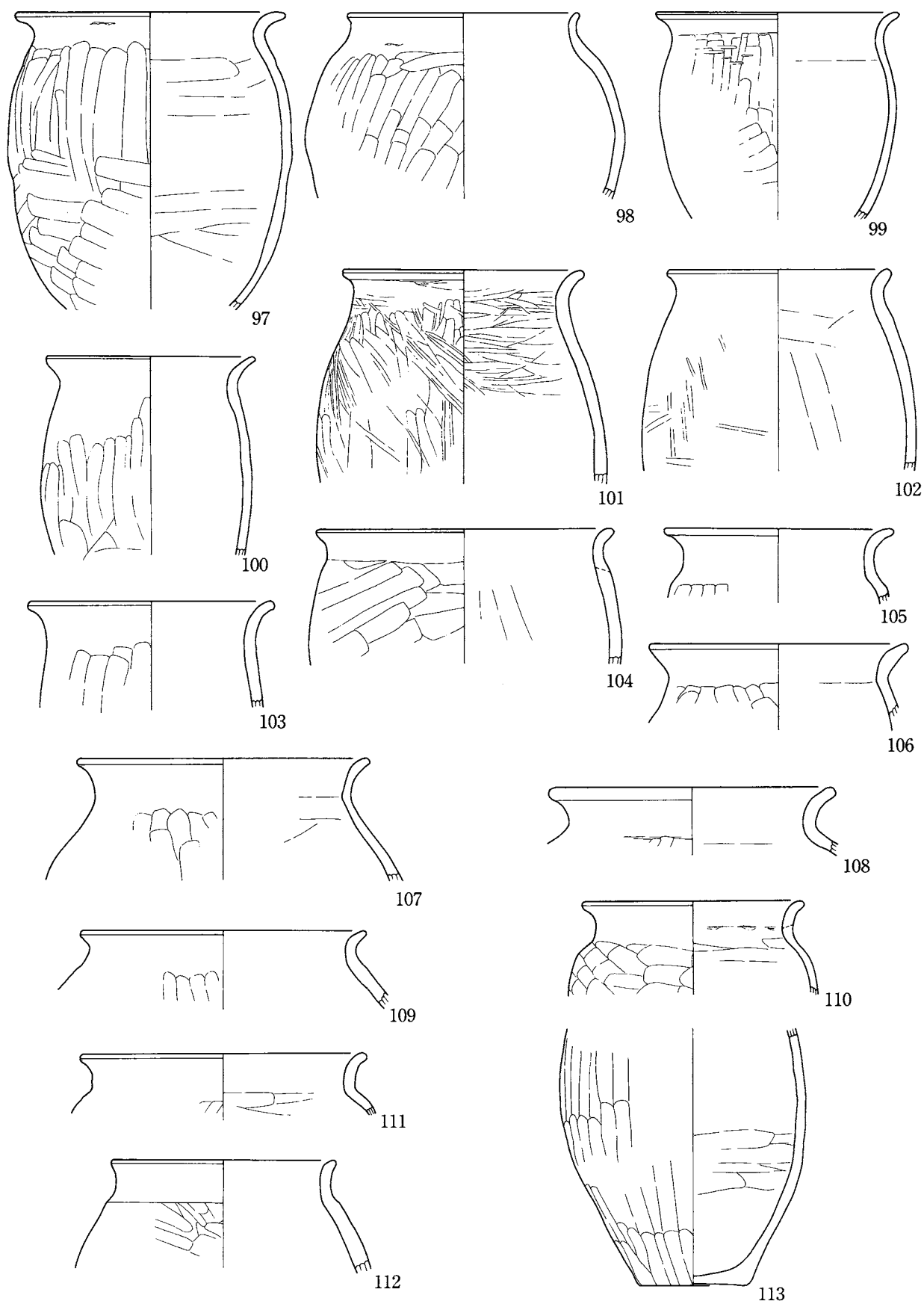
95



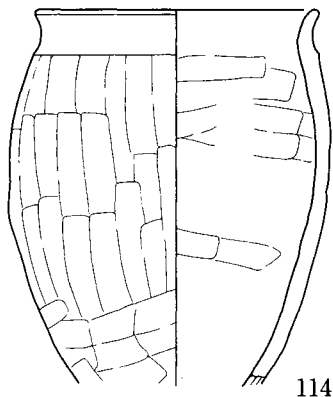
96

0 (1/4) 10cm

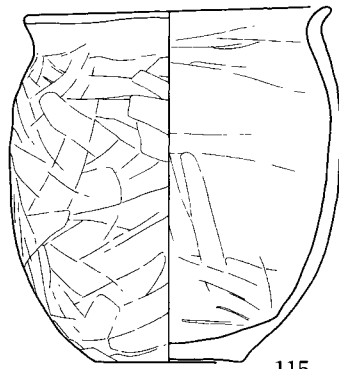
第262图 SD-001号出土遗物实测图(5)



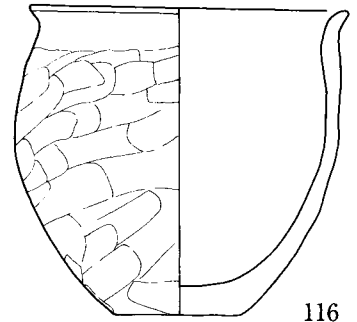
第263图 SD-001号出土遗物实测图(6)



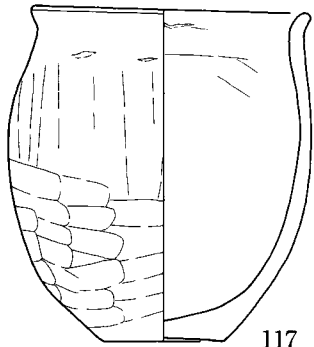
114



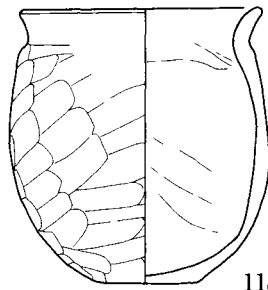
115



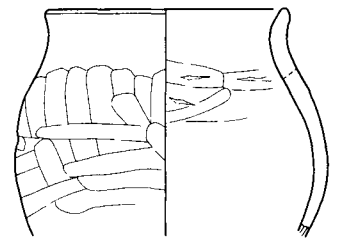
116



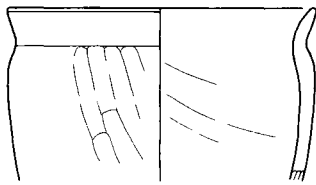
117



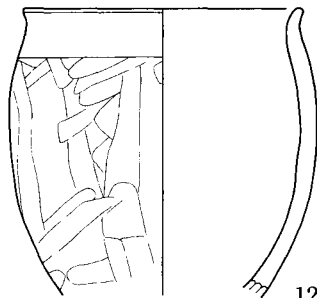
118



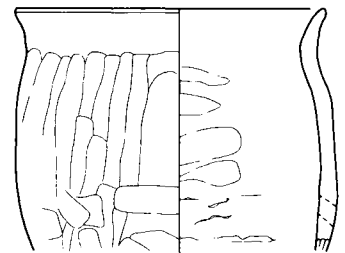
119



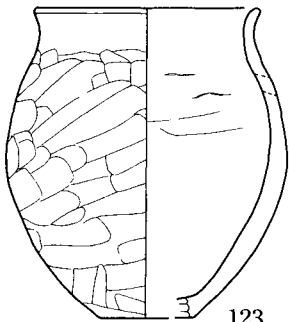
120



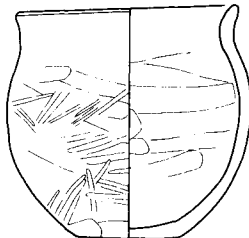
121



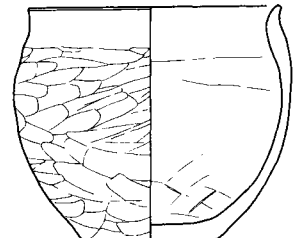
122



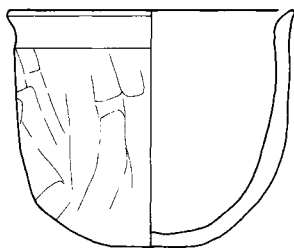
123



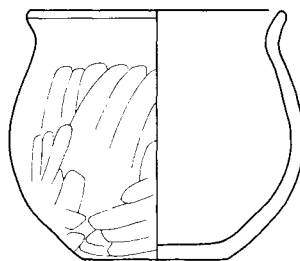
124



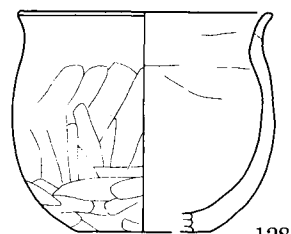
125



126



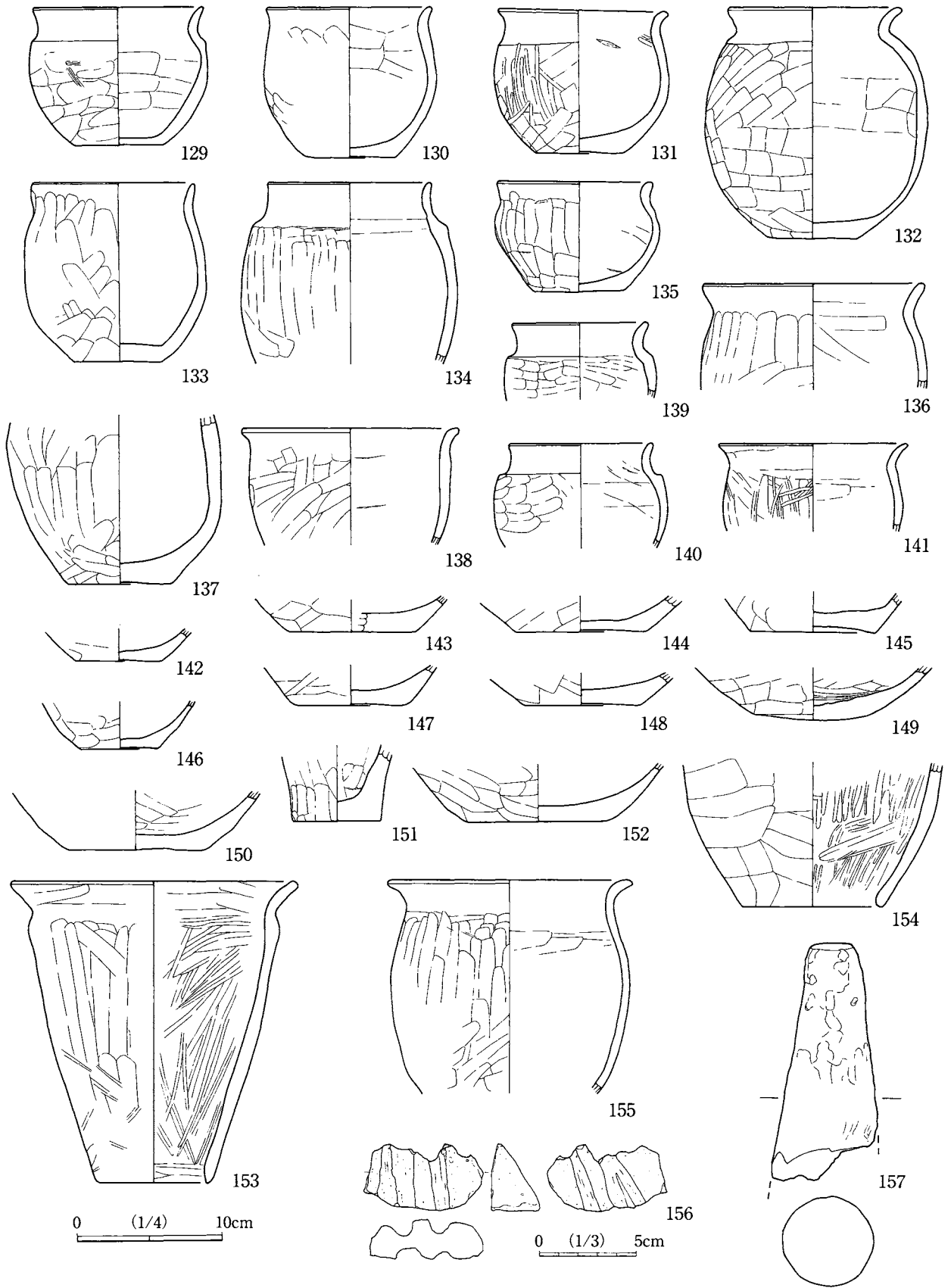
127



128

0 (1/4) 10cm

第264图 SD-001号出土遗物实测图(7)



第265图 SD-001号出土遗物实测图(8)

83～152は土師器甕である。法量としては口径15cm以上、器高25cm以上の大形の甕と、器高20cm以下の小形の甕に明確に分けることができる。口径・器高・底径のすべてが揃って計測できたのは、図示した58点の内の24点でしかなく、先の大形と小形の区分も、24点の計測値の散布状況をもとにしたものである。器高20cm以下の小形の甕についても、計測値の散布状況から識別はできないが、視覚的に大小の別があるように見え、口径13cm前後を境に区分が可能である。従って、土師器甕については大・中・小の3種の法量区分がなされる。

83～96は大形の甕として捉えられるもので、91・92のように胴部に張りのあるものと、83～86のように胴部に張りのないものがある。口縁部は94が受け口状を呈するが、他は外反して端部を丸く収めている。胴部外面は上半に縦方向、下半に横方向のヘラ削りを施すものが一般的であるが、84・85は口縁部下から横方向のヘラ削りを、95は斜め方向のヘラ削りを施している。また、90は縦方向のヘラ削りを施した後に胴部中位に横方向のヘラ削りを施す。

114～128は中形の甕として捉えられるものである。胴部も長くなく、口径と器高の比率が1.0前後となる。胴部外面の調整は、基本的には上半が縦方向、下半が横方向のヘラ削りであるが、115・116・118・123～125のように上半から横方向のヘラ削りを施すものも多い。なお、126は丸底である。

129～131・135・139は小形の甕として捉えられるものである。胴部は丸く、器高よりも口径が大きい。129・139・140は口縁部と胴部の境が角張っており、口縁部はヨコナデ、胴部は横方向のヘラ削りである。

153・154は土師器甕である。153は胴部が直線的に開き、口縁部も大きく外傾する。胴部外面は縦方向のヘラ削りで、底部周辺に横方向のヘラ削りを施す。内面は上半が横方向、下半が縦方向のヘラ磨きである。

156は軽石製の砥石である。幅1cm前後の半円形の溝が6条残る。157は土製支脚である。

第140表 SD-001号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 坏	9.3	2.9	丸	完形	微砂粒、長石(少)	灰色	受部径(10.1) 湖西産と思われる	663
2	土師器 坏	10.0	3.0	6.2	ほぼ完形	微砂粒、スコリア(少)、黒色粒	鈍い黄褐色	全面、漆仕上げ	637
3	土師器 坏	11.0	[3.7]	丸	2/3	微砂粒、スコリア(少)	内、鈍い黄褐色 外、鈍い黄褐色	内外、漆仕上げ 器面なめらか	12.70.76.95.98.107
4	土師器 坏	(10.0)	[3.2]	丸	口縁の一部	砂粒	赤褐色	内、ミガキ 外、ヘラズリ後一部ミガキ	1
5	土師器 坏	(11.4)	4.7	7.0	1/3	砂粒、黒色粒、長石、石英	褐色～黒褐色	底部端よく磨かれていて丸みを帯びている	46
6	土師器 坏	14.0	4.8	8.0	3/4	白色砂粒、小石、長石、石英、スコリア	暗褐色	口唇部摩滅	514.548.549.554.621
7	土師器 坏	12.6	4.8	丸	2/3	砂粒、長石、石英、スコリア	鈍い黄褐色一部黒色	器面摩耗、黒斑(外底部)	204.325
8	土師器 坏	14.4	[4.6]	—	底部欠他完形	粗砂粒、小石、長石、石英、スコリア	鈍い褐色一部黒褐色	内、剥落著しい 外、摩耗	513.515.585.610.617
9	土師器 坏	11.0	3.5	3.6	1/2	微砂粒、スコリア(少)	明黄褐色	内外、漆仕上げ	194.430.462.489.666
10	土師器 坏	13.2	[3.4]	—	1/2	砂粒、黒色粒、長石、スコリア	鈍い褐色	内外、二次的に火を受け器面剥落	277.279.373.381
11	土師器 坏	(14.0)	[4.3]	—	1/4	砂粒、黒色粒、石英、スコリア(多)	明赤褐色	器面摩耗	216.222.255
12	土師器 坏	14.4	[5.0]	—	1/2	砂粒、小石、長石、石英、スコリア	内、黄褐色～黒褐色 外、鈍い黄褐色	内、剥落著しい、炭素吸着	462.466.468
13	土師器 坏	(11.8)	5.1	6.4	底部完形 体部 1/3	白色砂粒、小石、長石(多)、石英、スコリア	体部、赤褐色 底部、黒褐色	炭素吸着断面まで及んでいる	624.626.627.644
14	土師器 坏	(12.4)	[3.5]	—	口縁の一部	砂粒	暗褐色～黒色	内、ナデ 外、ヘラズリ	646
15	土師器 坏	(14.2)	[3.8]	—	1/5	スコリア、石英、長石	黄褐色～黒褐色	内外、器面摩耗	1.118.151.359
16	土師器 坏	(12.4)	[4.0]	—	口縁1/3	砂粒	明褐色	内外、器面剥落	107.207
17	土師器 坏	(13.8)	6.0	丸	1/2	白色砂粒、小石、長石、石英	暗褐色～黒褐色	内外、ランダムにミガキ	613.629
18	土師器 坏	(14.0)	6.2	5.4	2/3	砂粒、黒色粒、スコリア、長石(多)、石英(多)	赤褐色一部黒色	内、丁寧にナデ 外、ヘラズリ痕明瞭にある	54
19	土師器 坏	14.4	[5.6]	丸	ほぼ完形	砂粒、小石、長石、石英	明赤褐色一部黒色	内、ピッチ上にスス付着	1.244
20	土師器 坏	11.8	3.5	丸	完形	砂粒、黒色粒、石英	内、明赤褐色 外、明褐色+黒色	器面歪んでいる 口縁波状	443.469
21	土師器 坏	(10.0)	[5.1]	—	1/4	スコリア、砂粒	鈍い黄褐色	内、ミガキ	516
22	土師器 坏	(16.0)	[4.8]	—	1/5	スコリア	橙色～褐灰色	内、ミガキ 器面摩耗	553.638.647
23	土師器 坏	16.0	5.3	10.0	完形	砂粒、長石、石英、スコリア	明赤褐色一部黒色	器面歪みあり	376.391.400.401.409.448.450.452.453.
24	土師器 坏	(9.5)	3.3	丸	1/3	微砂粒、スコリア	内、黄褐色 外、鈍い黄色	内外、漆仕上げ 外、摩耗	147.150.666

25	土師器	坏	10.0	3.7	丸	ほぼ完形	微砂粒	内、黒褐色 外、鈍い黄色~黒褐色	全面、漆仕上げ 外、摩耗	354
26	土師器	坏	9.7	3.5	丸	ほぼ完形	微砂粒	内、暗灰黄色~暗褐色 外、鈍い黄色一部黒褐色	全面、漆仕上げ 外、摩耗	355
27	土師器	坏	(14.4)	6.7	5.6	底部完形 体部1/3	白色砂粒、長石、黄色粒	褐色	底部木葉痕有り	566
28	土師器	坏	10.0	3.2	丸	ほぼ完形	微砂粒、スコリア(少)	鈍い黄色一部暗褐色	内外、漆仕上げ 外、摩耗一部剥落	421.427.459.474.477.666
29	土師器	坏	(9.0)	3.3	丸	口縁の一部	スコリア	鈍い黄色	内、ミガキ 外、ヘラケズリ	44
30	土師器	坏	12.4	5.0	丸	1/2	砂粒、長石、黒色粒	鈍い褐色	内外、ミガキ有り、一部剥落	1.65.66.67.68
31	土師器	高坏	20.0	[9.8]	-	坏部完形	砂粒、小石、長石(多)、石英(多)	内、黒色 外、鈍い赤褐色	内、黒色処理 外、剥落著しい	171.174.193.271.305.313.323.334.351.342.368.361.367.379.393.399.666
32	土師器	高坏	(16.3)	[4.4]	-	坏部1/2	石英、スコリア	内、灰黄褐色 外、橙色	内、丁寧なナデ 外、赤彩か?	591.643
33	土師器	高坏	(12.4)	[4.4]	-	坏部3/4	石英、スコリア	鈍い黄褐色	内、ナデ 外、器面摩耗	191.196.281.666
34	土師器	高坏	-	[9.5]	-	脚部の一部	白色粒	赤褐色	内、ヘラ痕跡、亀裂み残る 外、赤彩	56
35	土師器	高坏	-	[5.9]	9.2	脚部3/4	白色砂粒、長石、石英	坏部(内)、黒色 他褐色	坏部(内)、黒色処理(吸炭)	379.421.431.666
36	土師器	高坏	-	[6.2]	8.8	坏底部~脚部ほぼ完形	砂粒、黒色粒、長石、石英、スコリア	明褐色~褐灰色	外、ヘラケズリ痕明瞭、若干剥落有り	664
37	土師器	高坏	-	[4.5]	11.2	脚部2/3	白色砂粒、長石、スコリア	鈍い赤褐色		631
38	土師器	高坏	-	[7.2]	-	脚部完形	白色砂粒、石英(少)	坏部(内)、黒色 脚部(内)、灰褐色 脚部(外)、赤褐色	坏部(内)、黒色処理 脚部(外)、赤彩	6
39	土師器	高坏	-	[7.0]	-	基部のみ	白色粒、石英	内、黒褐色 外、鈍い赤褐色	坏部(内)、黒色処理 脚部(外)、赤彩	45
40	土師器	高坏	-	[5.0]	-	基部のみ	長石、石英	内、鈍い黄褐色 外、明褐色	外、赤彩	60
41	土師器	高坏	-	[4.6]	-	基部のみ	砂粒、長石、小石	黒褐色~褐色	坏部(内)、黒色処理	43
42	土師器	高坏	-	[10.0]	-	1/3	白色砂粒、小石(1~4mm)、長石、石英、スコリア	黒色、鈍い褐色	坏部(内)、黒色処理 器面摩耗	437
43	土師器	高坏	-	[9.3]	12.0	脚部ほぼ完形	白色砂粒、黒色粒、長石、石英	脚部(内)、鈍い黄色~暗灰黄色 脚部(外)、赤褐色	脚部(外)、赤彩	574
44	土師器	高坏	-	[10.5]	12.8	脚部ほぼ完形	白色砂粒、小石、長石、石英、スコリア	坏部(内)、黒色 脚部(内)、明褐色~赤色 脚部(外)、弱赤色~赤褐色	坏部(内)、黒色 脚部(内外)、赤彩	632
45	土師器	高坏	-	[12.6]	12.6	脚部完形	白色砂粒、長石、石英、スコリア	褐色	内、粘土紐巻き上げ痕鮮明	654
46	土師器	高坏	-	[16.4]	-	脚部3/4	砂粒、長石、石英、小石	坏部(内)、黒色 脚部(内)、黒褐色 脚部(外)、赤褐色	坏部(内)、黒色処理 脚部(外)、赤彩 脚部(内)、ヘラケズリ痕明瞭、粘土くず付着	660
47	土師器	高坏	-	[10.4]	-	脚部3/4	砂粒、黒色粒、長石、石英、スコリア	坏部(内)、黒色 脚部(内)、黒褐色 脚部(外)、橙色	坏部(内)、黒色処理 裾部、摩減	145.417
48	土師器	高坏	(11.0)	7.7	9.1	坏部1/4 脚部完形	粗砂粒、小石(1~2mm)、長石(多)、石英、スコリア	坏部(内) 黒色+橙色、他褐色	器面摩耗	267
49	土師器	高坏	10.3	8.0	7.0	2/3	砂粒、黒色粒、長石、石英	坏内、黄色~暗灰黄色 他鈍い褐色	坏部正円でない口径	368.393.405.419.666
50	土師器	高坏	(12.0)	7.7	9.2	坏部一部 脚部完形	砂粒、小石(1~2mm)、長石(多)、石英(多)、スコリア	明黄褐色	器面摩耗、小石の混入が目立つ	622
51	土師器	高坏	(12.6)	9.7	10.2	坏部1/4 脚部ほぼ完形	砂粒、黒色粒、石英	坏部、明褐色~暗褐色 脚部、明褐色	坏部(内)、粗にミガキ	373.519.572
52	土師器	高坏	(14.1)	12.7	(8.6)	1/2	白色砂粒、黒色粒、長石、石英(多)	坏部(内) 黒色 外、鈍い黄褐色~明褐色	坏部(内)、黒色処理 器面若干摩減	492
53	土師器	高坏	15.6	12.0	(9.0)	2/3	砂粒、小石(2~5mm)、長石、石英、スコリア	坏部(内)、黒色、他鈍い黄褐色~明褐色	坏部(内)、黒色処理	263.320.329.347.348
54	土師器	高坏	14.9	12.4	10.7	ほぼ完形	砂粒、黒色粒、長石(多)、石英(多)、小石	明褐色~赤褐色	坏部(内)、ランダムにミガキ 脚部の貼付部にヘラの痕多数有り	573
55	土師器	高坏	15.9	12.1	12.5	2/3	砂粒、黒色粒、石英、スコリア	坏部(内)、黒色 外、赤褐色	坏部(内)、黒色処理 内外、部分的に剥落有り	227.387.388.391.402.415.452.441.666
56	土師器	高坏	(16.7)	6.3	(12.0)	坏部1/3~底部1/2	スコリア、小砂粒	坏部(内)、褐色~明褐色 外、明赤褐色~鈍い赤褐色	内外、器面剥落	523.524.592.593.600.616
57	土師器	高坏	22.6	9.4	12.0	坏部1/4 脚部3/4	砂粒、黒色粒、長石、石英、小石	坏部(内)、黒色、他黄褐色~赤褐色	坏部(内)、黒色処理 脚部、歪み有り	1.115.325.666
58	土師器	高坏	(18.6)	10.7	11.9	坏部1/6 脚部完形	砂粒、小石(1~3mm)、長石、石英、スコリア	坏部(内)、黒色、他明褐色	坏部(内)、黒色処理、ミガキ痕強い	276.561
59	土師器	高坏	(17.6)	11.0	11.1	坏部1/5 脚部完形	砂粒、小石(1mm)、長石、石英	坏部(内)、灰黄色、他鈍い褐色~暗褐色	二次的に火を受けている 脚部(内) 剥落著しい	132
60	土師器	高坏	(15.8)	12.4	(11.6)	坏部1/2 脚部ほぼ完形	砂粒、スコリア(1~5mm)、長石、石英	坏部(内)、鈍い黄褐色、他褐色	坏部(内)、剥落著しい 脚部裾、摩減	154.155.412.422.429.431.455.460.461.467
61	土師器	高坏	(15.8)	12.5	(12.0)	1/2	白色砂粒、小石(2mm)、長石、石英、スコリア	坏部(内)、黒色、他明褐色~明赤褐色	坏部(内)、黒色処理 器面若干摩減	473.484.485
62	土師器	高坏	(17.2)	14.2	11.2	坏部1/2 脚部ほぼ完形	白色砂粒、黒色粒、長石、石英	坏部(内)、黒色、他赤褐色+暗褐色	坏部(内)、黒色処理 粗にミガキ 脚部裾摩減	238.254.345
63	土師器	高坏	(18.1)	14.8	12.2	坏部1/3 脚部ほぼ完形	白色砂粒、黒色粒、長石(少)、石英(少)	坏部(内)、鈍い黄褐色、他褐色~暗褐色	二次的に火を受けて剥落著しい	9.18.51.378.435.666
64	土師器	高坏	(17.0)	12.3	11.6	2/3	白色砂粒、小石、長石、石英、スコリア	鈍い黄褐色~灰黄褐色	全体的に剥落著しい	153.176.335.344.351.368.384.390.420.666
65	土師器	高坏	17.6	15.4	12.0	ほぼ完形	白色砂粒、黒色粒、長石(少)、石英	明褐色~灰黄色一部黒色	坏部の剥落著しい、脚部黒斑	255.308.351.363.367.371.372.413.418.432.447.602.666
66	土師器	高坏	(20.4)	13.0	10.4	坏部1/4 脚部ほぼ完形	粗砂粒、小石、長石、石英、スコリア	坏部(内) 黒色一部黄褐色 褐色~鈍い黄褐色	坏部(内)、放射状に暗文、黒色処理 外、器面摩耗	476
67	土師器	鉢	15.0	10.3	7.8	ほぼ完形	砂粒、小石(3mm)、長石、石英	鈍い赤褐色~暗褐色 外、底部黒色	器面摩耗と剥落有り、正円でない	243.340.353.369
68	土師器	鉢	15.5	9.5	8.4	完形	砂粒、小石(1mm)、長石(多)、石英	明黄褐色 底部、胴中央黒色	内外、胴中央部と底部に炭素吸着有り	434
69	土師器	鉢	(18.0)	[9.0]	-	1/4	白色砂粒、長石、石英、スコリア	鈍い黄褐色~灰黄褐色	器面摩耗	178.239.275.294
70	土師器	鉢	19.9	11.4	6.0	ほぼ完形	砂粒、小石(1~3mm)、長石(少)、石英、スコリア	明褐色一部黒色	器面の歪み大きく正円でない	131.133.161.209.241.243.245.247.252
71	土師器	手捏	13.0	11.8	8.5	ほぼ完形	砂粒、小石(1~3mm)、長石、石英	内、明赤褐色~黒褐色 外、明赤褐色、底部黒色	器形は手捏風で粗雑な作り 外、底部木葉痕	338
72	土師器	鉢	26.4	[16.5]	-	3/4	砂粒、小石(1~3mm)、石英、黒色粒	内、鈍い黄褐色~灰褐色 外、明褐色+黒色	二次的に火を受け、内面全体特に剥落著しい 口唇部摩減	495.503.505.507.546.564.566.567.638.640.641.649
73	土師器	手捏	12.6	11.1	7.0	ほぼ完形	砂粒、小石(1mm)、長石、石英	赤褐色 外、底部黒色	底部木葉痕	472.473.482
74	土師器	手捏	10.6	6.6	8.6	口唇部一部 ほぼ完形	粗砂粒、黒色粒、長石、石英	鈍い黄褐色~明赤褐色 外、1/4位黒色	器形はいびつで粗雑な作り 底部木葉痕	336.361.367.447.666
75	土師器	手捏	-	[5.0]	5.6	底部完形	砂粒、黒色粒、長石、石英	黒褐色 外、一部明褐色	内外、炭素吸着 外、木葉痕	370.385.417
76	土師器	手捏	9.7	6.5	7.8	ほぼ完形	白色砂粒、長石、石英	内、明褐色 外、鈍い黄褐色~黒褐色	粗雑な作り 外、底部木葉痕	366
77	土師器	手捏	8.3	7.0	5.6	完形	砂粒、長石、石英、小石(1~2mm)	内、黒褐色 外、鈍い黄褐色~黒褐色	粗雑な作り 外、底部木葉痕	480

78	土師器	手捏	9.4	5.6	6.6	完形	粗砂粒、長石(多)、石英	内、黒褐色 外、灰黄褐色	粗雑な作り 底部木葉痕	3
79	土師器	手捏	9.5	7.0	5.6	ほぼ完形	白色砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色～黒褐色	粗雑な作り 底部木葉痕	250
80	土師器	手捏	9.4	7.0	5.8	ほぼ完形	白色砂粒、小石(3mm)、長石、石英	内、鈍い黄褐色 外、明褐色一部褐色	粗雑な作り 底部木葉痕	481
81	土師器	手捏	7.3	5.0	4.0	ほぼ完形	砂粒、小石、長石(少)	内、鈍い黄褐色～黒色 外、鈍い黄褐色	外、底部木葉痕	394
82	土師器	手捏	13.3	7.0	7.8	口縁1/4 他完形	白色砂粒、小石、長石(多)、石英	赤褐色 外、底部黒色	粗雑な作り 底部木葉痕	367.396.666
83	土師器	甕	17.8	26.3	7.5	4/5	白色砂粒、小石(1~2mm)、長石、石英、スコリア	赤褐色一部黒色	器形にやや歪みあり	242.392.433.447.453.454.455.472.475.488.486.666
84	土師器	甕	17.7	26.3	7.4	2/3	砂粒、長石(少)、石英(少)	内、明赤褐色 外、広範囲褐色黒色一部明褐色	内、二次的に火を受けての剥落有り	226.340.357
85	土師器	甕	15.4	25.5	(7.4)	4/5	白色砂粒、小石(1~2mm)、長石、石英	内、鈍い黄褐色 外、赤褐色一部黒色	正円でない 外、剥落有り	18.72.141.265.287.264.265.288.290.291.318.299.318.328.333.358.359.322.602.666
86	土師器	甕	(18.7)	29.0	(6.9)	1/2	砂粒、小石(1mm)、長石(少)、石英(少)、スコリア	内、明褐色～鈍い黄褐色 外、明褐色～灰黄褐色	口縁部摩滅 内、ヘラによる沈線が目立つ 外、器面摩耗	1.501.520.521.533.536.555.556.569.644
87	土師器	甕	18.8	15.9	—	2/3	砂粒、小石、長石(少)、石英(少)	赤褐色一部黒色	外、口縁部スス付着 黒斑二箇所有り	383.415.293.389.211.226.289.402.260.421.405.399.471.284.370.240.128.171.182.117.463.120.189.280.226.464.269.666.270.135.285.368.219
88	土師器	甕	18.2	(29.0)	(10.0)	口縁～胴部1/3 底部1/2	砂粒、小石(1~2mm)、長石、石英	内、赤褐色 外、赤褐色～黄褐色一部黒褐色	内、刷毛目のような沈線部分的に残る	307.163.369.368.342.351.336.228.229.343.396.325.231.306.308.258.256.314.315.327
89	土師器	甕	(18.0)	[14.7]	—	1/6	粗砂粒、小石(1~2mm)、長石、石英(多)	内、褐色 外、鈍い赤褐色	内、剥落著しい 炭素吸着有り	420.452.477.489
90	土師器	甕	19.0	[16.7]	—	2/3	粗砂粒、小石、長石(多)、石英、スコリア	内、明褐色斑状に黄灰褐色 外、明褐色一部黒色	内、二次的に火を受け全面斑状に剥落著しく	662
91	土師器	甕	18.5	31.1	8.8	3/4	砂粒、長石(少)、石英(少)	内、灰褐色、鈍い褐色、黒褐色 外、黒色1/2鈍い褐色	内、丁寧なナデ	10.11.131.251.208.258.282.300.330.332.331.340.352.358.426.428.666
92	土師器	甕	23.0	32.0	8.9	ほぼ完形	白色砂粒、小石(1~5mm)、長石、石英、スコリア	内、明褐色、褐色 外、橙色～褐色一部黒褐色	内、二次的に火を受け、口縁部特に著しく剥落	1.152.160.187.396.996
93	土師器	甕	16.1	25.0	7.2	2/3	砂粒、長石(少)、石英(少)	黒色一部黄褐色	器面歪みあり 底部焼成後穿孔	10.17.19.25.88.102.89.35.69.71.14.78.103.32.15.91.96.79.92.31.87.74.73.80.81.75
94	土師器	甕	22.0	[18.0]	—	口縁2/3 胴央1/6	砂粒、雲母(多)、長石、石英(多)、小石	鈍い黄色～暗黄褐色	内外、大変丁寧な調整で器面めらか	166.221.272.332.346.358.392.451.666
95	土師器	甕	20.0	[24.3]	—	1/2	白色砂粒、黒色粒、長石、石英	明赤褐色一部黒色	外、火ダスキ痕、黒斑有り	192.210.233.310.347.342.349.360.398.438.461.479
96	土師器	甕	17.5	30.4	9.6	ほぼ完形	砂粒、小石、長石、石英	明赤褐色～暗赤褐色	内、ほとんど全面著しく剥落 外、若干摩耗	179.435.449.450.162.431.473.474.236.375.145.270.423.442.57.406
97	土師器	甕	(18.9)	[20.8]	—	底部欠 他1/3	砂粒、長石(少)、石英(少)、スコリア	内、明褐色 外、明赤褐色～暗赤褐色～黒褐色	内、ヘラナデ痕 外、ヘラケズリ痕明瞭にある	563.571.580.610
98	土師器	甕	(16.4)	[13.0]	—	口縁1/4	スコリア、石英	赤褐色	内、器面剥落	655
99	土師器	甕	(17.0)	[14.5]	—	1/3	白色粒、スコリア(少々)	褐色	内、丁寧なナデ 外、ヘラケズリ	562.639
100	土師器	甕	14.6	[14.0]	—	1/3	砂粒、長石、石英、スコリア	口縁～胴上鈍い黄褐色 胴央～暗褐色	内、丁寧なナデ	495.511.512.527.604.630.644
101	土師器	甕	16.8	[15.0]	—	1/3	砂粒、小石(1mm)、長石、石英	口縁鈍い赤褐色 他暗褐色	正円でない	504.547.568.596
102	土師器	甕	15.6	[14.1]	—	口縁2/3 胴部1/4	砂粒、長石(少)、石英(少)	鈍い赤褐色 一部黒色		344.339.384.399.351.391.400.410.411.368.427.651.666
103	土師器	甕	(17.3)	[7.6]	—	1/4	スコリア、長石、石英	内、暗赤褐色 外、鈍い赤褐色		505.597
104	土師器	甕	(21.0)	[9.5]	—	口縁1/4	スコリア、石英	褐色～暗褐色		109.319
105	土師器	甕	(16.0)	[5.1]	—	口縁の一部	スコリア、石英	赤褐色		39
106	土師器	甕	(17.0)	[5.5]	—	口縁1/6	スコリア、石英	赤褐色		50
107	土師器	甕	(20.6)	[8.5]	—	口縁1/6	スコリア、石英	暗褐色	内、ヘラナデ 外、ヘラケズリ	1
108	土師器	坏	(20.0)	[4.7]	—	口縁の一部	白色粒、石英、スコリア	褐色	口唇部のみ赤彩か。	57
109	土師器	甕	(20.0)	[5.3]	—	口縁1/6	スコリア、白色砂粒	赤褐色		26
110	土師器	甕	15.5	[6.5]	—	口縁～胴上部2/3	砂粒、長石、石英	鈍い赤褐色一部暗褐色	内、接合痕多く残る、頸部に強く刷毛状にヘラケズリ痕有り	33.36.644.535.493.517.546.635.542.498
111	土師器	甕	(20.0)	[4.4]	—	口縁1/8	白色砂粒	赤褐色		520
112	土師器	甕	15.4	[7.7]	—	口縁2/3 胴上部1/4	粗砂粒、黒色粒、長石、石英	内、黒褐色 外、鈍い赤褐色	内、炭素吸着 剥落有り	364.368.449.465
113	土師器	甕	—	[18.3]	7.3	口縁欠 他2/3	粗砂粒、黒色粒、長石(多)	内、暗褐色～黒褐色 外、暗褐色	外、若干砂粒状の付着物有り	620.623.644.645.630.502.508.541.576.587.604
114	土師器	甕	14.8	[19.7]	—	底部欠 他2/3	白色砂粒、長石、石英	内、鈍い黄褐色 外、赤褐色	内外、二次的に火を受け剥落激しい	433.479.489.490.491.487.472
115	土師器	甕	16.0	18.7	7.8	ほぼ完形	粗砂粒、長石、石英、スコリア	内、明赤褐色 外、黄褐色～明赤褐色一部黒色	器面歪みあり 外、摩耗	440
116	土師器	甕	16.4	16.0	6.8	ほぼ完形	白色砂粒、黒色粒、長石、石英、スコリア	内、灰黄褐色 外、鈍い黄褐色一部黒色	粗雑な作りで口縁歪みあり 外、摩耗	121.126.139.199.203.141.200.296
117	土師器	甕	14.5	17.6	6.3	ほぼ完形	砂粒、小石、長石、石英	褐色一部赤褐色 一部黒色	外、火ダスキ痕残る	113.313.350.351.439.487.659
118	土師器	甕	(12.8)	14.5	5.4	2/3	砂粒、小石(1~3mm)、長石、石英	鈍い黄褐色一部褐色		303.304.302.326.666.323.301.309.275.226.325
119	土師器	甕	12.7	[12.0]	—	1/2	砂粒、小石、長石、石英	暗褐色～赤褐色～灰黄褐色	内外、炭素吸着 内、剥落有り	570
120	土師器	甕	(16.0)	[9.0]	—	1/6	石英	明赤褐色		184.201
121	土師器	甕	14.6	[15.0]	—	2/3	砂粒、小石、長石(少)、石英、スコリア	内、鈍い赤褐色 外、鈍い黄褐色、黒褐色	内、若干剥落有り 外、口縁～胴上部にかけタール状にスス付着	30.142.149.335.336.343.351.370.396.477.541.666
122	土師器	甕	15.0	[12.7]	—	1/3	粗砂粒、小石、長石(多)、石英	内、鈍い黄褐色～黒褐色 外、赤褐色～黒褐色	器面若干波状で接合痕残る	516.519.565.608
123	土師器	甕	11.4	16.7	4.8	1/2	白色砂粒、長石、石英	内、褐色～黒褐色 外、赤褐色～褐色～黒褐色	丁寧にナデが加えられ器面めらか	571.628.636
124	土師器	甕	11.7	12.2	5.5	2/3	白色砂粒、スコリア(少)、長石、石英	内、褐色 外、灰褐色	内、刷毛目の様なナデ痕有り	1.28.529.551.554.568.581.665
125	土師器	甕	13.1	12.3	7.0	ほぼ完形	砂粒、スコリア(多)、長石(少)、石英(少)	鈍い赤褐色一部黒色	外、部分的にミガキが施され、器面めらか	353.356.358

126	土師器 甕	15.0	12.5	九	2/3	粗砂粒、小石、長石、石英	内、褐色～灰褐色 外、明褐色	口縁は楕円である 内外、摩耗	530.545.552.584.644.646
127	土師器 甕	13.6	13.2	7.5	1/2	砂粒、長石、石英、スコリア	内、灰黄褐色～灰褐色 外、明赤褐色～鈍い黄褐色一部暗褐色		590.607.618
128	土師器 甕	12.8	11.5	6.8	2/3	砂粒、長石(少)、石英(少)	内、赤褐色一部暗褐色 外、明赤褐色～黒褐色	外、口縁～底部全体の1/3位に炭素吸着有り	656.659
129	土師器 甕	(13.5)	9.5	6.0	口縁一部 他2/3	砂粒、黒色粒、長石、石英	内、鈍い黄褐色～暗褐色 外、鈍い赤褐色～暗褐色	外、一部炭素吸着有り 内、ピッチ状にスス付着	506.535.550.553
130	土師器 甕	(11.5)	10.3	6.4	口縁、胴中央1/3 他完形	白色砂粒、石英(少)	内、暗褐色一部赤褐色 外、明赤褐色一部黒色	内、炭素吸着 外、器面全体、薄く剥落有り	409.614.635.649
131	土師器 甕	11.8	10.0	5.8	完形	砂粒、長石、石英	内、赤褐色～褐色 外、褐色底部黒色	内、胴中央～底部にかけピッチ状のスス付着、頸部にヘラガキ沈着有り	246
132	土師器 甕	11.9	16.0	6.0	完形	砂粒、小石、長石、石英、スコリア	内、黄褐色～浅灰黄色 外、鈍い黄褐色～暗褐色	外、口縁～胴部全体に二次焼成によるスス付着	339
133	土師器 甕	11.3	12.5	6.0	3/4	砂粒、石英、スコリア	内、灰黄色～橙色 外、鈍い黄褐色～褐色、黒色	外、炭素吸着 木葉痕	13.77.79.83.85.93.95
134	土師器 甕	(11.4)	[12.5]	—	口縁～胴中央1/3	砂粒、小石(1～3mm)、長石(多)、石英(多)	内、赤褐色一部暗褐色 外、鈍い赤褐色～黒褐色	内、剥落有り	569.604.644
135	土師器 甕	10.7	7.6	6.0	ほぼ完形	砂粒、長石、石英	褐色～黒褐色	外、底部木葉痕	296.297
136	土師器 甕	(15.2)	[7.3]	—	口縁～胴上1/2	砂粒、小石、長石、石英(少)	内、明褐色 外、赤褐色	若干摩耗	106.123.311.350
137	土師器 甕	—	[11.7]	7.2	口縁～胴中央 欠底部3/4	白色砂粒(多)、長石(多)、石英、スコリア	赤褐色一部黒色	器面歪みあり	401.408.446.448.450.464
138	土師器 甕	(14.8)	[8.0]	—	口縁1/4	スコリア、石英	明褐色		224
139	土師器 甕	(9.4)	[5.3]	—	1/4	白色粒、スコリア、小石(1mm)	灰褐色		385
140	土師器 小型甕	(10.0)	[7.2]	—	口縁～胴中央1/4	白色砂粒、白針、長石、黄土粒	灰黄褐色	若干摩耗	184.242
141	土師器 甕	(13.0)	[7.0]	—	1/4	白色粒	褐色		53
142	土師器 甕	—	[2.3]	(6.0)	底部1/2	石英	赤褐色		1
143	土師器 甕	—	[2.2]	(8.8)	底部1/4	スコリア	内、灰黄褐色 外、明赤褐色～黒褐色	外、器面ざらついている	404
144	土師器 甕	—	[2.3]	(9.0)	底部1/3	スコリア	暗赤褐色	内、器面剥落	657
145	土師器 甕	—	[2.7]	9.0	底部2/3	砂粒、黒色粒	内、鈍い黄褐色 外、褐色黒色	外、炭素吸着	186.216
146	土師器 甕	—	[3.3]	5.4	底部完形	白色砂粒、長石、石英	内、灰黄褐色 外、黒褐色一部黄褐色	外、炭素吸着 器面ざらつき有り	397
147	土師器 甕	—	[2.7]	(8.0)	底部のみ	スコリア、砂粒	褐色		185
148	土師器 甕	—	[2.1]	(8.0)	底部1/3	スコリア、石英	赤褐色		396
149	土師器 甕	—	[3.6]	8.1	底部完形	砂粒、小石、長石、石英	内、明褐色 外、鈍い褐色	底部平らでない 内、粘土くずがそのまま付着	453.646
150	土師器 甕	—	[3.9]	9.0	底部1/2	粗砂粒、長石	内、暗褐色 外、赤褐色、灰褐色	外、二次的に火を受けて剥落著しい	522.577
151	土師器 甕	—	[5.3]	6.0	底部完形	砂粒、長石(少)、石英(少)	黒褐色一部鈍い褐色	内外、炭素吸着 硬質	47
152	土師器 甕	—	[4.0]	(10.0)	底部のみ	スコリア、砂粒	褐色		543.562
153	土師器 甕	(19.8)	21.3	(8.0)	1/5	砂粒、長石、石英、スコリア	内、赤褐色 外、鈍い黄褐色	内、全面強くミガキ痕	601.633
154	土師器 甕	—	[9.7]	(10.0)	底部1/4	スコリア、白色砂粒、石英	鈍い赤褐色～黒褐色	内、ナデ後ミガキ 外、ヘラケズリ	49
155	土師器 甕	(16.0)	[14.7]	—	口縁～胴部1/4	砂粒、長石、黒色粒	鈍い赤褐色、一部黒褐色	外、黒斑あり、口縁端摩滅	532.558.620.638

### SD-002号溝 (第266図)

D8グリッドで検出された溝で、西側台地の基部を横切る形で構築されている。SI-028号・SI-055号と重複し、溝が新しい。溝はほぼ直線で、N-63°-Eの方向である。調査区内では約10.5mが調査でき、幅0.5m～0.6mで、深さは0.2m前後である。南側はほぼ平行して現在の道路により削平されている。図示できる遺物はない。

### SD-003号溝 (第267図)

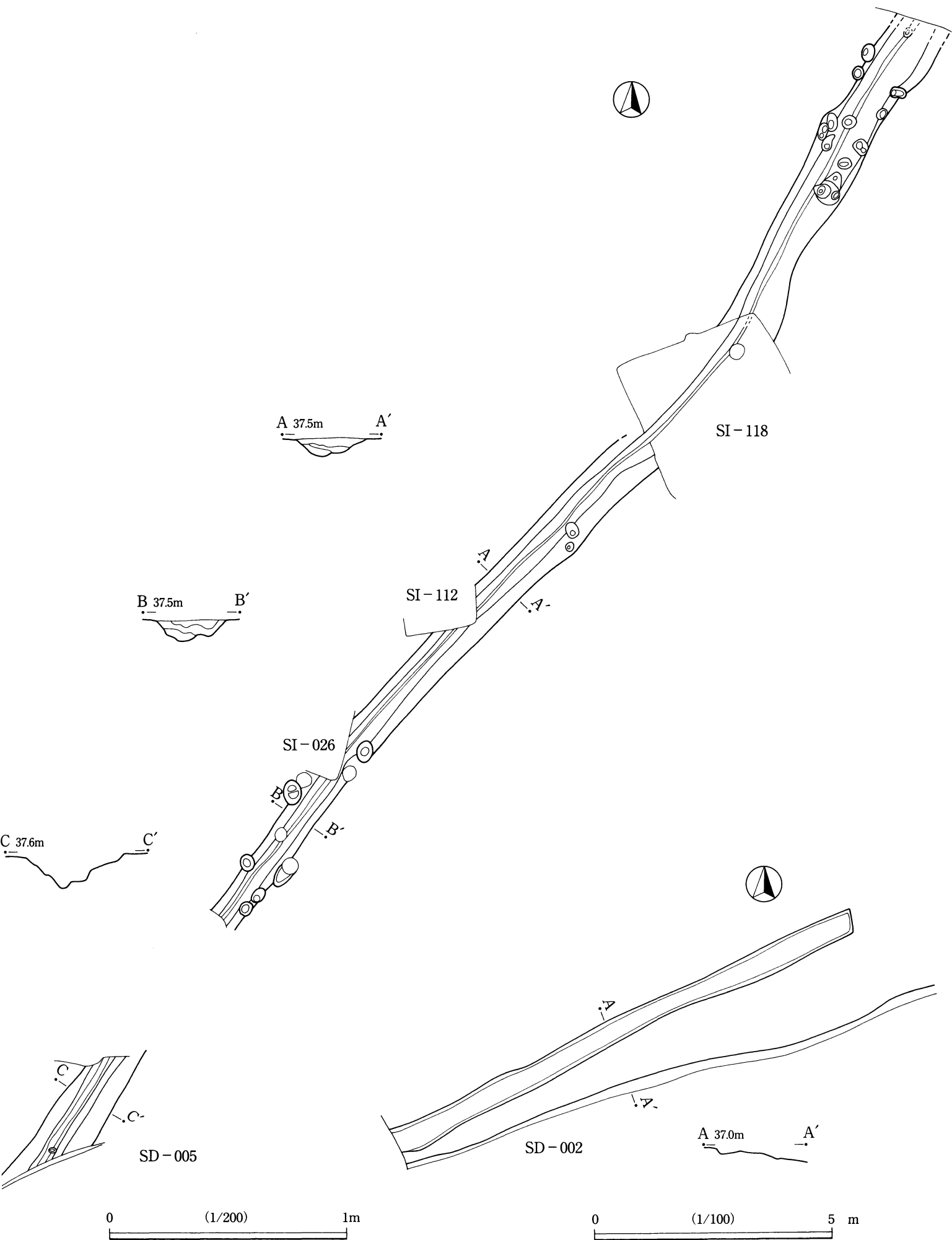
B8グリッドからB9グリッドにかけて所在する溝で、調査区西端の台地縁辺に沿って位置する。SI-030号と重複し、溝が新しい。調査区内で約15mが調査できた。やや蛇行するが概ねN-38°-Wの方向である。幅は0.6m～1.0mで、深さは0.5m以下である。2点の遺物を図示した。

1は須恵器甕もしくは鉢である。口縁部は胴部から直角に短く開き、端部の断面は三角形である。胴部は横位の叩きで、胎土には雲母粒・石英粒を多量に含んでいる。2は須恵器大甕の口縁部の破片である。

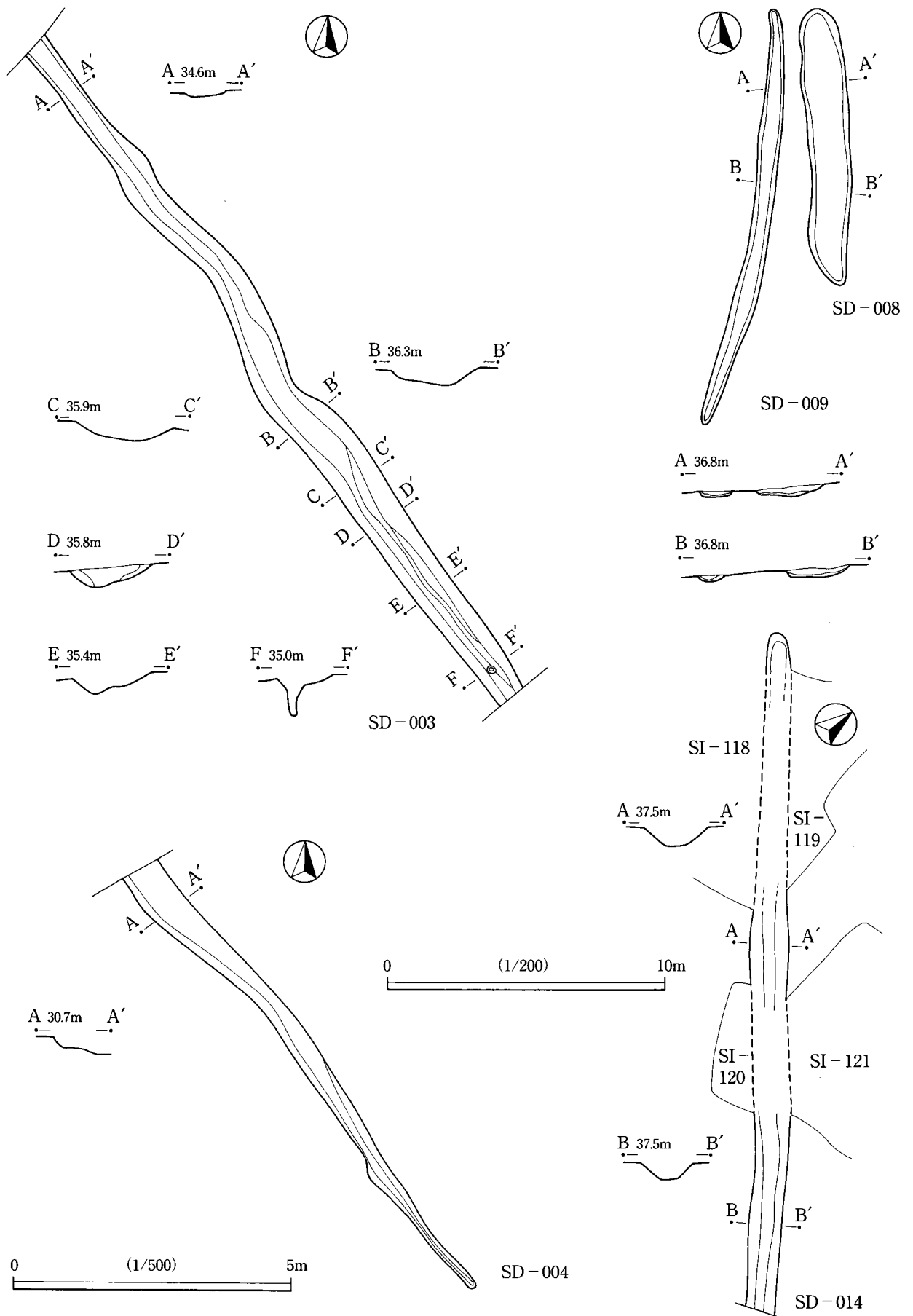
第141表 SD-003号出土土器観察表

挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 鉢	(28.0)	[13.6]	—	口縁1/12	石英、スコリア、長石、小石	灰色	内、無文の当て具痕	3
2	須恵器 甕	—	—	—	口縁片	石英	灰色		1





第266图 SD-002号·005号实测图



第267图 SD-003号·004号·008号·009号·014号实测图

**SD-004号溝**（第267図）

D5グリッドからE6グリッドにかけて所在する溝で、調査区内で約10mが調査できた。遺跡中央で北西へ向けて開く浅い谷で台地が二分されているが、その谷に沿って西側台地の縁辺に構築されている。溝はほぼ直線で、N-40°-Wの方向である。南東端部は自然になくなっており、北西に向けて徐々に幅が広くなり、最大で0.8mとなる。図示できる遺物はない。

**SD-005号・SD-014号溝**（第266, 267図, 図版66）

N1グリッドからL4グリッドにかけて所在する溝で、調査時においてSD-010と交差する南側をSD-005号、北側をSD-014号として調査した。SD-010号・SI-118号・SI-112号・SI-026号・SB-022号・SI-031号・SI-040号・SI-109号と重複する。竪穴住居跡より溝が新しい。調査区内で約38mが調査できた。溝はほぼ直線で、N-35°-Eの方向である。幅は約1mで底面は2段に掘り込まれている。深さは0.5m~0.8mで、壁の所々にピットがある。図示できる遺物はない。

**SD-008号・009号溝**（第267, 269図）

J4グリッドに所在する溝で、全長約5mである。また、ほぼ平行してSD-009号溝があり、SD-009は全長約7.5mである。幅はSD-008が約1m、SD-009が約0.6mである。確認面からの深さは0.4m前後で、断面は皿状である。SD-008の遺物を4点図示した。

1・4はロクロ土師器杯の口縁部破片である。4は体部下端に手持ちヘラ削り、底部は全面一方向ヘラ削りを施す。底部外面に「道カ」と墨書される。

第142表 SD-008号出土土器観察表

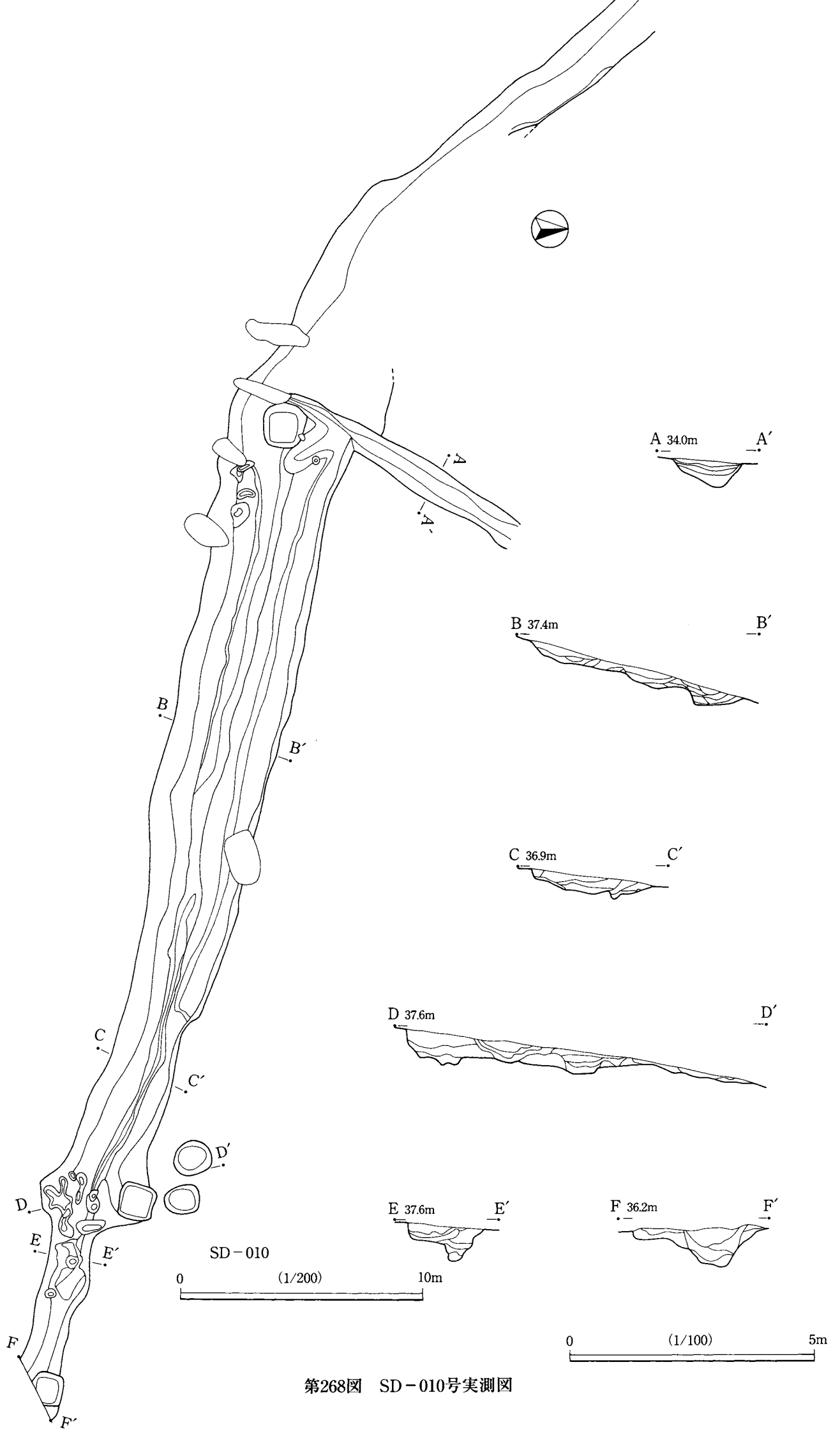
挿入番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	ロクロ土師器杯	(11.3)	[3.4]	-	口縁1/6	スコリア、黒色粒	鈍い黄褐色	内外、ヨコナデ	1
2	土師器甕	-	[1.5]	(7.3)	底部のみ	スコリア、白色粒	鈍い黄褐色		2
3	須恵器甕	-	-	-	胴部片	黒色粒、小石	灰黄色		10
4	ロクロ土師器杯	(13.4)	3.6	(7.8)	底部1/3 体部1/6	砂粒、小石、長石、石英、スコリア	鈍い黄褐色	底部墨書「道」?	9

**SD-006号・010号溝**（第268, 269図, 図版66）

M1グリッドからP2グリッドにかけて所在する溝で、調査時にSD-005号と交差する西側をSD-010号、東側をSD-006号として調査した。東側台地の北東縁辺に沿うように走っており、延長約32mを調査した。幅は最大で約2.5mを測り、3回以上にわたって掘り直しされ、底面も掘り直しに伴って段がある。古墳時代の土師器とともに中世の捏鉢の破片が出土しており、中世以降の通路と考えられる。

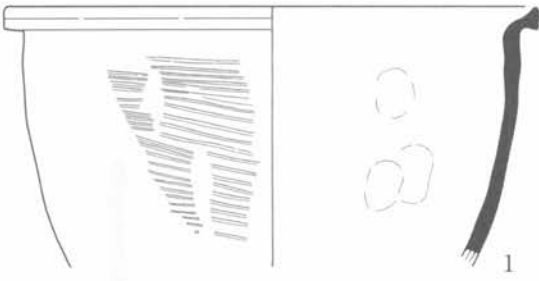
1~3は鬼高期の須恵器模倣の坏である。口縁部は短く内傾し、口縁部外面から内面にかけて丁寧にヘラ磨きを施す。4・5は浅い丸底の坏である。口縁部はヨコナデで、底部は不定方向に削っている。内面は丁寧に磨かれる。7はおそらく平底になるであろう坏である。体部は横方向のヘラ削りである。8はロクロ土師器杯である。体部下端に丸味があり、体部下端から底部にかけて手持ちヘラ削りを施す。9は土師器盤の高台部分の破片である。断面方形のしっかりした高台が付き、内外面とも赤彩される。

6・7・10・12は土師器のミニチュアで、いずれも粗雑な調整で、外面に粘土紐接合痕を残す。6・11は内面を丁寧にナデ、6は底部に木葉痕を残す。

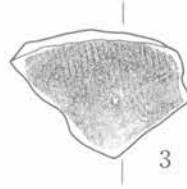
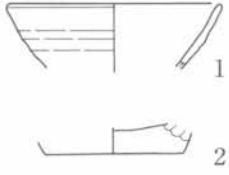


第268图 SD-010号实测图

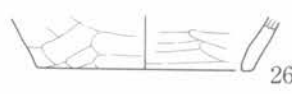
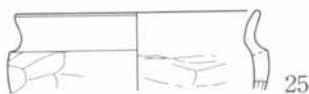
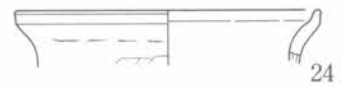
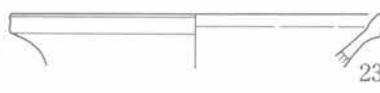
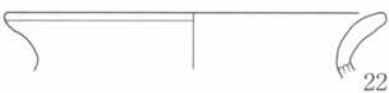
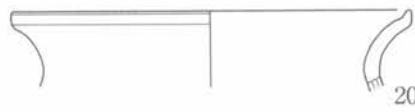
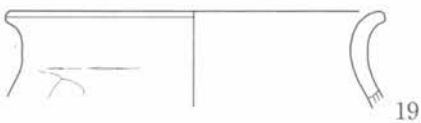
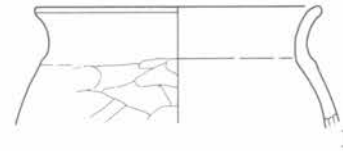
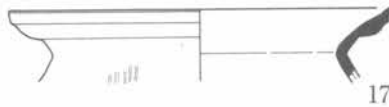
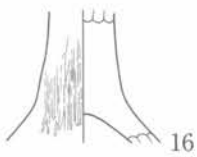
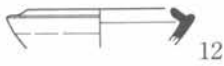
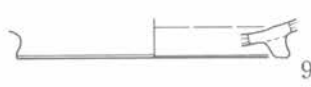
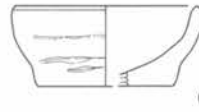
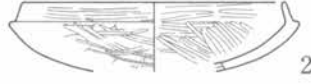
SD-003



SD-008

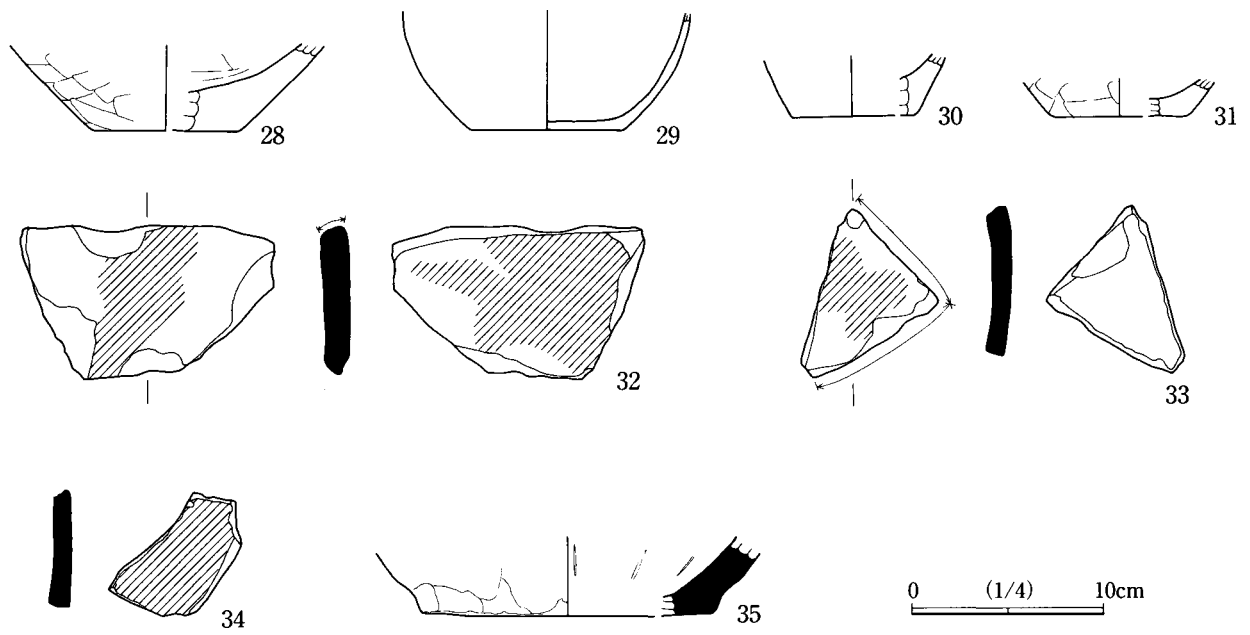


SD-010



0 (1/4) 10cm

第269图 SD-003号·008号·010号出土遗物实测图



第270図 SD-010号出土遺物実測図

第143表 SD-010号出土土器観察表

挿図番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号	
1	土師器 坏	(12.0)	[3.0]	—	1/7	スコリア	鈍い黄褐色	内外、ミガキ	1	
2	土師器 坏	(13.8)	[3.6]	—	1/7	スコリア	内、鈍い黄褐色 外、褐灰色	内、漆仕上げ	1	
3	土師器 坏	(13.4)	[2.7]	—	1/7	スコリア、石英	内、黒色 外、褐色	内外、黒色処理	1	
4	土師器 坏	(14.2)	[2.8]	丸	1/6	黒色砂粒	内、黄灰色 外、橙色	内、ミガキ	1	
5	土師器 坏	(13.3)	[2.1]	—	—	口縁の一部	黒色粒	内、ミガキ 外、ヘラケズリ	1	
6	土師器 手捏	(9.9)	4.2	(7.1)	1/4	黒色粒	褐色	内、ナデ 外、輪積み痕残る	1	
7	土師器 坏	(12.0)	[4.9]	—	—	口縁1/8	黒色砂粒	内、ミガキ 外、ヘラケズリ	1	
8	土師器 坏	—	[2.4]	(7.6)	—	底部1/6	白色砂粒、スコリア	鈍い褐色	1	
9	土師器 高台付坏	—	[2.0]	(14.3)	—	高台部1/8	スコリア	内外、赤彩 貼付高台	1	
10	土師器 手捏	(6.5)	3.5	丸	2/3	石英、長石	鈍い黄褐色		1	
11	土師器 手捏	—	[2.5]	(5.5)	—	底部1/3	スコリア、長石	鈍い黄褐色-黒褐色	1	
12	須恵器 坏	(7.7)	[2.0]	—	1/8	微砂粒	黄灰色	内外、ヨコナデ	1	
13	須恵器 高台付坏	—	[2.4]	(9.1)	—	高台部1/2	石英、長石	黄灰色	内外、ヨコナデ	14
14	須恵器 高台付坏	—	[2.0]	(8.0)	—	高台部一部	石英、長石	灰色	内外、ヨコナデ	1
15	土師器 甕	—	[8.0]	8.0	—	底部2/3 底辺部1/6	砂粒、長石、石英	褐色	薄手な作り 内、剥落著しい	1
16	土師器 高坏	—	[6.3]	—	—	脚部上部	黒色粒	赤褐色	外、器面剥落	1
17	須恵器 甕	(20.0)	[3.8]	—	—	口縁の一部	砂粒	明赤褐色	外、平行叩き	1
18	土師器 甕	(15.0)	[6.3]	—	—	口縁1/6	石英、砂粒	黒褐色		1
19	土師器 甕	(19.8)	[5.0]	—	—	口縁1/5	長石、スコリア	内、橙色 外、鈍い黄褐色		1
20	土師器 甕	(21.0)	[3.9]	—	—	口縁1/8	石英、スコリア	鈍い黄褐色		1
21	土師器 甕	(14.2)	[4.2]	—	—	口縁1/8	石英、スコリア	内、橙色 外、明赤褐色	内、輪積み痕一部残る	1
22	土師器 甕	19.8 ~ 20.0	[3.2]	—	—	口縁の一部	スコリア	明赤褐色		1
23	土師器 甕	(19.5)	[2.7]	—	—	口縁の一部	スコリア	赤褐色		1
24	土師器 甕	15.8 ~ 16.0	[2.7]	—	—	口縁の一部	砂粒	鈍い褐色		1
25	土師器 甕	(12.9)	[4.2]	—	—	口縁1/8	スコリア、石英、長石	鈍い褐色	内、輪積み痕残る	1
26	土師器 甕	—	[2.9]	(12.2)	—	底部1/3	スコリア、長石	鈍い褐色	内、ナデ 外、ヨコナデ	1
27	土師器 甕	—	[3.4]	(7.2)	—	底部の一部	スコリア、黒色粒	鈍い黄褐色	外、器面摩耗	1
28	土師器 甕	—	[4.5]	(7.5)	—	底部1/5	スコリア、石英	褐色		1
29	土師器 甕	—	[6.1]	(8.0)	—	底部の一部	スコリア、白色砂粒	明褐色		1
30	土師器 甕	—	[3.1]	(6.4)	—	底部1/2	黒色粒、白色粒、スコリア	内、黄褐色 外、橙色	内外、器面剥落	1
31	土師器 甕	—	[2.0]	(7.3)	—	底部1/4	石英、長石、スコリア	内、明赤褐色 外、灰黄褐色		1
32	須恵器 甕	—	—	—	—	胴部片			転用砥石	5
33	須恵器 甕	—	—	—	—	胴部片			転用砥石	4
34	須恵器 甕	—	—	—	—	胴部片			転用砥石	1
35	常滑 甕	—	[4.2]	(15.3)	—	底部1/7	石英、長石	内、褐灰色 外、灰褐色	内、表面滑らか	11

12は須恵器杯身である。口縁部は短く内傾している。13・14は須恵器高台坏である。13は胎土に石英粒を多く混入する。15は土師器蓋のつまみの破片である。16は土師器高坏の脚部の破片で、裾部が開く。脚柱部は縦方向のヘラ削りで、外面に赤彩を施す。

18~25・27~31は土師器甕である。いずれも小片である。25は肩が角張り、胴部に横方向のヘラ削りを施す。

32～34は須恵器甕の胴部破片で、破片中央部が摩滅しており、転用砥石として使用したものである。  
35は常滑の大甕の底部破片である。内面は二次利用されたと考えられ、かなり摩滅している。

#### SD-014号溝（第267図）

M2グリッドからN3グリッドにかけて所在する溝で、SD-005号、SI-118号、SI-119号、SI-120号、SI-121号と重複しており、竪穴住居跡より溝が新しい。延長約12mを調査し、さらに東側へ続いている。幅は約0.7mで、断面は逆台形を呈し、0.3m～0.4mの深さである。

#### 5 遺構外出土の遺物（第271、272図、図版141、142）

1～4・63は須恵器である。1は坏蓋で、宝珠様のつまみが付く。天井部に回転ヘラ削りが施され、ロクロ回転方向は左である。2は高台坏で、比較的高いしっかりとした高台が付く。体部下端から底部にかけて回転ヘラ削りを施し、ロクロ回転方向は右である。3・4は坏で、体部下端はともに手持ちヘラ削りを、底部は3が全面一方向、4が不定方向に削っている。63は底部破片で、外面に墨書されている。

5～7は鬼高期の土師器坏である。口縁部は短く内傾し、内外面とも丁寧に磨いている。5・7は漆仕上げとみられる。

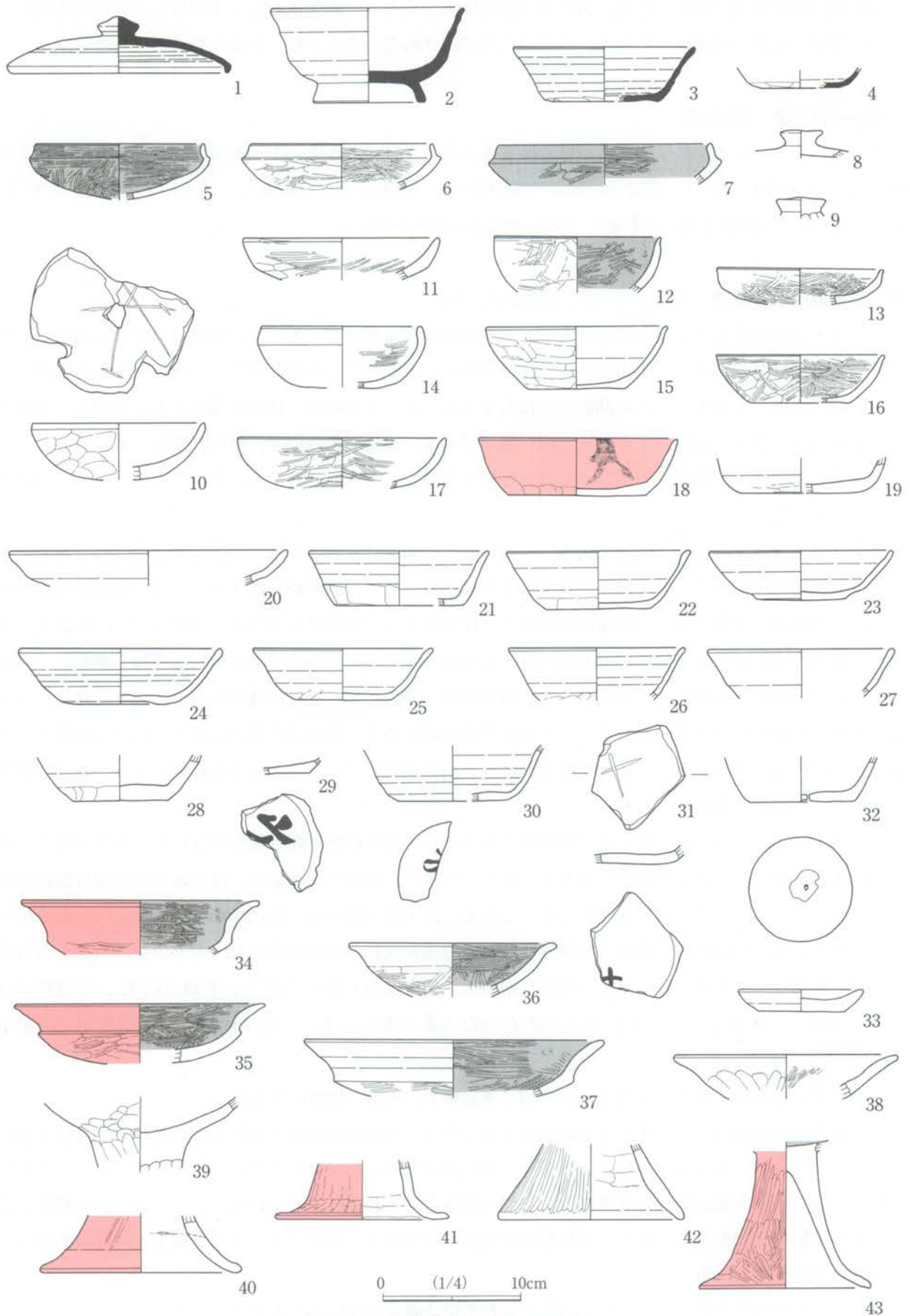
8・9は土師器蓋のつまみ部分である。9はつまみの頂部に赤彩される。10～17は土師器坏である。11～14は鬼高期の坏である。12・14は半球形の丸い体部で、14は口縁部が内傾する。12は内面黒色処理される。11・13は浅い丸底の坏で、口縁部が屈曲して僅かに立つ。底部は横方向のヘラ削りで、内外面とも粗いヘラ磨きを施している。10・17も丸底の坏であるが、8世紀代のものである。10は粗雑な調整で、外面に僅かに粘土紐接合痕が残る。外面はともに横方向のヘラ削りで、18は内外面ともヘラ磨きを施す。なお、17は内面に放射状のヘラ描きがある。15・16は平底の坏である。体部は直線的に開き、口縁部が僅かに外反する。口縁部はヨコナデで、体部は横方向のヘラ削りを施している。5は土師器盤であろうか。口縁部の小片で、内外面とも赤彩される。

18・19・21～32・53～62はロクロ土師器坏である。18・19は箱形で内外面赤彩される。体部下端はともに手持ちヘラ削りで、底部は19が全面不定方向のヘラ削り、18はナデ調整で、ほとんどヘラ削り痕は観察できない。なお、ともに内面に油煙が付着している。21・24・30・53～55は体部下端及び底部全面手持ちヘラ削りである。52は体部下端にヘラ削りはなく、底部も回転糸切り無調整で、底部中央に内面から外面へ向けて鋭利なものを突き刺したような穿孔がある。墨書は29・55が「山□」、53は「□家」、59は釈文は不明であるが、端正な文字で2行以上にわたった墨書である。また、31は底部外面に墨書が、内面に「×」の線刻がある。

33は三寸の燈明皿である。底部は回転糸切り無調整で、内面に油煙の付着はない。

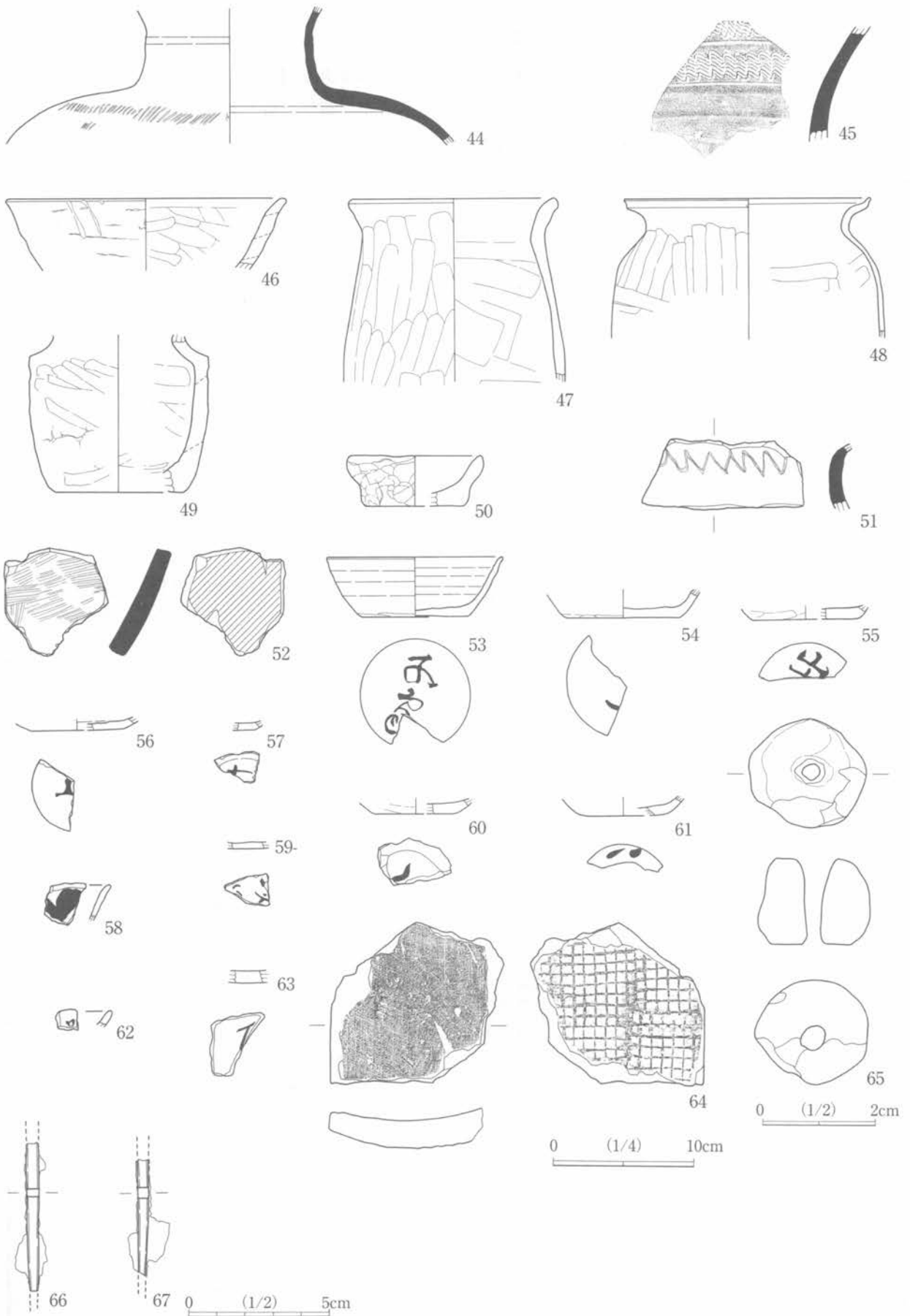
34～43は土師器高坏で、いずれも鬼高期のものである。坏部は口縁部と坏底部との境に明瞭な稜を巡らすもので、34・35・37は強く、36・38は弱い。口縁部は外反してヨコナデで、坏底部は横方向のヘラ削りである。いずれも内面は黒色処理される。裾部の開き方はそれぞれで、40は緩やかに、41・43は裾部で急激に開く。脚部は43が比較的長く、脚柱部は縦方向のヘラ削り、裾部にヨコナデを施す。外面は赤彩され、坏部内面を黒色処理する。

44・45・51は須恵器甕である。44は頸部が比較的細く直立気味に立ちあがり、口縁部で開くものである。



第271图 遺構外出土遺物実測図(1)





第272図 遺構外出土遺物実測図(2)

外面肩部に僅かに叩き痕がみられるが、叩き痕より上の内外面はロクロ調整である。45は大甕の口縁部破片で、沈線で区画し波状文を描く。51は広口の甕の破片と思われ、頸部に鋸歯状のヘラ描きが巡らされる。

46は土師器鉢である。調整は粗雑で、口縁部ヨコナデ、胴部は横方向のヘラ削りである。

47~49は土師器甕である。49は口縁部の形状が不明であるが、胴部は肩が角張ったものである。口縁部はヨコナデを施すが、胴部の調整は粗雑で、外面に粘土紐接合痕を残し、指頭ナデである。底部に木葉痕を残す。

50はミニチュアの土器で、手捏ねである。外面は凹凸が著しく、粘土紐接合痕を残す。また、底部に木葉痕を残す。

64は平瓦である。凹面は布目が、凸面は格子叩きである。65は土玉。66・67は鉄鏝の基部破片である。

第144表 遺構外出土土器観察表

種別番号	器種	口径	器高	底径	遺存度	胎土	色調	特徴	遺物番号
1	須恵器 蓋	(15.6)	4.0	—	1/3	微砂粒、白針(少)、黒色粒(少)	灰色	つまみ径(3.0)	7C-16-1
2	須恵器 高台付	(14.1)	6.8	8.1	底部1/2 体部1/3	砂粒、黒色粒、長石、石英、小石(1~7mm)	灰色	底部回転ヘラズリ後貼付高台	トレンチ-1-5
3	須恵器 坏	(13.0)	3.9	(7.8)	1/3	白色砂粒、長石、石英	灰色	薄手な作り	3L-1-1
4	須恵器 坏	—	[1.5]	(5.4)	1/8	微砂粒、長石	黄灰色	摩耗している	7D-1-1
5	土師器 坏	(12.0)	[4.0]	丸	1/4	微砂粒	灰黄色~灰褐色一部黒色	全面、漆仕上げ 内外、密にミガキ(光沢有り)	20-2-2
6	土師器 坏	(13.2)	[3.3]	—	1/6	砂粒、長石、石英、スコリア	鈍い黄褐色	内、ミガキ(単位、光沢有り)	1N-6-1
7	土師器 坏	(15.2)	[2.9]	—	1/8	微砂粒、長石、スコリア	灰褐色	内外、漆仕上げ	4J-1-1
8	土師器 蓋	—	[1.9]	—	つまみ部のみ	砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色	—	7E-1-1
9	土師器 蓋	—	[1.3]	—	つまみ部のみ	砂粒、長石、石英	褐色~赤褐色	—	6F-1-74
10	土師器 坏	(12.2)	4.0	丸	1/2	粗砂粒、小石、長石(少)、スコリア	褐色一部黒色	内、底部に焼成前のヘラ描有り	20-2-2
11	土師器 坏	(14.2)	[3.0]	—	1/5	白色砂粒、長石、スコリア	褐色	器面なめらか	2K-1-1
12	土師器 坏	(12.0)	[4.0]	—	口縁1/4	白色砂粒、長石、石英	内、黒色 外、鈍い赤褐色	内、黒色処理 内外、剥落有り	6G-152
13	土師器 坏	(12.0)	[2.6]	—	1/6	白色砂粒、長石	鈍い黄褐色	内外、ミガキ有り	6G-154
14	土師器 坏	(11.5)	[4.4]	—	1/3	微砂粒、長石	暗褐色	内外、薄く剥離している	表採-1.5.6.17
15	土師器 坏	(13.0)	4.5	(7.0)	底部1/2 体部1/4	粗砂粒、長石、石英、スコリア	鈍い黄褐色	二次的に火を受ける	4H-1
16	土師器 坏	(12.0)	3.5	(7.0)	1/4	砂粒、長石、白針	褐色	内、密にミガキ(単位、光沢有り)	4L-1
17	土師器 坏	(15.0)	[3.6]	—	1/8	砂粒、長石、スコリア	内、鈍い褐色 外、鈍い褐色	内、若干剥落有り	7C-16-1
18	ロクロ土師器 坏	14.3	4.1	9.8	2/3	砂粒、長石、石英(多)、スコリア	鈍い赤褐色一部黒色	内外、赤彩 内、タール状にスス付着	表採-2
19	ロクロ土師器 坏	—	[2.5]	(8.6)	底部1/2	砂粒、長石、石英	鈍い赤褐色、一部黒褐色	内、一部タール付着有り	4H-1-1
20	土師器 盤	(20.0)	[2.5]	—	1/8	白色砂粒、長石	明赤褐色	—	20-1-1
21	ロクロ土師器 坏	(13.0)	4.0	(9.2)	1/6	砂粒、長石、石英	内、鈍い赤褐色 外、鈍い黄褐色	—	3I-1-1
22	ロクロ土師器 坏	(13.2)	4.2	(7.4)	1/2	白色砂粒、長石、小石	鈍い黄色一部黒色	薄手な作り	5G-1
23	ロクロ土師器 坏	(13.2)	3.6	6.4	底部完形 体部1/6	白色砂粒、長石、石英、小石	黄褐色	底部平らでない	4H-1
24	ロクロ土師器 坏	(14.6)	4.0	6.4	底部ほぼ完形 体部1/4	粗砂粒、白針、長石、石英	内、褐色 外、暗褐色	外、底部回転糸切り無調整 粘度くす付着	6E-70-1
25	ロクロ土師器 坏	(13.0)	3.8	7.0	底部完形 体部1/4	砂粒、長石、石英、スコリア	内、褐色 外、灰黄色~黒褐色	外、炭素吸着	5H-1
26	ロクロ土師器 坏	(12.6)	[3.7]	—	1/6	砂粒、長石、スコリア	赤褐色	—	4J-1-1
27	ロクロ土師器 坏	(13.4)	[3.5]	—	1/5	砂粒、長石、スコリア	褐色~鈍い褐色	—	4K-1-1
28	ロクロ土師器 坏	—	[3.2]	(6.7)	底部1/3	砂粒、長石、スコリア	明赤褐色	1	20-2
29	ロクロ土師器 坏	—	[1.3]	—	底部1/3	砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色	外、底部墨書「山口」	5F-1
30	ロクロ土師器 坏	—	[3.7]	(8.0)	1/4	白色砂粒、小石、長石、石英、スコリア	赤褐色	外、底部墨書「万」	4J-1
31	ロクロ土師器 坏	—	—	—	底部1/3	砂粒、黒色粒、長石(少)、石英、スコリア	鈍い黄褐色	内、線刻「十」 外、墨書「口」	6E-22-1
32	ロクロ土師器 坏	—	[3.2]	7.5	底部完形	白色砂粒、黒色粒、長石、石英	内、鈍い褐色 外、明赤褐色	焼成後穿孔有り、孔径(0.3×0.2)	トレンチ1-18
33	土師器 かわらけ	8.9	1.7	6.2	3/4	砂粒、黒色粒、雲母、スコリア	鈍い黄褐色	底部回転糸切り無調整	表採-4
34	土師器 高坏	(17.2)	[3.9]	—	1/10	白色砂粒、長石、スコリア	内、黒色 外、鈍い赤褐色	内、黒色処理(吸炭) 外、赤彩	6G-44
35	土師器 高坏	(18.0)	[4.2]	—	坏部1/4	白色砂粒、長石、スコリア	内、黒色 外、鈍い赤褐色	内、黒色処理(吸炭) 外、赤彩	4I-1
36	土師器 高坏	(15.0)	[3.9]	—	坏部1/4	白色砂粒、長石、石英、スコリア	内、黒色 外、鈍い褐色	内、黒色処理(吸炭)	2K-1-1
37	土師器 高坏	(21.6)	[4.1]	—	坏部1/4	白色砂粒、長石、スコリア	内、黒色 外、赤褐色	内、黒色処理(吸炭)	4J-1-1
38	土師器 高坏	(15.9)	[3.2]	—	坏部1/5	砂粒、長石、石英	内、褐色 外、鈍い赤褐色	—	10-1-1
39	土師器 高坏	—	[5.3]	—	基部完形	白色砂粒、長石	内、鈍い褐色 外、鈍い赤褐色	摩耗している	6D-1-1
40	土師器 高坏	—	[4.2]	(14.4)	脚部1/5	白色砂粒、スコリア	赤褐色	外、赤彩	2K-1-1
41	土師器 高坏	—	[4.3]	12.6	脚部のみ2/3	砂粒、黒色粒、長石、石英	内、明赤褐色 外、赤褐色	外、赤彩 外、ヘラ先による擦過痕多数有り	4I-1
42	土師器 高坏	—	[5.5]	(13.4)	脚部1/5	砂粒、長石、スコリア	内、暗灰黄色 外、鈍い褐色	—	2K-1-1
43	土師器 高坏	—	[10.7]	12.3	脚部完形	砂粒、スコリア、長石(多)、石英(多)	坏部(内)、黒色 脚部(内)、褐色 脚部(外)、赤色	坏部(内)、黒色処理 脚部(外)、赤彩	表採-1
44	須恵器 甕	—	[9.5]	—	頸部~肩部1/4	微砂粒、長石、石英	灰緑色	肩部に平行叩目痕有り	SI-011-1.2.4.8.10.12.13.14.15.18.19.20.21.22.23
45	須恵器 甕	—	—	—	頸部片	微砂粒、小石、スコリア	灰色	頸部に波紋文	10-1
46	土師器 鉢	(20.0)	[5.1]	—	1/6	砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色	輪積み痕残る	2P-1-1
47	土師器 甕	(15.0)	[13.1]	—	口縁~胴上部1/3	砂粒、黒色粒、長石(多)、石英(多)、小石(多)	内、明褐色 外、鈍い黄褐色~黒色	—	1P-1
48	土師器 甕	(17.4)	[9.9]	—	口縁~胴上部1/4	白色砂粒、長石、石英	内、鈍い黄褐色 外、暗褐色	頸部強く横ナデが加えられている	表採-1
49	土師器 甕	—	[11.2]	(9.0)	1/4	白色砂粒、長石、石英、スコリア	内、灰褐色 外、鈍い褐色	内外、輪積み痕残る	2P-1-1

50	土師器 手捏	(9.8)	3.6	(7.1)	1/4	砂粒、長石(少)、石英(少)	内、明褐色 外、黒褐色	底部木葉痕	20-2
51	土師器 甕	-	-	-	頸部片	砂粒、長石、スコリア	内、明褐色 外、黒褐色	外、ヘラ掻き有り	5G-1
52	須恵器 転用砥石	-	-	-	胴部片	微砂粒	灰黄色		6F-23
53	ロクロ土師器 坏	(12.6)	4.3	7.6	1/2	砂粒、長石(多)、石英(多)	明褐色	底部墨書「□家」	4H-1-1
54	ロクロ土師器 坏	-	[2.1]	(8.0)	底部1/3	砂粒、小石、長石、石英	明褐色	底部墨書「□」	3L-1-1
55	ロクロ土師器 坏	-	[1.0]	7.4	底部1/4	砂粒、長石、石英	鈍い黄褐色~黒色	底部墨書「山口」	6G-81-1
56	ロクロ土師器 坏	-	[0.8]	(6.6)	底部1/4	砂粒、長石	内、褐色 外、赤褐色	底部墨書「□」	4J-1-1
57	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	砂粒、長石	鈍い褐色	底部墨書「□」	6G-77-1
58	ロクロ土師器 坏	-	-	-	口縁片	砂粒、長石、スコリア	褐色	底部墨書「□」	6G-53-1
59	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	砂粒、長石	褐色	底部墨書「□」	6G-1-1
60	ロクロ土師器 坏	-	[1.1]	(6.0)	底部1/6	砂粒、黒色粒、長石、スコリア	褐色	底部墨書「□」	20-2-1
61	ロクロ土師器 坏	-	[1.1]	(6.4)	底部1/5	粗砂粒、小石、長石、石英	鈍い褐色	底部墨書「□」	3L-1-1
62	ロクロ土師器 坏	-	-	-	口縁片	砂粒、長石	鈍い黄褐色	底部内面墨書「□」	2L-1-1
63	ロクロ土師器 坏	-	-	-	底部片	砂粒、石英、スコリア	灰黄色	底部墨書「石」?	6G-62-1

第145表 住居跡・溝出土 石製品属性表

住居跡・溝	遺物番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	挿図番号	備考
SI-002	4	砥石	90.0	57.2	33.7	194.0	凝灰岩	第図	
SI-002	19	砥石	51.5	32.6	24.1	39.0	凝灰岩	第図	
SI-018	9	砥石	60.0	55.7	36.1	98.0	凝灰岩	第図	
SI-050	1	砥石	59.4	43.2	23.6	73.9	凝灰岩	第図	
SI-059	1	砥石	36.1	39.0	12.2	20.0	凝灰岩	第図	穿孔あり
SI-059	18	砥石	64.0	50.0	30.0	97.0	凝灰岩	第図	
SI-061	22	砥石	190.5	77.1	57.5	849.0	砂岩	第図	
SI-064	15	砥石	64.2	52.2	30.0	85.0	砂岩	第図	
SI-075	2	砥石	127.9	48.6	31.7	120.0	凝灰岩	第図	穿孔あり
SI-079	3	砥石	46.1	44.9	13.7	40.6	凝灰岩	第図	
SI-096	38	砥石	313.0	156.0	50.0	4350.0	凝灰岩	第図	
SI-055	35	敲石	86.9	81.5	53.7	48.6	流紋岩	第図	
SI-063	8	敲石	98.5	104.2	39.0	48.2	チャート	第図	被熱?
SI-064	68	敲石	51.5	48.0	21.7	68.5	砂岩	第図	
SI-066	44	敲石	90.7	99.2	43.3	48.3	流紋岩	第図	
SI-068	9	敲石	62.7	109.9	21.4	30.0	玉髄	第図	石核?
SI-096	22	敲石	118.4	73.3	57.5	761.0	砂岩	第図	
SI-051	8	鉄床石	135.3	75.7	42.7	40.0	閃緑岩	第図	
SI-075	3	鉄床石	105.4	61.2	46.6	41.3	ハンレイ岩	第図	
SI-054	29	台石	170.9	103.9	44.5	115.2	砂岩	第図	
SI-092	1	有溝砥石	52.4	57.4	34.7	16.0	軽石	第図	
SI-097	16	有溝砥石	34.7	44.6	25.9	7.5	軽石	第図	
SD-001	不明	有溝砥石	34.4	62.0	24.7	10.0	軽石	第図	

第146表 鉄鏃計測表

遺構番号	挿図番号	身の形態	計測部位 全長(mm)	身 部(mm)				棒 状 部(mm) 基部(mm)					現重量 (g)	出土状況	図版番号	備考	
				長	逆刺深	最大幅	厚	長	幅	突起部長	厚	長					上端幅
SI-014	27	片刃	154.0	36.0	-	6.5	2.5	82.0	4.5	-	3.5	36.0	3.0	11.41	床面		68
SI-014	28	不明	58.8					58.8	5.2	-	2.6			5.38	覆土中層		49
SI-034	54	不明	39.0	-	-	-	-	8.4	3.0	-	3.0	30.6	3.0	1.30	覆土下層		18
SI-026	22	腸沢長三角形	55.6	31.6	2.1	38.5	4.3	26.1	8.4	-	4.0	-	-	17.90	覆土中層		8

SI-027	20	不明	98.0	-	-	-	-	98.0	5.8	-	4.7	-	-	12.57	覆土中層		55
SI-028	25	不明	61.0	-	-	-	-	38.5	7.8	-	5.5	22.5	4.5	9.68	壁溝		31
SI-029	20	不明	39.0	-	-	-	-	39.0	5.0	-	3.5	-	-	2.98	復土中層		2
SI-034	50	腸状長三角形式	149.0	39.0	6.0	24.5	-	63.5	7.5	10.0	5.0	52.5	3.5	20.60	復土下層		17 推定残長
SI-034	51a	腸状長三角形式	24.5	24.5	-	17.0	-	-	-	-	-	-	-	4.10	周溝		27 癒着
SI-034	51b	腸状長三角形式	28.0	28.0	-	20.0	-	-	-	-	-	-	-	-	周溝		27 癒着
SI-034	52	不明	71.0	-	-	-	-	71.0	7.0	-	4.0	-	-	10.95	周溝		27
SI-042	29	不明	77.0	-	-	-	-	77.0	5.5	-	3.5	-	-	9.45	壁溝		13
SI-051	28	不明	120.0	-	-	-	-	120	5.5	-	3.5	-	-	10.73	覆土中層		15
SI-072	10	不明	48.0	-	-	-	-	48.0	6.0	-	3.5	-	-	3.35	覆土下層		16
SI-090	45	不明	72.0	-	-	-	-	47.0	4.5	-	4.0	25.0	3.0	6.05	周溝		40
SI-091	3	不明	42.0	-	-	-	-	-	-	-	-	42.0	4.0	2.63	カマド左袖		3
G6	67	不明	43.0	-	-	-	-	-	-	-	-	43.0	5.0	4.02			173
G6	66	不明	54.0	-	-	-	-	54.0	4.5	-	3.0	-	-	3.65			174

第147表 刀子計測表

遺構番号	挿図番号	計測部位	身 部 (mm)			基 部 (mm)			重 量 (g)	出土状況	図版番号	備 考
			全長 (mm)	長	幅	厚	長	幅				
SI-023	22	114	75.0	9.5	2.5	39.0	6.5	4.0	11.69	壁溝	35	
SI-023	24	52.5	33.5	7.5	3.0	19.0	4.4	2.1	4.56	壁溝	42	
SI-027	19	71	60.0	8.7	1.7	11.0	6.5	3.5	7.85	周溝	51	
SI-028	23	112	47.2	13.5	2.5	64.8	6.0	1.5	17.17	覆土中層	38	
SI-031	8	111	90.5	10.5	2.5	20.5	8.0	3.0	14.56	覆土一括	1	
SI-034	53	59.3	-	10.5	2.0	-	5.6	2.2	7.27	覆土中層	38	身部と基部境界なし
SI-042	28	(73.0)	-	5.5	1.5	-	3.0	1.8	4.39	壁溝	14	2個体の推定残存長
SI-051	27	165	93.5	9.5	3.5	71.5	6.0	3.5	21.57	覆土中層	15	
SI-061	12	(152.0)	(105.5)	7.0	2.0	46.5	6.5	2.0	14.31	覆土上層	7	2個体の推定残存長
SI-064	23	107	84.0	6.5	2.2	23.0	4.2	2.0	10.74	覆土中層	57	
SI-091	2	124.5	80.5	11.0	2.0	44.0	6.5	3.0	16.54	床面下	2	
SI-093	34	209	145.0	9.3	3.2	64.0	7.0	3.0	23.87	覆土上層	75	
SI-098	15	136	70.0	8.3	3.0	66.0	5.5	2.5	12.26	覆土中層	18	完形
SI-100	3	147	80.0	10.0	2.5	67.0	7.0	2.0	18.88	覆土下層	5	

第148表 鉄製品計測表

遺構番号	挿図番号	全 長	幅	厚	重 量 (g)	出土状況	図版番号	備 考
		(mm)	(mm)	(mm)				
SI-001	19	71.0	27.0	5.0	14.2	遺構外		13.小刀 (刃先)
SI-034	55	21.0	49.5	5.0	26.4	覆土中層		24.ハバキ (刀)
SI-028	24	39.7	16.0	6.0	11.5	覆土下層		19.馬具 (?)
SI-028	26	39.0	13.0	7.5	12.6	周溝		35.馬具
SI-043	25	79.5	38.0	18.5	106.3	覆土上層		7.鉄斧
SI-052	13	206.0	172.0	38.0×22.3	261.0	床面		3.鋤先
SI-052	12	97.5	26.0	26.0	34.7	覆土下層		6.鋤
SI-093	35	120.0	75.0	27.7×18.5	60.7	覆土中層		35.鋤
SI-015	38	112.0	105.0	40.0	496.0	覆土中層		46.鉄滓

第149表 銅製品計測表

単位 mm

遺構番号	挿図番号	種類	計測値 全長(mm)×幅(mm)×厚 (mm)	重量 (g)	出土状況	図版番号	備考
SI-023	23	帯金具	25.6×20.6×1.4	3.11	壁溝		42
SI-025	10	帯金具	43.4×23.6×1.8	7.98	覆土中層		10

第150表 玉類計測表

( )現在長

遺構番号	挿図番号	径 (mm)	穿孔 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	材質	色調	出土状況	遺存度 (%)	図版番号	備考
SI-009 ①	34	6.4	0.9	4.5	0.17	石製	暗褐色	覆土上	100		2.白玉
②	35	6.1	1.3	4.3	0.17	石製	暗褐色	復土一括	100		64.白玉
③	36	5.8	1	3.7	0.15	石製	黒褐色	復土一括	100		64.白玉
④	37	5.5	0.8	3.6	0.13	石製	黒褐色	復土一括	100		64.白玉
⑤	38	6.3	1.3	4.8	0.2	石製	黒褐色	復土一括	100		64.白玉
⑥	39	9	3	6.9	0.83	石製	黒褐色	壁溝	100		77.白玉
⑦	40	4.7	1.7	2.5	0.07	石製	暗灰色	床面	100		78.白玉
⑧	41	4.8	2.1	3.3	0.09	石製	暗灰色	床面	100		78.白玉(滑石)
⑨	42	4.8	2.1	3.3	0.09	石製	暗灰色	床面	100		78.白玉(滑石)
SI-028	22	6	1.2	3.7	0.14	石製	暗褐色	復土中層	100		18.白玉
SI-081	19	8.1	1.4	7	0.44	石製	黒褐色	周溝	100		13.白玉
SI-109	4	10.6	3	7.8	1.26	石製	暗灰色	復土下層	100		9.白玉(滑石)
SI-029	19	9	1.5	16.5	1.50	土製	黒色	復土下層	100		25.管玉
SI-086	8	29	7.3	39.5	27.28	土製	鈍い黄橙色	復土中	100		4.土錘
SI-086	7	24.5	7	44.8	32.99	土製	黒褐色	復土上	ほぼ完形		9.土錘
SI-116	20	10.8	1.2	20.7	2.62	土製	橙褐色	周溝	100		22.三輪玉
SI-066	35	33.8	1.8	11	8.25	石製	暗灰色		80		勾玉

第151表 紡錘車計測表

( )現在長

遺構番号	挿図番号	最大径 (mm)	孔径 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	材質	出土状況	遺存度 (%)	図版番号	備考
SI-031	9	46.5	20	15.4	22.72	土製	床面	80		6
SI-036	21	54.6	9	15.1	40.15	土製	覆土中層	100		6.煤付着
SI-036	20	67.2	9.3	10.3	45.38	土製	床面	100		10.煤付着
SI-040	38	36.7	7.3	15.5	33.51	滑石製	床面	100		23
SI-040	39	39	9	15.7	41.09	滑石製	周溝	100		52
SI-049	8	37	8.2	17	39.18	滑石製	壁溝	100		4
SI-064	19	56.2	7.6	28.2	65.8	土製	覆土中層	80		40
SI-068	12	39.5	6.5	10.7	25.39	滑石製	覆土中層	100		2
SI-068	11	37.4	6	21	42.09	滑石製	覆土中層	90		8
SI-074	11	31.7	7.9	14.8	25.5	滑石製	カマド右袖脇	100		33
SI-090	44	42.8	7.3	15	46.44	滑石製	床面	100		38
SI-097	23	60.6	10.5	36	77	土製	床面	50		5
SI-129	9	43.5	7.8	20.3	22.17	土製	床面下	40		8.黒色
M-70	65	40	8.3	29.5	43.87	土製		70		2

第152表 支脚計測表

遺構番号	挿図番号	高 (mm)	径 (mm)	出土状況	遺存度 (%)	図版番号	備 考
SI-017	30	85	57	貯蔵穴	30		砂質、白色粒・雲母を含む、全体摩耗している。
SI-017	31	154	102	カマド右袖脇	70		砂質、雲母・スサ・白色粒を含む。
SI-045	5	182	85	カマド右袖脇	80		砂質、雲母・石英・長石（多量）・1⑧～16⑧の石を含む。
SI-048	15	130	121	カマド右袖脇	70		砂質、白色砂粒を含む。ボロボロしてもろい。
SI-064	22	120	81		40		砂質、白色砂粒・石英・スサ・小石を含む。一部煤付着
SI-082	17	196	92	カマド内	70		砂質、ボロボロしてもろい。
SI-084	8	132	132	カマド正面脇	60		粘土分（多量）・白色粒・小石を含む。
SI-093	3	82.5	123				
SI-096	29	128	91		50		砂質、白色粒・小石を含む。ボロボロしている。
SI-111	21	152	86	カマド右	50		粘土分を多量含む。
SI-117	8	180	75	カマド右	80		砂質、白色粒・小石を多く含む。火熱を受け炭化している。
SI-121	10	205	110	カマド右袖	80		粘土分が多い。表面若干炭化している。
SI-130	33	90.6	47				
SD-001	157	164	72	カマド右袖脇	80		粘土分多く含む。火熱を受け表面固く、炭化もしている。

第153表 その他の遺物計測表

遺構番号	挿図番号	全長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	出土状況	図版番号	備 考
SI-007	7	141.0	73.0	25.0				丸瓦
SI-130	4	50.0	68.0	30.0				平瓦
4J-5	64	115.0	123.0	20.0				平瓦

## 第5章 まとめ

### 第1節 旧石器時代

本遺跡の旧石器時代は2枚の文化層・5か所の石器集中が検出された。第I文化層はⅢ層の石器群、第II文化層は第2黒色帯下部の石器群と考えられる。

第I文化層の石器集中1は調査区の南西端の斜面上に分布する。出土層位はⅢ層上部からⅡb層である。石器群は南北2m、東西4mの範囲に広がるが、ほとんどが10B-15グリッドを中心に南北1m、東西1mにまとまる。石器の帰属時期は縄文時代以降の可能性もある。出土石器は、石核1点、台石1点、原石2点の合計4点である。

第II a文化層の石器集中1は調査区の北東端の斜面肩口に分布する。出土層位は大きく上下に拡散しているが、主体は第2黒色帯下部と考えられる。平面的には南北30m、東西45mの範囲に広がる。これらの石器群は空白部によってさらにいくつかの集中部に分けられそうであるが、明確には識別されない。極端に集中するグリッドが存在することによる偏ったばらつきが目立つ。出土石器は、石斧1点、楔形石器5点、敲石6点、台石1点、石核31点、剥片110点、碎片9点、原石及び原石S822点、礫2点の合計988点である。

第II b文化層の石器集中1は調査区のほぼ中央に分布する。出土層位はほぼⅦ層～Ⅵ層に集中する。第II a文化層に比べるとレベル的には高い。石器群は南北4m、東西4mの範囲に北西から南東にかけて帯状に広がる。出土石器は、剥片10点、碎片3点、礫1点の合計14点である。

第II c文化層の石器集中1 aは調査区の南西端の斜面肩口に分布する。出土層位は大きく拡散しているが、主体はⅦ層からⅥ層に集中する。第II a文化層に比べるとレベル的には高い。石器群は南北9m、東西10mの範囲に分布するが、さらに2群に分かれる。出土石器は、削器1点、UR剥片1点、石刃状剥片1点、楔形石器1点、敲石1点、台石3点、石核3点、原石5点、剥片28点、碎片2点、礫6点の合計52点である。石器集中1 bは調査区の南西端の斜面肩口に分布する。出土層位はほぼⅦ層～Ⅵ層に集中する。第II a文化層に比べるとレベル的には高い。石器群は南北6m、東西4mの範囲に広がるが、ほとんどが8D-06グリッドを中心に南北2m、東西2mにまとまる。出土石器は、削器1点、UR剥片2点、楔形石器1点、敲石1点、石核5点、原石3点、原石S2点、剥片32点、碎片8点、礫1点の合計56点である。

第II d文化層の石器集中1は調査区の南西端の斜面上に分布する。出土層位は第2黒色帯から立川ローム最下層と思われる。石器群は、9C-80グリッドを中心に南北1m、東西1mにまとまる。出土石器は、石核1点、原石1点の合計2点である。

### 第2節 古墳時代から平安時代集落の様相

#### (1) 遺構の様相

大山遺跡は東側で直接木戸川に面し、南北を支谷に挟まれた東西に伸びる台地上に立地している。今回の調査範囲はこの台地の北側縁辺に沿ったものである。調査範囲東端は木戸川の沖積層面への台地斜面で区画され、西端も台地北側の支谷から分かれる小支谷で区画される。さらに、調査範囲中央にも北側支谷から分かれる小支谷があり、台地は東西に二分されている。調査範囲中央の小支谷の西側を西側台地、東

側を東側台地と呼称することとする。この中央の小支谷を挟んだ東西の台地で古墳時代から平安時代にかけての遺構が濃密に検出され、台地南側で財団法人山武郡市文化財センターが行った発掘調査でも同時期の竪穴住居跡等が検出されていることから、当該期の集落は台地全面に展開していたことが明らかである。

今回の調査では古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡126軒、掘立柱建物跡21棟、土坑及び溝が検出されている。今回の調査範囲が集落跡のごく一部の調査であるため、集落全体の様相を復元することは困難であるが、今回の調査範囲の中から導き出される傾向について述べることにする。

#### ア 竪穴住居跡の分布

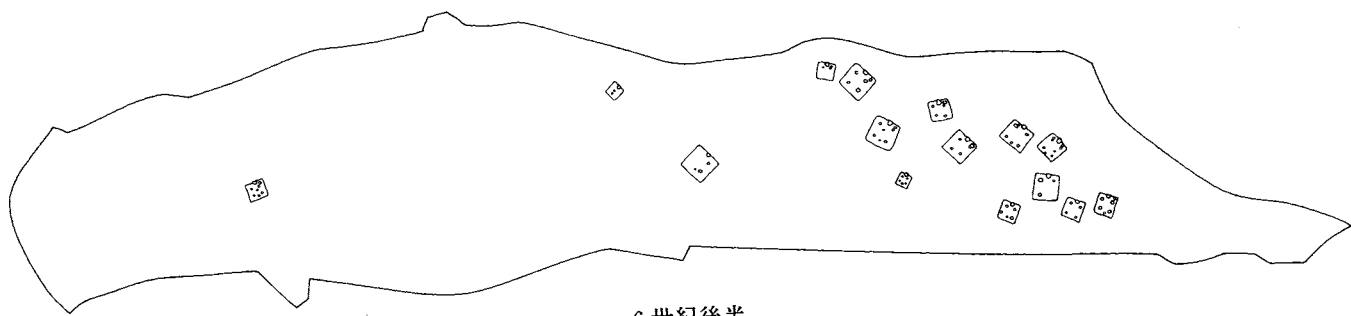
今回の調査範囲で検出された竪穴住居跡は、その出土遺物の検討からおおよそ6世紀後半から9世紀後半にかけてのものである。西側台地は面積的にも狭いことから、検出された竪穴住居軒数も16軒であり、東側台地と比較して密度的にも低いものである。しかしながら時期的な偏りもなく、古墳時代後期から9世紀前半までの竪穴住居跡が認められる。一方東側台地は110軒の竪穴住居跡が検出され、遺構密度も濃密な状況が見て取れる。狭い調査範囲ではあるが、視覚的に以下の2点が指摘できる。

- ・6世紀代の竪穴住居跡は北側縁辺に沿うように帯状に分布する。
- ・調査範囲中央の小支谷に面する緩斜面に7世紀中葉から後半にかけての竪穴住居跡が多く分布する。

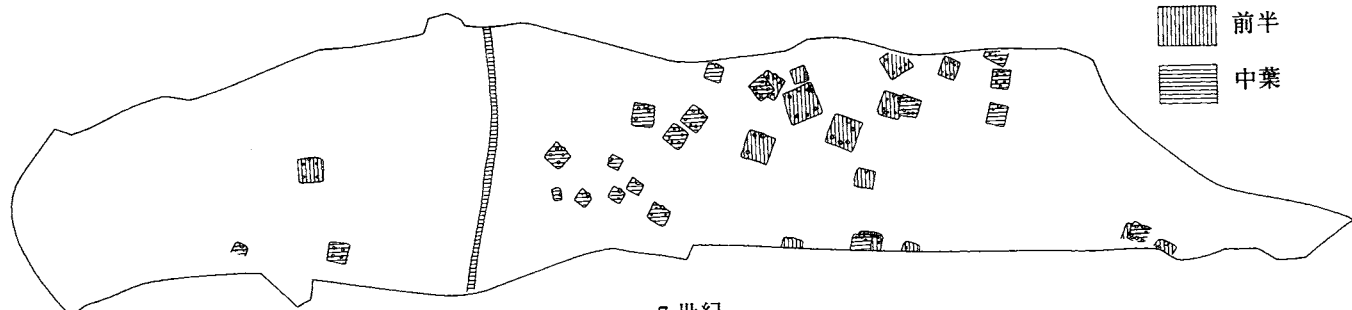
ここで特筆できるのは、7世紀中葉から後半にかけての竪穴住居跡の分布である。この緩斜面には7世紀前半から竪穴住居の進出が認められるが、6世紀代の竪穴住居跡の分布とは明らかに一線を画するものである。同様に8世紀前半の竪穴住居もこの斜面に僅かに残るが、8世紀中葉以降の竪穴住居跡は認められない。この浅い小支谷の中にはSD-001号溝があり、台地上から北側支谷への通路と考えられる。SD-001号溝に大量に投棄された遺物は7世紀後半から末葉に限られ、7世紀後半代において北側支谷を積極的に利用したものと考えられ、当該時期の竪穴住居跡がこの緩斜面に集中する結果となったのではないかと思われる。なお、他の時期についても台地南北の支谷を利用していたことは当然のことであり、SD-001号溝と同様な通路が他に存在した可能性は高いといえる。

時 期	遺 構 番 号
6 世紀後半	SI-009・SI-017・SI-020・SI-039・SI-047・SI-064・SI-069・SI-076 SI-080・SI-096・SI-111・SI-116・SI-118・SI-122・SI-121
7 世紀前半	SI-014・SI-021・SI-024・SI-041・SI-045・SI-054・SI-065・SI-067 SI-073・SI-074・SI-081・SI-083・SI-109・SI-126・SI-129
7 世紀中葉 ～後半	SI-016・SI-022・SI-048・SI-051・SI-055・SI-058・SI-060・SI-066 SI-068・SI-082・SI-084・SI-089・SI-095・SI-097・SI-100・SI-101 SI-103・SI-104・SI-117・SI-125・SD-001
8 世紀前半	SI-005・SI-018・SI-019・SI-023・SI-027・SI-029・SI-043・SI-070 SI-077・SI-085・SI-092・SI-124・SI-127・SI-128・SK-090
8 世紀中葉	SI-008・SI-025・SI-031・SI-032・SI-037・SI-042・SI-046・SI-052 SI-061・SI-072・SI-086・SI-087・SI-102・SI-105・SI-110・SI-113
8 世紀後半	SI-003・SI-007・SI-026・SI-028・SI-040・SI-044・SI-049・SI-053 SI-057・SI-075・SI-112・SI-118
9 世紀前半	SI-002・SI-034・SI-036・SI-056・SI-059・SI-062・SI-063・SI-079 SI-090・SI-093・SB-001・SB-002・SB-004
9 世紀中葉	SI-001・SI-015・SI-050・SI-098
9 世紀後半	SI-035・SI-130



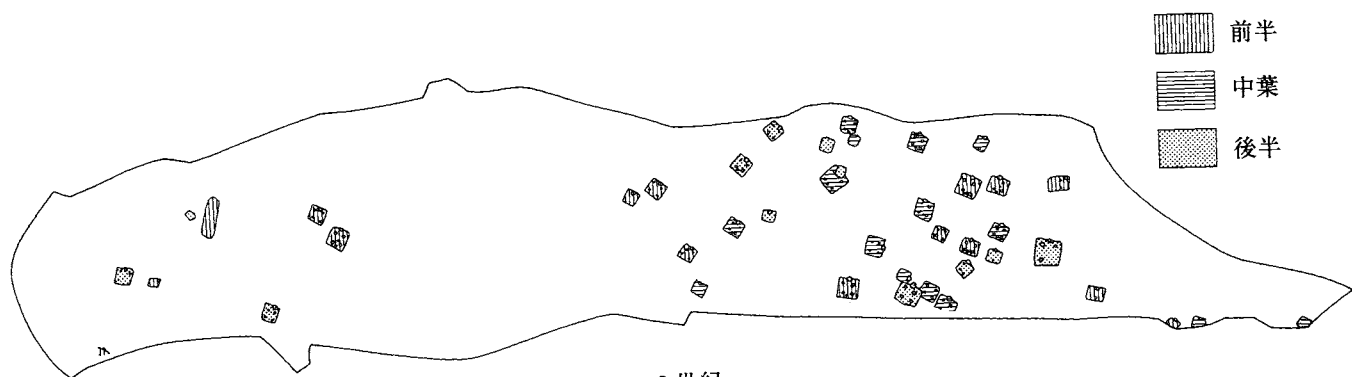


6世紀後半



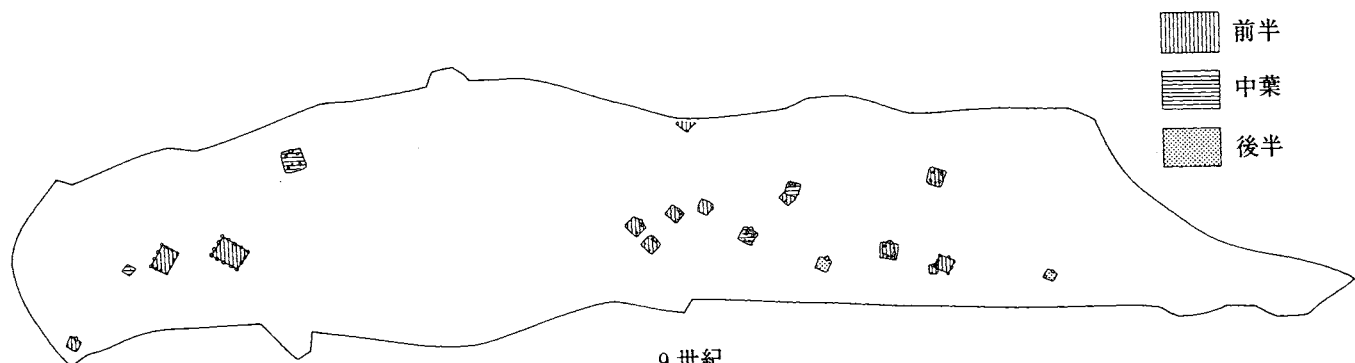
前半  
中葉

7世紀



前半  
中葉  
後半

8世紀



前半  
中葉  
後半

9世紀

第273図 古墳時代以降の集落変遷図

## イ 掘立柱建物跡について

掘立柱建物跡は21棟が検出された。時期を明確に決定できる建物は少ないが、基本的に8世紀代から9世紀代の構築と考えられる。この中で時期決定の材料となるのは、SB-001号・SB-002号の2棟であり、いずれも柱掘方から燈明皿に使用されたロクロ土師器坏が出土しており、9世紀前半代の構築と考えられる。また、SB-013号とSI-037号の重複関係から、SB-013号は8世紀中葉のSI-037号より新しい8世紀中葉以降の構築と考えられる。

分布は、竪穴住居同様に面積的に広い東側台地に多く位置し、竪穴住居跡と混在して検出された。しかし、竪穴住居跡のように台地全体に展開するのではなく、台地中央部の2Kグリッドから3Mグリッドの限られた位置に分布している。建物の規模は2間×3間を基本とし、長軸方向も周辺の竪穴住居跡とほぼ同じ方向で建てられている。

一方、西側台地にはSB-001号・SB-002号の2棟が検出されただけであるが、いずれも柱掘方から燈明皿として使用された9世紀前半のロクロ土師器坏が出土している。特にSB-001号は3間×4間と規模も大きく、掘方の直径が1mを越える立派なもので、東側台地に展開する掘立柱建物群とは異質の感がある。さらに、周辺の竪穴住居跡の主軸方向が地形に即した方向であるのに対し、この2棟の軸方向は方位に沿ったものであり、その点からも東側台地に展開する掘立柱建物群とは異なった性格の建物と理解できる。近接する9世紀前半代のSI-001号からは、今回の調査範囲で唯一「佛」と墨書された土器が出土しており、柱掘方からの完形の燈明皿の出土を考え合わせると、この2棟が仏教施設であった可能性も考えられる。

## (2) 遺物の様相

竪穴住居跡出土の土器を時期別に概観してみたい。

### ア 6世紀後半

坏類は須恵器模倣坏と椀形の坏が存在する。須恵器模倣坏についても、身の模倣と蓋の模倣があり、身の模倣坏は口径13cm前後の製品が主体となる。ただし、器高はすでに低くなりつつある。高坏は長脚と短脚があり、坏部は口縁部が大きく外反するものが一般的である。

甕類は大形と小形のものがあり、大形のものでは卵形の胴部となる。

### イ 7世紀前半

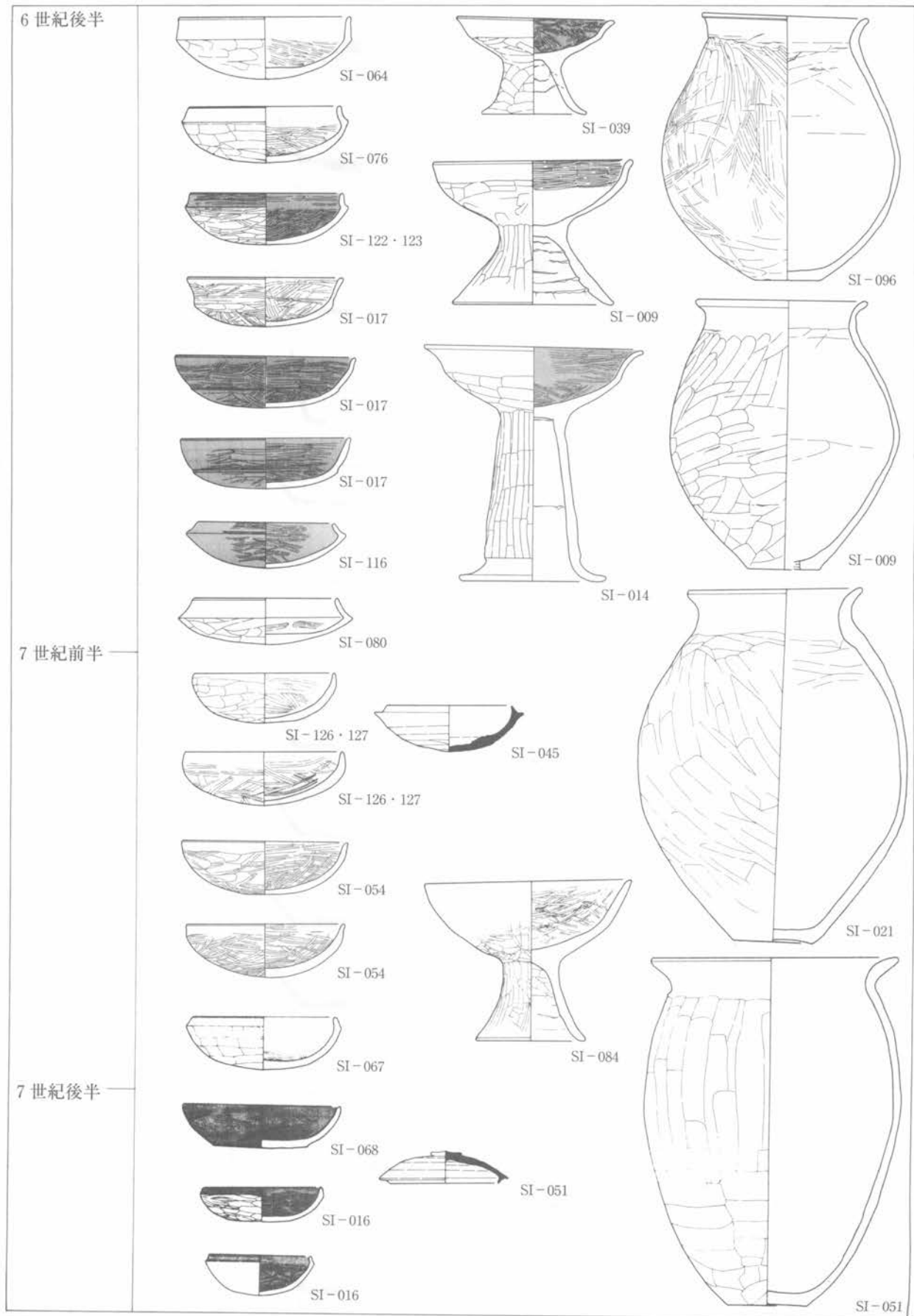
坏類は6世紀段階のものと比較して小振りとなってくる。須恵器模倣坏は受部の表現が弱くなる。高坏は坏底部がすぼまるようになる。

### ウ 7世紀中葉～後半

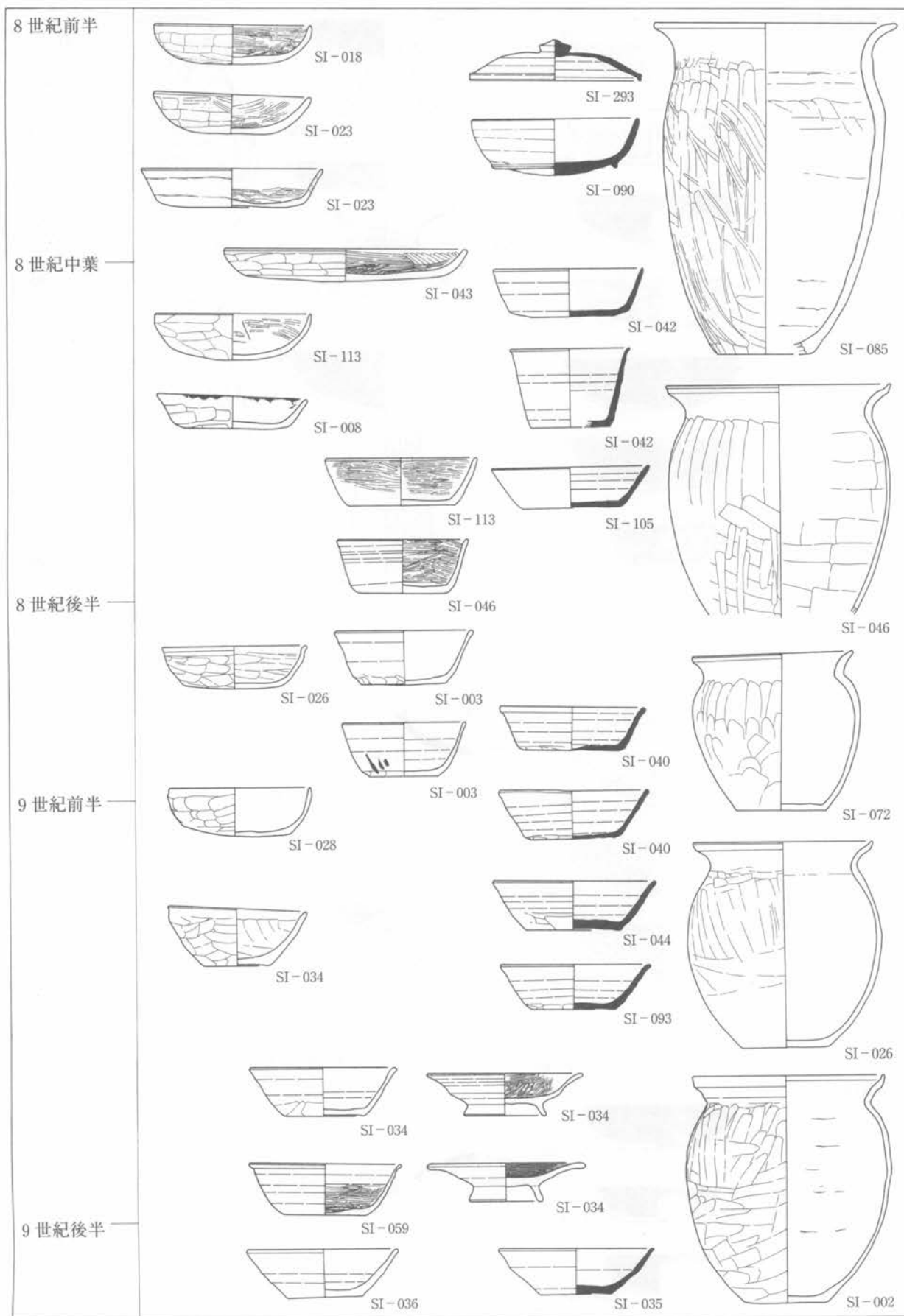
坏類は口径が小さくなり、10cm前後の製品が目立つ。須恵器模倣坏も受部の表現は形骸化し、逆に蓋模倣の坏は稜が底部近くに位置し、次第に姿を消していく。高坏の個体数は大幅に減少する。甕類は大形と小形の区分が可能で、SI-051号のように長胴化の傾向がみられる。

### エ 8世紀前半

坏類は法量的に大小に区分が可能である。丸底の坏が多いが、浅く平底となるものも現れる。また、大振りの盤が加わる。湖西産とみられる須恵器高台坏が伴っている。甕類はあまり良好な資料がないが、SI-085号のように胴部径よりも口径が大きい甕がみられるようになる。



第274図 古墳時代以降の土器の変遷(1)



第275図 古墳時代以降の土器の変遷(2)

#### オ 8世紀中葉

坏類はロクロ土師器が加わり、非ロクロ土師器の口径も12cm前後に統一される。須恵器は常陸産とともに永田窯の製品が含まれる。なお、SI-031号からは畿内系土師器が出土している。甕類は口唇部が受け口状を呈するものが現れ、まれに全面ロクロ調整の小形の甕もみられる。

#### カ 8世紀後半

坏類は他地域と比較して非ロクロ土師器の占める割合が高い。須恵器は常陸産が圧倒的であるが、在地産の須恵器がみられはじめる。甕類は明確に大小の区分が可能である。9世紀代についても同様であるが、所謂常総甕・武蔵甕はほとんどみられない。

#### キ 9世紀前半

坏類は非ロクロ土師器が急激に減少する。ただしSI-034号にみるように、底径の小さな坏が僅かに残る。皿が加わる。須恵器はあまり多くなく、在地産が目立つようになる。甕類は在地産の須恵器が多くみられるようになる。

#### ク 9世紀中葉

あまり良好な資料はないが、坏類は底径が小さい非ロクロ土師器が僅かに残る。無高台の皿が加わる。

#### ケ 9世紀後半

当該期の遺構は竪穴住居跡2軒しかなく、良好な資料はない。坏類は底径が小さくなり、調整も粗雑である。

#### イ 墨書土器の様相

墨書土器は多いとは言えないが、遺構外からの出土も含めて85点が確認できる。そのほとんどは部分的な破片であったり、不鮮明であることにより文字として判読できないが、全体として何種類かの文字が墨書されている。

墨書された文字数は一文字が圧倒的に多く、3文字で構成されるものが2点（「三田家」・「真後家」）ある。どちらも「家」が付くのが特徴である。点数的に多いのは「石」であり、5軒の竪穴住居跡から出土している。

佛	SB-001
川	SB-003
石	SI-036・SI-040・SI-041・SI-042・SI-056
三田家	SB-034
真後家	SI-079
上	SI-090
成	SI-090
大刀	SI-090
及枚	SI-093
吉	SI-093

# 写真図版



遺跡周辺航空写真





1 調査前状況 遺跡中央



2 調査区全体 遠景



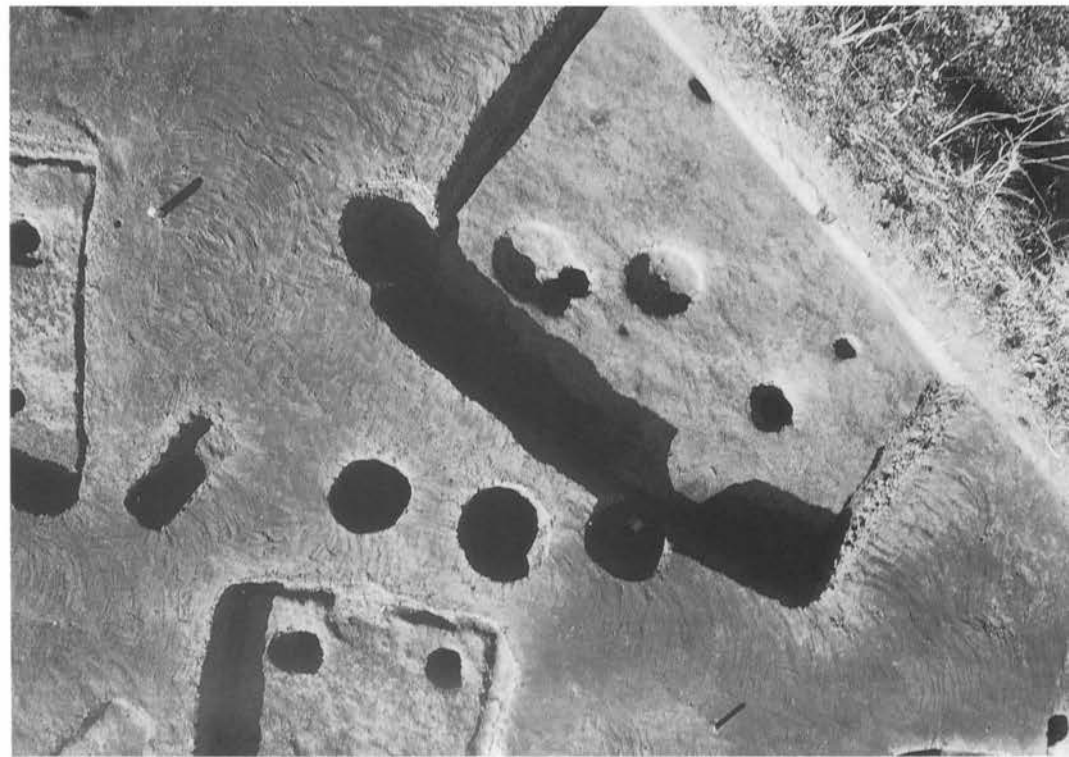
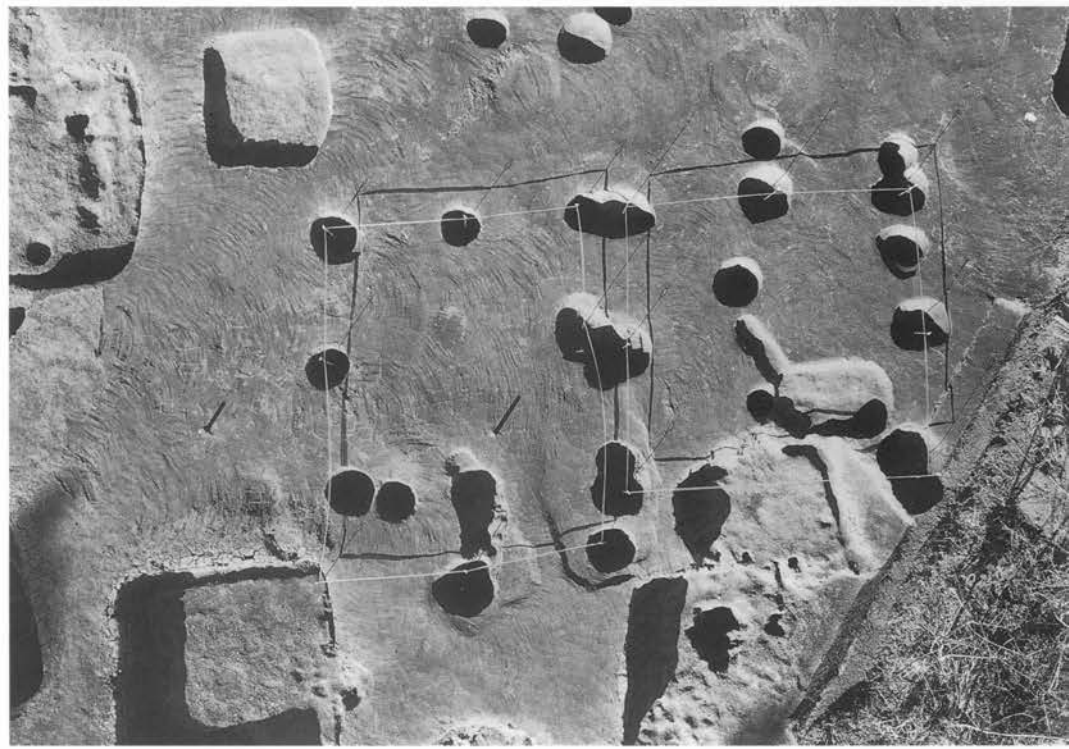
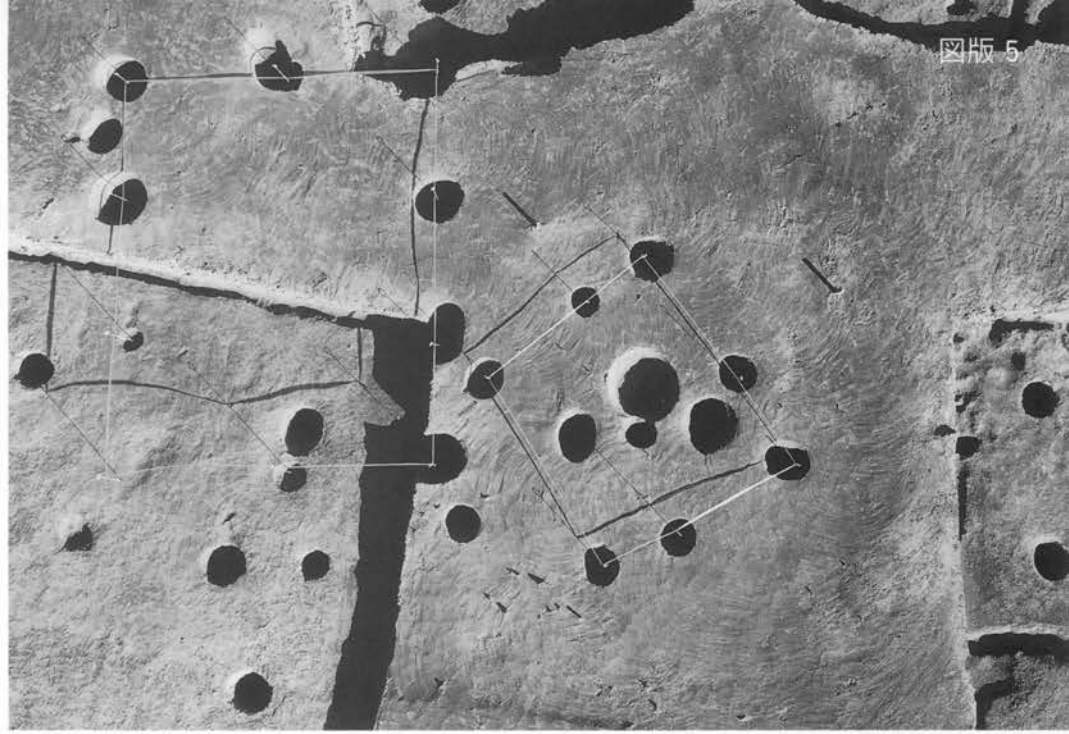
3 調査区全体 遠景



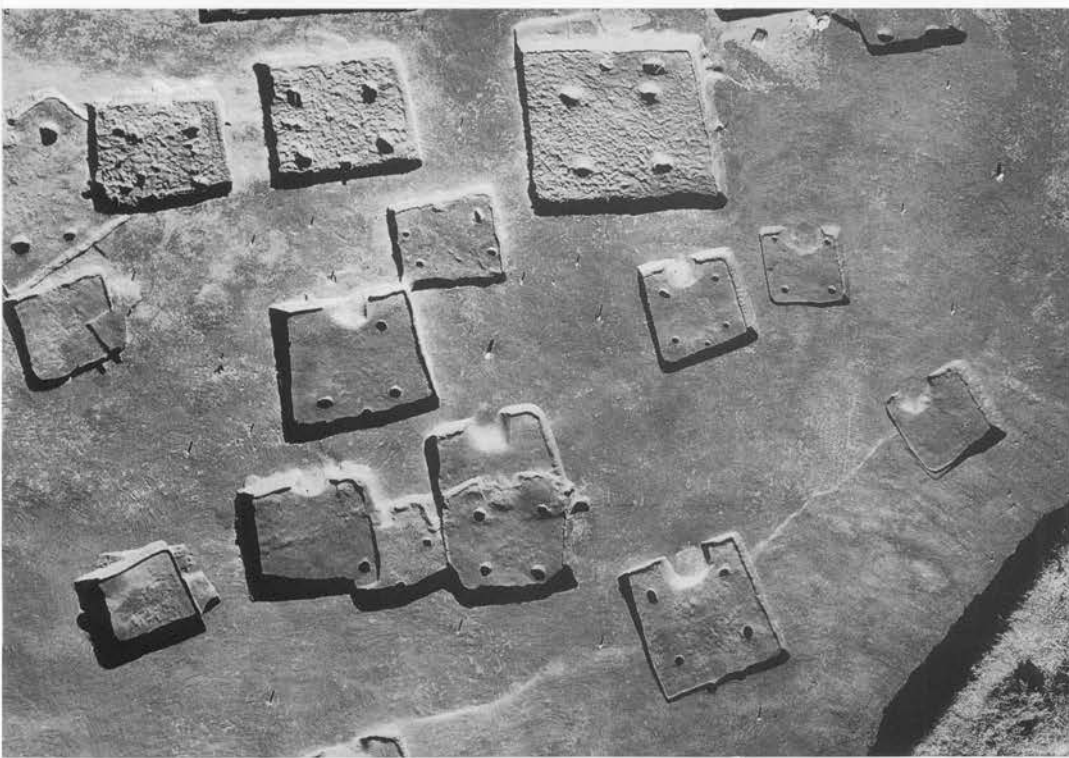
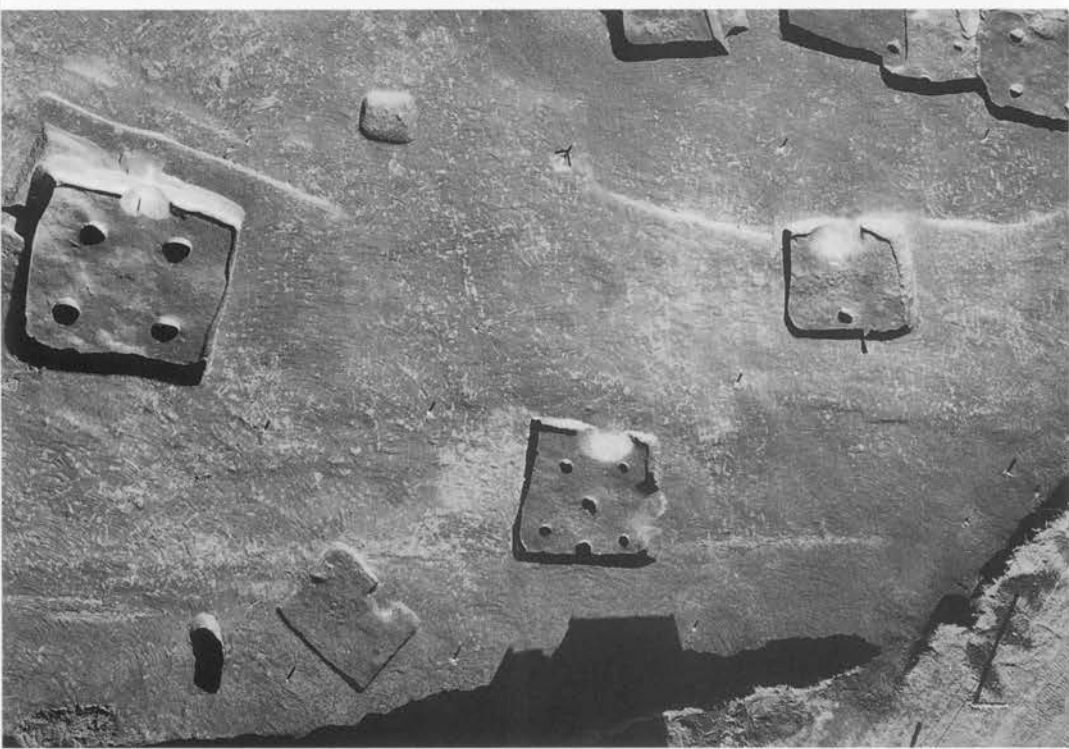


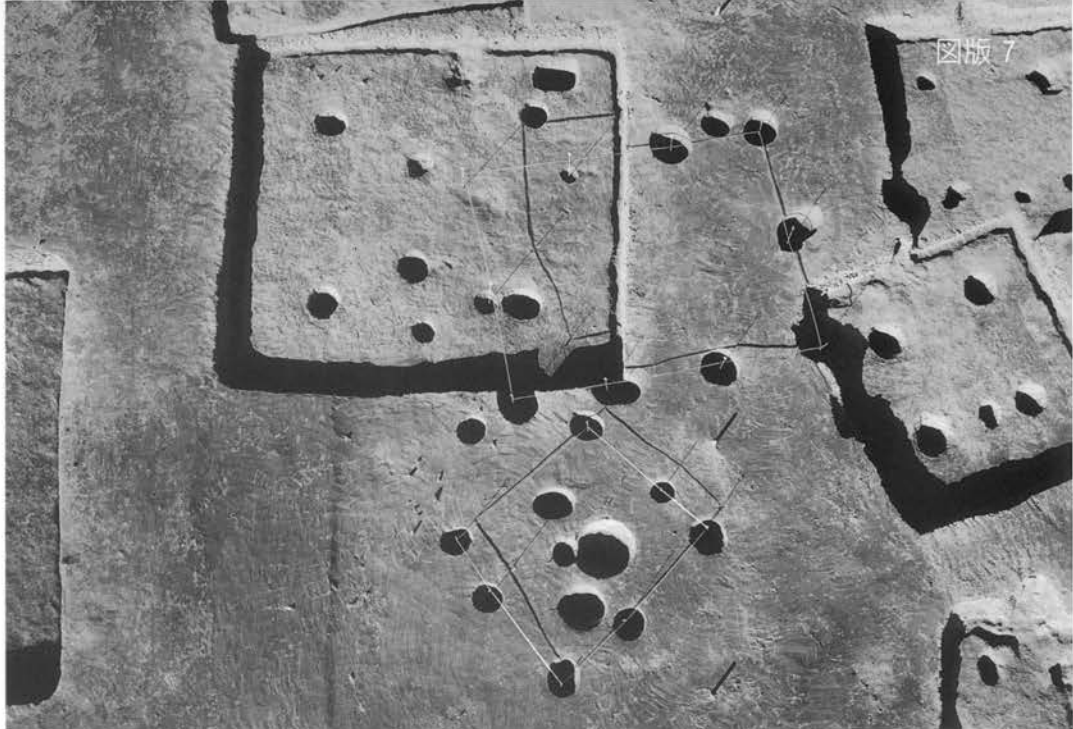


航空写真













1 第II a文化層  
石器集中 1  
L200～M200 西から

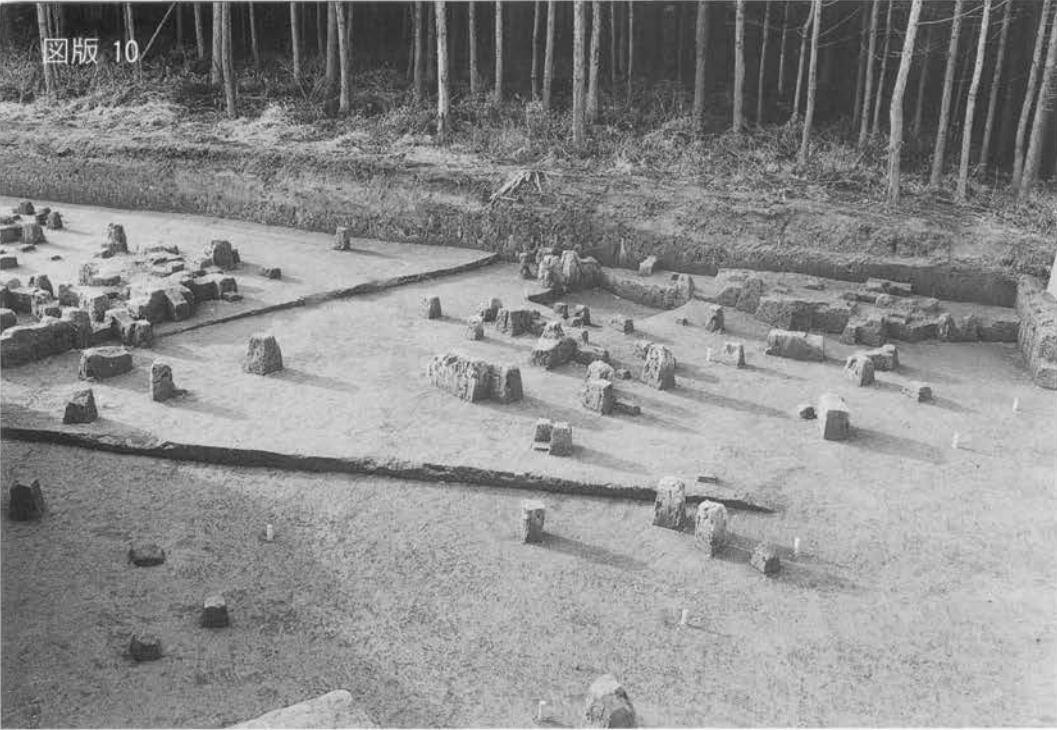


2 第II a文化層  
石器集中 1  
L200中心 西から



3 第II a文化層  
石器集中 1





1 第II a文化層  
石器集中 1



2 第II a文化層  
石器集中 1



3 第II b文化層  
石器集中 1  
G7-05 東南から



1 第IIc文化層  
石器集中 1  
D8-05周辺 北から



2 第II d文化層  
石器集中 1  
C-9 80 西から

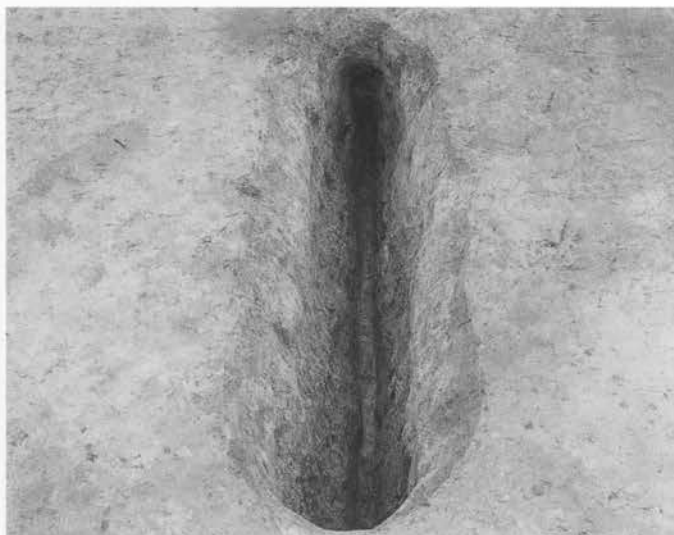


3 旧石器時代  
単独出土  
(K2-62  
グリッド周辺 南西から)





1 SK-016号全景 南から



2 SK-018号陥穴全景 北から



3 SK-022号陥穴セクション 南西から



4 SK-029号陥穴全景 東から



5 SK-052号全景 東から



1 SI-001号遺物出土状況 北から



2 SI-001・007号全景

3 SI-002号カマド近景 南から



4 SI-002号全景 西から

5 SI-002号カマド遺物出土状況 南東から



6 SI-002号遺物出土状況



7 SI-002号炭化材検出状況 西から



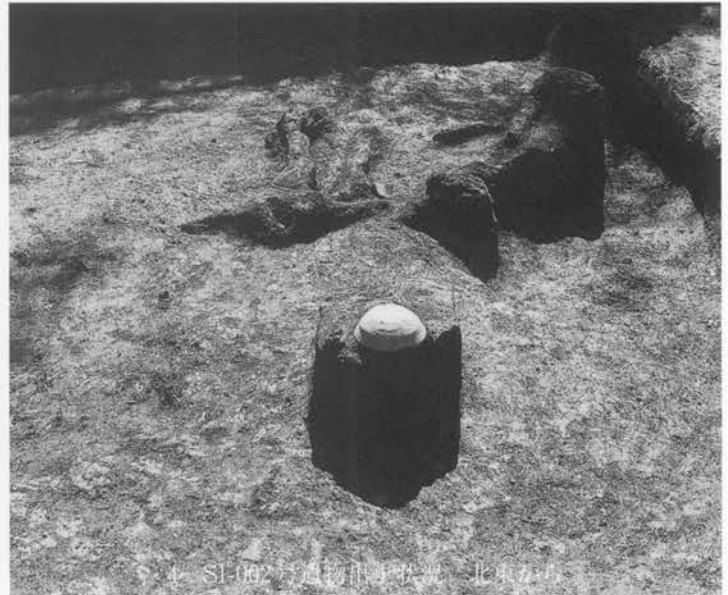
1 SI-002号灰化材・遺物検出状況 東から



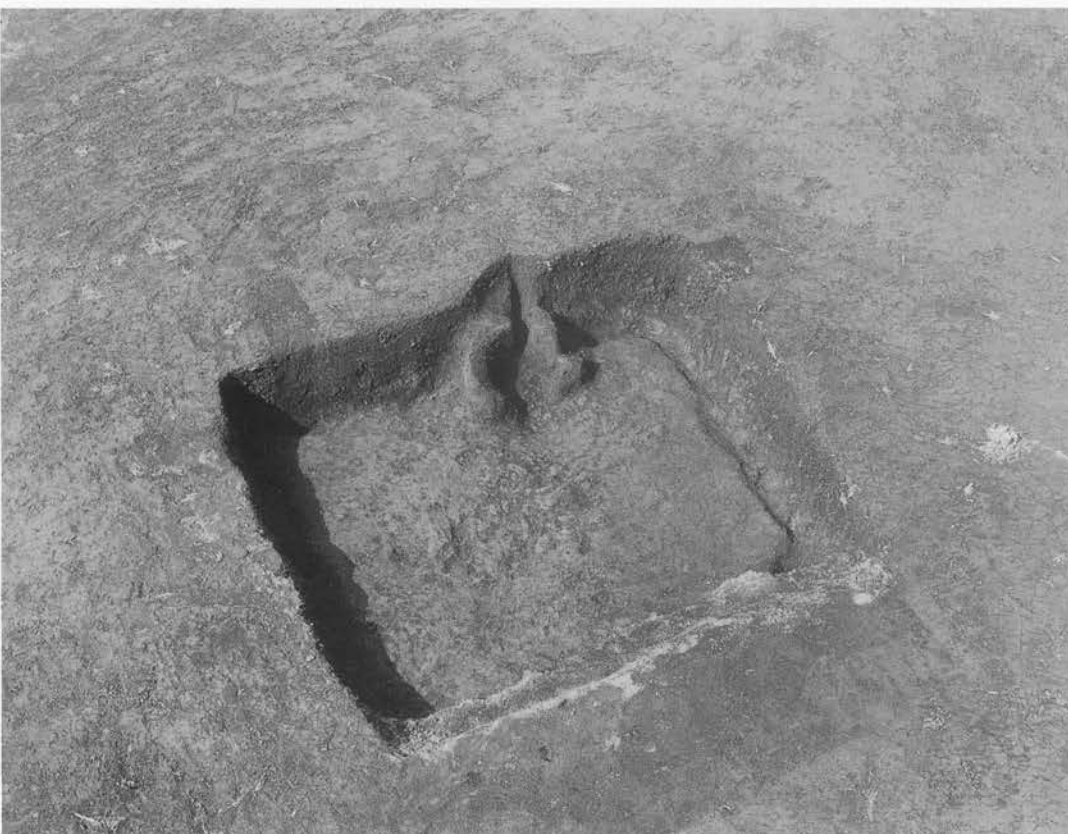
2 SI-002号炭化材・遺物検出状況 東から



3 SI-002号カマド遺物出土状況 南から



4 SI-002号遺物出土状況 北東から



5 SI-003号全景 南から

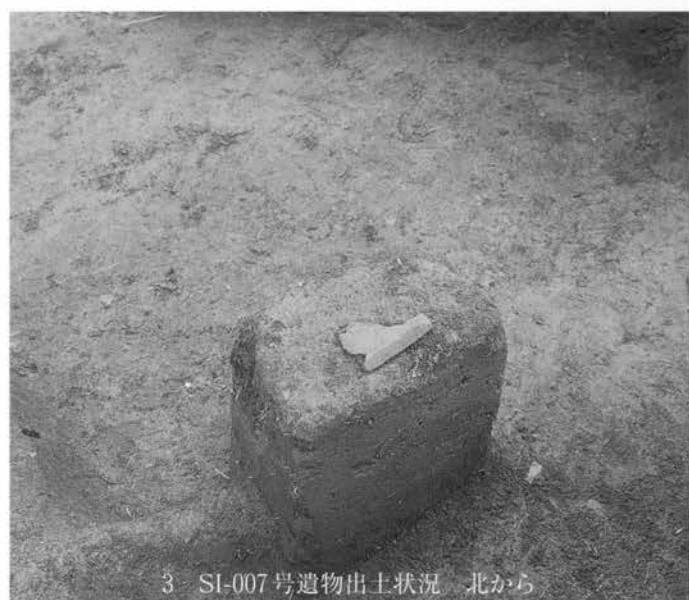




1 SI-004号全景 北から



2 SI-007号カマド近景 南東から



3 SI-007号遺物出土状況 北から



4 SI-008号遺物出土状況 西から



5 SI-008号・SK-020号全景 南から



1 SI-009号全景 南から



2 SI-009号カマド近景 南東から



3 SI-009号遺物出土状況 南から



4 SI-009号遺物出土状況



5 SI-009号遺物出土状況 南から





1 SI-014号・029号全景  
南から



2 SI-014号柱穴内遺物出土状況 北東から



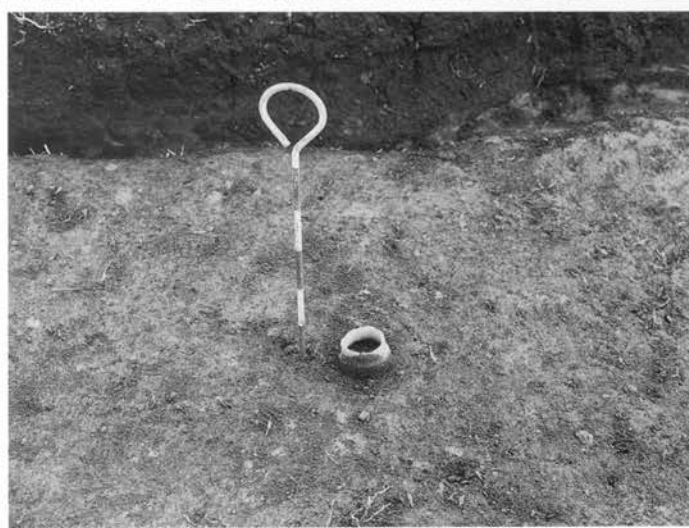
3 SI-014号カマド近景 南東から



4 SI-014号遺物出土状況 東から



5 SI-014号遺物出土状況 東から



6 SI-014号遺物出土状況 東から



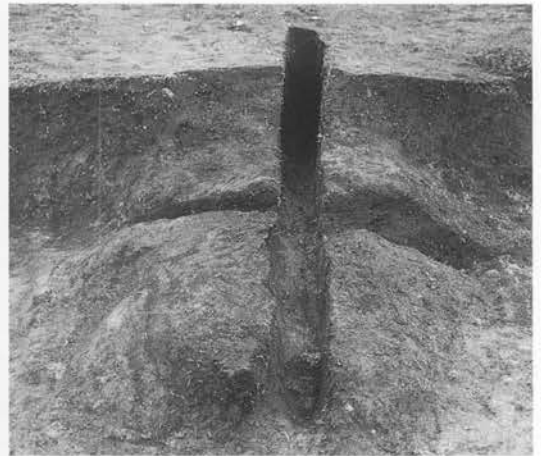
1 SI-015号全景 南から



2 SI-015号カマド近景 東南から



3 SI-016号全景 南西から



4 SI-016号カマド近景 南西から



5 SI-017号全景 南から

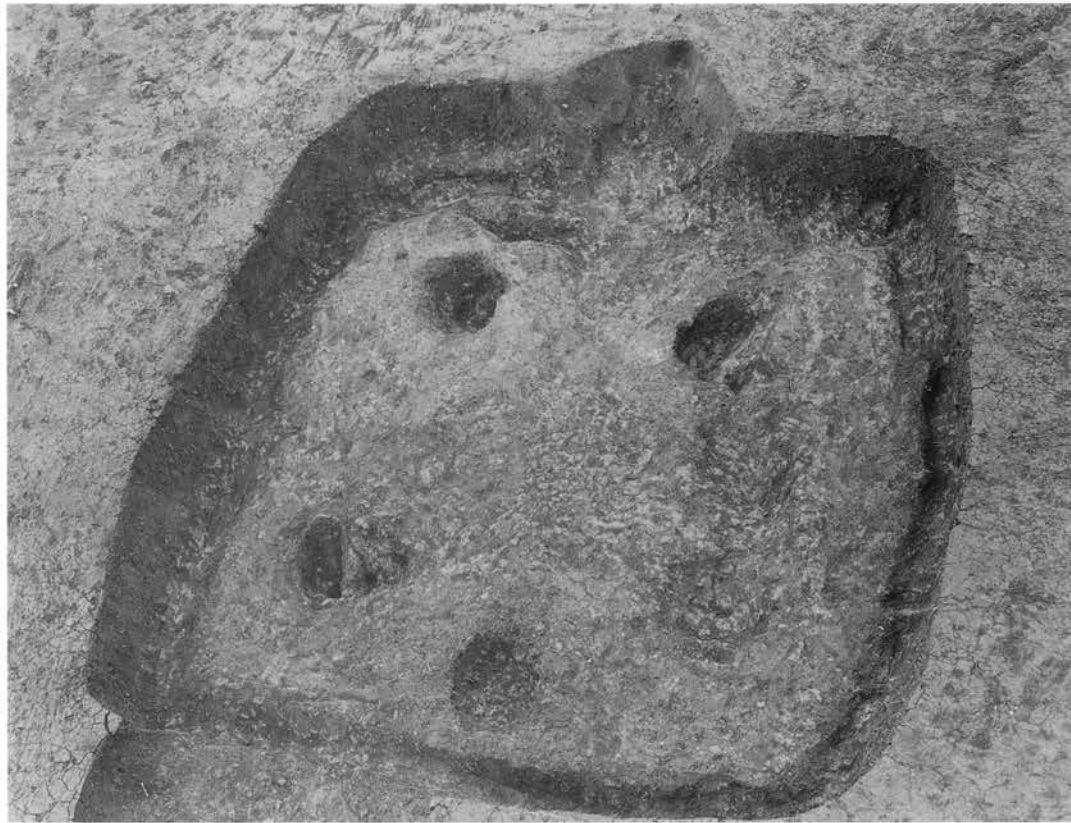




2 SI-018号カマド近景



1 SI-018号全景 南東から



3 SI-020号完掘状況



4 SI-021号遺物出土状況



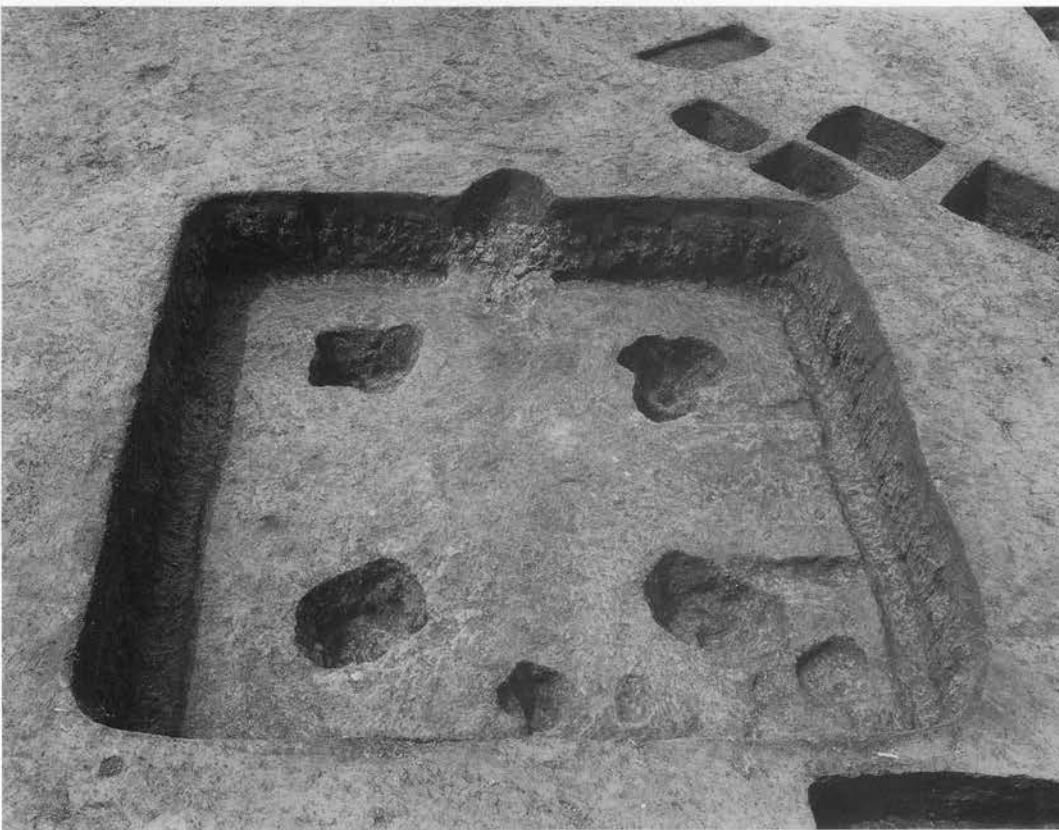
5 SI-021号カマド近景 南から



1 SI-021号・022号全景



2 SI-022号カマド近景



3 SI-023号全景 南から



1 SI-024号全景



2 SI-025号全景



3 SI-025号カマド袖状況

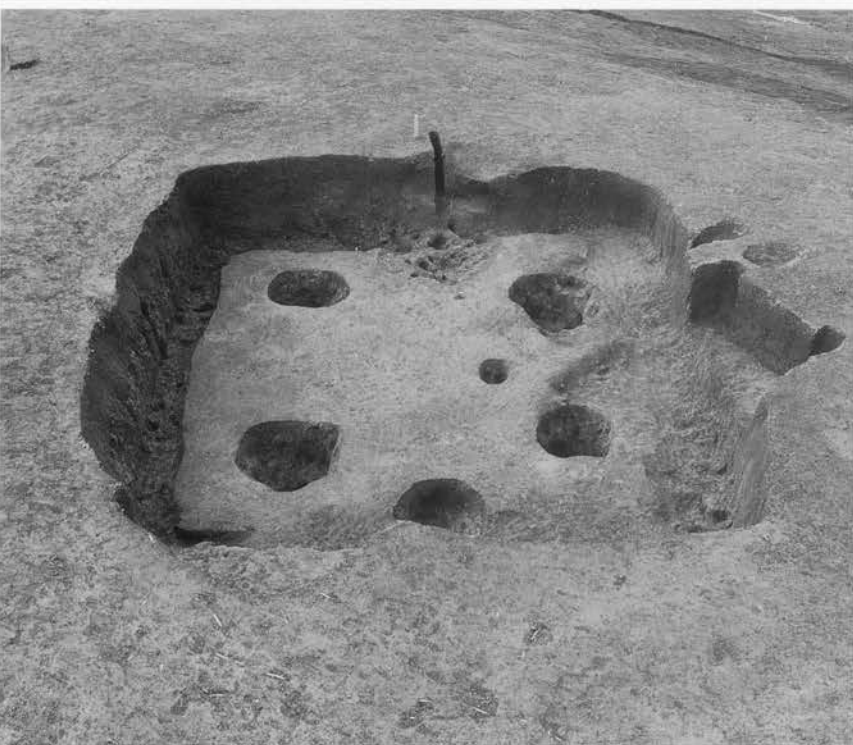




1 SI-026号全景 南から



2 SI-026号カマド近景 南から



3 SI-027号全景



4 SI-028号全景 南東から



5 SI-028号カマド近景 南から



1 SI-029号カマド灰検出状況 南から



2 SI-029号カマド近景 南から



3 SI-029号遺物出土状況



4 SI-029号遺物出土状況 東から



5 SI-030号・033号全景 東から





1 SI-031号全景



2 SI-032号・SD-005号  
完掘状况



3 SI-040号全景

1 SI-040号·SD-005号全景



2 SI-034号·036号全景



3 SI-035号全景







1 SI-036号全景



2 SI-036号カマド近景 南から



3 SI-036号炭化物出土状況  
南から



4 SI-037号全景 南から



5 SI-037号カマド近景 南から





2 SI-038号カマド近景 南から



1 SI-038号全景



3 SI-039号全景



4 SI-040号カマド近景



5 SI-039号カマド近景 南から



1 SI-041号全景 西から



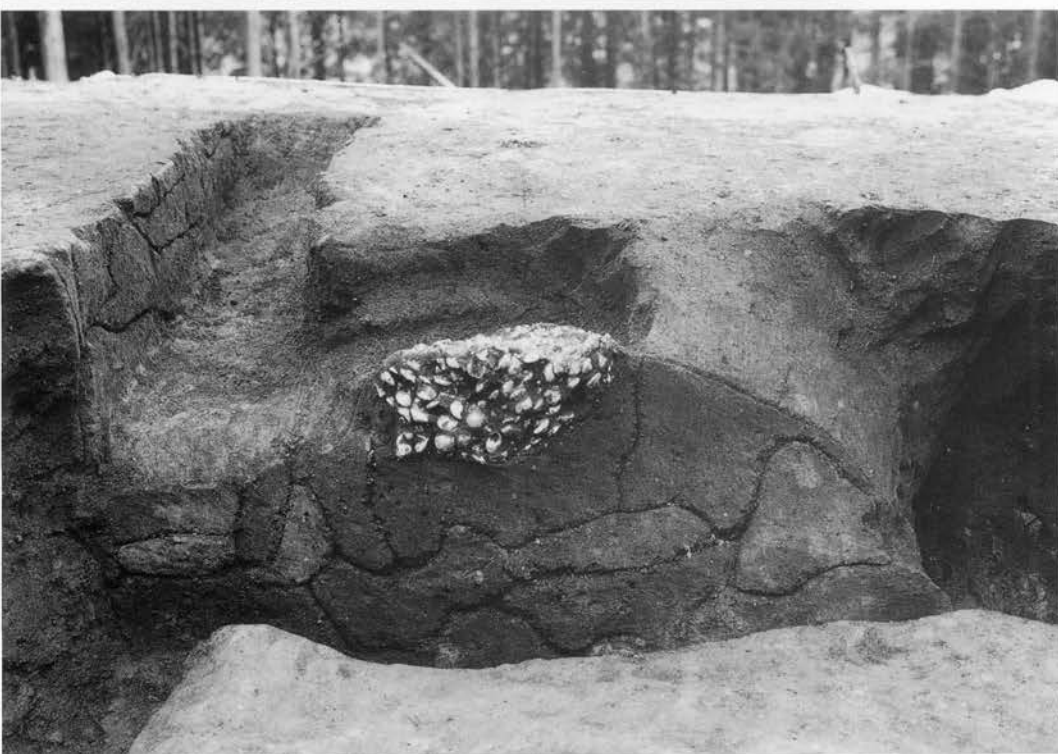
2 SI-041号カマド近景 南から



3 SI-043号全景 南西から



4 SI-042号カマド近景



5 SI-043号カマドセクション 南から





2 SI-044号カマド近景 南から



1 SI-044号全景



4 SI-045号カマド近景 南西から



3 SI-045号全景 南東から



5 SI-046号カマド近景 南から



6 SI-046号・047号全景 南から



1 SI-048号全景 南から



2 SI-048号カマド近景 西から



3 SI-049号カマド近景



4 SI-050号全景 南から



5 SI-051号全景 南から



6 SI-051号全景 南から





2 SI-052号カマド近景 南西から



1 SI-052号全景 南から



3 SI-053号カマド近景 南東から



4 SI-054号カマド近景 南から



6 SI-055号カマド近景 南から



5 SI-055号全景 南から



7 SI-056号カマド近景 南から



1 SI-057号カマド近景 南から



2 SI-057号カマド近景 南から



3 SI-058号全景



4 SI-058号カマド近景



5 SI-059号遺物・炭化材出土状況 南西から



6 SI-059号カマド検出状況 南から





1 SI-059号カマド袖近景 南から



2 SI-059号カマド内遺物出土状況 南から



3 SI-059号遺物出土状況



4 SI-059号炭化材・遺物出土状況 西から



5 SI-060号全景 南西から



1 SI-060号カマド近景



2 SI-063号床面検出状況 南から



3 SI-064号全景 南東から



4 SI-064号カマド全景 南西から





1 SI-066号遺物出土状況



2 SI-066号全景



3 SI-067号カマド近景 南から



5 SI-067号遺物検出状況 南から



4 SI-067号遺物出土状況



6 SI-068号カマド近景



7 SI-068号全景 南西から



1 SI-069号カマド遺物出土状況 南から



2 SI-069号カマド近景



3 SI-070号全景



4 SI-071号全景 南から



5 SI-071号カマド袖近景 南から





2 SI-074号カマド近景 南西から



1 SI-074号全景 南東から



3 SI-074号遺物出土状況



4 SI-075号全景 南から



5 SI-076号カマド近景



6 SI-076号全景 南から



2 SI-078号全景 西から



1 SI-077号カマド近景 南から



4 SI-079号全景 南から



3 SI-078号カマド近景 南から



5 SI-079号カマド近景 南から



6 SI-080号全景



7 SI-080号カマド近景 南から



1 SI-081号カマド近景 南東から



2 SI-082号カマド近景 南東から



4 SI-083号カマド近景



3 SI-083号全景



5 SI-083号遺物出土状況



6 SI-083号遺物出土状況



7 SI-083号遺物出土状況



8 SI-083号遺物出土状況





1 SI-083号遺物出土状況



2 SI-084号カマド近景 南東から



3 SI-085号カマド近景 南から



4 SI-086号カマド近景



5 SI-084号・085号・077号全景



6 SI-087号・088号全景



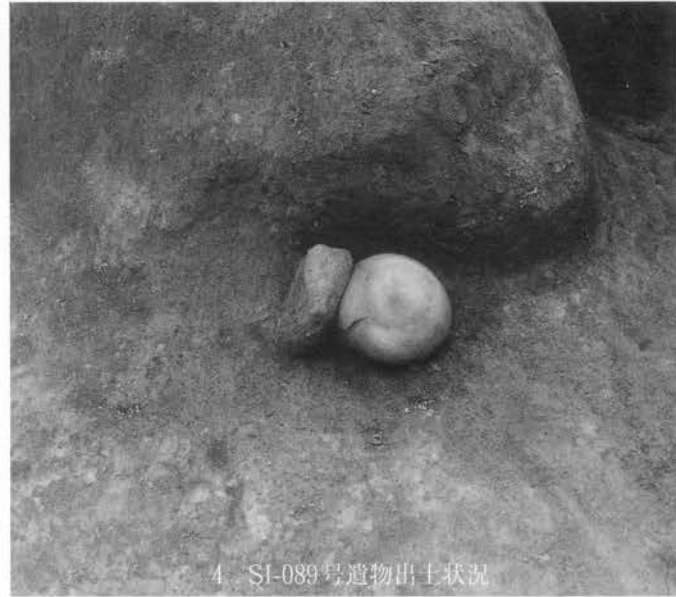
1 SI-089号カマド近景 東から



2 SI-089号カマド遺物出土状況 東から



3 SI-089号遺物出土状況



4 SI-089号遺物出土状況



5 SI-090号全景



1 SI-090号・093号・094号・095号全景



2 SI-092号全景 南東から



3 SI-092号カマド近景



4 SI-093号全景 南西から





1 SI-093号カマド近景



2 SI-094号カマド



3 SI-094号遺物出土状況 南西から



4 SI-095号遺物出土状況 南西から



5 SI-096号カマド袖近景 南から



6 SI-096号カマド遺物検出状況



7 SI-096号カマド内土器検出状況 南西から



8 SI-096号遺物出土状況 北西から



1 SI-096号炭化材・遺物出土状況 北から



2 SI-097号遺物出土状況（カマド脇） 南から



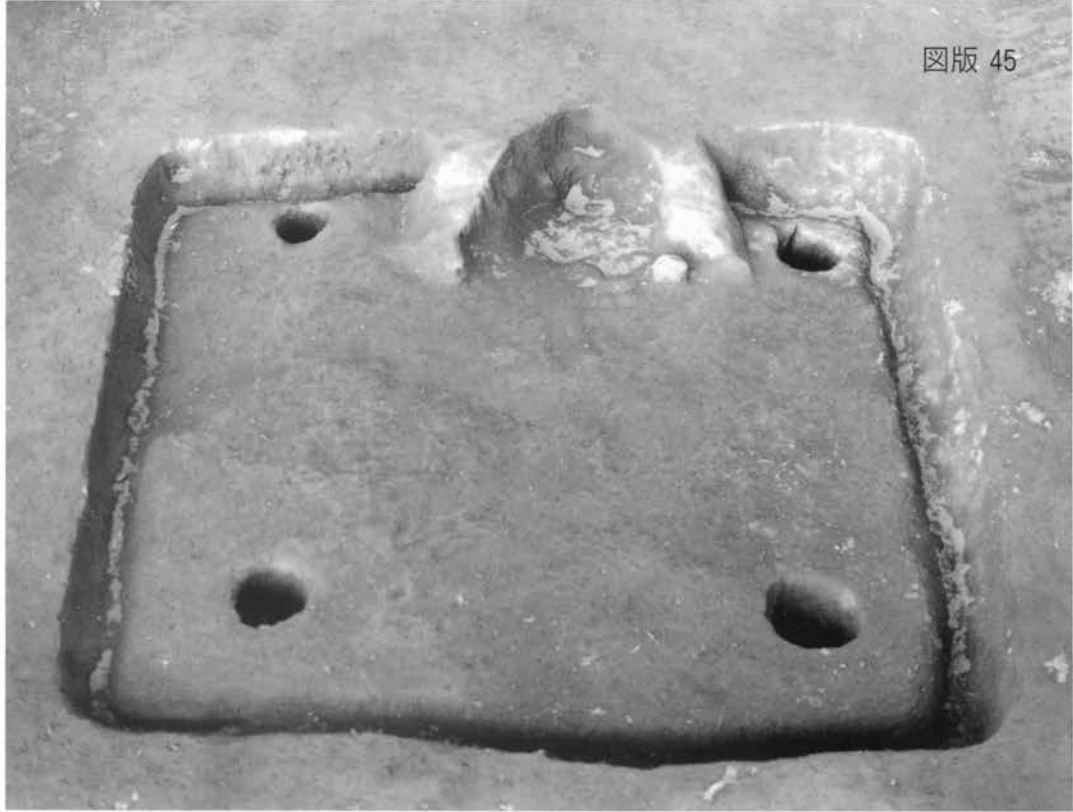
3 SI-097号全景 東南から



4 SI-097号カマド近景 南から



5 SI-098号全景



1 SI-099号全景



2 SI-099号カマド近景



3 SI-099号カマド近景 南から



4 SI-100号全景





1 SI-101号全景



2 SI-101号カマド近景



3 SI-102号カマド検出状況



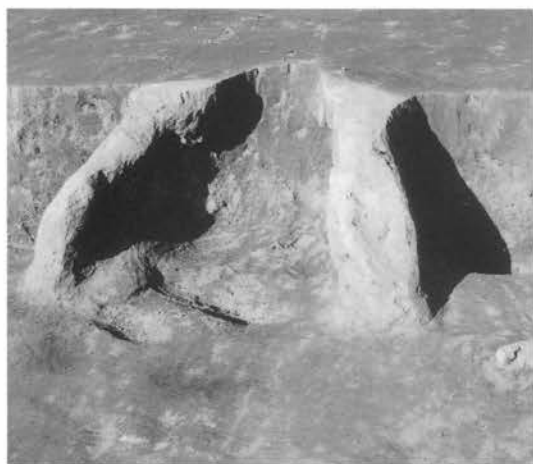
4 SI-103号カマド検出状況



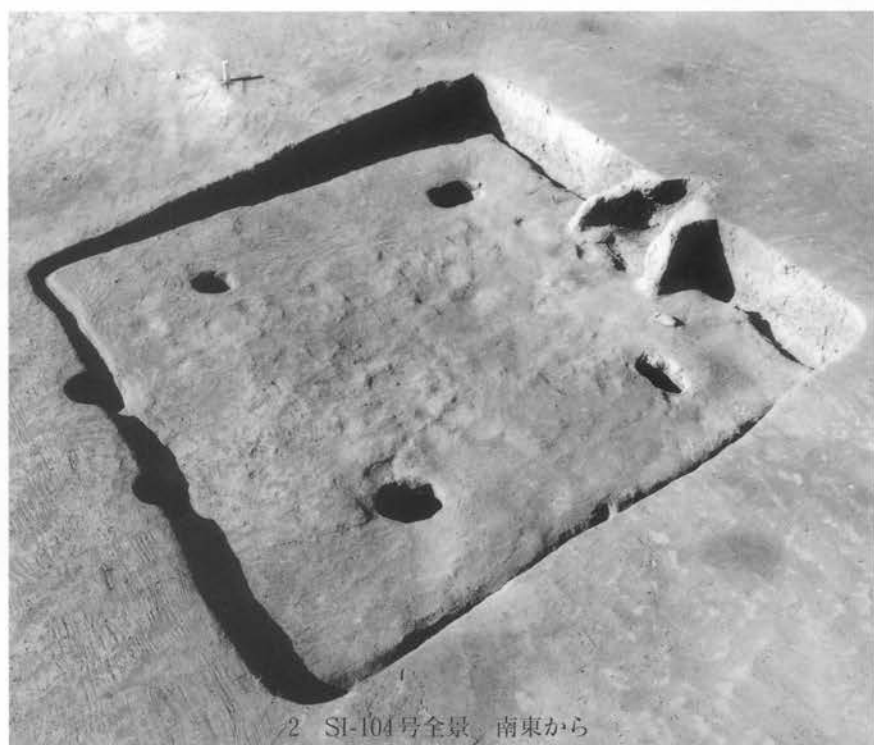
5 SI-102号カマド検出状況



1 SI-103号全景



3 SI-104号カマド近景



2 SI-104号全景、南東から



4 SI-105号全景



1 SI-106号全景 西から



2 SI-109号全景 西から



3 SI-110号全景



4 SI-110号カマド近景





2 SI-111号カマド近景



1 SI-111号全景



4 SI-112号カマド近景 南から



3 SI-112号全景



6 SI-113号カマド近景 南から



5 SI-113号全景



1 SI-114号・115号全景



2 SI-116号全景



3 SI-116号カマド近景 南から



4 SI-116号遺物出土状況

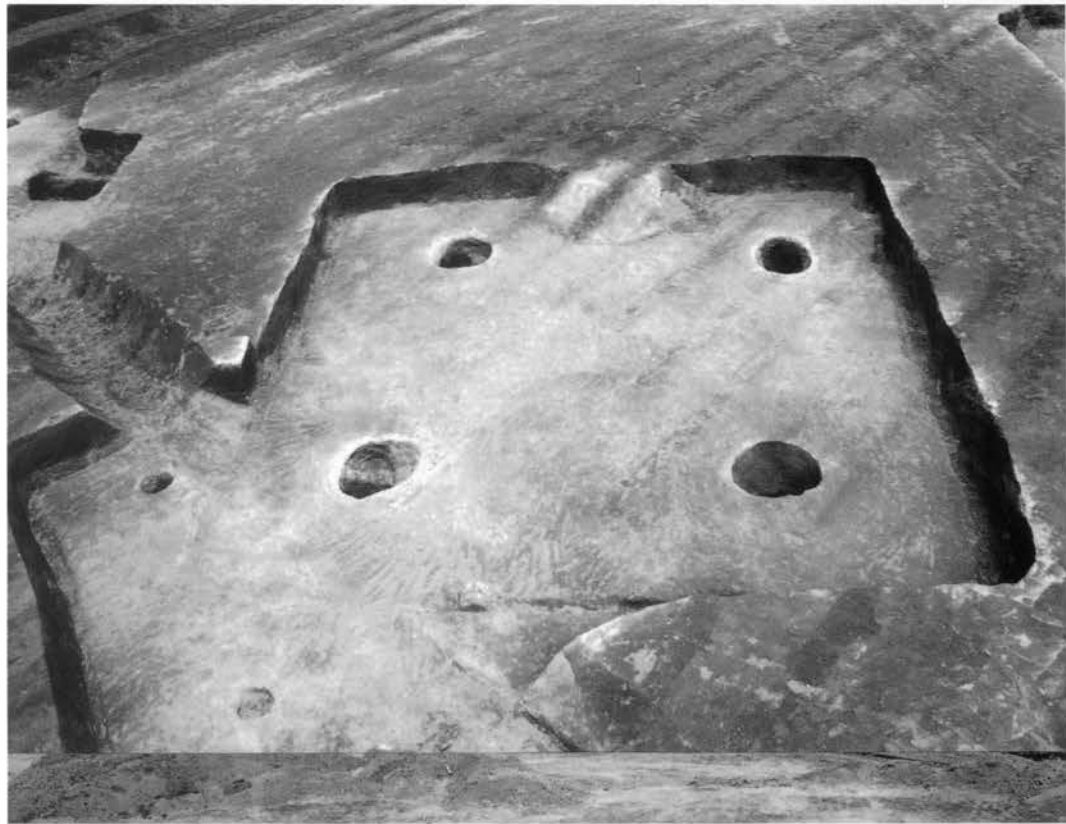




2 SI-118号カマド近景 南東から



1 SI-118号・119号全景



3 SI-120号・121号全景



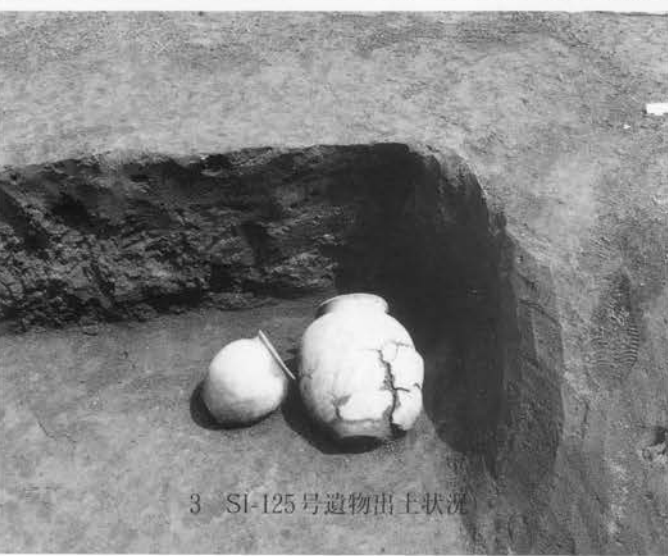
4 SI-122号・123号全景



1 SI-124号全景



2 SI-125号·129号全景



3 SI-125号遺物出土状況



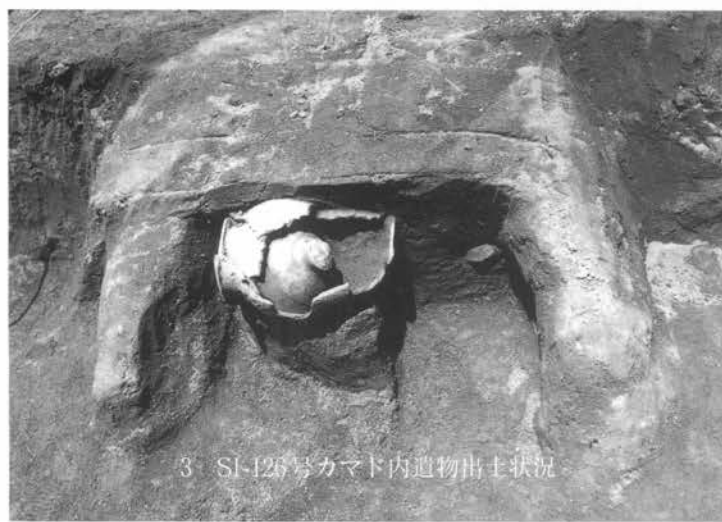
4 SI-125号遺物出土状況



1 SI-126号全景



2 SI-126号・127号全景



3 SI-126号カマド内遺物出土状況



4 SI-126号・127号遺物出土状況





1 SI-117号・128号全景



2 SI-128号カマド近景 南東から



3 SI-130号全景



1 SI-017号全景



2 SI-026号全景



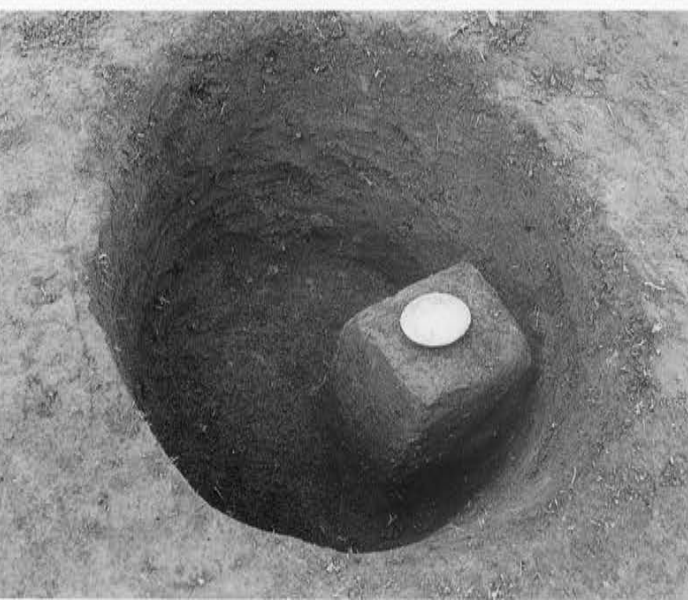
3 SI-031号全景



1 SB-001号全景



2 SB-001号柱痕跡検出状況  
東から



3 SB-001号P-8遺物出土状況  
東から





1 SB-002号全景 南から



2 SB-002号遺物出土状況  
南から



3 SB-004号・005号全景  
西から



1 SB-007号全景 西から



2 SB-008号・009号・010号  
011号・012号全景  
西から



3 SB-013号全景 西から

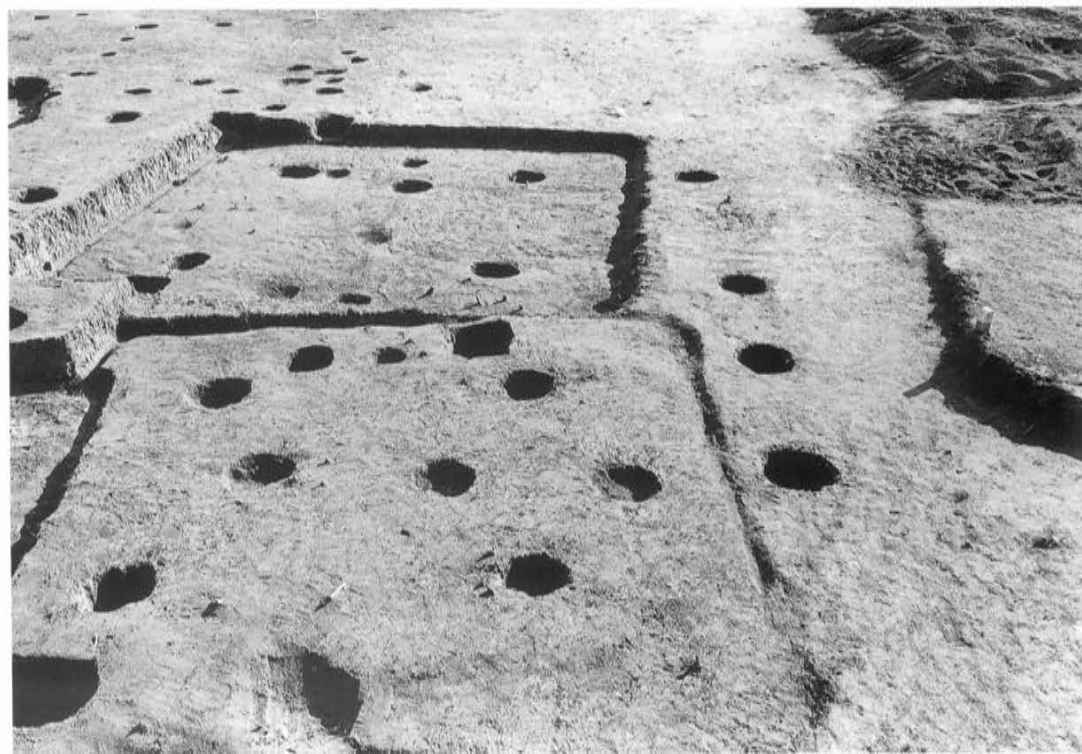




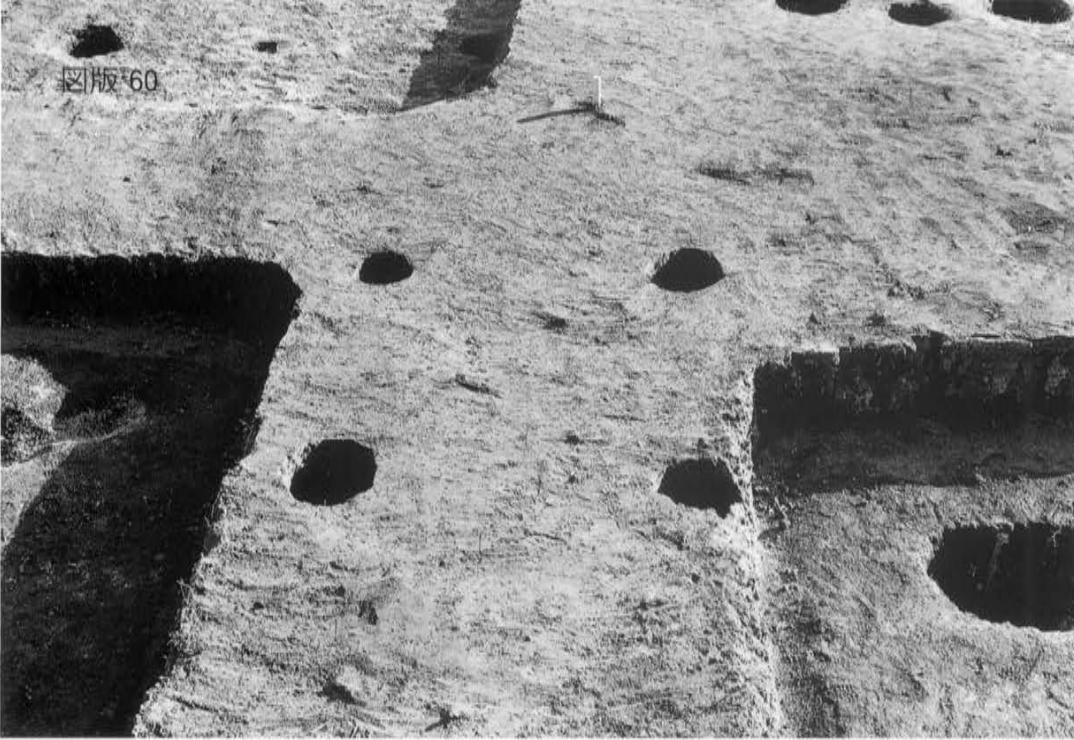
1 SB-014号全景 西から



2 SB-015号全景 北から



3 SB-016号全景 北から



1 SB-017号全景 北から



2 SB-018号全景 西から



3 SB-019号全景 西から



1 SB-020号・021号全景  
北から



2 SB-022号全景

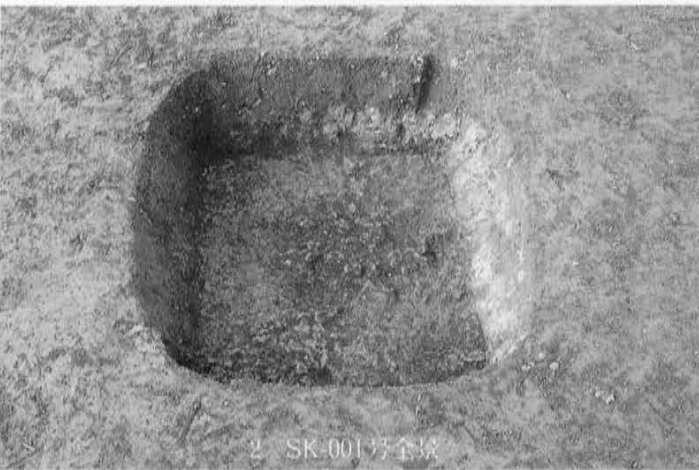


3 SB-023号・024号全景

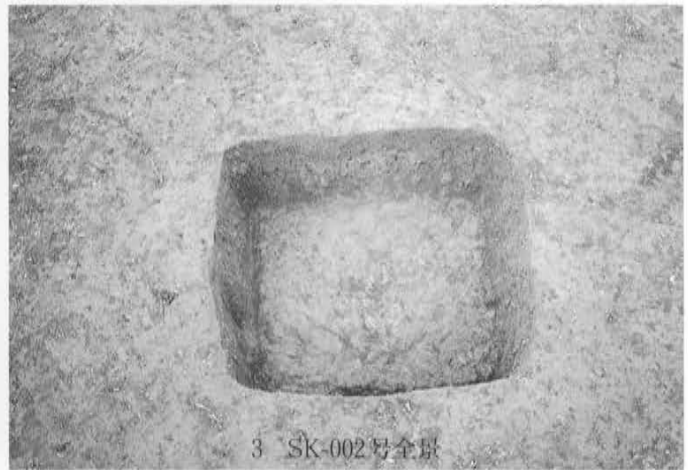




1 SK-001号～003号周辺遺構群全景  
北東から



2 SK-001号全景



3 SK-002号全景



4 SK-004号横置状況 西から



5 SK-005号全景 南から



6 SK-006号全景 西から



7 SK-041号全景 東から





1 SD-001号全景 南から



2 SD-001号近景 南から



3 SD-001号遺物出土状況  
南東から



1 SD-001号遺物出土状況  
西から



2 SD-001号遺物集中地点 西から



3 SD-001号遺物集中地点 西から



4 SD-001号遺物集中地点中心部 西から



5 SD-001号遺物集中地点 南東部



6 SD-001号遺物集中地点北西部 西から



7 SD-001号遺物出土状況 (中央寄り部分) 西から



1 SD-005号全景



2 SD-010号硬化画検出状況  
西から





1 SD-010号全景 東から

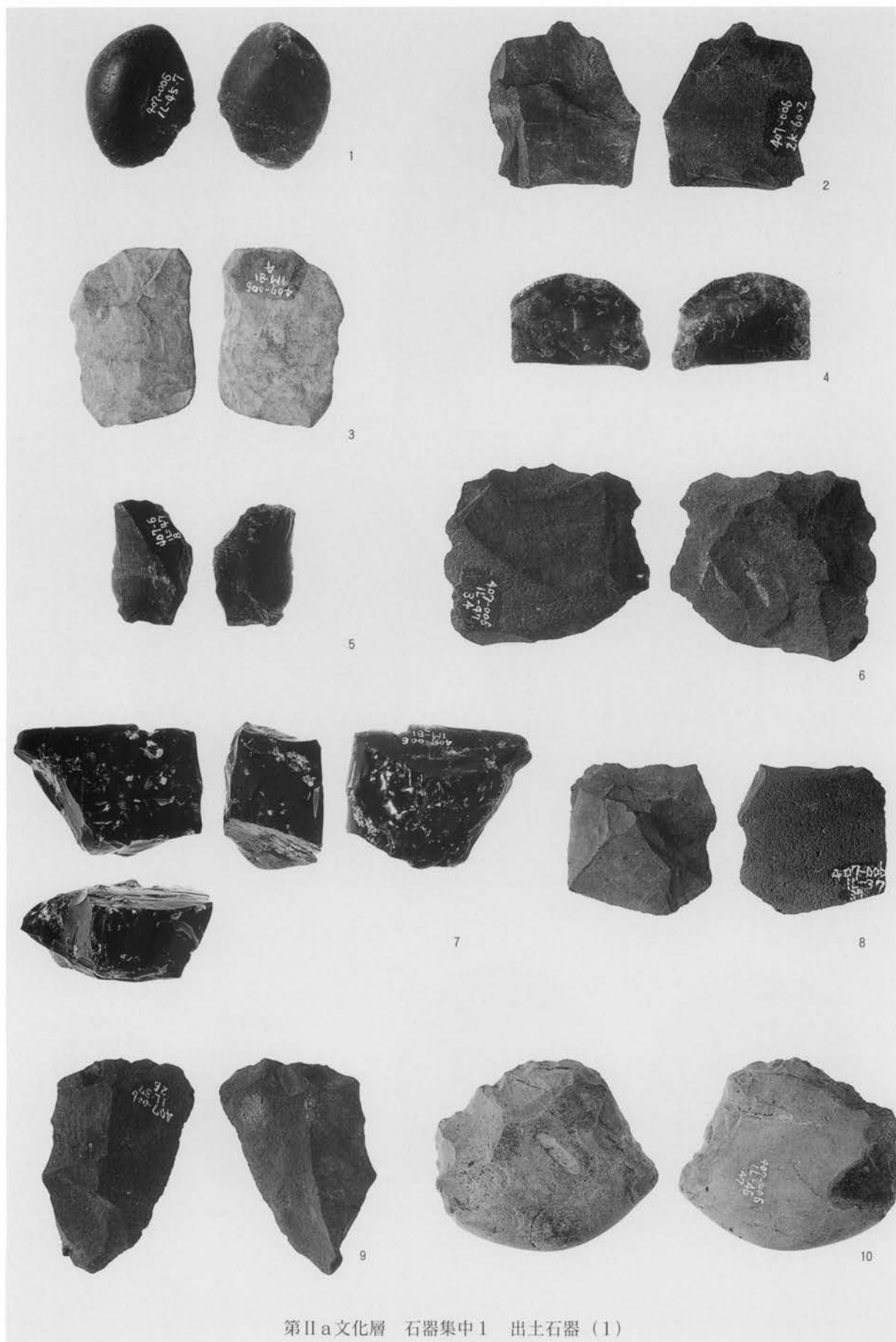


2 SD-014号全景

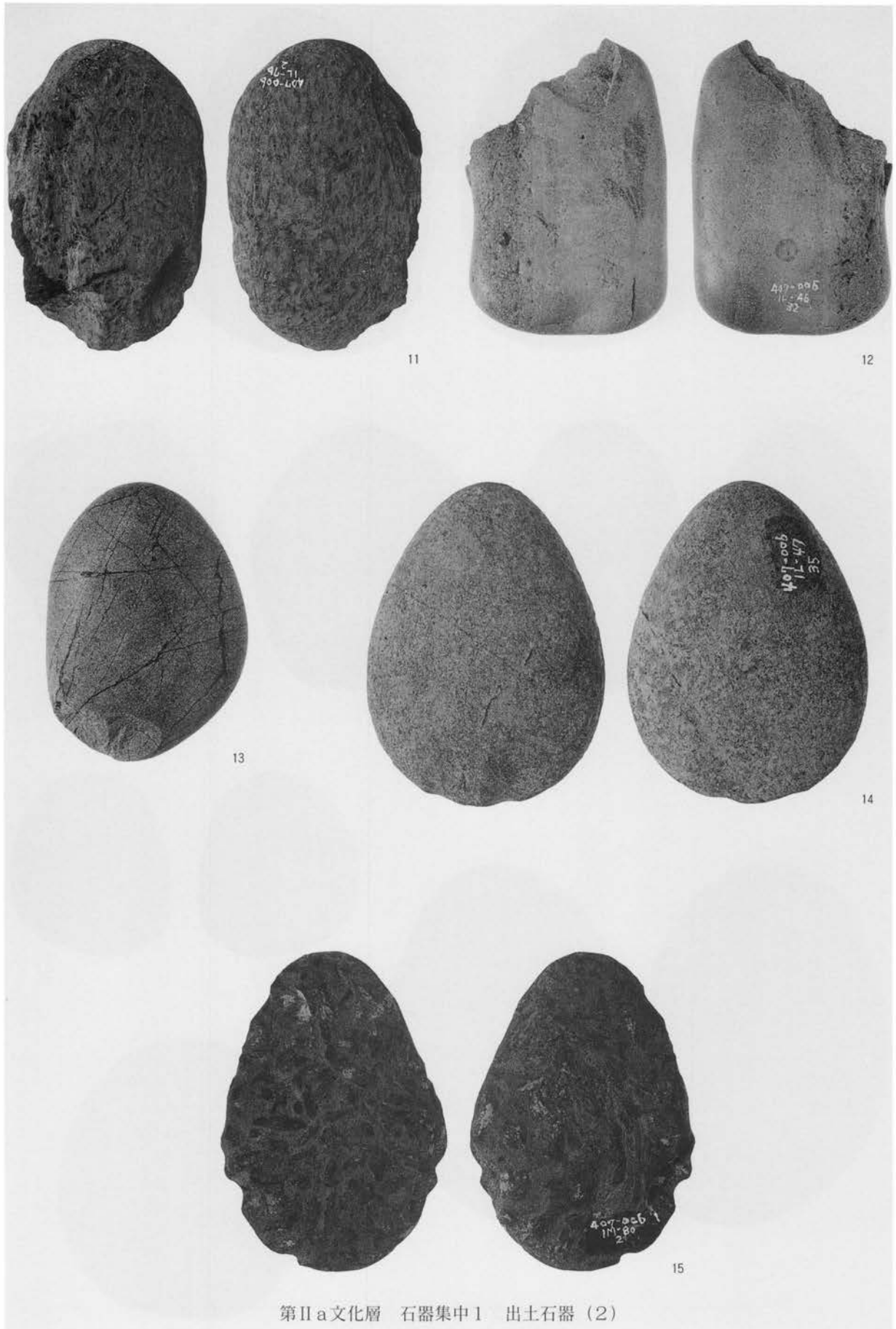




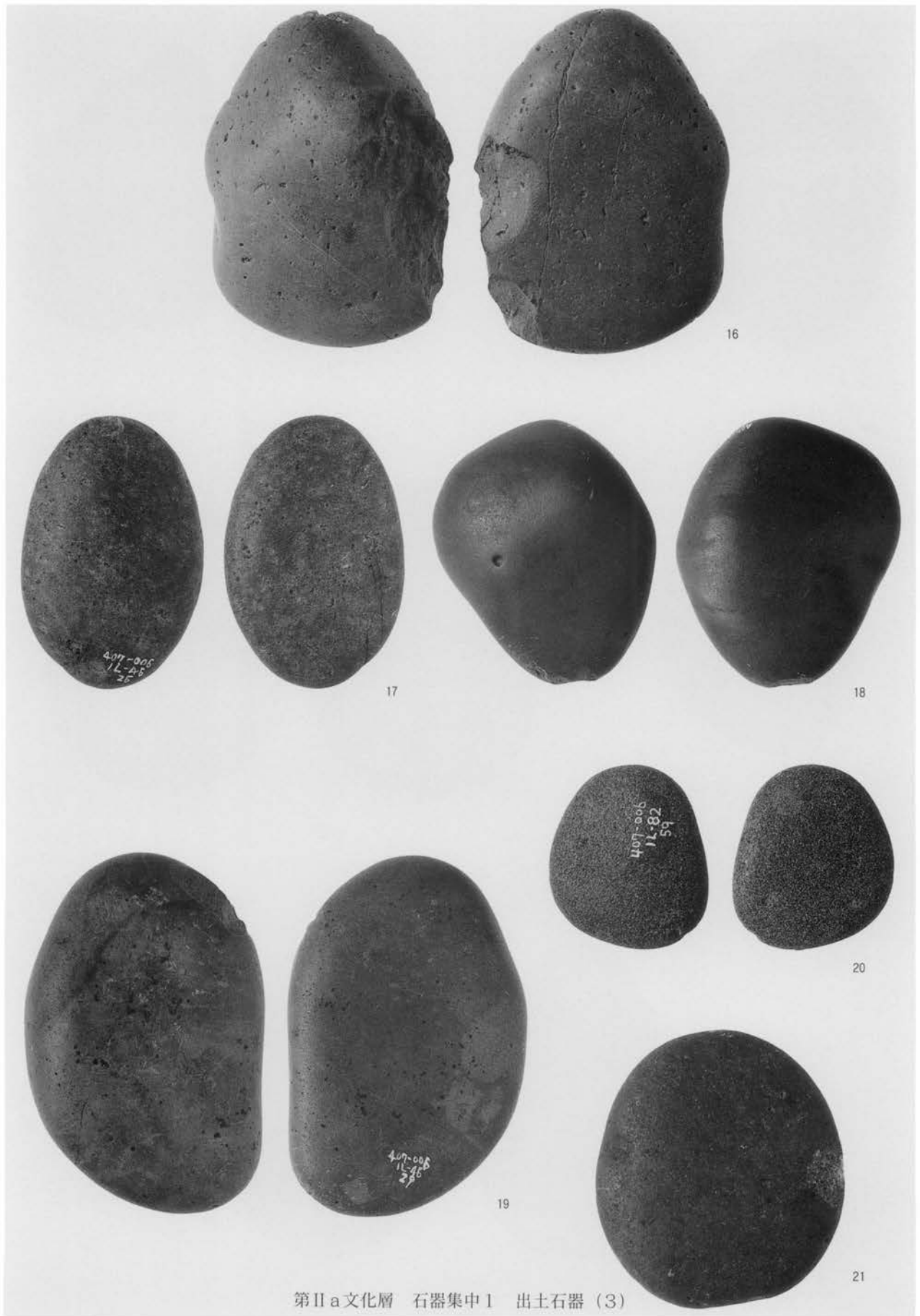
第I文化層 石器集中1 出土石器



第II a文化層 石器集中1 出土石器 (1)



第II a文化層 石器集中1 出土石器 (2)



第II a文化層 石器集中1 出土石器 (3)

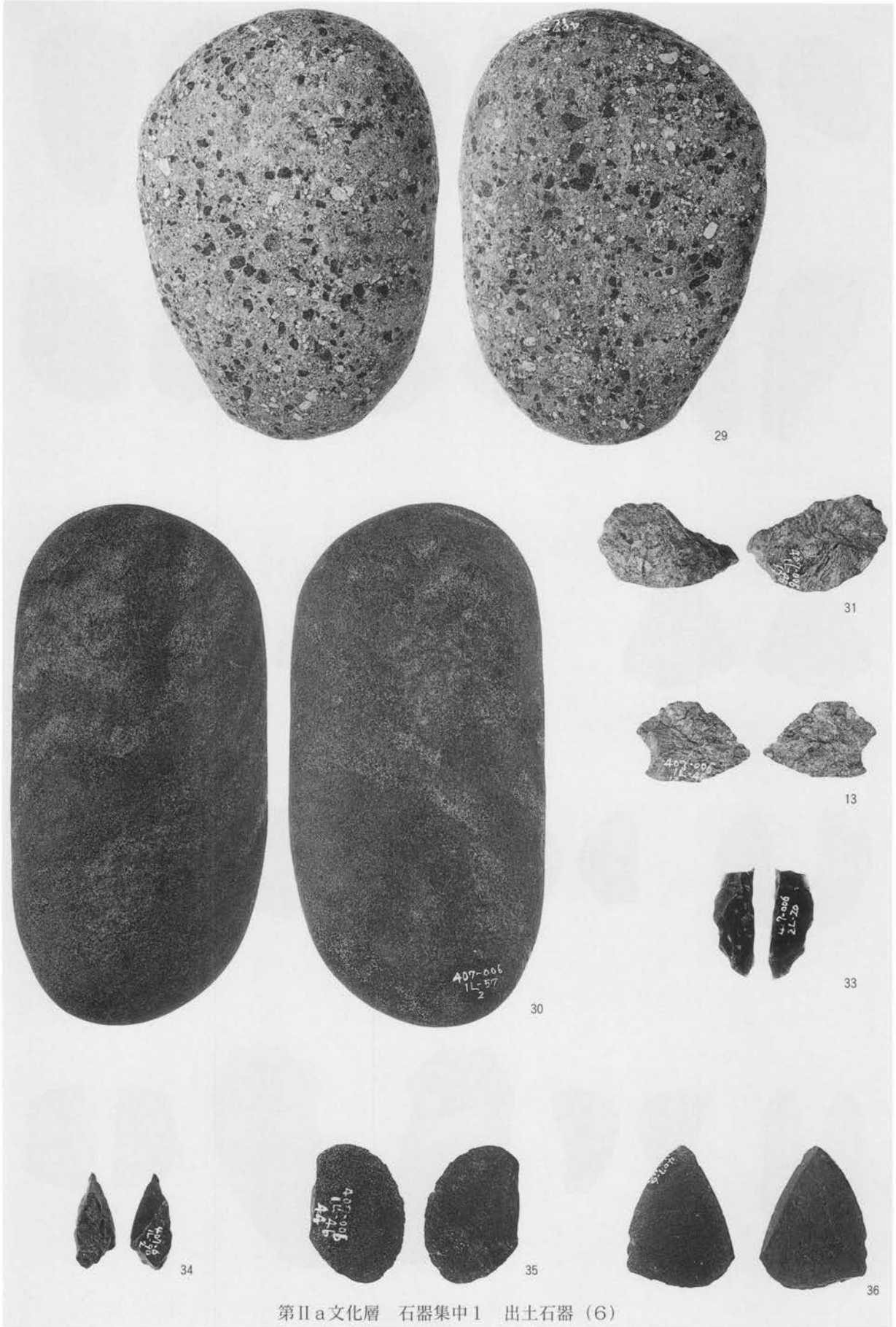


第II a文化層 石器集中1 出土石器 (4)





第II a文化層 石器集中1 出土石器 (5)

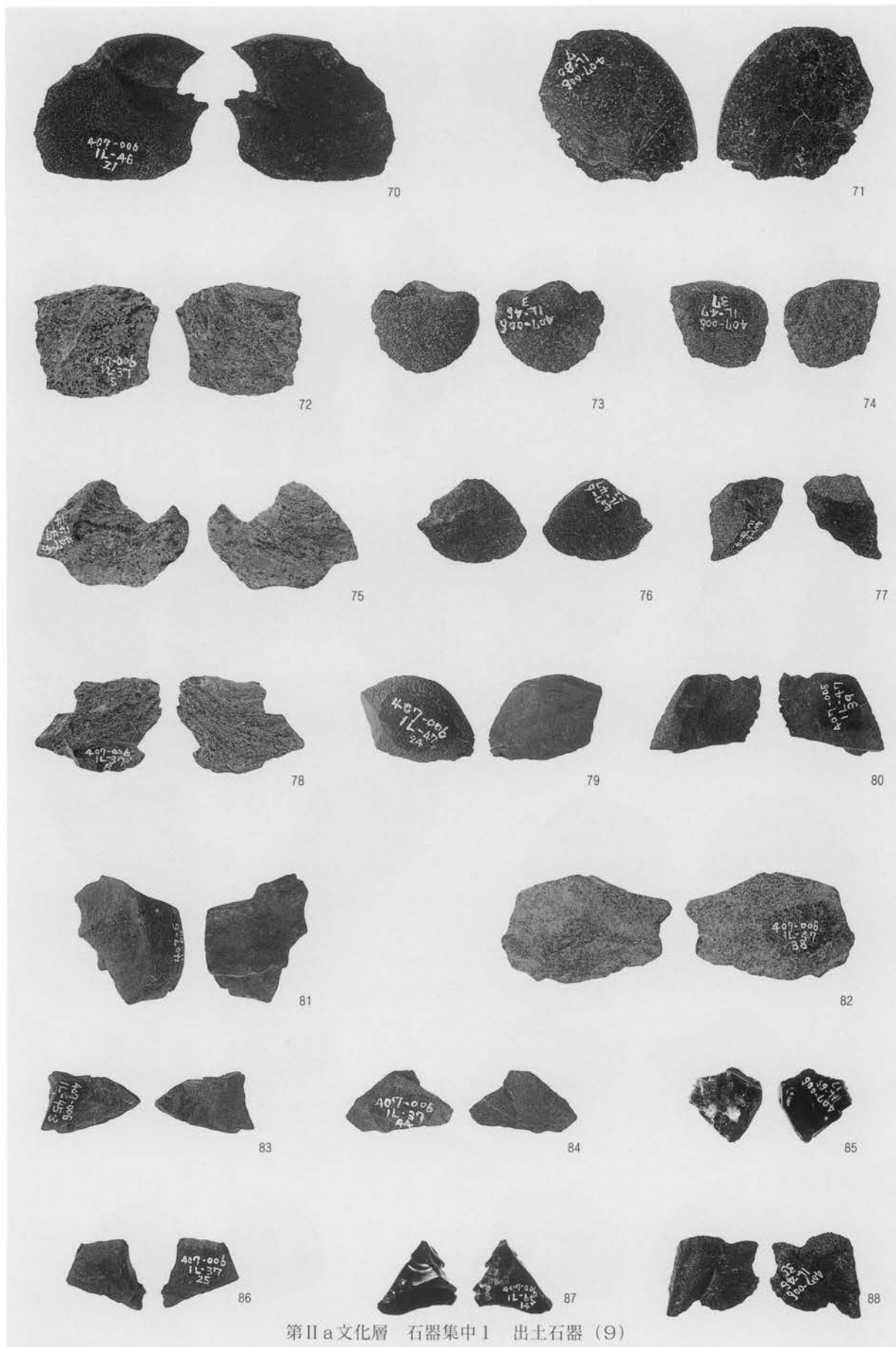


第II a文化層 石器集中1 出土石器 (6)

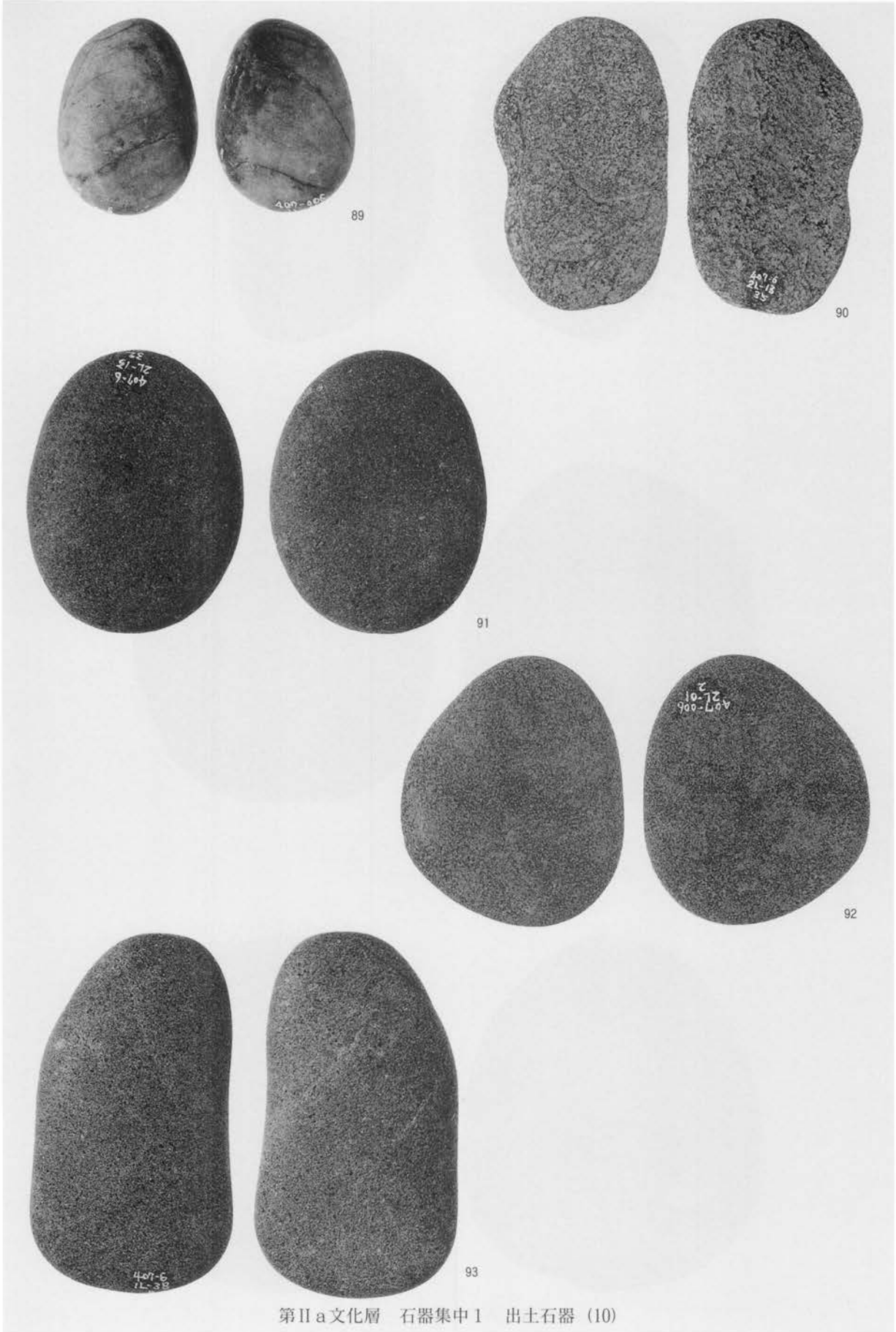








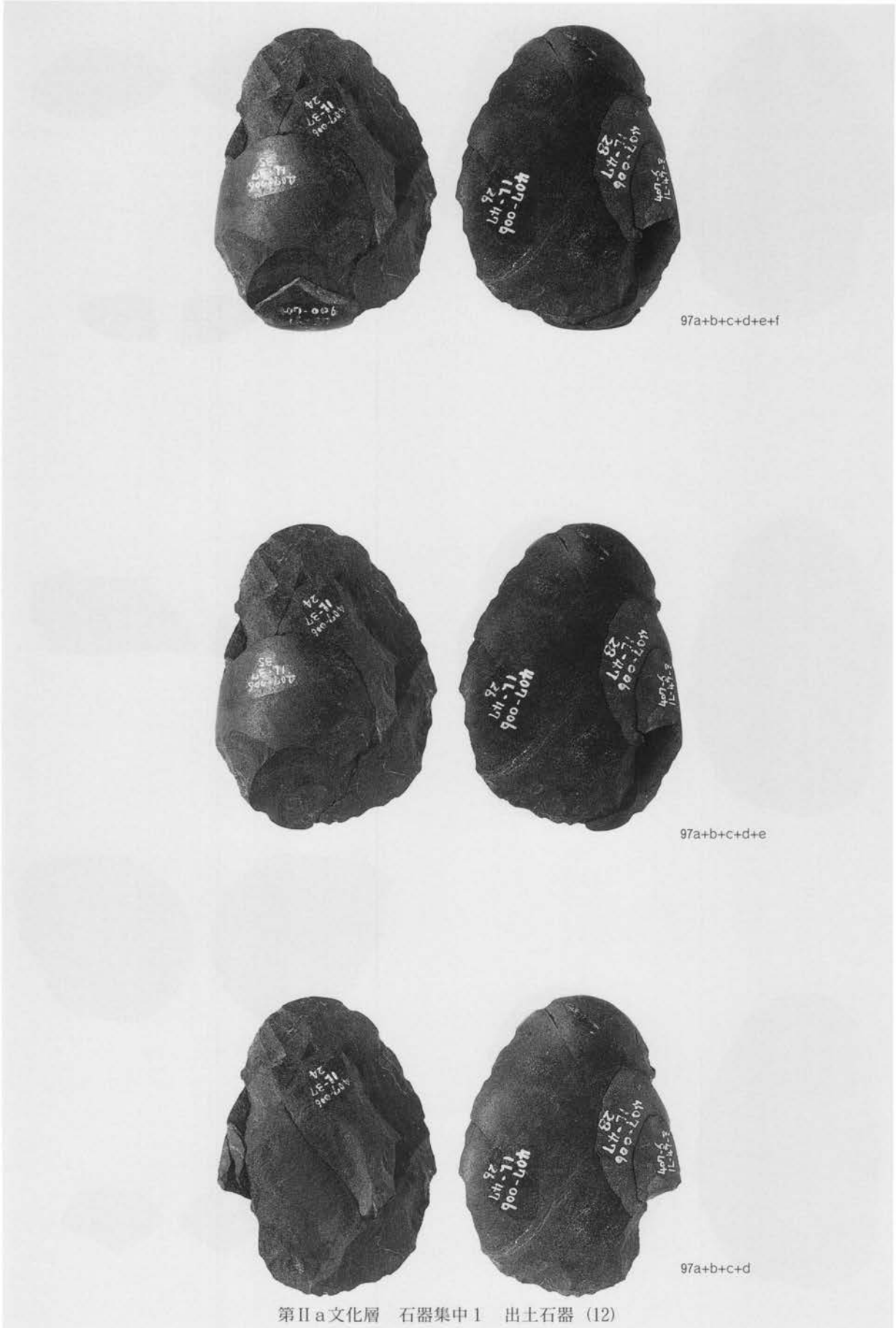
第II a文化層 石器集中1 出土石器 (9)

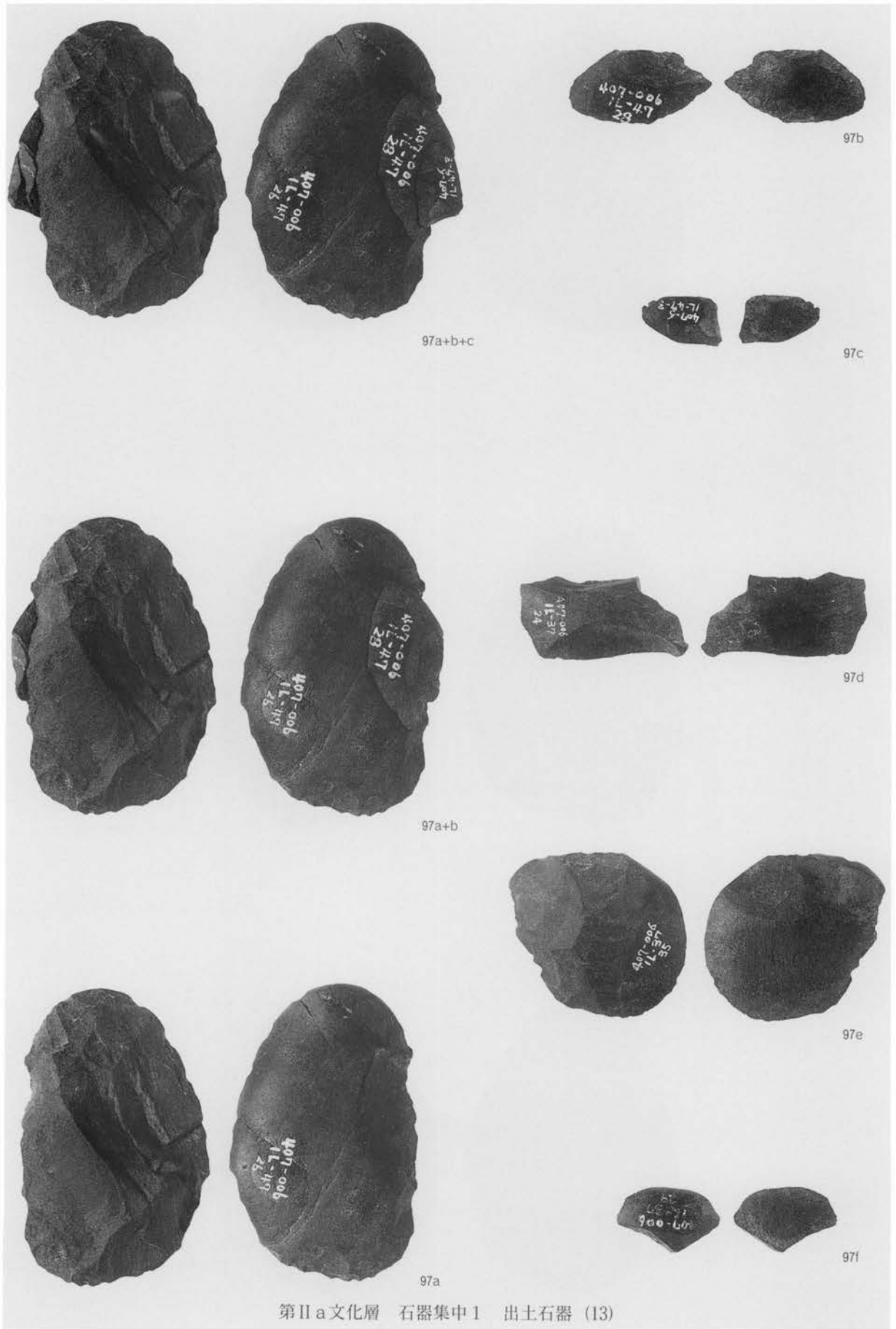


第II a文化層 石器集中I 出土石器 (10)



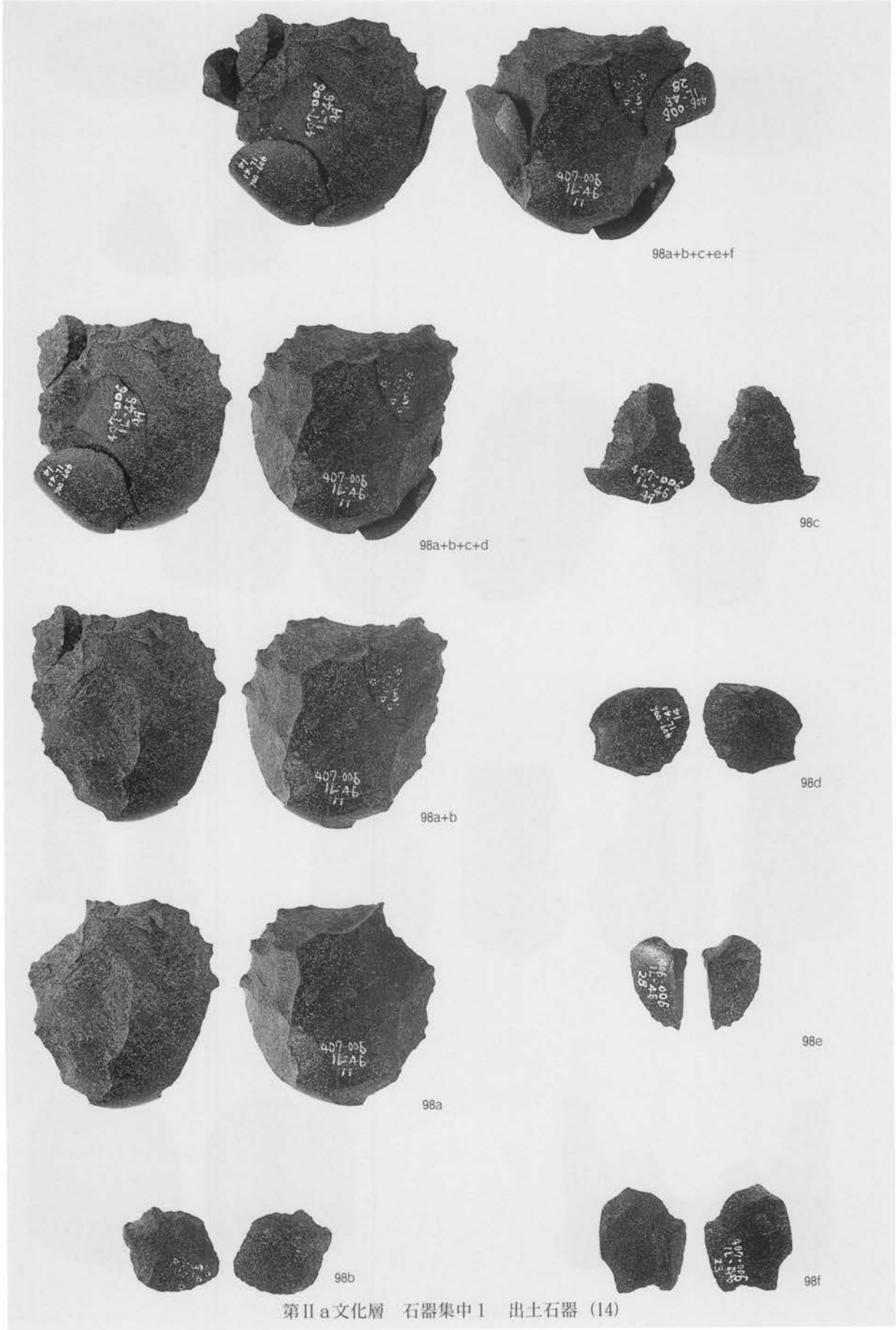
第II a文化層 石器集中1 出土石器 (11)



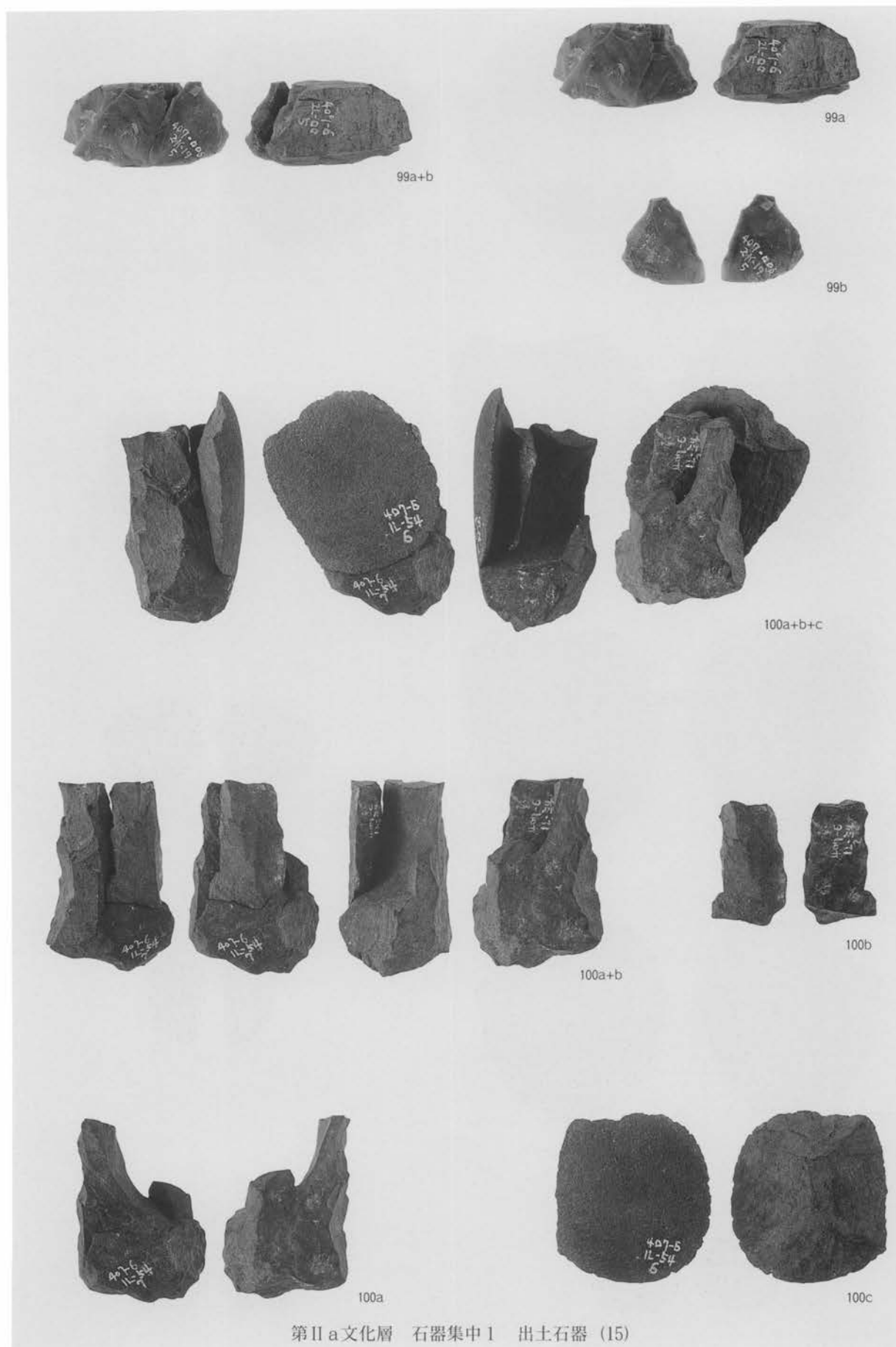


第IIa文化層 石器集中1 出土石器 (13)



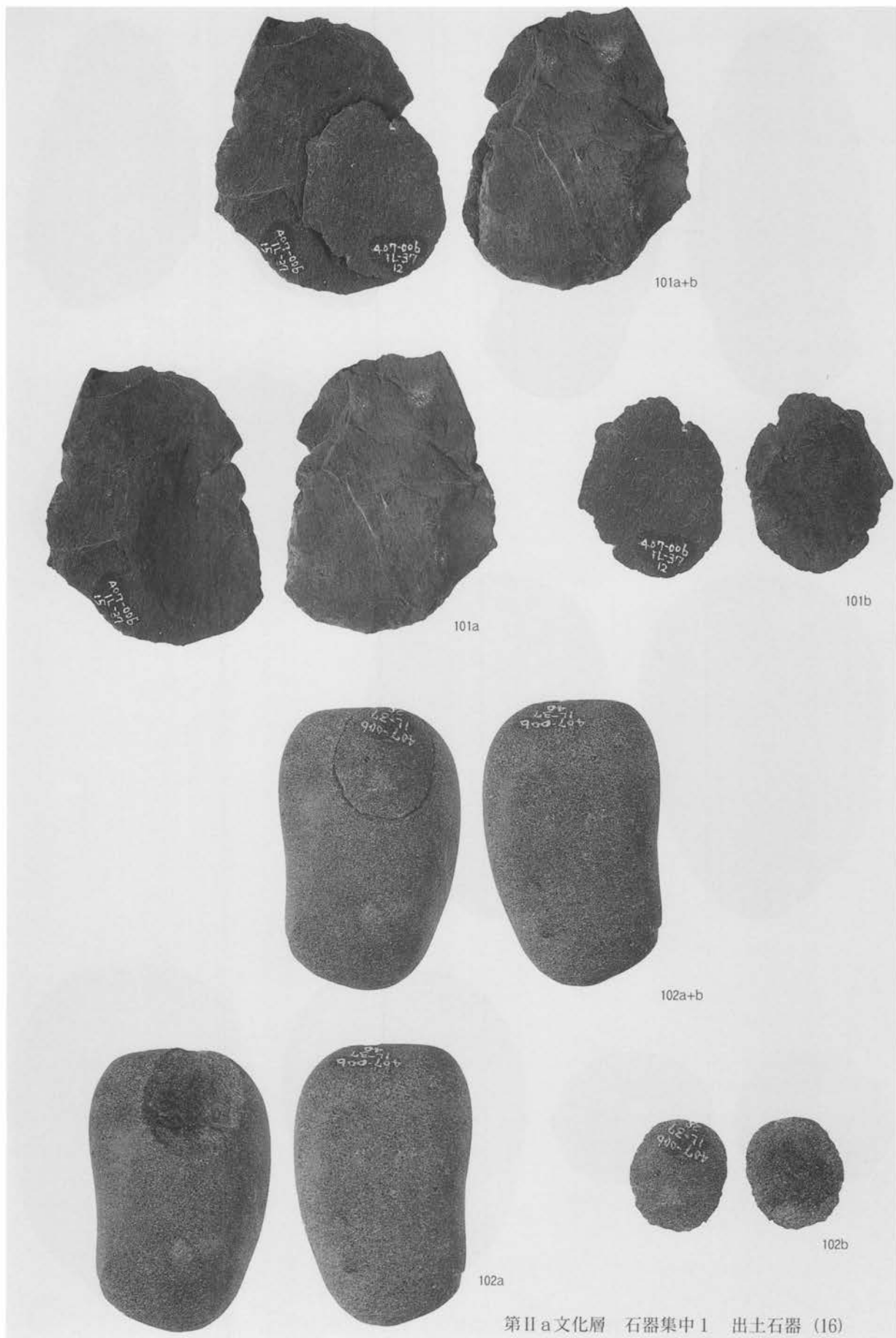


第II a文化層 石器集中I 出土石器 (14)



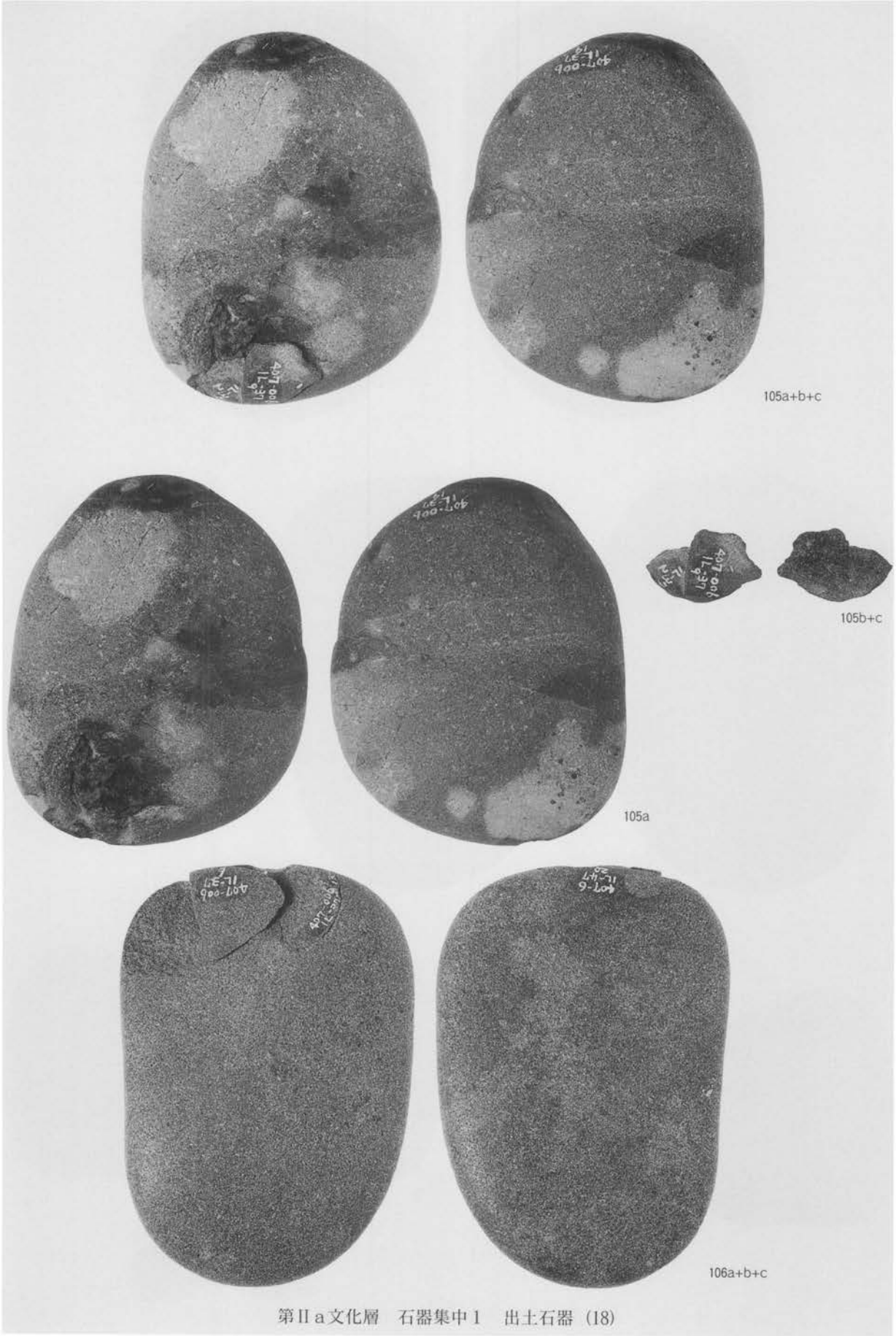
第II a文化層 石器集中1 出土石器 (15)





第II a文化層 石器集中1 出土石器 (16)

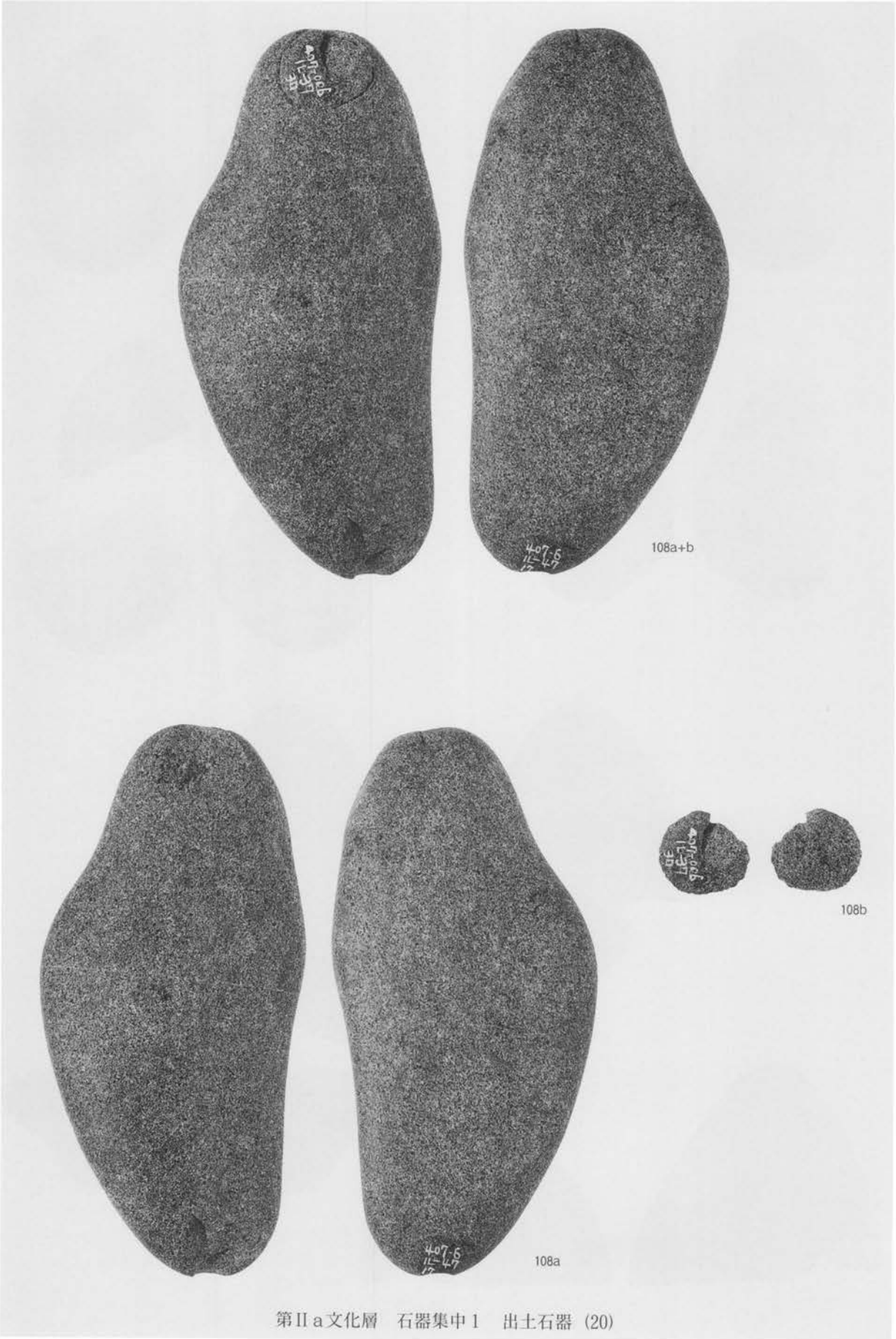




第II a文化層 石器集中1 出土石器 (18)

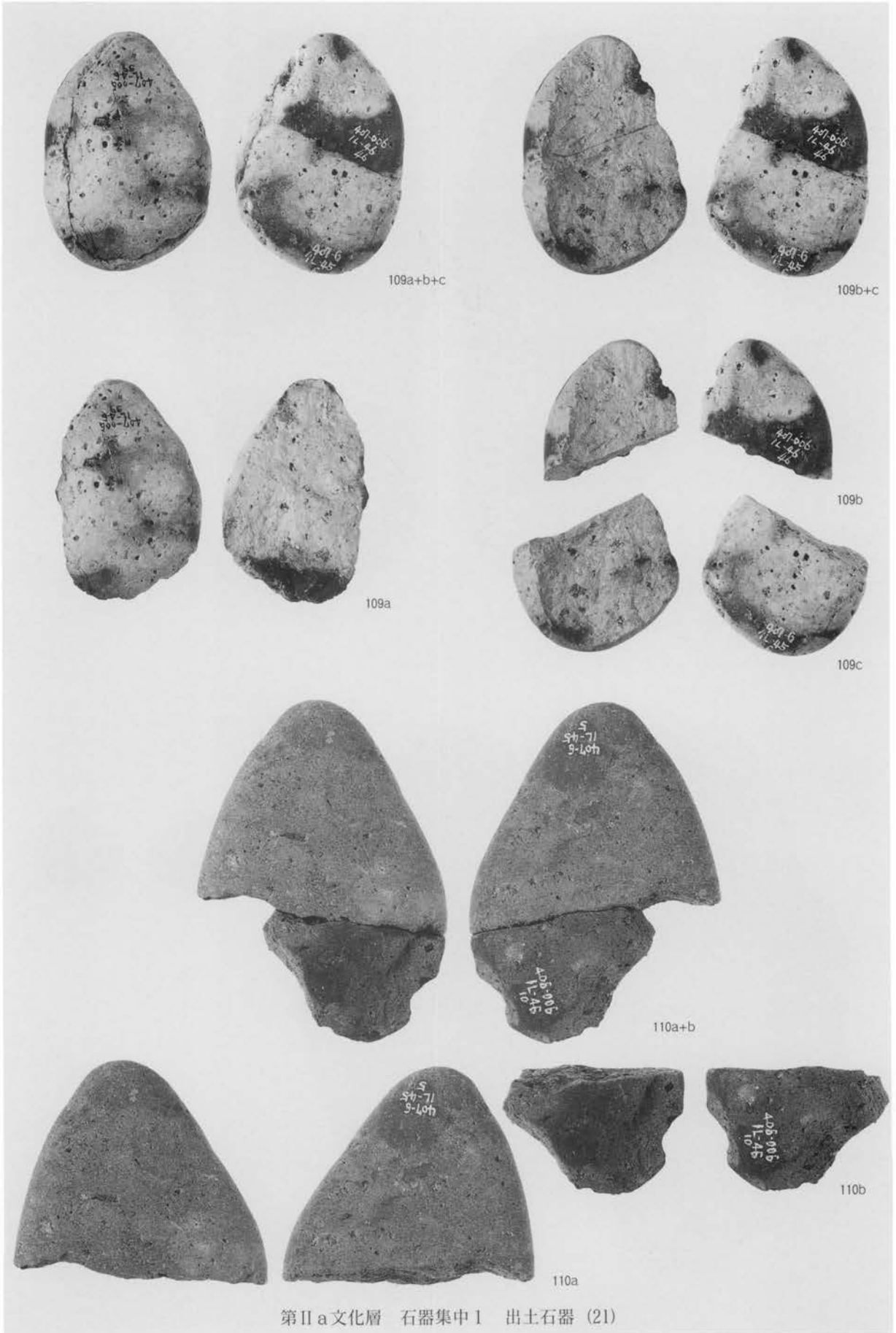


第II a文化層 石器集中1 出土石器 (19)



第II a文化層 石器集中1 出土石器 (20)





第II a文化層 石器集中1 出土石器 (21)



第II b文化層 石器集中1 出土石器



第IIc文化層 石器集中1a 出土石器(1)





第IIc文化層 石器集中1a 出土石器(2)



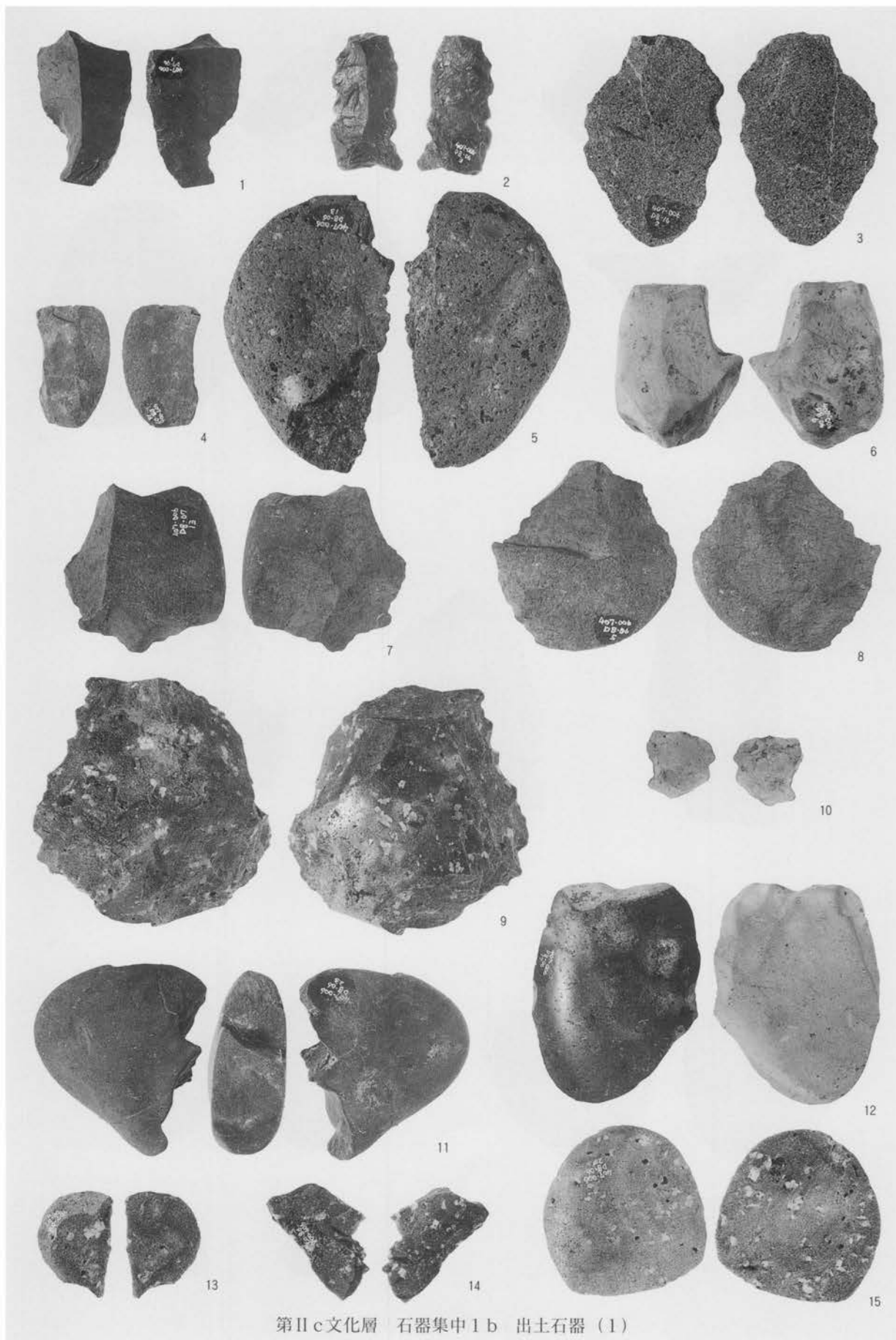
第IIc文化層 石器集中1a 出土石器(3)



第IIc文化層 石器集中1a 出土石器(4)

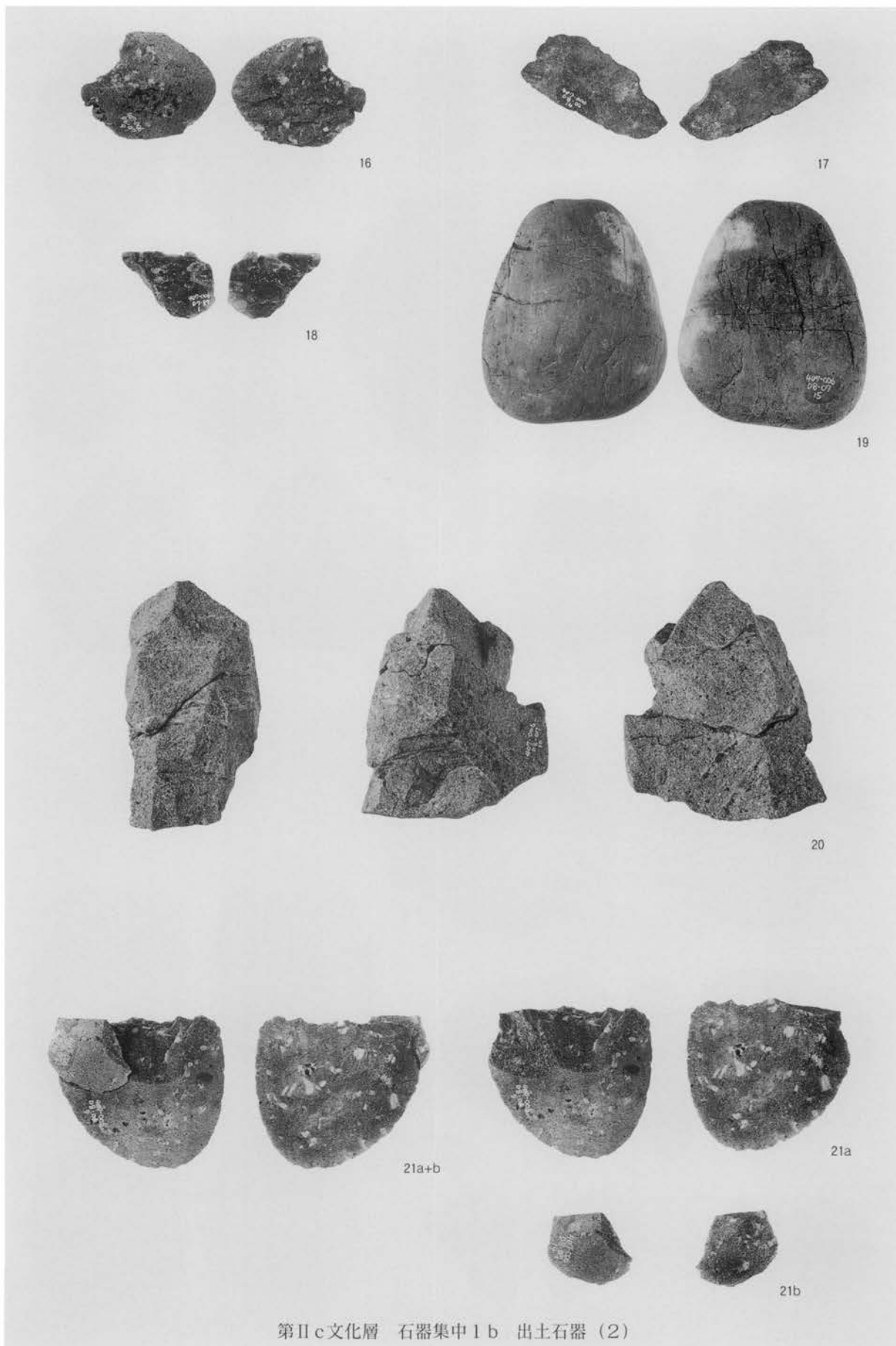


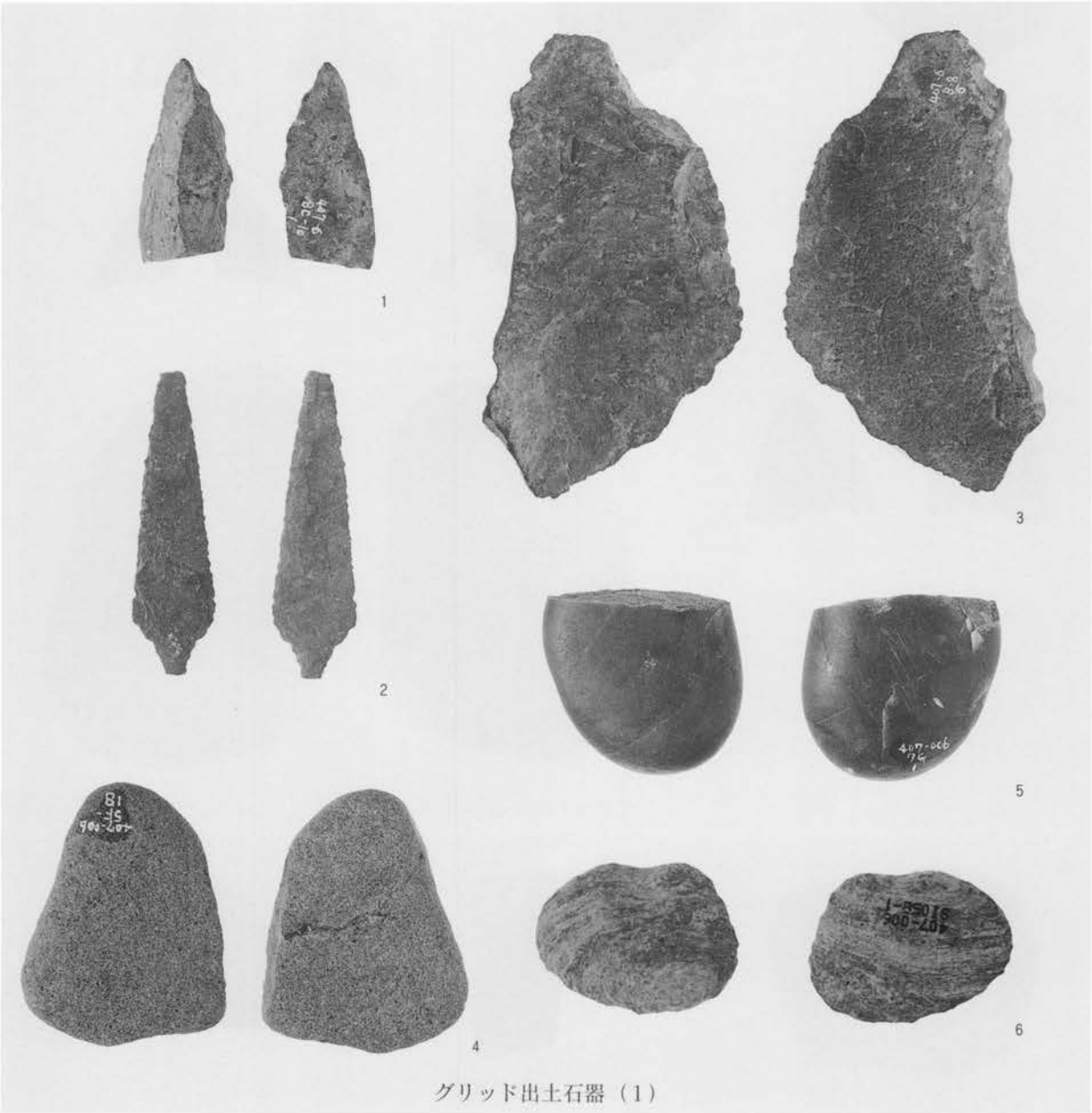
第IIc文化層 石器集中1a 出土石器 (5)

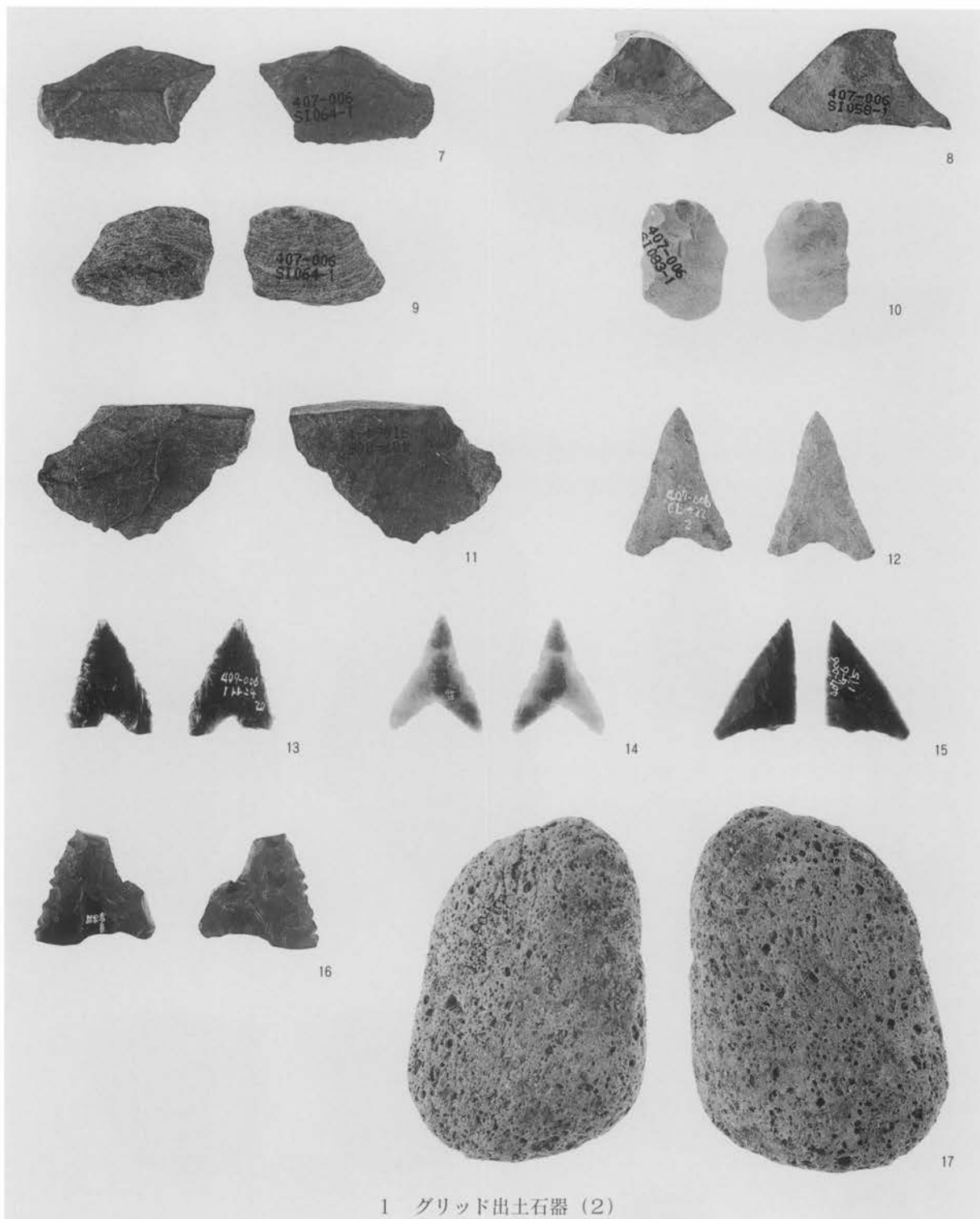


第IIc文化層 石器集中1b 出土石器 (1)

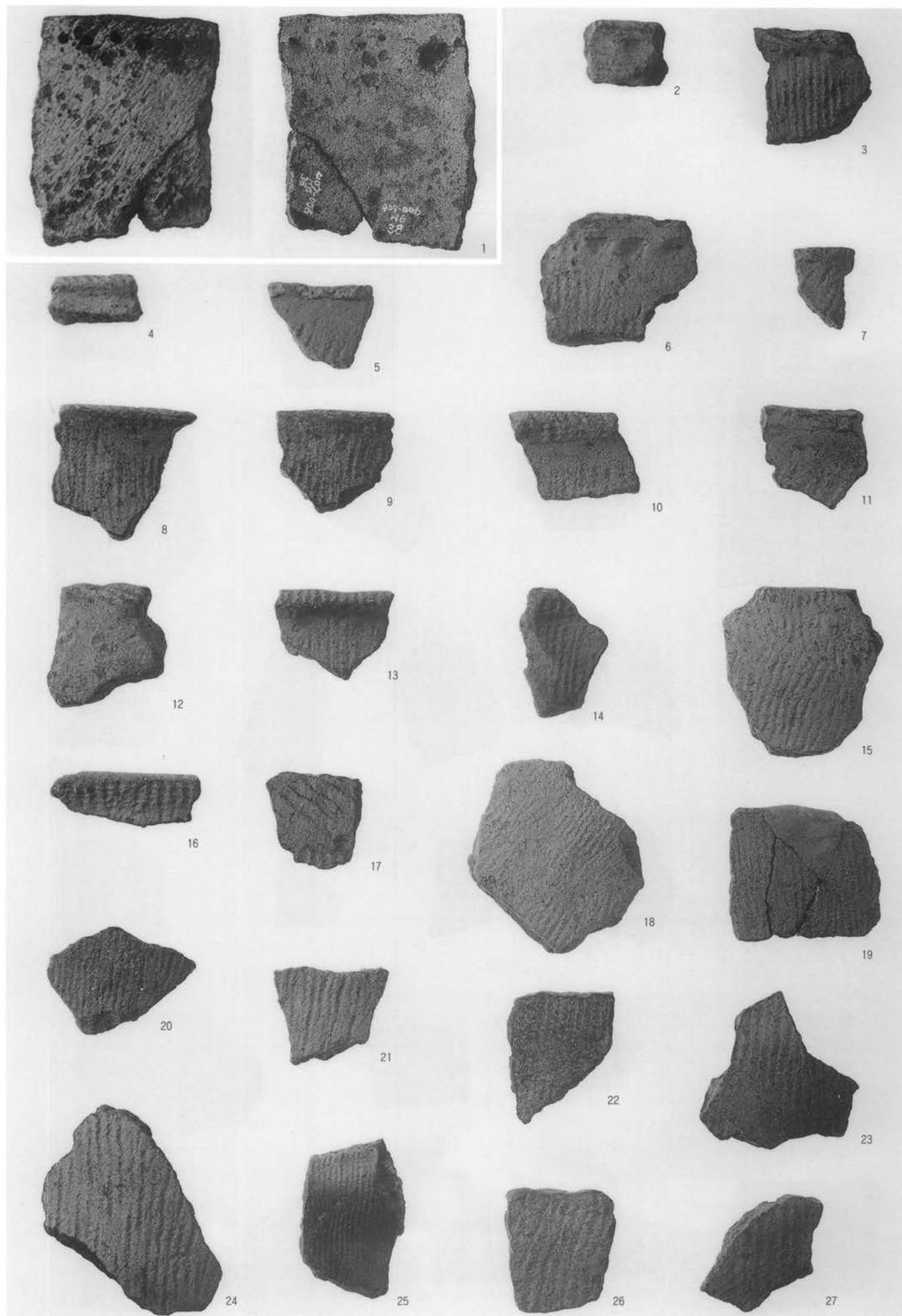




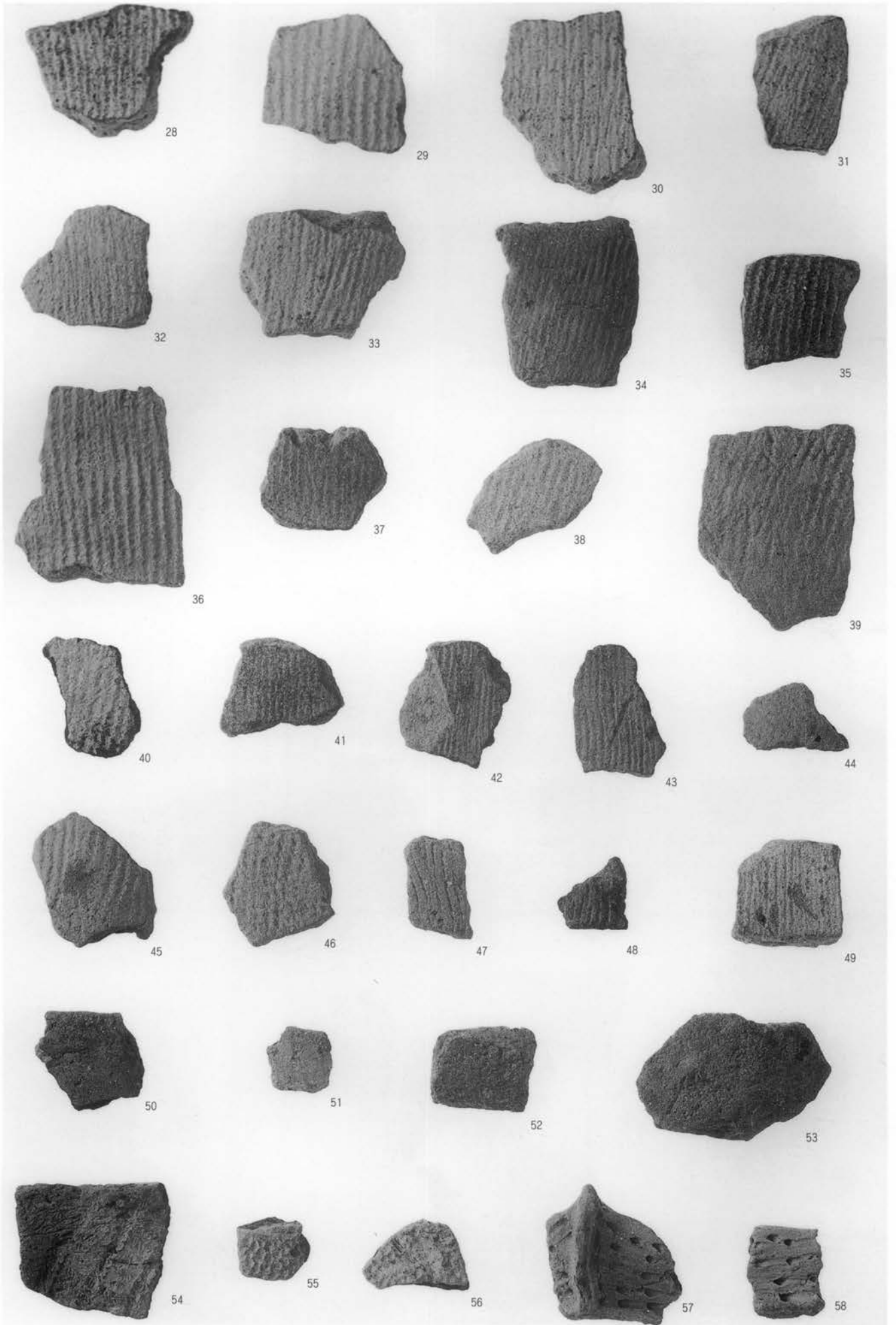








縄文土器 (1)



縄文土器 (2)



SI-001 1



SI-001 2



SI-001 3



SI-001 6



SI-001 11



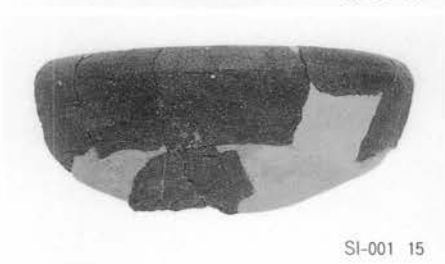
SI-001 12



SI-001 14



SI-001 13



SI-001 15



SI-001 16



SI-001 18



SI-002 1



SI-002 2



SI-002 6



SI-002 8



SI-002 12



SI-002 13



SI-002 16

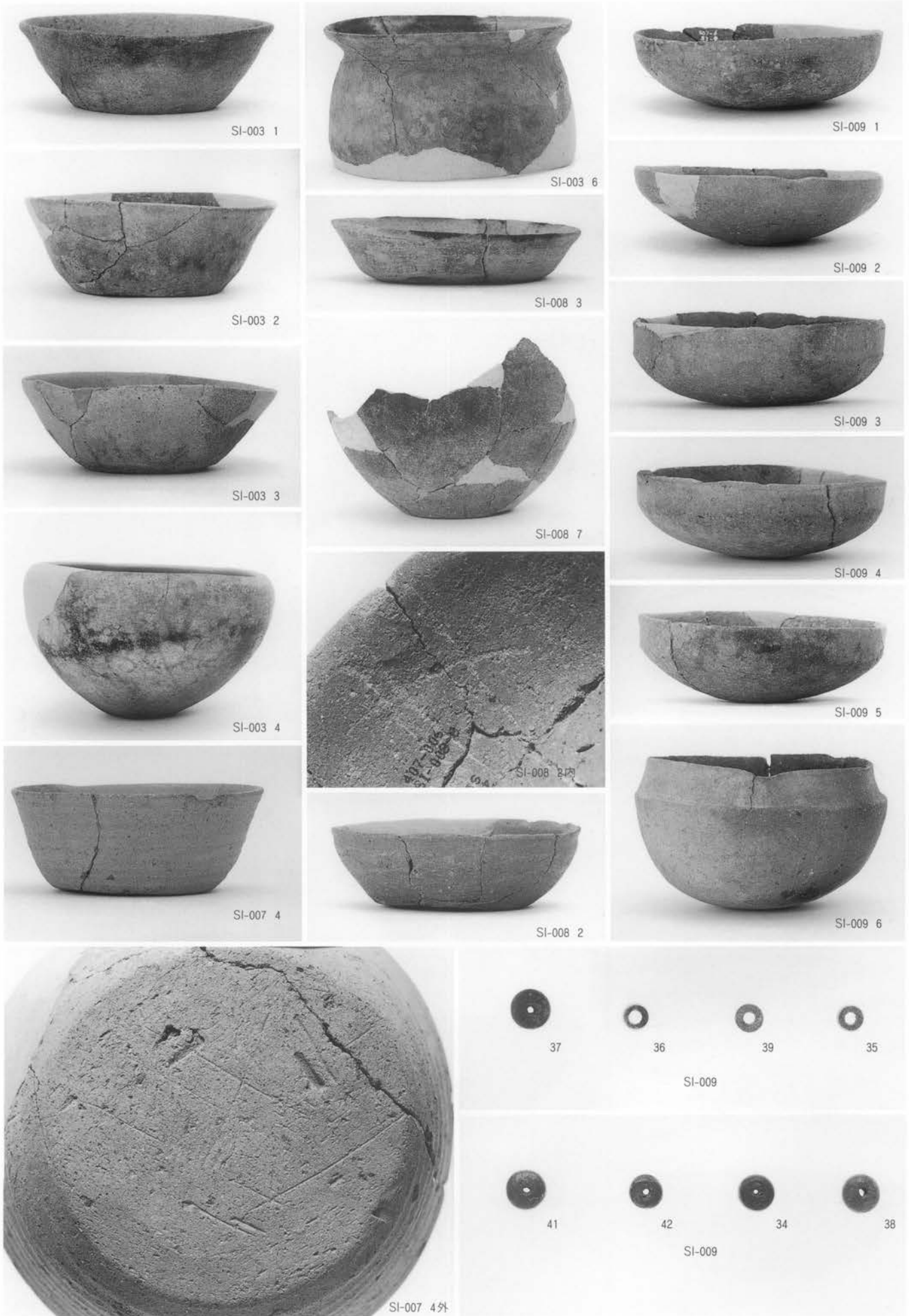


SI-002 17



SI-002 18

SI-001号~SI-002号出土遺物



SI-003号~SI-009号出土遺物





SI-009 8



SI-009 10



SI-009 11



SI-009 13



SI-009 14



SI-009 15



SI-009 26



SI-009 27



SI-009 28



SI-009 29



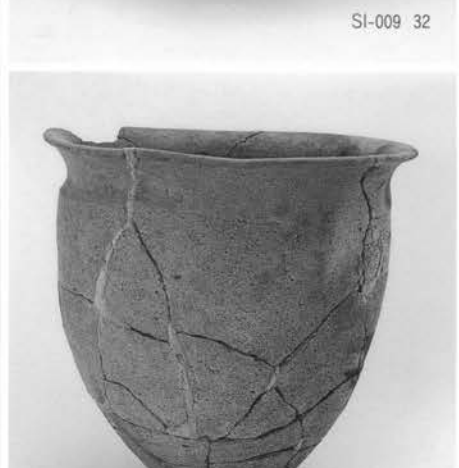
SI-009 30



SI-009 31



SI-009 32



SI-009 33



SI-014 3



SI-014 4



SI-014 12



SI-014 13



SI-014 14



SI-014 15



SI-014 16



SI-014 17



SI-014 19



SI-014 23



SI-014 25



SI-015 6



SI-015 9底



SI-015 12



SI-015 15

SI-014号~SI-015号出土遺物



SI-015 20外



SI-015 20内



SI-015 37



SI-017 2



SI-017 7



SI-017 14



SI-016 1



SI-017 16



SI-015 21



SI-016 2



SI-017 17



SI-015 33



SI-016 3



SI-017 22



SI-016 8



SI-015 36



SI-017 1



SI-017 24

SI-015号～SI-017号出土遺物



SI-017 19



SI-017 19



SI-017 25



SI-017 29



SI-017 30



SI-017 31



SI-018 1



SI-018 7



SI-020 4



SI-020 12



SI-021 1



SI-021 3



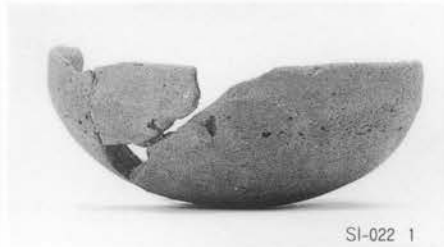
SI-021 4



SI-021 5



SI-021 6



SI-022 1



SI-022 2

SI-017号~SI-022号出土遺物





SI-022 3



SI-022 5



SI-023 3



SI-023 9



SI-023 4



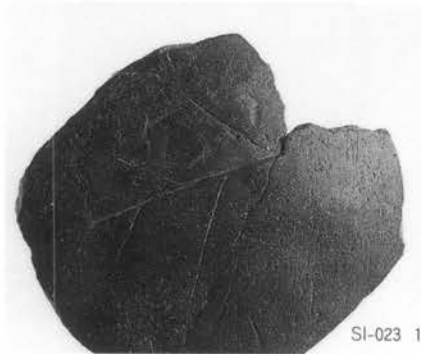
SI-023 6



SI-023 7



SI-023 10



SI-023 10



SI-023 12



SI-023 20



SI-024 3



SI-024 5



SI-025 1



SI-025 3



SI-025 9外



SI-026 1



SI-026 5



SI-026 19



SI-027 10



SI-027, SI-036 11



SI-028 1



SI-025 9内

SI-022号~SI-028号出土遺物



SI-027 19



SI-028 23



SI-029 7



SI-027 6底



SI-029 1



SI-029 10



SI-028 2



SI-029 1内



SI-029 14



SI-028 3



SI-029 2



SI-029 14底



SI-028 5



SI-029 2内



SI-029 15



SI-028 6



SI-029 3



SI-029 15底



SI-028 8



SI-029 5



SI-028 11



SI-029 6



SI-028 14



SI-029 9

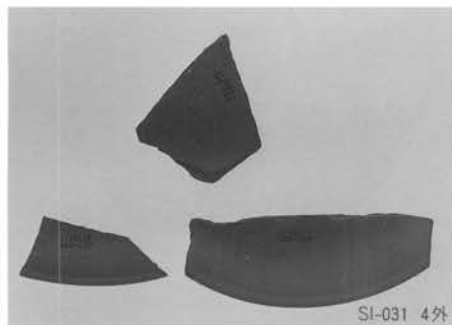


SI-029 19

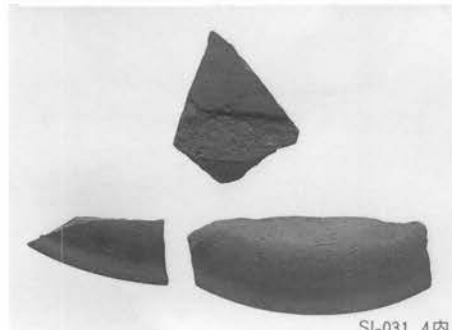


SI-028 22

SI-027号~SI-029号出土遺物



SI-031 4外



SI-031 4内



SI-031 6



SI-031 9



SI-031 9裏



SI-031 8



SI-032 4



SI-032 2



SI-032 1



SI-032 6



SI-032 9



SI-032 12



SI-034 1



SI-032 13



SI-034 2



SI-034 5



SI-034 9



SI-034 10



SI-034 14



SI-034 15



SI-034 21

SI-031号～SI-034号出土遺物



SI-034 23



SI-034 24



SI-034 26



SI-034 28



SI-034 38



SI-034 40



SI-034 44



SI-034 42



SI-035 1



SI-036 1



SI-036 3



SI-036 4



SI-036 5



SI-036 6



SI-036 7



SI-036 8



SI-036 9



SI-036 10



SI-036 14



SI-036 20



SI-036 20裏



SI-037 3



SI-037 6

SI-034号~SI-037号出土遺物





SI-036 21



SI-039 1



SI-039 2



SI-039 13



SI-036 21裏



SI-039 3



SI-039 5



SI-039 14



SI-039 15



SI-037 10



SI-039 10



SI-039 18



SI-037 8内



SI-039 11



SI-039 19



SI-037 8



SI-039 12



SI-039 21



SI-037 7

SI-036号～SI-039号出土遺物



SI-039 22



SI-039 23



SI-039 25



SI-039 26



SI-040 2



SI-040 4



SI-040 5



SI-040 30



SI-040 31



SI-040 36



SI-040 37



SI-042 2



SI-040 39



SI-040 39裏



SI-040 38



SI-040 38裏



SI-041 9



SI-042 1

SI-039号～SI-042号出土遺物



SI-042 3



SI-042 4



SI-042 5



SI-042 6



SI-042 8



SI-042 10



SI-042 28



SI-043 1



SI-043 4



SI-043 5



SI-043 6



SI-043 7



SI-043 9



SI-043 11



SI-043 20



SI-043 25



SI-044 3



SI-044 4



SI-044 5



SI-044 6



SI-044 14



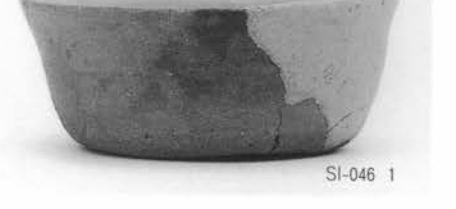
SI-045 1



SI-045 2

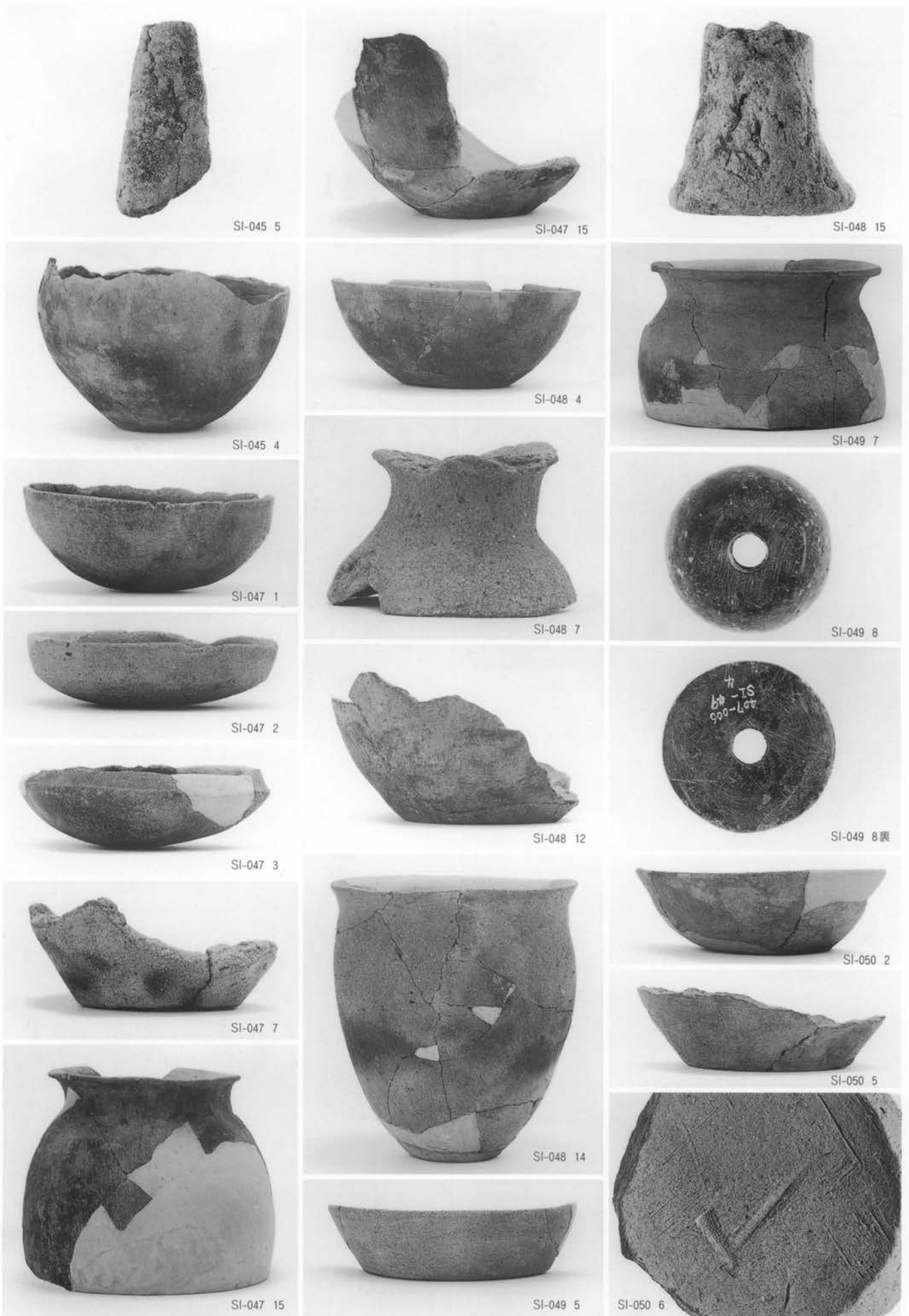


SI-045 3



SI-046 1

SI-042号~SI-046号出土遺物



SI-045号～SI-050号出土遺物





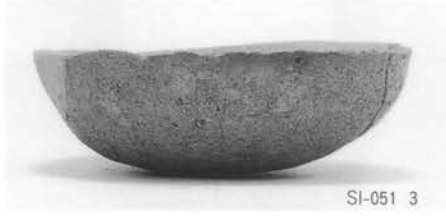
SI-050 13



SI-051 1



SI-051 2



SI-051 3



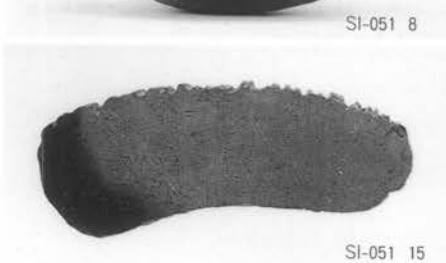
SI-051 6



SI-051 7



SI-051 8



SI-051 15



SI-051 10



SI-051 11



SI-051 16



SI-051 17



SI-051 18



SI-051 20



SI-051 22



SI-051 23



SI-051 24



SI-052 4

SI-050号~SI-052号出土遺物



SI-014 27



SI-028 25



SI-052 12



SI-042 29



SI-052 13



SI-015 38



SI-051 28



SI-090 45



SI-026 22

SI-014号 · 015号 · 026号 · 028号 · 042号 · 051号 · 052号 · 090号出土金属製品



SI-051号~SI-059号出土遺物



SI-059 8



SI-059 9



SI-059 11



SI-059 13



SI-059 14



SI-059 17



SI-059 15



SI-059 16



SI-060 2



SI-060 3



SI-060 4



SI-060 5



SI-060 6



SI-061 2



SI-061 3



SI-061 4内



SI-061 4





SI-061 5



SI-061 6



SI-061 6底



SI-061 10



SI-061 11



SI-062 1



SI-062 4



SI-063 1



SI-063 2内



SI-063 4



SI-063 5



SI-063 7



SI-063 8



SI-064 1



SI-064 2



SI-064 5



SI-064 8



SI-064 10



SI-064 11



SI-061 12

SI-061号～SI-064号出土遺物



SI-064 12



SI-064 15



SI-064 17



SI-064 19



SI-064 22



SI-065 1



SI-066 1



SI-066 2



SI-066 4



SI-066 9



SI-066 10



SI-066 11



SI-066 13



SI-066 14



SI-066 17



SI-066 19



SI-066 20



SI-066 27



SI-066 28



SI-066 33

SI-064号~SI-066号出土遺物



SI-066 35



SI-067 1



SI-067 2



SI-067 3



SI-067 4



SI-067 5



SI-067 6



SI-067 7



SI-067 8



SI-067 9



SI-067 10



SI-068 2



SI-068 3



SI-068 6



SI-068 7

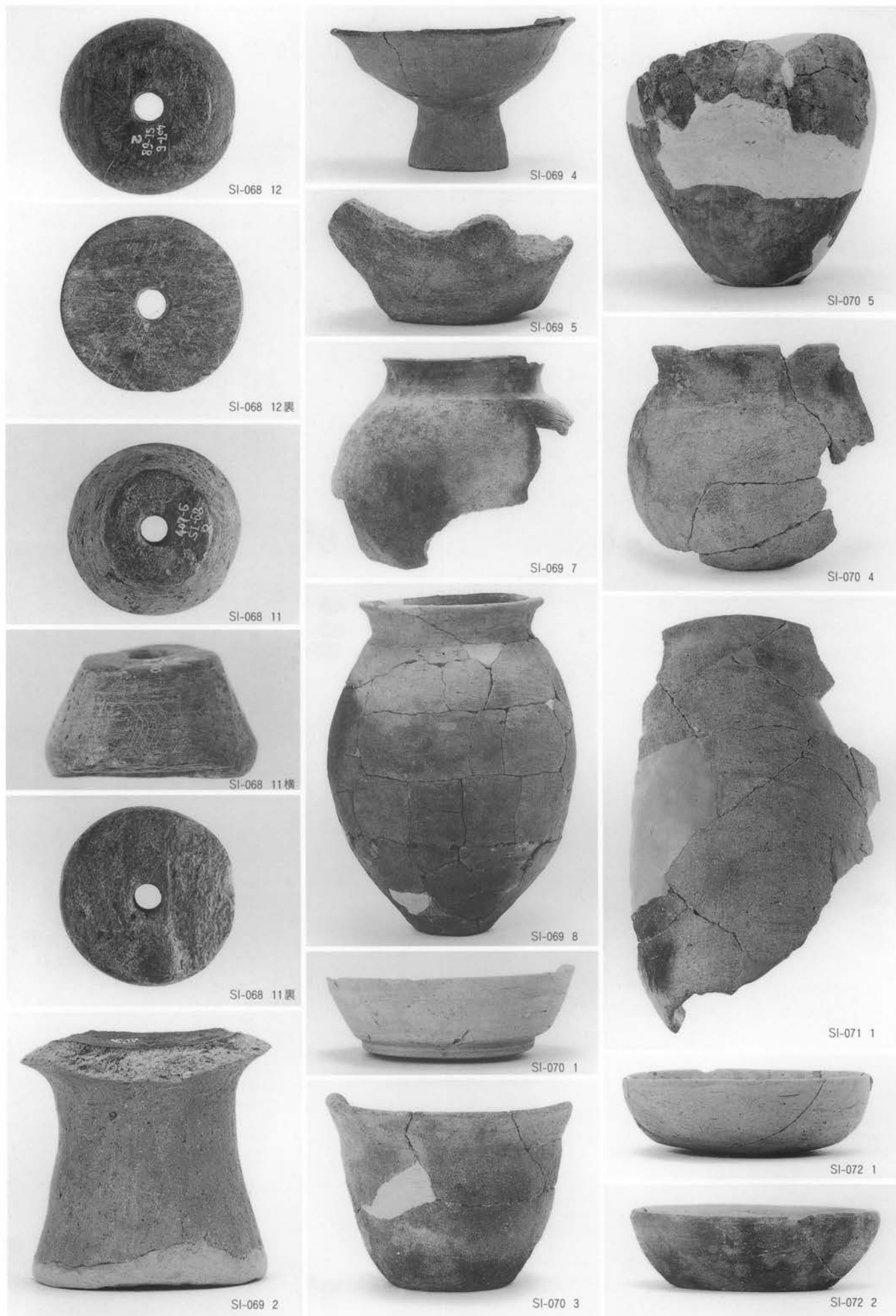


SI-068 8



SI-068 9

SI-066号~SI-068号出土遺物



SI-068号~SI-072号出土遺物





SI-072 3



SI-072 4



SI-072 5



SI-072 7



SI-072 8



SI-072 9



SI-073 2



SI-073 4



SI-074 4



SI-074 6



SI-074 7



SI-074 8



SI-074 9



SI-074 10



SI-074 11



SI-074 11裏



SI-076 1

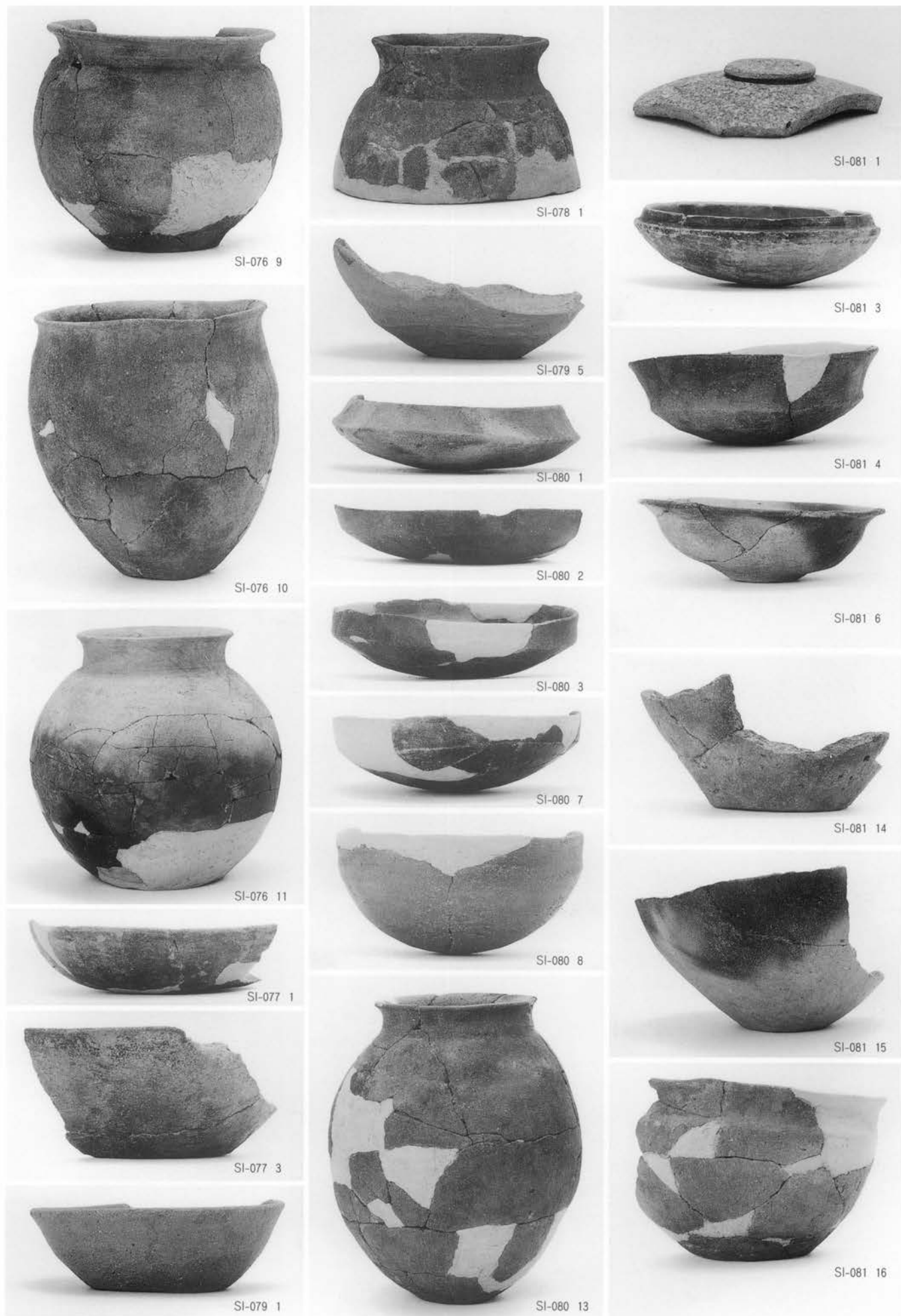


SI-076 2



SI-076 8

SI-072号～SI-076号出土遺物



SI-076号~SI-081号出土遺物



SI-081 18



SI-081 13



SI-083 2



SI-082 14



SI-083 3



SI-082 2



SI-083 7



SI-082 2底



SI-082 15



SI-083 8



SI-082 4



SI-082 16



SI-083 9



SI-082 5



SI-082 17



SI-083 10



SI-083 1

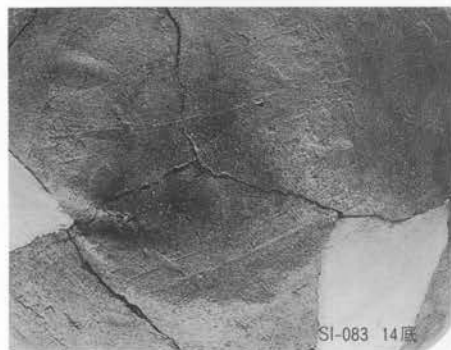
SI-081号~SI-083号出土遺物



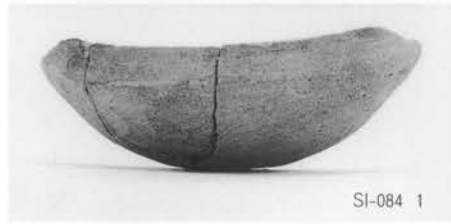
SI-083 11



SI-083 14



SI-083 14底



SI-084 1



SI-084 3



SI-084 4



SI-084 8



SI-085 1



SI-085 5



SI-085 6



SI-085 7



SI-085 8



SI-086 1内



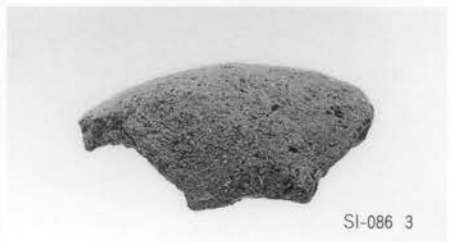
SI-086 1



SI-086 2



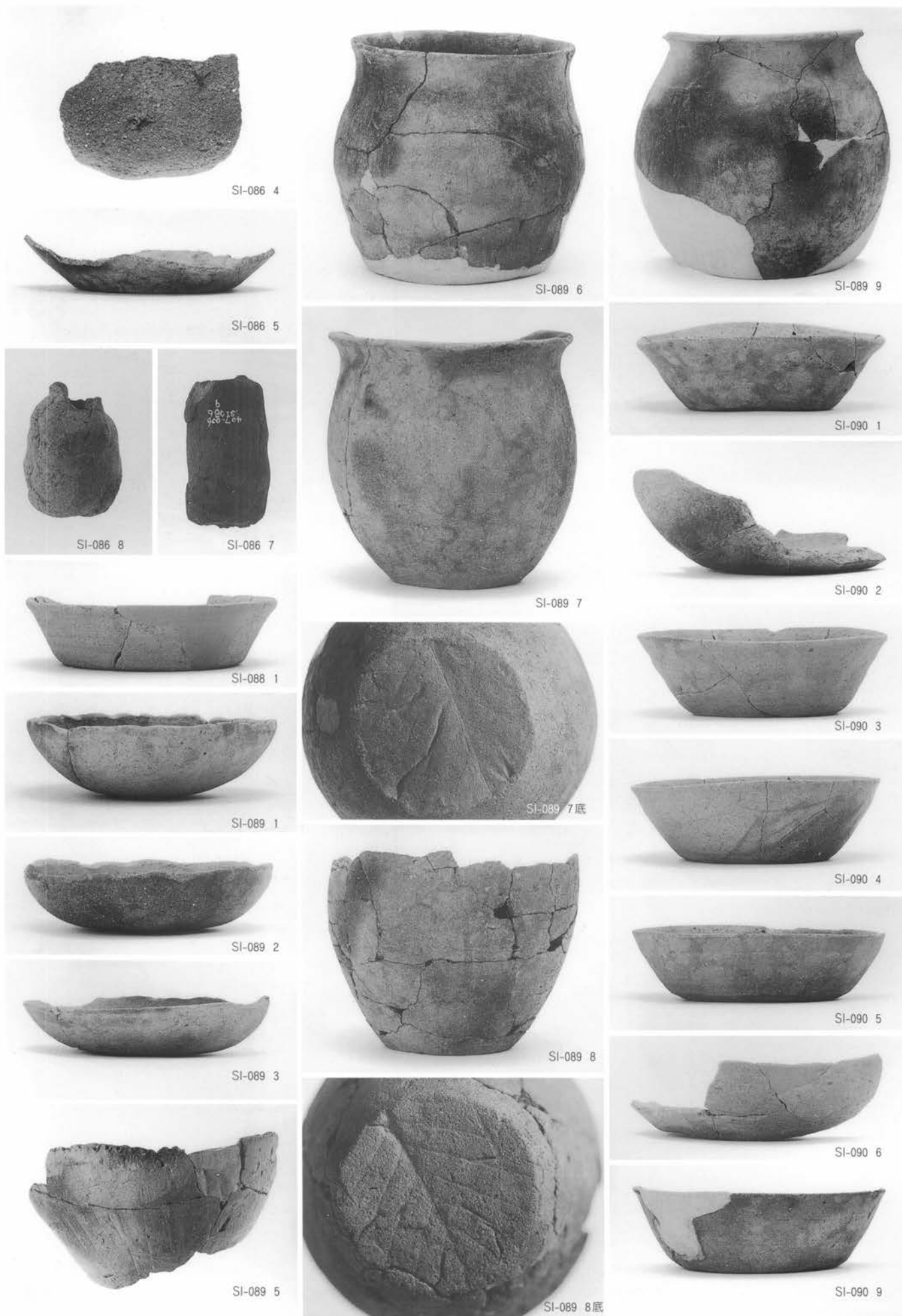
SI-086 2底



SI-086 3

SI-083号~ SI-086号出土遺物





SI-086号~SI-090号出土遺物



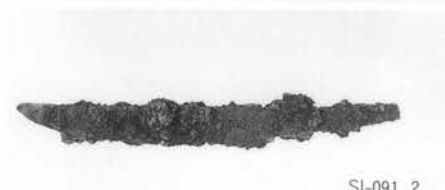
SI-090号出土遺物



SI-090 44



SI-090 44裏



SI-091 2



SI-091 2



SI-092 3



SI-092 4



SI-092 6



SI-092 7



SI-093 1



SI-093 2



SI-093 3



SI-093 6



SI-093 7



SI-093 8



SI-093 9



SI-093 10



SI-093 11



SI-093 12



SI-093 13



SI-093 14



SI-093 15



SI-093 17



SI-093 19

SI-090号～SI-093号出土遺物





SI-093 18



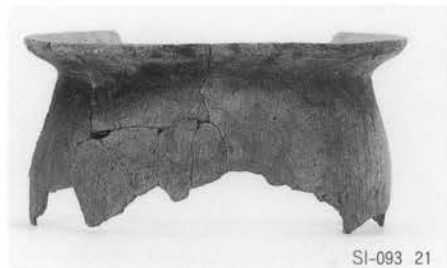
SI-093 35



SI-095 4



SI-095 5



SI-093 21



SI-095 7



SI-093 23



SI-094 1



SI-096 1



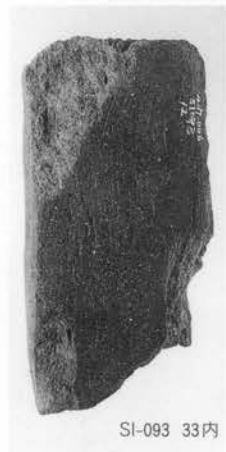
SI-093 24



SI-094 1



SI-096 2



SI-093 33内



SI-093 33外



SI-095 1



SI-096 3



SI-096 7



SI-095 2

SI-093号~SI-096号出土遺物



SI-096 6



SI-096 9



SI-096 12



SI-096 13



SI-096 14



SI-096 15



SI-096 16



SI-096 19



SI-096 20



SI-096 22



SI-096 25



SI-096 23



SI-096 27



SI-097 1

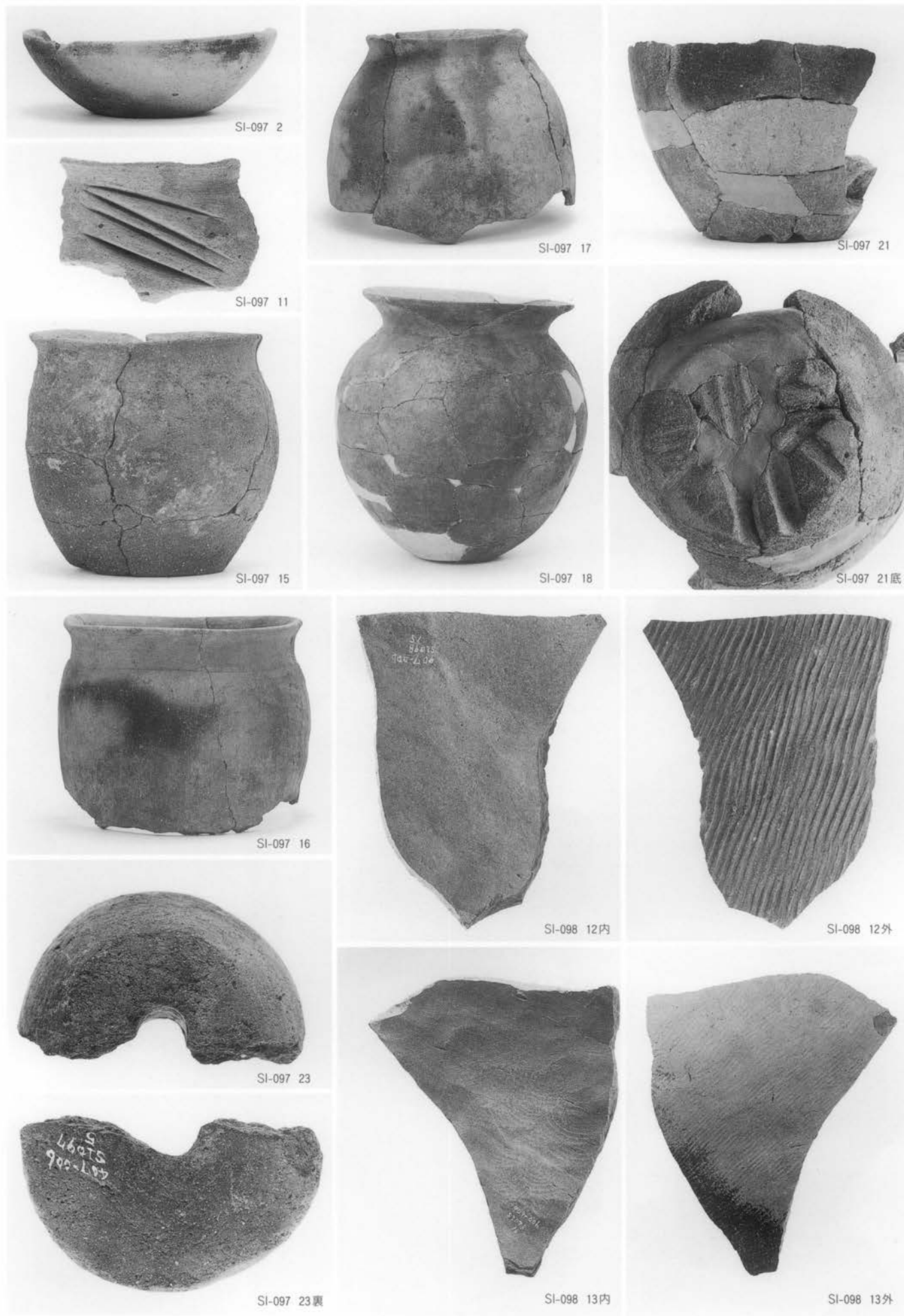


SI-096 31



SI-096 31

SI-096号出土遺物



SI-097号~SI-098号出土遺物



SI-098 1



SI-099 4



SI-103 1内



SI-098 9内



SI-101 1



SI-103 2



SI-098 7



SI-101 5



SI-104 2



SI-098 10



SI-101 7



SI-104 3



SI-099 1



SI-102 1



SI-099 3



SI-102 3



SI-099 2



SI-102 6



SI-104 5



SI-098 15



SI-100 3

SI-098号~SI-104号出土遺物





SI-105号~SI-111号出土遺物



SI-111 7



SI-111 8



SI-111 11



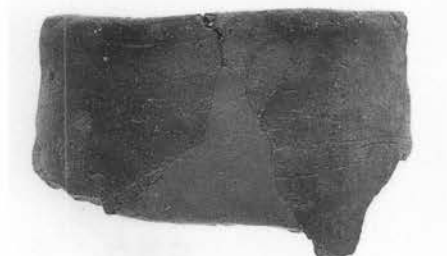
SI-111 12



SI-111 15



SI-111 19



SI-111 18



SI-111 20



SI-111 21



SI-112 1



SI-113 1



SI-113 2



SI-113 3



SI-113 4



SI-113 6



SI-113 7



SI-113 7内



SI-113 7



SI-113 8



SI-113 9



SI-113 10内

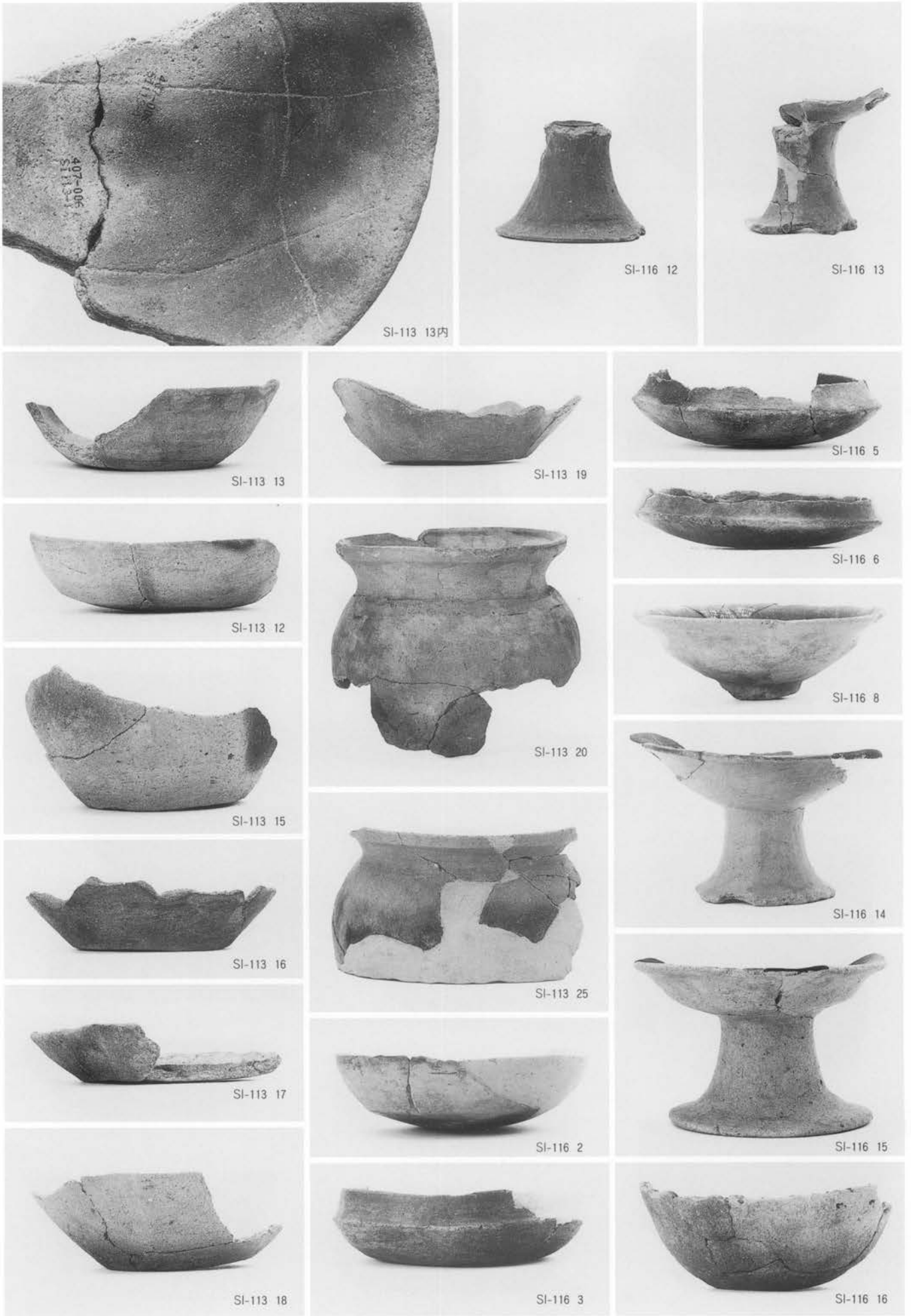


SI-113 10



SI-113 11

SI-111号~SI-113号出土遺物



SI-113号~SI-116号出土遺物





SI-116 17



SI-116 18



SI-116 19



SI-116 20



SI-117 2



SI-117 3



SI-117 4



SI-117 5



SI-117 6



SI-117 6底



SI-117 8



SI-118 1底



SI-118 3内



SI-118 4



SI-118 6



SI-118 8



SI-118 12



SI-118 13

SI-116号~SI-118号出土遺物



SI-118 15



SI-121 3



SI-121 5



SI-121 8



SI-121 9



SI-121 9内



SI-121 10



SI-122 1



SI-122 2



SI-122 3



SI-122 4



SI-122 5



SI-122 6



SI-124 2



SI-124 4



SI-124 5



SI-125 2



SI-125 3



SI-125 4



SI-125 5



SI-125 6



SI-125 7



SI-125 13



SI-125 15



SI-125 8



SI-125 14



SI-125 18



SI-125 9



SI-125 10



SI-126 1



SI-125 11



SI-125 16



SI-126 2



SI-125 12



SI-125 17



SI-126 3



SI-126 4



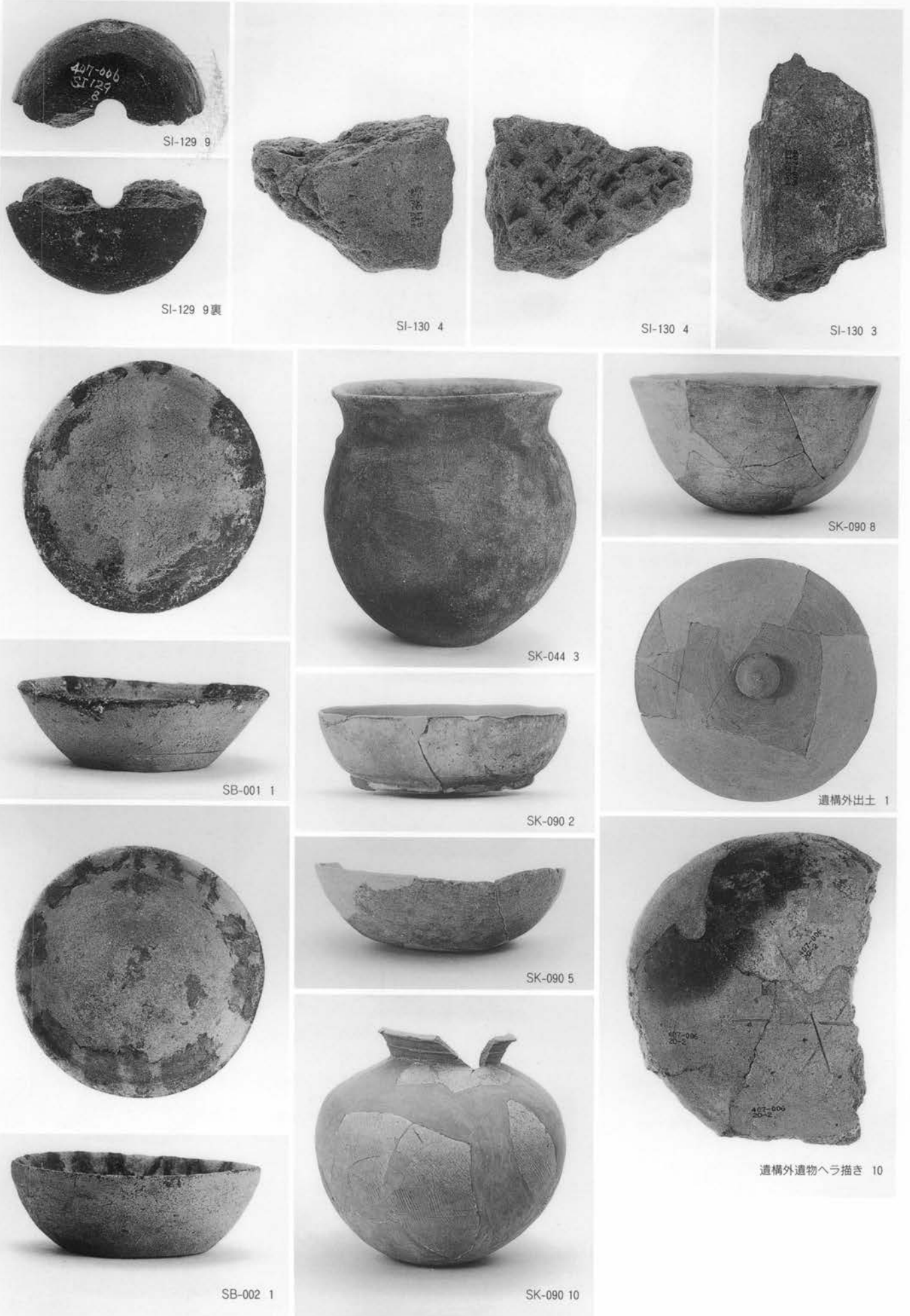
SI-126 5

SI-125号~SI-126号出土遺物

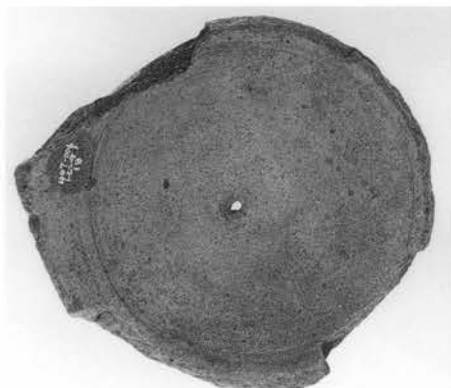


SI-126号~SI-129号出土遺物

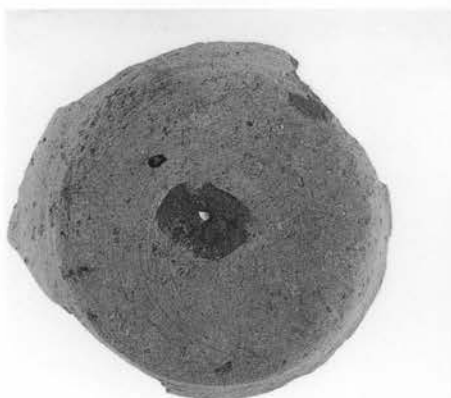




SI-129号・130号・SB-001号・002号・SK-090号・遺構外出土遺物



遺構外出土 32



遺構外出土 32



遺構外出土 41



遺構外出土 43



遺構外出土 49



遺構外出土 50



SD-001 3



SD-001 7



SD-001 9



SD-001 13



SD-001 17



SD-001 20



SD-001 24



SD-001 26



SD-001 28



SD-001 31



SD-001 34



SD-001 35



SD-001 36



SD-001 50



SD-001 59



SD-001 44



SD-001 51



SD-001 62



SD-001 45



SD-001 52



SD-001 63



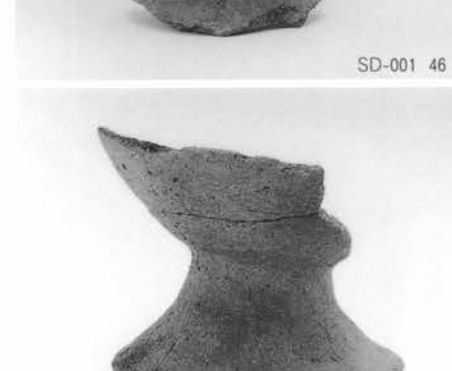
SD-001 46



SD-001 53



SD-001 64



SD-001 48



SD-001 57



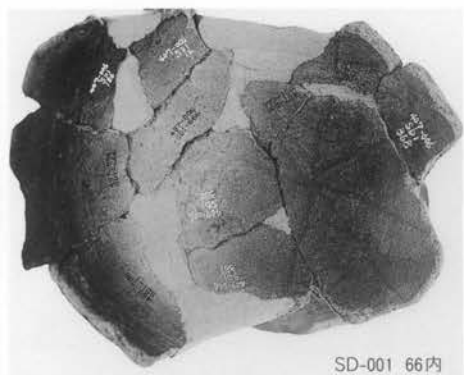
SD-001 65



SD-001 58

SD-001号出土遺物





SD-001 66内



SD-001 73



SD-001 80



SD-001 66



SD-001 73底



SD-001 80底



SD-001 67



SD-001 75



SD-001 82



SD-001 68



SD-001 75底



SD-001 82底



SD-001 70



SD-001 79



SD-001 84

SD-001号出土遺物



SD-001 83



SD-001 87



SD-001 92



SD-001 84



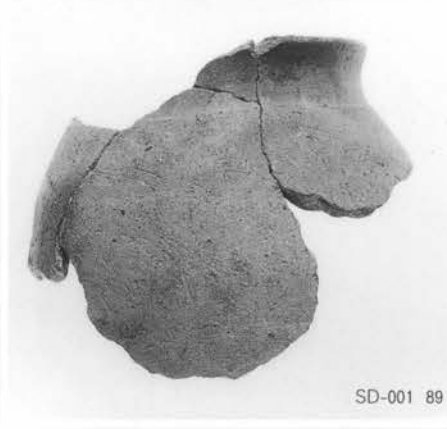
SD-001 88



SD-001 93



SD-001 86



SD-001 89



SD-001 94



SD-001 91



SD-001 97

SD-001号出土遗物



SD-001 96



SD-001 110



SD-001 112



SD-001 115



SD-001 100



SD-001 113



SD-001 116



SD-001 101



SD-001 114



SD-001 117



SD-001 102



SD-001 119



SD-001 118



SD-001号出土遺物





SD-001 133



SD-001 133底



SD-001 137



SD-001 145



SD-001 150



SD-001 152



SD-001 153



SD-001 157



SI-001 12



SI-002 8



SI-003



SI-034 45



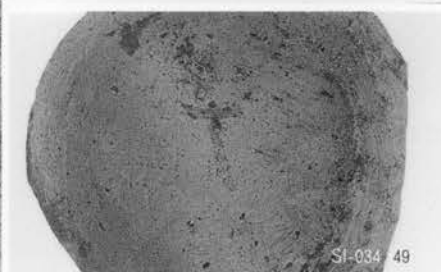
SI-034 46



SI-034 47



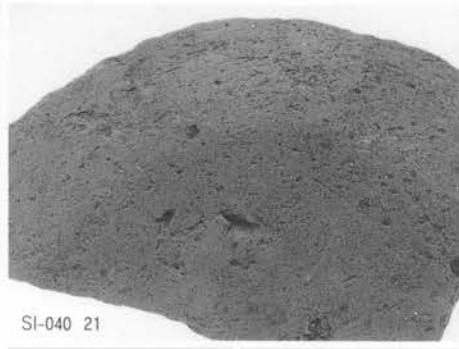
SI-034 48



SI-034 49



SI-036 18



SI-040 21



SI-043 15



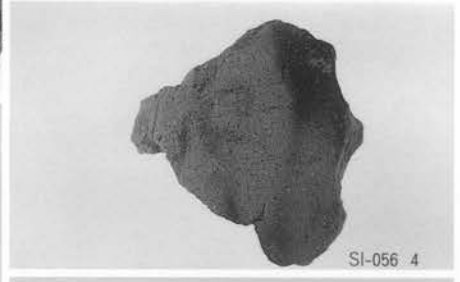
SI-036 19



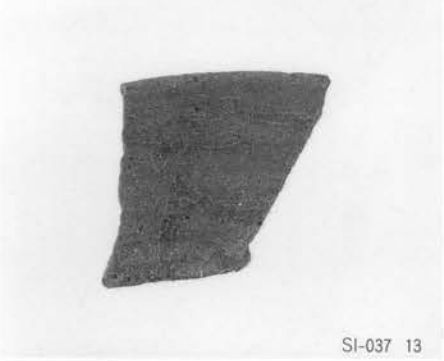
SI-040 22



SI-040 23



SI-056 4



SI-037 13



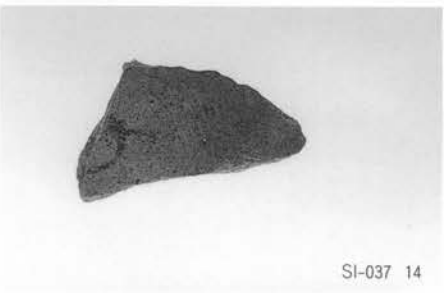
SI-040 24



SI-040 28



SI-056 5



SI-037 14



SI-040 29



SI-041 4



SI-062 5



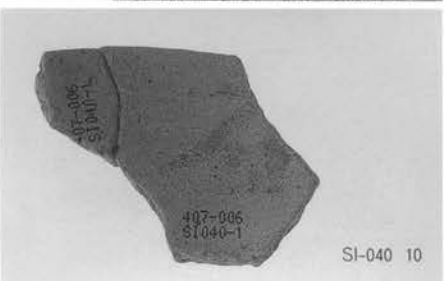
SI-040 6



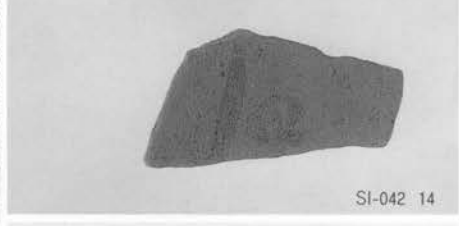
SI-042 13



SI-073 6



SI-040 10



SI-042 14



SI-075 2



SI-043 14

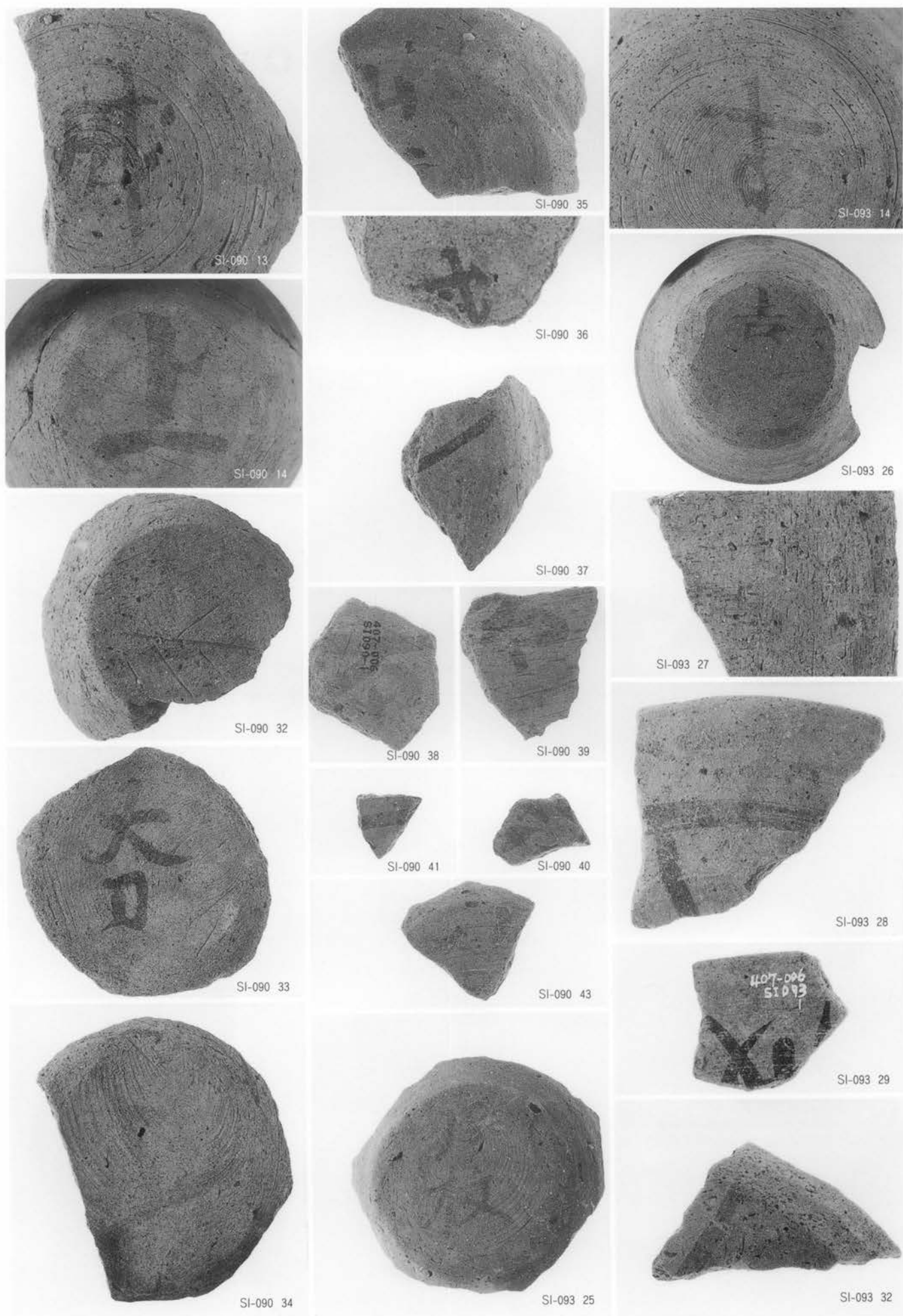


SI-077 4



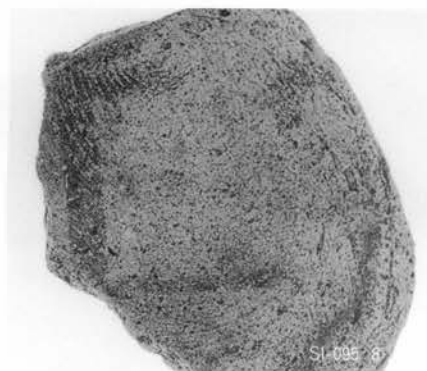
SI-079 7

SI-036号~SI-079号出土墨書土器



SI-090号~SI-093号出土墨書土器





SI-095 8



SI-113 27



SD-008 4



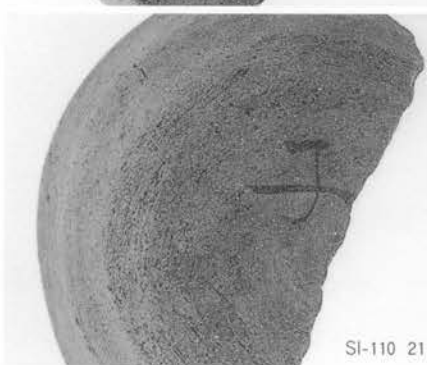
SI-098 14



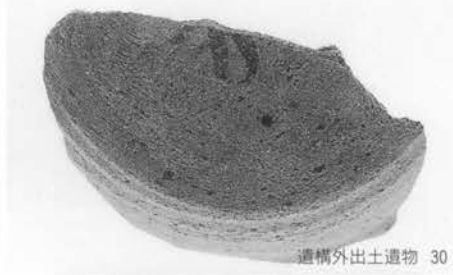
SI-127 12



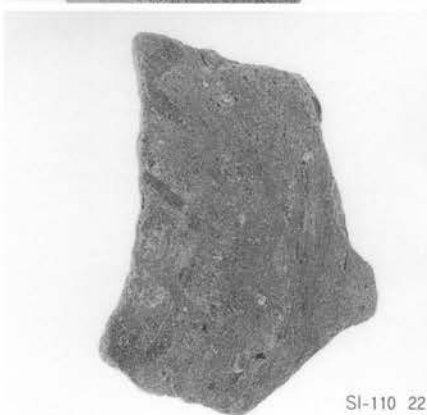
遺構外出土遺物 29



SI-110 21



遺構外出土遺物 30



SI-110 22



SB-001 2



遺構外出土遺物 31



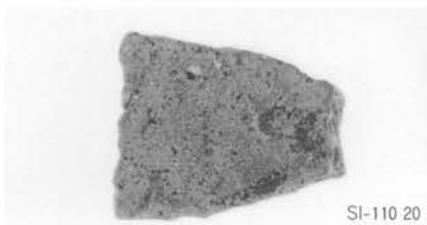
SI-110 24



SB-004 4



遺構外出土遺物 53



SI-110 20



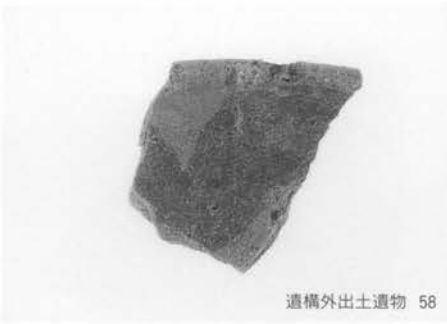
SB-013 1



遺構外出土遺物 54



遺構外出土遺物 55



遺構外出土遺物 58



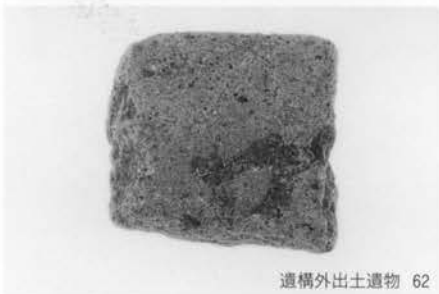
遺構外出土遺物 61



遺構外出土遺物 56



遺構外出土遺物 59



遺構外出土遺物 62



遺構外出土遺物 57

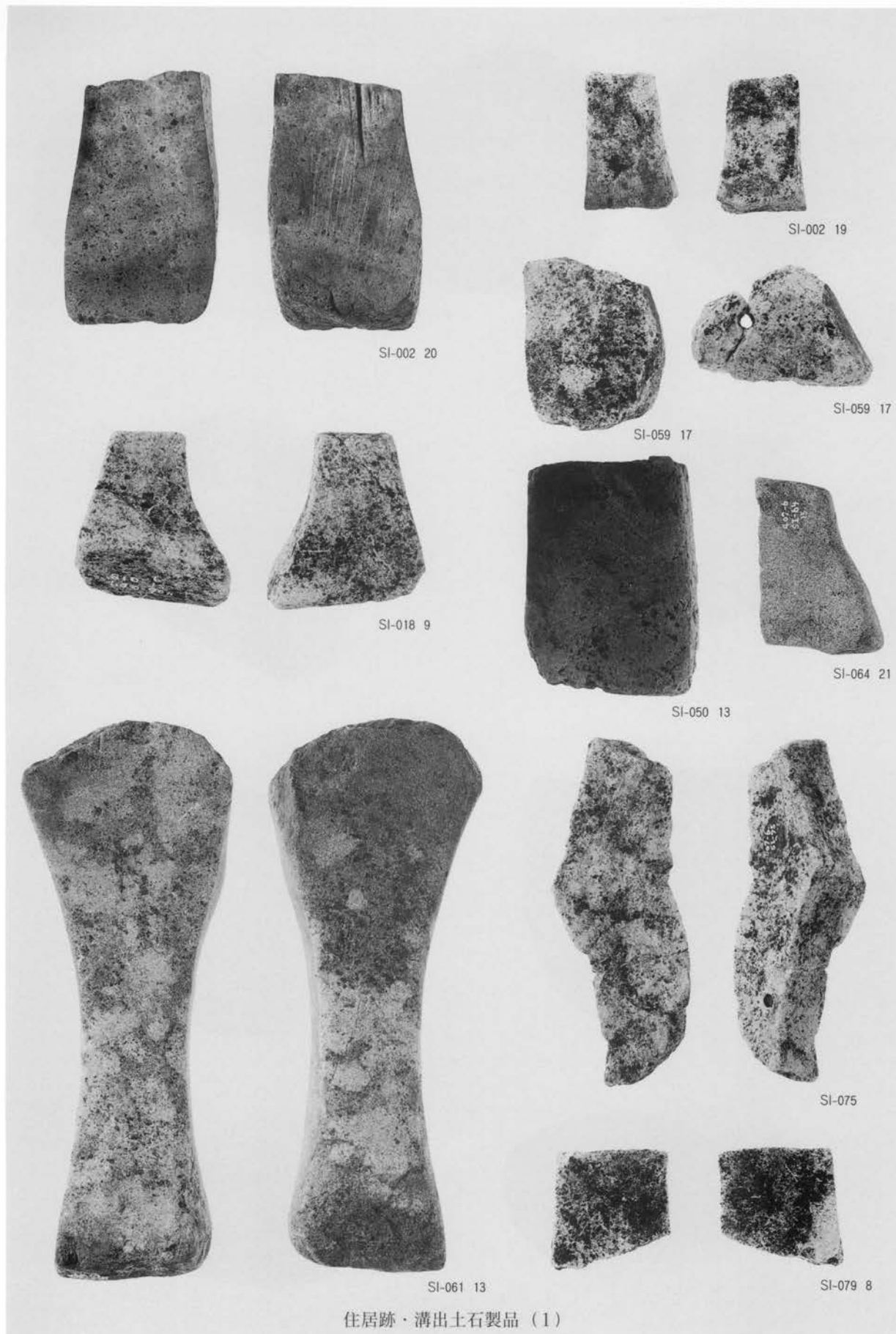


遺構外出土遺物 60

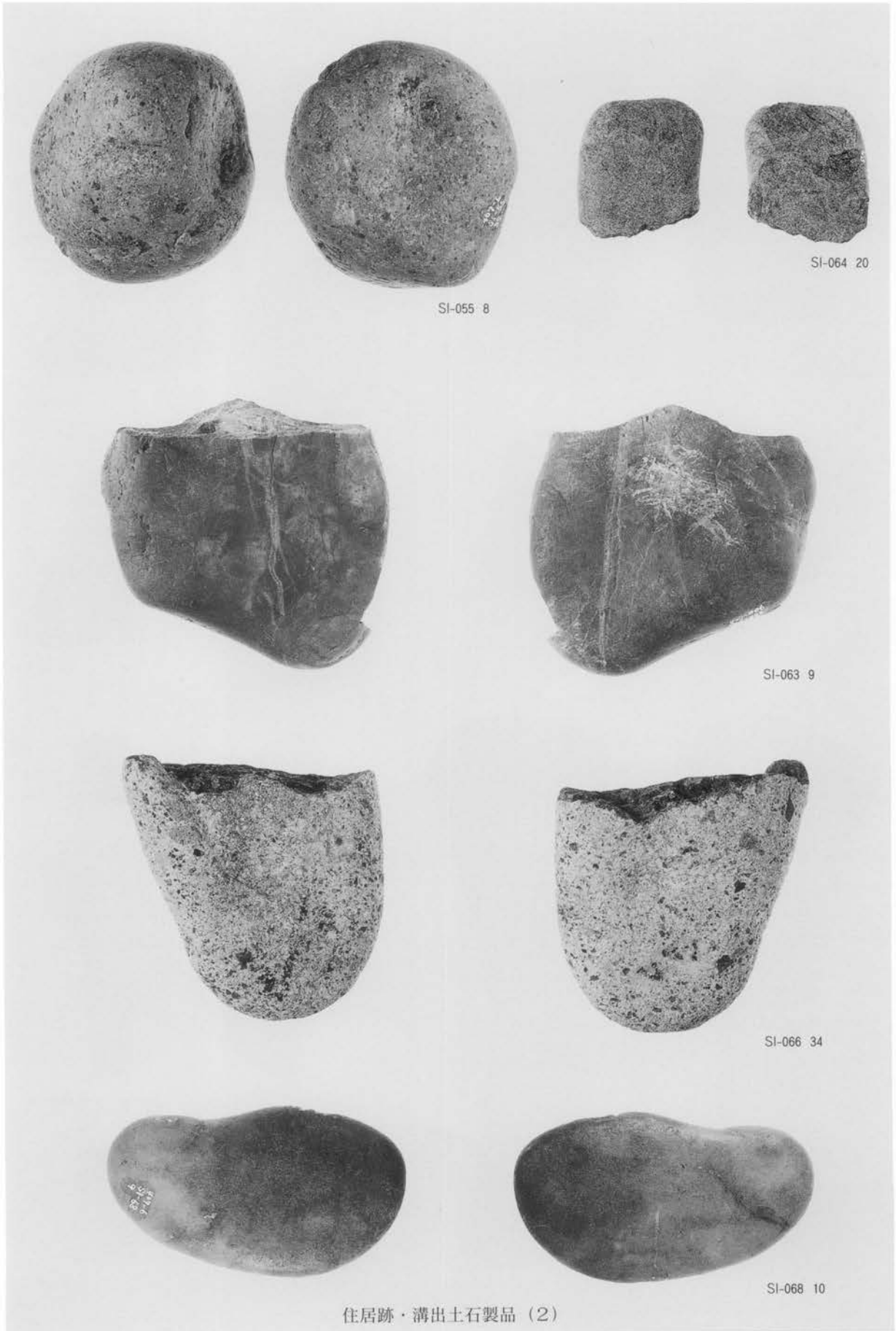


遺構外出土遺物 63

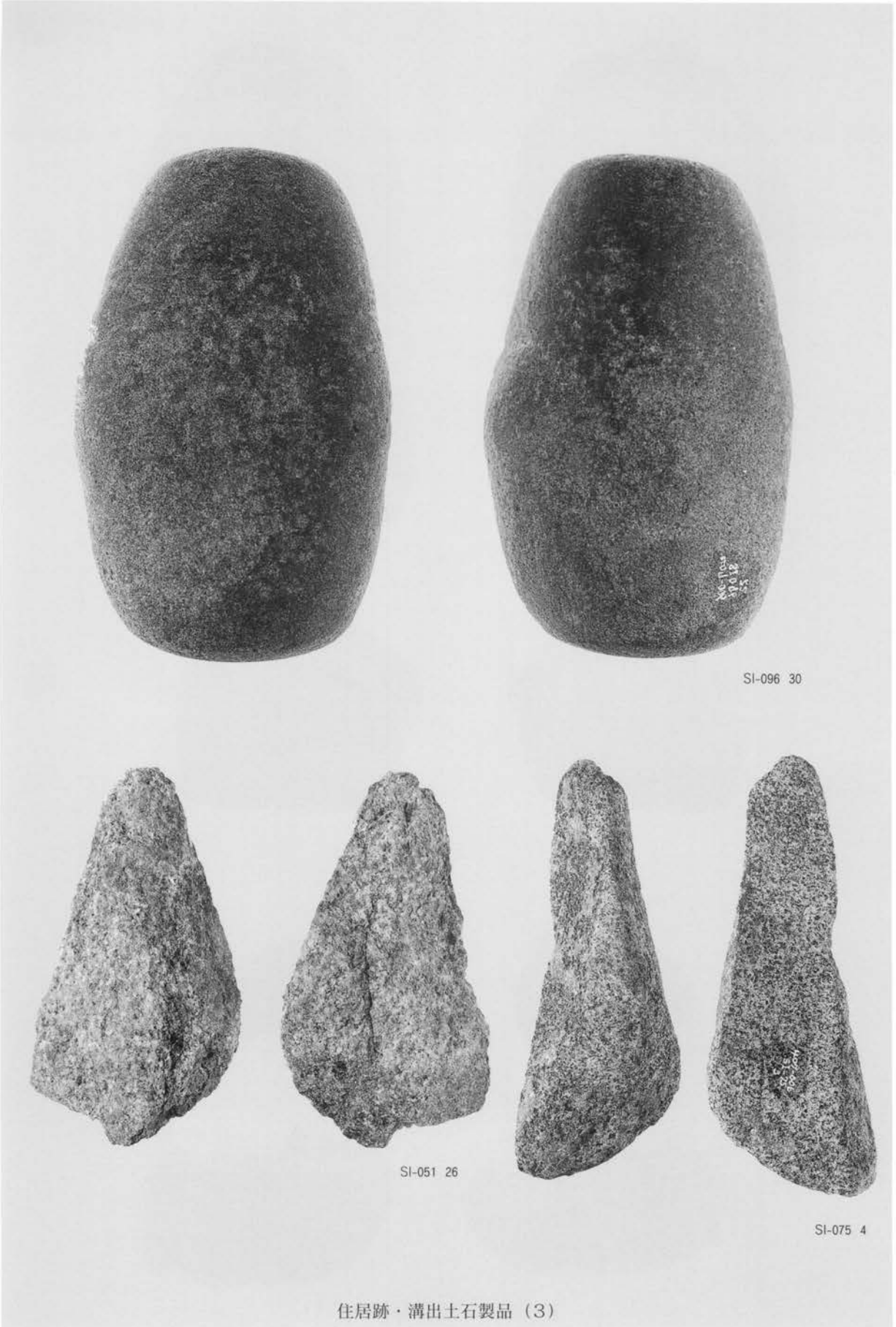
遺構外出土墨書土器



住居跡・溝出土石製品 (1)



住居跡・溝出土石製品 (2)



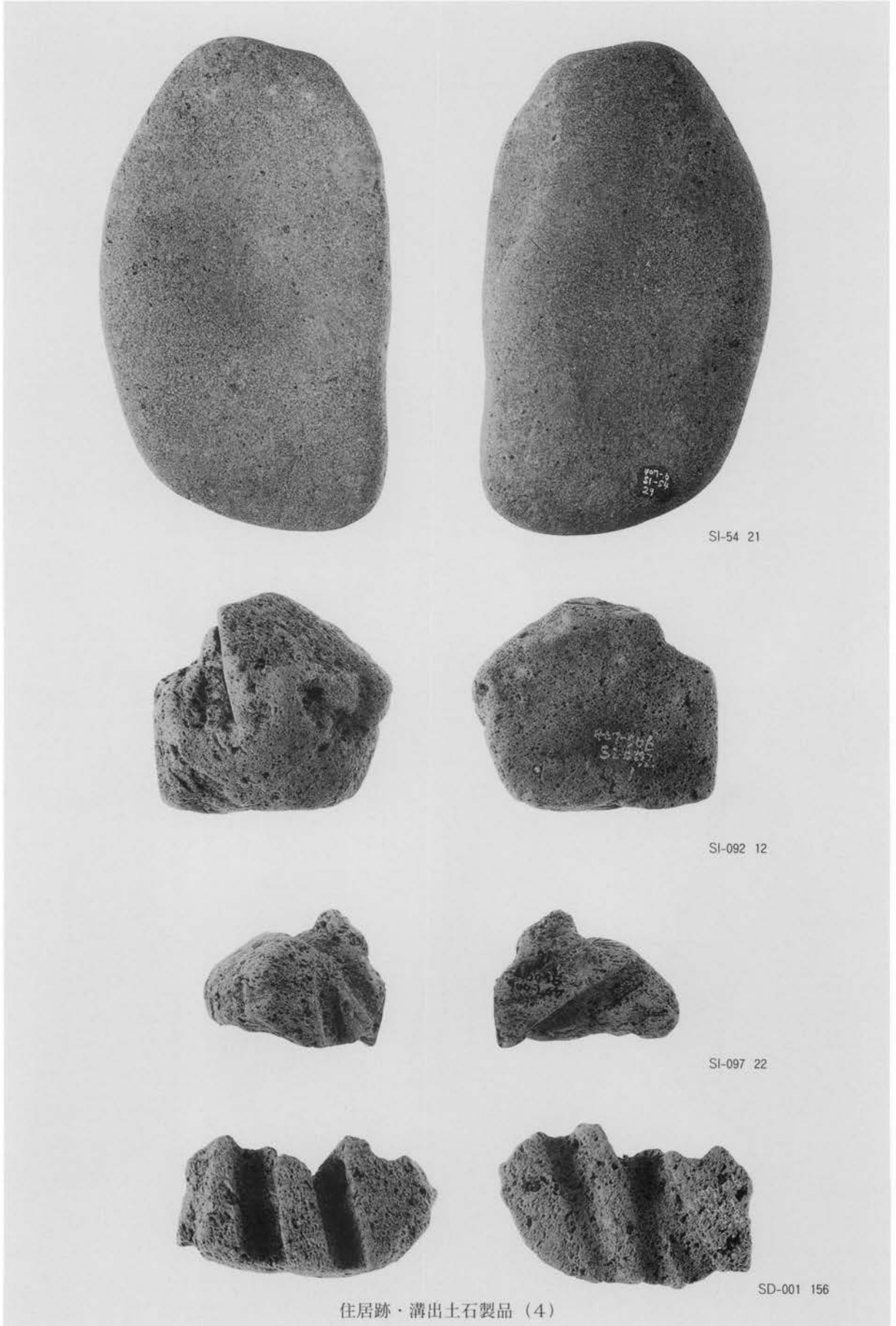
SI-096 30

SI-051 26

SI-075 4

住居跡・溝出土石製品 (3)





住居跡・溝出土石製品（4）

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	まつおまちおおやまいせき							
書名	千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書							
副書名	松尾町大山遺跡							
巻次	11							
シリーズ名	財団法人千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第430集							
編著者名	宮 重行・糸川道行・大野康男・田島 新							
編集機関	財団法人千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811							
発行年月日	西暦2002年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
おおやまいせき 大山遺跡	さんぶぐんまつおまち 山武郡松尾町 こわおやま 古和字大山 597-4ほか	12407	006	35度 39分 10秒	140度 25分 33秒	19941201 ～ 19970829	16,000	千葉東金道路(二期)建設に伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大山遺跡		旧石器時代	石器集中地点 5か所	楔形石器・台石・敲石・石核		Ⅲ層と第2黒色帯下部の2枚の文化層を検出した。		
		縄文時代	炉穴 1基 陥穴 22基	縄文土器早期撚糸文				
		古墳～平安	竪穴住居跡 126軒 掘立柱建物跡 21棟 土坑 溝	土師器・須恵器・墨書土器・畿内系土師器・鋤先・鉄鏃・刀子・砥石・帯金具		6世紀後半から9世紀後半に継続する集落跡で、9世紀前半に小規模な仏教施設がある。		
		中・近世	炭窯					



千葉県文化財センター調査報告第430集

千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書 11

—松尾町大山遺跡—

---

---

平成14年 3月25日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター  
発 行 日 本 道 路 公 団

財団法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡809番地2  
印 刷 株 式 会 社 エ リ ー ト 印 刷  
成田市並木町44-20

---

---